

新宇宙戦艦ヤマト & ナデシコ ディレクターズカット

KITT

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劇場版ナデシコの直後から始まる宇宙戦艦ヤマトとのクロスオーバー作品、「ヤマト&ナデシコ」の加筆修正版です。

演算ユニットの生体パーツにされた後遺症から地球の危機を知ったミスマル・ユリカは、対抗手段として別の宇宙から漂着した氷塊に眠る宇宙戦艦——ヤマトを目覚めさせることを決意した。

はたして、地球は侵略者の魔の手を退け、滅亡から逃れることができるのか？

ヤマトは、「能力は一流だが人格に問題あり」な乗組員を新たに迎えてもなお、地球を救うことができるのか？

感想でご意見いただけただけこともあり、各エピソードをAパートとBパートで分けてみることにしました。しおりをはさんでくださっている読者様はずれが生じている可能性がございますが、どうかご了承ください。

*注！

続編を執筆する場合はこちらからの派生になる予定。

Actionにも掲載していただきました。

後日談要素を含む短編を投稿後、閲覧数がすこしだけ増えていたのであらすじを修正しました。

目次

第一章 絶望に希望を

- 第一話 人類SOS！ 甦れ、希望の艦！ Aパート — 1
第一話 人類SOS！ 甦れ、希望の艦！ Bパート — 30
第二話 最後の希望！ 往復三三万六〇〇〇光年の旅へ挑め！
Aパート — 57
Bパート — 89

- 第二話 最後の希望！ 往復三三万六〇〇〇光年の旅へ挑め！

- Bパート — 89

第二章 ヤマト発進

- 第三話 号砲一発！ ヤマトの目覚め!! Aパート — 113

- 第三話 号砲一発！ ヤマトの目覚め!! Bパート — 142

- 第四話 ワープテスト！ 出撃、ダブルエックス!! Aパート

- 169

- 第四話 ワープテスト！ 出撃、ダブルエックス!! Bパート

- 197

- 第五話 悲壮な決断！ トランジッション波動砲!! Aパート

- 225

- 第五話 悲壮な決断！ トランジッション波動砲!! Bパート

- 253

- 第六話 氷原に眠る、兄の艦！ Aパート — 280

- 第六話 氷原に眠る、兄の艦！ Bパート — 313

第三章 冥王星決戦

- 第七話 ヤマト沈没！ 悲願の要塞攻略作戦!! Aパート — 337

- 第七話 ヤマト沈没！ 悲願の要塞攻略作戦!! Bパート — 367

- 第八話 決死のヤマト！ 冥王星基地を攻略せよ！ Aパート

第八話 決死のヤマト！ 冥王星基地を攻略せよ！ Bパート

第九話 回転防御？ アステロイドリング！ Aパート —— 448

第九話 回転防御？ アステロイドリング！ Bパート —— 480

第十話 さらに太陽系！ いつか帰るその日まで！ Aパート

第十話 さらに太陽系！ いつか帰るその日まで！ Bパート

第四章 未知なる空間に挑む

第十一話 外宇宙への進出！ 迫るガミラスの影！ Aパート

第十一話 外宇宙への進出！ 迫るガミラスの影！ Bパート

第十二話 機雷網と灼熱の星を超えろ！ Aパート —— 609

第十二話 機雷網と灼熱の星を超えろ！ Bパート —— 639

第十三話 銀河の試練！ オクトパス原始星団を超えろ！ A

パート

第十三話 銀河の試練！ オクトパス原始星団を超えろ！ B

パート

第十四話 次元断層の脅威！ ヤマト対ドメル艦隊！ Aパート

第十四話 次元断層の脅威！ ヤマト対ドメル艦隊！ Bパート

第五章 乗り越えるべき壁

- 775 第十五話 悲しみのヤマト！ 立ち上がれ古代!! Aパート
- 802 第十五話 悲しみのヤマト！ 立ち上がれ古代!! Bパート
- 829 第十六話 超新星！ ヤマト、緊急ワープせよ！ Aパート
- 861 第十六話 超新星！ ヤマト、緊急ワープせよ！ Bパート
- 885 第十七話 浮かぶ要塞島！ ヤマト補給大作戦!?! Aパート
- 914 第十七話 浮かぶ要塞島！ ヤマト補給大作戦!?! Bパート
- 940 第十八話 新たな脅威！ 暗躍する第三勢力！ Aパート
- 968 第十八話 新たな脅威！ 暗躍する第三勢力！ Bパート
- 第六章 自分らしくあるために
- 995 第十九話 明かされる真実！ 新たな決意と共に！ Aパート
- 1021 第十九話 明かされる真実！ 新たな決意と共に！ Bパート
- 1077 第二十話 三つ巴？ バラン星の攻防！ Aパート
- 1047 第二十話 三つ巴？ バラン星の攻防！ Bパート
- 1102 第二十一話 未来を切り開け！ 決意の波動砲！ Aパート

	第二十一話	未来を切り開け！ 決意の波動砲！	Bパート	
1129	第二十二話	愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！	Aパート	
1157	第二十二話	愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！	Aパート	
1183	第二十二話	愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！	Bパート	
	第七章	この愛を捧げて		
	第二十三話	七色星団の死闘！	Aパート	
	第二十三話	七色星団の死闘！	Bパート	
	第二十四話	激戦！ 封じられた波動砲!?	Aパート	
	第二十四話	激戦！ 封じられた波動砲!?	Bパート	
	第二十五話	ヤマトの戦い！ 驚異の暗黒星団帝国!!	Aパート	
	第二十五話	ヤマトの戦い！ 驚異の暗黒星団帝国!!	Bパート	
	第二十六話	決戦！ 機動要塞ゴルバ!!	Aパート	
	第二十六話	決戦！ 機動要塞ゴルバ!!	Bパート	
	最終話	ヤマトより愛をこめて！	Aパート	
	最終話	ヤマトより愛をこめて！	Bパート	
	短編	ラピス・ラズリの日常		
1495				
1467				
1438				
1408				
1381				
1353				
1325				
1295				
1268				
1242				
1212				

第一章 絶望に希望を

第一話 人類SOS！ 甦れ、希望の艦！ Aパート

「あなたがたに望まれる限り、私は——必ず地球と人類を救います。あなたがたが共に戦ってくれさえすれば」

声の主がそう宣言したのを、テンカワ・ユリカは夢の中で聞いた。彼女が見た夢はとても怖く、絶望に満ちた未来だった。それは侵略者によって滅亡の危機に瀕した地球。

突然現れた異星人の侵略者は強大だった。まったく太刀打ちできない人類。目の前に迫った終わり。もはや人類の手では決して覆すことのできない破滅。

そんな悪夢を見るユリカに『彼女』は語りかけたのだ。

『彼女』は人間ではない。だがとても暖かくて優しく、戦うために生み出された存在とは思えないほど澄み切った『心』を持っていた。

ユリカは垣間見る。『彼女』の『記憶』を。

赤茶け乾ききった地球から旅立つ『彼女』とその仲間たち。『彼女』は鉄くずの中から生まれた。覆しようのない敗北が『彼女』を生んだのだ。

想像を絶する苦難の末、『彼女』と仲間たちは破滅に瀕した地球を救ってみせた。

そのあとも、数度に及ぶ危機——白色彗星の恐怖、暗黒星団帝国による侵略、太陽の核融合異常増進による太陽系の危機——そして、遙か昔に分かたれた地球人類の末裔、ディンギル帝国と、それに誘導された水惑星——アクエリアスの脅威。そのすべてを、『彼女』と仲間たちは退け地球を守り続けた。

『彼女』の『記憶』の詳細を把握することは、ユリカにはできなかった。

だが『彼女』と仲間たちは幾度も絶望をひっくり返し、たしかかな希望を運んだという『歴史』と、それを支えた『信念』は理解した。

それは、悪夢を見たユリカにとっても希望であった。そして悟った。あの夢は未来の現実だったのだと。

近い未来、人類は侵略者によって滅ぶ運命にあったが、その未来が変貌しようとしている。

ユリカと『彼女』——そして志を共にする過去の、そして未来の仲間たちが成すのだ。

『彼女』は来る。ユリカを目印として別の宇宙からやってくる。別の宇宙であっても、愛する地球と人類の未来を護り抜くためだけに。

彼女はやってくる。その胸に刻み込まれた『愛』のために。

時に、西暦二二〇一年、夏。

旧木連のタカ派、草壁春樹を中心として結成されたクーデター軍、火星の後継者の蜂起を鎮圧することに成功したナデシコCは、ボソソジャンプを駆使して地球への帰途についていた。

「月軌道に到達。以後は通常航行で地球に向かう予定です」

オペレーターのマキビ・ハリの報告に、ナデシコC艦長ホシノ・ルリが頷く。

「わかりました、クルーの皆さんは交代で休憩に入ってください。——私も少し休みます。ハリー君、しばらく艦を任せますね」

「は、はい艦長！ 僕にらせてください」

敬愛するルリに頼まれて、ハリは目を輝かせ、力強く応じた。

ようやく救出が成った彼女の家族の片割れ——テンカワ・ユリカの見舞いに行きたいルリの気持ちに汲むことに躊躇はない。

——あの極冠遺跡最下層で救助されたユリカに安堵する姿を見せられては、断れるはずがない。

それに——少しは成長しているつもりだった。少しの留守くらい守れないようでは、男が廢る。

そんなハリの様子に頬を緩ませると、「では頼みます」と声をかけて艦長席から腰を上げる。

火星の後継者の戦いを経て、可愛い弟分はまた少し成長したようで

嬉しくなった。

「ルリルリ、あんまり無茶させちや駄目よ。」

「ユリカよろしく言っておいてね」

などと、ミナトやアオイ・ジュンといったかつての仲間達に声をかけられ、丁寧に応じつつも気持ちは急いだ。

ユリカはルリたちに救出され、演算ユニットから解放された直後に意識を取り戻し、かつてのようなボケすら見せた。が、まもなく意識を失って深い眠りについてしまった。

無理もない、体にどれほどの負担がかかったのか、どのような打ちを受けたのかわかったものではないのだから。

彼女はイネス指揮のもと医務室へと搬送され、ナデシココの設備でできる範囲の精密検査を受けることとなった。

邪魔をしてはいけない、艦長としてひと段落するまではと自分を律したルリは、帰還の途に就いてからも堪えに堪え、ようやく会いに行ってもよさそうな状況になったと思ったら——もう我慢できなかった。

……気が付けば速足で医務室に移動していた。少し乱れた息を整え、身嗜み用のコンパクトを覗いて軽く前髪を整えると深呼吸。医務室のドアを潜り、ベッドに横たわるユリカの姿を視界に収める。

その隣には容態を調べているイネス・フレサンジュの姿もあった。

——その表情は、決して明るいものではなかった。

浮かれていた気持ちに水を差されながら、ルリは問うた。

「イネスさん……。ユリカさんは、ユリカさんは大丈夫なんですよね？」

ルリは胸が締め付けられるような気分だった。

ベッドの上に横たわるユリカの体はシートで覆われていて見えな
いが、穏やかな呼吸に合わせて胸元は上下しているし、顔色も悪くは
見えない。

……しかし薄っすらと、薄っすらとだが、その顔にはボソソジャン
プの時に生じるナノマシンのパターンが光を放っていた。

ルリの顔色がさらに悪くなる。明らかに、異常だった。

「ああ、ルリちゃん。そうね、いまのところは、ね。多少光っちゃって
るけどたぶん大丈夫よ、問題ないわ」

ルリの問いかけに答えるイネス。取って付けたような笑顔が真実
を雄弁に物語っていた。

その程度の演技で騙されると——いや、イネスも動揺を抑えきれな
いのだろう。それでもルリの気持ちを考えたからこそ、少しでも安心
させられればと、演技しようとして失敗したのだとわかる。

だがそんな気遣いに応じられるほど冷静ではいられなかった。

「いまのところは？ たぶん？——お願いですイネスさん、正直に答
えてください。——どこがどう悪いんですか？」

医務室に向かうまでの浮ついた気分はすっかり宇宙の彼方に飛ん
で行ってしまった。

——やはり彼女はなんらかの重篤な障害を抱えてしまったのだろ
う。

——アキトのように。

「…………ごめんなさい。本当はいま話すべきじゃないと思っただけど
ね…………」

沈痛な面持ちのイネスは告げる。残酷な事実を。

「ナデシコの設備では万全とは言えないところはあるけど、病院で再
検査しても結果は同じだと思う。——彼女は長くないわ。万全の態
勢で治療を続けたとしても、もって五年。少しでも無理をすれば、一
年持たないかもしれない…………」

——ルリは足元が粉々に崩れ去ったような錯覚に陥った。両足が
わなわなと震えだし、歯がガチガチと耳障りな音を立てる。

思考がぐるぐると渦まいて、視界が揺れる。

（ユリカさんが、長くない？ どうして、どうして、折角会えたのに、
もう一度やり直せるかもしれないの？）

「彼女の体はね、演算ユニットの物と思われる未知のナノマシンに浸
食されているの。いまは活動を休止しているけど、どういった弾みで
活性化するか見当もつかない——いえ、ひとつだけはつきりとわかっ
ているのは、彼女がボソソジャンプを使うたびに確実に活性化して体

を蝕んでいくということよ。それどころか演算ユニットと彼女は完全にリンクを切れていない。それが原因でナノマシンの活動を完全に停止させることができないどころか、ジャンプに関わるたびに確実に体を侵食されていくことにもなる。……いまの医学じゃ除去すまままならないわ……」

今度こそ、ルリはその場に座り込んでしまった。

——嗚呼、なんということだろうか。

夫であるテンカワ・アキトが、あれだけの苦難の果てに救い出した妻は、すでに手遅れだったのだ。

……結局火星の後継者に捕らわれた時点で、この夫婦の未来は決まっていたと言っただろうか。

「——せめて、せめて遺跡の解析がもっと進めば、あれを作った異星人にでも接触できれば、あるいは。——もちろん私たちも全力を尽くすわ、それでも、確実に救える保障がないけれど、一切妥協しないことだけは約束する」

「——浸食が進んだ場合、どうなるんですか？」

弱々しい声で尋ねる。

きつと顔もひどいことになっているのだろう、イネスの顔が痛々しいものを見るものになっていた。

「確実に言えるのは全身の細胞異常ね。遺伝子情報が破壊されたら、体のあちこちにガンが発生する。ガンを治療しようにも、全身に発生したらいまの医学でも追いつかないし、原因であるナノマシン自体を除去・抑制できない以上完治はないわ。——それに神経組織にも負荷が掛かり続けることになるから、アキト君のような感覚異常が生じる可能性も高いし、下手をすると脳に損傷が発生してガンで死ぬよりも先に——植物人間になる可能性も……」

残酷な事実を告げざるを得ないイネスに、ルリはもう言葉も出なかった。

最愛の家族が、一度は亡くしたはずの家族が帰ってきたと思ったのに。

また、失うのか。それも——こんな、こんな理不尽極まりない形で

！
……ルリの中で火星の後継者に対する、理不尽な世界に対するの憎しみと怒りが渦巻く。

自分の力をすべて使えば、いまは護送中であろう草壁ら火星の後継者の連中を殺すことはできる。

直接砲撃を叩きこんでもいい、システムを乗っ取って生命維持システムを止めてやってもいい。懲罰など知ったことではない。

——ユリカが生きられない世界に、アキトが料理をできない世界に……私たち家族が幸せになれない世界になんの価値がある。

暗い感情が胸の中で渦巻く。

ルリはアキトが修羅の道を進んだ気持ちがあはつきりとわかった。

これはあの時味わった絶望とよく似ている。いや、はつきりとした悪意のもとにもたらされた悲劇だと知ったいま、より闇をまとつていると言えた。

そこでふと、アキトの補佐をしていたであろう少女のことが——言葉が頭を過った。

「……ナノマシンが、ナノマシンが原因なら——私がリンクして制御することはできないんですか？」

ルリにとつてはそれは妙案にも思えた。

ナノマシンを介して他者にリンクできることは、かつての記憶麻雀の一件、そして生体部品にされたユリカ自身が証明している。

ならばそれを逆手に取り、そういった技能に特化しているルリの実力をもつて遺跡由来の未知のナノマシンとやらを掌握して、その活動を抑え込める可能性は皆無ではないはずだ。

「活動の内容そのものがよくわかっていないのよ？ 下手にアクセスすればあなた自身も障害を患う危険がある——彼女がそれを望むと思つて？」

イネスの言葉に耳を貸す気はない。私がやらなければユリカは——

「だとしてもほかに選択肢がなければ——」

「——必要ないよ、ルリちゃん」

冷静で、悲観も弱々しさもない、場違いなほどに普通の声。

だがルリの行動を押しとどめる強さを持った、ユリカの声だった。

「ユリカさん!? 起きていらしたんですか?」

「うん。ついさっきだけだね。……ルリちゃん、気持ちはうれしいけど、そんなことしたって無駄だよ。いくらルリちゃんでもこれには勝てない。オモイカネの力を借りても」

ユリカはゆっくりと上体を起こしてルリと向き合う。ナノパターンの輝きは消え失せ、平常を取り戻したその姿。

——真実を知ったルリが切望し、必ずの奪還を誓った、愛しき家族の姿だった。

だが彼女の体の内では悪魔がその毒牙を研いでいるのだ。猶予はない。

「……やってみなければわかりません。試す価値はあります。だから試させて——」

身を乗り出すように訴えたルリを、ユリカは強く拒絶した。

「そんな方法じゃ通用しないよ。無理をすれば、確実にルリちゃんが壊されちゃう。——私は『家族』を犠牲にしてまで生き延びるつもりはないよ」

「しかし!」

さらに食い下がるルリの言葉を遮るように、ユリカは右手を突き出した。

「それにね、ルリちゃんにはやらないといけないことがある。だから自分を大切にしないとダメ」

「え?」

「いま、『彼女』が来たの」

「なにを言ってる——」

ユリカの言葉の意味を確かめる間もなくコミュニケーションが着信音を発し、ブリッジにいるハリの慌てふためいた様子を映し出す。

「か、艦長! 外の映像を見てください! と、とんでもないことが起こってます!!」

ハリは一方的に告げると外部カメラが映し出した映像を医務室に

デカデカと映し出す。その驚愕の映像に、ルリモイネスも驚愕に顔を引きつらせる。

唯一ユリカだけがその映像を真摯な眼差しで見つめていた。一瞬たりとも見逃すまいという意思が、その瞳から読み取れた。

「こ、これは一体……！」

ルリとイネスの言葉が被る。

フライウインドウに映し出された映像は宇宙の神秘、または超常の現象としか言えない、とても美しくあり、同時に酷く恐ろしいものだった。

地球と月のおおよそ中間の地点で、なにもない虚空が割れ、膨大な量の水が溢れだしたのだ。まるで瀑布のような勢いで渦巻き、これが真空の宇宙でなければ轟音を響かせているであろう神秘の映像。

カメラ越しで見ることが憚れるような、驚異の現象であった。

「アクエリアス」

ユリカが不自然なほど静かに告げた。

アクエリアス、その言葉の意味を問いかけるにはルリモイネスも、そしてコミュニケーション越しに聞いていたハリを始めとするブリッジの面々も余裕が無かった。

目の前に唐突に広がった瀑布は次第に落ち着きを取り戻し、静かに称えた巨大な海と化した。その水面が落ち着きを取り戻したかに思えた次の瞬間、水面を割って何者かの建造物の様な物が姿を現す。

——その姿は重々しいブルージェーと防錆塗料の赤に塗り分けられた、まるで洋上を往く船のような、アンティークな物体。

触先と球状艦首、甲板の上には砲身の歪んだ巨大な三連装砲塔が二つ確認できる。

その物体——恐らく宇宙戦艦の艦首は、天を衝くかのように宇宙を仰ぐと、その身を震わせながら徐々に徐々に、再び水中に没していく。まるで、役目を終えた船が、最後にその姿を見せようと力を振り絞ったかのようにも、それともまだまだ健在であるとその威容を見せつけているかのようにも見えた。

「……ルリちゃん、よく見ておくのよ。あれが私たちの最後にして

最大の希望——これから人類を襲う厄災を退ける唯一の力——宇宙戦艦ヤマトだよ」

ささやくようにその物体の名を口にするユリカ。その声色には畏怖と敬意、そして羨望が含まれていた。

「宇宙戦艦——ヤマト?。」

ユリカの言葉を繰り返すルリに、ユリカはこくりと頷いて答えた。

「そう、宇宙戦艦ヤマト。遙かなる宇宙から私たちのためだけにやってきた存在。そしてヤマトが対する私たちにとっての厄災の名は——大ガミラス帝国」

ユリカの言葉が終わると同時に、その言葉が真実であると告げる別の報告がブリッジから届いた。

そう、彼らは突然現れたのだ。

まるで内輪揉めで慌てふためく人類をあざ笑うかのように、侵略の絶好の機会であるといわんばかりに。

その日、世界は震撼した。

その世界の片隅で、『彼女』は大胆なようでひっそりとこの世界に顕現し、息を吹き返さんとしていた。

その名は——宇宙戦艦ヤマト。人類最後の希望と呼ばれる船であった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ　ディレクターズカット　愛の戦士たち

第一話　人類SOS！　甦れ、希望の艦！

地球人類が謎の星間国家、ガミラスに侵略戦争を仕掛けられて一カ月の時が流れていた。

時に西暦二二〇二年。場所は冥王星近海。そこには地球の残存戦力をまとめ上げた『最後の防衛艦隊』の姿があった。

総数はわずかに三〇隻。万全の状態で出撃した艦艇は半数にも満たず、なにかしらの損傷を抱えている艦も多い。

彼らは今日この宙域にて、最後になるやもしれない反抗作戦に挑む

べく、静かに冥王星を目指して航行を続けていた。

圧倒的な科学力を有するガミラスの前に、地球は壊滅的な被害を被っていた。

当初こそ互角に戦えるかと思われた地球艦隊ではあったが、ガミラスの艦艇は強力で、地球側の艦艇では太刀打ちできなかったのだ。

地球側では減衰させるのがやつとな旋回砲塔式の高収束グラビティブラスト。

地球側のグラビティブラストを容易に防ぐ強固なディストーションフィールド。

相転移エンジンを遥かに上回る高出力機関である波動エンジンと、それが生み出す推力による圧倒的な機動力。

フィールドに頼らなくても強固で、グラビティブラストにすら耐性を持つ装甲。

それに加え地球よりも艦隊運用の統率が取れていると、付け入る隙を見出せなかった。

——そう、過去の木星との戦いでその威力を示し普遍化した相転移炉式宇宙艦艇も、グラビティブラストも、ディストーションフィールドも、彼らの技術力の前では一世代も二世代も前の玩具に過ぎなかったことを、否応なく思い知らされる結果となったのである。

航空戦力同士の戦いでは、人型機動兵器の運動性能によって辛うじて一方的にやられるという事態は避けられたが、それでも火力不足で機動力の差は大きく、形勢を逆転するには至らなかった。

想像を絶する苦境を前に、ついには条約で禁止されていたボソン砲や相転移砲、はては火星の後継者との戦いで実績を残したナデシコCとホシノ・ルリによるシステム掌握も試みられたが、結果は芳しくなかった。

ボソン砲はなにかしらの対策があったのか、敵艦内にボソンジャンプさせようとしても座標が狂って狙った場所に送り込めなかったた

め、役に立たなかつた。

相転移砲にすらなにかしらの対策を用意できたらしく、発射の兆候を捉えられると無力化されてしまいますため効果が薄く、不意を突いて発射に成功したときのみその圧倒的な破壊力を披露するに留まつた。しかしそれゆえ決定打としては心許なかつた。

そして最後の手段であつたシステム掌握も、通信システムの大本が違つたためか、それとも管制システム自体の基本構造の差異ゆえか、十分な効果を上げる前にナデシココ本体に攻撃を加えられて封じられるなど、地球側の対策は悉く通用しなかつたのである。

その結果、まず見せしめといわんばかりに木星が滅ぼされた。

次は火星、そして各スペースコロニーと凄まじい勢いで人類はその居住圏を奪われていった。

もはや戦争の体すら成していない、一方的で情け容赦のない殺戮。火星の後継者の事件直後で煽られていた地球と木星の対立はおろか、宇宙軍と統合軍の権力争いも投げ出して対応を始めた頃には——もう遅かつた。

間もなく地球への直接攻撃を許し、地球は徹底的に追い込まれていく道をひた走ることになつたのだ。

それでも地球は無条件降伏を受け入れなかつた。

ガミラス側の要求が「奴隷か、さもなくてば殲滅か、好きな方を選べ」と高圧的であり、到底受け入れがたい内容であつたからだ。

受けれたが最後、人類は彼らの侵略の先兵になるか、さもなくてば資源採掘を目的とした労働船に寄せられ、死ぬまで働かされるか、ふたつにひとつ。

そして母なる星——地球は彼らに奪われてしまう。とても受け入れられない要求であつた。

無論追い込まれるにつれ「全滅してしまうよりは……」という意見も幾度か浮上した。

しかし水面下である計画を進行していた者たちが、それを留めていた。

『人類にはまだ、ヤマトがある』

その言葉の意味を正確に知るものは少ない。
ヤマト。その言葉の意味は実にさまじまだ。

アジアの国の一つである日本国の異名、それに由来し企業の社名として使われたり、土地の名前を指す旧国名でもある。

そして、いまではすっかりと忘れ去れたもうひとつの意味。

……それは戦艦大和。

第二次世界大戦において旧大日本帝国海軍が建造・運用した、旧世代の洋上戦艦としては現在でも最大最強を誇るとされる、大戦艦である。

大艦巨砲主義の極致とでも言うべき三連装四六センチ砲を三基備え、同時にその直撃に耐えられる堅牢な装甲をもっていたとされる、最強と謡われた超弩級戦艦。

——だがその艦は碌な活躍もできず没した。

時代の流れはすでに航空戦力に流れていて、その自慢の大砲の威力を披露する機会には終ぞ見舞われなかった。

彼女を沈めた航空戦力の台頭を招いたのが守るべき祖国であったことは、大和にとつての不幸であったのかもしれない。

かくして大和は深き海底に没した。

一〇〇機以上の爆撃機の波状攻撃に曝され、多くの兵士たちの亡骸を抱えて、北緯三〇度四三分、東経一二八度四分の、坊野岬沖の水深三四五メートルの地点で永遠の眠りについたので——。

誰もがその艦が、人類の希望だとは露ほども思わなかった。

旧世紀の、それも現在では原型すらまともに残っていない鉄屑。それが大和だ。誰も期待しないのは当然と言えよう。

だからこそほとんどのものは、ヤマトという暗号で呼ばれる兵器が水面下で建造されているのだと考え、大和のことなど連想すらしていなかった。

——だから彼らは知らなかった。大和は生きていることに。

たしかにこの世界の 大和は朽ち果てた。だが大和はヤマトとなって再起した世界が存在しているのだ。

同様の歴史を辿りながらも原形を留めたまま沈み、遙か未来で宇宙

戦艦として蘇り幾度となく地球の危機を救った、伝説の宇宙戦艦ヤマトが。

あのアクエリアス大氷塊のなかで、静かに目ざめの時を待ち構えていることを。

彼らはまだ、知らないのだ。

そして現在。

冥王星近海を航行中の艦隊旗艦ナデシコCのブリッジの中で、ミスマル・ユリカは瞑目していた。

秘密裏の計画とはいえ、ヤマト再建計画の立案者であり責任者でもある彼女がこの場にいるのには理由があった。

追いつまねながらも諦めずに続けた必死の調査の結果、ガミラスの太陽系進行の拠点となっているのは準惑星として太陽系の輪から外された星——冥王星であることが判明した。

人類がガミラスの侵略を退けるためには、ここを陥落させる以外に道はない。

しかし遙か遠方にある冥王星に艦隊を運搬するのは難しかった。

改良が進んだ相転移エンジンの巡航速度と航続距離であっても、惑星間——それもかつては太陽系の最果ての星と呼ばれた冥王星までを短時間で航行するには至らない。

当然ボソジャンプに頼るという選択肢も挙げられたが、ガミラスの太陽系侵攻でターミナルコロニーを含むチューリップは壊滅してしまい、冥王星までのルートも開かれてはいない状況ともなれば、A級ジャンパーによるナビゲートしか手段がない。

……だが肝心のジャンパーのほとんどは、火星の後継者に狩られてしまった。主義主張や手段はともかく、人類の未来と発展を謳い文句としていた彼らの行動によって、人類は窮地に追い込まれてしまったのである。

冥王星基地の存在が明らかになった時点で生存が確認されていた

A級ジャンパーはミスマル・ユリカ、イネス・フレサンジュの二名。――そして存在が秘匿されたままのテンカワ・アキトであった。

しかし公には死亡扱いのままの匿われているテンカワ・アキトに声がかかるはずもなく、イネス・フレサンジュは秘密裏の研究に従事しているとき、ミスマル・ユリカは人体実験の後遺症で入院中となれば、もはやお手上げの状態にあったと言えよう。

――だがユリカは先月唐突に軍に復帰して、この作戦を立案し自らナビゲーターとしてに立候補したのだ。

生死に係わるほどの大病を患ったときれている彼女なので内部でも物議を醸し出した。

貴重なA級ジャンパーにして、宇宙軍総司令の娘。そして火星の後継者事件の被害者にして確認される唯一の生存者。

立場的に容易に切り捨て使い捨てるにはさまざま問題があったのだが、彼女自身が決断を促したのだ。

躊躇している余裕など、すでないのだと。

復帰するなりユリカは冥王星基地に対する奇襲作戦を立案した。

ボソソジャンプで冥王星宙域付近まで跳躍し、残りの行程はステルスによる無音航行で接近。接近次第相転移砲を使用して大打撃を与える。

言葉に出したり文字に書き出してしまえばその程度の内容であった。

この単純ながら成功率が限りなく低い作戦に従事すべく、残存戦力を寄せ集めた『最後の地球艦隊』が編成され、生きて戻れぬ覚悟すら決めて、地球を発つたのだ。

この艦隊にはガミラスの猛攻で故郷を失った木星人の兵も多く参加していた。

地球に逃げ延びた同胞のため、「一緒に敵を取ろう」と手を握んでくれた地球の友人のために。

皮肉なことに、ガミラスという強大な脅威を前に人類はひとつになつた。いや、ひとつにならざるをえなかつた。

そうしなければならぬほど地球追い込まれてしまったのだから。

目を瞑りながら、ユリカは頭の中で現状をあの時垣間見た『記憶』と比較する。

（私があの時見た地球とは状況がまるで違ってる。あつちは七年近くも耐えられたはずなのに、こつちでは一年にも満たない短時間で追い詰められた。……この違い、やつぱりあのときスターシアに教えて貰った、あれの影響なのかな？）

ユリカの脳裏に浮かぶのは、赤茶けて水と緑を失った死にかけた星。

ユリカたちの地球とは異なる形で破滅に瀕した地球。

それを救ったのがあの宇宙戦艦ヤマトと、救いの手を差し伸べてくれた愛の星——イスカンドルと女王スターシア。

多少の差はあれど、自分たちも同じ状況に追いやられている。

ユリカの心中は穏やかとは言い難かった。どうしても常に不安が付いて回り、自分自身に対する不信も顔を覗かせていた。

（イスカンドルへの渡りは付けた。ヤマトももう一息で飛び立てるようになるはず。……はたして本当に、私はヤマトで地球を救えるのかな？ 私——沖田艦長や古代君のようにやれるのかな？）

ヤマトは何度も地球を救った。その実績にウソ偽りはなく、ユリカも疑いはしていない。

だがヤマトの実力は、戦艦としてのスペックのみならず、クルーの連帯感と技量あってこそそのものだということは理解している。

——はたして、ユリカたちはかつてのヤマトクルーに——古代たちに迫れるのかどうか。沖田艦長の教えを正しく受け継ぐことができるかだろうか。不安は尽きない。

（それに、ヤマトの活躍に関してはある程度記憶を垣間見たとは言っても、完全じゃないから敵さんの出方を予測して作戦を立てるってのも無理。——先入観でものを見なくて済むってのはむしろいいことなのかもしれないけれど、なまじ記憶を見ちゃったのは悪手だったかなあ。見たくて見たわけじゃないけどさ）

ユリカは断片的であつてもヤマトの記憶を垣間見たことで、それを

活かして対処できないかどうかを考えたことが幾度かあった。

だが曖昧かつ断片的な記憶ではそれも叶わなかったうえ、ヤマトが知る記憶は宇宙戦艦として新生が成った発進以降のもの。それ以前の地球侵攻の記憶はなかった。

それに——記憶にあつたガミラスは、グラビティブラストもデイス トーシオンフィールドも持つていなかったし、スターシアから聞かされたガミラスとイスカンドルの成り立ちも含めれば、ヤマトの記憶を頼りに備えられるのはせいぜい今後も異星人の侵略の可能性があるということを進言できる程度。

仮に新たな侵略者がヤマトの記憶と一致する国家であつたとしても、その技術力や成り立ちを図るには役に立たないだろうと、ガミラスによって証明もされてしまった。

創作で見かけるタイムトラベルものや物語の世界に飛び込んでしまうような作品にみられる優位性を、ユリカは得ることができなかった。少しだけ、残念だと思う。

(でも、やるしかない。私には責任があるんだ……ヤマトを蘇らせる、一緒に戦うと宣言した責任が。それに、スターシアの好意を無駄にはできない)

知らず知らず拳を握り締める。

ヤマトは間もなく蘇る。ヤマトと共に戦って、滅亡寸前まで追いやられてしまった地球を救う。

すべては愛のため。譲ることのできない、愛のため。

そのために自分は、ここまで抗い続けてきたのだ。

「ユリカさん、体調は大丈夫ですか？」

艦長席に座ったルリが心配気に声をかける。目を瞑ったまま静かにしていたから、具合でも悪くなったのかと気になったのだ。

「うん。まだ大丈夫。心配しなくても私って結構頑丈だから大丈夫だよ。ほら、このとおり元気元気！」

そんなルリにユリカは至って普通に、まったく問題ないと言わんばかりに両手で力こぶを作るポーズまで取って見せた。

「なんだっいたら空も飛んでみせるよ！」

両手を揃えて「シユワツチー」とポーズをとる。

「飛ばなくて結構です。どこぞの光の国の超人の真似事も必要ありません」

ルリはピシヤリとユリカの冗談を叩き潰す。くすりとも笑わない真顔で叩き潰されたユリカは、

「少しくらいノツテくれたっていいのに……」

と両手の人差し指を顔の前で「ちよんちよん」と合わせてイジケた。ルリは相変わらず、手厳しい。

……どうやら体調は特に悪くないようだ。ルリは少しだけほっとした。

ユリカは艦長席の右下にあるオペレーター席のひとつに座っている。連合軍の軍服に身を包み、以前の彼女と一見変わらない様子で任務に挑んでいる。

——つい六週間前まで病院の集中治療室にいたとは思えないほど、堂々とした佇まいだ。

だがルリはユリカの様子が気になってしかたがなかった。

最近の彼女は明るく振舞おうと無理をしているように感じてならない。一見なんの問題もなく普段どおりに振舞っているのだが、その瞳の奥には隠し切れない焦りと不安が浮かび、時折暗い表情を見せることもあった。

だがそれも無理らしからぬと、彼女を知るものは心を痛める。

ルリのように旧ナデシコから関わりのある、またその容態を知っているハリやサブロウタなどの面々はしきりにその体調を心配し、無理をさせまいとしていた。

ジャンプナビゲーター兼戦術アドバイザーという役職こそ当てられているが、実際ユリカがナデシコで、艦隊で請け負う役割などボソソジャンプ以外にない。彼女の仕事は作戦の立案とナビゲーターで完結している。

いや、ルリがそれ以上の負荷をかけないようにと指揮権を与えることを拒み、それが受け入れられたにすぎない。

意外と素直に応じたユリカに思うところがないわけでもないが、ルリはとりあえず従ってくれたことに安堵した。

もう彼女の時間は残り少ない。

ヤマト再建計画——ユリカが考える真に最後の反抗作戦のために、彼女はボソンジャンプを乱用した。それが彼女の命の灯を吹き消さんとしているのだ。

あの超常現象としか言いようのないアクエリアス出現後、止めるも聞かずあの氷塊に没したヤマトなる戦艦の残骸をボソンジャンプで強引に引き上げ、木星からかつぱらってきたという造船ドックの一角に収めた。

それだけで終わりかと思いきや、ボソンジャンプを使って今度はドックごと氷塊の中に戻し、事前に用意させていたチューリップで内部へのゲートを確保すると、土星の衛星タイタンに出陣。

ガミラスの目を掻い潜ってエンジンの構造材として必要だという未知の鉱石——コスモナイトの鉱脈を見つけ出し、やはりジャンプで探掘して持ち帰ってきた。

ほかに必要な鉱物資源を得るためにジャンプしまくったと聞いている。

このときの行動力は本当に凄まじいもので、誰も邪魔する余裕がなかった。むしろガミラスの出現で混乱の極みにあるのを利用して好き勝手したと言っても過言ではない。

さらにヤマトのデータベースを持ち出してそこに収められている未知の技術の開示することにも成功し、既存の艦艇の強化を短時間で実現、抜根的な解決には至らずともなんとか踏み止ませることにも成功させている。

まさに八面六臂の大活躍。いままでとは桁の違う凄まじいボソンジャンプの活用方法は、間近に見たネルガルのほうが情報隠蔽に走らざるをえないほどのものだったと聞く。

そのあとはユリカの要望とアイデアを、イネスらネルガルが誇る天才頭脳の持ち主たちがヤマト伝来の技術を用いて形にしたのが、大きな改修もなく既存の機動兵器を強化する支援メカ、Gフアルコンだ

(正式名は Galaxy Falcon。「銀河の隼」の意)。

エステバリス用に用意されていた高機動ユニットの発展型に相当し、これに対応するように改造したエステバリスに合体させることで、ようやくガミラスに対抗しうる機動兵器運用が可能となった。

……だが最後の希望とユリカが期待を寄せる肝心の宇宙戦艦ヤマトは本命である波動エンジン——ガミラスと同等のエンジンは未だに復元が完了していないため、いまだに再起の目途が立っていないかった。

データが足りない。

たったそれだけの理由で、その心臓となり莫大なエネルギーを生み出す波動エンジンの復旧は進んでいない。それ以外の部分はほとんど完成しているらしいのだが、エンジンが動かなければただの鉄くずだ。

情報ソースが時間を見つけては会いに行っていたユリカなのだから、間違いはないだろう。

彼女はルリにヤマトに乗って欲しいとは一言も口にしていなかったが、ネルガル経由で彼女の意志とは無関係にルリにも乗艦を求める声が届いている。

——だがルリは、ヤマトにさほど期待を寄せていないこともあって、乗り気ではなかった。

ナデシコに対する愛着もそうだが、ユリカの命を擦り減らす要因になっているヤマトにいい感情を持てなかったのだ。

ヤマト再建——そのために彼女の余命はついに六か月を宣告された。

体は急速に衰え始め、歩行するにも難儀するようになって杖を必要とするようになったのは序の口だ。

長時間の運動はもつてのほか。筋力の低下も著しく、片足で立つていることができなくなったので着替えなどにも苦労の連続、入浴もひとりでは転倒の恐れがあつて許可できないと言われた。

筋力の低下は全身に及んでいるため体の線は細くなり、以前のユリカの象徴とも言うべき健康的な魅力はすでに失われた。

ときおり激しい頭痛や体のどこかしらの激痛に見舞われるらしく、床やベッドの上でのた打ち回ることも増え、ときには丸一日意識が戻らないこともある。

髪から艶は失われ、油っ気のないぼさぼさ髪に変貌している。普段は誤魔化すために髪用の油を付けているくらいだ。

とても妙齡の女性の髪とは思えない無残なありさまで、抜け毛も増えた。

追い打ちをかけるかのように消化器官の衰えから、液体に近い流動食のようなものでなければ受け付けなくなり、不足しがちな栄養などを補うためのそれは、味など到底期待できるものではない。

これでアキトのように味覚が壊れているのならともかく、彼女の味覚はまだ健在なのだ。

食事という楽しみを奪われたに等しいその心境は……察して余りある。

消化器官が衰え始めてからは栄養の吸収率が下がったためか、高カロリー食で辛うじて維持してきた体重も減少し始めている。

幸いなのは、少しやせた程度で体形が留まっていることだろうか。とどめと言わんばかりに彼女の女性としての機能までも完全に失われ、二度と子供を産めなくなった。ナノマシンを除去しようとも、体の機能そのものが破壊されてしまったてはどうにもできない。

——彼女が望んでいたであろう輝かしい未来は、永遠に閉ざされてしまった。その事実が告げられたとき、ルリも同席していた。

だからそのときの、一切の感情が削ぎ落されたようなユリカの顔が、忘れられない。

もう勘弁してくれ、私たち家族がいつたいなにをしたというのだ！ルリは幾度となく心の中で叫んだ。

一度は様子を見に来たハリに抱き着いて泣き叫んでしまったこともある。あの子には迷惑だと思ったが、あのときは誰かに泣きつきたくて泣きつきたくて仕方なかったのだ。

ここまで追い込まれても彼女は、必要と判断すれば命を削るボソソジャンプを躊躇なく使用する。

——ジャンプをするたびに彼女はなにかが壊れていく。じりじりと、じりじりと、真綿で首を絞めるが如く追い詰められていく。

ルリを始めとする彼女を知るほとんどの人間が限界が近づいていることをひしひしと感じ、自重を呼びかけるも受け入れられないという状況に心労を溜めている。

今回のジャンプだって、直後にはナノパターンの激しい明滅がなかなか止まらず、自室に引き込んでいったくらいだ。

こつそりとモニターしていたルリはそこで苦しみもだえるユリカの姿を見ることになり、思わず絶叫しそうになった。それほど激しい苦しみ方であった。

——ルリは以前からヤマト再建に奔走するユリカの行動に苦言を述べ、おとなしくしているようにと何度となく頼み込んだが、ユリカは決して首を縦に振らなかった。

「大丈夫。まだ希望は潰えてないから。希望を形にするためにも、私が頑張らないといけないんだ」

心配をかけまいとしているのか、それとも痩せ我慢をしているのか。自分に向けられる優しい笑顔が心を抉る。

正直理解に苦しんだ。——いまさら戦艦一隻復元したところで、なにが変わるといふのだ。

なぜユリカはあのヤマトにそこまで入れ込む。いったいヤマトのなにが彼女をそこまで魅了し、駆り立てるのか。

ルリにはユリカの考えがまったく理解できなかった。

あのヤマトには、この状況を覆すなにかが——ユリカが命を削るだけの価値があるというのだろうか。理解できない。

ルリはヤマトが憎らしかった。自分からユリカを奪おうとしているように感じられて。

……せめてアキトが近くにいれば自重したかもしれないと思うと、ルリは苛立ちを覚えずにはいられない。

……アキトはいまだに姿を見せない。

ネルガルが匿っていることは見当がつく。軍に協力できないのは、下手なことをしてテロリストだと知れてしまえば、彼の今後が危うく

なるとの危惧だろうから別に構わない。

だが彼が姿を見せてくれさえすれば、A級ジャンパーとしての力を貸してさえくれれば、ユリカがここまでの無茶をしなくて済んだのではないかと思わずにはいられない。

それでもユリカはヤマトに執着したかもしれないが、そのジャンプをアキトが肩代わりするだけでも違ったのだろうか。

——本当にかつてのアキトは死んでしまったのだろうか。

目的を達したら彼女のことなど、自分たちのことなど、もはやどうでもいいのだろうか。

いま自分たちはこんなにも苦しんでいるのに。

たとえ滅びるとしても、そばにいてさえくれれば受け入れられるのに。

ユリカは救出されてからと言うもの、ルリの前でアキトのことを自分から切り出したことが一度もない。こちらが振つてもものつてこない。

それどころか旧姓のミスマルで名乗るばかりで、まるでアキトの事を忘れようとしているような気配すら感じられる。

それとも、先がない自分のことなどさっさと忘れて、他の幸せを見つけると言う暗示だともいうのだろうか。

ルリはネルガルに散々掛け合つてアキトを求めた。

彼女には時間がない、会うように説得して欲しいと。

ユリカにもアキトは必ず帰ってくるはずだから、信じてあげてほしいと訴えた。

前者はまともな回答など返ってくるはずもなく、後者にしても優しく微笑むだけで首を縦に振ることもしない。

ルリは精神的に追い込まれていた。

抜け出せそうにない絶望の闇に捕らわれそうになったことは、一度や二度ではない。

その都度支えてくれたのがサブロウタやハリといった新しい仲間たち。ミナトやユキナといったかつての仲間たちだ。

その存在にルリは幾分心を救われた。

特にルリを独りにしまいと躍起になっているハリの姿には、申し訳なさと共に不思議な温かみを感じるほどだった。

そしてルリは、ユリカに無理を強いる原因を作っているガミラスに存分に当たった。

それは憎しみと言うほどドロドロしているわけではない。強いているのなら子供が駄々をこねるかんしゃくに近い代物だった。

——しかしガミラスは強い。ナデシコCの全力でも足元に手が届くかどうかという状況に、ストレスは溜まる一方だ。

最近は肌荒れも酷いし目の下にはクマができつつある。

それでも指揮官として懸命に自分を奮い立たせて立ち向かっているが、いつ足元が崩れてもおかしくないな、と自分でも感じているほど状況は悪い。

それでも、抗わないわけにはいかない。

人類に明日がなければ、ユリカの延命すら望めないのだ。

「作戦開始まであと五分です。各員各所、準備を済ませてください」
ルリは全艦に指示を出す。

消耗激しい軍部は人材不足の極みにあり、それが祟ってルリは臨時の艦隊指揮官を兼任することになった。それに合わせて戦時階級として大佐に昇進させられたが、そんなものはどうでもいい。

艦隊司令に関してはユリカが自分から立候補したのをコウイチロウと二人掛かりで説得して引かせたから、その代わりに務めているに過ぎない。

建前上は復帰したての人間に艦隊を任せられないというものだったが、少しでもユリカに負担をかけたくないという一念からだった。それを察してか、ユリカは素直に従ったのでルリはその場は安堵したものである。

ともかく、艦隊旗艦でもあるナデシコCはこの作戦の要だ。掌握はできなくてもセンサー類のかく乱ができることはここ数回の戦闘で判明している。

当初は降伏勧告などの通信もあったが、現在では侵入される危険を考慮してか、勧告もなく殲滅戦に移行されるケースがほとんど。

そうでなくても徐々に対策が進んでいるのか、手応えがなくなっていく。だが、ルリにはこれ以外に対抗手段がないのだ。

「っ!? 艦長、冥王星に動きがあります」

ハリからの報告を受けてルリは気持ちを切り替える。

「詳細を」

「冥王星より艦隊出現。総数は六〇、駆逐艦が五〇に空母が九、それと未確認の大型艦が一隻。スクリーンに出します」

ブリッジ前方に投影されたウインドウには、ガミラスの艦艇が隊列を組むさまが映っている。

まるでヒレを広げた魚のようなシルエットに目玉のような艦首の装飾、緑を基調にした有機的なデザインをした、ガミラスの駆逐艦と思われる比較的小型の艦艇を中心に、ヒトデを連想させる快速の十字型の空母の姿も見える。

そしてその隊列の一番奥、中央には地球艦艇に近いとも言える紡錘・葉巻型の艦体を白と緑のツートンカラーで塗りわけた、多数の主砲を装備した見慣れぬ艦艇がある。

いままで地球が遭遇したどの艦艇よりも重武装で洗練されたデザインは、初めて見るルリですらプレッシャーを感じるほどの迫力を醸し出している。

ガミラスの主戦力であろう駆逐艦型よりも大きくて、ナデシコにも匹敵するサイズ。あれが——敵の旗艦だろうか。

それにしても、ステルスを駆使して近づいたはずだったが……。探知されていたのか、それともこちらの行動などお見通しだったのだろうか。予定よりも会敵が速い。

ルリは肘掛けのIFSボールを強く握り締めて悔しさを露にする。地球艦隊の力では、奇襲以外で勝ち目が薄いと言うのに。

「あの新しいやつはたぶん敵艦隊の旗艦、それも戦艦タイプだね……。やっぱり出てきたかあ。ここで私たちを完膚なきまでに潰して今度こそ戦意を折るつもりだよ。駆逐艦で接近してかく乱、空母の機動部隊で追い打ち、トドメに必要なら後方の戦艦の長射程砲かあ」

ウインドウに表示されたガミラス艦隊の威容を見つめながら、ユリ

力が状況を分析し始める。

「乱戦に弱い地球艦艇の弱点をものに突いてきてるなあ。こつちは決め手になるのが相転移砲しかないし、グラビティブラストはかなり接近して当てないとほとんど通用しないし、どっちも取り回しは悪い固定砲だから当てること自体が一苦労。——新型ミサイルと宇宙魚雷だけじゃ、強力な回転砲塔を有するガミラスとの接近戦で勝つのは難しい。最低射程の問題もそうだけど、迎撃されて無力化されることも少なくないから、決定打にはならないんだよなあ」

ユリカの言葉どおり、地球艦隊が大敗を喫しているのはそういう理由があった。

「艦隊戦では圧倒できるけど、航空戦だと主導権を地球に取られかねないって判断して、地球側の航空戦力の対艦攻撃力の低くさを考慮した艦隊戦力で撃滅、つてところかな？ 元々ガミラスの大艦巨砲主義的な艦隊運用は地球の比じゃないくらい強力だし、十八番の戦術で完膚なきまでに叩き潰してやるぞ、つて意気込みが伝わってくる……。ルリちゃん、冥王星にも注意を払って。もしかしたら長距離ミサイルとかで攻撃されるかもしれないから……。木星を滅ぼしたあの大型の惑星間ミサイル、発射地点は冥王星基地だろうし、ガミラスは遠慮してくれないよ。私たちを潰せば、あとは傍観しているだけで地球が滅ぶことを、知ってるだろうから」

ユリカにしては珍しく感じるほど、真面目で緊張感漂う声で警戒を促す。

この場においては権限などないに等しいユリカだが、その目に狂いは感じさせない。シミュレーション全戦全勝の天才の實力は、まったく衰えていないようだった。

予定外の事態に多少慌てたが、ルリも行き着いた答えは同じだったのですぐに落ち着きを取り戻した。

敬愛するユリカと同じ結論に至れるほど自分も成長したのだと考えると、ルリは少しだけ誇らしく思える。これで結果さえ伴えば文句はないのだが……。

いや、いまは考えないでおこう。目の前の敵に意識を集中しなくて

は勝てる戦も勝てなくなる。

奇襲が崩れたとしたら、次に取る手段は手垢がついたようなかく乱からの相転移砲しかない。

「敵のセンサーをかく乱して相転移砲で露払いをします。エステバリス隊は発進準備を。相転移砲の発射と同時に発進してください」

指示しながら腹に力を入れるルリ。

「ハーリー君、索敵・情報解析を任せます」

「任せてください」

ハリが力強く応じる。そこに、かつて艦の全てを任されて狼狽えていた姿はない。ガミラスとの戦争の中で、彼は確かな成長を遂げているのだ。

「古代さん、相転移砲を始めとする火器管制、任せます」

「了解！」

新乗組員の古代進が緊張の滲んだ声で応じる。

「島さん、艦の操舵を一任します」

「了解……！」

こちらにも新乗組員の島大介がやはり緊張の滲んだ声で応じる。

「ユキナさん、各艦にもナデシコの相転移砲に合わせて行動を開始するよう通達してください」

「了解」

と白鳥ユキナの声が元気のある声で応じた。

ガミラスとの戦闘が激化する中で、切り札として投入されたナデシコCはいくらかの改装が施され、艦首重力ブレードの根本にミサイルランチャーが、エンジンの出力強化で禁断の相転移砲までもが追加装備されている。

重力波通信の有効距離も延伸され、ガミラス艦に侵入したときのデータなどを参照に通信システムに改修を受け、いままでよりも長い距離からかく乱が狙えるようになった。

さすがに完全掌握するにはデータが不足しているため、気休め程度のかく乱が精一杯だが、ないよりはずっとマシだった。

これらの改装の影響とルリが全力でかく乱に回らなければならな

いことから、ハリへの負担増大を懸念され、艦の管制システムも変更を余儀なくされた。

ブリッジ自体を小規模ながら改装し、あのヤマトを参考に管制席が増設された。

火器管制を担当するスタッフとして古代進、艦の操舵担当として島大介が新たなブリッジメンバーとして乗艦している。共にまだ一八歳になったばかりの新人。

学校を繰り上げて卒業してすぐにナデシコCに配属となり、この戦いが初陣となるのだが初陣が実質悪あがきに近い決戦であることは気の毒に思う。

——気になるのは、特に進と大介の人事にユリカが口を挟んできたことだろうか。

この二名は「この役職が適切だと思う」と強引に意見を通した姿には、含みを感じずにはいられなかったが、実際適正にも叶っているのもそのまま採用となった。——なにかしら接点があったのか、それとも件のヤマト絡みだろうか。

さらに通信士として、呼んでもいなかった白鳥ユキナも乗艦している。保護者のハルカ・ミナトには止められたが、持ち前の行動力で振り切って強引にナデシコCへの乗船を求めたのだ。

彼女なりになにかしたかったのだろうとルリは勝手に解釈するに留めて、敢えて深い理由は聞いていない。彼女もなにも言っていないので詮索はしないのが礼儀というものだろう。

決戦の火蓋を切って落とそうとしているナデシコCの隣では、かつての仲間であるアオイ・ジユンの乗る戦艦アマリスが、防衛のために陣取っている。

かつてルリを「電子の妖精」と褒め称えていたアララギ率いる艦隊は、先の戦いでナデシコCを庇って壊滅した。

おかげでナデシコCは逃げ延びることができたが、ルリたちの心に重い影を残すだけで事態はなんら好転しなかったのだ。

——今度こそは。

ジユンのアマリスに、彼らのあとを追わせるわけにはいかない。

なんとしても成功させなければ……！！

ルリは決意を固めてガミラス艦に向け、かく乱のための欺まん情報を強制的に送り込んだ。

——効果はすぐに見られた。

地球側よりも射程が長いはずなのにガミラス艦は砲撃をしてこない。さらに隊列にもわずかだが乱れが見える。

ルリは額に浮かぶ汗を拭うことも忘れて全力で妨害に努める。

ナデシコCの、オモイカネの処理能力の大半がこのかく乱作業に使われる。強化された相転移エンジンをもつても、システム掌握機能と相転移砲を同時に使えば一時的にエネルギーが枯渇してシステムのかく乱は停止、ナデシコC自体も再チャージにかなりの時間を要することになる。

ここで打撃を与えられなければ一巻の終わりだった。

初めての实战で緊張で震えながら、進と大介は割り振られた作業を進めていた。

進はハリの補助のもと、相転移砲の準備を整える。

「敵艦隊に向けて回頭完了！」

「相転移エンジン、トライ・パワー・トウ・マキシマム！」

ナデシコCがガミラス艦隊の中央に艦首に向け、相転移エンジンの出力を最大にまで上げる。

強化された相転移エンジンが唸りを上げ、莫大なエネルギーを生成して必殺の一撃を放たと身を震わせる。

相転移砲のシステムを追加された左右の重力ブレードの先端がわずかに前進してから、外側に向かってスライドする。

露出した発射口にエネルギーが集中していく。——あとは引き金を引くだけだ。

センサー類がかく乱されているいまなら間違いなく決まるはず。相転移砲の加害範囲なら相当な打撃を与えられる、上手くいけば一網打尽も可能だ。

引き金を握る進にも緊張が走る。

普段から血気盛んで直情的な古代進ではあったが、緊張から額に珠

の汗が浮かぶ。

この一撃だけは外せない、戦果を上げなければならぬ。なぜならこの戦場には進の大切な――。

「落ち着けよ古代。慌てると仕損じるぞ」

額に汗を滲ませながらも冷静な態度を崩さない大介が声に声を掛けられて、進ははつとする。

絵にかいたような優等生タイプの島大介は、訓練生時代からの同期であり親友だった。

自分もいっぴいっぴいであろうに、こんな時でも進のフォローを忘れない彼の姿勢に、ただただ頭が下がる思いだ。

「わかってるさ。この一撃で全てが決まるんだ」

親友の言葉に幾分冷静になった進は、改めて相転移砲の照準を調整する。

確実な照準。これ以上時間を与えたら妨害される。

焦りでまた震えそうになる右手を左手で押さえつけながら、進は相転移砲の引き金を引いた。

「相転移砲、発射!!」

第一話 人類SOS！ 甦れ、希望の艦！ Bパート

艦首に生じた膨大なエネルギーが敵艦体の中央に投げ込まれると同時に、空間の相転移現象が広がる。

指定範囲内のすべての物体に等しく降り注ぐ破滅の現象。たとえ優れた性能をもつガミラスであっても、直撃を受ければただでは――

「くっ、読まれちゃったか。あの状態で小ワープできるなんて、本当に悔れないなあ、ガミラス……」

まだ結果すらわかっていないはずなのにユリカが緊張に満ちた声を上げる。その言葉の意味を問い質す前に異変は起こった。

「重力振多数、地球艦隊の内側です！」

ハリの警告が飛ぶと同時に、地球艦隊の内側にガミラス艦が出現する。この現象は――。

「ワープ!？」

ユキナが引きつった声を出す。

ユリカはガミラスのワープ能力の高さに唇を噛んだ。いまだに演算ユニットへのリンクを保持している彼女は、ある種の超空間的な感覚を持ってそれを知覚したのだ。

――ワープ。

それはガミラスが波動エンジンの力を利用して行う超空間航法の一種だ。

ボソンジャンプの様にボース粒子への変換や時間移動などのプロセスを行わず、波動エネルギーが生み出す時空間の歪曲作用を用いて空間を歪め、宇宙が四次元的には曲がっていることすら利用し、物理的な距離を限りなく〇に近づけたワームホールを自力で生成、その中を通過することで極々短時間で超長距離を移動するというものだ。

この超空間航法の存在も、地球側がガミラスに後れを取る要因のひとつであった。その単純な跳躍距離は、地球側が使えるボソンジャンプの比ではない。

正確に言えば、ボソソジャンプでも理論上は同程度の航続距離を出すことは可能だ。

しかしA級ジャンパーによるナビゲート能力ではイメージ能力の限界から、惑星間跳躍が限界であり、恒星間航行は座標指定の問題で危険極まりない。

容易く光年単位で跳躍するワープに対抗するには、イメージを補助するなんらかのマーカーを使うか、高性能なチューリップを使用するか、かつての自分のように演算ユニットに生体ユニットを組み込んだうえでもっと踏み込んだアプローチが必要になる。

しかしボソソジャンプの完全上位互換とは言えない性質でもあった。

ワープは空間歪曲と宇宙の四次元的な湾曲を利用した跳躍であるため、その気になれば数センチ単位での調整が可能なボソソジャンプよりも振幅が大きく精密性に劣る（特に戦術レベルでは影響が大きい）。

ほかにも個人単位での輸送はできない、密閉空間への跳躍は精密性の問題から不可能に近い、タイムパラドックス誘発もできないと、ボソソジャンプとはまったくベクトルの違う技術であった。

（高難易度の短距離ワープで回避する、か。学ばせてもらったよ、ガミラス）

ユリカはこの戦いの敗北を確信して、次に——ヤマトでの戦いに活かすところぶしを強く握りしめた。

「ルリちゃん、すぐに対処しないと危険だよ！ 完全に敵の思惑にはまってる！」

ルリはアームレストを強く握りしめる。

ユリカの指摘どおり、状況は最悪だ。完全に虚を突かれた。機動兵器部隊の展開はまだ始まってすらいない。

その状態で地球艦隊にとって最悪の構図である接近戦に持ち込まれるとは。

ガミラスにとっての必勝パターンにまんまとはめられてしまった

悔しさも露に、ルリは応戦を決意する。

これが事実上最後の作戦行動だという認識が、即時撤退という判断に至らせなかった。……ヤマトのことなど、ルリの眼中にはない。

「エステバリス隊の発艦を急がせてください！ 古代さんはミサイルで可能な限りの応戦を！」

「了解！ 全ミサイル発射管解放！ 諸現データ入力！」

「エステバリス隊は発進急いでください！」

あくまで徹底抗戦の構えを見せるルリとそれに同調するクルーチ。

だがユリカだけがそれに異議を唱えた。

「駄目、そんなんじゃない間に合わない！ ルリちゃん、すぐに撤退しないと全滅しちゃうよ！」

「この状況で撤退しようにも振り切れません。そんなこともわからないあなたではないはずですよ」

ルリは冷静を装って拒否した。元々速力その他で負けているのだ、全力で後退したところで逃げ切れるわけがない。——通常航行では。

「私がナビゲートしてジャンプで逃げればなんとかなる！ 各艦にデータリンクとボソンジャンプフィールド展開の指示を出して！」

このままじゃみんな無駄死にする！」

切羽詰まった声で提案するユリカに、ルリは頭に瞬時に血が昇った。かつてないほどの感情の発露を現すかのように、シートの肘掛けを思い切り叩いて反抗した。

「これ以上負担をかけないでください！ あなたの体はもう限界が近いんですよ！」

「この場でみんなを無駄死にさせるわけにはいかないでしょ！——ルリちゃん、個人的な感情で見殺しにするの!? それでも艦隊司令!？」

激昂するルリに対抗するかのよう大声を張り上げるユリカ。

ユリカに負担を掛けさせまいとするルリと、そんなことお構いなしに最善の手段を執ろうとするユリカ。

二人の思いがけない対立にナデシコCの艦橋は困惑の色を深めていた。

もちろん進も困惑していた。

ユリカとは初体面になる進ではあるが、大介共々事前に彼女が重病人であり、本来は現場に出るべき人間ではないということだけはルリに聞かされていて、あまり彼女に負担を掛けるようなことは避けるようにと釘を刺されていた。

それゆえに、まだ若く血気盛んな進などは内心場違いな人がいると内心侮っていたところがあつたくらいである。

だが、

(単なる重病人でも場違いな人でもなかった。この人は、本当に実力がある人なんだ)

進は無自覚に見下していた自分を恥じた。誰よりも早く戦況を見抜いて危機を回避しようとする姿勢。並大抵の実力ではできないだろう。

そう考えた進は黙って事の推移を見守ることにした。

もし撤退になるのなら、口惜しいがそれでも構わないと内心考えていた。

——そうすれば、進の大切な人が命を落とさずに済む。だから気持ちとしてはユリカがこのままルリを押し切ってくれることを期待した。

これが、進がユリカを意識した最初の出来事であつたと言えよう。

ユリカとルリが激突している間にも、状況は刻一刻と悪化していき。

味方の艦載機の展開が追い付いてないのに、高速十字空母は凄まじい勢いで全翼機型の航空機を展開して、次々にミサイルを叩きつけてくる。

特に敵に目を付けられているナゲシコCは優先して狙われているようだった。

想定外の急襲にわずかに残ったエネルギーでディスプレイオンフィールドを展開せざるをえなくなり、そちらにエネルギーを取られてエステバリス隊の展開作業も遅れている。

まだ一機も出撃できていない。

隣のアマリリスや駆逐艦アセビが、懸命に無防備なナデシコCを守ってくれている。だが時間の問題だろう。

徐々に、そして確実にその身に傷を刻み込まれ、少しずつ抵抗力を削がれていくのが手に取るようにわかる。

——ほかの艦艇も似たようなものだ。驚くべき速さで、すでに半数近くの艦艇が傷つき、沈もうとしていた。

こちらの反撃は——そのほとんどが空しく弾かれている。こちらの損害に対して敵の損害の小ささたるや……空しさすら覚えるほどだ。

辛うじて展開したわずかな艦載機も、出撃したそばから艦砲射撃やミサイルの爆発に巻き込まれて撃墜されていくではないか。

それを免れた機体も敵の航空編隊にかく乱され、母艦の援護もままならぬままなぶり殺しにされていく。

全員がまさかのワープ戦術に浮足立ち、力を出し切れていないのが手に取るようにわかる。

——ガミラスの猛攻が続く。容赦なく砲火を地球艦隊に放ち、この宙域に沈めようとしている。彼らはこの圧倒的優位な状況にあっても、遊んではいなかったのだ。

……また、負けてしまった。ルリは歯を食い縛って悔しさを露にする。

これ以上ないほどに惨めな敗北だった。今度こそはという誓いは、またしても破られ、醜態をさらしている。

——またユリカに負担をかけなければならない。そんなことにならないようにしたかったのに。

ルリが悔しがつている間にも、被害は拡大し続ける。

アマリリスとアセビの健闘も空しく、ついにナデシコCもデイストーションフィールドを突破され、直撃弾が生じた。

右舷重力ブレードの先端、相転移砲の発射口付近が破壊された。

このまま被弾が続いてデイストーションフィールドを失ってしま

えば——エネルギーが完全に空になってしまったら——ボソンジャンプで逃げることにすらできなくなってしまう。

……ルリは決断しなければならなかった。艦隊司令として、私情を押し殺して。

自責の念が襲い掛かってくる。

たしかに帰還のためにはボソンジャンプが必要だった。だからユリカに負担をかけるのはこの作戦が決行されたときから避けられないことだと理解していた。

それでも——それでも戦いに勝ちさえすれば、彼女のコンデイションを整える時間くらい与えられると思っていたのに。

(私たちが不甲斐ないから……!!)

ルリは血がにじむほどに右手を握りしめながら、命令を下した。

「……ユキナさん、各艦に通達。ナデシコとデータリンクしてボソンジャンプフィールドを展開。ボソンジャンプで撤退します」

「了解……各艦に通達します。ナデシコとデータリンクを開始してボソンジャンプフィールドを展開してください。ボソンジャンプで戦域を離脱します。繰り返しします——」

ユキナが各艦にルリの指令を伝達する。

その目には薄っすらとだが涙さえ浮かんでいるのが見えた。

ルリだって泣きたくて仕方がない。もう——人類に希望は残されていない。

——動くことすらできない戦艦に期待などはなからしていない。

あとは滅亡するのを待つしか、人類に残された選択肢はない。

各艦から了解の返事を受けとる最中、駆逐艦アセビだけは命令に背き、敵艦に向かって突撃を開始していた。

「——!? 艦長、アセビが命令を拒絶しています!」

「艦長は誰ですか? 命令に従うように言ってください」

ルリがアセビに再度通達を指示している。

進はアセビの動向が気になって仕方なかった。なぜならあの艦の艦長は——。

「アセビ艦長、古代守中佐から通信です」

「ホシノ艦長。ここは自分が引き受けます。ナデシコはほかの艦を連れて、早く行つてください」

ウィンドウ内の古代守艦長が静かに告げた。ほかの乗組員の表情も穏やかなもので、それが決して艦長の独断ではないことを示している。

「なにを言っているんだ兄さん！ 撤退の指示が出てるじゃないか！」

進は思わず声を張り上げていた。

新兵である進が艦長同士の会話に割って入るなど許されることはなかったが、そんなことはお構いなしに声を張り上げる。

——だって彼にとって守は唯一残された肉親——実の兄だったのだから。

幼い日に両親を失った進にとって、守は大切な家族として心の支えであった。決して失いたくない存在なのだ。

相転移砲の引き金を任されたときも兄のことが頭を過って手が震えるくらい、彼の存在は進の心に根を張っている。

だからこそ進は敵に背を向けて逃げ帰る恥辱よりも、事態を好転させられないことの悔しさよりも、ユリカが訴えた撤退を支持していたのだ。兄を失わずに済む、と。

なのに肝心の守は命令を無視して死に行こうとしている。

進には、到底受け入れられない決断であった。

「進。これは誰かがやらなければならぬことだ。——いま生き残らなければならぬのはナデシコ、いやホシノ艦長とミスマル大佐だ。彼女たちが残れば、きっと地球は救われるさ」

柔らかい笑みを浮かべ、守は断言する。

彼は知っていた。地球を救う最後の希望——宇宙戦艦ヤマトが目覚めようとしていることを。

そしてそれを操る人間は、再建計画の責任者も同然のユリカと、その仲間たちであることも。

だからナデシコとアマリスを最小限の被害で守り抜くことこ

それが、自分の役割であると悟っていたのだ。

無念ではあった。

要請どおりヤマトに乗って、重責を背負わなければならない彼女を支えてやれないのは。

だが、ここでこの命が潰れてもヤマトが蘇りさえすれば――。

「兄さん!!」

「繰り返します古代艦長。撤退します。同行して下さい」

ルリは進を咎めようとせず、繰り返して命じている。

――彼女も一度は家族を奪われた身。下で騒いでいる進の心情を慮っていることが理解できた。

しかしそれでも、守は従わない。従えなかった。

「ミスマル大佐。ボソンジャンプをお願いします。ほかの艦の準備も終わる頃でしょう。――進、強く生きるんだぞ。俺たちの地球を――人類の未来がかかってるんだ」

守の言葉にユリカは顔を歪め、両手を握り締めた。

ユリカとして守の行動に納得できない。自分たちに従うことを求めている。

だが同時に彼が残って戦うことで――いや生贄になることで、ガミラスを満足させることができれば、撤退した部隊が追撃を受ける可能性を減らせると悟ってしまった。

ボソンジャンプで逃げたところで敵にはワープ航法がある。追撃されたら逃げ延びられない。わかっていたことだ。

だがガミラスは地球の戦力では抗えないことを理解している。それに彼らにはこの程度の脆弱な艦隊をわざわざ追撃するよりも先に、やらねばならないこともあるのだ。

「ミスマル大佐、地球を、弟のことを頼みます。最後の希望を、あなたたちに」

「……」

そこまで言われて、ユリカは決意した。この場で恨まれたとしても、生き延びて明日を掴むと。――そして、彼の弟は自分が責任を

持って導いてみせると。

「——ジャンプします。あと一〇秒」

感情を押し殺して静かに告げたユリカに進が噛みつく。

「なに言ってるんだアンタは!? まだ兄さんが……!」

「ユリカさん駄目! 説得しますから時間を——」

進とルリの悲痛な叫びに胸が痛い。

「——ヤマトの航海の無事を、祈っています。ミスマル『艦長』」

守の最後の言葉を胸に刻んだ。——あとは、任された。

「——ジャンプ」

ナデシコCは生き残った艦隊を伴い、ボソンの輝きと共に冥王星海域から離脱した。

艦隊を見送った守とその部下たちは満足そうに笑みを浮かべる。

これで最後の希望は守られた。あとはせいぜい奴らに思い知らせてやるだけだ。

……地球人類の意地を。

その後アセビは猛奮戦の末、魚雷を撃ち尽くし十字砲火を浴びせられて爆発炎上。宇宙の彼方へと消えていった……。

その戦場の脇を掠めるように超高速の移動物体が通過したことを知っているのは、余裕のあったガミラスの旗艦とジャンプ寸前のユリカだけだった。

「なんで! なんで兄さんを見捨てたんだ!! 連れ帰れたはずなのに!!」

「古代やめろ! あの場は仕方なかったんだ!」

ナデシコCのブリッジは騒然としていた。

兄を見殺しにされたことで激情に駆られた進は、獣のように素早い身のこなしで自分の席を飛び出して、兄を見捨てたユリカに掴みかかっていた。

さきほど彼女の実力を認め、撤退を促してくれたことに感謝したことにすら吹っ飛んで、ただただ感情のままに荒れ狂う。

大介が止めようとしても止まらず、襟を掴んで引つ張り上げて渾身の力で頬を殴りつけようと腕を振りかぶる。

しかしユリカは抵抗の意思を見せない。

ナノパターンの発光の止まぬその瞳は真つすぐに進を見詰め、先を促しているようにも見える。

——まるで、断罪されたがっているようだ。

その目が癩に触って、進はこぶしを振り下ろす。望みどおり、その顔を思い切り殴り飛ばしてやる！

「お願いだからやめてえええ!!」

上から浴びせられた悲痛な叫びに、進は冷や水を浴びせられたかのように硬直する。

ユリカを殴りつけるはずだったこぶしは寸で止まり、届くことはなかった。

ゆっくりと顔を上げて声の方向を仰ぐと、そこには両目からぼろぼろと涙をこぼして進に訴えるルリの姿があった。

「家族を奪われる苦しみはよくわかります！ でもお願いだからやめて！ ユリカさんを殺さないでえ!! もう私から奪わないでえ!!」

嗚咽交じりに訴えるルリの姿に進は戸惑う。いくらなんでも大げさ過ぎると思った。一発殴り飛ばしてやろうとしただけに。

しかしその意味をすぐに知った。そして思い出した。

彼女は——。

「う……っ！」

呻き声が聞こえたと思ったら、ユリカを掴み上げている左手に生暖かい液体が触れる。

ぎよつとして視線を向ければ流れるような鼻血を出して、焦点の定まらない目をしているユリカの姿があった。

素人目にも危機的状况であることが一目で窺える。

そうだ、彼女は人体実験の後遺症で重病人だった。もしも本当に殴っていたら、殺していたかもしれない。

……思い出した。彼女はルリにとって愛してやまない、一度は失ったと思われていた『家族』であったことを。本人の口からそう告げら

れて、もしもユリカの様子がおかしかったらすぐに知らせるようにと懇願されていた。

その時に見せた真摯で必死さを湛えた瞳を、進はようやく思い出したのである。

進の頭からさつと血が下りて顔が青くなる。——とんでもないことをしてしまった。肉親の死で錯乱していたとはいえ、こればかりは……！

出足が遅れた大介がようやく進に組み付いてユリカから引き剥がす。

ぐったりと座席に身を沈めるユリカの鼻に持っていたハンカチを押し当てて止血を試みるが、白いハンカチはあっという間に朱に染まる。血が止まる気配がない。

(出血の止まらない……！　すぐに医者に見せなければ助からない！)

大介は大声を張り上げるようにユキナに医務室に連絡するように指示を出す。慌てた様子のユキナもすぐに応じて艦内通話を立ち上げた。

ブリッジは先ほどまでとは別の意味で混乱していた。

ユキナからの連絡を受けて大急ぎで駆け付けた医師は、同行させた看護師二名と共にユリカの容態を確認すると、注射器を取り出して薬を注射する。

しかしこの場では手に負えないと判断したのか、用意してきた担架を使ってすぐにユリカを運び出した。

ユリカが運び出されたあとのブリッジには、心配そうにユリカが出て行ったドア見つめるユキナ。ルリに駆け寄りたいのを我慢して各艦の状況確認を懸命にこなすハリ。「気持ちちはわかるが自重しろ！」と進を叱り飛ばす大介。　艦長席で嗚咽を漏らして泣き崩れるルリ。

——そして、左手に付いたユリカの血と、泣き崩れるルリの姿に怒りも冷めて呆然としている進が残されていた。

しばらくして、医務室からユリカは持ち直して小康状態になり、しばらくは医務室で監視の元休養させるという連絡があった。

だが病状の進行については現状でははつきりしないという一言が、ルリの心をかき乱した。

既に余裕のないルリは進を注意もせず、罰しようともせず、ただ自分の家族が彼の家族を見捨てる決断をしたことを謝罪しつつけた。

「ごめんなさい古代さん。本当なら私は、あなたを止められるような立場にないのに……」

泣き続けて目を赤く腫らしたルリが何度目かの謝罪をする。

結局あのと、職務遂行は無理と判断した副長の高杉サブロウタが格納庫からブリッジに舞い戻り、ルリと進をブリッジから追い出したのである。

厳密に言えばルリにはあの場を納める義務があった。

そもそも役職こそ浮ついたものだが、まだまだ駆け出しの新兵である進が、一応は大佐の階級を授かっているユリカに手を挙げるのはご法度だ。真つ当な軍隊なら即軍法会議ものである。

だがルリはそんなことなど考えもつかず、家族が進にした仕打ちにのみ意識が向いてしまっていた。

「いえ、僕のほうこそすみませんでした。つい、カツとなつて」

頭が冷えて冷静さが戻った進は、ユリカを許す許さない関係なくルリを宥める。

「わかっているんです。家族を奪われることがどういうことなのか……ユリカさんだつてわかつてるんです。わかっているはずなんです……」

懸命に訴えるルリに進はバツが悪そうな顔をする。だがルリはそんな進の表情に意識を向ける余裕はなかった。

「ユリカさんだつて、アキトさんを、最愛の夫を奪われて今日まで会えてないんです。それなのに、それなのにあんな決断をしなければならなくなつて、きつとユリカさんだつて辛いはずなんです。許してください。許してあげてください。でも彼女に当たるのだけは勘弁してください。――殴りたいのなら代わりに私を殴って構いませんから。止められなかった私も同罪です」

「いえ、もういいんです。感情的になつてすみませんでした」

進は頭を下げると足早に去っていった。

残されたルリはそんな進を沈痛な面持ちで見送り、涙を拭うとブリッジに戻るべく踵を返した。

「ようハーリー、頑張ってるじゃんか」

「からかわないで下さいよ、サブロウタさん」

ブリッジでは逃げ帰った艦隊の状況確認が終わり、クルーの面々は沈んだ表情で粛々と己の職務に没頭している。

——全員が気落ちしていた。最後の反抗作戦は無残にも完敗で終わってしまった。

生き残った艦は半分以下の十二隻。どの艦も損傷激しくまともな戦闘能力は残されていない。

ナデシコCも損傷こそ右舷重力ブレードの破損程度だが、この艦単独で敵に勝てるなどという夢物語を語る者がいるはずもない。

全員が理不尽な現実に叩きのめされ、明日への希望を失いつつあったのだ。

そんな中でも極力平静に振る舞おうとしているのが、マキビ・ハリと高杉サブロウタだった。

職務遂行が不可能と判断してルリをブリッジから追い出したサブロウタは、すぐに副長としてハリが行っていた艦隊の損害確認作業を手伝いつつ、ナデシコC自体の状況確認を済ませると、泣き言ひとつ言わずに頑張ったハリの頭をわしわしと乱暴に撫でてやる。

以前なら子ども扱いを怒っていたハリも、いまはこの程度の事で文句を言うことはない。——例外があるとすれば、ルリの前で賑やかしを目的としたときくらいだ。

ルリの前では、できるだけ明るく振舞いたい。沈み込んだ彼女の顔を見るのは、サブロウタも辛い。

「いやいや、上出来だぜハーリー。よく艦長をフォローしたな」

「僕はただ、艦長の助けになりたいだけです……艦長、この一年追い込まれてばかりで、可哀そうですねよ」

ルリの話題になるとハリも気落ちを隠せない。

ルリがユリカを助け出した直後、とても嬉しそうにしていたのをサブロウタも覚えていた。

あんなルリの姿は見たことがなかった。だからこそ自分の命を鑑みないユリカの行動には腹が立つハリの気持ちもわからなくもない。それを見せつけられて追いつめられるルリの姿なんて、サブロウタだって見たくもないのだ。

だからこそだろうか、ハリはガミラスとの戦いが始まってからは変わったと、サブロウタは感じた。

ルリの負担が少しでも軽くなるようにと、どんなに辛くても極力弱音を吐かないようにして、懸命にルリの補佐を務めあげている。驚くべき成長だと、サブロウタは内心嬉しく思っていた。

それでもハリはまだまだ成長途上の子供だ。手落ちもある。だからサブロウタは自分がそばにいる時はすかさずフォローして、彼の背をそっと押してやったことが何度もあった。

サブロウタの助けを借りながら、ハリは頑張っていた。

時間を作ってはルリに余計なことを考えさせないようにと、邪魔を覚悟で一緒に食事をしたり他愛のない話をしたり、時には真面目に職務の話をしたり。

サブロウタと二人三脚で、今日まで支えてきたのだ。

だが、それももう限界が近い。このままではルリは――。

「なんで、なんでユリカさんはあんな無茶を重ねるんですか？ あんなことしても艦長を追い込むだけだってわからないんですか？ それとも、テンカワ・アキトさんに、旦那さんに捨てられたと自棄になってるんですか？ 僕には理解できません……」

矢継ぎ早に不満を訴えるハリに、サブロウタは神妙な面持ちで自分の意見を語る。

ここはおちやらけて見せる場面ではない。年長者としてしっかりとその気持ちを受け止める必要があると感じた。

「――さあな。だけどよ、俺は彼女が自棄になってるようには見えな
いぜ？ なんと言うかこう、もつと先を見据えて、そのための準備と

して無茶をしているような気がするんだ。……例のヤマトも、この状況じゃあどこまで役に立つかわからないが、読ませてもらった資料の限りじゃ、あれだけがガミラス野郎に対抗できる現状唯一の戦力だ」サブロウタも将来的な乗艦を打診されている身の上なので、ネルガルから送られてくるヤマトの資料には最低限ではあるが目を通して

いる。
目を通したあとは要廃棄を求められていたためすでに手元にないが、そう思わせるには十分なスペックが、資料には書かれてはいた。

——もつとも、戦艦一隻でどうにかできるような状況ではないと、冷静な軍人としての自分が警告もしていたが、この場合は気休めでも期待しておいたほうがいいだろうと思う。藁にも縋りたい気持ちなのは、サブロウタとて同じなのだ。

「まあ考えてみりや、先の戦争じゃ俺たちは結局ナデシコA一隻に振り回されて、終戦まで持ち込まれたようなもんだ。万が一はありえるかもな」と回想する。

あの火星での痴話喧嘩はいまでも覚えている。

その時のやりとりが、自分達のいまを決定付けたことを考えると感慨深くもあり、同時にそのきつかけとなった夫婦が、かつての自分達の大將に蹂躪されて悲惨極まりない状況に置かれていると考えると、サブロウタとしてもなんとかなって欲しい思うことはある。

そもそもなんとかしてくれないと、敬愛するわれらが艦長殿がどうにかなくなってしまいで怖いのだ。フォローはもう限界だ。これ以上はルリが持たない。

いまのルリにとって、アキトとユリカは過去ではなく現在なのだ。彼女にとつて渴望して止まない、幸せの象徴。

それがこんな形で壊れていくさまを見せつけられるくらいなら、それこそ本当に事故死していたとか、実験中に死んでいたとかの方がマシだったと思う。

辛い現実には違いないが、生々しさを伴わいだけルリにとっては救いになったはずだろう。

それがこうも生々しく、確実に壊れていくさまを見せつけられるのは、ユリカと親しいとは言えないサブロウタですら、キツイと感じることがあるのだ。

とにかく、いまは救いが欲しい。それがサブロウタの本心だ。

「ミスマル大佐がなに考えてるのかわからんが、彼女がそれだけ期待をかけるヤマトだ。いざとなったら、俺たちがそのヤマトでこの状況をひっくり返すだけだ。——そうだろ？」

「……もちろんですよ、サブロウタさん。僕はなにがあっても、艦長を助けます」

ルリと別れた進は、行く当てもなく艦内を歩き回っていた。

本当ならブリッジに戻るべきなのだろうがいまは戻りたくない。どうしてかは知らないが、特に咎められていないことを考えるといまは戻ってくるなど暗に言われているようにも思える。

——気が付くと、医務室の前に足を運んでいた。

深い考えもなしにそのドアを潜ると、戦闘での負傷者や、倒れたユリカがベッドの上に寝かされている。

負傷者連中は呻き声をあげて苦しんでいるが、対照的にユリカは静かだった。

……しかし目は半開きで、焦点定まらぬ虚ろな視線を天井に向けている。

半開きになった口からは呼吸音に交じりうめき声のようなものも聞こえる。

最後の撤退で使ったボソソングジャンプの反動。それが彼女の体を蝕んでいることは明らかだった。

最後の肉親を見捨てた張本人だというのに、進は掴みかかった自分を恥じたい気持ちで一杯になった。

彼女もまた、命を懸けて自分たちを救ったのだと思い知らされたからだ。

なんとなしにその顔に触れてみようとして左手を伸ばすと、拭い去るのを忘れていた彼女の血がこびり付いていた。

すっかり乾いて黒ずんだそれは、ユリカの状態と合わさると進にこれ以上無く『死』を連想させられて鬱な気分させられる。同時に、激情に駆られ、考えなしに重病人に暴力をふるおうとした自分の矮小さすらも突き付けられているようで、心底嫌になってくる。

たとえ兄を見殺しにした人であっても、だ。

結局、踵を返して医務室をあとにした。行く当てもなく再び艦内をさまよおうとしていた進は、ある女性クルーに呼び止められた。

「あら、古代君じゃない。手に血が付いてるけど、どこか怪我でもしたの？」

振り返って呼び止めた人物を確認すると、医療班に配属された森雪の姿を認める。

彼女も今回の作戦でナデシコCに配属された新人で、進と大介の同期であった。と言っても学生ときは接点もなく、ナデシコCに配属されたとき、乗艦前の集まりで偶然知り合ったに過ぎない。

ただ、同期の中でもとびっきりの美人さんと名前くらいは聞いたことがあったもので、知り合えたときは大介と共に舞い上がったものだが、いまはとてもそんな気分ではない。

そう言えば、さきほどユリカを運んだ看護師の中で姿を見たような気がする。

——自分の醜態には気付かなかつたらしい。

「……いや、これは。ミスマル大佐の血だよ。俺が、掴みかかった時に付いたんだ」

罪を告白する気分で雪に告げる。

——進は誰かに罰してほしかったのかもしれない。罵倒してほしかったのかもしれない。

守を失った悲しみに飲まれていたとはいえ、見殺しにしたとはいえ、文字どおり命を削って自分たちを助けてくれた人に手を挙げた後悔は強い。

軍の広告塔として名を知られ、上官として敬意を抱いていたルリを泣かせてしまったことのバツの悪さもある。

いろんな感情が入り混じって自分でもどうしたいのかがわからな

い。ぐちやぐちやの心境だった。

「そう、お兄さんのことね……」

雪は悲しそうに顔を俯かせた。

すぐに雪は「そうだわ」とポケットからハンカチを取り出すと、近くにあった化粧室に入り、水道でハンカチを濡らしてから進の元に戻って、手に付いた血を拭ってくれた。

乾き切った血は簡単には落ちない。それでも濡れたハンカチは黒ずんだ血で汚れていく。

進にはその光景がまるで、雪に自分の汚れを移してしまっているような気がして、ことさら気分が悪くなった。

「もういいよ。自分で洗ってくるから」

と雪からハンカチを取り上げて「あとで洗って返すよ」と一方的に告げてその場を去る。正直乱暴だとも恩知らずだとも思ったが、かまうものか。

いまは他人に優しくできる余裕などありはしない。自分のことですらままならないというのに。

進はまたナデシコCの中をさまよい始める。自分でも制御できない複雑な感情を抱えたまま。

そんな進を見送りながら、雪はやるせなさを感じていた。

乗艦前に知り合って二人と仲良くなった雪は、話の流れで進の兄・守がこの作戦に参加していることも知っていたし、その彼がどのような結末を迎えたのかも、知っている。

出会って間もないとはいえ同期生で、しかも兄・守のことを自慢げに話していた進の姿は印象に残っている。だからこそ、雪も悲しかった。

雪は進の姿が見えなくなるまでその場に立ち尽くしたあと、医務室に戻ってベッドに横たわるユリカの姿を見つめる。

彼女がなにをしようとしているのか、雪は知らない。だが、命を削ってでも成し遂げたいなにかがあるのだと言うことを、本能的に察していた。

だから雪は、彼女の世話を任されたときから真摯に接してきた。

初めて会ったとき、「これからよろしくね、雪ちゃん！」とやたらフレンドリーな対応をされたのは面食らったが、彼女の人柄は好ましく思えたのですぐに仲良くなれた。

——天然ゆえにたまに会話が噛み合わなかったりすることがあるのが、時折疲れるが。

ユリカの病状や、そもそもなぜそうなったのかについては聞かされていたが、聞きしに勝るとはまさにこのこと。

ユリカの衰弱は激しく、普通の人間ならとつくの昔に心折れて自殺しているだろうと半ば確信するほどだ。

彼女がどうしてそこまで耐えられるのか疑問に思っていたが、雪はこっそりと教えて貰えた。

火星の後継者による悲惨な事件には同情し、怒りを覚えずにはいられなかった。元よりテロリストに共感など抱いていなかったが、生涯彼らを軽蔑し続けるだろうと確信した瞬間だった。

……だが聞いてて一番辛かったのは、そのあとすぐに始まった子供時代から引越して別れるまでと、ナデシコで再会し結婚に至るまでの惚れ気話の数々だった。

延々と数時間にもわたったそれは、色恋沙汰に興味津々の雪であっても少々辛く、「はいはいごちそうさまでした」で済ませたくなつたことは数回では利かない。

とは言え、そこまで熱烈に愛せる人がいるということは羨ましく思えるし、自分もそのような相手に巡り合いたいと漏らすと、

「大丈夫だよ。雪ちゃんなら、きつとすぐにそんな人に会えるよ」

と断言されてしまった。なぜユリカが言い切れたのかは長らく不明だったが、間違った言葉ではなかったと、後に雪は述懐している。雪は確かに、そんな人に巡り合えたのだ。

「ユリカさん。あなたも、旦那さんと再会できるとよいですね」
虚ろな目で天井を見つめるユリカを見つめながら、雪は願う。

彼女の体調は深刻で、まだ医療従事者としては日が浅い雪の目からも絶望的だ。

そして、残念だが地球も救われることはないだろうと、諦めの気持

ちも強い。

ユリカは「最後まで諦めちゃ駄目。まだ地球には希望が——ヤマトがあるから」と口にして、たびたび雪を励ましていたが、それがなんなのか詳細までは語ってくれなかつたので実感はわかなかつた。

それでも、ヤマト、という名前には妙に心惹かれる自分を覚えてもいた。

なんどもそう言われるにつれ、患者が諦めていないのに医療従事者が諦めるわけにはいかないと、雪は気持ちを前向きにして頑張ることを決めた。

だから、最後の日を迎えるよりも先に彼女が夫に再会できる日が来ることを切に願う。そのためにも、彼女を一秒でも長生きさせるために、努力を積み重ねるのであつた。

冥王星での戦いで敗走してから二日が過ぎた。

残存艦隊はユリカのナビゲートで火星近海にジャンプアウトしていたが、残存艦の大半が傷つきまともに航行できなかつたため、最低限の補修を試みたり、駄目だとわかると生き残つた艦への移乗を行つたりと、時間を取られたのだ。

最終的に稼働できたのは戦艦アマリスとナデシコCを含め八隻に留まり、ほかの艦はその場に捨て去つて帰路に就くことになつてしまつた。

——ただでさえ貴重な戦力をまたしても消耗したことで、ただでさえ低下していた士気はいよいよ危ういところに達していた。

それでもオープン回線で流れた守とナデシコCのやり取りが、生きてさえいれば抗うことができると、彼らの背中を支えていた。

——まだ抗えると。

火星近海は決して地球に近いとはいえない場所であつたが、改良された相転移エンジンの巡航速度なら、ここから地球に戻るまで約二週間。今後のことを考えるにはちようどいい時間と言えた。

ユリカの容態も落ち着き、意識を取り戻したのもちようどこの頃だつた。

本人曰く、多少のふらつきはあるが特別変わったことはないのと
とで、なんとか現況維持に成功したらしいことが伺えた。これには医
者も胸を撫で下ろし、ルリも安堵の表情を浮かべた。

……ただし無茶したことに対しての小言と癩癩は口をついたが。
対するユリカはその胸にルリの頭を抱き締める事でその場を収めて
しまった。

昔のような潤いと張りを失った肌に悲しみを覚えながらも、大好き
な姉——または母の胸に抱かれたルリは、一時の幸福を感じていた。
願わくばもつと味わいたい。ご都合主義でもなんでもいいからユ
リカが全快して、アキトも帰ってきて、また家族の生活を味わいたい。
そう考え黙って抱かれていたルリにとっての誤算は、途中で感情を
堪えきれなくなったのか、

「ホントに心配かけてごめんねえ！ もうジャンプしないから許し
てえ〜〜!!」

と泣き出したユリカに全力で抱きしめられて、口と鼻がその胸元で
塞がれて息ができなくなったことだろう。

必死に腕を叩いて訴えるも、ユリカは泣きじやくるばかりで一向に
気付いてもらえず、結局ルリが気絶してからようやく放してもらえた
とか。

あと数分遅かったらルリは天国に旅立っていたと告げられ、医師に
怒られて気落ちしているユリカに「気にしてませんから」とフオー
してその場は終わらせる。

しかし……。

(私も、あれくらいのもリユームが欲しかったな……)

医務室を出てからそつと両手を自らの胸元に宛がう。ユリカに比
べると慎ましやかで主張の少ない胸元に、言いようのない敗北感を覚
えながらルリはブリッジへと戻る。

今後成長することはあるのだろうか。してほしいなあ。と少し緩
んだ頭で願いながら。

ブリッジも敗戦の重い空気を何とか逸脱し、落ち着いた様子を見せ
ている。

雑務を片付けたハリとサブロウタは、交代でルリに構って心のケアに努めることになった。

ついさきほどなどは、ユリカの見舞いに行ったルリが医務室を出るタイミングでハリを送り込んで捕まえさせて、一緒に昼食を取らせた。戻ってきたルリに今度はサブロウタが真面目に職務の話を振りつついつもの軽い調子を披露して、彼女が極力暗い考えに捕らわれないようにフォローに奔走していた。

時にはユキナも混じってとにかく賑やかな状況を作ってルリの気持ちを持ち上げようと、努力を重ねていた。

そんな仲間たちの気遣いにルリは間違いない救われ、癒されていた。

肝心のユリカもアキトも、そして母なる星——地球の未来も、先を感じさせないお通夜ムードを払拭できてないが、いくぶん気持ちがマシになった。

それにさきほどの見舞いでユリカからも、「ジャンプはもうしない」と断言されたことで気分的にはかなり持ち直せた。——全力全開なハグもしてもらえたし。

なにかあれば使いそうな予感がするが、突っ撥ねられていたいままに比べれば遥かにマシだ。

少なくとも、ジャンプが原因でこれ以上病状が悪化することだけはないと思えるだけで。

……あとは地球の現況をどうするか、どうやってガミラスを退けるか、どうやって……ユリカの体を癒すかが今後の課題だ。

そこまで考えると、いままで意識していなかった、いや憎悪の対象にすら思えた宇宙戦艦ヤマトのことが気にかかり始める。

現金なものだと自分でも思ったが、ユリカが命を削って再建を指揮した、並行宇宙の戦艦。

彼女はヤマトを指して『厄災に立ち向かうための希望』と断言した。なぜそう主張するのか、なぜあれほどに期待をかけるのか、最初はわからなかった。

だがいまはわかる。演算ユニットだ。時間と空間の概念がないと

される空間跳躍システムの中核。

おそらく火星から地球に帰還する時のジャンプ中になにかあったに違いない。

その時に彼女は厄災——ガミラスの襲撃と宇宙戦艦ヤマトを知つたに違いない。そう考えればユリカのあの行動も説明が付く。

そうだ、あの時彼女はヤマトを指して『片割れ』と言った。

だとすればもう一つ、もう一つなんらかの『希望』を知り得たに違いない。

だがユリカはそのことをいままで一度たりとも口にしていないため、なんのことを指しているのかわからない。

だがもしかしたら、その片割れとヤマトが揃うことで、この状況を打破するどころか、完全にひっくり返すウルトラCが実現するのかもしれない。

心労が和らぎ、幾分聡明さを取り戻した頭脳がその可能性に行き着いた時、ルリは心に決めた。

——ネルガルからの要請に従い、ヤマトに乗る。

愛着のあるナデシコを降りるのは辛い背に腹は代えられない。ユリカも乗り込むはずだ。

軍に復帰したのはそのため、反抗作戦の立案やナビゲーターとしての行動に意見具申。すべて自分がまだ健在であることを、この脅威に対して命を捨てる覚悟で挑む心意気を持っていることを示すためではないのだろうか。

彼女はまだ絶望していない。未来を信じているに違いない。

そうと決まれば話は早い。早く地球に帰還してヤマトの再建に協力しよう。

あとはエンジンさえ、波動エンジンさえ完成すればヤマトが使えるようになる。

ヤマトの力でガミラスを退けることができれば……。あそこまで進んだ科学文明だ。医療技術だって進んでいるはず。その技術を手に入れる機会も巡ってくるに違いない。

少なくともこれまでの戦いで、特にルリのシステム掌握を試みたこ

とで、容姿はいまだ不明ながらも、ガミラスがヒューマノイドタイプの知的生命体であることだけはわかつているのだ。

だとすれば地球人に応用できる可能性も残されている。ユリカの希望もそこに根差しているのかもしれない。

ルリがそんなことを考えていると、思わぬ事態に直面した。

「艦長、本艦の右後方から高速で接近する物体、一！」

レーダーを見ていたハリの声に意識を切り替える。情報を表示させ、ルリ自身も解析を試みた。

「これは……宇宙船ですね。随分と小さいけど、亜光速に近い速度が出ていますね」

だとすればとてつもない科学力を持っていることになる。

望遠カメラで辛うじて捉えた映像は不鮮明ではあったが、ガミラスとも地球とも違う、有機的なデザインを持つ、フライパンのようなシルエットをした宇宙船の姿を映し出している。

黄色を基調とした色合いをしていることまではわかった。そして、ガミラスの砲撃でも受けたのか、後部から煙を吹いて制御を失っている様子だった。

「一分後に本艦と交差！ このままでは衝突します！」

悲鳴に近いハリの声にルリは即座に命令を下す。

「ディスプレイションフィールド展開。速やかに回避行動を。……島さん、頼みます」

「了解。取り舵二〇、全力回頭。回避行動に移ります」

ディスプレイションフィールドを展開した、巡行形態のナデシコCの姿勢制御スラストアークが火を噴き、三〇〇メートルを超える巨体がゆっくりとその進路を変える。

接近する物体に比べると遅々たる動きだが、それがナデシコCの全力だった。

「交差まであと一〇……九……八……」

ハリが秒読みを開始するのに合わせて、ナデシコCと宇宙船の距離が急激に縮まる。

——刹那の交差。辛うじてではあるが、ナデシコCは宇宙船との衝

突を回避することに成功した。

だが、両者がすれ違おうとしたまさにその瞬間、宇宙船からナデシココに向けて『なにか』が射出されたではないか。

フィールドに接触したそれはいくらか勢いを落としながらも弾丸のようにナデシココに命中、右舷重力ブレードの装甲板を貫通して艦内に入り込む。

衝突の衝撃は艦内全てに伝わり、乗組員の不安を否が応にも煽った。

「隔壁閉鎖。保安部は速やかに不明物体に接触してください。艦内に侵入されたかもしれません」

額に汗を滲ませながらルリが指示を出す。

ふと思いついたのは最初のナデシコの航海で、サツキミドリから脱出したアマノ・ヒカルの脱出ポッドがナデシコに命中した瞬間だ。

懐かしい過去を思い出してルリはわずかな郷愁に駆られる。

そんなルリを現実に強引に引き戻したのは医務室からの報告だった。

——ユリカが姿を眩ませた、と。

その報告にくらりと頭が揺れるがすぐに怒りが湧き出して怒鳴るように『捕獲』を指示する。

『保護』ではなく『捕獲』という表現が出たあたり、ルリの心中が伺えるというものだろう。

そんな風にルリが激怒しているであろうことを予測し、心の中で謝罪しながらも、ユリカはナデシココに突入してきた物体に接触すべく、ふらつく足を叱咤して艦内を進む。

キャスター付きの点滴台を杖代わりにヒイヒイ言いながら進んだ先に、それがあつた。幸い周囲の気密は破れておらず空気漏れの心配はなさそうだ。

——予想どおり、脱出カプセルだ。教えて貰ったものと形状は同じ、まず間違いない。

だが脱出カプセルは衝突の衝撃で破損したのか、それとも搭乗員が

自分から開けたのか、ハッチが開いているではないか。

慌てて視界を巡らせると、その搭乗者であろう、薄紫色をしたドレスを着た長い金髪が美しい絶世の美女が、カプセルから少し離れた場所に横たわっていた。

まるで絵画から抜け出してきたような神秘的な美しさにユリカは目を奪われる。相も変わらず美しい人だと感心する。

だがすぐに気を取り直して、

「大丈夫？ しっかりして！ サーシア！」

と声をかけてその体に触れる。

まだ温かい事に一瞬喜びを露にしたが、すぐに落胆するはめになった。

呼吸が止まっている。心臓の鼓動も。目立った外傷はないと思われたが、よく見ると首の骨が――。

なんとということだろうか。地球の危機を救うべく手を差し伸べてくれた恩人のひとりは、生きてその任を果たすができず、遠い異郷の地でその命を儂く散らしてしまったのだ。

生きて大任を果たしたのなら、再起を果たしたヤマトで故郷に連れ帰る予定だったのに……。もつといっぱい、話したいこともあったのに……。

まさかガミラスの妨害を受けて被弾するなんて、予想もしていなかった。

イスカンダルに対する敵意はないし、冥王星海戦のごたごたを利用すれば問題ないだろうと、ひそかにタイムスケジュールを合わせたはずなのに。

やはり早急に撤退しなければならぬ事態に追い込まれたことが効いているのだろうか。

結局、守も見捨てなければならなかった。

肉親を失う痛みはよく知っている。ユリカとて母を亡くしたし、家族もバラバラにされた痛みはまだ新しい。

古代進には同じ悲しみを味わわせたくないと頑張ったつもりだったのに、肝心の守を見捨てて逃げなければならぬなんて、とんだ皮

肉だ。

ユリカは沈みそうになる気持ちをなんとか奮い立たせる。弱気は厳禁、命を繋ぐためにも。

もしも自分が倒れてしまったら、それこそ地球は救われない。

地球を救うためにも、自分が未来を手にするためにも、なんとしても彼女の故郷に行かねばならないのだ。

ユリカは静かにサーシアに黙祷を捧げると、彼女が手に握りしめているカプセル状の物体を認め、彼女が命と引き換えに持ち込んでくれた、最後の希望のかけらをその手に抱く。

——これこそ自分が待ち望んでいた最後のピース。いままで彼女たちから秘密裏に得られていた援助と合わせて、地球を救うための手段がすべて揃った。

あとは実行に移すのみ。

ヤマトとの邂逅の際に見た、ガミラスに侵略されてあるべき姿を失った、未来の地球の姿を想う。

「ありがとう、サーシア。あなたの犠牲は決して無駄にはしないよ……私たちはきつと、イスカンダルに行く。あの遥かなる星に……さあ、じつと耐えるのはもう終わり。これからは反撃開始よ！ この絶望、ヤマトで必ず覆す!!」

第一話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二話 最後の希望！ 往復三三万六〇〇〇光年の旅へ挑め！

愛は世界を救えるのか？

第二話 最後の希望！ 往復三三万六〇〇〇光年の旅へ挑め！ Aパート

正体不明の宇宙船との遭遇を終えたナデシコCは、火星軌道を通過して一路地球へと向かっていった。

結局ユリカは不明物体——脱出カプセル——のそばで捕獲された。ブリッジに連行されたユリカはルリの雷の直撃を受けるはめになる。

素晴らしく冷ややかな目で理路整然と責め立てる激怒状態のルリの姿に、さすがのユリカもタジタジで、土下座を繰り返しながら謝罪する。

まるで米つきバツタみたい、と評したのはユキナだった。

異星人の女性の亡骸はユリカの要望で丁重に扱われることになり、最終的には一度火星に寄り道して、その大地に墓を建てて葬ることになった。

ユリカは異星人の亡骸がサンプルとして扱われることに強く反対し、ひとりの人間として、せめて土の上で安らかに眠れるように弔ってあげたいと強固に主張し、それにルリが折れたかたちだ。

その遺体はユートピアコロニー跡の高台に埋葬され、どこから来たのかもわからない異邦人は、火星の大地へと還っていった。

埋葬作業に駆り出された進は、その女性の容姿が雪にそっくりなことに驚き、広大な宇宙には地球人と同じような命が存在していることに宇宙の神秘を感じたという。

その後、ユリカは今度こそ医務室に連れられて監禁されることが決定された。

当然ユリカは「監禁つてなによお」と文句を口にするが、無言で鋭く睨むルリの迫力にあっさり屈し、脂汗を浮かべながら首を縦に振ることになる。

そして監視役として古代進が傍らに鎮座することとなった。

ユリカに対していい印象がない、どころか恨みを抱いている進に任

せるのはルリとしても気が引けたが、自分は離れられないし補佐役としてそばに置いておきたいハリとサブロウタも駄目。

結局、現在手が空いている戦闘部門の人間で、その感情ゆえに彼女に決して甘い顔をしないであろう進が適任であると判断されたのは、ある意味必然であつたのかもしれない。

対する進も、病人に殴りかかろうとした後ろめたさもあつて（渋々ながら）承諾し、進に対して後ろめたさのあるユリカは、大人しく医務室で休養することになつたのである。

だが、この出来事があつたからこそ以降の二人の関係があつたを思えば、最良の決断であつたと言っても過言ではないのかもしれない。

「それ、おいしいんですか？」

昼食の時間。

ベッドの上で上半身を起こして食事を摂るユリカ。なのだが、その食事内容が珍妙に見えた進は、あまり口を利きたくないと思つていたにも関わらず、思わず訪ねてしまった。

ベッド用テーブルの上に置かれたスープ皿の中には、とろみのあるスープのようなものが注がれている。

見かけはオレンジ色に近くてニンジンスープのようにも見えるので、そこは気にならない。

だが湯気と共に漂ってくる匂いはひどく薬品臭く、隣で昼食として持つてこられたクラブサンドイッチを齧っている進までもが、自分が病人になつた気分になるほどだった。

「全然。はつきり言ってますよ」

言いながらもあまり嫌そうな顔をせず、黙々と口に運ぶユリカを見てさらに追及したくなる。

「どうしてそんなもの食べてるんですか？　もしかして、普通食が食べられないとか？」

少々不躰かと思つたが気になるので聞くことにする。本当に気になるのだ、目の前のスープもどきが。

「うん。食べると吐くし消化できないの。……最初気付かないで食べたらエライ目に遭ったしねえ……」

と、遠い眼をしながら語るユリカに進は気持ちが悪く後退する。

食事中だと言うのに、その『エライ目』とやらを想像してしまったのだ。恐らくリバーズ……オエ。

「でも点滴だけじゃ栄養が不足しがちだし、せめて食べる形式くらい採ってたほうが精神衛生上いいんじゃないかなあ、って気を使ってくれたみたい。一応味とか匂いも頑張ってくれてただけど、これが限界みたいで……最近地球も食糧事情が厳しいでしょ？ だから薬に近いとは言っても、用意してもらえただけ贅沢だから文句は言えないよ」

遠い眼をしたユリカの言う通り、地球の食糧事情は一気に悪くなった。

地球の環境はガミラスの手で激変してしまい、農作物がともに育てられず、インフラも停止状態に近いため流通も行き届いてなくて、倉庫などに保管されていた無事な保存食を取り出して配るのにも、かなりの労力を要している始末だ。

そう、いま地球は死に絶えようとしているのだ。

医務室でユリカと進が食事をしている時、地球に向けて航行中のナデシコCの横を隕石が通過する。

最大巡航速度で航行するナデシコCよりもずっと速い速度で、直径が一〇〇メートルほどの球状の小天体が地球に向かって飛び去って行く。

「——遊星爆弾を確認しました。迎撃しますか？」

オペレーター席のハリがルリに伺いを立てるが、ルリは力なく頷いた。

「お願いハリリー君。ひとつやふたつ破壊したことで焼け石に水を通り越していまさらだけど……」

ルリの許可を得て、ハリはグラビティブラストを発射して小天体を破壊する。その顔には喜びもなく、むしろ諦めにも近い感情が張り付

いている。

——そう、もう手遅れなのだ。

ナデシコCの帰投先、地球。

その姿はガミラスの遊星爆弾の影響で変貌を遂げていた。

かつて地球は青い星と呼ばれていた。しかしいまは——。

『白い星』と呼ばれている。

スノーボールアースと呼ばれるその姿は、かつて地球が経験したことがある姿だと学者は言っている。

いまの地球はすべてが凍り付いていた。

ガミラスの落とした遊星爆弾は、単なる質量弾ではなかったのだ。

地球の成層圏付近で自爆し、太陽光の反射率（アルベド）が非常に高い粉塵をばら撒いて太陽光を遮ったのである。

その遊星爆弾が幾発も落とされ、ついに地上に太陽光は届かなくなった。

さらに一部の遊星爆弾にはガミラスの物と思われる人口変圧装置が内蔵されていて、反重力フロートで大気中に浮かぶと気象を操作し、人口の嵐を巻き起こして地表を大混乱に陥れた。

その結果地表は猛烈な吹雪に見舞われ、見る見るうちに海は凍り、大地も森も、すべてが凍り付いていった。

世界全土が南極の極地のような、極寒の世界が到来した瞬間であった。

猛烈な吹雪によって地表の多くは雪に飲まれ、その重みで多くの家屋が押し潰され、道を塞がれ、飢えと寒さで数多くの犠牲者を出した。

またエネルギー問題も深刻になった。

発電施設の殆どがこの異常気象の前に正常に働かなくなり、電力を生み出せなくなってしまうのだ。

この状況を改善すべく、ガミラスの襲撃を生き延びた軍艦やタンカーのカーゴブロックなどを改造した急増の避難所が各所で設立され、人々はそのを新たな住居とした。

現存している耐核シェルターなどもすべて開放して避難を促したが、間に合ったのは総人口の一〇分の一程度で、残りはすべて死に絶

えたとされている。

艦隊による軌道上からの艦砲射撃だとか、地上部隊による制圧などは行われなかったがその意図は明らかだ。

降伏もせず愚かにも歯向かい続ける地球人類を殲り殺しにするつもりなのだ。

悪魔のような所業は多くの人々の心を抉り、その希望を奪い去っていった。

環境破壊による被害者も大きかったが、明日への希望を失ったことで自ら命を絶つたものも多い。

地球と人類は、間違いなく破滅の淵にいるのだ。

ユリカがあの時見た記憶にある、遊星爆弾による放射能汚染で赤茶けた、並行世界の地球と同様に――。

一切の救いを感じさせない、絶望の世界へと変じていたのだ。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二話 最後の希望！ 往復三三万六〇〇〇光年の旅へ挑め！

「ごちそうさまでした」

ユリカは皿の上にスプーンを置くと、両手を合わせてそう言った。決して満たされる食事ではないだろうに。

だがいまの地球の状況を見れば、このような食事を用意してもらえないのは、彼女が言うように優遇されているに違いないのだ。感謝こそすれど文句など言えようはずがない。

とはいえ、

「はあ……普通のご飯が食べたいよ……」

と小声で愚痴っていたのを聞き逃せなかった。

さきほどは文句は言えないと口にしていたが、やはり辛いのだろう。

進は聞こえないふりをしながら、自分が食べているクラブサンドイッチを見る。

これもいまのご時世では貴重品となった生野菜を使用している。

一度凍り付いて解凍したもので、風味もなにもあったものではなかったが。

食糧事情で不幸中の幸いだったのは、氷漬けになったことで食糧の多くは傷んでいないことであつたと言えよう。

いまは防衛艦隊に回せないような型遅れの機動兵器などを駆使して、氷に閉ざされた倉庫などから食料をなんとか回収して凌ぐことができている。

とは言え、すべての食糧が無事というわけでもない。建物の倒壊などで押し潰されてしまっているからだ。

寒冷化で食料を生産するプラントが停止しているいまは、合成食品であつても確保が難しい状況が続いている。

このままでは、遠からず食糧難で更なる犠牲者が生まれ、最後には――。

「どうしたの古代君？ 食べないともつたいないよ？」

と、進の手に握られたサンドイッチに目を向ける。――お願いですからその羨望の視線を止めて下さい。不要な罪悪感を感じてしまいません。

「え？ ああ食べますよちゃんと。そりやもちろん、もつたいないですし」

そう言つて進は半分ほど残っていたサンドイッチを口に押し込む。

正直彼女の状況を知つてしまえば、その眼前でちゃんとした料理を食べるのは居心地が悪い。

――なぜこんな思いをしなければならないのだ。いや、事情はどうであれ上官に殴り掛かった懲罰と思えばこれほど楽なものはない――と思ひ込もう。

押し込んだサンドイッチを、これまた届けられたパックの薄いコーヒ―で流し込む。味も香りも大して期待できない代物だが、これすら貴重品なのだ。

「――ねえ古代君」

進が口の中のものを飲み込んだのを見計らつて、ユリカは話を切り出した。さきほどまでと違つて真剣な顔だ。

「お兄さんのこと。本当にごめんなさい。謝って済む問題じゃないけど、謝らせて」

そう言われて進は胸が騒めくのを覚えた。意図的に避けてきた話題だ。

進は胸の内でもまた感情が沸き立つのを感じたが、場所が場所で、相手が相手なのでなんとか抑え込む。

「いえ。本当の意味で兄を殺したのはガミラスです。大佐の行動がなければ、俺はこうして生きていらなかった。敵を討つことができるだけマシです……その、殴ろうとしてすみませんでした。命を危険に晒してまで俺達を助けてくれたのに」

内心の葛藤を抑え込んで務めて冷静に対応する。それくらいは大人でありたいという強がりでもあるし、罪悪感を覚えたのは本当のことだから、謝っておきたいのである。

「ううん。助けられなかったのは事実だから。殴りたかったら殴っていいよ。一発くらいなら問題無いと思うし、気の済むようにして欲しいの」

「嫌ですよそんなの！ 万が一の事があつたら、艦長はどうするんですか!？」

ユリカの問題発言に、医務室だと言うのについ声を荒げてしまった。

言ってから我に返って周りを見渡すと、会話の内容自体を聞かれていたためか皆苦笑して見逃してくれた。

ナデシコCの乗組員は気のいい人たちが多くて助かる。でもニヤニヤ陰で笑わないで欲しい。そういうのじゃないから。

対するユリカは進の叱責に目を丸くして驚いたようだ。

「うん、そうだね。ルリちゃんをこれ以上心配させるのは良くないよね——ありがとう古代君。ルリちゃんのこと心配してくれて」

「べ、別に許すとかそういうんじゃないんですから、その言い方は、その、なんだあ、不適切だと思います」

微笑みと共に感謝の言葉を言われた進は、照れ隠しの為に悪態をつくが、どうにもテンプレートなツンデレっぽい対応になってしまっ

た。その様子にユリカはくすりと笑う。

とても親しみやすく、年上が年下を見守る暖かい視線に、進は亡くなった両親のことを思い出した。

トカゲ戦争の頃、まだ進が一二の時に、両親は無人兵器の攻撃の余波に巻き込まれて死んだ。

たまたま軍の学校に通う兄を訪ねて、その帰りのバスを時間に合わせて停留所で待っていた両親が偶然巻き込まれたのだ。

進はトラブルで予定のバスに乗り遅れたため助かったが、それは救いとは程遠かった。

結局、進はそのことが原因で軍人への道を走ることになった。もしかしたら唯一残った肉親と同じ道に進むことで、自己保全を図ったのかも知れない。

生来心優しく喧嘩も嫌いだった進が、憎しみから真逆の道に向かって走り始めた瞬間だった。

幸か不幸か、進が戦場に出る前に戦争は終結した。そしてその正体が過去に地球から追い出された同胞であり、非は地球側にあったことも知らされて、進困惑を隠せなかった。

感情は中々納得してくれなかったが、なんとか復讐心を抑え込み、自分のような悲しい人を生まないようにと、世界を脅かす脅威から市民を護りたいと、軍人の道を選び進む道を選んで今日に至る。

しかし、結果として進はまた家族を失った。気持ちだけは先走るが、戦うための力が足りない。

いまの地球の力では……ガミラスに勝てないのだ。

急に沈み込んだ進の様子に心配になったのだろう、ユリカに話しかけられて進はようやく自分が思い出に浸ってしまっていたことを自覚した。

なんでもないと誤魔化そうとするが、亡き両親を思い出したことで薄っすらと涙を浮かべてしまっていたのを見られたようだ。

観念した進は亡き両親のことと、自分が軍人になった理由、そして軍人として果たすべきだと思っっていることをユリカに話す。

ユリカはなにも言わずに黙って最後まで聞いた。

「そっか。戦争で家族を……」

すべてを聞いたユリカは進をちよいちよいと手招きする。

何事かと顔を近づければ、いきなり抱きしめられた。

大人の女性、しかも病気で衰えた体とは言え、まだ若い女性の胸元に顔を埋める形になった進は、一瞬思考が吹っ飛んだ。

「なっ!？」

突然の事態にパニックに陥り離れようとするが、筋力が落ちているはずのユリカの腕を外せない。

「辛かったね。悲しかったね……お兄さんのこと、本当にごめんない。償いと言ったら変だけど、これからは私がお姉さんにでもお母さんにでもなつてあげるから。辛かったらいつでも頼ってくれていいよ……これでも私、子持ちの主婦だから」

そう言つて頭を撫でられる。恥ずかしくて顔から火が出そうだ。彼女としては善意のつもりなんだろうが正直ありがた迷惑だ。

背中に邪な視線を感じて居心地が悪くなった進は、なんとかユリカを振り払つて「トイレに行きます」と顔を真っ赤にして立ち去る。

——本来の役目であるユリカの監視のことなどすつぽ抜けてしまった。

ユリカはどうして進が逃げたのかをイマイチ理解できないながらも、ここは大人しく休もうとベッドの潜つて目を閉じる。

もうまもなくヤマトが目覚める。

彼女が目覚めれば、この状況を一気に覆す事ができるはずだ。

それまでは少しでも心と体を休めて備えよう。前人未到の長旅のために――。

(それにしても古代君可愛かったなあ。お兄さんのこともあるし、私が優しく癒してあげないと。うん、ルリちゃんだつて引き取った時には結構大きかったんだし、古代君をそう言う風に扱つてもまったく問題無いよね!)

などと、進にとってはありがた迷惑な思考を巡らせながら、ユリカは睡魔に誘われて眠りにつく。

対する進は方便だったはずのトイレを本当に済ませてから戻り、す

やすやと寝息を立てているユリカにがつくりと肩を落としたあと、監視任務を続行すべく椅子に腰かける。

「はあ……俺、これからこの人に振り回されそうな予感がする」
結論から言えば、不安的中だった。よくも悪くも。

苦々しい気分で遊星爆弾を粉碎したあとのブリッジでは、異邦人の女性が持っていた正体不明のカプセルの解析作業が行われていた。

摩訶不思議なデザインのカプセルであったが、解析を進めるにつれてそれが通信カプセルであることが判明した。

少々苦労はしたが、ルリとハリというIFS強化体質のオペレーターと、オモイカネと言う地球で最も優れたコンピューターがそろったナデシコCで解析できないほどではない。

と言うより、最初からプロテクトの類はかかっておらず、単にデータを読み取るための方式の構築に少々苦労したに過ぎない。

懸念していたウイルスの類も検出されていないので、データを呼び出してみることにした。

地球帰還までまだ日数が掛る。ならばここでやっておいたほうが時間の節約になるというものだ。

解析さえ終えてしまえば長距離通信を利用してイネスあたりに取りに来てもらい、地球に届けてもらえるだろう。

詳細な内容は防諜を考えると伝えられないが、ユリカの体調が心配とでも偽れば、イネスを呼ぶこと自体はさほど難しくない。主治医だし。

「スクリーンに出します」

ハリはごくりと唾を飲み込み、再生スイッチを入れる。

『——私は、イスカンダルのスターシア』

メッセージの出だしはこうだった。画面に映し出されたのは床まで届きそうな長い金髪をもつ、絶世の美女だった。——火星で埋葬した、あの異邦人の女性そっくりの。

青い軽やかなドレスを身に纏った、地球人とほとんど違わない容姿も然ることながら、驚くべきことに地球の言語、しかも日本語を話し

ているではないか。

『私の妹サーシアが、無事地球に辿り着き、このメツセージがあなたごたの手に渡ったのなら、イスカンダルへ来るのです。——このメツセージを疑っている余裕はないはずです。ガミラスによる環境破壊で、地球の生物が滅びるまで、あとわずかに一年。しかし、私どもの手には惑星環境復元装置、コスモリバースシステムがあります。残念ながら、もう私の力でこれを地球に届けることはできません。銀河系を隔てること一六万八〇〇〇光年。私は、あなたがたがイスカンダルへ来ることを信じています。そのため船を、あなたがたはすでに手にしているはず。——旅立つのです。遠き、イスカンダルに向かつて。生き残るために。——私は、イスカンダルのスターシア』

メツセージはそこで終わっていた。そして続けて表示されたデータは銀河系やイスカンダルを有するであろう大マゼラン雲までの宙域データ、そして……。

「艦長、これって!？」

ハリの驚きの声にルリも目を見張る。そう、そこに映し出されているのは待望のデータだったのだ。

「これは、もしかして波動エンジンの完全なデータ!？」

ヤマトの再建をあと一歩のところまで邪魔していた波動エンジン。その完全版のデータだった。

ユリカから聞かされた限りでは、ヤマトに搭載されている波動エンジンは、厳密にはその世界の地球で大幅な改良を受けたモデルであるが、本体はもちろんヤマトのデータベースも破損していたため、コア部分の完全な再現ができないでいるのだという。

それを補うばかりか、さらなる改良を可能とするデータの数々。

詳細を知らないルリですら圧倒されずにはいられなかった。

それに、その波動エンジンの生み出す莫大なエネルギーを一挙に吐き出す究極の破壊兵器、波動砲に関する資料すらも添付されているではないか。

そうか、そうだったんだ。これがユリカの言っていた希望の片割れ……!

あの宇宙戦艦ヤマトを復活させるための最後のピースにして、地球を破滅から救い出すウルトラC！ 本当に実在していたんだ。ユリカは正しかったのだ！

「このデータがあれば、ヤマトは蘇る！ 地球を救う最後の希望が！」
ルリが興奮冷めやらぬ様子でウィンドウに視線を釘付けにしている。

その凶面は少しずつ移り変わり、最後にはなんらかの化学式を大きく映し出していた。

「これは？」

食い入るようにウィンドウを見ていたユキナも、最後に現れた化学式に首を捻る。なにを意味しているのかわからないからだ。

「俺は専門外だけど、これ薬品かなにかじゃないか？ どう見ても波動エンジンとは無関係っぽいぞ？」

サブロウタも首を捻る。

「このデータ、医務室に送信してください。専門家に見てもらった方がいいでしょう」

その後、医務室にて送られてきた化学式の内容が解析され、非常に高度な医薬品と医療用のナノマシンであったことが判明した。

それを使えば今現在大怪我や病気で苦しんでいる人々はおろか、ユリカの時間をわずかではあるが引き延ばし、その夫でありルリの家族でもあるテンカワ・アキトの五感の回復も期待できることが判明したのは、まもなくのことであった。

なお、そのことを医務室にいるユリカに伝えようとしたら、肝心の彼女が爆睡していたために、ルリはそわそわとユリカが目覚めるまでの八時間ばかりを落ち着かず過ごすはめになったという。

—— 幸せそうにグーすか眠るユリカの寝姿に、ちよつぴりイラつと来たのは言うまでもないだろう。

「アキト君、ちよつといいかしら？」

テンカワ・アキトは唐突に部屋を訪ねてきたエリナ・キンジョウ・ウォンにその声を掛けられて、憂鬱そうに首を部屋の入口に向けた。「なんだエリナ。今日の輸送はもう終わったはずだぞ」

アキトはあまり感情を感じさせない声で応対した。

彼は現在ネルガルの月施設の一角に匿われている。アキトがここに滞在しているのは、ネルガルが匿っているのもそうだが、アカツキ・ナガレ会長からの厳命によって体の治療と並行しながら、アクエリアス秘密ドックへの物資運搬や人員の輸送にボソソジャンパーとして協力させられているからである。

ガミラスの攻撃で月の居住区はとうに壊滅しているし、ネルガルの月面施設もガミラスの攻撃に晒されてはいるのだが、ガミラスは偵察以外では地球近海には出現しないため、月面とアクエリアス大氷塊は息を潜めながらではあったがその機能を維持し、最後の反抗作戦のための準備を進めているのだ。

——ただ、アキトにとつては特別関心を引くことではなかった。

ユリカたちに迷惑が及ぶ可能性があることや、アカツキたちネルガルの上層部が、宇宙軍と密約を交わして自分への追及をうやむやにしていることを知らされたこともあり、尽力してくれただろうアカツキや義父の気持ちが無駄にできないと考えたからこそ大人しく引きこもり、ネルガルの企てにも協力しているが、それは義理の域を出ないものでしかない。

本音を言えば、もう他人とは関わりたくないと思っていた。こんな薄汚れた大罪人、見捨ててくれればいいのにとさえ思っている。

……いや、本音のほうではそうではないといい加減気付いている。自分は——許されたがっているのだ。あんな悲劇に見舞われたのだ、たしかに罪は犯したしそれを償わなければならぬとは思いますが、奪われた幸せを取り戻したいという欲求を完全に消し去ることはできないでいる。それを自覚しているからこそ、自分の浅ましさが許せなくもあるのだ。

それに——もしも平穏な生活に戻れたとして、どう生きていくとい

うのだ。

こんな壊れた体では、ユリカに、ルリちゃんに迷惑をかけるだけだ。だったらいつそ、死んでしまったほうがマシでは——。

そう考えたことは数知れないが、アカツキたちへの義理——という言葉で逃げ続け、ただただ無為な時間を過ごしていた。

いや、無為というのは正確ではないかもしれない。

自由な外出は当然禁止されていたが、代わりにここ三か月ほどの間はアクエリアストックへの物資輸送のほかに、開発中の新型機動兵器のテストパイロットを、師匠と呼ぶべき月臣元一朗と共に任されていたからだ。

コックピットの仕様が根本から変わったためなかなか慣れないでいたが、最近はやく馴染んできて、思い通りに動かすことができるようになっていく。

新型というだけあって、たしかに既存のどの機動兵器よりも優れた性能だと素直に称賛……していただろう。その機体の開発主任がウリバタケ・セイヤで、『あの』Xエステバリスの発展型と聞かされていなければ。

厳密には月面フレーム——つまり相転移エンジン搭載フレームのデータも組み合わせた、双方の発展型に相当するらしいが、先述のインパクトが強すぎた。

いまのところは特別問題を起こしてはいないのだが——もしかしたらエリナの要件もあれ絡みなのだろうか。

「ナデシコCから連絡があつてね。いまイネスが行ったけど、あなたの体の治療に使えるような薬や医療用ナノマシンのデータが、異星人からもたらされたんだって」

「なんだとっ!?!」

思わず興奮してしまう。きっといまは、顔中にナノマシンのパターンが発光していることだろう。

——火星の後継者の人体実験の後遺症、その身に刻み込まれた狂気の産物が。

「それを使えば、あなたの体に過剰投与されたナノマシンの除去や、壊

れた五感の再建も可能で、推測ではほかの問題も克服できるわよ。異星人さまさまのご都合主義ってやつね」

エリナの言葉が脳に染みるにつれ、アキトは言いようのない感覚に襲われる。

人体実験の後遺症でその機能の大半を失った五感が戻る。

それ以外にも体に来ているガタが治るのなら、不安の種だった病気などのリスクも大きく減ることになる。

つまり、日常生活において迷惑をかけることはなくなる。

そこまで考えると不意に浮かんでくる顔があった。

(ユリカ……)

想うのは、置いてきてしまった妻のこと。

復讐に身を焦がし、火星の後継者も無関係な人間も関係なく、多くの血を浴びてきた自分。

それは——彼女が大好きだったテンカワ・アキトではない。もう、彼女の王子様ではない。だから一緒にいられない。いてはいけない。

(ユリカ……俺はもう、以前の俺じゃなくなった。おまえだつて嫌だろう?)

脳裏に浮かぶユリカは、アキトが大好きな満面の笑みを浮かべるだけでなにも答えてはくれない。

(それに俺は、エリナを……抱いてしまった。……そのことを知ったら、ほかの女に手を出したなどと知ったら、それこそ悲しませて、拒絶されるんじゃない)

そんな考えが堂々と巡り続けた一一カ月だ。

アキトのもとにはユリカの所在を含めたあらゆる情報が入ってきていない。

唯一知っているのは、ナデシコCが地球へ連れ帰り、病院に運び込まれたということだけ。そのあとどうしているのかは聞いていない。聞くのが怖かったから自分からは聞けなかったし、周りの人間も話さなかったのでアキトは目をそらし続けていた。

ガミラスの侵略のことは嫌でも耳に入るし、放っておけば地球が滅ぶ——ユリカもルリも死ぬとわかっていても、ガミラスと戦おうとい

う気概は浮かんでこなかった。

それほどまでにアキトの心は消耗していたし、自分ひとりが参加したところで事態が好転するはずもないと理解していた。

アキトは——絶望を覆すヒーローなどではない。

回復の可能性が示されたのは嬉しい。だが治ったところでなにをすればいいのかが、わからない。

いまさら帰れない。もう見捨てたと取られても間違いじゃない行動をとってしまった。いや本当は帰りたい。でもそんなことが許されるとは思えない。俺は大罪人だ……。

アキトの思考がグルグルと混乱し始める。

それを知ってか知らずか、エリナは話を続けた。

「で、どうするの？　ウチとしては被験者が欲しいところだから、さっそく治療に入りたいと思うんだけど」

「いまさら治ったところで、どうしろと言うんだ。地球はまもなく滅ぶ。無意味だろ……」

地球は滅亡寸前なのだ。どんな行動もすべて無意味に終わる。

アキトにはそう決めつけてしまっている。いや、そう言い訳して自分の気持ちを誤魔化そうとしていた。

それを察したエリナは努めて冷静にアキトに告げることにした。

「——地球は必ず救われるわ。異星人の、いえ、イスカンダルの使者がもたらしたデータはヤマトを完成させるためのメカニズムと、救いの手段を提供する用意があるというメッセージ。そして彼女らの星までの宇宙地図なのよ。……ヤマトが完成すれば、少なくとも地球は回復する手段を持ち帰れる。ガミラスを退けられるかはわからないけど、それすらやってのけるかもしれないわ。あの艦なら……」

ヤマト。

その名前はアキトもよく知っている。自分が協力している輸送作業はすべてヤマトの復活に係わっているのだから当たり前だ。

そしてテストパイロットを務めている新型も、ヤマト艦載を目的として最適化した機体なのだと聞かされている。

……しかし、だからどうしたというのだ。

「楽観的だな……戦艦一隻であの軍勢がどうにかなるものか。あらゆる面でこちらを優に凌ぐ力を持っていて、その本拠すらわかっていないだぞ。それをどうやって覆す……!」

アキトは苛立ち気にエリナを否定する。八つ当たりなのは、わかっていた。

たかが戦艦一隻になにができる。せいぜい限られた人間を載せた地球脱出に使えるかどうかだ。

「……戦艦一隻で木星との戦争を終わらせるきっかけを作った、あのナデシコの、それも立役者の片割れとは思えない口振りね」

八つ当たりをされてもエリナは真摯だった。

アキトを憐れむでも非難するでもなく、淡々と事実を突きつける。その態度にアキトはなおさら苛立った。

——ナデシコ。その名前はいまもおアキトの胸中に輝く存在。辛いことも多かったが、ユリカと再会し、自分らしさを見つけ出した思い出の場所。

そして、妻ともども火星の後継者の連中に蹂躪されてしまった、在りし日の象徴。

「ナデシコはあいつの、ユリカの艦だ——俺には関係ない。どちらにせよ戦艦一隻に過度な期待を寄せるなんて夢の見過ぎだ。——ヤマトだかトマトだか知らないが、悪あがきするにしても、地球脱出船として運用したほうがまだマ——」

「そう、ならそのテンカワ・ユリカも報われないわね。あんなに頑張ってるのに、肝心の旦那様がこれじゃあね……!」

それまでポーカーフェイスを崩さなかったエリナが、ヤマトを愚弄した言葉を耳にした瞬間顔を歪め、怒りを含んだ声でアキトを非難した。

「……ユリカが、なんだって?」

「教えないわよ! 無意味なんですよ? とにかくあなたは今までどおりネルガルに従ってもらいます! 以上!!」

アキトの返事も待たずにエリナは部屋から出て行って姿を消してしまふ。

エリナを引き留めようと伸ばした右手はむなしく宙を彷徨い、その剣幕に追いかけることを躊躇してしまった。

「ユリカ……」

妻はいつたい、なにをしているのだろうか。

力なくベッドの上に腰を下ろして俯く。

アキトの中で、ユリカの現状を知りたいという欲求が渦巻く。だが、改めてエリナを追いかけて尋ねる勇気を、持ち合わせてなどいなかった。

怖かった。怖かったのだ。

ユリカに対面して万が一にも拒絶されたら。肝心な時に助けてやれなかったことをどう謝罪すればいい。逃げ出したことも。

「俺はいつたい——どうすればいいんだ……?」

アキトは自分を信じることも、ユリカを信じることもできず、頭を抱えて蹲る。

彼はまだ、自分の進むべき道筋を見つけれないでいた。

アキトの部屋をあとにしたエリナは足音も荒く廊下を進む。

全身から怒りを発散させながら。

もしも人通りのある廊下であつたら、誰もが恐れて道を開け、震えあがつて声をかけることすらしないだろう。

「まったく……い……あの朴念仁がつー!」

エリナの怒りは収まらない。

アキトが火星の後継者から救出されてから一時はその世話を勤め、彼を慰めるためにその身を捧げたこともある。

いまでもエリナはアキトへの想いを胸に秘めているが、だからと言つてそれを告げようとは露とも思っていない。

結局のところ、あの男はミスマル・ユリカ以外眼中にないのだ。……自分を抱いている時ですら。

男女の関係を持ってしまったエリナに対してはそれなりの優しきを見せることがあるが、それでもどこか距離を感じるもので一線を踏み越えてこない。

関係を持った当初こそ数回にわたって肌を重ねたが、荒れていた時期を過ぎてからはどこか距離を置いているのがわかる。

結局、行為の責任を感じているだけで、エリナを女として愛してくれるわけではないのだと、思い知らされただけだ。

そしていま、彼が愛するミスマル・ユリカは自分のすべてを賭してこの世界を救おうとあがいている。すべては夫たるテンカワ・アキトを含めた人類の未来のため。

文字どおり血反吐を吐きながら、体を壊しながら、残されたわずかな命をゴリゴリと削り落としながら。ただ未来を信じて。

たとえ世界を救っても自分が助からない可能性のほうが高いに、彼女は果敢に立ち向かっている。

アキトは好きだ、でも愛のために自分のすべてを捧げる覚悟のユリカには勝てない。それ以前に自分では彼を本当の意味で救うことすらできなかったのだ。

……だが彼女なら、彼が愛してやまない天性の明るさを持つ彼女ならきつと、アキトを救う事ができる。そのためにも彼女を護らなければならぬのだ。

思い返されるのは約一カ月前。アクエリアストック内でヤマトの再建計画が本格的にスタートした直後のこと。

すでにガミラスの脅威が周知のものとなり、世界中が恐怖に駆られ始めていたところだった。

「ミスマル・ユリカ！ あなた、安静にしてなさいと何度言ったらわかるのよっ！」

エリナはアクエリアス内に移送された元木屋の自動造船ドックの中で、蹲って激しく咳込んでいるユリカに怒鳴りつける。

元々性格的に相性が悪く、衝突することの多いふたりではあったが、今回は当然と言えよう。なにしろ怒られている人物のほうが、客観的に見て問題だったからだ。

「で、でも……っ、私が、やらないと……」

息も絶え絶えと言った様子のユリカに肩を貸してやりながら、エリナはさらに叱る。

「ジャンプだけならドクターでもどうにかなるでしょ!? あんな無茶をして、そんなに死に急ぎたいわけ!?!」

エリナが怒るのもつともだ。

止める間もなく行動を開始したユリカは、アクエリアスの海に没してバラバラになったヤマトのすべてをボソンジャンプで一度引き上げた。

ここまでではない。

問題は、その残骸を木星の使用されていない自動造船ドックにあまざず運び、アクエリアスの氷塊の中心をくり抜いて、そこにドックを送り込み、さらに内部を行き来するための小型のチューリップをどこからか見つけてきて、月のネルガルの使用されていない無人のドックとアクエリアス内のドックに設置したのだ。

この間、わずかに五日。

誰も止める暇などなかった。立て続けに行われた驚異的なボソンジャンプの応用は、イネスすら顔を真っ青にするほどのものであったという。

いずれも現在の技術では実現不可能な神業の連発だったのだから無理もない。

ジャンプにはそれなりの間があったが、その間誰もユリカの姿を捉えることができず、事前に持ち出していたであろう、わずかばかりの携帯食料と水だけで食い繋ぎ、火星に安置したはずの演算ユニットすら強奪してジャンプしたのだ。

たしかに演算ユニットさえ手中に収めればボソンジャンプワールドの問題は改善されるが、この件でネルガルと宇宙軍は事態の隠蔽にえらい苦勞をさせられた。

驚くべき行動力と手腕だが、その代償は決して小さくはない。

……その反動は確実に、その体を蝕んでいたのだ。

結局彼女を捕まえることに成功したのは、アクエリアス・ドックの

中に物資と人員を運ぶと自分から姿を現した時だった。

エリナは本来アクエリアスのドックに来る予定などなかったのだが、捕獲しようとして接近したところでジャンプに巻き込まれた。むろん、集められた技術者連中もだ。

誰もジャンパー処理などされていなくても関わらず、この娘は躊躇なく跳んだ。

当然誰もが死んだかと思っただが、全員が無事だった。

なにをしたのかは漠然とだが理解できた。この娘はボソソジャンプの演算ユニットが地球人を『生物』と認識できないという難点に補正を掛けたのだ。

つまり、人間翻訳機としての機能を人として活動しながらあっさり実行したのだ。尋常ではない。

だが無茶なジャンプの連続にユリカはどうとう限界を迎えてその場で倒れ、エリナはようやく確保することに成功した次第である。

捕獲したユリカの呼吸は荒く、不規則だ。

ユリカが最後にジャンプしてからすでに五分が経過している。なのに一向にナノマシンの輝きは収まらならない。

明らかによくない兆候を見れば、エリナでなくても怒るだろう。

「あなたの体は普通じゃないの！ これ以上の無茶は絶対に駄目！ 大人しくベッドで寝てなさいっ！」

「だ、だめ……ま、まだコスモナイトが……！」

顔面蒼白で弱り切っているのがはつきりと見て取れるユリカだが、まだ仕事が終わっていないと休むことを拒絶する。

「だから駄目よ！ ホントに死にたいわけ!? たかが戦艦一隻のためになんてそこまでするのよ！」

エリナの怒りも収まらない。ユリカに肩を貸しながら強引に医務室にまで運ぶ。

ユリカをぶち込むのなら大病院の集中治療室が適任ではあるのだが、そのためにはドックから出なければならぬ。

つまり出入り用に用意されていたチューリップ（デイストーションフィールド付き連絡艇も用意済み）を通るしかないのだが、それすら

も彼女の体を蝕む要因だ。

仕方なくエリナは、容態が落ち着くまではここで休ませ、向こう側で待機させたイネスたちに引き渡す用意を整えるつもりだった。

そのあとは薬で意識を奪ってでも病院のベッドに縛り付けて治療させる。

そうしなければこの娘は長く生きられない。

エリナは仮設医務室にユリカを運び込むと、医者にベルトを使って拘束し、逃げ出せないようにしろと指示を出し、ドック内に引き返してヤマト再建計画に関する打ち合わせを始めた。

その場には、新入りながら素晴らしい才能と高いセンス、常識に捕らわれない発想力で実現する、ネルガル期待のニューフェイス、真田志郎も参加していた。

彼の視点から見ても、並行宇宙の戦艦であると紹介されたヤマトに使用されている技術は素晴らしいものだそうで、たしかにこの技術を吸収できれば、現在までに判明しているガミラスの艦艇に打ち勝つことができるだろうとのことだ。

同時に彼は、

「構造が非常にわかりやすいんです。まるで自分自身が手掛けたかのような、そんな錯覚すら覚えるほどに」

と、ユリカが予め用意してくれた端末を操作して呼び出した、ヤマト艦内に残されていた設計図や各種データを参照しながら、そう言い切った。

エリナは短時間での再建が可能なのかどうか、はたしてそれで信頼性が損なわれないのかどうか心配だったので、そこも尋ねてみたが、

「なんとも言えません。しかし、なんとかかなりそうな気がします。まだあまり手を付けていませんが、不思議と作業が捗るんです。まるで……まるでそう、直して貰いたがっているような。そんな気がするのです」

真田自身も不思議そうな顔であった。

技術者ではないエリナからすればその言葉を信じてしかないので、

「任せる」と一言だけ告げた。

実際、早速ヤマトにとりついた技師たちは驚くべき速度で艦内を移動し、あちこちから情報を取得して再建プランの修正を粛々と行っている。

——優秀なメンツを揃えはしたが、ここまで優秀だっただろうか。

そんなこんなで話を纏めてからユリカの様子を確認しに行くと、幾分落ち着いた様子で、だが拘束されて恨みがましい目をした彼女に文句を言われた。

「拘束を外して下さい。私が行かないと駄目なんです」

「バカも休み休み言いなさい。これからドクターに引き渡して集中治療室行きよ」

取り合うつもりはない。このまま病院に放り込んで拘束する。そうしなければこの娘は死ぬ。

彼女の要求は聞いては——。

「それとも、動けないのをいいことにあんなことやそんなことを……」

「しないわよ！」

いきなり変なことを言い出したユリカについてノリツツコミする。

この突拍子のない発言はいつまで経っても治らないのだろうか。

そのあと、しばらく重たい空気が流れる。

ユリカはなにか言いたげな顔で口を開こうとしては躊躇するといふ、ある意味では彼女らしくない態度を取り続けたが、やがて意を決したのかエリナに話しかける。

「——エリナさん、少しふたりきりで話せませんか？」

ユリカはなにか諦めたような表情で訴える。

エリナはその様子に感じたものがあり、医師らを追い出して部屋を施錠、密室状態にする。

よほど騒がなければ音漏れはないだろうし、まだ盗聴器の類もないだろう。

「エリナさん、アカツキさんから聞いたんですけど、アキトの世話をしてくれてたそうですね？——もしかしなくても、抱かれたんですか？」

いきなりの爆弾発言にエリナは盛大に嘖いて咳き込むはめになった。

いつの間にアカツキに接触していたというのだ。そんな話は聞いていない。

「やつぱりかあ……別に責めてるんじゃないんです。アキトもこのことでは責めません——肝心な時にそばにいられなかった私が悪いんですし、それに……私もほかの男に好き放題されちゃったのと同じだし、綺麗な体ってわけじゃ、ないもの……」

その時のユリカの表情は正直見るに堪えなかった。

色々な感情が織り交ざっているが、色濃く浮き出ているのは後悔や無念といった、暗い感情。

彼女を知る誰しもが、似合わないと思断言する類の感情だった。

「そ、そういう言い方は卑怯だと思うわ。そばにいられなかったのも好き放題されたのも、あなたのせいってわけじゃないでしょう？ 全部あのテロリストどもの仕業じゃない」

これは本音だ。むしろ一緒に助け出せなかったことを、エリナ自身悔いている。

たしかに馬が合わず対立も頻繁にしたが、だからといってユリカを嫌っているのかといわれると案外そうでもない。

エリナもナデシコでの影響は受けているのだ。そしてその中心となったのがこのユリカと、アキトだ。

友人だと言えるほど深い仲ではないが、かつて共に戦った仲間として、あのような理不尽な仕打ちから救ってやりたいと思ったのは嘘偽りない本音だ。

ヒサゴプランに対する嫌がらせや、貴重なA級ジャンパーを確保すべきという意見すら、ネルガルが没落し始めていたあの時期では重役会議を通るものではなく、結局会長の意向で行われた万全とは言えない救出作戦。アキトが救えただけでもマシと言えるくらいだった。

それに加えて、ユリカを奪われたアキトのあの落ち込みよう。

恋敵ではあるが、アキトを思えばこそ彼女をずさんに扱うわけにはいかない。彼のあの血反吐を吐く戦いを、無駄にはさせられない。

エリナもひとりの女としてユリカが受けた屈辱には心底同情しているし、火星の後継者の連中が憎くい。

その身を、心を徹底的に利用され尊厳を踏みにじられたのだ。心中察して有り余る。

「ともかく、アキトを支えてくれてありがとうございます。アキトが人の心を捨てずに済んだのは、エリナさんの功績が大きいと思います——だからかな、不思議とそれ自体は悲しくないんです。私は、妻として夫を支えられなかったから、支えてくれたエリナさんには感謝の言葉しかない。本当にありがとうございます。——だからエリナさん、もしも私が生き残れなかったら、アキトを頼めますか？」

あの時のやり取りは、いま思い出しても胸が痛くなる。

彼女は決して絶望もしていなければやけっぱちになっているわけでもなかった。

文字どおり、最後の希望を命懸けで繋いでいただけだったのだ。

ユリカはエリナとイネスとアカツキにだけと断つてすべてを語った。すでにユリカはひとりでは今後活動できないことを悟り、エリナとイネスとアカツキを巻き込むことで行動する腹積もりだったのだ。

……そう、正真正銘最後の反抗作戦に備えて。

彼女はヤマトと共にイスカンドルに向かう。

だが、その旅路の苦難は予測がつかない。

イスカンドルに着くまで命が持つかどうか……着いたとしてもそこから先、命を繋げるかどうかは予測がつかない。

「だから、アキトは絶対にヤマトに乗せないでください。私のことも全部黙っててくださいね。いまの私を見たら、きつとアキトは苦しんじゃう。自分のせいだと勘違いしちゃう——アキトはとても、きつといまでも優しくくて、優しくくて、過度に自分を責めちゃう人だから……だから、もうアキトは戦うべきじゃない。戦場から離れて体を治して、もう一度幸せを掴めるように、気持ちを切り替えなきゃいけないの」

エリナはユリカの独白を黙って聞いていた。

「——本音を言えば、私はアキトと一緒にいたい、台無しにされた新婚生活を再開したいって思ってます。でも、いまは無理なんです。私が欲しいのは、アキトと一緒にイチヤイチャラブラブに暮らすだけの世界じゃない、アキトと一緒にラーメン屋をして、みんなで楽しく暮らせる世界なんですよ。——世界が減んだらラーメン屋どころじゃない。食べてくれる人がいなかったら、ラーメン屋なんて……アキトの夢は今度こそ叶わない」

悲痛な声だった。それは彼女がなによりも望んで、いまは叶わない夢。

「だから私は戦わないといけないんです。正直勝算がそこまであるわけじゃないし、地球は救えても、私は助からない可能性のほうが高い——それでも、私はアキトの幸せのためならどんな絶望もひっくり返す！ アキトがもう一度幸せを掴めるようにするためにも、もう一度ラーメン屋ができるようにするためにも、絶対に地球を救います！それが、アキトに助けてもらった恩返しで、妻としてしてあげられる、唯一のことだと思うから」

そこまで聞いた時点で、エリナは彼女の意思を曲げることができないと、悟った。悟らざるをえなかった。

「エリナさん。私が駄目だった時は、アキトのフォローをお願いします。私のこと、忘れさせちゃっていいです。なにをしてもいいから、アキトの心から私って存在を抹消して。……もちろん生き残れるように最善は尽くすつもりです。私だって幸せになりたいから。でも、私が生き残れる確率は、たぶん万にひとつ……だから、万が一の時はアキトを、アキトを助けて！ 護ってあげて欲しいの！ 復讐を始めたらアキトを見つけてくれて、アキトのことを愛してくれてるエリナさんにしか頼めないの！ だから、だからアキトを……お願い……」

最後は泣きながら懇願するユリカの手を、エリナは無言で握り締め、彼女の願いを受け入れた。

——結局ジャンプのたびに十分に休むことを確約させたあと、いく

ぶん回復した彼女の拘束を解き、送り出した。

彼女が、波動エンジンのコンデンサーやエネルギー伝導管など構成素材として必須であり、また使い方次第では装甲などの強化にも使えるというコスモナイト鉱石を、土星の衛星タイタンの鉱脈からボソソジャンプを利用して採掘してきたのは、それからまもなくのことだった……。

エリナはユリカの要望どおりイネスにもすべてを伝え、事前に話を聞いていたらしいアカツキもそのまま共犯者となった。

そして四人で相談したうえで、並行世界でヤマト工作班長としてヤマトの整備と改良に携わった経験のある真田志郎をヤマト再建計画の主任に据えることになった。

能力的に不足はないし、「この世界でもそのご都合主義っぷりを発揮してください」という願いも籠っている。

その後、ふたつの天才頭脳と復元したヤマトの万能工作機械の性能を駆使し、脅威的な速度でヤマトの再建と、対ガミラス決戦兵器としての性質を持たせた新型機動兵器、さらに既存兵器にも転用できる強化パーツを兼ねた宇宙戦闘機、Gファルコンのプランが形になった。

そのプランの中にはユリカが意見を出したり、それとなく提供した画期的とも言える凶面や技術も散見されたが、その出所に付いて詳細を知り得るのは共犯者のみである。

なお、ヤマト再建計画にナデシコが誇る元整備班長ウリバタケ・セイヤにも参加を願うという意見はあったのだが、「再建段階で余計なギミックを付けられるのは勘弁」というユリカの（ある意味ではもつともな）指摘で見事に流れた。

とにかく前科が多いのだ。頼まれてもいない余計なギミックを取り付けてひんしゆくをかつた例は枚挙がない。

が、人手不足の極みにある現状では完全に無視もできないので、新型機動兵器に関しては協力を求めることになり、その過程でXエステバリスをモデルにその完成系を目指した機体としてのプランが正式に認められ、最終的な形が完成した。

その機能の大半は彼のアイデアと要望によるものだが、一部は真田

も協力して互いにしのぎを削ったのだとか。

その結果、別用途で開発されていた新兵器が機動兵器用に手直しされて搭載可能になったのだ。それは間違いなく彼の手腕によるものである。

しかし予想されるその兵器の威力の高さゆえ、必要とされているのをわかっていながらも、苦々しい顔をしていたのが印象に残った。

ユリカはエリナに説き伏せられたこともあり、可能な限りの休息と治療を受けることは受け入れたが、イネスと協力しながらも壊れかけの体を騙してジャンプを繰り返し、作業に必要な鉱物資源の運搬などを繰り返した。

いや、繰り返さざるをえなかった。

再建計画に必要な、地球では手に入らない鉱物資源の採掘場所自体はヤマトのデータベースから判明していたが、土星の衛星への一気に到達するような超長距離ボソソジャンプを軽々実行し、あまつさえボソソジャンプで埋蔵された鉱物資源を、それも不純物を極力除外した状態でジャンプさせる神業を行使できたのは、演算ユニットと繋がったままの彼女しかいなかったのだ。

ヤマト再建計画が恐ろしくハイペースで進んだ理由の一端がこれだ。

本来必要な採掘作業や精錬作業の過程を一部でも省略して資材を提供されれば、作業時間は大幅に短縮できる。

単なる移送だけならイネスも協力できたが、この神業の模倣だけは無理だった。

なにより彼女はジャンパーとしての能力を行使するよりも先に、科学者としてその頭脳をフル回転させて、ヤマトの再建とガミラスに対抗できる新型機動兵器開発に協力するほうが優先された。

だから、ユリカが頑張るしかなかったのだ。

結局、その無理が祟って彼女はまともな治療ができないほど体を壊し、寿命を大きく縮めてしまった。なかば予定調和とはいえ心痛まずにはいられないほどに、彼女は壊れてしまった。

だがそれほどの無茶を繰り返しながらもナノマシンの活動を極限

まで抑え込んで、それでいて演算ユニットへのリンクを最大限に活かしたジャンプを実行できたのは、彼女の精神力の強さあつてのもの。それを支えた感情こそが——愛。

彼女はその感情だけを支えに、死神の誘いを幾度となく跳ね除けて生き残ってきた。

すべては最愛の夫が生きる世界のため。

すべては愛する家族が幸せに生きられる世界のため。

彼女は文字どおり命すら捨て去る覚悟をもって困難に立ち向かう道を選び、そして今日というこの日まで、最後の希望を繋ぎ止めることに成功したのだ。

エリナはふつつつと頭が煮えるのを抑えられないまま、通信室に飛び込んで地球にいるアカツキに連絡を入れた。

ナデシコCが回収した通信カプセルのことやその内容、そしてアキトには一方的に従うように命令して治療するつもりだと、鼻息も荒く伝える。

本当ならあそこでユリカの名前を出すこと自体が約束に反しているのだが、さすがのエリナも我慢の限界に来ていた。

アキトの気持ちもわかるから尊重してきたし、ユリカの気持ちもわかるから尊重してきたが、現在進行形で壮絶な戦いを繰り広げている彼女の姿を思い出すと、アキトの発言の無神経さがことさら癪に障ったのだ。

「ははは！ その調子じゃテンカワ君はまだぐずってるのかい？」

「ええそのとおりですとも！……まったく、このままじゃルリちゃんもかわいそうよ。相当追い詰められてるって聞いてますから」

エリナはアキトにこそ伝えていないが、ルリを含めてアキトに縁のある人の近況情報は可能な限り集めていた。個人的に心配だと言うのもあるが、アキトが再起した時、必要になると思ったからだ。

「困ったもんだねえ彼も。いや、ユリカ君もか。結局似た者同士って

ところかな？ 意地っ張りで周りの心配そっちのけでやりたい放題。お似合いってやつかな？」

アカツキの軽い物言いにエリナは頭にさらに血が上るのを感じた。ただし相手は彼ではなく、

「ええ本当に迷惑ですわ！ 夫婦そろって散々人を振り回してくれて！」

悔しいやら心配やらで頭が沸き立つのを抑えられない。

共犯者となって以降、エリナとユリカは急速に距離を縮め、友人と言つて差し支えない関係にまで至つていたが、その関係に至つたからこそなおさらユリカの無茶が心を抉る。

きつとナデシコに乗る前の、野心のためなら他人を平然と蹴り落とせる自分だつたらこうはならなかつたはずだ。

結局エリナもナデシコに毒された人間。

だが後悔はしていない。だから自分がすべきと信じたことをする。

「会長。私もヤマトに乗艦しても構いませんか？」

これしかない。エリナはそう確信した。

地球に残つたところでできることはない。しかしヤマトに乗れば彼女のバックアップを務めることができる。口では強がっていても、無理を重ねていることは明らかなのだ。

彼女が最後まで折れないようにするためには、どうしても補佐がいる。

追いつめられているルリだけでは不安だし、ヤマト出現以降接点の多い自分が行かなくてはお話にならない。

……ユリカはきつと怒るだろう。彼女は自分が地球に残り、アキトを支えることを望んでいる。

だがこれだけは引けない。

いまはひとりでも多く、彼女を理解して支えられる人間が必要なのだ。

「言うと思った。構わないよ。君とドクターとゴートくんはヤマトに乗艦して、彼女のサポートを務めてあげて」

アカツキは快諾してくれた。口ぶりからするに向こうから頼むつ

もりだったのだろうか。

それからまもなく、ナデシコCに通信カプセルを引き取りに行ったイネス・フレサンジュが戻ってきた。

相も変わらず無茶をしたユリカを叱ってきたとは、本人の弁である。たぶん本当のことだろうと、エリナは思った。

ナデシコCが回収した通信カプセルのメッセージは、すぐに地球連合政府にも届けられた。

その内容を鵜呑みにする政治家や軍人は少なかったが、メッセージの内容どおり、疑っている余裕はなかった。

最新のデータによれば、地球人類が生存限界を迎えるまでの時間は一年ほどしかない。

頑張ればもう少しだけ伸ばせるかもしれないが、どちらにしても迷っている時間はなかった。

そしてこのタイミングでネルガルと宇宙軍が匂わせるだけに留めていた、宇宙戦艦ヤマトの存在が連合政府内で公のものとなった。

民間への発表はまだ先であったが、並行宇宙で幾度となく地球を救ってきた奇跡の艦。

現行の地球の技術ではないのにたしかに地球の技術で造られたことが確認できるヤマト。

そのデータバンクに存在する、歯抜けもあるが輝かしいと言って遜色ない戦歴のデータは、たしかに連合政府の人間を勇気付けた。

そして先の冥王星攻略作戦において、艦隊の被害を最小に抑えたのがミスマル・ユリカの手腕によるものであると明かされると、本人の要望も瞬く間に受理された。

連合政府、統合軍、宇宙軍。その意見はおそらく初めて完全に一致したのである。

「われわれの最後の希望を、宇宙戦艦ヤマトに託す。宇宙戦艦ヤマトを惑星イスカンダルに派遣し、コスモリバースシステム受領の任に付

かせる！」

ナデシココを始めとする最後の防衛艦隊が地球に帰還して一カ月余りが経過したあと、民間に対してとうとうイスカンダルのメツセージと最後の希望、コスモリバーシステムと宇宙戦艦ヤマトの存在が公表された。

真の人類最後の反抗戦が、まもなく決行されようとしていると。

第二話 最後の希望！ 往復三三万六〇〇〇光年の旅へ挑め！ Bパート

ときはナデシココが帰還する直前に遡る。

「ユリカさん、お加減はいかがですか？」

ルリはここ最近では珍しい明るい声でユリカのベッドの横に腰かけ、毎度のペースト食を摂っている彼女に話しかけた。

「上々だよ。さすがはイスカンドル製の菓だね。これならジャンプさえしなれば一年くらい余裕で持ちそうかな？」

ユリカも無邪気な態度で応じる。

話の後半はまったく持つて明るくない話題ではあったが、それでもルリの気持ちが出るのには訳がある。

そう、イスカンドルだ。

イネスが通信カプセルと地球に届けたあと、数日の間を置いてそのメツセージを信じてヤマトを派遣することが決定されたとの連絡が届いたのだ。もちろんルリにもヤマトへの上官命令が早々に下っている。

ルリやヤマト乗艦が命じられたクルーの何人かは、地球に帰還したあと少しばかりの休暇と訓練を経てから発進することになっている。

(それにしても——本当にユリカさんが艦長とは)

なんとなく予想はついていた。そして納得している自分もいる。

ユリカはヤマト再建の責任者でシステムに詳しいし、その判断力の冴えも衰えてはいない。

それにこれほど無謀な航海に挑むともなれば、ユリカの性格のほう
が艦長として向いていると自覚はあった。

型にはまらないユリカの強さは、ルリが一番よく知っている。そういう意味では自分よりも融通が利くし、あの底抜けの明るさとマイペースさは、過酷な航海に挑むクルーにとって、寄るべき柱となるだ

ろう。

だが不安はある。

そんな大任にはたしてユリカは、アキトを欠いた状態で耐えられるのだろうか。

ここ最近のユリカの体調を考えると、カラ元気を駆使してもかつてのような無邪気な明るさでみんなを引っ張って行けるのか不安に駆られる。

だがルリはユリカを信じることに決めた。冷静な判断なら今度こそ自分が勤めればいい。

残念ながら完治には至らなかったものの、イスカンドルは不完全ながらもユリカの病状を食い止めるような医療技術を有していることがはつきりしている。

実際薬は効果てきめんで、発作の類は起こさなくなったし体調も安定している。

食事も内容こそ変わらないまでも、栄養の摂取効率が少し改善されたようで、それまでに比べると体重の減少にも歯止めがかかり、肌や髪の毛の艶も少しは戻った気がする。

——もしかしたら、イスカンドルにあるであろう本格的な医療機器や医学を頼れば、不可能と断定されたユリカの回復すら可能かもしれないと、ルリは淡い期待を抱く。

ユリカの容態が持ち直したこと、そして希望が繋がったことに感極まって思わず抱き着いてしまったくらい、ルリは嬉しかった。

抱き着いたユリカの温もりと柔らかさが、傷ついた心をわずかに癒してくれる。

誤算だったのはルリの行動を嬉しく感じたユリカが激しく頬擦りしたり、頭をぐりぐりと撫で練り回したことだった。

嬉しいけどやめてください禿げてしまいます。

なんとか脱出に成功したあと、ぼさぼさになった髪を直しながら視線で非難したが、ユリカはまったく気付かず「もう少し撫でてあげるう〜」と手を伸ばす始末だった。

「遠慮させて頂きます。発進まで存分に体を休めてください。私も全

力で補佐しますから、素直に頼ってくださいね」

頭皮を心配してユリカの申し出を遠慮したあと、ルリはここ最近では滅多に見せなかつた笑みをユリカに向け、ユリカも負けじと笑顔で了承する。

それで満足したルリは医務室を後にして、たまには自分からとハリを誘って昼食を取ることにする。

散々苦勞を掛けてしまったし、そうしたほうが彼も喜ぶだろうと思っただけだ。

以前に比べると味気なく量も減った食事だが、気持ちが前向きになったルリにはずっと美味しく感じられた。

つつい口数も多くなり、ハリとたわいもない雑談をしたり、イスカandalへ想いを馳せたりと、明らかに浮ついていた。

そんなルリの様子にここ最近の落ち込みようを知っているハリも、つい嬉しくなつて対応した。

ユリカもボソソジャンプの使用は禁じると言っていることから、ハリも少しだけ肩の荷が下りた気分ですりとの食事を楽しめる。

ハリもまた、ルリに希望を与えたイスカandalに、そしてそこに行くための船であるヤマトに期待を寄せ始めていたのであった。

一方。月のネルガル施設では、二週間前にイネスが持ち込んだ薬と医療用ナノマシンを投与されたアキトが、早々に五感の機能を回復させつつあった。

「イネスさん。ユリカは、ユリカはいつたいなにをやっているんですか？」

治療中は薬の副作用などで眠っていることが多かったアキトも、症状が回復に向かうに連れて、ようやくまともに動けるようになってきた。

あとは体の感覚のずれを補うためのリハビリに励みながら治療していくだけというところになって、アキトはどうとうイネスに尋ねて

みることにした。

エリナの件以来、努めて考えないようにしていたが、体が回復し始めるとユリカのことの気がなくなってしかたない。

彼女は、どうなっているのだろうか。実験の後遺症などで苦しんでいないだろうか。

——自ら拒絶して雲隠れしたという自覚はある。あるが——
「残念だけど口止めされてるのよ。あなたは自分の体のことだけ考えてなさい」

イネスはまったく取り合ってくれない。アキトに向き直すことすらせず、ただ黙々とカルテになにかを記載している。

「それじゃあ納得できない。あいつはいったいなにをしてるんだ？ 無事なのか？」

アキトはなおも食らいつくが、イネスは変わらず答えなかった。業を煮やしたアキトは椅子から立ち上がり、部屋を出るべくドアに向かう。

体はふらつくがこの際構ってられない。

「あら、どこに行くつもりかしら？」

「ラピスの所だ。ラピスに情報を探ってもらおう」

ラピス・ラズリ。

復讐者となったアキトを支え続けたもうひとりの妖精。

最後の戦いからしばらくは、いままでどおりアキトの世話を手伝っていた彼女だが、最近ではアキトのそばを離れて別の仕事についている。

時折連絡を寄こす以外に会話もない状態だが、ラピスはいまだにアキトに懐いている——というか向こうでなにかしら影響を受けたのか、感情表現が活発になって明るい性格に変貌しつつあった。

最初はただラピスの成長を喜びつつも、滅びに向かっている現状に多少の憂いを覚えた程度だった。だが、もしかしたらラピスはユリカと会ったのかもしれない。

アキトにとって、他者への影響が強く底なしに明るい人物は、ユリカしか思いつかない。

そして、アキトの伴侶という立場にあるユリカにラピスが多少は関心を示していたことも知っている。ラピスの短期間での変貌と照らし合わせれば、接点を持った可能性が高い。

ならば、ラピスを頼れば情報が掴めるかもしれない。

「彼女なら別件でしばらくここを離れているわ」

「どうせアクエリアスだろ。ラピスが絡みそうな案件は、あの船しかない」

いまネルガルが最も力を入れているのはヤマトの再建作業。完全な波動エンジンのデータを入手したいま、急ピッチで仕上げにかかっている最中だ。

あと一月もあればドック内でできる調整をすべて完了し、発進できるだろうと言われている。

もつとも、アキトにはさして興味のある話ではない。

(どうせ無意味——いや、それならなぜ俺はユリカを求める。これだって無意味だろうに)

アキトは自分の内から湧き上がろうとしているなにかを否定できないでいた。

「会っても無駄だけどね。彼女も口止めされてるわよ」

イネスは念を押すようにアキトに告げると、もうそれ以上なにも語らなかつた。

ラピスがヤマトに関わるようになった理由は単純なものだった。

物資が困窮している現状にあつて、すでに役目を終えたユーチャリスを解体しヤマトの資材として使う動きが出たからだ。

ユーチャリスに愛着のあるラピスは不満であったが、さりとしてその動きを覆すだけの力もなく、ユーチャリスは解体されてヤマトの資材となった。

——だからせめて、ユーチャリスを犠牲にして成り立つヤマトと接点を持つことで、自分を慰めたかっただけ。それだけの理由だった。

だがそれがラピスに思わぬ出会いをもたらした。ヤマト再建に関

わるようになって数日、ラピスは運命の出会いというものを経験したのだ。

「——ありがとうラピスちゃん、もう大丈夫だから戻っていいよ……大人しく寝てるから」

「駄目。あなたになにかあるとアキトが悲しむ。だから目を離さない。エリナにも頼まれてる」

弱々しいユリカの言葉を無視して、ラピスは引き受けた看病を完遂すべく気を配った。

事の発端は至ってシンプルだった。

例によってボソソングジャンプ直後に具合を悪くしたユリカの看病に、たまたま手が空いていたラピスが駆り出された、それだけのことである。

彼女のことはラピスも多少は知っていた。ラピスがパートナーとして共に火星の後継者と戦った、テンカワ・アキトの大切な人。そしてアキトが本当は一番会いたがっている人だと言う程度であったが、そういう縁もあつてか、ラピスもできれば、程度の考えであったが一度は会つてみたかった人物だ。そういう意味では渡りに船だったと言えよう。

——そしてそれは、彼女にとつてもそうだったらしい。

ラピスは両腕に点滴針を挿され、額や胸元に電極を取り付けたユリカの汗をぬるま湯で濡らした手拭いで優しく拭いてやつたり、毛布の位置を直してやつたり、実に甲斐甲斐しく面倒を見た。

「……ラピスちゃんはさあ」

点滴の残量を確認して、そろそろ医者を呼ぶべきかとコミュニケーションに手を伸ばしたところで、ユリカに話しかけられた。

「ラピスちゃんは、アキトが好き？」

「好き。大切な人。だからアキトの大切な人、あなたの面倒を見る。アキトを悲しませたくない」

ラピスのはつきりと断言する。

アキトのパートナーとして戦ってきたラピスにとっては死活問題だ。

アキトに助けられなければいまの自分はなかったと思っているラピスにとつて、恩人に対する恩返しも含まれているので、決して妥協のできないことであると言えた。

「……そっか。私もアキトが大好き、心から愛してる。だから、無茶だやめろと言われても、やめられないんだ。もっともっとがんばって、ヤマトを蘇らせないと……ヤマトが動かないことには、地球に未来がないからね」

「あなたひとりが頑張っても無駄。私は地球に未来はないと思う。……ヤマトは地球脱出のための船ではないの？」

ラピスはヤマトが地球脱出を目的として再建中の船だと解釈していた。

たしかにこれだけのスペックがあればガミラスにも早々遅れは取らない。

逃げに徹すれば、たとえ一握りの人類だけであつてもしばらくは生き残れるだろう。

ヤマトの艦内には万能工作機械を有する工場区があるため、ここが無事で資材を確保できれば補修パーツの生産はおろか、弾薬や艦載機の製造すら可能としている。

さらに小規模ではあるが、遺伝子改良によって収穫時期を大きく早めた植物を有する農園もあり、そこでは野菜や果物はもちろん、観賞用の花まで栽培できる贅沢な設備すらある。

これで戦闘用設備を最低限を残して撤去して、居住区に当てれば三〇〇〇人は養えるだろうし、そうやってどこかで再び文明を築いたほうが建設的だと、ラピスは考える。

地球に遊星爆弾が降り注ぐようになってから激変した地球の環境回復について、ラピスなりに調べてみた。残念ながらスノーボールアースと呼ばれる状態に持ち込まれた時点でもう終わっている断言していいだろうと結論が出るまで、さしたる時間はかからなかった。

この状態からあの反射物質を除去したとしても、氷が太陽光のエネ

ルギーを反射してしまうので気温は上がらない。気温が上がらなければ氷は溶けない。

二酸化炭素の濃度を増やせば気温は上がるだろうが、それでも解凍までに数百年かかるらしい。

こうなってしまうと時間でも巻き戻さない限りこの状況は救われないだろう。つまり、短期間での地球の回復は非現実的なのだ。

案外ガミラスの科学力なら短時間でどうにかできるのかもしれないが、地球の科学力では無理だ。

戦艦でしかないヤマトにこの状況は覆せない。尻尾を巻いて逃げたほうが建設的だと思うのだが……。

「なんとかできる可能性があるんだなあ、これが。そうでなかったら、とつくにアキトのところを押しかけて、せめて最後まで一緒にいようよ、って抱き着いてるよ」

苦笑いするユリカの様子をラピスは不思議に思う。

「なら会いに行けばいい。アキトは、本心ではあなたに会いたがっている。どうしてもと言うのなら、逃げられないようにしてあげようか？」

ラピスは地球が救われるとは思っていないし、ヤマトでの逃亡も限界が早いと考えていた。

だからアキトの気持ちを踏み躪ることになるかもしれないが、最愛の女性と再会させるのもひとつの手だと考えていた。

「だくめ。私が頑張れば、うんと頑張れば、地球は絶対に救われるの！」

私たちには——ヤマトがあるんだから」

「たかが戦艦一隻で惑星の環境をどうにかできるはずがない。さすがに夢物語だと思う」

「ラピスちゃん。世の中理屈ばかりじゃないんだよ。それにヤマトは、似たような状況に陥った並行宇宙の地球で生まれて、何度も何度も地球を護り抜いてきた真正銘の救世主なんだ——そう、人々の願いと、夢と、大いなる愛を乗せて戦い抜いた、最後の希望を運ぶ艦——いま私たちのそばに、そのヤマトがあるの」

ユリカはあの船に絶対の信頼を寄せているのがわかる。

だがラピスはイマイチ納得しかねた。

そもそもいろいろな経験の足りないラピスには、願いだの夢だの愛だと言った抽象的な言葉は実像を結べない。

とは言え、アキトの戦いを間近でサポートしてきたことから、執念、ならまだ辛うじて理解できなくもないが。

「それに地球を救う最後の手立ては、あと数か月もすれば皆に知れるよ。だから私は、それまでにヤマトを再建する。そしてヤマトと一緒に旅立って、救いの手段を取りにいかないといけないんだ」

「よくわからないけど、本当にそうだとしたらたしかにあの船には価値があるかもしれない。わかった、ヤマトの再建作業、もっとがんばる」

顔は真つ青なのにやたらと自信満々に言いきられて、ラピスは信じてみたくなかった。

理解しがたい部分はあるが、どうやらユリカはユリカなりの確信があつてこんな無茶を重ねていて、その集大成とも言えるのがヤマトらしい。

そう解釈したラピスはユリカがアクエリアスを訪れるたびに、ヤマトとはどのような艦なのかを、以前のアキトはどのような人物だったのかを聞き続けた。

そして会うたびにユリカとの距離を確実に縮めていき、その影響を受けることで次第に感情豊かになっていった。

エリナは「ああ……ラピスまで毒された」とか嘆いていたようだが、それがなんのことだか理解するのはまだ先の話。

心の成長と合わせるようにユリカが期待を寄せる、宇宙戦艦ヤマトに愛着を感じるようになり、夢、希望、そして愛の意味さえも理解し始めていた。

ユリカから口止めされているため、その現況をアキトに漏らすようなことは一切していないが、本音を言えば伝えたい。まだ希望があるのだと。

だがラピスの視点から見ても、いまのアキトにこのユリカを受け止めるだけの余裕はない。

彼の意識が変わらない限りは、絶対に会わせてはいけない。それだけは確信を持てたのだ。

ユリカに関する情報をラピスから聞き出そうとアクエリアス秘密ドックを訪れたアキトであったが、肝心のラピスには「機関部の再建作業が忙しい」と面会を断られ、結局なんの情報も得られなかった。しかたなく退散しようとしたとき、ふとドックに鎮座するヤマトを見上げてしまった。特に意味はない。行く先にその威容があつたら、そんな何気ない理由で。

外観の復元はほとんど終えた、ひどくアンティークなデザインの宇宙戦艦はなにも言わずアキトを見下ろしている。

「……」

この艦はもしかしたらユリカと関係しているのかもしれないが、追及する気力も湧いてこない。

——まだアキトの時間は、止まったままだった。

運命の日は来た。

その会場には文字どおり選りすぐりの人材が集められていた。総勢三〇〇名。全員が宇宙戦艦ヤマトへの配属を命じられた者である。かつてナデシコCに乗艦していたクルー、そして旧ナデシコクルーの一部もまた、その場所に集まっていた。

ホシノ・ルリ、マキビ・ハリ、高杉サブロウタ、古代進、島大介、森雪、アオイ・ジュン、ウリバタケ・セイヤ、スバル・リョーコ、マキ・イズミ、アマノ・ヒカルといったナデシコに縁あるもの。

ラピス・ラズリ、月臣元一朗、ゴート・ホーリー、エリナ・キンジョウ・ウオン、イネス・フレサンジュ、真田志郎といったネルガルからの出向組。

さらには宇宙軍や統合軍を問わず、腕に覚えのある人員が集められ、艦長からの訓示を待っている。全員が新しく作られたヤマトの隊

員服に身を包んで。

ヤマトの隊員服は各班毎に異なる色をしているという点は踏襲していた。

戦闘班は白地に赤、航海班は白地に緑、技術班は白地に青、航空隊は黒地に黄色、生活班と通信科は黄色地に黒、医療科は戦闘班と同じだが胸元と左腕に赤十字のマーク入り、機関部門は白地にオレンジ、オペレーターは白地に黒と区別されている。

体正面と背中には中央から左側に『レ』のようなマークが大きく書かれ、正面だけが右側にも小さく跳ねることで、変則的ではあるが錨マークの様なデザインになっているのが特徴の、新生ヤマトの隊員服であった。

もう人類にあとはない。これが真正銘最後の作戦だと、その士気は高くもあり、悲壮であった。

そんな心境の面々の前、壇上にかかるは宇宙戦艦ヤマト艦長の任に付いたミスマル・ユリカ。

ヤマト用に制服は用意されていたのだが、その身を敢えて宇宙服としての機能を与えて新造した旧ナデシコの艦長服で包み、ナデシコで使っていた士官用のマントや艦長帽の代わりに、新しく作った黒を基調に白で装飾したロングコートを羽織り、先代ヤマト艦長、沖田十三が被っていたのと同じデザインの帽子を被った。

それは彼女の決意の表れだった。

自分が自分らしくいられた思い出のナデシコと、これから新しい場所になるヤマト。そのふたつがあつてこそいまの自分だという彼女の意思。

沖田と同じデザインの艦長帽を被ったのも、自分なりに沖田の跡を継ぐという意味表示であった。

右手に歩行補助の杖を持ち、可能な限り力強く壇上に上がったユリカは集まったかつての、そしてこれからの仲間たちを一瞥して力強く宣言する。

「みなさん、私が宇宙戦艦ヤマトの艦長を務めることになりました、ミスマル・ユリカです。みなさんの命、今日から私が預かります……ヤ

マトと共に、必ず地球を——愛する家族の未来を救いましょう！」

その宣言を受けて、眼前の人々——今日から部下となる新生ヤマトクルーがより背筋を伸ばした。

「最初に断っておきたいことがあります。あの宇宙戦艦ヤマトが並行宇宙から漂着した戦艦であることは、ここにいる皆さんにはすでに知らされていると思います。しかし、その正確な来歴を知るものは、おそらく私だけです。だからこそ、どうしても伝えておきたいことがあります——あの宇宙戦艦ヤマトは、いまから約二六〇年前の戦争において、旧日本帝国海軍が運用した、かつて悲劇の戦艦の代名詞として語られたこともある、大和型戦艦一番艦大和が、宇宙戦艦として蘇った姿なのです！」

全員が色めき立った。突拍子のない内容だとは自分でも思う。だが、伝えなければならない。——ヤマトのすべてを。

「——かつて大和は守ることができなかった。守るべきお国の名前を頂き、当時最大最強と称される力を持ちながらも、大和はなにもできないまま沈められ、守るべき国は敗北し蹂躪された——だからこそ宇宙戦艦として蘇ったヤマトは、新たな命、新たな体、新たな使命、そして使命を同じとする新たな乗組員たちの手によって雄々しく立ち上がり、過去の悲劇を乗り越えたのです！」

ユリカは語る。ヤマトの記憶を垣間見たことで感じた、彼女の想いを。

伝えねばならない、これから共に戦う仲間たちに。ヤマトの気持ち

を。
受け継がなければならない、沖田十三が部下たちに遺した、あの教えを。

「しかしヤマトの戦いは終わったわけではありません。ヤマトは守るべき母なる星、この地球が、人類が危機に陥る度に立ち上がって護り抜いてきた！ それはなぜか!? 簡単なことです！ ヤマトは敗北の意味を知っているから！ 負ければ守りたいモノがどうなるのかをその身をもって知っている！ だからヤマトは負けなかった！ いえ、負けられなかった！ 例え想像を絶する苦難があつたとして

も、ヤマトの後ろには、護るべきモノがあつたからです！——ヤマトに乗艦する以上、私はみなさんにも同じ気概を要求します。我々の敗北は、守るべきモノの敗北と同意義であるということだと。だからこそ全員、信念をもって立ち向かいます！ この航海は、われわれ人類の、いえ、われわれが愛するすべての、未来を懸けた航海になります!!」

ユリカの一喝に全員が震えあがるのを見た。

それまで既存の技術では実現不可能な強力な宇宙戦艦としか認識していなかったであろう一同は、ヤマトの本当の来歴を知って圧倒されたのだろう。

そしてルリをはじめとする親しい人々は気付いたはずだ。

どうして自分がヤマトにここまで入れ込んだのか、その理由の一端を。

重ねてしまったのだ。なにもできないまま大切なものを奪われ、蹂躪されるのを見届けることすらできずに完膚なきまでに叩きのめされてしまった自分と、かつての大和を。

もう、大和は他人とは思えない。その共感と完敗してなお諦められない未来への羨望が、ユリカとヤマトを繋いだ。

「われわれはこれから、往復三三万六〇〇〇光年の旅に出発します。目的地は大マゼラン雲の中にある惑星、イスカンダル！ しかし宇宙戦艦ヤマトを完成し、宇宙地図を提供されたとはいえ、すべてが未知数の過酷な旅となることは明白です。また、ガミラスはわれわれの行動を的確に捉え攻撃をしていますが、われわれはガミラスの正体を知りません。わかっているのは冥王星に前線基地があり、そこから遊星爆弾を送り込まれ、地球がこのような惨事になったということだけです。周知のことではありますが、われわれとガミラスの間には歴然たる力の差があり、ヤマトの航海を彼らが妨害してくる可能性もまた、否定できません」

改めてガミラスの脅威を語る。

一般にガミラスの目的は不明のまま。だからこそ、今後の航海の障害になる可能性を示唆するに留めた。

いまは、それ以上語れない。

「しかし！ それでもわれわれは、イスカandalに辿り着き、コスモリバスシステムを受領し、地球を、愛する家族を救わなければなりません！ 許された時間はわずか一年。この限られた時間の中で航海を成功させる必要があります！ だからこそ、みなさんの力を私に貸してください！ ひとりでも多くの乗組員が生きて再び地球の大地を踏めるように私も最善を尽くします！ ヤマトも同じ使命を持つたわれわれが最後まで諦めることなく尽力する限り、力を貸してくれることでしょう！——しかし、もしも私が、ヤマトが信じられないというのであれば無理強いはしません。みなさんを選択の機会を与えます……三〇分後にアクエリアスへの移動が開始されますが、抜けた者はその前にここを離れて下さって結構です。誰も咎めたりはしませんし、咎めることを許しません。自らの意思で選択してください！ 私は一足先に、ヤマトで待っています!!」

そう締め括ったユリカに全員が敬礼で答える。

ユリカはそれを見届けると壇上から降り、振り返ることなく会場をあとにした。

そして会場から連絡艇に向かう最中、ユリカは逸る心臓を抑えながら独り言ちる。

「沖田艦長つぽくやってみたけど、あれでよかったのかな？——うん。もうちよつと碎けたほうが私らしかつたかなあ？ でも緊張感台無しになるし——」

と小声でブツブツと呟きながら歩いていたら、曲がり角に気付かず壁に『ゴツ』と痛々しい音と共に激突する。

「い、痛いのお……」と泣き言を言いながらも落ちた帽子をなんとか拾い上げ、改めて連絡艇に足を運ぶ。

ちよつぴり赤くなつたお鼻がジンジンした。

そんなポカをしながらも、ユリカは宣言どおりヤマトへ移動を開始していた。

ボソソジャンプはもう使わない、その約束を守るべく連絡艇を使ってアクエリアスへと移動する。

さすがにこれ以上ボソソジャンプを使えば確実に助からない。自分の体だけに、限界を迎えてしまったことを理解していた。

イスカンドルに着くまでは死ぬわけにはいかないのです、時間はかかっても安全な方法を取るのだ。

突如として地球と月の間に出現した大氷塊は、当初ガミラス以上に人々の関心を集め、恐怖を煽った。

しかしガミラスと言う驚異の前にそれも流れ去り、ユリカがそう呼んだことから広まって、いつしか人々の中で氷塊の名前はアクエリアスだと定着していた。

無論、その正体が並行宇宙の地球を水没の危機に陥れた、回遊惑星の名前であるということはほとんど知られていない。

そのアクエリアス大氷塊の隅に、可能な限りの偽装を施したポートが建設された。

これはボソソジャンプに依存せず物資や人員を運ぶための措置として造られたものだったが、実際にはほとんど使用されておらず、利便性が高いボソソジャンプを利用した往来が主であった。

ユリカとイネスが共同で開発したボース粒子の検出を妨げるシールド処理が上手く行ったことも、ボソソジャンプがメインだった理由のひとつだ。

だが今回はユリカのみならず、ヤマトへの人員の移動はすべてこのポートを使った連絡艇だ。

そうすることで、クルーとなる面々はあるのガミラスによって蹂躪された地球の姿を目に焼き付けられる。

ガミラスへの怒りと、地球を救いたいという願いを渴望させる事ができる。

われわれこそが最後の希望だとクルーに教えるため、ユリカは発見される危険を考えうえで、この移動手段を選んだのだ。

連絡艇を降り、ドック内部への通路を歩くユリカ。杖をつき、決し

て速いとは言えない速度ではあるが、衰えた体からは想像できないほど力強い歩みだ。

そう、彼女も待ち望んでいた瞬間だ。

耐えがたきを耐え、絶望に心を折るまいと努力してきた。

それがいまようやく実を結ぶ。もういいようにはやらせない。

この力があれば、ヤマトが機能さえすれば、アキトの未来を護れる。ルリの未来を護れる。新たにラピスも迎え入れることができる。

自分がどうなるかはまだわからないが、上手く行きさえすれば全部丸く収まるハッピーエンドを描く事ができるのだ。

そう、いままでヤマトが成してきたことだ。

ヤマトは地球を幾度も救ってきた。

赤茶けた死の星になった地球を、敵に占領された地球を、灼熱地獄と化した地球を、アクエリアスの水害に沈みかけた地球を。

だから、自分たちがしつかりすれば奇跡をまた起こせると、ユリカは信じていた。

ユリカはその一念だけで常人なら発狂するような苦痛に耐えた。

最愛の夫と会えない寂しさに耐えた。

大切な家族と友人たちを苦しめる罪悪感に耐えた。

いまにも散りそうなこの命を懸命に繋ぎ留めてきた。

すべてはこの瞬間を迎えるために！

ドアを潜った先はドックの内部。その視線の先に、天井のライトに照らし出された雄々しき巨像の姿がある。

その姿を見てユリカは心が沸き立つのを感じた。

そう、ヤマトだ。

かつてアクエリアスの大水害から地球を救うために自沈した守護神の姿。

ユリカが、人類が待ち望んだ宇宙戦艦ヤマトが、かつての姿、戦艦大和の面影を強く残した在りし日の姿を保ったまま、ついに蘇ったのだ！

幾度も地球人類を破滅から救い続け、その身を呈すことすら厭わなかった伝説の艦。その巨体がいま、ユリカの眼前にある。

「——ヤマト……」

ユリカは初めてその内部に足を踏み入れた時のことを思い出す。水に沈んだ第一艦橋の中で、息を引き取っていた沖田十三の姿を見た時、思わず涙がこぼれた。

救出されて地球に帰るボソンジジャンプの最中、その脳裏に刻み込まれたかつてのヤマトの活躍の日々の『記憶』。

すべてを鮮明に受け止めることはできず、不明瞭な部分も多い。

しかしそれでも、ヤマトが成し遂げてきた奇跡の数々を、その原動力を理解するには十分と言える『記憶』を彼女は見たのだ。

ユリカはヤマトの艦体を回収する際、沖田の亡骸を三浦半島にある高台にひそかに埋葬した。並行宇宙に彼の死を本当の意味で悼む者などいない。

本当は元の世界に戻してやりたかったが、それは叶わない。

だからせめて、息子のよう大切に思っていた部下、古代進の生家があった土地で埋葬してあげたくて、そうした。

そう、ユリカは進のことを知っていた。

ユリカが垣間見たヤマトの記憶。

決して完全なものではなく、断片的で不鮮明な部分も多かったその記憶の中にあつて、古代進を中心とした人間関係は、ことさら強く色を放っていた。

島大介、森雪、真田志郎と、ヤマトの中心と言えるメンバーの多くがこの世界にも違う形で生を受け、ヤマトに集おうとしている。

なかばユリカが故意的にそうしたのもあるが、受け入れられたこと自体が運命だったのだろう。

ヤマトにとって、古代進とは自身の代弁者だったのだ。

そしてその進に強く影響した沖田十三も、進にとって頼れる仲間たちもまた、そうだった。

とはいえ、ユリカも彼らの人なりを把握しているわけではない。だがそれでも、進を中心とした人間関係はある程度理解している。

そう、ユリカはヤマト出現直前のボソンジジャンプの最中、ヤマトの意思と触れたのだ。

アクエリアスの水柱を断ち切るために自爆したヤマトは、その時生じた時空の裂け目に落ち込み、数多の並行世界と接する空間に一時身を置いた。

その中で、偶然接触したこの世界で自身が必要とされていると理解したヤマトは、時空を超えるシステム、ボソンジジャンプの演算ユニットとリンクを弱々しくも保っていたユリカを接点としてこの世界に現れた。

その際ヤマトの身に刻み込まれた記憶に触れたことで、ユリカはヤマトがどのような艦なのかを、その使命を知ったのだ。

そのためユリカは、どうしてヤマトがこの世界に来たのかも察することができた。

恐らくヤマトが到来せず、ガミラスによって破滅した未来の自分の嘆きが、悲しみが、偶然ヤマトに届いて呼び寄せることになったのだと。

——そう、ヤマトの到来は一種のタイムパラドックスを引き起こしていたのだ。

ヤマトがこの世界に訪れたことで、破滅以外の未来がなかったこの地球にわずかな希望が生まれ、新たな未来を作り出すチャンスを得ることができたのだ。

だからこそ、ユリカはヤマトを蘇らせた。

これから襲い掛かる様々な苦難に、人類が屈せぬように、立ち向かえるようにと。

自分に応えてくれたヤマトへの恩返しも含めて。——これが、ヤマトにこだわったもうひとつの理由だ。

ユリカ涙を湛える目を袖で拭って再び足を進める。

本音を言えば間に合うのかどうかいつも不安だった。

なんとしてでも間に合わせるために無茶を重ねざるを得なくて、ただでさえ心配をかけている仲間たちにさらに心配をかけているのが自分でも辛かった。

だが報われた。

ヤマトへ続く通路を弾む気分で歩き、左舷後部の搭乗口にまで移動

する。歩きながら、生まれ変わったヤマトの姿を目に焼き付ける。

あんなにもボロボロだった艦体は完全に復元されていて、よりたくましく、力強い姿となって蘇っている。

自沈したヤマトは第一副砲の直下で断裂していた。しかしその艦体は接合と同時に延伸され、かつてよりも巨大になっている。

艦幅も増し、上から見るとかつての大和のように前後が細く、中央が膨らんだ安定感のある姿に生まれ変わった。

フレーム構造と装甲支持構造が改められ、より優れた耐弾性と耐久力を発揮するようにと、残された運用データを基に可能な限り手を加えた。

構造材はヤマトのデータから回収した空間磁力メツキの技術を応用した、一種のナノテクノロジーを活用した素材が混入され、装甲表面にも同様の作用を持つ素材が塗料に交じって塗布されている。

この素材にいわゆるエネルギー系の攻撃などが命中すると、そのエネルギーを利用して反射フィールドを自己生成する作用がある。オリジナルのように完全に反射するのは無理だが、命中したエネルギー同士をぶつけ合って相殺する、または乱反射させることで驚異的な耐久力を発揮できる。

理論上はグラビティブラストが直撃しても、いきなり内部まで貫通されはしない。

質量弾に対しては効果がないが、そこは自前の分厚く強固な装甲で受け止めるヤマト元来の防御で備えられる。

装甲板は中空複合装甲を採用している。複合装甲部分は実弾兵器の被弾によるダメージを防ぐことが主で、中空部分はそのにディスプレイションフィールドを展開する、かつてウリバタケが独自に開発し、独断でナデシコに装備したこともあるディスプレイションブロックを採用するためだ。

さらにヤマト本体に攻撃が届かないようにするための防御フィールドシステムとして、ディスプレイションフィールド改を装備した。

これは艦の表面に張り付くように展開可能になった新型のディスプレイションフィールドで、多重展開はもちろん、従来どおり球状に展

開することはもちろん、一方向に集中展開すらも可能としている、最新式だ。これとデイストーションングロックの併用で、鉄壁の守りを実現する。

基本的な武装と配置は変わらないものの、主砲と副砲は砲身が延長されエネルギー収束と有効射程が強化されたグラビティシヨックカノン——重力衝撃波砲に換装された。

従来のヤマトのシヨックカノンの原理と、グラビティブラストを組み合わせた新型砲で、これならガミラスの防御を容易く撃ち抜くことができるはずだ。

艦橋の周辺に集中配備されたパルスレーザー対空砲群も、対デイストーションフィールドを考慮したグラビティブラスト——通称パルスブラストに更新され破壊力が大幅に向上している。

従来の地球艦艇ならこの武装の半分も使いこなせずに出力不足に陥っているだろうが、それを実現したのが波動エンジン、そして波動エネルギー理論だ。

波動エンジン内部で生成されるタキオン粒子は、人類が定義していた質量が虚数の素粒子ではなく、正の実数の質量を有しながら超光速に達する粒子、いわゆるスーパーブラティオンと呼ばれる素粒子である。

それ自体が時空間を歪める作用を有していることから、空間歪曲装置の類に誘導してやるだけで、高効率でデイストーションフィールドやグラビティブラストを生み出すことができる。ガミラスの強さの秘密のひとつだ。

従来からのミサイル装備はすべてで継続している。

計三六門になるミサイル発射管は、主砲や副砲の死角からの敵を攻撃するために欠かせない。

弾頭そのものはかつてのヤマトが使用していたものを再生産して採用するにとどまったが、新たに従来では爆雷投射機であったマスト根元の装備は、外観そのままに近・中距離の迎撃用途に特化したピンポイントミサイルに更新された。

ミサイルは新型で、発射機はマルチパーパスタイプで、ほかの弾頭

もサイズさえ合わせれば使える。

心臓部である波動エンジンは、復元された波動エンジンの前方にリボルバー状に配置した小相転移エンジンを六つ備えた、通称六連相転移エンジンを増設。

波動エンジンのテクノロジーを加えて新造された相転移エンジンの外観は波動エンジンに近くなり、フライホイールの数が一枚である事を除けば、ぱった見ただけでは判別がつかないほどだ。

それを波動整流基とも呼ばれるスーパーチャージャーを挟んで接続した、『六連波動相転移エンジン』が、新生ヤマトの動力源である。

同じ真空を燃料とするエンジン同士抜群の相性を誇り、相転移エンジンを事実上の増幅装置として機能することで、波動エンジンは従来の六倍という劇的な出力強化を成し遂げた。

エンジンを更新したことで波動砲も六連発可能なトランジツション波動砲へと強化。従来威力の波動砲を最大六連発できるようになっている。

この大幅な改造で艦内構造は大きく改訂され、艦の中央は波動砲とエンジンで円筒状に占められている。

残念ながらワープエンジンの完全修復だけは叶わなかったが、それでも十分一年以内に地球とイスカンドルを往来できる性能は保有している。

居住区などは喫水より上の部分、艦の左右に分断されて配置された。

艦載機の格納庫も大幅に拡張され、第三艦橋支柱中央のエレベーターシャフトの手前までから、補助エンジンのすぐ後ろまでの長大なものとなり、内部構造も大きく改訂されている。

そのエレベーターシャフト前から艦底部のドーム部分の先端までは、大きく改定された艦内大工場となっている。

さらにその前方から艦首魚雷発射管の後ろ付近までのスペースを使って、特殊重攻撃艇信濃が搭載された。

この信濃には小型の宇宙攻撃艇とでもいうべき代物で、ヤマトのミサイルよりも強力な、試作の波動エネルギー弾道弾が二四発積載され

ている。

ヤマトのデータには波動エネルギーを封入した砲弾、波動カートリッジ弾のデータが残されていたのでそれをアレンジしたものである。

この弾頭の火力と、ヤマトとは別に動ける小型艇という立場を活用して、ヤマトの戦術の幅を広げる目的で貴重なスペースを割いてまで搭載された。

さらに艦底部の第三艦橋は大幅に強化・改定され、旧中央コンピュートールームに代わる電算室を内包した。

装甲や基礎構造の大幅な強化を経て、以前よりも一回りほど大きくなった第三艦橋の外壁は防電磁処理のため、喫水上と同じ青の強いグレーで塗られ、外見的にも以前との違いを如実に示している。

本来想定していなかったホシノ・ルリらIFS強化体質の人間が乗船することから、電算室の部分には一手間を加えてナデシコのオモイカネを移植された。

急な変更だったためマッチングがまだ完全ではないが、それでも十分な性能を発揮するはずだ。

そもそも、ユリカはルリやハリやラピスがヤマトに乗ることを認めていなかったのだが、ルリには散々弱みを握られてしまったし、ルリが乗ればハリも乗る、ラピスもユリカが心配だと言って聞かないため、渋々受け入れざるをえなかった。

オモイカネの移植に伴い、第三艦橋の先端部分にはナデシコの魂を継ぐという意味合いを込め、艦名とは縁もゆかりもない赤いナデシコの花びらのマークが急遽書き足された。

ほかにも艦首波動砲上部に艦体両舷、補助ノズルの間の構造物に白い錨マークの装飾が施されている。

かつてのヤマトに描かれたことがあるデザインではあるが、ユリカはこれを『平和という時代が戦争という嵐で流されて行かないようにする』というシンボル』として、ヤマトの体に再び刻んだ。

平和の象徴である白と、船を固定するための錨を掛けた、ユリカの切実な願いであった。

ユリカはヤマトの艦内に入ると、まずは第一艦橋に上る。

エレベーターから降りたユリカの目に飛び込んできたのは、電源こそ落ちていたが、かつての面影を色濃く残した、ヤマトの第一艦橋の姿だ。

レーダー席の後方に新たに副長席が新設されたことや、旧レーダー席が電算室との連動を優先した簡易的なパネルになっている以外は、以前のまま。

艦橋中央部分にある次元羅針盤も健在で、ユリカがイメージの中で見たヤマトの艦橋の姿が、在りし日の面影を残したまま蘇ったことに感激が止まらない。

自分でも驚くほど、このヤマトに感情移入している。

その気持ちの強さは、かつての居場所であるナデシコにいた時とあまりにも差がない。

(――ここが、新しい私の居場所なんだ)

ユリカは一通り艦橋内部を見渡すと、艦長席に振り向く。艦長席のボックスの全面にも、金色の錨マークの装飾が追加されている。

その後方、艦長席と上にある艦長席を結ぶエレベーターレール。そこにかけて飾られていた沖田艦長のレリーフは、いまは取り外されている。ユリカが外した。

そもそも、自分以外の人間は沖田艦長が最後までヤマトに残って運命を共にしたことを知らない。

だが、いまはそれでいい。

必要なのはヤマトの伝説であって沖田艦長そのものではない。

――沖田艦長の教えを、ユリカはおぼろげながらも理解して、受け継いだつもりだ。「最後の最後まで諦めない」という教えを。

自分は沖田艦長のようにはおそらくなれないだろう。

だから、私らしく自分らしく、ヤマトとクルーを導いていく。

(どうかユリカを導いてください、沖田艦長。あなたが指揮したこのヤマトは、私が継ぎます。この宇宙でも、必ずその使命を果たして見せます。どうか、見守っていてください)

艦長席に対して黙祷を捧げると、ユリカは恐る恐る、艦長席に腰を

下ろす。

しつかりとした造りの、座り心地のいい椅子だ。

目の前に広がる艦橋の全貌とコンソールを見て、自然と気持ちが引き締まる。

……これからは私がヤマトの、そしてクルーの母になるのだ。

「さあヤマト、旅立ちの時が来たよ。起こしにいこう——奇跡を」

静かに紡がれたユリカの言葉に応えるように、電源のまだ入っていないはずの計器盤が一瞬だけ機能した。

それを見て、ユリカは薄く微笑んだ。

さあ、私たちの物語の開幕だ。

いま、宇宙戦艦ヤマトは目覚めの時を迎えようとしていた。

行くのだヤマト、全人類の夢と希望を乗せて。

ガミラスによる寒冷化現象によって地球の生命が滅びるまで、

あと、三六五日。

あと、三六五日。

第二話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第三話 号砲一発！ ヤマトの目覚め!!

絶望の淵にて、希望が目覚める。

第二章 ヤマト発進

第三話 号砲一発！ ヤマトの目覚め!! Aパート

ユリカの宣言を受けた会場は騒めいていた。

ヤマトの来歴の衝撃もだが、彼女が見せつけたヤマトにかける熱い情熱と信頼に影響されたのも大きい。

自分たちこそが愛するモノたちにとって、最後の砦であるという事実を悲観的ではなく、むしろ誇らしげに語ってみせたその姿は、不思議と彼らの心を沸き立て、勇気を与えていた。

無論ヤマトのクルーに選ばれた者たちは直接的、間接的に彼女が余命幾許もない身の上であることを知っている。

一般にはともかく軍内部では調べればすぐにわかる情報だ。だからこそ、あの力強い言葉に勇気を貰えたと言っても過言ではない。

自分自身の未来すら危うい、むしろ地球同様すぐにでも終わってしまいそうな状態にも拘らず、微塵も諦めを感じさせない姿に、クルーたちは敬意すら抱いた。

——我々はまだまだやれる。絶望するにはまだ早い。信じてぶつかっていけば、なんとかなるかもしれない、と。

その後、一人の脱落者も出すことなく全員がアクエリアスへと移動を開始した。

連絡艇の窓から見た地球の惨状は、クルーたちの心に鋭い刃となって突き刺さる。

これが、いまの地球の姿。これを救う唯一の存在は、自分たち。そのためのヤマト。

ユリカの想定通り。クルーは皆、己に課せられた使命を改めて自覚して、知らず知らずに拳を握り締めていたという。

……全員乗艦、欠員なし。

その報告を艦長席で受けたユリカは全員の覚悟に感謝し、なおのこ

としつかりしなければと、改めて自分に決意表明をするのであった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第三話 号砲一発！ ヤマトの目覚め!!

ヤマトへの乗艦が完了してから一時間。

乗組員は自分たちの部屋割りを確認して荷物を置くと、それぞれの配属先に散らばってシステムを立ち上げていった。

大介は配属先になる第一艦橋の操舵席にて、家を出る時にまだ幼い弟から渡された激励の手紙を大切そうにポケットに入れ、使命感を燃え上がらせていた。

大切な家族たちからの激励の手紙だ。せめて発進の時くらいは肌身離さずにとっていたい。

島は操舵席に備わった操縦桿を動かして手応えを確認、各種スロットルの位置や計器類を確認する。

シミュレーションは受けているとはいっても実物を触るのはこれが初めてなのだから、発進前にきちんと把握しておかないとヤマトは飛ぶに飛べない。

ヤマトの運航部門の責任者にしてパイロットを兼任する航海長という立場を考えても、決して疎かにはできない作業だ。

「次郎、親父、お袋よ。待っててくれ。きつと帰るから……」

そんな大介の様子を、進は自分の受け持ちである第一艦橋最前席の中央、戦闘指揮席の計器チェックをしながら見ていた。

そのような座席に座る進もまた、戦闘班の責任者である戦闘班長に任命されていた。

ヤマトの戦闘指揮を任されるということは、ヤマトに備わった数々の武装の運用は勿論航空部隊への作戦指示すらも任されるといふことだ。

……それにここは、ヤマトの最終兵器であるトランジション波動砲のトリガーを備えられている。使用の判断は艦長のユリカに一任されているとは言っても、管制を担う進が仕損じるわけにはいかな

い。

進は責任感から額にジワリと汗が浮かぶのを感じた。

役職に対して経験と年齢が釣り合っていないとは感じるが、極度の人材不足の地球だ。任された以上やり遂げるしかない、気持ちを引き締めようとするが、ふと耳に入った大介の言葉に寂しさが去来するのは避けられなかった。

(……いや、島に悪気はない。これから苦難を乗り越えていく仲間、俺の一番の親友なんだ。ここは、普段の礼も兼ねて励ましてやるとするか)

「島、気張って行けよ。しくじったら、残された家族がかわいそうだからな」

「古代……ああ、しつかりするさ。その、ありがとうな」

進の前で軽率だったか、と言う顔をする大介に進は心配するなど笑い飛ばして見せた。励ましておいて寂しさや嫉妬を見せるなんて――格好がつかないじゃないか。それに、

「俺のことは気にするな。世界のどこもかしこも、同じような人間が山ほどいるんだ。それに俺は、ルリさんやユリカさんを信じるって決めたんだ。全身全霊をかけて、この計画に挑むだけさ」

「……そうか、そうだったな、古代。必ずやりきろうな。俺達の未来のためにも」

家族を失った心の痛みは消えない。

しかし進は以前に比べるとそういつた痛みが和らいでいることを自覚している。

そう、ナデシコCに乗艦して以降交流を重ねている、ルリやユリカの影響だ。

始まりはもちろん、あのナデシコCの騒動である。

ユリカの監視任務を任されていた間、ルリと腰を据えて話したことがあった。

その時に進は、ルリが宇宙に進出するに足る完璧な人間を目指して遺伝子操作されて生み出された子供であることを、そして両親と生きていた存在が単なる教育のための虚像に過ぎなかったこと、遺伝上の

本来の両親とは馴染めず縁遠くなっていること、そしてナデシコを降りた後ユリカに引き取られ、ユリカに連れられてアキトの住むボロアパートでの共同生活に至り——二人を家族と慕うようになったこと。さらには火星の後継者によってその幸せな生活が奪われてからの話。全てを聞かされた。

進は安易な同情は示さなかったが、やはり似た者同士としての共感を抱き、彼女と打ち解けていった。そして同時に彼女が広告塔として宣伝されているような雲の上の人ではなく、本質的にはどこにでも居る普通の人間なのだというこれをこれ以上無く理解させられた。

そしてユリカだ。

結果として兄を見殺しにした張本人。だがそのことを心から悔やんで苦しんでいる彼女を、冷徹な人間だと言い切ることは、進にはできなかった。

だから進はとにかく話してみることにした。

知りたかったのだ。彼女のことを。ルリがあればほど慕う彼女の人の柄を——どうしても。

そうやって数日も経てば、進はユリカが感情豊かで情に厚い、太陽のような暖かい人間であることを知る。

にも拘らずルリをいたずらに心配させる行動について不可解に思い、そのことを問い質してみたこともある。

結局「そうするしかなかったの。未来に希望を繋ぐためには」としか返答を貰えなかったが、その時の表情を見れば、ルリを苦しめたこととは本意でないのがわかった。

……彼女は表裏のある人間ではない。それに、帰路のナデシコの中でも時折話題を聞き、そして帰還後に自身も配属されることになったヤマトのことを聞かされれば、決してベストとは言えないまでも、間違ったことをしていたわけではないということが進にもわかった。

話が進むにつれて、進はそこまで彼女を突き動かす最大の動機——彼女の夫テンカワ・アキトのことが気になり始める。

少々不躰かとは思ったが、思い切って尋ねてみるとユリカは僅かな沈黙の後に、

「そうだね、私も古代君の身の上話を聞かせて貰ったから、答えなきやだね」

と、自分が知りえる限りのことを教えてくれた。

それは火星の後継者によって拉致され、人体実験の素材にされた彼女らの顛末。

アキトは実験の後遺症で、夢であった料理人に不可欠な味覚を始めとする五感に障害を抱えてしまい、自分たちの未来を閉ざした彼らへの復讐と、囚われたままのユリカ奪還のために復讐鬼と化し、火星の後継者の隠れ蓑であったヒサゴプランに関わるターミナルコロニーを襲撃して……無関係な人にも少なくない被害を出してしまった。

そして自身の行動ゆえに彼女と共に生きることが諦めて、別れの言葉もなく雲隠れしてしまったことを知った。

……そこまで話を聞くと、ユリカへの怒りや恨みなど吹き飛んで、彼女たちを身勝手かつ自己満足の正義を振りかざして引き離れた、火星の後継者への怒りが湧きあがってきた。

確かに実験の後遺症とやらがなければ、ヤマトの再建は成しえなかったかもしれない。いや、そうだとしても火星の後継者事件がなければまた違った道もあったはずだ。

ガミラスが避けられない脅威であったとしても、彼女の隣には最愛の夫がいたであろうし、その夫にしても、自分で自分を許せなくなるような所業に手を染めずとも済んだはずだ。

そんな感情が口を吐くと、ユリカは本当に泣きそうな顔で「それ以上言わないで」と進を止めた。

それから間を置かずには嗚咽を漏らして泣き出す姿を見て、火星の後継者の遺した傷跡が決して小さい物ではないことを痛感する。

彼女もまた自分と同じように、理不尽な暴力で不幸を背負っていた。

——そして、彼女はまだ火星の後継者の呪縛から逃れられていない。

そうやった腹を割った話が続くほどに、彼女らとの関係が深まるに連れ、いつしか進はユリカに強い敬意を抱くようになった。

あんなに弱々しい体なのに、本心では寂しくて寂しくて泣き叫んでいるというのに、それを感じさせない不思議な包容力に心が休まるのを感じる。

自分だつて手一杯であるだろうに、彼女は進を決して蔑ろにはしなかった。

そんな彼女の心の強さを、進は尊敬した。

いつしか彼女の元で共に戦い、この苦難を打ち勝つことを夢見るようになった。

その気持ちが極まった進は、冥王星近海での戦いで見せた戦術眼を思い出して「俺に戦闘指揮を教えてください」と頼んでみた。

断られるかもしれないと思ったが、彼女は「いいよいいよ、大歓迎だよ!」と快く応じてくれた。「やっぱりそうなるんだね!」と言いたげな視線が気にはなつたが、そんなことを追求するよりも先に己を鍛えるほうが先だと流して、教えを請う。

——あとから彼女が連合大学を首席で卒業した才女であることを知つたが、その時は知りもしなかった。

ちようどその時そばにいたルリは、それはもう怖いくらいに目を吊り上げて「大人しくしてください」とユリカを非難したが、「ゲームだからゲーム。そんなマジなのやらないから!」と、本当にオモイカネに頼んでゲームを起動して進と対戦する、という形でのレクチャーを実施した。

進はちよつと拍子抜けしたが、ルリの心情も考えるべきだろうとその場は我慢してユリカと対戦——してフルボッコにされ、格の違いをまざまざと見せつけられ、すごく悔しかった。

見かねたルリが代わりにユリカに挑んではみたものの、結局あの手この手で叩き潰されてやはりボッコボコにされていた。

ルリは尊敬するような悔しいような複雑な表情で「もう少し手加減してくれてもいいと思います」と唇を尖らせ、いままで見たことも無いような可愛い表情を見せてくれた。

その表情にユリカも進も大笑いして、陰鬱な空気を完全に吹き飛ばした楽しい時間を過ごしたものだ。

直後にルリは拗ねてしまったが、いまになって思えば空気を明るくするためのルリなりのポーズだったかもしれないと、進は思う。

……それからは毎日が忙しくも楽しかった。

時にはユリカの看病のために離れられない雪や、ルリを心配して様子を見に来たハリ、進がまた馬鹿をしでかさないかと気になって顔を出した大介すら巻き込んで、他愛のない無駄話に花を咲かせることもあった。

ユリカの無茶苦茶な活動報告も悪いことばかりではなく、地球では見られないような変わった気象現象などの写真だったり映像だったり資源採掘のたびに残していたらしく、未知なる宇宙の神秘の記録に全員で目を輝かせた。

ほかにも全員でゲームで遊んでバカ騒ぎをしたり、過去の映画やドラマを見て笑ったり感動したりと、暇さえあればユリカの所で大いに楽しんだものだ。

……病室では静かに、と艦医に怒られもしたが。

地球に戻ってからはヤマト乗艦のための訓練に勤しむことになったが、暇さえあれば顔を出すことに変わりはなく、そこでユリカからより本格的な指導も受けられ、そこで示した成績が見込まれたことも、進が戦闘班長に選ばれた理由らしい。

そこに地球で合流したラピスやエリナ、イネスらを始めとする旧ナデシコの面々とも顔見知りになると、進の交友関係は一気に広がった。

そういつた日々を経て、進は兄を失った悲しみを克服し、出会った友人たちのためにもこの航海の成功を誓うようになった。

もう二度と、大切な人を失うまいと固い決意を抱いて。

そこまで述懐してからふと後ろを振り向くと、その視線の先にはヤマトのコンピュータ関連の総責任者、チーフオペレーターの任に就いたルリが、機関制御席に座ったラピスに声を掛けていた。

「ラピス、そちらの準備はどうですか？」

電探士席にのパネルを操作してシステム全体をチェックしながら

問いかける。

ヤマトには最終調整の段階で急遽ナデシコCからオモイカネが移植された。

長年の相棒が一緒なのは心強かったが、ヤマトではオモイカネもサブコンピューター扱いだ。

本来想定されていない改修のため、マッチングが不完全なのだ。なにしろ、ナデシコCが無事に帰って来れる保証はなかったし、現役で活躍している貴重な戦力を、秘密裏に作業しているヤマトのために潰すわけにはいかなかったので、これは致し方ない。

メインコンピューターはユーチャリスが使用していたものを改修して搭載しているらしいが、そちらはオモイカネと違って人格のようなものは芽生えるに至っていないかったようで、そちらとのマッチングは思ったよりも悪くない。

——立場の違いにオモイカネが嫉妬していたが。

第一艦橋側の操作パネルは透明なスクリーンモニターひとつとコンソールパネルが一枚だけで、パネル全体が右側にある支柱一本で支えられているだけと、ボックス席の他に比べると本当に簡素なものだ。

改修が追い付かずIFS端末の使えないキーボードタイプのそれは、ルリの能力を最大限に発揮できるものではなかったが、本命の電算室は第三艦橋にあるのであまり問題ではない。本格的な作業をしたければそちらに移動すればいいだけだ。

ただ……。

(移動方法……もう少しなんとかならなかったのでしょうかね?)

頭を痛めながらラピスの返答を待つ。

てつきり彼女は自分の下に付くものかと思っていたのだが、彼女は意外や意外、機関部門の総責任者、機関長として乗り込んできた。

エンジン本体の機械的な調整作業はその細腕では無理だが、プログラム関連は元よりコンソールパネルを使用してのエンジンコントロール技術で優れた手腕を発揮したことで、案外すんなりと決まってしまうのだという。

本人も再建の際に最も力を注いだのが機関部の制御系だったようで、愛着があるのだとか。

見目麗しい少女が自分たちの上司になったというのに、機関部のクルーたちは意外と好意的にその事実を受け止め、小躍りしていたのが印象的だ。

ラピス自身は特に反応を示さず（理解できなかったのだとルリは判断した）、礼儀正しく部下となる男共に接していた。

「……起動準備は進展率五〇パーセント。作業は順調です、ルリ姉さん。いまのところハード、ソフト共にエラーはありません」
ラピスは計器類のチェック作業を止めずに回答する。

こちらはボックスタイプ立派なコンソールが用意されている。その中にすっぽりと納まったラピスは、長い桃色の髪を邪魔にならないようにうなじの所で縛っている。

計器盤はアナログメーターとデジタルメーターが複数備わったもので、複雑なエンジンの出力管理とエネルギー分配はこの席で行う（ラピスはI F S 端末への改修作業を強く断っていた）。

機関室からの直接制御を求められるときはこの席から直接指示を出して、彼女が担当できないエンジンの直接管理を部下たちが担う、という構図だ。

——本当に彼女は変わったと思う。

ナデシコCが地球に帰還してからのひと月の間に彼女とついに直接対面したのだが、最初は別人だと疑いたくなるほどに人間として飛躍的な成長を遂げていた。ユリカの影響と聞かされて大いに納得すると同時に悪影響を不安視したが。

おまけに対面するなりラピスはユリカに以前「じゃあラピスちゃんハルリちゃんの妹だね」という言葉をいろいろな点から考えた結果受け入れてしまったらしく、早々ルリを姉と呼び始めて大いに困惑させられたものだ。

それからはアキトやユリカという共通の話題を切っ掛けとして関係を深めていき、いまでは姉妹と言われても戸惑わないほどの関係を醸成している。

「通信システム、すべて異常なし、と。さすがわが社の製品ね。完璧だわ」

通信長に抜擢されたエリナが会心の笑みを浮かべている。

彼女の座る通信席は、壁面に備えられた艦内の各所を映し出す小型モニターが幾つも連なっているのが特徴で、手元のコンソールと合わせて艦内の通話を円滑に繋げる事ができる。

ヤマトでは任務の都合上艦外の通信の殆どは艦外作業中の工作班か、さもなければ出撃中の航空部隊になることが大半になるだろうが、場合によつては不審な電波の傍受や解析も担当することになる席だ。

ナデシコでは副操舵士の役割についていた彼女だが、ヤマトでは通信関係の責任者となったのは意外だった。

ユリカをフォローすべく第一艦橋への配属を強く希望した結果、空いている席がここしかなかったというのが理由らしい。

「それにしても、エリナさんが乗艦するとは思いませんでした」と、率直な感想を漏らすルリ。

ルリもこの一月の間にエリナが公私に渡って深くアキトと関わりがあった事実を掴んでいる。

ラピスの話で納得するまではエリナが自分から、ユリカから、アキトを奪おうとしているのかと思つてささやかな敵意を持つていたものだが、どうやらそれは間違いであったと理解して内心頭を下げたものだ。

「——まあ、ね。ヤマト再建計画には私もがつり絡んでたからどうしても気になるし、ユリカのフォローを考えると、私が居なきや話にならないじゃない。それにやられっぱなしってのは、私も嫌いなものね」

ふむ、とルリは頷く。

正直あまりいい印象のある人物ではないが、こういう時に嘘を言ったりはしないだろう。

実際彼女が日常的にユリカのフォロー、というか介護をしてきているのは直に見てきた。

ガミラスにやられっぱなしが云々というのも事実だろうし。

アキトのことに触れないのは——まあ、当然だろう。やぶ蛇でしかないし。

「ふむ、シミュレーターよりも操作しやすいな。火器管制制御の補佐は任せてくれて構わないぞ、戦闘班長」

とは砲術補佐席に座るゴートだ。

彼は砲術科長として武器運用の責任者に選ばれた。

目の前には主砲や副砲、対空砲に各種誘導兵器用の管制モニター、さらには武装管理や切り替えを行うための各種スイッチやキーボードが備わっている。煩雑さを避けるために洗練されたパネルデザインは、仕事量の割にはすつきりして見える。

……だが目を引くのはパネルデザインに対して立派過ぎるその体格だ。ヤマトの座席はゆとりある設計のはずなのに、少々窮屈に見える。

隣の席に座るエリナと比べるとその体格差は一目瞭然。

そしてなによりゴートには……ヤマトの隊員服があまり似合わない。

新しいデザインの隊員服は機能性を求めた結果体にフィットするデザインを採用している。筋骨隆々の大男が着ると目のやり場に少々困るのだ。

事実女性陣は特に性差を気にしたことのないラピスを除いて、極力直視を避けているのが現状であった。

(でもまあ、旧女性用隊員服よりは数段マシですが)

ルリは地球に戻ってからユリカに相談を求められた。その内容が隊員服についてのものだったのだ、旧隊員服の再生産に消極的なユリカの様子を訝しんでデータを見て——凍り付いた。

セクハラ反対、新規で行こう。

ルリの意見はユリカも大いに頷き、新規デザインに改定とあいなつた。大正解だったと、自分の姿を見て思った。

「古代でいいですよ、ゴートさん。頼りにさせてもらいます」

ルリが施行を脱線している間に話は進んでいたようだ。

あれほど荒れていた進もユリカに毒されたからだろう、いまではすっかり落ち着きを取り戻している。実に恐ろしきはユリカ・ウィルスの感染力と威力か。

ルリは勝手に納得してから自分のコンソールに視線を落とす。

艦橋内の会話には加わらず、黙って自分の作業を進めていたヤマトの工作班（化学分析・修理・製造）の総責任者である真田志郎は、会話が途切れたことを見計らって進に波動砲の確認作業を求めた。

「古代、波動砲のテストモードを起動してみてください。問題ないとは思いますが、操作手順の確認だけは怠るなよ」

「了解。波動砲、テストモード開始します」

真田の要請を受けた進が所定のスイッチを順に押していくと、安全装置が外れて戦闘指揮席正面のコンソールパネルが裏返し、拳銃型の発射装置（トリガーユニット）が顔を覗かせる。発射装置はそのまま回転したパネルごと、進の目線の高さまで上昇した。

そして発射装置の眼前にポップアップ式のターゲットスコープが出現。『TEST MODE』の文字と共に波動砲の照準が表示された。

——よし、操作手順は暗記しているようだ。

真田は安堵した。真田は表に出さないように心掛けているが進のことを常に気にかけていた。

ヤマト乗り組みが決定するまで直接対面したこともなかった。だが真田は彼の兄である守の親友であった。

さすがに成人して家を出た兄の交友関係など知る由もなかったのだろう、進はなんのリアクションもしてこなかったが。

だがそれでいい。亡くなった兄の親友などと告げて妙な気を使われるのは困る。

幸いユリカによってかれの心は救われている。いまはまだ、ただの同僚として見守っていただけでいい。

——自分だってまだ、守の死を消化できていないのだから。

進は両手でしっかりとトリガーユニットを握りしめると、横に前後にと、軽く力を入れてみる。

遊びのないサイドステイク操縦桿でもあるトリガーユニットは圧力を検知、それが反映されてターゲットスコープの仮想ターゲットマーカー動く。

マーカーの動きは機敏とは言えずゆったりとしたものだが、それも当然だ。

波動砲はヤマト艦首に固定装備された艦隊決戦兵器。

それゆえに照準動作は艦の旋回と連動している。この状態では操縦席からの操作はほぼ無効化され、戦闘指揮席からの操艦に切り替わる仕様なのだ。

圧力センサーだけではできない微調整を行う場合は、別途入力装置を使用し、コンマ単位の姿勢制御をも可能とする。

計器が表示する情報が発射準備の完了を告げる。

進は標的を照準に収めると引き金を引く。するとトリガーユニットのボルトが前進してターゲットスコープに映し出された仮想標的が粉碎された。

動作は良好だ。次に複数回の連続発射モードを試す。

新生したヤマトのトランジション波動砲は、六連発が可能になっている。

これはヤマトのエンジンが六連波動相転移エンジンに換装されたことで波動砲のシステム自体が大きく変貌したからだ。

それに伴い管制システムは一新されていて、複数のターゲットに対してピンポイントで撃ち込むことすら可能になっていた。

ターゲットを事前にロックしてそれぞれ微調整をすれば、ある程度の艦の制御は自動化されるなど、新システムに合わせた最適化も随所で行われている。

……かつての波動砲を凌駕する、最終兵器。

「ルリさん、仮想標的のデータ処理、お願いします」

「了解。波動砲のターゲット出します。数は六、正確な位置データを転送。発射どうぞ」

「受け取りました。発射します」

ルリが表示したターゲットの位置情報を火器管制システムに組み

込みロックオン。

進はそれに向かって仮想の波動砲を撃つ。

一射ごとにトリガーユニットのボルトが前進しては戻り、六つの標的を見事に粉碎する。

「波動砲テストモード終了。真田さん、問題ありません」

「うむ。あとはどこかで試射だな。使ってみなければ、どの程度の反動がヤマトに襲い掛かるかわからんからな……。なにしろわれわれにとつては未知の兵器だ。かつてのヤマトは使いこなせていたのだろうが、基礎技術の足りない状態での再建、しかも強化改造だ。正直慎重に慎重を重ねてもなお、不安が残る」

ヤマトの再建に一から取り組んでいる真田だ、その発射システムや要求されるエネルギーと合わせて、波動砲の破壊力をほぼ正確に導き出しているのだろう。

データは進も目を通してている。確かにすさまじい威力だった。

……ガミラスと対等に渡り合うには必要な力だとは思うが、一歩間違えれば自分たちのほうこそ破壊者に成り果てる禁忌の力。ユリカに言われた言葉が頭をよぎった。

「とてつもない威力の大量破壊兵器なんですよ？ テストであつても迂闊に使つてガミラスを刺激するつて結末は、嫌ですよね……？」と、心配が口を吐いたのは航行補佐席に座るハリだった。

彼は大介の副官としてヤマトの操縦に必要な航路データの割り出しや、周辺宙域の解析等を一手に引き受けている。

小柄な体に対応しているとは言い難い多数のスイッチとモニターの連なつた情報管理に特化した席。その実力はナデシコで共に戦つた進だから疑いもしない。

「たしかにな。とはいえ地球は遊星爆弾のせいであのぎまだ。戦時条約の類もない以上、使うべき時には使つて危機を乗り越えなければ、地球を救うことなんてできないさ」

大介は波動砲の使用に対して賛成の姿勢を見せている。進も同じ考えだった。

「俺も島に同感だ。だがハーリーの懸念ももつともだ。威力の底が知

れない以上、扱いには慎重であるべきだろうな。こいつは、あの相転移砲すら上回る怪物だと——艦長が言っていた。——艦長にそのまま言わせる砲を、安易に使うつもりはないさ」

進はそのときのユリカの表情を思い出して背筋が寒くなった。あれほど深刻な表情……波動砲とはそれほどまでに恐ろしい存在なのだろう。

深刻な空気が艦橋内に広まろうとしていた。そんなとき、副艦長のアオイ・ジウンが第一艦橋に飛び込んできた。

「発進準備は進んでいるか？」

第一艦橋に飛び込むなり開口一番に尋ねる。

ヤマトの副艦長を任命されたジウンはやる気をみなぎらせていた。

ジウンとて散々ガミラスに煮え湯を飲まされてきた。地球がここまで追い込まれてしまったのは、自分たち軍人が情けなかったからだ。と後悔の念もある。ヤマトが最後の希望だというのなら、力を尽くさない理由はない。

それにアキトを失ったことユリカを助けるためなら、ジウンは例え甲板掃除であったとしてもヤマトに乗り込んだ。すでに自分の気持ちにはケリをつけているが、いまのユリカの姿は痛々しくて見るに堪えない。

友人として見過ごせない。少しでも支えてあげなくては。

「はい、まもなく完了します」

すでに艦橋に集まっていた責任者を代表して、真田が返答をくれた。

「よし。古代君、艦長の様子を見て来てくれ。地球からの通信だ。ガミラスの艦隊が接近中らしい。さすがに感づかれたみたいだ」

「わかりました、艦長を呼んできます」

ジウンに言われて進はすぐに戦闘指揮席の波動砲テストモードを完了、通常モードに戻してから席を立つ。そのまま第一艦橋の後ろ、左舷側の主幹エレベーターへ。

ヤマトの艦長室は旧戦艦大和でいうところの主砲射撃指揮所に相当する場所にある。

そんな艦長室に行く方法はふたつ。ひとつは艦長席の昇降機能を使うこと。艦長席は専用のエレベーターも兼ねていて、艦長室の間を座席ごと速やかに移動することができる。

もうひとつは主幹エレベーターの左舷側を使うこと。このエレベーターは艦長室のひとう下の階層で止まり、そこから狭い階段を上ることで艦長席のドアの前に着く。

右舷側にはエレベーターシャフトが通っていない。そのスペースは洗面所とユニットバスに使われている。

しかし見れば見るほどに危険な位置にあるな、と進は思う。被弾はともかく、うっかり小惑星帯かなにかで接触事故でも起こしたら一巻の終わりだと思っただけだ。

なぜこのような場所に最高責任者の個室が用意されたのかはわからないが、ユリカ自身が在りし日のまま復活させることを望んだためそのままになっている。

のちに本人自ら、

「変えときゃよかったかも——こわいよお。なんで沖田艦長大丈夫だったの〜?」

とか、

「しまった、シャッター降ろさないと外から丸見え！ 迂闊に着替えもできない!?!」

といった泣き言が飛び出すのだが、いまさら嘆かれても進になにかできるわけではなかった。

「伝説を受け継ぐのって、プレッシャーだなあ」

艦長席でクルーの準備が終わるのを待っていたユリカは、杖で体を支えながら艦長室の正面窓越しにヤマトの艦首を見下ろす。

視線の先には巨大な三連装四六センチ砲塔が二基、背負い式に配されているのが見え、その先にはかつて自動航法室を要していた、いまは波動砲の最終収束装置を収める空間として機能しているドーム型

の建造物とそこに立つ情報収集用アンテナ。

さらに海上に浮かぶ船だった頃からの名残である、波除けのブルーカーに巨大なフェアリーダー（鎖が絡まないようにするための係留用の穴）が見渡せる。

沖田艦長も、ヤマトにトリチウムを積み込むさまをここから見届けたのだろうか。最後の戦いを挑むため、わが身を犠牲にするヤマトの姿を。

いま自分は、偉大な沖田艦長がその生涯を終えたこのヤマトで旅立とうとしている。はたしてうまくやれるのだろうか。自分は沖田艦長のようにクルーを見事まとめ上げ、これからの苦難を乗り切っているのだろうか。

不安は尽きない。

（だって私は、沖田艦長じゃない）

その不安はいつも胸の内にあつた。ヤマトがどれほど凄くても、その力を引き出せなければ絶対に苦難を乗り越えることなんてできない。

自分にそれだけの力があるのかどうか、自問自答は繰り返されたが答えはでていない。いや、正確にはわかっている。わかっているが、不安なのだ。

だって自分は一度、負けている。艦長としてではなく人としてだろうが、とにかく負けた。その雪辱も晴らす機会は永久に失われたいま、燻ているのは自分も同じなのかもしれない。

ユリカはゆっくり慎重に座席に腰を下ろすと、シートをリクライニングさせて上を仰ぐ。ドーム型の窓をもつ艦長室だけに、ドックの天井すら一望できた。

いまは閉鎖している巨大なハッチ。もうすぐあそこを抜けてヤマトは旅立つ。私たちの旅が始まる。

ふと意識が艦長室前方、窓辺と一体化したデスクの一番左下にある、大きな引き出しの中身に向いた。その中には、ヤマト艦長となつたユリカにとって支えとでも呼べるような品が入っていたが、それを取り出そうとは思わなかった。

それが必要になるとしたら、その時自分はきつともう――。

進はエレベーターを降り、狭い階段と廊下を抜け、艦長室のドアの前に立つ。一度呼吸を整えてからノック。

「古代です」

と声をかける。

すぐに「入っていいよ」と応答があったので「失礼します」とドアを開けた。

目の前には一部の隙もなく制服を着こなし、椅子ごとこちらを振り向いて座っているユリカの姿があった。

つつい病人であることを忘れそうになるほど、立派な姿だった。

「艦長。地球から通信です。ガミラスの艦隊がアクエリアスに接近中とのことです」

「わかった。じゃあすぐに発進して迎撃だね。ヤマトの初陣だ、気合を入れて行こうね、進君」

とつてもフレンドリーな応対するユリカ。これだけだととても艦長と部下の会話には聞こえない。

しかも交流を重ねた結果、彼女は進を下の名前で呼ぶようになっただけでなく、すっかり我が子のように可愛がり始めているのが拍車をかける。

正直嬉しいような恥ずかしいような。

進はそのたびに黙り込んだり赤面したりしているが、ユリカは一向に意に介してくれない。

でもさすがに最近慣れてきた。むしろこの関係が心地いいとすら感じている。

「はい！ 気合マシマシで行きましょう、艦長！」

ユリカ相手に、しかも周りに人のいない状況では堅苦しくしているだけ無駄と諦めている進は、冗談交じりに返事をしながら敬礼をする。

ユリカも椅子に座ったまま笑顔で答礼して、第一艦橋に戻るようにと指示する。

進もすぐに応じて艦長室を後にし、第一艦橋の自分の席に戻って

いった。

「……立派になるんだよ進。あなたが、これからこのヤマトを背負っていくんだからね——かつてのヤマトを導いた、並行世界のあなたのように」

進が部屋を出たあと、ユリカは独白する。

自分の今後を考えれば、どうしてもヤマトの指揮を継ぐ人間が必要になる。

……残念だがジюнでは駄目だ。

ヤマトを指揮するために必要なのは型にハマった強さじゃない。状況に応じての柔軟性だ。

ジюнは教本どおりにやらせたら自分に引けを取らない、いや経験値の分だけ勝るかもしれないが、ヤマトのような（この世界の基準からすると）特殊な艦艇を扱うには少々頭が固い。

これはルリにも同じことが言える。シミュレーションで対峙してみてもよくわかった。だから本当に残念なことに、自分の後継者に選ぶことができなかった。

だが古代進なら、それが務まる。

交流を重ねた一カ月半の間に、ユリカは進が自分の後継者足りえる と確信を持った。ヤマトの記憶で見た別世界の彼のことが頭を過らなかつたわけではないが、それを差し引いてもなお、資質がある。

足りない経験はこれから積みばいい。

ジюнやルリといった経験者もフォローできるだろう。

いま最も必要なのは諦めない心。挫けない心。そして、目的のためにひた走る情熱なのだ。

「さて、母親足る私がうじうじしてちゃ、示しがつかないよね」

親代わりとしてどっしり構えなければと思うと、さきほどまで抱いていた不安が吹き飛ぶ思いだ。

「——ヤマト、行くよ」

ユリカの声に応えるかのように、眼前のモニターが明滅して応える。くすりと笑ってシートの上昇スイッチを操作して、第一艦橋へ。

——さあ、旅立ちの時が来た！

第一艦橋に降りたユリカに全員が席から立ちあがって敬礼をする。もちろんルリもそうした。

「地球からの報告は？」

答礼したユリカがエリナに尋ねると、

「月軌道上にガミラスの駆逐艦五隻を確認。現在アクエリアスに接近中、到達まであと一〇分を想定」

うむ、と頷くとユリカはすぐに指揮を執り始めた。といっても現状でできることはひとつしかないだろう。

「全艦発進準備。発進と同時に主砲と副砲で敵艦を砲撃します！」

「了解！ 相転移エンジン、波動エンジン、起動開始！」

艦長の指示を受けて副長のジュンが指示を出す。

「い、E C Iに移動。準備に入ります」

一瞬の躊躇いのあと、ルリは本格的な準備のために第三艦橋の電算室に移動する。

電算室の主オペレーター席と第一艦橋の電探士席は座席自体が直通のエレベーターを兼ねる構造になっている。

——そう、これからほぼヤマトの最上層に近い第一艦橋から最下層の第三艦橋まで『急降下フリーフォール』を体験することになる。

……たしかに利便性はすばらしいと思う。だがなぜよりもよつて高速フリーホールなのだろうか。はつきり言っつてルリはビビっている。

それでも覚悟を決めてシートスイッチを操作すると、座席がわずかに後退したあと、そのまま床ごと降下を開始した。

眼前で接触防止のために通路を照らしている照明がある。それが高速で視界を流れていく。

……………ひい！

ルリが消えた穴が閉鎖される。その寸前に引きつった悲鳴がたしかに聞こえた。

ユリカと真田は思った。これはあとでトラブルの予感がする、と。そんな第一艦橋の状態など露知らず、あつという間に第三艦橋の電

算室に到着したルリはエレベーターシャフトから座席ごと飛び出し、制御パネルの前までスライドレールに沿って移動した。

(し、心臓に悪い……！)

急降下でちよつと乱れた髪を手櫛で直し、青褪めた表情のまま目の前のIFSコンソール両手を置く。

こちらも設計段階では想定していなかったため急造の物だが、性能的にはナデシココに遜色ないはずだ。

ルリたちオペレーターが座っているのは全天球型スクリーンの中
央に浮かんだ、古墳か、もしくは棒の先端に丸がついたような形をし
た制御台である。

二段高い位置にあるルリの主オペレーター席とその隣で一段下がったところに副オペレーター席(普段は空席)、最下段の先端の丸い部分に沿うような形で計六名、最大七名のオペレーターがヤマトの頭脳を管理するのだ。

ルリは弾む心臓を宥めながらシステムを次々と起動していく。

「ECI、準備完了」

『STAND BY』の文字が躍っていた全天球スクリーンにヤマトの外部カメラや各種センサーが拾った情報が表示された。

機関室も慌ただしかった。機関士たちが走り回ってエンジンの起動準備を整える。

新生ヤマトのエンジン制御は従来のエンジン本体に直付されたコンソールではなく、機関室の壁面や天井を移動する専用の機関制御室内のコンソールで操作する。

その内のひとつに飛び込んだのは、やや小太り気味の若者である徳川太助と、中年に差し掛かろうというベテラン機関士の山崎奨。二人は次々とシステムを起動していく。

起動終了後、山崎は通信マイクに向かって叫んだ。

「機関室、システム準備完了！」

「機関部門、配置完了」

ラピスの報告にユリカはこくりと頷いた。艦長席のパネルにも異

常は見当たらない。あとは飛び立ってみないことには問題の洗い出しもできないか。

「全通信回線オープン。送受信状態……良好です」

エリナが流れるような手付きで通信回線を覚醒させるのを見届ける。

「レーダーシステム、異常なし。長距離用コスモレーダー、起動完了！」

航行補佐席のハリがヤマトの艦橋上部、波動砲用測距儀に取り付けられた四枚のレーダーアンテナからなる長距離用タキオン観測機器——コスモレーダーを起動。

上部のアンテナがモーターの駆動音と共に旋回……問題ない。

「火器管制システム、異常なし」

ゴートが黙々と兵装システムを点検し、異常がないことを口頭報告。よし、これなら外のガミラス艦の迎撃が可能だ。

「艦内全機構、すべて異常なし。出航に差し支えありません」

艦内管理席で艦全体のチェック作業を終える真田。ヤマトの復元作業に携わった彼が言うのだから間違いはない。工作班のクルーも復元作業に関わった人員が半数を占めている。

彼らの活躍が今後のヤマトの航海を左右すると言っても過言ではない。

「航法システム、異常なし」

操舵席でモニターと計器を確認した大介もシステムが正常であることを告げ、改めて操縦桿を握る手に力を籠めているようだ。

緊張で体が震えているのが後ろ姿からでもわかる。報告後も繰り返しすべてのスイッチが所定の位置に入っているのを確認している様子。

ナデシコCでの操舵経験が活きているようだ。ナデシコCの操舵を初めて任されたとき、スイッチの入れ忘れでミスをしてしまったのが堪えているのだろう。

真面目な大介のことだ、同じ失敗はしまい。だが、肩に力を入れすぎるのは感心しないな、とユリカは思った。

「発進準備、すべて完了。……ドック上昇へ」

副長席のジユンがドックの管制室に指示を出した。

管制官の操作で天井のハッチがゆっくりと開放されていく。ハッチ開放後、ドック内部に警報ブザーの音が響き渡った。

直後、七万トンを超えるヤマトの巨体を支えていた船台がエレベーターとなって緩やかに上昇をはじめ、ヤマトは巨大なハッチの開口部を潜る。

その先にあるのは事前に掘られた氷のトンネル。氷塊の表面ギリギリの地点まで続いているトンネルだ。

「補助エンジン、始動」

「補助エンジン、動力接続」

「補助エンジン、動力接続、スイッチオン」

ユリカの指示を大介が、ラピスが復唱して実行されていった。

ヤマトの艦尾、喫水の下に備わった二基の補助エンジンから煌々と噴射炎が噴き出す。

まだアイドリング状態だが、その噴射炎の圧力と熱量でヤマトや船台に張り付いていた氷の一部が剥がれて舞い散る。

エレベーターシャフトに白い靄が立ち込めて、ヤマトの喫水よりも下に漂い始めた。

「相転移エンジン起動。フライホイール接続」

「フライホイール接続」

ラピスの指示が機関室に響き、波動エンジンの前方に増設された相転移エンジンが起動を開始する。

小相転移炉心に取り付けられている小フライホイールが回転を始める。フライホイールは緊急時に備えた予備エネルギーを蓄えはじめ、表面が赤く発光を始める。

六つの小炉心が生み出したエネルギーは、収束を目的として一体化している大炉心内部に誘導され、そこでも回転する大フライホイールが力を蓄えて発光する。

何事もなく相転移エンジンは起動に成功。

生み出したエネルギーを後方に接続された波動エンジンに伝達。波動エンジンが静かに震え始めた。

「続けて波動エンジン、第一フライホイール、第二フライホイール始動、一〇秒前」

「波動エンジン、第一フライホイール、第二フライホイール接続。起動！」

さらなる指示が機関室に届く。太助と山崎が一緒に機関室内のコソールを操作、波動エンジンに備えられたフライホイールが重々しい音を伴って回転を始める。

二枚のフライホイールは回転が高まるにつれて赤々と発光。エンジンが眠りから覚めたことをこれ以上なく視覚的に訴えていた。

そのさまを見届けた太助が思わず「よしっ！」と拳を握ると、山崎もぐつと親指を立てて応える。

相転移エンジンが、波動エンジンが、唸りを上げる。ヤマトの艦体が強力無比なエンジンが生み出す莫大なエネルギーを受け止めて――震える。

「ガントリールロック、解除」

ジュンの指示でヤマトの艦体を固定してた拘束アームが次々と花開き、ヤマトの艦体がフリーになった。

アームが解放されるわずかな振動を体に感じながら、ユリカは万感の思いを乗せて叫んだ。

（――沖田艦長。どうか、私たちを見守りください！）

「ヤマト、発進!!」

「ヤマト、発進します!!」

大介が命令を復唱、操縦桿を思い切り引く。

メインノズル内部のラストコーンが後退して噴射口を広げ、煌々とタキオン粒子の奔流が噴出。ヤマトの体が激しく震え、最大噴射開始!!

厚さ数十センチはある氷の天井を力尽くでぶち破り、ついに宇宙戦艦ヤマトが浮上した。

その体に張り付いた氷のかけらを振るい落としながら浮上する姿は、赤錆びた以前の体を振るい落として発進した誕生時を彷彿とさせる。

すべては愛のために。

アクエリアスの海に没したヤマトは次元すら飛び越え、平行世界の地球を救うために新生を果たしたのだ！

メインノズルが生み出す莫大な推力の余波で氷塊の表面が砕け散り、後方に巨大な水蒸気の柱と化しては宇宙へと流れ、消えていく。氷上を水平に猛スピードで飛翔するヤマト。メインノズルと補助ノズルから煌々と噴射炎を放ちながら、ヤマトは新たな生を謳歌するかの如く、力強く宇宙を突き進む。

その姿を捉えたガミラス軍駆逐艦——デストロイヤー艦五隻は速やかに攻撃体制に移行、ヤマトとの距離を詰めつつ照準に捉えようと身を振った。

「主砲の発射用意をしろ。速やかに距離を詰めて、あの戦艦を葬り去るぞ」

いままで幾多の地球艦艇を血祭りにあげてきた、ガミラス艦標準装備の無砲身三連装グラビティブラストが旋回し、その射線上にヤマトの姿を補足する。

あとはこのまま一気に距離を詰めて撃ち込んでやればいい。そうすれば、あの初めて見る宇宙戦艦もおしまいだ。

どうせ地球の技術力ではわが軍の艦には勝てっこない。

艦隊の指揮を兼業している駆逐艦艦長はそう思っていた。相も変わらず、いい加減無駄な抵抗を続けるものだと。

艦橋上部のコスモレーダーが、接近中のガミラス駆逐艦隊の動きを正確に捉える。

予想どおりヤマトを早々に狙い撃ちにして沈める算段のようだ。

「ヤマト右舷、十六万二〇〇〇キロ、三時の方向、上方二〇度の地点にガミラス駆逐艦五隻を確認！ ヤマトに向かって接近中です！」

ハリがレーダーに映る敵艦隊の位置情報を口頭報告しながら、詳細データを艦長席と戦闘指揮席と砲術補佐席に転送してくれた。あとはこれを頼りに迎撃すればいい。

「主砲、発射準備！」

「了解！ 主砲発射準備！ 目標、右舷のガミラス駆逐艦隊」

ユリカの命令を復唱、進はヤマトの主砲と副砲を起動を指示した。各砲座の砲手たちは速やかに命令を実行。パネルを操作して主砲と副砲を起動した。戦闘指揮席のモニターからでもそれがわかる。

砲身の尾栓部分にある安全装置が、拳銃の撃鉄のように起き上がったことが示された。

「ショックカノン、エネルギー伝導終了。自動追尾装置セット。標的誤差修正」

ゴートの報告。第一から第三主砲、第一・第二副砲の作動を確認。ゴートがハリから送られてきた位置情報を参照、月軌道上からヤマトに向かってくるガミラス艦に照準すべくデータを各砲に転送した。

転送されたデータを基に砲手は眼前の制御パネルを操作、狙いを定める。

動力室で巨大なギアが唸りを上げて駆動、水上艦だった頃からヤマトの象徴といえる三連装四六センチ砲塔——改良された重力衝撃波砲ことグラビティショックカノンが首をもたげる。砲室の回転に連動して波打つように砲身が角度を変え、遠方の標的を捉える。

同時に副砲である三連装二〇センチ重力衝撃波砲も各々標的を補足する。

ガミラス艦との距離はまだ遠い、従来の地球艦艇はもちろん敵の射程距離よりもまだ外側だ。

しかしヤマトならば——！

「主砲、発射あ！！」

「主砲、発射！！」

発射準備完了の報せから間髪入れずにユリカが叫ぶ。

進はすぐに復唱。

発射命令に各砲の砲手がトリガーを引いた。

強力な重力衝撃波が砲口から飛び出す。右・中央・左の砲と時間差を置いて発射される重力衝撃波。反動で砲身が後退、砲身内部で後退機が伸び切って衝撃を吸収する。

撃ち出された重力衝撃波は青白い光の尾を引きながら、狙い違わず各々の標的に命中。

主砲はおろか副砲ですら、徹底的に地球艦隊を打ちのめしてきたガミラスの艦艇を容易く撃ち抜ぬき内部で強烈な重力衝撃波をまき散らす。ガミラス艦は内側から徹底的に、ズタズタに引き裂かれ、最後は内側から爆ぜるようにして砕け散った。

いままでの地球艦隊のそれとは、比較することすらばからしい、桁違いの威力、そして有効射程であった。

ガミラス駆逐艦五隻を苦もなく葬り去ったヤマトは、主砲と副砲をニュートラルの位置に戻して加速、アクエリアス大氷塊を通過した。背後には一年間眠っていた大氷塊——そして白く輝く姿に成り果てた地球。それらを背にしてヤマトは再び宇宙という名の大海原へと旅立った。

それは地球にとって、誰もが見たがっていた光景。誰もが望んだ光景。

そう、ついに、ついに地球はガミラスと対等に戦える力を得たのだ。宇宙戦艦ヤマトという、強大な力を。

ヤマトの出航を見守るため、危険を承知でナデシコCに乗船して宇宙に上がったミスマル・コウイチロウら、軍や政府の高官たちもその光景を目に焼き付けていた。

全能力をヤマトの最終調整に割いたため、ナデシコCは制御コンピューターも仮設で飛ぶのが精一杯、襲われたらひとたまりもない状態。

だが彼らはその目で直接見届けたかったのだ。

全員が姿勢を正して敬礼、悲願だったその光景に涙を流していた。ついにやった。いままで一矢報いることにすら多大な犠牲を払っ

ていたガミラスを、ついにこちらが一方的に打ち破った！　これほど嬉しいことがあるだろうか！

その光景はさながら、六年前の佐世保で産声を上げた機動戦艦ナデシコの再来。

奇しくも艦長は共通してミスマル・ユリカ。運命とでもいうべきなのか。目的や立場こそ違えど、単艦で旅路に挑むその姿は、重ねずに見ることはできない。

「これが……ヤマトか！」

誰かが感嘆の叫びを上げる。みんなが最後の希望の誕生と門出を喜び祝っていた。

そしてその渦中であって、コウイチロウは別の意味でも涙を流していた。

ネルガルから水面下で接触を受け、今日までヤマトの再建とその後の運用についてさまざまな便宜を図ってきた彼は、事実上ヤマト計画の責任者といえる立場にある。

だからこそ、念願叶ったヤマトの復活はことさら感慨深い。

「頼んだぞ、ヤマト。任せたぞ、子供たち」

氷塊から離れ、悠然と宇宙空間を進むヤマトの姿を見届けながら、コウイチロウは敬礼と共に言葉を贈る。

そして――旅立つ娘を想う。

（――必ず生きて帰ってくるんだぞ、ユリカ）

愛娘が命を削って復活させたヤマト。

その胸中の全てを出航前夜に打ち明けられたコウイチロウは涙が止まらなかった。

ヤマトの再建に娘が関わっていることは知っていたが、その無謀と言える行動の裏にあのような理由があったとは、決意があったとは……露と知らなかった。

すっかり弱り切った愛娘をしっかりと抱きしめて、

「必ず、必ず生きて……帰ってくるんだぞ……！」
と激励することしかできない。

旅立つことを、止められない。そんなことをすれば地球にも未来が

ない。

いまコウイチロウにできることは、ただただ娘が、ヤマトが無事に帰還することを願い、ヤマトが帰ってくるまでの間、絶望に飲まれたこの地球を維持するために力を尽くすことだけだ。

あとは、コスモリバーズが想定された機能を発揮してさえすれば、その苦労も報われるだろう。

そこまで考えてふと思った。

凍てついた氷の中で眠っていたヤマト。凍てつき氷に閉ざされた地球。

凍てついた氷の中で生まれ変わり雄々しく浮上したヤマト。凍てついた地球の上で、懸命に誇りを捨てずに生きている人々の姿。

コウイチロウにはこの二つの事象が関連付けられて脳裏をかすめる。

あのヤマトの目覚めは、いまの地球がまだ死に絶えてはおらず、最善を尽くせばヤマト同様、再びあの青く美しい姿を、多くの命を湛えた素晴らしい生命の都として蘇ることを暗示しているようにも思えた。

だとすれば、ユリカもきつと——。

(アキト君……君なら立ち上がってくれるね？　ほかならぬ、ユリカのために)

ヤマト発進とガミラス撃退の映像は速やかに地上にも届けられた。

いままで難攻不落を誇ったガミラスにとうとう決定的な威力を見せつけたヤマトの雄姿は、人々を勇気付けた。

ヤマトなら、やってくれるかもしれない！

いままでは漠然とその名前のみを伝えられていたヤマトが、ついに現実となって人々の胸に刻み込まれる。

その名はすでに忘れさられた過去のものではない。

人類最後の砦を指す名前。

宇宙戦艦ヤマト。それこそが滅亡に瀕した地球が絶る、最後の対抗手段の名であった。

第三話 号砲一発！ ヤマトの目覚め!! Bパート

「こ、これはどうしたことだ……」

その光景を目の当たりにした冥王星前線基地司令、シユルツはわが目を疑った。

あの得体の知れない氷塊に怪しい動きがあると報告を受けたのは数時間前のこと。

懲りずに地球がなんらかの反抗を企てていると考えたシユルツは、デストロイヤー級五隻、内一隻は高性能な観測装置を装備した艦を出撃させ、偵察と、必要ならば妨害を指示した。——悲しいものだと思ししながら。

この間の冥王星近海での戦いすらも、シユルツにとっては無意味な抵抗としか思えなかった。

降伏すれば屈辱に塗れてでも生きるチャンスはあるというのに、勝たない戦いに幾度となく挑み、無駄に命を散らすさまはとても痛々しく、わずかな同情の念をシユルツの心に刻んでいる。

シユルツとて軍人だ。軍人として国の命令に従い地球を攻撃しているわけだが、そこに地球への憎しみや嗜虐心があるわけではない。軍人としての誇りを持ち、部下たちを大切にしてきたシユルツにとって、祖国を救うため命懸けで向かってくる地球艦隊に対してはむしろ敬意を覚えるくらいである。

だからこそ、同じ軍人として敬意をもって迎え撃ってきた。決して手を抜いたことはない。それが最低限の礼儀であり、死にゆく彼らの魂に対する報いであると。

先日の戦いもそうだ。囷となった駆逐艦を沈めたあと追撃を指示しなかったのは、その無力さをもって今度こそ屈してほしいという願いと、せめてもの情けがさせたもの。

そうしたシユルツのわずかばかりの憐憫の思いが、あの未確認の宇宙戦艦の出現に繋がってしまったのだろうか。

いままでの地球の艦艇ならデストロイヤー艦一隻だけでお釣りが

来るほどだったのに、今度は逆に自分たちのほうが容易く撃破されるとは。

送られてきた映像は数十秒程度と短いものであるが、シユルツは何度も映像を戻しては可能な限りのデータを集めるように指示を出す。

まさか、あの氷塊にそのような秘密が隠されていたとは。敵ながら完璧な防諜だったと賞賛するしかない。

「シユルツ司令。地球の放送を傍受したところによると、あの戦艦の名前はヤマト、宇宙戦艦ヤマトと言うそうです。また、ヤマトはイスカンダルに向かう、という内容も含まれていました」

「なにイスカンダルだと？　そうか、やはりこの間の宇宙船は……」
シユルツは歯噛みする。

どうやったかは知らないが、あのイスカンダルに救援を求めているとは……だとすれば先日の戦いはヤマトを完成させるために必要な使者を迎えるためのおとり作戦だった、と考えればあの無謀な戦いも納得がいく。

ヤマトとかいう宇宙戦艦の戦闘能力は決して軽視できない。わずかな映像ではあったが、あの距離から、しかも副砲クラスの武装でわが軍のデストロイヤー艦の破壊する威力……桁違いの性能だ。

あんな真似はわがガミラス軍の最新鋭戦艦、ドメラーズ級ですらできない所業。

だがイスカンダルが関わっているのなら領ける性能だ。あそこの技術力はガミラスにも勝るとも劣らないのだから。

「ガンツ」

シユルツは片腕とでもいうべき副官を呼び出す。

「はっ」

右手を掲げるガミラス式の敬礼をもって敬愛する司令官に答える小太りの男、ガンツ。

「すぐにこのことを本国に伝えろ。それと、デストロイヤー艦五隻と高速十字空母をすぐに派遣するのだ。航空戦力と連動して即刻ヤマトを攻撃する。だが無理はさせるな、まずはヤマトの分析が優先だ」
ガンツはすぐさま了承して通信パネルに向かう。

その姿を見送るとシユルツはモニターに映るヤマトの姿を睨みつける。

(地球人。その最後の抵抗の威力、しかと見届けた。だがわれわれにも引けぬ事情がある。必ずやこの手で打ち取ってみせるぞ、ヤマト！)

一方その頃。ガミラスの駆逐艦五隻を危なげなく葬り去ったヤマトでは。

「やったな古代！ 初めてにしちや上出来じゃないか！」

「おまえもだよ島！ 見事な発進だったじゃないか！」

親友同士仲良く互いを称え合う姿を、艦長席でユリカはほっこりとした顔で見つめている。

仲良きことは美しき哉。こういう友情というものは、見ているだけでも心が温まるものなのだ。

「そうそう、二人ともよくやったよ。艦長直々に褒めてあげる。いい子いい子！」

と言つて頭を撫でるジェスチャーをする。

本当に撫でてあげたかったがそこまで移動するのに時間がかかりそうだったので、ジェスチャーで我慢する。

ジェスチャーを受け、それぞれ違った反応を示す二人の姿も微笑ましい。

進は赤面して視線を逸らし、逆に大介は「ありがとうございます」と社交辞令的に会釈する余裕を見せる。実に対称的な二人だ。

「すごい……相転移砲ですらない、通常火器でこんなにもあつさりとい……これがヤマト……！」

ハリも想像の遥か上をいったヤマトの威力に興奮を隠せないらしい。

いままでの地球艦艇は、グラビティブラストで敵艦を沈めようとしたらそれはもう至近距離にまで接近して相打ち覚悟で撃ち合うしか

なかった。

しかしヤマトはこんな遠方からただの一撃で撃沈させられる。

あの苦難に満ちた戦いを退官したものであればこそ、ヤマトの威力は頼もしく映るのだろう。

「素晴らしい艦だ……これならガミラス相手でも不足ない。余程の大部隊でなければ対処のしようがあるだろう」

ゴートも興奮を隠せずヤマトを褒めている。

かつてナデシコで慢心し、火星で大失敗をした苦々しい記憶も思い起こされるが、それでも興奮せずにはいられなかった気持ちはわかる。

「まったくくだわ——ユリカが頑張った甲斐があったというわけね」

エリナも感慨深げに天井を仰いでいる。

たしかにこの一年余りの死に物狂いの行動の結果が、このヤマトに集約されている。

その戦いを支え続けた戦友である彼女にとっても、この小さな一歩が嬉しいのだろう。

ふと視線を機関制御席のラピスに向ければ、高鳴る心臓をなだめるように胸元に手を当てている。

かつて脱出船と侮った艦が、本当にガミラスにも通用する威力を秘めた戦艦だったのだと、痛感しているのだろう。

それに彼女も実によくヤマト再建に尽くしてくれた。その成果がこうして表れているのが嬉しいのかもしれない。

「機関部のみなさん、発進は成功しました。ひとまずはご苦労様です。引き続きエンジンの管理をお願いします」

と機関室に向かって労いと激励。

再び機関士達の「うおおおおおおお！」という雄たけびが響く中、「静かにしろ！」と山崎が叱り飛ばす声が聞こえた。

ラピスはそんな彼らの反応を意に介さず（いや理解できずにいるというほうが正確だろう）、「がんばってください」と笑顔で締めて通信を終えていた。

その様子を見た真田が思わず「妖精パワーとは恐ろしいな……」と

呻いている。うん、本当にそう思うよと、ユリカも相槌を打った。

真田はヤマトの性能に驚くよりも先にヤマトのコンディションの確認に余念がないようだ。なにしろ力尽くで分厚い氷の天井をぶち抜いたのだ。艦橋上部のアンテナ類が壊れていないかは気になるだろう。

——壊れてないけど。

「ユリカの努力が報われた。この艦ならガミラスの妨害があってもなんとかできる。あとは、イスカandalまでの道程か……」

副長席でジユンも感慨深げに目を閉じて余韻に浸っていた。

いままで散々辛酸を舐めさせられてきたガミラスに一矢報いた。ジユンもさんざん煮え湯を飲まされてきた軍人のひとり。感じ入るものがあるのだと思う。

ユリカは各々の反応を一通り観察し終え、さてこれからのことを、と口に出そうとしたとき、電算室からルリが戻ってきた。

なんとなくその姿を認めると同時に静まり返る第一艦橋。

「……真田さん」

感情を感じさせない無機質な声色に、真田もすつと背筋を伸ばす。

「な、なにかなホシノ君」

「なぜ、第三艦橋行き的手段がフリーフォールなんですか？」

「いやあ……戦闘中の往来も考慮すると、直通のエレベーターが便利だと思って、な。重力制御であまり加速度を感じないように調整してあるはずだが——」

「だとしても、怖いものは怖いのです。私、絶叫マシンとか馴染みがないもので」

ルリの底冷えするような声に艦橋の空気も凍る。——こあい。

「——ん、ごほんっ！ ル、ルリちゃん。いまさら改造なんてしてる余裕ないから、その、我慢してくれないかなあ、なんて、ははは……」

一応艦長としてフォローしようとして声をかけるが、ギギギという効果音が聞こえてきそうな動きでルリの首がこちらを向くと、ユリカがぎくりと硬直する。

「……そう言えば、ヤマトの再建にがつり絡んでいるんでしたよね、

ユリカさんは」

「は、はいい〜」

すっかり逃げ腰になってしまったが、艦長としてここで引けないと踏ん張る。

「もしかして、主犯はユリカさんですか？」

ルリの瞳が怖い。

じつとこちらを鋭く睨んでくる。

ユリカは艦長の威厳を奮い立たせて視線を受け止める。

ルリの瞳が怖い。

じつとこちらを鋭く睨んでくる。

ユリカはルリの視線の圧力に敗退した。

「ううううっ。そのお、第三艦橋に電算室を置こう、って言ったのは……わ、私ですう」

観念して白状する。

機関部と波動砲の改造で、艦体中央部に大規模なコンピューター室を置けなくなってしまったことは、再建中に問題視されていた。

そこでユリカは、以前のヤマトではあまり有効活用されていなかったらしい第三艦橋を使おう、という要望を出し、それが採用されていまに至る。

そう、ユリカは断片的なイメージしか継承していないため、第三艦橋を襲った数々の不幸を知らないのだ。

敵艦に張り付かれて爆破されたり、濃硫酸の海で溶け落ちたり、その後の航海でも被弾して大破したり、数々の強行着陸で艦体と地面に挟まれてしまったりとか。

そういった不幸の数々を、まったく知らないのだ。

「なるほど、よくわかりました」

「で、でも直通エレベーターを考えたのは真田さんだからあ！ 私じゃないからあ〜！」

ついに視線の圧力に負けて部下を売る。

艦長としてあるまじきその発言に「あ、ずるい」と真田も慌てる。

「まあいいです。……それより艦長、このあとの予定は？」

ルリは自分から話題を逸らしてくれた。

これ幸いとばかりにユリカは不自然なほど大きな声で今後の予定について語る。

「よ、予定、予定ね！ え〜ゴホンッ！ ヤマトは月軌道に到着後、小ワープのテストを行います。ワープ航法が成功しないことには、ヤマトはイスカンドルまで辿り着くことができません。ルリちゃんはハーリー君と協力してワープ航路の算出をお願いね。場所は結果がわかりやすい場所ならどこでもいいから。進路上に天体とかの重力源があるとワープ航路の湾曲はもろろんだけど、最悪ワープ空間から弾き出されて激突する危険性があります——今回は最初ということを入念な計算をお願いしますね。ただし、ガミラスの増援が来る可能性があるのでできるだけ急いで」

と、最後は艦長らしく凛々しい態度に戻って指示を出す。

言ってから気づいたが、その手の計算を確実にするためには、ルリは電算室にトンボ帰りする必要がある。

……要するに、フリーフォール第二弾決定。

おふっ……。

「了解しました——大丈夫、目を瞑れば怖くない、怖くない」

自分に言い聞かせながらルリはシートのスイッチを操作、髪の毛を両手で抑えて再びフリーフォールで電算室に移動する。

やっぱりハッチが閉じる瞬間に悲鳴が聞こえた。

トラウマにならなければいいのだが。ユリカと真田は頬に汗が流れるのを感じた。

ルリを見送ったあと「ちよつと休憩」とジyunに第一艦橋を任せて艦長室に上がった。座席をリクライニングさせて体を伸ばす。

やはり体力がナデシコCの時よりもさらに落ちている。ちよつと気張っただけなのに疲労感が強い。

逸る心臓を抑えるかのように痩せてきた胸元に手を当てて息を吐く。立ち上がるのも億劫なのでこのままシートで軽く休もうと目を瞑った。

どちらにせよそれほど間を置かずにワープだ——はたしてワープの負荷に体が持つだろうか。少し心配になる。

瞼の裏に思い浮かぶのは先程のルリの様子、くすりと笑ってしまふ。

発進から先ほどまでの出来事を振り返る。やはり自分は、『記憶』で断片的に垣間見た沖田艦長のように厳格な指導者にはなれそうにない。どうしてもナデシコのようになってしまふ。

それがいいことなのか悪いことなのかはわからないが、きつとこれが『私らしく』なのだろうと思う。

これからもこの調子でやっていこう、過度に沖田艦長を意識しなくてもけ躓くだけ——。

そこまで考えて不意に涙が流れたのを感じた。

なぜ泣いたのかすぐにはわからなかった。

だが気づいてしまった。

いままで必死だったから考えずに済んだ、目を逸らしていられた事実にはユリカは気づいてしまった。

空虚感だ。

あの時、第一艦橋の雰囲気はまさにナデシコそのものだった。

明確な上下関係があるはずなのに緩くて、艦長だろうと平気で睨まれて萎縮して、変なバカ騒ぎをして……だからこそ強く意識してしまふ。そこにいたはずの、いつもユリカの心を支えてくれていた王子様の姿が——ここにはないことに。

ととめどなく涙が溢れてくる。

いけない、持ち直さないと、旅は始まったばかりなのにこんなんじゃない、最後までとても持たない。

……気が付くと声に出して泣いていた。溢れだす感情を抑えることができない。

(アキト……ずつと我慢して我慢してここまで来た。イスカンダルからの薬で体は少し楽になった。ヤマトの完成で、さあこれからだつて気合も入れたけど。けど……やっぱり、寂しいよ。ナデシコの雰囲気に近いと、どうしてもあなたのことを思い出して、寂しいよ……心

細いよ……アキト——会いたいよ、そばに……いてほしいよ）
声にならない懇願が、艦長室に木霊した。
その慟哭を聞いていたのは、ヤマトだけであつた。

時間は少し遡る。

アキトは自室で燻り続けていた。

話し相手と言えたイネスもエリナもラピスも月臣も、みなヤマトに乗るための訓練で地球に降りてしまった。

新型機のテストも完了して、今頃はヤマトに搬入されている頃だろう。つまりテストパイロットとしての出番はもう、回ってこない。

みんなビデオメッセージで「ヤマトで頑張ってくるから留守をよろしく」などと一方的に告げて行つてしまったので、このひと月ほどは他人と会話していない。

イスカンダルの技術のおかげで五感は回復したし、後遺症らしい後遺症もみられなくなったのは、いまは嬉しく思っている。

あれだけ無意味なんだと悲観していたのに、いざ回復してしまえば失われたはずの感覚がもたらす刺激が嬉しくて仕方がない。

現金なものだ。

自重するアキトだったが、いまはその喜びを分かち合う相手も、喜んでくれる相手もない。

孤独に朽ちていくことを望んだはずなのに……。

そんな状態が長らく続いていた。

アキトがベッドの上で何度目かもわからない寝返りを打つていたとき、突然アカツキからモニターを点けて放送を見てみると言われた。ほかにすることもないし忘れられていなかったことが妙に嬉しくて、疑いもせずモニターを転倒させたのだが——。

「……なんなんだよ、これは……！」

点灯したモニターには、ある意味アキトが一番恐れていたものが映し出されているではないか。

艦長服と思わしき制服を着て壇上で語るユリカの姿。

久方ぶりに見る妻の姿について胸が熱くなったのは一瞬だけだ。高

感度カメラで撮影されたであろうそれは彼女の姿を鮮明に映し出していた。

だからこそ気づいてしまった。

彼女の体の異変に。

化粧で誤魔化しているようだが顔色が優れないように見えるし、どこか体の動きが緩慢で億劫そうに見える。

それに杖を突いて歩いてる……。以前のユリカにあった、溢れんばかりの活力がない。

アキトがいつの間にか惹かれ、愛するようになった、周囲すらも明るく励ますあの活力がほとんど感じられない。

映像中のユリカはアキトの印象とは裏腹に、力強い言葉で目の前に整列している人々にヤマトとはなにか、これから自分たちがなにをするのかを説いているが、そんなものは頭に入ってこない。

明らかにユリカは異常だ。

あそこまで極端な衰弱が普通なわけない。考えられる可能性はひとつ。人体実験の後遺症だ。

それも、自分よりもずっとずっと悪い。

——悪い予感の中した。ユリカはやはり、あのヤマトに関わっていたのだ。それもかなり深く。

「アカツキー！」

アキトは映像を最後まで見届けることなくインターフォンに飛びつき、アカツキを呼び出して問い詰めた。

「これはいったいなんだ、どういうことだ！　なんでユリカがヤマトに乗るんだよ！　どう見たって入院が必要な重病人じゃないか！」

そんなアキトの様子を感情の籠らない目で見るアカツキ。

その態度にアキトは無性に腹が立つ。感情のままに喚き散らそうとしたアキトを止めたのは、アカツキの落ち着き払った言葉だった。

「なぜって……そもそもヤマトを再建しようって言い出したのはユリカ君なんだけど？」

アカツキの言葉にアキトの心臓がキュツと縮まる。

「いやあ、彼女は凄いなえ。余命五年を宣告されてボソソジャンプし

ちや駄目って散々念押しされたのに、『ヤマトを再建しないと終わりだから私が頑張ります!』ってわが身を鑑みずにヤマトの再建に必要な下準備とか物資の輸送とかでとにかく跳び回って、八面六臂の大活躍ってやつ? それで余命半年を宣告されたのに今度は『私がヤマトをイスカンダルまで導きます。絶対に地球を救って見せます』って艦長に就任しちゃうんだもん。艦長の激務やストレスで半年持たずに死にかねないってのに——本当に凄いや彼女は。もうさ、死んだっていいからとにかく世界を救いたくて仕方ないみたいだね」

先ほどとは打って変わった変わった茶化した言い回しに、ギリツと奥歯を噛みしめたアキトが激怒する。

「ふざけるな! なぜ止めなかった!? 実験の後遺症なんだからあの弱りかたは!」

「止めたって聞き入れなかったんだよ。彼女は自分の命と引き換えに少しでも、君が生きているこの世界を護ることを決意したんだ」

アカツキの切り替えしにアキトは絶句する。

(——俺の、ため? ユリカは、俺を見限ってなんていなかったのか?)

「彼女は君がなにをしたのかすべて知っているよ。コロニー襲撃はもちろんのこと、エリナ君とのこともね」

「なっ!?!」

「まあゲロツたの僕だけどね。聞きたがってたから」

「おまえ……!」

「おやおや、別に僕は秘密にしてくれて頼まれたわけじゃないし、美女の頼みは断らない主義なんでね」

やれやれと首を振るアカツキの態度にアキトはいてもたってもいられなくなつて、非常用のCCを使ってアカツキのところに跳ぶ。

ジャンプしてきたアキトの姿を認めたアカツキは「あ、やつぱり来た」と呆れたような喜んでるようなよくわからない顔をする。

「まあ掛けたまえテンカワ君。話をしようじゃないか。それほど時間はないと思うから手早く行こう」

「艦長、ワープレストのプランが完成しましたので、第一艦橋に降りて来てください」

なんとか泣き止んで気持ちを持ち直したユリカは、エリナからの呼び出しを受けて艦長席を第一艦橋に降ろす。

さすがに第三艦橋直通ほどではないが、これも少しだけ怖いシステムだ。でも便利なので好き。

艦橋に降りたユリカは、少し涙目のルリを見つけて口の端が引きつる。

やっぱり怖い物は怖いらしい。

真田も気づいているのだろう、ものすごく居心地が悪そうだった。

「ハーリー君と協議した結果、月―火星間なら障害物もなく、重力場の影響も少ないので最適だと判断しました。どう思いますか？」

とルリがユリカの前にウィンドウを送って意見を求める。

データを見る限りでは問題がなさそうだ、そう判断したユリカはすぐに決断した。

「よし、このプランで行こう。準備にどれぐらいかかりそう？」

「機関部門は準備に二時間ほど必要と判断します。エネルギーの充填はともかく、ワープエンジンの操作手順を改めて確認しておきたいので」

機関制御席のラピスが計器類を見ながら報告する。始動したばかりのヤマトはエネルギーの備蓄も十分ではない。手順の確認も含めて、時間が必要なのはたしかだと頷く。

「そっか。わかった。でもできるだけ急いでね。いつガミラスに邪魔されるかわからないから」

「わかりました、艦長――少し席を外しても構いませんか？」

「？ 別にいいけどどうしたの？ トイレならエレベーターの横にあるよ。」

「違いますー！」

ラピスが顔を赤くして否定する。おや、間違えたか。

「手順確認ついでに、部下の激励してきたので」

「ああ、なるほどね。それなら問題ないよ、行って来てあげて」

「ありがとうございます。では後ほど」

と言って座席を後退させて立ち上がると、軽く会釈をして第一艦橋をあとにする。

「あの子も変わったわね。昔はあまり感情を表に出さなかったのに」

感慨深く語るのは、最も関わりの深いエリナ。

言葉は必要最低限、歯に衣を着せぬ発言が多かった。しかし最近では教育の成果なのか、言動に変化がみられる。

ただ、やはり実社会での経験値が少ないためか割と天然気味なのが気にかかるところ。

と、先日エリナに語ったら「あなたが言っても説得力がない」と言われてしまった。どういうことだろうか？

「人って、変わるものですから」

何気なく言ったつもりだったが、旧ナゲシコ組の面々は表情が曇った。

しまった、やぶ蛇だったか。きつとみんな、アキトのことを……。

この調子だと目が充血気味で瞼も腫れぼったいことにも気づかれているのだろう。

その理由もおおよそ見当がつくだろうからそつとしていてくれるのだと気付くのは、難しいことではない。

……これ以上この空気であることは耐えられそうにない。ユリカは話題を変えるために真田にも念を押しておくことにした。

「真田さん、艦内のチェックを急がせてください。それと、ワープ明けしたら艦の再チェックも怠らないように。昔のヤマトのデータを基に復元したといっても、あちこちに手を加えていますから。どんなトラブルが起こるかわかりません」

「わかっています、艦長。ウリバタケさんにも言っておきますよ。もつとも、言わなくても今頃あちこち艦内を駆けずり回ってるでしょうがね」

暗に気遣ってくれたのだろう、冗談めかして語る真田に感謝する。みなもそれに乗ったのか、それともウリバタケの所業を知るからだろうか。全員が苦笑いの表情。

……いや実際後者の比重も大きいのだろう。実際のところ、いざやマトに乗り込むなりウリバタケはテンションも高くあちこちで騒いでは、壁に頬擦りしたり未知の技術に目を輝かせ涎を垂らしたりと、周りがドン引きするほどの盛り上がりがあった。

そりやもう出航の緊張感とかヤマトの使命感とかが、銀河の彼方に吹っ飛びそうなくらい。

やはりと言うかなんと言うか、ヤマトの再建計画に関われなかったことも悔しいらしく、いろいろとデータも漁っている様子。おそらく彼なりに改造計画でも練っているのだろうが、「ヤマト自爆スイッチ」とか「第三艦橋特攻爆弾」とかを勝手に設置されては困る。

ロマンだ何だと、かつてアキトの屋台に色々 unnecessary ギミックを仕込みまくったことを、ユリカは忘れていない。

あの男は必ずヤマトを見ればそういつたギミックを仕込むに違いないという疑いを、ユリカは払拭できなかった。要監視体制を引いたほうが無難だろう。

ユリカにしてみれば新型機動兵器の開発に関わられただけマシだとは思うのだが、技術者魂とやらが納得しないらしい。……あの新型を「機動兵器版ヤマト」としか形容しようのない怪物に仕立て上げた張本人のくせに。

つくづく配備が間に合わなかったことが悔やまれるが、肝心のウリバタケがあまり騒がないのはなぜだろうか。

しかし追及している時間はなさそうだ。これからのテスト準備も忙しいし。

「相変わらずですよねあの人は。奥さんとお子さん、心配しているでしょうに」

とはジュンの言葉。

そもそもユリカがウリバタケに声を掛けなかったのは、奥さんと子供のそばにいてあげて欲しいという個人的な要望による。この一大事だ、離れるのは辛かろうと。

だから新型機の開発にしても実際にテストを行っていた月面ではなく、地球に滞在したまま携われるようにさまざまな配慮がされたと

いうのだが。あまり感謝はされていないようだ。

「ああ、そうだそうだ。念のためクルーの皆にワープについて説明しないといけないね」

ユリカ自身はワープ航法は勿論、ボソンジャンプに関する知識はかなりあるほうだが、みなはそうではない。

彼女は演算ユニットと弱々しいながらもリンクを保っているため、意識していれば自分の周囲数十キロの範囲で空間の歪みを知覚することができる。

これはユリカの体がいまや演算ユニットの端末に近い存在へと変貌しつつあるからこそ得られた、副産物とでもいうべき能力だ。つまり、それほどまでに彼女の体はナノマシンに侵食され、改変されているということ。

先の冥王星海戦でユリカがガミラスの小ワープ戦法への反応が早かったのは、彼らの次の手を予測していたのもそうだが、その超感覚とでもいうべき代物で知覚できてしまったから、というのにも含まれている。

いまでこそイスカンドルの治療薬でナノマシンの活性化を強引に抑えているので知覚はできなくなったが、そうでもしないとワープのたびにナノマシンが（ジャンプ時ほどではないが）活性化して、早々に倒れてしまうかもしれないほどユリカの体は不安定であった。

「わかり易さもそうだけど、できるだけみんなの緊張も解きたいし……いっちょやるしかないかあ……医務室に繋いで」

エリナはユリカの言葉の意味を悟ってか顔が歪んでいた。

「まさか、やるの？」

エリナの様子に真田もユリカがなにをしようとしているのかを感じづいた。

彼女とは同僚ではあるし自身も仕事の関係でやるにはやるし、楽しいのだが……彼女のあれはもはや趣味の領域で無駄に凝っている。

正直あのノリにはあまり巻き込まれたくはない。

——まあ自分の話題についてこれる女性なので好ましくは思っ

いるが。それはそれというやつだ。

「やりませす——恥ずかしいけど乗組員に過度な緊張をさせるわけにはいかないのです、ガス抜きも兼ねて。ルリちゃんも覚悟を決めてね！」
「えっ……？ まさか、ただ単に話すだけじゃなくてあれやるんですか？」

察しがつかなかつたらしいルリも、ようやく悟ったようだ。ご愁傷さま——。

「うん。恥ずかしいけど恒例だしね。中央作戦室ならスペースは十分だよな？ エリナ、悪いけど着替え手伝ってくれないかな？ ひとりじゃもう満足に着替えできないから……」

「ギャグ展開にしれつと深刻な話題を挟まないでよ！——ああもう仕方ないわね。ほら移動するわよ」

呆れた顔で言いながらもエリナは通信席を立ち、杖を突いて歩くユリカの傍らに寄り添う。なんだかんだ言いながら面倒見のいい、素晴らしい人だと思う。

中央作戦室はヤマトの艦橋（鐘楼）の土台部分にある。

第二艦橋の二倍近い面積の巨大なブリーフィングルームで、床には高解像度のモニターに立体映像投影装置などが設置され、第三艦橋の電算室ともリンクし、大容量のデータも軽々扱える施設だ。

当然、今回のような用途で使うような場所では断じてない。

「あ、ついでに真田さんも参加してね」
「ええっ!？」

予想外の飛び火だった。

一方ラピスは宣言通り機関室に足を運び、電子と紙、双方のマニュアルを突き合わせて手の空いている機関士たちと、システム操作手順と注意事項の確認を行っていた。

なにしろ完全に未知のエンジンであるため、全員が一様に不安を顔に張り付けながらの作業となった。

ラピス自身もプログラム関係や計器を見ての制御はともかく、実際に工具を持ってエンジンに触れられるほどの工学技術を持ち合わせ

ていないため、不安はあった。

が、上司として勤めて表に出さないうように心掛け、部下たちの不安を和らげるべく、柔らかく微笑んで「あなたたちならきつとできます」と鼓舞する。

笑顔が人の心を和らげるのだということは、ユリカから学んだことだ。だから自分もそれに倣っていく。

ラピスは自分なりの決意を固めヤマトに乗った。

無論機関士と言うわけでもないラピスが長に収まることを嫌がった者もいた。当然だと思う。年端もいかない小娘であるし、体格的に力仕事には不向きであるし、なにより手先の器用さというか技術力という点では、ベテランどころか学校を出たばかりの新人にも負けていると思っっている。

だがコンピュータプログラムに関しては自分に勝るものはいない。いるとしたらそれは部署の異なるルリかハリだけ。それにエンジンの再建に深く関わった自分は接続された六連相転移炉はもちろんのこと、波動エンジンのメカニズムにも理解が深い。

全体を統括してデータ処理したり、エネルギー分配の管理ならベテランにだって負けはしないと意気込んで実力を見せ、副官として叩き上げの山崎が付くことを条件に長となった。

その決断を裏切らないためにもしつかりしなくては。

「この手順なら問題なさそうですね。あとは本番で結果を出して、乗組員全員にわたしたちの実力を見せつけましょう。みなさんの実力を発揮すれば大丈夫。頑張っていきましょう」

と締め括り機関室での準備は終わった。解散した機関士一同は所定の配置に付き、ワープレストの準備を進めていく。

「ふうっ」と軽く息を吐いて第一艦橋に戻ろうとするが、慣れないことの連続で疲れたのか少しよろめいてしまう。

それを支えてくれたのは、資料の片づけを手伝ってくれた太助だった。

「大丈夫ですか、機関長？」

「大丈夫。ちよつと足がもつれただけ——ありがとう徳川さん。徳川

さんこそ気を付けてね。頼りにしてますから」

と頭を下げて微笑をプレゼント。これは普通に感謝の気持ちだ。太助は赤くなつてどもりながらも「大丈夫ならいいんです！」と送り出してくれた。

ラピスはどこことなく嬉しそうな太助の様子に「自分でもちゃんと人の上に立てるんだ。これからもこの調子で頑張ろう」と軽い足取りで機関室をあとにしようとした。

その時、独りで艦内の至る所にフライウインドウが立ち上がった。使われていなかったモニターが起動して、軽快な音楽が流れだす。「三……二……一……どつかあくん！なぜなにナデシコ……!!」という、ユリカとルリの声が突如として艦内に響いた。開いたウインドウとモニターはすべて同じ画面を映している。

映像にはウサギさんの着ぐるみを着たわれらがミスマル・ユリカ艦長と、児童向け番組の司会のお姉さんとでも言うべき格好をした、チーフオペレーターのホシノ・ルリの姿が映し出されていた。

ついでに端っこのほうには頬を羞恥で赤くした、トナカイの着ぐるみを着せられた工作班長、真田志郎の姿もある。

艦内の全員がいきなり始まった得体の知れない番組に固まる。

「おーいみんな、あつまれえ〜。なぜなにナデシコの時間だよ〜！」
「——あつまれえ〜」

とノリノリなようでやっぱり恥ずかしくて頬を赤くしたユリカと、同じく恥ずかしがって赤くなっているルリ。

その横で「なぜこうなつた」と己の不運を呪っている真田と、カオスな状況が映し出されている。

背後には『なぜなにナデシコ!! ヤマト出張篇〜初めてのワープ〜』などと書かれたがセット置かれている。ご丁寧にクレヨンとか鉛筆で書いたような丸っこくて、本当に児童番組そのものの字体。

ついでに役者たちの前には、これまた児童向け番組に在りそうな紙芝居とか人形劇とかで使いそうな舞台のセットが置かれている。

悲壮な覚悟と崇高な使命感をもって乗艦したはずの乗組員達は困惑を隠せないでいる。だが唐突に悟った。

たしかにあのユリカの演説は正しい。

彼女も相応の覚悟と使命感を持っていることは疑う余地がない。

だが、彼女は、彼女は。

——いろいろな意味で著名な『あの』機動戦艦ナデシコの艦長さんだったのだ。

「えっ……なにこれ？」

ラピスのセリフは、おそらく初めてナデシコのノリに触れる全員的心情を代弁していたと言えよう。

ただしラピス自身は頬を染めて「ウサギなユリカ姉さん可愛い。モフモフしたい」とか少々見当外れな感想も抱いていた。

なお、解説自体は児童向け番組の体制を取ったことから、非常にわかりやすくかつ丁寧にワープについての情報を乗組員一同に伝えることに成功し、思いのほか好評ではあった。

ヤマトのワープシステムは、波動エンジンの後部に取り付けられた『イスカンドル製ワープエンジン』を使用して機能する。

このエンジンと、波動エンジンが生み出す波動エネルギーの時空間歪曲作用がなければ、イスカンドル方式のワープ航法は成立しない。

波動エンジンが生み出す波動エネルギーとは、言うなれば『波動エンジン内部で生成される、自然界には存在しない超高出力タキオン粒子の発する波動』だ。

波動エンジンの内部でなければ生成できないというのがミソで、仮に自然界に存在するタキオン粒子を収集したとしても、ここまで効率的に時空間を捻じ曲げることはできない。

ヤマトはこれを、ワープエンジンと一体になっている『空間歪曲装置』に利用し、効率的に時空間を歪曲することで、ワープに必要なゲートを開いているのだ。

エネルギー消費量自体はすべてを使い切る波動砲よりはマシンだが、かなり激しい部類に入る。

従来のヤマトでは、エネルギー増幅装置であるスーパーチャージャーの搭載と合わせて、ワープを複数回連続で行うことで超長距離を一気に移動する『連続ワープ』が可能であった。

無論、新生したヤマトもスペック上は同じワープ、いやそれ以上のワープができるだけの出力を有している。もしこれが使えれば、イスカンドルまで一カ月未満という凄まじい速度で到達が可能になると試算が出ているほどだ。

しかし新生したヤマトはデータの欠損などの影響もあり、肝心の連続ワープ機関の復元がまるで行えなかっただけでなく、艦全体の完成度が以前のヤマトに及んでいない。

技術的に未熟であるにも拘らず、背伸びした改修を加えた弊害とあってしまえばそれまでではあるのだが。

特に、ワープに伴う人体への負担の問題が深刻で、いまの段階で無理に実行しようものなら、ワープに伴う強烈な加速度と空間歪曲の負荷で命を落とすのが確実とされている。

そのためワープに必要なエネルギー自体はむしろ有り余っていると言っても過言ではないにも拘らず、艦体への負荷はもちろん、人体への影響などを考慮した結果、最低でも二四時間以上のインターバルを置くことが望ましいとされ、ヤマトの航海スケジュールもこれをもとに算出されている。

今後の航海でデータを収集し、ワープシステム関連の改良が進められるのであればオリジナルには及ばずとも、限定的な連続ワープの再現は可能かもしれないと言われているが、工場区画を持つヤマトと言えど、航行中での改良には限度があるため基本ないものと考えられている。

それでも、いまのヤマトは単発のワープであっても最長二〇〇〇光年は跳べると試算が出ており、今後のエンジンの調整次第ではもう少しは伸ばせるとも言われている。

また、最長距離はあくまで理論値である上、実際は天体の重力場だったたり空間歪曲の具合などで変動するたまた、常にその距離を飛べると言うわけでもない。

銀河の中は星々や、その中央にあつて銀河を形成している超大質量ブラックホールの重力場、銀河間空間では銀河同士が重力で干渉しあっているとも言われているなど、大なり小なり影響を除外する事は

難しいのだ。

それに、ワープ航路を選定するためにはコスモレーダーによって広大な宇宙の詳細な観測が要求されるが、そのレーダーの感度は周囲の環境などで左右されるため、ワープの限界距離を決定付ける要因のひとつであり、ヤマトはその性能も以前に比べて衰えていると考えられていた。

……までは予定どおりの内容だった。が、イネスが悪乗りしたこと
で内容が脱線していき、以下の内容が追加された。

それは波動エネルギーの活用についてだった。

波動エンジンからエネルギーを取り出す際、波動エネルギーはその
エネルギーを電力などに変換される。

エンジン内部のタービンやエネルギー変換装置などを使用して行
われ、エネルギーを失った波動エネルギーはただのタキオン粒子にな
る。

タキオン粒子と波動エネルギーは似て非なるものであり、タキオン
粒子を波動砲と同じ手順で撃ち出したとしても、威力は格段に見劣り
する。

また、波動エネルギーの作用で強化されているデイストーション
フィールドやグラビティブラストに関しても、同様の威力は出ない。

しかしヤマトの補助エンジンを除外した推進機関全般は、この搾り
かすでも言うべきタキオン粒子を反動推進剤にすることで、莫大な
推力を得ていると説明された。

ちなみに『なぜなにナデシコ』放送されたあと、ただでさえ高かつ
たルリの人気はまた一段と跳ね上がり、戦後は知名度が低かったユリ
カも『いろんな意味で』乗組員の心を掴んで人気者となった（顔を赤
らめ、普段の物と違って可愛い装飾のされた杖を使いながら、ヨタヨ
タと着ぐるみ姿で動く様が、なんか可愛いモフりたいと評されたこと
が原因）。

惜しむらくは病気のせいでかつての美貌が損なわれていることと、
人妻であることか、と言うのは某メガネの技術者の談（なお「人妻が
こんな格好で」と一部マニアックな層には受けたとか）。

この映像は、後に疲れた一部乗組員たちの心を癒す清涼剤になったとかならなかったか。

同時に付き合わされた真田には各所から同情の念が寄せられ、しばらくは誰もが無言で労を労ったものだ。

——笑いをこらえた顔で。

余談だが、撮影セットの横ではただでさえ筋力が低下して久しいユリカが、着ぐるみ姿でヨタヨタと動いているのをハラハラと見守るエリナがいたり、久しぶりのセットをぱっぱと用意したウリバタケが別カメラでこの映像を撮影して、後に『転売』したり、脚本と演出を担当したイネスは感無量と満ち足りた顔をしていたり、万が一ユリカが倒れた時に備えて医療セットを抱えて見守る雪がいたり。

中央作戦室も結構大変な状況になってたという。

おまけのおまけとして、撮影後に中央作戦室に突入したラピスは、着ぐるみを脱ぐ前のユリカに抱き着いて、思いのほか毛並みのいい着ぐるみに頬擦りしたり抱きしめて貰ったりしてご満悦だったり。

——ルリも便乗したとか。

そんなバカみたいな展開を挟みつつも、第一艦橋でもワープの緊張感が徐々に支配し始め、特に運行責任者である大介は操作手順を繰り返し何度も確認し、額の汗を幾度も幾度も拭っていた。

なぜなにナデシコを見た時は、隣の進と一緒に爆笑しながらも内容にしきりに感心していた大介だが、いざ本番が近づくと生来の生真面目さから徐々に余裕を失っていった。

そんな大介に横からハンカチが差し出される。隅のほうに花の刺繍がある白いハンカチ。女性が好みそうなデザインだ。

「そんなに緊張していたら、体が持たないわよ」

ハンカチを差し出したのは、生活班長の任についている森雪だった。

本来艦橋とは無縁のはずの雪なのだが、ユリカの介護担当者でもあつたため第一艦橋への入室自体は認められている。艦長室にもフリーパスで入れるのは彼女とイネス、ついでに進むくらいだろう。

また、意外と才女なのでその気になればオペレーターとしても役に立つ技量を有するため、普段は空席の副オペレーター席に着席してルリのアシストを行うことも任務に含まれている。

普段は艦の生活必需品の補充や清掃、調理部門やら医療部門やらの統括者として結構忙しいらしいのに。

しかしそれを軽々こなしてしまう要領の良さが、彼女の強みであり魅力なのかもしれない。

いまもきつと、仕事の合間を縫って友人である大介の激励に來たのだろう。

「そうだぞ島。いまからそんなんじや、イスカandalどころか太陽系を出る前に石像になっちまうぞ」

雪に便乗して隣の進も軽口を叩いている。——いまはこういうふたりの気遣いがありがたく思える程度には、大介もふたりに心許していた。

進とは学校以来、雪とはナデシコで出会って以来の付き合い。特にこの三人はユリカを交えた輪の中に取り込まれただけあつて結束が強い。

進とは雪を奪い合う間柄であるので牽制は多少飛び交うが、それでも友情に亀裂が入るのかと言われれば強く否定できる。もしもこの想いが果たせず雪を持つていかれたとしても、祝福できるだろうと思う。

「ありがとう、二人とも。だがな、メカニズムが完璧に動作したとしても、俺が操縦ミスをしたらヤマトは終わりなんだ。緊張するなつてほろが無理だろ」

雪から渡されたハンカチで汗を拭う。

そんなとき、なぜなにナデシコを終えて艦長席に戻ってきていたユリカが、

「まあこの場合は両方とも正しいかな。でも大介君、肩の力を抜かないと却って失敗しちゃうってのは本当だよ。リラックスリラックス」

これまた軽く笑い飛ばした。

「しかし」と反論すると「しょうがないなあ」と艦長席を立ち、杖を突

いて歩くと大介の隣に移動すると身を屈めて、

「ふう……」

優しく耳に息を吹きかけられた。思わず「わあっ」と飛び上がった大介を見てケラケラ笑っている。

「だからリラックサだよ大介君。なんなら私と進君で脇をくすぐってあげようかあ？」

杖から放した右手をワキワキさせる。進も便乗して両手を掲げて指先を動かしながらニヤニヤと笑う。

この二人、本当に仲良くなつたものだ、と思いながらも大介は「もう大丈夫です」と大きく息を吐いて椅子に体を預ける。

多少強引であったが大介は肩の力が抜けるのを感じた。慥然とした表情をしながらも心の中で感謝の言葉を贈った。

そんなやりとりを一步引いた位置から見ていたエリナは、どうしても痛ましい気持ちを隠せないでいた。

急になぜなにナデシコを始めたことといい、ユリカが自分を抑えられなくなっているのは明白だった。

いままで抑えてきた反動が来ている。彼女はこの一年余りにも無茶を重ねすぎた。むしろよく我慢してきたと思う。

いままで彼女を支えてきたのは間違いなく心の、意志の強さ。

それがブレてしまえば、きつと崖から転がり落ちるようにあれよあれよという間に弱り切って……。

ずっと見てきたのだ。ユリカが血反吐を吐きながらすべてはアキトのためにと必死になつていたさまを。

『——エリナさん。どうして、どうして私は、私たちは、こんな目に遭わないといけないんですか？ 火星に生まれたから？ 私は、私はただ私らしくいられる場所が欲しかっただけ、アキトと一緒に、どこにでもあるような普通の家庭を持ちたかっただけなのに、なんでなんですか？ 火星に生まれただけで、なんでこんな思いをしなきゃいけないんですか？ 私は、私たちは、実験素材にされるために生まれてきたわけじゃないのに……！ 助けてエリナさん、助けて、助けてよお——』

疲労と本人曰く、全身がバラバラになりそんな激痛で倒れたユリカが、いつになく弱気になって自分に縋り付いて来た時のことを、ふと思いつく。

いたたまれなかった。

かつては自分も彼女らを食い物にしようとしていたことを思い出す。その時はとにかく胸が痛かった。

ナデシコに乗らなければ、例え火星の後継者が生まれなくても自分たちが彼女たちに同じような仕打ちをしていたかもしれないのだ。

絶対に報われて欲しい、このまま悲劇的な末路を迎えて欲しい。

そうでなければ、本当の意味で自分はアキトを諦めることができない。

仮に彼女が死んでアキトを手に入れる機会が来たとしても、ユリカの存在に一生縛られることになる。

彼女の犠牲なくしてアキトと結ばれることはない。だが彼女を失うのはいまの自分には辛い。彼女を犠牲にしてまで遂げるべき思いではないのだ。

絶対に死なせたくない。生きて、彼のところに送り返してやりたい。

だが、彼女の生存は、それこそ奇跡が起こらない限り絶望的なのだ。その奇跡を起こせるのは、このヤマトとイスカンドルだけだとエリナも疑ってはいない。信じるに足る情報は、エリナもユリカを介して得ている。

いまはその奇跡に掛けるしかない。

……彼はまだ、燻っているのだろうか。

ユリカの意向もそうだが、いまの彼では戦えないだろうと置き去りにしてきたアキトのことを思い浮かべる。

彼がここにいてくれたら……ユリカはイスカンドルまで安泰だろうに。せめて帰るまでには気持ちの整理をつけていてほしいが……。

「ワープレスト三〇分前。各自は所定の位置にて待機ね」

島をからかい終えたユリカが艦内放送で指示を出している。

嗚呼、彼女はいま心の中で大泣きしているのではないか。後ろ姿をみればわかる。この一年、ずっと見てきた背中だ。

それでも艦長として立派であろうと表情には出さないように努める姿のなんと痛々しい。

——助けてやれない。自分では。

彼以外には、救ってやれないのだ。

ユリカの指示を受けて、いよいよと緊張が高まる。

各々がワープの手順や注意事項を思い出す……。のだが、なぜなにナデシコが連想されて顔が緩む。緊張感を削ぐほどではないが、いい意味で肩の力が抜けてテキパキと作業を進める事ができている。

最初は驚いたが、案外有効なブリーフィングなのかもしれない。そんな考えが浮かぶくらいには心に余裕を持てた。

それを吹き飛ばしたのは、予想どおり攻撃を仕掛けてきたガミラスだ。

「艦長！ レーダーに反応、ガミラスの艦艇が接近中！ 数七、空母が二隻含まれています！」

ワープテストのデータ収集のため第一艦橋に上がってきたルリの報告が響く。

雪はすぐに第一艦橋を飛び出して自分の担当部署に戻り、ユリカも杖を突き、遅々とした足取りで艦長席に戻る。

「推定距離八〇万キロ。月の影になっていたため探知が遅れた模様です。接近してきます」

「こちらを射程に捉えるにはまだかかるはずだ。古代君、ヤマトはワープテストのためにすべてセッティングされていてどの武装も使えない。航空隊の発進用意をするんだ」

ジユンが対応の遅れているユリカの代わりに指示を出す。

「了解！ コスモタイガー隊はただちに攻撃の準備を！ 艦長、俺も出ます！」

「気を付けてね進君。あなたたちなら勝てる！ 私信じてるから！」

ユリカの激励を背に受けて、進は艦載機格納庫に向かって走り出す。

なにがなんでもヤマトを護つて見せる。
この艦が、ヤマトが人類最後の希望なのだ。
ワープテストの邪魔はさせない。
俺たちが、最後の希望なのだから！

ついに出航した我らが宇宙戦艦ヤマト。

人類は君に全てを託しているのだ。負けるなヤマト、決して折れてはいけない！

再び奇跡を起こす時が来たのだ！

地球生命滅亡と言われる日まで、

あと三六五日

第三話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第四話 ワープテスト！ 出撃、ダブルエックス!!

それはもうひとつの希望への力

第四話 ワープテスト！ 出撃、ダブルエックス!! Aパート

ガミラスの襲撃を受けて第一艦橋を飛び出した進は、移動しながら艦内服の襟元に隠された気密確保用のインナーを顎まで引き出し、戦闘指揮席から持ち出したヘルメットと電磁的に密着させ、気密を確保する。

このヘルメットは衝撃吸収能力に優れ、高圧縮酸素ボンベを内蔵し、気休め程度だが空気の清浄装置も内蔵されている。

そこに袖に密着する造りになっている袖の長い手袋を身に着けると、艦内服はそのまま簡易宇宙服となる。この機能は以前のヤマトからそのまま継承された機能で、このままの装備でも一時間程度なら宇宙空間で活動することすら可能としていた（推進器がないので『溺れてしまう』が）。

走りながら準備を終えた進が格納庫へ続くドアを潜る。眼前に広がる格納庫は、再建に伴う大規模な改装を施され、以前にも増して機能的になっていた。

格納庫の艦首側の壁面には新たに管制塔が設けられ、艦尾側の壁面も含めて電光掲示板が新設されて、パイロットや作業員が情報を共有しやすくなるなど配慮されている。

両側面の壁面には上下二段に区切られた格納スペース（左右合わせて六〇スペース）が設けられているのは変わっていないが、エレベーターとターンテーブルを使って移動させていたままでと違って、ロボットアームによる運搬方式に改められたことでより迅速かつ下段の機体からしか発進できないという欠点が解消されている。

さらに発着口が二つ増設され、前後に並んだ形になっていた。艦尾側の一回り小さい方が通常の機体、艦首側の一回り大きな方が重爆装備の大型機用と、機体に合わせて選択可能にすることで、より効率的な離発着を可能としているのだ。

そして新生ヤマトの艦載機としては、アルストロメリアとその強化パーツまたは高性能戦闘機として配備されている、Gファルコンの姿があった。

Gファルコンは支援戦闘機とも呼ばれている。機首を構成するAパーツと、胴体を構成するBパーツが合体して完成する、分離合体機能を備えた戦闘機だった。

Aパーツは主にセンサーユニットの役割を果たしていて、戦闘機のコックピットのような意匠の部分や、機首に内蔵された高感度センサー（光学カメラやレーダーなど）で情報収集を担当し、武装としてドックファイトの要になる大口径ビームマシンガンを二門搭載していて、その後ろに装備されている折り畳み式の翼は重力波フロートとしての機能を持ち、運動性向上はもちろん、静粛性を高めて単独での偵察機としても使えるようになっていた。

Bパーツにはコックピットやエンジンを搭載した中央ユニットであるウイングユニットと、カーゴスペースを兼ねるコンテナユニットで構成された、主に機動兵器用の追加パーツとしての機能が与えられた部位だ。

ウイングユニットの両翼端には拡散グラビティブラストが、コンテナユニットの前方には一〇発のマイクロミサイルランチャーが内蔵されている。

さらにウイングユニットとコンテナユニットにはそれぞれ大口径スラスタが二発ずつ装備されていて、破格の大推力を発揮する。

もちろんデイストーションフィールドは改良タイプを採用し、装甲材質も表面の防御コートもヤマトと同じものを使っているなどと、破格の防御性能すら有していた。

その性能を支えているのは、ヤマトの技術で大幅に小型化された相転移エンジン。

小型戦闘機に装備出来るサイズにも拘らず、相転移炉式駆逐艦に匹敵する出力を発揮する最新モデルだ。

加えて単独で戦闘機（大気圏内外兼用）としても運用出来るポテンシャルはあるのだが、元来が機動兵器用のパーツとして設計されたも

のであるため、単体でガミラス機に勝てるほどの性能はなく、専ら合体用の強化パーツとして運用されていた。

またGファルコンは本来『相転移エンジン搭載型人型機動兵器』との合体を前提に開発・設計された機体であるため、すでに型遅れ同然とも言われているエステバリスではそのポテンシャルを發揮できなかった。

特に対艦攻撃を行うには出力不足で、主砲の拡散グラビティブラストをもつてしても火力不足になることが実戦で証明されてしまっていた。

しかし致し方ないことだった。従来機の延命に使うこと自体が、開発担当のウリバダケのアイデアであり、本来想定されていなかったイレギュラーなのだから。

そのためエステバリスに合体するためには、重力波ユニットを撤去して代わりに合体用コネクターを取り付ける必要があり、動力と主推進装置を失ったエステバリスは単独では身動きすらままならないとか、機体剛性不足で推力を最大にできない、さらにバランスを取るため合体するBパーツも可変が必要になるせいで推力を集中できないなど、多くの制約を抱えていた。

だが、それでも大きな改修もなく合体可能で、かつ合体したエステバリスが制約があつてなお、ガミラス機と対等以上に渡り合つたという実績があつた。

そのためネルガルも軍も、Gファルコンが既存機の強化パーツとしても有益な存在であると認識し、すぐさま正式採用して可能な限りの量産体制を築き上げたのである。

そういった状況を鑑みて、完全新規設計された機体以外にもGファルコンの性能を引き出せる機体も用意されることとなった。

その機体の名は——アルストロメリア。本来はボソンジャンプ戦フレームとして開発されたエステバリスの後継機である。

しかしヤマトの技術伝来に合わせて再度設計を変更、ボソンジャンプ対応能力はそのままにGファルコンとの連動を前提に各部を強化、バイタルパート部分の装甲にはGファルコン同様、ヤマトと同じ素材

を使用し、それ以外の各部の装甲や露出したフレーム部分にもやはり同型の防衛コーートを塗布するなどした結果、エステバリス以上にGファルコンのスペックを引き出すことに成功している。

エステバリスが重力波ユニットを撤去したのに対して、アルストロメリアのユニットはコネクターを増設しても一切干渉しない構造であったので母艦の重力波ビームを有効に使え、機体自体のバランスも一切損なわれていない。

また可変させて接続するエステバリスに対して、アルストロメリアはBパーツを可変させずにそのまま垂直に交わるようにして合体することができる。

この恩恵で推力を分散してしまうエステバリスよりも最高速や加速度で上回ることができ、その気になれば戦場での分離合体すら視野に入れることが可能となっているなど、エステバリスで抱えていた欠点はすべて改善されていた。

さらに人型である展開形態では使用しないGファルコンのAパーツを頭に被せ、Bパーツ内部に機体を収納する戦闘機形態——収納形態も使用可能となった。機体を露出した展開形態ではAパーツをBパーツのカーゴスペースに固定することで紛失せずに済むように配慮されている。

強いて欠点を挙げるとするならエステバリスよりも高価なことと、出力系をチューニングされているとはいえ、重力波ビームによる補填だけでは火力不足を改善するには至っていないということだろうか。

ネルガルはヤマトの搭載機としてこのアルストロメリアをなんと二四機も都合してくれた。まさに大盤振る舞いだ。

しかし、ヤマトの発進に間に合わせるためと、特徴の短距離ボソンジャンプはジャンパー処置したパイロットの少なさを考慮して、ジャンプユニットを組み込んだ機体はたったの二機、それ以外はユニットをオミットして一部機能を落とした廉価版であった。

完全版の搭乗者は、かつて搭乗して火星の後継者の鎮圧に尽力したこともある月臣元一朗と、ヤマト配属後に任された古代進の二名が専任で任されていた。

進はヤマト配属以前まではジャンパー処置を受けていなかったが、ユリカの勧めもあつて処置を受けていたので、この機体のパイロットに選ばれた経緯がある。その時は未配備の新型機のパイロット候補としての処置であつたが、結果として無駄にならずに済んだといえよう。

格納庫では作業員が右に左にと走り回り、管制室からの制御で天井に四基備えられたロボットアームが格納スペースからアルストロメリアを引きずり出し、駐機スペースに置いていく。

駐機スペースに置かれたアルストロメリアの元に、別のアーム運んできたGファルコンが運搬される。

自動制御でBパーツの先端から離脱したAパーツが、重力波フローを駆使してBパーツのカーゴスペース内に移動して固定される。

Gファルコンがアルストロメリアに接続、ほぼ同時に床下の武器格納庫から一年前に比べて大幅に強化された大型レールカノンとラピッドライフルが、ウェポンキャリアーに載せられて上がってくる。

一部の機体は収納形態の状態でGファルコン下部に、全長一〇メートルもある新配備の大型爆弾槽を二基取り付けた重爆撃装備に換装されていた。対艦攻撃力の不足を補うために急遽用意され、なんとかヤマトに配備が間に合った装備だった。

出撃準備を終えたエステバリスの元にパイロットが次々と駆け寄ってはコックピットに収まり、愛機を立ち上げていく。起動した機体は再びロボットアームが釣り上げて、格納庫中央のカタパルトレーンに載せられていく。

進も遅れまいと自分のアルストロメリアに乗り込む。

指揮官なので個人用にカラーリングを弄っていいと言われたので、頭部や重力波アンテナ、膝と肩の先端を赤で塗ってもらった。そして戦闘班長の機体ということを示すため、肩には「01」と機体番号が振られている。

これはデータで見せてもらったことがある、ヤマトの内部に残されていた艦載機の残骸、コスモゼロからインスピレーションを得たものだ。

できれば乗ってみたいとは思っていたが、ヤマトの格納庫と発進設備を人型機動兵器用に改造する過程で、結局放棄されてしまった。使われていた技術は、新型機全般に活かされているらしいので、そういう意味ではこの機体もコスモゼロの子なのだろうか。

そういつた思いもあつて、せめて名前だけでも——妙に心惹かれるコスモゼロの名前を残したいと考え、ユリカの許可をもらつたうえでこの機体の愛称として使わせてもらうことになった。

そのことをユリカは涙を流して喜んでいたが、その理由を進が知るのはもつと先のことであつた。

——直後、彼女は進に感化されたのだろうか、ヤマトに所属する航空隊の名称を、かつてヤマトの航海を支えた名機、『コスモタイガーⅠ』からとつて『コスモタイガー隊』と命名してしまつたりもした。そんなことをふと思い返しながらIFSボールに右手を置くと、コックピットの計器に光が灯り、コスモゼロが起動していく。

——チエツク……異常なし。

Gファルコンとの合体は収納形態を選択してスタンバイする。

「コスモタイガー隊は順次発進。ヤマトの護衛任務につけ」

コックピットの中でコスモタイガー隊に発進命令を下す。

指示を受けた管制塔からの操作で、格納庫中央の床が傾斜して発進スロープへと変貌する。

スロープの上には四基のGファルコンアルストロメリアが並び、スロープの形成に伴つて等間隔に改めて並び直された。

そのあと、スロープで生まれた空間を区切るように艦尾側からシッターが閉じて格納庫と切り離す。

閉鎖されたスロープ内はそのまま減圧室を兼ねた発進ゲートとなり、減圧完了後に艦尾艦底部の発進口が開いた。

ブラストリフレクターがせり上がり、後方の機体を噴射圧から守る。起動した重力波カタパルトの勢いで次々とアルストロメリアが宇宙空間に向かって放出された。

放出された機体は、ヤマトの重力制御装置が生み出す不可視のトンネルをくぐる形で消耗することなく敵機の接近方向に進路を向けら、

スラストターを全開にして飛び去って行く。

スロープ内の機体がすべて発進すると、発進口にディスプレイションフィールドが展開されて気密を確保、スロープ内が加圧される。

加圧が完了するとシャッターが開いて、次の機体が並べられる。並べ終わるとシャッターが閉じて減圧。ハッチを覆っていたフィールドが消失してまた次の機体が射出される。

この構造は発進口を狙い撃ちにされても格納庫への被害を抑え、同時に作業員が宇宙服を着なくても整備作業を問題なく行えるようにするためのものだ。

そうやって発進作業を繰り返して、計二四機の機体が射出される。搭載スペースの残りは予備機と組み立て途中で搬入された試作機の部品で占拠されている。

進のコスモゼロと月臣のアルストロメリアは別のアームで持ち上げられて、上部の発進口へと誘導される。

ヤマトの艦尾上部の側面が発進ゲートだ。そこがスライドしてハッチが解放されると、ロボットアームで艦尾に設置されたカタパルトの上に接続される。

このカタパルトは人型には対応していない航空機用のもので、Gファルコンと合体して戦闘機形態をとることができるアルストロメリアと、未配備に終わった新型機のみが使用することができる、戦艦大和の頃から残されている航空設備であった。

コスモゼロは左舷側のカタパルトに、右舷側のカタパルトには月臣のGファルコンアルストロメリアが接続され、それぞれの機体が敵機が接近する方向に向けられた。

「発進！」

進の合図でカタパルトが作動。コスモゼロとアルストロメリアが時間差をつけて発進する。

凄まじい勢いで発射されたコスモゼロとアルストロメリアは、Gファルコンの推力を活かして先発したコスモタイガー隊を追いかけるのであった。

「よっしや見てろよガミラス！ 冥王星での屈辱を晴らしてやるぜ！」

と吠えるのはスバル・リョーコ、ナデシコCにも乗り込んでいた木星戦役時代からのベテランパイロットで、ヤマト配属後赤く塗られたアルストロメリアに乗り換えていた。

彼女は火星の後継者事件のあと、そのままナデシコCに所属され幾多の戦いを生き抜くことはできたものの、ガミラスにやられっぱなしで酷くストレスを溜めていた。

最後の決戦とされていた冥王星では出撃する間もなく撤退ということもあって、ヤマトにかかる意気込みは決してユリカ達に劣るものではなかった。

……もつとも、彼女がストレスを溜めていたのは戦友であるユリカのことも関係していた。そう、例の無茶に憤ったのは、リョーコも同じなのだ。

幸いヤマト計画が表沙汰になったことで矛先を収めることができしたが、そうでなければ友情は完膚なきまでに瓦解していたかもしれないと、本人は断言している。

「はいはい。リョーコは相変わらずだねえ〜」

「突っ込むのはいいけど、油断していると棺桶行きだよ」

かつての戦友であるアマノ・ヒカルとマキ・イズミがリョーコに続く。

この二人はヤマト乗艦以前は民間人として生活していたのだが、ルリの頼みに応じて快くヤマトに乗ることを選んだ。

彼女らも、思うところがあつたのだろう。

「まあ、あたしは漫画のネタになりそうだから冒険は大歓迎けどねえ〜。未知なる宇宙の冒険譚！ 異星人の侵略ものはしばらく勘弁だけど、これを題材にして漫画書きたいねえ！」

彼女は廃業寸前にまで追い込まれてなお、ヤマトの航海を通じてネタを確保し、蘇った地球での再起を願っている。

「アタシは連中が気に入らないだけさ……これ以上葬式に参加するのは、ゴメンだよ」

いつになくシリアスな雰囲気のイズミ。

ガミラスの攻撃で多くの人命が失われた世の中だ、過去のトラウマに触れるものがあるのだろう。

リョーコを中心としてヒカルの黄色、イズミの水色のアルストロメリアが続く。

「おうおう燃えてるねえ。でも、俺もいい加減負け続けはウンザリなんでね……ここらで逆転させてもらうぜー」

サブロウタも気合を入れ直す。

こちら青いアルストロメリアに機体を乗り換え心機一転、いままでの借りを返さんと牙を研いでいる。

スーパーエステバリスに乗っていた名残で、両肩のパーツは同機のもの的加工して移植してもらった。おかげで火力は通常の機体よりも上となっていた。

全員がいままでの雪辱を濯ごうと燃えていた。

ヤマトが立ったいま、ガミラスのいいようにはさせないと、全員が燃えているのだ。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第四話 ワープテスト！ 出撃、ダブルエックス!!

ヤマトから発進したコスモタイガー隊を迎え撃つべく、高速十字空母からも戦闘機が出撃する。

全翼機のような姿のそれはアルストロメリアよりも遥かに大型の機体で、機動力と航続距離、ディストーションフィールドの出力など、ほとんどの性能で地球側を凌駕する性能をもっている。

幸い人型特有の運動性能と火器の取り回しのよさを活かすことで渡り合うことはできていたが、Gファルコンが配備されるまでは機動力と火力が不足して決定打をもてず、という具合である。

しかしいまは、Gファルコンの性能をより引き出せるアルストロメリアに搭乗している。この機体ならば、エステバリスのような遅れは決して取らない。

コスモタイガー隊は自分たちの新たな力を見せつけんとばかりに果敢に戦いを挑むのであった。

「予想してはいたけど思ったよりも早かったなあ、ガミラスさん。せめてあと一時間遅く来てくれれば」

ユリカは疲労で靄がかかっていた頭を振りつつ文句を垂れる。さすがになぜなにナデシコは調子に乗り過ぎた、前ならあんな着ぐるみなんでもなかったのに。

ユリカの疲労に気づいているエリナはしきりに心配そうな視線を向けてくるが、仕事の手は休めていない。

「コスモタイガー隊と敵航空戦力が接敵、駆逐艦はそのままヤマトに向かつてきます」

ルリの報告にますますユリカの顔が険しくなる。

どうする、ワープテストを延期してでもヤマトで砲撃すべきだろうか。

未配備の新型ならともかく、重爆機を編成してもアルストロメリアの火力で対艦戦闘は少々辛い。

重爆撃装備の機体は駆逐艦の数に合わせて五機出撃させたが、足りるかどうか。

空母がいるとなれば艦載機が出てくることになるため、対空戦闘が絶望的の重爆機を増やすことができない。

Gファルコンとの連動で対抗したということは、言い返せば貴重な格納庫の容積の半分を強化装備のために潰しているということであり、ヤマトの艦載機総数は決して多いとは言えないのだ。

Gファルコンなしでも対等に戦える機体を用意して、倍の六〇機の航空機を運用する案もありはしたが、そんな機体を大量配備する余裕は今の地球にはない。

合体したまま格納する案も出たが、ヤマトの搭載機が最後の最後まで確定しなかったことが影響して、そのための設備が用意されず仕舞いに終わり、実現していない。

「せめて、ダブルエックスが間に合っていれば……」

ないものねだりだがやはり欲しかった。相転移エンジンを搭載したネルガルの最新鋭機。

単独で駆逐艦程度の艦艇なら撃破できる火力と、ヤマトがGフアルコンと連動すれば要塞攻撃の要としても運用できる、大火力機。

アルストロメリアすら一蹴性能を秘めた、決戦兵器。

だが最終調整が間に合わないと、ヤマトへの配備が結局見送られてしまった。あの機体なら一機あるだけでもかなり違っていただろうに。

案の定、コスモタイガー隊は苦戦を強いられていた。

性能差が埋まったとはいっても多勢に無勢、そうそう押し切ることはいできない。

出撃した重爆装備の機体は、高性能爆弾を二六八発内蔵した大型爆弾槽を駆逐艦に叩きつけることに成功していたが、配備されたばかりの装備であったことや、敵艦載機の妨害もあって十分な効果を発揮することができなかった。

それでも傷ついた敵艦に必死の猛攻を加えて撃沈したのが四隻。新型機の威力を見せつける大戦果といえたが、それ以上は無理だった。

残った駆逐艦一隻は敵機の妨害が激しく碌にダメージを与えられないままヤマトに向かっていく。

必死に追撃を仕掛けようとしたコスモタイガー隊を敵航空部隊が足止めにかかった。

「いかん、ヤマトが！」

アルストロメリアの中で月臣が呻く。

襲い掛かる敵機を躲し、右手のレールカノンを撃ち込んで叩き落とすのだが、すぐに後続に襲い掛かれては追撃などできない。

短距離ボソソジャンプで追いつくことは可能だ。しかしいま戦列を離れると艦載機もヤマトのほうに抜けかねない。

それでも月臣は懸命に敵機を退けヤマトに向かおうとあがくが、その努力も報われぬままヤマトと駆逐艦の距離が縮まっていく。

額から流れる汗が止まらなかった。

「敵駆逐艦一隻がヤマトに接近中。まもなく射程に入ります」
ルリの報告に第一艦橋の面々の表情が強張る。

ヤマトの武器は現状なになに一つ使えない。

優れた耐久力を有するヤマトだ、早々沈みはしないが、テスト前に損傷するのはトラブルの基になる。なんとしてでも避けたいが。

ユリカは徐々に接近する機影を睨みつける。

——アキト。

ふと、いまはいない夫に助けを求めてしまう。

それではいけないのに、彼はもう戦ってはいけない、むしろ自分が助けなければいけないのに。だが緩んでしまった心の檻は、気持ちを抑えてはくれない。

そうしている間にも敵は近づいてきている。

ユリカは観念してヤマトでの反撃を指示すべく口を開く。ワープテストは少々延期するしかないだろう。

ヤマトに接近中だった駆逐艦が破壊されたのはまさにその瞬間だった。

爆炎の中に一体の機動兵器のシルエットが浮かび上がった。

エステバリスに比べてより頭ひとつ分背が高く、人間らしく均整の取れた力強いシルエット。

デイストーションフィールド頼みで装甲が薄く、最小限のエステバリスと違って股関節を保護するスカートアーマーが装着されているなど、全体的に装甲部位が多いのが一目でわかる。

全体のカラーとしては白を基調にしつつ、暗めの紺で塗られた胴体と肩と手足の装甲の一部、腹の部分にはアクセントとして赤が配され、突き出した胸部の上下にクリアグリーンのカバーで覆われたセンサーユニットらしきもの。

白い頭部の額には四つに分かれた金色のブレードアンテナが装着され、瞳は緑に輝き、人間の口に相当する部分には縦に並んだ『へ』の字スリットが二つ、目のくまどりと顎の突き出た部分は赤く塗られた

フェイス。

頬の部分には冷却用のダクトが設けられ、斜め横に突き出したプレートがまるでヒゲのようで、ブレードアンテナと合わせて『X』のシルエットを形成している。

背中には巨大な翼のようなプレートが一对、身丈ほどもありそうな長大な砲身が一对、そのシルエットもまた『X』を形成していた。

右手には白を基調に紺でアクセントを加えられた長銃身のライフル。左手には衝角としても使えそうな先端を持つ白と赤に塗られたショートシールドを装備。

一見して地球製とわかるデザインだが、エステバリスともステルンクーゲルとも違う、独特なデザイン。従来機とはまるで方向性が異なっているのがありありと伺える、異様な機体。

「だ、ダブルエックス……？」

その姿を認めたユリカとエリナの声が奇麗に重なる。

そう、その機体はヤマトへの配備が間に合わないと搬入が見送られて彼女らを落胆させた、ネルガル重工の新型機動兵器。

機体名——ダブルエックス。

開発にあたっては、相転移エンジン搭載フレームである月面フレームのノウハウと、かつてウリバタケが『趣味かつ横領』で造り上げたXエステバリスを組み合わせた、双方の発展後継機ともいえる、ダブルエックスだ。

機体名もXエステバリスの後継を意識しつつ、異なる系列であることからエステバリスを名乗っていないなど異質な機体である。

さらにアルストロメリアの経験を活かした短距離ボソンジャンプにすら完全対応した、史上初の全高八メートル以下の相転移エンジン搭載型人型機動兵器。

ネルガル渾身の地球最強を冠する機体であり、ウリバタケ・セイヤにとっても生涯最高傑作と言われた機体であった。

「なんで、なんでダブルエックスが？ 完成間に合わなかったんじゃ」
ユリカは困惑する。もしかしたら発進後になんとか間に合って送り込まれた可能性もゼロではない。しかし、レーダー警報すらなくあ

の場に出現したということは……。

「艦長、あの機体の出現の際、ボース粒子反応を検知しました。あの機体はボソソジャンプで出現したと思われます」

ルリの報告を受けて大介を除いた全員が身を固くする。アルストロメリアの短距離ジャンプではないのは明らか。

とすれば乗っているのはA級ジャンパー。消去法でたった一人しかいないじゃないか。

「ダブルエックスから通信？ つ、繋がります」

通信席のエリナが咄嗟に回線を開く。第一艦橋正面、窓のすぐ上の天井に設置されたメインパネルが点灯し、パイロットの顔を映し出す。

その人物とは――。

「ヤマト、聞こえるか？ テンカワ・アキト、ダブルエックスと一緒にヤマトの航海に参加させてもらう。――いいな？ ユリカ」

アカツキからすべてを聞かされたアキトは無力感に打ちのめされていた。

アカツキは決して責めるようなことを言わなかったが、ユリカが悲壮な決意を固めて戦い続けていたことを余すことなく伝えてくれた。

――俺が、俺が迷っている間にユリカが、ユリカが――

ユリカは確実に破滅への道を進んでいる。

だがそれは地球と人類にとっては救いの道。イスカンドルに辿り着きさえすれば、ヤマトは必ず地球を救う。

だが、今のままではユリカが助かる確率は低い。

もう彼女の体と心は限界に近い。このまま無茶を続ければ――遠からず……。

「ユリカ君の決意――わかってくれたよね？ 彼女にとって君はいまでも一番星なのさ。だから彼女はヤマトの再建を成功させ、イスカンドルの支援すら取り付けることができた――君はその気持ちをどう

受け止める？ 変な意地を張っていると取り返しがつかないことになるぞ」

アカツキの言葉を受けて、アキトは自分がすべきことを悟った。それ以外に道はない。そうしなければ、ユリカはイस्कन्दルに辿り着く前に果てる。

そんなことは——許されない！

(ユリカ……)

アキトの脳裏に彼女との思い出が巡る。

火星で一緒だった頃の記憶、ナデシコで一緒だった頃の記憶、ボロアパートで一緒だった頃の記憶、結婚式の記憶。

いつでも自分に全力で好意をぶつけてくれた彼女。鬱陶しく思ったことも多いが、その嘘偽りのない好意にいつしか心惹かれ、彼女を選んだ。

——嗚呼、最初からいまずべきことは決まっていた。

火星で最初に木星に襲われた時、エステバリスで逃げようとして敵中に放り出されて硬直した時、いずれも救ってくれたのはユリカのイメージ。

優柔不断で気持ちと向き合えず、傷の舐め合いからメグミ・レイナードと仲良くなったりいろいろあったけど、ずっとずっと想っていたのは——。

だから悔しかった。奪われて。

だから申し訳なかった。護れなくて。

もう、後悔は十分だ。

あとは突き進むだけだ！ この想いのままに！

「——俺は行く。ヤマトに！ まだ間に合うはずだ、艦内見取り図を見せてくれ！ ボソソジャンプで直接乗り込んでユリカを助けるんだ！ 頼む！」

アキトは土下座してアカツキに助けを請う。

アカツキはそんなアキトを見て嬉しそうに笑うと「それだったらあれも持って行ってもらわないと困るんだ。実は搬入が間に合わなくてね」とアキトを格納庫に誘った。

かくしてアキトは調整が間に合わなかった、と嘘をついて残されていたダブルエックスに導かれた。

その左肩には白い百合の花弁に包まれるように小さな黒百合の花弁が描かれている。

それがなにを意味しているのかは考えるまでもない。

アキトはアカツキに感謝の言葉を述べると、そのままダブルエックスで旅立っていった。

「やれやれ……約束を破った甲斐があればいいけどねえ。ホントに手間がかかるんだから」

アカツキはとても清々しい笑みを浮かべていた。

アキトが、自分の意思で戻るきっかけを作るためだけに、アカツキは持てる権力を使ってアキトにユリカの演説の映像を見せたのだ。——どこにも放送などされていない、隠し撮りの映像を。

視線の先には、月軌道上でワープレストに備えたヤマトの姿を捉えたモニターがある。敵に襲撃されているようで、対応に苦慮しているようだが、ダブルエックスは間に合ったらしい。

「ふう。柄じゃないと自分でも思うんだけどさ。……ヤマト、あの家族の運命も——君に託す。頼む、絶対に護り抜いてくれ。そのために、僕は君の再建に力を尽くしたんだぞ」

「ア、キト？」

ユリカはわが目を疑った。どうしてここにアキトがいる。どうしてダブルエックスに乗っている。思考がぐるぐると渦巻いて正常に働かない。

「おい、聞こえてないのか？ とりあえず連中を叩いてくるから——」
「なんで来たの？」

アキトの言葉を遮ってユリカが言葉を絞り出す。

口に出してから、わけのわからない怒りが込み上げてくる。そして

感情のままに喚き散らした。

アキトはここにいちやいけな。その考えだけが膨れ上がり、艦長としての立場も威厳も宇宙の果てに吹っ飛んだ、大爆発だった。

「なんでアキトがここにいるのよ！ ダブルエックスだけ置いてさっさと帰らないよこのバカ！」

「ばっ!？」

いきなり罵倒されてアキトも狼狽する。だが、我慢する。そもそも置いて逃げた自分が悪いのだから。

「アキトはヤマトに乗っちゃ駄目！ 月でも地球でもどっちでもいいからヤマトの帰還を待つてればいいの！」

「——そんなこ」

「言い訳無用！ 帰りなさい！」

取り付く島もない拒絶。容赦ない言葉の暴力にアキトもとうとう我慢の限界を迎え、反撃の火蓋が切って落とされる。

「帰れるわけないだろうが！ アカツキから聞いたぞ、余命半年ってなんだ!？」

痛いところを突かれたユリカが「うぐっ！」と言葉に詰まると、アキトの攻勢が始まる。もう遠慮なんてない、言いたいことを言いたいだけ言つてやるとばかりに胸の内をぶちまけた。

「ルリちゃんたちにも凄く迷惑かけたつていうじゃないか！ もう少し考えてから行動しろこのバカッ！」

「——っ！ に、逃げてた人に言われたくない！」

「お、おまえだつて避けてたんだろうが！ お互い様だ！」

売り言葉に買い言葉。わあわあぎやあぎやあと、とても理不尽な悲劇に引き裂かれた夫婦の感動の再会とは思えない痴話喧嘩。ヤマトのクルー一同、戦闘中だと言うのに頭を抱えたい気分になった。

そう、『クルー一同』だ。

アキトの姿を認めたエリナは艦内、どこかコスモタイガー隊にいる旧ナデシコのメンバーにもこのことを伝えようと焦つてうっかり操作ミス、全艦放送してしまったのである。

つまり、火星極冠遺跡の再現であった。

「おい！ 戦闘中に痴話喧嘩してんじやねえ！ 気が散るだろうが！」

リョーコが怒鳴り返すが届いていないのか聞いていないのか、喧嘩はますますヒートアップ。気が散ると言いながらもその動きのキレはまったく衰える気配がない。

いまこの瞬間も後ろを取った敵機にミサイルを撃ち込んで撃破、爆風を利用して射線を隠したレールカノンと拡散グラビティブラストの散弾を放って、瞬く間に二機の戦闘機を撃墜している。

「ある意味らしいよね、なんか昔に戻った気分」

ヒカルは先程までよりもさらに肩の力を抜いて新たな愛機を操る。

その見事な操縦技術はブランクを感じさせず、的確な位置取りと素晴らしい判断力で、ガミラス機を翻弄、撃墜する。

「——ふっ」

イズミもなにかしらのギャグを言ったようだが、生憎リョーコにそれを聞く余裕などなかった。

イズミのアルストロメリアも精細さを欠くことなく、むしろさらに鋭く敵機に喰らい付き、その正確無比な射撃で確実に葬り去っていく。

「おいおい、戦闘中に痴話喧嘩って……火星での決戦思い出すなあ。あれがなけりや、木星と地球の関係もまた違ってたのかしらねえ」

サブロウタが笑う。

動きも軽やかに敵機の攻撃を躲し、返す刀で損傷を与える。被弾した敵機が錐もみして味方に激突して、果てる。

両肩の連射式カノンの弾幕とミサイルの雨あられ、そこに重力波の散弾とレールカノンの高速徹甲弾と、持てる火力の全てを出し尽くした猛攻の前に、ガミラスの戦闘機隊も攻めあぐねる。

「ふっ。ようやく振り切ったようだな、テンカワ。待っていたぞ」

月臣も嬉しそうな笑みを浮かべながら、左腕のクローを敵機のエンジン部に突き立てる。

余裕を取り戻したこともあり、短距離ボソソジャンプも織り交ぜた

変幻自在の戦闘機動で敵機を翻弄、確実に撃墜していく。

「あれが、テンカワ・アキトさん。艦長の旦那さんの」

コスモゼロのコックピットで進も困惑しながらも、感動(?)の再会を果たした夫婦を見守る。

困惑はしているが何故か胸が熱くなる。怒ってるようで、彼女はとも嬉しそうだった。

さすがにベテランパイロットたちには及ばないが、あの二人の邪魔はさせまいと進もシャカリキになって攻勢に転じる。

大切なユリカのためにも、この場はなんとしても死守する腹積もりで、進は果敢にガミラスと戦う。

もう二度と失わないために。

「アキトさん……」

痴話喧嘩を聞きながらルリは涙を滲ませた目でモニターを見つめる。会話のノリは完全にナデシコ時代のそれだ。黒衣を纏った復讐者の面影がない。

この場に来たということは、アキト自身の意識にも変化はあったのだろうけれど、ユリカと言葉を交わしただけでこんなにもあつさりと、以前の彼を覗かせる。

自分のときは、黒衣を脱がせることはできなかったのに。

——やっぱり、お似合いの二人です。

ルリは再び二人が巡り合えたことに喜びの涙を流す。

——そしてさよなら、私の初恋。

お互い罵倒しあっていい加減疲れたアキトとユリカは、荒い息を吐いてようやく言葉の応酬を止める。

「おまえなあ、せつかく会えたのに嬉しくないのかよ……」

アキトが思わず本音を漏らす。非難は覚悟していたがまさかここまで拒絶されるとは。

本当は愛想を尽かされたんじゃないかと疑いたくもなってくる。

「嬉しいに決まってるじゃない!」

即答したユリカにアキトはびくりと体が震える。

「アキトはいまでも私の王子様で、旦那様なんだから！ なにがあつたとしても、アキトがどんな姿になつたとしても、ずっとずっとそんなだからあ！ 私はずっとずっとアキトが大好き!! 一生そうなのお!!」

ユリカの絶叫がアキトの胸を打つ。

怒りをとおりに越して悲しくなつたのか、涙を振りまきながら叫ぶ姿は、ある意味最も見たくない顔だ。

でも、そのおかげでアキトは迷いを完全に振りきれた。

「でも、だからアキトはもう戦っちゃ駄目！ 無理して傷つく必要なんてない！ 今度は私がアキトを護る！ アキトの未来を切り開いてみせる！ だから帰りを待っててよ！ もう一度ラーメン屋ができるようにリハビリしててよ！ お願いだからあ！」

さきほどから支離滅裂になりながらもユリカが繰り返している主張だ。

心の準備もなく突然の再会にパニックに陥つて、論理的な思考など望めなくなったのだろう。ひたすら感情のままにアキトを追い返そうと必死だった。

この先どう転んでも避けられない自分の姿を、見せたくないという気持ちもありありと伝わってくる。

「駄目だ。それを聞いたらますます戻れるわけないだろ。ヤマトには、ヤマトにはな……俺とおまえの未来も掛かってるんだよ！ だいたいな、お前が隣にいてくれなきゃ、夢なんて終えるわけないだろうが！ もうラーメン屋は俺だけの夢じゃない。二人の夢なんだろ！」
そう言われてユリカが言葉を失う。両目から涙が溢れ、ぽたぽたと艦長席のコンソールに落ちた。

ユリカはアキトを止める事が不可能だと悟つたのだろう。もうそれ以上、拒絶の言葉はなかった。

「アキトお……」

「すぐに行くからとにかく待つてろ。俺たちの希望は、ヤマトはやらせない。この場は俺たちがなんとかする」

一方的に通信を切断し、駆逐艦の残骸付近に留まっていたダブルエックスを、最大戦速で敵航空部隊に向けた突撃させた。

両手で顔を覆って泣き出すユリカ。

いまの彼女に指揮を求めるのは無理だと判断したジユンが代わりに、

「ワープ開始予定まであと一五分だ。コスモタイガー隊は帰艦を急げ！」

帰艦命令を出す。

やっぱり乗艦して正解だった。いままで無理をしてきた分、アキトとの再会がよほど堪えたのだろう。

——想定外の事態ではあるが。

ジユンの胸の内で『空気読め』『最高のタイミングで来てくれた』相反する感情が駆け巡った。

ジユンの命令がコスモタイガー隊に届いてから少し遅れて、ダブルエックスが戦線に到着する。

「アキト、帰艦命令だ！ ワープまで時間がないぞ！」

「わかってる。殿を務めるからリョーコちゃんたちは戻ってくれ。ダブルエックスならすぐに追いつける」

リョーコの叱責アキトはすぐに応答した。

コスモタイガー隊の必死の活躍で、敵の航空戦力はすでに壊滅的な打撃を被っているが、健在な機体もまだ少し残っている。ヤマトの安全を考えるなら、すべて撃墜しておきたい。

ダブルエックスは味方機と敵の射線上にわざと飛び込んで、敵のビーム機銃弾を受け止めて防ぐ。ほとんどの攻撃はフィールドが弾き返し、フィールドを破ったはずのビーム弾もシールド表面であつさり弾かれた。

従来機ではあり得ない、脅威的な防衛性能だ。

「一人でやる気か!？」

「ダブルエックスだからできるんだ。この機体は相転移エンジン搭載

型で、そつちよりも数段上なんだ！　すべてがね！」

言いながら操縦桿を捻り、右手に握られた専用モデルのビームライフルを発砲する。発砲するたびに、機関部の排気口から気化した冷却材が少量噴き出して、白い煙となった。

ショックカノンの原理を応用した新型ビーム砲。針のように細い高収束粒子ビームを猛烈な勢いを付けながら回転させて撃ち出す。

命中するとドリルのように対象に抉り込むようにして破壊する作用があるため、エステバリス用の大型レールカノンと同等か上回る。さえ言われるほどのフィールド貫通力を誇り、接射に近い距離に限られるとはいえ、ガミラスの駆逐艦ならこのライフル一丁で十分戦える。とまで評されるほど。

つい先程も至近距離から機関部に連射することでガミラス駆逐艦を撃沈したことからも、それが正しかったことが伺える。

それでいて速射性・連射性ともに損なわれておらず、徹底してシンプルな内部構造による軽量さよる取り回しのよさ、そして長銃身による高い収束率と命中精度、破格の有効射程距離を併せもった、最強クラスの携行火器。それがこのDX専用バスターライフルだ。

その威力の源は発射システムだけではなく、ダブルエックスに搭載された大出力型小型相転移エンジンにもある。

Gファルコン以上の出力をもつ（巡洋艦相当の）相転移エンジンを搭載し、特殊装備を除いてシンプルで汎用性の高い機体構成による余剰出力を活かすことで、この大出力兵器の運用を可能としているのだ。

アキトはその強力無比なビームライフルから次々とビームを発射、その都度吐き出される冷却材の煙の尾を引きながら機体を縦横無尽に走らせガミラス機と相対し続ける。

撤退支援も目的としているので、Gファルコンアルストロメリアに向かおうとする敵機の眼前に躍り出て、撃ちかけられるビーム機銃弾を破格のフィールドと装甲で弾き飛ばしつつ、反撃のバスターライフルで確実に粉碎していく。

発射されたミサイルはこめかみの部分に内蔵された小口径のバル

カン砲で余さず迎撃。

ミサイルの爆発による煙を利用して近くにいた敵機に急接近。上から被さるように距離を詰め、左腕を大きく後ろに引き、マウントしているショットシールド——ディフェンスプレートの先端にフィールドを集中展開、収束。

フルパワーで振り下ろされたダブルエックスの左腕は敵機の左翼を貫通、半ばからへし折る。ついでに機首のコックピット目掛けて頭部バルカンを撃ち込んでやる。

近接戦闘で甚大な被害を受けたガミラス機は、そのままきりもみして宇宙を蛇行して進み、ダブルエックスを狙って放たれたミサイルの進路に割り込んで破壊された。

ダブルエックスは数機ものガミラス機を同時に相手取るむちゃくちゃな戦いをしている。

にもかかわらず、苦戦しているようなさまは一切見せない、逆に余裕すら感じさせる動きで敵機を翻弄している。

「母艦も牽制しておく！」

アキトは後方に位置する十字空母目掛けてライフルを三連射。距離があるためフィールドで弾かれたが、牽制ならこれで十分のはずだ。

特殊装備を搭載したダブルエックスのセンサーはアルストロメリアやGファルコンを凌ぐ性能を誇る。

また、特殊装備を活かすため敏捷性よりも安定性を重視した姿勢制御スラスターのセッティングとOSの調整と相まって、アルストロメリアですら真似できない長距離狙撃を軽々実行できる性能を持っているのだ。

散々テストパイロットとして乗った機体。癖も大体わかっているし、知らないことと言えば教えてもらえなかった特殊装備全般のことだが、それが二門の大砲なのはわかっているのです、おそらく合体した時だけ使えるグラビティブラストの類だろうと推測していた。

ふと思ったが、だったらそれを使ってあの空母を沈めてしまえば、ヤマトは安全になるのではないだろうか。

(——いや駄目だ。確かこの特殊装備はヤマトからの供給かGフアルコンのアシストがないと使えないって言われてたっけ?——ワープ、確か時間と空間を跳び越える、ボソソジャンプとは違う空間跳躍航法だったか? それの準備中にこっちに回すエネルギーなんてないか。Gフアルコンもないし。——つか、どうして外部電源が必要なんだ? 相転移エンジン搭載なのにな?)

いまさらながら疑問に思ったが考えていても仕方がない。

アキトは正面モニターに被さったヘッドアップディスプレイに映るロックオンマークを目で追う。

そこに敵機が重なるたびに右操縦桿のトリガーを引いてバスターライフルを発射、次々と粉碎していった。

アキトの支援を受けたリョーコたちは速やかにヤマトに帰艦、艦底部のハッチを潜って次々と着艦していく。

殿を務めたダブルエックスも敵機を全て撃破してから、最後に発着口を潜った。

だが安心は出来ない。航空機は全て叩いたが空母はほぼ無傷だ。空母にも武装が施されていることはこれまでの戦闘で分かっている。

「艦載機、すべて着艦。未帰艦なし」

管制塔からの報告が第一艦橋に響く。ワープ開始まで後五分。

「ワープ五分前。各自ベルト着用」

涙を拭ったユリカが指示を出しながら、自らも安全ベルトを締める。

格納庫から戻ってきた進も戦闘指揮席に座り、安全ベルトを締め体を固定した。

時間曲線を示すモニター表示を見つめながら、大介がワープスイッチレバーに手を伸ばす。

五本の横線がモニター上を左に流れ、中央を光点が上下に動くモニターは、ワープシステムによって捻じ曲げられる時間曲線を示している。

この時間曲線が捻じれた一点に、ヤマトが現在いる時間を示す光点が重なる瞬間にワープしなければならない。

極短い時間なら保持できるのだが、タイミングを逸するとまた計測し直しになる。ワープテストの時間をずらせなかった理由のひとつだ。

もつとも、初回であるため慎重に慎重を重ねているからこそこまめで時間がかかっているのであって、慣れてくればもつと早くワープを実行できるようになる。

余談だが、このタイミングを計算せずに適当なタイミングで飛ぶことを『無差別ワープ』と言い、宇宙の歪曲任せの跳躍になるためどこに出現するかわからない危険なワープだった。

ワープ準備をすべて完了し、あとは跳ぶだけになったヤマトをついに射程に捉えた高速十字空母が、上部ミサイルランチャーを起動、ヤマトに向かって発射する。

それとほぼ同時に、ワープモニターの時間曲線の捻じれとヤマトの時間がピタリと重なって保持される。

「ワープ！」

「ワープ！」

ユリカの号令に従って大介がワープスイッチレバーを押し込む。するとヤマトの艦体が青白い輝きに包み込まれ、空間に溶け込むようにして消え去る。

ヤマトに向かって発射されたミサイルは、突然目標を失って空しく宇宙を彷徨った。

その光景を目の当たりにした空母艦長は「バカな……」とつぶやいていた。

ボソンジャンプとは似て非なる不可思議な空間の中を、ヤマトは進む。まるで一秒にも一分にも感じられるような不可思議な感覚にクルーたちは驚く。

通常時間にすれば一瞬としか言えない時間を経て、ヤマトは通常空間に復帰、火星近海に出現していた。

ワープの衝撃で軽く意識を飛ばしていたクルーたちが呻きながら

起き上がり、眼下に広がる火星の姿に喜びを露にする。

ヤマトはワープ航法を成功させた。これでイスカandalへの道筋が開けたと。

喜びに沸くのは第一艦橋でも同じだった。

特に大介は熱いものが込み上げるのを堪えきれず、ガッツポーズをとって喜んでいる。

だがすぐに全員が異変に気付いた。艦長席があまりにも静かだからだ。普段なら我先に喜んで騒いでそうなのに。

振り向いた先に見えたのは、ぐったりと青い顔で座席にもたれ、気絶しているユリカの姿。全員の顔が青褪める。

もしかして、負荷に耐えきれなかったのではないか。

「ユリカ、しつかり！ やっぱり発進になぜなにナデシコにテンカワとの痴話喧嘩の連続はきつかったか……！」

「後ろ半分は自業自得な気もするけどね……ユリカ、しつかりして、大丈夫？」

「医務室、医務室に連絡を！ ユリカさんしつかりして！」

「ユリカしつかりして！ 死んじやいやあく！」

ルリさんもラピスさんも落ち着いて！ アキトさんが帰ってきたならユリカさんはきつと大丈夫です！」

「みんな落ち着け！ とにかく医務室に運ぶんだ。古代、手伝え！」

俺とおまえで運ぶぞ！」

「雪！ 艦長が倒れた、医務室に運ぶから受け入れ準備を！」

「艦橋は俺と副長達が引き受けた。頼むぞ古代」

「戦闘指揮席は俺が受け持つ、頼んだぞ」

ワープ成功の喜びも吹っ飛んで、第一艦橋はパニックだった。

妙にフワフワした感覚に包まれながら、ユリカは目を覚ます。目の前に映る景色は第一艦橋ではない。ここは、医務室だろうか。

そうか、ワープテストで気を失ったのか。ワープが初見ではキツイ

と言うのは覚悟していたが、まさか気絶とは。他のクルーを心配させてはいけないと言うのに。

ユリカは若干の後悔を感じながらも身を起こそうと体に力を入れた。

「ユリカ、気分はどうだ？　気持ち悪かったりしないか？」

声の方に目を向けると、心配げな顔をしたアキトの姿が視界に入ってきた。

少々暗い色使いのラフな普段着姿。多少大人びたと言うか、眼つきが鋭くなつた以外はあの頃のままの、ユリカの愛してやまないアキトの姿がある。

そのことが無性に嬉しくて、涙がこぼれる。

この一年間我慢を重ねてきた反動といわんばかりに、とめどなく涙が溢れて流れていく。

「アキト、体は、体は大丈夫なの？」

渾身の力で上半身を起こして、涙ながらに問うユリカにアキトは何度も何度も頷く。

「ちゃんと治ったよ。味覚も元通りで、それ以外の部分も——だから泣くなよ。こっちまで、泣けてくるじゃないか」

アキトの目にも涙が浮かぶ。
ずっとずっと逢いたくて、逢えないと思っていた最愛の妻とようやく逢えた。直前まであんなに会うのが怖かったのに、いざ対面したらこのぎまだ。

嬉しくて嬉しくて仕方ない。今眼の前にユリカがいる。

最も愛おしい女性が、眼の前に——。

「俺、おまえにちゃんと謝らないといけないんだ。俺は——」

「なにも言わなくていい。言わなくていいよ。私もなにも言わない——辛かったでしょう、寂しかったでしょう。でももう大丈夫。私がずっと傍にいる。もう離さない、一人になんて、しないから。地獄の底までだって着いて行くよ」

涙を流しながらユリカがアキトの手を掴んで顔に引き寄せ、唇の代わりと言わんばかりに掌にキスをする。

本当はユリカだつて辛い。

こんな弱り切つた、いまにも枯れ果ててしまふような自分の姿を、これから先避けることのできない姿を、見て欲しくない。

健闘空しく死ぬかもしれないから、あまり大きなことは言いたくない。

でも、でも一緒に居たい。もう離れたくない。

その一心で、アキトを繋ぎ留めたくて、必死になる。

「ああ、俺だつてもう離さない。離してなるものか……こんな、こんな最高の女を二度と離すもんか。ユリカ、愛してる。アカツキから全部聞いたよ。いままで本当に頑張つたんだな——ありがとうな、希望を護つてくれて。だから、絶対にイスカンドルに行こうな。イスカンドルで、おまえを元通りにしてもらつて、一緒にまたラーメン屋をやる。一緒に……幸せな家庭を——っ！」

アキトは掴まれた手でユリカの頬をそつと撫でる。

ユリカはアキトの言葉を聞いて、彼が『すべてを承知のうえでヤマトに來た』ことを悟つた。

——ならば、もう迷いはない。アキトと一緒に、みんなと一緒にイスカンドルへ。

ヤマトなら、それができるはずだ。

だからいまは、この再会を喜びたい。

「おかえりなさい、アキト」

「ただいま、ユリカ」

本当の意味で再会を果たした二人は、自然と抱き合い、唇を重ねるのであつた。

第四話 ワープテスト！ 出撃、ダブルエックス！！ Bパート

「やっと収まるべきところに収まった、つて感じかあ。これで少しでもユリカの心労が減ることを祈るわ」

「やれやれ、と第一艦橋のメインパネルに……そう、『メインパネルに映し出された』医務室の様子をみたエリナがため息を漏らす。

「ようやくこれで、アキトを完璧にあきらめることができると、清々しい表情だ。」

「わざわざ気を利かせて人払いをした甲斐もあったというもの。」

「そうですね。気持ちの前向きなら、イスカンドルまでユリカさんが持ちこたえる可能性がぐんっと上がりますし」

「頬を赤くしながらも、二人が元通りになったことが嬉しくて仕方ないルリが、弾んだ声で同意する。」

「にしても、これからどうするんですか？ さっきの戦闘のといいこれといい、全艦放送で全員見ちゃってるんですよ？」

「常識人のハリの指摘に全員が視線を逸らす。多少の後ろめたさはある模様。」

「ダメなんですか？ アキトもユリカ姉さんも嬉しそう。こんなの見たら誰もからかわないと思うけど」

「わりと純真な、それでいて常識不足で天然なラピスがそんなことをいう。結論のみ語るのであれば、アキトは後日バッチリからかわれて赤面することになった。」

「ふむ、離れ離れになった恋人同士の再会か……確かに、からかうのは野暮と言うやつだな——それにしても、よかった……」

「大人な真田に対して、」

「しかし、艦長も発進早々大泣きしてラブロマンスとは。俺たち人類最後の砦じゃないんですかね？ とりあえず、ブラックコーヒーでも飲みたい気分ですね、うんと苦いの」

珍しく大介は軽口を叩いていた。

とは言え涙を流しながらいまだに抱き合ってお互いの唇を深く求めあっている二人に、呆れるやら喜ばしいのやらと、判断が付きかねている表情。

「いいんだよ島。俺たちが守るべきなのは、本来ああいうどこにでもある当たり前の光景なんだ。それを奪おうとする奴は、誰だって許しちゃいけない。どんな理由があってもだ」

進はユリカと互いの身内についての想いを散々打ち明けあった仲だ。もはや身内同然のユリカの幸福を茶化すようなことはせず、ただただ心からの祝福を送る。

あの二人が真の幸せを手に入れるためにも、ヤマトの失敗は許されない。なにがなんでも成功させなければと、決意も新たに拳を握った。

「そうですねと古代さん。私たちが戦っているのは人格を持った生命体の可能性があります。だとすれば、いままで私たちが撃墜してきたガミラスの兵器にだって、ああいった人たちが乗っている可能性が十分にあります。私たちはガミラスについてまったくの無知です。もしかしたら最前線で戦っているのは、私たちと同じのような兵士かもしれない。それを履き違えてガミラスのすべてを憎むのは、私は嫌です」

ルリが釘を刺す。

進の意見は個人的には賛成だ。ルリとていかなる理由があろうとこの二人を引き裂いた火星の後継者の連中と、いま地球を滅亡に迫いやろうとしているガミラスを許すつもりは毛頭ない。

だが進の意見を推し進めた先にあるのは、かつての木星や火星の後継者なのだ。そのことが頭を過つてついつい口を挟んでしまう。

「……わかっていきますよ、ルリさん。でも敵は敵、味方は味方です。もしも、もしもガミラスに深刻な理由があったとしても、地球にしたことを認めるわけにはいかない……これから先、ガミラスと和解できる可能性があるとしたら、その時になってから考えればいいと思います。まだ俺は、兄さんを奪われた怒りを、憎しみを忘れていない。艦

長をここまで追い込んだ元凶の一つだつてことを、忘れてない。ルリさんだつてそうでしょう?」

拳を震わせて力説する進に「すみません、きれいごとを言いました」とルリが謝る。

進はルリの真意を理解しているのでそれ以上なにも言わない。いや、言うべき言葉がみつからない。

あたりまえだ。この考えはどちらも等しく正しくて、間違っているのだから。

理屈のみでいえばルリが、感情を考慮すれば進が正しい。絶対の正解がない問題なのだ。二人ともそれがわかっているから、それ以上の言葉を発することがない。

ある意味ではアキトの所業にも接触する事柄なのだから当然と言えよう。

いかなる理由があれど、アキトが世間に顔向けできない行動をとつたことは揺るがない事実。だからこそ一度は自分達の元を去つただ。

ネルガルと宇宙軍が結託して誤魔化してくれなければ、そしてガミラスの襲撃で追及するどころではなくなったのでなければ、アキトはテロリストとして指名手配されて二度と帰ってこれなかった。

それどころか妻であり行動の動機ともなったユリカの人生はもちろぬめちやくちやになるだろうし、ナデシコの仲間たちにも飛び火しかねない問題だった。

人は、道を外した者に厳しい。そしてそれに連なるものにも鬼となる。

汝隣人を愛せよ。罪は憎めど人は憎まず。

とつくの昔に答えは出ているのに、人はいまだにこれができない。

それがいい事なのか悪い事なのか、それは誰にも断言できることではないのかもしれない。

ただ言えることがあるとすれば、できるだけ多くの人が報われて欲しい。その切なる願いだけだろう。

その後なんとか落ち着いた（満足した）ユリカは、杖を第一艦橋に置き去りにしてしまったこともあって、アキトにお姫様抱っこをねだって第一艦橋へ戻ることになった。

ちよつと恥ずかしいけど至福の時間だと、お互い最初は思っていた。

医務室を出てすぐ数名のクルーに遭遇するまでは。

なぜか全員が感動を顔に張り付けて「おめでとうございます艦長！なにがなんでもイスカンダルに行きましょう！ 旦那さん、俺たちも全力を尽くします！」と熱く語ってくる。

もしかしなくても、と二人は顔を見合わせて青くなる。

火星の時みために、クルー全員に聞かれたかも……。

おっかなびっくり第一艦橋に上がったら、どこから持ち出したのか、クラツカーの祝福を受けた。それによって二人は推測が正しかったことを知る。

ルリはよほど嬉しいのか、涙をにじませながら「おかえりなさいアキトさん！ ユリカさんもおめでとうございます！」と人一倍はしゃいでいる。

あとで判明したことであるが、クラツカーを所望したの犯人はルリだった。あつさり用意して艦橋内で使うことを許可した真田も真田であるが。そもそもどうしてクラツカーがヤマトに積み込まれていたのだろうか。

また、ルリ以外の旧ナデシコの仲間たちも口々に「お帰り、テンカワ・アキト」と各々の方法で祝福したという。

アキトとユリカは恥ずかしさに顔から火が出そうだったが、全員から祝福されるのは悪い気分ではない。

その後アキトは協議の末、戦闘班航空科、要するにパイロットとして乗艦することになった。ジュン辺りは「生活班の炊事科にでも入るか？ 味覚治つたんだろ？」と勧めてくれたが断った。

「俺が料理をするのは、いや、料理を最初に食べてもらいたいのはユリカとルリちゃんだから。ユリカが治らない限りは誰にも料理しない。俺なりのケジメなんだ。——皿洗いくらいなら手伝うけどね」

同じ理由でラーメンのレシピを返そうとしたルリに対しても「健康になったユリカと一緒に地球に帰ってからでいい。俺はもう、どこにもいかないから」と受け取りを辞退し、ルリが「わかりました。また三人でラーメン屋をやりましょうね」と応じたことで一応の決着を見ている。

……会話の流れ的に除け者にされたラピスが涙目でふくれっ面になってしまい、その理由に気付いた三人は慌ててフォローして、なんとか許しをもらえるのに一五分ほどかかってしまったが。

ちなみに悪いのはテンカワ一家なので、エリナは一切フォローに参加しなかったという。

「はあ……あ、でも夫としてユリカの身の回りの世話はしてやってくれよ。艦長室で同居は無理だけど、できるだけ時間を作って世話するんだぞ。いまのユリカは日常生活に支障をきたしてるんだ」

と念を押された。まあそれは望むところだ。アキトはジュンの氣遣いに感謝した。

アキトの乗艦はほぼ第一艦橋のメインスタッフの話し合いで可決してしまっただが、特に問題を起こすことはなかった。

一応、ナゲシコと無縁なヤマトの面々でも、アキトが連続コロニー襲撃犯であることを知ってしまった。

あの痴話喧嘩の時に、それらしい情報を互いに口走ってしまったのだから仕方がない。

しかし、誰もそのことを追及したり咎めたりするつもりはなかった。

痴話喧嘩の内容からその動機が判明したこと、その動機を考えれば彼が強硬に走ることはもうなく、ヤマトの航海の邪魔をするようなこともしないだろうということ。

そしてなによりアキトが血も涙もない冷徹なテロリストなどではなく、いまもお優しいさを——人間性を保っていると理解できたからこそ、むしろこのヤマトで戦うことで、地球を救うために貢献させることで、その罪滅ぼしをさせてやりたいと考えたからこそ、クルーはアキトを受け入れることを選んだ。

アキトの行動で直接被害を被ったクルーがいなかったことも、この選択に影響していたのだろう。

しかしヤマトクルーにとつて、決して小さくはない罪を抱えた相手に対する最初の「許し」であり、もしかしたらその後の彼らの選択に少なからず影響を与えた決断だったのかもしれない。

「で、火星に着陸したのね？」

「そうだよ。ワープの影響で装甲板の支持構造がいくらか壊れていてね。エンジンの状態も心配だから、一度着陸して徹底的に見ておいたほうがいいと思って」

ユリカが目を覚ました時、すでにヤマトは火星に着陸していた。かつて火星の後継者の拠点ともなった極冠遺跡地に。

ガミラスの攻撃で破壊され、演算ユニットも地球に運び出されている（いまは地球に秘匿されている）ため現在はその価値を失っているが、辛うじて使えるようなドック施設があったのでそこに滑り込んだのだ。

作業用の機材は動きそうにないのが残念だが、上空からの発見を避けられそうなのはありがたい。

ヤマトにはランディングギヤが用意されていない（内部構造に余裕がない）ため、着陸しようとするところのようなドック施設を使って支えてもらうか、さもなければディストーションフィールドを下方方向に全力展開して『整地』して、第三艦橋を地上に埋没させるようにして艦底全体で設置するようにするしかない。下部に装備されたアンテナは、第三艦橋の搭乗員ハッチを使うこととを考慮して横に折りたためるようになっていたので、それほど邪魔にならないはずだった。

現在ヤマトは左舷後部の装甲板を広範囲に渡って破損している。カタパルトに繋がる艦載機の運搬通路も露出してしまっていて、その周辺にある機関部への影響も懸念されていた。

「そっか。なら仕方ないね。工作班のみんなには修理作業を頑張ってもらいましょう。ラピスちゃん、機関班の様子は？」

「現在エンジンを停止して整備中です。エネルギー伝導管の一部が溶

けて折れかかっているのを発見、現在補修作業中ですが、作業完了にはしばらくかかりそうです。エンジン全体の点検を含めると、一日は欲しいところですね」

機関室の様子をモニターしながら報告する。少々大袈裟かもしれないが、未知の超機関ということを考える最低これくらい欲しい。またなにかあったら困るのだから。

「エネルギー伝導管かあ。予定の強度が出てなかったのか、それとも想定以上の負荷が掛かったのか、どちらにしても心配だなあ。うん、仕方ないから火星で一日停泊しましょう。他の場所の点検作業も並行して下さい」

内心ユリカは「やっぱり六倍出力は半端ないなあ。でもこのエンジンでないとダメなんだよなあ」とか思っていたが、口には出さない。

一応実現するために必要な技術の提供も受けているのだし、単純にこちらの不手際だろう。

「おうっ、任せとけよ艦長！ 艦長はテンカワと一緒に英気を養っていいぜ。発進までにはばっちり仕上げてるからよ！ ダブルエックスだっていいできだったろ？」

コミニケを通じてウリバタケが意気込む。

あちこち駆け回ってヤマトのメカニズムを一通り満喫しただけあって、上気した顔でそれはもう嬉しそうに嬉しそうに語っている。その嬉しさにはアキトが楔を振り切って合流してくれたことも含まれていた。

彼もずっと心配していたのだ。

それだけに、自分が手掛けたダブルエックスと共にアキトが現れた時は、年甲斐もなくはしゃいで喜びを露にしたものだ。

無論、自身最高傑作と言えるダブルエックスが、鮮烈と言っても過言ではないものすごい格好いい登場を果たしたことも、気分がよかつた。

「ありがとうございます、ウリバタケさん。でも、そうも言ってもらえません。アキトにはせっかくだから、白兵戦の訓練に参加してもらいたいと思います」

「白兵戦の？ 陸戦隊は乗ってないのか？」

ユリカの隣に立っていたアキトが疑問を呈する。

——地味に一乗組員に過ぎないアキトが艦長の隣に陣取っているという異様な風景。

だが誰もそれを指摘しないし咎めたりしない。

一応明確な軍艦であり、乗組員も半数以上が軍人なのに、あつという間にナデシコな緩い空気に毒されてしまった。

でも誰もが仕事に手抜きなしなのがナデシコクオリティとでもいうべきなのだろうか。

ユリカの伝染力はすさまじい。

「二応戦闘班が兼任してるよ。必要なら進君とか航空隊の人たちも担当してもらおうことになってる。専門の人もいるけど、ヤマトは人員の補充が利かないから誰も彼もが最低限はできないとね。特に民間出身のクルーは」

私はさすがに無理だけど、と言うユリカの言葉にふむとアキトは頷く。

確かに単独での長距離航海。しかもどこにも寄港できないのなら、自前でやりくりするしかないのは必然だ。特におかしいところはない。

「幸いヤマトは停泊していますし、修理作業の邪魔にさえならなければそれなりのことができると思うんです。アキトには施設攻撃……あ、いやなこと言っちゃった？」

ユリカの声のトーンが下がってバツの悪そうな顔をする。そんな妻の様子に苦笑したアキトは「問題ない。俺は俺のできることをするだけさ」と胸を張って見せる。

「白兵戦用の訓練はいいとして、航空隊での俺の配属ってどうなるんだ？ ヤマトの艦内組織に関しては無知だから、最低限は教えて欲しいんだけど」

とアキトが不安げな顔で尋ねる。

「わかりました。では直属の上司になる俺、戦闘班長の古代進が案内

します。艦長、構いませんか？」

と戦闘指揮席を立った進がユリカに伺いを立てる。

「いいよいいよ。進君にお願いするね。終わったら中央作戦室に来て。私達は先に行ってるから——アキト、軍隊だからって喧嘩腰は駄目だよ」

めつとアキトに念を押すユリカに苦笑しながら「わかりました艦長。肝に銘じておきます」と返事をする。

確かに軍隊とかそういうのが苦手なアキトなので、心配されるのはわかる。……一応妻も軍人なのだが、どうにもそんな気分がしないのだ。ユリカだし。

「では、こちらです。航空隊の待機所と、格納庫を改めて案内します」

「よろしくお願いします、古代戦闘班長」

アキトは進に連れられて第一艦橋を後にするべく、主幹エレベーターに乗り込む。エレベーターの中で進は、

「ユリカさんには、あなたの奥さんにはお世話になっていきます。どうぞ、これからよろしくお願いします、テンカワさん。気安く進でいいですよ。あの人もそう呼んでますし、俺もアキトさんと呼ばせてもらいますから」

と握手を求めてきた。断る理由もないのでアキトはそれに応じるが、「迷惑かけてないかあいつ？　いろいろ疲れることも多いだろう？」と真面目な顔で心配する。

その様子に進は笑い始める。

「さすが旦那さん、よくわかっていらっしやる。でも心配ご無用。あの人と一緒にいる時間、楽しいんです。なんて言うか、本人はもう俺の母親気分ですし」

と頭をかく。

「母親気分？」

「ええ。その、冥王星海戦の時に——」

進から聞かされた話にアキトの顔が曇る。

「——そうか、あいつ」

アキトは掛けるべき言葉が浮かんでこなかった。

ユリカが進にした仕打ちは確かに酷と言えたし、そんな決断をせざるを得ない状況に置かれたユリカが不憫で仕方ない。

その時はまだヤマトが間に合うのかどうか、イスカandalから最後の“援助も届くかどうか”が不明瞭な状態で、さぞ不安だったろうに。

それに、身内を失う悲しみを理解しているユリカが、身内の肉親を見捨てる決断をすると言うのはさぞ心が痛んだことだろう。

護りたいと願ったものを護れない痛みは、ナデシコ時代で散々経験しているのだから。

「最初は見殺しにしたと恨みましたけど、間違っていました。あの時はそうするしかなかったし、彼女も好き好んでそうしたわけじゃない。ユリカさんが、そんなことを望むような人でないことは、この一カ月半でよく理解しました——俺が恨むべきは、本当の仇は——ガミラスっ……!」

ギリツと歯を鳴らす進にアキトは自分に似たものを感じた。それくらい今の進からは仄暗い闇が漏れている。かつての自分と、同じだ。

「家族を、大切な人を奪われる苦しみはよくわかるよ」

「……でしようね。全部聞きました、ユリカさんから。あなたが彼女を取り戻すために、復讐の為に火星の後継者と戦ったことは」

本当はアキトの行動について口外するのははばかられたが、進はある意味では同類を見つけたとしてアキトに親近感を抱いていた。その気持ち、その言葉を吐かせた。

「そうか……。俺は君に言っておきたことがある。憎む気持ちはよくわかるし復讐したい気持ちも痛いほどわかる。それを邪魔しようとは思わない、いや、邪魔する資格は俺にはない。だけど、憎しみに飲まれて過ちだけは起こさないでくれ。俺と同じ思いをして欲しくない。復讐という行動の果てにはつきものなのかもしれないけど、後悔だけは残さないでくれ——後悔を残しそうなら、やり方を変えて欲しい」

アキトの言葉に進は素直に頷く。

アキトがなにをしたのかはユリカから聞いている。その時アキトが抱いていた感情は、おそらくいま進が抱いているそれよりも暗く、どろりとしていたはずだ。だからこそアキトは行動した。そして、目的は果たしたが自身も拭い去れない罪の意識を背負い、生涯それに苦しむことになるのだろう。

だから同じ痛みを知るものとしての忠告として、素直に受け止めるべきだと思う。それくらい彼の言葉は重く、おぞましい感情を湛えているような気がした。

「……わかりました。憎しみだけに捕らわれないように、努力します。しかし、あの人のもとで働く限り、憎しみ一色に染まることはないと思いますけどね」

わざと明るく答える。その答えにアキトも、

「そうだな——俺もあいつと一緒に助け出されてたら、戦いはしても過ちは犯さずに済んだかもしれないな」

少し寂しげに答えた。

階層を移動するためのエレベーターを降りると、一度居住デッキで別のエレベーターに乗り換え、さらに下層のデッキに移動する。

大規模改装を受けたヤマトは、艦の中央に長大なエンジンルームが存在しているため、従来のように第三艦橋まで全階層を突き抜けるエレベーターが、チーフオペレーター用のフリーフォール以外にない。

エレベーターを乗り継ぎ辿り着いた下層デッキで、格納庫と繋がるパイロットの控え室のドアの前に辿り着く。

「ここがパイロット用の控え室です。少々狭いですが、ブリーフィングもここで行います。中の階段で管制塔に、奥のドアから格納庫に入ることができるので、覚えておいてください」

進は用のないパイロット控え室を素通りしてそのまま格納庫に繋がるドアを開ける。

その先にはヤマトの広大な格納庫が広がっていて、着艦時に見たはずなのアキトをまたしても圧倒する。

アキトの姿を認め、愛機の整備を手伝っていたリョーコが「おいアキト！」と声をかける。

「リョーコちゃん。俺——」

パイロットとして乗艦することになったから、と言おうとしたらその前にこっちに向かつて駆けて来ていきなり胸倉を掴まれた。

「てめえ！ おいしいところもって行きやがって！ てかあの機体なんだよ！」

と、格納スペースに入れられることなく駐機スペースに逗留されていたダブルエックスを指差す。

「ああ、あれね。あれがヤマト用に開発されてた新型だよ。相転移エンジン搭載型でGファルコンが合体する機体として最初に設計されたやつ……あとヤマトからエネルギー供給されるか、Gファルコンに拡張ユニット付けて初めてまともに機能する大砲も装備してるんだってさ」

アキトが記憶の中にある仕様書を思い出しつつ説明する。

「なるほどねえ。で、あれおまえが乗るのか？」

リョーコに言われてアキトはなんとなく自分が乗り続ける気になつていたことに気付いた。

いや、そもそもあれを乗りこなせるのは、

「たぶんそれしかないんじゃないか？ 見てもらったほうが早いと思うけど」

そう言つてアキトは二人をダブルエックスの元に案内して、三人仲良く機体をよじ登つて解放されたコックピットの中を覗き込む。

「げっ！ なんだこのコックピットは!? エステともクーゲルとも違うじゃねえか！」

リョーコはびっくり仰天、既存のどの機体とも異なるコックピットシステムに頭を抱えた。

Gファルコンすらエステバリスと類似したコックピットシステムを採用していたので、てつきりダブルエックスもそうだと考えていたのだろうとアキトは推測する。残念、この機体は完全新規でした。

エステバリスやステルンクーゲルではパイロット正面にあったコンソールパネルがごっそりなくなっているのが最初に目に付く。

縦ステイックの操縦桿がシートの両サイドにあり、その前方に小さ

な長方形のコンソールパネルがひとつずつ。パネルには小型のステータスマニターが付いていて、左右で内容が異なる。

正面から一八〇度の範囲に広がった、上下反転した等脚台形のモニター。その正面モ部分に被さる形で天井から降りてくるヘッドアップディスプレイ。

そのディスプレイの基部に通信用のスイッチが少しある程度と、それ以前の機体に比べるとコンソールパネルはかなり簡略化されているのが伺える造りだ。

あと足元にフットペダルが二つ。

そこまで見てリョーコは気付いた。右の操縦桿が着いていないことに。

「右の操縦桿は起動キーも兼ねてて、取り外し式なんだ」

言ってアキトは腰のポーチにしまっていた操縦桿を見せる。

左側の操縦桿よりも形状が複雑で大型。紺色を基調としている。後方上部に赤いアナログステイクが付いていて、その下には赤いスライドスイッチがある。側面にはクリアグリーンのカバーが被さっていて、内部メカが薄っすら透けて見えた。

「二応クーゲルと同じEOSによるマニュアル操縦にも対応しているけど、この操縦桿自体がIFS端末も兼ねてて、俺はIFS入力を主体にマニュアル操作も併用して操縦してるんだ。エステとはかなり勝手が違うから、慣れるのには時間がかかったよ」

アキトが自分の経験談をもとに説明すると、リョーコも進も苦い顔だ。おそらく機種転換訓練にどれくらい手間がかかるかを考えているのだろう。

「そいつの運用思想を考えるなら、パイロットはテンカワが最適だと進言させてもらうぞ、古代戦闘班長」

突然現れた月臣が口を挟んできた。どうやら自分の機体の整備を終えてこつちに顔を見せに来たようだが。

「テンカワ、お前の参加を心から歓迎するぞ。それとその機体だがな、一言で言ってしまうえば文字通りの決戦兵器。背中に装備した戦略砲、サテライトキャノンで敵艦隊や大規模施設の類を超長距離から撃ち

抜くことが仕事の、戦略砲撃機だ」

アキトの顎がかつくんと落ちる。そんなの、聞いてない！

「ヤマトからの重力波ビームを背中のリフレクターユニットで受信、またはGファルコンの増設エネルギーパックからの入力で発射可能になる、高圧縮タキオン粒子収束砲だ。正式名称はツインサテライトキャノン。見たとおり負荷軽減を目的に砲身を二門に分割して搭載したのが名の由来だ。機動兵器用に開発された波動砲の亜種と言ったほうがわかり易いかもしれん。本家波動砲にはまったく及ばないが、それでも破壊力は絶大。試算ではサツキミドリなどの大型のスペースコロニーすらも一撃で破壊する威力がある。ターミナルコロニークラスなら塵も残らん」

アキトの目が点になる。

「弾薬のタキオン粒子は受信した重力波ビーム、またはGファルコンのエネルギーパックのエネルギーを、リフレクターユニットが内蔵したタキオン粒子生成装置に入力して発生させる。ほかの部位に使えない、実質サテライトキャノンのためだけに装備された装置で、波動エンジンの技術の応用でもある。元々サテライトキャノンは、衛星軌道上に固定砲台として配置して、遊星爆弾や敵艦隊に対する迎撃・攻撃用として考案されたものを再設計して、威力を落としてもより柔軟な運用ができるよう、機動兵器用として転用した武器だ。——なにぶん急造なのでシステムに無駄が多く洗練されていないが、現状でもちゃんと稼働するから安心しろ、テストした俺が言うんだ、間違いない」

月臣がさらに補足しながらアキトの傍らにまでやってくる。

「それにアルストロメリア譲りの短距離ジャンプ機能も完備している。おまえが使えばA級ジャンパー由来の単独長距離ジャンプが使えるようになるのは、先程おまえ自身が証明したとおりだ。つまり、この機体の真の力を発揮できるのは、現状おまえしかないということだ」

「月臣……おまえもあれに絡んでたのか。つか戦略砲撃機って、ネルガルなに考えて——いや、ヤマトの波動砲も大概らしいんだっけか

？」

「んな物騒なもんに乗ってたのか俺は……」

単に相転移エンジン搭載型の高性能機動兵器としか認識していなかった。

あの背中の大砲もグラビティブラストの類だと思ったし「Xエステバリスの発展後継機」と言うのは覚えていたからってつきりその程度のものだろうか。

いや、確かに考えてみれば、自前で相転移エンジンを持っているはずのダブルエックスがGファルコン、母艦となるヤマトからの供給なしでは発射もできない大砲を装備しているという時点で、ヤバイものだ気付くべきだった。

「じゃあ、もしかしてこの操縦桿が取り外し式なのって……」

と右操縦桿を突き出すと、

「想像どおり、それはセキュリティシステムの一環だ。戦略兵器であるダブルエックスは扱いに慎重が要求される。相応のパイロットでなければ託せないからな。教えておくと、そのスライドスイッチを入れるとコントローラーが変形して、安全装置が外れる。あー、一応教えておこう。おまえがテストパイロットに選ばれたのも、わざと搬入しなかったのも会長の策略だ。気の毒には思うが」

なんてことのない操縦桿が異様に重く感じる。とてつもなく重大な責任を背負わされてしまった。

「というかアカツキが主犯か！ たぶん、機体の性能を引き出すだけじゃなくて、ギリギリまで自分がヤマトに同行しないと見越してこんな策略を――。」

「さらに付け加えるのならダブルエックスがやたらと頑丈なのは、サテライトキャノンの負荷に耐えるためだ。それに多少被弾したとしても、確実に運用することを求められたんだ。装甲や機体剛性が尋常ならざるものに仕上がっているのも、敏捷性よりも安定性、機体制動能力重視のセッティングなのも、すべてはサテライトキャノンの運用に特化しているからだ。総合的に高い水準で性能がまとまった汎用機に仕上がったのは、限りなく偶然に近い必然だった、程度に認識

しておけ」

よくわかりました、とアキトは頷くしかない。

そうか、異常なまでのあの耐久力と防御力は単に最高性能を目指したわけじゃなく、必要だから与えられたものだったのかと、いまさらながら納得する。

そういえば、装甲も表面のコーティングもヤマトに採用されているのと同じ素材を使っているとか聞かされた気がする。

そのヤマトも確かものすごい超兵器を積んでるとか聞いたし、そういう意味での関連もあるのだろうか。

「あぁー。ごほんっ。一応使用の判断はこちらでもしますが、単独行動時に限り使用判断を委ねることもあります——強力な火器ですので使用には細心の注意を払って下さいね、アキトさん」

進が同情の念をありありと顔に張り付けて、アキトの肩を叩いた。

アキトは「ど、努力します」と答えるのがやっとだった。余裕なんてない。

「詳細についてはあとで俺からレクチャーしよう。サテライトキャノンがなくても、ダブルエックスは貴重な戦力だ。必然的にエースとしての働きも期待する。頼んだぞ」

月臣も反対側の肩を叩いて去っていく。師匠、お願いですからこの出来ない弟子にもっと助言をお願いします。というアキトの願いは、残念ながら届かなかった。

そのあとパイロットたちに挨拶をして回り、その都度満面の笑みで「イスカダルまで行きましょうね！」と言われて赤面することになった。ヒカルとイズミも、

「アキト君おかえり〜。またよろしくねえ〜」

「……テンカワ、あんたの大事な人、二度と泣かせるんじゃないよ。そして、絶対に手放すな」

と各々に歓迎してくれた。イズミがシリアスなものには驚いたが、至ってまともな発言なので素直に頷く。

「ようテンカワ、歓迎するぜ。嫁さんのためにも頑張ろうな！」

サブロウタも歓迎の意を示す。初対面なのだが、ルリの部下らしい

し、そちらから聞いているのだろう。

「よろしくお願ひします高杉さん。ルリちゃんがお世話になっているみたいで、本当にありがとうございます」

そう言つて頭を下げるアキトにサブロウタも好感をもてたのか、「俺はあの人に付いていくつて決めてるんで、言いつこなしですよ——でも、またあの人を置いていくような真似したら、狙い打ちちゃうからねえ」

と右手で銃の形を作つて、「ばあん！」と発砲するそぶりを見せる。アキトはバツが悪そうな顔で「二度としません」と頷いて、互いに握手を交わした。

一通りあいさつも済ませたので、白兵戦の訓練について打ち合わせをすべく連絡を入れてから中央作戦室に向かう。

「お、来たね二人とも。それじゃあ打ち合わせ始めるね」

エリナを脇に従えたユリカが中央作戦室の中央に立っている。ほかにも大介や雪、真田やゴート、月臣にサブロウタも同席していた。ユリカはヤマト艦内への侵入を想定した白兵戦の訓練と、少数先鋭の特別攻撃隊を想定した、二種類の訓練を別々に行うことを考案した。

前者は主に民間出身クルーが最低限武器を使えるようにすることを目的とした、大規模なもの。

後者はすでに一定以上の実力がある人物を対象として、敵の施設への破壊工作を想定した小規模なものだ。

クルーに支給されている装備は外装デザインが一新され二種類になったレーザーガンであるコスモガン（男性がハイパワーの自動拳銃型で、女性が回転弾倉型を模した軽量型）。

全体的に角ばったデザイン、キャリングハンドルとグリップ下から伸びる曲床を採用したレーザーアサルトライフル。

それにかつてヤマトでも使っていたストック付きの手榴弾であるコスモ手榴弾に、施設破壊用の時限爆弾、H-4爆弾だ。

民間出身のクルーは突然の訓練に少々戸惑い不平が漏れながらも、

必要なことだし仕方がないと、訓練に参加すべく簡易宇宙服を着用して装備を受けた。

そして二時間後。

後者の訓練に参加することになった、進、アキト、ゴート、月臣、サブロウタ、真田でチームを組んで、敵施設内部への破壊工作訓練を開始した。

「よし、準備はできたな。みんな、訓練を開始するぞ！」

総責任者を務める事なった進が訓練開始を告げる。

装備は全員共通でコスモガンとアサルトライフル、そしてコスモ手榴弾（ダミー）に接近戦用のナイフ（ダミー）と、アキトが衛生兵としてファーストエイドキット、真田が工兵としてH-4爆弾（ダミー）を所持している。

あと共通して艦内服の上から着込む、黒い肩パッド付きのボディーマー、手甲、脛当てを装備している。

ウリバタケが調整してくれた小バツタ数機にそれらが廃墟に隠した簡易自動砲台数基、そして最深部にある仮想ターゲットに爆弾を設置して起爆すれば終了だ。

全員が極力一塊となり周囲を警戒しながら進む。

進と月臣が戦闘、ゴートとサブロウタが支援、真田と雪が最後尾で、その護衛にアキトという順番で、慎重に進んでいく。

全員無駄口を叩くことなく、ターゲット目指して慎重に進んでいくが、要所所で出現する小バツタや砲台に襲われ、なかなか前進できないでいた。

「くっ、なかなかいいタイミングで攻撃してくるな。障害物の利用も見事だ」

月臣が小バツタや砲台の襲撃を思わず称賛する。

実際アキトやゴートというスペシャリストと呼べるようなものでさえ、きわどいと思える攻撃を仕掛けてくる。

一敵の武器はパラライザー。当たっても一時的にマヒするだけとはいっても、出力が割と高くてシャレになっていない。

全員が緊張を高めながら出現する虫型機械全て始末しながら進ん

でいったのだが、

「うげえっー」

呻き声を上げて倒れたのはサブロウタだ。小バツタと相打ちした形でパラライザーを喰らってマヒした。

相打ちした小バツタのほうは、訓練出力のコスモガンの直撃を受けて、頭上に「再起動まであと六〇秒」などとウインドウを表示している。

少ない小バツタと自動砲台を有効活用するため、一定時間の停止とその場での戦闘を行わないようにしながら、ゾンビのごとく何度も襲い掛かってくるようにプログラムされていた。

砲台の運搬はもちろん小バツタの仕事だ。

「高杉さん、大丈夫ですか!？」

被弾したサブロウタを、アキトが物陰に引きずり込んでフォローして、ファーストエイドキットからパラライザーに効く薬を取り出して処置する。

「ちよ、ちよつと出力高過ぎないかこれ……?」

「セイヤさんだな……!」

アキトは悪ノリしたであろうウリバタケに軽く怒りを覚える。

前のほうでは進が飛び出してきた小バツタの攻撃を障害物を使って避け、反撃にコスモ手榴弾を放る。

派手な音とオレンジの煙が噴き出して小バツタが被弾判定で動かなくなった。

そつと顔を覗かせて様子を伺おうとすると、即座にパラライザーが飛んでくる。ほかの敵がやってきたようだ。

「なかなか、ハードな訓練だな」

月臣の感想が、みなのお持ちの代弁であったのは言うまでもないだろう。

そんなこんなで苦労しながら進み、途中ゴートも直撃を受けて倒れたりしながら、ようやく目標を見つけた。

疲れた表情の真田がH-4爆弾のタイマーをセット。仮想ターゲットの真ん中に張り付けてその場を離れる。セットした時間通り

に爆弾が爆発。派手な赤い煙が噴き出し激しい音が鳴り響く。

「よし、訓練完了……疲れた」

進はコスモガンの具合を確かめながら訓練完了を宣言する。

かなりハードな訓練になったが、おかげで装備一式の扱いにもだいぶ慣れてきた。

ボディアーマーもあまり邪魔に感じないで済む仕上がりだし、コスモガンとアサルトライフルはレーザーガンだけあって、弾速が光速だから当てやすいし反動もなく扱いやすい。

数を持ってないが、ストック付きのコスモ手榴弾も投げやすいのはありがたいところだった。

くたくたになりながらも一行は訓練を終えてヤマトに帰艦する。ヤマトの損傷箇所にはアルストロメリアが数機駆り出され、資材運搬船と一緒にヤマトの装甲外板の補修作業を手伝っていた。

人型機動兵器の利便性を利用した上手い修理術だと思う。

艦内に足を踏み入れると、訓練を終えたであろう民間出身のクルーが何名か廊下に倒れていた。——たぶん、こちらと似たような惨状だったのだろう。

で、しばらく放っておけば動けるようになるからと放置されたとき。進たちがそばを通過すると「へ、へるぷみー」と呻いていたが、報告が先なので放置した。

「ウリバタケさん」

テストの報告しに第一艦橋に上がった面々は、艦長に報告したあとすぐに艦内管理席で修理状況を確認していたウリバタケに詰め寄った。

「どした、怖い顔をして？」

「あのパラライザー、いくらなんでも出力が高過ぎると思うんですが？」

直撃して倒れたサブロウタやゴートが文句を言う。するとウリバタケはバツが悪そうに、

「そうか？ あれくらいのが訓練に気合が入るかと思ったんだが……」

すまん、悪気はなかった、次からは気を付けるよ」

どうやら本当のようだ。素直に謝罪を頂けたし、とりあえず使用した武器類を改めて点検するために艦内工場区にある機械工作室に運ぶ。

使ったからにはメンテナンスだ。

ついでに反省会とか使ってみた感想を言い合って今後の改良などに活かしてもらおう。こういう積み重ねが、いざという時、身を助けるのだ。

「ふう……」

艦長席に座ったユリカが息を吐く。とりあえず訓練も完了したし、装甲外板の補修作業も終え、あとは一晩かけて機関部門の調整を終えたあと、クルーを少し休ませれば発進できる。

出航早々の足止めは痛いと言えば痛いだが、ここで無理をして重大なトラブルで頓挫するよりはずっとマシだ。

「疲れてるんじゃないの？ 今日にはもう休んだほうがよくない？」

相変わらず気の利くエリナが声をかけてくれる。

「そうだね。さすがにいろいろあったし、ちゃんと休んだほうがいいよね。ジュン君、あと頼める？」

「もちろん。しっかり休んできてよ、ユリカ」

ジュンも快く応じる。元々そのためにヤマトに乗ったのだからせひもない。ユリカは「ありがとう」と感謝してから改めて艦長室に上がった。

艦長室に上がったユリカは杖を突いて「よっ！ と」と座席から立ち、よろめきながら艦長室の右後方にあるコンソールを操作、壁に畳まれていたベッドを展開する。

コートと艦長帽を脱いでクローゼットのハンガーに掛けた所でドアがノックされた。

「森雪です、入っても大丈夫ですか？」

と声を掛けられる。

「どうぞ」

と短く答えると「失礼します」と雪がハンドバックを持って艦長室に入る。

「エリナさんから連絡を頂きましたので、夕食をお持ちしました。それと、着替えと入浴のお手伝いを」

雪がハンドバック掲げて見せる。中にはユリカと自分の分の食事、それと入浴を介助するために必要な物一式が入っていた。

「ごめんね雪ちゃん。本当なら自分一人でしなきゃいけないのに」
申し訳なさそうに謝る。

いまのユリカは自分一人では着替えはともかく入浴は満足にできない。

足腰が弱っているので滑り止め加工をした床の上でも転倒の危険があるし、なにより一度湯船に入ってしまうと手すりを使っても中々出られなくて、のぼせたことがあった。

幸いトイレ位ならなんとかなるが、病状がさらに進めばそれすらも介助が必要になる。

そしてそれは、そう遠くのことではないだろう。

「いえ、ユリカさんのお世話は楽しいですよ。気になりません」
雪は笑って気にしていないと訴える。

ユリカを慕っているのは本当だし、世話を焼くこと自体、元々好きだ。辛いのはユリカの病状をなんとかすることができない現実のほう。

「それに、古代君のお母さんみたいなものですしね」

などと軽口を交えて艦長室の机を広げ、そこに夕食用の食器などを並べる。ユリカを介して接点を持ち続けた結果、雪は進に対して淡い思いを抱くようになっていた。

それを察しているユリカもそのような言い方をされては無下にはできない。すっかり進の母親気分なのだ。

「ねえ雪ちゃん。先にお風呂入りたいんだけど、いいかな？ 着ぐるみ来て動いたから汗掻いちゃったし」

そう訴えると、雪も応じる。

体を支えながらユリカの服を脱がせ、艦長室の後部にある浴室に運

ぶ。と言つてもスペースに限りがあるためユニットバスであるし、ユリカのコンディションでは湯船に浸かるのも大変なので専らシャワーだけだ。

一応一人でもシャワーくらいは浴びれるようにと、手すりや簡易的な腰掛けなど、体を支えられるものが用意されている。

さらに浴槽の壁が一部開いて段差を超えなくて済むように、できるかぎりの配慮もされていた。

だが長時間杖なしで立つていられない、筋力も衰えているユリカにはそれでも厳しいのが現実であった。

雪は浴室に入ってから改めてユリカの下着を脱がせると、シャワーの温度を調整し、ユリカの髪や体を洗い始める。

ヤマトの艦内服は簡易宇宙服として使えるものであるため当然のように水を弾く。だから艦内服のまま入浴介助することができた。

雪は袖口などから水が入らないように処理してから「お湯加減は大丈夫ですか？」などと尋ねながら丁寧に体を洗いあげる。ユリカは「だいじょぶだいじょぶ」と気持ちよさそうな顔で雪に身を任せる。

一応手すりに捕まって自分でも体を支えているが、気持ちよくて力が緩んでしまいそうだった。

最初こそ恥ずかしがったユリカであるが、介助を受け始めてそれに経っているし、なにより気心の知れた間柄である雪とエリナに世話をしてもらう分には慣れた感がある。

最近ではルリやラピスも混じることがあるのだが、小柄な体格で力の足りない二人では入浴の介助が務まらないので、専ら食事の席に同伴しての話し相手だったり、着替えの手伝いをするのがやつとであったが、それでもユリカは一緒に居られる時間を大いに楽しんでいった。

入浴を終えたユリカは（先に艦内服表面の水を拭いとった）雪に体を拭いてもらってから新しい下着を身に付ける。といつてもそれすらも雪の手を借りなければ湯冷めするまでかかってしまう。

そのあとは雪に体を支えてもらいながら艦長室にまで運んでもらい、寝間着を着せてもらう。ドライヤーで髪を乾かしてもらって、薬を服用してしばらく談笑で時間を潰してから、雪が用意してくれた食

事に手を付ける。

いつもどおり、スープ状のまじい栄養食だ。

雪も手軽に食べられるサンドイッチ（ヤマトの夜食用メニュー）とパックの紅茶で食事の席を賑やかに、食事を終えてしばらく経ってから、うとうとと舟を漕ぎ出したユリカをベッドの上に寝かせ、寝入ったのを確認してから艦長室をあとにした。

このあとも雪は生活班の雑務が数点と、資料の整理などがある。忙しいのは事実だが、それを理由にユリカの世話役を引くつもりはない。

好意によるところも大きいのが、やはりその境遇への同情なしには語れない。

死なせたくない、こんな理不尽の果てに。同じ女として、好きな男性と結ばれた先の幸せを噛みしめて、満足してから逝って欲しい。

それは嘘偽りのない、雪の願い。

それを実現するためにも、多少のオーバーワークは覚悟の上だ。

第一無理をしているという意味では、ユリカ以上に無理をしているクルーなどヤマトに乗っていない。

雪はそう考えながら、残った仕事をやっつけに戻っていった。

ユリカは夢を見ていた。

とても幸せだったあの頃の夢を。

アキトとルリと一緒に同居生活。ボロアパートで隙間風が寒くても、決して豊かとは言えないあの生活をユリカは愛していた。

また、あんな生活がしたい。アキトと一緒に、ルリと一緒に。

今度はそこにラピスを交えて、進や雪たちも交えて。

皆と一緒に、笑って楽しく過ごしたい。

同時刻。アキトはリョーコに促され、親睦を兼ねてコスモタイガー隊の仲間たち夕食を共にすることになり、そこで少し前になぜなにナデシコが行われたことを知った。

せつかくだからと、絶対持つてそんなウリバタケからその記録映像

を融通してもらい、寝る前に見てみることにした。

内容がワープ航法についての解説ということもあり、普通に聞くよりはわかり易いだろうと思っただけなら、なんと重病の妻が着ぐるみを着てヨタヨタと動いているではないか。

啞然としたあと怒ろうかとも思ったが、赤らめた顔で笑顔を振りまきつつヨタヨタと動く姿が可愛かったので許すことにした。

恥ずかしそうにしているルリも可愛く、娘同然のルリが健やかに成長した姿をこういう形で見せられると、ちよつと涙が浮かんでくる。

この映像は保管しておこう。——巻き込まれたであろう真田には悪いが。

次の日、修理と点検を終えたヤマトは火星を出発することになった。

しかしユリカはその前にしておくことがあると告げ、エリナに艦内放送の準備を指示する。

「艦長のミスマル・ユリカです。みんな、いったん作業の手を止めて聞いてください。——ナデシココに乗って人はもちろん、話に聞いたことがある人もいると思う。……この火星にはね、メッセージカプセルをもって地球のために命を散らしてしまった、イスカンダルの使者が——スターシアの妹のサーシアが眠ってるの。彼女の行動がなければ、私たちはヤマトを蘇らせることもできなかつたし、こうして明日への希望を求めることすらできなかつた」

全艦放送でクルーに語り掛けるユリカ。全員がその言葉を神妙な面持ちで聞いている。

「私たちはいま、その恩人が眠る地にいます。これからヤマトはユーピアコロニー跡に向かいます。彼女のお墓参りをしましょう」

誰も異議を唱えたりしなかつた。

そのままヤマトは火星の空を飛び、サーシアの眠る墓の近くまで移動して停止、そのままゆっくりと高度を下げて、艦底前後に装備されたアンテナを横向きに折りたたみ、第三艦橋後部の搭乗員ハッチを解放、二本あるエアステアを伸ばして設置させた。

アキトに体を支えてもらい、エリナや雪に傍らに控えてもらいながら、ユリカはメインスタッフを引き連れて火星の大地に降り立つ。

ユリカたちはサーシアの墓まで五〇メートルほど歩いてその眼前に立つ。

その辺にあつた石を使つて作つた粗末な墓標には、『遠き星からの使者　ここに安らかに眠る』と記されている。この墓を作つた当時、ユリカ以外に名前を知らなかったから、墓標に名前は刻まれていない。

ユリカは墓前に花束を供えようと、合掌して黙禱を捧げる。付き添う全員がそれに倣つて、ヤマトの甲板に整列したすべてのクルーも黙禱を捧げて、サーシアの冥福を祈つた。

（サーシア。あなたのおかげでこの通り、ヤマトは蘇つたよ。これから私たちはあなたの故郷——イスカンダルに行く）

ユリカはいまは亡き友人の死を心から悼んだ。本当に、本当に連れ帰りたかつた。遥かなる愛の星へと。

話したいことは山ほどあつた。身分の違いこそあれど、彼女はユリカの友。あれからひと月経つたいまでも、この痛みは消えていない。（あなたの魂も一緒に連れて行ってあげるね。この遺髪があれば、着いて来れるでしょ？）

ユリカは懐にしまっているサーシアの遺髪にそつと手を当てる。埋葬の際のどさくさに紛れて確保していた、たった一房の遺髪。せめてこれだけでもスターシアに届けなければならぬ。

ユリカがそつと目を開けた時、ヤマトの主砲と副砲が空砲を撃つた。サーシアの霊を弔う弔砲。宇宙軍規定で定められている最高数だけ、本来なら将官の弔いに使われる数だけ、彼女の弔いのために放たれた。

「もう行きます。本当にありがとう——サーシア。次に来るのは地球に戻ってくる時だね」

ユリカはアキトの手を借りて立ち上がると、最後に敬礼を送つてから踵を返した。

そのままヤマトに戻つて第三艦橋のエアステアを登る。最後にも

う一度だけ振り返り、それからエレベーターに乗り込む。

第一艦橋へ戻ったユリカたちはそれぞれの席に座る。アキトとはエレベーターを乗り換える際に別れた。

艦長席に座って眼前を見据えたユリカは指示を出す。

「ヤマト、発進！ 次の目的地の木星に向かいます！」

「ヤマト、発進します！」

ユリカの指示を受け、大介が操縦桿を引いて静かにヤマトを浮上させる。

重力制御で静かに高度を上げていくヤマト。十分な行動に達したあと、補助ノズル、メインノズルの順に点火、一気に重力圏を離脱すべく加速していく。

ヤマトが飛び去ろうとしている。その下にあるサーシアの墓前では、捧げられた花束が揺れている。

まるでさよならを言っているかのように。

まるでヤマトの旅立ちを祝福するかのように。

ゆらゆら、ゆらゆらと。

ヤマトの姿が見えなくなるまで、揺れ続けた。

無事にワープテストを完了し、遠き旅路への光を見出すことができたヤマト。

遠き星からの使者の霊を弔いながら、ヤマトは未知なる航海へ向けて歩みを進める。

ヤマトよ行け！

全人類の希望と未来を乗せて！

人類滅亡と言われる日まで、

あと、三六四日。

第四話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第五話 悲壮な決断！ トランジション波動砲！

それは、宇宙を揺るがす破壊の光。

第五話 悲壮な決断！ トランジツション波動砲!!

A.パート

「なに？ ヤマトが火星にワープしただと？」

地球を死の淵へと追いやる大ガミラス帝国。

そのガミラスの総統であるデスラーは、本星の執務室で突如として出現した宇宙戦艦——ヤマトについての報告を受けていた。

その端正な顔に薄っすらと微笑を浮かべている。まるで新しいおもちゃを見つけて喜んでいられるようにも、野蛮人と蔑んでいる地球人の予想外の努力に称賛しているかのようにも見える、深い笑みだった。

「はっ！ 冥王星前線基地司令のシユルツが、一部始終を目撃したとのことですよ」

相も変わらず神経質そうな面構えの副総統ヒスの言葉に、デスラーはくつつくと笑う。

ヒスが渡したメッセージカプセルが映し出すフライウィンドウにも、事細かな観測データが記されている。

疑う余地はないのは明白だった。

「ワープくらいできなくてイスカンダルには辿り着けんだろうさ。失われたボソソジャンプ技術を有しているだけでは、イスカンダルまで辿り着くのは不可能に近いからな。——まったくかわいい連中じゃないか、今頃低レベルなワープを成功させたことに喜んでいる頃かな？」

しかし、とデスラーは思考を巡らせる。この状況を覆すイスカンダルからの救援ともなれば、持ち出したのはあのコスモリバースシステムか。

ガミラスにはないイスカンダル独自の超技術の結晶ではあり、ガミラスとしても欲しいシステムではあるが、デスラーは力尽くでイスカンダルからシステムを取り上げるつもりはない。

それにあのシステムを確実に機能させるにはいくつかの条件が

あつたはずで、いまのガミラスではそれを満たせず、状況的にガミラスにとつては限りなく無用の長物に近いのも理由のひとつだ。

だがイスカンドルが地球に提供するとすれば、その要件を満たすために必要なあのシステムも提供していると考えるのが妥当だろう。

……それだけは看過できない事案だ。ヤマトがイスカンドルを指すのであれば、その傍らには。

しかしなぜスターシアは地球に手を貸す気になったのだろうか。一体どこで接点を持ったと言うのだろうか。彼女はわれわれの行動を非難してはいるが、直接行動に出たことはいままで一度たりともなかった。

一体なにが、彼女を動かした。

ヤマト——あまり軽んじないほうが、足元を掬われずに済みそう
だ。

「ヒス君。シュルツに伝えてやれ、ヤマトにはイスカンドルから受け継いだ超兵器が備わっている可能性が高いとな」

ヒスに命じてデスラーはメッセージカプセルを握り潰す。その行為が、デスラーの心情をよく表していた。

コスモリバースシステムである地球を救うためには、いま現在ガミラスでも開発中のあの超兵器をシステムの一部として使う必要がある。だとすればヤマトもそれを有している可能性が高い。

デスラーとてイスカンドルの過去の文献で目にしただけの、波動エネルギーを直接兵器転用したとされる超兵器には詳しくないが、波動エネルギーの性質を考慮すればその威力は——。

ヤマトとかいう艦がどこまで逆らえるかは読み切れないが、あれを装備しているのならたかが戦艦一隻と侮るには危険だ。手負いの獣
という蛮行に走るかなど、予想できるようなできないものだ。

「さて、未熟な野蛮人がどう使うのだろうか。……タキオン波動収束
砲を」

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第五話 悲壮な決断！ トランジツション波動砲!!

火星を出発した宇宙戦艦ヤマトは、木星に向かって静かに星の海を航行していた。

エンジン補修用のコスモナイトが不足していることや、ワープ後のエンジンの様子をより丁寧に見るために、ワープを使わず通常航行で移動となった。

しかしヤマトの巡航速度はいままで比ではなく、木星まで移動するのに一日程度しかかからない。相転移エンジンと重力波推進で航行する従来の宇宙戦艦では真似られない高速性を示していた。

そんなヤマトの艦内には平穏な時間が流れていた。

目立ったトラブルもガミラスの姿もなく、クルーは木星到着後に予定されている作業を考えて体と心を休めている。

そんな中、アキトはジュンの言いつけを守るという口実でユリカと昼食を共にすることになった。

まず最初に近かった食堂で自分の食事プレートを受け取り、その足で医務室に寄ってユリカ用の食事一式を受け取って——面食らった。

艦長室に入って広げたテーブルの上に自分のトレイを置き、教わったとおりにパウチの封を切ってスープ皿に中身を空けて、絶句。

「これ、美味しいのか？」

思わずわかりきった答えを求めてしまう。聞いてはいたがまさかここまで彼女の具合が悪くなっていたとは。

「アキトと一緒に食べるからきつと美味しいよ！」

ユリカは辛さを微塵も感じさせない笑顔で断言する。

——あんな事件があったあとでも、こんな食事生活を余儀なくされていても、彼女は変わっていない。変わらぬ愛情を自分に向けてくれる。

そのことが嬉しくてついつい抱きしめてしまった。彼女はとても嬉しそうに抱き返してくれる。

すっかり細くなって力も弱くなったハグにも悲しさを感じながらも、昔と変わらない彼女の温もりも感じられて、アキトは強く思っ

た。

——帰って来てよかった。この温もりはなにものにも代えがたい。やっぱり、この女性と結ばれたことは自分の人生の中でも特別幸福なことかもしれないな、とアキトは考える。

(だからこそ、絶対に救って見せる)

この航海を持って、火星の後継者の呪いを断ち切って、今度こそ平穏な生活を取り戻して見せると、アキトは誓いを新たにしました。

そうやって数分の間抱き合ったあと、二人はようやく食事を始めた。

アキトは自分の昼食であるプレートメニュー(パン二つ、ホワイトシチュー、バターを乗せたハンバーグと付け合わせのレタスとフライドポテト、レタスの葉の上にポテトサラダ、オレンジジュースを乗せた日替わり定食のひとつ)に、ユリカはいつもどおりオレンジ色のスープもどきに、それぞれ先割れと普通のスプーンを突っ込んだ。

互いに食事が半分になるまでは取り留めのない雑談に花を咲かせていたのだが、ふと気になったアキトはヤマトがどうして木星に向かうのかを訊ねてみた。

一日でも早くイスカンダルに行くのであれば、太陽系内で寄り道をしていない時間はないとおもおうのだが。

「理由は簡単。ひとつはガミラスの拠点を探し出して叩けるなら叩くため。ヤマトが旅立って無防備になった地球の安全を確保するためには必要だしね。彼らに制圧されたことがはっきりしている木星だもの、冥王星以外で拠点を造るとしたらここしかないでしょ。地球より内側の星は拠点造りに向いてないし、海王星と天王星に手を伸ばすには時間が足りないし。土星も——航路に組み込まれてるから調査はするけど、あそこには人類の手が入っていないから、活用できそうな施設の類もない。いくらガミラスでも、悠々と太陽系全域に拠点を造ってる時間的余裕はないはずだから、一番確率が高いのは、木連の跡を使える木星でしょ」

なるほど。アキトは頷いた。連中の目的があくまで地球、それも可能な限り早く手中に収めたいと思っっているのなら、他の星に手を出す

のは地球を手に入れてからでも遅くはないだろう。

ユリカの読みは決して楽観的でも的外れでもないはずだ。

「もうひとつは、木星になにかしら資源が残っているかもしれないから。ヤマトの補修用の物資は潤沢じゃないし、もしも木星で使われたプラントだったり採掘施設に少しでも使えそうなものがあるのなら、回収しておくに越したことはないでしょ？ 本当は遠回りになるんだけど、木星で用を果たしたら反対方向の土星にも行かなくちゃ。木星だとコスモナイトが手に入らないからね」

スプーンを口に運びながらユリカは説明する。

「コスモナイト？」

「波動エンジンのエネルギー伝導管とかコンデンサーに使う、地球外鉱物資源つてところかな。あれがないとエンジンの負荷に耐えられない部品が作れないの。装甲材にも使えるんだ。耐熱・耐圧性能も高いし、グラビティブラストみたいな重力波兵器にも、理屈はよくわからないけど耐性があるみたい。だけどヤマトの再建作業で使い切っちゃったから備蓄が乏しいのよ。結構タイタンから採掘したつもりだったんだけど、思った以上に使っちゃったしねえ。太陽系を出たあとコスモナイトが手に入る保証もないし、ガミラス艦の残骸から回収するのにも限度があるから、できる時に補給しておきたいのよ」

あむ、とスプーンを咥えながら溜息にも似た息を吐くユリカに、アキトも思案気な顔を見せる。

「ほかにヤマトの機能自体ちゃんと働くか未知数だからねえ。知つてのとおり、今回のパワーアップはどうしても必要なことなんだけど、ものすごく背伸びしてるから技術が追いついてない場所が多くて多くて……。たぶんだけど、ヤマト以外の艦だったらワープどころか発進の時点で失敗してると思うよ」

というか、エネルギー伝導管の小規模な破損と装甲板の亀裂で済んだこと自体が奇跡だと、ユリカは心の中で断言する。

「ヤマトだから耐えられてることか？ 確かに実績はあるんだろうけど、それは万全の状態の時の話で、いまそれほど関係あることなのか？」

アキトは怪訝そうな顔をする。

アキトはユリカと違ってヤマトの活躍のイメージをまったく知らないのだから、当然の疑問だ。

これはアキトに限らず他の全ての人に言えることでもある。

「うん。ヤマトはね、生きてるから」

「は？」

アキトは一瞬ユリカの頭がさらにおかしくなってしまったのかと訝しむ。元々「天才と馬鹿は紙一重」を体現しているかのようなユリカなので、実験の後遺症とかその他もろもろで本格的におかしくなってしまったかと疑う。

「——アキト、私あっぱっぱーになんてなってないからね？」

考えを読まれたようだ。ユリカがふくれっ面になって半眼で睨んでくる。

「ともかく！ ヤマトは生きてるの！ 確かに喋ったりしないし擬人化した妖精さんとかも出てこないけど、ヤマトはちゃんと命がある。意思がある。だからこんな短時間でちぐはぐな再建を成し遂げられた。ヤマトがそれを望んだから——ヤマトは人の手で制御されてこそ力を発揮するからそれ単体ではなにもできないけど、ヤマトと目的を同じとする、心通わせる人が乗って操れば、常識を超えた力を発揮する。アクエリアスの水害から地球を守るために波動砲で自爆しても原形を留められたのは、まだ自分の力が必要だって感じたから。そして、必要とされているこの宇宙に……。別の宇宙であっても、愛する地球と人類のためなら、何度だってヤマトは立ち上げられる。生まれ変わる時に捧げられた、大いなる祈りのために——それがヤマトの強さだよ、アキト。ヤマトは二六〇年もの長きに亘って存在し続けてきた。だからそう、一種の九十九の神みたいなものなんだよ——だからちよつと気が咎めたんだけど、この世界の大和の残骸の一部も再建にあたって使ってるんだ。ヤマトに改造することはできないけど、せめて一緒に戦おうって。同じ歴史を辿ったこの世界のヤマトだからね」

ユリカは嬉しそうにアキトに語る。

そんな様子に『夢物語』と否定的な感想を抱けるはずもなく「そっ

か。だったら、俺もちゃんとヤマトに向き合わないとな」と肯定する。実際、ヤマトに乗っているとどこか暖かいものを感じる。それがそうなのだとしたら、ヤマトが数多くの奇跡を起こしてきた理由が、なんとなくわかる気がする。

何度も地球を救ったという艦がどうして壊れて漂着したのかについては、クルーを含めたヤマト計画に参加している全員が知らされていた。

そうでなければ、絶対の守護者といわれたところで大破して漂着したヤマトが信用されることはなかったろう。

「それに私たちは——冥王星の基地を叩いてから太陽系を出る。地球の安全のことを考えると、あそこを捨て置くわけにはいかない。絶対に叩かないといけない。それまでに、ヤマトを万全な状況にしないといけないからね」

「——噂に聞いたガミラスの前線基地か。叩けるのか?」

ユリカの大きな発言にアキトは不安げに尋ねる。アキトでなくても戦艦一隻で前線基地を叩くと言われたら、誰だって不安になる。

「できるできないじゃなくて、やるの。いえ、やるしかないの。後顧の憂いを立つためにも、これ以上地球を汚させないためにも、私たちがやらなきゃだめなの。だって私たちが、人類最後の、地球最後の希望の光なんだから」

ユリカはスプーンを握り締めて断言する。

握られた手が白くなっているところを見ると、相当気合が入っていることが伺えるし、彼女自身勝てないとわかっていた戦いとはいえ、なす統べなく敗退したことが悔しいのだろう。

アキトはそんなユリカの手をそつと握って頷いた。

「わかった。俺も頑張るよユリカ。サテライトキャノンを装備したダブルエックスなら基地攻略作戦にうってつけ、いやそのために造った機体なんだから?……人数的にも時間的にも制圧は無理。話に聞いた波動砲の威力を鑑みるに、サテライトキャノンが切り札ってことで、間違いないだろ?」

「そのとおり。欲を言えば残骸からデータくらいは欲しいけど、まず

は破壊が優先——ヤマトが太陽系を去ったあとは、二度と地球に遊星爆弾は降らせせない！」

食後ユリカに菓を服用させたアキトはそのまま少しの時間談笑して過ぎた。

そしてユリカの休憩時間が終わる頃になって、彼女の身支度の準備をした。クローゼットに掛けられていたロングコートを着せて艦長帽を渡し、座席ごと第一艦橋に降りるのを見届ける。

とりあえずいまのところは何事もないようだと安堵しながら、アキトは食器を片付け自分の仕事をするために艦長室をあとにした。

副長命令として公然と一緒に行られるようになっていたアキトとユリカ。

それ自体はユリカのコンディション維持のためと説明されれば、そして痴話喧嘩の過程で聞いた火星の後継者の裏を知れば文句はないと、クルーたちは生暖かく見守る姿勢を取っている。

それに絶大の人気を誇るルリが「決してお二人を邪魔しないで下さい、お願いします！」とあちこちに頭を下げて回ったのも効いているのだとか。

しかしそれも長くは続かなかった。

特にユリカが失われた時間を取り戻さんと以前にも増して人前だろうがなんだろうが、所構わずイチヤイチャイチャと、全力で甘えにかかり、押し弱さや惚れた弱みかあまり強く抵抗しないアキトの態度が原因で、ヤマトの旅が数日を過ぎた頃には何人ものクルーが口から砂糖を吐きそうになったり壁をぶん殴りたくなつたと言われている。

そしてそんな光景が目撃されるたびに、

「がああああああああああつ!!」

とか、

「俺も彼女欲しいいいいいっ!!」

とか、

「なんで私は独り身なのよおおおおおくくくつ!!」

とか、

「リア充爆発……しちゃ困るけどやっぱり爆ぜろおおおおおっ!!」
といった悲鳴と怨嗟の声が艦内のどこかで響いたという。

食器を片付けたアキトは、コミュニケで予定表を呼び出しながら格納庫に向かって移動する。

「えーと、あと二〇分でシミュレーション訓練開始か。急がないとみんなに悪いな」

足早に艦内を駆ける。

スペースが乏しく搭載機数が多いヤマトでは、ナデシコのようなシミュレーターームの確保が難しかった。

そこでウリバタケと真田が協議を重ねた結果、機体のコックピットを艦内の回線に有線で接続し、シミュレーターモードを起動できるように調整を加えた。そうすることで省スペース化も図れるし、エステバリス系列機に採用されているアサルトピットが個人用に徹底したチューンがされているという利点を活かせ、場合によつてはそちらの調整にも役立つという恩恵を得ることができた。

特にコックピットシステムが根本的に異なるダブルエックスにとつて、とてもありがたい仕様であったという。

コスモタイガー隊に無事入隊したアキトは、ダブルエックスの専属パイロットとして仲間たちと訓練に勤しむようになった。

早くみんなと打ち解けて綿密な連携を取れるようにしないと、今後の作戦行動に支障が出る可能性がある。

ただでさえ自分は連帯行動の訓練を受けていないのだから、疎かにできないことだ。

アキトはパイロット待機室を通過して格納庫に足を踏み入れると、格納庫で最も艦首側にあるスペースに格納されたダブルエックスの収納庫にはしごを伝って上り、機体のコンディションをチェックする。

目立ったトラブルはないようだ。昨日の戦闘でそれなりに被弾しているはずなのだが、装甲を交換する必要もなかったと言われた。サ

テライトキャノンの負荷に耐えるには、これほどの装甲強度や機体剛性が必要とされるのかと、改めて驚かされる。

時間まで整備班員と一緒にダブルエックスの通常メンテの手伝いをしていたが、隊長であるリョーコに呼び出されてブリーフィングルームを兼ねる待機室へと移動する。整備はなんとか間に合った。

そして待機室で仲間たちと一緒に訓練内容の最終確認。今回の訓練は対艦攻撃訓練である。

ブリーフィング終了後、各々の機体に駆け寄り、格納スペースの脇にあるコンソールを操作して機体をシミュレートモードに設定してあるかを確認、確認が終わったら機体に入り込んでコックピットの電源を入れて訓練を開始した。

「アキト、遅れるな！」

「……了解、隊長！」

アキトはリョーコ達のアルストロメリアに続き、ダブルエックスを対艦攻撃に参加させる。

いまはダブルエックスもGファルコンを装備した姿——GファルコンDXへと変貌していた。

サテライトキャノンの砲身を伸長させて正面斜め上に向け、リフレクターユニットを後ろに寝かせた状態でGファルコンのA、Bパーツに胴体前後挟み込んで完成する、展開形態。これは主に火力と運動性能が求められる対空戦闘に特化した姿であり、サテライトキャノンの全力使用のためには必ずならなければならない姿だ。

これに対し、リフレクターを下に倒し、縮めた状態の砲身を頭上に向け、Gファルコンで上下に挟んだ姿が収納形態。こちらは主に長距離移動を迅速に行ったり、機動力の方が優先される局面での対空戦闘や、状況次第ではオプション兵装を使つての対艦戦闘を想定した姿だ。サテライトキャノンも使えなくはないが、最大出力は出せない。

最も強力な相転移エンジン搭載型のダブルエックスと、出力で劣つていてもこちらも相転移エンジン搭載のGファルコンが合体しているだけあって、その総出力は重力波ビームを併用したアルストロメリ

アの合体形態すら圧倒的に凌ぐ。

その出力は相転移炉式戦艦、それもナデシコ級に匹敵する値にまで達しているほどだ。

そのためGファルコンの拡散グラビティブラストも最大出力で活用できるようになり、アルストロメリアと違ってノンオプションで対艦攻撃を実行可能な唯一の機体として、コスモタイガー隊の要となりつつあった。

しかしそれも当然のことである。

ヤマト用に求められた新型機動兵器は、その設計段階においては対機動兵器戦闘から対艦・対要塞攻撃性能のすべてを単独で盛り込むテコン盛りな仕様が検討されていた。

しかし当然といえば当然であるが、そのような機体を完成させられるわけもなく頓挫。単機にすべての機能を盛り込むのではなく、そして多機能を求めて過度に大型化を避けるため、人型本体とそのサポートを行う支援戦闘機という形に分解されたのが、いまのダブルエックスとGファルコンである。

このアイデアの源流は、ブラックサレナと高機動ユニットにあった。

対北辰、取り巻きの七人衆を単機で相手するために歪に進化して至ったブラックサレナは、任務に応じて複数のオプションユニットを使用して運用された実績がある。

その運用実績から求められる性能や要求を推し進めた先で誕生したのが、キャリアー戦闘機とも形容されるGファルコンというわけだ。

こういう形で機体が分割された恩恵は大きく、状況に応じて分離と合体を使い分けることで数を増やす、または強力な単機で対応するといった使い方も可能になった。

さらにGファルコンには輸送戦闘機としての性質が結果的に付与されたことで、ダブルエックスの消耗を抑えつつ機体を輸送して戦場で分離して支援に回ることも、そのまま強化パーツとして機能することもできる、非常に多機能な運用法を確立している。

その意味では、この機体はブラックサレナの系譜を受け継ぐ機体としての側面も持ち、アキトが乗る事が運命付けられているかのような機体だった。

しかし、ヤマトではアルストロメリア単独では敵機に対抗しきれないこと、そしてアキトを乗せるために回りくどい画策をしなければならなかったという事情も影響して、Gファルコンに求められる機能の一部である、合体と分離の使い分けに必要なGファルコン側のパイロットが用意されていない。

常に合体したままの運用が求められる都合上、キャリアーとしての役割も果たせないなど、いくつかの制約を抱えての運用となっていた。

アキトのGファルコンDXは、ほかの機体が敵艦をかく乱している内に急接近、収束射撃モードに切り替えた拡散グラビティブラストと専用バスターライフルの最大出力を、装甲が薄い下部から機関部に連続して叩き込む。

本来の性能を発揮した拡散グラビティブラストと最強クラスの携行型ビーム砲である専用バスターライフルの威力の前に、データ上のガミラス駆逐艦は数発の被弾で機関部から火を噴き爆ぜた。

「目標の撃破を確認。次に移る」

アキトの報告に、シミュレーションながらリョーコも心が沸き立つのを感じる。これが新型の力か。合流した時の戦いでも見せつけられたが、Gファルコンが合体するともう手が付けられない強さにも思える。

この機体を活かすことができれば、ガミラス相手でも不足なく戦える。

まさに機動兵器版のヤマトではないかと、リョーコのみならず参加しているすべてのパイロットが高揚する。

「よしっ！ いいぞアキト、全機続け！」

リョーコの指示に従って隊列を組んだコスモタイガー隊が次の目標に向かって飛翔する。アキトのGファルコンDXもなんとか隊列に合わせて行動するが、追従しきれずもたついてしまう。

それでも訓練を重ねるごとに、確実にアキトは合わせられるようになってきていた。

思った以上に飲み込みがいいことに、ほかのパイロットも関心せざるをえない。

なるほど、単独でコロニーを襲撃した腕前に間違いはないということか。

あまり口に出したくないことではあったが、それでもアキトの呑み込みの早さとパイロットとしての技量を認めるには十分過ぎた。

——それに気づいていたのだ、アキトがもたつく理由が経験不足だけではないことに。

それから数回にわたって対艦戦闘訓練が続けられた。

ダブルエックスを前面に押し出した戦果は上々であり、対空戦闘から対艦戦闘、さらにサテライトキャノンまでも含めれば対艦隊戦闘に要塞攻略にまで対応できるマルチロールぶりに、否応なく実戦での活躍を期待する声が挙がる。

しかし肝心のサテライトキャノンの運用が難しく、安易に使えないことが頭を悩ませた。

元来が戦略砲撃装備であることから、戦術レベルの戦闘に持ち出す兵器でないことが原因だ。

第一に、発射のために必要なエネルギーチャージに数十秒という時間が必要となり、その間は一切の火器も使えず、ディスプレイオンフィールドすら展開できない。

いくら度を越した機体強度と装甲強度を持つダブルエックスといえど、棒立ちで集中砲火を浴び続けられればいずれ決壊する。

発射形態に移行したダブルエックスはリフレクターの受信パネル部分や両手足に装備された放熱装備——エネルギーラジエータープレートを展開するため、どうしてもそういった部位が無防備になる。当然この部位がひとつでも破壊されてしまえば発射が阻止されてしまう。

チャージを開始してエネルギー収束に必要なタキオンフィールドを展開することや、余剰エネルギーが生み出す一種の高熱フィールド

が生じるとはいっても、万全の防御体制とは言えない。

つまり発射準備に入る前にいかに安全を確保するか、状況次第では準備中のダブルエックスをいかに護衛しながら撃たせるかが課題として挙げられた。

第二に、技術的問題から受信したエネルギーだけでなく、機体すべてのエネルギーを消費する構造になっているため、発砲後は空になる。影響を受けないGファルコンと合体していないと身動きすらままならず、合体していたとしても、Gファルコン側の出力だけでは満足に戦えず、放熱の都合から最長五分間出力回復の見込みがないため、発射に成功しても残存兵力が存在する場合のケアが求められた。

——第三に、攻撃範囲も破壊力も過大である程度の調整が可能といても限度があるため、迂闊に発砲すると味方を巻き込みかねない、破壊すべきではない対象すら巻き込んでしまう危険性があり、使用の判断が極めて難しい。

当たり前のことだがサテライトキャノンの運用に終始するのであれば、ダブルエックスは前線に出すべき機体ではない。ほかの機体が安全を確保しなければ常に破損の危険が付きまとい、使用機会を棒に振る危険性があるのだから当然だ。

だがダブルエックスは——特にGファルコンDXはきわめて強力な戦力。後方に下げしておくべき存在ではない。

本来の運用思想とその高性能ゆえに求められる運用がかみ合わないいちぐはぐさもまた、この機体の扱いを難しくしているのであった。

アキトはダブルエックスのコックピットから這い出して大きく息を吐く。

ダブルエックスのコックピットハッチは既存の機体と違って胸部——というより襟元に備わっている。

頭部がわずかに後退し上部のハッチが解放され、胸部中央ブロック自体が前方に倒れるようにスライドしたあと、シートが昇降してパイロットが乗り降りする方式だ。

だからヤマトの格納庫では、固定ベッドに仰向けに寝かされて格納されている都合上、機体への乗り降りがほかの機体よりも幾分楽であ

る。

ちなみにそのままだと格納スペースのサイズをオーバーしてしまうため、格納中はリフレクターとサテライトキャノンは根元の結合ブロックごと外され、格納スペースの壁に固定されていた。

アキトは機体を降りたあと梯子を使って格納庫の床に降りると、訓練を終えたほかのメンバーのところに集合して反省会に参加する。

やはりと言うか、話題に上るのはダブルエックスのことだ。

アキトの技量についてはそれほど問題ならなかったが、先に挙げた運用上の問題は当然として、アルストロメリアの性能をもつてもダブルエックスには完全に追従できないという事実がさらに問題を深刻にしていた。

「くそつ。古代の言うとおりダブルエックスは扱いが難しいな。アキト、おまえの手応えはどうだ？」

「そうだね……。機体性能が高いのは個人的にはありがたいんだけど、隊列を組むとなると合わせるのが大変だと感じたかな？ 並行して飛ぶときだって、速度を合わせたりすると性能を抑えてる感じがしてちよつともどかしい。ただ、火力に関しては折り紙付きだから、それを活かすためにもみんなと行動したいと思う。連携したほうがチャンスも多いし、こつちからみんなをフォローするためにもあまり離れるのは得策じゃないと思うんだ。さすがにサテライト抜きで敵部隊を一機で退けられるような機体でもないし」

率直な感想を述べる。リョーコを始めとするパイロットたちも難しい顔で頭を捻った。

「まあ確かに凄い機体なんだよな。凄過ぎて活用が難しいってのは贅沢な話かもしれないが」

パイロットの一人が自分の考えを述べる。

シミュレーションでは問題にもならないが、ダブルエックスは機体のデザインからして悪目立ちする機体だ。実戦でその威力を見せなければ、恐らく集中的に狙われる。

それをフォローするのもコスモタイガー隊の課題ではあるが、ダブルエックスに追従できなければフォローどころではないのは明らか

だ。

「いつそ、真田さんに頼んでアルストロメリアのさらなる性能向上を図るとか？ 冗長性は残されてるらしいし、あの人のことだからなにかしらプランがあるんじゃないのか？」

「でも実働二六機だぞ？ その数を改造するのは結構手間じゃないか？」

「でも改造が上手くいったなら、ダブルエックスをもっと活かしやすいくなる。頼んでみるだけでもしてみたほうがいいと思うぞ」

意見はおおよそアルストロメリアのパワーアップが現実的という結論に達していた。ダブルエックスについていけない理由のひとつは推進装置の推力が劣っている、というのがあった。

確かにアルストロメリアはエステバリスに比べると部品のおミツトもなく、Gファルコンの推力も分散しただけマシではあったが、それでも方や相転移エンジンが二基搭載された超高出力機。

方や重力波ビームと相転移エンジン一基のハイブリット仕様。どちらのほうが優れているかは一目瞭然である。

「つーても本格的な改造になると配備まで時間かかるし、冥王星での戦いには間に合わねえよなあ。となると、やっぱり運用方法を構築するしかないってか——おいサブ、なにか知恵ないか？」

待機中のサブロウタに話を振る。待機組ゆえシミュレーションには参加せず、外部からモニターしていたに留まっていたが、それでもダブルエックスの隔絶した性能を把握するには十分だった様子。

「と言われてもねえ……。やっぱりアルストロメリアの強化が最優先だろうな。確かにいままでのエステに比べれば優れてるけどよ、今後ガミラスの連中だってダブルエックスを基準にして戦力を用意してくる可能性は高いわけだ。となると戦術を練っていまのままでも連携できるようにしたりしても、いずれ限界が来るだろうしな。つーてもアルストロメリアをいくら強化したってダブルエックスに並び立つのは不可能だろうし、やっぱり状況に応じて臨機応変に、つてのが最良になるんじゃないか？ ありきたりな意見で申し訳ないけど、結局のところダブルエックスの性能がまだまだ未知数なところもある

し、実戦での運用経験の浅さとかを考えると、いきなり名案を出すのはちよつと無理だぜ」

サブロウタは真面目な顔で顎に手を当てて悩む。

こういう時はチャライ態度を取ることは少なく、真面目な軍人としての視点で語ってくれるため、リョーコとしてもありがたい。

——普段からこうであればもつとありがたいのだが……。

「しかないよなあ。せめてダブルエックスみたいのがあと二、三機あれば、独立した遊撃部隊として別枠で扱えるんだけど、単機じゃなあ。……テンカワもそれでいいか？」

リョーコも頷く。

「……そうだなあ。やっぱりもつと一緒に訓練を重ねて、地道に互いの呼吸を掴んでいくのが確実そうだよなあ。とりあえずアルストロメリアの改良要望案をまとめたあと、いまの訓練の情報をまとめて検証して、次の訓練の計画を練ったほうがいいかな？」

アキトも二人の意見に賛成する。堅実に努力を重ねることの大切さはアキトも理解しているし、いかんせん不慣れな集団行動なのだから、いまのままではどうにもならないだろう。

ほかのパイロットたちも「それ以外に思いつかないし、それでなんとかするか」と応じて「ま、ダブルエックスが要だ。しつかり頼むぞ」とアキトの背中を叩いたり、気安い対応だった。

昨日行われた親睦会を兼ねた食事の席のことだ。

隊長として幹事を担当したりョーコが開口一番に、

「ここにいる奴は、おまえがなにをやったかなんて興味ねえよ。いまはこの旅を成功させることだけ考えようや。成功さえすりゃ、過去になががあつたって面と向かって文句言える奴はいねえ。なんせ、人類を救った英雄なんだ。帳消しするには十分過ぎるだろ？」

と断言し、コスモタイガー隊はもちろん、たまたま食堂で相席したクルーたちもが頷いたことで、アキトは自分を受け入れてくれた彼らに大きな感謝を感じて、自分から歩み寄るように心掛けたのもあった。

——結果、アキトはユリカとの再会をネタに散々弄り倒され、最前

線で命を懸けてきた自分たちを差し置いて新型機を受領したことに
対する（冗談半分の）嫉妬に晒され、火星の後継者関係のことを聞か
れない代わりにナデシコ時代はもちろん結婚に至るまでの同棲生活
についてとか、さらに火星で過ごしていたころのユリカとの馴れ初め
話などなど、いろいろ吐かされた結果、無事(?)にコスモタイガー
隊の隊員たちと打ち解け良好な関係を築くことに成功したのであつ
た。

「にしても、ダブルエックスって本当にゲキ・ガンガーみたいだね。い
やあ、ロマンの塊ですなあ」

サブロウタ同様、待機組だったヒカルがやってきて、楽しそうにア
キトに話題を振る。

「言われてみればね——ガイの奴が生きてたら、乗りたがったろうな
……少なくとも、この状況に燃え上がったのは間違いないか。本物
の侵略者との戦いだもんなあ」

ふと、ナデシコで最初に仲良くなった友人のことを思い出す。

例えば、ダブルエックスの原型というべきXエステバリスと共に
散ったムネタケ・サダアキ提督も、ガイのことで罪悪感を抱えてた様
子だった、とアキトは思い返す。

だとすれば、自分がダブルエックスに乗るのはある種の因縁なのだ
ろうか。

最後まで分かり合えずにいたムネタケ提督ではあったが、いまの自
分なら彼が最後に暴走してしまった理由がわかる。

……もしも出会い方が違っていたら、もしも自分がもう少しだけで
も大人だったら、あかり合うこともできたのだろうか。

当時は鬱陶しい、威張り散らすだけの嫌な大人としか思えなかった
ムネタケ提督。

当時わかり合えなかったことが、いまになって無性に寂しいと感じ
るとは、考えもしなかった。

「ムネタケ提督……正直、俺たち最後までわかり合えなかったけどさ、
あんたが守ろうとした正義は、地球は俺たちが絶対に救ってみせる—
—だから見ててくれ。あんたが乗った機体と同じ、Xの称号を受け継

いだこいつと、ヤマトの活躍をさ」

「真田さん、シミュレーションのデータを見る限りだと、アルストロメリアでもダブルエックスに追従するのは難しいと思いますが、真田さんはどう思いますか？」

「うむ……。想定よりもダブルエックスの完成度が高いのは間違いないようだな。確かにこのままでは部隊行動に支障をきたしかねん」

第一艦橋でコスモタイガー隊のシミュレーションを見守っていた進からの相談を受けた真田が苦い顔で唸る。

アルストロメリアとて、十分高性能な機体であるにもかかわらずこれとは、少々予想外だ。

「全面改修をする余裕はヤマトにはない。が、部分的に手を加えればもう少し性能を上げられるかもしれない。しかしそれをするにも資材が心許ないな。――艦長、木星で資材を入手できた場合、アルストロメリアの改造計画を練っても構いませんか？」

真田の進言を受けてユリカも難しい顔で考えたあと、「そうだね」と頷く。

「なにがあるかわからない旅だし、部隊行動もそうだけど、長期戦とか変わった環境での運用とかを要求されるかもだし、備えておくのは悪いことじゃないと思う」

と前向きな意見を口にする。

問題は、木星にそれだけの資材があるかどうかと、実際の作業にどの程度の時間を取られるかにかかっている。

「とりあえず事前計画だけは練っておいて。アルストロメリアは各パーツのブロック化が進んでるし、パーツ交換で済む程度の改造なら、それほど掛からないでしょう？ あ、あと航空隊からの要望があるかどうかちゃんと聞いてから作業してくださいね。実際に使うのは彼らなんですから」

「わかりました。では、少し彼らのところに顔を出して、意見を聞いてきたいと思います。構わないでしょうか？」

「いいよ。いつてきてあげて」

真田はすぐに席から立ち上がると、そのまま主幹エレベーターに乗り込んでパイロット待機室に向かって移動し始めた。

その姿を見送って二分ほど経ってから、

「あっ！」

ユリカが突然大声を上げたので、第一艦橋の面々はびくりと体を揺らす。一体何事だというのだろうか。

「ルリちゃん！ 波動砲の説明、まだみんなにしてなかったよ！」

ユリカが言うのとルリは露骨に嫌そうな顔をした。

「まさかまたやるんですか？ 私はちよつと……」

「嫌なら変わりますでしょうか？ ルリ姉さん」

嫌がるルリにラピスが助け舟を出す。が、かわいい妹を晒しものにはできないと、ルリは思い悩んだ末、結局応じた。

「じゃあまたイネスさんに連絡して、と。真田さんは仕事だから……そうだ、進君行ってみようか！ 進君にばつちり関係あるしね！」

「ええっ!？」

巻き込まれた。

アルストロメリアの改良について話し合おうとしていたアキトたちは、ちようどよく顔を見せてくれた真田も交えて改良案について色々と意見を出し合っていた。

「やっぱり優先すべきは機動性の強化ですかね？ スラスターの追加とかでなんとかありませんか？」

「そつちも大事だが火力も必要だ。大型爆弾槽でもなんとかなるが、もう少し柔軟に立ち回れる武器が欲しい」

「いや、ダブルエックスの護衛が最優先になる状況を考えると防御力も欲しい。防衛対象から離れられない状況だと、盾になることだって考慮しないとまずいぞ」

などなどと、パイロットひとりひとりが思い思いの要望を口にす

る。

そこになにを感じ取ったのかウリバタケが顔を見せると、話し合いは一気に具体性を伴ってヒートアップ。

「やっぱりよ、本体への固定武装をもう少し増やしたほうがいいんじゃないか？ ダブルエックスだってヘッドバルカンとブレストランチャーがあるしよ、攻撃用途に限らず小回りが利く迎撃用装備とかさ」

「そうですね、だとしても実弾を採用するかビーム兵器を採用するか。設置場所や搭載に伴う出力系への負荷を考えると……」

などと、ウリバタケと真田の独壇場へと変貌する意見会。

「ダブルエックスとアルストロメリア双方に搭乗経験がある俺からすると、やはりヘッドバルカンは迎撃・牽制目的で用いるには最適な武装だ。できるなら類似品の追加が欲しい」

月臣もその中に混じって意見を提出したりする。

そんな中黙って聞き手に回っていたはずのアキトが、

「……みんなの善意を棒に振るみたいで申し訳ないんだけど——ブラックサレナ、使えませんか？ ウリバタケさん、真田さん」

アキトが真面目な顔で訴える。

「装甲兼用のスラストユニット。ここに武装を足してもいい。本体に無理に機能を内蔵させたりするよりも設計が楽になったりしませんか？」

なにがなんでもヤマトを成功させたい。そして仲間たちが生き残れるようにしたいというアキトの真摯で悲痛な覚悟が嫌でも伝わってくる。

アキトの提案を受けた真田とウリバタケもその気持ちを汲んで、「検討してみよう」と答えた。

その場にいる全員が神妙な空気であった時、突如としてウィンドウが艦内の至る所に起動、使用されていなかったモニターに灯が灯る。

そして流れ出す軽快な音楽。

アキトはなんとなく嫌な予感がした。

「三……二……一……どっか〜ん！ なぜなにナゲシコ〜!!」

続けて流れしてきたユリカとルリの声にアキトは脱力してその場に崩れ落ちた。それでも視線は開いたウィンドウに釘付けのまま剥がせない。

「おーいみんな、あつまれえ〜。なぜなにナデシコの時間だよ〜！」
「——あ、あつまれえ〜……」

もはや恒例のウサギユリカと（前回以上に恥ずかし気な）ルリお姉さんに、巻き込まれたのだろう、仏頂面の進お兄さんもいた。

ルリとお揃いというか、子供向け体操番組のお兄さんのような格好をさせられ、顔を赤くしながらも、（自分が解説したくなる的の意味で）台本通りに動かない真田と違い、一応真面目に台本通りに動いている。

だが不憫だ。

背景には『なぜなにナデシコ ヤマト出張篇その二』初めての波動砲』と書かれている。

……この瞬間、艦内では拍手喝采でなぜなにナデシコの放送を歓迎していた。

可愛らしい艦長とオペレーターの姿、さらには生贄一名を見ることができるとというのが大半の理由だが、説明される内容がヤマトへの理解に繋がるとなれば見ない理由もない。

そもそも娯楽に乏しい宇宙戦艦の中で、これほど娯楽性の高い放送は人気が出ないわけがないのである。

「あ、あ……あのバカあああっ!!」

叫びながら立ち上がったアキトはわき目も振らず待機室を飛び出し、中央作戦室に向かって全力疾走を始めた。

一度ならず二度までも、普通の体ではないというのになぜ安静にできないのかと、妻の暴拳に怒りを露にしてアキトが駆ける！ 焦り過ぎてよろめいて曲がり角の壁に激突しながらも走る走る！

可愛いからと、ちゃっかり前回放送分の映像ディスクを懐にしまい込んだことも忘れて、アキトは走った！

「ユリカあああ〜っ!!」

廊下から叫び声が聞こえてくる。まるで地球でヤマトの帰りを

待っている義父、コウイチロウが乗り移ったかのような叫び声だ。

怒りだけでなく泣きが入っているあたり、複雑なアキトの心境を的確に表しているといえよう。

「……あくあ。俺は知らねえぞユリカ」

頭の後ろで手を組んでリョーコが呆れ顔で呟く。ほんの少し前までのシリアスな空気は完全に霧散してしまった。

「不憫な……」

月臣がアキトの心情を慮って目を伏せる。

ちなみに意外に思えるが、月臣はあまりなぜなにナデシコを笑っていない。多少面食らったが思いの外わかり易くいろいろ説明してくれるので、むしろありがたがっていた。——ただ木連時代だったら怒っていたかもしれないな、とは本人の弁。

「まあなあ。まったくユリカもよくやるよ。付き合わされるルリも可哀想に……もっと可愛そうなのは古代かもしれないねえけど」

羞恥を堪えながら、画面の中で波動砲の仕組みについて台本どおりのセリフと、用意された映像などを駆使してルリお姉さんと一緒に説明している、直属の上司であるはずの進お兄さんの姿に、リョーコは深く同情した。

——同情しただけだが。

最速で中央作戦室に飛び込んだアキトは、待ち構えていたゴートの奇襲の前に遭えなく拘束、猿ぐつわを噛まされたうえで簀巻きにされた。アキトの行動を読み切ったユリカの勝利である。

そして着替えを手伝ったのだろうエリナが、それはもう申し訳なさそうな顔でこちらに手を合わせながらも、ヨタヨタと動くユリカの姿をハラハラと見守り、原画協力として待機室を抜けていたヒカルも、その手伝いとして同行したイズミも簀巻きにされたアキトをそれはもう楽しそうに弄り、メガフォンを構えて演出に余念がないイネスは一瞥も寄こさない。

ユリカはカメラに映らないところでアキトに笑顔で手を振ってくるがそういう問題じゃないめっちゃ可愛いけど。

アキトに気づいたルリは「お願いだから見ないでください」と言わ

んばかりの目線でアキトを責めるが悪いのは俺なのかと理不尽な思いをする。

進も「止められません、無理」と目線で訴えるのみで可哀想だなおまえ。

……アキトはどうとう放送を中止させることができず、部屋の片隅を芋虫のようにのたうち回ることしかできなかった。

結局なぜなにナデシコ第二弾も好評を博し、クルーたちは最終兵器である波動砲に対する理解を得た。

しかし軽めのノリに反して示されたその威力の凄まじさに、全員で震えあがる羽目になったという。

波動砲。正式名称は『タキオン波動収束砲』。

ヤマトに装備されたそれはトランジッション波動砲と呼ばれている。

それはヤマトの最終兵器にして、地球人類が手にした火砲の中でもトップクラスに強力な破滅の力。

波動エンジン内で生成される波動エネルギー⇨タキオン粒子をエネルギーに変換せずそのまま発射装置に強制注入、圧力を限界まで高めて出力を上げ、『タキオンバースト波動流』の状態に加工、加工されたそれを一挙に前方に開放する、ヤマトの必殺兵器だ。

このタキオンバースト波動流は時空間そのものを極めて不安定にする性質を持っている。

そのためこの奔流に飲まれた時空間は時間連続体を歪められてしまう。空間が消滅したり穴が開くほどではないが、そこに物体があればもれなく消滅するというのが破壊原理だ。

また時空間を歪めているのはあくまでタキオンバースト波動流という『粒子ビームの一種』であるため、なにかしらの物体に命中するなどしてエネルギーが拡散することがあり、飛散したエネルギーによって広範囲に破壊作用がもたらされ二次被害を起す性質を持つ。

さらに厄介なことに、粒子ビームとしての性質があるためか、それとも波動エネルギー自体がもつ熱エネルギーとの相乗効果なのか、爆発と形容しても差し支えない強烈な反応を生む場合も多く、エネルギー

ギー流自体は収束された細かいビームに過ぎないのに、実際の破壊作用が広域に広がり過ぎてしまうことすらあるという。

事実、過去に強力なミサイルの迎撃と敵艦隊撃滅を目的として発射された波動砲のエネルギーがミサイルの爆発で拡大し、艦隊を丸呑みにしてしまったこともあったというデータも残されている。

ヤマトの波動砲はエネルギーを集約した収束型であるため、通常は戦艦一隻呑み込めるかどうかという細かいタキオンバースト波動流を撃ち出すが、撃ち出されたエネルギーの周囲の空間にも破壊作用は広まっているため、かすめた程度でも宇宙艦艇くらいなら容易く破壊する。

その破壊力はたった一発でオーストラリア大陸に匹敵する大きさと質量を有した、衛星の一種とも形容される浮遊大陸と呼ばれる天体を塵も残さず消滅に導くほどと、常軌を逸している。

——新生したヤマトはそれを六発まで連続で発射できるのだ。

そのため本来は不向きなはずの広域攻撃や多数のターゲットに対する連続攻撃すら可能としている。

そのすべてを使い切れば、地球の月すら消滅させ、地球サイズの天体すら砕くだけなら可能と言われている。

参考として語られた豆知識によれば、外的な力で月を消滅させるには、いまなお最強の核兵器である、水素爆弾の二兆発倍もの威力が必要と言われている。

つまり、ヤマトの最大火力はそれに匹敵あるいは凌駕する水準ということなのだ。

とはいえデメリットも相応にある。

ヤマトの主動力は波動相転移エンジン。

相転移エンジンを利用して波動エンジンの出力を大幅に強化した、複合連装エンジンを採用している。

だが発射体勢に切り替わると、相転移エンジンから波動エンジンへの供給が停止し、波動エンジンもエンジン内のエネルギーを電力などに変換しなくなるのだ。

その状態でそれぞれのエンジン内圧を十分に高め、六連炉心の中央

にある動力伝達装置とも呼ばれる波動砲用の薬室内にて、小相転移炉一つの全エネルギーと波動エンジン総量の六分の一の波動エネルギーを融合、仕上げるに六連炉心部分が前進して突入ボルトに接続、エネルギーを流し込む。

あとは波動砲の発射口まで繋がる長大なライフリングチューブと、その中にある波動砲収束装置、最終収束装置を経てエネルギーの収束と増幅を繰り返して発砲される。

使用する小相転移炉は円周状に並んだ炉心の頂点に位置する炉で、発射のたびに炉心が回転してエネルギー回路を切り替える構造を有している。

これがトランジション、『切り替え』と名付けられた由来だ。

従来のストライカーボルトで遊底を押し込む方式だと複合炉心でも連射が困難と判断され、改定された構造だった。

そして最大の欠点。それは波動砲は一発撃つごとに小相転移炉心一つがエネルギーを空にしてしまうため、停止するということがある。

基本的に六連炉心はそれぞれの炉心が独立して制御されているため、一つが空になったからといってほかの炉心から直接エネルギーを供給して再始動することはできない構造になっている。

当然再始動には時間がかかり、相転移エンジンの供給で稼働する波動エンジンの出力は入力されるエネルギーでも作用されるため、出力低下を招く。

ヤマトの波動エンジンは連装エンジンに改造されたことで単独では起動できないため、波動砲を発射することに六分の一ずつ出力が低下し、最後には停止してしまう。

そのため再始動の際は相転移エンジンから始めなければならないというシステム上の都合もあって、波動砲を撃ち切ったヤマトは長時間無防備になってしまうという致命的な弱点を有しているのだ。

たとえ撃ち切らずとも、出力が減少して回復に時間がかかるとなれば弱体化は避けられず、波動砲の使用はその威力がもたらす被害と合わせて常に慎重であることを余儀なくされる。

つまり、安易に頼ることができない、まさに最終兵器と呼ぶにふさわしい存在なのだ。

この説明によってクルーたちは、使いこなせれば頼もしい力になると同時に、一歩間違えれば自分たちもガミラスと同等の存在に墜ちる可能性を示されて、青褪めるのであった。

んで、なぜなにナデシコ終了直後。

「おまえという奴は！ 自分の体のことをわかってるのか!？」

激怒したアキトがユリカに説教を開始していた。

「でもでも好評だったし、波動砲のことは乗組員全員が理解してくれないと困るのよ〜」

「だったら別の人にやらせりゃいいだろうがっ！ 俺は心配で心配で……」

「ううう、ごめんなさいアキトお」

アキトに真剣に怒られてはユリカも立つ瀬ない。ウサギユリカの格好のまましよんぼりと身を小さくする。

「まあまあアキトさん。落ち着いてください、あんまり怒ったら却って艦長の体に障りますよ、『一応』病人なんですから『一応』」

進がフォローに回る。しかし『一応』などという言葉が出てくるところから察するに、彼も複雑な心境なのだろう。

「そうですアキトさん。止められなかった私たちにも非があります。ごめんなさい」

「ごめんなさいアキト君。その、ユリカの無茶を止められなくて」

ルリお姉さんとエリナまでもがユリカを庇いに入る。

こうまでされてはさすがにに叱り続けるわけにはいかず、アキトは不満と一緒に怒りを飲み込むことにする。

「まあいいじゃない。怒る気持ちもわかるけど、ガス抜きは誰にも必要なのよ。大丈夫、彼女の体調は私が保証するわ——それに、アキト君が戻って来てから彼女、本当に調子が良いのよ」

薄く笑いながらイネスが告げると、顔を赤くしながらもアキトはユリカに向き直って、

「もういい——でも、あんまり無茶するんじゃないぞ」

「うん、ごめんねアキト、心配させちゃって」

涙声で謝罪するユリカをぎゅっと抱き締めて円満に終わらせるところにする。

周りが見てるが知るかそんなこと。スキンシップは夫婦円満の秘訣、だとかアカツキが言っていた。

——あいつ未婚のはずだけど。

「おっ……っ？」

「？ どうしたのアキト？」

なぜか手をわさわさと動かして体を撫でるアキトの行動を疑問に思ったユリカが問う。人前で体を撫でまわすなんてアキトらしくない。

「いや、この着ぐるみ……すっげえ手触りがいい」

抱きしめて思いのほか気持ち良かったのか、アキトの顔が綻ぶ。

「そ、そう？ あんまり気にしてなかったけど」

「いや凄いつてこれ。クツションとかにして配ったら、ストレス解消用にちょうどいいんじゃないか？」

感激の声を上げるアキトにユリカが閃いた！

「そっか！ じゃあ艦内の空気が悪くなったら、私がこの格好で艦内歩き回ってハグしてあげればいいんだ！」

「そういうのは止めておけ!!」

その場にいた全員から即座に突っ込みが突き刺さった。

第五話 悲壮な決断！ トランジッション波動砲!!

Bパート

「アキト君、ちよつといいかしら？」

ユリカを艦橋に送り届けたあと、エリナが声をかけてきた。

「——ああ」

アキトは少し戸惑いながらも応じる。

二人はそのまま艦橋の後部にある展望室に足を運んだ。

本来は後方監視用の展望室なのだが、なぜかクルーたちの憩いの場として活用されることが多く、気になる男女が二人で立ち寄っている雰囲気になることがあるとかないとか噂になっていた。

「エリナ……その、俺——」

二人きりになった途端謝ろうとしたアキトを遮る形で、エリナの拳がアキトの鳩尾に突き刺さる。

「かはっ……い！」

と呻いてアキトが鳩尾を抑えて立ち尽くす。

「余計なことは言わなくてよろしい。最初から私はただ自暴自棄になってたあなたを慰めてあげただけ。ユリカから奪おうとか、責任を取って欲しいとかは考えてないわよ」

笑みすら浮かべた顔でアキトに宣言する。

別の話をしたかったが、アキトの性格だと絶対にこうなるだろうと思っただけ先制攻撃したのだが、大成功。

「あなたは愛すべき女性はユリカだけ、もちろん責任を取るのもね。——もうこれ以上泣かせちゃ駄目よ」

優しい声色でアキトを諭す。奇襲を受けて苦しんだアキトも、これ以上はお互いのためにならないと悟らされた。

「あ、ありがとうエリナ。感謝、するよ」

苦しみながらも礼を言う。これで、アキトとエリナの男女関係の清

算は完全に終わった。

「もつとも、友人としての関係はこのまま続けさせてもらってもいいわよね？ あんたたち、放っておくと何しでかすかわからなくて心配なのよ……まったく、タチの悪い夫婦と仲良くなったものよね」

苦笑するエリナにアキトもバツの悪い顔をする。

「で、本題なんだけど……あなたアカツキ君からどれくらい聞いてるの？」

「どれくらいって、ユリカがヤマトの再建に尽力したことと、余命が半年だつてこと……それと、イスカンドルとコスモリバースのこと」

万が一誰かに聞かれても困らないように、敢えてぼかしたアキト。だが、それだけでエリナはすべてを察した。

「そう、文字どおり全部か。あの人も大胆ね、下手したらアキト君が潰れてもおかしくない、残酷な事実なのに」

はあつ、と額を抑えて首を振る。

多少は自業自得だと思うが、アキトが不憫に思えた。エリナですら消化するには時間を要した案件を聞かされてすぐに出撃になるとは――。まあ彼にはいい葉だろうか。

「……まあショックだったよ。でも、あいつが助かる可能性が万に一つでも残ってるんならそれに賭ける。俺は絶対にユリカを諦めない。一緒に生きていくつて約束したんだ」

アキトの静かな決意にエリナもニヤリと笑って応える。

「なら私たちにできることは」

「ユリカを全力で支えてイスカンドルに辿り着かせることだ」

「ええ。この宇宙戦艦ヤマトならそれができる。ネルガルもそれしきることができない戦艦に、社運を賭けたりしないわよ」

二人は静かに視線を交えて拳を打ち合わせる。

「そうと決まれば話は早いわ。詳細は知らされてないけど、ユリカの世話役の森雪にもちゃんと顔見せして仲良くなっておくように。いくら夫でも艦内の風紀を考えると入浴とかの介助は務まらないでしょ？ 一応私と雪で交代で務めることになってるから」

「わかった。にしても風呂も一人で入れないなんて、思った以上に

弱ってるんだな。……やっぱりなぜなにナデシコは今回で最後にしておくべきなんじゃ」

アキトの心配はそちらに向く。騒いだ直後だというのものもあるが、着ぐるみ着用で動き回るのがいまのユリカにとって負担にならないわけがない、というのがアキトの考えだから当然だろう。

「それについてはなんとも言えないわね。ユリカのことばかり考えて、クルーの精神衛生を無視するのも悪手だし。実際凄く受けがいいのよ。たぶん戦艦の中だと娯楽が少ないし、これからの未知の旅路を思えば、つてことなのかもだけど」

「そんなに受けてるのか……。だとすると無理に辞めさせるわけにもいかないのか……。わかった。今後ともよろしく頼むよエリナ。頼りにしていいんだろ？」

「当然」

不敵な笑みで頷くエリナにアキトも笑みを浮かべる。

男女関係は終わったが、彼女とはこれからも未永く付き合っていくことになりそうだった。

翌日、ヤマトは木星近海に到着した。

艦内にはわかに慌ただしくなり、資源を得るためにどの場所に行くのが効果的かを調べるべく、調査活動を開始した。

新設された電算室とそのオペレーターたち、新装備の出番であり、見せ場であった。

「ルリちゃん、プローブ発射」

「了解、プローブを撃ちます」

第三艦橋の電算室に（フリーフォールで）移動した（涙目の）ルリは、コンソールを操作して第三艦橋前方に備えられた、プローブの発射管を解放する。

従来の第三艦橋では六つの窓のように見えた部分の内、二つが展開、中から各種高感度センサーを満載したプローブがそれぞれ一基づ

つ、計二基が発射される。

発射された魚雷型のプローブはしばらくロケットモーターで推進、ヤマトから離れると先端の天体観測レンズ部分を残し、前半分の外装がガバツと開いて電磁波探知アンテナ群を瞬時に展開した。

たちまち電算室にプローブが収集したデータが送り込まれ、電算室の高解像度モニターやウィンドウに所狭しと表示される。

ルリたちオペレーターはその情報を種類ごとに分別しそれぞれの担当する情報を徹底的に解析、最終的な回答を導き出していく。

地球では名の知れたルリはもちろん、そのバックアップを務めるオペレーターたちも選りすぐりの才女たちだ。

今回は雪も解析作業の手伝いとして副オペレーター席に座ってルリのバックアップを勤め上げる。

「艦長、解析結果出ました。第一艦橋のメインパネルに映します。オモイカネ、よろしく」

ルリの指示に従ってオモイカネが第一艦橋正面のメインパネルに解析結果を表示する。

その結果を見て真田が唸った。

「やはり、木星の居住区はあらかた破壊されてしまっているようだな。備蓄されていた資材が残っているかどうかまでは外部探査ではわからんか……。艦長、敵影もないようですし、最寄りのガニメデに寄って資源の確保に掛かりたいと思います。——最悪、破壊された居住区の残骸を回収して資材に加工しましょう。心が痛みますが、ヤマトには必要です」

沈痛な面持ちで訴える真田にユリカも神妙な顔で応じる。

「わかりました。ではコスモタイガー隊から選抜して真田技師長の護衛を頼みます。工作班も総出でかかってください。できるだけ短時間で終える必要があるため、機動兵器を使用しての解体作業も許可します。ダブルエックスは必ず連れて行ってください。それと、資材運搬のために作業艇はもちろん、Gファルコンも忘れずに」

と命じる。

真田も敬礼を持って応じ、すぐに工作班に招集をかけて自身も艦橋

を飛び出した。

ヤマトは慎重にガニメデまで移動すると地表から一〇キロの地点で停泊、ヤマトから資材運搬のための作業艇が数隻と、コスモタイガー隊の隊員が操るGフアルコンが一五機、アルストロメリアが六機、そして最後にダブルエックスが発進する。

ヤマトは単独での長旅を考慮しているため、不足した資材をほかの星での採取を考慮されている。そのためほかの戦艦では不必要な高性能な作業艇が複数搭載されていた。

搭載場所は第三主砲とメインノズルの間にある甲板下の専用格納庫で、カタパルト移動用のハッチを解放したあと、さらに内側のハッチを解放することで発進口が開く。

ほかにも第三艦橋両脇のバルジ部分にも上陸用の地上艇が格納されているなど、多種多様に備えていた。

ヤマトを発った作業艇と艦載機は、ガミラスを警戒しつつ可能な限りの隠密行動で破壊された居住区画に侵入すると、すぐに資源確保のための調査を開始した。

ガミラスの攻撃で破壊された居住区に生存者はなく、僅かながら期待をもっていたクルーたちの心に影を落としたが、幸いにも使えそうな資材が幾ばくか残されていた。

ほかにも居住区を構成していた残骸をいくつかを解体して、ヤマトに積み込むべくピストン運輸を始める。

ここで役に立ったのが、ダブルエックスが装備するハイパービームソードと呼ばれる武器だ。

ビームを剣状に収束させた近接戦闘武器で、高出力・高収束率、ビームの粒子を猛烈な勢いでチェーンソーのように循環させることで、デイストーションフィールドにも通用する破壊力を有する接近戦の切り札だ。

対ガミラス戦が前提、かつGフアルコンとの合体を含めて、射撃戦が主体なダブルエックスにこんな武装が用意された理由は、「人型なら剣が欲しいでしょう」という真田の一言のせいだ。

ほかの武装の開発発にかまけて意見を出し損ねたウリバタケは、そこ唇を噛んで悔しがったが、これが切つ掛けで二人は仲良くなつたのだから、ある意味では縁結びの装備とも言えた。

空間を漂う塵などに接触して発光して見えるビームの刃は、横から見ると少々幅があるが、正面からでは細い線にしか見えない。

ビームソードはその威力を存分に発揮し、居住区の残骸を容易く切断して運搬しやすい大きさに切りわけける。

ダブルエックスがこのような作業に積極的に駆り出されたのには訳がある。

重力波ビームもGファルコンもなしで長時間行動ができるスタンダードローンタイプの機体であることだ。

障害物によつて供給が断たれる心配もなく、その動力が生み出す大出力と、それを活かしきれる破格の機体強度とパワーは、戦闘のみならずこの手の土木作業にも適しているためだ。

アルストロメリアも一次装甲にバッテリーを組み込む技術によつて、エステバリスでは難しい長時間の活動を可能とし、機体出力の強化も果たしていたが、それでもダブルエックスと比較するとはつきりと見劣りする。

なのでアルストロメリアはダブルエックスの作業の補助として、建材が倒れたり落ちたりしないように支えたり、切りわけた資材の作業艇への積み込み作業を引き受けたりしていた。

切りわけられた資材はGファルコンのカーゴスペースに収められ、ヤマトに向かって運ばれる。

機動兵器を格納するためのスペースは、その気になればこのような運搬作業にも使えるし、規格を合わせたコンテナを収めての人員移動、さらには武器を満載して補給機や爆撃機としても使える汎用性を誇っていた。

そうしてGファルコンが運んだ資材は艦尾上甲板、第三主砲後部の左右に存在する搬入口に運ばれ、そこから専用の運搬路を使用して下部の工場区画に運ばれて加工され、旅路を支える物資となる。

工場で生産されるのは保守点検用の交換部品だけでなく、機動兵器

の部品だったりヤマトの装甲板だったりミサイルであつたりと、実にさまざま。

加工された部品や加工せずに保存することになった資材は、対空砲群の前後にあたる上甲板下の大型倉庫に、ミサイルは各発射管の弾薬庫に、機動兵器用の武装や保守点検部品は格納庫下の弾薬庫兼保管庫に保管されるように区分されている。

幸いなことにガミラスの妨害を受けることなく倉庫を満たすことができたヤマトは、出撃していた作業艇や艦載機をすべて収容し、ガニメデを離れて木星圏の調査活動を開始した。

ルリは第三艦橋内の電算室で解析作業を続けていた。

探査プローブとて消耗品ではあるが、出し惜しみをして見落とししてはいけないと、さらに二基を追加。先に射出してまだ機能しているプローブと合わせて計四基による探査活動を行う。

ルリを含めた八人のオペレーターとオモイカネが収集した情報を解析、さらに航法補佐席のハリがその情報を以前の木星圏の情報と照らし合わせ、その解析結果をまた電算室に送り返す。

そんな作業を一時間も続けた頃だろうか、探査プローブは巨大な木星の影から姿を現した物体の姿を捉えることに成功し、ルリたちオペレーターもその情報を解析して、物体の正体を突き止めた。

「……艦長、木星の市民艦と思しき物体を発見しました、パネルに出します」

ハリが解析されたデータとプローブのレンズが映し出した映像を重ねて、メインパネルに投影する。

メインパネルに投影された市民艦は、かつて木連の居住区として使われていた、いふなれば国土の一部。

戦争開始と共に真っ先に攻撃され破壊されたか、住人を皆殺しにされたと聞いているが、圧倒的なガミラスの力の前にほうほうの体で逃げ出すのが精一杯だったため、細かな状況が伝わっていない。

そのためその存在を認めたユリカは、淡い期待を抱くのを止められなかったのだが……。

映し出された市民艦は、ヤマトの一〇〇〇倍では済まされない、も

はや小天体といっても過言ではない凄まじい大きさを誇っているのは昔のまま。

しかしその表面には戦闘によるものと思われる傷が無数に刻み込まれていた。いくつかの傷はかなり大きく、内部構造を露出させている。

そして市民艦の周囲には一番見たくなかった存在——ガミラスの艦艇が複数駐屯しているではないか。

おそらく内部にも、相当数の艦艇がいることは疑いようがない状況だ。そして周囲にも市民艦と比べると大きく見劣りするが、居住用のスペースコロニーにも匹敵する大きさの球体が五つ浮かんでいる。

「これって、もしかしなくても市民艦を……拠点にしてる？」

ユリカが呆然とした声で確認するように尋ねる。

「……おそらくそうです。さすがに内部までスキャンはできませんが、周囲にはガミラスの駆逐艦クラスが一三〇隻、空母も二五隻が確認されています。内部にもいるかもしれないですが、外部からでは確認できません。周囲に浮かぶ物体の詳細は不明ですが、規模や形状などから居住用ないし工場の類ではないかと思われれます。」

航法管理席でハリが報告する。

電算室からのデータを参照する限りでは、これが解析の限界だった。市民艦のドック施設の規模を考えると多々とも不思議はないが、どちらにせよシャレにならない規模の敵戦力である。しかも周囲の球体の中にもまだまだいるかもしれないとは。

「くそっ。ガミラスの奴らめ！」

進が苦々しげに吐き捨てる。

木星に必ずしもいい感情のない進であっても、滅ぼされた挙句蹂躪される木星という国家が哀れに思えて仕方がない。

「ルリちゃん、市民艦のコンピュータにハッキングして、中を見れたりしない？」

「結果だけを申し上げるのなら、可能です。ただそのためにはもう少し接近しないといけませんし、なにより私のハッキング戦法はすでにガミラスに筒抜けです。下手に仕掛けるとヤマトの所在が露呈する

恐れがあります。それに、ヤマトはナデシコCと違って電子戦——と言ふよりも掌握戦術に特化した仕様ではないので、あれだけの物体を掌握して解析するのは限りなく不可能に近いです。仮にできたとして、内部のカメラやセンサー類がどの程度生き残っているのが不明ですので、知りたい情報が手に入る保証もありません」

専門家としてルリが答える。もうルリは、ユリカがなにを気にしているのかを察して、暗たんたる思いになっていた。

せめてもう少しガミラス側の情報がわかれば、システム掌握の精度を上げることができるのだが。

「艦長、市民艦が完全に破壊されていない以上、もしかしたら生存者がいるんじゃないですか？」

大介が疑問を呈する。そう、それがユリカの気にしていることだった。

「確かに可能性はある。元々全滅か奴隷かなんて言ってた連中だ。捕まって奴隷にされている人がいるかもしれないし、もしかしたどこかに隠れて助けを待つてる人がいるかもしれない……！ 艦長、市民艦を奪還しましょう。見過ごすことはできません！」

進が血気盛んに吠えるが、ユリカは首を横に振る。

「そうしたいのはやまやまだけど、ヤマトの戦力でどうやって奪還するつもりなの？ 敵の総数もわからないし、艦隊戦力を叩いたところで内部にどの程度ガミラスが入り込んでるのかわからない。それに小天体にも匹敵するような市民艦を、三〇〇人程度の私たちがどうやって掌握するの？ それに周囲の球体だって正体不明のままよ？」

冷静な意見に進は言葉を繋げない。

言われてみればそうだ。ガミラスに対抗できる戦力と言っても、所詮は戦艦一隻と最大でも三〇機程度の航空戦力を有しているだけだ。

艦隊戦なら戦いようがあっても、この手の施設制圧はとにかく人手が必要な作戦だ。

逆に敵の基地だったり宇宙要塞に対する破壊工作ならやりようはある。むしろ少数先鋭でもやり方次第で完遂できることは、ヤマトの戦歴が証明している。

だが中に『いるかどうかもわからない』要救助者を探し出して保護し、さらに敵兵を駆逐するような救出作戦を展開できる余力は、ヤマトにはないのだ。

市民艦が大きすぎる。加えて生存者を救出したとしてもヤマトで受け入れることはできない。アキトやイネスがピストン運輸しようにも、すべての木星人がジャンパー処理をしているわけではない。

そしてボソンジャンパーを失った地球がここに迎えに来るのは、とても時間がかかる。

それまで生き延びられる保証はない。そもそも迎えをよこす余裕は、地球にはない。

どれだけ吠えたところで、この現実を覆すことなどできないのだ。

「しばらく様子を見ます。メインスタッフは中央作戦室に集合。対策を考えましょう」

中央作戦室に集結したユリカ、進、大介、真田、ハリ、エリナ、ラピス、ゴート、ジユン、そしてアキトと月臣とサブロウタ。ルリは電算室で情報解析をしながら通信で参加していた。

「アキト、ボソンジャンプで内部に入り込んでの調査は無理そう？」

ユリカの質問にアキトは心底困った顔で、

「ボース粒子反応を検知されたら発見されるだけだろうな。探知システムくらい持っていると考えるのが妥当だろう。それに、このサイズの構造物を調べるのはヤマトの人数じゃ無理だ。居住区画はたぶん制圧されているだろうし、メンテナンスハッチとかカメラのない場所とかに隠れられてたりしたら、俺一人じゃどうにもならないよ——仮に月臣とか、木星出身者であっても、一般には立ち入り禁止の区画とかまで含めた詳細までは知らないだろうから、人海戦術を取るか、膨大な時間を使って調べ上げるか……。どちらにしても、現実的じゃない」

断言する。

ユリカもわかりきっていたが、諦めきれずに聞いただけなので「そう」と短く答えた。

「俺も調査には反対だ。さすがに規模が大き過ぎる。ヤマトの戦闘班を総動員しても手が全く足りない。不必要な犠牲を招くだけだ」

ゴートもアキトを援護する形で反対を表明する。が、やはり苦い顔をしていた。

「俺にとつては祖国の大地だ。解放してやりたい気持ちはある。だが、この状況でそれを求めることは、俺には……できません……!」

辛そうな月臣の姿に誰もが掛けるべき言葉を見つけられない。

「残念ですけど、俺も月臣少佐と同じです……本当、胸糞悪いですけどね……」

サブロウタも気落ちを隠せず、何時もの軽いノリは鳴りを潜めている。

「航海班は市民艦攻略作戦は反対です。ヤマトの航路日程にはあまり余裕がありません。すでに火星での停泊で一日のロスタイムを生じていますし、これから土星のタイタンでのコスモナイト採掘作業を考慮するのであれば、ここは見過ごすのが得策かと思えます」

大介が心を鬼にして職務を優先しようと思見する。

人道としては搜索すべきだと心が訴えるが、それでは本末転倒だと、理性が釘を刺す。胸の痛みを我慢して、大介は意見する。

「なんてことを言うんだ島！ 生き残っている人がいるかもしれないんだぞ！ それに、ここに敵戦力を残していくのは、後顧の憂いを立つという意味でも看過できません！ 艦長、せめて艦隊戦力だけでも叩きましよう！」

と進が熱く語るのを、ユリカは表情を変えることなく受け止めた。彼の性格からすればこのような反応をするのは初めからわかっていたこと。

しかし――。

「だが古代君。ここで戦闘をして時間もそうだが、ヤマトに傷を負わせて消耗させるのは得策じゃないぞ。多少の資材を確保することに成功したが、ヤマトの今後を考えると余剰はないんだ。太陽系を出たあとで資材の補充ができるかどうかともわからないままなんだぞ。

――事前計画で決まっている、冥王星基地攻略を忘れたのか？」

ジユンが逸る進を抑える。「しかし……！」と進も食い下がろうとするが、ジユンの言っている事の正しさも理解しているため、それ以上言葉を繋げなかった。

「古代君のいうことももつともね。ここにあんな戦力を残していくのは不安なのも事実。とは言っても、ヤマトを消耗させることなくあれを叩く方法は……」

エリナも難しい顔で床と空中に表示されている市民艦のデータを睨みつける。

本当はここにいる全員がわかっている。今取るべき最良の手段を。だが、実行したくないのだ。

——だからユリカが言うしかないのだ。艦長として、ヤマトの最高責任者として、心を鬼にして言うのだ。

「——波動砲、しかないね」

誰もが口に出したがらなかったキーワードを告げる。

特に月臣とサブロウタの体がはつきりと震えた。

その反応はわかっていた。だが、目を逸らしてはいけないのだ。この現実から。

「波動砲で市民艦を消滅させる。艦隊ごと全部、まとめて……」

静かな口調の中にも諦めと悲しみが混じるのを止められなかった。

波動砲ですべてを消滅させる。

それならヤマトへの負担を最小限に抑え、かつ不安材料を文字通り消滅させることができるのだ。

しかし、それが意味することとは——。

「それでは、それでは生き残っているかもしれない人たちを見殺しにしてしまいます！」

進が強く反発する。

護るべき市民が残っているかもしれないのに、無視して波動砲で粉砕するなど到底承服できないと、感情も露にユリカに突つかかる。理性ではそれ以外に選択肢がないと理解しながら。

そんな進の姿に胸を痛めるユリカだが、指揮官として譲ることはできなかつた。

「いる、と言う確証があれば波動砲を使うことはない。でも、確証はないしこのまま放置もできない。かと言って制圧作戦を実行することもできない。だとすれば、ヤマトの航海の安全に繋がる手段を選択するしかない……違うか？」

ユリカの隣で苦々しい表情のアキトが進に理解を求め。

アキトだって本当はこんな手段を肯定したくはない。この行為は、自分の犯した過ちをヤマトに——自分を受け入れてくれたみんなに背負わせるに等しい。

しかし、この現実を前に手段を選んでいられないのもまた、事実。

苦渋の決断なのだ。

「それに、波動砲の試射もできればいましておきたい。使うかどうかは未定だけど、予定している冥王星前線基地攻略の前に、それを抜きにしても補給の利きやすい太陽系内でテストを済ませて、万全の状態を外宇宙に出たいの」

ユリカも心苦しさを顔中に張り付けながら、断言する。

「——工作班も波動砲の試射』には』賛成します。補修用の資材を確保する当てがあるいまだからこそ、ヤマトの全機能を試しておく必要があると判断します」

「……機関班も同意します。ワープでのトラブルを鑑みると、波動砲でもエンジンになんらかの反動が生じることが予想されます。コスモナイト補充の当てがある今の内にテストして、タイタンにて可能な限りの改修を行うほうが、今後のためになると思います」

真田とラピスもそれぞれの部署の統括者として賛成の意を示す。

だがその表情は暗く、苦しげだ。

誰もが波動砲で市民艦を撃つことを認められないでいる。指揮官としての仮面を被ったユリカですら。

「僕は、波動砲の使用に反対です。ヤマトへの反動もそうですけど、古代さんと同じ理由です」

ハリが悲しそうな顔で反対を表明する。まだ一二歳の子供には酷な現実には、全員が顔を俯ける。

「ルリちゃん、波動砲で市民艦を破壊するとしたら何発必要？」

「——破壊するだけなら一発でも足りません。ただ、周囲の物体にまで致命的なダメージを与えるには距離が離れています。直線に並んだ状態なら一発でもすべて破壊できるかもしれませんが、どの方向から狙っても直線に並べることができません。複数回の発射は、必須だと思われまます」

ルリの回答にユリカは目を瞑って天を仰ぐ。僅かな沈黙の後顔を下げ、目を開くと決断する。

「波動砲、六発すべてを使用して、市民艦や不明物体もろともに、敵艦隊を消滅させます！」

ユリカの指示を聞いて真田とラピスが目を見開いて驚く。

「艦長、危険過ぎます！ 試射もしていないのに全力射撃はリスクがあまりに大きすぎます！」

「でも真田さん、いずれは試さなければならぬことを考えると、いまがチャンスなのでは？ いま駄目なら改修の余地もありますが、これを過ぎればチャンスがないかもしれません」

真田がリスクを訴えるのに対し、ラピスは驚きながらもいずれは試すのだからと使用を消極的に肯定する。

——標的がなんであるかはわかつている。だから、目には薄っすらと涙が浮かんでいる。

「進君」

静かなユリカの声に、進は姿勢を正して耳を傾けた。

「嫌なら私が波動砲の引き金を引く——どうする？」

「……………やります、やらせてください。せめて、せめて逃げずに向き合うことが、彼らに対する弔いだと、考えることにします」

進は辛そうな声で、しかししつかりとした姿勢で波動砲の発射を受け入れた。もうこれ以上議論余地はない、いまだできることをするしかないのだと、受け入れるしなくなってしまった。

「艦長、古代。俺は、決してあなたたちを恨まないことを誓う。——侵略者に蹂躪されるくらいならいっそ、ここで終わらせてやって欲しい。これ以上の辱めを、受けさせないでやってくれ……………」

悔し涙を浮かべながら月臣は頭を下げる。

足元にポタポタと垂れる涙がその心情を物語っていた。サブロウタも言葉なく、月臣に倣って頭を下げる。

ハリもそんな月臣の態度に覚悟を決めたのか、もう反対をしなかった。メイנסタッフ全員が、この業を背負って先に進む決意を固めたのであった。

「エリナ、艦内放送の準備をお願い。木星出身のクルーにも、理解を求めます」

「……わかったわ。いま準備する」

エリナは暗い顔のまま、中央作戦室の通信システムを起動して艦内の全員にユリカの言葉を伝える。

「ヤマトのみなさん、艦長のミスマル・ユリカです。たったいまわれわれメイנסタッフ一同は、木星の市民艦を占領するガミラスに対する対応の議論を行いました」

ユリカの言葉にヤマトのクルー全員が姿勢を正して耳を傾ける。特に市民艦の単語が出た瞬間、木星出身者が動揺した。

大介が気づいたように、もしかしたら生き残らないし捕縛された市民がいるかもしれないという考えに行き着いたからだ。

「議論の結果、市民艦の奪還、および生存者の搜索は行わず、波動砲を使用してガミラスの拠点となっている市民艦および周囲の巨大物体ごと、占拠しているガミラスを排除することを、決定しました」

ユリカの言葉に木星出身者は絶望と怒りを覚える。しかし続く言葉にそれも萎んでしまった。

「理由としては、ヤマトの戦力で市民艦を奪還および搜索するには、莫大な時間を浪費してしまうため現実的ではないこと。しかし辛いからといって放置して進めば、状況から見てヤマトが去ったあとの地球の危機に繋がるかもしれない、ヤマト自身が後ろから攻撃される危険性も高く、最悪冥王星基地攻略作戦で挟み撃ちにされる可能性もあります——よって、後顧の憂いを立つため、そして予定していた波動砲の試射も兼ねて……市民艦とガミラスの部隊を殲滅します……木星出身のクルーのみなさん、どうか理解してください」

ユリカの声は物悲し気で、彼女自身の辛さも雄弁に語っている。

「木星の同胞諸君。月臣元一朗だ。われらの故郷は、すでにガミラスに滅ぼされたのだ。この悔しさを、怒りを叩きつけるべき相手はガミラスなのだ！ ヤマトは土星での補給を終えたあと、冥王星の前線基地を叩く予定であることは知っているだろう。われらの屈辱は、その時に晴らす！ どうか、艦長を恨まないでやってほしい」

放送に割り込んだ月臣が同胞たちに頭を下げ、ユリカを庇う。

その姿に木星出身のクルーは受け入れ難い残酷な現実には涙し、そもそも元凶となったガミラスへの怒りと憎しみをたぎらせ——業を背負うことを決めた。

決断したユリカへの怒りが湧かないわけではない。

しかし、彼女に怒りをぶつけるたとしてもなにも解決しないと理解しているし、木連がこうなったのは決して彼女のせいではない。

この決断も、指揮官として当然の決断なのだ。

それに自分たちは約束してきたのだ。

絶対に地球を救ってみせると。

国としての木星が滅ぼされた時、励まし、手を取り合おうと言ってくれた友人たちに。

地球に逃げ延びて、ヤマトを信じて送り出してくれた同胞たちに。人類にとつての母なる大地を、必ず救ってみせると。

その障害となるのであれば、割り切るほかない。

すでにガミラスに滅ぼされて、蹂躪された姿を見るくらいならと。木星出身のクルーは自分たちに言い聞かせた。

心の中で泣きわめき、この現実を呪いながら、彼らは決断したのだ。故郷の地を破壊することを。

生きているかもしれない同胞を見殺しにすることを。

自分たちが残してきた人たちが、生き延びられるように。

「司令、ヤマトが接近中です」

市民艦を占領し、拠点にしているガミラス部隊の司令官に部下が報

告する。

「なんだと？ 例の地球艦か。……よし、すぐに艦隊を差し向けろ、こを奴らの墓場とするのだ！」

司令官はすぐに部下にそう命じた。

占拠した市民艦に陣取ったガミラスは、即座に接近中のヤマト迎撃のため準備を始める。

ガミラスは地球に対する威圧も兼ねてまず木星を攻略した。

市民艦やコロニーに対しては冥王星基地の超大型ミサイルを使った先制攻撃を加えて壊滅させた。

その大きさゆえに完全破壊を免れた市民艦は制圧して、ガミラスが太陽系で活動するうえでの拠点として活用している。

住人はすでに全員処刑している。この市民艦にいるのはガミラスの兵士のみだ。

本当なら住人は労働力として使いたかったところだが、太陽系に侵入したガミラスの総力では到底御しれない数の住人がいたため、全員処刑の判断が下された。

市民艦の住人はやたらと反抗的であったし、複雑な市民艦での土地勘で勝る相手だけに油断して足元を掬われるのも馬鹿らしかったので、全滅してもらおうほうが都合がよかったというのもある。

だから中央制御室を乗っ取って大気循環システムを停止した。あとは放っておくだけで窒息して全滅する。

思うことがないわけではないが、こちらとて祖国のため。決して嗜虐的というわけではない兵士たちは、ただその一念で鬼となって住人を葬ったのである。

いまは市民艦内部の工場区画や資源を利用して地球占領のための準備をしている最中だ。周囲に点在しているスペースコロニーと大工場施設も、これからどうしても必要になる重要な存在。

ここをヤマトに潰されるわけにはいかない。

戦艦一隻の火力で潰されるとは思わない。返り討ちにするのは容易だろう。

義憤に駆られて向かってきているのは理解できるが、自殺行為でし

かない。

ガミラスの司令官は余裕を持ってモニターに小さく映るヤマトの姿を見て薄く笑った。

ヤマトは市民艦とガミラス艦隊から離れること、一〇〇万キロの地点にあった。

比較的木星の大气層に近い位置で、敵の発見を少しでも遅らせるため、危険を承知で選んだ航路である。

メインパネルに映る市民艦の姿を目に焼き付けたユリカは、静かに、重々しく命令を下した。

「波動砲発射用意。艦内電源カット」

「——了解、艦内電源カット」

機関制御席のラピスが艦内の電力供給を必要最低限の生命維持システム以外、すべてカットする。艦橋も計器類の明かりを残して照明が落ち、艦内全体が暗闇に染まる。

そうすることで予備電力を確保し、エンジンの再始動を速やかに行うための処置だ。

自沈直前のヤマトでは不要になっていた措置だが、今回は再建直後、そしてトランジション波動砲への強化ということで意識的に行っている。

「相転移エンジンと波動エンジンの圧力上げて。非常弁全閉鎖」

「エンジン、圧力上げます。非常弁全閉鎖」

ユリカの指示に合わせてラピスが機関室に指示を出しつつ、機関制御席のコンソールでエネルギー制御を開始する。

「非常弁全閉鎖。エンジン圧力上昇中」

機関制御室の山崎が指示に合わせてコンソールパネルを操作、波動砲の発射準備を進める。操作に合わせて相転移エンジンと波動エンジンが唸りを上げる。

「波動砲への回路、開いて」

「波動砲への回路、開きます」

ラピスの指示を受け、太助が山崎と並んで波動砲の発射準備を進めていく。その顔にはべつたりと緊張が張り付いていた。

「全エネルギー波動砲へ。強制注入器作動」

計器を読み上げながらラピスが口頭報告を続ける。報告を受けたユリカはひとつ頷き、指示を続ける。

「波動砲、安全装置解除」

「安全装置解除、最終セーフティロック解除」

ユリカの指示に合わせて進が戦闘指揮席から波動砲の安全装置を外していく。

進の操作を受けて六連炉心の前進機構のロックが外されて、突入ポルトへの接続機能が解禁される。

同時にヤマトの波動砲口奥のシャッターが開いて発射口を解放する。

スーパーチャージャーから発射口手前の最終収束装置にエネルギーが送り込まれ、内部に波動エネルギーを制御するためのフィールドが形成、発生した光が発射口から外部に漏れる。

戦闘指揮席の波動砲発射装置が起き上がり、進の目線の高さまで持ち上がる。

ごくりと唾を飲み込んだ進がトリガーユニットに恐る恐る手を伸ばし、両手でしっかりと掴む。

「大介君、操艦を進君に渡して」

「了解——渡したぞ、頼むぞ古代」

「ああ、任しておけ！」

迷いを振り切り力強く頷いて、トリガーユニットとコンソールを併用してヤマトの姿勢を制御する。

「進君、六連射の反動もあるだろうから、主翼を開いて。スタビライザーの機能もあるから、こういう時の安定感を増す分には、真空でも有効よ」

「はい、主翼展開します」

進の操作でヤマトの中央、喫水線の部分から赤く塗られたデルタ翼が出現する。四つのパーツに分解された翼は展開と同時に組み立て

られ、その姿を露にする。

本来は大気圏内航行用または宇宙気流内での安定化装備であるが、改良型の主翼では宇宙空間での姿勢安定用にも使えるようにと、波動エネルギーの生み出す空間歪曲作用を転用した安定化装置としての機能も有していた。

小回りが利かなくなる代わりに艦の姿勢が安定しやすくなるため、精密砲撃時に展開されることも想定されている。

特に、トランジッション波動砲の連射には有益な効果をもたらしてくれる。

「艦首を市民艦に向けます。ターゲットスコープオープン、電影クロスゲージ明度二〇。ルリさん、市民艦の正確な位置情報を頼みます」「——了解。市民艦と不明物体の正確な位置情報を送ります。敵艦隊は波動砲の射線上に展開中のため、巻き込めるはずです」

電算室から送られてきた位置情報を頼りに波動砲の狙いをつける。収束型のヤマトの波動砲では、広がった敵艦隊を一挙に撃滅することとはできない。だが、ガミラス艦艇は特に広がりもせず一丸となつてこちらに接近してきている。これなら直線型の波動砲でも十分に巻き込む事ができるだろう。

市民艦と不明物体に向けて発砲するだけでケリがつく。

進は位置データに合わせて六発分の照準を設定し、射撃順序を組み立てる。

「タキオン粒子出力上昇。出力一二〇パーセントに到達」

ラピスが静かにエネルギーが十分な出力に達したことを報告する。

「発射一五秒前。総員、対ショック、対閃光防御！」

ユリカの指示を受けて、艦内全員が安全ベルトの装着や手短な物にしがみ付く。同時に艦橋要員全員が対閃光ゴーグルを被って備える。

本来なら防御シャッターを下ろして窓を閉鎖することが望ましいのだが、今回だけは、その成果を肉眼で見届ける必要がある。

自分たちの業を、その目に刻むのだ。

「発射一〇秒前……八……七……六……五……四……三……二……一……発射!!」

進はカウントが○になると同時に引き金を引く。

トリガーユニットのボルトの前進と同じくして、エンジンルームの六連相転移炉心が前進して突入ボルトに叩き付けられた。

同時に莫大なエネルギーが発射装置内部に一気に押し流され、ライフリングチューブ内を駆け巡る！

二つの収束装置を通過したタキオンバースト波動流が、わずかな間を置いて轟音と共に艦首の砲口から撃ち出された！

一度、二度、三度と、六連炉心が頂点を入れ替えながら突入ボルトに激突し、そのたびにヤマトの艦首からタキオンバースト波動流が放出された！

入力された照準に基づいて主翼の重力波放射推進器と各部の姿勢制御スラスターがわずかに作動、艦の姿勢をコンマ単位で制御、入力された照準通りに計六発のタキオンバースト波動流を撃ち切った！

「な——」

ガミラスの司令官は、ヤマトの急激なエネルギー反応の上昇に驚き詳細を確かめようとしたところで、あっけなく消え去った。

光よりも速いとされるタキオン粒子の奔流は、発射とほぼ同時に手前にあつたガミラス艦艇の一角を飲み込みつつ、市民艦に命中した。

命中したタキオンバースト波動流の奔流に晒された市民艦は、抵抗すらできずに歪んだ時空間に飲み込まれ、素粒子レベルで消滅していく。

命中と同時に飛び散り広がったタキオンバースト波動流の作用で、小天体にも匹敵するといわれる市民艦は、スペースコロニー級の不明物体は跡形もなく、爆発するかのようこの宇宙から永遠に消え去った。

射線上になかったガミラス艦隊もその爆発に飲まれ、離脱どころかなにが起こったのかすら理解できぬまま、宇宙の藻屑となる。

——そして市民艦と不明物体、ガミラス艦隊を消滅させてなお衰え

切らなかつたタキオンバースト波動流は、自然消滅するまで宇宙を切り裂き飛び去っていった……。

衝撃的な光景に第一艦橋の全員が言葉を失う。

あそこにはまだ、守るべき市民がいたかもしれないのに。

仮にいなかったとしてもガミラスを退けたあと、再び戻ることができたかもしれない、木星人にとって故郷の地。

自分たちが消し飛ばした。塵さえ残さずに。

かつてその威力ゆえに条約で禁止された相転移砲にも劣らない、単純な出力では遥か上をいくとユリカが語った波動砲。

その威力をヤマトクルー全員が目当たりにした結果、その言葉が誇張でもなんでもなかったことを思い知らされた。

しかも、市民艦のサイズはヤマトがいままで波動砲で消し飛ばしてきた物体の中でも中堅に過ぎない。

はつきりしているだけでも、ヤマトはこれよりも大きいオーストラリア大陸に匹敵する浮遊大陸を一撃で破壊することに成功しているのだ。

それが、ヤマトは六発も撃てるのだと、改めてその威力を見せつけられ、その責任をクルーに突きつけるのだ。

「は、反則だ、こんなの……」

そんな陳腐な感想しか浮かんでこない。ハリは目の前の光景が信じられない気持ちで一杯だった。

こんなもの、宇宙戦艦が備えていい装備ではない。

これは——悪魔の兵器だ。

波動砲の強烈な閃光も消え去り、計器以外の明かりが消えた艦橋の静けさが戻ると、ユリカは対閃光ゴーグルを乱暴に取り払って床に叩きつけようとして、止めた。

さすがに艦長として、この決断を下した人間として、そんな子供じみた真似はできないと自制する。

しかし、予想以上の破壊力だ。

(波動砲。やっぱりこれは、人類が持つべきではない禁忌の力なのか
もしれないなあ)

改めてヤマトがもつ力に畏怖を感じる。

(でも制御しなきゃ、使いこなさなきゃ。この力を使わない限りヤマトは勝てない。この星をも砕く禁忌の力を、人の心で制御してみせなきゃー！)

ユリカは改めて波動砲と向き合い、御することを心に誓う。

——その時、強烈な振動がヤマトの艦体を襲った。

「状況報告！」

慌てて叫ぶユリカにハリが叫び返す。

「木星の重力に捕まりました！ 艦体がどんどん引き寄せられています！」

「艦長、重力アンカーが波動砲の反動を吸収しきれなかったようです！ ヤマトは反動で木星に突っ込みかけているんです！」

真田が艦内管理席から叫ぶ。

モニターは本来波動砲の反動を吸収して空間に固定するための重力アンカーが、正常に作動しきれなかったことを示している。

そこでユリカは気づいた。従来の波動砲のデータを基に復元された重力アンカーが六連射に最適化されきっておらず、キャパシティオーバーを起こしたのだと。

そして、反動と閃光、そしてその威力に啞然としていたクルーは、ヤマトが木星に接近したことに気づくのが遅れたのだ。

ナデシコならオモイカネの自動制御もありえただろうが、ヤマトではオモイカネはあくまでサブコンピューターであってメインコンピューターではない。

その規模もいくらか縮小されて搭載されているので、ナデシコのように艦全体を支配して制御することはできない。

なお悪いことに木星の自転方向とヤマトの艦首方向が一致してる。反動で吹き飛ばされたということは、当然自転方向とぶつかり合う形になる。

そのせいで反作用による加速が木星の自転速度で中途半端に相殺され、木星に引き込まれる形になったのだ。

「エンジン再始動急いで！」

ユリカの絶叫に応えるように、ラピスも機関制御席から補助エンジンの出力を最大にするように指示を出し、自身もエネルギーを巧みにコントロールして推力を確保すると同時に波動相転移エンジンの再始動を開始する。

「島さん！ オーバーブーストを使って！ 補助エンジンが焼けても構いませんから全力噴射を！」

余裕なく叫ぶラピス。大介も操縦桿を巧みに操りなんとかヤマトが木星の大气に沈まないようにコントロールを試みる。

ヤマトの補助ノズルから最大噴射が始まるが、補助エンジンの出力では木星の重力場に勝つことができない。

徐々にヤマトの艦体が木星のガス雲の中に飲み込まれつつあった。

「大介君、艦首を持ち上げつつ木星の自転方向に乗せて主翼で滑空して！ 無理に噴射しても逃げられない！」

「りよ、了解！」

ユリカの指示に従い大介は主翼とメインノズルに三本備わった尾翼を制御、空力制御も利用して艦の姿勢を制御しつつ、足りない推力を補ってなんとかヤマトが没しないように懸命に舵を操った。

大介の懸命な努力の甲斐もあって、ヤマトは辛うじて木星の雲の中をそれ以上沈まずに水平飛行している。が、このままではいずれ失速して飲み込まれてしまうのは明らかだった。

いまでも、徐々に速度が落ちている。

補助エンジンの推力も限界に近い。その名のとおり補助推進機関でしかないのだから、オーバーブーストの持続時間はメインエンジンよりも短く、推力も小さいのだ。

「こちら機関室、相転移エンジン再始動！ 波動エンジン点火二〇秒前！」

太助の絶叫じみた報告がラピスに届く。

ラピスも機関制御席のスイッチ類を操作し、計器に映るエンジンの

状況をモニターして大介に告げる。

「波動エンジン点火一五秒前！ 島さん！」

「了解！ 一〇……九……八……七……六……五……四……三……二……一……点火！」

大介が操縦席のスロットルレバーを押し込んで、メインノズルの噴射を最大に設定する。

スラストコーンが目一杯後退したメインノズルから、轟音と共にタキオン粒子の奔流が噴き出し、失速しかけていたヤマトに力を与える。そのまま徐々に速度を上げつつ艦首を上げ、木星の重力場を振り切ることに成功したのであった。

なんとか重力の魔の手から逃げ果せたヤマトの中で、クルーが安堵の息を吐いていた。

エンジンの再始動があと一歩遅ければ、ヤマトは木星の圧力に押し潰され、鉄屑となっていただろう。

「あれが、波動砲の威力……」

進の呟きに真田が反応する。

「……われわれは、身に余る力を得てしまったのかもしれない。このような武器が、はたして本当に必要なのだろうか？」

自ら再建に携わったヤマトの威力に、真田も恐怖を隠し切れない。その威力を推測していながらも、追い込まれた地球を救い、ガミラスを退けるためには必要だと修復・強化した波動砲だが、実際にその威力を目の当たりにすると許されないことをしたのではないかと後悔の念が浮かんでくる。

「波動砲は私たちにとって、このうえのない力となることが実証されました——ただし、使い方を誤るとありとあらゆる物を破壊してしまう恐るべき破壊兵器であることもまた、実証されたのです。——今後の使用には、細心の注意を払うべきでしょう。この星すら砕く力を、我々人間の心の力で、良心で押さえつけ、正しく使うように心掛ける以外ありません……おそらくわれわれ人類は、もう波動砲を捨てることができないでしょうから」

と、ユリカが締めた。

普段の彼女とは正反対の様子に、波動砲の使用が極めて重大な責任を伴うことを嫌でもわからせる。

第一艦橋の面々は、今後安易な気持ちで波動砲を使用することは決してしまいと、誓いを立てる。

しかしユリカの言うように、迫りくる脅威に対して使用を戸惑って敗北を喫し、護るべきものを失うような結果を招くことも避けなければならぬと、否応なく波動砲と向き合うことも余儀なくされた。

星すら砕く禁断の力。それを制御するのは結局人間なのだ。ユリカはクルーに突き付ける。

そして地球人類はすでに恒星間航行を実現した文明の軍事力に対して大きく劣っていることが露呈し、破滅寸前に追い込まれた。

ならばこの力を決して手放しはしないだろう。逆にこの力を使って身を護ろうとすることを、ユリカは指摘した。

その力を使って人類が将来、侵略者にならない保証はどこにもない。

ならいまの自分たちにできることはなんなのか。もしも将来、地球人類が侵略者になる可能性があるのだとすれば、ここで滅ぶべきなのだろうか。

イスカンドルは何故、この力を託したのだろうか。ヤマトに元々備わっていた装備でもあったが、トランジション波動砲への改良案のデータを提供したのはイスカンドルだ。

人類がガミラスのような侵略者にはならないという確証があったのか、それとも別のなにかがあったのだろうか。

ヤマトクルーはそんな答えの出ない問題に直面して悩みながらも、木星圏をあとにする。

ユリカと秘め事を共有する、わずかな共犯者を除いて。

宇宙戦艦ヤマトよ。一六万八〇〇〇光年の前途は長い。

君に与えられた時間はわずかに一年。

地球では絶滅の恐怖と戦いながら、コスモリバースシステムの到着

を待っている。

人類滅亡の時言われる日まで、
あと、三六三日しかないのだ！

第五話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ ディレクターズカット

第六話 氷原に眠る、兄の艦！

氷原に慟哭が響く。

第六話 氷原に眠る、兄の艦！ Aパート

「タキオン波動収束砲、だと……!?」

冥王星基地司令シウルツは、目の前に映し出された映像に驚愕し、ヤマトが見せつけた威力への対応に追われていた。

そこについいましたがた本国から届いた情報が、タキオン波動収束砲——波動エネルギーを直接兵器転用する、ガミラスもまだ保有していない超兵器の名前と推定される威力であった。

長く軍に在籍しているシウルツではあったが、ここまでの威力を秘めた大砲を艦載兵器として搭載している実例を見るのは初めてであった。

髪の毛の薄くなつた頭頂に自然と汗が浮かび、流れ落ちる。

「いかん……。ヤマトを野放しにしては、いずれガミラスにとって無視できない脅威となる。なんとしてもここで潰さなければ——！」

シウルツは本国へ辛うじて撮影できた記録映像の一部始終を送り、その対応についての協議を求めるところを選択した。

シウルツとて誇りあるガミラスの軍人であり、地球攻略作戦の最前線を任された立場だ。

相応の覚悟をもつて務めているし、例え本国からの救援がないとしても、ここで確実にヤマトを叩き潰すための策を必死に練っている。

しかしデスラー総統が予測されたとおりの威力をヤマトがもっていることを知らせないわけにはいかなない。

ガミラスに万が一にも敗北をもたらさないために、打てる手はすべて打つ。それがシウルツのガミラスへの、デスラー総統への忠誠心だった。

「デスラー総統。冥王星基地のシウルツ司令より入電です。ヤマトがタキオン波動収束砲を使用したとのことです。それも、六連射した

と」

ヒス副総統の報告を受け、デスラー総統はくつくつと笑う。

その様子に不安げな表情を見せるヒスではあったが、彼がなにかを言う前にデスラーは言葉を紡いだ。

「やはりイスカandalからの技術提供を受けていたか。それも六連射——いかにイスカandalの技術を得たと言っても、あの未熟な宇宙戦艦の群れを見る限りでは、一朝一夕で再現することはできないはずだ。——ヒス君、たしか地球とその月の間に、得体のしれない大氷塊があつたと思つたのだが？」

デスラーの発言の真意を汲み取つたヒスは、はつとした顔で肯定する。

「はい総統、そのとおりでございます。地球とその月の間には正体不明の大氷塊があります。最も古い記録では、地球の内紛に乗じて宣戦布告をした段階で確認されています。が、それ以前の偵察段階では発見されていませんでした。また、宣戦布告とほぼ同時刻に、わずかな時間だけ強烈な時空間の歪みを計測したとの報告がありました」

当時の資料を思い出しながら告げる。

あの時はすでに地球攻略作戦が開始されていたこと、発見された氷塊にはなんの動きもなく、それを調査する時間的余裕もなかったことから放置されていたのだが……。

どうやら失策だったようだ。悔やんでも悔やみきれない。調査さえしておけば、あのヤマトの出現をみすみす見逃すこともなかったらうに。

「なるほど。そういうことか……どうやらヤマトは純粋な地球艦ではないらしい」

「はっ」

デスラーの言葉にヒスは面食らってしまう。

「ヤマトはその氷塊に乗って地球に漂着した戦艦だということだ。……おそらくはわれわれの侵攻と氷塊の出現はほぼ同時期で、その中にあつたヤマトの存在を知り、引き上げて使っているのだろう。だとすれば——もしかしなくても、あのヤマトは並行世界から漂着したの

かもしれないな」

「並行世界、ですと？」

突拍子のないデスラーの言葉にヒスは困惑するが、並行世界の存在そのものはワープなどの研究からある程度立証されている。

無論、ガミラスにそれを意図して渡る術はないし、特別研究もされている課題でもない。

ただ次元の狭間を利用した戦術は研究中だ。それに宇宙に点在する次元断層——つまりこの宇宙とは異なる空間のいくつかは、ガミラスの大演習場として使われているなど、並行世界間の移動はともかく亜空間の活用は積極的に行われている。

次元断層の中は通常空間からは観測できないため、艦載の新兵器のテストを秘匿したい時などにもってこいであるし、現在も任意でそういった時間断層に身を潜めて隠密行動や奇襲に威力を発揮するであろう、宇宙艦の研究もおこなわれていた。

「それだとすべての辻褄が合う。おそらくヤマトは並行宇宙の、あの未熟な文明が短期間に運用を学んでいることからすると、並行宇宙の地球から送り込まれたか、それともなんらかの事故で流れ着いたと考えるべきか——いや待て。氷塊……水……もしか、伝説の水惑星、アクエリアスか」

デスラーは顎に手を当て、記憶の中にある情報を引き上げては推論を並べていく。

「アクエリアスですか？ アクエリアスといえば、かつてイスカンダルとガミラスの祖先が住んでいたという星に、水と生命の息吹を与えたといわれている、あの回遊水惑星のことでしょうか？」

ヒスも記憶の中にある情報を引っ張り出して、デスラーの言葉を理解する。

ガミラスにとっても遙か昔の記録に残されているだけで、詳細は失われたに等しい、文字どおり『伝説』とされている惑星——それが水惑星アクエリアス。

それは地球を内包する天の川銀河の中を自由に巡り、近づいた星を水没させ、生まれたばかりであったり干乾びた星であったのなら水と

命の種子を与え、自らが撒いた命が芽吹き、生み出された文明があればそれを押し流して水没させると言われている、生命の神秘と進化に関わる星。

イスカンドルもガミラスも、いま住んでいるこの星に自然発生した生命ではない。

別の星で生まれた文明が宇宙に広がっていった過程で移民し、国を造つたに過ぎない。

だが、度重なる内紛や侵略戦争を生き抜く中で詳細な資料は失われていて、その原点がどこにあるのかはすでにわからなくなつて久しいのだ。

もしかしたら、イスカンドルにはまだ資料が残っているのかもしれないが、デスラーたちガミラスにそれを知る術はない。

「そのとおりだ。かつてわがガミラスを内包する大マゼラン雲は、地球を含む銀河の傍らにあつたと聞く。その際に移民を行った民族の末裔が、イスカンドルとガミラスに国を造つたのが、われらのルーツ。そしてわれらの命の根源たるアクエリアスはあの銀河の中を回遊しているとの記述も残されていた。ということは、その並行世界の地球は実在していたアクエリアスに接近され、水害に晒されようとしていたのではないだろうか。それを防ぐためにヤマトが、おそらくはタキオン波動収束砲を使用したなんらかの策を講じて水没防ぎ、それが生み出した時空間の歪みに落ち込んで並行世界間を超えた、と考えるのが当たらずとも遠からず、と言つたところだろう。ワープ技術に転用されているように、波動エネルギーには時空間を歪める作用がある。なにかの弾みで並行世界間の壁に穴を開けることがないとは言えない————そうか、だからイスカンドルに……」

「総統？」

急に黙り込んだデスラーにヒスが心配になつて声をかける。

デスラーはしばらく考え込んだあと、ニヤリと笑うと合点がいったという顔でヒスに言い放つた。

「どうやら連中を少し見くびつていたようだ。ボソソジャンプを高度に使いこなせる何者かがいるらしい」

「ほ、ボソンジャンプでございませうか？」

「そうだ。誰かは知らないが、ヤマト出現の時空の歪みを利用した超長距離ボソンジャンプで、イスカンドルにコンタクトを取ったのだ。だからスターシアは地球に使者を送ったのだろう。推測になるが、アクエリアスの水害を未然に防いだヤマトはその反動で大破——いや違うな。もしかするとヤマトはタキオン波動収束砲を意図的に暴発させて自爆し、その爆発で水害を防いだ可能性もある。あの大氷塊の水がアクエリアスのもので、その中にヤマトが眠っていたのだと仮定するのなら、状況的にはそれが自然だ。なにしろ吹き飛ばした水柱に飲まれて一緒に転移するなど、そのような状況でしか起こりえないからね」

ヒスはデスラーの推測に思わず聞き入ってしまう。

「だからイスカンドルの使者なしでは出現できなかったのだ。自沈という選択で母なる星を救ったというのなら、波動エンジンもタキオン波動収束砲も致命的なダメージを受けていたはず。再建するためにイスカンドルからの支援が必要だったのだろう。——そして、再建と並行してコスモリバスシステムに必要なシステム、六連射可能なタキオン波動収束砲のデータをも提供した。ボソンジャンプによる連絡が取れるにも拘らず使者を送ったのは、同じ手段を使うに出来ない事情があったと考えれば不自然さはない。スターシアは頑固だからね。説得するだけで無茶なボソンジャンプによる連絡の限界に近づき、肝心のデータをそれで得られなかったとしてもさほど不自然とは思わん。……おそらくこれがヤマト出現のからくりだろうと思うのだが、ヒス君はどう思うかね？」

デスラーの推測は、恐ろしいことに的を得ていた。

わずかな情報から己の知識を最大限に活用して、ヤマト出現の真相をほぼ見抜いていたのだ。

ヒスはその推測が間違っただけではないのだろうと確信していた。たしかにそれなら辻褃が合う。

ヤマトが健在であったのなら、すぐに大氷塊から引き揚げて使えばよかつたはずだ。それができなかつたのはヤマトが壊れていたから

と考えれば不自然さはない。

イスカandalもそうだ。たしかにスターシアは頑固——いや嚴格というべきだろう。彼女は自身が掲げた、いや国が掲げた方針を愚直なまでに守っている。

それを曲げさせただけでも驚愕すべきだが、それで無茶のタイムリミットが来てしまったとしても、不自然とは思わない。

「しかし、そのようなことが本当に可能なのでしょうか？　いかにボソンジャンプといえど、一六万八〇〇〇光年もの距離を覆すようなものでは——」

「実現していなければヤマトは出現していないはずだ。——もつとも、地球にヤマトのあとに続く艦を建造する余力はあるまい。ヤマトの出自がどうであれ、あの艦さえ粉微塵に粉碎すればそれで終わりだ」

相変わらず神経質そうなヒスの態度に笑いをかみ殺すように、デスラーは厳格な態度で命じた。

「シユルツに全力でヤマトを潰せと命じろ！　冥王星前線基地に援軍を送れ！　ヤマトはイスカandalに行く前に必ず冥王星基地を叩きに来るはず。——あの冥王星をヤマトの墓場にしてやるのだ！」

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ　ディレクターズカット

第六話　氷原に眠る、兄の艦！

宇宙戦艦ヤマトは一路土星に向かって進路を取っていた。

——案の定というべきか、波動砲の反動でヤマトは傷を負っていた。

発射口周辺の装甲板に亀裂が入ったのもそうだが、波動エンジンのエネルギー伝導管が焼け付いたり、コンデンサーの融解、制御コイルの破損が発生。このままではエンジンそのものが致命的な損傷を被りかねない危機的状況にある。

そのため初速を稼いだあとは波動エンジンを停止し、相転移エンジンから得られるエネルギーのみでの片肺飛行を余儀なくされていた。

ヤマトのメインノズルに採用されている推進システムは、タキオン粒子の噴出による反動推進とタキオン粒子の持つ空間歪曲作用を利用したフィールド推進機関を併用した複合推進装置だ。

そのため、タキオン粒子を生み出せない相転移エンジンからの供給だけでは作動しない。

また、波動エネルギーの転用によって機能している新型の重力波兵器やデイストーションフィールドも、相転移エンジンからの電力供給のみでは十全な機能を発揮できないと、あちこちがガタガタの状態にある。

一応波動エンジン停止時の緊急用として、相転移エンジンからの供給で最低限の機能を維持できるバイパス回路が用意されていたので、ヤマトの機能がすべて失われるという事態だけは避けられているが、それでもヤマトの消費に釣り合うエネルギーを、六連相転移エンジンが生み出すことは不可能。

そのため、ヤマトは現在まともな戦闘能力がないに等しい。頼みの綱はエネルギーを消費しないミサイルと艦載機だけであり、非常に心許ない状態が続いている。

土星到着まで約二日を想定しているが、その間ガミラスの攻撃がないことを祈るほかないほど、ヤマトは不安定な状態であった。

「ガミラスの追撃がないのは不幸中の幸いだね。……あちらさんも、波動砲が相当怖いみたい」

艦長室でアキトと雪と一緒に食卓を囲んでいるユリカが、溜息と共に独り言ちる。

波動砲の試射から数時間。

あんなことがあったあとだと食事が喉を通らないが、いやでも摂取しなければあつと言う間に駄目になる体なので、無理をして胃に流し込む。

食べ慣れたはずの栄養食が、いつにも増してまずく感じる。

アキトがそばにいてくれるのにこれだということは、自分の決断ながら、相当堪えているな、と考えた。

アキトも雪も食の進みは遅かったが、同じ気持ちなのか食べ物を口に運ぶことを止めない。

アキトはプレートメニュー（白米、合成肉のステーキ、ミニトマトの入ったレタスのサラダ、コーンポタージュ、ヤマト農園産トマトジュース）を、雪は手軽に食べられるタマゴサンドと野菜サンド、それに紅茶パックを夕食として持ち込んでいた。

食の進みも遅いが会話も弾まない。

波動砲で市民船を消滅させたことを、誰もが気に病み艦内の空気を悪くしていた。

「たしかにな。ヤマトの武装で使えるのは実質ミサイルだけで、フィールドも展開不能。アルストロメリアとダブルエックスのコンデイションが良好だから、いざとなればサテライトキャノンでなんとか、って選択しはあるけどさ……」

アキトは合成肉のステーキを齧りながら、ユリカの意見に賛成する。

ユリカの前で普通に食事するのが申し訳ないアキトだが、一緒に食べることをユリカが喜んでくれてるし、こっちが遠慮するとかえって気にしてしまうので、我慢して食べる。

ヤマトも食糧事情は決して豊かではないため、食品の一部が早くも合成食品になっていた。

いま齧っているステーキにしても、人工的に培養したたんぱく質をそれっぽく固めているだけなので、もちろん本物の肉には栄養以外のなにかもが及ばない。

味覚を失っている間はそれこそ栄養食だけで過ごしたアキトだが、せっかくな味覚が戻ってもこれでは嬉しさ半減。いや、自分が閉じこもっている間にここまで状況が悪くなっていたのだと改めて思い知らされた。

いまはまだ野菜もその形を保っているが、そう遠くない内に食用プランクトンなどを加工した、野菜代わりのペースト食か固形食に切り替わることだろう。

それでも農園が稼働している限りは多少なりとも形を保った野菜

が得られるのが、せめてもの救いだった。

しかしこの食糧事情の変化は、もとを質せばユリカが言い出したあの要望の影響も大きく、そのせいで予定よりも早くに合成食品を使わざるをえなくなったのだ。

内容が内容なので反対意見よりも賛成意見が勝ったため、多少の我慢は欠かせない。

「でもガミラスが慎重になるのもわかるわ……あの威力、使った私たち自身が一番怖いのももの」

雪が自分の気持ちを吐露する。その意見にはアキトも賛成だった。波動砲もそうだが、それより格段に劣るとはいえ戦略砲であるサテライトキャノン。

それらに頼らなければヤマトの航海の安全はなく、今後の地球の安全問題にも関わってくるかもしれないと知らしめられた直後だけに、どうしても考えてしまう。

その後も会話は弾まず、ただただ食事を口に運ぶだけに留まった。ユリカが入浴する段階になると、アキトは食器を引き取って艦長室をあとにした。

夫とはいえ、自分がユリカの入浴介助をするのは風紀的に大変具合が悪い。

ここは雪にすべてを任せよう。そもそも自分は介護のかの字も知らないのだから。

アキトは少し違った意味で自分の無力さを噛みしめながら、主幹エレベーターで降りて行った。

「ねえ雪ちゃん」

「なんですかユリカさん？」

「進君とは進展ないの？」

「えっ!？」

丁寧にユリカの髪を洗っていた雪だが、突然爆弾発言を投げかけられて動揺、つい手に力が入って髪を引っ張ってしまう。

突然髪を引っ張られたユリカが「いだっ!？」と呻く。首が勢い良く

後ろに倒れた。油断していたからことさらダメージが大きい。

ただし自業自得だが。

「す、すみませんユリカさん。でも、いきなりそんなこと言うから」
動揺を隠せない雪はドギマギしながら洗髪を続ける。

ユリカは痛む首を摩りながらも追及の手を緩めない。

「だって、案外そういう話が聞こえてこないからちよつと不安になっちゃって。やっぱり職場が違うとなかなか厳しいのかあ——。私の時は結構アキトに会いに行っただけど、雪ちゃん忙し過ぎるよねえ」

と、ナデシコ時代を思い返してみる。

ユリカの時はジュンが日頃の雑務の多くを引き受けてくれていたし、むしろ押し付けてアキトに会いに行っていた。

……いま思うと艦長としてどうかとも思うが、その結果アキトと結ばれたのだから個人的にはよかったのだらうと自己完結する。

対して雪は真面目に責務を果たしているし、艦内での仕事はかなり多い部類に入るクルーだ。

三〇〇人も人間が日々生活しているとすれば、どうしても消耗品の消費も激しくなるし、さまざまな問題も発生する。

生活班としてそれらに対応することはもちろん、クルーの健康を日々気遣い食事のメニューの決定や健康診断の実施、怪我人が発生すればその治療も求められるが、怪我の程度によっては手術の準備やその後の治療についての計画も立てねばならない。

さらには艦内の食糧プラントの管理運用も生活班の担当となっている。

生産そのものは工作班の仕事とはいえ、各部署から要求される生活必需品のリストをまとめて発注するのは生活班の仕事で、生傷が絶えない戦闘班や工作班の各部署への常備薬の補填や交換作業。

それらの統括責任者である雪の仕事はなかなか大変なものだ。

無論生活班と一口に言っても部門ごとにわかれていて、個々に責任者がいる。

イネスも生活班医療科の責任者であり艦医の立場にあつて、怪我人・病人の処置は彼女の指揮で完結していることのほうが多い。

食堂の管理を任されているのは炊事科の平田一という、古代と島の同期のひとりだ。歳の割にかなり腕が立つので、味や風味に劣る合成食料の料理の味付けはもちろん、味気ないトレーの色どりや栄養バランスを考えた食事メニューの考案は、大体彼の手腕によるものだ。

という感じで役割分担されているのだが、それでも最高責任者としての判断や管理を求められる場面はあるので、雪はそれらに対して応えるべく日々仕事に勉強にと忙しい日々を送っている。

「私としては、進君は雪ちゃんに任せたいと思ってるから応援したいんだけど、さすがに仕事さぼってまで、つてのはまずいよねえ〜」
「そ、そんなこと言われても。いまの古代君はそんな余裕がないですし……」

という感じでテレテレしながら雪が反論する。

実際のいまの進はなんとしても冥王星基地を叩いてみせると意気込みも露にゴートやら月臣やら、さらには基地攻略の要になるであろうアキトを交えて戦術論争に余念がない。

それ以外でも日々の日課であるトレーニング全般に愛機の整備作業の手伝いなど、雪に負けず劣らず忙しく過ごしているため、部署の違いも相まって雪と接触した回数是一片手で事足りる程度だ。

以前のヤマトのように第一艦橋勤務に就いていない影響はかなり大きいといえよう。

「出航して三日目にしてそれじゃあ体が持たないのに。……ねえ雪ちゃん、仕事を増やすようで悪いんだけど、タイタンでお仕事頼んでいい？」

につこりと微笑んだユリカの提案に、少し悩んだあと雪は応じた。
(これで少しは進展すると良いなあ。ヤマトの記憶とか関係無く、お似合いに思えるしね)

てなことを考えながら、ユリカは進と雪をくっ付けようと色々画策し始める。完全に下世話なのだが彼女はまったく気にしていない。

お似合いだと思うのは本当だし、進にはこういったしっかりした女性が一緒にいたほうがいいだろうという考えだ。

それに態度を見る限りでは進も雪に惹かれているのだろうし、なん

の問題もないだろう。

入浴を終えたユリカは、少し涼んでから雪に手伝ってもらいベッドに入った。

だが、まったく寝付けない。

頭上に広がる宇宙空間をなんともなしに眺めたり、眠ろうと目を瞑ってみるのだが、眠れない。

体は疲れ切っているはずなのに、意識だけははっきりと覚醒している。

先程は雪にまったく無関係な話をして意識をリセットさせたつもりだったが、やっぱり無理だった。

——脳裏に浮かぶのは波動砲で消滅した市民船の姿。そして、熱い涙を流して自分を擁護した月臣の姿。

強烈な罪悪感に胸が苦しい。

かつて故郷を奪った相手、自分達の幸せを奪った相手の故郷とはいえ、こんな結末は望んでいなかった。

逆に時間がかかってもいい、わだかまりが解けて仲良く暮らしていければいいと考えていたくらいだ。

ガミラスとの戦いが終わったら、思い出の品の回収くらいできたかもしれない。

人こそ減ってしまったが、人類が再び宇宙に進出する過程で再建もできたかもしれないのに。

その機会を永遠に奪ってしまった。それがただただ辛い。

思い返されるのは、自分の判断ミスが原因で死なせてしまったユー・トピアコロニーの生き残り。

あの時の光景と、波動砲で消し飛ばした市民船の姿がピタリと重なる。

——気持ち悪い、吐き気がする。

後悔渦巻くユリカの胸を突如として激しい痛みが貫く。

体を内側から引き裂かれるような、まるで寄生生物かなにかに食い荒らされて突き破られるような、到底堪えられないほどの激痛にユリカは声もなく絶叫する。

「っ!!!」

両手で胸を抑えて体を丸める。

痛みで霞む視界の中から、なんとかベッド右側の壁に据え付けられている艦内通信パネルを見つけて、ユリカのために用意された医務室への緊急コールボタンを渾身の力で叩く。上手く叩けなくて二度三度と叩いてようやく押すことに成功した。

パネルの点灯を見届けたユリカだが、安堵する間もない。

絶え間なく襲い掛かる激痛に身を振って堪えようとするが痛みは収まらない。

ベッド横の棚に置かれた無針注射器に手を伸ばし、震える手でなんとか首筋に当てがってボタンを押して薬液を体内に注入して応急処置する。

両目から止めどなく涙が溢れ、呻き声と共に唾液が口の端から零れ、ビクビクと手足が痙攣を起こす。

それでもユリカは驚異的な精神力で意識を保つ。意識を失ってしまったら二度と目覚められない。

体の中で荒れ狂うナノマシンを意志の力で強引にねじ伏せる。屈服させる。いままでどおりに。

(負ける……もんかあ……！ やつとヤマトが蘇って、アキトも帰って来てくれたのに……！ いまさら弱音なんて吐いてられるかあ……!!)

痛みで視界が霞む。体中から大量の汗を噴き出す。

正直何度も何度も苦しめられた痛みだ。

負けてしまおうかと、楽になりたいと思っただけは一度や二度ではない。

だがそれでもユリカは戦い続ける道を選ぶ。

すべてはこの先にある未来のため。

地球を救い、この戦いを終わらせて、もう一度アキトと一緒にラーメン屋をするため。

最愛のアキトの子供を産むため。

ルリにいま一度暖かい家庭を与えるため。

ラピスに家庭というものを教えるため。
エリナやミナトら友人達と楽しい時間を過ごすため。
そして息子同然と愛情を注ぐ進のためにも。
負けられない。

その一心で必死に生にしがみつく。

緊急コールを聞きつけた当直のイネスが、第二艦橋の下にある医務室から緊急セット一式を詰めたカバンを下げて、二分もしない内に駆け付けてくれた。

——どうやら今回も生き延びられるようだ。ユリカは切迫した表情のイネスの顔を認めながらそう確信した。

イネスの懸命の処置でなんとか回復したユリカは、ぐったりとした様子でベッドに身を委ねている。

すっかり疲れ切った表情で顔色も悪いが、彼女は落ち着いた様子だった。

教えておくべきだろうと呼び出しを受けたアキトとルリ、エリナとラピスも青褪めた顔でユリカの容態をイネスから伝えられていた。

「おそらくストレスが原因ね。波動砲の件、想像以上のストレスだったみたい」

イネスの診断に全員が納得しつつも、慰めの言葉がない事実には落ちる。

あの状況ではあれ以外に選択肢がないのは事実だ。だがそんなことは彼女自身が一番よくわかっている。

仕方がなかった。

そんな言葉で納得できるほど小さな問題ではない。

彼女は自身の決断で、滅ぼされたとはいえ木星市民が還るべき場所の一面を永遠に奪ってしまったのだ。

故郷が奪われることがどういうことなのか、気持ちはユリカにだけわかってわかる。

「……最近薬で落ち着いていたけど、やっぱり過度のストレスがかかると抑えきれないのね……」

イネスの表情も暗く、悔しそうだった。彼女の力を出し切っても、イスカンダルの医療技術を活用しても、現状では救う手立てがない。そしてこの一件で、今後ガミラスの妨害で激戦に晒された場合、大宇宙の自然が牙を剥いてきた場合。

それを乗り越える際に強いストレスに晒されたユリカの病状が加速する可能性がある事が示された。

それはすなわち、彼女の遺された時間が急激に減っていくということとを意味している。

「ユリカ……」

涙声で妻の名を呼ぶアキト。

彼にとっては初めて見るユリカの姿に胸が騒めく。

自分の知らぬところで彼女は幾度もこのような苦しみを味わい、そして耐えてきたのだろう。

滅んでもなお彼女を苦しめ続ける火星の後継者に改めて怒りが湧いてくるが、組織としてはすでに影も形もなく、逮捕された構成員のほとんどは荒廃した地球で死に絶えたと聞く。

仮になんらかの形で存続していたとしても、いまのアキトが私情ことを構えることなどできはしない。それは、復讐者ではなくなったアキトがすべきことではない。

「心配かけてゴメン、みんな……」

申し訳なさそうなユリカにアキトは首を横に振る。

「いや、ユリカが悪いわけじゃない。気にするなっ」

そう言っつて慰めるアキト。

いま自分の役割はヤマトの旅を成功させてユリカと地球を救うこと。

ストレスがユリカの身を蝕む病魔の餌であるなら、それを遠ざけることがアキトのすべきことなのだ。

「イネス、彼女のそばに誰かおいていたほうがよくないかしら。せめて今日だけでも」

そう提案するエリナにラピスが手を挙げる。

「私が残ります。ルリ姉さんよりも体が小さいから、一緒に寝ても負

担になりにくいと思います。本当はアキトが一番だと思うけど、風紀上の問題があるんでしょ？」

いつになく積極的なラピスの姿に、全員が頷いた。

「頼むよラピス。ユリカを見てやってくれ」

「私からもお願いします。ラピス、なにかあつたらすぐにイネスさんを呼んでね」

「頼んだわよラピス。でも、あなたもしっかり休まないと駄目よ。機関長なんだから」

それからしばらく、エリナが汗まみれになったユリカの清拭をすることになったので風紀的な問題から艦長室から早々に追い出されることになったアキトはイネスに礼を述べ、ラピスにあとを任せて名残惜し気に艦長室をあとにする。これ以上ここに居ても邪魔になるだけだ。

足取りも重く部屋へと戻り、自分のスペースである二段ベッドの下段に身を滑り込ませた。

「——大丈夫だったのか？」

同室になった月臣が声をかけてくる。

ヤマトの乗組員は各班・各科のチーフなどを除けば基本的には二人部屋か三人部屋で生活する。

出航直後は月臣は二人部屋をひとりで使っていたが、これはアキトを意地でも送り出してヤマトに乗せることを画策したアカツキの思惑によるものだ。

こういう事態の時、見ず知らずの人間よりは行動しやすいだろうと、気遣ってくれたのである。

つまり月臣もその点では共犯者である。

「……なんとか」

「……発作の原因は？」

月臣が訪ねてくるが、アキトはすぐに答えられない。沈黙で誤魔化そうとしたが、駄目だった。

「——俺に言えないことなのか？」

「——波動砲のストレスだろうって、イネスさんが言った」

これを月臣に告げるのは酷だろうと思っただが、そこまで食い下がられては言わないわけにはいかない。

「そうか」と言葉少なに受け入れた月臣は続ける。

「気にするな、と口にするのは簡単だ。だが、慰めにはならないだろうな。こればかりは、俺にできることはなにもない」

月臣もユリカを心配してくれている。

彼が言うには彼女を、そしてアキトを苦しめたのはかつて自分が信じた上官であり、正義。その犠牲者を目の前に突き付けられ、もがき苦しむさまを見せつけられては、平静ではいられないらしい。

「ああ」

二人の間を沈黙が支配する。これ以上交わすべき言葉思い浮かばないし、交わしたところでユリカが救われるわけではない。

願うことがあるとすれば、他の木星出身のクルーが彼女を責めたりしないことだけだ。

だが、虫のいい話だと自己嫌悪を覚える。

木星に友好的なだけの地球生まれですらこれほどの衝撃を受けたのだ。実際に故郷を消滅させられた木星出身者からすれば、衝動任せに彼女を糾弾することもありえる。

結局二人はそれ以上言葉を交わすことなく互いに眠りについた。

その胸に、この状況を生み出した暴走した正義と、ガミラスへの怒りを燻らせながら。

ユリカの清拭を終え、ラピスにあとを任せて艦長室を後にしたエリナとルリは、並んでエレベーターに乗り込む。

……我慢しきれなくなったのだろう、ルリはついに泣き出してしまった。

地球帰還後は葉のおかげで以前のような発作を起こさなくなっていたユリカに安心していただけに、今回の発作がことさらルリの心に突き刺さったのだろうと容易に予想がつく。

——放っておくわけにはいかないだろう。

「ルリちゃん、今日は私のところに泊まりなさい。ひとりでいたくな

いでしょう?。」

「——はい。お、願ひ、します」

しゃくり上げながらエリナの提案に応じたルリを引き連れ、エリナは自分の部屋に案内する。

ヤマトでは各班の班長や副班長などには個室が割り当てられている。ベッドは一人用で狭いが、ルリの体格ならなんとかなる。それに――。

案の定、部屋に入るなりルリはエリナに向かって胸に溜まっていた感情をぶつけはじめた。

それでもしなければ耐え切れなかったのだろう。

「——どうして、どうしてユリカさんがあんな目に遭わないといけな
いんですか? 戦争に参加したから? A級ジャンパーだから?」

どちらにしたって理不尽じゃないですか……! 私たち家族がな
にしたっていうんですかあ……!」

泣きながらしがみ付いてくるルリを優しく抱き留める。

黙ってルリの感情を受け止め、彼女が満足するまで優しく頭を撫で
る。

しばらくそうしていると、ルリがエリナから離れて両目の涙を拭
いた。

無言で差し出されたティッシュを「ありがとうございます」と受け
取って鼻をかんで、ようやく落ち着きを取り戻した。

「ごめんなさいエリナさん。エリナさんに当たってもしょうがないの
に」

「構わないわ。下手に抱え込んでしまうよりも、吐き出してしまつた
ほうが楽よ」

可能な限り明るく応対するエリナ。本当は自分だって無情な現実
への不満を喚き散らしたい。

だが、いまはその時ではない。ここは堪えなければならぬ時だ。

「ありがとうございます。今晚はお世話になります……」

「どうぞ、遠慮しないでいいわよ」

と受け入れる。

そのあとは、エリナが個人的に持ち込んでいた嗜好品の紅茶を一杯頂いて、気持ちを落ち着けることになった。

「おいしいです——エリナさん、淹れるのが上手ですね」

ルリはティーカップから漂う芳醇な香りを放つ琥珀色の液体を一口、また一口と口に運ぶ。

口の中一杯に広がる香りと、熱い感触が荒れていた心を沈めてくれる。

それにしても、よくこのご時世でこのような嗜好品を確保できたものだと感心しつつ、ルリは紅茶を堪能する。

「そりゃあ、会長秘書も務めましたからね。お茶汲みだって立派なスキルよ。——個人的な嗜好の追及でもあるけどね」

答えながらエリナも自ら淹れた紅茶を一口。うん、上出来だ。

「今度、私にも淹れ方を教えてくれませんか？ ユリカさんが回復したら、淹れてあげたいんです」

「私でよければいつでも教えてあげるわよ」

断る理由もないので快く応じる。

どのような形であれ、前向きなのはいいことだ。

「と言っても、貴重な茶葉なんだから、失敗したら承知しないわよ」冗談めかして告げるとルリの体がびくりと跳ねる。

あれ、そんなにきつい言い方だっただろうか。

「そ、そそそそうですよね。貴重なんですよね……ど、努力します」

ルリの態度から「ああ、この娘普段料理とかしないし、お茶もティーバックとかインスタントで済ませてるんだな」と知れた。

まあナデシコBの艦長として軍人になってからの生活では、自炊せずとも艦内か軍の施設内の食堂を利用すれば済む話だし、一人暮らしで趣味などにお金をあまり使わないルリのライフスタイルからすれば、休日の食事もお食やお弁当などで済ませているのも不思議はない。

「大丈夫よ。付きつきりで見つちり教えてあげるから」

朗らかに笑いながら宣言しただけなのに、ルリは恐縮した様子で「お願いします」と返事を返すばかり。

こういう恥じらいの表情も可愛いではないか、とエリナは率直な感

想を抱いた。

ナデシコA時代の彼女からは想像もできない感情豊かな表情に、當時を知るひとりとして彼女の成長を、時の流れを実感する。

かつて大人のエゴに巻き込まれ、本来望まれたのとは違う形で生を受けた命は、紆余曲折を経てこんなにも健やかに成長した。

そんな当たり前の出来事が嬉しく思える辺り、自分も丸くなったものだと苦笑する。

そうやってお茶を楽しんだあとは、夜も遅いので寝支度を始める。明日の仕事に差し支えては本末転倒だ。

ルリはエリナの寝間着を借りて、一緒のベッドに潜り込んだ。

「——エリナさんと一緒に寝るなんて、想像もしていませんでした」

「私もよ」

ルリは子供のようにエリナの体にしがみ付いてその胸に顔を埋める。いまは無性に人肌が恋しいのだろう。

「ユリカさん、助かりますよね？ イスカンダルを、信じて大丈夫なんですよね？」

いざ寝ようとしたと部屋を暗くしてじっとすると、ついつい不安が頭を過るのだろう。ルリはエリナに抱き着いたまま再び問いかけてきた。

イスカンダルはたしかにコスモリバーシステムと、優れた医療技術の一端を提供して地球に希望を与えた。

——だがユリカの体を治せるなどとは、当然ながら言われたわけではない。

そもそもよほど発想が飛躍しなければ、彼女のことをイスカンダルが知るはずもないと考えるのが普通だ。

彼女の言動から関りがあると知っていたとしても、彼女が自分の体のことを伝えて救援を求めたかもわからないし、仮に知っていたとしても、イスカンダルといつまで連絡を取り合っていたのかはわからない。

向こうにその気があったとしても、ユリカが手遅れな状態にまで体を悪くしてしまった可能性もある。

イスカンドルに辿り着きさえすれば万事解決ハッピーエンドなどとは、ルリたちが勝手に言っているだけなのだ。

「――助かるわよ。イスカンドルの技術なら、きつと彼女を元通りに回復させて――子供だって産めるようになる。そうしたら、あなたとラピスも含めた新しい生活が始まるのよ。信じてルリちゃん。イスカンドルが私たちにとって、本当に最後の希望なのよ」

らしくない物言いだとエリナは内心自嘲する。

だが嘘は言っていない。

イスカンドルに行けばユリカが助かる可能性が生まれるのだ。

そう、『可能性は』生まれるのだ。決して確実ではないが、彼女にとつてのハッピーエンドの可能性はたしかに存在している。だから彼女はヤマトを蘇らせたのだ。

だが、すべてを知って行動する自分と、なにも知らずにあるかどうかも定かではない希望に縋るルリとの間に、温度差が生じるのは避けられないことだろう。

だからエリナはまだ真実を明かせない身の上ながら、ルリに希望に縋るように訴えた。

「大丈夫。彼女は必ず、昔のような元気な姿を私たちに見せてくれるわ。信じるのよ、ルリちゃん」

それは自身に言い聞かせた言葉でもあった。

例えば方に一つの可能性でも〇でないのなら縋るしかない。それは見方を変えれば毒薬かもしれない、希望という言葉に。

いまはただ、信じて挑み続けるしかないのだから。

「ごめんねラピスちゃん……」

非常に弱々しい声で謝るユリカにラピスは、

「全然大丈夫だから心配しないで、ユリカ。私、ユリカと一緒に寝れて嬉しいよ」

左手を抱えるように抱き締めて慰める。

薬が効いてきてだいぶ落ち着いたとはいってもまだ青い顔をしているユリカだ。体温も少し低い。

一人用ベッドで狭いから、という理由もあるが、少しでも体温を分け与えられないかと思つてギューツと抱き着いてみる。

……目的が果たせているかどうかはわからないが、これは意外と心地いい。

「いつでも頼つて。戦闘指揮とか、みんなの鼓舞とかは私じゃ務まらないけれど、機関長としてユリカを支えることはできると思うから。だから抱え込まないでほしいの。私も、ユリカの家族なんだから」

ラピスははつきりと自分の意見を告げる。

アキトに助けられてから共に火星の後継者と戦い、それが終わったらヤマトの再建と、平穏な時間を過ごせているとは言い難いラピスではあるが、これまで出会つて来た人たちとの絆の大切さはもう理解している。

だからこそ教わってきたことを今度は自分が実践する番だとして、機関長の職務を懸命にこなし、そしてユリカの家族として彼女を支え、と心に誓つてヤマトに乗り込んだ。

いろいろと不安はある。

でもラピスはアキトの戦いを隣で見続けた経験がある。決して楽な道ではなかったがもがき続ければ道が開けるかもしれないことは経験している。

ユリカだつてそう信じているからこそあの無茶を耐え、いまこうしてヤマトの復活という成果をあげている。

ならばラピスは辛くても諦めない。二人が信じたように、ラピスも信じて先に進んでいくのだ。

「うん——ラピスちゃん、とつても暖かい」

「ユリカも、暖かいよ……ユリカ、大好き」

「私も大好きだよ、ラピスちゃん」

互いの体温と鼓動を感じながら二人は次第に夢の世界へと旅立つていく……。

——はずだった。

「でも……結構怖いんですね。外が丸見えで——吸い込まれてしまいう」

頭上に広がるのは——無限に広がる大宇宙。星々の煌めきの中にその身を置くと、自分の小ささが身に染みるようだ。

——多少詩的にモノローグを浮かべてみたところで恐怖は変わらない。だって窓の外は真空の宇宙。

展望室などで休憩している時ならいざ知らず、こうして眠りにつくという無防備にもほどがある状態だと正直怖い。

もし万が一、寝ている時にスペースデブリの類が直撃しようものなら——。

ラピスは身を縮こまらせて恐怖を露にする。

「そうだよねえ、やっぱり……シャッター降ろそっか」

ユリカもラピスの意見に賛成する。

この部屋ですでに三日生活しているわけだが、最初の一日目は幼少時代を過ごした火星——つまり惑星の大気圏内だったから問題なかった。

だが、二日目に初めてこの部屋で、窓を開いた状態で就寝した時は真面目に怖かった。

だって透明な硬化テクタイトを三枚隔てた(ヤマトの窓は基本的に放射線除去や防御力の都合で三枚重ね。その間にデイストーションフィールドや放射線除去液が展開される構造)先に真空の宇宙があるのだ。それは恐怖である。

再建の際に艦長室を移動しておけばよかったとつくづく後悔したもののだが、衰えた体で緊急事態に即応し、艦橋に移動することを考えると旧来の構造を再現したほうが都合がよかったのも事実だ。

しかし、なぜヤマトは宇宙戦艦として生まれ変わるとき、このような場所に最高司令官の部屋を用意したのだろうか。

考えれば考えるほど不思議である。

……案外そこまで考えていなかったのかもしれない。ヤマトの建造は余裕がなかったらしいし。

「もちろんです。降ろしましょう」

ラピスはユリカの提案にそれはもう眩い笑顔で応じた。

ユリカは返事を聞くが早い。か防衛シャッターの開閉スイッチに手を伸ばし、シャッターを下ろす。

艦長室の窓が装甲シャッターで覆われて、広大な宇宙空間が視界からシャットアウトする。同時に弱い室内灯が点灯する。

これで部屋の窓は装甲シャッターで閉鎖された。多少のスペースデブリは問題ないという安心感も得られ、ようやく安寧な空間が与えられたといえよう。

「それじゃ、改めてお休み、ラピスちゃん」

「おやすみなさい、ユリカ」

次の日、ユリカはラピスと雪と一緒に朝食を摂った。

なぜラピスが艦長室にいるのか雪は疑問に思ったようだが「寂しかったから一緒に寝て貰った」とユリカが誤魔化したためラピスも本当のことは打ち明けなかった。

その理由も事前に聞かされていたので多少呆れたが、特別反抗する理由もないから妥当な対応であったといえよう。

「いやあく。艦長室つて剥き出しだからたまに怖くなるんだよねえ。やっぱり再建のときに別の場所に移せばよかったよお」

ケラケラ笑って誤魔化そうとするユリカだが、雪には見抜かれてしまったようだ。と悟った。

彼女の眼は最初笑っていなかった、おそらくユリカの顔色やラピスがお泊りしていたという状況から、昨夜なにかしらのトラブルがあったことを察したのだろう。敏い娘だ。

「そうですね。プライベートがあつてないようなものですし、女性の部屋としては不適切ですね」

しかし追及せずに話題に乗っかってくれた。

艦長室のシャッターを降ろした理由はそれで正しい。おそらく雪もそれを察したのと、ユリカの具合が深刻であったならさすがに連絡が来ていると考え、追及せずに済ませてくれたようだ。

やはり気が利く娘だ。是が非でも進のお嫁さんに欲しいと、ユリカはそつと机の下にある左手を握り締めた。

「本当に怖かったあ。ユリカもよくここで生活する気になつたと思います。——でも、プラネタリウムと考えれば寝る時以外は心地いい空間ですね。星の海がとても奇麗」

いまは解放されている艦長室の窓の外を見て、ラピスがうつとりとした顔で感想を述べる。

たしかにドーム状の窓ガラスから観察できる星の海は、吸い込まれそうなほどに広大で奇麗だ。

こういう席では、この景色を一望できるのも悪くない。とてもムードがある。

（いつかアキトとこんな場所で思う存分イチャイチャして、朝を迎えてみたいなあ）

などと凄まじい妄想をしながらユリカはスプーンを加える。

結局彼女はどこまでいっても彼女であった。

身支度を終えたユリカはラピスを伴って、というよりはラピスに同行する形で機関室に顔を出した。

相も変わらず杖を突いてゆったりとした足取りで歩くユリカを先導するラピス。

「艦内の空気が重いから、明るくするために、艦内巡視に出よう！」

と突然思い立ったのでさっそく実行に移したからだ。

当然昨日の今日ということもあってラピスは渋い表情だったが、ユリカとして自分の体調くらいはわかっている。

だから最初にアキトに連絡を取り、随伴してもらうつもりだったのだ。

渋い顔ながらも了承したアキトだったが、すぐには来れないのとどこだったので、ラピスが機関室の視察に付き合うことになったのであった。

機関部門の副責任者である山崎奨は、今日も朝早くからこの気難しいエンジンの具合を部下たちと一緒に見ていた。

波動砲の試射による反動で傷ついたエンジンは不調そのもので、辛

うじて無傷で済んだ相転移エンジンからの供給によるやり繰りで、辛うじてヤマトは維持されている。

「おはようございませぬ徳川さん」

どうやら機関長も来たようだ。入り口近くで相転移エンジンの管理を行っていた太助に声を掛けたらしい。さて、自分も挨拶を――。

「あ、おはようございませぬ機関――」

長と続くはずだったであろう言葉が途切れる。――その隣に制服をビシッと着た最高責任者の艦長が立っただけならば無理もないか。

「徳川君おはよう！ 今日もう元気によろしくね！」

「か、艦長?!」

太助の絶叫が機関室に響き渡った。

その声に驚いた機関士たちが一斉に出入り口に視線を向ける。

嗚呼、朝から騒動な予感だ。

「艦長、どうなされたのですか?」

責任者のひとりとして率先してそばに駆け寄り用件を尋ねる。これ以上部下たちを困惑させられても正直困る。

ユリカが（一応）重病なのは艦内周知の事実。それがわざわざ足を運んだということは、なにか重大な案件があるのかもしれない。

もしかして、予定が変わって土星に行けなくなつたとも言おうのだろうか。だとしたら困るが……。

「いえ、みんなの様子を見にただけです。エンジンも気になりますけど、私の知識と技術じゃどうにもできませんし、そこは皆さん頼みます。ははあゝ」

と言つて拝むユリカの姿に全員がなんとも言えない気分になる。仮にも最高責任者なのに、こんなに簡単に頭を下げてよいのだろうか。しかも拝まれてるし。

「それに、艦橋と艦長室だけ行き来してるのも息が詰まりますし、顔を出しておかないと忘れられちゃうかもしれないから!」

と言うユリカに対して、

「いえ、それだけはないでしょう……」

苦笑いを浮かべる。後ろで機関士たちも似たような顔をしている。

その脳裏に浮かぶのは当然なゼナにナデシコ。しかも時折クルーの間でリピートされているので忘れられることだけは絶対にならないと思う。出航してまだ四日目だし。

機関部門でもワープの回だけは理解を深めるためにと、この四日間でも結構な頻度で繰り返し見ているのだ。

生真面目で頑固者の気がある山崎も、最初ユリカがなぜなにナデシコを始めた時は面食らったものだが、艦長として部下のケアに努めているのだと思えばまあ大丈夫——実際受けがいいし。

ただ、もう少し真面目であってほしいと思うのは贅沢だろうか。

「——あの、艦長」

山崎の隣を抜けて、数人の機関士がユリカに向き合う。その姿を見て山崎は眉を顰める。

全員が木星出身のクルーだ。

まさかユリカに腹いせをするつもりじゃないだろうかと疑うが、そのような気配もないし決めつけて遮るわけにもいかない。

山崎は事態を静観することにした。

ユリカもまた、木星出身のクルーと見て背筋を正して正面から向き合う。

彼らの想いを受け止めるのは、艦長としての責務であり、あの命令を下した人間として、絶対に避けては通れないことだった。

「冥王星前線基地攻略作戦、予定どおり実行されますか？」

「もちろんだよ。放置しておいたらヤマトが帰る前に地球が減んじやうかもしれないし、それにあそこを潰すことが、いままで散って逝った仲間たに対する弔いだと思うから。例え反対されたとしても、私は艦長命令を持ってあそこを叩く——これだけは絶対に譲れない」

これは本心だ。

ユリカは別に争いを望んでいるわけではないし復讐とかにも興味はない。

だが愛するモノを護るために全身全霊をかけて戦い、今日まで希望を繋いでくれた英霊たちに報いるためにも、あそこだけは叩き潰す。

それを手向けとしてヤマトはイスカンドルに行く。

この戦争の先にどのような結末が待っているとしても、仮にあそこを叩くことで今後の妨害がより苛酷になるとしても構わない。

散って逝った、そしていまも生きている仲間たちのためにも、冥王星前線基地だけは絶対にこの手で叩き潰す。

それがユリカの偽りならざる想いだ。

「——それだけ聞ければ満足です。われわれ木星人一同、われわれを受け入れてくれた地球のみなさんのためにも、そして地球に残してきた同胞たちのためにも、誇りと名誉にかけて任務に尽くします！ 艦長、私たちの想いはひとつです！」

全員が敬礼と共に熱い想いをユリカにぶつける。不覚にもユリカは胸が熱くなった。

罵倒されてもおかしくないのに、ついてきてくれるのか。

「わかった。ならもう一度言うよ。みなさんの命、私が預かります。ヤマト共に、必ず地球を——愛する家族の未来を救いましょう！」

ユリカの言葉に合わせて木星人クルーの周囲にもウインドウが開、敬礼した同じ木星人のクルーの姿が映っている。

その中には月臣とサブロータの姿もある。

どうやらコミニケをサウンドオンリーで起動して全員に聞かせていたようだ。おそらく、彼らの内誰かがユリカに遭遇したらこうするつもりだったのだろう。

ユリカは全員に向けて答礼して応える。もうこれ以上の言葉は余計だ。

そのあとは機関士全員を改めてひとりひとり激励し、エンジンの具合を聞いて頭を悩ませた。

幸いラピス率いる機関班と真田率いる工作班の間では、すでにエンジンの改修案が固まっているらしい。あとは実際にコスモナイトを手に入れ、エネルギー伝導管やコンデンサーを新しいものに置き換えるだけという段階まで行っていると聞いて、ユリカも顔を綻ばせた。「ただ、部品の交換作業には半日以上、部品製造にもその程度はかかると思われるので、改修後のテストも含めると一日、余裕を見ても一日と六時間は欲しい所です」

と山崎に言われてユリカは頷いた。専門家の意見は尊重すべきだ。「わかった。あとで大介君たちと相談して日程の調整をするね。限られた時間しか与えられないけど、バッチリ仕上げてくださいね」満面の笑みを浮かべるユリカに機関士たちも頼もしい笑顔で応じた。

「じゃあ私、ほかの部署見てくるね。ラピスちゃん、山崎さん、太助君、あとよろしくね」

手を振りながら踵を返す。

ベテラン機関士である山崎奨はとても頼りになるのだが、名字の關係で自分達を弄んだあの科学者の事を思い出すので顔に出さないようにするのがちよつと大変だ。

まあ、人を食った笑みを浮かべるあの科学者と違って、こつちの山崎はナイスミドルなおじさんといった感じで頼もしいのだが。

強いていえば、ガミガミ五月蠅いのが玉に瑕か。

おそらく内心ではユリカたちナデシコのノリに馴染めない部分もあるのだろう。

——でも、自分が指揮する艦で沖田が指揮したヤマトのような雰囲気はありえないので我慢してください、と心の中で願う。

ユリカはアキトと合流すべく廊下を進み、次の目的地である格納庫に向かう。幸い機関室とは近いので、待機室のドアの前に陣取つてれば問題ないだろう。

「艦長、おはようございます」

前から歩いてきたクルーが挨拶してくる。

うむ、ここは変な心配をさせないよう、一発ビシツと決めるとしますか。

「おっはよう！ 今日頑張つて行くかー！——っ!？」

元気よく右手を振りかぶったとき、異変が彼女を襲った。

ユリカが機関室を立つてからしばらく、席を外せないミーティングを終えたアキトは、リョーコに断つてからユリカの様子が気になって待機室を出た。

「すぐそつちに行くよ〜」

と連絡が来てから五分も経つが、一向に姿が見えない。昨日の今日なので心配が尽きない。

一応コミュニケーションに連絡しよう。

その頃、ルリはハリを呼んで電算室で色々と相談を持ち掛けている。た。

「——やっぱりいまのままだと、ガミラス相手にシステム掌握を仕掛けるのは無理だと思います。ヤマトの通信システムの規格は、ガミラスのそれに近づいたものなのでナデシコCよりマシだと思います。でも、ヤマトはナデシコCみたいに電子戦特化ではなく、ごくごくオーソドックスな、直接相手と打ち合う真正正銘の宇宙戦艦です。オモイカネも全力を出し切れませんし、無理をすればその分、ルリさんの負担も大きくなります」

「——わかつてはいても、残念です。システム掌握ができれば戦闘の負担も減ると思っただけですけど。……やっぱりないものねだりなのかなあ」

ルリはハリに協力して貰って、ヤマトでもなんらかの形でシステム掌握が実行できないかを再検証していた。

ユリカの負担を少しでも減らせないかと考えてのことだったが、やはりヤマトでは難しいことが再確認できただけであった。

ヤマトの通信システムはガミラスの物に類似した、タキオン粒子を使用した超光速タキオン通信波システムを採用している。

なので同じシステムを搭載したヤマトなら、と淡い期待を抱いたのだが、そうは問屋が卸さないようだ。

「気落ちすることないですよ。真田さんに相談して、ヤマトに改造を加えてもらうか、なにかしら補佐をするシステムを構築するなどすれば、限定的にはできるようになるかもしれません。諦めないで努力していきましよう！」

ハリはルリを励まそうと力強く意見する。

だが先の展望もなく意見しているわけではない。ハリとてルリの

力になろうといろいろと知恵を絞り続けているのだ。

以前のように通信回線を利用したハッキングができないのなら、直接相手に打ち込んで強制介入する端末を用意するとか、もしくはハッキングではなくウイルスを送り込んでかく乱してしまうとか、考えられる手段はまだほかにもあるはずだ。

ガミラス艦のシステムのデータが不足気味なので、どの手段も有効とは言い切れないのがネックだが、今後調査する機会がないとも断言できないのなら、考えるだけ考えて損はない。

「ありがとうハーリー君。励ましてくれて。——せめて、ガミラスの兵器のサンプルでも手に入れることができれば、徹底的に解析することもできるのに……」

ガミラスとの戦争が始まってすでに一年が経過しているが、一方的に打ち負かされ続けている地球はガミラスの兵器を直接鹵獲する機会に恵まれていない。

無論地球とてガミラスの兵器を撃破はしているのだが、広大な宇宙空間での戦闘に加え、常に劣勢で這う這うの体で逃げ出すのがやつとでは、とても回収する余力など……。

有効打になるのが相転移砲では残骸も残ることはなく、解析の困難さに拍車をかけていた。

ルリのハッキングによって得られた成果も、彼らのすべてを解き明かすにはまったく足りていないのである。

やはり現物を手に入れて解析するのが最も確実な手段だろう。可能であれば基地施設か軍艦のシステムを解析する機会が欲しいところだ。

「これ以上根を詰めても意味がなさそうですね。オモイカネもご苦勞さまでした。……ハーリー君、付き合わせたお詫びにお茶をごちそうするね。一緒に食堂に行こう」

無理にでも笑顔を作ってハリを誘う。ハリも笑顔を作って応じるが、内心では泣きたくて仕方ない。これではヤマトに乗る前の、ユリカが無茶をしていた頃のルりに逆戻りしてしまっているようだ。

多分、昨晚ユリカになにかあったのだらうと、ハリは見当をつけて

いた。波動砲で市民船を吹き飛ばしたことが負担になったんだと思う。あれは、自分にとつてもとても辛くて、正直言えばまだ飲み込めてないし、昨日の夜はよく眠れなかった。

しかしハリはそれを顔を出さないように懸命に堪える。いまルリの前で泣くわけにはいかない。不満を言うわけにもいかない。敬愛するルリのためにも自分が我慢しなければ。ハリはその一念で涙を堪えて笑顔を浮かべていた。

そして仲良く電算室を出て食堂に向かう途中、サブロウタに遭遇した。

「お、デートですか二人とも」

「茶化さないでくださいよ、サブロウタさん！」

サブロウタの軽口にはハリはいつも通りの反応で応じる。もちろん本気で憤っているわけではない。演技だ。

こういう時はサブロウタの存在がありがたい。こうやっていつものノリを演じることがルリにとつての救いになると、ハリは信じている。

サブロウタもそんなハリの心中は察しているし、ルリは彼にとつても敬愛する上官だ。だからハリが望むとおりに場を盛り上げる。

——内心では宇宙の塵と消えた故郷に思う所がある。が、先程のユリカの答えでサブロウタも自分なりにケジメを付けた。

——すべてのツケは、必ずガミラスに払わせる。

「——まあ、そんなところですね。それともハーリー君は、不満？」

薄っすらと頬を染めたルリの態度にハリもサブロウタもぎよっとするが、こういう時ハリの反応は光よりも速い。

「め、めめめ滅相ありません！　ぼ、僕は、るるるルリさんとデートできて大変ここに光栄です！」

予想外のサプライズ(?)にすっぴかりのぼせ上がったハリは、どもりながらも喜びの言葉を紡ぐ。完璧に地が出ているが取り繕う余裕なんてない。

まさに天にも昇るような気持だった。

(これはこれは……)

予想外のルリの言葉にサブロウタもたいそう驚いた。

ルリなりの冗談、場を盛り上げるためのリップサービスなのかもしれないが、テンパってるハリを見るルリの目は優しく、愛おしいものを見ているようだ。

無論、これがいままで通り可愛い弟分に向けている視線とも取れるが、もしかするともしかするのかも。

(まあこの一年、一番彼女をそばで支えてきたのはハーリーだもんな。もう少し男を磨けば、案外チャンスあるんじゃないやねえか?)

可愛がつてきたハリが着実に男に成長している。そう思うとサブロウタも嬉しくなってくる。

この一年、フオローやアドバイスをしてきた甲斐があったというものだ。

「んじゃあ、お邪魔虫は去るとしますかね」

頭の後ろに手をやって、飄々とした態度でその場を去るサブロウタ。

(がんばれよハーリー。もしかしたらお前、ルリさんの一番星になれるかもしれないぜ)

弟分にエールを送りながら持ち場に戻る。こんな日常を護るためにも、絶対に旅を成功させなければ。

サブロウタなりに、改めてヤマトの使命の重みを実感しながら足を進める。

その姿にいつもの軽薄さはなく、かといって木連時代ほど堅苦しいものでもない、いまのサブロウタらしい実直さが出ていた。

サブロウタはいま、静かに熱血していたのである。

第六話 氷原に眠る、兄の艦！ Bパート

ルリとハリが食堂でお茶を楽しんでいた頃、アキトはユリカと医療室で合流していた。

その理由は至って簡単。ユリカがほかのクルーによって医療室に運び込まれ、処置を受けていただけだ。

「——で、背中とか脚とか腕とかが攣って、動けなくなつたと?」

「……うん、心配かけてごめんなさい」

雪に体をほぐしてもらいながら、消え入りそうな声でユリカが謝る。あの時元気よく挨拶をしたところ、全身が『ビキッ!』と攣ってその場で動けなくなつたのだと聞いた。

声もなく青くなつて硬直するユリカに驚いたクルーはそのままコミュニケーションで医療室に連絡。迎えに来た雪や医療科の人間に運び込まれて治療とあいなつた。

——アキトがすぐにそのクルーに謝罪と感謝を伝えて、せめてものお礼として飲み物を奢つたのは、とても自然な流れだっただろう。

「多分筋力の低下が原因で姿勢が悪くなつて、あちこちに負担が掛かっているんだと思います。それに、どうしても運動不足になりがちですから、ね」

ユリカの整体をしながら雪が説明する。多芸な子だな、とアキトは思った。

「う……んっ……はあ……気持ち良いい」

整体してもらっているユリカも心地よさそうにしているが、アキトは心配が尽きない。はたしてこのままユリカに艦長を続けさせるべきなのだろうか。

いや、代わりを務められる人間がいけないことは重々承知だ。このヤマトは従来の地球艦艇のノリで運用するとまったく力を出し切れなない。正しく乗組員の意思をまとめ上げる象徴としての艦長が必要であり、そのためには優れた指揮能力と人間的な魅力が要求される。

いまのヤマトにはユリカが変わってそれが務まる人間がいけない。

ジユンは型にハマってこそ力を発揮するタイプから、こんな特殊な運用を必要とする艦の指揮官には向いていない。ただ、副官としてなら問題ない。むしろ型外れな指揮官をある程度抑えたり、常識的な見地からの指摘は必要なことだ。

ルリもどちらかという駄目だろう。残念だがルリはその容姿からくる人気は絶大だが、人間的な魅力で人をまとめるカリスマには大きく欠けている。この人についていけばなんとかなる、と思わせるような魅力が不足しているのだ。ただ、やはり副官と言うか縁の下の力持ちとしては必要な存在だろう。

いまのヤマトでユリカに変われそうな人材は——おそらく進だけだ。あの熱い人間性と意外なほど柔軟な思考を持ち、これと決めたらやり通そうとする意志の強さ。

師事していることも含めて、ユリカの代わりにヤマトを引っ張っていけるだけの地力があるはずだ。

だが彼は経験が不足している。熱血直情型の性格ももう少し落ち着かないと、昔の自分たちのようにここぞという時に大きな失敗をしかねない危うさがある。

「はい、これで終わりですユリカさん。あとは湿布を貼りますから、できるだけ安静にしててください」

「ええ〜。艦内見回るって言っちゃてるのに、ここで止めたら信用なくしちゃうよ〜」

唇を尖らせるユリカの姿を「ちよつと可愛い」とか思いながら、アキトは助け舟を出すことにする。

「雪ちゃん、車椅子用意できない？ 俺が押して回るから」

「用意できますけど。それだと艦長の具合を却って心配されませんか？」

「言い訳なら考えてあるから問題ないよ。ユリカの体調が周知のことなら、夫の俺が過度な心配をしてそうしたって言えば誤魔化せるさ。それに病状の悪化じゃないんだから、バレてもそこまで深刻じゃないよ……笑い話にはなるかもだけど」

朗らかに笑いながら告げると雪も「それもそうですね」と応じて、壁

の収納庫に仕舞われている車椅子を引き出してアキトに渡す。そのあとはあまり匂わない湿布を貼って貰ったユリカを車椅子に座らせて艦内を練り歩く。

予想通りユリカの具合が悪いのかと心配されたが、本人がいたって元気なのと、アキトが心配そうな顔をして見せればそれで大体納得してもらえた。

——そもそもヤマト艦内でこの二人の扱いは『ヤマトきつての熱愛（バ）カップル』であって、こういう組み合わせにさほど違和感を抱かないのである。

痴話喧嘩に医務室でのアツツ〜いラブシーンに、先日なぜなにナデシコでのアキトの行動は、すでに艦内に知れ渡っている。

そうでなくてもこの二人になにがあつたのかをおおむね察しているクルーたちなので、アキトの心配もわからないでもないと考えているのも追い風となった。

元々ヤマト再建に尽力した（＝最後の希望を繋いだ）ユリカを救うことを望むクルーは多かったので、この一幕でより気合が入ったクルーも多かったといわれている。

——しかし同時に。

「お願いですから巡視中にイチャつくのは勘弁してください口から砂糖が出てしまいます壁に大穴を開けたくなつてしまいますお願いしますからピンク色な空気を出さないで特に艦長自重して〜」

というクルーの心の叫びは、残念ながらいろいろな我慢し過ぎたせいでタガが外れているこの夫婦には、びみよくに届いていなかった。

翌日、ヤマトはようやく土星の姿を視界に捉えていた。

太陽系第五惑星土星。

誰もが知る有名な星であり、特徴ともいえる巨大なリングが生み出す神秘的な姿。同じ太陽系内の星でありながら、いままで人類が直接訪れたことのない未知の惑星だ。

映像資料や写真などで知名度は極めて高いとはいえ、実際にその姿を肉眼で確認したのは採掘に来たユリカが初めてであった。

そのため、コスモナイトを手に入れるために土星圏に初めて足を踏み入れたユリカは、初めて見た不思議な光景にはしゃいで、資料作成のため持ち込んでいたカメラで思う存分周りの景色を撮影、目的も果たして帰還した時も、ジャンプの後遺症で具合が悪くなっているにも拘らず「スッゴイ感動的だったよ！ みんなも見て見て！」とテンションも高くカメラを振り回して、「安静にしてなさい！」とエリナとイネスに怒られたという逸話も存在していた。

ヤマトが立ち寄るのはその数多い衛星の一つ、タイタンだ。惑星である水星よりも大きい土星最大の衛星で、濃密な大気を持ち、生命が存在する可能性を示唆されている。

太陽から遠いため、表面の温度は低く氷に覆われているが、多くの金属元素が眠っているとされていた。

ヤマトは波動エンジン補修のため、この星に微量ながら埋蔵されているコスモナイトを必要としているのだ。

ヤマトは主翼を展開しつつ、補助エンジンを使ったタイタンの軌道に到達。上空から地表の様子を調べたあと、静かに降下していく。戦闘能力を事実上喪失しているヤマトを軌道上に置き去りにするのはリスクが高いと考えられたからこそその判断であった。ヤマトはこれから地表探査の結果を基に身を隠せそうな渓谷へと移動する予定である。

そんなヤマトの姿を遠くから捉える影がある。ガミラスの高速十字空母だ。ヤマトに気づかれぬよう土星の輪の陰からそつと様子を伺っている。

そして捉えたヤマトの映像とパッシブセンサーが拾った情報を、悟られぬよう慎重に冥王星前線基地に送り届けていた。

「ヤマトが土星のタイタンに降下したのだと？」

「はい、シユルツ司令。偵察に出ている高速十字空母から報告です」
発令所のモニターには、空母が送信してきたヤマトの姿が映し出されている。

ヤマトは横つ腹から見慣れぬデルタ翼を広げ、タイタンの大気を滑空するようにして地表付近に降り立とうとしている。

「ガンツ、解析データを出せ」

「はっ！」

と応じて副官のガンツが送られてきたヤマトのデータをコンピュータにかけ、速やかに解析。モニターに表示されたヤマトの解析データを口頭で読み上げて報告する。

「エネルギー極度に微弱」

「なに？ エネルギー極度に微弱だと？」

シユルツが解析データに頭を捻る。

「故障かもしれませんが。ただちに我が艦隊を繰り出して——」

「待て、油断するな。相手はヤマトだ。慎重に挑まねば勝てぬ相手だぞ」

シユルツは顎に手を当てて思案する。ヤマトにはいままで散々煮え湯を飲まされている。

功を焦つても勝てる相手ではない。

これまでの解析データからして、悔しいが単艦での性能ではわがガミラスの戦闘艦を大きく上回る化け物であることが明白。

これが攻撃を誘うための演技の可能性すら捨てきれない。それにヤマト迎撃のため、戦力を冥王星基地に集中して作戦を練っている最中。迂闊に動かせば、こちらが隙を見せることになりかねないリスクがある。

「しかし連中は、タイタンでなにをするつもりだ？」

シユルツはヤマトの行動を予測できずにいる。ガミラスが太陽系に侵入してまだ一年。事前調査でおおよその星系図は作成したが、この星——それらが保有する衛星などの調査はまったくといっていいほど進展していない。そんな暇はないからだ。

資源を手に入れるだけなら開発が進んでいた木星圏を手に入ればそれで事足りたし、連中は手を付けていなかったが、衛星のいくつからかコスモナイトも手に入れることもできたため、わざわざ貴重な時間と労力を割いてまで他の星を開発する必要もなかった。

そんなことは地球を手に入れてからゆっくりとすればいい。

ガミラスが太陽系で完全に支配下に置いているのは前線基地を築いた冥王星を除けば、つい先日ヤマトにダメにされてしまった木星圏のみ。

火星はボソンジャンプ関連の資料を求めて襲撃したが、勢い余って施設を破壊してしまったためそのまま放置しているくらい、ガミラスとて余裕がない。

当然土星は手付かずだ。強いていえば……この間の戦闘で撃沈した地球の駆逐艦一隻が墜落したので、その捜査に部隊を送り込んだことがあったくらいだ。おかげで何人か貴重な地球人のサンプルを手に入れることに成功し、本国に送還してひと月ほどが経っている。もしかしたらヤマトは、タイタンに友軍艦が墜落したのを知って、その捜索にでも向かったのだろうか。

「探らせましょう。ヤマト偵察中の高速十字空母、応答せよ。高速十字空母、応答せよ」

「こちら高速十字空母、どうぞ」

「ヤマトのタイタンでの活動の目的を探れ。状況は逐一報告せよ。偵察を悟られないように慎重に事に当たれ」

「了解」

冥王星前線基地からの指令を受けた高速十字空母は、土星の輪から抜け出してタイタンに接近する。

ヤマトに発見されないよう反対側から慎重に回り込みつつ、偵察のための艦載機を発艦させたのであった。

「よし、手早く作業しちやいましょう！ ヤマトの停泊理由を悟られ

たら大問題だしね」

第一艦橋にて、ユリカは明るい声で意気込む。いま第一艦橋にはいつものメンツのほかにも、雪も呼ばれていた。

ヤマトは現在地表のクレバスに身を隠し、ロケットアンカーを左右の崖に撃ち込むことで艦体を固定している。

「二班に分けます。進君と雪ちゃんとハーリー君は信濃で周囲の偵察をお願いします。真田さんは工作班からチームを作ってコスモナイトの探掘、できればほかの有用そうな資源も確保しちゃってください。作業を迅速にしたいので、ハイパワーなダブルエックスを忘れずに！ 場所は渡したメモにばっちり書いてありますから。といっても、コスモナイトだけ抜き取ってきたから表面から見てもわからないと思うので、超音波探知とかで不自然な空洞を探してもらえると、一発だと思えます！」

ユリカは極力楽しそうに指示を出す。波動砲の一件以来沈みがちだった第一艦橋の空気が目に見えて明るくなって、気分が楽になるのを感じる。

カラ元気も元気の内というが、本当らしい。

「ただし、ヤマトはいまとても不調でまともに機能していません。でするので、行動は慌てず急いで正確に、状況判断を間違えないでくださいね」

と締めて『パン！』とかしわ手を打ち鳴らす。

「はいっ！ 『コスモナイトを手に入れてヤマトを元気にしよう作戦』開始です！」

ユリカはそう宣言した。

その宣言を聞いて、「ネーミングセンスどうにかならなかったのか」とは誰もが思ったが、疲れそうなので突っ込む者はいなかった。

まあ、わかりやすいのはいいことだろう。と、強引に納得した。

「よし、偵察は任せただ、古代！」

「了解！ そっちこそ手早く頼みますよ、真田さん！」

互いに頼もしい笑顔で応じる進と真田に、ユリカも満面の笑みで見送るのであった。

真田たちが各種運搬船や作業艇、ダブルエックスを引き連れて発進したあと、進、雪、ハリの三人は艦首底部に格納された『特務艇（または重攻撃艇）信濃』に乗り込んでいた。

全長八メートルにもなる大型の搭載艇で、ヤマトの作戦行動の幅を広げるために貴重な艦内スペースを割いてまで搭載した新装備である。

潜水艦の様に凹凸が少ない艦体を持ち、艦首に引き出し式のT字型安定翼（スラスタ―内蔵）を装備し、艦尾には取り外し可能なブースターユニットを装備している。

武装は上面の二四発の垂直ミサイル発射管（VLS）だ。

艦橋もほぼ埋没したシルエツトで、優れたステルス性能や対電磁波シールドをもつ、先行偵察や敵陣に突入してかく乱を主目的としている設計である。

積載された二四発の波動エネルギー弾道弾は、ヤマトのミサイルや主砲以上の火力を発揮する、波動エネルギーを転用したミサイルだ。封入された波動エネルギーは、トランジッション波動砲の八〇分の一と、波動カートリッジ弾よりも増えている。

その火力や生産性の低さなどから使いどころはやや難しいが、上手く使えばヤマトの火力支援としては申し分ない性能をもっている。

しかし発射実験はまだ済んでいない。旧ヤマトの波動カートリッジ弾をベースに開発しただけあつて、波動エネルギーの安定封入には成功しているが、実際の効果が未知数のままだ。

そもそも波動エネルギーを実際に扱えたのがおよそ二週間前と日が浅く、テストに割ける時間がなかったのだから致し方がないが。

また信濃は波動エンジンを搭載していないため、単独でワープはできず、構成素材こそヤマトと同じだがフィールド出力も大きく見劣りすると、総合的な戦闘能力ではガミラスの艦艇には及んでいない。

そもそもがヤマトの専属支援艦なので、単独で敵艦と正面から戦うことは想定されていないのだ。

実際の運用に際しては障害物を利用した闇討ちか、ヤマトと連携し

て敵の注意を惹かぬように立ち回りながら、その絶大な火力を行使する火力支援が主であると想定されている。

場合によっては格納庫が上下逆転でも収納できる構造なのを活かして、ヤマトの下方攻撃用VLSとして扱ってもよしとしていた。

「よし、火器管制システムは異常なしだ。雪、レーダーはどうだ？」

「こちらにも異常なし。通信システムも正常。ハーリー君、そっちはどう？」

「航法システムにも異常ありません。いつでも発進できます」

信濃の点検は済んだ。全員が長袖の手袋にヘルメットを身に付け、隊員服を簡易宇宙服として機能するようにしていることも確認する。「よしっ」とすべての準備を終えた進はずぐに管制室に連絡してハッチを解放させた。

ヤマト艦首底部の大型ハッチが観音開きに開いて、そこからゆつくりと信濃の姿が現れる。

オレンジを基調に青のアクセントの艦体色で、安定翼の側面に漢字で艦名の信濃と書かれている。艦尾にはヤマトと同じ白い錨マークも施されていた。

格納庫から離れた信濃はゆつくりと安定翼を展開して加速、ヤマトから離れていく。このままタイタンの地表付近をアクティブ・ステルスを発動しながら飛び回り、パッシブセンサーで周辺を警戒する予定となっていた。

その頃、ヤマトを離れた真田率いる工作班は、かつてユリカがコスモナイトを発掘した場所に來ていた。

ユリカによれば、元々ヤマトの天文データの中にあつた座標を指針にして調査したらしい。

真田も手早く指定された座標で探査機を動かすと、すぐにユリカの作業跡を発見する。

「あつたぞ。手早く表面の岩を砕いてしまおう。アキト君、早速頼む！」

「了解！　しかし、よくこんな装備考えますね……これセイヤさんの

仕事か？」

「お？ 気に入らねえかテンカワ。棘付き鉄球は男のロマンだろ？」

と三者三様のやり取りを繰り返す。

現在ダブルエックスは専用バスターライフルの代わりに、巨大なハンドガード付きのグリップとスラスタール付きの棘付き鉄球がセットになった新装備——Gハンマーを携えている。

対デイストーションフィールド対策の一環として考案された装備で、

「質量攻撃に弱いんだから鋭く尖った重量物なら突破しやすいんじゃないか？」

という発想とウリバタケの「男のロマン」によって試作されたイロモノ装備。地味にダブルエックスの開発に関与していた時から考えていたのだとか。

——なんでも、「ハイパービームソードのアイデアを真田に取られた」とウリバタケが敗北感を感じたのがきっかけで、よりロマン特化の武器を開発したのだとか。ありがた迷惑な話だ。どうせ作るならもっと使いやすいような武器にして欲しいとアキトは真剣に考える。

——ロマンを感じる気持ちはわからないでもないが。

グリップと鉄球はカーボンナノチューブワイヤーで結合されていて、最大で一五メートルほど伸びる。

伸びた状態で内蔵されたスラスタールや腕を使った制御で勢いをつけて、フィールドコーティングも施した鉄球を相手に叩き付けるといふ、シンプルイズベストな武器。スラスタールは軌道変更にも使える。

……なのだが、いかせん鉄球自体がかなり重く、相転移エンジン搭載型のダブルエックスの強靱な骨格とパワーがないと満足に扱えない困ったちゃんなのだ。当然アルストロメリアではまともに使えない。

ぶつちやけ対機動兵器戦闘には向いていない。こういう破碎作業とか対艦攻撃で使い道があるかないかというところだろう。

おまけにサテライトキャノンの砲身と胸部に着くAパーツが邪魔になるため、肝心要のGファルコンDXの姿ではまともに使えるかど

うかも怪しい。

一応、ほかにもダブルエックス用のオプション装備として、柄の上からビームソードを出力するツインビームソード、ビームソードよりも間合いが長く投擲にも対応したビームジャベリン。大型の弾頭を発射するカンフピストル風のロケット投射機ロケットランチャーガンなどが用意されているが、いずれもまだテスト未了であった。

なんでも完成したのがヤマト発進の直後らしく、アキトラのテストに間に合わなかったのだとか。

「じゃあ行きますよ。下がっててください！」

アキトはGハンマーのワイヤーを緩やかに伸ばしながら、鉄球を頭上で旋回させて勢いをつけた。

「フィールド出力安定。砕け！」

ハンマーにフィールドを収束してスラストに点火！ 凄まじい勢いで岩壁に激突したハンマーは容易く岩壁を打ち砕いて周りに凄まじい土煙とつぶてをまき散らす。

ダブルエックスもあつという間に土煙に飲み込まれてつぶてに全身を打たれるが、さすがダブルエックス。まったくの無傷でセンサー類の保護グラスにすら傷がない。

湧き上がった凄まじい土煙もデイストーションフィールドを上手く使って吹き飛ばして視界をすつきりさせる。

成果のほどはまずまずで、岩壁を砕いで奥にあるコスモナイトの金色の輝きがわずかだが伺えた。

「よしっ！ アキト君、この調子で続けてくれ」

「はいっ！ これは——病みつきになりそうだ！」

一気にテンションの上があったアキトが、ハンマーを岩壁に叩きつけては煙を吹き飛ばす作業を何度も繰り返し返す。

二日前に苦しんだユリカの姿を見てから、溜まりに溜まっていた鬱憤をすべて岩壁に叩き付けてやる、といわんばかりのアキトの猛攻に、哀れ岩壁は粉々に打ち砕かれしまったのである。

——なお、その鬼気迫るといっても過言ではないアキトの猛攻撃に、そばで見ていた真田とウリバタケを始めとする工作班の面々は背

筋がぞつとしたとか。

(——ああ、あいつもストレス溜まつてるんだな)

と同情もされたらしいが、その要因もどうせわれらが艦長だろうと考えると、普段目の毒になるほどイチャイチャしてるのだから、これといって言葉をかける必要はない、と投げ出されたことを、アキトは終ぞ知ることにはなかった。

タイタンの地表付近、クレバスや山間を極力発見されないよう、推力を抑えながら飛んでいる信濃の中では、雪が幻想的な景色に心を躍らせていた。

「うわあつ！ 古代君見て、すごく綺麗な景色よ！」

ブリッジの窓から除く景色は、一面に広がる氷の大地と地平線から顔を覗かせる土星の姿。

地球では決して見ることでできない神秘的な景色は、見る者を魅了するといっても過言ではないだろう。

「こら雪、遊びに来てるんじゃないんだぞ——でも、たしかに綺麗な景色だ。こりや、偵察任務に出た甲斐があつたかもな」

進も一応叱りながらも同調する。雪はその姿にユリカの影響を見た。

そもそも雪を信濃に乗せて偵察任務に就かせたのはユリカのお節介である。ちよつとでも関係が進展したらなあ、という親(馬鹿)心であつた。

最初この偵察任務兼デートと形容すべき任務を聞かされた時は公私混同と後ろめたかつたが、実際に出てしまえばなかなか心地よい時間である。

「たしかに凄い景色ですね。宇宙ってホントに凄いんだなあ」

宇宙の神秘を体感したハリも、感動を顔中に張り付けている。

彼も同行しているのは、もちろん任務のバックアップのためでもあるが、彼なら人の恋路をむやみに邪魔しないだろうと考えられたからだ。

実際彼は真面目に任務に打ち込んでいるようで、観光も楽しんでい

るらしく、特に咎めるような発言もなければ進との会話に割って入っても来ない、実にいい感じの同行者と言えた。

「ルリさんにも見せてあげたいなあ。きつと今頃電算室の中でデータと睨めっこしてるんだろうし。こういう景色を見てリラックスして欲しいなあ」

てな感じでハリがついつい本音を漏らすと、進は悪い笑みを浮かべて、

「おやおや、愛しのルリさんとデートの妄想かあ？ ハーリーも隅に置けないなあ〜」

とからかう。

……ハりは邪魔しなくても進はそうではなかったようだ。

雪は顔を一気に赤くしたハリを見て、

「古代君やめなさいな。人の恋路を邪魔すると、馬に蹴られちゃうんだからね！」

と雪が庇う。他人事ではない話題なのだからしつかり釘を刺しておかなければ。

対して進は「へいへい申し訳ございませんでした」と表情を変えずに形だけの謝罪。——もう少し礼儀を教える必要があるか……。

しかし唐突に顔を引き締めて、

「ん？ いまなにか見えたぞ！」

二人に警戒を促す。雪もハリもすぐに計器を確認して痕跡を調べる。

「これは、ガミラスの航空機です。おそらくわれわれを偵察に来たと思われます！」

ハリが報告すると同時に雪は無線機を手にとって、

「こちら信濃。タイタン上空にガミラスの航空機を確認！ 繰り返す——」

速やかにヤマトに連絡を取り、詳細な座標を転送するのであった。

「こちらヤマト、了解。信濃はそのまま警戒を続けてください。——」
工作班に告ぐ、タイタン上空でガミラスの航空機を補足、嚴重注意の

上、作業を急げ！」

通信席でエリナが真田率いる工作班に注意を求める。

艦長席のユリカも険しい顔で信濃から送られてきたデータを睨みつけていた。

「艦長、念のため航空隊の出撃準備をしておきますか？」

ジウンが確認を取ると「そうだね、お願い」とユリカも短く応じる。「艦長、バイパスを通せばショックカノンも三発までなら保証します。しかし、ヤマトのエネルギーもほぼ空になると、場所が場所なので煙突ミサイルが最適かと」

砲術補佐席のゴートがそう進言した。相転移エンジンの出力だけでは満足に戦えないヤマトにとつて、ミサイルはエネルギーを抑えつつ使用できる最後の切り札。しかし余裕をもって使えるほどの弾数はない。

ヤマトの場合、ほかの装備で内部容積が圧迫されていることと、艦内工場で資材さえあれば補充ができるという変わった特性を有していることから、各ミサイルの弾薬庫の規模はやや抑えめとなっている。

その分のスペースを福利厚生やら資材倉庫に充てているので、ミサイル攻撃は主砲と副砲のサポートとして用いるのが限界なのだ。

「ヤマトの所在を明らかにするのは得策ではないので、直接攻撃は最後の手段とします。コスモタイガー隊はヤマト発進後、距離を取って潜伏し、万が一に備えて下さい」

ユリカはそう指示を出す。いま襲撃されたヤマトは一卷の終わりだ。なんとしても凌がなければ……。

「こうなると、信濃が頼りだなあ」

「くつ。まだ予定量のコスモナイトを採掘できていないというのに……！」

工作船の中で真田が歯噛みする。アキト（の八つ当たり）のおかげで手早く岩壁を除去できたので、早速コスモナイトの採掘作業を始めではいるが、十分な量を確保できていない。

ヤマトの回復と今後の補給のことを考えれば、ここで諦めるわけにはいかないし、時間のロスも最小に抑えたい。

「真田さん、俺が警戒に回ります。工作班のみんなは、そのまま作業を続けてくれ」

アキトがダブルエックスで周辺の警戒を担当することを進言し、真田も頷く。

いまは彼だけが頼りだ。

許可を得たアキトは機体を素早く岩陰に隠し、ちよつとした裏技を使つて本来はサテライトキャノンの砲身の固定と照準に使う、両肩に内蔵されたマウント兼スコープユニットを展開して警戒にあたつた。アクティブセンサー類を使うのは見つけてくれといわんばかりなので、パッシブ光学センサーが頼みだ。

一応電波の逆探知もできるが、おそらく向こうも発見を避けるため、アクティブセンサーは必要最低限以下に抑えているだろう。

「先制できればめつけものだけど、そうも言っていられないか……」

いまダブルエックスは固定武装の大小合わせた六門の機関砲以外に射撃兵装がない。はたしてこの装備でどこまでやれるのやら。

棘付き鉄球が役立てばいいのだが。

アキトは緊張で額に汗を滲ませながら警戒を続ける。こうなると、敵の不意を突いて先手必勝を狙うしかない。

……上手く行かなかつたらとりあえず変な武装を考えたウリバタケを殴る。アキトはそう心に誓うのであった。

「雪、母艦の反応はまだないか？」

「ええ、まだ見つからないわ」

ガミラスの偵察機を発見した信濃は、ステルスを継続しながらタイタンの空を飛んでいた。とにかく本隊に連絡される前に叩き潰してしまわないとヤマトが危険だ。

逆にここで手早く片付けて本隊との連絡を絶つことができれば、いくばくかの時間を稼げるかもしれない。

「ハーリー、敵の母艦がいるとしたらヤマトの索敵範囲の外のはずだ。

タイタンの地形データをもう一度確認して、隠れられそうな場所を探してくれ」

「了解」

と応じたハリが改めてタイタンの地形データを参照する。いまのところ地球が遭遇した空母タイプは高速十字空母だけだ。

あの形状とサイズから隠れられそうな地形を算出するが、いかにせん候補が多い。

「——仕方ない。高度を上げて探索しよう。一刻も早く探し出さなければ」

進は操縦桿を引いて高度を上げる。胸中には焦りが渦巻き、額に汗が滲んでいた。

同時刻、ガミラスの偵察機はついに真田率いる工作班の一団を見つけていた。

「あれは……コスモナイトか！」

偵察機のパイロットは、地表から露出する金色に輝く鉱石を見て即座にヤマトの目的を察した。

「そうか、コスモナイトはエネルギー伝導管とコンデンサーに使う物質。ヤマトの不調は機関トラブルか」

と唇の端を歪める。そうとわかれば話は早い。機関トラブルでは、あのタキオン波動収束砲も使えないだろう。ヤマトを叩く絶好の機会だ。速やかに本体に連絡してヤマトを——！
そう考えて彼は通信機に手を伸ばした。

「見つけたぞガミラス！ 連絡はさせないからな！」

偵察機の姿を確認したアキトは脇目も振らずバックパックのメインスラスターを最大出力、頭部バルカンで牽制を掛けながらGハン

マーを思い切り振り抜いた。

ガミラスの偵察機はダブルエックスには気づかなかったようで、好都合のように頭上を無防備に飛んでくれた。

Gファルコンがなくてもダブルエックスの推力は桁外れに高い。戦闘機相手ならいざ知らず、偵察機ごときに後れを取るようなことはない！

アキトの気合と共に射出されたハンマーは、そのままガミラス偵察機の翼に命中して粉碎する。辛うじて機体を捻ることで、胴体への直撃は避けたようだ。

中々良い腕をしている。しかしバランスを失った偵察機はそのまま錐もみ状態で墜落を始める。

アキトはダブルエックス胸部に備わった四門の機関砲、ブレストランチャーを撃ち込んで容赦なくハチの巣にした。

ブレストランチャーは近・中距離での使用を想定した攻撃用の内臓機関砲である。その威力は一門で現行のラピッドライフルと同等というのだから、内蔵火器としては破格にも程がある火力を有している。欠点は弾数が少ないことと、射程が短いことだ。

その容赦ない弾丸の雨に晒された偵察機は、ボロ雑巾のような姿になったあと爆発四散した。

「偵察機一二四号、偵察機一二四号、応答しろ。偵察機一二四号！」

ガミラスの空母では突如として連絡を絶った偵察機の行方を求めていた。

「最後に反応のあった地点はどこだ？」

艦長の指示に応じて部下が座標を報告する。

「よし、すぐに艦載機を向かわせろ！ なんとしてもヤマトの動向を掴むのだ！」

「あれは……！」

進は山の陰から飛び出すガミラスの艦載機の姿を見つけた。とすればそこに母艦があるはずだ。

「よし！ 母艦を叩くぞ！」

「ヤマトに連絡しないの？」

「通信を傍受されるかもしれない。奇襲で一気に叩く！」

進は言い切ると操縦桿を捻って信濃を敵母艦の予想潜伏地点に向かわせた。大型艦のヤマトと違って軽快な運動で信濃は山間を駆け抜ける。

「見えたー！」

ついに信濃はガミラスの空母を捉えた。

進は出力を喰うアクティブ・ステルスをカットして火器管制システムを立ち上げる。まだ試験もしていない波動エネルギー弾道弾だが、威力は十分なはず。

「これでも食らえっ！」

発射レバーを下げると、信濃甲板の垂直ミサイル発射管(VLS)のハッチが二つ解放され、二発の大型ミサイルが発射される。白い弾頭はロケット噴射で加速。ガミラス高速空母に接近する。

空母側も信濃に気づいて迎撃態勢を取り、上部に備わった五連装ミサイルランチャーを起動して撃ちかけてくるが、進は懸命に操縦桿を操って信濃の巨体をまるで戦闘機のように動かし、追いつがってくるミサイルを躲す。

ガミラス高速空母も持ち前の快速で波動エネルギー弾頭弾を回避しようとするが、近接信管で起爆した波動エネルギー弾道弾の爆発に煽られてよろめき、脚のように伸びだ艦載機射出口四本の内二本をもがれて錐もみしながら墜落する。

直撃でもないのに凄まじい威力だ。

波動エネルギーを兵器転用することの恐ろしさを、改めて伝えられているような気持になる。

しかし、墜落した空母は小規模な爆発を繰り返して炎上している

が、奇跡的にもほぼ原形を留めているではないか！

「ん？ どうやら爆発しなかったようだな。……これは、資料を得るチャンスかもしれない！」

と進は沸き立つ。長いことその正体が謎に包まれてきたガミラスだ。その資料を得ることは、今後のヤマトの戦いにおいても決して無駄なことではない。

「雪！ すぐにヤマトに報告だ！ 俺たちはこのまま——」

偵察を続ける、と言うはずだった進の言葉は途中で止まってしまった。

「どうしたの古代君？」

「古代さん？」

雪とハリも進の様子がおかしいことに気付いてどうしたのかと尋ねてくるが、進の耳には入らない。

空母が墜落したすぐ近くに、巨大な氷塊がある。

いや、炎上する空母の熱に晒されて、その表面がわずかに溶けているのではないか。そこから見えるのは——。

「あ——あれは、あれは兄さんの艦だ！ 兄さんの!!」

進の絶叫に雪とハリも慌てて確認する。

そう、そこにあつた氷塊は墜落した駆逐艦アセビ。冥王星海戦で進の兄、古代守が乗っていた艦だったのだ。

進は止める間もなく信濃をアセビと墜落した空母の近くに着陸させた。

着陸を確認するとすぐにブリッジの後ろに向かって駆けだして、ジェットパックを掴むと後部にある搭乗員口を開いて外に飛び出す。

——進の眼前には破壊され、穴だらけになったアセビの無残な姿が晒されている。冥王星空域で撃沈されたあとタイタンに不時着したのか、その艦体はまだ原形を保っている。

——もしかしたらまだ生きているかもしれない。

根拠のない期待を抱いた進はジェットパックを背負って信濃から飛び降り、アセビに駆け寄る。

「兄さん！ 兄さん！ いたら返事してくれえーっ！ 兄さあ——」

ん!!」

進はアセビの周辺を駆けまわり、なんとか内部に入れなかと探るが、破損箇所も含めたあちこちは凍結してしまっていて、侵入口がない。

堪えきれなくなった進は侵入口を作ろうとコスモガンを抜いて凍り付いたアセビを撃つ。抑えきれない衝動をぶつけるかのようにひたすら撃つ。

砕かれた氷が散乱する。その中の一際大きな氷塊が足元に転がって来て、慌てて避けると凍り付いた地面に金属片が埋まっているのが見えた。

その金属片を見て、進は愕然として膝をつく。

それは、氷中に埋まった——守のドッグタグだった。

守は、もうここにはいない。墜落の衝撃で体がバラバラになってしまったかもしれない。もしかしたらそれ以前に宇宙に投げ出されて――。

呆然とその場に座り込んでしまった進に、雪もハリも掛けるべき言葉がなかった。

その後、出撃したガミラスの航空隊を難なく退けることに成功したヤマトは、停泊地点を移動しながらも念願だったコスモナイトの回収に成功した。

早速真田はラピスを伴い、艦内工場にて波動砲とワープの負荷を考慮したエネルギー伝導管とコンデンサーの製造を始める。

さらにコスモタイガー隊の力を借りてコスモナイトを余分に回収しつつ、いくらかの鉱物資源も採掘して、ヤマトの倉庫を潤わせた。今後どこで補給できるかわからない以上、ここで倉庫を満載にしておいたほうがいいだろう。

さらに、信濃が撃沈したガミラスの空母の解析も並行して行われた。残念なことに内部は火災で酷く焼けていて、生存者はもちろんまともな遺体の回収すらもできなかった。

しかし、無事だったいくつかのコンピュータを回収することに成

功し、いままでまったく不明瞭であったガミラス艦のメカニズムについて、理解を深めることに成功したのは僥幸だったといえよう。

「——進君が戻ったら、艦長室に来るように言っておいて」

ユリカはそう言うのと座席ごと艦長室に上がっていく。心なしか元気がない。

「アセビのこと、堪えてるよな……」

ジュンが心配そうに艦長席を見上げるが、そこにすでにユリカの姿はない。

「そうかもしれません——ユリカさん、凄く気にしてましたから」

沈んだ声でルリも同調する。

あの場でアセビと、守を見殺しにしたのはユリカで、それを止めることができなかったのはルリなのだ。気にならないわけがない。

「思いつめなければいいんだけど……」

昨日の今日なのでまた体調を崩してしまわないか心配になるエリナだが、冥王星海戦に参加していないエリナでは慰めようがなかった。

「すまん、少し外の空気を吸ってくる」

「わかりました。こちらで作業を進めておきます」

真田はラピスと部下たちに断って艦内工場区を出ると、その足で右舷展望室に入った。展望室から覗くタイタンの景色は寒々としていて、いまの真田の心境を現しているようだった。

「守……」

行こうと思えばアセビのそばに行くこともできた。だが、真田にはその勇気がなかった。

親友の墓標と言うべき艦に向き合うには、心の準備ができていない。まだ、内心では認めたくないのかもしれないと述懐する。

「……おまえの弟は、よくやっているよ。俺が、おまえの代わりに見守っていいこうと思う——守、安らかに、な……」

真田は視界の先にあるであろう守の墓標に敬礼する。

その目には珍しいことに、涙が流れていた。

「古代です」

艦長室のドアの前で声を張り上げる。

あのあと進はコスモガンの銃把で氷を砕いてドッグタグを回収、最低限の調査を行ってから信濃に戻り、しばらく周囲を偵察してからヤマトに帰艦した。

雪もハリも必要なこと以外は喋らず、そつとしておいてくれたことに感謝しながら、進はなんとか任務を終え、報告のために第一艦橋に上がったところで艦長室に呼ばれていると言われた。

用件はおおよそ見当がついている。——彼女にも、関係のある内容だ。

「入って」

重い気分を引き摺ったままドアを開けた進は、艦長席に座ったまま窓の外を向いているユリカの姿を認めた。

「報告して。——駆逐艦、アセビのことを」

「は、はい。——タイタンに不時着したと思われる駆逐艦アセビに……生存者は、生存者は……なく……っ！」

無残なアセビの姿を思い出して涙を、嗚咽を堪えて黙る進。

その手には、守のドッグタグが握り締められていた。

「生存者は、なく、か——」

進の報告にわかっていたにも拘らず、涙を流さずにはいられない。

あの戦いで負けるのはわかりきっていた。だからこそ、ユリカは早々に撤退を促してひとりでも多く助けるつもりである戦いに参加した。

無論、サーシアと合流するために必要な陽動も兼ねていたが、それは彼らの与り知らぬことで、ユリカもそれを踏まえたうえで全力で臨んだ戦いだっただけだ。

まさか、ヤマトの乗組員候補としていた守が残るとは思わなかった。本当なら進と守の兄弟を乗せて、ヤマトで旅立つつもりだったのに。

結局守は死に、進は心に深い傷を負った。それが悔しい。自分の無力さが情けない。

「進君」

そこでユリカは進に向き直る。涙を拭い去り、毅然とした顔で進に向き合う。

「地球を、アセビみたいにはしたくないよね」

「……はいー」

進は涙を堪えた顔で力強く頷いた。ユリカは渾身の力で立ち上がると、杖を使わずよろめきながらも進に近づき、そっと抱き締める。

「——冥王星基地を叩こう。守さんが護り抜いてくれた私たちが、このヤマトで」

「はい……！ 兄さん仇は、必ず！」

ユリカの言葉に、とうとう進は堪えきれず泣き出す。

力が抜けて崩れ落ちる進を支えられず、ユリカも一緒に膝をつく。改めて進の頭をその胸に抱いて、優しく髪をすき、背中をやさしく叩いてやった。

「いまはたくさん泣いていいんだよ。悲しみを吐き出して。私が受け止めてあげるから。——だから、泣き終わったら前を向いて歩くんだよ、進。ここで立ち止まったら駄目だからね。あなたには、まだまだいろんな未来があるんだから」

ユリカに母の温もりを感じながら、進は大いに泣いた。ユリカの体にしがみ付いて、声を出してわんわん泣いた。流した涙がユリカの胸元を濡らしていく。

ユリカは黙ってその涙を受け止め、優しく進をあやし続ける。

進はそんなユリカに甘えてしばらく泣き続けた。ここで悲しみを洗い流し、来るべき戦いに備えるために。

より力強く、明日を歩いていくために。

翌日、修理を終えたヤマトは静かに土星をあとにする。

ヤマトが地球を発つてすでに五日が過ぎていた。

地球で待つ人類は、冷え切った地球で刻一刻と近づく破滅の時を恐

れながら耐えている。

急げヤマトよ、三三万六〇〇〇光年の旅を。

人類滅亡の日まで、

あと、三六〇日しかない。

第六話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第七話 ヤマト沈没！ 悲願の要塞攻略作戦！！

戦え、未来のために。

第三章 冥王星決戦

第七話 ヤマト沈没！ 悲願の要塞攻略作戦！！ A パート

冥王星はかつて太陽系の最果てといわれていた星だった。

二〇〇年以上も前、惑星の定義を具体的に定める議論の末に惑星から外され、準惑星として太陽系近隣の天体として扱われるようになり、自然と話題に上り難くなった星である。

しかしその星はいま、ガミラスの出現によって軍関係者から注目を一身に浴びていた。

そう、ガミラスの太陽系前線基地はこの冥王星に建設されているのだ。惑星の環境改造や艦隊の規模や使用された兵器などから、その基地はかなり大規模であることが伺えた。

にも拘らず地球人類がまったく気づくことができなかったのは、単純に冥王星が遠く、観測自体が難しかったからというのものもあるし、ここ数年続いた地球圏の混乱も一因のひとつであろう。

ガミラスはいずれからやって来たのか。ヒューマノイドタイプの宇宙人なのかすらもまだわかっていない。

少なくとも断言できるのは、古代火星文明の遺物を手に入れ急激に技術レベルが向上したはずの地球圏を遥かに上回る力を持っていること。

そしてヤマトが太陽系を去るためには、眼前の脅威であるこの冥王星前線基地の所在を明らかにし、撃滅しなければならないという事実のみである。

そして西暦二二〇二年夏。

冥王星はガミラスの手で惑星改造を施され、表面積の半分以上にもなる海洋が与えられていた。

その海洋の下、透明な耐水圧ドームの中に冥王星前線基地のさまざ

まな施設が収められている。

巧妙に隠蔽された地上付近の宇宙船ドックに、生活を支える小規模な食糧生産工場など、複数の施設がドームごとに区分けされて連なっている。

基地司令のシュルツは、その施設の中のひとつである司令室にあって、腕組をしながらモニターを睨みつけていた。

「ヤマト確認。方位PX703からOP6へ」

モニターには宇宙を悠々と航行するヤマトの姿が映し出されていた。

この宇宙戦艦には、すでに幾度となく煮え湯を飲まされている。

あの氷塊の中に隠れていたことさえ事前に掴めていればと、後悔の念に苛まされたことは一度や二度ではない。

「ヤマトめ、本気でこの冥王星基地を攻略するつもりか」

モニターに映るヤマトを睨むシュルツに、副官のガンツは逸る自分を抑えて報告する。

「シュルツ司令、部隊はすでに配置についています。いかがされますか？」

ガンツの言葉にシュルツは気持ちを固めた。事前にできるだけの準備は整えた。あとは実行に移るのみという段階に達している。

決戦の時が来たのだ。

「よし！ ガンツ、遊星爆弾を発射してヤマトを誘え。母なる星を痛めつけられれば、向こうから勝手に来てくれる。あのタキオン波動収束砲は脅威だが、デスラー総統から賜ったデータと、ヤマトの使用記録を検証する限りでは、あれはチャージに相応の時間が必要となり、正面にしか撃てない。さらにエネルギーを使い尽くすため、使用後の隙も甚大となることがわかっている。ならばいままでの地球艦隊同様、包囲して接近戦を仕掛ければ使用を封じることでもできるはずだ。——冥王星にまで引きずり込めば。使いたくても使えまい。星の破壊に巻き込まれて自滅するだけだからな」

と、シュルツはヤマトのタキオン波動収束砲を封じる策を披露した。

シユルツは自分の分析が間違っているとは考えていない。あの砲は威力こそ桁外れではあるが所詮は固定砲だ。そういう意味では地球艦隊が使ったグラビティブラストや相転移砲と同じ対処法が使える。

それにヤマトのタキオン波動収束砲がその威力を發揮するのは、強いていうならアウトレンジからの一撃にあり、対象が宇宙要塞や基地施設、まとまった艦隊なら最大の威力を披露できるだろう。

シユルツとしては、それが一番避けたい事態だ。

艦隊でなら対処することはできる。しかし身動きできない基地施設はタキオン波動収束砲の格好の獲物だ。

それ故に慎重な、それでいて大胆な作戦を練る必要があるのだ。

「奴が所定のラインを越えたら、まずはステルス塗装を施した超大型ミサイルで後ろから煽る。そのあとは艦隊を小ワープでヤマトの至近距離に出現して混戦に持ち込み、冥王星の領空に入ったあとは、反射衛星砲でとどめだ」

シユルツは自信も露に笑みを浮かべる。本当はヤマトへの恐れが消えてはいないのだが、指揮官として部下に不安な顔など見せられようはずがない。やせ我慢だ。

先のタキオン波動収束砲によって破壊された木星の市民船と、そこに駐屯していた艦隊を纏めて損失したのは大きな痛手だった。が、デスラーの一声で冥王星前線基地にはそのキャパシティー限界までの艦艇が配備されたので、兵力的に不足は感じない。

ガミラスのワープ性能なら、危険を伴う最短コースを使えばガミラス星から太陽系まで一週間程度、安全な迂回路を通つても数十日程度で到達できる。

ただ、損失した空母の補充だけは間に合わなかった。太陽系に導入していた空母はすべて、運悪く木星で塵と消え去った。

あれがあれば航空戦力と合わせてヤマトを波状攻撃できるのだが、いまや基地防衛のための最低数しか航空機が残存していない。

デスラーの予定した増援の中には宇宙空母も含まれていたのだが、すぐに出撃できる空母の中に高速十字空母がなかった。ガミラスの

主力空母である多層宇宙空母は足が遅く、ヤマトの進行速度の速さもあつて間に合わなかつたのだ。

もつとも、あのヤマト相手に航空戦力がどの程度有効なのかは不明だが。

ガミラスは地球侵略の目的の関係から、冥王星前線基地に試作の防空兵器のテストの役割を与えていた。

それが反射衛星砲と呼ばれる兵器である。

惑星全体を防衛する最新鋭の防空システムの雛型で、衛星軌道上に大量に反射装置を備えた衛星を打ち上げて、基地の砲撃を反射衛星で幾重にも屈曲させ、目標に確実に命中させるという恐るべき兵器であつた。

攻撃範囲内に入ったが最後、破壊されるまで逃れることは叶わないだろう。だが、試作品故に弱点もあつた。

「問題はうまくヤマトを追い立てて、反射衛星砲の射程内に入れられるかどうかにかかっている。反射衛星砲はあくまで拠点防衛兵器だ。……射程距離はヤマトの砲を下回っている。それにヤマトの砲は副砲クラスですら、わが軍の艦を一撃で破壊する威力がある……。追いついて失敗して最大射程から砲撃されては、虎の子の反射衛星砲も宝の持ち腐れだ。また、反射衛星砲はわがガミラスの艦艇なら、戦艦であろうとも一撃で破壊する威力を持つが、ヤマトの防御性能に関しては不明瞭な点が多い。——少なくともタキオン波動収束砲の反動に耐える強度をもつ以上、決して柔な艦ではないはずだ。一撃で決められればよし、さもなければ沈むまで何発でも命中させるまでだが、エネルギーのチャージには相応の時間が掛かる……。その間に反撃の機会を与えてしまわないかが心配だ」

つい弱音が口に出ってしまった。

シウルツとて独自にヤマトの分析を進めている。しかしいかんせんヤマトとの交戦機会は少なく、その性能を推し量ることはできない部分が多いのだ。

艦載機戦力を使用して別動隊を派遣する可能性もなくはないが、こちらの基地の所在は掴まれていないのは地球艦隊の動きから推し量

れる。それに、ヤマトの艦載機の火力で基地施設の破壊は困難極まるだろう。ましてや水中の施設だ。

少なくとも最初の攻撃で艦載機兵力の投入がなければ、艦載機による基地襲撃を警戒する必要があるが、全部でなくてもいまままで確認され、推測されているヤマトの最大搭載数に近い数が出撃していれば、過度に警戒する必要はないだろう。

一機や二機でどうにかなるほど柔な基地ではないし、ヤマトの艦載機はおそらく単独で長時間・長距離の任務に対応できるものではない。

これまでの地球との交戦データでそれは判明しているし、比較的データの少ないあの宇宙戦闘機もどきの追加パーツを装備してからも、性能向上は著しいが対処できる程度の能力に留まっている。

やはり、警戒すべきはタキオン波動収束砲であり、ヤマト自身の戦闘能力だろう。

——持てる力のすべてを叩きつけなければ勝てぬ相手だと、シユルツはヤマトを高く評価していた。せざるをえなかった。

「だが、われらとて誇りあるガミラスの軍人だ！ デスラー総統への忠誠に誓って、必ずやヤマトをここで打ち取って見せるのだ！」

シユルツの鼓舞にガンツら部下達も闘志を奮い立たせてモニターに映るヤマトを睨みつける。

ガミラスの誇りにかけても、必ずやここでヤマトを叩き潰す！ この命に代えてでも！

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第七話 ヤマト沈没！ 悲願の要塞攻略作戦！！

時は少し遡る。

宇宙戦艦ヤマトは土星を発ったあと、通常航行で冥王星を目指して飛行していた。

「では、コスモタイガー隊のパワーアップは成功したんですか！」
ユリカが目を輝かせて真田に確認する。

「ええ、ダブルエックスの運用データを参考に、アルストロメリア各機の出力系と推進系のチューニングを行うことにしました。——ただなにぶん時間が不足しているので全面的な改修には程遠く、カタログスペック上はほんの数パーセント、目的であるGファルコンDXに追従するという性能には到底達していません。武装の強化も同様です。一応いままでの戦闘データを参考にレールカノンと腕部クロウの再調整も行いますが、あまり過度な期待がもてる状態には……」

と真田が答える。さすがに時間が不足していたため本当に必要最低限に達するかどうかという状態から逸脱することはできなかった。コスモタイガー隊の損耗や生存率を考えれば、もつと徹底して作業したかったのだが。

「それでもないよりも全然マシです！ これでみんなが生き残る確率が一パーセントでも上がるんなら万々歳ですよ！ さつすが真田さん！ いやっ！ ヤマトの切り札！ 生きるご都合主義！」

ユリカは素直に喜んで真田を煽てる。パチパチと拍手のおまけも付いた。十分な仕事を果たせたとは思えないとはいえ、煽てられては真田も悪い気はしない。

「ありがとうございます、艦長。武装の強化や新装備の開発こそ間に合いませんでしたが、地球で積み込んできた試作品と大型爆弾槽の増産だけはなんとか間に合いそうです。ハイパーバズーカと命名された大型のロケットランチャーのことですが、幸い構造が簡単だったので短時間での大量生産を実現できる判断してプランを作成しました。弾頭には、対デイストーションフィールドを考慮してタキオン粒子を封入した炸裂弾を用意します。タキオン粒子の放つ波動はデイストーションフィールドを打ち消す働きを持ったため、通常の炸薬よりも有効であると思います。もちろん、大型爆弾槽の高性能爆薬にも同様の処置を施します。艦長の許可さえいただければ、冥王星の決戦までに数を揃えてみせます」

真田の言葉にユリカも大いに頷く。いまは少しでも戦力が欲しい時だ。ありがたく配備させてもらおう。

「本当に頼もしいですね、真田さんは。それじゃあ艦長権で工作班の

みんなの食事には少しイロを付けてもらえるよう頼んでおきます」

「ありがとうございます。部下たちの励みになるでしょう」

ヤマトの食糧事情は決して豊かではないが決戦前の準備だ。工作班には戦いのあとも含めて大仕事が続くことになる。戦闘班同様、英気を養ってもらわないと。

「艦長、三日後には冥王星に接近します。航路はこのままでよいんですか？」

大介が艦長席を振り返り、形だけの確認を取る。

今回の冥王星攻略作戦は航海班も納得済みではあるが、攻略にどれほどの時間がかかるのか、そもそもヤマトの被害がどのくらいになるのか、その回復にどの程度の時間がかかるのかは見当もつかない。

ヤマトの運航責任者としては、できることなら回避していきたい戦いでもある。——職務上は、だ。

「このままでいいよ。下手に進路を変えても意味がないし、どうせ向こうはこっちの動きなんてお見通しだろうしね」

ユリカはあつさりとは肯定する。

ならばと、大介は視線を隣の席の進に向けた。

「古代、お兄さんの敵討ちはわかるが、勢い余って空回りするなよ」

大介は親友に対して少し釘をさしておく。

大介とてこの宇宙で辛酸を舐めた。正直いま思い返しても悔しいし、仲間たちの仇を取りたいと思う。

だからこそこの戦いを止めることはしないし、多少の遅れは、それこそ航海班の総力を挙げて取り返して見せる所存だ。

だが進の血気盛んさを知る身としては、こうも言いたくなる。失敗したら、それこそ守はなんのために困になったのかわからなくなってしまうのだから。

「ああ、わかってる。——ガミラスの奴ら、今度こそ叩いて見せる。兄さんの敵討ちだ」

大介の言葉を受け入れつつも、進は静かに闘志を燃やしていた。この宇宙で兄はやられた。

あの時は成す術なく敗退するしかなかったが、今度は違う。この宇

宙戦艦ヤマトなら、ガミラスに太刀打ちできるのだ。

「——やれやれ。でもまあ、僕も冥王星基地だけは叩かないと気が済まないから、ここは古代君に続くべきかな？」

ジュンも冥王星海戦では苦い思いをさせられたひとりだ。今回ばかりは気合の入りようが違う。

「——私にとつてもリベンジです。あの時の悔しさ、ここで晴らしていけます」

ルリも闘志に満ち溢れた顔でシステムチェックに余念がない。

あの時、システム掌握がもう少し上手く行っていれば、敵の行動を讀めてさえいれば。そう思わずにはいられない。

あの海戦に参加した全員が、たつぷりと味わわされた悔しさと憤りをすべて、冥王星前線基地に叩き返してやるつもりだった。

「よし！　じゃあ作戦を煮詰めようか。中央作戦室に集まって！」
ユリカの号令に第一艦橋のクルーたちは力強く頷いた。

「これが、現在の冥王星です」

今回は中央作戦室で直接データを操作しているルリが、床の高解像度モニターに冥王星の姿を映し出す。

ジュンは改めて変わり果てた姿となった冥王星の姿を目にする。

「これは先の冥王星海戦の時に撮影された映像です。ご覧のとおり、ガミラスによるものと思われる環境改造を受けた様子で、いまの冥王星は海洋を有しています」

映し出される冥王星の姿は、かつて探査機などで得られた姿と異なり、水によつて青々とした姿に変貌していた。

「いままでの調査で冥王星にガミラスの前線基地があることだけはわかっていますが、残念ながらそれ以上のことはわかっていません。——ハーリー君、ヤマトのタキオンスキャナーで得られた、最新の映像データを表示してくれませんか？」

「わかりました」

ルリの隣でアシスタントを務めるハリがコンソールを操作、冥王星の姿をより鮮明に映し出した。

ヤマトには波動エネルギーを構成する超光速粒子、タキオンを応用したセンサーシステムが各所に設けられている。

光よりも速いその粒子を利用したレーダーや光学測定システムは、使い次第では数千光年先の事象をも捉えることができた（ワープ計算に必要な天体観測が限界）。

幸いにも冥王星は恒星を背にしていなかったため、恒星風などで解析が阻害されることもなく、情報は正確なものだった。

「……ん？ やけにデブリが多いな」

表示されたデータを見て真田が疑問を抱く。

言われた気付いた。最初はつきり撃破された艦艇の残骸かと思っただが、考えてみれば地球側が冥王星の近海で戦ったのは先の海戦のみで、残骸がデブリとして冥王星を回り始めるには少々時間が足りない。そもそも絶対数が違う。

「ガミラスの偵察衛星かなにかか？ だがそれにしても数が多い。なにらかの衛星兵器の可能性があるな」

ゴートが自分の意見を口にした。

かつてのバリア衛星はもちろん、サテライトキャノンの初期案を知っているため、衛星軌道になんらかの武器を設置している可能性を指摘したのだろう。

もしそうであるのなら、ヤマトは敵の大艦隊と大型ミサイルなどの基地からの直接攻撃に加え、衛星兵器にも注意を払わないといけなくなる。

「だとすると、迂闊に冥王星に接近するのは危険ですね。——波動砲を使えない以上、ロングレンジ攻撃で一気に撃滅、といかないのが難点ですね」

進が難しい顔で情報を分析する。

この作戦の本格的な立案は木星で波動砲の試射を行ってから行われたが、その結果を踏まえ、波動砲は使用せずに作戦を実施することが確定していた。

「そうですね。波動砲を使えば冥王星自体を破壊してしまう可能性があります。あります。もしそうになったら、冥王星の破片や影響を受ける小惑星帯

が将来的に地球に降り注ぐ危険があります」

ラピスの指摘にジユンも頷く。

太陽系とは意外と繊細なバランスで成立している。波動砲のような大きな力でそのバランスを崩してしまえば、人道云々以前に自らの首を絞めかねないのだ。

「そう、波動砲は使えない。でも基地攻略を成し遂げるためには大火力の運用が必須。つまり切り札は……」

ユリカの視線がこの場に呼ばれていたアキトに向けられる。

「ダブルエックスの、ツインサテライトキャノンか」

「そう、僕たちが保有する最小サイズの戦略兵器。これに賭ける」

ジユンが補足しつつ、アキトに信頼の眼差しを向ける。

「うん、この作戦のカギになるのはダブルエックス。ツインサテライトキャノンの火力なら、基地制圧に十分な火力を叩き出せる。なにせ、火力はヤマトの波動砲に次ぐ、私たちの切り札その二だからね」
ユリカが断言した。

ダブルエックスのツインサテライトキャノンは高圧縮タキオン粒子収束砲、いわば波動砲の一種である。

さまざまな事情から運用不可能と判断された波動エネルギーではなく、それよりもエネルギー順位の低いタキオン粒子を使用しているのが特徴だ。そのため破壊力という点では本家波動砲には遠く及ばない。しかしこれは単に比較対象が悪いだけで、その破壊力は小型機動兵器の域を遥かに超越していることに変わりはない。

その威力たるや、大型のスペースコロニーすら一撃で消滅に導き、最大射程は優に三〇万キロにもおよぶ、まさにコスモタイガー隊の切り札。

波動砲と違って出力調整の幅も広く、対象の破壊規模に合わせることも比較的簡単であるため、今回のように戦略兵器の威力が欲しいが波動砲では過剰であると判断された時の代用品として、出航前から期待されていた装備だ。

これは強力過ぎる波動砲は最後の手段として極力使用を控えることで、敵を過剰に刺激して兵器開発の競争を生み出すことを極力避け

るため、同時に波動砲の乱用によって第三国家を刺激して侵略の口実を与えないようにするためという事情もある。

もちろんユリカたちは威力が劣るとはいえ、サテライトキャノンも大量破壊兵器であることも、拳銃で人を殺すのも、本質的な意味では大きな違いはないことを承知している。

だが同時にどのような理由であれ、殺し合いはその意思と覚悟がある者同士の間でのみ成立すべきだとも考えている。その意思がない者に強要したり巻き込むことは好ましいことではない。だからこういった大量破壊兵器は忌み嫌われるべきだとも考えていた。

例えサテライトキャノンであっても、艦隊や大型ミサイルの規模から推測できる前線基地の規模と、その最大破壊力を考慮すればただでさえ改造されて激変した冥王星の環境をさらに激変させてしまう危険性は極めて高い。

そうであるのなら、過剰威力を理由に波動砲を自粛したこと自体が自己満足の欺まんとの罵りを受けたとしても、まったく反論できないことも承知している。

それでもこの矛盾ともいえる理由を掲げて極力自粛する姿勢を通すことで、目的のために手段を選ばない悪魔に堕ちないようと、自分たちに言い聞かせているのだ。

「Gファルコンに追加エネルギーパックを装備したダブルエックスは、サテライトキャノンを最大出力で一発だけ撃つことができる。この火力を冥王星の前線基地に叩き込めれば、形勢は一気にこちらに傾くはずだ」

ゴートが矛盾を飲み込み込みながら期待を寄せている。

現状基地攻略の手段としては最良の選択であるのだから当然だろう。しかしまだ問題は残されていた。

「サテライトキャノンの威力であれば、艦体の規模から推測される冥王星基地の破壊は十分可能であると判断されていますが、規模はあくまで推論に過ぎず、具体的な規模や構造などが不明であり、それどころか未だに基地の所在すらわかっていません。またテストこそ数回行われていますが、サテライトキャノンの実戦使用が初めてであ

るため、波動砲同様その威力も厳密には未知数です。ガミラスへの露見を避けるため、小天体などを相手にした試射もなく、その威力は発砲した時の観測データとエネルギー量から来る推測に過ぎません。ですので、使用の際は確実を期するためにも事前調査を怠らないよう心掛ける必要があります」

それらの不確定要素を挙げて、真田が注意を促す。相手はこちらの戦力をおおよそ把握しているが、こちらはまったく把握できていない。

それこそがこの作戦の一番の問題なのだ。

「そこで、今回の作戦ではヤマトとダブルエックス以外の航空部隊をすべて囷として使います。敵はおそらく波動砲の使用を警戒して、包囲しての接近戦を挑んでくる可能性が高いと結論付けられました。それにもしこのデブリが敵の装備の一角であるとすれば、敵はヤマトを冥王星にまで誘き寄せる可能性もあります。——その状態で波動砲を使用すれば、冥王星の崩壊に巻き込まれて自滅の恐れがありますから、今回の戦いでは絶対に波動砲には頼れないと、頭に入れておいてください」

ジyunは事前に立案されていた計画を再確認しつつ、改めて感情的な理由だけではなく、状況的に波動砲は使えないであろう判断したと強調し、続けた。

「この作戦ではヤマトはわざと敵の術中に嵌まり、冥王星に慎重を重ねながら、それでいて確実に接近します。基地攻略はダブルエックスのサテライトキャノン単独での成功がベストではありますが、場合によっては特別攻撃班を選定して、基地への破壊工作作戦への切り替え、または両者の同時進行も考えられるため、臨機応変な対応を心掛けることが求められます。——この無謀以外のなにものでもない本戦を成功するカギは、クルー全員の臨機応変さに掛かっていると、言っても過言ではないでしょう」

と締める。改めて口に出してみても、無謀としか言い表せない作戦だと思う。

計画そのものを立案したのはユリカで、ジyunがそれに色々と質問

をして纏め上げた代物なのだが、やはり不安は尽きない。

——と言うのもユリカは最初から「基地攻略はダブルエックスで決まり！ アキトが失敗するはずないもん！」と言い切ったため、それではほかが納得しないとジユンがいろいろと付け足したのが、今回のブリーフィングで行われた解説だ。

ナデシコだろうがヤマトだろうが、ユリカに振り回されることに変わりはないようだ。もつと、ユリカの突飛な発想に理屈付けしたり理解を示せるようになったのは、ジユンが経験を重ねた分だけ成長したということの表れといえよう。

……これだけ苦労しながらも影が薄いと言われてしまうのだから、ジユンはちよつぱり世の理不尽さを呪った。

「——敵の術中にわざと嵌まらなさと敵の本拠もわからない、か。かなりハイリスクな戦闘になりそうね。無傷で抜けられるとは考えないほうが、かえって気楽に思えそうだわ」

エリナも渋い顔をしている。戦闘畑の人間ではない彼女でも、この作戦の無謀さは理解できるだろう。

——きつとナデシコ時代なら、それこそ「こんな戦い勝てるわけないでしょ！ もう少し考えてからものを言いなさい！」などとヒステリックに騒いでいただろうと思うと、彼女も落ち着いたものだと思えて実感する。

——本人の前では怖くて口にできないが。

「たしかに、いくらヤマトがすごい艦でも、要塞の大型火器の類に直撃されたら、耐えられない可能性も十分に考えられますからね。罨に嵌るのにも慎重さが要求されますね」

ハリも懸念材料を口に出して確認する。

冥王星基地が大型の惑星間巡航ミサイルを装備していることは判明している。ヤマトの火炮なら迎撃自体は可能だが、艦隊戦の最中に撃ち込まれたら脅威になるだろうし、万が一にも直撃すればヤマトは一撃でスクラップにされる。

ほかにも未確認の武器があってもおかしくない以上、警戒するに越したことはない。

「でも、ヤマト以外に囚が務まらない以上、やるしかないよ。——真田さん、艦のコンディションはどうですか？」

「全艦異常ありません。望みうる限り最高のコンディションです」

「エンジンも正常です。タイタンでの改修は上手くいきましたので、想定される激戦にも耐えてくれるはずですよ」

真田とラピスが自信たっぷりに宣言する。

先のトラブルから知恵を絞りに絞って改修を加えたヤマトだ。早々に故障することはありえないと胸を張る。

技術者の誇りにかけて、と胸を張る二人に全員が頷いた。

「だったら思い切ってぶつかっていきましよう。この戦い、尻込みしては絶対勝てません！ 私たちの、ヤマトの力を十全に引き出して戦えば勝てます！ 全員、気合入れて行きましよう！ おおーっ！」

てな感じで気合たっぷりに拳を突き上げるユリカに、ジューンはとても心配になる。

——つい先日同じことをして全身が攣ったということを聞かされているからだ。

それを知らないほかのクルーは完璧に乗せられて「おおーっ！」と気合いも新たにしている。珍しいことに普段は乗らない真田まで乗せられている。気に恐ろしきはユリカの影響力だ。

「じゃあ解散！ 関係各員に詳細を連絡したあと、決戦の日まで英気を養いながら準備してください！」

ユリカの号令でスタッフ一同解散してそれぞれの持ち場に戻った。

アキトは解散するクルーの中から進を呼び止め、その行動になにを感じたらしいユリカとルリとエリナを含めた五人だけが中央作戦室に残った。

「ユリカ」

真剣なアキトの声に居住まいを正したユリカが正面から向き合う。

「なに？」

「ダブルエックスに進君を同乗させても構わないか？」

「俺、ですか？」

予想外の発言に進も怪訝そうな顔をする。

「ああ。できればサテライトキャノンの引き金を譲りたい——進君、お兄さんの敵討ち、ここで果たしてガミラスへの憎しみに終止符を打つんだ」

真剣な表情のアキトに進も真剣な顔で応じる。

「……終止符、ですか」

「そうだ。……ガミラス全体が憎い気持ちはわかる。地球はあのざまだしこれからヤマトの航海が続けば犠牲者だつて出るだろう。無茶苦茶を言ってる自覚はある。だけど、君は俺と同じ道を万が一にも通っちゃいけない。君は人の道を外れてはいけない」

アキトは進に真摯に訴えた。それは進から自分と同じ——いや同じだった暗さを感じ取ってしまったからこそその行為であった。

「俺は火星の後継者が憎かった。俺とユリカを苦しめ、その人生を狂わせたあいつらが。非道を働きながら詭弁でそれを正当化していたあいつらが、憎くて憎くて仕方がなかった。とても許せなかった。同時にユリカをあいつらのいいようにされてくなくて、俺は戦った。でもあいつらは強かった。ネルガルのバックアップを受けていても、単独で挑んで勝てるほど弱くもなければ、立ち回りも下手じゃなかった。だから連中と戦う過程で俺は——無関係な人さえも巻き込んでいった。止まらない癖に自分でも許せないようなことをする自分が……いや、そうじゃない。どんな理由があれど、憎しみのままに人を殺し続ける自分が心底嫌になって、許されたいけど許せなくて、一度は逃げ出して引きこもった」

アキトの独白は続く。進は言葉を挟むことなく、ただ黙ってその言葉を聞き、噛みしめていた。

「状況的に君が俺と同じような道を進むとは思っていない。でもどんな理由があれ、戦って人を殺すつてのは重いことなんだ。生き抜くために仕方のないことであっても。たぶん君は、本質的には俺と似てるんだと思う。本当はどんな理由があつても暴力だとかが嫌なタイプで、でも理不尽を見逃せるほど醒めてもいなくて。だから理由があれ

ば矛盾に苦しみながらも戦って戦って、傷ついていく。そこに憎しみが絡んで自制が失われてしまえば——君は自分で自分を一切許せなくなってしまうと思う。だからお兄さんの敵討ちとして戦うのは、これで終わりにしてしまっただけがいいと思う。俺の時と違って、この戦いは国家絡みだから」

アキトの言葉に進はしばし考えたあと、大きく頷いた。

「——わかりました。ここは、先輩のアドバイスに従います」

応じるべきだと思った。たしかに進はガミラスが憎い。いや、いまの地球でガミラスを憎まない者などいないだろう。

しかし以前ルリに言われたことを思い起こせば、そしてアキトが彼らに弄ばれてから今日までの日々を鑑みれば、アキトの言葉を真摯に受け止めるべきだと思う。

それに進自身も薄々と感じていたことだ。かつて憎んだ木星の市民船を波動砲で消し飛ばした時に。

もしも自分が木星のことを消化できずに憎み続けていたら、きっと内心では喜んで波動砲を撃ちこんでいただろう。両親の仇を取ったと。ガミラスに滅ぼされた時点で喜んでいたかもしれない。

そんな自分を連想したことが怖かった。ガミラスは憎い、復讐を果たしたい。でもそのまま突き進むのは怖い。人として歪んでしまいたくない。そう考えていただけに、アキトの気遣いが身に染みみた。

アキトは進と自分の類似点から進が内に抱える闇と澱みを察し、自分と同じ轍を踏まないよう発散の機会を与えつつもヤマトの航海に関わる大きな責任と同居させることで、歯止めをかけさせるつもりなのだろう。

自分と同じになってほしくないから。

(俺は、間違えてはいけない……)

ユリカもそんな進をとても嬉しそうに見つめている。

最近のこの人は、本当に母親同然の位置に収まってしまった。けど、それがとても嬉しい。この間はだいぶ甘えてしまったし、彼女の存在が進の心の闇を払ってくれているのは事実だ。ルリが慕うのも

よくわかる。

この人は本当に周りの人を明るく染め上げる。ある意味では、この人の下につけたからこそ、自分は必要以上に暗い感情に囚われ続けずに済んでいるのかもしれない。

——そんな自分のほうが、ただガミラスへの怒りと憎しみを糧に突き進む自分よりも、ずっとずっといい。

「じゃあ出撃に向けての準備は怠らないように。アキト、しっかりとレクチャーしてね」

「わかってる。俺はGファルコンのほうに乗るよ。合体中ならGファルコン側からの操縦を受け付けるから、もしも戦闘になっちゃったら俺が対応できるしな。サテライトキャノンの発射だけはダブルエックス側からしか操作受け付けられないから、進君にもダブルエックスのシミュレーションも受けてもらうことになるけど、構わないだろう？」

アキトに促され「では、早速お願いします」と承諾して共に格納庫に向かうことにした。

が、退室前に進はユリカに向かって「では、アキトさんをお借りします」と会釈をしていく。

するとユリカはわが子を見送る母親の顔でVサインを突き出し、「いつてらっしやい！」と快く送り出してくれた。

なぜそこでVサインなのかはよくわからない。普通に手を振るだけではないのか、と考えながらも、進はアキトと一緒にダブルエックスの元へと向かうのであった。

「古代さん、意外とアキトさんのアドバイスを受け止めてくれてますね」

「——この戦争が今後どうなるのかなんて予想もつかないけど、憎しみを抱いた戦いの果てがどういうものなのか、アキト君っていうわかり易いお手本が目の前にいたってのもあるんでしょう。——特に古代君は、肉親を殺された直後で、その無残な姿を目の当たりにしてる。だから、互いの姿が重なって見えるのよ、きつと」

分析するエリナの脳裏には、ユリカを奪われ、五感に障害を抱えて自暴自棄になったアキトの姿が、徐々に黒衣の復讐者となっていた過程が思い出された。

もう、あんな光景は見たくないものだと思う。

人が壊れて闇に飲まれていく姿何て、本当に見るものじゃない。

「でも私もアキトも、進君をそんな道には絶対進ませません。たしかに戦争は続いていますし、私だってガミラスに怒りや憎しみが無いといえは嘘になる。もちろん火星の後継者にだって……。でも私たちも進君も、まだまだ明るい未来が掴めるんです！ だから、私たちがりの方法で導いて見せます」

ユリカの決意は固い。

並行世界の、ヤマトと共に戦い抜いた進はそのようなこともなく、最後は愛する人と一緒になったようだが、この宇宙の進がどう転ぶのかはまったくわからない。

辿ってきた人生だって違うし、性格や人間性もまったく同じではないだろう。

だから、しっかりと導かなければならない。

そう、沖田艦長の代わりに自分が。

ユリカは改めて『母親として』進に向き合っていく決意を固めてしまふ。もはや、ユリカの中では『古代進は息子である』という考えが完璧に定着してしまい、書き換え不可能になっていた。

そして進もすっかりユリカに毒されて、その事を当たり前と感じるようになってしまったのだった。——それはそれで問題があるのかもしれないが。

その日の夜。ルリとはラピスと今日の世話役であるエリナと一緒に、ユリカと食卓を囲んでいた。

今回アキトは進に操縦のレクチャーをしていて格納庫に入り浸っており、食事も食堂で進と一緒に摂るとして辞退している。作戦前ということもあってユリカも「そちを優先していいよ」と気持ちよく送り出しているので一家勢ぞろいの食卓とはいかなかったことを、ル

リとラピスは秘かに残念がっていた。

ヤマトに乗艦してからユリカがルリとプライベートな時間を過ごすのは、これが初めてだった。

ユリカの食事内容は相変わらずだが、ルリはユリカと食卓を囲めること自体が幸せに思える。隣にはできたばかりの妹分のラピスに、この間の一件で打ち解けたエリナもいる。

かつて失ったはずの家族の温もりは、輪を広げてルリのもとに帰ってきた。

あとはイスカンドルの助太刀で地球を救い、ユリカを救い、ガミラスとの戦いを終わらせれば——アキトとユリカの生存を知って以来、火星の後継者との戦いを終わらせてからずっとずっと望んでいた平穏な生活に戻ることができる。

そう考えるとルリはあれほど不信がっていたヤマトがよきものを運んでくれる箱舟のように思えてきた。

そうして和気あいあいと語り合いながら終えた夕食のあとは、さらにいろいろな雑談に花を咲かせる。

その話題の中には、先日ついに手に入れた念願のサンプルを解析の進展が含まれていた。

「ガミラスの空母を解析したことで、少しですけどシステムの理解が進みました。まだまだ不完全ですが、解析がさらに進めば限定的であることに変わりないとはいえ、システム掌握も可能になる可能性がみえてきました。現時点でもECMなどの妨害手段の効果をいくらか上げられると思います」

ルリがやや明るい顔で語った。タイタンで回収した空母の残骸から得られたデータは、ルリにとっては喉から手が出るほど欲しいものだった。

おかげでガミラスのシステムを不完全ではあるが解析することに成功し、システム掌握はまだまだ届かないまでも、ガミラス相手の電子戦での遅れをいくらか挽回できるような資料を得ることができた。

嬉しくないわけがない。これでユリカの負担をまた一段と減らせる。

敵をルリが無力ができれば、そこまで行かなくても弱体化させるだけでもできれば、艦の指揮を執るユリカは幾分気が楽になるだろう。いまの彼女にとってストレスは大敵なのだから。

「そうなんだー。さすがルリちゃん！ あー、でもあまり使わないほうがいいかもしれないなあ」

最初は驚いて喜んだものの、すぐにやや浮かない顔になったユリカにルリは少し傷ついた。

システム掌握ができればユリカの負担を減らせると思ってた必死にがんばってるのに、その言い方はないのではないだろうか。ちよつとだけルリは拗ねた。

「これでヤマトがシステム掌握と波動砲を両立できるなんて知れたら、相手がどんな対策を練ってくるのかわからなくなっちゃうよ。掌握は本当に最後の切り札として温存しちゃって、それ以外は純粋な戦闘艦として戦ったほうが却ってやり易いかもしれないね。ヤマトはナデシコと違って純粋な戦闘艦として見られているはずだから、そういう先入観を覆さないようにしていざというときに付け入る隙を残しておこうよ。幸いというか、ヤマトには波動砲っていう凶悪過ぎるほど凶悪な武装があるわけだし。……その、別にルリちゃんが私の負担を考えてくれているのを無視してるわけじゃないの。ナデシコに比べるとヤマトの電子戦装備じゃシステム掌握戦術にも限度があるから、本当にここぞというとき以外は使いたくないって考えてるだけだから」

その考えにはルリも納得した。

たしかにナデシコの時点でも敵は対策を始めていて通用し辛くなっていったのだ。警戒して損はない。相手の基礎技術力は地球を上回っているのだから、本腰を入れて対策されるといくらルリとオモイカネのコンビでも限界があることは身に染みている。

温存したがるユリカの意見は正しい。

掌握戦法は自身の能力を最大限に発揮できる戦法だ。かつて火星の後継者に対して決定打になった手段だと、あれほど強大な敵であるガミラス相手にギリギリのところであっても通用した戦法なのだか

らと、知らず知らずのうちになんかそれにしがみ付いてしまつて視野狭窄に陥っていたのかもしれないと自省した。

「だから解析作業はこのまま続けて。例え一度きりでも完璧にできるように準備だけは進めておいて欲しいの。……もしかしたら、本当に切り札になるかもしれないからね。使用の判断は私がするから、ルリちゃんの独断では使わないように。ただし、私が指揮を執れない状況だったり、もしくは判断を仰いでからじゃ遅いつつという超緊急事態の時はルリちゃんの裁量に任せる。当てにしているからね、ルリちゃん」
そう言われてしまつてはもう反論の余地はない。「わかりました、艦長命令に従います」と素直に応じる。

緊急事態に限るとはいえ、自分の裁量で行使するチャンスが与えられているだけありがたい。

それにどちらにせよ冥王星基地攻略作戦には間に合わないのだ。ルリはこの戦いに負けるつもりなど微塵もないので、あわよくば基地の残骸のひとつでも入手してさらに情報を蓄積し、より磨き上げた起死回生の一打として備えておくのが吉だと考えた。

自惚れるわけでも、その身に施された遺伝子操作を肯定するわけでもないが、それこそが自身の、そして友人たるオモイカネの能力を最大限に発揮する戦法であるのは明白だ。

ならば、今度使うときは絶対に決定打にしてみせる。そしてヤマトを必ず勝たせる。

ルリは新たな決意を固め、今後のプランをハリと検討しようと考え始めた。

——本当ならラピスにも意見を求めたいのだが、彼女は最近この手の話題に乗ってくれないし、消極的に協力してくれるだけなのであまり声を掛けないようにしている。

いまだつて嬉しそうにシステム掌握について話すルリを複雑な顔で見ている。その瞳には素直な称賛のほかにも、なぜか自己嫌悪が見て取れた。

ルリは一度だけ理由を尋ねたことがあったが、ラピスは「IFSを使いたくないんです。私はみんなと同じようにヤマトと接したいだ

けなの……」としか答えてはくれなかった。

なぜそのような考えに至ったのかは聞けなかったが、ならばそれ以上は聞くまいと、ルリは深入りせず、話題も極力降らないようにしている。

姉として妹の考えを尊重したいのだ。無論彼女なりに答えが出て、そのうえでIFSを含めた自分の在り方を定められたのなら、その手を借りればいい。

きつとラピスはかつての自分同様、自分の居場所を自分の手で掴みたいと考えているのだ。いわば自己を固めるためのステップを踏んでいる最中。邪魔をしてはいけない。

「問題は冥王星をどの程度の損害で切り抜けられるかに掛かってるわね。できるだけ最小の被害で切り抜きたいけれどね……」

とエリナはため息を吐く。

正直敵基地攻略作戦を単独で実行するなど正気の沙汰ではない。たしかにヤマトにはそれを実現する実力がある。だがその切り札というべき波動砲はもろもろの事情で封じられている。幸いにもダブルエックスという切り札は健在だが、はたしてうまく機能するのだろうか。

「最善は尽くします。でも、どうなるかはやってみないとわかりません。——私は、絶対にイスカンドルに行きます。そして必ず、アキトやルリちゃんたちと一緒にの生活に戻る。そのためなら、どんな障害だって蹴散らして進むのみです」

ユリカはそう力強く宣言して拳を握る。小刻みに震える拳が決意の強さと不安を現しているように見えた。

もとより苦難は覚悟のうえ。楽にイスカンドルに行けるなんて最初から思っていない。

だが、諦められない理由があるのだ。

例えばそれが個人的なものだとしても、諦められない夢がある。だからどんな苦難であっても乗り越えて突き進むしかない。

そして世界も救う。みんなが幸せを掴み、日々を生きていくこの世界を。

それが——宇宙戦艦ヤマトの使命なのだから。

「あつ！ 折角だからルリちゃん、今日は一緒に寝ない？ ハーリー君との進展が気になるし。……もしかしなくても、恋人一歩手前だったりするの？」

「……え、ええっ?!」

結局捕まって根掘り葉掘り喋らされた。

「……かんべんしてください……マジで」

二日後。ヤマトは冥王星空域に到達した。自ずと艦内の緊張が高まる中、戦い始まりを告げる合図が静かに現れた。

「十時の方向、レーダーに感二〇。これは……遊星爆弾です！」

ルリの報告に第一艦橋の全員の顔が引き締まる。

「くそっ！ 俺たちを誘うためにこれ見よがしに!!」

進がいきり立って座席の肘掛けを叩く。だが進の言葉はヤマトクルー全員の気持ちだ。

すでに瀕死の地球にこの仕打ち。

地球に住むものとして、決して看過できるようなものではない。

「……へえ。そう、そこまでしてくるんだ……！」

ユリカも怒りで頭が煮えてくるのを感じた。

ガミラス。彼らが侵略などしてこなければ、地球はあんなことにならなかった。

木星も滅ぶことはなかった、誰も彼もが絶望に打ちひしがられることはなかったのだ。

地球侵略の目的は知っているが、モノには限度というものがある！ ヤマトを確実におびき寄せるためだけに地球にこの仕打ち——いだろう、望み通り正面からねじ伏せてみせようではないか。

冥王星前線基地は、今日という日で終わりを迎えるのだ。

「——コスモタイガー隊発進準備。敵さんこちらに気付いているみただから、ダブルエックスの出撃は慎重にね。進君も早く格納庫に

行つて……戦闘指揮は私が執る。席を借りるよ」

彼女らしくないと感じるほど低く落ち着いた、底知れぬ迫力のある声で宣言する。

ユリカはすぐに艦長帽とコートを脱ぎ捨てながら立ち上がり、乱暴に座席に引つ掛ける。

そのまま杖片手に席を離れ、同じく席を立ち艦橋中央で立ち止まった進と手を打ち合わせる。

いつになく真面目だ。本気と書いてマジと読む。珍しいユリカの超シリアスモードの発現であつた。

「しつかりね」

「はい、艦長ー」

短く言葉を交わすと進は主幹エレベーターに駆け込んで格納庫に、ユリカは進の代わりに戦闘指揮席に着く。

この席は波動砲の管制をはじめヤマトの戦闘指揮を一手に担える造りになっているため、単独での操艦といった非常事態への対応が不可能なことを除けば艦長席の代わりに戦闘指揮をすることくらい造作もない能力を有している。

過去のヤマトにおいて、指揮官となつた進がこの席でヤマトの指揮をやり通してみせたことから、その能力が何えるというものだ。

「全艦戦闘配置！ 各砲座位置につけ！」

ユリカがマイクを手にとって各部署に指示を出す。一斉に艦内が慌ただしくなり、戦闘班・砲術科の面々は担当となる砲座に次々と着席する。

並行世界の宇宙戦艦を復元した、というだけあつてヤマトは従来の宇宙戦艦と違って艦砲ごとに制御するシステムが残されている。

この世界で復元され、この世界の人間に合わせて改修を受けたヤマトは以前に比べると自動化が進み省力化しているが、随所に人間が直接管理する余地が残された、人機一体を体現する制御システムが導入されている。

火器管制システムもその例に漏れず、照準から発砲までを人間が担うことも、コンピュータに任せてしまうこともできる造りになつて

いる。だがダメージコントロールや時に機械すら上回る能力を示す人間の才覚を考慮するという言い分で、そして単独航海で不測の事態が多数想定されるヤマトだからこそ、貴重な人材を惜しげもなく配する必要があるのでこの管理方式が導入できたといつても過言ではないだろう。

そしてこの管理方式こそが、人の血肉が通ってこそヤマトは真の力を発揮できる。言い換えればそれこそがヤマトを特別足らしめている要因であろう。

艦隊戦という意味では事実上の初陣となる今回では機械制御に頼るところも大きいだろう。しかし経験を重ねていくたびに、クルーは強くなる。それがヤマトを強くする。

この相互関係こそが、宇宙戦艦ヤマトの実力を支えるのだ！

「防御シャッター降ろせ！ 全艦、砲雷撃戦——用意！」

ユリカの指示でヤマトのすべての窓に防御シャッターが下ろされる。旧ヤマトから継承された保護システムだ。艦橋全体の基礎構造の強化と合わせて、CICをもたないヤマトであっても指揮中枢を容易く失わないように配慮されていた。

またシャッターで閉じられた窓はそのままスクリーンとして機能する。艦橋上部にある測距儀をはじめとする外部カメラが拾った光学映像を映し出したり、メインパネルと併用して解析データを多く表示したりと、無駄にならない。

「さて……派手な戦になりそうね」

珍しくユリカは高揚する戦意に笑みを浮かべた。

ヤマトの戦闘準備が進む。下部の大型格納庫でも慌ただしく出撃準備が進められていた。

今回は大規模な艦隊戦が予想されているため、機体の半分は重爆撃装備に換装して待機している。

準備ができた機体から順次出撃していく中で、Gファルコンと合体したダブルエックスも収納形態の姿で左舷カタパルトに乗せられた。

「よし、Gファルコンからの制御が有効になった。進君、心の準備は

？」

「もちろん終わっています」

計器類を確認し終えた進が力強く答える。シミュレーターでは何
度も座った席だが、実戦ともなるとやはり感覚が違う。

アルストロメリアとは桁違いのパワーを、進は操縦桿越しに感じ
取って身震いする。これが、地球圏最強の機動兵器の鼓動か。

「古代、しっかりやれよ！ 兄さんの敵討ちだ！」

通信で大介が進を鼓舞してくる。本当にありがたい親友だ。そう
言われてはますます気合いが入るといふものだ。

「島、しっかりやろうぜ！ 今日から遊星爆弾は地球に落とさせん！」
気合を入れた進に準備完了とみたアキトは管制室にカタパルトの
起動を指示した。

「よし、発進！」

左舷カタパルトに乗せられたGファルコンDXが、カタパルトの勢
いで一気に加速して冥王星めがけて突っ込む。

今回は特別に光学迷彩を可能とする装備が追加され、ステルス性が
高められていた。その一環でボソンジャンプを利用した通信機が新
設された。例の隠蔽措置が施された品で、ボース粒子反応を検出され
にくいようになっていた。

そしてサテライトキャノン撃つために必要な二本のエネルギー
パックが、コンテナユニットの下に装着されている。機体の全長にも
匹敵するほどの巨大なエネルギーパックだ。その大きさと扱うエネ
ルギー量の多さからダブルエックス本体にも劣らない装甲が施され
た、非常に高価な装備でもある。

基地に潜入しての破壊工作も考慮し、Gファルコンのカーゴスペー
スの隙間に装備一式を詰めた大き目のトランクも装備してある。

加速が終了したあとはエンジンも切って、最低限の航法システムを
使って冥王星に飛ぶ予定だ。

ダブルエックスの存在は敵に認知されていてもおかしくはない。
だがまだ一度もサテライトキャノンを使っていない。となれば見た
ことがない新型機がいた、という程度の認識はあってもそれ以上には

至らない。仮に戦場で姿を見かけなかったとしても気にも留めないだろう。

それにヤマトの火力なくして基地の攻略はならないという先入観があるのならなおさらだ。

進はモニターに映る冥王星の姿を睨みつけ、今日こそはあの日の雪辱を晴らし、地球に降り注ぐ遊星爆弾を止めてみせると――兄の仇をとると誓った。

発進したコスモタイガー隊は、半数ずつヤマトの両翼を固めるように編隊飛行を開始した。コスモタイガー隊を従えたヤマトは、慎重かつ大胆に冥王星に向かって悠然と直進する。

その姿はまるで王者の前に現れた挑戦者のようでもあり、逆に奢つた王者に真の王者のなんたるかを見せつけに来た、強者のような風格すら漂わせていた。

その姿を冥王星前線基地のモニターで捉えたシウルツは、迫り来る強敵を前に不敵な笑みを浮かべる。

相手にとって不足なし。今日が地球との戦いに終止符を打つ日だと、戦意を高揚させる。

「やはり動いたか、ヤマト。ガンツ、超大型ミサイルでヤマトを後方から煽れ！」

「はっ！」

指令に従ってガンツはすぐに基地の制御パネルから、事前に冥王星に向かうヤマトを後ろから追い立てられるように配備しておいた超大型ミサイルに攻撃指令を送信する。

これでヤマトを後方から煽り、冥王星領空圏内に、反射衛星砲の射程内に納めなければならない。

さあ、勝負だヤマト！ いまこそ雌雄を決する時だ！

シウルツは口の端を持ち上げて迫るヤマトを睨みつけた。

電算室で警戒任務を務めているルリは、緊張で額に浮かぶ汗を何度も袖で拭いながらレーダーで周囲を監視する。敵の発見が早ければ早いほどヤマトが優位に立てる。念のためにプローブも三基ほど発射しているが、まだ目立った動きは見つけられない。

瞬きもがまんしてじつとレーダーに目を凝らしていると、ヤマトの後方に放った探査プローブがなにかの影を捉える。距離一〇キロ、高速でヤマトに接近してきている。これは！

「こちら電算室！ ヤマト後方一〇キロ地点に超大型ミサイルを複数発見！ 数は二〇。どうやらステルス塗装を施していたようです。光の反射率が極めて低く、光学観測ならびに長距離用のコスモレーダーでは探知が遅れました」

ルリの報告に第一艦橋に緊張が走る。最初からなかなか激しい歓迎だと、ユリカは口元に笑みを浮かべた。

さあ、戦闘開始だ。

高ぶりきった戦意も露にユリカは戦闘指揮を執る。全力で迎え撃ってこい、こちらも全力で叩き潰してやる。

「第三主砲、第二副砲は大型ミサイルの迎撃を開始！ 艦尾ミサイル発射管開け！ 発射したあとはすぐに再装填して追撃に備えて！」
戦闘指揮席から指示を受けて、即座に第三主砲・第二副砲と艦尾魚雷発射制御室がすばやく迎撃態勢を整える。

第三主砲が重々しく、第二副砲が軽やかに回転して後方から迫り来る大型ミサイルに照準を合わせる。

鼓型で全長が一〇〇〇メートルにも達する巨大なミサイルだ。直撃したらいかにヤマトでも耐えきれぬものではないだろう。

第三主砲と第二副砲から送られてくるデータは、主砲が目標を捉え、発射準備を終えたことを知らせる。

「てえー！」

ユリカの号令で第三主砲と第二副砲が火を噴いた。各砲時間差で

発射された六本の重力衝撃波は、狙い変わらず大型ミサイルに命中する。

しかし一射では破壊できなかった。続けてもう二射撃ち込んで一発迎撃に成功。大都市をも一撃で吹き飛ばしてしまいそうな特大の爆発が生まれる。あの規模の爆発に巻き込まれたら大損害確定だ。懐に入られる前に迎撃しなければ！

すぐに次の目標に向けて砲撃を行う。だが手数が足りない。徐々にヤマトとミサイルの距離が詰まってくる。

しかし距離が縮まれば艦尾ミサイルの有効射程に入る。それで手数は足りるはずだ。いざとなれば煙突ミサイルも足せるだろう。

「艦長、増速しますか？」

「まだ駄目。敵の狙いは冥王星にヤマトを追い込むこと。まだダブルエックスが予定の地点に全然届いていないから、ギリギリまで粘るよ。このまま第一戦速を維持、迎撃を続けます。各砲攻撃の手を緩めないで！」

ユリカは大介の提案を却下して粘ることを決める。早々に敵の術中に嵌ってやる必要はない。

ギリギリまで粘ってダブルエックスが冥王星の上空に侵入するまでの時間を稼がないと、作戦はご破綻だ。

「艦尾ミサイル、全門発射！」

ヤマト艦尾喫水部分にある六門の六一センチ魚雷およびミサイル発射管。そのすべてが開いて六発の対艦ミサイルが発射された。

艦砲では狙いにくい、甲板よりも低い位置にある大型ミサイルに向けて、ヤマトの対艦ミサイルが煙の尾を引いて襲い掛かる。

主砲の直撃に三回も耐えた大型ミサイルだけに、対艦ミサイルが六発命中しても破壊できない。その結果を知る前に速やかに再装填した艦尾ミサイル発射管から、再度六発の対艦ミサイルが放たれた。

命中、ようやく超大型ミサイルの撃墜に成功する。

そのをを喜ぶよりも先にハリの鋭い声が艦橋に響いた。

「後方よりミサイルの残骸が接近中！ ヤマトへの直撃コースにある残骸を確認！」

ハリの報告にユリカは即座に命令を下す。

「ピンポイントミサイル発射用意！ 諸元データの入力はこつちでやります！」

命令に従ってヤマト後部マストの根元に装備された二基の多目的ランチャーにが後方に向けられる。

一基につき四つあるハッチの内二つが跳ね上がって、中に収められた中型ミサイルが顔を覗かせる。発射筒の中に十字に仕切られ四つ収まっている。

発射。

計一六発のミサイルが放たれて向かってくる破片の内、脅威度の高いものに命中、破壊。残った破片が向かってくるが、この程度のサイズなら問題なく弾ける。

「フィールド艦尾に集中展開！ 衝撃に備えて！」

ヤマトの艦尾方向に円錐状に集中展開されたフィールドが、ミサイルの破片を食い止め、弾き返す。

質量兵器に対しては強固とは言い難いデイストーションフィールドだが、持ち前の高出力とフィールドの傾斜で凌ぎきる。

——成功。ヤマトは被害を受けることなく二基の超大型ミサイルを迎撃することに成功した。

この調子ですべて撃ち落さんと、戦闘班の士気もぐんぐん上がっていった。

第七話 ヤマト沈没！ 悲願の要塞攻略作戦！！ B パート

一方、ヤマト周囲を固めるコスモタイガー隊にも破片が襲い掛かる。しかし機動力に富んだ艦載機たちはその破片を易々と回避する。もちろん編隊を維持したままだ。

万が一にも破片が命中しようものなら一撃で終了してしまう小型機動兵器ではあったが、そのぶん小回りが利いて運動性に富んでいる。ヤマトからのデータリンクで遅滞なく届けられた位置情報を参照して、危なげない動きで破片を次から次へと回避していく。

伊達に今日という日まで生き残りヤマトのクルーとして選抜されたわけではない。ベテラン揃いの彼らにとって、この程度の芸当は朝飯前であったのだ。

第三主砲と第二副砲は休む間もなく砲撃を続け、次々とミサイルを沈めていく。

艦尾ミサイルによるミサイルの迎撃と、ピンポイントミサイルでの防御を使い分けてヤマトへの損害を抑えた。

超大型ミサイルの猛攻を全力で凌ぐ。もう少しですべて撃墜というとき、航法補佐席のハリが叫んだ。

「重力振、ヤマト周囲に多数！ 包囲されます！」

ハリの報告と同時に、小ワープでヤマトの周囲にガミラスの駆逐艦隊が出現、包囲された。

総数一二〇隻にも及ぶ艦隊だ。その数にレーダーを睨んでいたハリはもちろん、電算室でルリ達オペレーターも声もない悲鳴を上げる。

初手からこの数とは……敵は本気で、恥も外聞もなく全力でヤマトを沈めつもりだ。

驚くクルーの中では唯一冷静さを保っていたユリカは、すぐにその意図が波動砲の封殺であることを看破する。

予想どおりといえばそのとおりだが、やはり類似した装備であるグ

ラビティブラストや相転移砲に対応しただけのことはある。すぐに運用上の欠点に気付いたか。

さすがにこれだけの数が来るとは予想していなかったが、だからといって引けはしない。

祖国の運命を背負っているのはこちらとて同じこと。押しとおるのみ！

「全砲門開け！ 主砲とミサイルは距離がある敵を、副砲は近くの敵を優先！ パルスブラストは対空防御に集中！ 各砲ターゲットの選定はこちらで行います！」

ユリカが各砲室に向けて指示を飛ばす。

それまで沈黙していたヤマトの第一主砲と第二主砲、第一副砲が、艦橋の両脇を固めるように装備された連装から四連装までの一二七センチ対空重力波砲——通称パルスブラスト砲が、その下側に設置された両舷八連装六一センチミサイル発射管が、艦橋後方にある八連装六一センチ上方迎撃ミサイル——通称煙突ミサイルが、艦首喫水付近の六門の六一センチ魚雷およびミサイル発射管が、それぞれ起動する。

「コスモタイガー隊はヤマトの死角の敵に向けて攻撃開始！……全砲門、迎撃開始！」

ユリカの号令でヤマトの全兵装が一斉に放たれる。

ほぼ同時に、ヤマトを取り囲むコスモタイガー隊が各々に定めた獲物に食い付いていく。

そして、負けじとガミラス駆逐艦もヤマトに向かって主砲とミサイルを次から次へと叩き込んできた。

「増速、第二戦速！ 進路三―三―七、降下角七度で水平降下、右に八度ローリング！」

命令を復唱しながら操縦桿を捻りスロットルレバーを押し、ヤマトの艦体を動かしていく。

装甲表面を覆うディストーションフィールドに敵艦の重力波が命中して発光、迎撃を免れたミサイルが命中して爆炎を上げる。しかしヤマトが目立ったダメージはない。

強固で避弾経始を意識した装甲と表面に施された防御コート、その表面に沿うようにガミラス艦の推定八倍出力で展開されるデイストーションフィールドの威力はすさまじく、数十発もの被弾を凌ぎきり致命的なダメージを受け流していたのだ。まさに難攻不落の要塞と形容するに相応しい威容をもって、ガミラス艦隊を威圧する。

これだけの数の攻撃を苦もなく突破したヤマトの無事な姿にガミラス艦隊が一瞬怯んだのを肌と感じた。

（攻撃が一時的に止まった。ヤマトの実力に怯んだみたいね。でも、まだまだこれからだよガミラス。ヤマトの実力はこんなものじゃないから！）

超大型ミサイルの処理を終えたヤマトの猛攻は一層激しくなった。時に身を振って敵艦を主砲の射界に捉え、攻撃を受け流して、ヤマトは一步も引かぬ戦いを続ける。

主砲も副砲も敵の駆逐艦を一撃で葬り去る威力を見せつけた。特に副砲は主砲を上回る旋回速度と連射速度で接近してきた敵艦に追従して葬る。配置上砲撃の妨げになってしまふフィンやアンテナマストは、引き込まれたり根元から回転して射線を塞がないように小刻みに動いていた。

飛び交うミサイルは互いに迎撃し合うため決定打にはなり難いが、ひとたび命中すれば確実に損傷を与え、撃沈を免れても一度姿勢が崩れれば、主砲や副砲が射貫く。

連続発射のできないミサイルに変わって主砲は四秒に一発、副砲は二秒に一発のペースで次々と火を噴く

対空砲であるパルスプラスト砲は、隣り合う砲身から交互にパルス状に青白く発光して見える重力波を吐き出しつつ旋回、迫り来るミサイルを撃ち落とし、時には敵艦の横っ腹に片舷三八門の集中砲火を浴びせる。その火力や凄まじく、駆逐艦程度ならそのまま押し切れてしまふほどだ。

主砲や副砲では真似できない高密度の弾幕と合わせ、対空防御と対艦攻撃をシームレスに切り替えての大活躍。射程距離も副砲に迫るほど長く、ミサイルや敵航空戦力の早期撃墜を図るに十分なスペック

を持つ。

六連波動相転移エンジンの大出力を存分に活用し、両用砲（対艦と対空の兼用砲）として使えるように改造された結果だ。

しかしさすがに一二〇もの艦艇を一度に相手にしているだけあって、標的の数の多さに砲身の冷却が追い付かなくなってきた。このままではオーバーヒートしてしまう。発射間隔の調整やローテーションを組んで使用するなど、あの手この手で対処してなんとか持たせる。

いまは火力も手数も落とせない状況なのだ。ヤマトはありつたけのミサイルとエネルギーを駆使して必死の猛攻撃を継続した。

このかつて経験したことのない大接戦にヤマトクルーたちはまったく余裕がなくなっていた。

電算室のルリたちは敵艦の位置、エネルギー反応、射撃レーダーを照射した艦の割り出し、ミサイルの目と耳を誤魔化す電子妨害にと大忙しだった。

ルリ達オペレーターは縁の下の力持ち。彼女らが解析したデータがなくては各部門のプロフェッショナルたちもその実力を発揮しきれない。逆に電算室との連携さえうまくいけばヤマトは以前のそれを凌ぐ戦闘力を発揮できる。

そう確信できるほどルリを頂点としたオペレーターたちのデータ捌きは神懸かっていた。

その彼女らが解析したデータを受け取ったハリが、ゴートが、ユリカが、それを参照してリアルタイムで状況を判断していく。

ハリは敵の行動に応じた回避行動データを作成しては操舵席に送り付け、大介のサポートに徹する。

ゴートは敵の正確な位置データと敵の種類に合わせて最適な武装を選択して攻撃指示を出す。さらにミサイルの諸元データの入力や各武装のコンディション管理、さらにはフィールド担当班と連携してフィールド強度の維持と出力分配を行う。

ユリカは敵艦隊の行動データなどを読み取って脅威度の高い敵に優先して攻撃するように指揮すると同時に、コスモタイガー隊との連

絡を取り合ってヤマトと密に連携できるように心掛け、コスモタイガー隊が弱らせた敵へのトドメや、優先攻撃目標の指示、損耗具合に応じた交代指示などを出し続ける。

艦内管理席の真田は被弾個所ごとに必要なダメージコントロールの指示を次々と飛ばした。部下たちを手際良く分担させ、ヤマトの機能を落とさないよう、戦闘班にも迫る大活躍であった。

通信席のエリナもコスモタイガー隊や艦内通話の回線を次々と操作、指示漏れが発生しないようにする。彼女の手際よさに助けられ、ヤマトとコスモタイガー隊の連携が破綻することも、艦内の状況報告を漏らすこともなかった。

機関制御席のラピスも主砲や副砲、パルスブラストにディスプレイオンフィールドと、凄まじい勢いで消費されていくエネルギー管理を徹底し、ヤマトが息切れしないように細心の注意を払ってエネルギー分配を制御していた。

エンジンの出力を落とさないように機関室に檄を飛ばすことも忘れない。全力戦闘中のヤマトのエネルギー消耗は予想以上に激しく、推力に分配する出力が落ち込み機動力が鈍りつつあった。

技術的背伸びを承知で改造された六連波動相転移エンジンは、予想を超える激戦で不安定になりつつある。

機関室もエンジンのコンディションを保つため、コンピューター制御やエンジンの直接管理と八方手を尽くしていた。

副長席に座るジュンはユリカが戦闘指揮で手一杯になっているため、代わりに各部署の情報を統括してヤマトの状況を正確に把握し、敵部隊の動きを解析して全体の戦況把握のために尽力する。

合わせてヤマトの進路の修正案をいくつも提示する。それになんとかユリカが目を通しては理想に近いものを採用してはハリと大介に送り、ヤマトの進路を細かく修正していく。

クルー全員がとにかく必死の顔で、額に汗を浮かべながら刻一刻と変化していく状況に対応し、確実にガミラスの艦隊を駆逐していく。

熾烈極まる激戦。

以前よりも強化されたヤマトであつても少しづつ傷ついていった。

たび重なる被弾で弱ったフィールドを抜けた重力波が、ミサイルがヤマトの装甲に傷を刻んでいく。それでも反射材混入の装甲と表面コートの頑強さ、そして装甲の空間に張り巡らされたディスプレイコンブロックの不可視の隔壁で、内部へ貫通されることだけは防いでいる。

だが衝撃までは完全に防ぎきれず内部構造にダメージが生じる。被弾のたびに艦体が軋む音が耳に入り、クルーたちの不安を煽った。

ヤマトの威力は凄まじいが、回避行動や被弾の衝撃で主砲も副砲も照準がずれて命中を逃すことも多く、すでに五〇隻あまりを撃沈せしめたとはいえ、危機を脱したとは言い切れない。

第一艦橋にも各所から被害報告が引つ切りなしに届くようになり、数を減らすガミラス艦隊とヤマトの戦いは一進一退の様相を見せていているのであった。

「あの時の借りを返しに来たぜ！ ガミラス！」

コックピットで吠えるリョーコは、愛機を巧みに操って狙いを定めた敵艦に接近する。ヒカルとイズミもそれに続く。

「相変わらず熱いねえ〜リョーコは。でも、私も漫画家廃業の危機に追い込まれて、怒ってるんだからね！」

「山の頂上、それは、いっただき〜」

全機右腕のクローを展開し、左手にはハイパーバズーカを携え、機動力を増した愛機を駆ってガミラス駆逐艦に接近する。

まともに撃ち合っても防御を抜けることは困難なので、三人娘は比較的防御が薄く、破壊すれば指揮系統を混乱できるブリッジに狙いを定めて急接近。散発的な対空砲火を潜り抜けて装甲表面を覆うフィールドに右手のクローを突き立てた。

クローのフィールド中和機能をフル稼働。急激にエネルギーを消耗しながらも周辺のフィールドを押し分けて、わずかな穴を開けていく。

そこに至近距離からハイパーバズーカの弾頭を撃ち込んでさらにフィールドを押し広げ、Gファルコンの拡散グラビティブラスト（収

束モード）を撃ち込んでブリッジを破壊する。

ブリッジを破壊されたガミラス艦は制御を失って蛇行し始める。そのまま味方の射線に入り込んで、ヤマトを襲うはずだった重力波を代わりに受け止め、撃沈する。

「よっしやあー！ この調子でいくぜ！ ヒカル、イズミ！」

「いいよ、いいよおー！ たまりにたまった鬱憤をぶつけちやんだからあー」

「同感。いままでのツケ、たつぷりと払って貰うよ！」

気合たつぷりの三人娘は新しい獲物へと襲い掛かる。ハイパーバズーカの予備弾倉もまだいくつか残されている。

Gフアルコンのカーゴスペースには予備弾倉のほかにも大型レールカノンも懸架され、補給に戻らなくても火力を維持できるように備えていた。

根本的に火力不足を解決できていないアルストロメリアが火力を維持するには多数の武器を懸架してひたすら手数を増やすしかないのだ。

「よっしやっ！ 頂きだぜ！！」

威勢のいい掛け声と共に、サブロウタのアルストロメリアが敵艦に肉薄する。重爆装備で出撃していたサブロウタだったが、機動性の低下を感じさせない巧みな操縦でガミラス艦の機関部に大型爆弾槽を叩きつける。

二基の大型爆弾槽、計五三六発の高性能爆弾の破壊力の前にガミラス艦も耐え切れなかった。フィールドを貫通した爆発によって装甲に大穴を開けられ、損傷して暴走した機関部が弾け飛んで爆発炎上、そのまま味方艦にあわや衝突しかける。

「その隙——逃さん！！」

月臣は叫びながら愛機を最大戦速で突っ込ませる。目標は大破した味方艦との衝突を避けるために横っ腹を見せた艦。

両腕部のクローを展開して機関部周辺のフィールドに突き立て、中和を図る。単機では出力がまったく足りない。しかしすぐにサブロウタの機体がフォローに入れば状況は変わってくる。

二機分の出力で強引に弱らせたフィールドを最大出力の拡散グラビティブラストで強引に打ち抜き、辛うじて機関部にダメージを与えることに成功した。

「くっ、ダブルエックスがいないと火力が足りんな……っ」

さすがの月臣も弱音が口を吐く。

短距離ボソソンプを駆使しながら的確に弱点を攻撃しているはずなのに、アルストロメリアの火力では中々致命傷を与えられない。

相轉移エンジン二基で動くGファルコンDXは、とにかく火力がアルストロメリアとは段違いに上だ。サテライトキャノンを引きにしてもその絶大な戦闘能力はこういった戦場にこそ欲しいものなのだ、より適した任務に導入されているのだから文句は言えない。

「たしかにキツイっすね。でも、負けてられませんよ少佐！ この戦いの果てに人類の未来が掛かってるんです！ くうっ！ 卒業したはずの熱血が疼くぜえ！」

サブロウタは勢いを緩めずに敵艦に食い付く。右手に担いだハイパーバズーカと両肩の連射式カノンとマイクロミサイル、Gファルコンの火砲と持てる火力のすべてを出し惜しみせずにつけていく。

まさに動く弾薬庫の様相を呈していた。

「……たしかにな。だがこんな熱血なら悪くない！ これこそが本当の木連魂だ！」

月臣も弱気を振り切るようにさらに勢いを増して攻撃に転ずる。

短距離ボソソンプを駆使してかく乱しつつ、腕のクローを突き立ててフィールドを弱らせ、拡散グラビティブラストや大型レールカノンをしこたま撃ち込んでダメージを与える。

コスモタイガー隊は当初の指示通り、ヤマトの砲撃が届き難い位置にある敵艦を優先して攻撃しているが、その攻撃力からヤマトほど効率的に敵艦を駆除することができていない。

それでも小規模ながら要点を抑えた改修の恩恵で以前よりも決定打が増しているのが救いであり、部隊全体で一〇隻も屠った。重爆装備の機体が何機かまだ爆弾槽を使っていないので、もう二、三隻程度

なら撃沈が望めそうだった。

以前の装備なら五隻程度が限界であっただろうが、いままでの戦闘データを反映した機体と戦術の確立、そして不退転の覚悟で挑む指揮の高度に後押しされて、いままで敗走を重ねてきた地球とは思えない奮戦であった。

一進一退の攻防が続く。双方余裕などない熾烈極まる激戦が、静寂の宇宙に喧騒をもたらしている。

その頃、慣性飛行で冥王星に向かうGファルコンDXもパツシブセンサーでヤマトの状況はおおよそ捉えていた。

「苦戦してるな……。と言うか、戦艦一隻にこんな仰々しい戦力をぶつけてくるなんて……。流石のガミラスも、波動砲は怖いんだな……」
アキトはGファルコンのコックピットの中で唸る。

わずか一年で地球を散々に打ちのめしてきたガミラスだけある。波動砲の存在があれど、単艦のヤマト相手にまったく容赦してくれない。

地球との技術力の差やこれまでの戦績を鑑みれば驕っていても不思議はないと淡い希望を抱いていたのだが、甘かった。

「くそうっ！　これじゃ俺たちが基地を潰す前にヤマトが沈んじまう！」

進はダブルエックスのコックピットで操縦桿を握り締める。元が血気盛んなので、こういう時に冷静さを失い易いのが、進の欠点だろう。

「落ち着くんだ、進君。ヤマトを、ユリカを信じるんだ」
アキトは平静を保った声で進を宥める。

実際はアキトも気にはなっているが、作戦を台無しにするわけにはいかない。ここは、ヤマトのタフネスとユリカの采配にすべてを託すしかない。

最初からヤマトとユリカを信じて挑んだ航海だ。いまは自分が成すべきことを成せばいい。

「ヤマト、冥王星に依然接近中！ 艦隊の半数以上が撃破されました！」

司令室のオペレーターが驚愕の声を上げる。

まさか一二〇隻にも及ぶ艦隊と真つ向からやり合えるとは、非常識にもほどがある。

艦も凄いが、こちらの艦隊行動を読み切り最小限の被害で最大の効果を上げる指揮官の采配も見事だと、シユルツは敵ながら天晴れと内心称賛した。

「攻撃の手を緩めるな！ 超大型ミサイルを追加で撃ち込め！ ありったけだ！」

シユルツの指示を受け、副官のガンツはすぐに自らオペレートして基地に用意されている超大型ミサイルをありったけ発射する。

先発してヤマトに送ったミサイルと合わせて計四〇発。

——たった一隻でここまで戦える。正真正銘の化け物相手に出し惜しみなんてしてられない。

「ワシは反射衛星砲の管制室に行く。ガンツ、ここは任せたぞ」

そう言うとシユルツはエレベーターに乗り込み、基地の下層にある反射衛星砲の管制室に向かった。

「リーダーに感！ 冥王星から超大型ミサイルが接近！ 数二〇！」

ルリの悲鳴に近い報告にユリカはギリツと歯噛みする。まだそれだけの余力があるか。一筋縄ではいかないと覚悟はしていたが、大した戦力だ。

おもしろい、我慢比べで早々に負けるつもりはない。こちらとこの一年、毎日のように死を覚悟しながら抗い続けてきたのだ。

ユリカの闘志がさらに燃え上がった。

「進路変更、面舵三〇、ピッチ角プラス五、左に一〇度傾斜！」

ユリカは大介に操艦の指示を出すと、続けざまに艦砲制御室に怒鳴りつけるようにして指示する。

「火力を左舷に集中、目標超大型ミサイル！ 左舷ミサイル発射管は全門通常弾頭発射、発射後バリア弾頭に切り替えて防御幕を形成！」
ヤマトはその巨体を振るようにして回頭。超大型ミサイル迎撃の構えを取る。

巻き込まれることを恐れてか、ガミラス艦隊はヤマトから距離を取ろうと動き出した。そのおかげで攻撃の手がわずかに緩んだ。

「大介君、信濃で出撃してコスモタイガー隊と連携、ガミラス艦隊に当たって！ 操舵はハーリー君が変わって！ ゴートさんも同乗して攻撃を担当してあげてください！」

「了解！」

三人はすぐに指示に従って行動開始、持ち場を移動する。

ハリの体格では操舵席のコンソールは少々持て余し気味だが、シートの設定を弄って調整して、無理やり合わせた。

ユリカは戦闘指揮で手一杯で操舵を変われないし、ジューンはバックアップにてんてこ舞いで余裕がないのだから、ハりに頑張ってもらおう。

ここが温存しておいた信濃の使いどころだ。

信濃とコスモタイガー隊との連携は新生ヤマトの戦術の要だが、信濃は性能上の問題から正面から敵艦隊と相対できない。

二四発の波動エネルギー弾道弾以外に武装を持たず、生産性の悪さから補充が困難で継戦能力が極端に低く、小型ゆえに耐久力でヤマトに劣り、波動エンジン未搭載だから最高速と防御力で劣る。このような性能ではむやみに出しても戦果を挙げられないのだ。

信濃の強みは小型艇特有の運動性能の高さにあって、それを活かさなければなんの役にも立たない。

今回のように敵艦隊が隙を見せ、かつヤマトが別に注力しなければならぬ状況こそ、信濃が活きる場面である。

ミサイルの迎撃態勢を整えたヤマトの主砲と副砲が同時に斉射され、ひとつ、二つと超大型ミサイルを破壊していく。

続け様に左舷八連装ミサイル発射管から対艦ミサイルが放たれ、直後にバリア弾頭を装備したミサイルが速やかに再装填される。

少しでも破片を撃ち落とすためにとパルスプラスチック砲も大量の弾を吐き出して懸命の弾幕を張った。

ヤマトの火器もいくらか被弾して機能障害を発生しているため、開戦直後に比べると攻撃の密度が薄くなっていた。

それでもヤマトの攻勢はまったく緩まない。すべては帰りを待つ人々のため。ヤマトに失敗は——敗北は許されないのだ。

黙々と迎撃を続けるヤマトの艦底部から信濃が発進、ミサイルの迎撃に全力を注いでいる無防備なヤマトを攻撃しようと態勢を整えようとしているガミラス艦隊に猛然と突っ込んだ。

小柄な体格が生み出す小回りを活かし、回避行動を取りながら二四発の波動エネルギー弾道弾を次々と放つ。

大介の巧みな操縦技術と、冷静沈着なゴートの正確な照準と完璧な発射タイミングの組み合わせは絶妙で、迎撃の隙を極力与えず、そして敵の迎撃を巧みに掻い潜って肉薄、確実な攻撃を加えていく。

波動エネルギー弾道弾の威力は折り紙付きで、一発で容易くガミラス艦を粉碎し、余波だけでも損傷を与えることに成功している。

信濃の攻撃でさらに一九隻のガミラス艦が轟沈し、弱った艦を最後の力を振り絞ったコスモタイガー隊が喰っていく。——消耗が激しいコスモタイガー隊には、もう満足に対艦攻撃できるだけの弾薬は残されていない。これが真正銘のラストアタックであった。

この攻撃で残存わずかとなったガミラス艦隊は、これ以上の戦闘継続は無理と悟ってか、冥王星へと下がって行く。

ヤマトも危ういところでミサイルの迎撃に成功し、艦体を覆うフィールドを突き抜けた破片の衝突で傷を負ったが、戦闘能力を保つことには成功していた。

弾薬を使い果たして戦闘継続が困難になった信濃とコスモタイガー隊が次々とヤマトに帰艦していく。

ヤマトも収納が完了するまでは迂闊に動けず、不本意ながら無防備な姿を晒すことになる。

……それは冥王星前線基地が待ち望んだ、決定的な隙であった。

反射衛星砲の管制室に到達したシユルツは、モニターに映るヤマトの姿に不敵な笑みを浮かべる。

敵ながら見事な戦いぶりだ。これほどの戦いは、軍歴の長いシユルツとしてそう経験できるものではない。

——そしていまからその強敵を討ち取れるのだ、頭脳で地球人に勝るガミラスの叡智の結晶によって。

「ヤマトはいま、こちらに脇腹を見せています」

部下の報告に笑みをますます深める。

「よおし……反射衛星砲発射用意」

静かに命令を下す。雌雄を決する時が来たのだ。

「反射衛星砲、制御装置準備完了！」

「エネルギー充填、一五〇パーセント」

冥王星基地が誇る反射衛星砲が目覚めていく。

海底に走ったエネルギーチューブの中を膨大なエネルギーが駆け巡り、反射衛星砲に集中する。

驚異の艦ヤマトを屠るため、目一杯のエネルギーが充填されていく。通常時の一・五倍ものエネルギーを投入したのだ、その威力はわが軍の指揮戦艦級すら一撃で仕留める威力。

これならヤマトがどれほど強力であろうと、確実に息の根を止められるはずだ。

「ヤマト、おまえは素晴らしい強敵だ。その実力に敬意を表して、わが冥王星前線基地の切り札をもって仕留めさせてもらう」

シユルツは獲物が刻一刻と罠に近づくのを待ちかまえながら、祖国のために決死の覚悟で挑んで来たヤマトに最大限の敬意を表した。

願わくば、敵としてではなく戦友として会いたかったと、柄にもなく考える。

きつと彼らとは、美味しい酒が交わせただろう。

……いや、妙な感傷はよそう。この強敵を沈めぬ限り、ガミラスに安寧はないのだ。

そう、地球とガミラスは相容れない、相容れるわけがないのだ。残念なことだ。

「発射用意！」

シウルツは発射装置を右手に構えてヤマトに照準が合う瞬間を待つ。

モニター上のヤマトは着々と反射衛星砲の射程に近づいてくる。あと少し……。

「反射衛星砲、発射！」

シウルツは発射ボタンを押し込んだ。

その瞬間に、チューリップを彷彿とさせる砲身から強力なエネルギービームが撃ち出される。

砲を保護している透明な保護ドームはこのエネルギービームを透過するため、砲を保護したまま発射できる。

この仕様が原因で重力波砲を採用できなかったのだが、基地施設と直結した大出力砲の威力は、決して重力波砲に引け劣らない。

海中を突き進むビームは、凍り付いた海面をぶち破って天に向かって飛び去って行く。砕かれた氷はすぐに凍り付いて、僅かな痕跡を残すのみとなる。

そのまま宇宙へと飛び出したビームは、真つすぐに無防備なヤマトの横っ腹めがけて突き進んだ。

その頃ヤマトはようやく信濃とコスモタイガー隊を格納し、体勢を立て直そうとしていた。

ガミラスの艦隊が離れたわずかな隙に、ユリカはポケットに忍ばせておいたタブレットケースを振って、錠剤を二つほど口の中に放り込む。

薬の吸収効率のよい舌下で舐めて、コンディションが悪化しないよ

うに気を配る。つい先日の反省が活きていた。

戦闘指揮で熱くなり過ぎた。頭がズキズキと痛み始めてきたし、胸も苦しくて動悸が収まらない。指先がかすかに痙攣をするようになった。

このままでは指揮を執れなくなる。承知していたこととはいえ、弱り切った体に憤りを感じずにはいられない。

「艦長、大丈夫ですか？」

隣のハリが気遣わし気に尋ねてくるが、ユリカは笑顔と右手のVサインを作つて応える。

正直余裕はない。だが引けない。——この戦いだけは絶対に、散つて逝つた仲間たちのためにも。

「左舷方向！ 強力なエネルギーが接近中っ！」

悲鳴染みたるルリの報告にユリカは即座に反応した。

「フィールド左舷に集中展開！ 右ロール二〇度！」

命令が下るとフィールド制御担当は、即座にヤマトの左舷に集中展開して被弾に備える。ハリもすぐに反応してヤマトを右にロールさせる。

対応がギリギリで間に合つたと思つた直後、強烈な一撃がヤマトの横っ腹に突き刺さつた。

ヤマトの艦体が激しく揺れる。集中展開したフィールドの妨害に遭い、曲面装甲に一部が受け流されながらもフィールドを抜けて複合装甲と、装甲下のデイストーションブロック数枚をも貫通し、内部構造を露出する大打撃を受けてしまった。

幸い装甲貫通までで威力を失つたが、もしもフィールドの集中展開が遅れていたら、艦をロールして装甲面に垂直に命中させないようにならなかつたら、機関部にまで達してヤマトは終わっていたかもしれない。

ヤマトは左舷錨マークの前付近、左舷搭乗口部分に直径七メートルにも達する大穴を開けたまま、冥王星に向かって墜落していった。

「左舷ミサイル発射管付近に損傷。装甲をすべて貫通されました！」

真田の報告に第一艦橋の全員が顔を青くする。

強力な要塞砲の存在は考慮していたが、まさかヤマトの防御をいとも簡単に突破するほどとは。

「艦長、推進器の出力制御装置に損害発生、出力の制御が効きません！」

ラピスが機関制御席で悲鳴を上げる。機関部近くまでダメージが及んだため、各ノズルへの出力制御装置を破損してしまったのだ。

「――駄目です！……このままだと冥王星に突っ込んでしまいます！」

ハりは半泣きになりながらも懸命に立て直しを図るが、舵がいうことを聞いてくれない。

出力制御系が破損したので逆噴射にうまく出力が回らない。メイノズルへの供給は停止できたが、これではやがて冥王星に墜落してバラバラになってしまう。

「艦長！ 右上方一五度方向に冥王星の衛星らしき天体があります！」

ルリの報告にユリカが視線を向けると、そこには冥王星の衛星らしい小天体を認めた。

地球からの観測データには無い非常に小さな、最も長い所で二〇キロ程度の楕円状の岩石。

冥王星にかなり近い軌道を回っているようだ。ロシユ限界のわずか手前といったところだろうか。その不自然な軌道からするに、彗星かなにかが一時的に冥王星の軌道を回っているだけで、衛星ではないのだろう。

だが、使える。

「ロケットアンカーを使います！ ハーリー君は左舷スラスター全力噴射の準備をして！」

「は、はいっ！」

ユリカは戦闘指揮席からの制御でロケットアンカーの目標を入力、衛星に最接近したタイミングで発射した。

洋上艦を模したヤマトはその姿に偽らない主錨を艦首の左右に備えている。海上停泊時に投錨する本来の使い方はもちろん、このような状況下で天体に撃ち込むことで艦を固定する目的でも使用可能だ。

各部を變形させて鋭い銛となった右舷ロケットアンカーは、ロケット推進で岩石に向かって突き進み、その表面に深々と突き刺さる。

同時にヤマトはアンカーを起点に振り子のようには振り回された。遠心力が生み出す激しい横Gに、艦内の全員が近くのものにしがみついて耐える。

そのままあわや衛星に激突しようとしたところで、機関士たちの懸命な努力で最大噴射を果たした左舷スラストスターが寸でのところでヤマトを停止させる。

噴射の圧力で衛星表面に生じた粉塵が、ヤマトがどれほど接近していたのかを如実に表していた。

「はあ〜……もう駄目かと思った」

とハリが弱音を漏らし、

「機関室のみなさん、お疲れさまでした」

ラピスが青い顔で部下に感謝の意を表す。感謝の言葉に汗と油で汚れた機関士たちがニツと笑って親指を立てて応えた。

「あ、危うく交通事故だったね。ペチャンコにならなくてよかったあ〜」

疲労でシリアスモードが解除されたユリカがボケると、「シヤレにならない例えは止めて！」と艦橋のクルーから総突っ込みを受けて「ふみい〜……」とへこむ。

そこでようやく信濃から戻ってきた大介とゴートが、それぞれの席に戻っていく。

「変わろうハリー。よく頑張ったな」

「ぬうう、これが冥王星基地の切り札か。恐ろしい威力だ……!」

砲術補佐席で武装の稼働状況を調べながらゴートが呻く。

駆逐艦とはいえ、それまで容易く地球艦を破壊してきたガミラスの砲撃に対して圧倒的な防御力を示したこのヤマトが、これまでのダメージがあるにせよ、たった一発でここまで追い込まれるとは。

やはりガミラスは油断ならない敵だと、全員が気持ちを引き締める。

「艦長、補修作業を指揮します」

真田がユリカに告げた。この損傷はすぐにでも応急処置しないと、艦の機能への影響はもちろん、防御性能にも影響が大きいと暗に訴えた。

「わかった。でも気を付けて、必ず追撃が来る。船外作業は最小限に留めて内側の応急処置を優先して。いま迂闊に外に出ると、犠牲者を増やしかねないから」

ユリカの言葉に真田も応じて第一艦橋を飛び出していく。

そのまま真田は被弾個所周辺の隔壁の閉鎖を指示しつつ、いまの攻撃でダメージを負ったフィールド発生装置の応急処置を始めた。

幸いにも機能停止には至っていないが、それまでの被弾と合わせて相当な負荷が溜まっている。

艦の各所に分散されたフィールド発振装置のコイルやヒューズなど、フェイルセーフ用の交換部品を部下たちと協力して手早く交換していく。

ヤマトの技術班の大部分は、ヤマトの再建作業に携わった技術者が多い。勝手知ったるなんとやら。驚異的なスピードでヤマトの機能を回復させていった。

地味にここで大活躍するのがナデシコが誇る名メカニック・ウリバタケ・セイヤその人で、出航からずっと艦内を駆けずり回って色々探求していたことで蓄えた知識と持ち前の技術力を思う存分披露して、真田でもすぐには手が付けられないような、破損の大きな部位を瞬く間に応急処置していく。

頭脳では真田が勝るが、技術ではウリバタケが勝る。

似た者同士で互いに多くを語らずとも、この手の作業で相手がなにを求めているのかがわかるので、最小のコミュニケーションで最大の効果を挙げる、地味ながらも頼もしい名コンビが生まれていたのである。

——なお、一部からは「あくあ。出会っちゃまったよ」と嘆きの声が聞こえたとかいう噂が流れたらしいが、真偽のほどは定かではない。

「ヤマト、冥王星の反対側に隠れたからといって、安全ではないぞ」
反射衛星砲の、しかもオーバーチャージの一撃を耐え抜いたばかりか致命傷すら与えられなかったことに内心計り知れない衝撃を受けているシユルツであったが、動揺を表に出さず次の指示を出す。

強力な反射衛星砲の一撃からヤマトを保護したのは、同じ反射衛星砲から生まれた保護メツキ技術であることを、幸か不幸かシユルツが知ることはなかった。

「次弾装填急げ。反射衛星、反射板オープン。目標、ヤマト！」

シユルツの指示に従って部下達がヤマトを狙うために必要な反射衛星を選択する。

「反射衛星二号、一〇号、一一号、六号、用意。微動修正開始」

司令室の命令を受諾した軌道上の反射板搭載衛星——通称反射衛星の稼働状態になった。

花卉とも表現出来る四枚の反射板を展開し、角度を微調整してヤマトへの射線を確認していく。

基地の所在が判明し難いよう、一直線ではなく数回に屈曲させることも忘れない。万が一にも所在が露見して、ヤマトの直接攻撃に晒されることだけは避けなければならないからだ。

「反射衛星、準備完了！」

部下の報告にシユルツは笑みを深くする。

「さあヤマト、冥王星基地が誇る反射衛星砲の真の威力、とくと味わうがいい——発射！」

シユルツが発射ボタンを押し込むと、反射衛星砲から放たれたビームが再び天を貫き、軌道上の反射衛星に命中してその進路を屈曲させていく。反射衛星は起動と同時に反射フィールドを展開し、それを利用して屈曲させるのだ。

数回の屈曲を経たビームが、ヤマト目掛けて突き進む。状況を飲み込めず無防備なままのヤマト目掛けて。

戦闘指揮席でユリカが呻く。さすがにこの遠心力はなかなか辛かった。安全ベルトこそ装着していたが、腹部に食い込んだベルトが痛いし、視界が揺れる。大激戦で消耗激しいとはいえ、本当に弱った体が恨めしい。

自分がすっかりしなければ、艦長がぶれたらヤマトは駄目になってしまうというのに。

「艦長、これを飲んでください。栄養ドリンクです」

と、いつの間にか第一艦橋に上がっていた雪が栄養ドリンクのビンを差し出しているではないか。キャップは開封されていて、すぐに口を付けられるように配慮されているのがニクイ。ユリカは礼を言つて受け取るとぐいと一気に煽る。

「……ふはあつ！ くうく、五臓六腑に染みわたる〜！」

大袈裟なりアクションを取るユリカに雪が苦笑している。

……でも最近の水といつも栄養食くらいしか口にしていないのだから、こんな栄養ドリンクでも立派な嗜好品なのだ。雪もわかっているのだろうか、表情に少し陰が差した。

「ほかのみんなには？」

「もう配りました。それじゃあ、私も負傷者の手当てに戻りますね」

そう言つて足早に艦橋を立ち去る雪。もちろん空き瓶を全部回収して持ち帰ることも忘れない、プロの鑑だ。

忙しい中第一艦橋の面々、すなわちヤマトの首脳たちを激励するために抜け出してきたのだろう。

——良いお嫁さんになりそうだ、ますます進を任せたいと、ユリカはちらりと考えた。

「……ここで停泊すると、的にならないかしら？」

栄養ドリンクでいくらか気力を回復したエリナがもつともな疑問を口にする。停泊した艦艇など、たしかに的にしかならない。

「……はさつき砲撃予想地点から冥王星を挟んでちょうど反対側ですよ？ 発射地点付近が基地周辺だとするのなら、星の反対側にまでは——」

設置されていないだろう、と大介が暗に心配いらないうと言った直後だった。

「右舷より高エネルギー反応！ 同型の大砲です！」
というルリの無慈悲な報告が第一艦橋に響き渡る。

「フィールド右舷に集中展開！ 右ロール急いで！」

慌てて指示を飛ばすユリカに応えたフィールド制御担当の早業と大介の反射神経により、ヤマトの右舷に命中した反射衛星砲の一撃はまたしても致命傷にならずに済んだ。

しかしそれでも右舷展望室の直下付近に直径八メートルにもなる大穴が空き、内部構造が露出する大損害を被る。この威力、間違いなく同じ兵器だ。

悪いことは重なるもので、被弾の衝撃でロケットアンカーが抜けてしまい、ヤマトは再び冥王星に向かって墜落を始めてしまったのだ。

エンジンの出力制御系がまだ回復していないため、逆噴射は最低限しか使えず、メインノズルの点火もままならない。ヤマトは再び冥王星の地表目掛けて艦首から突っ込んでいった。

「もう！ 大介君が余計なフラグ立てるから！」

「お、俺のせいですか!？」

ユリカのボケに悲鳴に近い声で大介が反応する。

その顔は「理不尽だ！」と強く訴えていたが、コントに付き合う余裕のないほかのクルーは、それぞれの部署の損害確認に加え、衝撃で投げ出されないように体を固定することに全力を注ぐのであった。

「くそっ、減速しきれない……！」

「——っ！ 主翼展開！ タキオンフィールドで少しでも減速掛けて！
ハーリー君、冥王星の海洋の位置を大介君に！ 着水させれば耐えられるかも！」

「は、はいー」

冥王星に墜落を始めたヤマトを見て、司令室に喜びの歓声が上が

る。

あれほど手強かった強敵が、冥王星基地の切り札を前に右往左往している。そして、確実にダメージを与えているのだ。——しかし、本来なら木っ端微塵になっっていなければおかしい攻撃を二発も耐えたという現実からは、微妙に目を逸らしていた。

「ヤマトは赤道付近の海に向かっています」

「よし、もう一息だ。完全に息の根を止めてやる。反射衛星砲発射用意！」

主翼を展開したヤマトは主翼から放たれる空間歪曲場に乗る形でなんとか減速をかけていた。艦内では破損箇所付近の隔壁をすべて閉鎖して浸水に備える。

「島さん、出力制御装置が一部回復しました、逆噴射できます！」

ラピスの報告に応じると大介はすぐに姿勢制御スラスターの噴射制御を行う。

ヤマトの艦首下部スラスターがタキオン粒子の奔流を噴き出す。噴射圧が高まるに従いヤマトの落下速度が低下し、艦首が持ち上がる。だが墜落までは防げそうにない。主翼を畳んで着水の体勢に入る。

減速できたとはいえそれでも相当な速度が出ている。操縦桿を握る大介の手にも力が入り、額に汗が浮かぶ。

眼下には凍り付いた海面がぐんぐん迫ってきていた。

「着水するぞー！ 全員、衝撃に備えろ！！」

着水まであと少しというところで大介が艦内通信機に向かって叫んだ。それから一〇秒もしない内に、凄まじい衝撃と共にヤマトが着水する。

艦内に衝撃音と乗組員の悲鳴が轟く。

ヤマトは氷を砕き、激しい水飛沫を上げながら数キロに渡って海面を滑走し、一度は完全に水中に没してから大きく艦首を跳ね上げて水

面から飛び出し、再び着水してようやくその勢いを失った。

艦内の慣性制御機構をフル稼働してもこの衝撃、慣性制御機構がなかったり破損していたら、乗員は残らずミンチになっていただろう。派手な着水の影響もあって、被弾個所から浸水が続いている。

隔壁で閉鎖されているため広範囲の水没は免れているが、被弾箇所は完全に水没してしまった。

無事着水できたことに喜びも露にする第一艦橋の面々ではあったが、はっとして戦闘指揮席の様子を伺う。

戦闘指揮席のユリカはぐったりとした様子でコンソールに突っ伏していた。

「艦長！ 大丈夫!？」

すぐに通信席から駆け出したエリナがユリカの肩を掴む。

「うう……」

突っ伏したユリカから呻き声が聞こえると全員の顔が青褪める。いまの衝撃で容態が悪化してしまったのではないだろうか。

もしもそうだとしたら、これからの航海はどうなる。無傷で済まないのは承知のうえとはいえ、もう少し自分たちに力があれば。

などと思考が混乱しているとユリカが小さな声で「気持ち、悪い……吐き、そう……」と呻いていた。

「え？」という感じでエリナがユリカを抱き起すと、両手で口を押えて青白くなっているのが確認できた。こころなしか頬が膨らんでいる。

「ちよー！ え、エチケツト袋どこ!？」

エリナが慌てる。こんなところでリバーズされたら堪ったもんじやない。

「えくと、ってその前に各部署は被害状況報告を！」

ジユンが副長としての仕事を果たす。

艦長が指揮できないのだから当然の振る舞いなのだが、想定外の事態に声が上がらず気味でやや頼りなく感じるのが玉に瑕だろうか。

「ユリカ、大丈夫？ エリナ、後ろのトイレ！」

ラピスが浮足立ってエリナを促す。

第一艦橋の後方、左右のエレベーターの内側には艦橋要員用のトイ

レが設置されていた。通常勤務中に催してもすぐに用を足して戻って来れる、欠かすことのできない必須の設備だ。

いまにも吐きそうなユリカはすぐにエリナと手伝わされたゴートに連れられて、艦橋後部のトイレに連れ込まれた。

すぐに「おええつゝ！」と思い切り嘔吐する声が聞こえる。

固形物を食べていないからだろう、先程飲んだドリンク剤と少量の胃液を吐くに留まったが、もの凄くしんどそうだった。

「うう……。ベルトでお腹をぐってされたし、滅茶苦茶揺れたから、耐えられなかったよお。うぷつ……」

青褪めた顔でわざわざ報告する。正直そんな詳細に言わないでほしいと思う。

ひとまず落ち着いたユリカを戦闘指揮席に戻した直後。

「真上から来ます！」

ルリの絶叫が響き渡る。

「え？ 金ダライ？」

相次ぐ不調ですつかり平常モードのユリカに対して、
「んなわけあるかあゝ!!」

全員でノリ突っ込みしながらもフィールドだけは上部に集中展開して備えた。

凄まじい衝撃音と共に第二副砲横、右舷搬入口付近に着弾。

そばにあった連装対空砲ひとつを全壊させながら大穴が空くと、ヤマトはバランスを崩して左に傾き始める。

「ああつ、ヤマトがボケた！……じゃなくて傾斜が止まりません！」

大介が操舵席で必死にバランスを取ろうとするが操縦系にも支障をきたしたのか、いうことを聞いてくれない。

——ユリカのせいでヤマトが本当にボケたのかと一瞬真剣に考えてしまったのは毒された証だろうか。

「島君、なんとかならないの!？」

戦闘指揮席のシートにしがみ付いて傾斜に耐えるエリナに、「駄目です！」と大介が操縦桿とスイッチ類を操作しながら答える。

完全にコントロールを失ってしまっている。

「金ダライなんて落ちてくるものなんですか!？」

パニックに陥ってピントがずれた問いかけをするラピス。

「大昔のコントですよ! 専用のタライを使って——」

こっちもパニックに陥ったのか律儀に答えるハリ。

「お前たち落ち着かんか!」

ゴート叱責するも効果なし。

「ああもう滅茶苦茶だあく!!」

溜まらず絶叫するジュン。

そうこうしている内にヤマトは完全にひっくり返り、艦尾を天に向けてそのままゆっくりと冥王星の海に沈没した。

ヤマト、どうしたのだ？

かつては切り抜けた苦難に屈してしまうのか？

それとも本当にボケを体得したと言うのか!?

しっかりするのだヤマト!

人類絶滅と言われる日まで、

あと三五七日しかないのだ!

第七話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第八話 決死のヤマト! 冥王星基地を攻略せよ!

勝て、地球の明日のために

第八話 決死のヤマト！ 冥王星基地を攻略せよ！ A.パート

ガミラスの新兵器の威力の前に、ヤマトは冥王星の海へと没した。しかしヤマトは死に絶えてなどいなかった。敵の追撃を回避するため死んだふりをしてそのまま海底に没しただけであった。

「水深三〇〇メートル。海底に到達した模様です」

計器を読み上げながら、平常心を取り戻した大介が報告する。

制御を失ったヤマトではあったが、すぐに原因が重力制御装置のトラブルであったことが判明。

艦内に人口重力を発生させる重力制御装置。第二艦橋で制御されているそれが着水の衝撃に加えて浸水による被害でかなりのダメージを受けていたのだが、最後の被弾が決定打になった。装置が暴走して艦の外部に強力な重力場を形成してしまった。

結果、ヤマトは真下に引つ張られてしまい制御を失ってしまったのである。

その問題が判明した直後、ルリの判断で艦内の重力制御を一時停止したことでヤマトの沈降は食い止められたのだが、すぐにユリカの「このまま死んだふりして」という命令を受けて潜水用のバラストタンクに注水、そのまま潜水艦行動に移行したのだ。被弾箇所からの浸水のことを考えればバラストタンクへの注水音を悟られることはない。おまけで煙突ミサイルから残っていたミサイル数発を排出してヤマトから少し離れたところで自爆させる偽装も加え、時間を稼げるように工作も加える。

そうしてヤマトは海底の岩をいくつか砕きながら着底し、右に傾いだ状態で固定されるのであった。

「着底完了。ラピスさん、エンジンの具合はどうですか？」

大介はヤマトの姿勢が安定したことを確認してから、エンジンの具

合をラピスに尋ねる。

「損傷はありません。現在は死んだふりのため停止していますが、再始動はすぐにできます。――ですが、出力制御系の修復がまだ終わっていません。それに三度の被弾であちこちのエネルギー供給ラインにエラーが生じていて、全力運転してもヤマトの各部に十分な出力が行き渡らない状態にあります」

こちらもようやく落ち着いた様子での確に質問に答える。しかし先程の取り乱しの影響かほんのり頬が赤い。思い起こすと恥ずかしいらしい。

「真田さん、修理状況は？」

戦闘指揮席で唸っているユリカに代わって、ジユンが損傷個所で修復作業にかかりきりになった真田にコミュニケで尋ねた。

沈降時の衝撃もあってか、現在ユリカはグロッキーであった。

「なんとも言えません。浸水による被害も各所に及んでいて、すぐに手を付けられない部分が多過ぎます。最低限の応急処置も、あと八時間掛かる見込みです」

汗と油で汚れた真田が作業の手を一度止めて答える。

正体不明の砲撃による被害は予想どおり大きいものだった。

最初の一発は機関部に近い場所を破壊され、そこからエネルギー供給ラインの一部に浸水が発生、ヤマトの機能の一部が麻痺状態に陥れた。

特に問題なのはやはり推進系で、現状ではメインノズルの最大噴射はもちろんのこと、各姿勢制御スラスタへの供給すら安定せず、満身に身動きできない状態にあった。

二発目は艦内工場のすぐそばまで損傷が達しているため、こちらも浸水で工場区の一部が被害を被っていて、不足している補修部品の生産に支障をきたしている。

また位置が近い居住区、それも右舷医務室付近にも被害が発生しているため、一部の医療機器が現在使用不能になってしまっている。……不幸中の幸いなのは、左舷側が無傷なことと、右舷側も手術などの大規模な治療ができないだけで、軽症者の治療には支障をきたして

いないことだ。

三発目は元々空間の広い物資搬入口に被弾したこともあって、最も浸水が深刻な個所だ。

第二副砲の回転機構にもダメージが及び、エネルギー伝導管までもが破損しているため使用不能に陥っている。近くに装備されていた連装対空砲はひとつが消滅、もうひとつは半壊している有様だ。

ほかにもそれまでの戦闘による損害の蓄積も無視できるものではない。

左舷展望室は、防御シャッター越しに被弾したにも拘らず、窓である硬化テクタイトにひびが入って軽度の浸水に見舞われ、艦橋トップにあるコスモレーダーのアンテナも、右舷側は三分の一ほど欠けている。

煙突ミサイル後方のマストアンテナも最後の被弾で損傷し、右側は回転機構が破損して大きく跳ね上がった状態、T字（Y字）型のマストも右側が少し欠けて左に傾いている。

コスモレーダーとマストアンテナの破損の影響でヤマトは外部の情報を取得するための目と耳を傷付けられた状態にあるため、索敵能力や電子戦能力が減退していた。

各武装の被害も決して軽微ではない。艦首ミサイル発射管も左中央が開閉不能になり、右舷の八連装ミサイル発射管もハッチ開閉不能、艦尾ミサイル発射管は左舷側ハッチがすべて動作不能、煙突ミサイルも残弾を撃ち尽くし偽装爆発の影響もあって損傷している。

第一主砲も被弾して左砲身が機能障害、第二主砲は二発目の大砲の被弾と浸水の影響で回転不能、第三主砲は左測距儀が全損してこちらも三発目の被弾の影響で回転不能、パルスブラスト対空砲群も半数以上が機能していない。第一副砲は無傷だが、これだけで対艦戦闘を行うのは少々無謀であろう。

装甲も至るところに弾痕が残り、劣化した防御コートが白化したり黒化したりしているなど、傷んでいる。

損害報告をまとめればヤマトは中破状態といえる。

乗組員もかなりの人数が負傷しているし、数名の死者も出た。戦闘

の規模に比例した損害といえよう。

とはいえ並の戦艦なら最初の超大型ミサイルの時点で宇宙の藻屑になっていたことは疑いようがなく、この物量さに加え相手のホームグラウンドで対等に渡り合ったヤマトとそのクルーの底力を考えれば、恐ろしいことに戦力的には拮抗しているという驚異的な事実が見えてくる。

そのことをヤマトのコンデイションと敵の行動から薄っすらと察した真田は、改めてユリカがヤマトの復活に拘ったことがやはり正しかったのだと納得していた。

「ううっ……状況はあ……？」

戦闘指揮席でダウン寸前のユリカが呻きに近い声で尋ねた。いまはエリナの手で後ろに倒されたシートにもたれて右腕を額に当てている。冷や汗が止まらないし呼吸は苦しいままだしで、コンデイションはお世辞にもいいとはいえなかったが、それでも先日の騒動や先月までに比べれば全然マシだった。

たぶん慣れっこになったのだろう。

「あの大砲の被害で、第二副砲が使用不能で対空砲一基が全損、一基が半壊。被弾個所からの浸水はようやく止まったみたいだけど、それまで浸水による被害も多数。ほかにエネルギー供給ラインの断絶が数カ所。——辛うじて戦闘は可能だけど、またあれに直撃されたらさすがにもたないかもね」

ジュンが第一艦橋後方左右の壁にあるダメージコントロールパネルを見ながら報告してくれた。

再建に伴なって新設された第一艦橋の設備で、その名のとおりダメージコントロールの効率を上げる目的で供えられた設備である。

ユリカも後ろを仰いで画面をちらりと見てみたが、画面に表示されているヤマトのフレーム画像の至るところが赤く色づけされ、そこから細かく文字と線で損傷の程度を多数表示していた。

パッと見ただけでも満身創痍であることが容易に伺える有様だった。

「指揮は僕が引き継ぐから、ユリカは少し休んで。その状態じゃあ指揮は無理でしょ？」

ジューンは極力優しい声で休息を促す。コンディションの悪さは自覚しているからか「うん」と力なく応えて楽な姿勢で座席に体を預ける。

こういう時、ジューンは本当に頼りになる。本当、『バックアップ要員としてなら』ヤマトに欠かせない存在だと、ユリカは改めてジューンが乗艦してくれてよかったと胸を撫で下ろした。

操舵席の介は落ち着かない様子で計器類をチェックしながら、チラチラと左隣の戦闘指揮席に視線を送っていた。

目に見えて不調なユリカの様子が気になって仕方がない。

少し前までの大ボケはいかんともしがたいが、やはり天才と称された頭脳は本物だった。

戦闘開始からの戦闘指揮は見事なもので、その力がなければヤマトはこうも拮抗した戦いをすることはできなかつただろう。

それくらい凄まじい戦いだつた。初めて経験した戦闘であるあの冥王星攻撃作戦すらも凌ぐほどの激戦、正直冷や汗が止まらなかつた。

それを退けたのはヤマトの性能もそうだが、ユリカの采配のおかげで敵の攻撃を的確に裁くことできたからだ。実際指示通りに操舵した介だ、わからないわけがない。

敵の攻撃を読み切り最小の被害で済ませられるような、針の穴を通すような精密操舵の数々。ジューンの提案したプランの時点でもまだまだ新兵の介には厳しいと思える内容だつたのに、ユリカは状況に応じてさらに難度の高い操舵も要求したのである。

正直自分でもよくできたと自画自賛したいくらい、難度の高い操舵だつた。なにしろ一桁単位での操艦はあたりまえ。頻繁に艦を上下左右に数度から数十度の単位で動かし、増速に減速も頻繁、挙句敵の攻撃を受け流すために艦をローリングさせたり――。

厳しかったがそれでも介は――ほかのクルーたちもこの激戦をここまで戦い抜いた。介のような新兵からルリのようなベテラン

まで、ヤマトの人員の経験値には大きなムラがある。

そのクルーを纏め上げてその力を引き出せるだけの器が、彼女にはあるのだと確信する。

普段の軽いノリやボケは彼女への親しみ(または呆れと不安)を、戦闘中の凜とした姿が指揮官としての頼もしさを感じると、彼女に対する印象はあまりに極端だ。

だがその両方を極端に備える彼女を理解さえすれば、日頃は肩肘張らなくて済むのでのびのびと適度にガスを抜いていられるし、いざ非常時ともなればその指導力を信頼して目の前の任務にひたすら打ち込むことができる。いい塩梅だと思う。

——ギャップが大き過ぎて壁を乗り越えて信用できるようになるまでが少々手間なのが玉に瑕だが。

あと主にアキト絡みでの超浮ついた色ボケっぷりも賛否が分かれる要因だろうが。

……親友の進はすでに慣れきってしまったのか、彼女が突然ボケようが、そこから急にシリアスを決めようが、アキトと眼前でいちやっこうが動じなくなってきたが。

意外と大物なのかもしれない。

そこまで考えてどうしていまの自分がここまで気もそぞろになっているのかが理解できた。たしかにユリカは凄い。だがその体は火星の後継者の人体実験とヤマト再建のためのたび重なる無茶で限界が近い。

これから先どのような苦難が待ち受けているかわからないが、彼女の指揮の下なら大丈夫だろうと信用してしまっただがために、それが呆気なく失われてしまうかもしれない現状に不安を感じているのだ。

たぶんそれは、自分だけではない。誰しもが抱えつつある不安である、大介は漠然と考えた。

「雪ちゃんもイネスも、いまは負傷者の治療で手が離せないみたいね……。よし、ハーリー君、悪いけど艦長をよろしく。私は医務室に薬を取りに行ってくるわ。ルリちゃんもこっちに戻ってくれないかしら? 代わりに通信の番を頼みたいの」

とハリとルリに頼んでいた。二人とも「わかりました」と快く応じていた。

すぐにハリは航法補佐席から立ってエリナの代わりにユリカの傍らに陣取り、エリナから渡されたハンカチを使って額に浮かんだ汗を拭っている。

「ありがとうハーリー君。ホントにいい子だねえ、よしよし」

薄っすらと目を開けて礼を言いつつ左手でハリの頭を撫でるユリカの姿に、大介はますます不安で胸が苦しくなる。

少しでも心配を掛けまいと気丈に振舞っているが、撫でている手が微かに震えているのに気が付いてしまった。ハリもそうなのだろう、察してぎこちない笑みを浮かべているのではないか。

「や、止めて下さいよ艦長。僕だってもう一人前の軍人なんですよ?」
やんわり不本意だ、と主張する。

ユリカは「そう?」と応じて頭を撫でるのは止めた。

空いた左手は今度は自分の腹部に当てられる。安全ベルトが締め付けた部分だ。痛むのだろう、嘔吐したくらいだし。

大介の不安は増すばかりだが、この状況でも諦めない姿勢に、艦長であり続けようとしている姿に、わずかばかりの勇気を貰った気がする。

この諦めない心こそが、挫けぬ心こそが、かつてのヤマトが苦難を乗り越えてきた、本当の秘訣に思えてきた。

だとしたら自分も新生ヤマトクルーとして、それに倣うべきなのかもしれない。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ ディレクターズカット

第八話 決死のヤマト! 冥王星基地を攻略せよ!

冥王星前線基地の司令室では、海底に沈んだヤマトの捜索が始まっていた。

「お見事ですシュルツ司令。さしものヤマトも、司令の采配の前には打つ手なしでしたね」

ガンツがは嬉しそうにシユルツを褒め称える。被害は決して小さくはないが、それに見合うだけの大戦果を挙げられたのだとすっかり気が大きくなっているようだ。

だがその気持ちはわからないでもない。敵はタキオン波動収束砲を備えた超戦艦なのだ。

このような大物は過去に例がない。この強敵の撃破は、デスラー十字勲章ものだと、ガンツは敬愛する司令の手腕を称賛して止まない。だがシユルツはその称賛をそのまま受け取るわけにはいかなかった。

「まだ油断するなガンツ。確実に息の根を止めるまでは安心してはならん。敵はヤマトだ、たった一隻でわれらにここまでさせる強敵なのだ。油断して足元を掬われては、デスラー総統に顔向けできない」

シユルツはここまで追い込めたことに内心喜びを抱きながらも、司令官として毅然とした態度を崩さぬまま次の手を指示する。

まだ手を緩めるわけにはいかない。その艦体を真っ二つに引き裂き、二度と再び飛べぬようにしてからでなければ、安心して勝利の美酒を煽ることは許されないのだ。

「潜水艇を発進させろ、ヤマトの沈没地点を捜査して、発見次第魚雷を叩き込んで粉々に粉碎しろ。妥協はするな、油断もするな。二度と浮上できぬよう鉄屑に変えるまで、決して攻撃の手を緩めるな！」

耐圧ドームの下部に設けられた発進ゲートに注水が開始され、完了次第次々と小型の潜水艇がゲートを潜って発進していく。

目標はヤマト。現在確認されている最大最強の敵を確実に葬り去るべく、ガミラス冥王星前線基地はありつただけの武力をつぎ込む姿勢をまったく崩していなかった。

その頃、単独行動中のGファルコンDXはようやく冥王星に到着していた。慣性飛行だけでは思いの外時間がかかってしまい、ヤマトが冥王星に最接近する前に地表に到達するという目的は果たせなかつ

たのである。

「ヤマト、結構派手にやられてましたね。……ユリカさんたちは大丈夫だろうか？」

得体の知れない砲撃を受けて、煙を噴いたヤマトが右往左往するさまを見ることになった進の気分は暗い。

そう簡単にヤマトが沈むとは考えていないが、ただ黙ってみているしかない現状も重なって不安と心配が募る。

「あいつがそう簡単にやられるもんか。あれくらいで終わってるんなら、木星との戦争の時、ナデシコは火星で終わってるし、ヤマトだって別の世界で地球を救ったりもできなかっただろうさ」

アキトは進を不安にさせないように極力普通に振舞う。もちろん胸の内ではユリカたちの安否が気になって仕方がない。

だが、復讐者として数多くの修羅場を潜り抜けてきた経験をもつアキトだ、ここで焦ってもできることはなく、むしろ焦って基地攻略を失敗してしまえばヤマトはそこで終わりだとはつきりと理解していた。

だから自分たちがすべきことはまったく変わらない。冥王星前線基地を発見して確実に破壊する。そうすることが結果的にヤマトの危機を救うのだ。

それに、自慢の妻はこの程度の苦難で音を上げるほど柔じゃない。

「——信じているんですね。やっぱり、奥さんだからですか？」

「それを抜きにしても、ナデシコが戦争で沈まずに戦い抜けて、大戦果を挙げられたのはユリカの采配が無視できないからね。……失敗も多かつたけど。まあ、否定しても意味がないから言っちゃうけど、進君の言うとおりでな。ユリカは俺の妻だからってのはもちろんある。あいつは俺に絶対の信頼を抱いてるんだ。俺が応えてやらなきゃ誰が応えるんだよ。——俺、あいつの夫で王子様だから」

笑みを浮かべながら断言するアキトに、進は「ごちそうさまです」としか言えなかった。

だが、少し気持ちが楽になった気がする。

「さて、雑談もいいけど仕事だ仕事。超大型ミサイルと例の大砲の最

初の発射地点は、大体この辺だったか……」

アキトはコンソールを操作して冥王星の簡単な地図を表示し、超大型ミサイルと大砲が放たれた位置を書き込んでみる。

大砲の発射地点と超大型ミサイルの発射地点はそれなりに離れているが、それでも半径三〇キロの範囲内に収まっている。惑星全体を比較として考えれば、隣接していると考えて問題ないだろう。

「はい。さすがにダブルエックスのセンサーだけでは詳細な位置はわかりませんが、おおよその位置はそこで間違いないと思います。しかし、衛星軌道から見ると地上に建造物が見当たりません。海洋の下に隠されているか、なんらかの遮蔽フィールドの類を展開していると考えたほうがいいかもしれませんね」

進はデータを参照しながらそう推測する。後者ならまだありがたいが、前者の場合は少々問題だと、進はデータを睨みながら考える。「だろうね。このまま衛星軌道に陣取っても仕方ない。地表付近を飛んで調べてみよう」

アキトの提案に進も頷き、GファルコンDXは慎重に冥王星の地表付近に降りて行った。

元々がいわば『全部乗せラーメン』を指標に開発された機体なので、GファルコンDXの形態である限り、単独で地球の大気圏の離脱と再突入がノンオペションで実行できる機体として完成されている（分離状態では厳しい）。

相転移エンジン搭載で重力波スラスタを採用したGファルコンDXは、推進剤切れの心配がなく、その既存機を遥かに上回る推進力から生み出される機動力とボソンジャンプ能力のおかげで、ヤマトの元居た世界の名機——コスモタイガーIIに匹敵する活動範囲と哨戒能力すらもつのだ。

いまはその能力を最大限に活用して冥王星前線基地の所在を探り当て、機動兵器としては異例の戦略級火力を使って、基地殲滅を目論んでいるという寸法だ。

しかしその作戦に許された時間は、決して多くはない。アキトと進は内心の焦りを押し殺しつつ、発見されないよう地表スレスレを慎重

に飛行しながら情報収集に励むのであった。

「それじゃあ、あの大砲は例のデブリを使用して射線を屈曲させている、と？」

第一艦橋に戻ってきたルリの報告を聞いて、ジユンはたいそう驚いていた。偶然の一致だろうが、サテライトキャノンの初期案と本当によく似ていたからだろう。

当初予定されていたサテライトキャノンの初期案の場合、中継衛星を介してエネルギーを送信してもらい、衛星軌道上に配置された大砲のいずれかを発射するシステムなので、順序が逆ではあるが。

「はい。おそらくあのデブリはなんらかの反射装置を内蔵した大砲のシステムの一部だと思われます。地上で発射した砲撃を衛星で屈曲させることで、理論上の死角がありません。惑星全体の防空用装備として考えればかなり強力な武器だと思われます。現在までに判明している砲撃データから大砲は一門だけと推測しています。もし複数の砲があるのならもっと砲撃の感覚が短いと思われますので。また反射衛星自体に攻撃能力も確認されていません。……もしかすると、ガミラスにとってもまだ試作段階の装備なのかもしれませんね。だから多数の砲と反射板を利用した飽和攻撃を実行できないのでしよう」

ルリは通信席のパネルを操作して、オモイカネに繋ぐとデータの表示を頼んだ。

「オモイカネ、観測データに基づいた砲撃予想地点を表示してください」

ルリの指示にオモイカネはすぐに作成したCGデータをメインパネルに送る。冥王星を基準に、ヤマトの移動経路と被弾地点、最初の砲撃予想地点を基準にデブリで屈曲されたビームがヤマトに届くまでの経路など、さまざまパターンを表示した。

最初の砲撃は冥王星から真っすぐ飛んできたので砲からの直接砲

撃の可能性が高い。だが二発目以降は冥王星から直接撃てないため反射衛星を使った屈曲射撃であることも示す。

——そして反射衛星を使用した予想弾道パターンを可能な限り表示する。本当に網の目のように描かれたビームの予想弾道に第一艦橋の面々も舌を巻く。最初から屈曲ありきで発射されては大砲の位置を特定することはできないだろう。

「なるほど。これならたしかに死角がない。——本当に俺がフラグ立てたのか？」

島がぼそりと呟くと、全員があからさまにそっぽを向く。地味にユリカの発言を気にしているようだった。

「ともかく、この仮称・反射衛星砲は厄介だ。移動目標に対する脅威度がわからない以上、迂闊に飛び出せない。対策を考えないと」

ゴートも難しい顔で対策を訴える。ルリも同感だ。さすがにもう一発あれを食らうとヤマトがどうなるかわからない。今度こそ致命傷を負う可能性は高いだろう。

現状では単発であると推測されているとはいえ死角がなく、ヤマトの防御を一撃で貫通する脅威の威力。やみくもに飛び立てば狙い撃ちにされ、今度こそヤマトは海の藻屑と終わる。

そこに、医務室から薬の入った無針注射器と医療キットを手にエリナが戻ってきた。

「留守番ありがとう、ルリちゃん。はい、この薬を艦長に打って。無針注射器だから簡単よ」

ルリに持ってきた注射器を渡して、通信席から追立て代わりに自分が座る。自分で打ちに行ってもいいのにわざわざルリに譲るのは、エリナなりの気遣いだろう。

「わかりました——ありがとう、エリナさん」

ルリは公然とした理由でユリカの下に駆け寄る。その姿を誰もが微笑ましく見送りながら、邪魔をしないようにデータを睨みつけて反射衛星砲攻略の糸口を探る。

いまのところ攻撃が止んでいるとはいえ、この包囲網を抜け出して基地に対して反撃するのは困難極まりない。ジュンもゴートも難し

い顔で黙り込んでしまった。

「ユリカさん、お薬です。これで気分がよくなりますよ」

ルリはハリに付き添われているユリカに、それはもう満面の笑みを浮かべて注射器を見せる。しかし、

「ううん……その言い方だと、危ないほうのお薬みたいだよ」

グロッキーなユリカがルリの言い回しを指摘する。すぐには呑み込めず隣に視線を巡らせるとハリと大介が納得したように頷いていた。

「……………っ！」

ようやく自分の発言が誤解を招きかねないと気が付いたルリは羞恥で頬を染める。

「そ、そんなボケかましてないで、左手出してください」

くすりと笑いながら左腕を差し出すユリカ。

ルリは袖口に隠されたファスナーを下ろしてから袖口を捲る。ユリカの艦内服は旧ナデシコの制服デザインだが、現行の艦内服同様簡易宇宙服として使えるように改造されているため、袖は肌をぴつたりと着くようになっていなのだ。なので、袖をまくるのにもひと手間必要なのである

剥き出しになった腕に注射器を押し当ててボタンを押すと、浸透圧で薬液がユリカの体内に送り込まれる。

特に痛みはないはずだが、体内になにかを送り込まれる感覚にユリカが軽く呻いていた。

「えへへ、本当に薬漬けみたいだね、私」

そう笑われると釣られて笑いそうになるが、本当に薬漬けの日々を送っているユリカに言われると、可哀想に思えて泣き顔と笑い顔がごっちゃになったような変な顔になってしまう。

「お、ルリちゃん睨めっこがしたいんだね。あつぷつぷう」

……なにか盛大に勘違いしたのか、それとも場を和ませるためなのかは判断が付かないが、ユリカも変な顔を作ってルリと向き合う。

……そのまましばし互いに変な顔を突き付けたままでいたが、双方の顔を近くで見ているハリが噴き出すのを切っ掛けに、ルリも「参り

ました」と今度こそ笑い出して「私の勝ちい！」とユリカが拳を天に突き上げて、第一艦橋に笑い声が響いた。

ハリは遠慮せずに笑いながら、ようやく空気が軽くなったのを感じた。

先ほどのやり取りで貴重なルリの照れ顔を至近距離で拝めたハリは、眼福眼福と脳内フォルダーにその表情を保存した。

ユリカと絡んだルリは、こういう無防備な表情をたくさん見せてくれるのでハリは本当にありがたく思っている。たぶんアキトと一緒にの時もそうなのだろうが、いかんせんアキトはヤマトに乗ってからルリとあまり絡んでいないので真偽不明だ。

正直ルリを置いて雲隠れしていたアキトは気に入らないのだが、ルリのためならアキトと一緒に居られるように謀ってみるか、と考える。

しかし——。ユリカの体調が気がかりだ。こんなやり取りで過度な緊張を取り除くのはさすがと思うが、はたして彼女は持つのだろうか。彼女が倒れたあと、誰がそれを引き継げるのだろうか。

正直ハリの視点からみてもジュンやルリでは荷が重いと考えてしまふ。

ルリはユリカが倒れた場合を仮定すると——たぶん落ち込んだり心労が嵩んだりで指揮どころではないだろう。ハリとしてもルリにこれ以上の重荷を背負わせたくはない。

ジュンは——優秀なのだろうけどこの風変わりな艦の艦長としてはどうなのだろうかと思っている。火星の後継者との決戦やガミラス戦でも数度共に戦った間柄だが、どうにもヤマトに乗ってから印象が薄い。

バックアップはしっかりしているのだが総責任者として全権を任せられるかといわれると、首を傾げてしまふ自分がいる。たぶんユリカが強過ぎてジュンが完璧に喰われているのだと思うのだが……。

「ん？」

リーダーパネルを見ていたジュンがなにかに気付いたようだ。ハリも自分の席に戻ってリーダーパネルを確認する。潜水艦行動を想

定しているヤマトは水中用のソナーやセンサーの類を装備している。純然たる潜水艦のそれには及ばないが、決して性能は低くない。

そのセンサーが、ヤマトに急速に接近している物体を捉えていた。「未確認物体接近中だ！ 全員持ち場に戻れ！」

ジュンの声にルリも慌てて自分の席に戻った。彼女も電探士席のパネルを操作してセンサーが捉えた物体の正体を探っている。

「未確認物体の正体は潜水艇と判断します。数は四〇。沈没したヤマトの搜索と、確実な破壊が目的だと思われまます」

音響センサーが捕らえた推進音が、確実にヤマトに向かって近づいてきている。敵はヤマトの着水地点から沈降地点を計算して部隊を送ってきたのだろう、ほぼ真つすぐ向かってきていた。

戦闘を回避するのは無理そうだ。速やかに判断したユリカとゴートの反応は速かった。

「艦首発射管に多弾頭魚雷の装填急がせて」

シートを起こしたユリカがすぐにゴートやミサイル発射室のクルーに指示を出す。

薬で多少持ち直しているが、やはり顔は青褪めたままで声にも無い。それでも判断は的確だ。このまま死んだふりをしていてもヤマトがバラバラになるまで魚雷を撃ち込まれるだけだろうし、反撃しなければただ死を待つだけだ。

ハリも覚悟を決めて敵潜水艇群の進路予測の手伝いを始めた。

ユリカは思ったよりも時間が稼げなかったことから、自分がガミラスの心理状態を少し読み違えていたことを悟った。

（思った以上にヤマトを警戒して、恐れているんだ。せめてあと三分くらいは稼ぎたかったな）

ユリカは読み違いを悔やみながらも魚雷の発射準備の推移を見守る。砲術補佐席のゴートは不調気味のユリカの代わりに艦首ミサイル制御室に指示を飛ばし、接近中の潜水艇の位置情報と進路、速度などの情報を入力していく。

艦首のミサイル発射管に注水が行われたあと、使用可能な発射管扉が解放された。ガミラス潜水艇との距離が縮まる。

「多弾頭魚雷、艦首発射管にセット完了」

「センサーに感！ 魚雷を発射した模様です！」

ルリの報告を受けてユリカも負けじと魚雷の発射指示を出す。命令は速やかに復唱され、艦首の発射管から魚雷が放出される。放たれた魚雷は一定距離を進んだ後、先端のカバーを解放して中から九発の小型爆弾を放出して散らばらせる。

そしてその爆弾の網の中にガミラス潜水艇が突っ込むと、近接信管が作動して爆発する。水中は空気中よりも衝撃波の伝播が速い。それに水圧がかかる関係でデイストーションフィールドのような歪曲場を纏うことが難しい。

そのため爆圧に晒されたガミラス潜水艇はそのまま衝撃波に碎かれ、押し潰され、鉄屑へと変貌していく。

しかし五発の多弾頭魚雷だけでは全部を仕留めきれはるはずもなく、迎撃せずに放置される形になった数十にも及ぶ魚雷がヤマトの艦体に突き刺さる。

被弾の衝撃でヤマトが震える。潜水艇はどうやら一人乗りの小型のものらしく、搭載された魚雷も相応に小さく威力も低いようだが塵も積もればなんとやら。デイストーションフィールドに頼れないのはヤマトとて同じなのだ。

装甲はこの魚雷の威力に耐えられそうだが、浸水を防いでいる隔壁や傷んでいる部位の傷を広げるには十分な威力といえる。

ヤマトはもう一度多弾頭魚雷を発射して応戦するが、魚雷もこれで品切れだ。

元々宇宙空間での運用がメインのヤマトに水中用の魚雷を多くストックする余裕はない。通常のミサイルでは誘導方式の関係もあって水中では役に立たないので、実質対抗手段を失ったに等しい状態だ。

いや、水中でも主砲と副砲は機能する。重力衝撃波も水中で極端に減衰したりはしないし、なにより出力の桁が違う。

だが、主砲は大規模艦隊戦と敵の必殺兵器であろう反射衛星砲(仮)を三度も受けたことで損傷している。それに死んだふりの一環で工

ンジンを停止しているため、波動エネルギーの性質を利用して機能させている新方式のグラビティブラスト発射機構も漏れなく停止中だ。またエネルギー供給ラインに損傷があるため点検なしでは暴発の危険性も大きく使うに使えない。

この戦いは長引く。ユリカはそう確信した。

——案の定、潜水艇とヤマトの死闘は数十分にも及んだのである。

魚雷を使い果たしたヤマトはやむなくまだ弾薬が残っていたピンポイントミサイルとエネルギー供給ラインの点検が済んでいるパルスブラスト数基を使用した。

水中で使用に適していないミサイル、数の乏しいパルスブラストでは苦勞が止まなかったが、それでも迎撃には成功した。

しかし——。

「きやあつー！」

運悪く第一艦橋に命中した魚雷のダメージで戦闘指揮席のパネルが火を噴く。飛び散った破片がユリカに襲い掛かった。

装甲シャッターで守られた第一艦橋の窓が割れたり浸水が始まったりはしないが、衝撃に計器のほう能耐えられなかったらしい。

「ユリカー！」

すぐにエリナが先ほど持ってきた医療キットを携えて駆け寄った。第一艦橋にも備え付けの医療キットはあるのだが、こちらはユリカ用に備え付けのキットには備わっていない薬品が収まっている。

戦闘が長期化するのには避けられないと踏んだエリナが、イネスに少々無理を言つて用意してもらったものであった。

「ぎ、刺さった……！」

咄嗟に顔を庇つたので艦内服が破片を防いでくれたのだが、剥き出しだった手首までは守ってはくれなかった。左掌に深々と五センチほどになるうかという尖った破片が刺さっている。

「抜くわよユリカ。我慢なさい」

一応口頭で断ってから掌に刺さった破片を遠慮なく力一杯引き抜いた。ユリカは激痛に悲鳴を上げるが構わず医療キットから取り出した消毒液を、容赦なく傷口に浴びせかける。

そこに一切の慈悲はなかった。いや、治療という行為は慈悲であるので語弊があるかもしれないが。

「アッ……！」

そりやもう耳に刺すような甲高い悲鳴を発したが、構わず薬を塗ってガーゼで覆ってから手早く包帯を巻く。

でも少々耳がキーンと耳鳴りを起こしている。親子そろって、地声が大きいのと思考が脱線しかけるくらいには効いた。難聴になったら補聴器は彼女の給料から買わせると心に誓う。

「え、エリナあ。もつと優しくしてえ〜」

泣き言を漏らすユリカだが「ちゃんと処置しないと大変でしょう？」と取りあわない。慣れた手つきで応急処置を終えると、

「戦闘が終わったらちちゃんと診てもらいなさいよ。感染症を起こしたら大変だから」

と念を押す。ユリカは「はあく〜い」と涙声で応じて手当された掌に「ふうー！　ふうー！」と息を吹きかけていた。

そんな様子を見て、大介は先程ほどから抱いている不安がますます強くなった。いまはこの程度で済んだからいいが、もしも指揮を執れないほどの怪我をしたらどうなる。たしかにバックアップ要因としての副長や、ナデシコCで艦長経験のあるルリがいるが、この二人にユリカほどの信頼が置けるかと尋ねられたら答えは……ノーだ。

この二人には、この人に付いていけば、と思わせるようなカリスマは感じられない。

いまのヤマトは軍の指揮系統から逸脱し、実質艦長が全権を握った状態にある。それこそ一国一城の主とまで言われた、大昔の艦長そのものが要求される。

あの二人にはそれに至るための器が足りないのと、大介は半ば確信していた。というよりもヤマトが特殊過ぎるのだ。

現代の戦争において単独で長期に及ぶ作戦行動自体、よほど特殊な艦艇でもない限りはありえないし、それでも必要に応じてバックアップを受けることが不可能なわけでない。

しかしヤマトは一切のバックアップを受けることができないのだ。

さらに戦闘だけでなく未知なる空間を定められた時間内にすべて乗り越えることを要求されている——正気の沙汰ではない。

それゆえにヤマトの艦長には、容易に乗組員を追い詰めるこの過酷極まる任務の精神的負荷を取り除く絶対的な支柱になることが求められる。

ジユンもルリも、実務能力はともかく精神的支柱とするに大介の目から見ても力不足としか見えないのだ。

特にルリは容姿からくるアイドル性はともかく、ユリカが原因となつて精神的に安定しているとは言い難い状態がそれに拍車をかけているのが痛い。仮にそれがなかったとして、ヤマトの艦長として適切かといわれると少々悩むが、不適切と断言するほどではないはずなのだが……。

いまのヤマトにユリカの代わりにクルーの精神的支柱足りえる人間が、この大役を継げる人間が、はたしているのだろうか。

大介の不安は晴れることなく徐々に積み重なっていった。

シユルツは険しい表情を浮かべていた。差し向けた潜水艇がヤマトの手によつて一隻残らず撃破されてしまったからだ。それは冥王星基地が誇る反射衛星砲ですら決定打にならなかつたという事実を如実に示していたのだから当然だろう。

「なんとという奴だ。これほどの攻撃を受けながら、まだこれほどの余力があるとは……」

司令室全体の空気が重い。シユルツも含めた全員が先ほどまでの余裕を失い、非常識な能力を見せつけるヤマトにはつきりと恐怖を抱き始めていた。

そんな中にあつて指揮官としての役割を果たすべく、シユルツは恐怖を吹き飛ばさんとばかりに叫んだ。

「爆雷を投下しろ！　なんとしても浮上させて、今度こそ反射衛星砲で止めを刺す！」

シユルツの指令に全員が浮足立ちながらヤマトへの攻撃準備を開始した。

必殺兵器をもってしても決めきれなかったという現実が、冥王星基地から完全に余裕を奪い去っていた。

作戦は完璧だったはずだ。思惑どおりヤマトは波動砲を封じられ、冥王星基地の全戦力による猛攻撃を受けて深手を負った。

だが、それだけだった。

戦艦一隻などあつという間に宇宙の塵とできるはずの猛攻を耐え凌ぎ、いまもまだ生きている。これを恐怖と言わずしてなんと言うのか。

シユルツたちは、ヤマトがどうしようもなく恐ろしかったのだ。

恐怖が焦りを生み、ただただ一刻も早いヤマトの撃滅のみに意識が向き、どうしてヤマトが馬鹿正直に正面から挑んで来たのか、そして月での戦いで確認されていた新型機の姿が見えなかった理由について、シユルツはまったく意識が向いていなかったのである。

冥王星の地表すれすれを飛行するGファルコンDXは展開形態に変形、パッシブセンサーを駆使して冥王星前線基地の所在を懸命に捜索していた。

展開形態はダブルエックスをGファルコンが前後に挟んだ戦闘形態である。その形状から推力が全方向にバランスよく向いているのが特徴であるが、特にダブルエックスのメインスラスタを下方に、Gファルコンのメインスラスタを後ろに向けているため、重力下においては滞空と移動の推力の分散がしやすいという利点を持っている。

もちろん収納形態よりも格段に小回りが利くため、戦闘はもちろん探査行動にも向いていた。

「……駄目だ。痕跡を発見できない。この辺りのはずなのに」

ダブルエックスのコックピットの中で呻く進。ヤマトが冥王星に

墜落してからすでに二時間近くが経過している。

アクティブセンサーを使えば発見できるかもしれないが、隠密作戦を求められる現状には適していない。アクティブセンサーを使うということは暗闇で光を灯す行為に等しく、こちらが発見されるリスクが極めて高くなる。

「くそっ。もしも本当に基地が海中にあるのなら、ダブルエックスのセンサー類じゃ時間がかかり過ぎる。それに、サテライトキャノンも水中基地に対する直接攻撃のテストなんてしてないし……。せめて、地上に露出した部分か、地表近くに施設があれば……！」

焦りから唇を噛む進。だが彼の心配ももつともだ。

タキオン粒子砲であるサテライトキャノンは、波動砲同様一種の時間歪曲作用を主とした（副次効果で膨大な熱量破壊も含めた）破壊兵器だ。出力も極めて高いため大気中での減衰はほとんど無視できるほどの威力もある。

これは、ガミラスの目を掻い潜って地表で行われたテスト（皮肉にも、太陽の光を遮った粉塵が地表の様子を遮蔽した）で判明している。だが水中の標的となると話は違ってくる。

密度の高い水中ではビームの減衰が強烈になる可能性は十分に高い。いくら波動砲の亜種であっても、テストもなしでは実用性について保証できるものではない。原理的にも出力的にも波動砲には劣っているのだから当然だ。

それでも原理的には四〇〇メートルくらいまでは無視できるはずだと真田とイネスも言っていたが、基地がその範囲内にある保証はない。

二次被害をもたらす周辺への破壊作用の拡散や、粒子の飛散がどの程度になるかも予想ができないのも不安の種だ。

それに水中に基地が敷設されていた場合、上空からその所在を把握すること自体が不可能に近い。水で海面が閉ざされているから侵入するためには氷を割る必要がある。水中に基地を敷設しているのなら、そういった音を拾う備えくらいはあると考えたほうが妥当だろうし、無策で突撃はできない。

それにこちらでも水中では真価を發揮できない。切り札たるサテライトキャノンも水中では発砲できないのだ。余剰エネルギーや膨大な熱を排出するシステムが、水蒸気爆発を誘発してしまうからである。

ゆえにもしも水中の施設を砲撃するのであれば、その所在を確認した上で空中から発砲する必要があるのだが……。

「あの大砲が地表に露出していないのなら、どこかに排気塔みたいなものがあるはずなんだ。それさえわかれば、ある程度基地の位置も推測できるんだが……」

アキトも計器と睨めっこしながらこの状況を打開するための知恵を絞る。

「排気塔。目立つようには置いてないでしょうね」

「だろうな。でも大砲を撃てば確実に排気する。——ヤマトが撃たれるのは正直避けたいんだが」

さすがのアキトも焦燥感に支配されつつある。いくらヤマトでも、あんな大砲を何発も食らって無事でいられるわけがない。だが時間をかけ過ぎれば次の砲撃がヤマトに——。

焦りだけが募る中、GフアルコンDXは凍てついた冥王星の大地の上を右往左往するのであった。

その頃ヤマトは大量の爆雷の雨に晒されていた。一発一発はヤマトにとっては蚊に刺されたようなものだったが、いかんせん数が多い。海面ギリギリを航行する潜水艇が次々と爆雷を落としていくを止める術もなく、爆雷の雨を甘んじて受け止めるしかなかった。

触雷による振動がヤマトを襲い、クルーの不安を煽る。

「くそっ。このままでは傷が深まるだけだ……!」

「テンカワと古代は、まだ基地を発見できていないのか……?」

大介とゴートが険しい表情で不安を口にしている。

「……うくん。もしかすると、基地が見つからなくて右往左往してるのかも」

薬を口に放り込みながらユリカは二人の状況を予測した。まあ簡

単に発見できるのならヤマトの事前調査で見つかったであろうから、二人を責めるつもりはない。

「やはり、基地は地表に露出していないと?」

電探士席のルリがいままでの解析データを洗い直して、冥王星前線基地の所在を探ろうとしているようだが、成果は上がっていない様子。

データ不足であるし、戦闘の合間に収集したデータだけで発見できるほど、杜撰な偽装はしていないだろう。

「まあそうだろうね。わざわざ海洋を造ったってことは、そこに隠してると考えるのが妥当だろうし。汎用機とはいえ水中での活動はおまけ程度のダブルエックスじゃ、水中の基地をすぐに発見とはいかないでしょう」

「だとすると、特別攻撃隊を編成して破壊工作を考えたほうがいいかな?」

のほほんとしたユリカにジュンが意見するが、ユリカはあまりいい策ではないと思った。ジュンもわかつたうえで進言しているのだから。

特別攻撃隊を乗せた揚陸艇では爆雷の雨を潜り抜けて氷上に出ることが難しいし、そこから改めて基地の探査となると、途方もない時間がかかる。いくらなんでも耐え切れない。

ならば、

「必要ないよ。——大介君、浮上して。敵に撃たせてあげましょう、必殺兵器」

こともなげに告げたユリカに全員が驚きの声を上げる。

「しょ、正気ですか!? 今度ヤマトに命中したら……!」

「大丈夫。アレを海面上のヤマトに命中させたかったら、衛星で反射しないと当たらないでしょ? 要するに反射板の開閉タイミングに合わせて急速潜航すれば当たらないってこと。——それに、潜ったヤマトに撃ってこないところからすると、水中では威力が極端に減衰しちゃうか、水に入った瞬間に屈折しちゃうか……どっちかだと思いうから、潜っちゃえば安心安心。この爆雷の雨がそれを証明してくれてる

よ。要するに、とつとと浮上して来い、そうすれば反射衛星砲で決めてやる、って言ってるようなものよ。敵さん、あんまりにもヤマトがタフなんで、焦って余裕をなくしてるみたい。——問題は反射板のどれを使うか、ってところかな?……ルリちゃん、ヤマトの上空に反射衛星つてある?」

「あります。頭上に一基、ほかにもヤマトを狙えそうな衛星が四つほど確認できます」

ユリカの読みに感心したルリは聞かれる前から情報を検索し、事前に把握していたデブリ——反射衛星の位置情報を再度確認していた。

この手の情報管理はお手の物、かつてアララギから言われた「電子の妖精」の異名に恥じないよう、常日頃心掛けている。

彼らが命懸けで守ってくれたこの命。それが間違いでなかったと証明するためにも。

「さっすがルリちゃん! 打てば響くってやつだね! 私の自慢だけのことはあるよ! んじゃ、浮上して撃ってもらいましょうか——私たちの反撃の狼煙を」

ユリカは微笑を浮かべながら告げた。

大介はユリカの言葉に頼もしさと背筋がぞつとするような冷たさを覚えた。

(やつぱりこの人は凄い。依存しているのかもしれないが、いまは考えるのはよそう。この人に従って、この場を切り抜けるのが先決だ) 大介も先程まで胸中に渦巻いていた不安を振り払い、速やかに準備を進める。……姿勢制御スラスタ、ほぼ正常。補助エンジン——異常なし。バラストタンクの注排水システム——パーフェクト。

「バラストタンクブロー。浮上開始」

静かにユリカの命令が下った。

「両舷バラストタンク排水」

「メインタンクブロー」

大介とハリが共同してヤマトの浮上を開始させた。バラストタンクを排水したヤマトは爆雷の雨の中ゆっくりと浮上していく。凍っていた海面まであと少し——。

「ヤマト、浮上しました！」

ヤマトの動向を伺っていたオペレーターが喜色に満ちた声を上げる。ヤマトは海面の氷を叩き割ってその姿を露にしたのだ。

「よし、このチャンスを逃すな。攻撃機を撤退させろ、反射衛星砲発射用意！」

「反射衛星砲、エネルギー充填一五〇パーセント！」

「三号衛星、角度調整右三〇度」

「八号衛星反射板、オープン！」

次々と反射衛星が起動して、ヤマトをその照準に収めた！

「反射衛星砲、発射！」

シウルツが渾身の思いを込めて発射スイッチを押し込む。

反射衛星砲のビームが凍てついた海面を割り、反射衛星を中継してヤマトに向かう。シウルツたちの願いを乗せて。

「ヤマト直上の反射板が開きました！」

第三艦橋に降りたルリの報告を受けて、すぐに大介はヤマトを潜航させる。

「急速潜航！」

操縦桿を思い切り押し込みバラストタンク全部に注水開始。姿勢制御スラスタも使って強引にヤマトを海中に押し込んでいく。凄まじい水の抵抗を力尽くで押しつけて、ヤマトは海中へと没していく。

第一艦橋を冷やりとした感覚が包み込む。ヤマトが潜るのが先か、ビームが命中するのが先か、さながら気分はチキンレースだ。

ヤマトが完全に海中に没してから二テンポは遅れてビームが海面に突き刺さった。

ユリカの予想どおり、ビームは海面に激突した瞬間急激に威力を減衰させ、ヤマトの防御コートと装甲の反射材でも十分に無力化できる程度の弱々しい威力に終わった。もちろんダメージはない。

今回の賭けは、ヤマトが勝ったのだ。

「っ!?……ふう〜、間一髪だ」

「艦長の予想どおり、海の中には通用しないみたいですね」

「だから言ったじゃない。大丈夫だって」

大介が潜航が間に合ったことに安堵し、ハリがユリカの読みの正しさを褒め、ユリカがほれ見たことかと胸を張る様子がフライウィンドウに映っている。

海に潜ってから葉を摂取しまくっているおかげか、幾分体調が回復したようで、ルリは胸を撫で下ろした。

爆雷の雨は鬱陶しかったが、常に敵艦の動きとヤマトの位置取りを考えて指揮するのに比べれば、随分と負担も小さいのだろう。

にしても、本当に葉漬けだ。その内禁断症状が出るんじゃないかと、不謹慎な妄想が頭を過る。

「アキトさんも古代さんも、いまの砲撃を捉えてくれているといいんですが」

上手く行ったことに安堵しながらも、少しだけ不安そうな声を出す。

「大丈夫だよ。だって、アキトと進君だもん。私の自慢の夫と息子だから、きつと意地でも成功させてくれるよ」

とユリカは余裕たつぷりだ。何気に進をはつきり『息子』と断言しているのが彼女らしいといふかなんというか。

いまさらだがもう確定事項なんですね、とルリは心の中で突っ込む。

「……ある意味古代さん、外堀を埋められましたね」

ルリが小さな声で呟く。

はつきりと断言されたこともそうだが、ひそかに艦内でそういう認識が広まりつつあることを知ったら、きつと顔から火を噴いて恥ずかしがるに違いない。

なにしろ狭い宇宙戦艦の中だ。ちよつとでも面白い話題があるとすぐに伝播する。軍艦の中は娯楽が少ないので当然だろう。

ユリカが進を我が子同然に可愛がっていることはすでに周知の事実。そこに至るまでの過程もどこでどう漏れたのか、案外知られているのだ。

むしろユリカが率先して広めていた。

ある意味艦長が特定の乗組員と過度に親しいというのは大問題な気がするが、それで統率がまったく乱れないこの艦は一体どうなっているのやら。

ああ、そういえば自分もラピスもユリカの家族と公言しているし、追加要員とはいえ夫のアキトも乗ってるから今更なのか。ルリは納得納得と頷いて仕事に戻る。

(アキトさん、古代さん。頼みます)

ルリは別行動中の二人に、改めて自分たちの命運を託す。

(あ、でも古代さんがユリカさんの息子の立場を受け入れたとしたら、その場合私はお姉ちゃん？ それとも妹？ 年齢的には古代さんのほうが上だけど子供になったのは私のほうが……まあ、あとで考えればいいか)

ちよつとびり思考が脱線したルリであった。

ヤマトに向けて反射衛星砲が放たれた直後、GファルコンDXはそのビームの奔流を直接確認することに成功していた。しかも、あまり離れていない！

「大砲が発射された!？」

進が天に向かって伸びるビームに驚愕していると、アキトの叱責が飛ぶ。

「早く排気塔を探すんだ!」

叱責されてわれにかえった進はすぐに機体を上昇させて全周囲を探查する。サテライトキャノンのために搭載された高感度センサーも最大活用。高感度センサーはすぐに目的のものを見つけ出した。

「ありました! おそらくあれが排気塔です!」

海中から放たれたビームのちょうど反対側、小さな崖に埋もれるようにして排気塔があった。放出された凄まじい熱がまるでオーロラのように暗い冥王星の空を照らす。

すぐさま機体を翻して排気塔に直行。ここからサテライトキャノンを撃ち込めば基地を仕留められる！

逸る気持ちのままにサテライトキャノンを用意しようとした進をアキトが咎めた。

「駄目だ進君！——あの大砲まで距離がある。基地施設と併設された砲台じゃないかもしれない。だとすると基地が加害半径に含まれていない可能性がある。ここに撃ち込んだだけじゃ仕損じるかもしれない」

アキトに咎められてはつとした進は、改めて情報を整理する。

排気塔からビームが発射された地点までの距離は約八キロ。

数値だけならサテライトキャノンが命中した時の加害半径には含まれているが、それは地表に露出していて、かつ大砲が基地に併設されている場合の話だ。

大砲が基地から離れているかもしれないし、構造次第では上手く威力が伝わらず、基地に影響を及ぼせない可能性もある。

敵基地の全貌もわからないのに一発限りの切り札を使うのは早計だ。

「あ……すみません。気が急いでしまつて。まずは調査分析、ですね」
「そのとおり。焦る気持ちはわかるけど、こういう時は落ち着かなきゃ。せつかくユリカが作ってくれた機会だ」

アキトは先程の砲撃がユリカの差し金だと察したようだ。

おそらく自分たちが未だに動いていないことから、基地の搜索に手間取っていると見抜き、指標を示すためにわざと撃たせたのだろう。

おかげでビーム砲の正確な位置と、排気塔を見つけた。

進もアキトの言葉でそれに気が付き、要らぬ心配をかけてしまったと少し後悔しながら、ユリカの気遣いに感謝して機体を操る。

ダブルエックスを排気塔に寄せて、内部を覗いてみる。暗視カメラを使用して覗いた排気塔は、やはりというか途中で屈曲していて全貌

を見渡せない。

「これだと、ただ撃ち込んだだけじゃ駄目そうですね。排気塔の周りにエネルギー源でもあれば、誘爆を期待できそうですけど——くそつ、ここからじゃそこまではわからないか」

進はなんとか突破口がないかと周りを調べてみる。これほどの建造物なら、必ず人の出入りする場所や、手入れをするためのなにかがあるはずだ。

排気口のサイズさえ合っていればダブルエックスで直接入り込んでもいいのだが——。

「この排気塔のサイズだと、ダブルエックスで直接入るのは無理か——ん？ アキトさん、メンテナンスハッチがあります！」

排気塔の端にメンテナンスハッチを見つける。やはりあった。ここから施設内部に入り込めるはずだ。

上手くすれば基地の全容を掴めるだろうし、内部から破壊工作もできる。

「よし、ここから内部に潜入してみよう」

アキトはすぐに決断した。

潜入して情報を集め、適切な場所にサテライトキャノンを撃ち込む。それ以外に冥王星前線基地を破壊する手段はない。

一応破壊工作用の爆弾は持ち込んでいるが、持ち込める程度の爆弾では焼け石に水だろう。

動力炉や動力パイプ、または発射直前のあの大砲にでも仕掛けて爆破すれば誘爆で吹き飛ばせるかもしれないが、高望みだろう。

「わかりました。アキトさん、頼りにさせてもらいます」

進はアキトの判断に従って行動することに決めた。立場上は進のほうが上官だが、経験値はアキトが勝る。現場指揮を任せたほうが成功率が高い。

「任せろ。褒められた経験じゃないけど、いまはできることをやる」

そうと決まれば善は急げだ。GファルコンDXを排気塔近くの物陰に着陸させる。

追加されたエネルギーパックを補助脚として、四本足でその場に立

つと、慎重に足を曲げて片膝立ちの姿勢を取る。エネルギーパックもそれに連動して基部で回転、背中に合体したままのGファルコンBパーツを支える。

続けてハイパービームソードを引き抜いて最低出力で起動。メンテナンスハッチを溶かして開口部を造る。これで侵入口も確保できた。

機体を固定した進がコックピットハッチ開閉レバーを捻ると、胸部に合体したAパーツが分離して静かに前方に着陸、ダブルエックスのハッチが解放される。

同時にアキトもGファルコンBパーツのコックピットハッチを解放していた。中央ノーズユニットの赤いドーム状のパーツが左右に割れて、さらに内側のハッチが上に開いてコックピットが露出する。

機体から這い出した二人は、ちゃんとハッチを閉め直してからGファルコンのカーゴユニットの内側、ダブルエックスを格納しても邪魔にならないところに固定していたコンテナを開封した。

「よし。最低限これだけあればどうとでもなるな」

二人は中身を取り出して手早く身に付けた。

白兵戦用に用意されたプロテクターも忘れずに装着する。デザインは極々シンプルなもの、肩当ての付いたプロテクター（背中に酸素パック内蔵）を着込み、手足につけるプロテクターは肘と膝から下を包み込む形状のものだ。色は光沢のない黒。

対レーザーコーティングのほかにも、対弾・耐衝撃仕様の軽量型。可能な限り装着者の動きを阻害しないように工夫を凝らされているため、身に付けてもそれほど違和感がなく防御力は十分。

最初から着込んでいないのは、胴体のプロテクターが操縦の邪魔になるからだ。

腰には常時下げているコスモガンのほかにカプセル型のH-4爆弾二つコスモ手榴弾を二つ、レーザーアサルトライフルの予備のエネルギーパック一つを吊るす。

分解して持ち込んだレーザーアサルトライフルを手早く組み立てて動作の確認。――問題なし。

たった二人での作戦行動になるのだから火力と継戦能力と運用性のバランスが取れたレーザーアサルトライフルは必須だ。今回は真田が用意してくれた銃剣のオプションも取り付けているので、不意の接近戦にも備えている。

また、アキトだけは万能探知機、小型カメラ、マッピング用の目印と、念のためとしてCCを持ち込んだ。

屋内戦ならこれで十分なはずだ。それに二人という少人数での潜入作戦ではこれ以上の重装備は運用できない。

「目的は敵の施設の全貌を掴むこと。できれば大砲くらいは潰したいけど、欲張って失敗しないようにしよう。基地の全貌さえつかめれば、サテライトキャノンで勝敗を決せられるはずだ。慎重に行こう」「はいー」

アキトは先行して穴を潜った。——人影はなし、探知器にも反応なし。セキュリティーに引つかからずに済んだようだ。

(ボソソジャンプができれば楽だろうけど、そう上手くは行かないかもな)

アキトは事前にユリカに聞かされていたことを思い出した。

第八話 決死のヤマト！ 冥王星基地を攻略せよ！

Bパート

「いいアキト？ ガミラスは自分でボソソジャンプを使うことはできないけど、ボソソジャンプの出現座標を狂わせるジャミング手段を保有しているの。なんでも波動エンジン誕生後に盛大に事故つたらしくって、タイムパラドックス的な危険性も考慮して何世紀も前に永久封印したみたい。対策だけは残したみたいだけど」

攻略作戦前、呼び出しを受けたアキトは艦長服をビシツと着込んだ真面目な表情のユリカから、ボソソジャンプに関する注意を受けたのだ。

「スターシアに助言が正しければ、ガミラスもイスカandalも阻害の方法は波動エネルギーとワープシステムで得られた、時空間歪曲作用を利用してジャンプアウトのタイミングと場所を狂わすって方法だよ」

ユリカはかつてスターシアから聞いた、研究が停止する前のボソソジャンプ対策についてアキトに伝えてくれた。

というのもアキトはヤマトが発進する直前になって初めて真実を知らされ、直接乗り込んだという経緯がある。そのため同じ真相を知る共犯者であるイネスやエリナ、教えてくれたアカツキと違って詳細までは把握していない可能性を危惧してくれたらしい。

「ジャンプに耐えられる肉体は持っていないも、私たちがみたいなのA級ジャンパー自体が相当なイレギュラーらしくて、少なくともイスカandalと記録にある限りのガミラスでは前例がないらしくて、A級ジャンパーを使わない入力装置へのジャミング手段は開発されてたみたいけど、私たちのイメージ入力への阻害はたぶんできないって言った。だから敵にA級ジャンパーの知識はないと思って構わないって。火星の後継者の実験内容を回収してるとも思えないしね」

ユリカは断言する。ガミラスはA級ジャンパーを知らない。そし

てその妨害もできないと。しかし――

「ジャミング圏内でのジャンプは、もしかするとかなり危険かもしれないよ。ジャンプアウトに影響する時空間の歪みが、ジャンプインの時にどう作用するのか、検証はできていないから……。いまの私だから言えるけど、本来ボソソジャンプと波動エネルギーは相性が最悪なの。波動エネルギーは超光速粒子のタキオンの塊で、光速を突破した物体は時間が遡るって聞いたことあるでしょ？」

「いやない。SFにそこまで詳しくないから」

素直に答えたら複雑な表情で黙ってしまった。勉強不足でごめんなさい。

「ゴホンツ……ともかく、時間移動を利用しているボソソジャンプにとって、波動エネルギーがもつ時空間歪曲作用とタキオンの時間逆行作用が組み合わさると、位置座標も時間座標に大きな誤差が生じる可能性が高いの。なにしろボソソジャンプの実用化段階では波動エンジンも波動エネルギー理論もなかったから。ダブルエックスがタキオン粒子砲を装備してるのに発射の都度自己生成する手間をかけてるのも、ボソソジャンプシステムの安全性を考えてのことなの」

なるほど、とアキトは頷く。たしかに疑問だったが、それが理由だったのか。

「もちろんヤマトも例外じゃない。というか波動エネルギーな分もつと質が悪い。ヤマト自身は波動エネルギーが空じゃないと実質ジャンプ不能って考えて。艦内でのジャンプについては、炉心内部で生成してエネルギーに変換してる分には外部に影響しないように遮蔽されてるから大丈夫なはず。といってもいまのヤマトは敵と同じジャミングシステムを搭載してるから、艦内でのジャンプは（法度だよ。時間がずれるだけならまだしも、位置座標が狂ったら最悪宇宙にポイだから」

ユリカの言葉に、アカツキがダブルエックスをわざわざ残していた理由を知った。ボソソジャンプで乗り込もうとしたら、最悪そうだった可能性があったのか。

「じゃあ、冥王星基地内部からの脱出にボソソジャンプを使うのは、リ

スクがあるんだな？」

「うん。でも、基地施設の動力源が波動エネルギーかどうかによるけど……。もちろん、停泊中の軍艦から波動エネルギーを融通してもらおう形でジャミングしてる可能性もあるよ。——だから、あまり頼らないで。慎重にね。アキトがいなくなったら私、私……」

最後は泣きそうになりながら訴えるユリカの顔を思い出して、アキトは気を引き締める。

絶対に死ねない。ユリカを遺しては。

同時刻、シウルツはヤマトの動きに違和感を感じていた。

「ガンツ。ヤマトの動きに違和感を感じんか？」

「違和感、ですか？」

ガンツは真意を掴めない、という顔で聞き返す。

「うむ。ヤマトはもしかして、わざと反射衛星砲を撃たせたのかもしれん。なにか狙いがあるのか、それとも……」

なんともむず痒い感覚が続く。

仮にわざと撃たせたとして、ヤマトの現在位置からでは反射衛星砲を直接確認することはできない。

衛星の反射にしても、ヤマトの探知装置を警戒して惑星の影を利用するように屈曲させている。それに、ヤマトから別動隊が出現したという情報も入っていない。

先程の一撃を回避したのは頭上の反射板の動きを見てだろうが、そう何度も同じ手で回避されるほど、反射衛星砲は甘くない。

「……仕方ない。爆雷攻撃を続ける。もう一度燻り出す。そして、今度はヤマトの死角から反射衛星砲を叩き込んで決着をつける」

あまり時間を掛けてはいられない。ヤマトがなんらかの対策を講じる前に決定打を与えなければ。

シウルツは焦っていた。ヤマトの動きが読めない。

別動隊を出したわけでもなく、直接攻撃に転じようとしているわけ

でもない。だが狙いもなくあんなことをするような指揮官とは思えない。

……まさか、別動隊はすでに。

「——念には念を、か。ガンツ、基地内部に不審な動きがないか確認させろ。どんな些細なことでもいい、見落とすな」

アキトと進は慎重に施設内部を進んでいた。発見されないように身を低くして物陰を辿りながら、監視カメラなどを警戒しつつ慎重に移動する。

アキトは大型の携帯端末とあまり変わらない大きさの万能探知機を左手に持ち、各種センサーが捕らえるトランプやエネルギー反応を目安に進路を定め、角に遭遇するたびに小型カメラで覗き込み、拾った映像を探知機の画面に映して監視カメラや敵兵を警戒しながら進む。来た道に戻るよう、そつと印を残すのも忘れない。

あとに続く進も緊張に口の中を乾かせ、何度も唾液を飲み込みながらアキトの足を引っ張るまいと神経を張り巡らせながら同行していた。

施設に侵入してすでに一時間が経過している。

緑を基調にした色調、生物的な意匠を持つ基地内部は有機的な不気味さを感じさせる。

驚くことに大気組成も地球人の呼吸に適したもので、仮にヘルメットを取っても施設内なら問題なく活動できてしまう。

この大気組成と施設の形や操作盤から、ガミラス人が間違いなく地球人型の宇宙人であると結論付けられた。貴重な資料になる。アキトはカメラで可能な限り撮影しておくことにした。

最低限の人数で運用しているのか、施設内部は思いのほか静かだ。見かけるようになった兵士も、どこか怯えた表情であちこちを駆けまわっている。推測どおり、地球人と遜色ない外見だ。——肌の色が青いことを除いて。

「——ヤマトが予想以上にしぶとくて、浮足立ってるみたいだな」

「ええ。つまり、まだヤマトは無事ってことですね」

二人はヘルメットを接触させて会話する。接触通信だ。電波を飛ばして傍受される危険性を下げられる。

いまはガミラスの正体が地球人型の異星人であることを詮索する余裕がない。だから自然と事務的な会話になった。

慎重に慎重を重ねて、息の詰まる時間を過ごしながら二人は着々と施設の奥へと侵入していく。

幾度か扉を潜った先で、二人は窓のある長い廊下に出た。慎重に廊下に出て、窓の外の景色を確認する。

「なるほど、やっぱり水中に施設があったか」

アキトはようやく全容が掴めたと、満足げに頷く。

「これほどの規模……あそこでサテライトキャノンを撃たなくて正解だった」

進も想像以上の規模に呆然としている。

眼下に広がる基地施設はいくつもの透明な耐水圧ドームが連なつて構成される、大規模なものだった。

幸いサテライトキャノンで十分致命的なダメージを与えられる規模だが、水上から闇雲に撃つても効果は薄いだろうと、アキトは分析する。

それにここから見ただけではとても基地の施設の全容が掴めない。太陽から遠い冥王星だし深度も深いのだろう、ライトで施設が照らされているからこそおおよその規模はわかったが、それだけだ。

水面には分厚い氷、それに深い深度。ドームがライトで照らされていても上からでは到底見つからない。……考えられた施設だ。

一気に全部を吹き飛ばせる保証がないのなら、せめて基地の中核——動力炉か司令室を確実に破壊したいのだが。

なにか利用できそうなものは……。

「アキトさん、あの海底に走っているパイプはなんでしようか？」

進に促されて視線を向けると、透明なパイプかチューブと形容できるなにかが一点に向かって走っていた。その先を確認すべく、カメラ

を構えてズームアップしてみる。

「これは……もしかして、あのチューリップみたいな物体があの大砲なのか？」

カメラにぼんやりと映るのは、チューリップのような先端をもつ細長い物体で、海底に透明なドームに包まれる形で保護されている。

「とすれば、この海底を走っているパイプはあの大砲へのエネルギー伝導管の可能性が高いですね——アキトさん、いいことを思いつきましたよ」

「奇遇だな進君。俺も思いついたばかりだよ」

二人は顔を見合わせてニヤリと笑う。

「サテライトキャノンと大砲の発射を合わせ、誘爆も含めて基地を葬り去る！」

まったく同じ内容を同時に口にしてさらに笑みを深くする。

「よし、やることが決まった。もう少し基地を探索して、保険を仕掛けておこう。その後脱出してヤマトに連絡、あの大砲を誘ってもらえばばっちりだ」

「はい！」

「やるぞ。今日で冥王星基地は最終回だ」

反射衛星砲を撃たせてから二時間、ヤマトへの爆雷攻撃は続いていた。

在庫が乏しくなってきたのか、幾分散発的にはなっていたが、止まることはなかった。

破損個所付近に命中した爆雷のダメージは、確実にヤマトの内部機構を破壊して浸水を招いていた。浸水箇所が増えたことで電装品への被害も拡大の一途を辿り、あちこちでエラーが発生している。

このままではいずれ致命傷に繋がりがかねないと、クルーたちは危機感が煽られていた。

「むく。さすがに被害もシャレにならなくなって来たなあ——アキトと進君がここまででこずってるから察するに、相当規模が大きいか、効果的にサテライトキャノンを撃ち込める場所の選定に手間取って

るみたいだねえ」

アキトたちが失敗したとは露とも考えないユリカ。待つ以外にできることがないので欠伸をひとつしてからぐつと体を伸ばして「待つしかないか」とだらけきっている。

まあ最高責任者が力を抜いていれば、各班のチーフも過度に部下を締め付けるわけにはいかないだろうから、変に艦内の空気が重くなったりもしないだろう。とか考えてだらける自分を正当化してみたり。

「艦長。このままで大丈夫ですか？」

大介は不安げな顔で操縦桿を握っている。かれこれ四時間はこうして潜ったままだから、不安になっても仕方ないか。

「ほかに手段もないしね。——ラピスちゃん、エネルギー供給ラインのほうはどうなってる？」

「浸水個所は手が付けられていないので、進展はあまりありません。この爆雷の中では、水中で作業させるわけにもいきませんから……」

ラピスは悔しそうだ。爆雷の雨の中、迂闊に船外作業をさせれば爆圧で作業員が死ぬ。小バツタとてバラバラだ。

しかし水没してしまった供給ラインの修理なくしてヤマトが完全になることはないというジレンマ。まあじり貧だ。

「だよねえ。真田さんも似たような感じですか？」

「はい。申し訳ありません艦長。やはり、この攻撃の中では修理作業を進めることはできません」

第一艦橋に戻って来ていた真田も、苦虫を噛み潰したような顔で報告する。できるだけの処置はしているが、破損個所を直接触れられない限り、根本的な解決は不可能。わかりきっていることだ。

だから「自己再生とかできない？」と心の中でヤマトに問いかけてみる。「できたら苦労しません！」と力いっぱい反論された。

ですよね。

「じゃ、とりあえず待機で。医療科はどうなってるのかな？」

「軽症者の手当は終わったそうよ。でも、重傷者の手術はまだ継続中。医務室からも医療室からも、爆雷をどうにかしろって苦情が来てるわ」

通信席で艦内通話を色々聞いていたエリナが、医務室と医療室からの苦情を繋げる。たしかに重病人の治療をするのに、手元を狂わす振動はノーサンキューだ。

「どうにかしろって言われてもねえ〜」

頭の後ろで手を組んで悩んでいた時、待ち望んでいた一報が飛び込んで来た。

「――さすがだよ二人とも……これでこの戦いはファイナーレ、私たちの勝ちだ」

自分でもびつくりするほど冷たい声が出た。ああ、自分でも自覚していなかったが結構腹に据えかねてたのか。

隣で大介も怯えた表情を見せている。――失敬な、(病人だけど)まだまだ若くてかわいい人妻さんなんだぞ。

今後の方針を決めたアキトたちは、さらに基地の奥に足を踏み込んで動力施設と思われる場所に到達していた。ここを見逃す手はないと、持ち込んだH―4爆弾セットする――もちろんこれは罠だ。

わざと見つからなそうで見つかりそうな場所にセットする。こちらの本当の狙いを悟られないようにするためにも見つからなくてももらったほうがあるがたいくらいだ。

仮に発見されずに爆破に成功したとしても、こちらに損はない。

欲を言えばあの大砲に設置したかったが、距離もあるしガードが堅いのは目に見えている。このメンバーでは無理だった。

爆弾を設置してダブルエックスの所まで戻ろうとしたところで、とうとう敵兵に発見された。二人は発見した敵兵を素早く射殺、持っていた携帯端末をちやつかり拝借しつつ、脱兎の如く駆けだした。こうなったら時間が大事だと、速やかに来た道を駆けだした。

予めセットして置いた印を頼りに全速力で駆けて行く。追いかけてくる敵兵にはレーザーアサルトライフルを三点バーストで撃ちかけて牽制する。

レーザーアサルトライフルから吐き出されたパルスレーザーが壁や床に当たって閃光を煌めかせ、被弾個所を赤熱化させる。命中はは

なから期待していない。少しでも足を鈍らせて追跡を躲す。ダブルエックスまで辿り着けなければこちらの負けだ。

出し惜しみはなしだと言わんばかりに腰に下げているコスモ手榴弾をひとつ掴むと、角を曲がる際にグリップの底にある安全装置を壁に叩き付けて解除、そのまま後方に放り投げる。

起爆。爆音に交じってガミラス兵士の悲鳴が聞こえる。少しは効果があったようだ。

もう一発放り投げる。爆発。悲鳴。そしてレーザーアサルトライフルの静かな銃声が、冥王星前線基地の一角に響く。

なんとか道なりを半分まで辿ったところでどうとう補足されてしまった。前後から飛び交う銃撃を物陰に隠れてやり過ごす、もう動けそうにない。

「仕方ない。駄目元でジャンプしてみる」

「だ、大丈夫なんですか？ 艦長が——」

「聞いてるけどほかに手段がない。一か八かだ！」

アキトは進の肩を掴んで身を寄せると、CCを取り出してダブルエックスの足元をイメージする。

（頼む、跳べてくれ！）

アキトは神に祈る気持ちでボソソジャンプを決行する。

……………失敗するかと思われたボソソジャンプは成功した。どうやら懸念していた座標の乱れは回避できたらしい。

ジャンプアウトには威力を発揮できてもジャンプインには通用しなかったのだろうか。いや、考えるのは後回しだ。

邪魔になる胴体のプロテクターをその場で脱ぎ捨てて、すぐさま眼前のダブルエックスに乗り込む。

幸いなことに、ダブルエックスは発見されていなかったらしく、妨害を受けずに離陸できた。あとは、

「よし、ヤマトに連絡だ。あの大砲を撃ってもらおうぞ！」

アキトはすぐに積み込んでいたボソソジャンプ通信機を起動して、ヤマトにメッセージを送った。

『冥王星基地に対してサテライトキャノンを使う。誘爆を狙うため敵

の大砲を撃たせてほしい』
と。

「侵入者を発見しただと？」

シユルツは最悪の予想が当たってしまったことをここで知った。どうやら最初から別動隊を出していたらしい。——それらしい機影をヤマトが放った痕跡は見つかっていないのだが……。

いや、一度だけあった。ヤマトが艦載機を放出した、戦闘開始直前だけならその隙がある。油断した——いやヤマトに注意を向け過ぎたか。タキオン波動収束砲に意識を向け過ぎた。

しかし、ヤマトの艦載機の総数は最初の威力偵察で空母航空部隊とやり合った数とほぼ一致している。

ヤマトのサイズといままでに判明している装備から推測される格納庫容積を考慮しても、おそらく最大搭載数に近い数が出撃していたはずだ。

別動隊といっても、艦載機一、二機程度。戦力というには心許ない数しか出せなかったはずだが、それで十分だと確信を持っていたのだろうか。

「はっ！ 数は二名、ボソンジャンプを使用して逃走した模様です」

部下の報告にシユルツは顔しかめる。

（一体どうやって潜入した。基地の所在を連中は——いやまさか、反射衛星砲の排気塔か!? それならヤマトの不可解な行動も納得できる！ わざと反射衛星砲を撃たせ、地表に露出せざるをえない排気塔の所在を確認して、メンテナンスハッチから内部に侵入したのか！

迂闊だった、ヤマトを仕留めるのに焦り過ぎたの……。だとしてもたった二名？ 少な過ぎる。しかも、弱いとはいえジャミングの影響でボソンジャンプを成功させるとは……よほど強力な入力装置を持っているのか？ 時間歪曲すら補正するほどの？）

思考を巡らせるが情報が少な過ぎて答えに辿り着けない。それに

確認せねばならぬことはほかにも山ほどある。

「なにか仕掛けられていたか？」

「はっ！ 侵入者を発見した反射衛星砲の機関部の一角から、時限爆弾らしいものを発見。現在処理班が向かっております」

部下の報告にとりあえずは一安心。別動隊を使つて侵入したようだが、人数を絞り過ぎた挙句、爆弾の設置も杜撰だったらしい。

見事別動隊を基地施設にまで侵入させた割にはお粗末な結果だ。そもそもたつた二名で攻略できるほど、冥王星前線基地は無防備ではない。見込みが甘いにもほどがある。

「そうか、よくやった。どうやらこれでヤマトの起死回生の策は潰えたようだな」

「シユルツ司令、排気塔付近にヤマトの所属と思われる艦載機の反応を発見しました！」

ガンツの報告にモニターを向くと、そこには戦闘機と人型が垂直に交わつたようなアンバランスな機体が空を飛んでいる。

見慣れない機体だ。

いやたしか、ヤマトが最初のワープをした時にボソンジャンプで出現し、傷ついた駆逐艦一隻を屠つた機体が、あのような形をしていたと思う。それ以外に交戦記録もないし、その時もほかと比べれば強力なビーム兵器を所有していた以外、目立った動きをしていなかった。

——ヤマトの性能が驚異的過ぎて完全に失念していた機体だ。そういうえば、先の艦隊戦では姿を見かけなかった気がする。

それにしても、まさか艦載機一機程度の別動隊で破壊仕事を仕掛けてくるとは思わなかった。無謀を通り越して馬鹿だと断じるしかない。

だがあのヤマトが、この冥王星基地と単艦でここまで戦えている指揮官が、こんな粗末な作戦を考案するとは考えにくいが……。

「!? 司令、ヤマトが浮上しました！ 海面を飛び出してこちらに飛んできますー！」

重なる報告にシユルツは一瞬迷つたがすぐに、

「よし！ 反射衛星砲でヤマトを狙え！ あの艦載機は戦闘機に任せ

ろ！」

とヤマトを優先して叩くことを決める。

所詮は艦載機、母艦さえ沈めてしまえば袋の鼠だ。

残された艦隊戦力も投入して徹底的に叩くことを決意し、自らも乗艦してヤマトと雌雄を決する準備を進める。

その頃ヤマトは、アキトたちの要望に応じる形で海面から飛び出し、翼を開いて緩やかに飛んでいた。

「艦長。反射板が開きました。敵の砲撃体勢が整ったようです」

緊張の滲んだルリの声が、第一艦橋に届く。

「さて、お膳立てはしたからね。頼んだよ、アキト、進」

ユリカは静かな面持ちで離れた所にいる夫と息子(?)にすべてを託した。

祈りは通じた。ヤマトが飛翔してから三分ほど経ってから、右前方約一〇〇キロの地点で巨大な爆発が起こった。

全員が緊張を顔に張り付けてメインパネルを見詰める中、ユリカだけは窓の外、その視線の先にいるであろうダブルエックスに優しい眼差しを送っていた。

「よくやったね、進。ありがとう、アキト」

「シユルツ司令、例の艦載機が反射衛星砲の上空で停止しました」

部下の報告に戦艦に乗艦していたシユルツはすぐに応じる。

「構うな！ 射線上で停止してくれるのなら手間が省けるといふものだ。ヤマト諸共葬ってやれ！ 反射衛星砲発射用意！」

進とアキトはすぐに大砲の真上にダブルエックスを停止させた。

ここからサテライトキャノンで水中の標的を狙撃する。自分たち
にできる正真正銘最後の攻撃だ。

進は一度唾液を飲み込んでから、右操縦桿の赤いスライドスイッチ
を左に押し込む。スイッチが入ると、操縦桿前方と上のカバーが開い
て、専用の管制モニターが出現した。

同時にダブルエックスもその姿を変える。

砲身は伸びたままさらに前方に倒れこみ、肩から出現したマウント
兼スコップユニットにがちりと挟まれて固定される。

Gファルコンの拡散グラビティブラストの砲門が一度上を向き、背
中のリフレクターユニットが起き上がりて展開、六枚三対の羽のよう
なシルエットを構成する。その形はまるで横向きのWを描いている
かのよう。

リフレクターユニットが展開されると、上がっていた拡散グラビ
ティブラストの砲身も下がって正面に向き直る。

手足に装備されている紺色のカバーが展開、中からそれぞれ二枚
セットの放熱フィンが出現した。

この姿こそが、ダブルエックスのサテライトキャノン発射形態。ダ
ブルエックスの真の姿だ。

変形が完了するとGファルコンのコンテナユニットの下部から突
き出たエネルギーパックからの供給が始まる。

リフレクターユニットの内側の面が金色に輝く。膨大なエネル
ギーをタキオン粒子に変換し、砲に供給すると同時にタキオンフィ
ールドを形成、外部からタキオンバースト流の制御を行うシステム。

変換しきれなかった余剰エネルギーと機体の発熱を、手足の冷却
フィン——エネルギーラジエータープレートが効率的に排出するこ
とで、ダブルエックスはその身に蓄えられる膨大なエネルギーに負け
ることなくこの強大な力を制御できる。

右の操縦桿の管制モニターに表示されたX字のエネルギーメー
ターが最大値を示し、青く発光した。

「エネルギー充填一二〇パーセント。最終安全装置解除！」

進の操作で砲身内部のストライカーボルトと遊底を固定していたロックが外れる。発射機構は旧ヤマトの波動砲のコピーに近い。

眼前のHUDは海中にある大砲の位置にロックオンしたことを示している。よく観察してみれば、ビームの発射で氷の凍結具合がほかと違ってするのが丸わかりだった。最初に気付いていれば……。

右操縦桿の後方に突き出ているアナログステイックを使って微調整、これで決める！

「ツインサテライトキャノン、発射あつ!!」

進は右操縦桿のトリガーを引き絞る。

わずかな間をおいて、轟音と共に両肩の砲身から強力なタキオンバースト流が放出された。それはタキオンフィールドの作用もあつて砲口から放たれた直後、絡み合うように一軸に合成され強力なビームへと変貌する。

回転しながら直径二〇〇メートルにはなろうかという青白いビームはそのまま凍てついた海面に突き刺さる。

その膨大な熱量で瞬時に海面が蒸発、ほとんど減衰することなく海底の反射衛星砲に突き刺さつて瞬時に消滅させた。

そして——大爆発。

「な、なにぞことだ!？」

突然の衝撃についてシユルツはパニックを起こした。

彼にとって不幸だったのか、それとも幸福だったのか。

あの新型機が撃ち放ったビームは一瞬で海底の基地に直撃し、その膨大な熱量と空間歪曲作用、そして衝撃によって瞬時に基地全体に致命的なダメージを与えたのだ。

反射衛星砲の制御室を離れ、ドックの戦艦に移乗していたシユルツは、膨大な水の障壁と頑丈なドックのおかげで基地諸共消滅することを免れたに過ぎなかったのである。

「シユルツ司令！ 例の艦載機の砲撃です！ 基地が一撃で壊滅的な

打撃を受けてしまいました！ 誘爆も続いていてドックもいつまで持つかわかりません！ 逃げないと危険です!!」

ガンツもパニツクに陥りながらも状況を報告し、退避を促す。

「ば、馬鹿な。艦載機に……八メートルにも満たないあんな人形に……これほどの火力を持たせるなんて……!」

地球人は阿呆か。シュルツは心の中で叫ぶ。物騒なんてものじゃない。

ある意味ヤマトのタキオン波動収束砲よりも危険ではないか。

シュルツは悟った。見事ヤマトの狙いに乗せられたと。

だがこの状況は到底予想できるものではない。ガミラスの戦略兵器は惑星間弾道ミサイルとでもいうべき超大型ミサイルや遊星爆弾といった兵器が主流であり、基本戦術が大艦巨砲主義で軍艦が主戦力。艦載機はその補助だ。

これは恒星間に及ぶ広大な空間を移動出来て十分な戦力を得られるのが艦艇のみという、ガミラス以外も含めた恒星間戦争の事情によるところが大きい。

そのため地球のようにあくまで惑星間、それも極めて狭い範囲における防空・攻撃を目的とした艦載機を主軸にした戦闘自体が、ガミラスからすれば時代遅れの戦術に過ぎない。

よって、ガミラスは人型機動兵器の存在に驚き、その威力をある程度評価しながらも「所詮は恒星間戦争に適さない人形遊び」と意に介していなかった。

なので、まさか全高八メートルにも満たない艦載機が、恒星間戦争に対応可能なスペックを有し、それどころか地上の基地施設をただの一撃で消滅させることができる大砲を備えているなど、想像すらできなかつたのである。

だがシュルツは自らの幸運に感謝した。なんとしても逃げ延びてヤマトの脅威を伝えなければ。ヤマトは艦載戦力にすら戦略兵器を持たせていると、なんとしても知らせなければならぬ。

シュルツは屈辱を噛みしめながらガンツに促されてヤマトとの交戦を諦め、艦隊ごと退避することを決定した。

反射衛星砲もなしにヤマトと直接対峙することは危険であるし、あの艦載機の大砲についても詳細がまるでわからない——このままでは戦えない、分析しなければ。

シウルツはモニターに映るヤマトの新型機動兵器の姿を瞼に焼き付けながら、ほうほうの体で逃げ出すしかなかった。

進は眼下の光景が信じられなかった。

サテライトキャノンの一撃は、予想以上の威力を持って進たちの期待に応えて見せた。

サテライトキャノンが起こした水蒸気爆発の衝撃波で上空に吹き飛ばされたGファルコンDXであったが、持ち前の頑丈さでほとんど傷らしい傷を負わずにもちこたえ、アキトがGファルコン側から懸命にコントロールしたおかげで墜落も免れた。

眼前では基地から脱出したと思われる艦隊と、ヤマトに蹴散らされた敵艦隊の残存戦力が合流して一目散に冥王星を去っていく。

どうやらヤマトやダブルエックスに攻撃する気持ちも萎えてしまったようだ。

エネルギーを使い果たして浮いているのがやつとなので、幸運だった。もしも敵が相打ち覚悟で向かってきていたら、ダブルエックスはここで撃墜されていただろうし、満身創痍のヤマトもどうなっていたか。

頭の片隅でそう状況を把握しながらも、進は自らの手で招いた惨状に言葉を失っていた。

波動砲の時も感じたこの感覚。そうだ、これは後悔と……畏怖だ。たしかにガミラスは憎い。木星やコロニーなどの宇宙移民の国を滅ぼし、地球を荒廃させ、兄を殺し、そして新たな母というべきユリカを死に追いやろうとしている。

憎くないはずがない。だが、だとしてもこれはやりすぎではないか。

進の胸に去来する大量破壊兵器への恐怖。そしてその引き金を引く自分自身への嫌悪。その原動力となりえる憎しみの感情。すべてが進の心中をかき乱し、痛みとなって発露していた。

「——やったな、進君。これで冥王星基地は終わりだ。君の復讐も、終わったんだ」

優しい声でアキトに言われて、進は改めて宣言した。

「はい……これで、俺の復讐は終わりました。いえ、終わらせませすー」
進は最初は力なく、そして最後は力を込めて断言した。

二度と憎しみの感情で波動砲もサテライトキャノンも撃つことはない。

撃つとすれば、それはそうしなければ生き残れない状況下での最後の手段とする。

例えその結果、多くの命を散らすことになったとしても、その現実から逃げずに受け止める。

進は自然とその回答に、ユリカから示された答えに行き着いていた。

「ありがとうございます、アキトさん。おかげで俺、気持ちの整理がつかまりました」

「そっか。よかった」

アキトは嬉しそうだった。

その表情には凄まじい威力を見せつけたサテライトキャノンへの恐怖が伺えるが、それ以上に進の成長を見届けられたことのほうが大事のようだ。

進はそんなアキトの様子に、自分が支えられているんだと実感する。

だから自然と、言葉が発せられていた。

「俺、ユリカさんのこと、母親みたいに思ってます」

「ん？」とアキトは唐突に切り出された話題に首を捻る。

「不思議な気分です。歳だつてそう離れてないのに、姉じゃなくて母なんですよ。普段の態度や言動は姉のほうがびっぴりのはずなのに——そうになると、アキトさんもユリカさんの夫だから……兄じゃなく

て父、になるんですかね」

照れ臭そうに心情を告げる進にアキトは赤面する。

まさかの展開だ。

ユリカがお母さんぶっていると言わされた時からこういう展開は予想していたが、まさか本人から切り出されるとは……。

「なんか、だいぶユリカに毒されたみたいだな」

アキトはそうとしか言えなかった。

「否定はしません——だから、これだけは言わせてください。ユリカさんが俺の背を支えて、心を癒してくれたから。そして復讐のために戦って、それを乗り越えた経験があるあなたが諭してくれたから——俺はもう、復讐に生きることはない。どんな形であれ、俺はあなたたち夫婦のおかげで救われたんだと思います」

それは心からの感謝だった。

もしもユリカに出会わなければ、アキトに出会わなければ。

自分はガミラスを憎み続け、波動砲やサテライトキャノンといった大量破壊兵器の使用に一切躊躇のない悪魔になっていたかもしれない。——そう、憎んでるはずのガミラスの同類になったかもしれないのだ。

「そう言ってもらえると、俺も救われた気分だよ……どんな言い訳をしても、俺の罪は消えない。俺が無関係な人の命を、幸せを奪った事実には消せない。——でも、そんな俺でも誰かのためになれたっていうんなら、嬉しいな」

アキトは痛々しい笑みを浮かべて進に答える。自分のしたことの重大さは自分が一番よく知っている。だから、

「俺さ、取り返しのつかないことをしたって自覚はある。だから帰れなかった……俺は、もう昔の俺じゃない、あいつの王子様じゃないんだって、自分で決めつけてた。あいつの気持ちを見捨てた。——結婚する時にわかってたはずなのに。あいつの幸せを決めるのはあいつ自身だから、あいつを信じて一緒になろうって。なのに俺は、ユリカを捨てよう……」

涙が頬を流れる。あの状況で戦わないという選択肢はなかった。

ネルガルにすべてを任せて、ユリカが帰ってくるのを待つなんてできなかった。

自分の手で取り戻したかった。

護れなかったから、本当に大切な人だから。

大切な人が、あんな連中に蹂躪されている現実には我慢ならなかった。

その結果、罪を重ねた挙句自分勝手に放り出そうとするなんて、ユリカにとって酷な仕打ちだと自覚はあった。

だがアキト自身の気持ちの整理がつかなかった。だからヤマトでユリカが旅立つに至るまで戻れなかったのだ。

「それを責めることは……誰でもできる。でも誰もがそうなる可能性を秘めているんだと、俺は思います」

進はそんなアキトに思ったことを率直に投げかけた。

「罪は罪、償いが必要だと考えるのは自然です。でもあなたたちが置かれた境遇と、あいつらの——火星の後継者の悪辣さを考えると、一方的に責めるわけにはいかないって思えるんです。たしかにあなたは、確かに罪を重ねたかもしれない。でも、人の心を捨て去ったわけではない。だから償いの機会を与えられるべきだって思うんです——それに、愛する人に変貌した自分を見せたくない、失望させたくないって気持ちは、いまの俺にはわかります」

アキトは進の告白を黙って聞いた。かつての自分と同じ道を進みかけ、踏み止まることに成功した彼の言葉を。

「俺は、ユリカさんを失望させたくない。尊敬してるから、心の底から尊敬してるから。だから、俺を導いてくれていた彼女を裏切るようなことはしたくないって、彼女が自慢できる俺でありたいって思うから——だから、俺はアキトさんの行動を非難できません。そんな資格もない。でも、俺はアキトさんと出会ったことを嬉しく思うし、あなたに助けてもらったと信じて疑わない。——だから、ヤマトの旅の成功を持って罪滅ぼしにしましょう。そうしてユリカさんと……お母さんと幸せになるんです」

それは進の本音だった。最初の出会いを決していいとはいえない

かった。

でも、ユリカがいたからいまの自分があると、進は疑わない。だからこそ、アキトの気持ちがわかる気がするのだ。

「ありがとう。理解者がいるって、いいもんだな」

「……ええ。本当に……理解者がいるって、素晴らしいです」

涙ぐんだ声で頷き合う二人。それ以上の会話は、もう必要なかった。

「帰ろう、ヤマトに。俺たちの居場所に。ユリカの所に」

「帰りましょう。そして地球も……お母さんも、必ず救いましょう！」

二人の想いを乗せて、GフアルコンDXは冥王星の空を飛ぶ。

その先に待つのは人類最後の砦であり、ユリカが命を懸けて蘇らせた最後の希望——宇宙戦艦ヤマト。

二人にとって大事なユリカの艦——そして、地球と人類と、彼ら家族の未来を乗せる艦が待っているのだ。

冥王星基地が陥落して少し時間の過ぎた頃、ガミラス本星では。

巨大な姿見の前で身嗜みを整えていたデスラーは、鏡に映りこんだヒスの姿を認める。焦っているようだ。

「デスラー総統……冥王星前線基地が、全滅しました……」

力なく報告するヒスに、デスラーは冷たい笑みを浮かべて聞き返す。

「全滅、だと？」

その様子にはヒスは身を固くして続ける。

「はっ、シユルツ司令とガンツ副指令は、辛うじて艦隊と共に脱出したようですが……」

「脱出？」

デスラーの冷たい声にはヒスは当事者でないにも関わらず萎縮する。

「戦闘を放棄したのか？ もつてのほかだ。ガミラス星への帰還は許さん——戦って死ねと……いや、ヤマトを屠ることができたのなら、

帰還を許すと伝えろ」

デスラーの冷酷な言葉にただただ萎縮するヒスだが、内心ではそれも仕方のないことだろうと思う。

冥王星前線基地には追加の艦隊を派遣し支援していたのだ。実験兵器とはいえ反射衛星砲すらあるのに、戦艦一隻にシユルツは敗北して、おめおめと生き恥を晒している。

この大失態に見合う償いは、死しかないだろう。

それだけに最後の温情とでもいふべき言葉には酷く驚いた。だが、そうでもして発破をかける必要があるということなのか。

たしかに、いまはガミラスにも余裕がないのだが……。

デスラーは表面上は落ち着いていたが、内心では激しく憤っていた。

戦力を増強してやったのに敗北したシユルツらに対する怒りもそうだが、新たなガミラス星として目星をつけた唯一の星の思わぬ反撃に対しても、焦りを感じている。

(住む場所の違い程度で互いを滅ぼし合うような野蛮人ごときが調子に乗りおって……！ 宇宙戦艦ヤマト……その名前、忘れんぞ。必ずや葬り去り地球をわれらが手中に収めてみせる。それこそが、わがガミラスの生き延びる唯一の道なのだ)

デスラーは傍らにある端末に表示される映像を見て忌々しげに唇を歪める。

モニターには渦巻く赤いガスが悠然と宇宙を突き進む姿が映し出されていた。

それは進路上にある星々を飲み込みながら、一路ガミラス星を目指して進んでいる。

その渦は、ガミラスで『カスケードブラックホール』と名付けられた、世にも奇妙な移動性ブラックホールであった。

女王スターシアはイスカンダルの首都マザータウンの中心にある

自らの居城であるタワーの屋上から、夜空を眺めていた。

その視線の先には双子星であるガミラス星がある。

隣人の暴挙にはかねてから憤りを感じていたが、今回の謀略にはこ
とさら憤っていた。

しかし隣人であるがゆえに彼らの苦悩は理解できるし、生きたいと
願うことは生物の常だ。

彼らの行いが許されるわけではないが、さりとして……。

「ユリカ。あなたは今頃、ヤマトと共にこのイスカンドルを目指した
長き旅路についているのでしょうか？」

スターシアは遙か彼方から救いを求めに意識を飛ばしてきた、地球
の女性を想う。

いまはもう、接触することも叶わぬ女性を。

最初は彼女の要望に対してスターシアは難色を示した。

ガミラスがどのように地球を侵略するのはおおよそ予想が付い
た。なるほどたしかにイスカンドルに遺された技術なら地球を救う
ことができよう。ガミラスにも抗えよう。

だが、それが新たな争いの火種になることを懸念せずにはいられな
かった。

提供しなければならぬ技術の中には、超兵器であるタキオン波動
収束砲が含まれている。

そして、スターシアにとってそれ以上に許せない手段も取る必要が
あった。だから応じたいという気持ちを抱きながらも、イスカンドル
の女王として難色を示したのだ。

はたしてそれらの技術を渡して、かの星がガミラスと同じ道を歩ん
でしまわないかと。だからスターシアは問うた。

「——強過ぎる力は、使い方を間違えれば他人だけでなく自分自身を
も傷つけます——あなたたちは大丈夫ですか？」
と。

それに対するユリカの答えは簡潔で力強かった。

「——もちろんです！」

その答えを受けてスターシアは決断した。地球を——ユリカを信

じて支援すると。

それから数回、彼女の意識と話をして、イスカンドルに伝わる技術をいくつも提供した。彼女の記憶力の高さと、ボソンジャンプを使ったデータ送信を駆使して。

波動エンジンと波動砲だけは送られてきたヤマトの仕様と今後に合わせて、こちらのマザーコンピューターを使った改設計必要だった。

だから、彼女の体が限界を迎える前に伝えることができず、サーシアを使者として派遣し、合流できるようにと日程を調整するのが精一杯だった。

サーシアは、無事なのだろうか。

ガミラスの動きから察するに、ヤマトは発ったはずだ。ユリカを乗せて。

「初めてあなたと話した時は断ろうと思いましたが……いまはただ、あなたがたがイスカンドルを訪れることを望んでいます——このイスカンドルが失われる前に」

傍らにある端末のモニターには、デスラーの端末に映っていたのと同じカスケードブラックホールの姿が映し出されている。

この脅威を払拭する手段は、ガミラスはおろかいまのイスカンドルには——ない。

かつてのイスカンドルなら、対処できたのだろうか。

しかし、いまは無理だ。

だからこそ、最悪の事態が訪れる前にヤマトはイスカンドルに辿り着かねばならない。

「ユリカ。私は忘れません。あなたのその一途で強い愛を。だからこそ、信じてみようと思ったのです」

瞳を閉じるサーシアの脳裏に、あの時のユリカの言葉が思い起こされる。

「——大丈夫です！　どんな苦難が待ち受けていたとしても、私は絶対になんか乗り越えて見せます！　愛するアキトのために！　ヤマトとなら、できます！」

技術提供はもちろんのこと、地球の技術力では往復三三万六〇〇〇

光年の旅は無理だろうと諭すスターシアに返した言葉だ。

あのような強い感情は、スターシアが縁遠くなつて久しいものだった。

今度はちゃんと生身で顔を合わせて話してみたい。

スターシアは視線を遥か彼方の宇宙に向ける。

その先に、ユリカが乗る宇宙戦艦ヤマトがあることを信じて。

しばらく夜風に当たつてから、スターシアはタワーの最下層にある格納庫に足を踏み入れる。

その中にあるのだ。

ユリカの意思を受け止めこの遠距離通信を可能とってしまった、封印された技術の塊が。

それはボソソジャンプシステムを有した機動兵器。

そして、精神感應システム——フラッシュシステムをも搭載した。

この二つが揃つたこの機体が完全な解体を免れ封印されていたことが、遥か一六万八〇〇〇光年もの距離を繋いでユリカとイスカンドルを結んだ奇跡を生み出したのだ。

本来破棄しなければならぬはずのこの機体を、なぜ先人たちが保存していたのかはわからない。

しかしその判断がいま、地球を救う架け橋なつた。

「プロトタイプ・ガンダム……先人たちが生み出した最強の機動兵器の雛型。あなたは、なにを思っているのですか？」

スターシアの眼前にある人型機動兵器のフレームは、なにも語りはしなかつた。

地球を始め、太陽系の人類居住区を制覇していたガミラスの前線基地は消えた。

それはヤマトの前途に明るいものを感じさせはしたが、ガミラスの陰謀は深い。

急げヤマトよイスカンドルへ！

地球の人々は君の帰りを待っている。

人類絶滅まで、

あと三五六日。

第八話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第九話 回転防御？ アステロイド・リング！

気高き戦士の戦いに捧ぐ。

第九話 回転防御？ アステロイドリング！ A
パート

宇宙戦艦ヤマトの決死の戦いの結果、地球を死の縁にまで追い込んだ冥王星前線基地は陥落した。

わずか一年という短い時間で地球を徹底的に追い込んだ仇敵にとうとう一矢報いた。そして二度と遊星爆弾は地球に降り注がない。

そしてそれは、一時的なものかもしれないがガミラスの魔の手が太陽系から消え去ったことも意味していた。

この事実は速やかに地球に届けられ、ヤマトが確実に先に進んでいることを知らしめた。

……その報告の中には占拠された市民船を止むを得ず破壊したという事実も含まれていたが、ヤマトの英雄性を損なうとして政府によつて公表はされず、ヤマトクルーと一部の軍・政府の高官のみが知る事実として闇に葬られ、表向きはヤマトが調査した段階ですでにガミラスによつて破壊され、木星に飲まれたと報じられた。

波動砲の発射は試射を兼ねて木星圏に駐屯していたガミラス艦隊を屠るためだった、という形で歪められ、ヤマトクルーにとつては苦々しい結果となつてしまった。

地球でその事実を知った秋山源八郎は受け入れ難い事実に涙を流したものの、苦しい決断を強いられたヤマトクルーを労い、軍人として自分を律することで耐え抜いた。

ヤマトの決断を受け入れることができたのは、それ以外に手段がなかったのだろうと理解できたからだだった。

それに木星という国は滅んでしまつていても、民が滅んでしまつたわけではない。生き残つた同胞が生きて行くためには、権力を持つ秋山が頑張らねばならない。

彼はそう思うことで、己の職務に打ち込むことで悲しみに打ち勝ち、前へと進み続ける活力を得たのであった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第九話 回転防御？ アステロイドリング！

無事に任務を遂げてヤマトに戻ったアキトと進は、すぐに同僚の戦闘班や格納庫内で機体の整備を担当している工作班のクルーにもみくちやにされた。

やれ「よくやった！」だの「木星の敵を取った！」だの「ガミラスの連中め思い知ったか！」などと歓声を受けながらなんとか格納庫を脱出し、第一艦橋に上がる。

「……凄い沸きようですね……」

「……まあ、地球を追い込んだ前線基地を叩いたんだから、当然かもね……」

二人そろって揉みくちやにされたのでかなり疲れた。ただでさえ単独作戦行動——休みなしで五時間以上神経を張っていたというのにこれはキツイ。

しかも一時間は敵前線基地に忍び込んだので工作に従事していたのだ。神経はすっかりくたびれきっている。すぐにでもベッドに飛び込んで泥のように眠りたい気分だ。

「でも、これが希望に繋がるといふのなら、個人的な感傷は抜きにして誇りたいと思います。復讐は終わっても俺たちの戦いは終わっていない……地球を救うその日までは……！」

改めて志を語る進にアキトは拳を掲げて応える。進は掲げられたアキトの拳に自分の拳を打ち付ける。

二人はこの作戦を通じて互いを理解を深め、互いを無二の存在と認め合っていた。その関係に相応しい表現は未だに見えていなかったが、深く良好な関係に至ったことだけは確かだった。

二人を乗せたエレベーターが第一艦橋に到達した。ドアが開く。その視線の先に飛び込んで来たのは……。

「はあ〜。ルリちゃんいい子いい子お。本当によくやってくれたよお〜」

「ちよ、ユリカさん苦し……」

ユリカに抱き締められ、頬擦り加えて頭を撫でられているルリの姿だった。

すっかりと抱え込まれたルリの顔はユリカの胸元に埋まっている。痩せたとはいえまだまだポリウムのある胸元に顔を押し付けられたルリは、軽く呼吸困難に陥っている様子。

恥ずかしいのか嬉しいのか、いやそれ以上に苦しいのか。顔を赤くして手をばたばたと振っているがそれほど抵抗しているわけでもない。

なんとも微笑ましい光景だ——ラピスが羨ましそうに見ているのが気になる。

「おっ！ お帰り二人とも。大金星だったね！」

二人に気付いたユリカがぱつと明るい顔を向けて大きく手を振る。だがルリは解放されない。

釣られて手を振り返した二人は、こちらに來れないだろうユリカのために自分から近づく。

「ただいま帰艦しました。冥王星前線基地破壊任務、無事に成功しました」

敬礼と共に進が報告すると、ユリカはそれはもう嬉しそうに頷いた。

「さっすが進君とアキトだね。もうホントに私の自慢だよ！」

うんうん、と変わらずルリを拘束したまま頷くユリカ。

ルリは今度こそ間違いなく恥ずかしさで顔を真っ赤にしてジタバタと暴れ始める。

それでもユリカをぶつたりしないようにいろいろと気を使っているのがわかるが、そんな抵抗で脱出できるほど甘い拘束ではないらしい。

「ユリカさん、お願いですからもう放してください……！」

ちよっぴり焦ったような恥ずかしいような、そんな声色で暴れるルリを、ユリカは名残惜しそうに放す。解放されたルリは乱れた髪を手櫛で直してコホンとひとつ咳払い。

すでに威厳もへつたくれもないだろうが、チーフオペレーターにして電算室室長の立場であるので、形だけでも威厳を持たねばという涙ぐましい努力が伝わって来て、進もそしてアキトも心の中で涙がちよちよぎれる思いだった。

「お、お疲れさまでした。おかげで私たちも命拾いました」

「ギリギリでも間に合って良かったよ。……そうだルリちゃん、施設内に侵入しているいろいろ漁ってきたんだ。映像データと探知機の解析データ、なにかの参考になるかもしれないから提出するね。——おつと、そうだそうだ。一応ガミラス兵が持ってた携帯端末らしきものもぶん捕ってきたんだった。これも解析してくれて構わないよ」

アキトは小型カメラと探知機、それにガミラス兵が持っていた携帯端末をルリに手渡した。

ルリに渡しておけば自然と真田の眼にも触れるだろう。ウリバタケも——資料を得るだけなら問題ないな、たぶん。

貴重な資料を得られたルリは、アキトたちの眼前で喜びも露にする。

アキトの手癖の悪さをつつこんだりはしなかった。否、つつこむ以前に念願の資料が得られたことに舞い上がってそれどころではないのだろう。

（あのときはそれどころじゃなかったけど、考えてみれば物凄く手癖悪いよなあ）

進は思う。でもまあ、サテライトキャノンで消滅してしまった基地からでは得られるものもないだろうし、せめてもの戦利品と考えれば——ホントによくあの場でそんなことを考えて行動する余裕があったものだと今更ながら感心させられる。

伊達に場数を潜っていないということだろうか。

「ありがとうございます、アキトさん！ 早速この資料を解析して、ガミラスのシステムへの理解を深めたいと思います！」

ルリは小躍りしそうなほど喜んで、すぐに電探士席に座ると解析作業を始めるための準備を電算室に依頼する。

この調子だとすぐに自分も電算室に移動するつもりなのだろう。

——フリーフォールはいい加減慣れてしまったようだ。

「ともかくご苦勞様。二人ともゆっくり休んでいいよ」

満面の笑みを浮かべるユリカに進はつい嬉しくなって、

「はい！ ありがとうございます、お母さん！……あっ!!」

と盛大に自爆した。頭の中で「やっちまったあゝゝ!!」と叫ぶが時すでに遅し。……でも、アキトと腹を割って話したときから遅かれ早かれこうなると予想はしていた。うん。

しばらく第一艦橋の時間が止まった。

ユリカは目をぱちくりと大きく瞬いて、両手で目を擦ってから進を凝視し、耳が詰まってないかと両手の小指で耳穴をグリグリ。

「進、いま私のこと、お母さんって……」

ユリカは胸の前で両手を組んで、おずおずと座席から身を乗り出すようにして進に迫る。両目は期待に満ち溢れてキラキラと輝いている。

……その眼差しを裏切る度胸を、進は持ち合わせていなかった。よって、返答はひとつしかなかったわけ。

「え、と。その——はい。呼びました」

照れ臭そうにそっぽを向いて後頭部を掻きながら答えると、ユリカは渾身の力で進にダイブを敢行。

姿勢が低かったことと、筋力不足が祟って進の鳩尾に頭から突っ込む形になった。

「げふうっ!!」

凄まじい呻き声を上げて進は第一艦橋の床に沈む。一撃KO、見事な頭突きだった。

「うれしい！ 進！ もう私たち家族だね！」

と、などとユリカが言っていた気がするが、意識が闇の底に落ちていった進はそれどころではなかった。

故意ではないにしても進を一撃KOしたユリカを呆れ顔で見下ろすアキト。

「おいユリカ、のびてるぞ」

アキトの声も聞こえないのか白目を向いて痙攣している進に抱き

着いたまま、ユリカは本当に嬉しそうにしている。

やれやれとアキトは首を振る。

事前に進の気持ちを聞いていただけにアキトはいまさら驚きはしないが、改めてこういう場で口にされるとむず痒い気持ちになる。まあいいか。ユリカも喜んでるし、進にとつての幸せに繋がるなら問題ないか。……問題ないだろう、うん。

ルリも「ご愁傷さまです」と進の今後を考えて胸の前で十字架をきった。

まあこれでよかったのだろう。進にとつてユリカの存在が支えになつていたのは事実だし、よくも悪くも影響を受けまくつたのだから、収まる場所に収まったといふべきなのか。

（進さん、歓迎しますよ——あとはあなたが兄なのか、それとも弟なのかを決めるだけです）

歓迎する気持ちに偽りはないが、妙な対抗心が頭を覗かせる。……自分ですらユリカとアキトを『母』『父』と呼べていないので、進に先を越されたようで悔しい。実際に自分にそれができるのかと問われると、恥ずかしくてできないだろうと思うがそれはそれこれはこれ。

いまは困窮に喘いでいるであろうピースランドの遺伝上の両親には悪いが、ルリにとつて『家族』と呼べるのはアキトとユリカであり、そう呼ぶのであればこの二人以外に思い当たらないのであった。

一方でラピスはなんとなくムズムズする気持ちだ。

進のことは好きだし、ユリカが散々『息子』と公言していたので進が感化されたとしてもいまさら驚きはしない。そもそも実験体として生み出され、遺伝子提供者が不明なラピスにとつて、血縁関係が生み出す絆は実感が欠片もわからない。

将来的に自分が子供でも産めば話は別だろうが、大事なものは同人士の意識だとユリカとエリナからも教えられたので、ラピスはそれが正しいと信じている。

（羨ましい。私だって、頑張ってるのに……）

ぶっちゃけラピスがムズムズしているのはこれが原因だ。地味ながら大切な問題である。

元々まともな家庭環境に置かれた経験がないラピスだ、感情の発露を覚えたことをきっかけに愛情に飢え始め、いわゆる承認欲求が少なからず顔を覗かせている状態にあった。

エリナはもちろんユリカにも甘えたい時は甘えたいし、当然ながら頑張ったら褒めてもらいたい、認めてもらいたい。そうやって自己を固めている最中なのだ。

だから、進が家族になるのはいい。でも進ばかり(ルリもだけど)褒められているのはラピス的には面白くない。

気絶していなければ、その進が褒めてくれたかもしれないのに。てな感じで頬をぷくぷくと膨らませていたら……

「ん？ ラピスどうした、可愛い顔が台無しだぞ」

と気づいたアキトがラピスの頭を撫でて「初めての艦隊戦お疲れさま。疲れただろ」と労ってくれた。

アキトもラピスにとっては大切な家族であり、父でありお兄さんと言える存在なので嬉しくないわけがない。

それでご機嫌になっていると、「あく！ 私もなでなでするう〜！」と進をホールドしたままのユリカがアピールを始める。

……気づいてくれなかったのはユリカなんだよ。と思いましたが、ここで拗ねるのは損はあっても得はないと考え、静かに席を立ててユリカのもとに足を運ぶ。

すぐにユリカに抱き締められて「ん〜。ラピスちゃんの髪の毛柔らかくてすべすべ。今日はご苦労さま。大変だったね」と労ってくれる。うむ、素直に応じて大正解。

アキトにしてもらうのとユリカにしてもらうのでは微妙な違いがあつて、同じ話題で二度美味しい。満足満足と、満面の笑みを浮かべるラピス。

なお、ラピスがアキトやユリカを父母と呼ばないのは、同じように大切なエリナに優劣をつけるようで悪いという彼女なりの配慮だった。当のエリナは気にするなと言っていたのだが、ラピスはやはり悪いと思えず頷かなかつたのだ。

そんな光景を目の当たりにした大介は、笑うべきなのか呆れるべき

なのかイマイチ判断の付かない顔で操縦桿を操っている。

現在のヤマトは自動制御装置がダメーჯを受けているため手動制御の真つ最中、注意力散漫は事故のもとなのだが……すぐ隣で見せつけられる家庭事情というか茶番というか、なんと言っているかわからない緩い光景に注意を向けるなど言うほうが酷だろう。面白いし。

(思った以上に感化されてたんだな古代。しかしまあ、孤独だって思うよりはマシなのかもしれないな)

と考えながらも、母と慕うユリカも余命いくばくもなく、イスカandalに行つたからといって確実に助かる保証がない現状には頭が痛くなる。進がまた辛い別れを経験するだけじゃないかと心配なのだ。(こいつに悲しい思いをさせないためにも、俺たち航海班が遅れを取り戻さなければ……任せろよ古代。もうおまえに家族を失う悲しみは背負わせないからな!)

大介は決意を新たにヤマトをイスカandalまで辿り着かせて見せると、航路計画を練り直すことにする。

……しかしその前にこの面白い光景を存分に目に焼き付けておくか、としっかりと観察することを忘れない。

あとでこの話題を肴にコーヒーを楽しんでやると決意する。

ジユンは一気に緊張感を失つた空気に「これでいいのかなあ?」と思いつつも「まあナデシコもこんな感じだったかな?」と肅々と自分の仕事をする。

要するにユリカが気を抜いている時は自分がフォローすればいいだけだと自己完結したのだ。——だから影が薄いと言われるのだと、ジユンは気付いているようで気付いていなかった。

エリナは「あくあ。これはあとが大変ね」と呆れかえった表情で事態を見守っている。

大激戦を終えた直後で疲労してるんだから騒いでないで休め、と言いたくて仕方がないが、進だけならまだしもラピスが巻き込まれては怒鳴り込むわけにもいかない。こっちだって疲れてるんだ。

まあ気持ちが悪まっているのならいいのかな、と思いついて自分の仕事をしようとコンソールに向き直る。通信士もまだまだやること

が多いのだ。

ハりは「進さんも盛大に自爆したなあ」とユリカに抱かれて至福の表情を浮かべているラピスを眺めている。

とても愛らしいが、個人的には先程までのみんなの前で撫でられ、羞恥で赤くなっていたルリのほうがよかったなあ、とか失礼なことを考える。

あの姿も脳内フォルダーに保存済みだ。嚴重にロックをかけて消去しないようにしなくては。

正直な感想を述べるなら、ユリカにはぜひともルリと絡んでいままで見えたことのないルリの一面をバンバン引き出して欲しい。眼福であるのでぜひともだ。

真田は真田で床でのびている進やユリカに甘えているラピスを苦笑して見ながらも、どのような形であれ進が理解者を、そして大切な人を見つけて幸せを掴もうとしている姿に内心感激を覚えていた。

そしてそれを成したのは、真田にとっても恩人と言えるユリカたちだと思うと、奇妙な縁に胸が熱くなる。

(守。お前の弟は立派に成長しつつあるぞ。新しい家族も手に入れて、こんなにも明るい表情をするようになった——お前も、天国で見ているか、守)

いまは亡き友に心の中で報告して、真田はヤマトの被害確認に戻る。勝ったとはいえ、ヤマトは満身創痍。こういうささやかな幸せを護り抜く為にも、ヤマトを万全の状態に戻さなければならぬ。

それが工作班長としての使命だと、真田は被害確認に精を出す。

……そうだ、ユリカが生き延びられるようにするためにヤマトの問題点を洗い出して、できる範囲内で改修していこう。ヤマト再建の際にも武装の増設やらなんやらと案は出ていたが、六連波動相転移エンジンやトランジション波動砲やらの搭載による変貌が著しく、それ以外の部分ではできるだけ簡潔に、自沈直前の状態で復元しようという意見が多数を占めて実行されなかったアイデアだった、その候補となったひとつなら、修理作業と併用した改修が可能だ。

だってできるようにちゃんと備えているのだから。そうと決まれ

ば話は早い。イネスやウリバタケと相談して、ヤマトの機能向上について話し合いの機会を設けるとしよう。

真田はコミュニケーションでメツセージを送ってから「さて、どう仕上げるか」と唇の端を持ち上げた。

そのあとすぐ、ヤマトは冥王星を発った。

本当なら基地から資源を漁りたかったのだが、海中にある基地の残骸を漁るのは合理的ではない。

なので、代わりに冥王星空域で撃破した敵艦の残骸少々に研究用として反射衛星をひとつ回収しながら、ヤマトは冥王星軌道の外側にあるカイパーベルトに向かって進路を取った。ここに紛れて残存艦隊からの追撃をわずかばかりでも遅らせるために。

「カイパーベルトってなんだ？」

てな感じで、天体に疎いアキトが質問する。

例によってユリカたちと食事を共にしての一時である。

今回はルリとラピスと雪に加え、強引に連れ込まれた進も席を囲んでいた（エリナは仕事が忙しいと辞退した）。

食事はユリカがいつもの栄養食である以外は、一律でプレートメニュー（食パン二枚、スパゲッティサラダ、ホワイトシチュー、合成年ハムステーキ、オレンジジュース）を食べている。

「カイパーベルトとは冥王星軌道の外側にある小惑星帯のことです。正式名はエッジワース・カイパーベルト。わかり易く説明するのなら、火星と木星の間にあるアステロイドベルトと同じような物ですね」

ルリがスパゲッティサラダを口に運びながら解説する。ルリも天文学についてはそれほど詳しいわけではなかったが、オモイカネという頼もしい友人がいて、出向前にできるだけ積み込んだデータベースを頼りにすれば、最低限かみ砕いた解説くらいはできる。

「アステロイドベルトって言うと、あの小天体が密集してる地帯のことだっけ？」

アキトが確認すると、ルリは「そうです」と頷く。

「小天体から鉱物資源を採取できる可能性もあるしね。ヤマトもかなりダメージを受けてるし、ミサイルも撃ち尽くしちゃったから。金属資源を補充しないと修理も生産も立ち行かなくなっちゃうよ」

スプーンを口に運びながらユリカが目的を説明する。

たしかにいまのヤマトは満身創痍だ。装甲を貫通した被害は反射衛星砲の三発に限られるが、装甲表面には大量の弾痕が刻み込まれている。

痛んだ装甲は必要に応じて張り替えて交換し、表面が削れたり軽くなったり部分だけの部分は補修用に開発された液体金属を流し込んで補修する。

堅牢なヤマトの装甲板ではあるが、もちろん修理や改修に必要な溶接や溶断の技術も確立しているため、従来の物よりも手間がかかるが問題なく張替えできる。

また、表面の防御コートがあったままだと作業が進展しないため、まずはそれを除去する溶液を塗布してコートを剥がし、作業終了後に改めてコーティングする手間もかかった。この防御コートは塗装も兼ねているため、地球型の惑星の大気中はもとより、宇宙を漂う星間物質などによる腐食から装甲を保護する役割があるため、決して疎かにはできない。あとコンピュータ保護の防磁作用の役割も。

被弾によるダメージもさることながら、浸水によってエネルギー供給ラインや電装品が負った細かい被害も多く、奥まった場所や構造上どうしても作業スペースが確保し辛い場所があるため手間がかかるのだ。

それにフレームの矯正やら応力検査やら、やらなければならぬ箇所は多く、工作班の頭を悩ませていた。

「修理には最低でも二〇日以上かあ。アルストロメリアと小バツタを使えるからまだ楽になってるほうなんだけどねえ。搭載機が全部アルストロメリアでよかったよ。エステバリスだったらもっと大きな損害を被っていただろうし、航空隊の損耗がまだ少なく済んだのは、不幸中の幸いだね」

ユリカは珍しく真剣な表情で語っている。

しかしユリカの言葉ももつともだと思う。普通なら返り討ちで轟沈している。これからもこの規模の戦闘が想定される以上、戦術をもう一度練り直したほうがいいかもしれない。

「でもいまは、素直に勝利を喜びたいと思います。この宙域で散つていった、戦士たちの弔いとして」

進はオレンジジュースでパンを胃に流しながら、モニターに映し出される冥王星宙域に視線を送っている。そこにはヤマトが撃破したガミラス艦の残骸が四散していた。

あの最後の反抗作戦と言われた艦隊戦では一方的に蹂躪された地球が、ヤマトという強大な力によってついに逆転に成功した証。

ガミラスはまごう事なき敵。とは言え、人と変わらぬあの姿を見たあとでこの大量の残骸——大勢の人死の跡にはわずかばかりの感傷も覚える。

しかしだからと言ってわれわれも止まれない。

いかなる妨害であつても切り抜けて地球を救い、未来を護らなければならぬのだ。

「そうですね。それに波動砲を封印しても私たちは戦える。それが証明されたことも嬉しいです。そうでないと私たちどころか、これからの地球が波動砲の依存した防衛戦略に傾倒してしまうかもしれないですし」

ラピスも進に便乗しつつ、拭い去れない波動砲への恐怖を口にする。

幼いラピスにとって、波動砲の問答無用の威力は別格過ぎる畏怖の対象として心に刻み込まれてしまったようだ。

もちろんルリだって波動砲は怖い。あれはあまりにも問答無用すぎる。強力な兵器の多用は不必要な破壊を招き、相手が知的生命だと仮定すればその威力で恐怖を煽り、超兵器による応酬という最悪のシナリオを描きかねない危険性がある。波動砲の力に溺れば、そんな未来もありえる。

いや、仮に波動砲を封じたところでヤマトに使われている異星人由

来の技術などは十分過ぎるほど強力だ。今後は同じ技術を使った戦艦が多数建造され、地球の防衛に使われるのであれば波動砲があってもなくても地球の未来は……。

地球は滅亡寸前まで追い込まれているのだ。軍拡の未来に走るのを止める術はなく、それが間違いと言いつけるほど他者の善良性を信じられるわけもない。

「そうだね。波動砲に頼ればなんでも解決、なんてなったら嫌だもんね——スターシアも、そんなつもりで私たちに託したわけじゃないし」

ユリカの言い様に違和感を感じたのはルリだけのようだ。

アキトは特別気にしたふうもなく切り分けたハムステーキを口に放り込んでいるし、ラピスはスパゲッティサラダを啜ってご満悦といった顔をしている。意外と麺類が好きらしい——気持ちにはわからないけど。

進も特別リアクションを取ることなく隣の雪と言葉を交わしている。

「ユリカさん、スターシアさんの心境がわかるんですか？　まるで知り合いみたいない方ですよ」

ルリの言葉に「しまったあ！」と顔にでかかど張り付けてユリカは「そ、そう思っただけよ」と誤魔化す。

ジト目で睨んでみるがユリカは話す気がないらしく無視している。追及するだけ無駄だと諦めたルリは先割れスプーンをシチューに突っ込んで具と一緒に掬い上げた。ヤマトのランチプレートは例外なくこの使い難いことで有名な先割れスプーンが採用されている。

というものの食器をむやみやたらに増やせないので効率化しようとした結果らしい。むう。

とは言えこれは一般食の場合で、本来なら艦長のユリカは専用の食堂で一般クルーよりも立派な食事を摂ることができるのだが、肝心のユリカの容態がこれなので食事を提供する機会は皆無、艦長用の食堂はすっかり埃を被っていた。

そもそも食事のためだけに衰えているユリカを艦内で歩かせるの

も問題視されたこともあり（その割に視察と称して動き回っているが）、食事は大抵世話役の雪かエリナ、夫のアキトを中心とした内輪の者が、艦長室で摂ることになっているのが現状だ。

今回は六人と大人数なので使おうかとも考えたのだが、広さに大差ないため結局今回もお流れになった。

さすがに手狭だが、この距離感が心地いいといえば心地いい。

「それにしても艦長、今日は随分と具合がよろしいようですね」

なぜか妙にウキウキしている雪がユリカの体調を訊ねている。――ああそうか、意中の男性と一緒にだからか。しかもこの場にいるのは彼女以外が全員『家族』。その中に問題なく混ざれているということにはユリカの関与を認める。

実際雪の好意は比較的わかりやすい。ユリカほどストレートに開けっ広げというわけでもないが、さりとしてわかりにくいということもない。たぶん最初は守を失った進に対する同情から放っておけなかったのが、ユリカを挟んで日々を過ごす内に異性への好意へと変貌していったのだろう。

あの時間は終末へと向かいつつある現状においても素直に楽しいと言える時間だったことは、ルリもよく知っている。それに加えてユリカだ。アキトと再会してからは以前にも増して惚れ気話が多く、介助のため接する機会の多い雪が影響を受けてしまった可能性は否定できない。

よくも悪くもユリカは影響力が強い人間だ。そうであっても不思議はないが……。

「まあね。葉がぶ飲みしたし、戦いには勝てたし、なにより進がとうとう私をお母さんって、お母さんって言うてくれたもの！　もう嬉しくて嬉しくて……！」

ほろりと涙を流すユリカに進は真っ赤になってうつむき、先割れスプーンでシチューをかき混ぜている。観念したとはいえ、やはり面と向かって言われると気恥しいのだろう。同情を禁じ得ない光景だ。

アキトも赤面している進を見て助け舟を出さずにはいられなかった。

「でも、進君の精神衛生上普段からそう呼ぶのは止めておいたほうがいいなだろうな。うん」

アキトとしてもあまり年の離れていない進に「お父さん」と呼ばれるのは違和感がある。

進が慕って考えていることは嬉しいし、頼ってくれるのであればそれに応えたいと考えるのは、生来の気質だと自分でも思う。

それに許されないことをしてしまったという自責の念を消せないアキトにとって、『誰かのために尽くしたい』という欲求が尽きない自分のすべてを棄ててでも、とまではいかないが、やはり心の奥底で『赦し』を乞うている自分がいることを自覚している。

……たぶんこれは、一生涯続くだろうと思う。だからこそ俺は――

「むく。アキトがそう言うんならそれでもいいけど。それにどう呼ばれたってもう私たちの絆が途切れることはないからね。先人さんが言ったんだって、『絆とは断ち切ることでできない強い繋がり。離れていても、心と心が繋がっている』って」

ユリカの発言に「へえく。説教臭いけど案外良い言葉だなあ」と頷く。ルリたちも少なからず感銘を受けたようだ。

そんなこんなで食事の席は話題が尽きず、つい数時間前まで緊迫した戦いを繰り広げた戦艦の中とは思えない穏やかな時間が流れていた。

話の話題は次第に予想以上の頑張りを見せるラピスに向いた。まさかの機関長就任から今日まで、ラピスは非常に頑張っているのは誰しもが知ることである。

「ホントにラピスちゃんはしっかりしてるよなあ。エリナさんの教育がよかったのかな？」

と感心する進。この一家と付き合いがあつてエリナと縁遠いということはもちろんなく、それなりに親しい間柄にあった。

以前、ユリカに翻弄され続けていた進の肩を無言で叩いて紅茶をご馳走してくれたこともあつたと聞いている。本当に気が利く人だと、進はユリカとは違う意味で尊敬しているくらいだとも。

たしかに、いまのエリナはナデシコ時代に比べて角が取れて付き合
いやすくなつたなどはルリも思う。

「もちろんです。エリナには、出会った頃からお世話になりっぱなし
——今度、なにかお礼をしたいです」

頬を染めて照れるラピスに進もほつこりと頬を緩ませる。ユリカ
のおかげで接点を持ったラピスを進が可愛がっているのは知ってい
る。

日頃は業務や自身の鍛錬に余念がなく、接点があるように思われて
いない。しかし休憩が重なった時などはジューズをご馳走したり、機
関長としての手腕を褒めたりしているを何度か見たことがある。

そんなこともあつてか、ラピスは進にもよく懐いているようだ。

「古代さんもすっかりお兄ちゃんが板についてきましたね」
と率直な感想を漏らす。

年下かつ立場的には同等のラピスの場合、階級や立場的にも上で
あつた自分と違って接しやすく打ち解けやすかつたのもあるだろう
が、驚くほどラピスが懐くのが早い。彼女は育ちの関係で人見知りの
気があつたと思うのだが——ああ、ユリカに強制的に矯正されてし
まつたのか。

……進と言い雪と言いラピスと言い、彼女の影響を受けたであろう
人物はそれ以前と比べて変貌が目立つ気がする。まあかく言う自分
もVサインをすることがあるのはユリカの影響だが。

ルリがそんなことを考えている間にも、ラピスがエリナにどんな贈
り物をするべきかで徐々に話がヒートアップしていく。

しかし贈り物に疎い男二人とルリは話の輪から自然と締め出され、
ユリカと雪が意見をぶつけ合つてラピスがそれを拾い上げる構図へ
と変貌していった。

輪から外れた三人は白熱した議論を聞きながら黙つて食事を口に
運ぶしかすることがない。ちよつぴり空しい瞬間だ。

だがこの光景こそ、ユリカ達が最も求めている『平穏』と呼べる時
間であることは疑いようがない。ヤマトの最終目標は、この光景が日
常的に行われる『平和』を取り戻すことにあるのだと、実感するには

十分な時間であった。

なお、ラピスの贈り物は艦内で用意できてかつ小物類と指針が決まったこともあり、最終的には有名なクラシック曲のオルゴールを制作して送るということになった。

真田とウリバタケの協力も仰いで用意したプレゼントは、後日メツセージカードと共にエリナに送られ、大層喜ばれたという。

食事を終えたあと、ユリカは疲労を考慮してそのまま風呂に入ってから就寝となったので、雪に世話を任せてアキトたちは退室することになった。

ラピスはエンジン周りの点検作業の視察と手伝いに機関室へ、進は兵装の状態を再度確認するため第一艦橋に向かい、ルリとアキトは揃って展望室へと足を運んだ。

「そういえば、ヤマトに乗ってから二人で話すのってこれが初めてだっけ」

「そうですね」

展望室のソファアに並んで腰を下ろした二人は、展望室の窓から星々の海を眺めつつ言葉を交わす。

「アキトさんのおかげで、ユリカさん凄く幸せそう。……久方ぶりです、ユリカさんのあの笑顔は」

「そっか。俺がいない間のユリカの様子、聞きたいとは思うけど、あえて聞かないことにするよ。あいつも俺のこと、聞きたがらないしさ」話して楽しい話題でないことは確かだ。

ユリカはヤマト再建のために文字通り命を削り、アキトは罪悪感と無気力の中で停滞していただけ。それを話し合ったところでそこそ傷の舐め合いにしかならないだろうし、それは互いの望むところではない。

「私も話したくないです。でも、未来の話はしたい。アキトさんは今回の旅が成功したあと、どうされるつもりなんですか？ ラーメンの屋台はそうですね、ユリカさんとの夫婦生活を再開するのはわかりますけど、それ以外になにか願望はないのですか？」

「そうだなあ……実は俺さ、ネルガルでも軍でも良いから、パイロット

を続けるつもりなんだ」

アキトの告白にルリはたいそう驚いた。

「パイロットって、ラーメン屋はどうするんですか？」

「もちろんやるよ。二足わらしを踏むんだ。今回の件で、宇宙にはほかの文明がいくつも存在していて、それが地球にとつての脅威になりかねないってわかったからね。だから、少しでもいい、今後またあるかもしれない脅威のために、備えを残したいんだ。確かに俺はヤマトで贖罪を果たして戻って決めてここに来た。でも、それだけじゃ俺の気が収まらないんだ。俺は生涯自分の犯した過ちと向き合い続けなきゃいけない。裁判で判決を受けることを実質拒否してしまった俺だから、せめてもの罪滅ぼしとして、平和を守るための戦いに参加していきたいんだ」

そう語るアキトの瞳には強い決意が宿っていた。

「——アキトさんらしいですね。そこまで決意されているのなら、私はもちろんとも言えません。ただ、またユリカさんを故意に置いていこうとしたら、そのときはただでは済ませませんよ?」

冗談めかして言うルリにアキトも大きく頷く。

「もちろんだよ、ルリちゃん。第一死んだらそこで終わりだろ? 俺にはまだまだやりたいことも、やるべきことも残されてるんだ。死ぬくないよ、そう簡単には」

力強く宣言するアキトにルリも心からの笑みを浮かべて頷く。

「どうやらもう心配はなさそうだ。アキトは自分を取り戻している。自分としっかり向き合って進むべき道を定めている。」

確かにアキトのしたことは万人に認められることではない。それによくも悪くも真面目で責任感の強い彼のことだ、その罪を忘れることは決してできないだろう。だが構わない。アキトはもう逃げないとわかったから。

それもヤマトのおかげなのかもしれないと思うと、あれほど蔑んでいたはずのこの艦への愛着が、また深まりそうだった。

「できる限りの助太刀はしますよ、アキトさん。それより、その考えはユリカさんには?」

「まだ誰にも言っていない。ルリちゃんが初めてだよ。まあ感づかれてるとは思うけどね。」

隠し事がばれた子供のよ様な表情のアキトにルリはくすりと笑って肯定した。

「でしようね。ユリカさん、やたらと鋭いときがありますから」

「だよねえ〜」

二人は声を出して笑いだす。こうして彼と他愛もない時間を過ごしたのは何年ぶりだろうか。そうやってひとしきり笑ってから、ルリは漠然とユリカもアキトと似たような考えにあるのだろうと想像した。

……だってヤマトを蘇らせたのはユリカで、ユリカはヤマトが数度にわたって地球と人類を外敵の脅威から護り抜いてきたことを知っている。つまり、この世界でも同じことが起きかねないということ。最初から想定して行動しているであろうことに、いまさらながら思い当たったのである。

よほど自分は余裕がなかったらしいと振り返ると同時に、ユリカがそのことを口外せずに水面下で動いている理由も察した。

あるかどうかもわからない脅威に戦々恐々するよりも、眼前の脅威を取り除く方が先決であるし、なによりその先にある平和が脆いものだ。口にするのは、不要な不安を煽るだけだ。

それにユリカ自身、願うのはアキトとの幸せな結婚生活が一番で、そのためにはそのような脅威は来ないほうが好ましいのは当然だ。言霊とかの迷信を考えれば、口には出せまい。

それに心血を注いで復活させたヤマトにしても、願わくばこれが最後の戦いであって欲しいと考えていることはルリも知っている。

平和になった地球の海で永久に錨を降ろすか、それとも別世界であつても坊ヶ崎沖の海底に戻すか。それが叶わぬ願望と理解しているながら、それを求めていた。

「さて、もう少し話題がないかな。せっかくの機会だから、もう少しルリちゃんとお喋りしたいな。ユリカとはべったりだけど、ルリちゃんは疎かにしちやつてるし」

アキトは少し申し訳なさそうだ。

確かにヤマトで再会してからアキトとルリの接点は少ない。パイロットは電算室にそれほど用がないし、アキトは暇があれば訓練かユリカの相手をしているかで、狭い艦内だというのにルリとはあまり話せていないのが実情だ。

もちろんそれは仕方がないことだと理解しているが、せつかくの機会なのだからもう少し彼を借りてもいいだろうと思う。

だから、かなり恥ずかしいが自分にとって結構重要な案件を話題として提供することにした。

「そうですね。私もサブロウタさんやオペレーター仲間の――は、ハーリー君とは良く話してますけど、アキトさんとはあまり機会がないですし」

ハーリーの名前を出すとき、わずかにどもってしまう。というのもこれは先日の艦長室でのお泊りが原因だ。

決戦三日前の夜。

ユリカに誘われてベッドを共にしたルリは、しっかりと抱きしめられて拘束されながら、質問責めにあっていた。なぜ拘束されなければならぬのかと、ルリは若干理不尽な想いを抱きながら、大好きな姉であり母であるユリカの温もりを味わっていた。

これで話題がもう少し普通だったら言うことないのだが……。

「ねえねえ、ルリちゃん。実際のところハーリー君とはどうなってるの？ 傍から見ると凄く初々しいカップルなんだけど」

と目を輝かせながら訪ねてくるユリカに視線を逸らしながら、「べ、別になんともなってます。ハーリー君は可愛い弟分みたいなもので、別にそういう意識は……」

と否定するが、内心自分でもわからないところがある。一年前までだったらそれこそまったく意識していなかったが、この一年で見違えて成長したハーリーの姿を何度も見せつけられた。

その姿に頼もしさを覚え、甘えていたことは事実だといまになって気づくが、それが恋愛感情を伴うものなのかと問われれば正直よくわ

からない。というかそんなことを考える心のゆとりがルリにはなかったのだ。

——いま自分を拘束している誰かさんのおかげで。

「そうなの？ ハーリー君はルリちゃんのこと好きだと思っただけだなあ」

そう言われると心臓が飛び跳ねる。

実は最近、ハリの態度は姉（に相当する存在）に対する憧憬ではなく、異性に対する恋慕ではないかと、少しだけ疑っていた。

でも自分は一七歳で、相手はまだ一三歳（になったばかり）の子供なのだ。恋愛対象になるはずがないので余裕のなさもあってあまり考えたことがなかった。

「まあ年齢は気になるよね。でも、私がアキトに恋したのは幼稚園の頃だったんだよ」

二歳しか差がないでしょうが、と内心突っ込む。

「ほぼ同年代の恋愛と一緒にしないでください」

「えー。愛さえあれば歳の差なんて関係ないよ。実際二〇歳以上も離れた結婚なんて珍しくないじゃん」

「その場合は両方とも成人しています。ハーリー君はまだ一三歳になったばかりですよ？」

不満たつぷりに唇を尖らすルリにユリカは「微笑ましいなあ」と顔を綻ばせている。駄目だこの人、人の話を聞いていない。

「一番大事なのは年齢じゃなくて愛だよ、愛。ルリちゃん、ハーリー君という時すつごく楽しそうに見えたんだけど——私の勘違いかあ」

「残念残念」と話を切り上げ、「おやすみ」とユリカはあっさりと夢の世界に旅立つ。

一方的に言うだけ言って眠ってしまったとは。相変わらずと言えば相変わらずだが腹立たしい。ちよつとムカついたので頬を抓ってみるが起きる気配なし。むなしくなったただけなので早々に止めて、自分も目を瞑る。

ミナトと並んで自分に大きな影響を与えた女性に抱きしめられて、ルリは確かに幸福だった。彼女の安らかな寝息と心臓の鼓動に心が

休まるのを感じる。

(私、いつからこんな甘えんぼさんになったのかな?)

もう一七歳だというのに。少し恥ずかしいかもしれないが、ユリカ相手に遠慮するだけ馬鹿らしいと思いついて自分からユリカに抱き着く。痩せた体の感触が物悲しいが、かつてと変わらない温もりを一杯に感じ取る。

この旅の終わりにはきつと、彼女の体は元通りになる。そうしたら、今度こそ元氣一杯の在りし日のユリカが帰ってくる。

漠然とした、過大とも言える希望が現実になりそうな予感を胸に秘め、ルリはユリカの温もりに包まれて夢の世界に旅立った。

幸運なことに、普段寝相の悪いユリカもこの時ばかりはお行儀良く寝てくれたので、ルリはヤマトに乗ってから最も安らかで、充実した睡眠を食うことができたのであった。

……しかし、ここでユリカに意識させられたせい、か、仕事ならともかくプライベートな時間ではハリをまともに見れない。

言われたから意識しているのか、元々その兆候があったのか、自分でもよくわからない。

ならばせつかくの機会だ、アキトにこの事を話してみようと考えたのである。

相談されたアキトはそれはもう困った顔で、

「ごめんルリちゃん。俺、恋愛沙汰には疎くてさ。ユリカくらいわかり易ければともかく、ハーリー君とは接点も乏しいし、アドバイスできないや」

と頭を掻きながらルリに答える。

「でしょうね。話を振っておいてなんです、ぶっちゃけると最初から当てにしません」

ルリはぼつさり切り捨てる。そもそもナゲシコ時代から色恋沙汰で優柔不断な態度を取り続け、天然ジゴロとも捉えられかねない言動や態度を取ったこともあるアキトに恋愛相談など、建設的な答えが返ってくるわけがないと断定していた。

ぼつさり切られたアキトの頬が引き攣る。傷ついた様子だが、自業

自得というものだ。

「私はただ、アキトさんには知っていて欲しかったんです。その、もしも本当に私がハリー君を好きになったんだとしたら、しよ、将来的には、その……」

ごによごによと言葉を濁す。きつといま自分の顔は真っ赤に染まっているだろうな。

アキトにとって初めて見るルリの表情に驚きを通り越して感動を覚えた。

（ルリちゃん。俺がいない間に、こんなにも感情豊かに、普通の女の子に育ったんだね）

その成長を見届けられなかったことが、改めて悔やまれる。

「それから先は、今後の楽しみって言った感じかな？——俺も、少しハリー君と話してみようかな。なんだかんだでルリちゃんをここ一年の間支えてくれたお礼もしたいし」

そんなことを言ったら、ルリはさらに恥ずかしくなったのか頭を抱えて蹲ってしまう。アキトはそんなルリの様子にユリカとの語らいとはまた違った充足感を得る。

ナデシコ時代の無機質さを感じさせた少女は、愛さえも理解する感情豊かな女性へと成長した。

一緒に居た時間は決して長いとは言えないし、酷い仕打ちをしてしまった自覚もある。だが、家族の確かな成長を見ることができて、喜びを感じる。その成長に自分が少しでも関与できているのだとしたら、こんな嬉しいことはないだろう。

（ユリカとの間に子供が生まれたら、またこんな感動を味わえるのかな？）

いまは閉ざされたままの未来の予想図。だがいつかは実現する可能性のある未来。

（そっか、俺とユリカの子供だけじゃない。ルリちゃんが、ラピスがいずれ誰かと結婚して、子供を産んだら、その子の成長も見届けることができるんだな）

そうやって家族の輪は、人の愛は広がっていくのかと考えると、ア

キトは急に視野が開けた錯覚すら覚える。

やっぱり、帰ってきてよかった。この人が生み出す大いなる輪こそが、愛こそが人を幸せにするのだと——これ以上なく感じられた瞬間だった。

次の日。ユリカは雪を伴って医療室に足を運んでいた。ここは第二艦橋直下の医務室と異なり、重病者の治療や手術などを行うための場所だ。

つい昨日の死闘によって多くのクルーが傷つき、医務室や医療室のお世話になっていた。医療施設とはいえ戦艦内の施設、怪我人に対してベッドの数が足りないため、程度の軽いクルーは自室に戻されている。

それでもいまなお生死の境をさまようクルーたちが多数、医療室のベッドの上で苦しんでいた。

ユリカはそんなクルーのひとりひとりを丁寧に見舞い、励ますためにここに来たのだ。

「冥王星前線基地は壊滅した。これでもう地球に遊星爆弾は降らないし、太陽系からガミラスを追い出せた。あなたたちが頑張ってくれたからだよ」

ひとりひとり言葉を変えつつ、傷を負いながらも職務を果たしたクルーを励まし、犠牲となった数名のクルーの葬儀も慎ましやかに進める。

ナデシコのとさきのように個人個人の要望に応じた派手な式はできない。宇宙で死んだ仲間を宇宙に還す、以前のヤマトで行われていた宇宙葬で統一されている。

遺体を収めたカプセルを艦尾甲板の上から宇宙へと流し、頭上に向けてレーザーアサルトライフルで吊砲を放ち、宇宙の彼方へと消えていく仲間たちの遺体をみなで見送る。安らかな眠りが続くことを願いながら……。

葬式を終えたあと、アキトは食堂でハリと遭遇していた。

艦長として今日くらいは喪に服すと言い出したユリカの気持ちを

汲み取って、今日は一緒にいないようにと心掛け、ひとりで昼食を摂りに来たとき、偶然ばったりと。

無言で二人は列に並び、自分の番が来ると壁に設置された自動配膳機のスイツチを押す。配膳機の自動ドアが開いて、中からプレートに乗った食事がベルトコンベアで手元に流れてくる。

省スペース化と徹底した衛生管理を考え、ナゲシコのような厨房を覗ける食堂ではない。

貴重な食材を無駄なく活用するための綿密な計画に基づき、生活班が考案したセットメニューを朝・昼・夕の三食、日毎にローテーションして提供されるのがヤマトの食生活である。

無論、事前に注文をすれば多少のオーダーには応じてくれるが、食材運用計画から大きく逸脱したメニューは注文できず、食事の自由度は低い。

せいぜい、雪が艦長室で良く食べているサンドイッチなどの軽食や、ちよつと体調が悪い時用のおかゆやオートミール程度だ。

料理人としてのアキトはこの温かみを感じない食事の提供に眉を顰めたが、ヤマトの特殊性と食糧事情などを考えると文句ばかりも言っていられないと納得するしかなかった。

アキトとすぐ後ろに並んでいたハりはトレイを手に同じ席に着く。食事時でそこそこ混んでいるためさほど不自然ではないし、スペースの有効活用と効率よくクルーを捌くため、食事の相席はヤマトでは日常的に行われていることだ。

余程の理由がない限りは断らないようにと通達もされている。これは人間関係は円滑にするようにとのお達しでもある。

幸い、現時点ではクルーの間で目立った対立やいじめ問題なども発生していない。それを承知しているからだろう、微妙な表情をしながらもハりはアキトの着席を断りはしなかった。

……その表情が微妙なのは、惚れた女性の父親代わりを相手にしているからか、それともその女性を間接的に苦しめていた人物にいい感情を抱けないからか、どちらだろうかと考える。

「こうして話すのは初めてだね。ルリちゃんのこと、ありがとうな」

アキトはこのまま重苦しい空気のままであることを嫌ってそう話しかけた。

「いえ、僕は、その、当然のことをしたまでですから。それに、サブロウタさんもいましたし」

照れたような怒ったような、曖昧な表情のハリ。ルリを置き去りにして悲しませた自分に対しての怒りと、ルリのこととで礼を言われたことに対する照れが緋い交ぜになっているようだ。……本当に真つすくな子だ。

「いや、やっぱりハーリー君の努力があつてこそだと思う。本当にありがとう。こういうのも変かもだけど、これからもルリちゃんのことをよろしく頼む」

「そ、その言いかただと、まるで娘をお嫁にやるち、父親みたいじゃないですか……！」

上擦った声でハリが指摘すると、アキトは「そういう捉えかたもあるのか」と納得して頷く。

「ハーリー君は大丈夫だと思うから、俺に異存はないよ。ルリちゃんだってもう子供じゃないんだし、そのルリちゃんがハーリー君を選ぶというのなら、文句なんてないさ」

昨晚のルリとの会話を思い出して、アキトは暗にハリとルリがそうなつてもいいと認める。ルリの態度的にも問題ないだろう、たぶん。

「ほ、本当ですか？」

アキトの反応が予想外過ぎたのか、ハリは嬉しそうな声を上げていた。

「まずはルリちゃん捕まえてからだけだね。頑張れよハーリー君。陰ながら応援してるから」

アキトは心からのエールを送ってからようやく食事に手を付ける。

ハリは顔を真っ赤にして先割れスプーンで食事を出して戸惑っているが、きつと頭の中ではルリとの関係の進展についていろいろと考えを巡らせているのだろう。

そんなハリの様子に苦笑しながら食事を終えたアキトは、「早く食べないとあとが支えるよ」と声を掛けてから食器を返却口に放り込ん

で食堂から出た。

このあとは格納庫でダブルエックスの整備の手伝いをする予定だ。

——現在ヤマトは戦闘能力をほぼ喪失している。

点検作業や補修の影響で主砲も副砲も使用不可。ミサイルは残弾ゼロ、パルスブラストも少数が使えるのみ。当然波動砲も使えない状況にある。

となると残された戦力は艦載機のみだが、こちらも対艦攻撃用装備の大半を使い果たしてしまったので、決定力を有しているのは実質GファルコンDXのみ、万全にしておきたい。

しかしこの機体ですら戦艦クラスとなれば決定打にならない。サテライトキャノンを除くすれば……。

(サテライトキャノン。波動砲と同じ大量破壊兵器。使わないに越したことはないんだけど……いや、そんなことを言える状況にないか。話し合いで解決できる段階に至らない限り、いや、話し合いのテーブルに着かせるようにする手段としても、暴力を含めたあらゆる手段を講じるのは必然だし、大量破壊兵器の存在も……そのためのカードとして使える。こういった甘言が許されるのは、結局平和な世の中だけなんだよなあ……)

それから間もなく。傷ついたヤマトはようやくカイパーベルト付近に到着した。

あとは有用な資源を有する小惑星を見つけて採掘を行い、その陰に身を隠しながら補修を終わらせれば航海を再開できる。

——問題は、それを敵が黙って見逃してくれるかだ。

アキトと進がもたらした『ガミラスは地球人と変わらない姿形をしている』という情報は、艦内で混乱を招いたがそれもユリカの言葉を受けて沈黙した。

「相手が知的生命体なのはわかりきってたことだよ。それに相手がタコみたいな異星人だとしても生物には違わない。その命を奪ってでも進むことを求められているのが私たちなんだ。相手が私たちと変わらないとわかったのならなおさら敬意をもって戦おう。——私た

ちと同じ存在なんだってすっかり理解して。決して目を逸らさなずに」

その頃、冥王星基地を脱出したシユルツたちはなんとか体制を整えたあと、血眼になってヤマトを探していた。

ヤマト撃滅なくしてガミラス星への帰還が許されない彼らは、文字通り必死だった。

「未確認飛行物体発見！」

「司令、ヤマトでは？」

「ヤマトに違いはない……！」

司令のシユルツをはじめ、全員が額に玉のような汗を浮かべてレーダー画面を睨みつける。あれだけの猛攻を凌いだヤマトを残存勢力で叩き潰せる確たる自信は……ない。

だがやらねばならぬ。本国への帰還が果たせずともよい。だがガミラス帝国の障害となるあのヤマトだけは……ヤマトだけはここで潰さなければならぬ！

「全艦に告ぐ。ヤマトと思しき艦影を発見した。これより全速で接近する！ 一時隊列を崩して、各々別航路を取って目標地点に結集せよ！」

シユルツの指令に従って、残存した冥王星基地の艦艇が散らばってヤマトへと向かう。——そしてこの事実には、ヤマトはまだ気づいていなかった。

「カイパーベルトに到着しました」

操縦補佐席のハリがユリカに報告する。ヤマトの修理は昼夜問わずに続いているが、復旧率はあまり高くない。

冥王星基地攻略作戦から不眠不休で工作班らを働かせるのは酷過

ぎる、という判断もあり、現在はローテーションを組んで手が空いているほかの班のクルーも動員してなんとか回している状態であった。「ありがとう、ハーリー君。大介君、カイパーベルトの運航周期に合わせて。少しでも敵の目を欺きたいの。エンジン停止、エネルギー反応も極力抑えよう。——でも、すぐに再始動できるようにしてね」

テキパキと指示を出しながらも、かつてのトラウマが蘇ってちよっぴり弱気に指示を出す。

「了解。機関室、エンジン停止。緊急時に速やかに再始動できるように、準備をお願いします」

ラピスはすぐに艦内通話で機関室に指示を出してエンジンを一時休眠させる。大介も併せてヤマトを制御。

「了解、メインノズル噴射停止。カイパーベルトの運航周期に合わせてます」

姿勢制御スラスタでヤマトの速度を調整、カイパーベルトの運航周期に合わせる。

これでヤマトは晴れて小天体の仲間入りを果たす。周囲には直径数メートル程度の岩石や直径が数キロ、数百キロにも達する小天体も無数に点在していて、迂闊な操艦はそのまま衝突に繋がるような密度の高い空間であった。

そのような環境でエネルギー反応を抑えれば、天体に紛れて発見率は大きく低下すること間違いない。

もつとも、光学センサーの類までは誤魔化せないので欺瞞は必要である。冥王星基地を脱した敵艦隊が周辺に潜んでいる可能性は高い。早急に作業を終えなければならぬのでユリカは手早く指示を出す。「では真田さん、例の装備をお願いします」

ユリカが促すと真田は頼もしい笑顔で「了解」と頷く。

「古代、中距離迎撃ミサイルランチャーを起動してくれ。ターゲットはこちらで選定してある」

真田の要請に進はひとつ頷き、後部マスト根元に装備された中距離迎撃ミサイル発射管——通称ピンポイントミサイルのハッチを開放、装填されていた新型弾頭を撃ち出す。

弾頭はダーツの矢のような装置を七本纏めてロケットエンジンに取り付けたもので、一セルから四発、計三三発もの弾頭が打ち出された。

発射された弾頭は入力データに基づいて各々異なる軌道を描き、カイパーベルトの中に飛び込んでいく。そしてある地点で弾頭の装置を広げてから打ち出し、周囲に計二二四基の装置をばら撒く。

装置は次々と周囲の岩石に突き刺さり、後部のアンテナを展開して起動を完了した。

「よし、反重力感應基すべて異常なし。ホシノ君、電算室から制御を頼む」

「了解。——岩盤装着開始します」

ルリが反重力感應基の制御を開始、重力制御で岩石をヤマトに引き寄せ始める。ヤマトは次々と引き寄せられる小型の岩石に包み込まれ、レーダーやセンサーを有する第一艦橋から上とマストにバルバスバウ、推進装置であるメインノズルとサブノズルの噴射口を除いて細かな岩石に包まれた姿に変貌した。

剥き出しの第一艦橋と艦長室の照明も落とされ灯火管制も実施。現状実施できる最高の欺瞞を完成させた。

アクティブセンサーの類を使えなくなったため、岩石の隙間から除く展望室からも双眼鏡片手に周囲を警戒するクルーたち。

「このまましばらくカイパーベルトに流されます。敵に発見される前に資源を得られそうな小惑星を発見、その表面に偽装ごと張り付いて簡易ドックを成立させて、ヤマトの修理を進めます」

ユリカは簡潔に今後の予定を口頭で指示する。

ヤマトがいま使った装備は反重力感應基と呼ばれる、かつてのヤマトでも使われていた特殊装備だ。小天体などを遠隔操作してヤマトの身を隠すための隠蔽、場合によってはアップリケアーマーとして使うことを想定している。使える局面は限られるためいつでも使える装備ではないが、単独航海を余儀なくされるヤマトの旅路の助けになると、データからサルベージしたそれを再生産していたのだ。

ユリカなど、かつてのヤマトでの運用データを見るよりも先に自分

なりの活用方法をいくつも編み出し、以前の運用実績にはない使い方も考案している。

ルリも検証に付き合ってもらい、真田も交えているいろいろと考えてきた成果。いまが披露の時だ。

「艦長、資源を得られそうな小惑星を発見しました。楕円型の小惑星で、大きさは最大が約六〇〇キロ、ヤマト右舷前方、包囲右一八度、上方三五度、距離一二〇〇キロです」

ハリの報告に「ハーリー君仕事速い！」と喜びも露にするユリカ。早速その小惑星に向かって微速前進を指示する。

ヤマトの補助ノズルが弱々しく噴射、岩石を纏ったままゆっくりと前進を開始。初速だけ稼ぐとあとは慣性航行で小惑星に接近する。

エネルギー放出量の大きなメインノズルを使えないので遅々としてしか移動できないのがもどかしいが、焦って噴射すればヤマトは敵に発見される危険性が増す。慎重に———と思っていた矢先、パツシブセンサーが接近中の艦影を補足した。

「うええ。なんでこう嫌なタイミングでばかり」

ものすごく嫌そうな顔でメインパネルに映るガミラス艦を睨むユリカに「いや、それ基本中の基本でしょ」とジyunが突っ込む。そんなことは言われなくてもわかっている。ちよつと愚痴りたかっただけだ。

「艦長、やはり主砲と副砲へのエネルギー供給は無理です。エネルギー供給ラインの修理と調整にはあと一〇時間はかかります……」

機関制御席のラピスが申し訳なさそうな顔でユリカに謝る。「気にしない、気にしない。ラピスちゃんが悪くないもん」と務めて明るく対応して流す。どちらにせよまとともに戦うには傷が深すぎるのだ。

「このまま小天体のふりをして移動を継続。アステロイド・シップ状態のヤマトをすぐに発見できるとは思えません。小惑星に到達次第、ヤマトの修理作業を開始します」

ユリカはできるだけ余裕があるように指示を出す。

願いが通じたのか、ヤマトはガミラスに発見されることなく無事小惑星に到達することができた。なかなか心臓に悪い移動だったが、目

論見どおり小天体が密集していてレーダーだけでは探索が難しい宇宙域であることが味方してくれたようだった。

「んじゃ、ロケットアンカー発射」

ヤマト右舷のロケットアンカーが岩盤の隙間から飛び出して小惑星に撃ち込まれる。慎重に鎖を巻き上げ、ヤマトはゆつくりと小惑星の表面に接近した。

再建当初こそアンティークな外観のヤマトだからという理由で残されたにも等しい装備だが、こういうときには地味ながら非常に効果的な装備として機能する。これはこれ以降の艦にもなんらかの形で残したい機能だ。

「岩盤解除、プロローブを発射後、簡易ドックに再構築します」

ルリが電算室で反重力感應基を制御する傍ら、部下のオペレーターにプロローブの射出を指示している。

最大搭載数である六基全部を発射、反重力感應基を利用してその位置関係を制御しつつ、ヤマト覆った岩石をドーム状に再構成、岩盤の合間に展開前のプロローブを植える形で設置してから展開。

——これでヤマトは小惑星の表面に設営した即席の簡易ドックに入港できた形になる。プロローブをドック表面に設置すれば、使用不能になるヤマトのセンサーの代理を任せられるので索敵機能を阻害されることなく引きこまれるという寸法だ。

これが、ユリカとルリが共同で考え出したアステロイド・シップ計画の活用方法だ。旧来のヤマトでは単に身に纏う偽装としてしか使わなかったが、制御装置の技術が一段上の新生ヤマトではこんな複雑な制御も容易くこなせる。その気になれば簡易ドックを維持したまま航行することすら可能だ。——効率はよくないが。

「真田さん、修理作業と天体からの資源採掘をお願いします。必要なら手の空いてるクルーに応援を頼んでも構いませんので、慌てず急いで正確にお願いしま〜す」

ユリカの命令に真田は「お任せください艦長！」と頷き、さっそく悪友となったウリバタケにも声をかけて自身も第一艦橋を飛び出した。

第九話 回転防御？ アステロイドリング！ B パート

こうして、ヤマトの本格的な修理作業が開始され、真田とウリバタケはそれぞれ役割分担して作業を進め始めた。

真田は主に資源採掘と補修用の部品の製造を一手に引き受け、ウリバタケはヤマト本体の点検と修理作業をすべて引き受けた。

ウリバタケはこの手の実作業には強いが、真田ほど効率的に部品の製造ラインや採掘作業を指揮できないので、妥当な配置であった。

おまけに無駄にテンションの高いウリバタケの指揮する修理陣は士気が妙に高く、意外なほど手が早くて正確ときている。任せない道理はなかった。おかげで真田も浮いた時間を使ってヤマトを完全にするためのアイデアを捻出するのに余念がない。

こういった仕事を通じて互いに強い信頼関係を結んだこともあり、公私問わず良好な関係を築き上げ、よく顔を合わせて相談をしているくらいだ。

その会話の中には、

「やっぱり主砲で実体の砲撃撃ちたい」

「弾薬庫と給弾装置のスペースがなあ。やっぱりボソンジャンプ給弾か？」

とか、

「第三艦橋を独立運用できるように改造したい」

「あのデザインだと単独移動しても違和感ねえしなあ。改造しちゃうか？」

など、機能面での改良はもちろん冗談なプランも含めていろいろと雑談に花を咲かせている。

時折イネスも混ざって、

「じゃあ艦長の生活をサポートするアイテムでも生産してもらおうかしら？」

といろいろと話し合い、いくつかは実行に移せる段階に達してい

た。

今度艦長の了承を得ようと考えている。きっと、役に立つことだろう。

ヤマトが姿を隠して八時間余りが経過した。

順調にヤマトを追いかけていたと思つたシユルツは、ヤマトが脇目も振らずカイパーベルトの中に入り込んだことに齒軋りし、すぐにその消息を追わせた。

「まさか、ワープで逃げたのか？」

言葉に出してから真剣にその可能性を追求してみるが、ガンツが調べた限りではワープの形跡はまったく検出されていないという。

そもそも時空間を歪めて跳躍するワープ航法は、規模に関わらずその瞬間にかなりの痕跡を残すものだ。

特に重力波や空間歪曲場の観測そのものは、たとえガミラスに数段劣る地球の艦艇でも容易にできるほど、ワープの痕跡は大きい。当然ながらわが艦隊が見落とす道理はない。

カイパーベルトの中に身を隠したとしても同じことだ。捜索中の艦隊が必ずその痕跡を発見できる。もつと巨大な重力源のそばでもない限り、見落とすことはありえない。

それに――。

（小天体の集まりとは言え、カイパーベルト内でワープするのは重力場のバランス的にもリスクが大きい。周辺に障害物があるとワープインの際に巻き込んでワープ中やワープアウト時に激突してしまう危険がある。ヤマトのワープ性能を推し量るには情報が少なすぎるが、昨日今日技術を手にしたばかりの彼らがそんな無謀をするとは考えにくい。だからこそ身を隠したはずだが……）

「やはり、ヤマトはカイパーベルトの中に身を潜めたとしたか考えられん……。ガンツ、ヤマトの最終確認地点はどこだ？」

「はっ。ヤマトはこの地点で姿を眩ませたと報告が重複しておりま

す」

ガンツはレーダーモニターに映るカイパーベルトの一点を指差して報告する。シウルツはその地点を中心にヤマトの搜索包囲網を形成することを指示した。

「……早く発見せねばならぬ。ヤマトの修理が進めば進むほど、あの波動砲の威力が物を言うのだ」

冥王星でヤマトは波動砲を使わなかった。もちろん使われないようにシウルツなりに作戦は練ったが、おそらくヤマトは冥王星を破壊する可能性のある波動砲の使用を自ら控えたのだろうとシウルツは見ている。

だがここはカイパーベルトだ。たしかに波動砲の威力で天体のバランスが崩れ、地球になんらかの影響が生じる可能性はあるが、冥王星を砕くに比べればいくぶん対処しやすいはず。

ヤマトが波動砲を有する限り、正面から艦隊決戦を仕掛けるのはリスクが高過ぎる。それに、ボソソジャンプを使ってこないという保証がイマイチ得られないのも気がかりだった。

「しかし、ボース粒子反応も検出されていないし、ヤマトはいままで一度たりともボソソジャンプを使っていない。波動エネルギーの影響を懸念してだろうとは思うが……」

シウルツは顎に手を当てて考えるが、答えを導き出すことはできない。

ボソソジャンプを利用することができなくなって久しいガミラスだが、対策のための基本知識くらいは持っている。

実際ジャミングにしても過去の遺物を考えなしに使っているわけではない。動作原理をしっかりと理解し、制御下に置いたうえで使っているのだから当然だろう。

だが奴らは未熟な技術なれど活用していたし、遺物を漁っていたのだから、もしかすると過去のガミラスでは気づけなかった抜け道の類を発見していて、活用できている可能性は否定できない。

それゆえにシウルツはヤマトに対して慎重に接してきた。

超兵器波動砲、ボソソジャンプ、それらを抜きにしても一二〇隻も

の艦隊に包囲され、超大型ミサイルを四〇発にも見舞われ、反射衛星砲三発にすら耐えきつた、あの圧倒的な性能。それに加えて見事な采配を見せた指揮官の冴えと、それを忠実に実現したクルーの練度。

……悔しいがヤマトは強い。シユルツが知る限り——いやガミラスが過去相対したいかなる敵よりも。

シユルツはヤマトを屠るためなら奥の手を持ち出すことも辞さない覚悟を決めていた。だがそのカードを切るよりも前に、できる限りのことをしておかなければならない。

「なんとしても探し出せ！ 星の裏も表も全て調べ上げろ！ われらの命に代えても、ヤマトはここで叩かねばならんのだ！」

シユルツの激に部下たちは必死になってヤマトの姿を追い求める。

あの激戦でヤマトの脅威は身に染みている冥王星基地の面々にとって、ヤマトは命と引き換えにしても叩き潰す必要のある祖国の脅威と認識しているようだった。

全員が必死になってヤマトを探す。文字どおり目を皿のようにして、僅かな痕跡すら見落とすまいとレーダーを睨み、光学機器をフル稼働させ、それでも足りぬと窓から直接乗員がヤマトの姿を求めた。それからさらに二時間が経過した。ガンツは光学モニターに映るひとつの小惑星を目に留めた。

「シユルツ司令！ 不審な小惑星を発見しました！」

頼れる副官の声にシユルツは即座に駆け寄りモニターに詰め寄る。そこに映し出されているのはなんの変哲もない小惑星。だがその表面に妙な膨らみがあるのが見て取れた。

その膨らみの表面は非常に荒く、まるで岩石を無理やり寄せ集めたような不自然さを感じさせる。だがそれも注意して見ていればの話で、注意を払っていないければ見逃しかねない程度には自然だ。

「ガンツ、あの不審な膨らみを拡大しろ」

シユルツの命令に従ってカメラの倍率を拡大する。すると岩石の隙間に巧妙に隠されている観測機器の存在を確認できたではないか！ 外部を監視する役割を持つ装置だけに完全には覆えなかったのだろう。

「あれは探査プローブの一種だな……だとすれば、ヤマトはあの中にいるはずだ！」

どうやったかは知らないが、発見を避けるために周りを漂う小天体を寄せ集めて偽装に使用したらしい。中々頭の回る連中だ。しかしこちらとて、必死の覚悟で挑んでいるのだ、見事な偽装だがわれわれの目を欺くには一步足りなかったようだ。

シユルツはさっそく通信機に飛びついて指示を出した。最終決戦の始まりだ！

「——全艦集結せよ！ ヤマトに対し、最後の攻撃を仕掛ける！」

少し時を遡り、岩盤の中に身を隠したヤマトの中では。

「しっかし派手にやられたもんだぜ。俺達がいなかったら修理できなかったかもしれないなあ」

宇宙服を着込んで船外作業に従事するウリバタケが愚痴る。百戦錬磨の名メカニツクの目から見ても、ヤマトの損害は目を覆わんばかり。無事な場所を探すほうが大変なくらいだ。

とは言え、

「まあ、沈まなかったただけ運がよかったか。——そういう意味じゃ、たしかにお前さんは伝説の宇宙戦艦で、かつナデシコの魂も継いでるってことかねえ」

ウリバタケは独り言ちる。

ヤマトの戦歴には目を通して。詳細な戦闘データこそ残されていないが、大まかな経歴を知るには十分な資料が残されていたので苦労はなかった。

すさまじい戦果だった。そんな陳腐な感想しか浮かんでこないほどに。ウリバタケはそれを捏造だとは疑わなかったし、むしろ実際ヤマトに触れれば確信も得られた。

ウリバタケとてメカニツクの端くれだ。艦体構造やデータ上に残されている改修内容から、ヤマトが潜り抜けてきた修羅場の数々が窺

い知れると言うものだ。

完成されたあと、幾度にも渡って手を加えられたがゆえの歪さと不完全さが同居しながらも、それらを踏まえて徹底的に性能を底上げしていったヤマトの歴史——実に見事な仕事ぶりだった。

同じメカニックとして、負けてはいられないと敬意すら覚えるほどに。

対してナデシコもヤマトに比べれば戦績は劣るかもしれないが、相応の修羅場を潜り抜け生還した縁起のいい艦だ。かつての乗艦として思い入れのあるナデシコを引き合いに出すのは当然の流れだろうし、戦いの規模が違えど同じように修羅場の数々を潜り抜けた名艦二隻に関わられたのだ。メカニック冥利に尽きる。

しかも、戦いにおける立場としては揃いも揃って『初めて敵に正面から対抗できる戦艦』の立ち位置にあるのだ。

この因縁にウリバタケだけではない、初代ナデシコのクルーたちはヤマトを『違う形で登場したナデシコの跡継ぎ』と考えている節がある。それくらい立ち位置が似ているのだ。

——もしかしたら、自分たちがこの世界に漂着したヤマトに乗ったのは運命だったのかもしれないと、作業の手を止めずに考える。

部下たちに細かく指示を出しながら自身も破損箇所に取り付いて、壊れた装甲板の切除や溶接、その前に外部から作業したほうが早いだろう内部構造の修理を的確にこなしていく。

そんなとき、

「セイヤさん、この装甲はどこに運ばばいいんですか？」

宇宙服の内蔵無線からアキトの声が響く。

早々に修理を終えたダブルエックスと一緒に、ヤマト艦首の左右に搭載された資材運搬船と協力して装甲などの大きな部品の運搬作業や、装甲の張替え作業の手伝いに名乗りを上げてくれたのだ。

元々は完全なダブルエックスをあらかじめ出撃させておくことで、偽装が見破られたとき速やかに攻勢に出られるようにという配慮だったのだが、だったら手伝ったほうが時間を持て余さないとアキトが言い出したことで、修理作業の手伝いもしているに過ぎない。

そのため携行武装を搭載したGファルコンが左舷カタパルトの上で待機しているし、機体の調整を終えた三人娘のアルストロメリアも、戦闘態勢のまま発進レーン上で待機中であった。

アキトが疲れたら後退して修理作業を手伝ってくれるつもりらしい。

「おう！ それは右舷展望室下の装甲板だな！ 持って行って張替えを手伝ってやってくれ！ 雑な仕事すんじゃねえぞ！」

ウリバタケの指示に「うつつす！」と応じてアキトのダブルエックスが機体の全長ほどもある装甲版を運搬していく。

戦闘用の機体の癖に、案外手先が器用なダブルエックスによる修理作業は手早く精密だ。

それもそのはず、修理作業を円滑にするためにわざわざルリに頼んで制御プログラムも組んでもらったから間違いない。ついでにウリバタケと真田でマニピュレーターのリ調整も行ったのだ。パイロットがハマしない限り、作業はつつがなく終了することだろう。

そんなこんなで八時間ほど修理作業が続いたが、そこで第一艦橋のエリナから無線でガミラス接近の警告が届く。ユリカからも警戒体制に移行するので修理作業を中止するようにと通達され、ウリバタケは聞こえないように舌打ちした。

「ちっ、しょうがねえな。全員艦内に避難だ！」

ウリバタケは渋々修理作業を中断して作業員を引き揚げさせる。

もちろん作業艇や工作機械の類も一緒に引込めるが、剥がしたばかりだったり、これから溶接するところだった装甲板は置き去りだ。

なにかあってロストしたら貴重な資源を無駄にすることになる。

——なにごとくも過ぎ去って欲しいものだが、それは高望みだろうなど、自虐した。

「ガミラス艦隊は、真つすぐこの小惑星を目指しています。後方にも展開を確認、囲まれました！」

電算室でプローブからの情報を解析するルリが、緊張を滲ませた声で報告する。

「あちやく。敵さんの執念を侮ってたよ。こんなに早く発見されるなんて」

ユリカがぺちつと額を叩く。もう少し粘れると思っていたのだが、見込みが甘かった。いや、素直に敵の根気強さに敬意を表すべきだろう。ヤマトが回復する前に決着を付けたいと考えること自体は、自然なものであるし、立場が逆ならユリカとて同じことをするだろう。

「艦長、どうします？ ヤマトの武装はほとんど使えませんか」

戦闘指揮席で進が額に汗を滲ませる。

各砲へのエネルギー供給ラインの修理はおおよそ完了しているのだが、まだ最終点検が終わっていない。点検未了で発砲してなにかしらのトラブルを生じてしまおうとかえって危険だ。なにしろ機関部から直接エネルギー伝導管を引っ張っている構造であるわけだし、リスクを避けるのは当然の判断だろう。

おまけにミサイルはすべて撃ち尽くしたまま補充されていない。そんな時間的余裕はなかった。

「だいじよぶ、だいじよぶ。アステロイド・シップ計画に死角なし。

……ルリちゃん、いよいよ本番だよ。心の準備はOK？」

「はい、任せてください艦長。ヤマトは私たちオペレーターがきっちりしつかり護つてみせますとも」

ルリは不敵な笑みを浮かべて部下たちと視線を合わせて頷く。普段目立たない縁の下の力持ちにスポットライトが向けられた瞬間だ。……ルリは常日頃から目立っているが。

「偽装解除、ヤマト浮上後、岩盤を回転させます」

「了解！」

六人の部下がそれぞれ応じ、今後の作戦に合わせてコンピュータを操作する。

「大介君、偽装解除と同時にヤマトを小惑星から浮上させて。このカイパーベルト内でガミラス艦隊を迎え撃ちます！」

ユリカの頼もしい声に大介ら第一艦橋の面々が真剣な眼差しで各々準備を進めた。これが太陽系内での最後の戦いになるだろうという緊張感が満ちていく。

「了解。機関長、メインエンジン点火準備願います」

「了解。機関室、メインエンジン点火準備。偽装解除後、ヤマトを小惑星から浮上させます」

大介の要求を得て、ラピスは頼もしい部下たちに命令を下す。

幸いなことにエンジンには目立ったダメージはなく、反射衛星砲で大打撃を受けた出力制御系統の修理は真っ先に終わらせてある。

攻撃能力こそ喪失しているとはいえ、ヤマトは逃げるには十分な余力を残している。ただ、デイストーションフィールドは発生器の交換作業が途中で機能半減しているので、耐えるには厳しいが。

「反重力感応基、動力伝達を確認。岩盤解除一五秒前」

ルリの報告とラピスの「メインエンジン点火一〇前」と指示が続く。カウントダウンは続き、カウントゼロで大介はスロットルを押し込む。

「メインエンジン点火。ヤマト、浮上します！」

ヤマトをドーム状に覆っていた偽装が解除され、その中からメインノズルを噴射したヤマトが浮上する。

「ヤマト、自ら姿を現すとは——なんと潔い奴だ」

モニターに映るヤマトの姿にシユルツは気を引き締める。

「シユルツ司令、ヤマトはどうやら反射衛星砲のダメージがまだ回復していない様子です。一気に畳みかけるのが最善かと」

ガンツはヤマトの姿を拡大するや否や意見具申する。モニターに映るヤマトは反射衛星砲だけでなく、その前の艦隊戦で損傷したであろう装甲板の処置が終わっていない。

部分的に内部構造を露出しているし、張り替えたばかりで塗装すら終わっていない部分が散見される、実に見ずばらしい姿だ。

勝機があるとしたら、いましかない。シユルツは決断した。

「全艦に告ぐ。全砲門を開いてヤマトを撃滅せよ！これが最後のチャンスだと思え！」

シユルツの号令に応じて、各艦が隊列を整え照準をヤマトに向ける。一斉攻撃の構えだ。

「ガミラス艦隊より射撃用レーダーの照射を確認。攻撃態勢に入った模様です」

反重力感応基の制御で手一杯のルリに変わり、副オペレーター席に座った雪が第一艦橋に報告する。

その報告にユリカとルリと真田以外の全員が額に汗を滲ませる。敵の決死の覚悟が伝わってくるようだ。

進はすぐに格納庫に連絡、ダブルエックスの武装を取り付けたGファルコン、三人娘のアルストロメリアの出撃を命じる。

対艦攻撃がメインになる以上、主力はノンオプションでそれが可能なGファルコンDX。

アルストロメリアはその補佐と目くらまし要員だ。……残念だが大型爆弾槽も残っていないし、信濃も波動エネルギー弾道弾を撃ち切って戦力外だ。

問題があるとすれば、このような障害物の密集した場所だと自爆の恐れがあるためサテライトキャノンが使い辛いということだろう。

大型のスペースコロニーをも一撃で消滅させるサテライトキャノンも、それ以上の規模の小惑星が点在しているアステロイドベルトの中ではさすがに分が悪い。

おまけに整備の都合からエネルギーパックの充電が終わっておらず、ヤマトからの重力波ビームの照射が必須になっているが、こんな障害物だらけの空間で受信するのは少々厳しい。——サテライトキャノンは使えないと判断するほうがいいだろう。——状況的にはともかく、心情的にはあまり使いたくない代物でもあるし。

すぐにカタパルトに乗せられていたGファルコンが射出され、自動操縦でダブルエックス目掛けて飛んでくる。アキトはすぐに合体態勢をとった。

伸長したサテライトキャノンを肩越しに前方に向け、リフレクターを後方に倒したダブルエックスに、GファルコンのAパーツが機首と翼を畳んで胸部に被さり、肩関節の根元が外側にスライドして出現するコネクターに、垂直尾翼の後ろからスライドして出現したコネクターを接続して固定。Bパーツが背中の中のドッキングコネクターに接続、中央ユニットに内蔵された大型マニピュレーターが腰のハードポイントに接続されてBパーツを起き上がった状態で支える。

——合体完了。すぐにカーゴスペース内に吊るされていた新兵器——ビームジャベリンとシールド——ディフェンスプレートを装備する。ようやく調整が終わったビームジャベリンはその名のとおりに、ビーム刃を形成する投げ槍だ。腰部のビームソードよりもリーチが長く刺突に特化した調整がされているため、対フィールド突破力で勝る。

今回は対艦戦闘がメインということもあって、バスターライフルは置いてきた。これとハイパービームソードを合わせれば、対艦戦闘も苦にならない——はず。

「さあかかって来い。ヤマトは、俺たちの希望はそう簡単にはやらせてやれないぞ——！」

静かに闘志を高めるアキトに進から通信が入った。

「アキトさん、ヤマトはまもなくガミラスへの対処行動に入ります。それに合わせてリョーコさんたちと協力して、対艦攻撃を願います」
「了解」

短く応じるとすぐにヤマトから今後の作戦プランに関する資料が送られてくる。

簡潔に記されたとんでもない内容にアキトは開いた口が塞がらなかったが、すぐにニヤリと笑う。——これは、相手の意表を突けるいいアイデアかもしれない。

その頃電算室では、反重力感応基を撃ち込まれた岩石の位置情報を完全に把握したルリが、ユリカと考え出した活用法のために部下たちと念入りに周辺情報を探る。

ドームに埋め込んでいたプローブを修理途上のレーダーシステム代わりに、ガミラスの動向を正確に捉える。

「ルリちゃん！」

「はい！ 岩盤回転！ アステロイド・リング形成！」

ルリの意思がIFS端末を通してオモイカネに、ヤマトのコンピュータに送り込まれる。さあ、これからが腕の見せ所だ！

偽装ドームを解除されて周辺に散らばっていた岩石が反重力感応基に操られ、ヤマトの周辺に再集結。見る見るうちに左回りに高速回転する帯を形成し始める。

「なにをしようとしているのか知らんが、させんぞヤマト！ 全艦砲撃開始！」

シユルツの号令でガミラス艦隊は次々と重力波とミサイルを放ち、ヤマトを宇宙の藻屑にせんと火力を叩きつける。

たかが岩石、これだけの火力を叩きつけてやればあっさりと消滅してヤマトは宇宙の塵と消えるはずだと、誰もが願った。

ルリはガミラスの猛攻がヤマトに届く前に防御措置を完成させていた。反重力感応基を撃ち込まれた岩石を重力制御でヤマト周囲にまるで天使の輪のように集め、回転させることで形成されるアステロイド・リング防御幕。かつてのヤマトでも使用された防御手段のひとつだ。

そのアステロイド・リングを巧みに制御して、襲い掛かってくる重力波とミサイルを次々と受け止める。

帯の向きを変えたり、回転する盾のように形成したり、変幻自在の動きで適切な形状へと変えて猛攻を防ぐ。

本来ただの岩石で防げる重力波砲ではないが、再生産された反重力

感応基は小型のディスプレイフィールド発生機が内蔵されていた。そこにヤマトからの重力波ビームを受けて、重力制御とフィールド用のエネルギーを確保して機能するため見かけによらぬ高出力を得ているというのは、エステバリスの運用データの転用だった。

波動エネルギーの恩恵を直接受けられず、装置の規模から強度も十分とは言い難い。……だが、数が揃えば相互作用で補える。その技術はすでに確立済みだ。

それに装置が回転しているのもミソで、無理に広域にフィールドを広げるのではなくフィールドアタックのように横殴りに殴りつけることで、フィールド強度以上の攻撃を凌ぐことができるのだ。

さらに環境次第では追加で反重力感応基を打ち出すことで損耗した岩石を補填して防御力を維持したり、数を増やして防御を厚くしたりと応用しやすい。最悪敵艦の残骸すらも制御することは可能であろう。

だが、防御一辺倒ではいずれ力尽きてしまうことは容易に予想できた。ここでルリとユリカが考案した次の行動が真価を発揮する。フィールド発生装置はこのためのおまけに過ぎない。

と言うよりも、ビームではなく重力波砲をガミラスが備えていた時点で、ユリカは防御システムとしてのアステロイド・リングにある程度見切りをつけていた。

もちろん度重なるシミュレーションによってご覧のとおり防御性能を発揮することはできているが、本命はこれから行う行動にこそある。

「ルリちゃん、勢いつけてえ〜」
「いつもより多く回しております」

ユリカの指示を受けてルリはアステロイド・リングの回転速度を最高にまで上げる。

リングはヤマトの喫水線と平行になるような位置で回転し、凄まじい運動エネルギーを蓄える。その姿はまるで天体の膠着円盤のよう。

そして、ガミラス艦の位置情報や周辺環境データを、雪たちオペレーターが改めて処理してルリの手元に送り込む。準備完了！

「やつちやえー！！」

「投擲開始！」

ユリカの命令を受け、ルリは回転するアステロイド・リングからまるでピッチングマシンのように次から次へと岩石をランダムに放出、ガミラス艦目掛けて撃ち込んでいく。

ガミラス艦は想定外の事態に対処が間に合わなかった様子。次々と撃ち込まれる岩石に右往左往、次々と直撃を受けて傷ついていた。

原理上デイストーションフィールドは質量を伴った攻撃に弱い。そこに大質量の物体を高速で大昔の攻城兵器よろしく叩きつけてやればどうなるか——結果は火を見るより明らかだろう。

おまけにフィールドコーティングすらされているのだ。さすがのガミラス艦であつても無傷で凌ぎ切ることはできない様子だった。

これが、ただの岩石では十分な防御力を得るのが難しいと考えたユリカの考えを、ルリの技術で形にした、アステロイド・ノック戦法である。

「や、ヤマトめ……なんという攻撃手段だ……！」

シウルツは急な回避行動で揺れるブリッジの中で、近くのコソールにしがみ付きながら戦慄する。

周りにあるものを有効活用して、僅か一手でこちらの体制を崩す豪胆にして繊細な戦術。技術力で劣ると見下していたがとんでもないことだった。彼らは苦境の中で着実に技術と発想を磨き、ヤマトというイレギュラーの出現に伴って見事にその才能を開花させていた。

まったくもって恐ろしい存在だ。常識に縛られることをよしとしない型破れで奇抜な——それでいて基本を疎かにしない優れた指揮官と、そんなついていくのも大変であろう指揮官にたやすく追従する部下。戦慄しないわけがない。あれは常識に囚われていては決して勝てない相手だと、いやというほど思い知らされた。

……これがヤマト。ガミラス最大にして最恐の敵！

「しゅ、シユルツ司令！ あの人型が向かってきます！」

ガンツが示したモニターの中で、冥王星基地をただの一撃で葬り去った人型機動兵器が迫ってくる。

その威力を味わった彼らは、ヤマト同様の脅威を感じ速やかに迎撃姿勢を取ったが、それで止まってくれるほど、あの人形は甘い相手ではなかった。

アキトはGファルコンDXのスラスターを全開にして一気に距離を詰め、手短なガミラス駆逐艦に襲い掛かった。

ヤマトに繋いだままの通信からは、

「やったあく！ ルリちゃんさすがあ！」

とか、

「いえいえ、電算室オペレーターズのチームワークの力です」

とか、

「艦長！ アステロイド・シップ計画は完全に成功しました！」

とか、

「すごいなこれ……！ 島、いつそこからは岩石を身に纏ったまま航行するのもありじゃ……」

とか、

「馬鹿言うな！ 積載量が増えて航行に支障が出るだろうが！」

などといったやり取りが聞こえてくる——このノリは本当にナゲシコだな、とか考えながらも千載一遇のチャンスを逃すまいと一気呵成に挑む。

体勢を立て直す時間は与えてやらない！

少し遅れてリョーコとヒカルとイズミのアルストロメリアも、アキトが狙いを定めた艦のすぐ近くの艦に襲い掛かったようだ。

GファルコンDXは既存機の比ではない推力を最大限に活かした機動で岩石をぶつけられ弱ったガミラス駆逐艦に接近、爆発に巻き込まれることのない距離から、収束モードの拡散グラビティブラストを

計一二発、矢継ぎ早に撃ち込んだ。

相手のフィールドを食い破った重力波は、破損部からたちまちガミラス駆逐艦の内部構造を破壊、破壊されて暴走した機関部の爆発で内側から引き裂かれ、カイパーベルトの一部と成り果てる。

撃沈を確認したアキトは機体を翻し、次の獲物を探していると三人娘の戦いが視界に入った。

最初に至近距離からレールカノンとハイパーバズーカ三挺の全弾を撃ち込んでブリッジを叩き潰し指揮系統を混乱させ、すぐさま機関部に取り付き腕部クローを最大出力で叩き込みながらGファルコンの火力を集中して装甲を破って致命傷を負わせる。

エステバリスでは不可能だった戦法を駆使して、手負いとはいえ一隻沈めて見せた。相も変わらず息の合った連携だ。

戦果を見届けつつ次の獲物を選んだアキトは最大戦速で肉薄、今度は左手にハイパービームソードを持たせ、装甲が比較的薄い艦底部にビームジャベリンと同時に突き立てる。

密着しなければ役に立たない近接戦闘武器ではあるが、ビームの収束率と突破力はバスターライフルを上回る。激しい抵抗をかくぐり、接触して数秒でフィールドを突き破って装甲に喰い込んだ。粒子が激突する際に生じる熱と衝撃で見る見るうちに装甲が融解して穴を開けていく。

そのままでは致命傷を与えられないためビームソードを引き抜くと同時に左右の拡散グラビティブラストを発射、ついでに左のミサイルポッドも開いて五発ほど撃ち込む。そこにさらにダメ押しでGファルコンAパーツの機首大口徑ビームマシンガンも離脱しながら撃ち込んでから最後に拡散グラビティブラストをもう一撃。

情け容赦ない攻撃にろくな抵抗もできずに破壊されたガミラス駆逐艦の残骸を尻目に、GファルコンDXとGファルコンアルストロメリアの部隊は更なる獲物を求めてカイパーベルトの間隙を飛び回る。アキトは左腕のハイパービームソードを腰に戻し、Gファルコンのカーゴスペースに釣られていたもうひとつの新型オプション——ロケットランチャーガンを持たせる。

こちらにもダブルエックス用のオプション装備で、カンフピストル風のロケット投射機だ。先日ロールアウトしたハイパーバズーカよりも弾頭が大きく破壊力で勝るが、構造の都合で有効射程が劣り、携行弾数も著しく制限されるという難点を抱えていた。

アキトはそのロケットランチャーガンと敵艦の機関部目掛けて発砲、残りのミサイルもすべて使う。大型弾頭とマイクロミサイルが一点に立て続けに命中して爆炎を上げる。そこにすかさずグラビティブラストを連続で撃ち込んでやると、密着するまでもなく敵艦の機関部を破壊できた。

（ふむ、使い勝手は悪いけど威力はすごい。これは対艦攻撃に使えるな）

アキトはこのオプションの生みの親であるウリバタケに感謝した。

——だからなおさらハンマーとの落差を感じ、よくも悪くもウリバタケがロマン型であることを思い知らされた。

予想を遥かに超える新型機の戦闘力に顔面蒼白になったシウルツは、いよいよ最後の手段に訴える決意を固めた。

（たかが人形と侮っていたが、あの新型は危険だ。まさか単独でわが軍のデストロイヤー艦に匹敵する戦闘能力を持っているとは……！）

だが、所詮は艦載機。母艦であるヤマトさえ潰せれば——！）

「ガンツ、最後の手段に出るぞ……体当たりだ！」

「ええっ!？」

「ヤマトはここで潰さねばならんだ！ この命と引き換えにしても、デスラー総統に近づけるわけにはいかん！——ガンツ、生き恥を晒させるようで悪いが、おまえは脱出してヤマトとその搭載機との交戦データを、本国に伝えるのだ」

シウルツの命令にガンツは反発した。冥王星基地以前から慕ってきた、共に戦ってきた上官と一緒に死なせてくれと切実に訴えたが、シウルツは頑として首を縦に振らなかった。

「おまえまで死んでしまったら、ヤマトの脅威を伝えるものがないなくなってしまう——行けガンツ！ われらの戦いを無駄にするな！」

敬愛する上官の檄に、ガンツは涙を溢れさせながら心からの敬礼を捧げ、脱出艇に走った。

……その姿を見送りながら、シウルツは無傷なデストロイヤー艦一隻に戦域を離脱してガミラス本星に戻るように伝える。

たとえ極刑に処されても、データだけは渡すのだと言うシウルツの懇願に近い命令に、デストロイヤー艦の艦長と部下たちは熱い涙を流しながら応え、屈辱に紛れてでもヤマトとの交戦データを伝えると確約する。

——間もなく、シウルツの艦から飛び出した脱出艇が、離脱を受け入れたデストロイヤー艦に収納された。

脱出艇を受け入れた艦は速やかに反転、カイパーベルトを離脱していく。

その姿を見送ったシウルツは、無線機を手にとって指揮下にあるすべての艦、すべての部下に最後になる命令を下した……。

「全艦に告ぐ。冥王星前線基地司令のシウルツだ。ヤマトはここから一歩も外に出すわけにはいかん、最後の決着をつけるのだ！——諸君。長いようで短い付き合いだった。これより、ヤマトへの体当たりを敢行する！ これ以外に活路はない……！……！……！諸君の未来に栄光あれ。冥王星前線基地の勇士たちよ、覚えておきたまえ……！……！われらの前に勇士なく、われらのあとに勇士なしだ！」

シウルツの最後の演説に、全員が涙を流して震えていた。それは死ねと命令されたことに対する悲しみでも反発でもなく、われら冥王星前線基地一同を最後まで大切に思ってくれたシウルツへの感謝と、最後の瞬間まで付き添う覚悟、そして強敵ヤマトをここで葬り去り、祖国への脅威を取り除かんとするガミラス軍人としての誇りで身を震わせていたのだ。

——そこに死への恐怖はなかった。

「……さあ行くぞ！ 全艦突撃開始!!」

シウルツの号令でガミラス艦隊は砲撃しながらヤマトに体当たり

すべく突き進む。ただただ祖国への忠誠と、敬愛する上官を寂しく逝かせまいとする覚悟のみで、宿敵ヤマトに命をもって立ち向かうのであった。

「艦長！ 艦隊が真つすぐ突っ込んできます！」

電算室でルリの補佐を務めていた雪が、ガミラス艦の行動を速やかに第一艦橋に報告する。

「ルリちゃん、リング解除！ 大介君、身軽になったらすぐに回避行動に移って！ 体当たりするつもりよ！」

敵艦の動きからその目的を悟ったユリカがすぐに指示を出す。使い次第ではとても有用なアステロイド・リングにもひとつ弱点がある。

ヤマトの全力機動に追従できないのだ。

リング形成中は急激な機動をすると、追従できなかったリングがヤマトに接触する危険性があり、リングを解除して身に纏っても重量増加で機動力が落ちる二重苦を抱える、防御特化の戦術なのだ。

「了解、リング解除！」

「機関全速、取り舵一杯！ 回避行動に移ります！」

命令を受けた全員の行動は素早かった。

ルリはすぐさま残っていた岩石を敵艦隊の進路に割り込むように放出、ハリは大介の操縦を補佐すべく、電算室から送られたデータを頼りに敵艦の進行方向からヤマトを外すための行動プランを選出する。

送られたデータを頼りにヤマトを操る大介と、ヤマトの速力に影響する機関コントロールに全神経を集中するラピス。

全員が一丸となって命を捨てて挑んでくる冥王星艦隊と相対。雌雄を決する瞬間が迫っていた。

ばら撒かれた岩石に激突した僚艦たちが、ヤマトとの進路に割り込んできた岩石を避けられず次々と衝突を繰り返し、玉突き事故のように碎かれ、ひしゃげて、沈んでいく。

さらにこちらの行動を阻止すべく、人型たちも決死の覚悟で僚艦の機関部を破壊し、宇宙を漂うゴミ屑へと変えていく。

熾烈極まる攻防で艦隊が壊滅していくなか、シユルツの乗艦だけはヤマトに肉薄することに成功した。

「デスラー総統バンザアアアイツ!!」

シユルツは祖国の主の名を叫びながらヤマト向かって突き進む。

——その脳裏に、祖国に置いてきた愛する娘の姿が過った。もう二度と、その笑顔を見ることはない。成長を見届けることができない。シユルツの心に残った、わずかばかりの無念。

(ヒルダ……)

全力で右舷スラスターを全開にして軌道を逸らそうとするヤマトに敵戦艦が突っ込んでくる。回避は間に合わない!

「進! ロケットアンカー!」

「はい! ロケットアンカー発射!」

ユリカの命令に進は疑問を挟むことなく応じる。彼女がなにを狙っているのかを直観的に理解したのだ。

進の操作で撃ち出された右舷ロケットアンカーは、ヤマトに突っ込もうとしていたシユルツ艦の艦首側面に苦もなく突き刺さる。アンカー自体に高出力のフィールドを収束させ、デイスターションアタックと同じことをしたのだ。

アンカーは命中と同時に内部でフィールドを解放し、小規模な爆発を引き起こす。戦艦を動かすには非力な一撃だが、ヤマトの回避行動を成功させるには十分だった。

本来ならヤマトに正面からぶつかることができたであろうシユル

ツ艦は、わずかに軌道を逸らされた。ヤマト右舷中央付近に接触して激しい火花を散らし、右舷コスモレーダーアンテナ、その下のウイングマスト、対空砲の砲身を根こそぎへし折ったが、ヤマトを葬るには角度が浅すぎた。

敵艦はそれ以上の損害を与えられないままヤマトを通り過ぎ、刺さったままのロケットアンカーの鎖が伸び切って張り詰め——ちぎれた。その反動で姿勢制御を誤った敵艦は、体勢を立て直す間もなく空しく小惑星に激突——散った。

その爆発の光に、辛うじて撃沈を免れたヤマトが照らし出される。ちぎれてひらひらと漂う鎖は、まるで死闘の末散っていった敵艦に対して哀愁の意を示しているようであった。

その最後を見届けたユリカは、ガミラスの残存艦艇がいなくなったことを確認したあと、全乗組員に黙祷を命令する。

「みなさん。彼らは地球を死の淵まで追い込んだ仇敵でした……しかし祖国のため、命を捨ててもヤマトを討ち取ろうとしたその忠誠心に、愛国心に、同じく祖国の命運を背負った戦士として、哀悼の意を捧げたいと思います……全員、黙祷！」

誰もその命令に逆らうものはいなかった。たしかに地球を破滅寸前まで追い込んだ怨敵ではあるが、最後の特攻の瞬間、たしかに感じたのだ。

自分たちと同じ、祖国の命運を背負った戦士としての気概を——使命感を。

そう思えば窮地を切り抜けたはずの歓喜も沸いては来ず、クルー全員が死力を尽くして戦った冥王星艦隊の戦士たちに心から哀悼の意を捧げ、その健闘と生き様を称える。

——護るべきモノの為に命を賭した、戦士たちの冥福を祈って。

ヤマトのそばに戻ってきたダブルエックスとアルストロメリアたちも、同じように黙祷を捧げていた。アキトたちも、同じようにしているのだろうか。

「黙祷、終わり！」

傍から見れば敵対した兵士に対しても礼を護つたに過ぎない行為

であつた。

しかしガミラス侵攻の事情を知らない大多数のヤマトクルーにとって、それは大きな分岐点となつた。

地球人と変わらぬ姿を持ち、そして祖国のために命を賭せるメンタルをもつ行動を見せつけたその姿。

自分たちと同じ『心』をもつ『人間』なのだ、改めて思い知らされた。

ユリカを始め、事情を知る一部の者にとつても、心に刺さる出来事だつたと言えよう。

それは、シユルツが命と引き換えに成した、この時点では小さな――だが後に大きな意味を持つ出来事だつたのだ。

ヤマトは改めてカイパーベルトの小惑星に取り付いて資源の採掘と、傷ついた艦の修理作業に没頭し始めた。

ヤマトの修理完了予定まであと二五日。急ぐ旅路においては手痛い損失である。

それは、冥王星前線基地の執念と祖国への忠誠心が成した成果。

ヤマトクルーはそのことを深く心に刻み、これからもあるであろう妨害を掻い潜ってイスカandalに辿り着くと、改めて気を引き締めるのであつた。

太陽系に入り込んだガミラスの軍勢を辛くも壊滅させたヤマト。

だが、その前途は未だ険しい。

地球絶滅の危機を刻々と迎えている人類を救えるのは、宇宙戦艦ヤマト。

その愛と知恵と勇氣しかない。

急げヤマト、その日まで！

人類滅亡と言われる日まで、

あと三五四日。

第九話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十話 さらに太陽系！ いつか帰るその日まで！

かならずの帰還を誓って。

第十話 さらば太陽系！ いつか帰るその日まで！

A.パート

冥王星前線基地の残存艦隊の襲撃を、アステロイド・シップ計画とGファルコンDXの活躍で辛くも切り抜けたヤマト。

しかし冥王星前線基地攻略作戦で負った傷は大きく、ヤマトは航行スケジュールの予定日数を超過する形で太陽系内に足止めを食らっていた。

だが、それでも艦内の空気は明るかった。

その最期に思うことこそあったが、地球を滅亡寸前にまで追い込んだ脅威を退けることに成功したことは事実であり、少しづつではあるが、太陽系をガミラスの手から一時的であつても開放できたことに対する喜びや達成感が沸き上がってきたのである。

そして本来なら緩んだ気を引き締める立場にある艦長のミスマル・ユリカもまた、

「いえ〜い！ 私たち勝ったよ〜！ 祝勝会だ〜！」

と艦内のあちこちに出現しては左手でVサインを高らかに掲げ、勝利の喜びを共に分かち合おうとハイタッチをしたり、手を握り合ったり、隣で付き添っているアキトやエリナの眉間に皺が寄る元気で盛り上げていくので、誰も歯止めがかけられなかったのである。

もちろん能天気そのものだったわけではない。敵が自分たちと同類であると実感したことで低下した士気を盛り上げるため、道化を買って出たという意味合いも強い。とは言え陰で小言を言われることは避けられないので、アキトやエリナを中心にいろいろ説教もされた。

もしもこの光景を天国の沖田艦長がみていたらどうなるのかと思いましたが、まあこれが私らしくなのだろうと自己完結して終わる。深く考えてはいけない。

そんな空気を積極的に広めながらも、ユリカは艦長室に籠って日々

の書類仕事に勤しんでいた。

このときは冥王星前線基地残存艦隊との決戦から、八日が経過していた。

「ふくむ。やっぱりあちこちやられたせいで修理に時間がかかるんだねえ……」

ペン型入力端子を鼻と唇の間に挟んで唸りながら、真田が纏めて提出したヤマトの損害報告に頭を痛める。

いまは壁に収納したベッドの裏側に設置された折り畳み式デスクを開いて、その上に紙書類とバインダーにファイル、さらには電子報告書を表示したウインドウを周囲に広げて、今後の運航についてアイデアをひねり出していた。

「真田さんとセイヤさんに言わせると、結構細かい所にダメージが及んでいるらしく、時間を取られているそうです。最後の敵旗艦の接触で応急処置程度だった箇所が結構傷んだみたいですし、部品の生産も遅れているとか」

ユリカの隣で書類の整理を手伝っているルリが補足する。

停泊中とあつては電算室をフル稼働させる必要もなく、索敵任務は部下と自ら手伝いを名乗り出たハリの好意に甘え、ユリカの日々の体調では辛かろうと書類仕事の手伝いを願い出た。

しかし資料を見れば見るほどに大きな被害を被ったことがわかる。単独航海ゆえにさまざまな資源はもちろん、限られた時間内での超長距離航海だからこそ付きまとう時間の遣り繰りは、ルリにとつても頭の痛い課題である。

「ユリカさん、やはりカイパーベルトの天体だけで資源を調達するのには限度があります。希少金属などの資源がほとんど得られません。……コスモタイガー隊のみなさんがガミラス艦の残骸を拾い集めてくれています、回収に苦労しているようです。特にアキトさんとイネスさんは、ボソソジャンプで地球までリターンまでさせられていて大変みたいです」

ルリは資料を覗みながらユリカに報告する。

現在ヤマトは再び小惑星の上に簡易ドックを形成して身を潜めていた。

反重力感応基で制御されるドックは必要に応じたサイズ、向きに開口部を作れる。そこから作業班を外部に出击させることで、破損した自身や撃破したガミラス艦の残骸、さらにはカイパーベルト内の天体から資源を回収し、艦の修理作業と今後に備えた資材と交換部品のストックを続けていた。

単独での航行を余儀なくされているヤマトでは、一度にストックできる資源の量は著しく限られている。となれば破損した部品を資源に再還元したり敵の残骸を漁ったり、立ち寄った星から資源を得るなど工夫をこなさなければならぬ。

そしてこういう作業に威力を発揮するのが人型機動兵器だった。

Gファルコンとの合体によって相転移エンジンが追加されたことで格段に稼働時間が延長され、機体自体のパワーと器用さも向上した現行機においては、資源回収のための作業機械としても破格のパフォーマンスを発揮してくれている。

これと作業艇を同時に運用すれば、ガミラスの奇襲を受けたとしても作業艇を守りやすくなるという副次効果も得られるとあって、コスモタイガー隊の任務にヤマトの船外作業の手伝い全般が加えられたのは、必然といえよう。

特にボソンジャンプに対応しているダブルエックスは要も要、A級ジャンパーの実力で実行できる長距離ボソンジャンプを駆使して、資源回収にひた走っていた。

既存機と大幅に異なる操縦系を持つせいで、正パイロットに任命されたアキトとテストパイロットの月臣、アキトから直接レクチャーを受けた進しか乗れないのが難点だが、この三人と時にはナビゲーターとして協力してくれるイネスの力添えもあり、地球にも支援を求めることを提案され、許可を出したばかりだった。

なんでもコスモタイガー隊のパワーアップのためらしい。

ほかにも機関班からの要望で、タイタンから追加でコスモナイトを確保する目的で遠征部隊も編成する許可もついさつき艦長室に届い

たばかりだ。

「はあ……この七日間、アキトにまともに会えてないなあ」

寂しそうに呟くユリカにルリは少し同情する。が、内心「どうせ会えるようになったら所構わずイチャイチャするんでしょ」と冷ややかな考えも浮かんでくる。しかし、それを咎めることは誰にもできないだろう。

だって本当に目の毒なのだ。特に独り身で相方募集中だったり結婚願望がある人間にとっては。

意外に思われることもあるがルリもその内のひとりなので、家族が再開した喜びのピークを過ぎれば冷めた感想が出てくるのは当然だろう。

そんなんだからエリナに「ラピスの教育に悪いから自重しろ」と夫婦そろってお説教されるのだ。思春期直前のラピスの眼前だと言うのに、二人だけの世界を作ってキスなんてしたら当然。同情の余地はない。

で、そのあと決まって「恋をするってどんな気持ちなんですか?」とラピスに質問されるエリナも気の毒だった。

ラピスももう一三歳。そろそろ誰かに恋をしたっておかしくない時期だから、なおさら自重を求めたい。ただでさえ一般常識を勉強中のラピスだというのに。

「資材の回収もそろそろ目処が立つらしいですし、もうしばらくの辛抱ですよ。時間ができたらたっぷりイチャイチャしてください。艦長室で、二人つきりで。——さて、一息入れましょう、ユリカさん」
一応誰にも見られないようにしろと釘を刺しつつ、休憩しようと切り出す。

「そうだね」

と嫌味が通じたのかどうかすら怪しい能天気な口調でユリカが応じた。

せっかくの休憩だが、いまのユリカはお茶も遠慮するように言われているので特に問題のない栄養ドリンクか水しか飲ませられない。ルリも書類仕事で少々疲れたので、一緒に栄養ドリンクでお茶をしよう。

う。

——優雅さには程遠いなあ。ルリはおかしな気分だった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十話 さらに太陽系！ いつか帰るその日まで！

ヤマトの修理作業は順調に進んでいた。

修理開始から一〇日が過ぎる頃には装甲外板の補修作業はあらかた終了し、ヤマトの艦内はようやく気密を取り戻す。

それから修理作業ではがした防壁コートの再塗布のため、専用的大型スプレーを持ったグループの作業が始まる。その作業に丸一日かかって、ヤマトはようやく外見上は損傷から復旧した。

あとは内部の修理を進めていくことになるわけだが、これがまた厄介なもので、単独での長期的に多種多様な作戦行動が求められるヤマトは、全長三三三m、艦幅五〇mの艦体に似つかわしくないほど多数の機能を盛り込んでいて、しかもかなりの重武装ときている。

結果、とにかく内部構造が複雑で余裕がない。

可能な限り効率的に詰め込んではいるが、わずか一年という短い時間で大破状態から大規模改修を踏まえた再建を行ったことや、一般的な宇宙戦艦には不要な装備（艦内工場とか）も多いため、どうしても整備性という点では問題の多く問題を抱えているのが実情だった。

もちろんヤマトに限らず内部構造を露出するような打撃を受けた軍艦の整備には手間がかかるものだが、ヤマトは一般的なそれよりも手間がかかる。それだけに、反射衛生砲によって受けた被害の回復には時間がかかった。

ヤマト自身の頑強さも修理作業を長引かせる一因であったことは言うまでもないだろう。

しかしそんなヤマトの欠点を補える人材がいた。真田とウリバタケのコンビに代表される工作班の面々だ。

特に真田とウリバタケはそのご都合主義的な能力をいかに発揮し、ぱつと見どう手を付けるべきかと悩みそうな損傷個所を一瞥す

るだけで、補修作業の優先順位をあっという間に決めてしまう。

部下たちも今回の航海にあたって旧ナデシコの「人格に問題があれば能力は超一流」な連中や、それに肩を並べる凄腕がそろっていたこともあって、この扱いづらさが目立つヤマトという艦艇の難しい整備を四苦八苦しながらも着実にこなし、その機能を維持していた。

それでも大激戦を潜り抜けた傷は大きく、彼らの技量をもつてしても、ヤマト全体の検査と修理作業が完了して万全の状態にまで回復させるのに、予定されていた補修日数の一四日を大きく超過する遅れを出し、スケジュールの予備日数も大きく目減りしてしまったのだ。

そんな大修理の最中。

外装の修理を完了し内部の作業が本格化していた時のことだった。

ユリカはヤマトが誇る技術者三人組に、今後のことを考えた提案とやらを持ち掛けられたのであった。

「アルストロメリアのパワーアップに——新型機動兵器の開発の目途が立った!?!」

第一艦橋で真田とウリバタケとイネスにそう話を振られて、ユリカは目を白黒させながら絶叫した。

「ええ。地球に向いて伺いを立てたところ、ヤマトの再建やダブルエックス開発に使った資材のあまりがいくらか残っているらしく、それを切り崩せばなんとかかなりそうだという返事を頂けました。——A級ジャンパーの存在のおかげでこんな手段を講じることができました」

真田はユリカの反応に満足げに頷きながら、アキトとイネスのおかげでこの案を通せたと語る。

「艦長もご存じのとおり、アルストロメリアを受領して性能差はだいぶ埋まったとはいえ、数の不足からコスモタイガー隊の決定力——特に対艦攻撃力の乏しさが課題になってしまいました。加えてダブルエックスはサテライトキャノンの運用が第一で、今後も今回のように戦闘に参加できない状況が想定されます。——そこで、以前から相談

を受けていたアルストロメリアのパワーアップはもちろん、ダブルエックスと同じ技術で一から建造された新型機動兵器の導入が不可欠だと判断したのです」

「なるほど。地球の施設を使わせてもらえればヤマトの修理と補給を並行しながら強化も可能、というわけですね」

「そのとおりです。ヤマトの工場は余裕がありませんでしたので、ネルガルの月施設にアルストロメリアの強化用のパーツを製造してもらっています。アルストロメリアは修理や採掘作業にも使っているので向こうに送ることはできません。ですから部品だけ受け取って艦内で組付けます。太陽系におけるガミラスの拠点を叩き、一時的であつても彼らの手から太陽系を取り戻せたからこそその思い切つたアイデアでしたが、どうやらうまくいっているようです」

ユリカは腕組みして感心する。なるほど盲点だつた。

とすると、木星で彼らが支配していた市民船を破壊したことは、結果だけ見れば正解だつたと言えるのだろうか。それで心の痛みが消え去るわけではないが――。

「これをご覧ください」

真田は自身の席のコンソールを操作して、メインパネルに強化型アルストロメリアのCGモデルを映し出した。

CGモデルのアルストロメリア（改）は、部分的なパーツの交換や追加が行われていることが見て取れる。

背中の重力波アンテナは長さが倍近く延長されているばかりか、中央に横向きに伸びるアンテナが追加されている。また基部に間接が追加されているらしく、ダブルエックスのリフレクターのように正面に向けて倒せるようになっていようだ。――シルエットもどことなく似ている。技術転用したのだろうか。

「重力波アンテナはリフレクターの技術を転用してエネルギーの貯蔵機能を追加し、変換機能も強化して出力を増しています。内部のエネルギーシステムも要点を抑えて交換することで、その出力を持て余さないようにします」

ふむふむと頷きながらさらに画像を注視。おや、肩の上面にハード

ポイントが増設されているようだ。

「お気付きになられましたか。肩の上側にハードポイントを増設し、武装の追加が可能になりました。サブアームも併用すれば携行武装のマウントも可能です。」

CGモデルが武装をマウントした予想図に変貌した。ふむ、シンプルな円筒状の砲身の砲身に箱形のミサイルランチャー、サブアームを使えば携行武装のマウントも可能、と。

「ほかにも——」

さらに補足しようとした真田の脇をイネスが突く。はてと振り向く真田の眼前で、ふうと頬を膨らませたイネスが「自分にやらせろ」と目で訴えていた。

「……どうぞ」

気圧された真田が素直に譲るとイネスは会心の笑みを浮かべて、

「それじゃあ、説明しましょう」

すぐく嬉しそうに宣言。ユリカも苦い笑みを浮かべる。彼女は本当に相変わらさずだ。

そんなイネスを横目で見た真田は、「本当に楽しそうに生き生きとしている。この表情は好きなんだがなあ」とか心中で呟いていた。

あまり女つ気のあるとは言い難い真田ではあるが、女性に興味がないわけではない。恋愛だつてしてみたいという欲求も一応ある。

ただ、それ以上に科学に向き合っているだけであるし、そんな自分に付いてこれる女性の姿が想像できなかっただけだ。

そもそも、自身の科学との向き合い方は生涯を掛けたものなので、妻を娶って巻き込むことを内心恐れ、及び腰になっていたというものもある。だが、ネルガルに入りヤマト再建計画を通じて接点を持ったイネス・フレサンジュは、そういう意味では真田にとって大変好ましい女性であると言えた。

美人なのはもちろん、自分と共通の話題で対等以上に渡り合える。これはなかなか魅力的である。それに、うっかり口を滑らせた自身の科学との向き合い方にも理解を示してくれたのだ、意識しない訳がない。

事実ヤマト乗艦前から気が付けば食事の席に誘っていたり、その逆もよくあったので脈がないわけではないだろうし、そうであるのならいつそ当たって砕けてみてもいいような気がしないでもない。まあヤマトに乗っている間は自重したほうがお互いのためだと思うが。

強いて欠点を上げるのなら、この説明好きだろうか。しかも彼女の場合なぜか児童向きの演出に舵を切ってしまうのがどうにも馴染めない。——どうにかならんものだろうか。

一方真田から説明の座を奪い取ったイネスは、素直に譲ってくれた真田に心から感謝していた。やはり彼も技術者、説明という行為の魅力はよく理解しているようだ。

ヤマト再建計画で知り合ってから以来、自分の隣にいて好ましく思える男性である真田として意識しているイネスだが、また少し好感度が上がったことを自覚する。

一緒にいて苦痛を感じないというのは、相性がいいと考えていいのではないかとも考えているが、イネスはこの旅が最良の結果で終わらない限り自分の幸せを追求するつもりはない。

それは共犯者としての責任だと思し、場合によっては自分の命すらも危ういのだ。いまは関係を進める気にはなれない。

そんな深刻な考えも頭を過ったが、まずは説明一も二もなくも説明だ。

「えーごほんっ！ 改良型のアルストロメリアは腕部クロユニットにも改良を加えていて、爪は外側の二本だけに削減し、内側の一本は撤去、その代わりに内蔵型ビームライフルを装備することになるわ。さすがにダブルエックスの出力には到底及ばないけれど、対空戦闘では十分な火力を出せる計算であるし、固定武装の充実によってとにかく継戦能力と瞬間火力向上が目的の改装ね」

メインパネルの表示が拡大され、撤去されたクロウの代わりに内蔵型のビームライフルが装備されたことを示す注釈が重ねられた。

「ビームソード兼用で開発したかったのだけど、技術的な問題から兼用型は実現できなかったのよ。表側のクロウは従来品の改良で済ませているけれど、エネルギー効率を考えるとビームソードを搭載する

のはまだまだ問題が多くてね」

どうして併用できなかったのかの技術的な問題を語ろうと口を開きかけたところで即座にユリカから、「足のパーツはなんなんですか？」と質問が飛んで流されてしまった。——やるな、艦長。

「足の部品は追加スラスター兼用の装甲ユニットね。統計で視ると、エステバリスは意外と脚部を損壊しているという報告が多かったのよ。基本構造が共通してるアルストロメリアも膝部分にメインバッテリーを搭載している都合上、少しでも保護しておきたかったというのもあるわ」

イネスが該当箇所の画像を拡大する。アルストロメリアの脚部は正面と外側に追加装甲が装備され、脚部のポリウムが増していた。

特に外側の装甲はダブルエックスの脚部ラジエーターカバーに似た形状のものを採用し、同機であれば放熱フィンが収納されている場所に釣り鐘型の重力波スラスターを搭載し、装甲を外側に開くことで大出力の噴射はもちろんとして、噴射方向の変化も可能としているベクタードノズルでもある。

「ほかにもレーザーシステムの更新や関節駆動部の強化などなど、外見に反映されない部分も順当にパワーアップする予定になっているわ。これらの改装によって、アルストロメリアはダブルエックスに十分追従可能な随伴機としての性能を得ることができるはずよ。もちろんGファルコンもいままでの運用実績を基に調整を行って、より信頼性を高める予定でもあるしね。——まあそれでもダブルエックスには届かないのだけどね」

「小型相転移エンジン搭載の差ですか？」

いままで機関制御席のパネルと睨めっこしていたラピスが唐突に会話に入り込んできた。機関部門の責任者として興味があるのだろうか。

……考えてみればアキトの相棒とし頑張っていた頃はブラックサレナの整備の手伝いなどにも駆り出されていたが、ヤマト再建計画のときはダブルエックスに一切関わっていなかった。技術者の端くれとして気になるのだろうか。

「そうよ。特にダブルエックスのエンジンは現行の小型相転移エンジンの中でも文句なしの最強なもの。おまけにツインサテライトキャノンの発砲に必要な出力を得るためにこの出力を求めたとは言っても、通常戦闘時にはぶっちゃけかなり余裕があるのよね。グラビティブラストも装備していないし。ほかと比較すれば大出力とは言っても、携行型のビームライフルとビームソードじゃ、デバイスの大きさから出力の上限値はたかが知れてる。余った分を推進装置全般やデイストーションフィールドに分配して、いずれも現行機最強の称号を欲しいままにする出力を与えてもなお、余ってるのよ」

イネスは手元のパネルを操作して、アルストロメリア改の隣にダブルエックスの資料を表示させる。

「また、サテライトキャノン発射用のエネルギー蓄積や、発射後の再始動を高速化するため、機体の各所に『エネルギーコンダクター』と命名された新型コンデンサーが内蔵されているのも大きいわね。普段はそこに余剰エネルギーを蓄積し、必要とされる時に開放することで、ダブルエックスは瞬間的に大出力を発揮することができるのよ」

イネスはダブルエックスのシルエットにエネルギーコンダクターの搭載位置を示す赤いシルエットを重ねて説明する。両腕や両足など、各所に大小問わず点在していることが伺えることだろう。

「さらに！ Gファルコンと合体すればそちらの出力と統合されて自由に分配することができる構造も採用することで、ダブルエックスは通常戦闘においても他を圧倒する戦闘能力を発揮できるってわけ。特にGファルコンDXがノンオプションでも対艦戦闘に対応できる最大の理由はこれね。完全新規設計で新しいアイデアを詰め込めたからこそ、この機体は実現できたってわけよ」

「——まあ、イスカandalからの技術提供もあったのは事実だけどね、特に高強度・高剛性のフレーム構造とか、超大出力エネルギーの制御系とか、基礎の部分は」

イネスは最後は心の中でだけ呟いた。

ダブルエックスはいまのところその名を関していないが、イスカandalが開発した「ガンダム」と称される人型機動兵器の系譜を継ぐ機

体だ。ウリバタケが参加する前にユリカを通してさりげなく、ヤマトから回収したデータと偽るようにしてネルガルに提示したそのデータだ。もちろんコスモタイガーIIやコスモゼロといったヤマト搭載機のデータも活用されているし、いまの形にしたのは間違いなくウリバタケの手腕であったが、イスカンドルの助けなしでは実現できなかったのも事実である。

イネスも真田も最初は地球の延命のため、ヤマトのデータにもあった戦闘衛星を造る目的でそのデータを活用し、サテライトキャノンの原型を考案していたのだが、思った以上に地球の環境破壊が深刻であったため戦闘衛星の必要性が問われていた時、ウリバタケの発想からダブルエックスに小型化して搭載されるに至ったという経緯がある。

結果としてヤマトの航海の助けにはなったが、そのアイデアを提出したときのウリバタケの顔は、いまでも脳裏に焼き付いている。だが、その力はヤマトの航海の成否にすら関わる強力な手札となった。

つくづく理想と現実の折り合いとは難しいものだと思う。

そんなイネスの心中を知らないラピスは「納得しました。凄いですね、ダブルエックス」と素直に称賛していた。——あんな経験があったのに、純真な子だ。

喜んでくれたラピスの様子にイネスは制服の上から羽織っていた白衣のポケットから飴玉を取り出すと、「はい、よい子にはプレゼント」とラピスに手渡す。

「ありがとうございます」と、ラピスは嬉しそうに受け取って、早速貰った飴玉を頬張って美味しそうに口の中で転がしていた。

——第一艦橋での飲食は禁止されていないし、食べかすを出さない飴玉では叱責もされないだろう。特にユリカがその程度のことでは叱責する姿など、想像できない。

「それじゃあ話を戻すけれど、ここまでが既存機の強化について。ある意味本命の新型機は——これよ」

イネスはそう言って三機の新型機動兵器の完成予想CGモデルをメインパネルに表示させた。

ユリカはやや不安げな表情でメインパネルに映し出された新型機のモデルを見る。

ダブルエックスと共通するような意匠——つまりイスカナルで付けられたコードネームに乗っ取って言うのなら『ガンダムタイプ』とでも形容すべきデザイン機の機体だ。

データをもたらしたユリカだからこそ理解できる。さすがイスカナル製というだけあって、人型機動兵器としては最良の設計なのだ、ガンダムタイプは。

「——この三機も当然地球に製造依頼を？」

つい不安となって訪ねてしまう。ヤマトの艦内でガンダムタイプに準ずる機体を新規に開発するにはいろいろと無理がある。まあできなくはないと思うのだがさすがに専門外なのでなんとも……。

「当然でしょ、ヤマトの艦内で造るとなると負担が大きいもの。できなくはないけれど、相当物資に余裕を持って、かつ時間をかけなければならぬ。早急な戦力強化を目的とする今回の要望とは食い違いわね」

イネスは「そんなに心配しなくても大丈夫よ」と語りかけてくるが、ウリバタケが囁んでいるとなるといまいち信用できないところがある。ナデシコ時代も結構勝手をしていたし、イネスだって品性方正というわけではない。

——真田はまだ良識的だと思うが、二人の悪影響を受けていないとは考えづらい。油断してはダメだ、私はヤマトの艦長なのだから。

「この三機の内、一機はダブルエックスのベースモデル——仮称エックスよ。あの形になる前の試作機の設計とパーツを流用して建造するわ。サテライトキャノン搭載以前の設計で開発されていた、同様の外部供給システムを使って戦艦クラスかそれ以上の威力のグラビティブラストの運用に加え、状況によって装備の換装を行うことで多種多様な状況に対して高いパフォーマンスを発揮することを目的とした機体よ。ただ、計画がグラビティブラストからいまの高圧縮タキオン粒子収束砲——サテライトキャノンの搭載に変更された際、要求スペックを満たすには不足と判断されて、基礎設計を流用しつつフ

レームから作り直したのが、いまのダブルエックスというわけ。——
けどこれからの戦い、敵はダブルエックスの脅威も知って対策も練っ
てくるでしょうし、その対抗策としてこの機体を改修して直援機とし
て運用したほうがサテライトキャノンを狙える機会も増えるって考
えたわけ。なにしろこの機体は基本フレームの設計はおおよそ終
わっているから、比較的短い時間で仕上がるかと踏んだのよ」

「直援、ですか?」

「ええ。本来の武装を撤回して携行武装にビームマシンガンとディバ
イダーを用意するわ」

イネスはメインパネルに完成予想CGを表示して簡潔な解説をし
てくれた。

表示された武装はライトグレーを基調に、トリガーガード前にトラ
イアングル型のエネルギーチェンバーと上部にデュアルセンサー、銃
口が二つある銃。これがビームマシンガンであろう。

そして上下対称デザインの細長い大型シールドだ。中央がドーム
状に膨らんでいたりと、そこからX字を描くようにプレートが生えてい
る。

「試作品の多連装小型グラビティブラスト——通称ハモニカ砲と展開
式大型シールド、大口径可変スラスタを組み合わせた装備よ。見て
のとおり大型シールドとして機能するだけでなく、中央からシールド
を開くことで内蔵されたハモニカ砲を露出した砲撃形態、さらにシー
ルドの開閉に関わらず大型可変スラスタを後ろに倒したり回転させ
ることで高機動ユニットとして使用することもできる新型のマル
チウエポン。一見小型で頼りなく見えるハモニカ砲だけど、相互干渉
による増幅効果、それに加えてサテライトキャノン運用のために開発
されたエネルギーコンダクターを機体側に装備して供給させること
でデバイスの大きさに似合わない大出力を活用できるようになり、余
剰出力を加えて出力を増したGファルコンDXの拡散グラビティブ
ラストをも遥かに上回る必殺兵器から拡散放射による面制圧まで、幅
広い運用を可能としているわ。——性質上、専用に管制システムを組
み込んだエックス以外の機体では運用できない専用装備になってし

まうのが難点かしら。ビームマシンガンも同様ね。エネルギーコンダクターを併用して大出力と装弾数を稼ぐ構造だし、ほかの武装とは制御自体が異なるから」

イネスは「アルストロメリアでも使えるようにしたかった」とも語る。

「あと本来はサテライトキャノン単装にしても搭載することを目的に再開発していたんだけど、機体の設計上どうしても劣化ダブルエックスの域を出ないことと、先も話したとおり今後の妨害工作の増加を考えると直援機を確保するほうが先決と判断して新武装での開発に切り替えたの。——将来的にはサテライトキャノンの装備も可能でしょうけど、今回の航海中ではよほどのことがなければ無理でしょうね」

イネスも真田も、そしてウリバタケも残念そうに——それでいてサテライトキャノンの増産の見込みがないことにわずかな安堵のようなものも滲ませた複雑な表情を浮かべている。

——戦力としては欲しいしのは事実だが、大量破壊兵器を増産して抗うという手法に抵抗を感じるのは事実だ。すでに使ってしまったいまとなつては偽善でしかない——だが平和な世界を知る人間としてはおそらく排除し難い感情だと、ユリカは思った。

「ほかの二機は汎用型のエックスとは違うプランで同じく護衛機として新設計した機体だ。エアマスターとレオパルド。こっちは基礎設計を始めたばかりだから、ヤマトの修理完了までに完成するのは難しいと思う。だから可能な限り部品を用意してもらつて——あとは艦内工場で作業を続けるしかねえ。資材の負担が大きいことは承知だが、やらせてほしい、艦長。こいつらは絶対に役に立つ！」

ウリバタケが少々険しい顔で懇願してくる。

彼に言わせるとエアマスターは優れた機動力による早期警戒や前線の構築、レオパルドはエアマスターのあとから続いて動く弾薬庫と形容すべき重武装で敵航空戦力を駆逐し、サテライトキャノン発射の安全確保やダブルエックスの護衛を重視した機体として設計を進めているらしいが、設計含めて完成には至っていない様子。

——アルストロメリアのパワーアップは成ったが性能面で未だに大きな溝があるのは事実。同格の機体が追加される意義は大きい。「ふむ。たしかにダブルエックスと同格の機体が三機も増える利点は大きい。問題はパイロットの確保だが」

近頃影が薄いゴートが話題に入ってきた。ふむ、彼をしてそう言わしめるか。ゴートの意見なら信用できる。

「それに関して言えば、修理作業中に選抜と訓練を行えばいいでしょう。月臣君を含め、候補は何人か見つけています」

「ジユン君、進、どう思う？」

ユリカは頼れる副官と息子に話を振った。最高責任者として結論付けてしまってもいいのだが、それではジユンと進の今後に影響してしまう。——いつまで艦長を続けられるか、わからないのだ。

「戦力を増強したいのはたしかだから、僕はいいと思うよ。エアマスタールとレオパルドが間に合うかどうかはわからないにしても、エックスという機体が間に合ってくれだけでもありがたいと思う。ダブルエックスの働きは今後の航海の成否に影響する重大な案件だからね」

「俺も副長と同じ考えです。間に合うかどうかわからない二機はともかく、ダブルエックス相当の機体が増えるのは、戦術の幅を広げるいい案だと考えます」

二人の意見を受けて、ユリカは今回の提案のすべてを許可した。いかにガミラスといえど、航行中の宇宙戦艦がこうも戦力を増強できるとは考えないだろうし、特に完成に時間がかかるであろう二機に関しては、意表を突く手札として機能するかもしれない。——完成すれば、だが。

「わかりました。許可します。ヤマトの作業と並行してなので大変だとは思いますが、地球と連携して戦力強化を図りましょう。——これから私たちは未知なる宇宙に進出するわけですから、備えはしておくに越したことはないでしょう」

「ありがとうございます艦長！ 工作班一同、必ずやご期待に添えて見せます！——それではさっそくアキト君に依頼して、地球のネルガ

ルとの打ち合わせをします」

言うなり真田は足早に第一艦橋をあとにして、イネスとウリバタケも職場に戻っていく。その姿を見送り「今後が少しでも楽になればいいねえ」と呑気に進たちと笑ってから気づいた。

「ってこれじゃあ出航までアキトとイチヤイチャできないじゃなあ〜
〜いつ!!」

「……いま頃気づいたんですか?」

ムンクの叫びよろしく絶叫するユリカにルリの冷静かつ鋭い突っ込みが炸裂。とどめとなった。

それから数日して。真田、ウリバタケ、イネスは左舷展望室のソファーに腰掛け飲み物片手に談笑していた。

なんとか打ち合わせは進んでいて、この調子ならアルストロメリアの改装は無事完了し、エックスもディバイダー装備という新しいプランのおかげでなんとか戦力増強の役割を果たせそうだと安堵していた。

「しかしよお、ヤマトの物資がもうちつと豊かだったなら、例のセリフのための秘密兵器のひとつやふたつ、用意したかったなあ」

と上機嫌でウリバタケが語ると真田も「まったくもってそのとおりです」と頷く。

「こんなこともあろうかと」この言葉とそれが生み出すであろう羨望のまなざし。それに憧れない技術者はいないと真田は思う。

このセリフの語源は大昔に誕生した日本が誇るヒーロー番組『光の国の超人シリーズ』……その記念すべき一作目と言われている。

その作品に登場するメカニック担当のムードメーカーな隊員が、「こんなこともあろうかと、二挺作っておきました」というセリフと共に新型の光線銃を取り出したシーンがあり、それ以外にもストーリーの都合で特に伏線らしい伏線もなく発明品を出したり、その場その場で必要となるアイテムをすぐに用意してみせる大活躍振りから、メカニックキャラクターⅡ「こんなこともあろうかと」のイメージが生まれ、後続の作品に多大な影響を与えたと言われている。

現実世界ではなかなか言えるような状況に恵まれないのが実情ではあるが、メカマン憧れの名台詞として、なんと二〇〇年以上経過した今日まで語り継がれているのだ。

「さて、休憩もこれくらいにして届いたパーツでさっそく一機、アルストロメリアを改修してみましょう。テスト結果が良好であるのなら、このまま部品の生産を委託しつつ、艦内で回収作業を継続しなければなりませんからね。ヤマトの改修作業も並行しなければならぬのですから、われわれがあまり油を売ってはいはしかたありません」

真田は内心もう少し休みたい欲求を覚えながらも真つ先に立ち上がった。工作班長として部下たちにもつともない姿は見せられないし、今後の航海の成否に関わる重大な案件なのだから、手を抜くことは許されない。

工作班長としても、真田個人としても。

それから数時間が経過。改修成ったアルストロメリア・カスタム（仮称）が、カイパーベルト内を演習場にして、その性能を見せつけていた。

シミュレーションどおり、想定されたスペックをいかに発揮しているのが容易に見て取れた。ダブルエックスを使用した模擬戦でもいままでのように一方的にやられるようなこともなく、パイロットの技量次第で渡り合えると断言できるだけの強化ができた様子に、真田も胸を撫で下ろした。

（せめて相転移エンジンを搭載したかったが、これでも十分な出来栄えだな）

真田は改修がうまくいったことに満足しつつも、本質的な性能差を埋めるには至っていないという事実も受け止めた。

わかっていたことだが相転移エンジンの有無による性能差は大きい。おそらくエステバリスの系譜のままでは、今後も搭載の見込みはないだろうと結論付けるには十分な成果とも認識している。

というのも、エステバリス系列機に相転移エンジンを搭載できないのにはそれなりの理由がある。

まず第一に搭載スペースがないのだ。最初から搭載前提で開発さ

れたダブルエックスと違って、エステバリスはそのコンセプトの関係で動力を内蔵するようには設計されていない。ダブルエックスの技術とノウハウで改修したと言っても、設計を直したわけではないのだからどうしようもないのだ。

Gファルコンとの合体という増設するのなら問題はない。合体を前提に調整を重ねているからだ。それにサテライトキャノン用のエネルギーパックを手直しして出力強化用の増槽にもできるだろうが、その出力を活用するにはやはり新設計の機体でなければならぬと、改めて確認できた。

(しかし考えようによっては、これをベースにさらなる改修を行うのもアリだな。人型に相転移エンジンを搭載するのはコストがかなり高くつくことが証明されているが、Gファルコンへの搭載は案外ローコストだった。合体機構やユニット化が進んでいるとはいっても、戦闘機と人型の差が出たということだろうか)

ヤマト帰還後の地球の防衛力回復を考えるのであれば、コストと性能のバランスは大事だ。どんなに高性能でも数を揃えられなければ数の暴力に蹂躪される。ダブルエックスやヤマトが単独で多数を相手に戦えるというのは、性能もそうだが操る人間のスペックに依存している部分も大きい。

もう少し時間をかけて、改修後のデータを踏まえて再度調整を加えれば、アルストロメリアは十分現役でいられるはずだ。Gファルコンという拡張手段を確立しているいまは、ダブルエックスのように欲張らなければ無理に人型に相転移エンジンを搭載する必要も薄い。

まあそれでも要求されるだろうことは目に見えているのだから、こちらも個人的に研究しておこうとは思うが。

(――あとはエアマスターとレオパルドがいつになるか、か。できれば連中がダブルエックスや改良型アルストロメリアに対応する前に完成させたいが……)

それからさらに日が過ぎ、修理作業開始から二三日が経過していた。ヤマトはようやく傷を完全に癒し、点検作業も終えていつでも発

進める状態に至った。

地球側に機動兵器の部品と合わせてミサイルや消耗部品、あと食糧を少々地球側に提供してもらえたおかげで、ヤマトは万全と言えるコンディションで再出発を控えている。

カイパーベルトを出てすぐにワープを予定しているが、それを行えば人類製のボソン通信機では地球と連絡を取ることが難しくなると判断したユリカは、地球の連合政府に対して、往路における最後の通信を行っていた。

「随分遠くまで行ったんだな、ユリカ」

ヤマトからの通信に応対したの、ヤマト計画の事実上の責任者であるユリカの父、コウイチロウであった。

人類最長距離の通信ではあったが、ボソングジャンプ通信の性能のおかげで映像も音声も鮮明そのものであり、会話に苦労はなかった。

コウイチロウとしては、瀕死と言っても過言ではない愛娘が健在であることがなよりの救いであった。

もちろんヤマトが冥王星前線基地を叩いたことも、甚大な被害を被って航海がひと月近くも遅れながらも、無事に旅路を再開するという報告も嬉しかったが、やはり愛娘の笑顔を見れる喜びに勝るものではない。

それに加えてアキトのことだ。ネルガル会長アカツキ・ナガレから、アキトが非常に前向きな考えでヤマトに合流したことを聞かされたときは、目から涙が溢れて止まらなかった。

コウイチロウとて、アキトのことが心配だった。愛娘の夫である以上、義理の息子であるわけだし当然のことだ。彼が前向きにヤマトに乗ったのなら、きつとユリカとも元の鞘に納まったことが容易に想像できるし、イスカandalからの支援で彼の障害も完治したなれば、地球が救われたあとはまた、彼のラーメンを食する機会にも恵まれることだろう。

それだけでも吉報であったのに、アキトが冥王星前線基地壊滅の立役者に名を連ねたのは驚きを通り越してとても喜ばしい出来事と言

えた。

……彼がコロニー連続襲撃犯であると感付いていた軍や政府連中も、その功績とヤマトの成功を引き換えに取引に応じたようで、今後あの事件に関わる暗部を一切言及しないことなどを条件に、アキトの罪状を問わないと確約を得た。万が一反故するのなら——少々汚い手を使ってでも守るだけだ。

とにもかくにもヤマトだ。ヤマトが成功さえすれば、彼が愛する娘夫婦は元の生活に戻る。

ユリカが命を懸けて蘇らせたヤマト。その能力はいかなく発揮され、この絶望的な状況に一筋の細い——だが強い光を差し込ませている。

これから娘を待ち受けている過酷な運命には心が痛む。親としても人としても。だがアキトを取り戻し、絶大な信頼を寄せるヤマトがそれに応え続けているいまは、コウイチロウも胸を張って、ヤマトを信じられるのだった。

コウイチロウの顔を見れて喜ぶユリカも笑顔で応対しながらも、思ったよりも時間的損失が大きくなってしまったことに若干の後悔の念を滲ませていた。少々、ヤマトの力を過信してしまった。

「はい、司令。でも本当ならとつくに太陽系を出ていなければならぬのだと考えると、忸怩たる思いです」

ヤマトの旅は観光旅行などではない。

一年という限られた時間のうち、十二分の一もの時間を太陽系で消費してしまった事實は重い。

言い換えれば、冥王星基地の戦士たちの必死の思いが、ヤマトにそれだけの損失を与えたということ。——彼らは本当に素晴らしい戦士たちだった。願わくば、もつとよい形で出会いたかった。

「なあに。ヤマトならその程度の遅れは取り戻せるんだろう？ たしかにこの遅れで軍や政府内では、ヤマトの成功を不安視する声も上がってはいる。だがそれをお前達が気にすることはない。——ヤマトはただ前を向いて、その使命を果たせばよいのだ。それが——宇宙

戦艦ヤマトなのだろうか？」

コウイチロウはユリカはもちろん、クルーを責めるようなことは一切言わなかった。その心遣いが嬉しくあったが、やはり申し訳なくも思う気持ちは胸に残った。

「まあそれはそれとして、諸君には改めてこれを見てほしい」

コウイチロウが通信画面に呼び出したのは、地球の現状だった。

「見てのとおり、遊星爆弾が止んだとはいえ地表は凍り付いたまま、生き残った生物はないに等しい」

上空に浮かぶ人口変圧装置はあらかた除去されたのだろう、猛吹雪に見舞われることが当たり前だった地表は落ち着きを取り戻しているが、それでも太陽の光はまったく届いておらず、むしろ吹雪が収まったことで暗く冷たく音のない死の空間の印象が増していた。

痛々しい地球の現状に空気も重くなり、改めて地球が死に瀕していることが伝わってくる。

「シエルターや避難所の人々も、間近に迫った終末に恐怖し、救いを求めにきている」

コウイチロウの言葉の重みに、改めて自分達の使命の重さを実感する。

失敗は許されない。総人口の一〇分の九が死に絶えたとはいえ、まだ一〇億もの人類が耐え忍んでいるのだ。

彼らの命運を、ヤマトが背負っている。

「幸いにも、ヤマト発進から冥王星前線基地を撃破するまでの活躍は、一部事実を伏せながらも民間に発表されている。おかげで、いくぶん気持ちが上がってきたようになってるようだ。諸君らの活躍のおかげ——ありがとう」

そう言っただけで頭を下げるコウイチロウに全員が目頭が熱くなる。

伏せられた事実とは市民船のことだろう。それに関しては仕方がないと思いつつも、自分たちの活躍が地球の支えになっていると聞かされては、航海の辛さにも耐えられるというものだ。

「無論、ヤマトが遠くなることで不安も積もってきているし、旅の過酷さゆえにその成功を疑う者も少なくはない——だが、我々はヤマトの

成功を信じている。これからもそのつもりで、航海に挑んでくれ」

そう言つて敬礼するコウイチロウに、全員が答礼して応じる。

それで職務は終わりと判断したのか、艦内全部に話が伝わるようにしなさいと前置きしてから、いくぶん軽い口調でコウイチロウは話を切り出した。

「あくユリカ。出航前に頼まれた件だが、クルー全員の親類と極めて親しい人は、こちらでまとめて保護しておいたよ」

その発言にユリカ以外の全員が目を剥いた。

「艦長、そんなこと頼んでたんですか？」

驚きの声を上げたのは進だった。あの頃は発進準備に色々忙しかったというのに、いつの間にかここまで手を回していたのかと訴えてきている。

「だって家族の安否が気になつてたら、ヤマトの旅に集中できないでしょ？ だから親類とか、特別仲のいい友人とか恋人とかは、お父様にまとめて保護して貰えるように頼んでたの」

「どう？ 気が利いてるでしょ？」とばかりに胸を張つて鼻を鳴らすユリカに、あちこちから拍手が送られてくる。いいぞ、もつと褒めて。「うむ。家族は大事にするものだからな。この件に関してはネルガルのアカツキ会長も力を尽くしてくれてね。個人情報調べて上げるのは申し訳ないと思つたが、こちらで調査して該当した人々は漏らさず保護したよ」

コウイチロウの言葉に艦内が沸き上がる。地球の状況を思えば、家族だけならまだしも、親しい友達や恋人まで保護して貰えるとは破格の待遇だから当然だろう。

ヤマトに乗って良かった、と叫ぶクルーが出てくるのも必然だった。

最後の希望ヤマトに乗り込んでいるからこそ、そしてクルーを大事に思うユリカの気遣いと、娘にただ甘なコウイチロウ、そしてユリカの心情を酌み、ヤマトの成功を疑わないアカツキの力があってこそ成し得た超好待遇だ。

「そこでだ。保護した人々は身の安全を確保するため、ほかの人々と

半ば隔離されていてね。市民全体にヤマトがまだ太陽系にいることを知られるのは少々まずいが、諸君らの大切な人に声をかける程度なら許可されてよいと思うしだ。——そこでだ、諸君らが太陽系を離れて通信できなくなる前に、全乗組員に五分間の個別通信を許可しようと思う」

コウイチロウの言葉にクルー全員が喜びを露にする。

「こちらのほうでも順番の調整を行うので、事前に話したいことをまとめておくように。また、同じ人と通信したい者がいるのなら、人数分の時間を合計して話せるように取り図ろう。必ず相手の了承を得るように、突発的な便乗による延長は考慮しないものとする。詳細はまた連絡するので、準備しておくように」

通信が終わったあと、案の定艦内は大騒ぎとなった。

さりげなく身内の保護を頼んでいたユリカの元にはお礼の連絡が殺到。あつと言う間にウィンドウに包まれてユリカの姿が見えなくなる。

それで完全に拘束されたユリカに代わって、副長のジユンが進とルリの協力得て、冥王星基地攻略の祝勝会を兼ねた、『太陽系お別れパーティー』の準備を粛々と行うのであった。

そして、コウイチロウの通信からきっかり六時間でパーティーの準備はすべて整った。

このテのレクリエーションを任せると異常なほど作業が早いのが、旧ナデシコクルーの特徴と言えるのだろうか。

ヤマトに乗艦したナデシコクルーの数は決して多くはないのだが、ユリカが発するナデシコな空気にあっさり毒された優秀な人材の集まりの前には、些細な問題であつたようだ。

パーティーともなれば料理も相応の物を用意しなければならぬのが問題と言えれば問題だつたのだが、ちゃっかり事前計画に『冥王星攻略後、太陽系さよならパーティーをするかも』とユリカの書き込みがあつたので、念のためと相応の準備をコツコツとしてきたのと、補

給物資の中に明らかにこれを想定した食料が含まれていたことから、比較的余裕をもって対処することができたのである。

また、立食パーティーともなれば料理は自由に取ることが前提になるので、当然普段の食事ですべて使っているトレーはあまり使い勝手がよくはない。さりとて艦長や来賓用に用意されている食器では数が足りないとなれば、もう工作班に制作が依頼されるのは必然であろう。

こういった仕事に柔軟に対処できるのが、再建前から継続して搭載されている万能工作機械の強みである。使い終わったら処理して資材に還元することを考慮して、紙皿が多数用意された。

さらにパーティーともなれば欠かせない飾り付けに必要な数々の物資も製造され、手空きのクルーがせっせと会場となる展望室を中心に飾り付けていく。おそろしいまでの手際よさ、そして意識の切り替えの早さであった。

その時戦場と化していた厨房では、料理長を務める平田一がその手腕をいかんなく発揮してさまざまな料理を用意していた。料理人のプライドにかけて、パーティーに参加する全クルーの舌と胃袋を満足させて見せると、気合いも露わに調理と配膳の指示を出していく。

「平田、料理の準備はどうなってる？」

会場設営を手伝っている進がひよっこり顔を出してきた。

「順調だ。時間までには間に合うぞ、古代」

険しい顔を緩めて応対する。なにを隠そう平田は進と大介の同期である。まさかヤマトで再開するとは夢にも思っていなかったが、こうして時折顔を合わせる機会があれば、あの厳しかった訓練時代すら懐かしく思える。

「楽しみにしてるぞ平田。おまえの飯はうまいからな」

進はそれだけ言うとはひらひらと手を振って去っていった。邪魔をしないためだろう。

「おう、楽しみにしておけよ」

聞こえていないだろうがそう返事をして平田は自身も調理を進めていく。

(さて、そろそろ隣の厨房も確認するか)

料理が完成し、盛り付けを済ませた平田は隣の厨房に移動すると部下に声をかけ、足早に通路に出た。

新生したヤマトは波動エンジンと波動砲が艦の中央を通っている構造なので、居住ブロックが左右に分割されている。左右で繋がる場所は主幹エレベーターの根本だけだ。

結果、食堂の設置場所にも苦慮することになり、医療室共々左右の居住区にそれぞれ置かれる結果となった。

単に規模の大きな厨房と食堂であったのならまだ楽だったのだが、二つに分割されたおかげで管理の手間も増えている。衛生面とかは特に気を遣うし、総スペースの問題から一室当たりの面積も資料で見ただ旧ヤマトに比べてやや狭いのも不便ではあった。

平田は隣の居住区の厨房に入ると、予定どおりに作業が進展していることを確認し満足げに頷いたのである。

そうした縁の下の力持ちたちの努力の甲斐もあって、パーティーの準備は目立ったトラブルもなく終了し、乗組員の地球との個人通信の順番や相手との調整も滞りなく完了したのであった。

すべての準備が整ったあと、パーティーの開始を宣言すべくユリカは左舷大展望室に移動していた。

傍らで移動の補助や小道具の受け渡しを手伝ってくれているアキトとエリナに支えられながら、ユリカは慎重に開会の宣言を行う台の上の椅子に座り、グラスとマイクを渡された。

ユリカの言葉をコミュニケを通して全艦にリアルタイムで送信するため、コミュニケのスイッチもオン。フライウィンドウがあちこちに展開されて、ユリカの顔を艦内中に映していた。

よし、準備万端さっそくいこうか。

ユリカはマイクのスイッチを入れてごほんっと咳ばらいをひとつ。「え、みなさんの類稀な働きの結果、われわれは無事冥王星前線基地の攻略に成功し、その残存艦隊の撃滅にも成功しました。すべてみなさんの実力であり、艦長として大変誇らしく思っています」

ユリカはそんな前置きから始めた。

ヤマトが優れた戦闘艦であることは彼女自身が一番よく理解していたが、その性能を引き出すには高い技量を持った乗員が不可欠である。

その点ヤマトに集ったクルーたちは顔見知りも含めて本当に素晴らしい人材が揃っている。ユリカは艦長として本当に誇らしかった。彼らがいなければヤマトは冥王星を越えることすらできなかったのだから。

「基地攻略からすでに二三日もの時間が流れ、いまさら感はありませんが、ヤマトの修理中にパーティーなんかしたら、工作班の人たちから恨まれてしまうので気にしないことにしましょう」

この冗談はみなんのツボにはまったらしく、どつと笑いが発せられた。

でも嘘は言っていない。実際あの被害から回復するのにも、アルストロメリアも改修するにしても、工作班はフル稼働を余儀なくされていたし、それ以外の部署も手空きのものは手伝いに駆り出されていて、とてもパーティーをする余裕がなかったのだ。

——なので「祝勝会だ〜！」と艦長自ら騒いでいたのになかなか実現できず、ユリカは催促の視線に晒されたり落胆の声を聴いたりで、居心地が悪いことがあつたくらいに。

しかしその甲斐あつて残してきた家族との交信というサプライズまで飛び出したのだ。これならみんな満足してくれるだろう。

「ともあれ、ヤマトはまもなく太陽系を突破し、前人未到の外宇宙へと飛び出そうとしています。修理作業でヤマトの航行スケジュールがちよつと遅れ気味なので、これから少し規模の大きいワープで次の経由地であるプロキシマ・ケンタウリ星系に跳びます。その距離はおおよそ四・二五光年と、イスカンドルに比べるとご近所なのですが、そこまで行くともう地球との連絡は不可能になってしまいます。ので、ミスマル司令の御厚意に与り、みんなには五分間だけです。地球に残してきた大切な人との通信を許可しちゃいます〜！」

改めて告げると途端にクルーが盛り上がる。

ちなみに「ちよつと遅れ気味」と言っているが、実際には計画に含

まれていた修理作業を大きく超過、スケジュールから一〇日ほど遅れていた。それにこのパーティーに割く日数を考慮すると、結構な遅れになってしまったが、パーティーの間くらいは忘れたっていいだろうと思う。

「それではみなさん！ パーティー終了まで飲んで騒いでお話しして、存分に楽しんでください！ パーティーの成功を期待します！——乾杯！」

宣言してグラスを掲げると、「乾杯！」と大展望室に集まったクルーが応じてくれる。

全員がグラスを掲げ、中に入った色鮮やかなジュースを煽る。アルコールの摂取は許可できなかったが、ヤマト農園で取れた新鮮な果物を使ったフレッシュジュースはさぞ美味しいことだろう。

……うらやましい。そんなユリカにはなんか濃い緑色の飲み物で満たされたグラスが渡されている。どうせいつもの食事のドリンク版だろうと気にせず煽って——

「ぶほおっ！」

盛大に嘔き出してむせ返る。

「ゲホッ！ ゲホッ！……なにこれ、すっごく苦い！」

「あ、それ残さず全部飲むようになってドクターからの伝言ね」

言いながらエリナは脇に置かれていたピッチャーを構え、継ぎ足しの準備を整えていた。

「パーティーの余興で倒れられても困るから、いつもの食事よりも栄養価を高めてあるそうよ。一気に飲む必要はないけど、必ず飲み切るようにって」

ピッチャーに並々注がれたドリンクに顔が引きつる。まずい栄養食には慣れたつもりだが、これはそれよりもまずい。たった一口でノックアウトだった。それを、全部……。

「……そうだぞユリカ。体のためにも残さず飲むんだ」

視線で助けを求めた夫に見捨てられた。あ、あなたの可愛い奥さんのピンチなんですよ！

「みんなも艦長に倒れてほしくないわよね？」

親友はそう言って、コミュニケーションも通じて艦内すべてに同意を求める。お〜いちよつと待つてよ！

(あれ?・も、もしかして味方っていないの? に、逃げようかな……でも、艦長としてパーティーの賑やかしをやるって宣言しちやったし……どうしようううう!!?)

立場的に逃げるわけにはいかない。視線でアキトに救いを求めても黙って首を横に振られた。

「はい!・倒れてほしくありません!」

と元氣いっぱいの声でクルーが唱和。ますますユリカが顔を青褪めさせる。

「艦長、これがクルーの総意です。どうしますか?」

ニコニコとピッチャーを突き出すエリナにユリカが折れた。そりやもうぽつきりとへし折れた。

「うう……飲みますう〜」

涙目で飲み切ることを承諾する。完全敗北確定であった。

エリナはユリカが折れたことに安堵した。ドリンクが栄養価を高めてあるスペシャルな品なのは本当だが、味を調整せず苦いまま出しているのは、普段あまり自重せずアキトとイチャイチャし過ぎてクルーにダメージを負わせているユリカへの、ささやかな報復である。

しかしこれからはしやぐなのであれば飲んでもらわないと困るので、事前にユリカ以外の全員に出したメッセージで示し合わせて追い込んだのであった。

もちろん渋い顔をして「せめて調味は……」と難色を示したアキトも「普段自重が足りないからいけないのよ」と返されては沈黙以外の返事は返せなかったらしい。

第十話 さらば太陽系！ いつか帰るその日まで！

B.パート

そんな開会式を経て開始された『太陽系お別れパーティー』は、開幕から盛り上がっていた。

そのさまを見ながらアキトは皿に盛った料理をひと口。うん、平田は本当にいい腕をしている。

隣ではユリカが涙を流しながら激マズドリンクをちびちびと煽っている。時折投げられる視線が頬を刺す。盛り上がった会場はそんなユリカをも着にしてしまっていた。

すでに上下関係はないに等しく、それでいながら無礼になるほどでもないという絶妙な距離感を保ちながらヒートアップを重ねる。

パーティーということもあって活躍の場を得たと心得たか、イズミがユリカが開会を宣言した壇上上がり、ヤマトに持ち込んでいたらしいウクレレ片手に漫談を始めた。

旧ナデシコクルーはやや冷ややかな対応だったが、なにも知らないクルーにはそこそこ好評であった。流石はバーの雇われママさんを経験しただけのことはあると、アキトはしきりに感心していた。

それに刺激を受けたのか、場を艦長自ら盛り上げると気張ったユリカが、

「艦長ミスマル・ユリカ！ 一曲歌わせてもらいます！」

と宣言して、かつてナデシコの一番組コンテストでも歌った『私らしく』を熱唱。さすがにアイドルコスチュームではないし椅子に座った状態ではあったが、(涙目の)ウインクのおまけをつけたりしてとにかく盛り上げに徹する。

さらには持ち寄った景品を掛け、大ビンゴ大会まで開催される悪ノりっぷりを見せつけた。

景品の中に『ウサギユリカ(杖ありとなし)』と『ルリお姉さん(一七歳バージョン)と一一歳バージョン』のフィギュアセットが含まれ

ていて、アキトがウリバタケを睨むハプニングもあったが、大会はつづがなく進行した（ちなみにフィギュアはラピスがゲットして、嬉しそうに抱きかかえて自室に置きに行った）。

そんな会場から抜け出して、通信室に向かうクルーの姿が目立ち始めた。往路で地球と連絡できる最後の機会とあって、誰もが浮足立っている。

クルーたちは事前に地球側で調整された順番どおり列を作り、生活班長の雪がPDAを片手に彼らを捌いていた。通信の時間はスケジュールで管理されているので、列を作る人数は五名に制限され、ひとり入るごとに次のクルーがコミュニケーションで呼び出されるようにして、遅滞が生じないように配慮されていた。

トラブルの種を極力取り除き、通信に集中できるようにという生活班の配慮である。

PAD片手にクルーの整理をしていると、自然と列に並ぶクルーから世間話が漏れ聞こえてくる。待っている時間を適度に潰すためか、それとも緊張を紛らわせるためか、前後のクルーと雑談に興じている様子だ。

「地球を出発する寸前に生まれた子供なんだ」

と赤子の写った写真を見せて語る者。

「俺、婚約者を残してきたから、帰ったら結婚するんだ」

と語る者がいて、

「リアル死亡フラグ!？」

と突っ込まれたり、

「父の容態がよくないんだ。帰るまで、元気だといんだけど……」

と家族の様子をしきりに気にする者など、実にさまざま。

列の先頭に立つものは、通信室を出るクルーと入れ替わって中に入る。通信室をあとにするクルーは涙を浮かべながら寂しげな表情を浮かべるものが多い。

当然だと思う。郷愁の念もそうだが、生きて帰れる保証がない未知なる旅路への不安が、どうしても消せないのだ。

それに保護されているとはいえ、地球の現状を考えればないよりは

マシン程度であることも否定できず、絶対の安全が保障されたと考えるような楽家はいいない。

これが今生の別れかも知れないと思うと、通信では成功を強く誓って励ましているても、いざ通信が終われば不安を感じて落ち込んでしまうのも無理はない。

雪は顔に出さないように努めながらも、自分のときは大丈夫だろうかと不安を覚えるのであった。

そんな人間模様を見せる通信室の列の中に、島大介の姿もあった。大介はそわそわしながら自分の番を待ち続け、ようやくその時が来た。雪の指示を受けた通信料のクルーに案内され通信室に入り、通信機の操作を教わる。

と言つても、ドツクタグに記載された認識番号を打ち込んでスイッチを入れるだけで繋がるようにあらかじめセットされているので苦労はない。

認識番号を打ち込んでスイッチを押すと、数秒の待ち時間を経て、通信画面に両親と弟の姿が映し出された。

「お父さん、お母さん、次郎……！」

「大介……！」

「兄ちゃん！」

一カ月ぶりの対面に、互いの顔が歓喜に彩られる。

「ご無沙汰してます。お父さん、少し痩せたようですね？」

「おお、そうかね？」

他愛のない話題から会話が始まる。限られた時間では言いたいことをすべて言い切ることはできないが、重苦しい話題から入りたくないのは、同じ思いなのだろう。

「次郎、元気そうだな」

「へへへ、そうかい？」

年の離れた弟も元気そうで一安心。ヤマトで出発する時は使命感に駆られていたとは言え、置き去りにする家族のことが心配だったのだが、ユリカの手回しのおかげで状況は悪くないようだ。

それから少しだけ近況報告をする中で、母はやや思いつめた表情で

大介に尋ねる。

「ねえ大介、ヤマトは本当に大丈夫なの？」

「うん？」と大介はいきなり深刻な話題を切り出した母に怪訝そうな顔をする。

「大丈夫に決まってるだろ。なんてったって、俺たちはあの冥王星基地だって攻略してみせたんだぜ！」

大介は極力明るく応対する。不安があるのは大介とて同じだが、それを家族に見せるわけにはいかない。

「そう？　噂に聞いた話だと、ヤマトの艦長さんは命に関わる大病を患ってるって言うじゃない。そんな人で本当に大丈夫なのか、心配になって……」

大介はなんとか顔に出さずに堪えた。噂が流れていたのか——どこからか漏れるのは避けられなかったか……。

軍内部では周知と言ってもいいユリカの体調も、当然のように民間には公表されていない。死にかけの人間が指揮する艦に、誰が希望を託せるものか。

明かされているのは、彼女がかつての戦争で活躍したナデシコの艦長であることと、第一次冥王星海戦にて艦隊の被害を最小限に抑えた立役者であることくらいだ。

しかし軍に保護された以上、ユリカの体調に関する話が漏れ聞こえたとしても、なんら不思議ではないか。

「心配ないよ、お母さん。艦長はなんともないし、本当に——本当に凄い人だ。あの人がいなかったら、俺たちは冥王星基地を攻略することもできなかった。普段から俺たちのことを大切にしてくれて、空気を明るくしてくれるし、変に怒鳴り散らしたりもしないし、ノビノビと任務に打ち込める。——本当に尊敬できる艦長だよ」

言いながら、これまでのユリカの振る舞いの数々を思い返す。

——戦闘指揮の凄さやいざという時の決断力は疑いようがないが、それ以上に思い返されるのは、艦長としては奇行と言うほうが相応しいであろう行動の数々だった。

……発進直後から着ぐるみを着込んで児童番組同然の用語解説番

組に出演したり、それから間を置かず夫婦喧嘩を勃発させて艦内に痴話喧嘩をリアルタイム放送したり、それが終わったら感動の再会に託けてイチヤイチャを生中継したり、またなぜなにナデシコを開催したり、作戦名のセンスは微妙だし、戦闘中の体調崩して嘔吐したりボケをかましてノリツッコミせざるをえなくなったり。

(……あれ、本当に尊敬してるのかわからなくなったぞ?)

「そうなの? それならよかった。いい上司に巡り合えたみたいで、お母さん安心したよ」

息子の回答に満足したのか、ほっと胸を撫で下ろす母の様子に、大介は誤魔化せたと胸を撫で下ろす。

母としても、最期の希望であるヤマトに無視できない不安材料が含まれているとは思いたくないのだろう。噂話よりも息子の答えを信じてくれたらしい。

「大丈夫。ヤマトは必ずコスモリバースを受け取って……地球に帰ります」

——無情にも時間が近づいていることをブザーが知らせた。家族の顔も寂しげなものに変わる。あと一五秒しかない。

「それじゃあ、お父さん、お母さん。お元気で」

「兄ちゃん!」

弟が通信モニターにしがみ付いてくる。涙を流して別れを惜しむ弟に胸を締め付けられる思いを抱きながら、大介は別れを告げた。

「次郎……あまり世話を掛けるんじゃないぞ」

——通信モニターが暗転する。もう、家族との浅瀬は終わりだ。

「……くっ……!」

大介は寂しさを飲み込んで、暗くなったモニターに別れを告げて立ち上がる。

次に会えるのは……ヤマトがコスモリバースを受け取って地球に帰ったときだろう。

果たしてその時が訪れるのか、その時まで自分は生きていられるのか。そんな寂しさを抱えたからだろうか、無性に人の騒めきが恋しくなつて左舷展望室に戻ることにした。

ルリが賑やかしをしている右舷展望室でもよかったのかもしれないが、母とのやり取りでユリカに対する不安が顔を覗かせてしまったので、普段どおりバカをやっているであろう姿を見て安心してなくなったのである。

そう思つて通路を進んでいると、眼前から徳川太助が歩いてくるではないか。さつきまでは左舷展望室でパーティーに参加していたと思つたのだが。

「あ、島航海長！」

大介の姿に気付いた太助が緊張の滲んだ声で敬礼する。

「おいおい、いま敬礼は必要ないだろう。パーティーの真つ最中なんだぜ」

大介はそう言つて太助の反応に苦笑いする。

「あ、す、すみません！」

手を下ろしながらも硬い表情の太助に、とうとう島は笑いを隠せなくなつた。

「そんなに固くなるなよ。もつと気楽にいこうぜ」

そう言つて肩を叩く。おかげでいい気分転換ができた。それだけでもこいつには感謝したいくらいだと、内心想つた。

太助は島の二つ下の後輩にあたる存在だ。専攻した分野が違うため接点は多くはなかったが、それなりに目立つ存在だったので何度か顔を合わせて一緒に飯を食つたこともある。と言うのも……。

「どうだ、ヤマトの機関部門は。ラピスちゃんはともかく、山崎さんは厳しいんじゃないのか？」

「——ええ、まあ。でも、親父の背を負うんならこれくらい乗り越えていかないといけないんで」

太助の父、徳川彦左衛門はかなり名の知れた凄腕の機関士だ。

彼が現役だったのはちょうど木星との戦争が行われている最中で、まったく新しい機関である相転移エンジンに関しても、四苦八苦しながらではあるが見事制御してみせ、ネルガルから購入した相転移エンジンやグラビティブラストなどを搭載してようやくまともに戦えるようになった宇宙軍を陰から支えた立役者のひとりだった。

だがそんな彼も、ガミラス戦の初期に戦死している。息子である太助は比較されるのを承知の上で、その悲しみをバネに機関士として勉強に励み、その結果ヤマトに配属されたらしい。

「そうか、すっかりやれよ徳川。おまえの親父さんもきつと、応援してくれているさ」

大介は太助の肩をポンと叩いてエールを送る。あまり気の利いたことは言えない自分が少し情けなかった。だが太助はそれで十分だったらしく、

「はい！ 頑張つて親父に追いついてみせます！——それでは、通信の予定が近いので、僕はこれで」

「ああ、引き留めて悪かったよ。それじゃ、ご家族としつかり話してくるんだぞ」

「は、はい！ ありがとうございます！」

太助は頭を下げてから駆け足で通信室に向かう。その背中を見送った大介は、目的地である左舷展望室に足を踏み入れた。

——おや、異様に盛り上がっているような……。

大介は何事かと注意深く展望室を見渡して、すぐにその正体に気付いた。とは言つてもこれで気付かないやつがいるとしたら、そいつは相当注意力散漫な人間だろうと思うくらい、目立っていた。

「ウィナー、ミスマル艦長お〜〜!!」

司会を担当しているであろうウリバタケがマイク片手に叫び、その傍らでユリカがブイサインを観客に突き出している。

誰もが見られるようにと大きなウィンドウが頭上に開かれており、そこには戦略シミュレーションゲームと思われる画面が映し出されている。対戦者の名前は「ホシノ・ルリ」とあった。

どうやら余興としてユリカとルリがゲームで対戦したらしい。

「さあさあ！ ヤマトが誇る天才頭脳！ ミスマル艦長に挑戦する勇氣ある者はほかにいないかあー！」

テンションも高く煽るウリバタケにクルーもわいわいと「次おまえが対戦したらどうだ？」「いや無理無理勝つこないって」と言葉を交わし合っている。

挑戦、という言葉からするに、ユリカをチャンピオンかなにかに見立てて挑戦者が挑む形式のようだ。

それにしても冥王星で見事な指揮を見せたユリカに挑むのは、たとえレクリエーションであつてもそれなりに勇気のいる行動だと思うのだが、意外と挑む者が多いようだ。

現にゲーム画面の隣にやや小さいウィンドウが開いているのだが、そこにはいままでの対戦結果が連なるようにして表示されている。複数回の挑戦も許されているようで、ルリは立て続けに二回挑戦していた。ほかにもラピスやゴート、戦闘班のクルーを中心に挑戦者の名が刻まれているが、いずれも黒星、つまり敗北しているのが見て取れる。

(シミュレーターと言えど全戦全勝——そう言えば、艦長は学校のシミュレーションで無敗を誇ったとか聞いたことが——)

レクリエーションでも容赦なし、そしてその栄光は健在なり、か。……それにしても月臣の名が連なっているのには驚いた。この手のレクリエーションには関心がなさそうだと思うのだが、彼なりに賑やかしに気を使っているということだろうか。

「おおっ！ 艦長宛てに挑戦状が届いたぞお!? これは……第一艦橋で当直中の古代進戦闘班長だあ〜！ 去る冥王星攻略作戦でついに艦長の息子であることを認めた古代戦闘班長！ どんな戦いを見せるのか、いまから楽しみだぞお〜！」

ウリバタケの言葉を聞いて大介は思わず顔を手で覆う。

「当直中に遊びの予約入れるなよ、古代……」

染まり過ぎだ、かつての暴走癖があれどまじめだったおまえはどこにいった。それが大介の率直な感想だった。

ユリカとシミュレーション対決を終えたルリは、傍らに控えていたハリの手を取って通信室に向かって移動を開始した。

観戦していたクルーたちに会釈しつつ、「順番が近いので通信室に行きます」と断ってそそくさと右舷展望室をあとにする。

余興とは言え、正直負けたのはかなり悔しい。結構いいところまで

追い込んだと思つたのに、わずか一手でひっくり返されてしまった衝撃は計り知れない。

自分だつて艦長を経験し、幾多の戦いを経て成長したから喰らいつけると考えていたのだが……甘かった。

「今度は負けませんよ……」

すっかり意地になつたルリは通信が終わつたら再戦することを心に誓いつつ、通信室に足早に通路を駆けていく。

通信相手にはミナトとユキナを選んでいる。ピースランドの父と母も気にならない訳ではないのだが、そこまで近いとは言えない距離感なので今回は遠慮させてもらった。——もしかしたらその事実を知らされて泣いているかもしれないが。

「本当にいいんですか？ 僕も一緒させてもらつて」

遠慮がちに尋ねるハリに「もちろんです。ハーリー君だつて気になるでしょ？」と返す。

ハリはルリの通信に便乗したあと、養育してくれた義理の両親に連絡する予定だ。ナデシコに乗つてからはあまり会えていないが、血は繋がっていなくても育ての親であるため気になっている様子。

——自分と違つて養父母との関係が良好なのはいいことだ。

通信室前に到着した二人は、列に並びながらそわそわと待つ。

気安く提案したあとに気づいたのだが、ルリはハリの通信にも同席することになつてしまった。

ナデシコ乗艦時には上司であつたのだから、腹心の部下といえる彼の両親に挨拶のひとつや二つしたとしても問題はないだろう。——と思うがやはりプライベートな通信にわざわざ同席してそれをするということは、「まるで実際の許可を取ろうとしているみたい」と思えてしまつて心臓が跳ね上がる。

……それもこれもユリカだ、全部ユリカのせいだ！ ヤマトの空気が平時において軽過ぎるのもラピスが好奇心旺盛な天然になりつつあるのもいまここで自分がこんな失態を犯したのも、全部ユリカが悪いのだ！

「おつ、ルリさんにハーリーじゃないですか。通信ですか？」

そんなことを考えていたらサブロウタが声を掛けてきた。ちやつかり最後尾のルリとハリの後ろに付いている

「サブロウタさんもですか？」

ハリの質問にサブロウタは「おう」と頷く。

「俺は秋山少将と話しておこうと思いましたがね。両親もいないし、木星時代はお世話になったんで」

そういえば、たしか戦中はかなづきで彼の副官をしていたと聞いたことがある。戦後宇宙軍に参画した際も世話になったとか。

所属や立場が変わってもなお、サブロウタは変わらず秋山源八郎のことを慕っているようだった。

「……後ろ、失礼する」

いきなり声を掛けられてぎよつとして確認すると、そこには月臣元一朗の姿があった。

「月臣少佐——」

「……」

驚くサブロウタと対照的にルリの顔はどうしても険しくなる。

ルリも彼が九十九を殺したことを知っている。そのせいで、ミナトが悲しい思いをしたことを忘れることができない。

そう簡単に割り切れるはずもない。許せるわけもない。

彼を責めるのは簡単だ。だがアキトのことで恩があるし、アキト同様の意識で苦しむ月臣を責め立てるなど、自分にはできそうにない。

「……どうしても、彼と黒衣を纏ったアキトの姿が重なってしまうからだ。」

「あなたも、誰かと話たいんですか？」

「……ああ」

月臣は多くを語ろうとはしなかった。ルリも問うつもりはない。ただ、言葉を交わしてみたかっただけだ。

「ホシノさん。頼みが——いや、忘れてくれ」

「——なんですか？」

「忘れてくれ。気の迷いだ……」

「……」

月臣の様子からなにを言いたいのかは予想がついた。おおかたミナトとユキナのことだろう。

——かつて自分が殺めた親友の想い人と妹。

あの戦争が終結して四年。すでに草壁との決着も付け、人類の進退をかけた未知の脅威との戦いに身を投じることになったいまにあっても、過去の過ちを清算したと思えずにいるのだろう。

「私は、ミナトさん……白鳥さんの恋人だった人と、ユキナさんと話すつもりです——あとで様子をお伝えします」

余計なお節介だと自分でも思う。嫌味だと思われても仕方がないとも。だが、このままでもいいとは思えない。そんな、個人的な感情だった。

「……心遣い、感謝する」

言葉少なく礼を告げる月臣に、ルリは「お気になさらず」とだけ返した。

それからしばらくして。

ようやく順番が巡ってきたルリは、ハリを引き連れて通信室入室。

最初はルリの番だ。ハリを同席させているが別々の相手との通信なので五分づつの会話。あまり時間を無駄にはできない。

ルリは早速認識番号を入力して通信機を起動。わずかな待ち時間。そわそわした気持ちで待ち構えていると、通信モニターが灯った。

「ルリルリ、元気そうね」

「ルリ、しばらくぶり！」

「ミナトさん！ ユキナさん！」

モニターに映ったハルカ・ミナトと白鳥ユキナの姿に、ルリもハリも気分が高揚する。

「お体の具合は、もういいんですか？」

「ええ、大丈夫よ。イस्कンダルの薬って凄いのね。おかげさまですっかり元気よ」

モニターに映るミナトの顔色はたしかによさそうだ。ルリもハリもほつと胸を撫で下ろす。

行動力にやたらと優れたユキナがヤマトに乗艦しなかったのは、適性試験に落ちたのもそうだが、それ以上に体調を崩したミナトが心配だったからと聞いている。

現在の地球は極度に寒冷化にあり、地表ではウイルスや細菌などは生存していない。が、人々が暮らす居住区はそうもいかない。

食糧事情が厳しく慢性的な栄養不足、そこに加えて閉鎖空間でプライベートの確保すらできないほど切迫した避難生活。それらのストレスなどから体調を崩す人はあとを絶たず、暴動や略奪なども繰り返して発生している、切迫した状態が続いていた。

ミナトは、避難生活が始まってからも教育者として避難所の子供たちに勉強を教えたり、ボランティアの引率というような形で居住環境の改善のための活動をしていたが、避難生活のストレスと疲れから、ナデシコCが冥王星海戦に望むべく発進したあと、倒れてしまった。

ナデシコCが帰艦した頃は相当具合が悪く、衣料品の不足から回復が難しいとすら言われていたくらいだった。

ユキナはもしかしたら自分が制止を聞かずナデシコCに乗り込んだことが、ミナトが倒れた切っ掛けになったのではないかと自責の念に駆られ苦しんだ。

しかし幸運なことに、ナデシコCの帰還はイスカンドル製の医薬品の提供を意味していた。先行してネルガルがアキト相手に行ったテスト結果から使えると判断し、少しづつではあるが民間にも出回りつつある。

薬の入手を巡った争いも少なからず発生してしまったが、それでも状態の悪い人間に優先して与えられ、幾人もの人命を救う結果をもたらしたと聞く。

ミナトは残念ながらもなかなか薬を得る機会が巡ってこなかったらしいが、ヤマト発進直後にネルガルと軍が保護したため、最悪な事態を迎えることなく病状が回復に向かい、いまではほぼ完治と言っている状態にあるのだそうだ。

「心配しなくていいよルリ。あたしがついてるんだから！」

そう言つて胸を張るユキナだが、ミナトは「調子に乗らないの！」と軽くその頭を小突く。

ユキナも勝手を言つてナデシコCに乗艦して迷惑を掛けた自覚があるので強くは出れないらしく、「てへへ……」と頭の後ろで手を組んで可愛らしく舌を出した。

「それだけ聞ければ満足です。心配してたんですよ」

「僕もです。これで安心してイスカandalに行けますよ」

「もう大丈夫だから安心して。それと、ユリカさんにありがとうつて伝えておいて。アカツキ君から彼女が保護を訴えてくれたつて聞いたわよ……特別扱いなのは心苦しくもあるけど、ユキナも一緒に保護して貰えたし、感謝してるつて」

複雑な心境なのは本当だろう。ミナトの性格を考えれば、自分たちだけが特別扱いされて保護されている状態は、後ろめたさを感じても不思議はない。

特にミナトの大切な教え子たちはヤマトともナデシコとも関係がない人が大半のはず、その子らを安全と言える環境下におけないことは、彼女にとつてさぞ辛いことだろう。

「あ、そうだそうだ。ルリ——元一朗つてヤマトに乗ってるの？」

予想外の質問に顔が強張る。その様子から察したのか、ユキナは「そっか」と呟いたあと、

「じゃあさ、伝えといてくれない。お兄ちゃんを殺したこと、許せないけど、許せないけどさ……ヤマトの航海が成功したら、一緒にお墓参りに行こうつて。だから、死んじゃダメだつて、伝えておいて。お願いね」

そう言伝を頼まれた。複雑な気持ちが顔に出ている。

ユキナにしてみれば、兄を殺されたことは許せないし、許せるとは思えない。月臣も許されたいとは思っていないだろう。

しかし九十九の親友であつたということは、自然とユキナとも関係が深いということの意味するはず。このままにしておきたくはないのだろう。

だから向き合いたい。その思いを言葉を伝えてくれと頼まれては、断りようがない。

「わかりました、伝えます」

ルリがそう答えた時、別れを告げるブザーが鳴った。

「時間みたいね……ルリルリ、必ず帰ってくるのよ。もちろんユリカさんもアキト君も一緒にね」

「帰ってきたらお祝いするからね！ 準備を無駄にしないでよ！」

「……必ず、必ず帰ります……！」

「約束します、約束しますとも！」

涙を浮かべながら別れの瞬間を迎える。モニターは無情にも時間きっかりに通信を終了し、暗転した。

次に会えるのはヤマトが帰って来た時だと未来に想いを馳せながら気持ちを落ち着かせ、次の通信相手——ハリの育ての親に繋がれた。

……彼の両親は隣に立つルリの姿を見るや否や「彼女か？」とまじめな表情で問いただしてきたので赤面回避不可という、事前に予測していたとおりの展開に見舞われたのは、言うまでもないだろう。

そんなハプニングを知らず、通路で自分の番を待っていた月臣は二人からユキナの伝言を聞かされた。月臣は静かに目を伏せ「わかった。ありがとう」と言葉少なく受け取る。

短い会話を終えた二人はそのまま静かに去っていった。

月臣はそれから五分待った。ルリたちの次の番で通信を終えたサブロウタに会釈を受けてから、月臣も案内に従って通信室に足を踏み入れる。

——最初は誰とも話さないつもりだった。だったのだが、ふとかつての友と言葉を交わしてみたくなくなった。

たぶんそれは、アキトが戻ったことに影響されたのだろうと思う。結局自分も過去に置いてきたつもりのかなにかを取り戻したがっているのかもしれない。

認識番号を入力してしばらく。モニターに彼の姿が映った。

「よう、久しぶりだな月臣」

「ああ、久しぶりだな秋山」

月臣が選んだ相手は、かつての友人である秋山源八郎。いまは連合宇宙軍に参画して、コウイチロウの片腕として敏腕を振るっている彼。

……共に熱血クーデターを起こして木星を変えた——友だ。

「おまえがヤマトに乗ると聞いたときはさすがに驚いたぜ。なにかきっかけでもあったのか？」

「……俺はただ、九十九を殺した償いがしたかっただけだ。それに、あいつが生きていたらこうしただろうと思うと……じつとしていられなくてな」

それが月臣がヤマトに乗った理由だ。それと、

「テンカワも気がかりだった。会長の計略に乗った以上、最後まで見届けたかった。それにイスカandalに辿り着くまでの間、少しでも艦長の助けになればと——あの夫婦は、敵ではあった。だがそれ以上に俺の信じた正義の……草壁の被害者だ。力になってやりたくなっただ」

ただがむしやらに正義を、熱血を追い求めていたあの頃が懐かしく思える。だがいまとなつては深い考えを持たず、ただ言葉上の「正義」とロマンばかりを追いかけていた自分が恥ずかしい。

もう少し視野が広ければ、もう少し九十九に理解を示すことができれば……あんなことにはならなかったかもしれない……。

「そうか……なあ、月臣よお。そろそろいいんじゃないか？ 自分を責めるのを止めたってよ」

「しかし……」

「おまえは十分罪滅ぼしをした。おまえが気にかけてるテンカワ・アキトにしたって、世間に顔向けできねえことをした。……だが、自分に向き合って真つ当に生きる選択をしたんだろ？」

「それは……」

月臣自身感じていたことだ。同じく過ちを犯しながらも、それを乗り越えて元の道に戻る決意をしたアキトの存在が、とてもまぶしく映る。

自分には、帰るべき場所も待っていてくれる人もいない。

だが、紛いなりにも彼の師のひとりとして、このままではいけないとは漠然と考えていた。

「なにをしようが九十九の奴は帰って来ねえ、昔に戻れるわけでもねえ。だがな、テンカワを案じたおおまえが、元通りとはいかなくても普通の生活に戻ることを望んだおまえが、そのままでもいいわけねえだろ？」

秋山の言葉が胸に刺さる。

そもそも、九十九暗殺から続く自身の戦いはすでに終わっている。だからいまの人生が蛇足でしかないと感じることは多々あった。——ヤマトに乗る前は。

「おっと、そろそろ時間か。説教臭くなって悪かったな。無事の帰還を信じてるぜ、月臣」

「ああ、必ず帰る。俺の戦いにケリをつけるためにも」

そこで通信は途切れた。だが、月臣の気分はいくらも軽くなった。必ず地球に帰り、九十九の墓参りをしてから、身の振り方を考えよう。少し前までに比べると前向きな気持ちで、月臣は通信室をあとにする。

とりあえず自分の同類だったといえるアキトの様子でも見るかと、左舷展望室の会場に足を踏み入れた瞬間、月臣はゴートに捕獲された。

何事かと問い質すと、「思った以上に盛り上がってるからリベンジしろ」と一方的に告げられて引っ張られた。

——連れていかれた先は、会場の盛り上げになるかと思つて挑んだユリカ艦長とのシミュレーションバトルの場だ。

ユリカはかつて秋山が『快男児』とまで評した指揮官だ、その腕前を自分も体験してみたかったこともあつて戦つてみたが、もう十分その手腕はわかった。

残念ながら月臣の技量では勝ち目がない。

「おおっとお!? 先程は善戦空しく敗退した元優人部隊のエース、月臣元一郎のリベンジだぁー!!」

相も変わらず司会を続けているウリバタケが煽る煽る。その傍ら

に大きく表示されるウィンドウには対戦者の名前が山と表示されていた。

一部の連中は束になって掛かって纏めて撃沈したらしく、試合の回数よりも挑戦者の数が多いようだ。

「ヤマト艦長との戦いだけに、山と挑戦者が現れる……お粗末」

いつの間にか隣に現れたイズミがそんな駄洒落を言ってから去っていった。

……それが言いたかっただけか。

「わ、私もう十分戦った気がするんですけど……」

例のドリンク片手にバテ気味のユリカが暗に「もう終わりにしよう」と訴えるが、誰も聞く耳持たない——なんというか、本命の通信よりも悪い意味でメインになってしまっている印象が否めない。

（ああ——ここまで来たら、せめて一勝持つて行かないと気が済まないのか）

月臣は自分がこの場に担ぎ上げられた理由を悟る。

挑戦者リストに目を向けてみれば、三度目の挑戦に敗退したルリの名前の横には黒星が三つも付いている。なるほどこれは引き下がない。

——む、地味に艦長の息子の立場を受け入れた古代進の名前が予約リストに入っているではないか。

（——あいつ当直中に予約入れたのか）

少し頭痛がしてきた月臣だが、この場で断るのは会場の空気を考えればよくないだろう。

逃げたと言われるのも癪だし、パーティーの成功に繋がるのなら、この程度の協力は惜しむべきではない。

艦長には……がんばってもらおう。普段イチャつき過ぎて不評を買った報いと諦めてくれ。普段の様子からするに、この程度なら大事にも至らないだろうし。

「そういうことになったようです。艦長、再挑戦させて頂く！」

やる気十分と宣戦を布告して操作盤の椅子にどっかりと座る。

月臣のやる気にユリカは引き気味だ。

「うう……もうこれで四九戦目……」

——嘆くユリカの姿に心が大いに痛んだが、ノせられてしまった以上は完遂する。もちろん全力で挑む。戦士の礼儀だ。そう、過ちを犯してしまったが、月臣元一朗は元来戦士の気質の持ち主だ。

例え病弱だろうと女性だろうとゲームだろうと、戦うのなら全力でやらせてもらう！

「ふっ、分の悪い賭けは嫌いじゃないんでな……いぎ！ 尋常に勝負！」

「……嫌ってください、休ませてえ……」

気合い溢れる月臣と疲れた顔のユリカの対比が面白いと、観戦中のクルーが盛り上がる。

いつの間にかユリカの傍らに来ていた夫のアキトがグラスにドリ๊งクを継ぎ足して、

「がんばれよユリカ！ 俺、ユリカの勝利を信じてるからな！」

とてもいい笑顔で煽る煽る。おいおまえは立場的に止めるべきだろうと内心突っ込んだが、やはりアキトも会場の空気を尊重しているのだろうと思いなおした。

万が一体調を崩してもここは医療室にも近いから即対応可能である。イスカンダルから提供された医薬品の効能に感謝しつつ、月臣は指を鳴らしてから操作盤の上に静かに置いた。

「うぐっ……ア、アキトにそんなこと言われたら……：がんばらない訳にはいかないじゃない……！」

追い詰められた表情ながら、しっかりと操作盤に向かって対戦準備を始めるユリカ。本当に旦那に弱いな、と改めて月臣は思う。

さて、申し訳ないが観戦者のためにも見ごたえある試合をしようではないか！

そして、月臣元一朗とミスマル・ユリカの（二度目となる）戦いの火蓋が切って落とされた。

ユリカが月臣との対戦でヒイヒイ言っていた頃、当直任務を大介に引き継いだ進がようやくパーティー会場に顔を出していた。

副長のジュンも真田に引き継いだあと、家族との通信のために通信室に足を運んでいるはずだ。

地球に話したい相手のいない進は気が楽なもので、パーティー会場に顔を出すと近くのクルー相手に雑談の華を咲かせながら、適当に料理を摘まんで腹を満たし、フレッシュジュースを飲んで喉を潤す。

ヤマトで発つ前は、最後の家族を亡くして天涯孤独になったと悲しんだものだが、いまの進にはユリカとアキト、ルリやラピスといった新しい『家族』がいる。

だから進はもう寂しくなかったし、ほかのクルーが地球に残してきた家族や友人、恋人たちと通信してようやく孤独を感じない嫉妬もない。

むしろ（ちよつと恥ずかしいが）日常的に『家族』と接していることを悪いと考えてしまうくらい、いまの進は満たされていた。

もちろんその『家族』に引き摺り込んだ張本人であり、新しい母といえるユリカが危機的状况にあることは重々承知だ。

激情のままに胸倉に掴みかかった時に触れた血の感触は、忘れてたくても忘れられない。

あんなことをしてかした自分を優しく受け入れて、ここまで導いてくれたユリカには感謝が尽きない。

もちろんユリカと接するきつかけを与えてくれたのは、同じ悲しみを共有したルリのおかげであるし、復讐という行為に対して考えさせてくれたのはアキトだ。

この三人の内ひとりでも欠けていたら、どうなっていたのだろうか。

ラピスにしたって、弟として生きてきた自分にとって初めてできた妹のような存在である。かわいくてしかたがないし、彼女との触れ合いもまた、こうして自分を安定させられている要因であろうとも思う。それに、

「あら、古代君もお休み？」

合成肉のステーキを齧っていた進に、雪が声をかけてきた。手にはサラダとハンバーグの乗った皿を持っているところからするに、彼女

も交代したばかりなのだろう。

「ああ。島の奴に引き継いだよ。俺だつてパーティーを楽しむ権利くらいあるさ。冥王星攻略の要だつたんだぜ？」

とわざと調子のいいことを言ってみる。

進はあの功績はアキトのものだと考えている。表沙汰にできない経験に寄るとはいえ、アキトの経験値とそれに基づいた判断がなければ、失敗していた可能性が高いから当然だった。

「うふふ。そうね、古代君とアキトさんの手柄だったものね」

それをわかっている雪はわざわざ補足して進をからかう。進も「ちえっ」とわざとらしく反応して互いに笑う。

未だに距離を縮められないでいるが、進は恋も知った。

今後彼女とどうなるかはそれこそ神のみぞ知るといったところだろうが、いずれはアキトとユリカのように、仲睦まじい家庭を築きたいと将来の願望を抱いている。

その幸せ家族計画のためにも、イスカンドルに行かなければならぬ。しかし――、

(イスカンドル……それ以外に寄るべきところがないのも事実だが、なにか引つかかるな……)

展望室の窓から深淵の宇宙を覗きながら、進はユリカといままで交わした会話からイスカンドルに対しての疑問を思い返す。

疑問とは言うが、イスカンドルの協力や支援を疑っているというわけでない。

ユリカの言動などから鑑みるに、イスカンドルには一定の信頼を置いていいだろう。それにユリカの失言などを考慮すると、なんらかの方法で――おそらくはボソソジャンプでイスカンドルとコンタクトを取ったであろうことは、疑いようがない。

だからこそ、ユリカはイスカンドルを信じているのだろうし。

進が懸念を示しているのはイスカンドルの技術そのものだ。

壊滅的な被害を被った地球を救うと言われているコスモリバースシステム。はたしてどのような原理でそれを成すのだろうか。

それにユリカはあまりにも自分を気にかけて過ぎていると感じるこ

とが多々ある。鬱陶しいとかではなく、まるで自分の後をすぐにも継がせようとしているように感じることもあるのだ。

その様子は自分がそう遠くない内に指揮を執れなくなること示しているように感じられて、不安であると同時になにかしら裏がありそうな気がしてならないのだ。

(たしかに病気が進行すれば、指揮を執れなくなるのは自然だ。しかし、副長だっているし艦長経験のあるルリさんだっている。なのにとうして俺に期待するんだ?)

経験値で勝るジュンとルリが控えているのだから、新米の域を脱していない自分に期待するのは筋違いに思える。それとも二人に期待できず、自分に期待するなにかがあるのだろうか。

(お、月臣さん負けたのか……相変わらずすごいな、ユリカさん。ユリカさんの思惑はわからないけど、いまは好意に甘えて自分を鍛え、期待に応えていこう)

結論の出ない思考を早々に打ち切って、進は皿の上の料理を飲み込んでカラになった皿をテーブルの上に置き、ユリカのいる場所に向かって歩き出す。目的は当然――。

「艦長！ 挑戦に来ましたよ！」

「ぎやあああゝゝゝっ！」

鍛えたいと申し出たのはあなたでしよう、と言わんばかりの視線を向けると「進相手じゃ断れないっ！」と頭を抱えて対戦を承諾する(予約済みだから会場が拒否させてくれないが)。

うむ、生徒として恥じない戦いをしてみせるぞ。進は指を鳴らして戦意を露にした。

楽しい様子に進に雪も肩の荷が下りた気がする。正直、今回の地球との交信で問題になったのは、すでに家族を失って天涯孤独の身になっっているクルーだった。

雪の中で特に気がかりだった進だが、すでにユリカたちと良好な関係を築けた事から振り切っているようで、一安心。

ほかの孤独なクルーも、ナデシコクルーが作り出すこの緩くて騒ぎやすい空気のおかげか、パーティーに参加している限り寂しさを感じ

ない様だった。

(でも、古代君が寂しくない理由の中に、私は含まれているのかしら?)

少しだけユリカたちに嫉妬する。関係を進められない臆病な自分にも非があるが。

(焦りは禁物ね。ユリカさんも協力してくれているんだし)

軽く頭を振って、せっかくだから特等席で進を応援しようとする舞台に近づく。

ユリカの後ろではアキトが盛り上げのためにユリカを鼓舞し、挑戦者の進には周りから「絶対に勝てよ！」と野次が飛んでいる。

いい加減無敗の王者が地に落ちるさまを誰も見たいのだろう。

幸いにも相手は弱り切っている。ここで決めねばいつ勝ちを拾えるというのだろうか！ と最早悪役のノリに近いものを感じる。

「——じゃあ、進との対戦はちよつと特別な編成でやろうか」

疲れ切ったユリカは不敵な笑みを浮かべて提案した。やはり、手塩にかけて育てている進相手だと気合いが違うようだ。

ユリカの提案した編成は至ってシンプル。

進は新生ヤマト単艦(搭載機三〇機(ダブルエックス含む)と信濃)。

対するユリカはヤマトのデータベースから復元したらしいアンドロメダなる戦艦とその原型らしい量産型の主力戦艦からなる三〇隻の艦隊。

基本性能では新生ヤマトが勝るが、数ではユリカ有利でしかない編成にブーイングも出たが、進はあっさり了承して戦いを開始した。

母からの挑戦状と言うべき戦いに、進の戦意も駆り立てられたのだろうと思う。不敵な笑みで応じた進は、ユリカ率いるアンドロメダ艦隊と戦った。

戦いの結末は引き分けだった。過去最高成績と言っても過言ではない戦いは、最後は波動砲の相打ちによる双方の破壊で幕を閉じる。

波動砲搭載艦艇での試合は唯一とはいえ、ユリカに波動砲使用の決断をさせたということもあり、進は称賛された。

進としては、波動砲の使用を『促された』のは艦隊行動から察した

し、それに乗っかる以外の手段では引き分けに持ち込めなかったの
で、事実上の敗北だと考えているのだが、周りはそうではない様子。

——だが、ようやく彼女相手に戦えるレベルにまで成長できたので
はないかと思うと、少しは自信を持てるというものだ。

（ユリカさん、あなたがなにを思って俺を鍛えているのかは、いまはわ
からない。でも、その期待だけは裏切らないって、約束します）

そうして、『二日間』にも及んだパーティーはいよいよ終幕へと向か
う。

三〇〇人近い人数が五分の個別に通信するとなると、大体二五時間
は掛かる計算になるのだ。

修理作業が予定よりも少し短縮されたことを差し引いても、貴重な
日数を浪費したという事実はみな気付いていたが、だれもそのことに
は触れようとしなかったという。

結局その二日間はどんちゃん騒ぎのお祭りパーティーが続き、ク
ルーは大いに英気を養った。

二日目は半ばダウン状態のユリカだったので、会場にはいたが半ば
上の空、隅っこでぐったりと椅子に座りながらドリンクをチビチビ煽
り、時折司会担当としてマイクを掴むに留まった。

代わりの目玉は初日に通信を終えた航空隊におけるシミュレー
ション対決で、トーナメント方式で行われたそれは会場を大いに盛り
上げ、優勝を搔っ攫った月臣には惜しみない拍手が送られた。

アキトは一日目の終わりも間近という頃に、ユリカを同伴してコウ
イチロウとアカツキと通信した。いろいろと裏で工作してくれたこ
とへの礼を述べると共に、必ずの帰還を誓う。

「アキト君、改めてユリカを頼むよ」

改めて告げられた義父の言葉に、アキトは深々と頭を下げた。必
ず、あの平穏な日々を取り戻すのだと硬く誓って、
通信は終わる。

寂しい気持ちは沸き上がったが、生き残り、ヤマトの旅を成功させ
ればまた会えると、気持ちを入れ替えた。

必ず、あの平穏な日々を取り戻すのだと硬く誓って。

そうして全員が思い思いの人と通信し、ヤマトの使命に改めて向き合ったパーティーの閉幕。ユリカはクルー全員に唱和を求めた。

「みんな、地球と残してきた大切な人たちに改めて宣言しましょう！

——必ずここへ！ 帰ってくるぞー！！」

必ずここへ、帰ってくるぞー！

全員が心の底から叫び、使命を果たして帰還する誓うのであった。

パーティー閉幕から二時間後。宇宙戦艦ヤマトは長距離ワープで太陽系を離脱する。

ワープに伴い生じる空間の波動が、まるで別れを惜しむかのようにゆっくりと溶けて消えるのであった。

われが故郷太陽系に別れを告げて、ヤマトは旅立つ。

その先に待ち構えているのは、ガミラスの魔の手か、それとも大宇宙の神秘か。

ヤマトはすでに、予定日数をオーバーして三六日もの時間を費やしている。

人類滅亡まで、

あと、三二九日しかないのだ。

第十話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十一話 外宇宙への進出！ 迫るガミラスの影！

いざ、未知なる宇宙へ。

第四章 未知なる空間に挑む

第十一話 外宇宙への進出！ 迫るガミラスの影！

Aパート

ガミラスによる環境破壊で凍てついた氷の星となってしまった母なる星——地球。

そこで懸命に明日へ命を繋いでいる人々の中に、元旧ナデシコの通信士であり現役アイドルとしていまも活動しているメグミ・レイナーの姿もあった。

彼女もユリカの手回しもあつて保護されたひとりであり、家族も一緒にあつて保護されていた。

自分だけでなく両親にまで手が回ったのは、ユリカの要望を聞き入れたコウイチロウとアカツキの尽力によるものなので、軍やネルガルによい印象のないメグミも、その点に関しては素直に感謝の意を表していた。

彼女はいま、同じく保護された旧ナデシコクルー、ハルカ・ミナトの見舞いに訪れていた。

「ミナトさん、体の具合はどうですか？」

「あらメグミちゃん、お久しぶり。見てのとおり、もう全然平気よ」
そう言つてミナトはわかり易くガッツポーズを取っていた。

実際軍に保護されてからはイスカンダル製の治療薬を工面して貰えたこともあり、体調は倒れる前よりもいいくらいだと言っている。「よかったあ。倒れたって聞いたときは本当に心配したんですよ。なかなかお見舞いにも来れなくてごめんなさい」

そう言いながらメグミは持参した紙袋から、いまは貴重になつていく紅茶のティーバッグの箱を取り出す。今日まで大事に残していた嗜好品であつた。

「メグミちゃんは、たしかあちこちの避難所とかシェルターで慰問ラ

イブをしてるんだっけ？」

「そうですね——でも、みんな気が立ってるのか、騒動になることも少くないんです」

沈痛な面持ちで語るメグミに、ミナトも相当苦勞しているんだなと、労わりの表情を浮かべてそつと肩を叩く。

メグミはガミラスの侵攻が始まってからもアイドルとして可能な限りあちこちを巡り、慎ましやかではあるが、無償でライブを行ったり、握手会を開くなどして少しでも人々を励まそうと苦心していた。

もちろんこんなご時世なので、治安の悪化などから危ない目に遭ったことも一度や二度ではないし、目的が目的なので当然お金にもならない。つまり、活動費用は自費になっている部分も多く、彼女自身の疲勞もピークに達しようとしていた。

それでも軍とネルガルに保護されてからは活動に援助が付くようになったし、かつての同僚であるプロスペクターも護衛や交渉に力を貸してくれているので、幾分楽になった。

食事の質がよくなったので、なんとか活動する体力を維持することもできているが、はたしてどれだけ続けられるかは自分でもわからなくなってきた。

「大変ね、メグミちゃんも。でも、あなたの歌を聴いてると、私も元氣が出てくるよ」

そうやって励ましてくれるミナトに笑顔で応え、メグミは自分の想いを言葉にする。

「そう言ってもらえると嬉しいです。それに、私はユリカさんたちがなんとかしてくれるって、信じることにしていますから。——だから、ヤマトが帰ってくるまで、みんなを励まし続けるって誓ったんです」

正直に言えば、メグミとて絶望を感じている。木星とか火星の後継者とかの抗争とは桁の違う被害に心折れそうになったことがある。

だが、そんなときひよっこりと顔を出したのは人体実験の後遺症で入院している、それも面会謝絶と言われていたユリカだった。

かつての上司でアキトを巡った恋敵。人物としての相性もいいとはいえない間柄だけに、最初はメグミも戸惑った。もちろん彼女とア

キトを襲った非道な仕打ちについては知っていたし、具合がよくないと聞かされて心配しなかったわけではない。

なんだかんだいって、二年近い時間を一緒に過ごして苦楽を共にした仲間なのだ。

「ユリカさん、はつきりと言ったんです。この状況を覆せる手段があるって。いまはまだ表沙汰にできないけど、私たちを助けてくれる異星人もいるって。その異星人の支援で希望の箱舟も用意できるって、それはもう力強く断言しました」

いまだからこそその言葉の意味もわかる。

イスカandalと宇宙戦艦ヤマトのことだったのだと。

「その時は絶対に人に言い触らさないでって念を押されて……心配しなくてもその内みんなにも知れるから、嘘じゃないからって。私が絶対にこの絶望を払拭してみせるって、すごく真剣な顔で宣言して。

……あの人、本当は病院で付きっきりの看病が必要な状態なのに」

メグミは進路に悩んだ経緯もあって看護師の資格を持っている。当然相応の医学知識があるし、いざという時の応急処置くらいならいまでもできる技術を保持している。

だから再会したユリカの顔色が優れず、なにかしらの障害を抱えていることをすぐに見破っていた。

だからまだ希望が残ってる、諦めたら駄目だと力説するユリカを一度は黙らせ、その病状について問い質した。その時彼女はしらばっくれようとしていたが、あの手この手で言いくるめて吐かせ、その深刻な病状を知った。

当然メグミは安静にしていなないと駄目だと脅したのだが、ユリカは頑として首を縦に振らなかった。その理由については聞き出せなかったが、いま彼女がヤマトと共に太陽系を飛び出して、イスカandalに向かっていると聞いてなんとなく察した。

ヤマトの存在とイスカandalのメッセージについて発表されたとき、その少し前から出回るようになった新しい薬の存在。それだけ示されれば予想くらいは建てられる。きっとイスカandalの医療に回復の可能性を賭けたのだろう。重病の体をおしてヤマトに乗り込ん

だのも、限界を迎えるより先にその医療に与ろうとした可能性がある。

しかしメグミがユリカと最後に会ったのは半年以上も前のことだ。現在の彼女の具合については知らされていない。正直当時のコンデイションでも戦艦の艦長——それも単独で未知なる航海に赴いたヤマトの旅路を想像すれば、リスクの方が遥かに上回ると思うのだが、判断材料が少なすぎてこれ以上の推測はできないでいた。

ただひとつ言えることは、彼女は決して死に行ったわけではないということだけである。

「それに、さっきアカツキさんから聞いたんですけど、アキトさん、ヤマトに乗ったそうです」

「ホントに!? ルリルリとの通信じゃそこまで話す余裕なかったから聞けてなかったんだけど……よかったあ。ルリルリもユリカさんも、気が楽になったでしょうね」

「ええ、きつとヤマトでも所構わずイチャイチャして、周りを呆れさせてるんですよ」

三つ子の魂百までも言うし、きつと間違っていないだろう。とうかアキトを前におとなしく艦長を務めているユリカの姿は想像できない。

「ホントにね。ちゃんと帰って来れるか不安になっちゃうわ……」

「でも案外なんとかするんじゃないんですか。ユリカさん、なんだかんだで私たちをちゃんと平和な日常に戻してくれましたから」

ユリカの楽天的な振る舞いに不安を覚えたことは数知れない。いや不安を覚えるなどという方が無理だろう。

だが、彼女はなんだかんだでナデシコを沈めさせなかった。幸運によるところもあったろうが、それは紛れもない事実である。

正体不明の敵の新兵器を、その天才と称された頭脳で見事対処し打ち破った時のことは、まだ覚えている。

あのミラクルを期待するしかない。いまの地球には、ヤマトとイスカンドル以外に継るものがないのだから。

「そこで私、ハウメイガールズのみんなと協力して新曲を作ることに

したんです。もうタイトルは決まってて、ユリカさんとヤマトについて歌ってみようかと」

メグミの発言に驚いたミナトが目丸くする。

「あらー、メグミちゃん戦争とかそういうの嫌いじゃなかったっけ？」

「もちろん嫌いですよ。だから、『ユリカさんとヤマトの歌』なんですよ。あの人って一般的な軍人さんのイメージからほど遠い人ですから、あまり気にならないですよね」

はつきりと答えた。

どのような理由があっても、戦争だとか殺し合いは肯定できない。もちろんそのための道具に過ぎないヤマトも、本来なら関わり合いたくない代物だ。

しかし、道具は所詮使い方次第という考え方もあるし、いまはあの艦を信じてみたいのだ。

——あの艦を指揮しているのは、かつての仲間なのだから。

「なので、あの人の戦う動機なんかを考慮した題名は——」

この愛を捧げて。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十一話 外宇宙への進出！ 迫るガミラスの影！

ガミラス帝国本星、銀河方面軍司令部本部。

デスラーはリムジンの車内から自分がいま足を運んでいる建物を含めた街並みを眺めていた。

ガミラス星の建造物は、いずれも植物を模したような有機的なデザインで構成されていて、この司令部のデザインも、直線的なデザインが多用された高層ビルという感じの地球やそれに類するほかの文明の都市に比べると、まるで巨大なツクシが乱立しているかのような印象も受ける。

だがこれこそがデスラーがこよなく愛する、そして未来永劫守り抜きたいと願うガミラス民族の文化だ。

専用に作られたリムジンから降り、デスラーは自らの足で歩み始めた。赤い絨毯の引かれた道を進み階段を上る。道の両端にはデスラーを迎える下士官や使用人がずらりと並び、ガミラス式の右手を掲げる敬礼を送っている、いつもの風景だ。

デスラーはその中を悠々と歩き、長い廊下を世話係の者を引き連れながら歩み続けた。

中央作戦室に近づく。通路の端に控える軍人の階級も上がり、全員がそれまでの者とは違う立派な軍服に身を包み、一様に敬礼しながら、

「デスラー総統ばんざああい！ デスラー総統ばんざああい！」

とデスラーへの忠誠心を見せ、彼を称える。

その声を浴びながら通路を悠然と、総統の貫録を示すように歩くデスラー。通路のある場所を通過すると、照明によってデスラーの肌は本来の青から肌色にも見えることがあった。施設内の清潔さを保つための滅菌灯など影響によるものだ。

しかしデスラーは機能面はともかくとしても、ガミラス人にとって特別高貴な色とされている青——それも純潔のガミラス人を示す青き肌が損なわれる瞬間は、あまり愉快ではない。

デスラーはそれほどもでにガミラスという国を、民族を愛おしく、誇りに思っているのだ。

デスラーは心の内を決して面には出さず、大ガミラスの総統としての威厳たつぷりに歩み続け、中央作戦室に足を踏み入れる。そのまま奥にある自らの玉座の前に立ち、後ろを振り返り軽い笑みを浮かべて部下たちに答礼する。

そして悠然とした態度で自らの席に腰を下ろす。デスラーが腰を下ろしたあと、室内に控えていた部下たち——つまり各部門の責任者たちも自らの席に腰を下ろして身住まいを正す。

——今日このような席が設けられたのは、ガミラスにとって甚だ不本意な大敗について再度の検証と、その対策について議論するためであった。

「では、始めてくれたまえ」

デスラーが促すと、傍らに控えていたヒス副総統が応じる。

「は……それでは地球の宇宙戦艦ヤマト。その忌々しい航海ぶりについてご説明いたします」

そう、今日の会議の題目は現在ガミラスが最優先で行っている地球攻略作戦を阻む強敵——宇宙戦艦ヤマトについてだ。

「デスラー期限五二年、三〇一日に地球を出発したヤマトは、同年同日に太陽系第四惑星、火星宙域にワープテストを行い、成功させました」
デスラーの眼前の巨大なモニターに、白く凍り付いた地球とその月、火星が、本来の距離を無視してわかりやすい縮尺で表示されている。その映像の中で、ヤマトの現在地を示す光点が月軌道から火星軌道に瞬時に移動した。

「地球の宇宙船としては初めて、光速を突破する性能を見せつけました。また、この際偵察に向かわせたデストロイヤー艦五隻を瞬く間に撃沈。続けて威力偵察に派遣したデストロイヤー艦五隻と高速十字空母二隻の攻撃を難なく凌ぎ、デストロイヤー艦五隻が撃沈、航空機部隊を壊滅に追い込んでいます。しかもこの時ヤマトは自身の火炮を使わず、例の人形のみを戦力として、この戦果を挙げています」

ヒスの報告に合わせて、モニターには回収されたヤマトとの交戦データが表示される。映像が主体だったが、その時間は戦果に対して短かった。

最初のデストロイヤー艦五隻の時は、氷塊を割って出てから十数秒で呆気なく撃破されている。ヤマトの主砲と副砲の威力と射程は、いままでの地球艦体とは桁が違うということを、たったこれだけの戦闘で理解せざるをえなかった。

威力偵察に出した艦隊も、航空隊の死に物狂いといしか言いようのない猛攻に後れを取ってろくにヤマトに攻撃できなかった。

——新型を投入したか。基本的にはヤマト登場の少し前に出始めていた強化パーツ付きの機体と共通のようだが、基本性能が格段に上がっている。それに得体の知れない新型の姿がある。あれは——ほかとは別物だろう。

デスラーはヒスが映すその映像を無表情で見つめていた。

ガミラスも大昔にはこの手のロボット兵器が実用化されていた時代があると、過去の記録に残されている。

しかしその版図を大マゼラン全域に広げていく過程で、より航続距離に優れ、生産性に優れた兵器を欲するようになり、最終的に大気圏内両用の宇宙戦闘機が主力兵器となったのだ。

そこにはガミラスにとって力の象徴であるのが強大な宇宙艦艇であることの影響もある。広大な宇宙を股にかけて戦うには、宇宙戦闘機というのはあまりにも小さ過ぎたのだ。結果、航空機やキャリアーたる空母が軽視されることこそないものの、戦闘の主役は武装した宇宙船——すなわち宇宙戦艦が務めるようになり、宇宙戦闘機は宇宙戦艦では手が回らない、不得手な局面で使用されるものという差別化が厳格化していった。当然武装も対空戦闘や局地的な対艦戦闘が主体なので、過度な重武装は行われなくなり、そういった旧世代的な戦略爆撃機といった兵器は廃れ始めているのが実情であった。

そういう意味では、地球がロボット兵器——それも人型を模した兵器を航空戦力として使っているさまは、極めて古典的な人形遊びに映るのだ。

そのため当初はデスラーも含む多くの将校が過去の遺物を目の当たりにしたギャップに嘲笑を浮かべていたものだが、なかなかその性能が侮りがたく、地球の抵抗の一翼を担ったという事実直面すると、デスラーやその腹心クラスともなればさすがに嘲笑はしなくなつた。

だからといって歴然たる技術力と軍事力の差を覆すに至るとは考えなかつたが。

「それで勢いを得たヤマトは、同年三〇二日……わが軍が接收し、前線基地として使用していた第五惑星木星の大型の市民船を、タキオン波動収束砲の六連射を持って撃破しました」

辛うじて得られた映像データには、ヤマトの艦首から吐き出された強力無比のタキオンバースト波動流が、凄まじい威力をもって駐屯していた艦隊諸共、小天体にも匹敵する市民船六隻をあつさりと消滅させている姿が映っていた。

その圧倒的な威力に、ガミラス軍の歴戦の將軍たちが揃って息を飲み、血の気を失う。

これほどの大砲は、ガミラスといえども保有していない。少なくとも、艦載兵器としては。

「ふふふ……しかし未熟な文明でありながらタキオン波動収束砲を使うとは、地球人も中々頑張るじゃないか。そう思わんかね、ヒス君？」
デスラーは余裕を見せつけるようにヒスに問う。もちろん内心複雑な感情が渦巻いていて冷静とは言えない状態にあるのだが、それを表に出しては総統など務まらない。

偉大な大ガミラスの指導者として、余裕を見せなければ誰も着いてこないだろう。

「は……忌々しくはありますが、敵ながら天晴れな奮戦ぶりです」

デスラーの顔色を窺いながらヒスはそう答えた。デスラーはくつくつと笑いながらヒスに報告を続けるよう促す。

機嫌を損ねずに済んだと安堵したようにヒスが口頭説明を継続する。

……心配せずともこの程度のことではヒスを叱り飛ばすことはしない。それどころかよくわかっているじゃないかと褒めたい気分だった。

「そして同年三〇四日、第六惑星土星の衛星タイタンにて、なんらかの作業を行ったと見られますが、偵察部隊が詳細を報告する前に撃破されてしまったため、不明です」

その報告にはさしものデスラーも眉がわずかに動く。なんの結果も出さずに敗退するなど、誇りある大ガミラスの恥だ。だが同時にそれはヤマトがそれだけうまく立ち回ったということを意味している。

「同年三〇九日、ヤマトは地球側が準惑星と呼ぶ冥王星に到達。太陽系におけるわが軍最大の軍事拠点——同時に地球移民計画の重要拠点である冥王星前線基地に攻撃を仕掛けました。冥王星前線基地から退却した副官のガンツが持ち帰ったデータによりますと、ヤマトは冥王星前線基地の全兵力、超大型ミサイル四〇発と、デスラー総統が遣わした援軍含め、デストロイヤー艦一二〇隻の艦隊、そして試験運

用のため配備していた反射衛星砲のすべてを退けて前線基地を撃破しています」

その報告に將軍たちがおもしろいほどはつきりと顔を顰める。だが気持ちわからなくもない、たかが戦艦一隻の戦果としてはあまりに異常だ。

この大ガミラスの目から見ても、信じがたい戦果を挙げたのだ。「ガンツが持ち帰ったデータに含まれていた映像記録がこちらになります」

ヒスの操作でモニターに映し出されたのは、冥王星前線基地の猛攻を前に果敢に立ち向かうヤマトの姿であった。

超大型ミサイルの猛攻も、艦隊による包囲も、すべて巧みな操艦と攻撃目標の選択によって凌ぎきったその戦いぶりの素晴らしさたるや——艦の性能も素晴らしいが、やはり指揮官の采配の素晴らしさ、それを実行したクルーたちの練度と指揮の高さ。

ここまでの逸材は、ガミラスでもそうそういない水準であろう。

「しかしヤマトは反射衛星砲の攻撃には対処しきれず計三発の被弾で大打撃を受けています。この三度の被弾で冥王星の海洋に没したかに見えましたが、生存。潜水艇による攻撃を凌ぎ、爆雷による誘いにも乗らず、逆にこちらの焦りを逆手にとって罠に嵌めて反射衛星砲の所在を特定し、事前に発進していたらしい新型機動兵器のパイロットによる基地内部の偵察を経て攻撃。ただの一撃で基地が破壊されてしまいました。敵の新型機動兵器は、全高八メートル未満の大きさでありながら、わがガミラスでも配備されていないような絶大な威力のビーム砲を搭載していることが、この戦いで判明いたしました」

モニターの映像には、海面下の基地に向けてサテライトキャノンの狙いを定める新型機の姿が映し出されている。

最近姿を見るようになった、宇宙戦闘機を分割したかのような強化パーツを装備している。あの強化装備はガミラスでも少々評価されていた。

シルエットこそ洗練されているとは言い難いが、それまで性能で後塵を拝していたはずの人型を、こちらの航空戦力と同等の域にまで押

し上げたのはまぎれもなくあの強化パーツの恩恵だ。なかなかどうして、やるものだと思心させられる。

そして件新型だ。

それまでの機体とは異なるシルエットと意匠——あれはたしかイスカンダルがかつて保有していたと聞く人型の頂点と謡われた——ガンダムに似ている。あれもイスカンダルからの支援で得たのか、それとも偶然の一致なのか、姿だけでは判断できない。

しかしその威力は本物だった。光る翼を背負い、両肩に担いだ大砲から強力なビームを発射、海面下の基地をただの一撃で吹き飛ばすその姿——まさしく悪魔。

デスラーはこの一撃で確信した。あれはイスカンダルがもたらした産物であると。あのスターシアがタキオン波動収束砲と共に封印を解いたこと驚かれる、イスカンダルの超科学の産物だと。

「艦載機にこのような火力を持たせるとは……地球人はなにを考えているのだ……!？」

衝撃的な記録に將軍のひとりが呻き声を出す。

もちろんガミラスでは航空戦力にこれほどの過剰火力を持たせることは絶対にしない。

万が一の反乱も懸念されているし、なにより宇宙戦艦の方が大火力の運用に適しているのは必然。無理をして艦載機にここまでの火力を持たせる理由も必然性も欠けている。

これはガミラスが遭遇したことのある惑星国家のすべてにおいて共通している。「航空機に戦術兵器を標準装備する」という発想自体がすでに時代遅れの産物なのだ。

これも惑星間戦闘というスケールの広さと、それを可能とする宇宙戦艦の強力さの前には、航空機の積載量と運用思想が着いていけなかつたことを意味している。

逆にとの国家も、惑星の中での戦争を繰り返していた頃は航空戦力が戦いの主役となり、その過程で戦術装備を運用可能な戦闘機が登場していたとも確認がされているので、あれはその延長にある、まさしく時代遅れの——それでいながら最先端をいく矛盾の塊と言える機

体なのだろう。

「また映像や被害から推測した結果、この砲はタキオン粒子砲の一種であると結論付けられました。おそらくヤマトが搭載することで得たデータを基に、タキオン波動収束砲を機動兵器に搭載可能なように手直した物でしょう。威力はオリジナルのタキオン波動収束砲には到底及びませんが、それでも戦局を左右するに足る威力があり、並大抵の手段では防げないと考えられます」

追い詰められた手負いの獣は恐ろしい。そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

イスカンダルの支援を得たとは言っても、自力で自らの太陽系を出ることも叶わない未熟な文明が、これほどの兵器を作り上げるとは……見くびっていたのかもしれない。デスラーは改めて素直に現実を受け止める。

「その後ヤマトは、冥王星軌道の外側にある小惑星帯に身を潜め、冥王星基地を脱出したシユルツ以下、残存艦隊と交戦。これを撃破した模様です。先の戦略砲搭載型機動兵器も通常兵装でこの戦闘に参加、それ以前に交戦した機動兵器とは別格の強さでわが軍を翻弄しています。またヤマトも周囲のアステロイドをなんらかの装置で制御して攻防一体の戦術を披露するなど、ヤマトは単艦として非常に優れたスペックに決して依存せず、状況に応じて臨機応変かつ常識に囚われない突飛な戦術をもって対抗していると言えるでしょう」

予想だにしなかった地球の抵抗に将軍たちの顔色も冴えない。デスラーは思う。ガミラスの全力を叩きつけてやれば勝てない相手ではない、と。ヤマトはたしかに強い。タキオン波動収束砲も厄介だ。しかし結局は一隻の戦艦とわずかな数の人型戦闘機を有する、ガミラス全体と比べれば脆弱な戦力に過ぎない。

もちろんその身軽さを利用することで、軍隊の戦いの基本になるであろう、数と数の激突に慣れ親しんだこちらの意表を突けているとも考えられる。

数に頼った飽和攻撃を掛けた場合、よほどうまく奇襲できなければあのタキオン波動収束砲で一網打尽にされるだろう。あの砲が広域

破壊に使えないのかどうか、判断できない以上真正面から数には頼れない。

包囲殲滅も同士討ちの危険性を考慮すると自ずと限界が見える。しかもヤマトは、単艦に対して密集可能な限界数と対等に渡り合ってしまった。

つまりヤマトを下すためには、ヤマトがその知恵と武力で対抗できないように綿密に構築した作戦はもちろん、相当数の血を流す覚悟をもって挑まなければならぬということだ。

「同年三三四日。ヤマトは修理を終え、小惑星帯から発進したことが確認されています。——以上が出現から収集されたヤマトのデータではありませんが、これだけの性能を秘めた戦艦を、イスカンダルの支援があつたにせよこの短時間で地球が用意した不自然さは拭えませぬ。あのヤマトが出現した大氷塊が空間を飛び越えて出現したことから察しますに——ヤマトは並行宇宙の類から出現した宇宙戦艦であるとも考えられています。この世界の地球人が問題なく運用できていることからすると、並行宇宙の地球が建造したのでしょうか。故意か偶然かは现阶段では不明ですが、そうであるのであれば、いままでの地球の戦力と同列に考えるのは極めて危険であると、結論付けられます」

ヒスの報告の締めはほかならぬデスラー自身が推測したことであるが、公式の場で発表するのは今回が初めて。実質ほかの将兵にヤマトの情報を共有させるために語らせたものだ。

想像を絶する未知なる存在。それがヤマトだと。いままでの気概で挑めば勝てない相手だと。

「総統。現在わが軍はヤマトに十分な戦力と労力を割ける状態にはありません。かと言って、半端な戦力を差し向けたとしても返り討ちに遭う危険性が極めて高いでしょう。そこで、艦隊戦力ではなく罨に嵌めて撃滅するのが得策だと考えます」

ヒスの反対側に控えていたタラン将軍が進言する。

彼は軍事と政治の双方に精通している将軍であり、双方を統括して国を治めているデスラーにとっては頼もしい片腕と言える存在であ

る。

ヒスも能力的には十分な信頼を置ける存在だが、いかんせん神経質で慎重すぎるきらいがある。もちろんそれも必要な才覚であるのでデスラーは彼にその役職を任せているのだが、ここぞというときに全幅の信頼を置けるかと言われると、言葉に詰まってしまふ。

「ヤマトはおそらく長距離ワープの事前テストを兼ねてと思われるますが、太陽系から四・二五光年の距離にあるプロキシマ・ケンタウリ星系にワープアウトが確認されています。その星系の第一番惑星には、わが軍の採掘部隊が派遣されています」

眼前のモニターに、小規模ながら資源採掘を行っている工作艦の姿が映る。ガミラスの宇宙船の中でも最大級の大きさで、惑星からの資源採掘や浮きドックの代わりも務まる艦艇だ。

「この惑星は恒星との距離が非常に近く、恒星に面した面は極めて高温になります。その環境の産物として、ほかの星ではあまり見かけない特殊な耐熱金属資源を確保できる星でもあります」

タランの説明に合わせてモニター上にはその資源に関する簡略な資料が表示される。

地球攻略作戦が目下の最優先事項であるが、今後のことを考えれば兵站の確保は決して疎かにできない重大な仕事だ。

恒星間航行可能な宇宙戦艦に使える金属資源は貴重だ。ガミラスが盛んに版図を広げていけるのは、母星であるガミラス星にガミラシウムと呼ばれるエネルギー資源があり、ガミラス星が属するサンザー恒星系とその近くの恒星系に波動エンジンのスペックを引き出すのに不可欠な、コスモナイトやそれに類する資源が豊富に埋蔵されているからだ。

「ヤマト——正確にはそれを操るクルーたちにとって、太陽系の外は未知なる空間です。修理作業で損失した資源を仮にわれらの目を欺いたボソソジャンプの活用で補えたとしても、跳躍距離の都合から二度と同じ方法は使えないでしょう。となれば今後は、航路上にあるほかの星系ないし自由浮遊惑星の類から資源を採掘しなければならぬ。——予想されるヤマトの航路上に資源を得られそうな恒星系は

決して多くありません。仮に資源が十分であつても調査もせず素通りするとは考えにくい。調べておけば、少々の損失で済むと判断されればあとから取りに来るといふ選択肢も選べるのですから。彼らとてそのことは重々承知のはず。われわれがそれを予想して罠を張っていると考えたとしても、容易に素通りはできないでしょう」

タランの言葉にデスラーもほかの将軍たちも頷く。

ヤマトは誰からもバックアップを受けられない過酷な航海を余儀なくされている。そんな状況下にあつて保険の一切を掛けようというといふことは、まずありえないだろう。

「ですので、われわれはこの星に罠を張ります。ほかの星は資源の採掘には向かない褐色矮星と目ぼしい資源のない岩石惑星のみです。で、ヤマトは資源を求めてこの惑星を訪れると考えられます。ヤマトが確実に惑星に降下するよう仕向けるため、すでにこの惑星からわが部隊は撤退させ、採掘跡は巧妙に隠蔽しております」

モニターには予想されるヤマトの進路と、隠蔽工作について事細かに描かれている。予想では、ヤマトは褐色矮星である第三惑星方向からプロキシマ・ケンタウリ星系に侵入し、岩石惑星の第二惑星を経由して第一惑星に向かうとされている。

「ヤマトが資源採取ないし調査のために惑星に降り立ったあと、おそらくおざなりな調査しかしないであろう第三惑星に隠れた工作部隊が惑星の死角から軌道上に侵入し、総統の名前を頂いた新型宇宙機雷——デスラー機雷で惑星を封鎖いたします」

モニター上にはまるで金平糖のような形をした、青色の宇宙機雷が表示されている。大きさは球体部分の直径が三メートルほどで、棘の部分を含めても六メートルとかなり小さい。

「このデスラー機雷は総統の名を頂くに相応しい、高貴な青に染められています。これにより宇宙空間での低視認性も備えておりますし、ステルス塗装も兼ねているためまず長距離用のコスモレーダーでは捉えられません。そのためヤマトは、資源を得て意気揚々と惑星を出たところでこの機雷に包囲されることとなります。あとは機雷の動きを制御するコントロール機雷の指示に従い、機雷は徐々に徐々にヤ

マトを絡め取り、閉じ込めます」

モニター上のシミュレーション映像では、機雷原に突入したヤマトが絡め取られるさまが克明に映し出されている。

「このデスラー機雷はワープの空間歪曲に反応しても起爆しますし、ボソンジャンプ対策も施されています。とは言え、現在までヤマト自身がボソンジャンプを行使したことはありません。波動エンジン搭載艦艇のボソンジャンプが極めて危険であることは、両者がある程度研究すれば自ずと知れることですので、ヤマト側も承知であると思われれます。が、エンジン停止状態、エネルギー枯渇状態であれば問題を解決できません。ヤマトの作業員が使用した例が冥王星前線基地の交戦記録にあるため、この機雷はボース粒子反応を検出して起爆するようにもプログラムもされています。残念ながら、ジャミングではジャンプそのものを阻害はできないため、このような対策を取るほかありませんでした」

この件に関してはこれ以上の手は打てないと、デスラーも諦めている。

ガミラスもかつてはボソンジャンプの技術を持っていたのだが、波動エンジンと波動エネルギー理論が構築されたあたりから、その相性の悪さが引き起こす大事故の危険性が示唆され完全に封印されてしまった。

この時はまだ交流が活発だったイスカンドルの技術者の後押しもあり、封印は速やかに行われたと伝えられている。

外敵に使われた時のためにジャミングシステムとその概要こそ残されたが、ボソンジャンプそのものを実行するための手段やそれに繋がりがかねない技術や情報は残されていないのが実情である。

勢いあまって火星の遺跡を破壊していたり、宣戦布告直前に火星から運び出されてしまったらしい演算ユニットが手に入っていれば、また違ったのだろうか。

「本来であれば機雷原突入と同時に起爆したいところですが、ヤマトの防御力と機雷の移動速度を考慮すると、すぐに起爆することは叶いません。機雷の間隔を徐々に狭め、最終的に機雷の放つ電磁波がヤマ

トに接触したところで起爆しなければ、ヤマトを確実に吹き飛ばすことは難しいでしょう。——艦隊を投入して艦砲射撃と合わせることも検討されましたが、ヤマトには例の戦略砲撃を可能とする人型があります。ヤマトは機雷原に囚われた直後に周辺の警戒のため、あるいは機雷撤去を目的として人型を出撃させるでしょうし、あの出力から推測される有効射程外から砲撃する能力は、わがガミラスの艦艇にはありません。よって、本来は冥王星基地への援軍を予定していながら間に合わなかった、多層式宇宙空母三隻がアルファ・ケンタウリ星系に再度派遣されております。搭載された新型戦闘機と爆撃機による攻撃で、ヤマトの艦載機部隊を封じる手筈です」

モニターに複数の飛行甲板を重ねるように備えた、ガミラスでもっともポピュラーな宇宙空母の姿が映し出される。

ガミラスの標準色である緑に塗られた空母が三隻。戦艦一隻に差し向ける航空機の総数としては過剰にもほどがある量の艦載機を運用できる。——相手が常識の範疇に納まっていればの話だが。

「これだけの数の航空戦力に襲い掛かれれば、連中も機雷の撤去作業どころではなくなるでしょう。あの人型の器用さと汎用性の高さ、機雷撤去の主力である人型を迎撃に向かわせてしまえば、いかにヤマトであつても手の打ちようがないはず。懸念される戦略砲として、広範囲に広がった部隊を一撃で吹き飛ばすことはできないはずですが、いえ、機雷に誘爆する危険を考慮すれば発砲させずに済むかもしれません。そうして機雷を撤去する労力を失ったヤマトは、やがて紙飛行機のように儂く燃え尽きることになるのです」

タランの立案した作戦にデスクラーも満足げに頷く。正面から戦えないヤマトに対する搦め手としては、十分過ぎる内容だ。

だが、作戦はこれだけではない。

「私としては、ヤマトにはここで終わってもらいたいのだが、万が一にもこちらの策に乗らなかった場合に備えて、もうひとつ策を用意してある。もっとも、それを披露するのはヤマトが無事に突破したら、の話だがね」

万が一にもあるまい、という態度を示し、胸中を明かすことなく不

敵に笑う。

デスラーは複雑な気持ちを抱えていた。

あの氷塊から姿を現し冥王星を攻略するまでの間、デスラーはヤマトの存在をたいそう疎まくに思っていた。

偉大なガミラスに歯向かう愚かな艦、野蛮人が得た身の丈に合わぬ超兵器。それがデスラーのヤマト評だった。だったのだが……。

(冥王星前線基地攻略戦のヤマトの姿。滅びゆく祖国のために死に物狂いで向かって来るあの姿。この上なく美しく、そして力強かった……あれほどの戦いを、私はいままで見たことがない)

デスラーのヤマトに対する評価が変化したきっかけは、敵前逃亡という大罪を二度も犯したガンツが命を捨てる覚悟で持ち帰ったデータだった。

敵前逃亡は死刑だ。ガミラスは逃げ出した兵士に対して寛容ではない。それを許せば命惜しさに祖国を危険にさらす愚か者が生まれてしまう。

それゆえ、ガンツもその部下たちもすぐに処刑してしまうつもりだった。だが必死の形相でデータの重要性を訴えるガンツに僅かばかりの猶予を与え、超空間通信で送られてきたデータに目を通すことにしたのだ。

……それが、デスラーにとって初めて目にするヤマトの姿であった。

数の暴力をもともしない奮戦ぶりは、彼の目を捉えて離さなかった。

傷つき一度は海中に没しながらも最後の最後まで諦めず、ついに圧倒的戦力差を覆したヤマト。

(どのような困難に直面しようとも生き抜こうとする、強い意志を感じる。記録映像だというのに、それが色褪せることなく伝わってくるとは……あの戦いぶりには一片の曇りもなかった。まさに守護者の戦いぶり。敵ながら……本当に素晴らしい戦いぶりだった……宇宙戦艦ヤマト……)

デスラーの本質は戦士だ。大ガミラス帝国を背負う戦士なのだ。

だからこそ戦士の心が理解できる、ヤマトの戦いを支える心の強さが手に取るようにわかる。

それが生み出した美し戦いぶりには、本当に惚れ惚れした。

繊細かつ大胆な操艦。数の暴力に食い下がる苛烈な砲火。幾度となくその身を撃たれても怯むことを知らないまさに鉄の城。

そのヤマトを指揮するのは――。

（頑ななスターシアをも動かした人間――ミスマル・ユリカ……と言ったか……その女性がヤマトの艦長か――会って話してみたいものだ……）

その事実もまた、デスラーがヤマトに急速に共感を覚え始めた理由であった。

あのスターシアが、頑なに封印してきたタキオン波動収束砲を提供しても良いと考えさせるような人物とは、一体どのような人柄をしているのか。個人的な興味も尽きない。

三週間前のことだった。

太陽系から捕虜を運搬してきた護送船がトラブルを起こしてイスカンドルに墜落したのだ。

地球を支援したことが明らかとはいえ、ガミラスは――いやデスラーはイスカンドルになにかしらのリアクションを取るつもりはなかった。それでも迷惑をかけたと謝罪のためにホットラインに手を伸ばし、事務的に乗員の生死を問い合わせたのだ。

彼女は「生存者は地球人一名だけ」と答えた。

本当なら捕虜の引き渡しを求めるべきなのだろうが、デスラーはそのままイスカンドルに置き去りにすることを選んだ。

スターシアは孤独だ。日々の変化も乏しいあの星においてはいい刺激になるだろうし、彼女の話し相手になるかもしれないのならと、デスラーなりの気遣いだった。

――もしかしたら、甘んじて滅びを受け入れようとする彼女が心変わりする切っ掛けになるかもしれないという打算が多少含まれていたことは、否定できないが。

そういう事情もあり、デスラーは生き残った捕虜に関する処置を自

身の裁量で決定して終わらせた。

そのときふと思いついたので、デスラーは戯れにスターシアに問うた。

「君に接触した地球人についてわざわざかでもいい、教えてくれないか」

と。スターシアはデスラーの要望に、

「ミスマル・ユリカという女性です。彼女は愛する家族の未来を護るために、ヤマトの艦長としてこのイスカンドルに向かっています。もちろん彼女には、イスカンドルとガミラスについて私が知る限りのすべてを教えてください」

とだけ答えてくれた。

デスラーはそれで十分と礼を述べたあと、通信を切った。

——この時得た情報は、いまだにデスラーの胸の内に留めてあった。

本来なら最後の切り札になるであろうガミラスとイスカンドルの関係すら知られていては、今後の戦略に修正が必要だろう。

それにスターシアは『ミスマル・ユリカ』なる地球人に共感を抱いているようだった。

戦う理由としては個人的だと思うし、そもそも人を愛するということへの理解が乏しいデスラーには、それで国や民族の運命を背負って戦えるものなのかと理解に苦しんでいた。

しかし——護るべきもののために戦うことの意味と強さは、知っている。

もしもガミラスがいま、苦境に立たされていなかったら——地球制圧がもつと余裕のある作戦であったとしたら——きつとヤマトとの戦いをお遊びとしか思えなかっただろう。ユリカなる人物がスターシアに接触しようとも、気にも留めなかっただろう。

しかし、いまのデスラーは違う。ヤマトと同じ立場に立っている。祖国を救うため、すべてを賭して抗う立場に。

それが『愛』だというのであれば、まさしくヤマトとデスラーは同じ動機で戦っているのだ。

その奇妙な感覚がそうさせたのだろうか、貴重なデータを持ち帰っ

たとして、デスラーはガンツに温情を与え、今回の機雷網による撃滅作戦が失敗したときの後詰めを任せている。生還は望めない作戦だと念押ししたが、シユルツの元に逝きたがっている彼らには最上の任務になったようだ。

敬愛する上官を討ち取られ、ヤマトへの敵意に溢れているガンツは命と引き換えてでもヤマトを討ち取ると誓いを立て、デスラーが送り込んだ補給隊と接触し、作戦に必須の装備一式を受け取る算段になっている。

しかしデスラーはこの二段構えの作戦をもつてしても、ヤマトを止められないのではないかと感じていた。

——ヤマトは強い。それは単に優れた宇宙戦艦だからではない。

人の意思だ。途轍もなく強い人の意思だ。それがヤマトに常識を超えた強さを与えている。

だとすれば、かつてイスカンダルで研究されたことがあるという、人の意思を体現するマシンであるのかもしれない。

「ガミラスの科学の粋を集めた宇宙機雷です。いかに強力な宇宙戦艦だとしても、地球人の科学力では突破は不可能でしょう」

誇らしげに語るタランの姿に、デスラーは部下としての頼もしさを感じると同時に、ヤマトに対する考え方の違いをはつきりと感じた。

タランもヤマト攻略のために同じ資料を見ているはずだが、デスラーのように妙な共感を覚えたりはしていないのだろう。

「——とは言え、不可能に思われた冥王星前線基地攻略を成功させた艦が相手。油断して足元を掬われないう、二段構えの作戦を構築した次第です。——あの艦は祖国の命運を背負って飛び出してきた、いわば地球人類そのもの。映像記録からでもヒシヒシと感じる強い意志に敬意を表して対峙せねば、勝てぬ相手でしょう」

訂正、タランもヤマトの強さの本質を感じ取っているようだ。やはりこの男はデスラーにとって代え難い部下であるようだ。

その時、タランの部下のひとり中央作戦室の入り口に立ち敬礼を掲げ、

「ご報告いたします。ヤマトがプロキシマ・ケンタウリ星系を航行中

です。予想どおり、第三惑星を通過した後、第二惑星を向かっていきます。航路から第一惑星にも立ち寄ると思われれます」

「どうやら予想どおりに事が進んだ様子。」

ヤマトはきつとこのまま第一惑星に降下して資源の採掘を始めるだろう。——罨の可能性を考慮しながらも。

ガミラスの未来すらも砕きかねないヤマトに敵意はある。しかし、それと同時に奇妙な共感を抱くのを止められない。

そんな気持ちが出たのだろう。デスラーはある意味では現状に相応しくない、しかしヤマトなど歯牙にもかけていないとするのであれば、適切とも言える言葉を口にしていた。

「ふふふ……では諸君、宇宙戦艦ヤマトの無事を祈ろうではないか」

従者が用意したグラスを掲げて不敵の笑みを浮かべる。グラスに映る自分の顔を見て、これなら妙な誤解は招くまいと安堵する。

その時「ガハハハッ！」と不愉快な笑い声が耳に飛び込む。

デスラーは不愉快そうに視線を送ると、

「ヤマトの無事を祈るとは！ 総統も相当、冗談がお好きなようですね！」

——いかにも下品そうな中年の将軍が笑っている。

デスラーは無言で座席左側の肘掛けの一部をスライドさせ、タッチパネルを露にすると手早く操作した。

その瞬間、下品な笑い声を上げていた将軍が座席ごと床下に引き込まれて消え去る。一連の流れを見ていた将軍たちは視線を逸らし、素知らぬ顔で無言を貫く。

「ガミラスに下品な男は不要だ……」

そう言って改めてグラスを掲げる。その頃には全員にグラスが行き渡り、皆一様にグラスを掲げて、

「デスラー総統ばんざああい！」

と唱和する。

デスラーはそれを聞きながらグラスの中の酒に口を付ける。

（さて、どうなるヤマト？……ここで終わるとは思わんがね？）

デスラーは早々にヤマトに消えて欲しいという気持ちと、ヤマトと

直接対峙してみたいという気持ちがせめぎ合うのを感じながら、酒を飲み干した。

さて、この作戦の結果が楽しみだ。

結果が出るまでは、ガミラスの移民計画に関しての修正案について検討を進めるとしよう。

宇宙戦艦ヤマトは太陽系に別れを告げるワープを終え、青い閃光に包まれながら滲みだすように通常空間に復帰した。

身に纏った閃光が消えうせたヤマトの体に、ワープテストの時に生じたような傷は見えなかった。ただひとつだけ相違がある。安定翼を展開した姿であったのだ。

「ワープ終了！」

操舵席でワープレバーを引き戻した大介が報告する。各計器はヤマトが無事に通常空間に復帰した事を告げていた。

予定どおり、地球から四・二五光年離れたプロキシマ・ケンタウリ星系の近海に到着している。

眼前には（宇宙規模の視点で）それほど離れていない恒星がひとつ浮かんでいた。

「艦の損傷認めず」

艦内管理席の真田が計器をチェック。ヤマトの各所に設置された自己診断システムは異常を検知していない。が、念のため工作班の面々を各所に派遣してチェックを促している。

「波動相転移エンジン、異常なし。引き続き検査を続けます」

機関管理席のラピスも計器上はエンジンに異常がないと報告している。

「どうやら上手くいったみたい。私も特になんともないみたいだし」

ユリカがほっとした声を出す。前回のワープでは終了直後に気絶してしまっただが、今回はなんともない。一安心だ。

「ええ、どうやらヤマトの改裝作業は成功したようです。——長い足

止めも、悪いことばかりではなかったようですね」

真田が部下の報告を受け取りながらそんな感想を口にする。

冥王星前線基地で大損害を受けたヤマトの修理は長期化し、二五日も足止めを食らった。

だが転んでもただでは起きないのがヤマトだ。

修理が長期化することが明白となった瞬間、真田とウリバタケは各部署の総責任者と一緒に会議を招集。

発進から冥王星基地攻略作戦までのわずかな運用データと各部署の意見を聞いて回って、実現できる範囲での改修作業を行ったのだ。

まず最初にトラブルを起こした装甲の支持構造は、部品の品質と取り付け時のヒューマンエラーが主な原因だったことが判明し、修理作業に並行したわずかな補強と手直しで想定値に近づけた。

次に主砲や副砲、パルスブラストといった重力波兵器。動作自体は問題はないが、実戦で獲得したデータを基に、エネルギーの消費量や重力波の収束率などに微調整が加えられ、冷却装置の見直しも行われたことで信頼性が強化された。

衝撃で破損したり不具合を起こした部位は修理と並行して少しでも信頼性を高めるための改修が加えられている。

そして、一番の問題児である波動エンジンも再調整を受けた。

航行も戦闘もしないのなら波動エンジンまで動かす必要はないと、一度完全に停止して徹底的に調整しなおしたのだ。

熱で溶けたり折れたりしたエネルギー伝導管やコンデンサーも原因の究明や予防策が再検討され、その結果に合わせて微調整を行っている。

タイタンでの改修結果が的を得ていたためそれ自体はさほど苦もなく実現できたが、次に課題になったのはエネルギーの変換効率や使用効率といった点だった。

冥王星での戦いにおいて、ヤマトは波動砲やワープといった大エネルギーを使用するシステムの使用こそなかったものの、各種武装やデイストーションフィールド、さらには推進システムと、多くのシステムをフル稼働して戦わざるを得なかった。

結果、エンジンは常に全力回転を余儀なくされ、被弾による衝撃で制御システムなどに小規模のトラブルが頻発。機関班はエンジンを保つのに大奮戦を余儀なくされたのである。

元来が背伸びした改修と揶揄される複雑な複合大出力エンジンであったので、制御プログラムの改良も含めたエネルギー供給システム関連の再調整が、改修作業で最も手間のかかった作業であったと言える。

「ワープによるエンジンの損傷を認めず。出力の回復も順調——再調整の甲斐があったようです」

だがその苦労の甲斐はあつたらしい。現にテスト時に比べるとずっと長距離を跳躍したにも関わらず、ヤマトには目立った不調は見受けられないし、艦長席のモニターから確認できる範囲でも、波動相転移エンジンの動作は安定している。

……あとは、試射以降使用の機会に恵まれていない波動砲の再テストか。特に六連射の負荷をへたらず受け止められるかどうか、今後の波動砲の運用の焦点と言えるだろう。

「改装した主翼も、ワープ航法時のスタビライザーとしてちゃんと機能しているようです。上手くいってよかった、これでワープの人体への影響を減らせると思います」

ハリも改修されたヤマトの性能に安堵の表情だ。

そう、ヤマトが安定翼を開いたままワープした理由は、改装によってワープ航法時の負荷を減らすスタビライザーとしての機能が解禁されたからだだった。

ヤマト再建の際、普段はデッドウェイトになりがちな安定翼を撤去するかどうかで揉めたことがあった。最終的にはヤマトがいかなる空間を進むことになるかわからないという事情もあって、省スペース化のための分割収納機能を追加するなどして残されることになったが、その際ユリカが入れ知恵してちよつとした改良を加えてもらったのだ。

それが波動エネルギーの空間歪曲作用を応用した、タキオンフィールドの展開機能だ。ダブルエックスのリフレクターユニットに内蔵

されているそれは、これの廉価版といった品である。

サテライトキャノンの制御に特化したダブルエックスと違い、ヤマトの主翼はより多目的だ。補助推進装置としての活用はもちろん、ワープ航法における次元の壁を超える際に生じる負荷を軽減して安定化させたり、まだ試験段階だがディスプレイオンフィールドとは異なる防御フィールドとしての活用や波動砲の収束外部制御装置としての活用も視野に入っているなど、多岐に亘っている。

もちろん表向きの理由は主翼のデッドウェイト化をさけるためであつたが、実はユリカとその共犯者しか知らない隠し機能を実現するために必要だからそれとなく搭載させたシステムだった。

内ひとつはそろそろ公開してもいい頃合いなので、折を見てテストしてしまわなければならないだろう。

真田は予想以上に改修作業が上手くいったことに満足していた。

これで、ユリカの病状の進行が少しでも抑えられたら幸いだ。

それ以外にも戦闘やトラブルで負傷者が出た場合であっても、負傷者への負担を減らしつつワープを敢行できる利点は大きい。戦場からの急速離脱にワープを使うこともあるだろうし。

改装には手の空いたイネスの協力もあつたので、思いのほかスムーズかつ高い完成度で仕上がった。やはり彼女は素晴らしい頭脳の持ち主だと改めて感服する。

今後とも仲良くしていきたいな、と真田はひとり領いた。

「よしー。じゃあ点検作業を続けながら、通常航行でプロキシマ・ケンタウリ星系に接近。有益な資源がありそうなら惑星を調査し、可能であれば採取。それが完了次第、次の経由地であるオリオン座のベテルギウス近海に向けての大ワープテストを実行します。今度は地球から約六四二光年、現在地からでも六三八年は離れた遠方にワープするからね！」

チェックを怠らないようにと釘を刺すユリカに、真田とラピスが強く頷く。大ワープともなればさらなる負荷が懸念される。ヤマトの整備を万全におこなければ。

航行責任者の大介も早速航路計算に移らなければならない。プロ

キシマ・ケンタウリの惑星の資源調査は工作班の仕事であるが、遠方からどのような星なのかを観測してその種類を判断するのは航海班の仕事だ。

「それじゃあるりさん。すみませんがプロキシマ・ケンタウリ星系の観測と、そのデータ解析をお手伝い願えますか？」

大介はルリに手伝いを要望した。

一応電算室はハリでも扱えるが、ハリは航海班の副官として一緒に航行艦橋である第二艦橋での解析作業に同席して貰いたい。となると、ルリか雪に頼むのが手っ取り早い。

地球からの観測で惑星ひとつ存在することが観測されているが、現地点からの観測なら発見されていないほかの星を発見することもできるかもしれない。

そこに有益な資源があれば助かる。地球からの補給を受けて多少余裕を持たたとは言っても、ヤマトの倉庫事情は依然厳しいままなのだ。

「わかりました。すぐに始めますか？」

「ええ。——自動操縦にセット、第二戦速でプロキシマ・ケンタウリ星系に向かって航行するように設定しました。到着予定は一〇時間後を予定していますから、十分時間がありますね」

自動操縦に切り替わったヤマトは、安定翼を格納してメインノズルを点火。悠然と宇宙を航行し始める。これで操舵席を離れても大丈夫だ。

「では、私も機関室に降りてエンジンの様子を直接見てきます」

ラピスも機関制御席を立って早々にエレベーターに向かっていった。

「……艦長。俺も同行して構いませんか？ 波動砲の制御装置の様子を見ておきたいので」

「別にいいよ。職務熱心でお母さん嬉しいよ……」

よよよよ、と涙を拭う振りをするユリカに「では失礼します」と、進は全く取り合うことなくラピスと一緒に第一艦橋を去っていった。

いい加減ユリカのあしらい方を学んだらしく、以前のように赤面したり過剰に反応して恥ずかしがることはなくなっていた。

(まあ、いい加減慣れてもいいころだよな。艦長の奇行にも)

「……進のイケずう〜」

顔の前で両手の人差し指を『ちよんちよん』とぶつけながら嘆くユリカだが、第一艦橋に残ったクルーは誰も取り合わない。

通信席でエリナが右手で額を抑えて「はあく〜」と溜息を吐いていたことが、ユリカの態度に対する唯一の反応と言って差し支えないのかもしれないと、大介は思った。

第十一話 外宇宙への進出！ 迫るガミラスの影！

Bパート

進とラピスはエレベーターに乗りながら、真剣な表情で意見を交わしていた。

「ラピスちゃん、いま波動砲を使ったとしたら、エンジンに問題が出る可能性ってどのくらいだと思ってる？」

「……難しい質問ですね。エンジンの改修と再調整を行ってから、波動砲は一度も使っていません。エンジンの整備には自信があります。やはり実際に使ってみないことには具体的な意見は言えませんね」

顎に手を当てながら問いに答えるラピスに、進も「そうか……」と頷く。

幸運なことに木星での試射以降波動砲を撃つ機会には恵まれていない。心情的な問題もそうだが、そもそも波動砲を積極的に使用する局面というのはヤマトにとつて窮地ということであるので、撃つ機会がないイコール苦境に立たされていけないということなので、幸運なのだ。

「改装を訴えたユリカ姉さんには悪いと思いますが……やはりこの改装は無茶だったとしか考えられません。エンジン制御はまだなんとかなります。実際多少の不具合こそ起こしましたが、冥王星海戦では最後まで戦い抜くことができました。しかし、ワープに比べて波動砲の負担は大き過ぎます」

波動砲発射後の波動エンジンの惨状を思い出してラピスは身震いしている。

だが無理もない。ワープの時もエネルギー伝導管が溶ける被害を被ったが、比較的修理は簡単だった。その後の改修も上手くいっているようで、このプロキシマ・ケンタウリ星系へのワープでもトラブルを起こしていない。

しかし、波動砲はもつと酷かった。

エネルギー伝導管どころかコンデンサーも複数破損してしまった。それに波動砲口周辺の装甲板にも亀裂が入る被害——自損としては最大の被害を被った。

幸いにも航行中の修理が困難なライフリングチューブやふたつの収束装置は損害を免れたが、波動砲の使用に不安を覚えたことは事実だ。

一応、あの時の経験を基にした改修を行い微調整を繰り返しているが、やはり撃つてみないことには確たる自信を得ることは難しい。

「単発での発射なら問題ないと思います。——でも、連射の反動に耐えられるかどうかは保証しかねます……ユリカ姉さんは、いったいどうして波動砲の連射なんて考えたんでしょうか？ 冥王星基地攻略作戦でヤマトが耐えられたのは、波動砲と密接に関わった連装エンジンの力が大きいとは思いますが、そもそもあれほどの過剰戦力をぶつけられたのはランジツシヨン波動砲のせいだと考えると、メリットよりもデメリットが目立つ気がしてならないんです」

ラピスの意見はもつともだと思う。

しかし波動砲は一発限りの必殺兵器であったとしても、想像を絶する超兵器であることに変わりない。

結局、波動砲の存在が敵を刺激したには違いないだろう。だが波動砲なしでヤマトの航海が成功するかと問われれば、進は黙って首を横に振るだろう。

しかし、

（ガミラスはやけに必死だった。波動砲が怖いのはわかる。だがそれでも……たかが一隻に過剰戦力も辞さないなんて、自分たちの優位性を信じて疑わなかったガミラスにしては、やけに切り替えが早くないか？）

そこが気掛かりだった。いかにヤマトが強力でも戦力としては戦艦一隻に過ぎない。

直接戦闘指揮を執る機会はなかったが、冥王星海戦の敵艦の数は些か大袈裟に思える。

進が知るガミラスだったら、自分たちの優位性を疑うことなく、それこそゲーム感覚で適当に叩こうとするのが常だと思う。

それなのに、いきなり形振り構わない全力を尽くしてきた。

冥王星前線基地にとっては目の前の脅威だからわからないでもないが——それだけでは説明がつかない必死さを感じた気がする。

進はアキトと共に、ヤマトに恐れを抱いている基地要員の姿を直接見ているのだ。

あれではまるで、ヤマトがガミラスそのものにとっても脅威になると言わんばかりの慌てようだった。

——彼らはヤマトがガミラスそのもの——つまり本星に直接害を与える可能性を現実的に受け止めるなにかを知っていたのだろうか。そうでもなければ波動砲を過剰に恐れる理由にはならない気がする。

「たしかにトランジッション波動砲は過ぎた力だと思う。だけど、その存在が俺たちの航海の安全を守ってくれている気もしてるんだ。あれだけの超兵器、向けられたくないのは誰だって一緒だろうしな」
進は努めて冷静に自分の意見を語る。

いくら機関長の任を拜命しているとはいえ、まだ一三になったばかりの少女なのだ。それに進にとっては可愛い妹分。いたずらに不安がらせることは言いたくない。

「そうだとよいのですが……」

それから特に会話も弾まず、目的地である機関室に到着した。

艦首側にあるドアを潜れば、眼の前にはワープエンジンを含めれば全長が一六〇メートルにも達する長大な六連波動相転移エンジンの威容が眼前に迫る。

機関室にある部分だけなら一一〇メートルといくぶん短くなるが、相転移エンジン採用以降のユニット化が進んだ宇宙艦艇とはまったく異なる大型機関だ。

その先端部分が波動砲の薬室と突入ボルトを兼ねている六連相転移エンジン。

回転弾倉式拳銃のスピードローダーを彷彿とさせる、実包のような配置の小相転移炉心。中央にあるのが動力伝達装置とも呼ばれる波

動砲の薬室部分。

小炉心と直結した大炉心はエネルギーの収束と波動エンジンへの供給用なので除外するが、この部分だけでナデシコCの四倍もの出力のある機関だ。

だがこの部分だけでは前座も同然の扱いである。

「いつ見ても凄いよなあ……このエンジン」

「ええ。ナデシコCと比較しても二四倍以上ですからね、最大出力になると」

ラピスの言葉に改めてこのエンジンの力を認識する。

ナデシコCの四倍もの出力が、波動炉心で波動エネルギーとして変換・出力されると六倍化されて二四倍もの大出力となる。

三〇〇メートル弱の宇宙戦艦には、あまりにも過大な出力だろう。「でも、この出力もまだまだまだ理解も技術も追いついていない現段階の話です。もっと理解が進んでポテンシャルを引き出せるようになってきたらきつと……」

もつと増える。ラピスは暗にそう告げた。

いまの段階でもガミラスの主力であろう駆逐艦クラスと比較しても、八倍越えの絶大な出力差を生み出している。

そのパワーを利用した攻撃力と防御力、そして機動力。

それらを最大限に活かしたヤマトは戦いの常識である多数有利という絶対的な不利を覆し、勝利を掴ませるだけのポテンシャルを有している。

もしもこのエンジンを採用していなければ……仮に主砲を重力衝撃波砲に換装しようが、ディストーションフィールドを搭載しようが、ヤマトは勝てなかつたかもしれない。

もちろんラピスが懸念するようにデメリットも多い。

このエンジンもまだ掌握したとは言えないほど使いこなせていないし、出力増大による負荷に耐えられる完成度に、ヤマト自身が至っているとは言い難い。

総合的な戦闘能力は強化されたと言言できても、完成度という点では再建以前に見劣りしていると、進はデータ比較で断定せざるをえな

かった。

……だつていまのヤマトは連続ワープを失っているのだから。

「最初に出航したときはこれでガミラスに勝てるって……単純に浮かれてたんだよな」

「はい。あのときはそれが当然だったと、いまでも思います。でも、浅はかだったとも思っています」

あのときはようやく対等になれたと喜ぶばかりで、その力がなにをもたらずのかまでは考えていなかった。

たぶん、ユリカ以外は同じだったはずだ。

「あ、機関長！ それに古代さんも！」

眼前で相転移エンジンと波動エンジンを繋ぐエネルギー整流・増幅装置——スーパージャージャーに取り付いていた太助が、並んで歩く進たちに気付いて敬礼と挨拶。

その陰になるところで整備作業を手伝っていた山崎も、油污れで黒くなった手をウエスで拭いながら太助同様に敬礼と挨拶を送った。

「機関長、ワープ後の確認作業ですか？」

「はい、山崎さん。第一艦橋の計器だけでは全貌がわかり難くて……」

進はラピスが、機関制御席だと全体のエネルギー管理やエンジンの自己診断システムによる状況はわかってても、実際のメカニズムの具合はわかりにくいとぼやいていたことを思い出した。

「古代さんはどうしたんですか？ 戦闘班長が機関室に用ってことは……」

「ああ、察しのとおり波動砲に用があるんだ、徳川」

大介が面識あるように進も太助と面識があった。

当然進のほう先輩ということになるのだが、ユリカに毒されきつた進は割とフレンドリーな対応をしていた。修理作業の際に波動砲絡みで何度か機関室に足を運んだことがあり、ある程度この場で求められるものを心得ているため、嫌な顔はされていない。

波動砲が問題児であることは周知のことで、その引き金を任せられている進ともなれば、この場に足を運んでいろいろ知りたがるのも無理はないだろうと理解されている、というのもあるのだろう。

ただしラピス絡みで『進お兄さん』と笑われることがあるのが癪に障るが。

「なあ徳川。おまえから見てトランジツション波動砲のメカニズムになにか疑問とかはないのか？ ほら、イスカンダルからデータが送られて来たんだろ？ そこになにかよくわからないものがあつたとか」
そう言われて太助は答えに窮していた。

——この顔はなにかを知っている顔だ。だが立場的に言えないのかも知れない。なにしろ太助はまだ下っ端の機関士だ。

「……古代さん、疑問に思われているとおおり波動砲には……正確には、それも含めたエンジンの制御システムには、ハード・ソフト両方にブラックボックスが存在しています」

太助の隣にいた山崎がそう答える。どうやらラピスがアイコンタクトで話すように促したらしい。

「ブラックボックス？」

「ええ。トランジツション波動砲や六連波動相転移エンジンの制御システムには、普段は機能していない正体不明のシステムが組み込まれています——例の通信カプセルを覚えていますか？」

「ええ。ユリカさんが、サーシアさん——イスカンダルの人から受け取った、あのカプセルですよね？」

進の答えに山崎も太助も頷く。

「古代さん、実はその通信カプセルがエンジンの制御装置に組み込まれてるんです。提供された図面に、必ず制御装置に組み込むようにと指示が書かれていたんですよ」

太助が困惑な表情で告げると、進は大層驚いた様子で「あのカプセルが？」と少々間抜けな声を出してしまう。

「そうなんです。私も組み込む前にルリ姉さんに解析を依頼したんですけど、プログラムの中に解析できない部分があると報告を受けて初めてブラックボックスの存在が判明したんです。とは言っても無理に抉じ開けて駄目にしてしまったては本末転倒でしたし、いまの私たちの技術力では、このエンジンの完全な制御プログラムを完成させられなかったので……」

悔しそうなラピスに「仕方ないじゃないか、未知のエンジンなんだから」とフォローをしながらも、進はさらに追及してみる。

すると組み込んだ通信カプセルはたしかに通常時にはエンジンの制御装置として機能していて、膨大なエネルギーを生み出すエンジンを細やかに制御しているのだという。

しかしエンジンに組み込んだあと判明したことがあった。てつきり制御に必要と思われていたブラックボックス部分は、まったく動作していないことが判明したのだ。

また、トランジション波動砲にも使われていないハードウェアが組み込まれていて、それも波動砲を発射するまでは存在が知れないようにと、実に巧妙に隠蔽されていたと言う。

撤去しようにもシステム全体への悪影響を考えると撤去できず、不安を抱えながら日々エンジンを管理しているのが、いまの機関部門だという。

「ユリカさんには報告したのか？」

「ええ、でも艦長が放っておいていいと取り合ってくれなくて……まあヤマトの再建に最初から関わっている人ですし、僕たちには知らされていない秘密のひとつやふたつあるのかもしれないですけど、ちよつと不安ですよ」

「それどころかイスカンダルが不必要なものを提供したりしない、むやみに外したくないようにと釘まで刺されてしまって……正直困惑しています」

ラピスの補足に進も「ふむ」と頷く。

「わかった、とりあえずこれ以上の追及は無意味そうだし止めておくよ——とにかく、現状波動砲に目立った問題はない、と考えて大丈夫なんだよな？」

進の言葉にラピスは頷く。どうやらエレベーターでのやり取り以上の報告はない様子。

「ただ、繰り返ししますが連射の反動に耐えられるかは不安が残ります。それにワープ直後の使用は艦体に大きな負荷が掛かって損傷する可能性があります。余程の緊急事態でない限り、連射とワープ前後すぐ

の使用は避けてください」

ラピスに念を押されて「わかった、気を付けるよ」と朗らかに答え、進は機関室をあとにする。だが機関室を出る時にエンジンを一瞥することは忘れなかった。

機関室を出た進は第一艦橋には戻らず、格納庫で機体の整備作業をすると断りを入れてから格納庫に。愛機であるコスモゼロのコックピットに滑り込んでハッチを閉鎖、簡単な整備作業——も兼ねた熟考時間を取る。

「……なるほど。波動砲とエンジンにブラックボックスか……となると、これがユリカさんとイスカンドルの秘密に繋がっていると見て間違いないな」

なぜ波動砲のデータ、それも旧ヤマトを凌ぐトランジッション波動砲を地球に提供したのか。それと密接に絡んだ六連波動相転移エンジン。

そしてハードとソフトの双方に仕込まれた、ブラックボックス。

進は着実に答えに近づいていると感が囁くのを感じた。すべての謎が解けた時、はたして真実を受け止められるのかはわからない。

だが、漠然といかなる真実であつても受け入れなければならぬと感じ取っていた。

一〇時間後、ヤマトはプロキシマ・ケンタウリ星系に接近していた。

ちょうど第三惑星である褐色矮星が進路上にあるが、あれは木星などと同じくガスの塊の天体、と言うより太陽のなりそこないと言われることもある天体なので、ヤマトが欲する資源を得ることはできないこともあり、詳細な調査は日程の都合もあつて見送られた。

「なんか、太陽に比べると可愛らしい大きさだね」

メインパネルに映るプロキシマ・ケンタウリの映像と、比較として表示された太陽の大きさを見て率直な感想を漏らすユリカ。

真田は少し補足しようかと思つて口を開きかけたが、エリナに先を越されてしまった。

「たしかプロキシマ・ケンタウリは赤色矮星だから、恒星としては特に

小さい部類に入るんじゃないやなかつたかしら？ ヤマトに乗る前に少し天文学を少し齧ってみた程度で申し訳ないけど」

「説明しましょう！」

やっぱりか。と真田は心の中で呟いた。

「調査時間を減らしたくないから手短に済ませるわね。プロキシマ・ケンタウリは現在確認されている限りでは地球から最も近い位置にある恒星で、赤色矮星という主系列星と呼ばれる時期の恒星としては最も小さい部類に入る星よ。大きさは大体太陽の七分の一で、質量は八分の一程度、平均密度は四〇倍と言われているわ。ヤマトでの観測結果も大体合ってたわね。磁気活動によって不規則かつ急激に明るさが変化する爆発型変光星——くじら座UV型変光星の一種でもあるわ。赤色矮星は質量が小さく核融合反応が緩やかに行われるため、私たちがよく知る太陽よりもずっと寿命が長く、それこそ宇宙創成からすぐに誕生した星ですら、まだ寿命を迎えていないと言われているわ。プロキシマ・ケンタウリは、地球から最も近いこともあって、しばしばSFを含めた恒星間航行の目的地として挙げられているわよ。これ豆知識。以上、簡易だったけれど、イネス・フレサンジュでした」

空気を呼んだのか至ってシンプルな説明で終わらせてイネスの放送は終わった。

というよりも、自分がさらに調査したくて早々に打ち切ったのだらうと、付き合いの長いエリナと趣味が似ている真田は感付いていた。人類がこういった天体に近づいたのはもちろん初めて。

地球から観測されていた岩石型惑星のほかに、それよりも少し外側の軌道に褐色矮星がひとつ、それよりも内側の軌道に地球より少し小さいサイズの岩石型惑星がひとつ確認された。

褐色矮星はともかく、岩石型惑星はなんらかの鉱物資源を得られる可能性があるため、今後のことを考えれば調査と採掘作業をしておきたいところだ。これからの旅路で必ず必要になる行程なのだから。

欲を言えば資源採掘目的以外での天体観測を含めた調査もしたいのが本音だ。

兵器開発とは無関係にその知的探求心を満たす行為——なんと満

たされる行為だろうか。

しかし今回の旅路では時間が足りない。諦めるしかない。

だがヤマトの旅が成功すれば、地球は必ず波動エンジンを搭載した艦艇を量産するだろう。いずれこの広大な宇宙を気ままに探査する機会もあるだろうし、タキオン粒子を使用した超長距離測定技術が誕生したのだから、太陽系からでもいままでよりもずっと精度の高い観測が可能にはなるだろう。

せめていまは、現物を生で見るといってこれ以上なく素晴らしい出来事の感動を胸に刻みつつ、果てなき航海のストレスを癒すとしよう。

「艦長、第一惑星と第二惑星は岩石型惑星ですので、もしかしたら資源を得られるかもしれません。地表近くに鉱脈があれば、短時間で採集が可能でしょう。——とにかく時短を求めるのなら、乱暴な手段にはなりますが、ヤマトの砲撃や艦載機の砲撃で適度に地表を吹き飛ばして採掘することも、視野に入れるべきかもしれません」

さらっと怖いことを言った。隣の席のハリはその光景を想像したのか、顔を引き攣らせている。

砲撃で巻き起こる粉塵に飛び散る大地。

自分で言っておいてなんだが、自然を大切にね。という謳い文句が脳裏を過った。

「……まあ時短の為にはそれくらいしないともどうにもならないこともありえるよねえ……悠長に発破なんてしてられないし、さっさと回収しようとしたらそれしかないんだよねえ」

ユリカは憂鬱そうな顔で真田の意見を肯定する。

惑星の環境破壊などを考慮すると過剰手段にもほどがあるし、生命の存在を考慮するなら不必要に惑星に立ち寄ること自体が問題行為なのだが、ヤマトはその目的の都合から、航海の成功に必要なものなら必要分だけの作業は政府から許可されている（もちろん知的生命体のいない星に限定した地球側の身勝手な言い分であることは、疑いようがないが）。

「とにかく接近しましょう。ガミラスへの警戒は怠らないでね。太陽系に一番近い恒星系だから、ガミラスも中継地にしている可能性があるあ

るし。もしかしたら、希少資源とかがあって、ガミラスが採掘してるかもしれないしね」

あははは、と笑うユリカに真田はルリに改めて解析と警戒を求めた。

真田の要請を受けてハリも航行補佐席で周辺宙域の不審な動きを探查すべく、探知機を最大稼働させる。

航行補佐席は航路探查にも不可欠な、周辺の重力異常や空間歪曲、天体の動きなどを探知するのに向いている部署だ。

「赤色矮星とは言え恒星系だものね。さしものタキオン光学測定も、惑星の近海まで接近しないと鉱物資源の探查が無理なのが残念だわ」

エリナが自社で形にした新しい探查システムの数少ない弱点に嘆息しているのを耳にした。

光学測定の名のとおり、タキオン粒子が発する光を使っている超光速探查システム。だが光を使っている以上、恒星が発する光などによって阻害されるため、地表探查や鉱物探查と言った才を穿つような探查活動は、惑星の軌道上からでもなければ実施できないことが多い。

実際太陽系の場合、太陽から遠くほとんど恩恵に与れない土星以降の天体でもなければ、離れた距離からの詳細な探查はできなかったというデータがあるほどだ。

赤色矮星のプロキシマ・ケンタウリは太陽の七分の一程度の大きさであるが、密度的には太陽の八倍の恒星風出している。それに、閃光星の都合から安定した光量を保っていないため、ことさら観測が難しい。

いまプロキシマ・ケンタウリは急激に増光しては元に戻る、という活動を数回繰り返している。

この状況に威力を発揮したのは、ヤマトの窓に備わっている減光フィルター機能であった。

波動砲もそうだが、恒星に接近すればその強烈な光が窓から飛び込んで内側を焼き尽くしかねないという事情から、ヤマトの窓という窓にはすべてこの処置が施され、ある程度自動的に光量の調整がされて

いる。

しかし恒星に最大接近したり、波動砲発射時の強烈な閃光は防げない（完全な遮光はシャッターに任されている）ため、シャッターなしでは対閃光ゴーグルの着用が義務付けられていた。

ヤマトはガミラスの存在に警戒しながら、静かにプロキシマ・ケンタウリ第二惑星の重力影響圏内に入った。

地球よりもほんの少しだけ大きな岩石型惑星の姿が見える。だが植物や水の存在は、軌道上からではまったく伺えない。

「真田さん、ルリちゃんとハーリー君と協力して、プロキシマ・ケンタウリ第二惑星の調査を継続してください。有用な資源があるようなら確保していきます」

「ガミラスの動きは常に警戒するように。探掘作業中はヤマトも無防備になる」

ジュンは念を押すことを忘れなかった。ハリも当然とばかりに頷いてレーダーに目を凝らす。

ガミラスがどこから来てどこに帰っていくのかわからないのだ。それに連中は確実に地球人よりも宇宙に詳しい。

自分たちでは見落としてしまうような影に潜んで、ヤマトを狙っていてもおかしくはない。

「——やみくもに戦って勝てる相手だとは思われてないでしょうから、仕掛けてくるとしたら艦隊戦よりもトラップの類かもね。そっちは艦隊よりも見つけ辛いから注意して」

ユリカは波動砲をもったヤマトに正面から艦隊が挑んでくる可能性は低いと、言外に断言した。

たしかに言うとおりかもしれない。

冥王星での戦いでは、彼らは波動砲を恐れ、使われないようにするための行動に終始していた。よほど自信を持てる戦力を用意するか、ヤマトが不利を被るような空間でもない、そうそう正面からぶつかっては来ないというユリカの意見は的外れとは思えなかった。

見えない不安を払拭しきることは出来なかったが、それでも資源を求めて惑星の探査作業を開始した。

ルリはいい加減慣れたフリーフォールで第三艦橋に移動、電算室の探査システムの準備を始める。

ヤマトは探知装置をフル活用して惑星の組成や鉱物資源についての調査を開始すべく、第三艦橋の探査プローブ（小）のハッチを二つ開放、小サイズの探査プローブを射出する。

こちらは惑星の地表探査に特化したもので、タキオン工学測定器を内蔵している。ヤマトのシステムと組み合わせれば、星ひとつを調べ上げるのもそう時間はかからない。

タキオン粒子の放つ光は付随する空間波動の影響なのか、物体を透過しやすい性質がある。だから惑星の上空を隅々まで飛び回って探査機を動かす手間がいくぶん短縮され、鉱脈を上空から探査するという無茶すら実現できたのだ。

その反応を見てどのような資源が得られるかを見極めるのは、結構難しいが。

プローブが取得したデータが第三艦橋でノイズなどを除去された状態で艦内管理席に送り込まれる。

電算室との連動で情報処理能力が格段に向上したヤマトであるが、電算室だけですべての情報処理を賄っているわけではない。

首脳陣が詰める第一艦橋の各々の座席には、それぞれの役割に特化した情報や処理能力が与えられており、双方に補完し合うことで初めてヤマトはその優れた情報処理能力を活かしきれぬ構造になっている。

ヤマトのマンパワー信仰の一端でもあり、専門家の意見を確実に加えることでより精度の高い情報処理を実現するための方式でもあった。

「……うーむ。どうやらこの星には目ぼしい資源はないようです。鉄にケイ素と、ありふれた資源のみで足しにもなりません」

「そっか……。じゃあ第一惑星の方に向かおうか。その程度の資源に時間は割けないし」

ユリカの言葉を受けて、大介はすぐにヤマトを第二惑星近海から発進させる——前にもつたないからと、プローブをアルストロメリア

で回収して再利用することは忘れない。

発進したヤマトの航路を指示すべく、ハリは大介に第一惑星への最短コースの情報を届けてくれた。

それを参照して大介はヤマトの航路設定を行い、自動操縦でヤマトはプロキシマ・ケンタウリ第一惑星の周辺に到達した。

そこで改めて回収したプローブを使って惑星の探査を開始する。

そして――

「艦長！ 大変なことがわかりました！」

興奮も露に大声を出す真田にユリカも表情を強張らせる。

「なにか不審なものでも!？」

一気に緊迫した空気が生まれる。

ユリカはこの星系でガミラスがなにかしら仕掛けてくる可能性が高いと考えていたが、やはり的中してしまったのか。

資源を諦めるのは今後を考えると好ましくはないが、余計な被害を被るよりは――。

「いえ、この惑星にはいままで見たこともない変わった組成の金属資源が埋蔵されているようです！ おそらく主星に近く、惑星表面が非常に高温なことが要因で形成された可能性があります！」

報告を受けてユリカ含め第一艦橋のクルーは「ああ、だからそんなに興奮したのか」と納得すると同時に、人騒がせな報告に自然と視線が険しくなる。

その視線にわれに返った真田は、コホンと咳払いをして続けた。

「つと、失礼しました……回収して調べてみないことにはどのような特性があるのかはわかりませんが、うまく活用できればヤマトの機能を向上させることができるかもしれません」

「それは素晴らしい。――しかしガミラスはそれを知っているのだろうか。もし知っているのなら、ガミラスもこの資源を採掘するために部隊を派遣している可能性があるのでは？ もしかしたら、拠点を備えている可能性も」

最近影が薄い印象のあるゴートが率直な感想を漏らした。

まあ自分と共犯者を除外すれば、ガミラスの母星がどこにあるのか

わからないのだから当然の懸念だろう。

それでも太陽系への侵入方向から、このプロキシマ・ケンタウリがガミラスの予想進路上に存在することは容易に判断できる。

ユリカとしてもゴートの懸念はおそらく的中しているだろうと思う。

「どう思いますか、真田さん？」

「……可能性はあります。しかしその資源があるのは恒星を向いた面です。あの第一惑星は潮汐力の影響もあって、自転と公転が同期して常に同じ面を恒星に向けています。ちょうど地球の月を想像して頂けるとわかり易いかと。そちら側は表面温度が一五〇〇度を超えていますし、主星が閃光星であることも影響して不安定な環境にあります。ガミラスの技術力に関しては詳細がわかりませんが、仮に採掘しているとしてもこの環境下に施設を造るのは困難でしょう。――採掘をしているとして、工作船の類で乗り付けて作業するという方法に留まっていると考えられます」

真田の推測に少し悩んだユリカは、

「――ちよつとリスクがあるけど、惑星に降下して資源を採掘しましょう。貴重な資源なら欲しいし、採掘作業の経験ももう少し積んでおきたいしね」

採掘作業の実施を決意した。

今回の大規模修理と補給は、地球の協力でいくぶん楽になったが、それでもヤマトの懐事情は厳しいの一言だ。もしガミラスが採掘したのなら、その跡を使わせてもらえば作業は迅速に済むだろう。

おそらくヤマトが経由するのを見越して罫を張っているはずだ。

太陽系から最も近い恒星系ともなれば、恒星間航行のテスト地点として都合がいいのは考えればすぐにわかる。

ガミラスが見落とすとは思えない。連中はそんなに甘くない。

艦隊戦を挑まれる可能性は低いと思う。ならばトラップの類が濃厚だが……。

「ルリちゃん、ハーリー君。センサーの探査範囲におかしな動きってある？」

「いまのところ不審な動きは見られません。ただ星の影をうまく使われると、レーダーでは捕捉できないと思われれます」

「こちらもです。タキオンスキヤナーを使って周辺を探查してみましたが、不審な動きは見られませんでした。引き続き探查活動を続けま
す」

ルリとハリが各々報告する。ヤマトの目と耳であるセンサー類を扱う立場にあるだけに、回答も慎重なものだった。

ヤマトのセンサーシステムは恒星間航行を可能とする宇宙船としては十分過ぎる性能を有しているが、どうしてもガミラスのものには劣っていると、ユリカは考えている。

ヤマトが搭載しているタキオンスキヤナーやコスモレーダーは、数千光年もの距離を跳躍するワープシステムのために開発された、タキオン波を使用した超長距離探查システムだ。

ワープ航路の選定に不可欠な天体の位置情報——つまり重力場の情報を取得するために使われ、タキオン波による探查であつても生じてしまう距離による情報の時差を修正するシステムとセットになつて初めて機能する（それでも見落としが生じることがあるため、ワープシステムにはワープ航路上に『障害物』を検知すると自動で『停止』する安全装置が組み込まれている）。

だが地球人はそのシステムの扱いに慣れていない。どうあがいても経験値の分だけガミラスには負ける。

それに連中は宇宙での戦に慣れている。おそらく事前に罠を回避することは、難しいだろう。

「じゃあこのまま行きましょう。仮に罠が張られていたとしても、それを喰い破つて突き進むのがヤマトです。真田さん、現宙域で戦闘になった場合、艦への影響はありますか？」

ユリカの質問に真田は即答した。

「ヤマトは問題ありません。熱と放射線は強烈ですが、ヤマトの装甲なら十分に耐えられる熱量ですし、強力な放射線シールドに除去装置も用意されています。デイストーションフィールドもありますから、仮に赤色超巨星に接近したとしても、極短時間なら持ちこたえられる

はずです。ただ、ミサイルは自爆の危険があるため使用は控えるべきだと具申します。信濃も厳しいですね。艦体は耐えられても、波動エネルギー弾道弾がもたないでしょうし」

「なら、艦載機はどうなりますか？」

今度は進から質問が飛んだ。

「ダブルエックスなら耐えられるだろう。……それ以外の機体はなんとか活動はできるが戦闘は少々厳しいだろうな。恒星が近いし、保護のためにフィールドを最高強度で保ち続けるくらいしないと、熱で機体がやられてしまうだろう。ダブルエックスはヤマトと同じ構造材で造られているし、ヤマト艦載が前提で開発された唯一の機体だ。当然ヤマトと同じく極限環境での運用も視野に入っている。放射線対策も万全だから、仮にフィールドを喪失してもパイロットがすぐにやられることはない。ただ、戦場が惑星の裏側なら放射線も熱も遮られるから、アルストロメリアでも問題なく戦える」

「わかりました。ではダブルエックスはGファルコン装備で格納庫で発進準備をさせて、いざというときは出撃してもらいましょう。艦長、よろしいですか？」

進の提案にユリカは頷く。

ダブルエックスの威力はすでに証明されている。状況的にサテライトキャノンの使用は厳しくとも、この機体が戦えるだけでも戦力的にはいく分違う。

——地球で積み込んだほかの機体はまだ完成に至っていない。

エアマスターとレオパルドはまだフレームのみで完成度は三割、エックスも結局先の二機の開発とギリギリまで搭載を試みた単装型サテライトキャノンに足を引っ張られて、デイバイダー仕様で組み立て途中にあり、完成までもう少しかかる。

投入できるのは、もう少し先になる。

「古代、武装の選択には十分に注意してくれ。恒星風の影響をもちに受ける場所での戦いの場合、ビーム砲の類では影響を受けて射程距離の減退や砲撃の屈曲が起こる可能性がある。実体弾もミサイルと同じ理由で使用が制限される可能性がある。——惑星の影ならその限

りではないが、グラビティブラスト以外はあまりあてにできんぞ」
「わかりました」

マイクを掴んで真田のアドバイスをもとに準備を進めさせる進。いまでできることはこれくらいだろう。

ヤマトは慎重にプロキシマ・ケンタウリ第一惑星に接近し、改めて惑星表面の探査を行う。目当ての資源の採掘ポイントを探ると同時に、ガミラスの痕跡の有無を探る必要ためだ。

大気はないが、安定性を高めるために安定翼を開いた姿でヤマトは第一惑星の引力圏に侵入した。高空を飛行しながら探査装置を全開にする。

ガミラスが採掘したらしい痕跡は、いまのところ見当たらない。

資源のある恒星に面した地表は、鉄をも溶かす高熱に晒されマグマのように赤熱化してドロドロになっている。これではちよつとした隠ぺい工作で痕跡を消せてしまうだろう。

それからしばらく探査を続け、ようやく採掘地点を定めた。目的となる鉱脈は恒星に熱せられた表面と裏の境付近にあるようで、ありがたいことに比較的地表に近い位置にあるようだった。

だがそれでも周囲の温度は優に数百度を超え、ヤマトは問題なくとも作業艇や作業員の活動は難しい状況にある。

そこで、煙突ミサイルから改良された防御装備を放出して日傘を作ることにした。

この新装備は反重力感応基の成功と、ガミラスから接收した反射衛星のアイデアを組み合わせることで完成した、待望の自由制御型防御兵装である。

通称『リフレクトデیفエンサー』の誕生であった。

ヤマトが採用している六一センチ空間対艦ミサイルは、従来の魚雷型・ロケット型のままであったが、リフレクトデیفエンサーの配備と共に新型に更新されていた。

中央が太く尾部と先端が細く、尾部には推進ノズルと姿勢制御ノズルの集合体、先端は黒い円筒状で弾頭は交換式。発射後は中央部に装

備された受信アンテナ兼用の安定翼四枚を開き、ヤマトから重力波ビームの受信を受けることで重力波推進を使用した高機動を実現している。もちろん内蔵コンデンサーでも飛翔できる構造で、その出力を活かしたアンチフィールド機能も有していた。

そして肝となるのは弾頭の交換機能である。

先端部分は換装可能な造りになっていて、通常の対艦弾頭と今回の新装備リフレクトディフェンサーを交換して使用できるようになっている。

リフレクトディフェンサーは発射後先端を花卉のように開放して、ディストーションフィールドを展開。反重力感応基が生み出すアステロイドリングと似たような動作で敵の攻撃を弾くことで防御する。

オリジナルの反射板と同等の反射フィールドはこのサイズでは再現できなかったが、元来空間歪曲で攻撃を『逸らす』ディストーションフィールドでもある程度の代用ができた。

反重力感応基と異なり使用できる局面が多いのも特徴である。

リフレクトディフェンサーはヤマトの頭上ですぐに弾頭のフィールド発生器を展開、強力なディストーションフィールドをヤマトの頭上に展開して日光を遮る。

周囲の温度に変化が表れた。だが日傘だけでは足りない。地表の温度が下がるまでかなりの時間がかかってしまう。

そこで出番となったのがすっかりお馴染みのダブルエックス。

手早く地表をビームと重力波で砕いて目当ての金属資源を見つけ出す。

高温環境下にあるためか、鉱石ではなく溶け固まった金属の状態で見えられ、精錬の手間がいくらか省けそうだと喜ばれた。

「――土木作業、板についたな」

アキトは誰に向かってというわけでもなく独り言ちた。

アルストロメリアでも活動可能な程度の温度にまでは下がっているが、やはりダブルエックスのほうがパワーも耐久力も上である。とするとこのまま作業を手伝うべきかどうかを問わねばなるまい。

さっそく通信機に向かつて問うと、すぐにユリカから返事があつた。

「アキトご苦勞さま！ ダブルエックスは戦闘待機だから戻っていいよ。そしたらパイロット室で待機してて」

「了解」

アキトはすぐに機体を翻して、採掘作業に従事すべく出撃したアルストロメリアとすれ違ってヤマトに帰艦する。

機体を駐機スペースに戻し、再出撃に備えてカタパルトへの接続に使用されるロボットアームに固定する。もちろんGフアルコンと収納形態で合体してからだ。

Gフアルコンのコンテナの下部ハッチ両脇には四ヶ所のハードポイントが装備されていて、ロボットアームは四つに分かれた先端をそこに差し込むようにして接続する。

機体はアームに支えられたまま宙に浮いて固定された。これでアキトがコックピットに乗り込み次第すぐにもカタパルトに接続され出撃可能になったというわけだ。

コントロールユニットは接続したままスタンバイ状態に設定、アキトは機体に異常がないことを確認してからコックピットハッチを開放。ハッチの裏に備えられた昇降用ワイヤーの端にある足掛けに右足を乗せ、左足でスイッチを操作して立ち乗りの姿勢で床に降り立つ。

「お疲れアキト。適当に体を休めながら待機してくれ。——これ、ハーリーのやつから預かってるこの周辺の地形と環境のデータな」

リョーコはパイロット待機室に入ってきたアキトにそう声を掛けて、ブリーフィング用のモニターにデータを映した。

「ありがとうリョーコちゃん。すっかり目を通しておくよ」

アキトは一番前の席にどかかと腰を下ろすと、モニターに表示される地形データと周辺環境のデータにしつかりと目を通す。

——やはりこの星の上で戦うのは避けたいな。

アキトは率直な感想を思い浮かべる。

高温なのもそうだが、万が一地表に叩き落されるとマグマ同然の地

表に埋まってしまうかもしれない。

この状況下でまともに使える武器は、拡散グラビティブラストくらいだろうが、冷却システムのキャパシティを考えると普段の感覚では使えない。ビーム兵器は論外。恒星風で散らされてしまう。

(……ハンマー、あまり使いたくはないんだけどな)

この状況ではむしろ有効だろうと思うが、対空戦闘になったら役に立たない。

アキトはできるだけ惑星の陰で戦いたいと、真剣に思っていた。

それからしばらくは黙々と採掘作業が続いた。

作業に駆り出されたヒカルやイズミ、サブロウタも工作班の指示に従って資源を運んだり掘り起こしたりと、人型ロボットのパワーと器用さ、特にIFSの柔軟性を存分に活かして手際よく進めていく。

いつこのような作業に駆り出されても大丈夫なようにと、工作班に出向いて講習を受けているだけあって、経験値が高くない割に作業は淀みなかった。

人員の補充が効かず、自前でやりくりしなければならぬヤマトの厳しい事情が如実に反映されている場面と言えよう。

そういつた苦労を経て採掘された未知の金属資源は、そのまま艦内工場区の機械工作室に運び込まれ、真田とイネスの手によって解析された。

「艦長、例の金属資源の解析が終了しました!」

「早いですね。結果はどうでした?」

採取してまだ一時間程度しか経っていないのにもう解析できたのか。

雪が気を利かせて持ってきてくれた栄養ドリンクをストローでチューつと吸いながら、結果を聞くユリカ。

食の娯楽が乏しいので、すっかり栄養ドリンクがジュース替わり。

……なんかかわびしい。アキトのご飯が食べたい。

「この金属は単体ではあまり役に立たないのですが、チタン系の素材とコスモナイトで合金化すると、耐熱性を大幅に引き上げられること

が判明しました。ヤマトの装甲に反映するには時間と労力が足りませんが、エンジンやスラスタ、武装など耐熱性が求められる部分の部品をこの素材で作って置き換えることで耐久性や信頼性の向上が図れます。特に波動砲やワープ機関、長時間の使用が想定されるパルブラストやデイストーションフィールド発生機には、率先して改良を加える価値があると断言できます」

真田の報告に進とラピスは「おおく」と驚きながらも思わず拍手。ただでさえ問題児のエンジンと波動砲が改善を果たせるのなら、作業に伴う多少の時間ロスも惜しくないと感じてしまう。

それに主砲や副砲は発射サイクルの関係でそれほど深刻ではないが、弾幕形勢が役割であるパルブラストは、冥王星での戦いで冷却が追い付かない場面があった。それを考えると、可能であれば改修したいところだ。

「作業にはどれくらいかかりますか？」

「採取と並行して部品の製造と置き換えですから、そうですね……エンジンだけなら一日貰えればなんとかなります。それ以外の部位は、航行しながら作業するしかないでしょう。あまりここで足止めを食らうと、ただでさえ遅れている航行スケジュールへの影響が懸念されます」

真田の提案を受けて視線で大介に問うユリカ。その意味を汲み取った大介は、

「真田さんの言うとおりです。一日くらいならともかく、一気に改修を進めて二日も三日も足止めされると、航行スケジュールの修正が効かなくなります。ただでさえ当初の予定から一五日以上も遅れているのです。ただ、ワープの信頼性を高めるためにもエンジンの改修は必要でしょう。その程度の時間なら、航海班の名に懸けて必ず取り返してみせます」

大介の意見にユリカはうんうんと頷き、「じゃあ作業しましょう。エンジンの補強は大事ですし」と改修作業を許可する。

一応カイパーベルト内でも再調整はしているが、複合大炉心と化したエンジンの動作には常に不安が残っている。あれ以来不具合を起

こしてないが、もっぱら波動砲のせいであらう不安が残っているのだし、思い切って作業してしまってもいいだろう。

交換する部位もエンジンの中核ではなく周辺機器に等しいので、作業も艦内から行える範囲で収まっているのだから、万が一の時は補助エンジンで航行すれば移動も可能だ。

もっと大規模な作業の場合は——メインノズルごとエンジンを抜き出して分解しなければならぬだろうが、できればそのような機会には恵まれないでほしいと、切に願った。

工作班と航空科は、交代しながら資源の採掘と運搬、部品の製造と置き換え作業を続ける。エンジン関係だけあつて機関班も総動員しての作業となつた。

制作に必要なコスモナイトは、カイパーベルトでの長期修理中に再度採掘された品が使われている。

取り外した部品は工場区に運び込まれ、解体後に再び資源化されて予備部品に早変わりする。いろいろと懐の寂しいヤマトだ。壊れた部品や交換した消耗品であつてもまた使えるようにでもしなければ立ち行かないのが実情であつた。

そういう意味では規模こそ小さいが、資源の加工から複雑な部品まで製造可能なヤマトの艦内工場は、まさに航海の生命線と言え、航行に不可欠なエンジンと並んでヤマトの心臓部のひとつと言えた。

この区画を守るため、ヤマトは艦底部への武装増設すらも諦めて重厚な装甲を採用することを継続したほどである。

それから作業は順調に進み、真田の言葉どおり一日でエネルギー伝導管とコンデンサーの交換作業を終了し、テスト結果も良好であつた。

短くも密度の濃い時間を過ごしたためか、思ったよりも経験値が蓄えられていたらしく、部品の製造も取り換え作業も、前回よりも格段に早く済み、そこそこの時間をかけて再調整することができた。

あとは飛びながらも調整できる範疇にある。

武装や推進装置の部品も作り始めているので、少しずつ交換していけばヤマトの信頼性が格段に向上することだろう。

また今回の採掘作業は思わぬ成果ももたらしていた。

真田によれば、高熱に晒され続けたゆえに変質した構造の解析ができたそうで、ヤマトの工場区でも少々難易度が高いが、類似した金属を精錬できるようになるというのだ。

つまり今後も改良した部品の製造は一応可能ということになり、採取した金属が尽きたあとでも性能が逆戻りすることは避けられるらしい。

本物には若干及ばないらしいが類似品が作れるというだけで上々の成果と言えよう。

作業を終えたヤマトは重力圏を離脱すべく惑星の裏側に回り込むようにして飛行していた。イスカandalへの航路に復帰するにはそちらの方角が正しいからである。

そうして星の裏側から引力圏を離脱した直後だった。

ルリが異変に気付いた。ヤマトの惑星間航行用計器が障害物を検知していることに。

リーダーにはなにも映っていないので誤作動を疑ったが、念のために制動を掛けてヤマトを停止させることを進言した。

大介は念のためとルリの要求を承諾し、ヤマトを軌道上に停止させるべく逆噴射のスイッチを入れる。

電算室に移動して改めて情報解析を行った結果が表示されると同時にルリがさらなる警告を発し、大介は緊急制動スイッチに切り替えて回避しようとしたが、遅かった。

ヤマトはガミラスが設置した宇宙機雷の群れの中に突入してしまっていたのだ。

すぐに逆進で抜け出そうとするが、機雷が動いている。これでは迂闊に動けない。機雷に接触したら、連鎖爆発を起こしてしまうだろう。

「なるほど。やっぱりこの星の存在を知っていて、ヤマトが補給に立ち寄ることを想定して罫を張ってたのか。艦隊戦をしたくないから機雷でドカン、か……」

世の中そう甘くないね、と真剣そのものなユリカの言葉にヤマトは緊張に包まれる。

「艦長！ 前方から航空機多数！ ガミラスの戦闘機と爆撃機の編隊です！」

電算室から発せられたルリの絶叫に、事態はますます悪くなる。ヤマトの火砲での迎撃は不可能だった。

その中、ユリカは焦りを表に出すことなく静かに指示を発した

「進、コスモタイガー隊出撃よ。敵航空部隊を迎撃」

「了解！ コスモタイガー隊緊急発進だ！」

進も動じず答えた。

「さて、ガミラス自慢の罠を喰い破りましょうか！」

艦内に戦闘配備を告げる警報が鳴り響いた。

戦闘開始を告げるゴングが鳴り響いた。

ガミラスの巧妙な罠に囚われたヤマト。

だが屈するな、そして旅路を急ぐのだ！

地球は刻々と最後の日に近づきつつある。

ヤマトよ、君が戻る日はいつか。

人類絶滅と言われる日まで、

あと、三二七日。

第十一話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十二話 機雷網と灼熱の星を越えろ！

試されるは強き想い。

第十二話 機雷網と灼熱の星を超えろ！ Aパート

ヤマトがプロキシマ・ケンタウリ星系第一惑星に降下したことを確認したガミラスは、すぐにヤマト撃滅を目的とした作戦を展開していた。

プロキシマ・ケンタウリが有する三番目の星である褐色矮星に潜んでいた工作部隊の艦艇が、ヤマトに発見されぬよう密やかに行動を開始する。

幸いと言うべきか、ヤマトはたびたび周辺探査に使用しているプローブをこの星には使用しなかった。また好都合なことにあまり接近もせず、われわれを見逃した。

資源を得られない恒星のなりそこない——褐色矮星。

このような星にわれわれが拠点を造ることはないだろうとタカを括ったのだろうが、それが過ちであったと思ひ知ることになるだろう。

偉大なデスラー総統の名を賜った新型宇宙機雷を満載した大型輸送艦が、偽装解除して褐色矮星の影から姿を現し、そのまま静かに第一惑星に向けて航行を開始。

ヤマトはすでに惑星の地表付近に降下している。降下に加えてプロキシマ・ケンタウリの煌々と降り注ぐ光によって、頭上への監視が損なわれているだろう。

現に惑星の反対側から慎重に接近した工作艦隊に、ヤマトはまったく気付かなかった。

工作艦は第一惑星の軌道上に到達すると、巨大なカーゴスペースをすべて開放、中から大量のデスラー機雷をばら撒き始める。

数千、万に届こうかというすさまじい数の機雷の中で、たったひとつだけ異なる物体が混じっていた。

形状こそ酷似しているが、一回りサイズが大きく、球体から飛び出している突起の数も倍以上、色も総統の名に恥じぬようにと高貴な蒼を使用しているほかの機雷と違って血のような暗い赤色をしている。

——コントロール機雷だ。

これ自体は接触しても爆発しない、機雷としての機能を持たないものだ。だが代わりに散布した大量の機雷の動きを一括でコントロールする、言わば司令塔の役割を担っている。

このコントロール機雷は、ヤマトが機雷原に突入するまで機雷の信管を意図的にオフにし、ヤマトが網にかかってから信管を作動させながら素早く退路を断ち、少しづつ確実に機雷同士の間隔を狭めて一斉に起爆させるようにプログラムされている。

驚異的な耐久力を誇るヤマトを確実に葬るための措置だ。機雷の動きが緩やかに設定されているのは、ヤマトが機雷網から脱しようとして動くように仕向け、より深く絡めとるためらしい。

デスラー総統の発案だった。

ステルス塗装をされた機雷はヤマトのレーダーではよほど近距離にならないければ捉えられないだろう。冥王星での戦いのデータから推測したのだから、間違いはない。

ガミラスの技術の粋を集めて生み出されたこのデスラー機雷を切り抜ける道はない。

仮にコントロール機雷を無力化したとしても、個々の機雷は自動的に信管をオンにしてその場で留まるようにプログラムされている。解体できた頃には包囲網は完成し、大型の宇宙艦艇であるヤマトは逃げ出す隙間もないだろう。

ワープもボソソジャンプは封じたも同じ。使用の兆候が見られれば即座に起爆して機雷網全体が吹き飛ぶ。ヤマトとて耐えられないだろう。

人型機動兵器での撤去も考慮して、コントロール停止後はそちらにも反応するよう別の信管も作動するよう設定されていた。

——網にかかった時点でヤマトは逃げ出す術を失っているのだ。ガミラスの科学力は地球のそれを遥かに凌駕している。外部からの助力を得たとはいえ、根本的な技術力の差を覆せはしない。

たとえ常識を遥かに覆す強力無比で非常識の塊としか言えない宇宙戦艦であつても、例外ではない。

工作部隊の隊長は機雷の敷設作業に成功し、ヤマトがその中に飛び込んだ時点で勝利を確信していた。

あとはヤマトが吹き飛んだことを確認してから、総統に成功の報告を告げるだけでいい。

そうすれば、いまは凍り付いているあの青々と美しい地球は、第二のガミラス本星となる。

——われわれは、生き延びられるのだ。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十二話 機雷網と灼熱の星を越えろ！

「艦長。この機雷は前の超大型ミサイル同様、コスモレーダーには映らないステルス塗装を施されていたようです。惑星間航行用の安全装置が反応しなかったら、機雷に突っ込んで起爆させてしまっていたかもしれません」

電算室で部下のオペレーターと共に機雷の解析作業を続けるルリはそう報告した。

……こんなことになるのなら、探査プローブを軌道上に配置しておけばよかったと後悔の念に駆られる。

いや、ガミラスが上手だったのだ。

この環境下では探査プローブを残したところで、恒星から降り注ぐ熱と光であつという間にダメになってしまっていただろう。

(それに採掘作業のために日陰を造って上空への監視が甘くなることすら想定していたかもしれない……外宇宙での経験値の差が出た、ということでしょうか——?)

やはり油断ならない相手だ。

広大な宇宙空間で単独航海するヤマトにトラップを仕掛けるのは難しい。

その目的地が割れているとしても、どの航路をどのように航行するのかを正確に予測する事は不可能に近いからだ。

だが極力最短距離を進みたいというこちらの心情を読み、かつその

航路上にあるめぼしい資源を有する惑星や、どうしても抜ける必要がある宙域に目星をつけて罫を張るのなら、話は別だろう。

冥王星での戦いによる消耗は、ボソンジャンプを駆使すれば地球から少しくらいの支援を受けられると判断できるかもしれないが、単独航海ともなれば常に資源に飢えているという判断を覆すには、いささか旅の序盤過ぎた。

そして波動エンジンが実現する超空間航法——ワープの技術と経験が未熟な地球人が、最初の目的地として最寄りの恒星系を選んでテストをすることも、考えてみれば予測できないほうが難しい。

だから警戒していたつもりだったが——今回はガミラスの掌の上でまんまと踊らされてしまった。

ルリは悔しさに唇を噛んだ。

「ユリカ、接近中の航空部隊に対処しないと。ヤマトが機雷に接触しなくても、敵の攻撃で起爆されたら一巻の終わりだ！」

ユリカはジュンからの進言に大きく頷いた。

自分よりも経験値で勝っているだけのことはある。その対応の早さと肝の座りようは、ナデシコ時代の彼にはなかったものだろう。

「コスモタイガー隊の出撃準備が完了しました！ いつでもいけます！」

進からの報告を受けてユリカは両手をコンソールに付けて立ち上が——ろうとして失敗しつつも声を張り上げた。

「すぐに出撃させて！——進はヤマトに残って。もしかしたら、機雷の対処に出てもらうかもしれないから。それと……サテライトキャノンの使用許可をアキトに。余波は心配だけど、あの機体の速力なら余波を考慮しなくて済む地点まで早急に飛び出せるはずだから」

「了解！」

進はすぐにコスモタイガー隊に出撃を指示した。——彼もだいぶ肝が据わってきた。それでこそ自分の後継者だ。

「……真田さん、この機雷網からの脱出は可能だと思いますか？」

「——難しいと思います。機雷の動きから推測すると、機雷全体の動

きをコントロールする中央制御装置があるはずです。しかし周辺に艦艇の反応がなく、接近中の部隊が大規模コンピューターを搭載できない航空隊であることを考慮すると、おそらく機雷群の中にコントロール機雷のようなものが紛れているのでしよう。それを止めない限り、機雷はやがて隙間なくヤマトを囲い込み、一斉に起爆してヤマトを吹き飛ばしてしまうでしょう」

真田は淀みなく回答する。

「艦長、機雷の突起から電磁波が放出されているのを確認した。あまり遠くまでは飛んでいないが、これも信管の一種と考えていいだろう。——それにこれまでの交戦経験を考えると、ワープやボソンジャンプで逃げようとするとその兆候を察知して起爆する仕掛けを施していると考えてもいいはずだ。機雷を撤去して道を広げない限り、脱出はできないと判断する」

真田と協力して機雷の分析に当たっていたゴートが補足してくれた。

砲術補佐席は兵器関連のデータが敵味方問わず豊富に収められているし、ゴート自身も従軍経験のある腕利きだ。

その判断は間違っていないだろう。

「なるほど……まず最初にすべきはコントロール機雷の無力化か。——ルリさん、分析できますか？」

進の要望にルリは少しだけ沈黙したあと、

「——それらしい物体を発見しました。ヤマト前方仰角五度方向、右四二度方向に異常電波あり。機雷の信管として機能しているものは周波数が違います。間違いなくコントロール電波の一種です」

さすがルリちゃん仕事が早い。

進は手短かに礼を述べるとすぐにユリカに、

「艦長。俺が行きます。真田工作班長とウリバタケさんを連れてコントロール機雷に接触し、これを無力化したいと考えます」

頼もしい言葉にユリカは即座に許可を出した。止める理由も躊躇している時間もない。

「許可します。アルストロメリアとGファルコンで向かって。大型の

作業機械が必要になるかもしれないから」

「了解」と進と真田がウリバタケに連絡を入れつつ格納庫に全力疾走を開始した。

ほぼ同時刻、事前に発進準備を整えていたコスモタイガー隊が次々と格納庫から飛び出して、敵航空部隊を迎え撃つべく進路を機雷網の外に向けた。

ここは惑星の陰で恒星風の影響を受けにくい。ここなら心置きなく戦えるし、ビーム兵器も射程の減少は避けられなくても使用に耐えうる。

火力の低下もなければ後れを取る理由ない。

アルストロメリアを凌ぐ機動力で機雷網を真つ先に飛び出したのは、アキトのGファルコンDXだ。

敵が機雷網に十分に近づく前に接敵し、早急にサテライトキャノンを使用して敵部隊の頭数を減らすのが彼の仕事だ。

機雷網にサテライトキャノンの影響が及んで起爆してしまわないようにするためにも、最速で突破しなければならなかったのである。

(こいつも頻繁に使うことになるとはな……!)

冥王星の戦いから連続して使わなければならないことに良心が痛む。だが流れ弾ですら致命的になりかねないこの状況下で使用を躊躇してはならない。

アキトは痛む良心を黙らせて、発射体勢に移行した機体をヤマトに振り向かせた。

——今回は機体を重くしなくなかったのでエネルギーパックを外している。だからサテライトキャノン撃つにはヤマトからエネルギーを供給して貰う必要があるのだ。そしてリフレクターの受信は正面側からしかできない構造になっているため、こうして振り返らなければならぬのだ。

ダブルエックスからの信号を受信したヤマトは、専用の重力波ビームをダブルエックスに向けて照射を開始。

指向性が極めて強く大出力なので、アルストロメリアではあつとい

う間にパンクしてしまうほどの代物だ。

重力波ビームを受信したりフレクターの表面パネルが金色に発光し、変換しきれなかった余剰エネルギーが両腕両脚のエネルギーラジエータープレートから放出され、機体全体が高熱フィールドと、タキオンフィールドに包まれる。

受信開始からきっかり一〇秒でチャージを終えると機体を翻し、敵編隊に砲門を向ける。

「ちっ、対処は考案済みか……」

舌打ちしたアキトの視線の先には、散開した敵航空編隊の姿が映し出されていた。

いかにサテライトキャノンと言えど、照射範囲には限度がある。それを見越してのことだろうが……少々、見込みが甘い。

この武器は波動砲ほど『エネルギー制御が洗練されていないのだ』。つまり――

「散開が甘いんだよー」

アキトはサテライトキャノンの反動制御に使われている重力アンカーと姿勢制御スラスターの制御をオートからマニュアルに変更、発射と同時に機体を旋回させた。

砲身から放出され、眼前で一門に収束されたタキオンバースト流が直径二〇〇メートルにも達する円柱状のビームと化し、機体制御によって放出方向がリアルタイムで変更されるに追従して、『ビームが振り回された』。その軌跡に沿って敵部隊の半数以上が光芒に飲まれ、消えていく。

ダブルエックスに装備されたツインサテライトキャノンは完成にこそ至っているが、その実まだまだ未成熟なエネルギー制御で運用されている装備だ。

トランジション波動砲と比較してもエネルギー収束はあまく、無駄に広範囲にエネルギーが広がってしまったている。だから直径二〇〇メートルもの巨大なビームを打ち出しているのだ。

そしてエネルギー量に対して放出口が小さいこともあって、撃ち切るのにも時間がかかる。そのため、こういう無茶なアクションをする

ことで巨大な剣のように扱うこともできる。機体にかかる負荷は大きくなるが、一回程度なら問題にならない程度の耐久力を、ダブルエックスは持っているのだ。

「先制には成功——あとはリョーコちゃんたち次第か」

アキトはクールタイムに突入した機体をGファルコンの出力で制御しながら、追いついてきた仲間たちの健闘を祈った。

コスモタイガー隊はサテライトキャノン発砲直後で無防備になったダブルエックスのすぐ横を次々とすり抜けていく。

予想以上の威力を見せたサテライトキャノンに浮足立った敵編隊。このチャンス逃すわけにはいかない、一気に攻め立てて機雷網に接近させないようにする！

「アキトの一撃を無駄にするな！ 全機攻撃開始！ 間違っても機雷網に向けて発砲するなよ！」

リョーコの檄が飛び、コスモタイガー隊とガミラス航空隊がついに交差。そして——

「リョーコ、こいつら新型みたいだ！ 油断していると足元掬われるよ！」

「うへへ、速いよ〜！」

果敢に攻撃するイズミとヒカルも、いままで相対したことのない新型の動きに戸惑いを隠せない。

戦闘機と爆撃機だと判別はできたが、いままでの全翼機より一段上の強さだった。火力もそうだが機動力でも勝っていて、いままでの戦闘リズムでは対処できないのだ。

戦闘機と思しき機体は緑色を基調としていて、機首が横に膨らみ機体後方に主翼のある姿は、地球でエンテ型と呼ばれる戦闘機に似ている印象を受ける。機首に従来機にも見られた高収束タイプのビーム機関砲を主翼と機首に内蔵し、翼下に対空ミサイルを左右四発ずつ吊るしている。

爆撃機と思しき機体は紫色を基調とし、機首左右に小型八連装ミサイルランチャーを搭載し、中翼配置の逆ガルウイングの翼下にも大型爆弾と対艦ミサイルらしい装備が多数吊るされている。ガミラスの

科学力を考慮すれば相当な大火力だろう。

間違いない、ヤマトを標的として調整された新型だと判断できる。「くそつ、アルストロメリアが改良されてなかったらやばかったぜ……！」

コックピットの中でリョーゴが毒づく。

真田たちの判断は正しかった。エッジワース・カイパーベルト内で地球と共同で行われた改修によってパワーアップしたアルストロメリアは、この予想外の新型に対して互角の戦いを演じられるほどの性能を獲得していたのである。

改修後初めての実戦に加え、相手が新型であったことから戦闘リズムが狂って面食らうことにはなったが、機体性能は不足ない、十分に食いついていけることが実感できた。

リョーゴは右手に握ったラピッドライフルを発射、回避されるがすかさず狙いを着けなおし、新装備の腕部内蔵型ビームライフルを発射する。

腕の武装ユニットから放たれたビームは狙い変わらず敵戦闘機の左翼に命中。ダブルエックスのライフルのように一撃で吹き飛ばすには出力不足であったようだが、十分な手傷を負わせることには成功している。

続けて左肩に追加装備しておいたハイパーバズーカをサブアームを介して左手に握らせて速やかに発射、動きの鈍った敵戦闘機にとどめを刺す。

「いけるぜ……！ 真田とウリバタケの仕事は確かだ！」

「同感！ 腕前じゃあこっちゃだつて負けてないよ！」

隣のイズミ機がレールカノンを撃ちかけつつ拡散グラビティブラストも活用して攻勢にでた。

「そうそう、地道に改良を重ねて強くなっていくのだから、ロボットもののテンプレートにして偉大なるお約束なんだから！」

ヒカル機は脚部追加スラスターを展開して瞬間的に全力噴射、敵機の攻撃を錐もみに回避しつつ、右肩に備えたロケット砲から砲弾を撃ち放ち、Gフアルコンからもミサイルを発射、敵機の回避行動に合わ

せてライフルを撃ちかけていた。

地道な強化を繰り返したコスモタイガー隊は数で勝るガミラス航空隊と一進一退、まったく互角の戦闘を繰り返していた。

機雷網に一発の流れ弾を出すまいとするが故に行動が制限されていたが、そんな不利を感じさせない勇猛さで迎え撃つ。ガミラスの航空隊も機雷網に向かう余裕を見出せないのか、コスモタイガー隊が釘付けにできている。

——そこに機体の冷却を終えて戦闘可能になったGファルコンDXが、収納形態の姿で追い付いた。

「おまたせ！ 戦線に復帰する！」

新型相手に善戦している仲間たちに加勢すべく、アキトはダブルエックスを操った。

この中で最も脅威と認められているGファルコンDXの突撃に、ガミラス航空部隊は優先して戦力を割こうとしている様子だったが、コスモタイガー隊の仲間たちがそれを許さない。

「やるぞー！ ダブルエックス！」

敵陣に突っ込むと同時に機体を翻し、人型の展開形態に姿を変えたGファルコンDXは、右手に携えたエステバリスの大型レールカノンと左手の専用バスターライフルを腰だめに構えて連射、そこにGファルコンのAパーツの大型ビーム機関砲、Bパーツのミサイルと拡散グラビティプラストを合わせて弾幕を形成する。

——やはりそうだ。敵新型機は恐るべき性能を有していたが、GファルコンDXの性能は圧倒的に優勢であることが伺える。

敵は基礎技術力で勝つていえるとはいえ、慢心がある。ユリカから聞いた話では、ガミラスにとって人型機動兵器というのは過去の産物でお遊びに近いものらしい。それに加えて開戦当初の圧倒的優位から来る印象が加われば、そう簡単には意識を変えられないだろう。

それにあの新型機。おそらくヤマトが思った以上に手強いと判断したからこそ投入してきたのだろうが、その運用思想に、仮想標的に、十分な性能を持った人型機動兵器というものは含まれていないのだろう。だから付け入る隙がある。

（イスカンダルのおかげで生まれたこの『ガンダムダブルエックス』は、星間戦争の舞台でも戦えるだけのスペックがあるんだ！）

アキトはGファルコンDXのスペックを活かして敵陣に喰い込み、その圧倒的な戦闘力で一気に戦局をコスモタイガー隊優位に傾けた。

Gファルコンの兵装は高速戦闘時の命中精度と威力を両立すべく搭載された大口徑ビーム機関砲と拡散グラビティブラスト。ビーム機関砲での牽制から繋げられる重力波の散弾のコンビネーションは、宇宙戦闘機でも対応し辛いだろう。それに加え距離の近い敵には左手に握ったビームジャベリンのリーチを活かして突き刺し、切り裂く。

瞬く間に五機を撃墜せしめたGファルコンDXは、振り向きざまに背後から奇襲しようとした敵機に対応すべく頭部を巡らせた。

「――余計だったかな？」

「いや、そんなことはないさ」

アキトが対処しようとした敵機は、月臣のアルストロメリアが爪を突き立てて始末していた。

二本に減った爪で敵機のフィールドと装甲を貫き、密着状態で内蔵型ビームライフルを撃ち放って撃墜。なかなか容赦のない攻撃だった。

並び立った二機目掛けて爆撃機がミサイルを放つ。散開して回避しつつ、アキトは敵の頭を押さえるべくコンソールを操作して武装の設定を変更し、右操縦桿のトリガーを引く。

Gファルコン両翼の拡散グラビティブラストから、散弾の雨が放たれた。アキトは機体を旋回させながら散弾の雨を敵編隊に浴びせかける。

通常拡散グラビティブラストは、ショットガンのように数発の散弾を一回放出するだけ発射方式を採用している。エネルギー効率の問題だ。だがダブルエックスと合体した場合は出力に余裕があることに目を付けたウリバタケが、作業の片手間にダブルエックスと合体する機体のみ、新たに拡散放射モードを設定し、試験運用していたのだ。

エネルギー消費は相応に激しいが、より効率的かつ持続的に面制圧が望める利点は大きかった。

事実ほとんど狙いを付けない威嚇射撃に近いにも関わらず、命中したら即撃墜の攻撃に回避に徹さざるえないガミラス航空隊は、その連携を乱しているではないか。

こうなればしめたもの。コスモタイガー隊の怒涛の猛攻が展開され、ガミラス航空隊は瞬く間に追い込まれていった。

——結局今回の戦いは、コスモタイガー隊の完勝と言える結果に終わった。ガミラス戦開始以来の快拳と言える勝利であった。

形勢不利と見た敵機が二〇機ばかり言うこの体で逃げ出していったが、無理してすべて叩き落す必要はなく、見逃すことにした。

こちらにもまったく無傷というわけではない。損傷は全機軽微ではあったが、深追いして傷を増やすのは馬鹿らしいし限りだ。今回は、連中の鼻を明かせたことでよしとしよう。

リョーコは現宙域で警戒することを命じて四方に目を凝らすように促した。増援が来ないとも限らない。

そう指示を受けたアキトは例によってサテライトキャノン用のスコープを起動して、光学観測も交えた長距離探査を実施した。

敵機が逃げていった方向、スコープで観測できるギリギリの距離に甲板を四つも重ねた見慣れぬ空母が三隻（緑、青、紫）存在するのを確認した。

艦の一部が焦げたり溶解しているように見えるのは、もしかしくなくともサテライトキャノンが至近をかすめたのかもしれない。

（——そう言えば、最大射程は約三八万キロにも達するんだったな）

アキトは無自覚に敵の母艦に対しても打撃を与えていたことを知った。ということ——思ったとおり、空母は生き残りの航空隊を回収すると早々にワープで撤退していった。

コスモタイガーが激戦を繰り広げているなか、ヤマトは機雷網の中で少しでも触雷を遅らせるための努力を繰り広げていた。

「微速前進○。五。左前方の機雷の隙間に入り込んで」

「了解。微速前進〇・五」

大介は補助ノズルの推力を絞ってヤマトを低速で前進させる。ユリカの指示どおり、比較的隙間の広い空間にヤマトの巨体を捻じ込んでいくことで、一秒でも触雷を遅らせるべく苦心していた。

ただ前進するだけでなく、艦を一桁単位の数字でロールさせ、数十センチ単位で水平移動、ときには一桁単位、場合によってはコンマ単位で艦を動かしてとにかく機雷の間隙を縫う精密操舵を続ける。

そうやって三〇分近くも大介はヤマトを機雷の脅威から護り続けた。航法補佐席のハリも電算室のルリと協力して、機雷の動きからヤマトが捻じ込める空間を必死に算出してフォローしてくれているからこそ成しえた神業だ。

その情報は艦長席のユリカも受け取っていて、時に完全に大介の技量頼み、針の穴を通すような操舵を指示して、ただでさえ冷や汗で濡れている大介の顔に汗を追加注文する真似をする。

(ちくしょう……！　なんて無茶な操縦をさせるんだ！)

内心愚痴をこぼしながらも、大介はそれに見事に応え続けた。機雷の動きは自爆を避けるためか緩やかだったのも幸いした。

それでも、限界は自ずと迫ってくる。もうこれ以上はヤマトを動かすペースが確保できない。

「島、気を付けろ！　左舷の機雷に接触寸前だ！」

砲術補佐席からも機雷の動きを監視していたゴートの警告に、大介はすぐに艦を右側に倒してギリギリのところまで接触を回避した。――危うかった。

「艦長！　これ以上は限界です！」

思わず挙げた悲鳴にユリカは、

「大介君なら大丈夫！　必ず耐えられるよ！」

丸投げとも取れる声援を持つて応えた。

大介の額に青筋が浮かぶ。だが反論している余裕はない。よそ見もしてられない。ひたすら計器と睨めっこして機雷を躲し続けなければならぬ地獄の時間が続く。

(古代、真田さん、ウリバタケさん、早くしてくれえ〜！)

大介は心の中で撤去作業に向かった三人に泣きついていた。

そんな大介の悲鳴を聞き届けたかどうかは定かでないが、進たちはコスモゼロとそれに合体した複座仕様のGファルコンを駆り、機雷の間隙を駆け抜けながらようやくコントロール機雷を発見することに成功していた。

進は速やかにコスモゼロからGファルコンを分離させ、無線制御での操縦に切り替えつつコントロール機雷に横付けさせて待機させる。

機雷の解体にコスモゼロの力が必要だとするのなら、重心バランスを狂わせるGファルコンは邪魔でしかないので速やかに排除しなければならなかったので、ふたりを届けるついでに排除したのだ。

Gファルコンが無線制御で横付けされたのを確認すると、真田とウリバタケは速やかに行動に移った。

「よしこれだ！ 解体作業を開始するぞ！」

船外作業用の宇宙服に身を包んだ真田とウリバタケが手持ちの工具を確認。――準備よし！ Gファルコンのコックピットから飛び出す。

「ルリ君、解析作業を手伝ってくれ！」

宇宙服の通信機で真田が呼びかけると、ルリはすぐに「了解」と応じる。

要請を受けたルリはIFSボールに置く手を直して気合を入れなおす。

「オモイカネ、コントロール機雷の解析を始めますよ」

ナデシコ時代からの相棒はすぐに応えてくれた。

以前アキトが冥王星基地の兵士から強奪してきた端末機器の解析もあり、理解を深めたいまのふたりなら、この程度の規模の機器ならば解析できるはずだ。

真田が届けてくれる情報を頼りにコントロール機雷を丸裸にしていく。まだシステムを掌握するにはデータ不足であったが、ハードウェアの解析するには足りている。

「——解析終了。結果を転送します」

ルリはやり遂げた。小さな——だが辛酸をなめ続けてきたルリにとっては大きな成果であった。

「よし！ 古代、その突起を外してくれ！」

解析結果を受け取ったウリバタケはすぐに指示を出す。進もすぐに応じて機体をコントロール機雷に取り付かせ、突起を慎重に捻って取り外す。すると本体と繋がったコードがこぼれ出て、進が悲鳴を上げているのを通信越しに聞く。

気持ちはわかる、と思いつつもウリバタケは真田と一緒に開口部から内部に入り込み、解析データを基にハードウェアを次々と解体し、コアモジュールを取り出して機能を停止させる。

「よし！ 解体終了だ！」

変化はすぐに表れた。コントロール機雷からの信号を失った機雷が動きを停止して、信管となる電磁波の放射も止めたのだ。

おそらくコントロール機雷にトラブルが生じた時のためのスタンバイモードになったのだろう。コントロール機雷に全体のコントロールを依存していた機雷なので、機雷同士の接触による暴発などを防ぐため、コントロールを失ったあとはその場に停止して動かないようにと予め設定されていたとみて、間違いはないだろう。

というルリの報告でジユンも胸を撫で下ろした。ヤマトが動かない限り、機雷が爆発することはないだろう。——あとはどうやって撤去するかだ。

「接触信管が解除されているかどうかは確認が取れていませんので、アルストロメリアに撤去させるのはリスクが高いと思われます」

ふむ。ルリの言葉にジユンはコスモタイガー隊に撤去要請を出そうと通信スイッチに伸ばした手を止め、腕組みして悩みだした。さて、ほかになにか効率的で安全な方法は——

「工作班と手の空いてる戦闘班のみなさあくん！ 艦長命令です！すぐに船外作業服を着て『素手で』機雷の撤去作業を始めてくださあ

「いい！」

一切の相談もなく、ユリカは唐突な命令を出した。ジユンもそうだがゴートも目を剥いて反論する

「す、素手でか!？」

「無茶だよユリカ!？」

だがユリカはどこ吹く風と言った感じで涼しい顔をしている。

「え？　宇宙戦艦用に作られた機雷に人間が触れたって起爆しないでしょ？　信管の感度は知らないけど、普通は大型船舶とかと接触して初めて機能するように設定しない？　だって宇宙っていろいろ飛び交ってたりするんだし、人間程度でも反応する感度じゃ、信管入れた瞬間にドカアーンッ！　でしょ？」

……言われてみればそうだった。実際人類が作った機雷や地雷の類も、目的とした対象に合わせて信管の感度を調整するものだ。なんだ、いつもの突飛な発想じゃなくてちゃんと考えてたのか。

「それに、ガミラスって科学技術の凄さを誇ってる節があるし、超原始的な人力作業で撤去することまでは考えてないよ。逆に艦載機で動かすことは——存在を知った時点で対策されてるだろうけど、ね？」

妙に自信ありげなユリカの態度は不思議だが、たしかに地球も科学技術の発展に伴って人力作業を機械に置き換えてきた歴史があり、ヤマト以前の最強の艦であるナデシコですら、それを逆手に取った掌握戦法を行使できるからこそ猛威を振るったのだ。地球以上のガミラスならそのような考えに至っても不思議はないかもしれない。

「なるほど——なら話は早いな。艦長、俺も行って撤去してくる」

ゴートも自ら機雷撤去作業を手伝うべく第一艦橋を飛び出していった。

ヤマトのエアロックや搭乗員ハッチから次々と工作班と、今回まったく出番がなかった砲術科の面々、さらに手の空いている部署から志願したクルーが飛び出して行く。

最初は恐る恐るだったが、人間が接触しても機雷が起爆しないとわかるとすぐにコツと掴み、電算室からの指示に従って順序よく航路上の機雷を取り除いていった。

機雷撤去が進む中、作業の邪魔にならないように迂回しながらコスモタイガー隊が次々と帰還する。

ほとんどの機体が傷を負っていたが、大きな損傷を受けることも脱落者も出すことなく、戦いに勝利して凱旋してくるコスモタイガー隊。

サテライトキャノンで半分吹き飛んだとは言え、八〇機以上の新型機と正面から戦わざるをえなかったのだが、順当にパワーアップを遂げたコスモタイガー隊は数の圧倒的不利を覆す大戦果を挙げて帰還してきた。

まぎれもない、快挙であった。

コスモタイガー隊が帰還してしばらくすると、ゴートから機雷撤去完了の報告が届く。艦長として作業に参加した全員に労いの言葉を贈るユリカ。

なかなかスリリングな戦いであったが、どうやら今回もヤマトが勝ちを拾ったようだ。

ヤマトはクルーが人力で挟み開けた間隙をゆっくりと潜り抜け、ついでに貴重な資料としてコントロール機雷と撃破した敵新型艦載機の残骸（しかもパイロットが投げ出された関係でコックピットも含めて原形を留めた貴重品）をちゃっかり回収しつつ、機雷網から距離を置く。

——そして、

「第三主砲発射！」

「はい！ 第三主砲発射！」

ユリカの号令に、進はそれはもう嬉しそうに応じた。

標的はもちろんさきほどまでヤマトを散々苦しめてくれた宇宙機雷網である。

第三主砲から放たれた重力衝撃波は機雷網に飛び込み、射線上の機雷をいくつも破壊して爆発させる。

当然誘爆、機雷網全体が大爆発する結果となった。

「た〜まや〜！」

「か〜ぎや〜！」

ユリカの言葉に悪ノリしたルリが同調し、その光景を展望室で、あるいはウィンドウを通して目の当たりにしたクルーが拍手を送る光景にユリカもすつきりした気持ちになった。

……ただ、

「あや!？」

思った以上に爆発の規模が大きかったことは誤算だった。被害こそ受けなかったが、爆炎にヤマトの姿が飲み込まれてしまったのである。

(ば、爆発オチってギャグマンガじゃないんだから……! 調子に乗り過ぎた!)

機雷の威力をどこか見くびっていた自分を咎めるユリカ。同時に万が一にもあの機雷網の中いる時に起爆していたら——と考えると、いまさらながら肝が冷える思いであった。

機雷群に囚われてから一幕を漏らさず捉えたガミラスは、予想されてはいたが現実のものになるとは思っていなかった光景に啞然としていた。

いくつものリレー衛星を介して実現している超光速通信よってほぼリアルタイムで中継されたその光景を見届けたデスラーは、静かに口を開いた。

「——タラン」

「は、はい総統」

「近頃物忘れをするようになってね。あの機雷の名前はなんと叫ぶかね?」

「……はっ、総統の名前を賜って、デスラー機雷と……」

本当に申し訳なさそうに告げるタラン。

大ガミラスの指導者であり顔と言わなければならないような真似は、命をもって償わなければ……。

そう口にしたようにしたタランを片手で制して、デスラーは笑みすら浮かべて笑う。

「恐れ入った。まさか宇宙機雷を人間の手で取り除こうとはね……ガミラスの科学の粋を凝らしたデスラー機雷でも、そんな原始的な手段にまでは対策を施していなかった。まったく、野蛮人の素朴な発想には学ばされるじゃないか」

口ではそう言うデスラーだったが、内心ではいまままで以上にヤマトの評価を、その最高責任者であろう艦長の評価を上げていた。

（おそらくなんの考えもなしにあのような手段を取った訳でない。われわれが地球よりも優れた科学力を有し、それを誇っていると見抜いたからこそその選り取った選択。盲点だった。人力などという前時代的な手段のことなどにも考えていなかった）

直観的にミスマル・ユリカの考えを見抜き、ますます笑みを深くする。

程度の低い内紛を起こすような未熟な文明と見下していたが、なかなかどうして、見所のある連中がいるじゃないか。

ガミラスの文明の特徴を、限られた情報から見抜いてぶっつけ本番にも怖気ず行動する胆力。

どのような障害にぶち当たっても知恵と勇気をもって打ち破り、目的を完遂しようとする使命感。

わがガミラスの兵達にも勝るとも劣らない、実に清々しい連中ではないか。

しかし――。

（それだけの知恵と実力持ちながら、なぜ最後にあのような迂闊な真似をしたのだ？ ミスマル・ユリカ……スターシアをも動かした人物にしては迂闊に思えるが……）

脳裏を過るのは爆炎に飲まれたヤマトの姿。

デスラーはてつきりスターシアすらも動かしたミスマル・ユリカという人間はさぞかし人ができていると考えている。それに加えこれほどの戦いを見せるのだから、さぞかし理知的な女性でもあるのだろうと思っっている。

——もしかして、自分の抱いている人物像は間違っているのだろうか。

デスラーは悩んだが、いまはヤマトへの対策を考え実行するときだ。個人的な探求は後回しにして、相当としてみなを率いることが求められている状況だ。

「さて、ヤマトの最期が見られなかったのは残念だが、さつそく次の作戦の準備に入るとしようじゃないか。偉大なわが大ガミラスが、策のひとつやふたつ破られたくらいでどうにかなるものではないと、改めてヤマトに教えてあげようじゃないか」

デスラーの言葉に冷や汗を浮かべながら、将校たちは次の作戦の披露を待っている。最高指導者たるデスラー直々の作戦立案だけあつて、誰も口を挟もうとはしない。

「タラン、ヤマトの現在位置からイスカンドルまでの航路を計算した場合、次の目的地は赤色超巨星のベテルギウスと推測されるんだつたね？」

デスラーの問いにタランはよどみなく答える。

「はい総統。ヤマトはプロキシマ・ケンタウリへのワープで、短距離の恒星間ワープテストを成功させています。となれば、次にヤマトが目論むのは長距離の恒星間ワープテストであることが容易に予想できます。イスカンドルへの航路を考えると、プロキシマ・ケンタウリから約六三八光年ほど離れたベテルギウスだと推測されます。このベテルギウスは赤色超巨星であり、地球の太陽半径の約九五〇〜一〇〇〇倍の大きさを誇り、同時に強力な重力場を有しています。ヤマトのワープ性能の詳細は不明のままですが、仮にわれわれと同等であったとしても、この恒星を航路上に置いては飛び越えられるはずもございません。進路に変更がない限り、ヤマトは必ずベテルギウスでワープアウトします」

断言するタランにデスラーも頷く。ワープ航法は実に繊細だ。ガミラスのように全力であれば数万光年もの距離を一息に跳べるワープであっても、これほどの大物を飛び越えるのは自殺行為だ。

素直に迂回路を設定するか、手前でワープアウトして安全なルートを再計算する必要がある。

「そこで、われわれはこのベテルギウスの周囲に磁力バリアを設置し

た。ヤマトの機関出力が波動炉心六つ分だとしても、このバリアを力尽くで突破することは不可能だ。バリアに接すれば、磁力の影響で計器類も狂ってまともに動けないだろうしね。だが、このバリアはベテルギウスに面した一角だけ意図的に開けられている。そこにヤマトを誘い込む」

デスラーは言葉を区切ってタランに目配せ。頷いたタランがある実験室の様子をモニターに映し出した。

「こちらをご覧ください。これはガミラスの開発局が偶発的に開発した、ガス生命体です」

モニターには時折赤い電を生じる黒色ガスを封じたカプセルの姿が映し出されていた。そのガスに向かって赤いレーザーが放たれると、ガスの総量が急激に増えて活性化するではないか。

続けて金属片がガスに向かって放り込まれる。するとガスに触れた金属片が瞬く間に誘拐するかのごとく分解され、ガスに吸収されていく。そしてまたしてもガスの総量が増加して、活動が活発化していく。

「このガスは物質のエネルギーを吸収して成長する特性があります。このガスを封入した魚雷を、すでに作戦のため待機させているガンツの艦に渡してあります。ヤマトがバリアに接触すれば、付近に忍ばせたミサイルポッドからミサイルが発射され、ヤマトを煽り、運がよければ傷つけることができるでしょう。ミサイル発射を確認次第、ガンツの艦からこのガスを収めた魚雷が発射されます。このガスはより大きなエネルギー源であるヤマトに自ら食らい付いていくでしょう。ヤマトの武装ではこのガス生命体になんの痛痒も与えられない以上、このガスから逃げるためにバリアが開いている唯一の方角——ベテルギウスに自ら向かっていくしかありません。そうすればヤマトはベテルギウスのコロナの中を突き進むことを余儀なくされます」

おおっ、と称賛の声が漏れ聞こえる。だが策はこれで終わりではない。

「仮にガス生命体がベテルギウスに惹かれて飲まれたとしても、追撃するガンツに追い立てられることになる。ベテルギウスのコロナの

中を進めばプロミネンスも障害となる。重力に逆らうために高速で駆け抜けなければならぬヤマトだ。進路を塞がれて避けられない局面に遭遇することもあるだろう……だがタキオン波動収束砲でプロミネンスを吹き飛ばして進路を開こうとしても、ガンツの追撃を受けては無防備にエネルギーを充填できるはずもない。——ヤマトを待つ運命はただひとつ。ベテルギウスに飲まれて燃え尽きるのみ、というわけだ」

自然を上手く利用した奇策に、將軍たちが唖るのが聞こえた。

おそらくほとんどの將校が勝利を確信したのであろう。

だがデスラーは違った。深い笑みを浮かべながら思う。

（さあヤマト、救国の戦士たちよ。私と君たち、どちらの想いの強さが勝るか、勝負しようではないか。……方が一にもこの罫を突破したのであれば、私は君たちに最大限の敬意を表し、私が切れる最高の手札をもって、君たちを推し量ろう。わがガミラスが誇る宇宙の狼——ドメル將軍によって。彼を通して、君たちを見定めさせたもろう。母なる祖国の命運を掛けて）

デスラーはいつしかヤマトのことを認めていた。自分でも気づかないうちに、ヤマトをただの敵・障害物とは見做せないでいるようになったことに、いまさらながら気づかされた。

——ヤマト。母なる星ガミラス。そして気高き隣人イスカンドルをも救う力を持つ、最大の敵。

彼らをどうするかで、ガミラスの命運は決する。デスラーは確かな確信を得ていた。

デスラー機雷の脅威から逃れたヤマトは、次の経由地であるベテルギウスに向けた大ワープの準備を行っていた。

幸運なことにプロキシマ・ケンタウリ第一惑星での活動や、その後の機雷網での攻防を含め、ヤマトもコスモタイガー隊も大きな被害を受けずに済んだ。

まったくの無傷とはいかなかったが、それでも一方的に負けていたガミラスにとうとう互角の戦いを——それも新型機相手に行えたという事実は、コスモタイガー隊のパイロットはもちろん、改修作業を繰り返したウリバタケにとっても喜ばしく、誇らしいことであった。

「まさかここまでやれるとは——感慨深いですね、ウリバタケさん」
改良の成果を直に見たいと第一艦橋から足を運んだ真田が、整備作業を指揮するウリバタケにそう声を掛けた。

「……だな。ようやくとダブルエックス以外の連中も対等に渡り合えるまでになったか……改修内容には自信があったけどよ、こうやって実際に目の当たりにすると、頑張つてよかったって思えるよな、真田」
ウリバタケも感慨深そうに帰還したアルストロメリアを眺める。

二六機もの巨人たちは細かな傷をあちこちに作っていたが、五体満足、大けがもなく帰ってきた。資料映像で見た、惨敗して碌に帰つてこれない、帰つてきてもズタボロであったかつてのエステバリスたちとは真逆の雄姿に——そして自分たちの努力の成果として、生きて帰ってきたパイロットたちの姿に涙がにじむ思いであった。

「——ええ。ですが、喜んでばかりもいません。イタチごっこにはなりません、こちらの戦力強化を向こうが知った以上、さらなる対策を考案していかなければ——」

真田の言葉にウリバタケも頷く。しかし——

「——前に観た大昔の特撮のセリフにこんなのがあったな。『それは血を吐きながら続ける、悲しいマラソン』だって。超兵器を含めた兵器開発の競争に対する皮肉だったが、まさか自分がその渦中に身を投じることになるたあなあ。——艦長の波動砲に対する考えも含めて、やるせない気分になってくるぜ」

つい吐露してしまった言葉に真田も静かに、そして強く頷く。

結果的に自ら関わった兵器開発とその整備。避けようがない競争の歴史。

物事の進展には欠かせない競争。

いまはただ、虚しさを感じた。

「——さて、暗くなつてもなにも進展しやしねえ。修理作業だけど、

回収した敵の新型の解析も大事だな。敵の性能が少しでもわかれば、付け入る隙を見つけられるかもしれないねえしな」

「そうですね……。ルリ君にも手伝いを頼みましょう。——ルリ君、鹵獲した敵新型の解析作業について相談があるのだが……」

真田がさつそくルリに連絡を取ると、準備万端と待ち構えていたルリがすぐに承諾してくれた。

「私もオモイカネも準備万端です。いつでもどうぞ」

ルリも散々辛酸を嘗めさせられたからだろう、後方にいたウリバタケや真田とはまた違った熱意を感じさせる。十中八九ユリカの体調も絡んでいるのだろうが、彼女も無茶を重ねているように感じて、その成長を見てきたウリバタケも心配を隠せない。

「ウリバタケさん、解析作業もそうですが、エックスの完成はいつ頃になりそうですか？ エアマスターとレオパルドはまだまだとしても、エックスを投入できるようになれば、もう少し戦力に余裕を得られると思うのですが？」

「あとひと月もあれば投入できるはずだ。急いではいるが、急ぎ過ぎて詰めを誤ると取り返しがつかねえからな」

ウリバタケは格納庫の一番隅で組み立て作業を続けられているエックスに視線を送りながら答えた。

フレームはほとんど組みあがっていて、あとは装甲やらスラスト、ジェネレーターに各部コンデンサー（エネルギーコンダクター）の取り付けと調整に、装備一式の調整を終えれば実戦投入可能になる予定だ。

今回はサテライトキャノンはもちろんほかに多種多様な武装ユニットを製作して換装するというプランもオミットして開発しただけあって、思ったよりも順調に進んでいる。

……この装備なら、役に立つはずだ。

「エアマスターとレオパルドはルリルリの言うとおり、まだまだ先になる。こっちはおおよその設計が終わっただけで、部品の生産もそうだが、細部の詰めが甘い。地道に続けてはいるが、順調に航海が進んだとしても、バラン星までに間に合うかどうかってレベルだ。最悪完

成は諦めてダブルエックスとエックスの予備パーツとか強化パーツへの転換も視野に入れないといけないかもな」

「そうですか……難しい問題ですね。データ上のシミュレートでよろしければ私もお手伝いしますが？」

「必要になつたら声を掛けるよ。真田だつてそつちの方面だつたら頼りになるし、それよりもルリルリにはチーフオペレーターとしての仕事に専念してもらいたいからな。——あんまり無理すんなよ。艦長だつて、無理して倒れるルリルリは見たくないだろうしな」

「……善処します。それでは、解析作業を開始するとき声を掛けてください、待機しています」

ルリはそれだけ言うとお通信を切った。ウリバタケはなんとなく釈然としない思いを抱きながらも自分の仕事に戻ることにした。

真田も修理作業の指揮をウリバタケに任せて新型機の解析作業の準備を進めている。

(さて、縁の下の力持ちとして、頑張るとするかねえ)

ウリバタケは肩をぐるりと回して気合を入れなおした。

それから一〇時間ほど経過した。

さらなるガミラスの罠を懸念し、艦載機の修理作業を完全に終わらせたほうがいいと考えられたため、ベテルギウスへの大ワープの予定がやや繰り下げられていた。

航路が敵にばれているのは確実と確信しているユリカは、できるだけ万全な状態を維持したほうがいいと航海班と工作班に理解を求め、ヤマトを万全な状態にするため、特に新たに手に入れた金属資源での改修箇所全般の調整に時間を割くことにしたのだ。

もちろん鹵獲した新型戦闘機とコントロール機雷の解析の時間も設けられ、作業を担当していた真田とウリバタケとルリは、その成果をユリカに報告すべく第一艦橋に揃っていた。

「艦長、コントロール機雷と敵新型戦闘機の解析を完了いたしました」

「ご苦労様です。それで、なにか成果は上がりましたか？」

「こういう言い方はプレッシャーになるかとも思ったが、嬉々とした

表情を見る限りでは問題なさそうだと思えた。実際、その直感は間違いいではなかったようだ。

「はい艦長！　まず最初に私から報告です。……ごほんっ！　コントロール機雷の制御システムを解析したことで、リフレクトデイフェンサーやアステロイド・リングの制御プログラムの改良に使えそうなコマンドをいくつか発見することができました。これからはより小さな負担でより自由なコントロールが望めるようになると思います。もちろん、なんらかの事情で私が制御を請け負えない場合でも、今までよりもずっと高精度なコントロールが可能になりはまずです。すぐにも作業に入りたいと思っっているのですが、どうでしょうか？」

胸を張って報告するルリは自慢げそうだった。彼女がこんな表情を見せるのは珍しいと思う反面、ヤマトの航海に対する意気込みを感じさせる。

——彼女に隠し事をしなければならないのが、少し堪えた。

「かまわないよ。でもその前に休憩を忘れないでね」

「はい」

ルリの報告が終わったら、次は真田とウリバタケの番だった。

「それと敵新型の解析結果ですが、ガミラスも戦闘機には小型相転移エンジンを採用していたことが判明しました。使われていた技術や部品のいくつかはわれわれでも使えそうなものでしたので、これを組み込むことで小型相転移エンジンの出力や安定性の強化が図れそうです」

「それはありがたいですね。エンジン出力に余裕が生まれれば、火力や機動力にも回せますしね」

「おう！　期待してくれよ艦長！」

自信たっぷりなウリバタケに「期待しています」とエールを送る。兵器の開発競争は正直辟易ものだが、それでみんなが生き残れるとこののなら——。

(あ……)

ユリカは軽いめまいを覚えた。機雷原を突破してからどうにも体調が優れないが、これはもしかや——。

（——ナノマシンの浸食が、また進んだみたい……そうだよ、結構ストレスだつて溜まるし……）

状況は芳しくない。これから先ますます状態が悪くなる。だが、弱音を吐くわけにはいかない。

（私は、宇宙戦艦ヤマトの艦長なんだ！ 沖田艦長だつてきつと、このくらいの苦難は越えてきたはず！）

詳細はわからないが、どうも最初のヤマトの航海の時、沖田艦長が病気を——それも死に至る病を患っていたことだけはわかつている。進を艦長代理に任命したのもそれが原因だと、前後の状況から推測できる。

でも、まだこの世界の進には早い。なんとしてでも、その時まで耐えなければ。

それからしばらくして、コスモタイガー隊の修理完了に加えヤマトの改修箇所の調整も終え、予定よりも四日ほど遅れを出してしまったが無事ベテルギウス近海へと大ワープを成功させていた。

改修の恩恵もあるのか、六〇〇光年を超える大ワープをトラブルらしいトラブルもなく実行できたことで、運行責任者である大介の表情も明るかった。

安定翼の改装は効果的だったようだ、真田もウリバタケも大満足しているようだったという。

ヤマトが接近したベテルギウスはオリオン座 α 星とも言われ、おおいぬ座のシリウス、小犬座のプロキオンと共に冬の大三角形を形成していることで著名な星だ。

大きさは太陽系の中心に置いた場合、木星の公転軌道近くにも達すると言われる大物で、質量は太陽の約二〇倍にも達するという。

赤色超巨星であるベテルギウスは、言うなれば星としての寿命を終える寸前の末期の状態にある。

この状態は安定した水素の核融合を終え、水素の核融合で生まれたヘリウムによる核融合を開始して外層が膨張し始め、表面の温度が下がったことで形成される。

質量が十分に大きいとそこからヘリウムの核融合も開始される。さらに中心核ではヘリウムが炭素に変わる核融合も発生し、窒素、酸素、ネオンと言った順に重い元素が形成され、最終的に鉄に変換されていき、鉄の中心核とそれを取り巻く元素の層が形成されるとされている。

ここからさらに状態が進むと『超新星爆発』と呼ばれる星全体が吹き飛ばされる爆発現象を引き起こすとされていて、このベテルギウスは脈動偏光を起こすほど不安定な星であるため前述のとおり寿命が近いと考えられ、この現象を観測できるであろうモデルケースとしても注目されていた（一部からはとつと爆発しろ、などという不謹慎な発言があったと言われているほどらしい）。

また、ベテルギウスが超新星爆発を起こした場合についての地球への影響も過去に散々議論されていた。

というのも、この超新星爆発によって生じる現象のひとつに、『ガンマ線バースト』と呼ばれる大量のガンマ線が放出される現象があるとされているのだ。かつてはそれが地球に直撃することが懸念されていたのである。

もしも本当にその懸念が現実のものとなれば、オゾン層が破壊され、地球生命に甚大な被害が生じるとも言われていた。

近年の研究ではガンマ線バーストに恒星の自転軸から二度の範囲で指向性があることが判明し、ベテルギウスは観測の結果自転軸が地球から二十度ずれているため直撃の心配はないとされ、また距離の二乗に反比例してガンマ線の強さが弱まることから、多少の影響はあっても大事には至らないだろうとも言われている。

ヤマトはいま、ベテルギウスの放つ光に照らされて朱に染まっていた。

恒星にかなり近い位置にいたため、減光フィルター越しでも艦内に相当な光が飛び込んでくることが予測されたため、それを防ぐため予め防御シャッターがすべて降ろされた状態でワープし、ベテルギウスの様子はすべて光学カメラを含めた外部センサーが捉えたものを、スクリーンと化した窓とメインパネルに映し出すことで見ていた。

「ほへえ〜。おつきいねえ〜！」

能天気なユリカの率直過ぎる感想にルリは思わず苦笑してしまう。だがみな同じような感想を口にしていたし、自分だってそうだった。——つい先ほどまでは。

受難の時間はワープ明けしてからわりとすぐに訪れたのである。

「——というわけで、ベテルギウスは木星の公転軌道直径にも届かぬばかりの超巨星というわけなのよ。ルリちゃん、フィルターを通した映像を見せてあげて」

案の定、即座に湧いてきて上機嫌で説明を続けるイネスの要望に疲れた顔で応じる。

すでに観測データを超特急で解析させられ、要望に応じて何度も何度も形を変えて表示する作業に従事させられている。

電算室にいる部下に航路探査のため降りて来ているハリ、そして手伝いに来ている雪はウィンドウ越しに実に申し訳なきような顔をしているが、イネスの相手はルリに任せきりにして自分の仕事に精を出している。——だれかたすけてよ……。

「あれ？ 太陽みたいに完全な球形じゃないのですか？」

ラピスが疑問の声を上げる。

フィルターを掛けられ、単なる光の玉から恒星特有のなんとも形容しがたい表層が見れるようになったベテルギウスだが、太陽のように真球に近い形ではなく、大きなこぶ状のものをもった形状であった。「それはガスが恒星表面から流失して表面温度が不均一になったりして、星自体が不安定な状態にあるからだと考えられるわ。この形態にあるということは、星としての寿命も近いということであるし」「それじゃあ、いまこの瞬間にもドカァ〜ン！ っつてもあり得るってことですか」

イネスの回答に不安を感じたユリカが尋ねると、「ありえるわよ」とにべもなく答えるイネス。おい、空気が重くなったじゃないか。

「いまのところそれらしい兆候は見られませんからたぶん大丈夫だと思えますよ」

見かねてフォローするのだが、

「あら、恒星の研究——それも超巨星なんてまともに解析されているとは言い難いのよ。私たちが気づいていない、もしくは想定していたのとは違う動きをしているだけで、超新星爆発の秒読みに入っているも、なんらおかしくないのよ」

イネスはルリのフォローを台無しにした。

「そ、そうなんですか？」

「そうよ。だから慎重に通過して。こんな大物のすぐ横をワープで通り抜けるのは困難極まりないわ。質量は大きさほどでないにしても、航路が歪曲されるには違いなし直径がが広すぎて、緊急ワープアウトで恒星の中に出現しかねないわ。——もしも爆発したら、亜光速まで加速しても逃げ切れるとは思えないけれど、イチかバチかの手段ならあるわよ」

「と、どうも……」

イネスの発言に大介が食い付く。やはり操舵手として、航海長として知っておきたい情報だったか。計算を求められたルリとしてはできるだけ避けたい手段なのだが……。

「そうね、名付けるのなら『波動砲ワープ』とでも言うべき手段よ。ワープ開始と同時に波動砲を発射することでワープ航路の空間を強引に押し開くように湾曲させることで、太陽質量の三〇倍までの恒星なら、中心核さえ外せば跳び越えることは理論上可能よ。ただ、ワープと波動砲の同時使用はヤマトへの負担も大きいし、波動砲の影響で歪曲した空間を跳ぶから精密さは皆無に等しい、事実上の無差別ワープになるわ。正直反転してワープしたほうが安全ではあるし短時間で済むのだけど、なんらかの事情で反転ができない緊急時には、これに頼るほかないでしょうね。ヤマトは艦長の体調はもとより、波動エネルギーの作用の影響で安全なボソソジャンプを実行できない以上、緊急時にはこういった賭けに出るしかないのだから」

第十二話 機雷網と灼熱の星を超えろ！ Bパート

イネスの突発的な解説を終えたヤマトは、慎重にベテルギウス近海を通過すべく航行を続けていた。

ベテルギウスから放射される強力な放射線の数々に加え強力な重力場とそれが生み出すわずかな空間歪曲の影響もあってか、ヤマトのセンサーが誤作動を起こして航路が安定しないハプニングも起きたが、最終的には電算室でルリとハリが補正を掛けたことで鎮静化に成功していた。

「ルリさん、ご苦労様です。ホント、いつも大助かりですよ」

副オペレーター席で情報処理を終えたハリが尊敬の眼差しを向けてくる。

ナデシコBで初めて会った時から変わらないまなざしに、ルリはこそばゆい思いだった。

「そう言うハリー君もよく頑張ってますよ。……本当に立派になりました。初めて会ったときとは見違えてますよ」

頼りなさが目立った彼も、火星の後継者の事件を経て、ガミラスとの戦いを経験し始めてから急激に成長している。

かつてのような泣き言を聞く機会は目に見えて減り、顔つきにもいくらかの頼もしさと落ち着きが出てきている。

——すっかり、大人の男性になりつつあるようだ。

もう少し褒めてあげようかと思つて副ナビゲーター席に近づいたところでヤマトを凄まじい衝撃が襲う。

バランスを崩したルリはそのままハリに向かって倒れ込む形になり、慌ててハリもルリを抱き留めようと向き合う。

倒れ込んだルリはハリに抱き留められてことなきを得た。——思ったよりも彼は遅しかった。サブロウタ稽古をつけてもらっているからだろうか。

「チーフ、大丈夫ですか!？」

階下の部下がルリを心配して振り返る。

「だ、大丈夫です！」

恥ずかしいところを見られたと、羞恥で頬が染まる。明らかな緊急事態でなければもう少し――

（なにを考えてるの私！ シャキツとしなきや！）

「ルリちゃん、いまの衝撃はなに!? ってええ〜!!」

状況確認のために第三艦橋に問い合わせたのであろうユリカの顔が、眼前に浮かんだ。あつ、まだ抱き合ってたまま……。

「こっ、これから解析しますのでいま少し時間をください!!」

追及の暇を与えまいと語気も強くユリカをけん制、黙らせる。

「は、はいい〜!」とすっかり怖気づいたユリカの顔が小さくなる。少しきつかっただろうかと反省が頭を覗かせるが、からかわれてたまるものかという怒りのほうが勝った。

ルリはハリに話してもらってからチーフオペレーター席に座つてすぐに解析作業を開始、部下の集めた情報を精査して事態を探った。

「大介君、航法装置に異常は?」

「ありません! 自動操縦、手動操縦共に正常です。――ラピスさん、エンジントラブルは?」

「こちらも確認できません。相転移エンジンも波動エンジンも正常そのものです」

第一艦橋では状況確認のため声が飛び交っている。

突然の衝撃に続けてヤマトの航行速度が低下しているのが計器にはつきりと映し出されている。

この原因不明の衝撃と減速がヤマト自身のトラブルでないのなら、外的要因があるはずだと、進は戦闘指揮席からでも確認できる範囲で周囲の状況を探った。

「イネスさん、真田さん、想定される要因はなんですか?」

「情報不足でなんとも言えません。ベテルギウスの脈動による衝撃波も想定されますが、可能性は低いと考えられます」

「私も真田さんと同意見ね。ベテルギウスは星自体の形状が変化する脈動変光星の一種、つまり膨張と収縮を繰り返している星よ。それに

よって表層のガス帯が外部に流出もするだろうし、それがヤマトに
用した可能性は考えられるわ。とは言え、直前の観測データそれら
しい兆候はないわね……脈動なのだから、星の表層に動きが見られる
はずだし、なによりあの規模の星の脈動による衝撃波に見舞われたの
ら、ヤマトにも大きな被害が出ているはずよ。だとすれば考えられる
のは——」

「自然現象でないとしたら、ガミラスの工作の線があるのでは？」

副長席のジュンがもつともな意見を述べている。進もその可能性
には思い立った。連中がヤマトの航路を把握しているのなら罫を仕
掛けてくるであろうことは、先のプロキシマ・ケンタウリ第一惑星で
証明されている。

「雪、レーダーシステムの反応は？」

ユリカに栄養剤を届けに来ていた雪に尋ねてみた。彼女は衝撃で
転びかけたところを偶然そばにいたゴートに抱えられて難を逃れて
いた。——惜しい、あそこに自分がいれば。

つい邪な考えが思考をかすめた。いかんいかん。

「いま確認するわ！ ルリさん、データを送ります！」

雪はレーダーシステムのログを呼び出しながら、レーダーの感度や
対応レンジを細かく切り替えてリアルタイムの反応を調べつつ、その
データを電算室に送って解析に回している。

それから数十秒かけて、第一艦橋と電算室のデータのやり取りが続
けられ、謎の衝撃と減速の理由が判明した。

「……これは!? 艦長、ヤマトの周囲に磁力バリアが展開されていま
す！ 衝撃と減速はバリアに接触したことが原因です！ すごい出
力だわ、このままではヤマトはあと数分で完全に停止してしまいます
！ それに、ヤマトの計器類に磁場の干渉によるものと思われるエ
ラーが発生し始めています！」

雪の報告にユリカの顔がこわばるのが見えた。おそらくこれは本
命のトラップに嵌めるための前座に過ぎないのだと、彼女はすぐに理
解したのだろう。その表情を見て、進も理解した。

——おそらくこのトラップは、眼前のベテルギウスを利用したなに

かである、と。

「大介君、バリアからの離脱を試みて。雪ちゃんやルリちゃんと協力してバリアの範囲と位置の詳細を。全艦戦闘配置。進、主砲とパルスはいつでも使えるようにしておいて」

進はもちろん大介も雪も「了解」と応じて作業に取り掛かる。

大介はさっそくバリアから離脱するために操縦桿とスロットルレバーを操りながら、機関部に要望を出している。

「ラピスさん、エネルギー増幅。リバーススラスタを最大噴射願います！」

「了解。機関室、エネルギー増幅！ リバーススラスタ最大噴射！」
ラピスの指示で機関室が慌ただしくなった。

「徳川！ エネルギー増幅、最大噴射だぞ！」

「は、はい！」

原因不明の衝撃の調査でエンジンに取り付いていた太助は、山崎に怒鳴られるように指示されて大慌てで機関制御室に飛び込む。

油で汚れた顔を拭う間もなく、汚れた手袋を外してコンソールを叩いた。隣の山崎もあまり余裕のない表情。

太助はいまヤマトが窮地に置かれていることを、否応なく理解させられた。

六連波動相転移エンジンが唸りを上げ、艦首の喫水部に縦四つ並んだバウスラスタ兼用リバーススラスタが、最大噴射を開始する。噴射の反動とバリアの抵抗でヤマトの艦体がビリビリと震えるが、抜け出せない。

「ラピスさん！ これが限界ですか!？」

操舵席の大介が操縦桿を捻ってヤマトの艦体を揺らすように動かし、強引に抜け出そうと努力しているが、効果は薄い。

「エンジンは最大出力です！ スラスタもこれ以上出力上げられません！」

大介の叱責にラピスは泣きそうになりながら答える。全力を尽くしているのにそれがまったく反映されていない。これほど悔しく無力感を煽ることはないだろう。

「っ！ 全姿勢制御スラスタ、逆噴射！」

出力アップが敵わないと見た大介が艦首側の姿勢制御スラスタすべてを、可動域が許す限り艦首側に向けて全力噴射させた。

ラピスはすぐに操縦に合わせた出力管理を行うが、ヤマトはカメの如く遅い歩みでしか動けない。

「二〇時三〇分の方向から大型ミサイル接近！ 数は二四！ 対艦ミサイルだと思われます！」

雪から報告にラピスの焦りが募る。なにかほかに手段は——!?

「機関長！ 波動砲口からエネルギーを噴射する逆進システムを使いましょう！ カイパーベルトで調整したあれですよ！」

機関室から太助のありがたい意見が届いた。

ラピスは緊急時の急停止・全速後退用の逆噴射システムの存在を失念していたことに、いまさらながら気づかされた。

なんと迂闊な——。自責の念が顔を覗かせるが反省はあとにしていまはこの手段にかけるしかない！

ラピスはすぐに機関室にシステムの起動を指示した。

ラピスの許可を得た太助と示し合わせ、山崎は波動砲の発射口を機関室からの操作で開放、バイパスを通してタキオン粒子を波動砲のライフリングチューブ内に導入、波動砲用の最終収束装置のみを使用してメインノズルと同等の推力を発生させた。

普段はここまでの大推力が要求されないことから使われないでいたシステムだが、どうやら太助はちゃんと覚えていたようだ。もう少し遅かったら自分が提案していたが、なかなかどうして、頑張ってるじゃないか。

（機関士としての才能は親父譲りか……。煙たがれようが構わず厳しくしてきたが、どううやらその成果が顔を覗かせてきたようだな）

太助に見えないように唇を嬉しきで歪ませる。

こいつは将来——大物になるかもしれない。

「よし！ 動き始めたぞ……！ 機関長、この状態をキープしてください！」

波動砲リバーズ噴射の威力は絶大で、ほかのスラスタの推力も合わさりヤマトをバリアからじりじりと引き剥がしていく。

——だが、ミサイルを回避するには間に合いそうにない。進はそつと迎撃ミサイルの発射スイッチに手を添えた。——艦長ならそろそろ。

「進！ リフレクトデیفエンサー！」

「了解！ リフレクトデیفエンサー発射！」

進はすぐにスイッチを押し込む。

左舷八連装ミサイル発射管が解放、八発のバリア弾頭搭載のミサイル——リフレクトデیفエンサーが煙の尾を引いて放出される。リフレクトデیفエンサーはミサイルの眼前でデイストーションフィールドの円盤を展開、すべての対艦ミサイルを苦もなく受け止めた。

超大型ミサイルや高収束グラビティブラストならまだしも、普通の対艦ミサイル程度でこれを貫通してヤマトに被害を与えることはできないようだった。

それからすぐに、ヤマトは艦首を突っ込んでいたバリアからも離脱する。ひとまずは、危機を脱することができたようだった。

しかしヤマトがバリアに触れたことを切っ掛けとしてだろう。後方もバリアに囲まれてしまい、ヤマトはその場に立ち往生する羽目になってしまった。

——どうやらここからが本番らしい。

進は額に滲んだ汗を右手で拭った。

ラピスはユリカからの指示を受けて機関室に降り、エンジンの整備の指揮していた。これからガミラスの罠を掻い潜るにあつて、エンジ

ンのコンディションは命運を左右すると言つて過言ではない。

しかしラピスは残念なことにハードウェアの整備を先導することはできない。その欠点は頼もしい副官である山崎に一任し、ソフト方面からの管理とバグ取りに専念することにしていた。

部下の助けも借りつつ機関制御室でプログラムの修正作業をあらかた終え、山崎にエンジン本体の整備状況を訪ねようと思つて制御室の窓から外を覗くと、こちらに向かつて歩いてくる山崎と太助の姿が見えた。

出迎えようと部屋の入口を潜ると、珍しく山崎が太助を褒めているのが聞こえた。

「徳川、きつきの機関はなかなかよかつたぞ。普段使われていないシステムをちゃんと覚えていたばかりか、機関長のフォローまでするのはな。……きつと、親父さんも喜んでるぞ」

珍しく手放しで山崎に褒められて、太助は喜んで良いのか気味悪がるべきなのかイマイチ判断がついていない様子だった。

普段からやれ「半人前」だの「親父が泣くぞ！」だのと特に叱責されている立場だし、変に思い上がりものなら直後に雷が落ちる、とても考えて萎縮しているのだろうか。

とはいえラピスも山崎にもつと穏便に済ませてほしいとはなかなか言えない。若輩者の自覚はあるし、立場が上とはいえその道のプロとして手腕を振るっている山崎の育成方針にケチを付けられるほどの知識も経験も、持っていない。

「あ、ありがとうございます山崎さん……」

「今回はおまえに助けられてしまったな。これからもこの調子で自己研鑽に励むんだぞ」

さて、そろそろ自分も声を掛けるとしよう。もう少し太助の百面相を見ていたい気もするけど。

「助かりました、徳川さん。適切な助言をありがとうございます」

にこやかに助けにお礼を述べる。山崎と違って太助は表情が一気に柔らかくなつて素直に言葉を受け取ってくれている。山崎は多少呆れ顔ながらも釘を刺したりはしないようだ。今日は柔らかいな、と

改めて思う。

——おや、なぜだか周囲から視線が集まったような気がする。……気のせいだろうか。ともかく、仕事をしなければ。

「山崎さん、波動相転移エンジンの整備状況はどうなっていますか？艦長からの要望で、長時間の全力運転に耐えられるようにしてほしいとのことですが」

「長時間の全力運転、ですか？……!?! まさか、ベテルギウスの至近でも航行するつもりなのですか？」

「ガミラスの罠が張られている以上、ベテルギウスを利用しないとは思えない、とのことですよ」

「……たしかに艦長の仰るとおりですね。——徳川、もう少し見て回るぞ。今回ばかりは少々の無茶ではすまなそうだ」

山崎はすぐにユリカの考えを飲み込んだらしく、大きく頷いて太助やほかの機関士たちを呼び寄せて再度エンジンのコンデイションの確認と調整作業を最速で終わらせるように指示を出した。

ラピスももう一度プログラムチップをしておくべきだと考え、部下を引き連れて別の端末に向かった。

「……ヤマト、冥王星での戦いから今日まで、おまえの姿を忘れた日はなかったぞ……!」

デスラーに本作戦のためにと充てられた、シユルツが乗っていたのと同型の戦艦の艦橋。そこでガンツは最大望遠で捉えたヤマトの後姿を睨みつけていた。

あの戦艦に、敬愛する上司と苦楽を共にした同僚や部下の大半を殺された。その報復を果たすためなら——そして祖国の未来のためなら、喜んでこの命を捧げよう。

ヤマト——今日こそ息の根を。

「デスラー総統の名誉のためにも、シユルツ司令の敵をとるためにも、今日、憎きヤマトを確実に叩き潰す——みんな、命を捨てる覚悟はで

きたか？」

後ろを振り返れば、共にシユルツを見殺しにして撤退した同志たちの姿がある。

みな一様に、ガンツと同じ目をしていた。そう、敬愛すべき上官を葬った怨敵に対する憎しみと怒りを湛えた目だ。

その目は口よりも雄弁にその心を語っていた。——ヤマトを討ち取って敬愛するシユルツの許に逝こう、と。

元よりこの策に生還の可能性などない。ガンツたちはこれからガス生命体を使つて追い立てたヤマトと共に、赤色超巨星ベテルギウスの至近を通過するのだ。そして高確率で失敗するであろうガス生命体の後釜としてヤマトを追い詰め、諸共に灼熱の業火に焼かれるが運命。

だが躊躇はない。ヤマトを討ち取れるのであれば。

「作戦どおりガス生命体を放ったあとは、ガスの注意を惹かないようにヤマトを追撃してベテルギウスに接近する。あのヤマトがガスに飲まれるとは思えない。ガス生命体はあくまでベテルギウスに追い込むための陽動に過ぎん。本命は本艦の全攻撃能力を駆使してヤマトを痛めつけ、ベテルギウスの炎の中に叩き落すこと！ 差し違えるため……体当たりも辞さない覚悟で行くぞー！」

ガンツの檄を受け、同志たちは最後の作戦の準備にかかる。

「よし！ ガス生命体を放て！ ヤマトとの決戦だ！」

ガンツの叫びに応え、艦首の魚雷発射管からガス生命体を収めた宇宙魚雷がヤマト目掛けて突き進む。

ヤマトが迎撃しようがしまいが、一定の時間で弾頭が解放されて中からガス生命体が出現、ヤマトをベテルギウスに追い立てる。

そしてヤマトは、自ら死地に向かって突き進むことになるのだ。

「艦長、分析結果が出ました。バリアはヤマトの全周をほぼ覆っていますが、推測どおりベテルギウスの方向だけは開いていました。とな

ればガミラスの次の手は——」

ルリが電算室の解析結果を第一艦橋に報告していた時、レーダーに後方から急速接近する物体の姿が映る。ミサイルだ。

「進、迎撃！」

「了解！ 目標、接近中のミサイル。第二副砲発射！」

進の指示で第二副砲の砲手が迫り来るミサイル目掛けて三本の重力衝撃波を撃ち出し、ヤマトへの直撃コースにあった二基のミサイルを正確に撃ち落とす。意図はわからないがヤマトへの被害は回避できた……はずだった。

「!? 艦長、ミサイルの弾頭からガスのような物が放出されました。パネルに出します」

ルリがメインパネルに映し出したのは、時折赤い稲妻が走る黒色ガスであった。それが脇目も振らずヤマト目掛けて接近してくるではないか。

「なにこれ？ 妨害物質かなにか？」

ユリカが疑問の声を上げる頃には接近してきたガスの一部が触腕のように伸びて、左舷カタパルトとメインノズルの左尾翼に接触寸前であった。固唾を飲んで事態を見守ると、触腕が触れたフィールドが瞬時に消失、接触を許したカタパルトと尾翼があつという間にポロポロになって崩壊していく。

慌てて消失したフィールドを再展開、強引に遮蔽。しかしそのフィールドも急激にエネルギーを喪失して消失寸前となり、代わりにガスの動きが活発化して増殖していることが見て取れた。

「金属腐食ガスだ！ 逃げないと艦がやられる！」

真田の叫ぶような推測にユリカはすぐに発進を指示する。

「しかし艦長！ 進路が……！」

「構わないからベテルギウスに向かって！ こうなったら、死中に活を見出す以外に道はないわ！」

「……了解！ ハーリー！ ベテルギウスの活動データを随時解析して航路を見つけてくれ！ 火に触れたら一環の終わりだからな！」

ユリカの活に覚悟を決めた大介はハりにフォローを頼みながら操

縦桿を捻り、ヤマトをベテルギウスに向かって前進させた。

ガスを振り切るべく最大噴射を始めたヤマト。ガスを振り切れると思われていたのだが……。

「くそっ！ メインノズルから噴射されているタキオン粒子を食って加速してやがる！ あのガスは周囲のエネルギーを食って増殖するガス生命体なんだ！」

焦りからか普段よりも乱暴な口調で吠える真田。

……状況は最悪だった。進路の先にある赤色超巨星ベテルギウスはから放出されるエネルギー量は文字どおり桁外れ。いかにヤマトが優れた防衛性能を持つとは言っても、長時間は耐えられない。

最大出力でデイストーションフィールドを展開してその尋常ならざる値の熱量や放射線を少しでも防ぎつつ、対放射線防壁や放射線除去装置を使って防衛しなければ、乗組員全員があつという間に致死量の放射線を浴びて即死してしまうだろう。

そして後方にはガス生命体。火器でこいつを除去することは事実上不可能となれば、このままチキンレースを挑むしかない。おまけに後方からガミラスの戦艦クラスが接近していることもレーダーが捉えている。

（おそろしくガミラスは、ヤマトがあこのガス生命体を駆逐するためにはベテルギウスに接近することを見越しているはず。ガス生命体で追い込むのは序の口。プロミネンスとかが進路を塞ぎ、それを波動砲で除去しようとするまで視野に入ってる。……だから戦艦に追わせて発射のチャンス潰して心中させるってところかな。——ヤマトが以前のままであったら、これで詰んでたけど、生まれ変わったヤマトは一味違うよ、デスラー総統！）

テスト未了で効果のほどが不明瞭ではあるが、波動砲には再建時に仕込んだ隠し機能がある。その機能を使えばこの危機を乗り越えられる公算はある。

ユリカが密かに決意を固めていたとき、第一艦橋にファーストエイドキットと船外作業用の宇宙服を手にしたイネスが飛び込んで来た。

「やっぱりこうなるのね！ 艦長！ 全員に宇宙服を着せて！ 艦内

の冷房は食糧庫や医療関係の場所に集中させる必要があるから乗員が無防備になる！ 宇宙服を着なければ熱にやられてしまうわ！」

イネスのアドバイスを受けてすぐにユリカは全乗組員に宇宙服の着用を指示する。自身もイネスの手を借りてよろめきながらも宇宙服を着こんだ。

ヤマトはバリアの開口部を潜り抜けながらベテルギウスに接近していく。ベテルギウスの光に照らされて、ヤマトの姿が完全に朱に染まり、表面と内部の温度が急激に上昇していく。

艦内の温度も冷房が弱い部分では一〇〇度に達しようとしていて、イネスの警告どおり宇宙服がなければクルーの健康被害が懸念される状況である。

最大出力でフィールドを多重展開しながら、ベテルギウスに墜落してしまわないよう最大噴射を継続する。

「気を付けて！ 火の粉であってもヤマトなんて一飲みだからね……」

燃え盛るベテルギウスからは重力の束縛を逃れていたであろう灼熱のガスが流出している。それに乗って断続的に生じるプロミネンス以外にも大量の火の粉が舞い上がり、ヤマトの進路を著しく制限していた。

進は戦闘指揮席で計器を睨み、万が一の時は波動砲を使ってでもこれらの除去をしなければならぬと考えていた。

隣の操舵席では大介がハリと連携してプロミネンスや飛び散る火の粉にヤマトの防衛を凌駕する高熱のガスを避けつつヤマトを進めている。ひっきりなしにハリが口頭でも進路の指定を繰り返していることから、ヤマトの進路確保が絶望的に難しいことが伺えた。

万が一にもこの業火に接触すれば、ヤマトはあえなく蒸発して消えさる運命。大介の心労も心配になってくる。

「っ！ 主翼展開！ 少しでも恒星風に乗って墜落を防ぎます！」

大介は少しでも回避行動による失速を避けるべく、安定翼を開いたようだ。

安定翼を開けばタキオンフィールドの保護に加え、彼が口にしたように恒星風の力を借りて浮いていられる。プロミネンスを回避するために速度を落として旋回した場合でも、幾分失速しにくくなるはずだった。

「それにしても暑いわね……艦長、大丈夫?」

艦内無線の維持に努めながらもユリカの体調が気になるのである。う、エリナが気遣わし気に尋ねるのが聞こえた。

「なんとかね……バリアを抜けてベテルギウスから離脱出来るまであと一時間……みんな、なんとしても切り抜けるよ!」

艦長席からの檄に進を含めた全員が応える。

ユリカの体調は心配だが、進にいまできることは緊急事態への対処に備えることだけだった。

灼熱の責め苦しに喘ぎながら、ヤマトは進む。

この高温に水や食料、医薬品を保護するために冷却システムを全開にして対処しているが、すでに限界が近い。

対して防御フィールドに推進力、冷却システムに各種センサーやコンピュータに消費されるエネルギーを確保するため、機関室はほかの部署よりも高温の環境下で必死にエンジンを回していた。

「機関室、エンジン出力が低下しています。エンジンのチェック急いで下さい!」

ラピスの指示で同僚たちが慌ただしく機関室を駆け回る。

機関室も温度が極めて高くなり、身動きし辛い宇宙服を着ての作業となつて、中々エンジンの直接整備が覚束ないでいるのは、機関制御席の窓からでも伺えた。

それを見かねた隣の山崎は、

「徳川、俺はエンジンを直接見てくる、ここは任せたぞ!」

「りよ、了解!」

返事を聞くなり山崎は機関制御室を飛び出して、暑さでへばつている機関士を「サウナに入ったことないのか! このくらいでへこたれるんじゃない!」と激励ししつつ稼働中のエンジンに取り付き、高熱と連続した最大運転の影響で音を上げないように細心の注意を払つ

てエンジンのコンディション管理に努めている。

一方で機関制御室に残された太助は制御プログラムのバグを確認しつつ、コンピュータ方面からのエンジン管理を継続する。過酷な環境下での運用に加えてこれほどの時間の全力運転は、再建後のヤマトでは初めて。ただでさえ管理が難しくその全貌も理解しているとは言い難い六連波動相転移エンジン。あちこちで小さなエラーが見え隠れし、太助はそれをもぐらたたきのように見るそばから修正すべくキーに指を走らせる。

普段ならラピスの支援も得られるだろうが、彼女は現在エネルギーの分配制御と全体の統括で忙しく手が回らない。いまコンピュータ方面で作業できるのは、太助しかない。

「くそっ、めげてたまるもんか……！ 親父、見守っててくれよ！ 名機関士の息子の名に恥じない、立派な機関士になって見せるからな！」

脳裏に浮かぶのは亡くなった父、徳川彦左衛門の背中。口煩くて苦手などところもあつたが、己の職務に誇りを持ち、卓越した技術で責務を果たし続けてきた広い漢の背中。いまでも太助の目標であり、追い付きたいと願っている偉大な父の背中であった。

「現在ベテルギウスから七〇〇万キロの位置を通過中。コロナによる乱磁場随所にあり。大介さん、右に七度転進してください」

現在ヤマトとベテルギウスの間には太陽半径の一〇倍ほどの空間が開いていた。だがそれほどの数値でありながらヤマトはベテルギウスの至近を通過しているに等しい状況にある。あまりにもベテルギウスが大きすぎるのだ。コロナの範囲内を通過することを強要されたヤマトには、常に一〇〇万度を優に超える超高温と莫大な量の放射線が襲い掛かっている。

持ち前の優れた耐熱性と複数枚のディスプレイシールドによる遮熱がなかったら、ヤマトはとっくの昔に蒸発していただろう。「後方のガスの動きに変化あり！ 火の粉に触れて発火しているようです！」

ヤマトと共にコロナの中を突き進み、その熱エネルギーを吸収して地球すら軽々呑み込めそうなほど巨大化していたガス生命体が、とうとうプロミネンスに触れて発火した。

ガス生命体はそのままプロミネンスに飲まれるようにしてベテルギウスに飲み込まれ、呆気なく燃え尽きてしまう。ここまでは進も予見していたことだった。だが――。

「ガミラス艦の増速と射撃用レーダーの照射を確認しました。砲撃が来ます！」

急速に距離を詰めてきたガミラス戦艦からの砲撃が始まった。次から次へと主砲をから重力波を放ち、ヤマトに牙を剥くガミラス戦艦。恒星風を凌ぐためにフィールドの出力を割いているヤマトにとつて、容易くはじける砲撃であつても被弾は好ましくない事態であつた。

このまま被弾が続けばフィールドは弱まり、ベテルギウスからの放射をもろに受けることになる。そうなつてしまえばヤマトはどれほど耐えられるだろうか……。

「あいつら、ヤマトと心中するつもりなのか？」

進は戦慄に震える。ガミラス戦艦は明らかにヤマトと心中するつもりで突撃している。頭の片隅でその予感がしていたが、まさかここまで――。進は自分が敵の気迫に飲まれつつあることを悟つた。

「っ?! 前方に恒星フレア発生! イレギュラーで計算にはありません! この規模と距離では回避不能です!!」

ハリが非常な現実に悲鳴を上げる。恒星フレアは、太陽の五つや六つくらいなら簡単に飲み込んでしまえるような規模をもって、ヤマトの眼前に立ち塞がっている。

「くそっ、波動砲も間に合わない!!」

距離が近過ぎて、このままだと発射前に恒星フレアに激突してしまう。減速して間に合わせようとすると、推力低下でベテルギウスに墜ちる。それに後方から心中する覚悟で迫ってくるガミラス戦艦の接近をこれ以上許してしまえば、無防備になるメインノズルを狙われてしまう。そうなつたらヤマトは一卷の終わりだ。

進は必死に考える。この状況を打開できる手段はなか、なにかないのか——!?

「しかたないか……波動砲用意！　モード・ゲキガンフレア！」

進の思考を彼方に吹き飛ばすような力強いユリカの指令に、詳細を知らない進は啞然とした。

「しかし！　あれはまだテストも——」

詳細を知っているらしい真田が思わず制止しようとしているが、ユリカは取り合わなかった。

「これがテストです！　主翼の改良も済んだいまなら使えます！　議論している余裕はありません！」

ユリカの勢いに真田も覚悟を決めたらしく、進に操作手順を口頭説明してくれた。

「古代！　波動砲のトリガーユニットを起動したらボルトを手で押し込め！　それで切り替わる！」

進はもはや疑問を挟んでいゝ余地はないと黙って指示に従う。波動砲のトリガーユニットを起動し、言われたとおりボルトを手で押し込んだ。普段はトリガーの動作を確認するための機構に過ぎないと思いついていたからか、押し込むという発想はなかった。

ボルトを押し込むと、起き上がったターゲツトスコープのレティクルの下に「Mode　ゲキガンフレア」と表示されている。

……なぜゲキガンフレアだけカタカナなのだと突つ込む余裕もなく、表示される操作マニュアルに従う。

操作を指示した真田は目に流れ込んでくる汗に苛立ちながら艦内の自己診断プログラムのモニターを凝視して、システムの発動に問題がないかを確認する。

モード・ゲキガンフレア。それは、波動砲に備わったもうひとつの機能。ユリカが引き出したヤマトの過去の『戦闘データ』の中にあつた、波動砲から波動エネルギーをリークさせて突撃する姿を基に立案された、波動砲の応用戦術だ。

要約してしまえば波動エネルギーを波動砲口から意図的にリークさせ、安定翼のタキオンフィールドを利用してエネルギーを艦の周囲

に停滞させ、その状態で突撃するという一見すれば自爆覚悟の突撃戦法である。

周囲を覆う波動エネルギーの空間波動の一部を後方に放出することでメインノズル単独では到底生み出せない爆発的な加速をもって敵に突撃、そのまま敵を突き抜けて後方に抜ける、または敵艦隊の集中砲火を強引に耐え凌ぐために考案されてた使い方だった。

波動エネルギーのタキオンバースト波動流への加工手順が省略されるため、波動砲に比べると三分の二の時間で使用可能な即応性を持つ。

波動エネルギーに包み込まれたその姿がまるで「ゲキガンガーのゲキガンフレアみたいだ！」と木星出身技術者が騒いだことが原因でモード・ゲキガンフレアと呼ばれるようになった。

発案者のユリカは最初もつと格好よく「シャインスパーク……」と意見を出したがまったく耳に入らなかったらしく、真田が彼女の意見を尊重しようとして抗弁しても通用せず、なし崩し的にそれが正式名称となってしまうたのである。

しかし——調整に参加している真田の目から見ても、この戦法は問題点が多い。

タキオンバースト波動流にまで加工していないとはいえ、高圧化させた波動エネルギーを周囲に停滞させることによる艦体への影響もそうだが、突破戦術であるためメインノズルの噴射を継続しなければならぬのでエネルギー消費量が波動砲を越えていて持続時間も短い。

さらに波動エネルギーの防御幕が邪魔になって一切のセンサーが使えないため、使用しながら航路を修正することはできないに等しく、事前に収集したデータを基に算出した計算のみを頼りに進むしかないなど使い勝手はかなり悪い。

そもそも『戦艦で体当たりを敢行する』という無謀さもあり、実は最後の最後まで搭載が反対されていた機能であった。

(まさか本当に使う機会があるとは……さすがは元ナデシコの艦長だ)

真田は改めてユリカの発想の柔軟性に感服させられる思いだった。——あとはシステムが想定どおりの威力を発揮することはそうだが、それであるの火柱に通用するかどうか。それが一番の懸念であった。

一方、モード・ゲキガンフレアの命令が下るなり駆けこむようにして機関室にやってきたラピスは、太助の隣に陣取ってエンジンの制御に忙殺されていた。

未知なるシステムを起動するためには第一艦橋のコンソールでは『遠い』と考え駆けこんできたのだ。

「相転移エンジン、波動エンジン、出力一二〇パーセントに到達。非常弁全閉鎖。強制注入器作動。突入ボルトに六連炉心接続」

ラピスが機関制御室の計器を読み上げつつ粛々と準備を進める。

一応このシステム自体はラピスも知っていたし、その意図も聞かされている。本当に使うとは思わなかったが……。

（波動砲の時にはトラブルを起こしたけど、エンジンは改修しているし調整も繰り返した。——今度はトラブルが許されない）

万が一トラブルを起こしてしまえばヤマトはベテルギウスに真っ逆さま。筆舌し難い緊張とプレッシャーを感じる。

「機関室のみなさん！ 踏ん張りどころです！ 絶対に成功させますよ！」

自分自身に言い聞かせるように声を張り上げて部下たちを激励する。部下たちも声を張り上げて応じてくれるのが頼もしいが、それでもラピスは心臓が締め付けられるような思いだった。

これからエンジンはエネルギーを流出させつつ全力運転を続けなければならぬ。

すでにエンジンには大きな負荷がかかっているというのにはたしめてもつ。恒星フレアの突破に成功しても、引力圏を離脱する推力を残せるのか。

イチかバチかの大勝負。ヤマトが沈めば地球は終わる。その事実を改めて突き詰められたような気がして、ラピスは胸が痛かった。

モード・ゲキガンフレアは波動砲の变化形。舵の担当も進が受け持つことになった。ほぼ直進するだけとはいえ微妙な軌道修正は行うかもしれないのだ、嫌でも緊張させられる。

親友に比べれば自分の操縦技術など子供騙し。盲目の計器飛行でベテルギウスに突っ込むことなく、ヤマトをこの溶鉱炉から抜け出させるのか、不安が胸に渦巻く。だが、やるしかない。

ヤマトは地球と全人類の未来を背負った艦だ。そのヤマトの戦士として——敬愛するミスマル・ユリカの息子として、ひざを折るわけにはいかない。

進は波動砲のトリガーユニットを握りなおしてタイミングを計った。

その頃、恒星フレアに向かって突き進むヤマトの姿をガンツ達は会心の笑みを浮かべながら見送っていた。

もう回避はできない。勝った。あの悪魔のような力を持った戦艦に。

われらの行動は無駄ではなかった。デスラー総統の策は本当に素晴らしかった。

ここで命果てようとも、怨敵宇宙戦艦ヤマトを葬ったのだ。

(シユルツ司令……あなたの行動は無駄ではなかった。あなたが私に託したデータのおかげで、ガミラスは奇策を用いてあの化け物を屠ることに成功しましたよ……！)

感涙にむせび泣くガンツ。だが事態は彼の予想を裏切る。

そう、宇宙戦艦ヤマトのすべてを、彼は知らなかったのだ。

「波動砲口よりエネルギーリーク開始！ それ、ゲキガンフレ

「アアアアアア!!」

ユリカのお約束の絶叫と共に、進はトリガーを引いた。途端に波動砲口から青く輝く粒子の奔流が噴き出す。

その粒子の奔流は、安定翼が生み出すタキオンフィールドに制御され、繭のようにヤマトを包み込んで輝く弾丸と化した。

そのままヤマトは恒星フレアに最大戦速で突撃。——直後、凄まじい衝撃がヤマトを襲う。

超高温の恒星フレアはヤマトの突撃で割かれながらも、真下から猛烈にぶち当たり続け、ヤマトを翻弄する。桁違いのエネルギー量と勢いに、ヤマトを覆う波動エネルギーの膜が剥がれそうになる。

それでも全力運転するエンジンは健気にエネルギーを波動砲から放出、それまでに蓄えたエネルギーでメインノズルからの噴射も止めない。

しかし——。

「だめです！ エネルギーが足りません!!」

ラピスの悲鳴が第一艦橋に届く。

恒星フレアの猛威からヤマトを護っている波動エネルギーが急速にエンジン内から失われていく。六連波動相転移エンジンの出力をもつてしても、恒星の——赤色超巨星の放つエネルギーのほんの一端にも敵わない。

波動エネルギーの膜が消失すれば、ヤマトは一瞬で蒸発してしまうだろう。

（くそっ！ 波動砲だったら!!）

波動砲の威力であれば、五発以内に恒星フレアを引き裂いて突破することもできたはずだ。だが、ただその身に波動エネルギーを纏っただけでは、波動炉心六つ分の出力でも足りないのだ。

そんな諦めにも似た焦燥に進が挫けそうになっていたとき、ユリカが腹の底から叫んだ。

「根性入れなさいヤマトお!! 使命を果たさずに沈むつもりかあ!!」

それはヤマトへの叱咤。第一艦橋に響き渡った叱咤の音が反響する。

そして——奇跡は起こった。

——そんな結末を、私は望みません！——

それは声だった。誰かが口を開いたわけではない。ただ頭の中に自然と入り込んできた。とても静かで、それでいて熱く、透き通った綺麗な声だ。

その声が響いたあと、すぐに変化は訪れた。

「フラッシュシステム、起動……？」

戦闘指揮席のコンソールの一角にウィンドウが浮かび上がり、フラッシュシステムなる装置が起動したことを伝えていた。

それは進が疑問を抱き独自に調査を進めようとしていた、波動エンジンとイスカンドルのメッセーヅカプセルに組み込まれていたブランクボックスの一端であることは疑いようがない。

まさか、こんなタイミングでお目にかかることになろうとは。

「そんな！ 安全装置が!？」

機関室で必死にエンジンを守っていたラピスたちが驚きと戸惑いの声を上げる。なぜなら六連波動相転移エンジンに施されているあらゆる安全装置が残らず外され、想定外の動作を始めたからだ。もちろんなにも操作はしていない。エンジンが勝手に人の手を離れて動き出してしまったのだ。

管制モニターには小相転移炉心の前方に備わった制御棒が限界まで抜かれたことも示されている。

想定外の事態に狼狽していたラピスたちの眼前で、エンジンは本来不可能なはずの波動砲起動中のエネルギー生成も実行していく。

息を吹き返した相転移エンジンからの供給を受け、波動エンジンは全力運転を開始。あつという間に不足していた波動エネルギーを補填して波動砲からの放出を継続しているではないか！

物理的に実行不可能に近いはずの動作を見せるエンジンに、ラピスは初めて恐怖を覚えた。——だがすぐにそんな感情も吹き飛んでしまった。想定外の動作を始めたエンジンが不安定になったのだ。

安全装置をかけなおしたい欲求を堪え、現状維持を心がけてこの苦難を乗り越えるべく力を尽くす。

次々と現れるプログラムエラーを修正し、異常振動で緩みかけるボルトを締め付け、冷却装置も限界までフル稼働させ、辛くもエンジンを守り切ることに成功したのであった。

無限とも思える時間を耐えきり、死力を尽くした彼らの努力は報われた。

ヤマトは青く輝く弾丸の姿を保ったまま、恒星フレアを突き抜けた。そしてその勢いのままとつきに舵を上に乗った進の機転の結果、バリアすら力づくで突き抜け、ガミラスが張り巡らせた巧妙な罠を切り抜けることができた。

バリアを突破してすぐに波動エネルギーの膜は霧散、ヤマトはエンジンが生み出す出力をすべてメインノズルに注ぎ込んで噴射、ベテルギウスから全速力で離脱していく。

その頃にはエンジンの制御棒も含めた安全装置は独りでにすべてかけ直され、安定した状態に戻っていたという。

この奇跡の裏で、フラッシュシステムとは異なるブラックボックスが密かに機能していたことに気づいたのは、ユリカと共犯者のみであったという――。

「こんな……こんなことが……」

ヤマトを追尾しながらその動向を最初から見届けていたガンツは放心していた。

恒星フレアに突入し、儂く燃え尽きるはずだったヤマトは波動エネルギーを艦首から噴出させてその身を包み、ベテルギウスが生み出した巨大な恒星フレアに突っ込んだのだ。

そして増速したヤマトは恒星フレアを突き抜けたばかりかバリアすらも突破して、急速に離脱していく。

——失敗したのだ。ガンツたちの作戦は。想像を絶するヤマトの切り札によって。

心は折れたガンツたちは茫然と立ち尽くしたまま、ヤマトが突破した恒星フレアに吸い込まれるように突入し、一切の抵抗も許されず燃え尽きてしまった。

そしてガンツが最後の瞬間まで送り続けた映像と、執念に配した観測衛星によって一部始終を見届けたガミラス本星——中央作戦室もまた、混乱に見舞われていた。

「馬鹿な……」

将軍の誰かがわが目を疑う光景に呆然としているのが視界に入ったが、デスラーはそんな醜態に意識を割ける状態になかった。

「まさか、タキオン波動収束砲にあのような使い方を見出していたとは……！」

想像の遙か上を行くヤマトの力に、デスラーは驚愕を隠せない。だが、同時にますますヤマトに心を惹かれる自分を認めた。

（これほどの危機に見舞われても諦める気配なしか、ヤマト！——改めて認めようヤマト……君たちはわれらに勝るとも劣らない力と勇猛さを秘めた、救国戦士なのだ！）

デスラーはベテルギウスから急速に遠ざかる艦影を見送りながら、内側から沸き上がる熱を感じる。

それは愛する祖国を窮地に追い込む怨敵に対する怒りや憎しみなどではない。

最初にその姿を見たときに感じた——感じてしまった、共通の目的を抱え、死力を尽くす存在に対する敬意であり、対抗心。

ガミラスのため、デスラーはヤマトを討たねばならない。地球のため、ヤマトはデスラーを討たねばならない。

決して相容れない立場にありながらも、根底に流れるモノがまったく同じであることが実感できたからこそ得られた、この不思議な感

覚。

デスラーはヤマトを『好敵手』として認識していた。

「——これではつきりしたようだね、諸君。ヤマトと対することができる存在は、もやはただひひとり。宇宙の狼と名高いドメル將軍に委ねるのが最適だと考えるのだが、諸君はどう思うかね？」

デスラーの提案に異を唱える者はいなかった。当然だ。これほどの敵に対抗できる將軍は、もはやドメル將軍しかないと否応なく理解させられたのだろう。

デスラーは薄く唇に笑みを浮かべた。彼ならば不足はない。必ずや自分の思惑を正しく理解し、ヤマトと対面してくれるだろう。

ヤマトをドメルがどう捉えるか。それこそがガミラスの未来を左右することになると、デスラーは漠然と考えていた。

ガミラスの仕掛けたふたつの罠を辛うじて切り抜けたヤマト。

しかし、その立役者となったブラックボックスの正体とはなにか。

そしてついに表舞台に出たヤマトの自我は、どのような影響を与えていくのだろうか？

急げヤマトよイスカandalへ！

人類滅亡と言われる日まで、

あと、三二三日しかないのだ！

第十二話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十三話 銀河の試練！ オクトパス原始星団を超えろ！

それは宇宙の大嵐か……。

第十三話 銀河の試練！ オクトパス原始星団を超越しろ！ Aパート

徐々に後方へと遠ざかるベテルギウスの姿を後方展望室から見送りながら、雪は両手を胸の前で組んで祈りを捧げていた。

(どうか、艦長の容態が安定しますように……)

ベテルギウスは過去に『オリオンの願い星』として称されていたと聞く。さきほどまでは随分と苦しめられた灼熱地獄だったが、いまはその言い伝えに縋りたい。

「ねえヤマト。あなたにも意思があるのなら、あなたを蘇らせるために力を尽くした、艦長を護つてあげて。ねえ、お願いよ」

ヤマトはなにも答えてくれない。さきほど聞こえた声の正体がヤマトの意思だということは、ユリカの口から語られた。

それが事実なのかどうかを確かめる術を、雪は持ち合わせていない。ユリカに問い質すこともいまはできない。

ガミラスの罠に見事はめられ、ベテルギウスへの接近から離脱までの間、彼女は強いストレスにさらされ続けた。無理もない、赤色超巨星への接近は高熱によるダメージ以外にも薄氷の上を歩かされるような緊張に常に苛まされるし、モード・ゲキガンフレアによる恒星フレアの突破も、強いストレスのもとだった。

それでも彼女は不可思議な現象に対して困惑と恐怖を隠せないクルーを落ち着かせるべく最後まで艦長として振るまっていた。

「あれは……ヤマトの意思そのものよ。イスカンダルの支援物資の中に、向こうで開発された精神感応システム——フラッシュシステムが含まれていたみたいね……。ヤマトはそれを介して私たちの意思を拾って力を高めて、システムが搭載されている波動エンジンの制御に関与したみたい……まさか、ここまでの、こと、が——」

そこで彼女は限界を迎えたらしく、倒れてしまった。すぐにイネスによって応急処置が施されると同時に医療室に運び込まれ、本格的な

手当てを受けている。

「本当に、イスカンドルまでたどり着けるのかしら——」

ヤマトが、ではない。ユリカが、だった。雪はユリカの体調の悪化を肌感じて恐怖に駆られて自分で自分の体を抱きしめる。

——大丈夫、彼女は必ず、辿り着けます——

雪はそんなヤマトの声を聞いた気がした。いつの間にか浮かんでいた涙をゴシゴシと右手で拭い去って、医療室に戻る。

——彼女は絶対にイスカンドルに連れていく。死なせたりはしない。

強い思いを抱きながら、彼女は歩き始めた。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十三話 銀河の試練！ オクトパス原始星団を超えろ！

「では、ユリカの容態は安定したんですね？」

ジュンの確認にイネスは疲れ切った表情で頷いた。

「ええ、いまのところ深刻な事態には至っていないわ。幸運なことにナノマシンの浸食の進行は加速していない、緊張と高熱で体力を消耗しただけ、要するにただの過労よ。ゆつたりと休ませて栄養を取らせれば問題ないわ。……というわけだから二、三日は副長が指揮を執ってもらえるかしら？ そうすれば艦長を休ませられるのだけでも」

「そういうことなら任せてください。先生は艦長や、今回の無茶で倒れたクルーたちの看病に専念してください」

ジュンがそう言うといネスは「任せて」と軽く手を振りながら応え、通信を切った。彼女も疲れている様子だったので、折を見て休んでほしい——と考えたところで通信を切る前に「少し休んでください」と言うべきだったと思い当たった。しまった、タイミングを逃した。

「艦長が倒れるのも無理はない。宇宙服を着てもサウナ状態だったんだ。それに加えて超巨星のすぐそばを突っ切る無茶な指揮——心労も大きかったろうに」

反射的に声のほうに首を巡らせると、ゴートが心配そうに艦長席を

仰いでいた。

ガタイのいい彼ですら暗に「辛かった」と言っているくらいなのだから、病人のユリカが倒れるのは当然だと改めて思い知らされた。

もちろんジュンだってもうクタクタで、叶うことならすぐにでもシャワーで汗を流してベッドにもぐりこみたい気分だった。

「副長、艦長の様子を見てきてもいいかしら？」

「——そうですね。お願いしますエリナさん——テンカワは？」

ジュンはアキトの動向についても尋ねてみた。いまのヤマトにとって、ダブルエックスは生命線である。モード・ゲキガンフレアの使用でエネルギーがほぼカラになっているのもそうだが、相転移エンジンも波動エンジンも出力がまったく上がらずヤマトは出力が稼働ギリギリの最低値にまで低下している状態にあった。

幸い追撃の類はないようであるが、戦闘能力を喪失し逃げるに逃げられないヤマトを護るには、サテライトキャノンの力が必要だった。

つまりアキトにはいつでも機体に搭乗できる状態であってほしいのが指揮官としての考えなのだが、妻が倒れたという状況でパイロット室に待機し続けろと命令するのは、友人として気が引ける。

「彼ならもう医務室に行っています。ヤマトが回復するまでは待機してらって主張してたらしいんですけど、周りに説得されてお見舞いに行くことになったとかで」

「そうですね」、とジュンは納得して脱力して副長席にもたれる。

現在ヤマトはクルー総出で各部署の点検作業に従事していた。特に装甲外板、食料や医薬品、そしてクルーの放射線被爆の検査など、やることは山積みの状態だ。

しかしベテルギウスからまだ十分に離れたとは言い難い現状では船外作業は危険であるので延期されている。あれほどのサイズの赤色超巨星ともなれば、それこそ地球と冥王星ほどの距離が開いていてもなお、相当な熱エネルギーが作用するのだ。

——本当は点検後のほうが望ましいのだが、小ワープで離れてからのほうが安全だろう。

そう判断したジュンは改めて医療科に問い合わせ、小ワープを実行

してもクルーへの健康面の影響が少ないかどうかを問い、大丈夫だろうという答えを得てからすぐに小ワープを実行し、ベテルギウスから十分に距離を取って安全を確保、それからヤマトの全面的な検査を命じることにした。——あとはエンジンの回復を待つしかない。

それから少しして届いた炊事科と医療科の報告によれば、食料や水、医薬品への被害は最小限に食い止められたようで、いまから調整作業に入るようだ。

ただ、居住ブロックの艦首側から繋がっている農園や合成食糧用製造室には無視できない被害があつたようだ。……生鮮食料の六分の一ていどが駄目になってしまつて、食料の合成に使う培養たんぱく質やプランクトンなども、全体の二二パーセントが使えなくなつたのだという。

ただでさえ余裕のないヤマトの食糧事情がさらに厳しくなつたのは、手痛い被害だ。

しかし不幸中の幸いとして備蓄分の保存食糧は被害を受けていない。また培養たんぱく質とプランクトンも死滅してしまつたものは破棄せざるをえないが、培養装置そのものは無傷であるので、時間はかかるが回復は可能だという。

もともとヤマトには『人が生活していれば自然と出す』ものも含めて、有機物を再利用するシステムが備わつている。それらも駆使すれば回復速度の補強もできるだろう。詳細を知るとちよつぱり気分が悪くなるのだが……。

乗組員の被爆チェックも少しづつだが進行している。だが入念に施された放射線対策のおかげで、あの状況でも艦内への放射線の透過はほとんどなかったらしく、念のため検査は行われているがそれほど深刻な問題ではないと断言されていた。

「どこか、植物の自生している惑星が近くにないものかな……」

かなり贅沢な悩みだと思うが、もしもそんな惑星がヤマトの航路上に存在していたら、食用に使える植物の採取ができるかもしれない。

だが地球からの観測では発見される星の大半は恒星であり、惑星系を持つ恒星を発見しても、観測方法の関係で見つかる星の大半は褐色

矮星。もしくはは大質量の木星型惑星に海王星型惑星。地球型の惑星——すなわち水や生命が存在している星は現在でも発見されていない。メツセージを送ってきたイスカンドルが初めてと言えるだろう。いまヤマトが求めている惑星があるとすれば、恒星のハビタブルゾーンと呼ばれる生命の誕生するのに適した環境と考えられる領域内の惑星に限定される。

地球からの観測ではいくつかそれらしい星が発見はされているが、当然詳細を知りえたわけではない。仮にその領域内にあったとしても食用に適した植物がある保証はなく、ヤマトには航路予定を変更してまでそれらを探しに行く余裕はない。

つまり偶然立ち寄った恒星系にあれば幸運と考えられるほど、難しい注文なのだ。ジュンはないものねだりにしかならない補給計画を立てるわけにもいかず、副長席にもたれて悶々とするしかなかった。「艦長の不在といい、食糧問題といい、ヤマトをベテルギウスで燃やし尽くすというガミラスの策は不発に終わったが、それでも無視できない被害を受けた。——やはり油断ならんな」

「そうですね……。艦長、大丈夫かな……。しばらくはガミラスの攻撃がないことを祈りたいですね」

真田とハリの会話が漏れ聞こえてくる。

たしかにしばらくはガミラスに出てきてほしくない。

ユリカの体調もそうだがヤマトの整備のことを考えると最低でも一週間以上は——いやそもそもガミラスの妨害がないに越したことはないのだ。ヤマトの目的は戦うことではなくイスカンドルに行つてコスモリバスシステムを受領して地球を救うことなのだ。

ガミラスとの戦いは——最悪地球を回復させてからも続くだろうが、優先順位に変わりはない。

(ユリカ——。持ちこたえてくれよ、イスカンドルまで)

その頃機関室では、機関士たちが汗水垂らし油汚れに塗れながらエンジンの点検作業にいそんでいた。

さきほどの異常動作の原因の究明もそうだが、異常動作の反動でど

んな損害を被ったのかもしつかりと確認しなければならない。

幸いというか、エネルギーをほぼ使い切っている状態なのでいまは相転移エンジン共々停止状態にある。おかげで隅々まで点検することができるのでありがたいが、もし解体を要する修理作業が必要な被害を受けていたら、ベテルギウスの影響圏を抜けるまでに何日かかることになるやら――。

そんな状態なので普段はエンジン本体の整備作業には参加せず、機関制御席や制御室のコンソールからプログラムチップを担当するのが常だったラピスも、今回ばかりは本体の整備作業を手伝っていた。

髪を纏め、整備用ハッチを全開にして内部の制御装置をつぶさに点検してチップシートに記載する作業を続ける。

「……おかしい。……安全装置が全部外れた暴走状態だったはずなのに、制御パネルの大半が損耗していないなんて……」

ラピスは太助を助手に制御パネルを見て回っているのだが、予想に反して八割以上のパネルが損耗らしい損耗をしていないのだ。全体を見渡しても波動砲に関係するエネルギー収束・増幅系にダメージがある程度。だがそちらも致命的なダメージは被っていないので、部品交換ですぐに回復復旧できる程度の損害だった。

……プロキシマ・ケンタウリ第一惑星で改修して耐久力と信頼性は向上したが、あの高温下、しかも波動砲の関連システムに加えて本来想定されていないシステム起動中のエネルギーの生成と変換という異常動作をしたにも関わらず、ここまで損傷がないというのは不自然極まらない。

まるで――自己再生でもしたみたいだった。

「たしかにおかしいですね……あんな動作をしたら、制御システムの大半が壊れてもおかしくないのに……」

隣でPDAと睨めっこしながら太助が首を捻り、別の場所で点検作業中の山崎に声を掛けた。

「山崎さあ〜ん！ そっちはどうなってますか〜！」

駆動部の損耗やら安全弁の動作を確認していた山崎が、太助に負け

ない大声で叫び返す。

「こっちも目立った異常なしだ！ エネルギーを使いきって回復が遅れているが、補助エンジンからの再チャージが完了次第、通常運転可能だ！ 点検作業の終了と合わせて、二時間後には回せそうぞぞ！」

山崎の返事にラピスは太助は顔を向き合わせて唸った。

「波動砲とは無関係の補助エンジンが無事なのは当然としても……」

「エネルギーを使い果たしたただけで、エンジンが無傷に近いって、どういふことなんでしょうかね？」

ますますわからない。

そう言えば、前にユリカと食事を一緒した時に「ヤマトには命があつてね。そのせいなのか、ほんとうなら物理的に耐えきれないような負荷がかかってもときおり今生で持ちこたえちやうことがあるんだよ」とか言っていた気がする。

「本当にユリカが言っていたとおり、ヤマトが根性で耐えたってことになるのでしょうか？」

「それって凄く非現実的ですけど、あんな体験したあとだと信じる気になれますよね」

太助がなんとも言えないという表情でラピスに同意する。

「ヤマト……二六〇年の眠りから覚めた戦艦大和。そんな変わった来歴のせいなの？ それとも——」

「ただ言えることは、そんな非常識な艦が僕たちの味方だってことです……ありがたいことに」

心からの言葉に、ラピスも大きく頷いた。

さすがはユリカが必死に目覚めさせた最後の希望。その名に恥じぬすさまじい艦だった。

ブラックボックスをはじめ、ヤマトにはまだまだ秘密が隠されていることを痛感した出来事であったが、それでもラピスはヤマトに対して疑いを抱くことはなかった。

ユリカが期待をかけたこともそうだが、ラピスだってヤマトの再建には全身全霊をかけたのだ。ヤマトは秘密こそ抱えているが現在までラピスたちを裏切ったことはない。

ならばいままでどおりにするだけだ。
人類にはヤマトしかないのだから。

ルリは電算室で今回の件で解放されたブラックボックス——フラッシュシステムに関する解析作業に携わっていた。

本当はすぐにも医療室のユリカを見舞いたいのだが、仕事を放り出していくのは部下に示しがつかない。

できるだけ早く終わらせたい——と思っていたら、

「——たしかにユリカさんの仰るとおりでした。このフラッシュシステムは人の精神波を利用したマシンインターフェイスの一種です。本来はヤマトのような戦艦ではなく、人型機動兵器に使われることを想定したものだそうです。——開示されたマニュアルに記されていました。イスカンダルの通信カプセルは、そのフラッシュシステムのコアモジュールも兼ねていたようです。——おそろしい技術ですよ、まさかナノマシン構造材を活用して、これほど複雑なシステムをあのサイズまで小型化し、かつ記憶装置としても活用させるなんて……」
拍子抜けだと表情に現れるのは止められなかった。まさかマニュアルどころか設計図すら添付されていたとは。

報告を受けるジュンと真田も苦笑していた。拍子抜けしているのは彼らも同じなのだろう。

「開示された情報はこっちでも閲覧できるのかな？」

「すぐに転送します。真田さんの席でいいですか？」

「頼むよ。——それから、お見舞い行って来ていいよ」

ジュンの言葉について表情が明るくなり、はっと周りの目が気になって咳払い。「それではお言葉に甘えて」と部下に仕事を引き継いで逃げ出すようにエレベーターに乗り込む。

直前に「艦長の様子、あとで教えてください」と声をかけられたので、ルリはひとつ頷いてエレベーターのドアを閉じる。

目的地は五層構造の居住区のうち、医療室のある最下層区画。

ヤマトのエレベーターは戦闘中などの高速移動も考慮して移動速度が速いこともあって、あつという間に目的の階層に到着。耳馴染み

のいい到着音を聞きながら、開いたエレベーターのドアを潜る。

と、眼の前にリョーコとヒカルとイズミといった、ナデシコ時代からの仲間であるパイロット三人が立っていた。どうやらエレベーター待ちをしていたようだが……。

「おう、ルリじゃねえか。例のブラックボックスの解析終わったのか？」

さっそくりョーコがそう問うてきた。別に秘密にするべきこともないのでルリはすぐに答える。

「終わりました。と言うよりも、起動と同時に詳細が明かされた、と言ったほうが適切だと思います。残された別のブラックボックスはうんともすんとも言いませんし、私がしたことと言えば、開示された情報を副長に届けたくらいですね」

答えには満足したようだが、三人はそろって難しい顔。ややあつて、ヒカルが口を開いた。

「ルリルリはさ、あのヤマトの声ってのどう思う？ 艦長はとつくに知ってたみたいだったけど、本当だとしたらものすごくオカルトと言うか、ファンタジーみたいだと思わない？ 漫画とかアニメだと口ポットが意思を持ったとかかってたまにある展開だけど、現実にそういったのに直面すると、少し困惑するよ、ねえ？」

そういった方面に理解のあるであろうヒカルでも戸惑いを隠せないらしい。たぶんそれが普通の反応——いやかなり冷静なほうだと思う。

「俺はかなり面食らったぜ。まさかヤマトがオカルトな戦艦だとは思わなかったしな。——いや、沈没した大和を改造したっていうんなら、その、なんだ——戦没者の霊が出るってのなら理解できるんだけど」

リョーコは理解が追い付いていないように思えた。それでも取り乱したり気味悪がったりしている様子を見せないあたり、彼女も肝が据わっている。

「……この艦は私たちが知らない歴史を歩んできた。そういう意味ではなにがあってもおかしくないとさえ思うし、ヤマト自身の意

思からは悪意をまったく感じなかった。それにいままで目立ったりアクションがなかったことを考慮すると、相当イレギュラーな事態がない限りは扱う私たち自身の裁量にすべてを委ねるって姿勢をとつてみたいだし、過度に気にして歩調を乱すのだけは、避けたいところね」

いきなりイズミがそんなことを言い出したので、ルリだけでなくリョーコとヒカルも揃って彼女の顔をガン見する。

「——なに？」

「いや……おまえがそんなこと言い出すとは思わなかった」

リョーコが少し気味悪げに告げると、イズミは簡潔な回答で応える。

「率直な感想を言ったままでよ」

「まあ、正論かもなあ。……にしても、ユリカの奴どこでヤマトの意図ってのを知ったんだ？ ブラックボックスなはずのフラッシュシステムってのも知ってたみたいだし」

リョーコの疑問にルリは自分なりの考えを語って聞かせた。

ヤマトの出現時にユリカがガミラスの到来についても示唆していたことや、いまにして思えばその時点ですでにヤマトの意思の存在を知っていた素振りであったこと。

ヤマト再建の際無茶なボソソジャンプを繰り返していたことや、スターシアと既知としか取れない失言があったことからその時に接点を持ったらしいことが推測できること。

そのすべてを。

「……となると、ユリカはヤマトの出現時にその意志に触れたって言うのか？……ファンタジー過ぎて付いていけねえや。……なあルリ。もしかしてそのときにユリカがヤマトに影響されたのは間違いないとしてだ。洗脳された、って可能性はないよ、な？」

「……」

ルリもいまになって気になっていたことだった。

ヤマト再建に入れ込むユリカの姿は異常にも思えたのは記憶に新しい。それまで接点のなかった大和——ヤマトにああも入れ込むよ

うな人ではなかったとも思う。怪しいと言えば怪しい。しかし――。

「たしかにヤマトへの入れ込みようは異常とも思えました。でも、洗脳されたというにはユリカさんの動機と言いますか、日々の行動や言動にあまりにも変化がないので、その線は薄いと思います」

「ああ……」

妙に力が籠ってしまったルリの言葉にリョーコも納得してくれたようだ。

たしかに入れ込みはすごかったが彼女の人柄に変化は見られないし、いまだにアキト、アキトと騒いでいる。

たぶん問題ないだろう。うん。

きつとヤマトの意思とやらと妙に馬が合ったというオチだろう。言葉にしたらすつきりした。

「それはそれとして、リョーコさんたちはユリカさんのお見舞いの帰りですか？」

「ああ。アキトの奴も放り込んで来た。ダブルエックスのことを考えるとアキトは外したくなかったけど、ユリカには一番の特効薬だしな。……ユリカには無事イスカandalに辿り着いて貰って、ちゃんと治療受けさせてやらないといけないからな。――もう見捨てたくねえんだよ」

強い口調で言い切るリョーコにルリも頷く。それはルリにとって、地球の未来と同じくらい大事な案件なのだから。

「お気遣いありがとうございます、リョーコさん。ユリカさんの具合はどうでした？」

「意識は戻ったけど、辛そうだったな。ルリも顔見せに行くんだろ？ 励まして来てやれよ」

リョーコにそう送り出されたルリは、照れた表情を浮かべながら医療室に足を運ぶ。

医療室は居住区の艦首側にあるので、艦の中央より後ろにある主幹エレベーターから約六〇メートルの距離があった。

かつての医務室はエレベーターから比較的近い位置にあったそう

なのだが、まとまったスペースを確保するのが難しくなった艦内構造の改変のあおりで追いやられたのだとか……。

代り映えのしない景色の廊下をトボトボとあるけば、いつの間にか目当ての左舷医療室に辿り着いた。ルリは入り口の前で軽く深呼吸をしてからドアを潜る。

「あら、ルリさん。艦長のお見舞いですか？」

医療室に入るなり雪が声をかけてきた。どうやら医療科の手伝いに来ていたらしい。いまも医薬品の乗ったトレーを手に持っている。

本当に多芸で忙しい人だと感心する。彼女にできないことってあるのだろうか。

「そうです。ユリカさんは？」

雪は『苦笑』を浮かべて一番奥のベッドを指さす。カーテンで仕切られているようだが、人影が動いているのがなんとなくわかる。

雪の様子に察したものがああるルリは真顔で雪に軽く会釈をしてから、ユリカのベッドに近づいていく。

「失礼します」と声をかけてからカーテンを潜ると、顔色悪くベッドに横たわるユリカと、ベッドの左側で椅子に座って手を握ってやってるアキトの姿があった。

「わあ、お見舞いに来てくれたんだ」

……思ったよりも元気そうだ。アキトの表情も暗くない。いや、これは呆れ顔か。

「ルリちゃん——ルリちゃんからも叱ってやってくれない？」

「は？」

藪から棒にいったいなんなのだろうか。

「ユリカの奴、目を覚ますなり「休まないといけないんなら、一緒にゲームでもしよう」って言って聞かないんだ」

ルリは自分の視線が鋭く冷ややかなものになったことを自覚した。

「だって、退屈なんだもん。潤いが欲しいよお」

「ゲームしたら休めないでしょう。大人しく寝てなさい」

ルリは冷たく突き放すように叱った。毎度毎度どうしてこうマイペースを崩さないのだろうか彼女は。

「アキトが目の前でプレイしてくれるだけでいいんだけどなく。私見で楽しむから」

「……ここ、病室だぞ」

「うるうるうる……」

「……わかった、やるよやりますよ……」

あ、折れた。

ユリカ相手にアキトが勝てるわけがないか。

しかし、それくらいの元気があるのなら答えてもらいたいこともある。答えて貰えないだろうか。

「ユリカさん」

「ん？」

「ヤマトの意思について詳しく教えてください。それと、フラッシュシステムのことをどうして知っていたのかもです」

ルリの問いかけにユリカは困った表情を浮かべてから、やはり困ったような口調で答える。

「説明しようがないよ。ヤマトの意思って言ったってそのままの意味だし、フラッシュシステムもイスカandalとのやり取りで知っただけで、なんで提供してくれたのかよくわかってないもん」

「……」

明らかに嘘だ。彼女は真実を語っていない。ルリはなんとなく察した。

この期に及んでどうして真実を語ってくれないのかと視線で非難していると、ユリカは縮こまって「うう、ルリちゃんが怖い」とシーツを口元まで引き上げている。

「だいたい私最初から言ってたじゃない、ヤマトは生きてるって。私たちの救いを求める声を聴いて助けに来てくれたんだよおっ。ルリちゃん信じてくれなかつたけど」

「普通信じませんよ、そんなオカルト」

「それで嘘つき呼ばわりされても困るんだけどなあ……ただひとつだけ言えることはある。ヤマトはあくまで人の手で制御される戦艦としてスタイルを通してること。今回のイレギュラー中のイレ

ギター。でもまあ、普段からダメージを受けるごとに根性を発揮していくから、受ける被害が軽減されたり反動のあるシステムを使ってもダメージが小さかったりするんだけどね」

ユリカの言葉にルリはいままでヤマトの被害報告を思い出せるだけ思い出し、その前後の状況やかかった負荷、受けた攻撃の破壊係数などを頭の中でざっと照らし合わせてみた。

……なるほど、たしかに思い当たる節はいくつかある。

「正直まだ信じきれませんが……ヤマトを疑ったところで無意味だということとはわかりました。とりあえず、私のほうからも噂を流して理解を求めてみます。だから、お・と・な・し・く・休んで体力を回復してください」

強い口調で念押しされてユリカは沈黙した。そして怯えた視線でアキトに助けを求めている。失礼な！

「心配しなくてもしばらくはそばにいるって」

ユリカの顔がぱつと明るくなった。ルリはユリカに子犬のような尻尾と耳が映えて、舌を出しながらすり寄るさまを幻視した。いや実際すり寄ってるのだけでも……。

とても幸せそうだった。胸やけがする。

「ぐちそうさまでした……」

「そう言うルリちゃんもハーリー君とはどうなの？ そろそろ意識も

——
思わぬ切り返しにルリは無言で逃亡した。

そのことからかわれるのはノーサンキュー。

三十六計逃げるに如かず。

ルリは振り返ることなく足早に医療室から逃走したのであった。

アキトは振り返ることなく逃走したルリを見送ったあと、ユリカと顔を見合わせて安堵する。

筆談で相談していたフラッシュシステムその他もろもろに関して、誤魔化せたようだ。

あのシステムを積んだ理由について詮索されると、色々と隠し事を追及されかねない。

——この時点であのシステムが、それもヤマト自身の判断で起動するのは想定外もいところだ。

おまけに痕跡を残さなかったとはいえ、もうひとつのブラックボックスをも起動してしまっていたのだから心臓に悪い。ばれなくてよかった……というか、あんな使い方もできるのか……。

ついでにユリカの髪の色が急速に抜けていることも誤魔化せたようだ。体調の悪化を如実に示すバロメーターのようなものだから、今後は気を付けて誤魔化さないと——。

その後アキトとユリカはルリに対する誤魔化しも兼ねてイチャイチャしまくった。『隣のベッドに体調を崩したクルーが寝ているにも拘らず』イチャイチャラブラブの空気を出しまくって、寝ているクルーが悶えていたことには終ぞ気付かなかった。

自重とはなんだっただろうか。

で、医療室から逃げ出したルリは、偶然廊下を歩いていたハリに遭遇した。

対面するなり赤面してしまう。ユリカのせいだ！ あんな話題を出された直後で件の張本人と顔を合わせるなんて、気恥ずかしいに決まっているじゃないか！

「……その、ハーリー君……」

「はい、なんででしょうか？」

……気負いを感じられないハリの態度に妙に意識してしまっている自分が恥ずかしくなった。狼狽して特に深い考えもなく声を掛けてしまった自分の迂闊さを呪う。

なにかないか、話題がないか！

ルリは必死に頭を回転させ、実時間にして約〇・五秒の間を置いてなんとかかひねり出した珍しくもなんともない話題を口にした。

「ハーリー君、お疲れさまでした。このあと特に用事がないのなら一緒に食事でもどうですか？」

「もちろん構いませんよ。艦長のお見舞いとも思っただんですけど、アキトさんが来てるんなら邪魔になるだけでしょうし……」

「……その判断は間違いじゃありませんよ、マジで」
ルリは照れも吹き飛んで真顔になつてしまった。

結局ユリカがユリカであり続ける限り、あれは治らないのだろうと思う。

……いや、もしかしたら子供でもできて母親としての自覚が——変わるわけないか。実際ルリやラピス、ついでに進が関わっても大して変わらないのだし。

そのあとは他愛もない雑談を交えながらハリと一緒に軽く食事を済ませ、ベテルギウス突破でヤマト全体コンピュータにダメージが出ていないかをチェックするべく、第三艦橋に戻ったルリ。

部下たちにユリカが大丈夫そうであると伝えたと、自分の席に座つてコンソールに両手を置く。

「さて、お仕事しますか」

サブロウタはパイロット待機室前の廊下でハリと落ち合い、ユリカが倒れたあとのルリの様子について尋ねていた。もちろん場合によつてはいろいろとフォローを考えなければならぬからである。

「……ふむふむ。じゃあルリさんは特に問題ないつてことでオーケーだな？　ふうう。艦長も大丈夫そうで安心したぜ」

ハリの報告にサブロウタはほつと胸を撫で下ろす。どうやら今回は大事に至っていないようだ。

しかし——。

（艦長の容体がよくなることはありえない。つまりこれから先もこの問題は付いて回る……いやもつと悪くなるのは確定……。まずいよなあ、こいつは。ヤマトの威力を見たガミラスがこれから先も妨害を繰り返すつもりなら、もつと悪辣な手段をとってくるだろうし。——こうなつてくると頼みの綱は……）

サブロウタは静かにこちらを見詰めているハリと視線を合わせた。ルリがハリに甘えている場面は何度も見た。ならば彼女のことは、本格的にこいつに任せるときが来たのかもしれないと思つた。

——まだ少しだけ頼りないのが、玉に瑕だが。

ベテルギウスの近海を小ワープで離れたヤマトは整備作業を進めていた。

目立った損傷は左カタパルト損失と左尾翼半壊だけで済んでいる。フィールドに守られた艦の被害は底部スタビライザーや第三艦橋は表面が軽く溶けた程度と、想像以上に軽微であった。

これも艦長の言うところの『ヤマトの根性』であるかどうかは定かではなかったが、都合のいい結果を得られたという事実は心強いものである。

点検作業を終えたヤマトはインターバルを置いてから約一〇〇〇光年の長距離ワープを成功させることができた。

調整が進んだタキオンフィールドの保護はその威力を存分に発揮し、クルーへの健康被害も確認されなかったため、さらなる長距離ワープのテストも実施されることになった。

その距離約二〇〇〇光年。再建当初は銀河間空間に出てから、そして航行中の改良を考慮しない最大跳躍距離に、勢いに乗ったヤマトは挑もうとしていたのである。

——テストは無事成功を収めた。それは常に時間に追われているクルーたちにとって非常に心強い知らせと言えた。

——それからは日程の遅れを取り戻すべく一日一回、現時点での最長距離である約二〇〇〇光年のワープを連続して敢行した。

その間ヤマトもクルーもトラブルらしいトラブルをひとつも起こすことがなく、ガミラスの妨害も受けなかったことで順調そのものといった航海となる。

修理完了から一二日も経てば、地球から約二五〇〇〇光年の距離を走破して、あと一息で銀河系を抜け出せるところまで達していたくらい順調だった。

このときまでは。

「ワープ終了！——ん？　おいハーリー、ワープアウト座標が計算と

「違わないか？ これは——強制ワープアウトだぞ」

操舵席の計器を見るまでもない、ヤマトは本来飛び越える予定だった暗黒ガスの塊——暗黒星雲の中にワープアウトしている。

「なにか予期せぬトラブルがあったとしか考えられない。」

「こちらでも確認しました。これは……島さん！ 大質量の天体に引かれてワープ航路が歪曲した形跡があります！ 外部からの探査では発見できなかった天体があるようです！」

「ハリがコスモレーダーとワープの衝突回避システムのログをチエック、データを転送してくれた。」

安全装置による強制ワープアウトとなれば、大質量天体が航路上かその付近にあったというのが最も考えやすい原因だろう。今回は航路の歪曲も確認されているというのだからほぼ間違いはない。

「やはり、暗黒星雲を突っ切るワープはもつと慎重になるべきでしたね……」

ハリに言われずとも自責の念を感じる。ここ最近では現状で望める最長距離のワープを連続して日程を短縮することに入れ込み過ぎた。

レーダーによる探査はもちろんのこと、光学機器による探査もし辛い暗黒星雲なのだ。もつと入念にデータ収集するか、多少のロスを出してでも迂回すべきだったか。

「いまさら言ってもしかたないさ……艦長、一旦停泊して——」

航路探査をやり直しましょう、と続くはずだった言葉は、突然ヤマトを襲った振動で遮られた。

慌てて手動制御に切り替えて艦の姿勢を制御、安定を取り戻すべく舵を切る。

「島さん、面舵四〇、上下角プラス九度方向に転進してください！——ヤマトは宇宙気流に巻き込まれたんです！」

その名前はヤマトのデータベースで見ることがある。

宇宙気流。

字面のとおり、宇宙空間を高速で流れるガスなどの星間物質の流れだ。

星間物質の密度が高い宙域や、恒星やブラックホールなどの天体か

ら猛烈な勢いで放出されるジェットなど見られる現象だ。

気流の速度もさることながら、ものによっては数光年——数百光年にもわたって尾を引く巨大な流れ。場合によってはその先がブラツクホールに繋がっていることすらあるという。

「ルリちゃん、ハーリー君。気流の先の解析は？」

「少し待ってください——気流の先に強い重力場を確認。核融合反応こそ確認できませんが、暗黒星雲の隙間からとても強い光を確認——これは、原始星だと推測されます！」

ルリの報告を聞いて大介は小さく舌打ちをした。

「原始星——星として固まり始めている恒星の初期も初期の姿……そんなものの近くにワープアウトしたのか……まだ固まってないとはいつても将来の恒星候補。それだけの質量があるんなら、ワープ航路が湾曲しても無理ないか……」

ジュンが独り言ちるを聞きながら、大介はよつとの思いでヤマトを気流から脱させた。

「しかし、この気流の流れはかなり複雑だ……まさか、連星系？」

ようやく手を休めることができた大介が疑問の声を上げれば、

「周辺に同じような重力場を八つ確認しました！——なんてことだ。

この原始星は相互に水と原始雲放射線帯で相互に結び付いています！ この気流は原始星に落ち込むガスの流れと時点で生じる流れが複雑に絡み合ったものです！」

「……それって、とんでもなく面倒な宙域に出ちやっただよね……しまった、イスカandalからじゃ銀河の、それも暗黒星雲の中の原子星団なんて見つけられなかったんだ」

苦々し気なユリカの言葉に艦長席を振り向けば、やはり深刻な表情をしたユリカの姿を認めてしまう。

——どうやら一筋縄では脱出できない場所に落ち込んでしまったようだ。

ユリカは艦長席で腕を組みながら打開策を思案する。

事前提供された地図に胡坐をかいてしまったと自制すべきだろう。

スターシアから聞いたイスカンドルの現状を思い出せば、完璧な地図を用意できないことくらいわかっていたのに。

とにかく行動しなければ。クルーにも理解を求めて団結を維持しなければ、越えられる壁も超えられなくなってしまう。

そう考えたユリカがとった行動。それは――。

使われていなかったモニターに灯が灯り、ウィンドウがあちこちに開き、軽快な音楽が流れだす。この時点で艦内が沸き上がった。

「三！ 二！ 一！ どっか〜ん！ なぜなにナデシコ〜!!」

もはや恒例と化したなぜなにナデシコの開幕であった。

「おーいみんな、あつまれえ〜。なぜなにナデシコの時間だよ〜！」
「あつまれ〜」

いつものウサギユリカの隣にはすでに達観した表情のルリお姉さん、その傍らにはアシスタント担当として駆り出されたトナカイ真田の姿があった。

彼らの背景には『なぜなにナデシコ ヤマト出張篇その三〜原子星 困ってなに？ ヤマトはこれからどうなるの？〜』と書かれている。

二度と出演すまいと断固拒否の姿勢を貫きたかった真田であったが、ユリカには潤んだ瞳でせがまれ、ルリからは「ひとりだけ逃げようなんて……」と刺すような冷たい視線が向けられるに至って、諦めた。

結果、大人しく台本に従って道化を演じている次第である。

――しかし、ただで転ぶつもりは毛頭なかった。

「また放送する機会があると考えて用意していました……！ 艦長の衣装には、イネス先生の手を借りてパワーアシストを組み込んでおきました！ これで不自由な動作からは解放されることでしょう！」

やけくそ気味に放たれた真田の言葉どおり、ウサギユリカは（要らぬ）ぱわ〜あつぷを遂げていた。

アクチュエーターや強化骨格を目立たぬように、そして装着者の違和感にならないように組み込み、さらにIFS制御で全身のそれを制御することにより、ウサギユリカは杖を突いたヨタヨタしい動作から解放され、健康だった頃と遜色ない軽やかな動作を手に入れていた。

もちろん真田はこんな茶番のためだけにこんな装備を考案したわけではない。日に日に弱っていくユリカが日常生活で苦勞しないようにするためのテストとして、余裕のある衣装を使ったに過ぎない。

——あまり理解されていない気がするが。

「う、ウサギ艦長が軽やかに動いているだとおっ!？」

そんな大声を耳にして、生真面目で頑固気質な山崎はこめかみを痙攣させながら腕を組み、機関制御室の窓からエンジンルームを覗んでいた。

正直ワイワイガヤガヤと番組に夢中な部下の姿に怒鳴って叱責したい気持ち湧き上がってくるが、艦長たちが体を張って艦の空気をよくしようと努力しているのを無駄にできない。

それに番組の内容そのものは非常に大事なものであるなので見るなとも言えない。

——せめてもの救いは隣の徳川太助はごくごく普通に番組を見ていることだろうか。

もちろん太助は隣から漂ってくる不穏な空気の影響で騒ぐことができなかっただけである。

背筋を冷たい汗が流れるのを感じながら、表面上は平静を装って番組を見る。

(これで内容が頭に入ってなかったらなかったで、どやされるんだらうしなあ……!)

必死だった。

番組の内容はヤマトを捉えこんでしまった原始星団——特に眼前にある八つの原始星とそれが生み出す渦の形などから『オクトパス原始星団』と名付けられたこの宙域に因んだ雑学である。

この宙域を構成している原始星とは、ジュンが語ったとおり恒星の誕生初期の状態ことだ。巨大なガスの塊が自己の重力で収縮を始め、可視光で観測できるようになる『おうし座T型星』になる直前までの

状態を指しているという。

暗黒星雲は星間雲と呼ばれる天体の一種だ。

星間雲とは銀河に見られるガス・プラズマ・塵の集まりの総称で、なにもない空間に比べて分子などの密度の高い領域である（または星間物質の密度が周囲よりも高い領域）。

暗黒星雲の場合は光を放たず、背後にある恒星の光も通さず黒く見えることからそう呼ばれている。オリオン座の馬頭星雲が有名だ。

こういった密度の高い空間において、近くの超新星爆発の衝撃波などを受けたりと雲の中で分子の濃淡が生まれる。濃くなった部分は重力が強くなることから周囲の物質を引き付けて濃度が濃くなっていき、重力が強くなって——を繰り返して雪だるま式に濃くなっていくと、最終的に原始星が誕生するとされる。

原始星は周囲の物質が超音速で落下していくため衝撃波面が形成されている。その面で落下物質の運動エネルギーが一気に熱に変わるため、主系列星よりも非常に明るく輝くのだが、このときはまだ周囲を暗黒星雲で覆われているため外部から可視光で観測することはできない。

だが自己の重力で収縮が続き、重力エネルギーの開放で中心核の温度が上昇していくと恒星風により周囲の暗黒星雲を吹き飛ばす。

こうして可視光で観測できるようになった『おうし座T型星Ⅱ Tタウリ型星』の段階を経て、最終的に中心核で水素の核融合反応が開始すると主系列星になる。

恒星系の形成は『おうし座T型星』の段階で星の周囲を回転している濃いガスの円盤の中で行われる。

原始星に取り込まれなかった塵がぶつかり合って微惑星になり、それが集まって原始惑星が形成されていくとシミュレートされているが、現在の地球でも詳細を観測しきれないため仮設・憶測である部分もまた多い。

ただひとつ言えることがあるとすれば、星として固まり切る前のその天体の規模は、周囲を取り巻く構造を含めて計測すれば極めて膨大であるということだ。

ヤマトの眼前にはその原始星が八つも連なり、巨大な壁として立ちふさがっている。しかも厄介なことちようど原始星の自転軸と連星系の公転軸に対して平行に突っ込んでしまっているため、原始星の周りを廻っているガスの流れすらも壁になってしまっていた。

さらに暗黒星雲自体が普通の宇宙空間に比べて密度が高いため、タキオン粒子を使った超光速・広域レーダーであるコスモレーダーも障害物過多で観測範囲を著しく減退させていて、ヤマトは眼前の状況を探るのが精一杯となり、脱出路を探し出すことにすら難儀していた。もちろんワープ航路の観測すら満足にできないので、適当にワープして離脱するという安易な選択も封じられていた。

こういった危険性を有する暗黒星雲だからこそ、ワープで一息に跳び越えたかったのだが、その濃密さゆえか、外宇宙航行の経験値の不足ゆえか、不幸な見落としがあったようだ。

もつとも、イスカンドル製ワープシステムの緊急回避システムが優れていなければ原始星の中に飛び出して一瞬で破壊しつくされていただであろうことを思えば、幸運と言えるのだが。

そんないまのヤマトにできることと言えば、ワープ前の外側からの観測データを基に全体の天体の動きを予測しつつセンサーの感度が許す限り眼前の原始星団を観測して、活路を見出すことだけである。

……それができなければ、ヤマトは朽ち果てるまでこの宙域に釘づけにされるだけとなるであろう。

最終手段の波動砲を使用した強制ワープゲートの構築にしても、連星系が生み出す複雑で広域に及んだ重力場に加え、宙域の全貌が見えないことから自重することになった。

もし強行したとしてもそれこそ最悪の事態を招くだけであろう。

通常航行での離脱もまた現実的とは言えなかった。ヤマトを飲み込んだ暗黒星雲は大きさが四〇〇光年にも達しているため、ワープなしで離脱することは実質不可能。

ヤマトのワープ記録を見る限りではヤマトが停止した位置はちようど暗黒星雲を突き抜ける寸前らしいことが伺え、この距離なら通常航行でも抜け出せる位置だった。が、そのためには眼前のオクトパス

原始星団を突破する必要がある。

だが眼前の星団は巨大で危険となれば迂闊に突っ込むことはできない。そんなことをすればヤマトはあつという間に宇宙の藻屑と消えるだろう。

傍から見ればものの見事に詰んだような有様だが、ヤマトが誇る天才頭脳とオモイカネは、わずかな可能性を見出すことに成功していた。

「と言うで、ヤマトはしばらく現宙域に留まりあの八個の原始星が生み出す嵐の中心点——海峡と呼べそうな場所の探査を続けることにしました。このオクトパス原始星団は水と原始雲放射線帯で相互に結び付いていて、それが猛烈な力で渦巻いている危険な宙域だけど、相互に作用しあっているのならどこかで力と力がぶつかり合って相殺した場所とか、もしかしたら台風の目よろしく穏やかな場所があるかもしれないんだよ」

「じゃあお姉さん、ボクたちはそんな海峡を見つけ出してから通り抜けたほうが、迂回するよりは早く突破できるんだね？」

「そうだよ、ウサギさん。もしかしたら三週間くらい足止めされてしまうかもしれないかもしれないけど、テレビの前のみんなも変に焦ったりしないで、気持ちを大きくして待っててね。じゃ、また次回の放送までさようなら」

その台詞はオクトパス原始星団に捕らわれたヤマトの、長い長い闘いの日々の開幕であった。

ヤマトがオクトパス原始星団に捕らわれて一週間が経過した。

電算室を要する第三艦橋と航行艦橋である第二艦橋では、航海班とオペレーターが日々協力してオクトパス原始星団の探査・解析作業を続けていた。

しかし、原始星やヤマトを覆う濃密な星間物質と強烈な放射線に阻まれていた。探査は困難を極めていた。

誰も責めるようなことはしなかったのだが、航海班の面々は目に見えて意気消沈しており第二艦橋は常に重苦しい空気に包まれていた。特に責任者の大介と補佐役のハリの落ち込みはすさまじく、痛ましかった。

仕事柄第二環境に訪れる機会の増えたルリはそんなハリ（と大介）を見てられなくなり、いままで支えて貰った恩を返さんとそれはもう優しく大らかに接した。

今日も今日とて励ましついでに一息ついてもらうためにも、艦内の空気を気にした雪と一緒にコーヒーを差し入れに行ったのだが……。

「んっ!？」

やれやれ、と疲れた表情で雪が淹れたコーヒーに口を付ける大介。……恋した女性が（仕事の一環でしかないとはいえ）手ずから淹れてくれたことに内心喜びながら一口飲んだ……そして速攻で顔を顰める羽目になった。

「——なんだこのコーヒーは……！ 控えめに言っても不味い……！」

自分の一言に雪の笑顔が凍り付いたのは自覚したが、それでも言わずにはいられなかった。これじゃあ士気が下がってしまう。

「——ははは、そのう……美味しいですよ……！」

苦い顔でお世辞を言うハリのほうがおそらく応対としては正しい——とは言えないが無難だったと思う。といってもハリの場合は凍った雪の笑顔が怖かったからだ、後に述懐していたが。

そして案の定というか、ハリの言葉に素早く食い付いた雪が「あらそう！ ならもう一杯いかが？」とそれはもう嬉しそうに告げるのだが、流石に世辞でも二杯目は嫌だったらしく、「もう結構です」と断っていた。

「ハリー君、それが正しい選択です。……時には相手を傷つけると知りながらもはつきり言わないと、アキトさんみたいな目に会いますよ」

ルリは勇気を振り絞っておかわりを断ったハ리를フォローしてい

た。

……そういえば進から聞いたことがある。かつてアキトはユリカが差し入れた『夜食（本人曰く『劇薬』）』を食べるようにせがまれ、悶絶したことがあるのだと。

しかもその時はあのメグミ・レイナードも『栄養ドリンク（本人曰く『殺人ジュース』）』を立て続けに飲まされさらなる地獄を見たとか何とか。

——さらに聞いた話では、結局ユリカのメシマズは改善されていないので、今後の過程において、すっかり仕込まないといういろいろ大変かもしれないと頭を悩ませているらしい。そうやって思考を脱線させていたら雪が口角をピクピクさせていた。もう笑顔を取り繕う余裕もないらしい。

……その顔を見て一口飲んでから手を付けていなかったコーヒーを気合で飲み干し、空になったカップをカートの上に置いた。

全員がそんな感じで実にギスギスした空気でカップを返却すると、雪は怒りのオーラを纏いながらワゴンを押して、第二艦橋をあとにした。

そんな雪の様子に第二艦橋の空気も和らぎ笑いが起こったので、彼女には悪いが助かった。——と思ったのだこのときは。

しかしリベンジを誓う雪は毎日のようにやってきては『一向に上達しないコーヒー』を飲まされ続ける羽目になったのは誤算であった。

それからヤマトはたびたび宇宙気流の流れに翻弄されることになった。気流の流れは星系という視点で見ればある程度一定しているても、ヤマトという小さな小さな存在にとっては決して一定とは言えない規模で変動を繰り返している。

高速で激突するガスと微天体によつて、ヤマトのディスプレイもフィールド発生器にも大きな負担を強いていて、工作班と戦闘班はひっきりなしに発生器のコンディションを確認し、破損が見られる場合はすぐに部品を交換したり、発生器をローテーションさせて使用することでパンクを防ぐなどの対応を求められ、思いのほか慌ただしい

日々を送ることになっていた。

そうやって気流の流れの変化に翻弄され、安全を確保するために動かされたことでヤマトは自身の所在を徐々に見失っていき、海峡の探查活動にも支障をきたすようになっていった。

ガミラスの罨よりもよほど過酷で容赦のない、大自然の猛威。それがヤマトの眼前に立ちはだかつていたのである。

第十三話 銀河の試練！ オクトパス原始星団を超える！ Bパート

……それからさらに数日が経過した。

オクトパス原始星団に捕らわれて以降、ヤマトはワープや波動砲も使用していないし、気流から逃れるための移動を除けば停泊しているのに等しい。

またこのような環境下ではいかにガミラスとさえどヤマトを補足して戦いを挑むことはないだろうと判断されたため、ヤマト全体で機能を維持できる範疇での整備と改修作業が行われていた。

特に作業の進展が著しかったのが搭載機の改修作業であった。

鹵獲したガミラス機を解析して判明ことであるが、ガミラスの使用している相転移エンジンの完成度はこちら側を凌駕している。

人型機動兵器に比べると内部構造にゆとりがあるからか、全体的に大型でゆとりのある設計であったので、そのままコピーしても役には立たなそうであったのだが、ばらして解析を続けた結果部分部分応用可能な技術を発見することに成功したのである。

それを基にしてエネルギーの変換効率や回復速度の向上や、より安定性を高める措置を加えつつ、コンデンサーも見直すことで全体的な性能向上を図っているのが現状だった。

改修作業はまだ途上ではあるが、完成すればいままでもよりもずっと効率的にエネルギーを使えるようになるので継戦能力が格段に向上することは間違いない。

それに加えガミラス機が採用していたパルスビーム砲を参考にすることで、射撃系ビーム兵器全般の威力と射程の強化も並行して行われている。

対空戦闘の主力兵装がビーム兵器に偏っていることは否めない現有戦力に置いて、この改修は魅力的なものとして歓迎された。特にGファルコンの大口径ビームマシンガンは敵のパルスビーム機関砲と

構造や原理が似ていたため特に強化が著しい。

ダブルエックスのバスターライフルも、アルストロメリアの内蔵型ビームライフルもこの恩恵でより強力になった。

グラビティブラストのほうもコンデンサーとジェネレーターの改良によって性能を向上できるらしく、この基礎改造だけでもコスモタイガー隊の打撃力は格段に向上したと言っても過言ではないだろう。

だがアルストロメリアの強化はこれに留まっていない。

改修によって出力に余裕が生まれたことからオプション装備の拡大も始められたのだ。

今回新たに考案された装備は『アトミックシザーズ』と呼称される武装だ。

これは腰に増設されたハードポイントを介して接続する、多関節アームとビーム砲を内蔵したハサミがセットになった遠近両用のマルチウエポンである。

多関節アームは伸長状態ならばアルストロメリアの両腕部よりも長く伸ばすことができ、自由度も非常に高い。先端に据え付けられたハサミはマニピュレーターとして機能し、精密作業に耐えうる器用さも、機動兵器を捕縛するだけのパワーも兼ね備えている。

ハサミの中央部には内臓式のビーム砲が内蔵されていて、多関節アームと併用して非常に広い範囲に発砲できる。火力も腕部内蔵型ビームライフルとほぼ同等を確保した。

さらにハサミ部分にはディスプレイションフィールドの中和システムが組み込まれているため、接近して対象に閉じた状態で突き刺し、ハサミを開くことでフィールドに穴を開けてからビーム砲を発砲することでより効率的に対象にダメージを与えられるように考慮されている。

そしてつい最近存在が知れたブラックボックス——フラッシュシステム。

これらはダブルエックスとまだ開発中のエックスの二機に搭載され、機体の制御やオプションの制御に使えるかの試験も開始された。

現状ではIFSとの競合が懸念されているが、うまく住み分けができればパイロットの不足から使用できていない、分離・合体を交えたGファルコンとの連携を実現できるかもしれないと期待されていた。

また月臣に至っては「以前のエステバリスにあったワイヤードフィストの機能と併用すれば、短距離限定で疑似的な全方位攻撃ができるのではないか」という意見を提出し、彼の機体を使って今後テストを行ってみる予定にもなっていた。

その改修作業にはヤマト機関長ラピス・ラズリも関わっていた。機関部門責任者としての知識と優れたプログラマーとして技術を買われ、エンジンや出力系のプログラムを最新のものにアップデートする作業に協力したのである。

もちろん力の及ぶ範囲で最高の仕事をした、これ以上はないと胸を張れる出来栄えだった。

しかし成果に反して、ラピスの胸の中にはモヤモヤした感情が渦巻いていた。

……結局今回も、IFSを使わなかった——いや、使えなかった。そのせいで作業時間が伸びてしまったのが、なんとなくしこりとして胸の内に残っている。

もちろん仕事に手抜きはないし、最終的な完成度も遜色ないと自負している。

現在ヤマトは停泊中とはいえ、限られた時間の中で目的を果たさなければならぬヤマトにとって時間はなによりも貴重。

それを個人的な感情で無駄にロスしたのではないかと考えると、気持ちモヤモヤする。

根が真面目なラピスはなかなか割り切ることができず、気恥ずかしさからエリナをはじめとする親しい大人に相談することもできず、ずるずると引きずってしまっていた。

——それで勤務時間外でも落ち着かず、いまもこうして寝付けないでベッドの上で悶々としている。

——部屋にいても落ち着かない。これなら機関室の様子でも見えてきたほうがマシだ。

ラピスはベッドから這い出すと手早く着替えて足早に機関室に向かう。

ちょうどプロキシマ・ケンタウリ第一惑星で確保した耐熱金属を組み合わせた部品への置き換え作業も進展している。……確認作業の人手が増える分には構わないだろう。

機関室に足を踏み入れると、徳川太助が相転移エンジン部分に取り付いて汗水流して整備作業に勤しんでいた。

隣には山崎奨も指導のためか、マニュアルと工具を片手に口と手を出していた。

普段から口うるさいと言われがちな山崎であったが、その表情は穏やかさを感じさせ、漏れ聞こえてくる会話にも棘は感じない。どうやら太助はよくやれているらしい。

——いつまでもこうして見ているのも悪いだろう。とりあえず挨拶をしておこう。

「こんばんは徳川さん、山崎さん。エンジンの様子はどうですか？」
太助は驚いたように振り向いた。勤務時間外で就寝しているはずの時間なのだから当然だろうか。眠れないにしても部屋で休んでいるのが定石であろうし。

山崎も同じような視線を向けつつ「どうかなさったのですか？」と尋ねてくる。

……彼は実の子同然の年齢のラピスにもこうして敬意を表してくれるので、上司としてありがたく思うと同時に少々申し訳なく思える。

——経験と実力、どれをとっても彼が機関長に相応しかつたのだ。ラピスが割り込まなければ、彼がその立場に就いていたであろうし、それが相応しいのではないかと考えたことは一度や二度ではない。

でも彼なら、自分の悩みを受け止めてくれるのではないだろうか。少しだけ、機体を抱いてしまう。

一方で山崎は突然現れたラピスに戸惑っていた。顔を見ればなんらかの悩みを抱えているようではあるが、はたしてこちらから問いたすべきなのだろうか。

「機関長？ 今日はまだ終わりのはずじゃあ……」

「ちよつと眠れなくて……」

太助の問いに言葉短く視線を逸らしたラピス。

太助と顔を見合わせて少し悩んでから、「なにか悩みごとですか？」と異口同音に尋ねた。

ラピスは少し悩んだ素振りを見せたあと、周囲を見渡してから少し沈んだ声で悩みを打ち明けてくれた。

——その悩みは単純でありながら、それでいて根深いものだった。

山崎もヤマト配属が決定され、上司になる立場の人間が年端もいかぬ少女であると聞かされた時、その素性を訪ねたことがあったが、こうした悩みを抱えていることにまでは考えが追いついていなかったようだ。

——彼女は人為的に遺伝子調整を施された人間として生まれてきた。それゆえに普通の人間では持ちえないほど高いIFS適性を与えられ、より高度なオペレートが可能になっている。

そういつた存在ゆえに、まともな戸籍もなくずっと研究素材として扱われてきた経緯があり、紆余曲折のはてにアキトやエリナと出会い、その生活が激変したのだという。

ふたりは人間として不完全だった彼女に対してよくしてくれていたのだという。

ただ、当時の問題から（山崎はその『問題』というのがおそらく公然の秘密として処理されているアキトと火星の後継者との戦いに関することだと察した）あまり外部の人間と接することはなく、自分と他者との違いというものをあまり認知しておらず、漠然とした認識しかもっていないかったのだという。

そしてその違いを身をもって知ることになったのがヤマト再建プロジェクトに従事するようになってからだ……と。

——彼女はヤマト再建作業においてシステムプログラム関連の作業に従事していたのだという。またユリカと接触してからは特に最後の最後まで形にならなかった機関部の再建作業に熱を上げていて、おのれの能力を隠しめせず存分に活用して挑んでいたのだという。

もちろんそのおかげでヤマトは間に合ったわけだが、その生活の中で彼女は自分と他人の『違い』に関する決定的な言葉を耳にしてしまったのだ。

「遺伝操作で生まれた？　へえ、つまり俺たちとは生まれた時から出来が違うってことか。じゃああの才能も納得だな」

ショックだったと彼女は言った。多分その人物に悪意はなかったのだろうとも。事実の彼がラピスを悪く言ったと言えるのは、彼女の知る限りではそれだけ。作業中に顔を合わせても表情や言動から読み取れる限りでは悪意は感じなかったし、いろいろと差し入れをくれたり休ませてくれたりと、気を使ってくれている人物だったとも語った。

だが、偶然ではあったが聞いてしまった事実は消せない。

自分がネルガルの研究所で生まれたことも『実験体』であり『改造された人間』だと言う認識はあったが、はつきりとした形で突き付けられたのは初めてだった、と。

自分がどれほど素晴らしい仕事をしたとしても、『改造されているのだからできて当たり前』であり、そうでなければ問答無用で『失敗作』と呼ばれる存在なのだ、否応なしに突き付けられたのだと。

……その事実を意識した瞬間、ラピスは自分自身の在り方に迷いを抱くようになったのだと、沈んだ声で語った。

それ以来彼女は時間の切迫しているヤマト再建作業は効率重視で与えられた才能を——IFSを使ったオペレート能力を使うことに抵抗を覚えてしまったのだという。

だからヤマトに乗る決意を固め、機関部門の総責任者として第一艦橋の機関制御席を任されることになった時も、ほかの同類ふたりとは異なり制御システム改修の一切を断ったのは、忌避感があったからなのだ。

——なるほど、道理で不自然さが残る仕様になったわけだと、山崎はいまさらながら理解した。

……同じ遺伝子操作の結果『普通ではない』能力を得て生まれてきたルリとハリは、そのことに対してなにかしらの葛藤を抱いているよ

うには見えない印象がある。

山崎の見立てでは、ルリはとつくにそういったものを克服してしまっているのだろうし、ハリはまだそういった壁にぶつかっていないか、敬愛しているルリと同じなら誇らしいとでも考えているように思える。

(本来なら相談相手として最も相応しいはずのルリさんも艦長絡みであのありさまでは、なかなか相談相手に恵まれなかった、ということころか)

山崎はラピスとの人間関係において踏み込みが足りていなかったことを痛感した。

山崎は別にラピスを軽んじているわけではないが、やはりまだまだ若い少女というだけあって、距離感を掴みかねていたのは事実だ。上司として、そしてその手腕と知識に敬意を損なわないようにしていたが、年頃の少女に対する接し方としてはもう少し業務外で気遣いが必要だったかと猛省する。

——ついつい太助やほかの若造たちの教育ばかりに熱を入れてしまっていた。……少女相手にいつものノリで説教などできないし。

さて、どうアドバイスすべきだろうか。

年長者として山崎は少し考えこんだ。

……結局問われるままに悩みをすべて打ち明けたラピスは、気分が少し軽くなった代わりに羞恥を覚えていた。

上司としては軽率な行動だったといまになって思う。弱みがあったとしてもそれを見せずに胸を張らなければ、部下はついてこないだろうに……。

「……その気持ち、ちょっとわかります。僕は遺伝子操作とかとは無縁ですけど、立派な父親がいましたから——その背中に憧れて同じ道を進みましたけど、よく父と比べられて……いまだって山崎さんにそうやってどやされていますし」

太助の言葉にラピスは少し驚いたあと——山崎への視線が厳しくなったことを自覚した。

「それはだな……」

彼は予想外の方向から切り込まれて狼狽しているようだが、いまのラピスにはどうでもいいことであった。

「偉大な親がいると、子供はどうしても比べられます。親父のことは心から尊敬してるしあんなふうになりたいとは願ってるんですが……やっぱり比較されると辛いときってありますよ……。失敗したときに親父が泣くぞ！ とか……。言われなくてもわかってるのに」

ついに視線の温度が氷点下まで下がったことを自覚した。——頼れる大人だと思っていたのに。

「訓練学校の時は特に酷かったですよ。同級生はもちろん教師からも頻繁に比較されてましたし。——その点山崎さんはいいですね。口うるさくても指導に手抜きはないですし、現場でミスしたら叱責されるのはあたり前って言えばあたり前ですから。いまだってこうして休憩時間を割いて面倒見てくれてますし」

ほう。山崎は違うといのか。

「あー……。それはだな……。ほんっ！——俺はおまえの親父さんに世話になったことがあるからな。代わりにちゃんと背を押してやろうとしてるだけだ」

——なるほど。これは失礼な誤解をしてしまったようだ。反省しなければ。

「色眼鏡で見られる気持ちはわかりますし、結局大成したとしてもついて回ることもなのかもしれない……。でも僕はこの道を突き進んでいっつか必ず親父に追いついて——追い越す。そんな色眼鏡を吹き飛ばすくらいに立派になればいい、スタート地点がどうであれ、これが僕の実力だ！ って。機関長もいつそ開き直つちやえばいいと思いますよ。IFSを使うのが使うまいが、機関長は立派なんですから」

太助の言葉に思わず泣きそうになってしまった。こんなにも立派な部下を持ってて私はとても幸せだと思う。

「なるほどね……。IFSをやたらと忌避していたのはそういう理由だったわけね」

聞きなれた声にぎくりと体を硬直させ、ギリギリと錆びた扉のようにゆつくりと振り返る。……。いつの間にか機関室に入り込んでいた

エリナの姿が視界に入った。

「え、エリナ……」

なぜだか説教されそうな気がして身を縮こませる。

そんなラピスの姿がおかしくて、エリナは薄く微笑んだ。

「ま、なんとなくわかってたけどね。いろいろと裏で注意喚起してただけど、ちよつと遅かったのか。にしても、そういう相談ならまずユリカにしておくべきだったんじゃないの?」

「でも——ユリカだって忙しいし……」

「あの娘もね、軍人の家系として高名なミスマル家に生まれて、その長女として扱われることを窮屈に感じてナデシコに乗ったような娘なのよ。そう、その徳川太助と同じような悩みを持って生きてきたんだから」

ナデシコに乗っている当時は理解しようとしていなかったが、いまなら理解できる。

だからこそ彼女にとってそういったしがらみが無縁のアキトは『王子様』だったのも、同じように（アオイ・ジユンを除けば）家名のしがらみをまったく気にしない連中の集まりだった『ナデシコ』という場所が、この上ない宝であったのだろうということも。

そしていま、その場は『ヤマト』へと移った。

厳密には『ナデシコ』までとは少々意味合いが違う。彼女は家名こそ振り切ったが、今度は『ヤマト艦長』として自ら縛られているし、エリナには名前以外の情報がほとんど伝わっていない『沖田十三』という人物の背を追いかけている。

いまのラピスならそれを察せないわけがない。相談を持ち掛けることを遠慮する判断は決して間違いではないが、それはそれで保護者としては寂しさを感じる。

——アキトもエリナも、他人からの視線や評価などにそれ相応に悩まされた経験はあるし、なんやかんやでそれを乗り越えてきた。

——だからもう少し、もう少し頼ってくれたって……まあ人間関係の輪を広げていること自体はもう手を挙げて喜んでいるのだけでも。

「そうだったんだ……知らなかった」

「そうよ。アキト君だって、コックになりたいって願いながらもパイロットとして戦うことを求められてたり、自分がなりたい自分と他人が求めている自分ってのが上手く合致しなくて苦しんでたんだ経験があるんだから、口下手で要領を得た回答は得られないかもしれないけど、相談するのが無駄って人物でもないのよ?」

少々手厳しいが、実際アキトにこの手の人生相談を持ち掛けても要領を得ない回答しか返ってこないのだから仕方がない。

「悩むことを恥ずかしがることはないのよ。人間誰しもそうやって大きくなっていくんだから。だから思いつきり悩んで、ひとりであろうにもならなかったら誰かに相談したりして、自分なりの答えを見つけていけばいいのよ」

諭されたラピスはこくりと頷く。

やはりこの若さと経験で、機関長という大任を拝命したのは負担だったのだろう、これからはもう少しラピスにも気を配らなければ、とエリナは思った。

この一件もあってか、ラピスは太助、山崎両名と親密な関係となり、特に年齢が近い太助とは急速に仲良くなった。

山崎も「上官に対する礼を失しない程度に相談にのりましょう。おじさん代わり思っていただければ光栄です」と提言してもらえたこともあって、以降技術面だけではなく身の上話——それも『家族』には打ち明けにくい話を山崎に聞いてもらうことが増えたのであった。

……が、そのことを知ったユリカが「頼ってもらえないよ……!」と滂沱の涙を流し、アキトも「そっか。もう親離れか……」と若干落ち込んだりして、そのことを知ったラピスが大いに慌てたという。

……ヤマトがオクトパス原始星団に捕らわれて二週間が経過した。

旧ナデシコクルーの影響で比較的空気の軽いヤマトの艦内も、徐々に不穏な空気が蔓延しつつあった。

些細なことで諍いが発生する様になり、脱出路を発見できない航海

班もピリピリした空気を出し、艦内の空気をさらに悪くし始めていた。

また、弱り始めたユリカが再び体調を崩して寝込んだのも事態を悪化させていた。

というのも彼女は普段から艦内を見回ったり放送で一日の開始を告げたりと、過酷な航海でクルーが精神的に参らないように艦内を明るくしようとあの手この手を尽くしていたのだ。

しかし体調不良でそれが敵わなくなれば、彼女へに心配が転じて不安となり、クルーたちの心の平静を奪っていった。

艦長室で家族や友人に囲まれて心身を休めながらも、ユリカは艦内の空気が悪くなったと聞いてそれを解消する手段を色々と考えていた。

「——と、言うわけでルリちゃん、エリナ、協力して！」

ベッドの上で上半身を起こし、世話に来てくれたルリとエリナに拝むように頼み込む。

ルリは露骨に嫌な顔をして、エリナも渋い顔をするが……艦内の空気をこのままにはしておけないと、渋々ながら了承してくれた。なので次は——。

艦長室に呼び出しを受けた真田と進は、一体何事かと不安と困惑を抱えながら主幹エレベーターを昇り、緊張しながら艦長室のドアを叩く。

……で、ドアを潜ったあとエリナとルリも合わせて艦長直々に要請を受けたふたりは、渋い表情で顔を見合わせてから——結局応じないわけにはいかなかった。

「——なあ古代。断り切れない俺は弱い人間か？」

「——いえ、そんなことはありませんよ、真田さん……」

艦長室を去り、後方展望室に傷心を癒すためにやってきた野郎ふたりは、互いの肩を抱いて慰め合う。

……彼らの中がより一層深まったことは、言うまでもないだろう。

「はあ〜い！ 今日日は日頃頑張ってるヤマトの乗組員のみんなを励ますべく、ウサギさんとお姉さんとお兄さんとトナカイさんが応援に来たよ〜〜！」

そう、かつて第二回放送終了後にユリカが舞台裏で閃いたとおり、人気番組なげなにナデシコのキャラクターとして握手会（写真撮影付き）が実施されたのだ。

ウサギユリカとルリお姉さんを中心に、脇に控える生贄二名。

普段から乗組員の憩いの場として、こういう時には有視界による天体観測の場として活気溢れる舷側大展望室。その右舷側がなぜなにナデシコ出演者のイベント会場に早変わりしていた。

工作班主導の下、リサイクルも考えられた装飾で染め上げられた会場。そんな会場に足を踏み入れるべく廊下にすら連なるクルーの列、しかも長蛇の列だ。

そんな盛況な会場の様子を遠い目で眺めるアキト。あのあと事後報告に近い形でこのイベントのことを聞かされ、文句も挿めず会場護衛の任についていた。

——いまアキトの心境は、窓の外を高速で流れるガスと微小天体の如く荒れている——ようなそうでないような。

「——みんな、娯楽に飢えてるんだな」

出演者の傍らで、同じく護衛担当のゴートと月臣、サブロウタも無表情に頷く。

予想外の盛況ぶりに言葉を失ったのは彼らも同様である。

「——アキト。艦長のアイデアに付き合わせて大変だなあ」

パイロット仲間として、ルリの保護者として最近打ち解けてきたサブロウタにそう語られて、アキトはなんとも言えない顔をする。

「……本当は大人しくしてて欲しいんだけどね。サブロウタもありがたいかな、手伝ってくれて」

「気にすんなって。ルリさんの護衛役なんだね。……しかしまあ、盛況だねえ〜」

そういうサブロウタ——つまりアキトたちの眼前ではなぜなにナ

デシコ出演者の握手会と写真撮影が行われている。

基本的に希望すれば全員との握手や撮影、場合によっては複数のキャラクターと同時に撮影可能と言う大盤振る舞いのサーピスに、大體どのクルーも全員分と撮影してホクホク顔で帰って行く。

(みんな、成人してるんだよな?)

アキトはついつい首をかしげてしまう。

よくも悪くも変わり者が多かったナデシコならともかく、職業軍人——それも敗戦一步手前というか事実上の敗北を経験している軍人たちが半分は乗り込んでいるはずのヤマトなのに、どうしてこうもお遊びに真剣なのだろうか。

——いや、むしろ追い込まれ過ぎた反動なのだろうか。

眼前では艦長自らが着ぐるみを着て先陣を切っている。

——嗚呼、結局真面目な軍人さんすら毒したのは我が最愛の妻であつたか……。

アキトは世の理不尽さというかなんとか、とにかくになにかを実感したような気がした。

そういつた外野の思いを蹴り飛ばしつつ盛況のイベント会場。

基本的には握手と撮影のみだが、本当に病人かどうか怪しく思える溢れんばかりの元氣にアキトやラピスすら魅了した着ぐるみの手触りが人気のウサギユリカ、羞恥で頬を染めているのが萌えと大人気のルリお姉さんが人気をほぼ二分していた。

が、生贄梓の進と真田も専ら弄りネタ確保のためだろうが、そこそこ人に囲まれていた。

それぞれお兄さんの格好とトナカイの着ぐるみといういつもの格好で、「ああ、早く終わらねえかな……」と魂が半分飛んでいる放心状態であつた。

もちろん握手や撮影を願うクルーたちの顔にも邪悪な笑みが浮かんでいたと言われ、それからしばらくは密かにからかいの種になっていたとかいかなかったとか。

なお、期待に目を輝かせながら列に並んでいたラピスは山崎を保護者代わりに同伴しつつ、半暴走状態で全員に飛びついてハグを求める

羽目の外しっぷりであった。

もしかしくなくてもエリナのコスプレ趣味の影響を受けてしまったのかもしれない、とはアキトの言い分であり、エリナはその発言に対して静かに反論したという。——そっぽを向いて。

「ご苦労さま、進君。ユリカの無茶に付き合わせて悪かったね」

優しいがとても強い同情の念が込められたアキトの視線に進は、

「——これで艦内の空気がよくなるのなら本望です……」

と激しく疲れた顔で返す。

イベントは無事成功と言える成果を収め、クルーたちの焦りもいくらか癒されたようだった。

——そうなってくれなければなんのためにこんな恥をかいたのかわからない。

「……いやほんとにありがとう。うん」

アキトは痛ましげな表情でさらなる労いの言葉を送ってくれた。

ありがとうお父さん。その言葉を貰えただけでもがんばった甲斐があったよ……。

ナデシコCに乗る前の自分だったら断固拒否の姿勢を崩さなかっただろうに。本当に変わったと自分でも思う。

——十中八九、ユリカに振り回された影響だろう。これがいい意味での成長なのかどうかは判断付かないが、成長しないよりはいいのだと思う。心底。

「……この二週間、艦内をそれとなく見て回ったり、雑談やゲームに参加したりしてみましたけど、艦内の空気の悪さは目に見えていましたからね。ただでさえ一三日以上の遅れを出しているのにこの停滞。気が気じゃないのはだれしも同じでしょうし」

これまでに艦内を巡って集めた情報をアキトに報告しておくことにした。彼の耳に入れておけば、自然とユリカの耳にも入る。

自分で報告に行くのが一番早いのだが、どうにも時間が合わないのだ。

「話を聞いた限りだとユリカさんが倒れたことが堪えているクルーが

多いようです。地球のタイムリミットまではまだ一〇カ月半の時間ありますが、ユリカさんの余命はあと四か月ちょっと。アキトさんが最初の口喧嘩で余命半年なんて口走ったから、時間がないっていう強迫観念が強いみたいです」

「……………」

進の言葉を受けて、アキトは勢いで口走ってしまったことをいまさらながらに後悔しているようだった。

あの状況では無理らしからぬことと思っではいる。むしろユリカが想像以上にみなに慕われ、愛されていることが驚きであったとも思っている。

失礼ながら、たしかにユリカは優れた指揮能力を持っている。が、その型破りな振る舞いに頭のねじが五・六本飛んでるんじゃないかと疑わしい言動や性格など、万人受けするタイプではない。

にも拘らず目立った不満が聞こえてこないのは、このような過酷極まる旅路にあってはその性格こそが精神的支柱として機能しているということなのだろうと推測はできる。

なるほどたしかに、これは機械では真似できない。これこそがいまもってなお生身の人間でしか発揮できない、『艦長に求められるアイドル性』というものか。

「いまはまだユリカさんが動いているからなんとかなっています、今後さらに病状が進行したら——」

「日程の遅れによるプレッシャーが、ますます強くなるだろうね」

アキトの返答に進も頷く。これからは、だれもがこの命題と向き合っていかなければならない。

——だがはたしてどうにかなるのだろうか。

ヤマトには、ユリカに肩を並べるほどの影響力を持った人間がほかにいないのだ。

ルリもジュンも指揮官を経験したことのある優秀な人材ではあるが、ユリカの代わりが務まるほどの求心力はない。——特にジュンは日ごろの影の薄さがどうにも——。

ルリはマスコットとしての人気はあれど、ことヤマト艦内に置いて

『指揮官』としての評価が高いかと言われると苦しい。

レクリエーションとはいえ、彼女はユリカに太刀打ちできずに敗退している。それに彼女はいろいろと精神的な脆さが知られてしまっている。

ましてや彼女に白羽の矢が立つとしたらそれはユリカが倒れた時——彼女がヤマト艦長としての重みに加え、状態が悪化したユリカの未来を背負うことになったとしたら……結果は火を見るまでもない。パンクして終わりだ。

「避けては通れない道だとは思う。だけどユリカがイスカンドルまで艦長を続けられないかどうかはその時が来てみないとわからないんだ。いまは最悪の事態を避けるように全力を尽くすことを考えよう」アキトに肩を叩かれながらそう諭された。

進は頷きつつも、そう遠くないうちにやってくるであろうその日への恐れを消し去ることができなかった。

ヤマトがオクトパス原始星団に捕らわれてから、とうとう三週間が経過してしまった。

解析そのものは遅々としてだが進んでいた。

ヤマトが求める『海峡』と呼ぶべき場所の見当もついた。

それはオクトパス原始星団のど真ん中。中央に四方を囲むように位置する四つの原始星が生み出す渦の中心部。それこそがヤマトが通過可能な嵐の目ともいえるべき開口部だ。

星団の形状やガスの流れから、あるとすればここだろうと比較的早期から見当が付いていたのだが、流れが変わった暗黒ガスに飲まれないうように移動するなどして観測位置が頻繁に変わってしまったことや、流れが一定ではなく観測機器の障害をするなどしていたので、時間がかかってしまっていた。

その所在と存在が確定したのは進展であったが、まだヤマトが通行するに十分な大きさが無い。それにそこに至るまでの航路も確保できていない。

だが、気流の流れを計測して今後の動きを計算した限りでは、数日

中に必ずヤマトが通過できるタイミングがあるであろうことが判明し、この長きに亘る停泊にも終わりが見えてきた。

しかし、三週間も足止めされたことで今後の航海ではたして遅れを取り戻せるのか、ユリカの命が持つのかという不安が増し、艦内ではますますピリついた空気が広まっていた。

「まずい……また艦内の空気が悪くなってきちゃった……」

「無理もないわね……ただでさえ時間の限られた旅だし、あなたの体調も気がかりだつて意見も多いし。こればかりはどうしようもないわ」

お風呂上りにエリナにマッサージで体を解して貰いながら、ユリカはなんとかしなければと対策を考え始める。

なぜなにナデシコはネタがない。

出演者による慰問イベントはやったばかり。

……なにかないか……ナデシコの二年間で培った経験でなにか……！

「……そうだ、まだひとつだけ——ナデシコの思い出がある」

「え？………も、もしかして、あれ?!」

察したエリナに力強く頷いて答える。

もう——これしかない！

「と言うわけで！ 明日一三時よりミス一番星コンテストを執り行いたいと思います！」

艦内放送で唐突な宣言をしたユリカに、半数以上のクルーが困惑させられた。『ミス一番星コンテスト』などといきなり前置きもなく言われて「あ、あれね!」と言えるのはそれこそ旧ナデシコクルーくらいだろうと、ルリは額を押さえる。

「参加者はおひとりでもグループでも構いません！ 自分の容姿だったり芸に自信のある人は奮ってご参加ください！ 優勝賞品はヤマトの一日艦長体験です！」

「あの、ルリさん………なんですかこれ？」

戦闘指揮席で波動砲用測距儀を使った観測を手伝っていた進が、電探士席で作業を手伝っている自分に訪ねてきた。

まあ無理もない。大事な前置きがごっそり抜け落ちているのだから。

「かつてナデシコAで行われたミスコンです。まあ、レクリエーションの一環だったと捉えてくれればおおよそ合っています」

裏ではほかにも思惑はあったようだがいい方向に転がったのだからあえて語る必要はあるまい。

そのイベントに飛び入り参加で優勝を搔つ攫ったのはルリ本人だが、結局恥ずかしくなって辞退、次点のユリカが繰り上げ優勝となったんだっただか。

——いまとなつてはもうあんなことはできないし、イベント自体に参加したいとは思えない。

ましてやこの歳になってなぜなにナデシコに強制参加させられて、コスプレ姿を晒してしまっているルリだ。

恥ずかしい以前にさらにハードルが上がってしまいそうで非常に面倒くさい。そもそも特に魅せたい相手なんて——いや、いないとまでは言えないのだけでも……。

などと悶々としていたルリに進は悪意なく容赦のない一言を浴びせてくれた。

「本当に非常識な艦だったんですね、ナデシコって」
「返す言葉もございません」

結局「このまま憂鬱な気分のままにいるよりは……」という消極的な理由からミス一番星コンテストは粛々と開催され——たはずが異様に盛り上がりすぎてしまった。

なにしろなにかのお約束と言わんばかりに美人揃いなヤマト女子クルー。ゆえに男性陣の話題でも「誰が一番美人なんだ」と論ざれることがしばしばであり、公然とした理由をもって彼女らを愛でることが出来る機会となれば、気合が入らないわけがない。

という女性陣からしたらグープンをお見舞いしたくなるほど下心

満載の動機によって、コンテスト会場はすさまじい速度で設営されてしまったのだ。

「レディース&ジェントルマン！ これより、第一回宇宙戦艦ヤマト・ミス一番星コンテスト！ 一日艦長権争奪杯を開催いたしま〜す!!」
盛大な拍手に煽られながら（作戦行動中の軍艦にあるまじき）ミスコンの開催が宣言される。

開幕の音頭はナデシコで開催された前大会の（繰り上がり）優勝者であるミスマル・ユリカ艦長が勤め、その傍らには司会担当の座を奪い去ったウリバタケ・セイヤと哀れにも巻き込まれてしまったアオイ・ジユン副長が固めていた。

ちなみに、「艦長は参加しないんですか？」という（彼女の体調を考慮すれば暴言に等しい）質問も飛んだが、それに関してはユリカ自身から、

「私、人妻だもん！ それに、アキトの一番であれさえすればいいから……」

と惚気を引き出す結果となった。

質問者が二重の意味で失敗を悟って「はいわかりました理解しました!!」と遮り、後ろで睨みを利かせたエリナの威圧によって、彼女がアキトにしな垂れかかっていちゃつくという展開だけは阻止されたのであった。

開幕早々危ういところであったが、男性陣は気を取り直して会場を注視した。

なにしろほとんどの女性クルーが参加を表明してくれた一大イベントだ。気になるあの子が参加していれば、煌びやかに飾られた姿を見るチャンスとなり、意中の女性でなくても艶姿を見れるとあれば、溢れんばかりの衝動を抑えられないわけがない。

男とは、そういう悲しい生き物なのだ。

対する女性陣は不本意に見世物にされるこのイベントに消極的ではあった。が、彼女らにとっても客観的に見てだれが一番魅力的なのか、という答えには興味があつたし、このまま悶々としているよりは、見世物にでもなっていたほうが気が紛れる……という消極的な理由

から、いつしか互いをライバルと認め合ったガチンコ勝負へと発展してしまったのだ。

こうした流れを冷静に見届けたイネス・フレサンジュは後に、「あの艦長の下にあつては、ヤマトであつてもナデシコ化するのには避けられないつてことね」という的確な感想を残したと言う。

そして、楽屋裏にて。

「まさか……雪さんまで参加するとは思いませんでした」

驚き半分呆れ半分のルリに雪はくすくすと笑いながら、

「あら、私もルリさんが参加するとは思わなかったわ」と返された。

ルリが結局参加した理由はもちろん艦内の空気を鑑みてのことだ。こういったイベントに無縁そうな自分が出たとなれば、ほかの女性クルーも動いてくれるだろうと考えたから。

——ハリへのアピールなんて考えていない、たぶん、おそろく。

対する雪は進へのアピールが目的であろうと予想している。それに生活班長としてレクリエーション自体に積極的であつたという立場を鑑みれば、彼女は絶対に参加を拒否できないとも思うが。

「はあ——人妻という方便で逃げたユリカさんが羨ましいです」

「うふふ。ルリさんはこういうの好きそうじゃありませんものね。——私も露出過多は遠慮したいけど、みんなの気分を盛り上げられるのなら、参加しないわけにはいきませんからね」

ほらやつぱり。彼女は生活班長としての立場でこのようなイベントに参加できる。その社交性は本当にうらやましく思う。こればかりは軍人としてそこそこのキャリアを積んだいまであつても改善の傾向がない。

——うーむ。

あ、そうだ。せっかくだから勧誘してみるか。

「それなら今度なせなにナデシコが放送されるなら、ユリカさんの代役しますか？ 番組の存続はともかく、これ以上ユリカさんに暴れられるのはありがたいので」

「謹んでお受けします。……実は、ちよつと参加してみたかったのよね。いままでお声がかからなかったから自重してきたんだけど……」
と意外な事を口にする雪にルリはびっくり仰天。

(……)これが、これが生活班長としての矜持……! わ、私には真似できない……!)

ルリは雪の職務に対する姿勢に驚愕した。まさかあんな番組でさらし者にされることに興味があつたとは……!

「一度着ぐるみつて来てみたかったのよ。どうせ着るなら相応の舞台で着たいものだし」

「……」

勘違いがあつたようだ。彼女も結構いい性格をしている。

優勝候補ふたりがそんなやりとりをしている傍らで、サブロウタはリョーコに絡んでいた。

「あれ? スバル中尉は参加しないんですか?」

「しねえよ。恥ずかしいだろうが」

頬を赤らめながら参加辞退を明確に示すリョーコに、サブロウタは両手を頭の後ろで組んで露骨にがっかりしていた。

「そりゃ残念。せつかく中尉の晴れ姿が見れると思つたのに」

すつごく残念だ。火星の後継者事件で知り合つて以来、時間を見つけてはアプローチを続けているのだがなかなか成果が出ない。

態度からするに脈がないわけではないのだろうか——男勝りな態度に反して奥手で乙女な部分があるんだな、と改めて魅力を感じる。

そのギャップがいい、もつと見たい。

「ばっ! なに言つてやがるんだこの野郎!」

と脇腹に肘を捻じ込まれるが、照れ隠しの一撃なので悶絶するほどは痛くない。それでも不意打ち気味の一撃に「げふっ!」と呻くが、こうつたやりとりもまた楽しいものだ。

——マズじゃないけれど。

(まあ、ヤマトの旅が成功してミスマル艦長が救われないことには——
——気が引けるんだろうけどな)

脇腹を抑えて呻くふりをしながら、頭の中では冷静にリョーコを分

析する。

実際ユリカが実験の後遺症で余命幾許もないと知らされたときは誰よりも（それこそ家族のルリよりも）激しく憤り、激情も露に捕縛した火星の後継者の連中を全員殴り飛ばしてやると騒いでいたり、その後のヤマト再建に関わる無茶を知ったときも烈火の如く怒って「アキトを残して死ぬつもりか！」となじり寄っていたくらいだ。

それからパイロット室でアキトにユリカの様子をかなりの頻度で尋ねたり、ユリカが具合を悪くしたと聞けば問答無用でアキトを追い出して行かせようとするなど、かなり気を使っていた。

ずっと、傍らで見てきたのだから自信を持って言える。

「——そんなに、見たいものなのかよ……？」

リョーコの眩きに真面目な思考も一時停止して振り向く。いまなんて言った。

「え？ そりゃまあ……気になるあの子の普段と違う姿を見たつてのは当然の欲求と言いますか……まあ男なら、ねえ？」

ドストレートに反応してみる。

リョーコと知り合ってからのはほかの女性に手を出していない、つまり本命であるのだから嘘偽りのない言葉だ。

——そもそもいまの地球の状況ではナンパに精を出す余裕なんてないし。声をかけてた女の子たちもいまは生きるのが精一杯、どころか何人かは訃報も聞く羽目になった。

一応それとなく手を回して少しでも生き残れるようにと力を貸しはしたが……はたして無事だろうか。

ヤマトが戻るまでに、何人が生き残れるのだろうか。

などと少々シリアスな思考が頭を過つたのだが、思わぬ直球発現を受けてかさらに赤くなるリョーコ。

おお、可愛いでないの！

追撃しようかとも思ったが、機嫌を損ねたり場の空気を悪くしても悪手だろうと思って自重しておく。ただ、一言だけ告げておきたい。

「俺、マジだからね」

『ミス一番星コンテスト』は熾烈極まる投票の末、雪を辛うじて退けたルリの優勝で幕を閉じた。

悔しがるほかのクルーの嫉妬と羨望の視線に晒されながらトロフィーを受け取り、一日艦長の権利が授与される。

わざわざ用意された「一日艦長」の札が張られたユリカと同デザイナーのコートと帽子を渡され、次の日には艦長席にも座る羽目になったことには困惑を隠せない。

「さすがに艦長席は……」

辞退したかったのだが、

「艦長が艦長席に座らないでどうするのよ。せつかくだから体験体験」

てな感じで無理やり座らせてしまった。

——艦長席から望む第一艦橋の景色は、自分が最高責任者なのだとも実感させてくれるようなプレッシャーを感じさせてくれる。

人類最後の希望——ヤマト。

艦隊旗艦を担ったことがあるナデシコの艦長経験があるとはいえ、単独で過酷な任務に投入されるヤマトの異質さには到底及ばない。

なるほどたしかにユリカがナデシコ時代よりもマジな態度が多いわけだ。

ふむ。気乗りしていなかったがこれはユリカを公然と休ませる良い機会だ。今日一日だけでも羽を伸ばしてもらおう。

幸いにも今日という日に海峡通過のタイミングは巡ってこなかった。ユリカへの引継ぎも考慮した書類整理などは普段の手伝いの延長と考えれば苦ではなかったし、ジュンという頼れる副官がいればなんのその。

一日の終わりにエリナに聞いた限りでは、ユリカはアキトとラピスを引き連れて映写室で定期的に行われている映画の上映会を楽しんだり、娯楽室ではかのクルーを巻き込んだ簡単なゲームで無双したりしていたらしい。

そしてヤマトがオクトパス原始星団に捕らわれて三〇日が経過し

た。

これ以上の停滞は許されないといいよもってクルーがかんしゃくを起こしそうになったその時、ついに待望の瞬間が訪れた。

「艦長！ 海峡への航路が開けています！」

待ち望んでいた瞬間に艦内が活気付く。これを逃したらもしかしたら期限内に抜け出せないという危機感もあり、超特急で出港準備が進められていく。

待ち望んだ機会に航海班——特に班長たる大介の気合はすさまじかった。

おそらくこれが最初で最後の機会と、操縦桿を握る手にも力が入っているのが後ろ姿からでもわかる。

「探査プローブを発射します。目的の空間が海峡であることを確定させ、可能な限り航路の設定を行います」

ルリはユリカに伺いを立ててから探査プローブを撃ち出す。

この宙域の規模と環境を考慮すると、使い捨て可能で無人の探査プローブ以外に選択肢はない。あとはプローブが収集した情報を電算室をフル稼働させて解析し、この千載一遇のチャンスをものにする。

第三艦橋に直行したルリは、大盤振る舞いの大型探査プローブ六発を撃ち出して広域探査を試みた。

探査プローブはロケットモーターを点火、弱まったガスの中を突き進みアンテナを展開、ヤマトの目となり耳となり情報を集め出す。

まるで無限にも思える数分が過ぎ去った。探査プローブはガスに飲まれてバラバラに分解されるその瞬間まで、ヤマトの航路を導き出す貴重な情報をもたらしてくれた。

「——解析を終了。確度は七割程度ですが、ヤマトが通過可能で反対側に繋がっている可能性の高いトンネルのような空洞を発見しました。予想どおり渦の中心部、芯を貫くように航行すれば、分解されることなく通過可能であると判断します」

ルリが集めた情報を解析したハリの報告を受けて、大介は操縦桿を握る手に力を込めてユリカの指示を待った。

「そこまでわかれば十分よ。リスクは高いけれどこれ以上ここで足止めを食らうわけにはいきません。……ヤマト発進！ 最大戦速、海峡に向かって突撃!!」

「了解！ ヤマト、発進します!!」

待望の指示を背に受け、大介はスロットルレバーを全開にしてヤマトを発進させた。

緩やかになっているとはいえガスの流れは依然として強く、いつものようなタイミングで強くなるかわからない。

大介はラピスに最大出力の維持とエネルギー増幅を依頼しつつ、ハリが導き出した航路データに従って操縦桿を捻った。

ヤマトは最大戦速で渦巻くガスの中心目掛けて突撃を開始する。

渦に近づくにつれてガスの流れは激しくなる。水で結びついていくという解析どおり水の流れも随所に見られ、超高温の水の流れも襲い掛かってきた。

ガスの中には塵とでも言うべき微天体が無数に流れ、展開したフィールドの表面にひっきりなしに激突しては砕けていく。

ヤマトの表面を覆うように展開したフィールドでは安定感が足りない。いつそラグビーボール状の従来方式で展開を——いや、負荷は減っても安定させるには物足りない。ならばいつそ、

「大介君、安定翼展開。翼を使って気流に乗って安定させて!」

ユリカの指示に従いすぐに多目的安定翼を展開する。

艦側面、喫水部分の装甲シャッターが開いて中から分割された多目的安定翼が姿を覗かせる。くみ上げられながら巨大なデルタ型の翼へと変じ、ヤマトの空力を補助する。

安定翼を開いたヤマトは、ガスの中をあっちへふらふら、こっちへふらふらと蛇行しながら前進。主翼の、メインノズルの尾翼の動翼も動かして気流の流れに乗りつつ、ヤマトは一步踏み外せばバラバラに分解されかねない危険な航路を突き進んでいく。

大介は額に汗をびっしりと浮かべながら、操縦桿に加え各種スイッチやレバーを絶え間なく操作、必死の思いでヤマトを操るが、中心部に近づくにつれて流れが一段と激しくなり、とうとう手に負えないレ

ベルにまで激しく揺さぶられるようになっていった。

その困窮を見かねた進はたまらず進言した。

「艦長！ 予備操縦席を使って島のフォローをさせてください」

「許可します！ 助けてあげて！」

ユリカの了承を受け、進は安全ベルトを外して揺れる第一艦橋の床をよろめきながら、左隣の予備操縦席に転がり込むように座り込む。

本来は操舵席が破損した時の予備として用意された席であったが、操舵席のバックアップとしても操縦を補佐する使い方もできる。

「——すまん！ 古代！」

「やるぞ島！ 力を合わせてこの荒波を乗り越えるんだ！」

進も波動砲の砲手として操縦のレクチャーは受けている。その先生はほかならぬ大介だ。技量は到底及ばないまでも、補助くらいなら……！

ふたりは息を合わせてヤマトを操り、縦横無尽に流れるガスの奔流の中を進んでいく。

異なるガスの流れにぶつかる度にヤマトの艦体が大きく揺れ、進路が定まらなくなるのをふたりがかりで抑え込む。

額から滝のような汗を流しながら、ルリとハリの助けも借りて必死にヤマトを目的の航路に乗せて進ませる。

ガスの流れに負けないよう、機関部はエネルギー増幅を繰り返して推力を確保、メインノズルと補助ノズルからは煌々と力強く噴射が続いた。

そうやって二時間近い時間が流れた。

無限に続くかと錯覚しそうになるほど密度の濃い時間を過ごしたヤマト。

だがついに海峡を通り抜け、反対側に抜け出すことにせいこうしたのだ！

眼前の宇宙はまだ暗黒星雲に包まれているようだが、銀河中心側に比べると濃度が薄い。

ヤマトは密度の薄いガスの中を全速力で駆け抜けていく。

そしてついに、暗黒星雲の隙間を見つけ出した！ その先には久方

ぶりとなる星の海が広がっているではないか！

「……抜けた」

大介がやり遂げたと、万感の思いで呟く。

「やったぞ島！ さすがはヤマトの航海長だぜ！」

「古代……！ いや、おまえが手伝ってくれたおかげだ！ ありがとう古代！」

互いに座席から飛び出したふたりは互いの手を取り合って成功を喜び合い、互いの肩を抱き合って力なく床に座り込む。

「みんな、よくやったよ！ これで、ヤマトは銀河系を離れて銀河間空間に進出した……私たちはオクトパス原始星団の試練に打ち勝ったんだよ！」

ユリカの言葉にクルー全員が、とうとう銀河系すら飛び出したことを実感した。

これでヤマトは地球から約二万五〇〇〇光年の距離を進んだことになる。

思わぬ足止めを食らってしまったが、着々と大マゼラン雲に——イスカンダルに近づいていることを実感するには十分すぎる出来事であったと言えよう。

それに計算では、この銀河間空間では銀河同士に作用する重力場の影響こそあれど、銀河内や恒星系の中に比べるとワープへの干渉は小さくなるのが予測されている。

改修が進んでワープ性能が向上しつつあるいまのヤマトなら、もしかしたら二〇〇〇光年以上の大ワープも実現できるかもしれない。

そうすればすぐにでも遅れを取り戻して使命を果たせる。そんな期待が胸に満ち溢れ、互いの健闘を称えあう。

そこに長き足止めによるギスギスした空気は存在していなかった。さあ、挽回の時が来た！

この遅れを取り戻してヤマトはイスカンダルに往く。

次の指標は銀河系と大マゼランの中間に位置するとされる銀河間星——自由浮遊惑星のバラン星だ！

苦難の末、ついに宇宙の難所を超えたヤマト。
その背後には母なる太陽系を含む天の川銀河がある。
再びこの地に戻ってくるためにも、急げヤマトよイスカンドルへ！
人類滅亡とされる日まで、
あと二七九日しかないのだ！

第十三話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十四話 次元断層の脅威！ ヤマト対ドメル艦隊！

宇宙の狼、ヤマトと出会う。

第十四話 次元断層の脅威！ ヤマト対ドメル艦隊 ！ Aパート

ヤマトがオクトパス原始星団という大自然の驚異に翻弄されていた頃、デスラーは自身の居住にある専用の浴室で日々の疲れを洗い流しながら、ガミラス最大の脅威を観測してから今日までの日々を反芻していた。

……ガミラス星に向かって真つすぐに突き進んで来る移動性ブラックホール——カスケードブラックホールが観測されたのは三年ほど前のことだった。

世にも珍しい銀河の中を移動するその天体の存在はガミラスの目を引いた。その時は観測史上初となる天体の観測をする、それ以上の意味はなかった。——その天体の予測進路上にガミラスならびにイスカンドルが存在していると知れるまでは。

初めてその報告を受けた時の衝撃は筆舌し難いものがあつた。それが誤りであつてほしいと何度となく計算をやり直しても結果は変わらなかつた。ガミラスとイスカンドルは三年以内にカスケードブラックホールに飲まれてこの宇宙から消える。いまのままでは揺るがない現実であると。

デスラーは大ガミラスの総統として速やかに対策を検討させると同時に、カスケードブラックホールそのものをも徹底的に分析させた。

その結果、カスケードブラックホールは大マゼラン星雲の中の有益な資源を有する惑星を根こそぎ飲み込むコースを描くという、自然現象としてはありえない軌道を描いていることが発覚したのだ。

つまりあのカスケードブラックホールは天然自然の産物ではない、何者かが作り出した人工天体ではないかと考えられるようになるまでさしたる時間はかからなかつた。

さらなる調査の結果、ブラックホールのように見えていたそれはこ

の宇宙とはまったく異なる別の宇宙に星を転移させる時空転移装置であることが判明した。——決して少なくはない科学者の犠牲の果てに。

そこまでの情報を得たデスラーは人工物であるなら壊せるはずだ、と考えるようになりそのための手段の模索と並行し、カスケードブラックホールの影響を受けない新天地への移住というふたつの命令を下したのであった。

しかしそのどちらも至難を極めた。

破壊を試みるという方針は、次元の裂け目が生み出す重力圏に邪魔をされて攻撃が届かないという難関にぶち当たった。

しかしデスラーにはひとつ、たったひとつだけこの難題を実現する兵器に心当たりがあった。……イスカンドルの古い文献にその名を残していた超兵器——タキオン波動収束砲。

波動エネルギーを直接転用した、星をも砕くとされている禁忌の力。その砲の威力であれば、重力圏の影響を振り切って破壊できるはずだ。

いままではガミラスの独裁政治体制に反発する勢力の手に渡ることを忌避して、同時にガミラスが最も欲する惑星資源の不必要な損失を生み出しかねないと研究されてこなかったが、もうこれに縋るしかない。

デスラーはスターシアに双方の星の危機だと訴え技術提供を願ったが、スターシアは頷かなかった。

スターシアからすればガミラスに——いや、侵略戦争を行っているような国家にだけは、渡したくなかったのだ。

もちろんデスラーも断られると承知の上で頼んだことなので、袖に振られたからと言って彼女になにかしらの報復をするつもりはない。第一イスカンドルの助けを借りれずとも、偉大なガミラスの技術局ならば間に合わせることもできるだろうという確信ももっていた。

かくして二年の歳月をかけ、いままさにガミラス製のタキオン波動収束砲が形になるうとしている。現在その砲は新しいデスラーの座乗艦への搭載作業が進められていて、作業進展率は六〇パーセントと

なっている。

しかしいまのガミラスでは波動エンジン二基分の出力を撃ち出すのがやつと……それではカスケードブラックホールの重力圏の影響を突破して次元転移装置を破壊するには力不足。

もしもそれを可能とするのであれば——ヤマトの六連射型、その全出力を一挙に開放する必要があると、ガミラスの技術局は苦渋に顔を曇らせていた。

いまも技術局は改良を続けているが、現状ではこの方法でガミラス民族を救える可能性は極めて低いと言わざるをえない。

となればもうひとつの手段である移民にかける期待が大きくなるというもの。数ある候補地からデスラーが移住先として選んだのは、兼ねてより進出を考えていた天の川銀河にあり、まだまだ豊かな自然を持つ美しき星——地球であった。

天の川銀河への侵攻を検討したときから目を付けていた星であり、惑星改造なしに速やかに民族を移住させられるというのは、この上なく魅力と言える。

それに調査の過程で連中はガミラスでは失われたに等しいボソソジャンプを利用して見つけられた。連中が自力で開発できるわけがない、つまりボソソジャンプを開発した古代宇宙人の遺跡のようなものがあり、それを解析することで活用する術を得たのだと考えるのが自然だった。

これもデスラーが地球に狙いを定めた理由のひとつだ。波動エネルギーとの相性で切り捨てた技術とはいえ、いまの目で見れば利用法があるかもしれないと考えたのである。

……問題は交渉によって極力平和的に解決するか、侵略によって手に入れるかの選択だった。

……結局デスラーは度重なる検討の末……侵略という手段を選んだ。

理解できたかぎりの地球の情勢——特にここ数年分を鑑みた結果、交渉するに値しないと断定したからである。

あのような文明相手では交渉している間にガミラスが消滅してし

まうという焦りもあつたのもそれを後押しした。

調査開始から半年も経つたころには冥王星に前線基地の設営が始まり、地球側に悟られることなくすべての準備を終えたのが一年前、都合よく発生した内紛に乗じる形で侵攻を開始することで意表を突き、地球人が古代異星人の技術——相転移エンジンやグラビティブラストやデイストーションフィールド——それにボソソジャンプ。たしかに個々にみれば決して悪いものではないが、発掘品に手を加えた程度で自己改良もできていないありさまでは、負けるほうが難しいというものだ。

相転移砲なる超兵器やハッキング戦法は多少鬱陶しかったが、絶対的な力の差を覆せるものではなかった。

——もう、地球に勝ち目はない。あとは凍えて死滅しつつある地球を制圧して解凍し、移民を完了させるだけでガミラス民族の未来は安泰だ。

スターシアたちを置き去りにするのは隣人として心が痛んだが、彼女たちが同行を受け入れないことは想像が付いていた。デスラー個人としては痛ましくとも、国家の代表としては執着するわけにもいかない。

決して楽とは言えない未知の果てに未来を掴んだと思つた矢先に現れたのが——あの宇宙戦艦ヤマト。

(記録を見れば見るほどに素晴らしい艦だ……石を齧り泥水を啜つても祖国を救おうとする姿の——なんと勇ましく美しいことか……)

ガミラスの未来を摘み取らんとするヤマトの存在は疎ましい。それは揺るがない事実だ。

だが同類と言ふべきヤマトを心から憎むことができようはずもない。立場が違えばデスラーがそうしただけだ。

そう思わせるほどにヤマトの戦いは気高く美しい。

大ガミラスの総統としてヤマトに屈することはできないが、もし仮にヤマトがデスラーの見込んだとおりの存在だとしたら、スターシアが見込んだほど人間が操っているのであれば、ガミラスを滅ぼすような真似をするだろうか……。

ガミラスが最後まで地球を諦めないようであれば、ヤマトは躊躇せずガミラスを滅ぼすだろう。スターシアも状況次第ではそのことでヤマトを咎めはしないはずだ。ガミラスの自業自得として。

デスラーは自問自答する。——ヤマトに対し、どのように応じればいいのだろうか。

デスラーは迷いを抱えてしまった。ヤマトを通して見た地球人類に対しても、はたして自分の選択は正しかったのかと考えてしまうほどに迷っていた。

ガミラスのためにもデスラー個人としても——ヤマトが欲しい。艦だけではない。クルーも含めてすべてが欲しいのだ。

きつと……最高の理解者となれただろう。……ガミラスが侵略者でなければ。

「デスラー総統。ドメル将軍がルビー戦線より戻られました」
「ん……わかった」

使用人の報告を受けて、デスラーは湯船から出る。

その後は従者の手を借りていつもの軍服を身に纏い、マントを翻して歩み始めた。

……その背にへばりつく、迷いを抱えながら。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十四話 次元断層の脅威！ ヤマト対ドメル艦隊！

ガミラス銀河方面軍司令本部。

そこへ続く道を、濃いモミアゲと割れ顎に筋骨隆々とした体躯の軍人——ドメル将軍を乗せた車が駆け抜けていった。彼こそがデスラーが対ヤマトを任せられる唯一の人間と期待をかける、ガミラス最強の名譽を賜った人材であった。

そのドメル将軍は走行中の車内からガミラス市街の様子を観察していた。表向きは落ち着いて見える。

(まだ市民に大きな混乱は広がっていないようだな……)

ガミラス本星から離れた場所で防衛線構築を担うドメルにも、本星

の状況は耳に入ってくる。

（地球から出現したヤマトとかいう戦艦——シユルツの冥王星基地を破ったばかりかデスラー総統の策をふたつも打ち破って見せるとは……侮りがたい艦だ）

最初その報告を聞いたとき、さしものドメルも我が耳を疑った。ドメルは我が目で実際に確かめるまではどんな噂も頭ごなしに否定したりはしないし、相手を侮ったりもしないように心掛けている。そういった些細な慢心が致命的な事態を招くと知っているからだ。

だがどのような手品を弄すれば、技術力でガミラスの後塵を拝している地球がガミラス、それも艦隊規模の戦力を相手取れる戦艦を建造できるというのか。

それにヤマトが打ち破った相手が相手だ。シユルツとは個人的な面識があるが、決して無能ではない。視野も広く状況判断も適切、部下には厳しくも優しいまさに理想の指揮官のひとりと太鼓判を押せる、ひとかどの軍人だ。

それを正面から——超兵器も使わずに打ち破って見せるとは……ガミラスの常識でも考え難い事態だろう。

そこまで考えが及ぶと、ドメルは自分が召喚されたのも当然だと思えるようになった。驕るつもりはないが、自分以外にこんな怪物と相対して平常を保てるような指揮官はいないだろう。いるとしたらデスラー総統だけだと思うが、一国の代表を最前線に送り込むわけにはいかない。

最近国境付近に現れる正体不明の黒色艦隊は気になるが、それに関してほかでも務まる。目下の脅威はガミラスの移民計画の妨げになるヤマトだ。

思案に暮れるドメルを乗せた車が、銀河方面軍司令本部前に停車する。

ドメルは車を降りると司令本部内に続く長い階段を上り、デスラー総統の待つ執務室へと進んでいった。

「デスラー総統。ドメル、ルビー戦線よりただいま帰投いたしました」

「ご苦労。忙しいところを呼び出してすまなかつたね」

敬礼するドメルの労を労い、手振りで楽にするように伝えるデスラーにドメルもわずかに体の力を緩めた。

「今回君を呼んだのはほかでもない、地球の戦艦——ヤマト討伐を任せたいと思ってるね」

「その名前はルビー戦線にまで届いております。だいぶ苦労されていると——」

ドメルの言葉にデスラーはふつと笑う。

「そうだ。突然降って湧いた戦艦だが……これがたいそう強くてね。冥王星前線基地を潰されたばかりか、ガミラスの兵器開発局が誇る最新鋭の宇宙機雷も、ベテルギウスを利用した罫も、すべてて乗り越えられてしまったよ。いやはや、敵ながら天晴れとしか言いようがないてね」

妙に清々しい表情のデスラー。ドメルはこれまでのやり取りで、彼がヤマトと言う艦に並々ならぬ思いを抱いていることを察した。

だからこそ、自身も感じたことを素直に伝えることで応える選択を選んだ。

「記録映像は私も拝見いたしました。素晴らしい艦です。性能もさることながら、乗組員の質も士気も高く、なにより祖国の命運を背負って孤軍奮闘する姿には、気高きすら感じさせられました」

「そうか——やはり君もそう感じたか……」

「やはり、総統も？」

ドメルが問うとデスラーは一度頷いてからしばしの間を置いて、ぽつりと話し出す。

「素晴らしい艦だ。もし……ガミラスに余裕があった状態で相対したならば、彼らを嘲るだけだっただろう。しかし、滅びゆく母星と民族のために必死に抗う姿には共感を覚える。だが、われわれが加害者である以上その力の向く先は——。どれほど個人的な好意を持ったとしても私はガミラスの総統として、ヤマトに屈するわけにはいかないのだよ」

目を伏せて心情を吐露するデスラーの姿に、ドメルは軍人として答

えた。

「総統。私も同じ考えです。だからこそ、偉大な祖国の——ガミラスのため、このドメルめがヤマトを打ち破って見せましょう。それが、総統のお望みとあれば」

「君は察しがよくて助かるよ、ドメル。君にはいま一度、ヤマトを見極めて貰いたい。今後のためにもね。五日後、バラン星にある銀河方面前線基地に向かってくれ。君を銀河方面作戦司令長官に任命する。同時にバラン星基地の司令官も兼任してくれたまえ」

デスラーは予め用意していたであろう命令書を差し出した。

精一杯の忠誠心を胸に命令書を受け取ったドメルは、敬礼を送ったあと踵を返してデスラーの執務室を出た。

五日の準備時間はあるが、あまり猶予があるとは言えない。

まだ底が見えていないとは言え、相応のデータは得られている。それを基に考案した対ヤマト用にアイデアがいくつかある。それを形にできるか否か、有用性を含めて兵器開発局に提出して検討してもらう必要がある。

それにヤマトと戦って死んでいった者たちの墓参りもしたいところだ。

いや待て、軍務だけにかまけるわけにはいかない。せめて一日くらいは普段さびしい思いをさせている家族とゆったり過ごす時間を設けられなければ。息子もだいぶ大きくなってきたし、なにより家のことは妻に任せつきりだ。

なにかこう、喜ばれることもしなければ夫として父親として失格だろう。

——さて、どうしたものか。

オクトパス原始星団を突破したヤマトは小ワープを敢行、オクトパス原始の影響圏から完全に離れた場所にあった。

銀河系外縁より推定二〇光年離れ、イスカandalへの航路誤差右二

五度三分、上方一一という地点で、ユリカは待望と言つてもいい報告を受けていた。

「艦長。オクトパス原始星団突破と重なってしまい報告が遅れてしまいました。エックスの組み上げと初期調整を完了いたしました。最終調整の為に実働テストの許可を頂きたいのですが」

もちろんユリカは大きく頷いた。「私も格納庫で現物見たあ〜い！」という駄々もこねて。

ユリカの反応は想像していたのだろう、真田も「ええ、是非とも見てやってください！」と乗り気だ。よほど完成したエックスの出来栄えに自身がある様子。これは嫌が応にも期待が高まるというものだ。

……一方その喧騒を横目に見たエリナは無言で通信席のパネルを操作、問答無用でアキトを第一艦橋に呼び出してユリカの世話役を押し付けた。さすがの才女も真田はともかく、自信満々に鼻息も荒くエックスを見せびらかすであろうウリバタケの相手は疲れるのだ。

こういう役目こそ、夫たるアキトが背負うべきだろうと、エリナはさじを投げたのである。

同時刻。新型機のテスト準備していたアキトはエリナからの威圧を含んだ呼び出しで第一艦橋に来るようにと告げられ、なんとなく嫌な予感がするなど赴いてみれば予想どおり、ユリカを格納庫に連れ込む羽目になった。

彼女の体調の悪化は留まることを知らない。最近ではとうとう杖を使つても歩行に苦労するようになり、車椅子を使う機会が激増しているくらいだ。

それでも艦長としての責務を果たそうとしている姿にはアキトも感心させらる。ナデシコ時代とは本当に意気込みが違っている。

——それだけ垣間見た記憶の中の沖田艦長に感銘を受けた、ということなのだろう。

「カッコいい……ダブルエックスよりもスタイリッシュな感じだあ……」

そのユリカの眼前にあるエックスの姿を見て感激に震えている。

まあ気持ちはわかる。

胴体と足首と袖の部分が青、胸周りと顎と隈取、頭頂部のカメラの外周部分が赤、胸部のダクトと頭部のブレードアンテナが光沢のない金に塗られ、全体的にマツシブな印象のダブルエックスに比べるとシンプルでスリムな印象の強い。

襟や肩や腕や足には機体外部に露出したエネルギーコンダクターが装備されていて、エネルギー解放時には青白く発光もする。

背中に装備されたバックパックは薄い四角形で、辺の部分に長方形型のスラスターが装備され四方に噴射することで空間戦闘での運動性能を高め、角の部分には前後方向に回転可能なハードポイントが計四つ装備されいる。これは装備換装による戦術バリエーションを持たせるための設計だからだ。

いまはそのすべてを使ってパーツが装着されている。

上ふたつを使って二本のビームソードホルダーを兼ねた可変スラスターを備えたコネクター装備のカバー。下ふたつはそれぞれ外付けのエネルギーパックが装備されている。これは結局Gファルコンとの合体を諦めることになった結果問題となった出力不足を補うための措置だ。

そのためGファルコン合体相当の出力での戦闘時には制限がついてしまっているが、余裕があるときは本体からも低速ながらチャージ可能な造りになっている。

このふたつの装備は機体名を象徴する『X』を象っているのは、技術者としての粋な計らいというやつだろうか。

採用された相転移エンジンはダブルエックス以下、Gファルコン以上の中間出力に留めて扱いやすさを優先。加えてアルストロメリアやダブルエックス同様、B級以上のジャンパーによる単独ボソンジャンプ機能も装備しているなど、要点を押さえた設計となっている。

「以前お話ししたようにエックスはもともと装備換装による戦術バリエーションを求めた機体であり、そこからダブルエックスにまで派生していったベースモデルです。ゆえに構造もベシックにして堅牢、地形適応から武装適応の幅も広く、今後の人型機動兵器のスタンダー

ドを作れるように設計されています。……まだ少々コストが高いのですが」

「ふむ」、とユリカは頷いていた。

たしかにガンダムタイプは基本性能は高いのだが、もともとがイスカンダル製の機体。地球の技術力と生産技術では少々コストが重いというのは、アキトも理解している。

「残念ながらアルストロメリアのオプション製造との兼ね合いもあったので、本来想定していた装備の換装による対応性も実現できませんでしたが、現状のディバイダー装備でも、対空・対艦戦闘まで幅広く対応するだけの性能はあると、保証します」

「そうですか……わかりました。あれこれ求めて形にならないよりは、ずつとマシです。ご苦勞様でした、真田さん」

アキトは真田たちがエックスを汎用機として再設計してサテライトキャノン捨てるという選択をしたと聞いたとき、少し複雑な気持ちだった。自分のダブルエックスも、願わくばそういった機体であったほうが気持ち良かったと思うからだ。

もちろんサテライトキャノンの威力はヤマトの航海に必要なものだと思う。以前のヤマトには波動砲以外に戦略兵器と呼べる兵器はなかったらしいので、それと比較すれば不必要なのかもしれないが、冥王星の戦いに加えてプロキシマ・ケンタウリでの戦いと、サテライトキャノンは役に立っている。

(やっぱりまだ、こいつの力は怖いな)

アキトは己が愛機に目を向ける。バージョンアップで細部のデザインとバランスが少しだけ変わった、大量破壊兵器に。

「……エックスへの搭載こそ見送りましたが、蓄積したデータを基にダブルエックスのツインサテライトキャノンのバージョンアップは行っています。ガミラス機を解析して得た発想と技術を基に、若干ではあります。低燃費化に成功しています。これに相転移エンジンのアップグレードとエネルギーコンダクターを含めたコンデンサー類の強化を合わせることで、従来どおりの出力であれば発射直後であっても自衛程度の戦闘なら十分に行えるだけの余力を残せるようにな

り、余裕が出た分を注ぎ込むことでより強力な砲撃も可能としていきます」

量産されなかったと思ったらこの強化だ。表情なく語る真田の心境など言葉にするまでもないだろう。

アキトは再びエックスの姿を仰ぐ。エックスの脇にはトライアングル型のエネルギーチェンバーを備えた連装ビームマシンガンが一挺、大型のシールドユニット——ディバイダーが吊るされている。

どちらも火器としての性能はすこぶる高く、部分的にはGファルコンDXすらも凌駕する戦闘能力を与えるエックスの専用装備。

結局サテライトキャノンの搭載がオミットされ、先の事情からほかの装備への換装も見送られたこともあってか、コックピットのレイアウトはダブルエックスと同じながら右の操縦桿は左と同じデザイン標準モデルになっている。

——つまり、運び込まれるだけは運び込まれた試作の単装型サテライトキャノン完成の用途が立ったとしても、仕様変更には手間がかかる。そういった仕様に、サテライトキャノン量産に対する心境の複雑さが見て取れると思ったのは、アキトだけではないだろう。

「——エックスのスペックについては以上となります。なにかご質問はありますか？」

真田の言葉にユリカは「いえ、大丈夫です。本当にご苦労様でした」と理解と労いの言葉を送っていた。

「ありがとうございます、艦長」

真田は期待を裏切らなかつたことが嬉しいのか、満足げに見えた。するとユリカはしばしの間右手を顎の下に当てがって悩んでから、ぼんと左手のひらを右のこぶしで叩いてから、

「これからはエックスとダブルエックス、それにエアマスターやレオパルドを含めた機体の名前を『ガンダム』って呼びましょう。もちろん、このフェイスデザインを採用していることが絶対条件ってことで」

それはアキトも聞かされた、イスカンドルがかつて開発した最強の機動兵器の雛型——相転移エンジン搭載に加えてボソンジャンプシ

システムとフラッシュシステムを搭載した、当時はもちろんいまの目で見ても最強クラスの戦闘能力を秘めた、異星の人型機動兵器。

たしかそのデザインは、ダブルエックスやエックスに近しいものであったと聞く。

だからアキトは時折『ガンダムダブルエックス』と心の中で呼んでいたのだが、なるほどそれを正式なものにしようということか。

「……なるほど、イスカンドルで建造された人型ねえ……。たしかにこいつらは艦長の言うデザインにも近いし、イスカンドルからの技術提供で形になったようなもんだからな。名前を借りるってのも悪くないか」

いつの間にか隣にやってきていたウリバタケも乗り気だった。

結局そのままトントン拍子に登録情報も書き換えられ、エックスとダブルエックス、そしてまだ形にもなっていないエアマスターとレオパルドも含めた一連の機体は『ガンダム』というペットネームが加えられることとなり、合わせて形式番号なども（開発元であるネルガルに無断で）変更され、『GX-9900-DV』だの、『GX-9901-DX』だのと悪乗りともいえる勢いであった。

（ああ、うん。真田さんはともかくセイヤさんってこういうの好きだもんな）

アキトは気分的に距離を置きながら、盛り上がってしまった真田とウリバタケを生暖かく見守っていた。

「しまった、油に火を注いじやった」

「……逆だぞ、ユリカ」

エックスデバイダーのテスト結果は良好であった。

リフレクトデیفエンサーを仮想標的にビームマシンガンにハモニカ砲、大型ビームソードといった専用装備の威力を存分に見せつけ、Gファルコンと合体できないというハンデを補うに足る出来栄えになっていることを示した。

デバイダーをハモニカ砲展開状態にしてバックパックカバー中

央のコネクターに接続することで完成する『高機動モード』の機動力は抜群であり、やはりGファルコンDXに追従可能な性能を見せつけていた。

これにより、いまだ完成の目途が立っていないエアマスター、レオパルドと共に専属の護衛機としての役割が確定し、強化されたダブルエックスがサテライトキャノンを運用していくうえで欠かすことのできないパートナー機としての地位を揺るがないものとした。

また当機の専属パイロットとして選ばれたのはコスモタイガー隊長、スバル・リョーコであった。

技量においてはタカスギ・サブロータや月臣元一朗も見劣りしない、いや元一朗に関して言えばむしろ勝っているとも評されたのだが、彼らは揃って「隊長という立場にある彼女にこそふさわしい」と立場を譲ったことから確定したのである。

結論から言えば彼らの判断は正しかった。

元来がプロトタイプ・ダブルエックスであるエックスは情報収集能力と処理能力に長けているため、隊長として戦況を把握して指揮を下すには都合がよかつたうえ、部下を鼓舞するにもエックスの性能と目立つ外見は思いのほか効果的であった。

並行して開発が進められているエアマスターとレオパルドこそ完成の目途が立っていなかったが、エックスの完成とその能力は過酷な旅を続けるヤマトにとって頼もしい力であった。

その後ヤマトは遅れを取り戻すべく、慎重に検討を重ねた末、ワープの最長記録に挑戦することとなった

今度は約二〇〇光年のワープへのチャレンジ。

さきほどのワープのデータにより、銀河間にも銀河同士の重力場もワープに小さくない影響することがはつきりとわかつたため、想定していたよりも難度の高いワープ。

しかし、遅れを取り戻すためにもワープ距離の延伸は必要だ。オクトパス原子星団でロスした時間は約一カ月。一分一秒が貴重な航海においてこの遅れは致命的であろう。

だからこそみな焦っていたのだろう。

ヤマトの後ろには迫りくる滅亡を前に耐えることしかできない地球がある。生き残った人々がいる。

彼らを救うためにこそヤマトは発進したのだという気概、使命感。それらがこの挑戦を後押ししてしまった。

このワープがヤマトに思わぬ試練をもたらすことになろうとは、だれひとりとして予想していなかった……。

強烈な衝撃がヤマトを襲った。ユリカは艦長席で激しく揺さぶられ、ベルトが腹部に食い込むのを感じた。

ヤマトはいま、長距離ワープを終えてワープアウトした直後であった。いままでのワープアウトでこのような衝撃が襲い掛かってきた経験はない。

つまり、異常事態ということだ。

「なにがあったの!?!」

腹部を襲う鈍痛を振り払うように声を張り上げるユリカに、探査システムを全開にしたルリとハリが共同で解析を開始。

眼前の戦闘指揮席では進が身を乗り出して窓から外を覗いていた。

「ん? おかしいぞ……星が、まったく見えない!?!」

進が驚愕の叫びを上げた。慌ててユリカも艦橋右後方の窓に目を向ける。

……銀河を飛び出したとはいえ、ほかの銀河や銀河間に漂う星の光がまったく見えないということはあり得ない。にもかかわらず視界には星の明かりがひとつたりとも飛び込んでこない。どころか、視界を遮る星間雲の類も見当たらない。

「島、ワープシステムのログは?」

進が大介に問い質しているが、操舵席でログを確認していた大介は、

「ワープシステムは正常だ。安全装置が稼働した形跡もない——まさか……艦長、ヤマトは次元の境界面付近にワープアウトして、次元断層に落ち込んでしまったのでは?」

言われるまでもなく、その可能性を考えていた。懸念していたこと

が現実になってしまった。

ユリカはイスカンダルから送られてきた宇宙地図に記載されていた注意事項を思い出す。

銀河系と大マゼランの間にはかつて両者が接近した名残であるマゼラニックストリームと呼ばれる水素気流の流れがある。

その高速で流れるガスの中には次元断層と呼ばれる異次元空洞に通ずる境界面が存在しているのだという。

次元断層の落ち込むことは、きわめて危険なできごとである。

通常的手段では脱出が不可能に近く、次元の開口部を正確に把握し、かつ任意に開く術を持たなければ二度と出られぬ監獄と化してしまふ。

さらに致命的なのは、次元が異なる影響で相転移エンジンや波動エンジンの動作効率が極端に悪くなることだ。

動力をそのふたつのエンジンに頼っているヤマトにとっては死活問題。さらにエネルギー吸収性を持つ空間も存在しているので、処置なしでそこに足を踏み入れてしまえば難破船とかして永遠に漂い続ける羽目になる。

まさに宇宙の神秘にして跳びぬけた難所と言えるだろう。

もちろんスタースシアはそれを見越した対策を授けてくれた。イスカンダルの協力で改修された相転移エンジンと波動エンジンにはエネルギー吸収性空間への防護策が施されているし、ヤマト最大の必殺兵器である波動砲は、次元の境界面を強引に開くマスターキーの役割を果たすことも教わっている。

波動砲は強烈な空間歪曲作用を及ぼすため、次元の境界面に撃ち込めば強烈に湾曲させ、ワームホール的一种を形成することができる。この理論を基に考案されている最終手段が『波動砲ワープ』であると言え、どういう現象化は想像しやすいだろう。

改修され波動砲を連射、つまり一発で空にならないいまのヤマトだからこそ脱出手段として期待できるのだ。

それ以外の方法では境界面でワープシステムの起動が挙げられるが、ヤマトのワープエンジンの性能では正直偶発的に落ち込むのが

精々で、自力で脱出するには少々性能不足だ。

つまりヤマトがこの空間から抜け出さなくば、最低でも波動砲一発分と自力で航行するだけのエネルギーを残した状態で、次元の境界面を探し出すしかないのだ。

ユリカは頬を汗が濡らす感触を覚える。

(まずいな。亜空間ソナーで対処できる範囲の空間ならいいんだけど……)

ヤマト艦首バルバスバウ内部には亜空間ソナーが装備されている。パッシブ・アクティブ双方に対応したイスカンドル製の機器で、こういった事態に遭遇した時の『目と耳』として装備されたものだが、地球の技術力で造られたそれは本来の性能に達してはいないだろう。

「艦長、波動相転移エンジンの反応効率が急激に悪化しています。幸い停止には至っていませんが、大量にエネルギーを消費すると、エンジンが停止してしまう危険性があります」

コンソールを睨んでいたラピスの報告に少しだけ安心。どうやら防護策は機能しているらしい。

「ここが次元断層だとしたら、僕たちの技術だと脱出に波動砲が必要になる……撃てそうかい？」

「発射は可能です。ただ、この空間内でエンジンが停止してしまうと再始動できないおそれがあります。エネルギー発生量も二割まで減少していますし、不要なエネルギーは極力カットして備蓄に回したほうが賢明だと思います」

「わかりました。艦内の不要な電源を極力カット。少しでも予備電力を蓄えてください。脱出のためには波動砲とワープ、それぞれ一回分のエネルギーが不可欠です。ラピスちゃんはエンジンが停止しないように機関班を総動員して。ルリちゃんとハーリー君はイネスさんの協力も仰いで、この空間を全力で解析——」

そこまで指示したところでユリカは気づいた。何時も——イスカンドル製の薬で抑え込んだ状態でも頭の片隅に引っかかるようなあの感覚が、消え失せている。

「……私、演算ユニットとのリンクが切れている……」

「ということは、この空間は演算ユニットが観測できない——ボソンジャンプできない空間ってこと？」

エリナが尋ねると、ユリカはゆっくりと頷いた。

「そうだと思う。これ、私にとつてもヤバいかも……演算ユニットとのリンクが切れちゃったら、リンクを確立しようとしてナノマシンが活性化しちゃうかも——エリナ、イネスさんにすぐに連絡とつて。ジユン君は私の代わりに艦の指揮をお願い。私、しばらく医務室で様子を見て貰って来るから」

ジユンはすぐに「わかった、任せて」と頷いた。エリナも医務室のイネスに連絡を取ったあと、艦橋に常駐するようになった車椅子を広げてくれた。

「じゃあ、あとは任せたね」

そう言い残し、ユリカはエリナに運ばれて医務室へと移動した。

「……何事もなければいいのだけれど」

一度は失ったと思っていた大切な『家族』。彼女の苦しみはルリの苦しみ。

早くなんとかしなければ。貴重な時間を浪費するつもりはない。一分一秒でも早く脱出の目を見つけて、ヤマトをイスカandalへ——！

「ハリー君、ECIに行きます。この空間の解析作業を第二艦橋で手伝ってください」

ルリはオペレーターとして最も信頼しているハリにそう頼むと、座席のスイッチを押して第三艦橋へ移動する。

すぐにでも電算室をフル稼働させて、この空間の情報を集めて脱出の手段を探さなければ！

ECIに到着するなり探査システムを稼働。ヤマトのセンサーをフル稼働した瞬間、レーダーに反応があった。

これは——ガミラス艦だ！

ルリの報告を受け、進は即断した。

「副長、この状況で戦闘はリスクが高過ぎます。逃げましょう」

「……そうだね。ここは全力で逃げよう！」

ジューンは進の進言に応じてくれた。ならば話は早い、一目散に逃げだすのみ！

「島ー！」

「了解！ 両舷全速！ 取り舵二〇！」

大介はすぐにガミラス艦の真逆の方向へヤマトを走らせる。進は念のため艦尾ミサイル発射管に通常弾頭を装填、ガミラス艦が追撃してきた場合の迎撃に備えた。

……しかしガミラス艦はヤマトを追撃してこない。

この場合は助かったと捉えるべきだろう。

（しかしあの艦はどうしてこの空間にいたんだ？……これ以上悪いことが起きなければいいんだが）

悪寒が背中を駆ける。

もしも、もしもだ。あのガミラス艦がヤマトのように事故で落ち込んだのではなく自分から入ってきたのだとしたら……。

ここで、一戦交えることになるかもしれない。

デスラーに任命され銀河方面作戦司令長官の地位に就いたドメルは、すぐにバランス基地に赴任していた。

自身の乗艦であるドメラーズ三世がバランス基地の発着場に着陸、その周囲のスペースに部下たちの艦と試作の無人艦数十隻も着陸する。

艦降りたドメルの眼前に口髭を生やした男——この基地の前任司令官だったゲールが待ち構えていた。

案内されて足を踏み入れた司令室の調度品に軽くめまいを覚える。「下品」の一言で説明の済みそうな、ドメルの趣味にはまったく合わない、正直に言って反吐が出そうな内装だった。

が、ドメルは嫌悪感を飲み込んで極力事務的に、かつ横柄にならないように心掛けて接するよう心掛けた。

「よろしく頼むぞ、ゲール。早速だが、二日後に艦隊の半分を引き連れ、今後の移民船団護衛訓練の為第六区異次元演習場にて演習を行う。君は別の艦隊を率いて、あのヤマトに対しての作戦行動を実施して貰いたい」

いまは協調を乱してはならない。感性が合わぬ人間であろうとも問題なく付き合い、足元を掬われるような事態を極力避けなければ、ヤマトには勝てない。

あの艦は、真正正銘祖国の命運を背負った地球艦隊そのものだ。たつた一艦と侮ることはできない。

不確定要素をひとつでも多く潰さなければ、足元をすくわれて取り逃がすことになる。ドメルの感がそう告げていた。

幸いなのは、ゲールという男は重要拠点である balan 星の基地を任されているだけあり、総統への忠誠心に厚く、少々詰めが甘いことを除けば軍人としても優秀な部類に入ることだろう。

資料を読んだ限り、戦略の方針がドメルと合致するとは言い難いようだが、副官として置いておけば役に立ちそうな予感はある。むやみに敵対することはないだろう。

一方でゲールは、突如として湧いた自分の後釜に対して敵意を抱いていた。

しかしガミラス軍人としてデスラー総統の意向に逆らうわけにはいかない。不満を押し殺して新たな上官となったドメルに渋々ながら従うことを選んだ。

最初にドメルから依頼されたのは、彼の考案した罠を張りヤマトを待ちかまえることだった。

最初は意図が読めなかったが、資料と口頭説明でその意図を聞かされれば唸るしかない。さすがはガミラス最強とも称される宇宙の狼。

上手くいけば、軍内部でも噂になっていくあのヤマトを屠ることができるし、失敗してもこの balan 星から目を逸らすことができるのなら、ガミラスにとって損はない。

「ヤマトはタキオン波動収束砲を装備しているだけでなく、純粋な戦闘艦としての能力もクルーの質も極めて高い。正面から戦いを挑め

ば、物量で圧倒しても甚大な被害を出しかねん。だからこそ、ヤマトの意表を突く必要があるのだ」

ドメルが仕掛けた罠は、常識ではなかなか考えられないことだった。まさか自然現象すら利用するとは、そうそうお目にかかれない作戦だろう。

その後のおまけも、目的を達すればよいとするなら悪くない。

「お任せくださいドメル司令。このゲールめが、司令の作戦を一切の遅滞なく実施し、必ずやヤマトを討ち取ってご覧にいきましょう！」
上手くすればあの強敵を直接討ち取れる誉れに与れる。

それに与れなくても、国家の危機を救う作戦に従事するのになんの不満があるうか。すべては偉大なるガミラスの為、デスラー総統の為だ。

幸いドメルは鼻持ちならない相手ではない、ここはぐつと堪えて忠実な副官として振舞うべきだろう。

ドメルは作戦を快諾して出撃すると彼を鼓舞しながら、なんとか協調姿勢を維持できそうだと心の中で嘆息した。

そして現在、ドメルは艦隊を率いて異次元空洞内で大演習を行うべく、いままさに空洞内に侵入したばかりだった。

そこに部下から思わぬ報告が飛び込む。

「なに？ ヤマトがこの空洞内に侵入しているだど？」

これは、悠長に演習をしているわけにはいかなかった。

(自ら望んで入ってきたとは考えにくい。おそらくはワープアウト地点と次元の境界面が偶然重なった事故だろうが、これは、またとない好機かもしれないな……)

ドメルは頭の中で様々な策を練る。これは、どう転んでもガミラスにとつては益があるかもしれない。

ならば話は早い。さっそく部隊を派遣してヤマトの搜索を敢行すべきだ。

ドメルは唇に薄く笑みを浮かべた。

「――駄目……次元の境界面を発見できない。それどころか空間の端すら見えてこないなんて……」

ルリはあの手この手でこの空間内をスキャンしようとセンサーの感度やレーダーの波長も変えているのだが、一向に成果が上がらない。

頼みの亜空間ソナーをアクティブモードで起動しても、次元の境界面を発見できない。おそらくソナーの範囲外にあるのだろう。

逃走のため大きく移動してしまっただけとはいえ、ヤマトがこの空洞に落ち込んだ地点からそんなに離れていないはずなのに。

ワープの事故で落ち込んだからか、元の次元に近い境界面とは離れた場所に出現してしまったのかもしれないと思うと、手掛かりがなさ過ぎて心が折れてしまいそうだった。

「思ったよりも広いのかもしれないですね。それに天体のような物体も発見できませんし、もしかすると――ここは次元が違うせいで物質の構成が僕達の次元とは根本的に違うのかもしれない。それで、ヤマトの探知システムには反応しないのかも」

ここまで入念に探査しても結果が変わらないのだから、ハリの指摘には頷くしかないだろう。

「……少し休憩しましょう。そろそろ四時間になりますし、一息入れたらなにか閃くかもしれません」

ルリは交代で全員に四〇分間の休憩を取ることを命じた。

指示を受けた部下たちは背筋を伸ばしたり腕を回したり、食堂にお茶を飲みに行ったりと、思い思いの手段で頭を休めようとする。

部下たちに先に休むように懇願されたルリも同様で、食堂でなにか甘いものでも飲もうかと思ったのだが、それより先にユリカの様子を見たくなり医務室に向かうことにした。なにも聞こえてこないの心配はないのだろうが、心配は心配。顔を見て安心したかった。

そんな思いで医務室に顔を出してみると、部屋唯一のベッドの上でユリカが眠りこけていた。腕に点滴針が刺さっているが、ラベルから察するに栄養剤の類だと推測できる。

……どうやら大事には至っていない様子。安心した。

「あらルリちゃん。艦長が心配だったのかしら？」

「まあ、そんなところです」

ルリの姿に気付いたイネスに話しかけられると、ルリは気恥ずかしそうに頷いた。

「なら安心して。今のところは問題ないわ。ただ、あまり長いことの空間に留まるとどうなるかわからないから、できるだけ早く脱出したいわね」

イネスの言葉にルリは顔がこわばるのを自覚した。

たしかにそのとおりだ。早く脱出しなければ彼女にも地球にも未来が——そうだ、この人になら相談しても大丈夫だろう。口は堅いだろうしなにより彼女の頭脳は当てになる。むしろこういうときこそ頼るべき人物だろう。

「その、イネスさん——解析作業に行き詰ってしまったって、すこし相談に乗っていただけませんか？」

思い切って調査結果をイネスに打ち明け、ついでに愚痴も聞いて貰った。

造られて与えられた力とは言え、ルリにとって他の追従を許さないオペレート能力はプライドのひとつと言っても過言ではない。

だが実際はどうだ、ガミラスが進行を開始して以降の自分は敵に通用していない。火星の後継者を破ったハッキング戦法は通用せず、そうそうに鼻っ柱を折られただけで終わっている。

指揮官として無能だとは思わないが、いままで自分の指揮下で死んでいった兵たちのことを思えば、自分の力を誇れるはずもない。

加えて改めて見せつけられたユリカの人徳と言うか統率力——差は歴然だった。

それに——アイドルとして乗組員を鼓舞して士気を維持しようと奮戦するユリカの真似すら、できる気がしない。恥ずかしいとか以前に、最近ではかなり解消されたと思っているが、やはり人付き合いは根本的に苦手であることが尾を引いている。

あのカイパーベルトやオクトパス原始星団での停滞の時、ルリも自

分なりに部下や周りのクルーを鼓舞して盛り上げようと頑張つてみたのだが、どうにもいい言葉が出てこなくて当たり前障りのない言葉ばかりが口を吐いた。

対してユリカは体当たりの手段ではあつたが、いずれの場合も一時的とはいえクルーの焦りを和らげ、士気を取り戻させていた。……あれはルリが真似できるものではない。

それだけに、ユリカが倒れた時は士気の低下が著しかった。最初のワープでダウンしたときは影響が少なかったはずなのに、いつの間にか彼女はヤマトの精神的支柱として欠かせなくなつてしまつている。

彼女がちよつと元氣な姿を見せてやるだけで、アキトとクルーの前でイチャイチャするだけで、クルーは安心して職務に打ち込んでいるのをルリも知つていた。

……自分ではきつと、ああはいかない。

自分の容姿を理由に周りが騒いでいることも、それが人気を得ていることも把握しているが——それだけではヤマトの士気を保てない。この艦はそんな人気だけで支えられるほど小さな艦ではなかつた。

ルリは、何としてもユリカの命が尽きる前にイスカンドルに彼女を運ばなければならぬ。そのためだけに全力を尽くしているのに、現実は一層空回りしている気分になつていた。

そんなことまでついついイネスに話してしまった。

ユリカが爆睡していてよかつた。とても彼女には聞かせられない、要らぬ心配をかけてしまう。

ルリの心情を聞かされたイネスは少し間をおいてからこう答えた。

「——気持ちわかるわ。私も医療従事者として、そして科学者として、彼女を救いたい気持ちはあるもの。でも、私の力だけでは彼女は救えない。イスカンドルに縋りたいのは——私も同じよ」

こう言うしかなかつた。イネスは『すべてを知っている』。が、それを口にするには——いまはできない。

この航海の果てになにが待つのかも、ユリカが助かる可能性がどの程度あるのかも、おおよそ把握している立場にある。

『すべてユリカから聞かされたことだ』

エリナも地球に残ったアカツキも、アカツキからすべて聞かされたアキトも知っている秘密。

いまなお隠されているこの情報ゆえに、ユリカは当初ルリたち『家族』の乗艦を拒否していたくらいだ。

それらすべての事情を知るがゆえに、イネスはルリとは違った意味で奇跡にすがりたい気持ちでいっぱいだった。

しかしそれを口にするわけにはいかない。

うっかり秘密を喋ってしまうかもしれないし、カウンセラーも兼ねている自分が気落ちした姿を見せるわけにもいかない。

だからルリには申し訳なく思うが、ここは目先の問題に対して自分なりの意見を述べて誤魔化してしまおう。

「ルリちゃんはいままでこの空間そのもの解析に拘ってたみたいだけど、ヤマトみたいにこの空間に落ち込んだ通常空間の物体は探して見たの？」

イネスの問いに、ルリは静かに首を振った。

「いえ、この空間の解析が先だと思って——いまのセンサー感度だと、宇宙船サイズの物体は反応しないので時間の無駄になるかと……」

なるほど、結果を求めるあまり視野狭窄に陥っていたのか。

たしかにヤマトのセンサーでも、数天文単位も離れてしまったら宇宙船程度の物体を補足することは困難だろう。

しかし最初から諦めていては結果は掴めない。

「だとしても、いまはそれをやってみたらいいんじゃないかしら。もしかしたらだけど、次元の境界面の近くなら、いまのヤマトみたいに不意に落ち込んだ通常空間の物体が密集してアステロイド帯みたいになっているかもしれない。そうしたら、そこで波動砲を使えば万事解決にもなるのだから——」

柔和に微笑みながら諭すイネスにルリは礼もそこそこに医務室から飛び出していった。

ヒントを得られて気持ちが逸ってしまったのだろうが、はたして彼女の身体能力で——。

ドアが閉まる直前、なにやらすつころんだような音と悲鳴が聞こえ

た気がした。そんなルリの様子にくすりと笑ってしまう。

「やれやれ、あの子も結構溜まつてるわね——その元凶として、言いたいことあるかしら？」

イネスはそうユリカに振ってみる。当然反応はない。

それはそうだ。ユリカを休ませるために投薬してまで眠らせたのは、ほかならぬイネス自身なのだから。

「ま、眠ってなかったらあんな話はさせなかったけど。われながらいい判断だったみたい」

席から立ち上がってベッドで眠るユリカの顔を覗き込む。

穏やかな寝顔を浮かべているが、はたしてこの空間を脱出したあと無事でいられるかどうか……。リンクが再確立した際、浸食が進む可能性は捨てきれない。

「——イスカンドルまでは必ず持たせてみせるから、信用して頂戴ね」
自分に言い聞かせるように宣言する。

彼女が助かるには、なにがなんでもイスカンドルに辿り着かねばならない。

単にイスカンドルに連れて行くだけなら冷凍睡眠という手段もあるが、諸々の事情からそれはできなかった。

そんなことをしてしまえばユリカはまず助からない。浸食自体は抑えられても、肝心要の回復手段を取ることが難しくなってしまう。

それに……。ヤマトには彼女が必要だった。ヤマトを理解し、勝手のわからぬクルーにその道を示すためにも。

だから彼女は艦長として乗り込んだのだ。みなを導くために。

ユリカが士気を高めるべく奮闘しているのは知っているし、そうでもしないと過酷極まるこの航海でクルーの士気をここまで保てなかっただろうことも理解している。実際たいした効果だったと感心させられっぱなしだ。

……。しかしそろそろ、限界だろう。

正直いまからでも冷凍睡眠という手段を考えるべきなのかもしれないが、いま彼女を失えばヤマトは——。

「あとは後継者——古代君次第になってくるのね……」

不安はある。だがユリカから聞かされた『別世界』の彼のことを思えば、案外なんとかなるのかもしれないと、イネスは思った。

休憩を終えたルリたちは、イネスの助言を受けてすぐにヤマトと同じくこの空間に引き込まれたであろう通常空間の物体の搜索を開始する。

貴重な探査プローブも使いきり、目を皿のようにして搜索した結果、ヤマトを中心に三方向にそれらしい反応を発見することに成功した。

ヤマトの現在の進行方向から見ると一時と五時と七時の方角。各々の反応地点をから推測するに、この空間は太陽系がすっぽりと収まってしまうほど広大であることが窺え、ワープを使えない現状では、それらの地点に移動するだけでも多大な時間を使ってしまう。

伸長に検討を重ねた結果、ヤマトの現在地から最も近い七時方向の反応地点を探査することに決定した。

到達までは最大戦速でも二三時間。ほかの地点はそれぞれ三〇時間間に四八時間もかかるほど離れている。もしもなにも得られず梯子することになったら、ヤマトはこの空間内でどれほどの時間をロスすることになるか検討もつかない。

もう賭けるしかなかった。七時の反応地点に一縷の望みを託して、ヤマトは次元断層をさまよい始めるのであった。

そして――

「目標座標に到達。前方に多数の障害物を検知、反応からすると――これは宇宙船の残骸だと思われます」

計器を確認しながらハリがそう報告すると、真田がピクリと瞼を動かすのが見えた。

「艦長、調査と並行してこの残骸の回収許可を頂けないでしょうか？ 宇宙船の残骸ともなれば、ヤマトにとって有用な資源になります」
「許可します。ヤマトの倉庫事情も厳しいですし、この機会に積めるだけ積み込みましょう」

ユリカは即決した。この次元断層からの脱出が急務ではあるが、貴

重なる補給の機会を見ず見す棒に振ることはできない。ヤマトの航海はここを出てからが本番なのだ。

それに上手くいけば、回収した残骸からこの空間に関する情報を得られる可能性もある。

「？ 艦長、一〇時の方向に微弱ですが動力反応があります」

ルリの報告に第一艦橋に緊張が走る。もしかしたら、まだ生きているガミラス艦かもしれない。

「――慎重に接近して。いまは危険を冒してでも、情報を得ることを優先しましょう。残骸の回収作業は効率を重視して反重力感應基を使ってください」

「艦長、解析データによると、改良を加えた小型相転移エンジンであれば、ヤマトからエネルギー供給すること始動は可能ですが、エネルギー生成効率が悪過ぎて重力波ビームを含めても……アルストロメリアは満足に戦えるほどのエネルギーを得られません。ガンダムも厳しいでしょう。――しかし、少々問題もありますが、機動兵器の活用法についてアイデアがあります」

真田の進言を聞いたユリカとジyun、それに進とゴートもそのアイデアを採用することにした。

少々リスクのある活用法だが、満身に運用できない機動兵器を少しでも活かすには、それ以外に方法がないのも事実だった。

改めて様々な制約を課せられた状態であることを突き付けられましたが、気を取り直して調査活動を開始する。

反重力感應基を射出して周辺の残骸に打ち込み、艦体に装着する様に引き寄せる。引き寄せた残骸はすぐに搬入口から回収して収納しやすい様に加工し、次々と倉庫に叩き込まれていく。

さらにこの空洞内ではまともにも運用できないであろう信濃は、上下反転のうえで格納庫に係留する作業が行われた。

こうすれば発進口を開放するだけで信濃の波動エネルギー弾道弾を遠隔操作で使用することができる。絶大な火力を誇る波動エネルギー弾道弾を死蔵してしまうよりは、幾分マシな判断だった。

ヤマトは反重力感應基で残骸を回収しながら動力反応を微速前進

で追い続け、やがて中央が円形で前後に足のような構造物が伸びた、ボロボロの宇宙船を発見した。

「あれか……」

異様な風体の宇宙船にジュンがゴクリと唾を飲む。

本当にいかにもな難破船といったあれ具合に、わずかながら恐怖を覚える。

「外部からだけではよくわからんな……。艦長、危険を伴いますが調査隊を編成して内部から調べる必要があると思います」

真田の進言に難しい顔で悩んだあと、ユリカは頷く。危険を恐れるばかりではこの状況を打開できないと判断してのことだ。

すぐに幽霊船（仮称）調査のため、古代進・森雪・ウリバタケ・セイヤ・ゴート・ホーリー・月臣元一朗・高杉サブロウタの六名が選抜され、艦首両舷の格納庫に収納された多目的輸送機「Gキャリアー」で幽霊船に向かわせた。

この機体はGファルコンのAパーツとBパーツのウイングパーツのみを流用し、下部のスラスタとミサイルポッドを構成するパーツの代わりに多目的コンテナを据え付けた輸送特化のバリエーション機である。

拡散グラビティブラストも撤去され、テイルトウイングタイプのスラスタに換装され、全長が一七メートルと倍以上に大型化する要因となった巨大なカーゴユニットが外見上の特徴であり、Aパーツに残されているビームマシンガン以外の武装を失っているので戦闘は苦手ながら、十数名もの人員を一度に輸送可能な新生ヤマトの新しい輸送機であった。

Gキャリアーは相転移エンジンの不調もなんのその。急遽用意された燃料式スラスタをテイルトウイングに強引に取り付け、通常時よりも低速だが順調に異次元空間を飛行する。

Gキャリアーはゆっくりと幽霊船の周囲を旋回しながら侵入口を探し出し、静かに接舷、固定用のワイヤーを胴体部分から撃ち込んで漂流しないように機体を固定した。

減圧室に移動した進たちは、減圧完了後ハッチを解放して機外へ。

慎重にスラストを吹かして発見したエアロック接近、技術担当のウリバタケと雪が協力して周囲を探り、エアロックの開放手段を探し出す。

動力反応があるから当然であるが、雪が生きている電源を使ってコンソールを起動してエアロックを開放、進たちはすんなりと幽霊船の中に足を踏み入れることができた。

「流石だな、雪」

「もつと頼ってくれてもいいのよ、古代君」

船内に侵入した六人は、すぐに調査準備を始める。解析はウリバタケと雪の仕事、ほかの四人は警戒を担当していた。

もしかしたら侵入者用の攻撃システムが生き残っているかもしれない。油断だけはできなかった。

今回は前衛担当の進と月臣が取り回し優先でコスモガンを構え、支援担当のゴートとサブロウタがレーザーアサルトライフルを装備していた。

道中、生き残っていた自動砲台の砲火を退けながら二つ目になるドアを開放した瞬間、突如として怪物に襲われた。

グロテスクな姿をした怪物の鋭い爪を避けつつ死に物狂いで返り討ちにした一行は、予想外のアクシデントに神経をすり減らしながらも幽霊船のメインコンピューター室に足を踏み入れる。

「——なんだったんでしょね、あの怪物は」

戦闘であつたがゆえに真つ先に怪物との遭遇を経験した進が、同じように怪物と至近距離で相対した月臣に話を振る。

「わからん。だがあの怪物には人為的な手が加えられている様にも感じた。ここはどうやら思った以上に危険な場所らしいぞ」

月臣の感想に嫌な予感が一行の頭を過る。コスモガンやレーザーアサルトライフルをしこたま撃ち込んでようやくやく倒すことができた怪物の耐久力……人為的に生み出された『兵器』の可能性すら伺えた。

それに形勢不利と見るなり天井のダクトを使って一時撤退し、次の

部屋に移動すべくドアを潜ろうとした瞬間背後に降り立って鋭い爪を振るう、戦闘力が最も低い雪を積極的に狙いに来るなど、頭もよかった。

はたして野生動物がここまで戦術的に行動できるものなのだろうか……。

不穏な空気に飲まれかけながらも、雪とウリバタケは協力して辛うじて生きている幽霊船のコンピューターからデータを吸い出していた。

異星人の宇宙船なのでデータの方式も違つて手こずると思われたが、思いのほか呆気なくデータの吸出しが終わつてしまった。

想像よりはるかに速く作業が終わつたことに驚きながらも進は歓声を上げる。

「凄いな雪。いつの間にそんな技術を——」

「……!! すぐにヤマトに戻らないと! 大変なことがわかつたわ!」

「雪ちゃんの言うとおりで! すぐに戻つて対策しないとヤバイ!」

ふたりの剣幕に困惑する進たちだったが、余計な詮索はせずヤマトへ帰艦すべく、来た道を素早く戻る。

道中で雪はこわばつた口調で進にある事実を口にした。

「古代君、この船はね——」

「ガミラスの標的艦!?!」

調査メンバーのもたらした報告にジウンが大声を上げた。

「はい。あの艦のコンピュータは間違いなくガミラスの物でした。データの吸出しがすぐに終わったのも、ルリさんがガミラスの解析を進めていたからです」

雪の報告は恐るべきものだった。

ガミラスはこの次元断層の存在を認知しているだけでなく、この空間内で大規模な艦隊演習を何度も行っているらしい。

あの幽霊船と思われていた宇宙船は、ガミラスの試作大型宇宙空母だった。しかし想定された性能を発揮できず廃棄が決定され、この空

洞に運び込まれて標的艦とされていたのである。

となれば、この空洞に落ち込んだ直後に接触したガミラス艦はこの空洞内を哨戒しているパトロール艦の可能性が高い。

つまり、常駐して哨戒しているとも、近々この空洞内で演習の予定があつて事前に調査しているとも取れる。

……いまヤマトが居る場所は、標的艦の密集した場所。

近々演習があるにせよ、ないにせよ、ヤマトがこの空洞に落ち込んだことが敵の指揮官に知れていることは間違いない。

「あの艦艇は自力航行でこの空間に入って来たとみられます。航路データが残っていましたので、これを遡れば次元の境界面があると思われる空間座標に到達できると判断します」

雪の報告を聞きユリカはすぐに発進命令を出した。

もはや一刻の猶予もない。

すぐにでもその境界面の座標に向かって脱出を図るか、さもなければ一目散にこの場を離れて安全の確保をしなければ、ヤマトは大艦隊と鉢合わせてしまう！

——艦内に非常警報が鳴り響く。

………遅かったか。

「艦長！ ガミラスの大艦隊が接近中！ 数は推定四〇〇！」

第十四話 次元断層の脅威！ ヤマト対ドメル艦隊 ！ Bパート

「あれがヤマトか……」

ドメルは艦橋のメインパネルに拡大投影されたヤマトの姿を見て、ぼそりと呟いた。

ガミラスはもちろん、いままで遭遇した国家のそれと比較しても非常に珍しい形状の艦型。

どのような機能を求めてあのような姿になったのかは用として知れないが、これまでの交戦データから非常に優れた戦闘艦であることが確定している。

ドメルが乗るこのドメラーズ三世もガミラス最新鋭の超弩級戦艦だ。

全長はヤマトの倍近くあり単純な砲撃装備の数では圧倒している。とは言え、重武装・重装甲の艦隊旗艦として設計されているため小回りが利かず、機動力では劣っているだろう。

それに砲撃装備の数で圧倒しているとは言え、機関出力で大きく差を付けられているため、総火力は五分といったところだろうか。

制御の難しさと生産性もあり、ガミラスでは主機関を連装化している艦艇はほとんどないので推測でしかないが、真っ向からの衝突は避けたいところだ。

「ドメル司令、ヤマトはどうやらこちらに気付いたようです」

部下の報告にドメルは小さく頷く。

思ったよりも対応が遅かった。やはり、次元断層内での行動は不慣れなのだろう。

しかし不慣れな状況ながら、現状打破のために自分たちと同じ次元の物体を探し出し、脱出の手掛かりを得ようとするまでの行動の速さは特筆に値する。

デスラー総統が目をかけるだけのことは、あるようだ。

「よし、まずは艦隊の全火力をもって先制攻撃を仕掛ける。それで撃沈できなかった場合は包囲して波状攻撃をかける。一気に仕留めようとするな、じわじわと時間をかけて追い詰める。この空間の中では六連炉心と推測されるヤマトとてエネルギーは厳しいはずだ。持久戦に持ち込めばわが軍の勝利は揺るがない。タキオン波動収束砲も、この環境ではおいそれとは使えず、無駄撃ちすれば脱出の可能性すら消してしまうことを、連中は知っているはずだ。まずはヤマトを消耗させることを考える。指示したどおりのローテーションを組んで、わが軍の消耗は極力抑える。エネルギーが厳しいのはこちらと同じだということをお忘れな！」

ドメルは静かに、だが力強く指示を出す。

バランスに駐屯していた艦隊に自身が育て上げた部下たち。

まだ連携が完璧ではないのが懸念材料であるが、この千載一遇のチャンスに逃す手はない。

そして――。

(さあヤマト。この一手を退ける手段は、ひとつだけだぞ……！)

「――艦長、航路データを遡るには……敵艦隊の背後に抜けるしかありません」

隠し切れない緊張の滲んだ声で報告するルリ。

いままでとはけた違いの規模にユリカも一瞬判断に迷ったが、こうなつては取るべき手段は――！

「全艦第一戦闘配置！ 敵の中央を突破して次元の境界面到達を目指します！ この状況で明後日の方向に逃げてても却って状況が悪くなるだけです！ 一か八か、死中に活を求める以外に方法はありません！」

ユリカは有無を言わせない強い口調で命令する。もうそれ以外の最善策がない。

「しかし、突破するにしても中央には敵の旗艦と思われる超弩級戦艦

があります。ヤマトよりも大型ですよ！」

半ば確認するような進に、

「それでもよ！ 迂回したり防御の薄そうな場所を突こうとしたら却って包囲殲滅されかねない！ それに旗艦に接近すれば、敵部隊も迂闊に攻撃できないはずよ！」

力強く断言すると進も覚悟を決めたようだ。

手早く全兵装を起動させて全力攻撃の構えを取る。

「進兄さん。再度確認しますが、エンジンの効率が大きく落ちているのでヤマトのエネルギー回復量はいつもの二割がやつとです。改良で武器のエネルギー効率が上がっているとしても、あまり攻撃と防御に専念し過ぎるとエネルギー切れを起こして、エンジンが停止してしまう恐れがあります」

……厳しい状況だ。

この空間からの脱出には波動砲が必須で、脱出後にワープで距離も取りたい。

だとすれば、包囲突破時点で相轉移エンジン二基以上の稼働と総エネルギーの三割程度は残さないと……ヤマトは終わりだ。

「敵艦隊より射撃用レーダーの照射を確認！ 一斉砲撃が来ます！」

ドメル艦隊はヤマトを射程に捉えるや否や、全火力をヤマトを含めたデブリ帯に向けて容赦なく叩きつけた。

数百もの重力波の火線が、ヤマトのいるデブリ帯を一瞬で消滅させる。

ほとんどの将兵がこの瞬間勝利を確信していた。

どれほど強固なフィールドであろうとも、これだけの物量に勝てるものではないのだ。

しかしドメルだけはヤマトがまだ沈んでいないという確信を持っていた。

なぜならば――。

「や、ヤマト、健在です！」

部下の驚きに満ちた報告も、ドメルはさも当然だと言わんばかりに受け止める。

ヤマトには恒星フレアを突破した、あのタキオン波動収束砲の応用戦術がある。この程度の砲撃で、恒星フレアを突き抜けたあの防壁を突破することはできない。

ドメルは薄く笑う。

そうだ、そうするしかなかっただろう。

私はその選択肢しか残さなかったからな。

「モード・ゲキガンフレア解除——なんとか砲撃を凌げたようです」

進の報告にユリカもホッと胸を撫で下ろす。

波動エネルギーの繭を脱ぎ捨て、艦体に反重力感応基で集めた大量のデブリを身に纏ったヤマトの姿が露になる。

さあ！ ここからが本番だ！

「第三戦速！ 敵艦隊中央に向けて突撃開始！」

「了解！ 第三戦速。進路、敵艦隊中央！」

モード・ゲキガンフレアで稼いだ初速も利用して、ヤマトは四〇〇隻にも及ぶ大艦隊の真ただ中に向かって突撃を開始した。

あの瞬間。

砲撃を避けられないと瞬時に判断したユリカは、モード・ゲキガンフレアの使用を決断した。

判断の速さと思いきりはさすがだと、ルリは改めて感心させられた。

そのおかげでヤマトは宇宙の藻屑とならずに済んだのだが……。

「艦長、第一、第二相転移エンジンが停止。ヤマトの総エネルギー量が六分の四以下にまで減少しました……」

ラピスの険しい声は、第三艦橋にも届いている。

防御のみが目的だったので極力抑えたつもりだったが、攻撃を凌ぎ

きるのに結局波動砲二発分を使ってしまった。

直結構造で波動砲のように分割消費ができないシステムだから仕方ないと言えば仕方ないのだが……いきなり総エネルギーの六分の四を使わされたのは幸先が悪い。

「やはりこの空間内ではエンジンの再始動は不可能です。最大まで起動用電力を投入しても、点火してくれません」

状況はかなり悪い。いや最悪と言ったほうが適切だ。

通常空間なら、この状況でも辛うじてだが相転移エンジンの再始動が間に合う。

波動砲やワープが使えるほどの回復は望めなくても、活動不能に陥る危険性がぐっと低くなっただろうが、現状では消耗していく一方だ。

このまま全力戦闘を行えば、敵艦隊を突破するよりも先にヤマトのエネルギーが枯渇してしまうのは火を見るよりも明らか。

普段どおりには、戦えない。

だがユリカの戦意は衰えていないようだ。

ヤマトの艦長になってからの彼女は、ナデシコ時代とは本当に意気込みが違う。

「進！ 不必要な砲撃は極力避けて、進路の邪魔になりそうな敵にだけ絞って！ ミサイルを撃ち尽くしたっていい、主砲は最小限で行くよ！」

「了解！——ルリさん、アステロイド・リング防御幕の形成を！ 合わせてリフレクトディフェンサーの準備願います！」

「了解、制御は任せてください！」
進の指示にルリはすぐに応えた。

煙突ミサイルと両舷ミサイル発射管からリフレクトディフェンサーが次々と射出される。

リフレクトディフェンサーは艦体を離れてたデブリに交じってヤマトの周囲を旋回、防御幕を形成した。

「雪さん、私はアステロイド・リングとリフレクトディフェンサーの制御に全力を尽くします。情報統括処理はすべてあなたにお任せしま

す」

「任せてくださいー！」

第三艦橋に降りていた雪が副オペレーター席でルリのフォローをしてくれる。

暇を見つけては自分の片腕としての教育を施してきたが、雪はルリの教えたことをよく吸収し、ハリには及ばないまでも自身のフォローを任せるに足る実力を身に着けつつある。

おかげでルリは全力をアステロイド・リングとリフレクトディフェンサーの制御に注げる。

このふたつの装備はヤマトの全力機動に追従できないとされている。だがそれはハードウェアよりもソフトウェアの問題の方が大きい。

が、ルリが他の追従を許さないその卓越したオペレート能力で手動制御すれば話は別だ。そのための訓練は大介の協力の元、何度も行っている。

しかし負担は大きいしそれ以外のことはできなくなる。こんな非常事態でもなければルリとて遠慮したい作業だった。

だがうまく機能すれば、ヤマトが全力フィールドを張るよりも消費エネルギーが四〇五割程度少なくて済む。

一パーセントでもエネルギーに余裕を持たせたい状況なので、すべての攻撃をこのふたつの機能で限界まで凌ぎ切れれば、その分余力が生まれるはずだ。

つまり、電子の妖精の腕の見せどころというわけだ。

仲間の協力があれば……やれる！

「ヤマト、艦隊に向かって進撃してきます。例のアステロイドを利用した戦術を使用しているようです」

「なるほどな。なかなか思いきりのいい指揮官だ」

ドメルは素直に感心していた。

よく状況がわかっている。それ以外に活路はあるまい。

限りあるエネルギーとは言っても、出し惜しみをして撃沈されては元も子もない。ヤマトが生き延びるためには、その防御幕を展開するしかなかった。

さあ、開戦直後にエネルギーを浪費させられた気分はいかがほどだろうか。

「さて、ヤマトが取れる行動は——」

初手からあの防御幕を展開していたのには驚かされたが、ヤマトの行動を読めばそれが成せた理由はおおよそ推測できる。

おおかた手掛かりの搜索ついでに補給物資を確保しておこうという魂胆だったのだろう。それがこの土壇場で有益に機能した、というところか。

だとしたら実に運がいい。

そしてその過程で次元の境界面のデータも得たのだろうと思えば、艦隊の中央突破を目的とした進路も頷ける。

次元の境界面はなにも艦隊後方のひとつだけではない。だが悠長に搜索している余裕は、ヤマトにはない。

一日でも早くイスカンダルに辿り着き、地球が滅亡する前に帰らなければならぬ心理的圧迫感が常にあり、これだけの大艦隊に追いかけられながら当てもない搜索活動を行うことの非現実さを考慮すれば、所在のはつきりとしている艦隊後方のもの以外は眼中にないはずだ。

おまけに艦隊に対する切り札であるはずのタキオン波動収束砲は、使うに使えないはず。

あの兵器が次元の境界面を強引に抉じ開けるための最終手段として機能するであろうことは、その原理から容易く推測できた。

ならばこそ、安易に使うて自らの首を絞める真似はできまい。

あのリング防御幕を使って消費を極限まで抑えつつ、艦隊を中央突破して後方の次元の境界面にタキオン波動収束砲を撃ち込んで開口部を形成、脱出後に即座にワープで逃走。それ以外にないだろう。

つまりこちらが取るべき行動は飽和攻撃であるのリングを剥がして

フィールドを展開させ、主砲を含めた武器を使わせてエネルギーを枯渇させることで無力化して拿捕、ということになる。

こちらは数の優位を活かして持久戦に持ち込んでやればいいだけだ。

本来ヤマト相手には愚策になりかねない距離を置いた包囲陣形も、最大の懸念材料であるタキオン波動収束砲を状況的にも心理的にも使い辛いこの状況なら最大限に活用できる。

数の暴力を文字どおり力づくで覆すための切り札を封じられてしまった以上、ヤマトがこの包囲網を突破できる可能性は極めて低いだろう。

(総統もきつと、一番の望みはクルーを含めて鹵獲することのはず。だからこそその持久戦だ。功を焦る形でやりすぎてしまい、ヤマトを撃沈することは極力避けたいところだな)

だが懸念はまだ存在する。

ドメル気を引き締めてモニターを睨みつけた。

あの艦にはまだ、冥王星基地をただの一撃のもとに消滅させた、人型がいる。

あれだけの出力を、あのサイズの兵器に積めるエンジンで叩き出すことはガミラスでも不可能だ。とすれば、あの背中の戦闘機のような増設ユニットの下に吊るされていたタンクが、発射用のエネルギータンクとみて間違いないだろう。

それに加え、ヤマトから照射される重力波ビームを受信することで発砲できるということが、プロキシマケンタウリでの戦いで判明している。

あれがこの空間でも使用できるというのであれば、タキオン波動収束砲にも劣らない脅威として、ドメルの艦隊に牙を剥くことになるだろう。

ドメルはあの大砲がタキオン波動収束砲の亜種であると見当は付けていたが、それ以上の仕様については不明な点が多く、具体的な対抗策を見いだせないでいた。

それにあの人型は、あの大砲抜きにしても尋常ならざる強さを見せ

つける、艦載機版のヤマトとでも形容すべき兵器だ。

動力はおそらく小型の相転移エンジン。それも波動エンジンの技術でアップグレードされた、戦争初期の地球製のそれとは比較できないほど高性能な。

背中ユニットと本体で最低でも二基以上搭載されていると睨んでいる。

相転移エンジンはこの空間では機能し辛いけど、まったく使えないというほどでもない。

——あの機体の動向にだけは、注意を払わなければ。最悪戦況をひっくり返される危険がある。

ドメルは圧倒的優位な立場にあることを自覚しながらも、それが綱渡りのような錯覚すら覚えた。

すべてが、いままで自分が相対してきた相手と異なる。

一騎当千の戦艦と人型。未知なる強敵。

ドメルは知らず知らずのうちに口角を上げていた。強敵との対峙に、静かに高揚を覚えていたのである。

(読まれてたか……予想よりも艦隊の展開が早い)

ヤマトはアステロイド・リングを使用しながら第三戦速を維持してガミラス艦隊の中央を突き進む。

ヤマトの周囲を、まるでトンネルを作るようにガミラス艦が円運動で包囲している。

どの艦も必要以上に接近することなく、断続的に砲撃とミサイルでヤマトを襲う。

各艦の間隔は広く取られているのに……横から抜け出す隙が見出せない。

……手強い指揮官だ。

ユリカは自分がいま、かつてないほどの強敵と相まみえていることを自覚して背中が冷たくなった。

だが、負けられない。ヤマトは負けられないのだ。

雪が第三艦橋から送ってくる敵艦隊の位置データを基に、ヤマトの進路を細かく指示する。

ジユンの手伝いも借りて頭脳をフル回転。次々と送られてくる各種データから艦隊の動きを把握し、最小の消耗で突破できるようにヤマトを導く。

全力を出したルリのアステロイド・リングの制御は見事なものだった。

右回転、左回転と異なる方向で回転するリングをいくつも形成して動かし、ヤマトに襲い掛かってくる攻撃を巧みに防いでいる。

ルリのおかげでヤマトはまだ一発の被弾もなければ、迎撃ミサイルの一発すら使っていない。

リフレクトディフェンサーの制御も感心させられる。

ルリはヤマトに放たれた重力波を的確に逸らすばかりか、逆に危険度の高いガミラス艦に向けて屈曲させることで攻撃にも転用しているのだ。

想定された使い方とはいえまだまだデータ不足の装備。それをここまで使いこなすルリの手腕は母親として本当に誇らしいものである。

だがルリの奮戦をもつてしても、状況は好転していない。

反射された攻撃で傷つくと、ガミラス艦はすぐに離脱する。普通ならそこが好機足りえるのだが、落后した艦の代わりがすぐさま飛び込んできて穴埋めしてしまう。

一切の遅滞を感じさせない、滑らかな艦隊運動だ。

それに……。

(数の優位を活かしてヤマトを消耗させて鹵獲するつもりね……完全はこちらの思惑が読まれている……)

包囲網の外側に攻撃に参加せず同行している艦があるのに気付いたユリカは、すぐに敵の狙いを察した。

……敵の指揮官はヤマトを撃沈するのではなく、無力化して鹵獲したいのだ。

ガミラスの状況を考えれば、完成された波動砲は喉から手が出るほど欲しいだろう。

ただ、鹵獲を優先しているとはいえ撃沈をまったく考えていないわけではないはずだ。おそらくチャンスは一度あるかないか。

見逃さないようにしなければ……。

「リング損耗率三〇パーセント!」

ルリの報告が第一艦橋に飛び込んできた。

ヤマトが突破作戦を開始してすでに三〇分が経過している。

艦隊はヤマトを包み込むようにして同行しているので、突破には相応な時間が掛かることが予想された。

おまけに次元の境界面までは最短コースを進めたとしても、一八時間もの時間がかかる。

標的艦から距離があるのは、あえてこの空間を長時間移動させることで、普段はあまり気にしなくて済むエネルギーの管理や機関コントロールを効率よく学ばせるためだろう。

かつてないほど辛い戦いだ。

この局面を突破するには、『アレ』を試すしかないだろう。

だが確実に成功させるには、もつと敵旗艦の眼前——包囲網の出口ギリギリまで接近しなくては!

「艦長! コスモタイガー隊の攻撃準備が整いました!」

「リング損耗率が四〇パーセント越えたら備えさせて。そこでヤマトも砲撃開始よ!」

ユリカの命令に進も頷いた。

さて、人型をバカにしているガミラスの指揮官。

人型には特有の利点があることを、いまこの瞬間をもつて思い知らせてあげようではないか。

第一艦橋からの命令を受け、アキトは右手に持ったコントロールユニットを差し込んでダブルエックスを起動した。隣のエックスでも、リョーコがそうしているだろう。

ダブルエックスの双眼に光が灯る。

残念ながら、普段なら力強く駆動する相転移エンジンも弱々しく、このままではまともな戦闘行為はできそうにない。

だがそれは普通に動かせばの話。二基のエンジンと本来はサテライトキヤノン用の追加エネルギーパックのパワーを足せば、短時間なら十分に戦える。元からエネルギーパックを装備しているエックスも問題ない。

それにガンダム二機には、エネルギー消費を極力抑えて戦えるようにと工作班が急ごしらえながらも追加武装をたっぷり施してくれた。

まず左手に専用バスターライフル。ただし、増設バッテリー付きで消耗を抑えられるように応急改造されている。

同じくバッテリーを増設したレールカノンも右手に保持。これで本体の電力消費を抑えつつレールカノンの火力に頼れる。強度と電力さえ十分なら、レールカノンは対艦攻撃にも使えるのだ。

そして、両足の脛部分に急造のマウントを取り付けてGファルコンが搭載しているのと同型のマイクロミサイルを、簡素なマウントで縦に四つ並べて装備。

さらにGファルコンはコンテナユニットの下部には大気圏内用安定翼——を兼ねたウエポンベイが接続され、そこに新型の三角柱型の空対空ミサイルが上に三発、下に二基ずつセットがふたつで計七発。

さらに下側の二発セットの下には長めのパイロンを使って新型の航空対艦魚雷が一発づつ吊るされ、左右合わせてミサイル一四発と魚雷四発の重装備が追加されている。

さらにその安定翼の根元には仮のマウントで右側にロケットランチャーガン、左側に予備弾薬を五発強引に装備している。

とにかくエネルギーを節約しながら手数を増やし、総火力を上げるための苦肉の策。

ヤマトの台所事情では厳しいだけの使い捨て前提の重武装は圧巻の一言だが、それでもこの状況下ではまったく不安を拭えない。

エックスも本来の役割とは正反対の任務に就くにあたり、バックパックに接続したデイバイダーに急ごしらえのマウントを取り付けて、ダブルエックスと同じ爆装を施していた。

開いた左手にはハイパーバズーカ、右手にはビームマシンガン。比較的軽装だが、それでもアルストロメリアカスタムよりも総火力では勝っていた。

艦体に機体を固定するための磁力ブーツが履かされ、ヤマトの固定砲台として機能するようにセッティングされている。

それは機動戦闘を捨てる代わりに限界までの重装備を施したイズミとヒカル、サブロウタと月臣、ほか六機のアルストロメリアも同じであった。

「これだけの重装備でも、サテライトキャノンほどの決定力はない。戦況が長引くとエネルギーパックが空になってサテライトキャノンは使えない。ヤマトからの重力波ビームは期待できないし、戦況判断が難しいな……」

「発射の判断はユリカに任せるっきやねえだろ。機体に不用意に被弾させるんじゃないぞ！ サテライトキャノンが使えなくなったら、たぶん終わりだぞ！」

「わかってる」

アキトはクギを刺してきたリョーコにそう返すと、戦況報告に耳を傾ける。きつともうすぐ。

「リング損耗率四〇パーセント！」

「コスモタイガー隊、所定の場所で攻撃開始！」

始まった。

アキトはスロットルを開いてダブルエックスを浮遊させた。

隣のエックス共々カタパルト運搬路を自力で移動してハッチから飛び出し、閉じられたハッチの上に陣取って『固定砲台』となった。

ほかの機体は解放された二つの発進口のハッチの上に陣取ってこちらも固定砲台となる。

防御シャッターで格納庫とカタパルト内部が隔離される構造に改造された、新生ヤマトだからこそ可能になった変則的手段だ。

たしかにこの空間で普段どおりの戦闘機動は不可能。出たところでデブリになるだけだろう。

だが『ヤマトの上で砲台になる』くらいはできる。

そうすれば推進装置でエネルギーを消費しなくて済むし、ヤマトのフィールドの加護を受けられるから防御に割くエネルギーも兵器に回せる。

そうすれば、Gファルコンのエンジンでもギリギリではあるが事足りる。

それに過去の戦訓から予備としてもう一セット用意されたサテライトキャノン用のエネルギーパックを使用すれば、固定砲台くらいの役割は果たせるのだ。

これはガミラスが運用している宇宙戦闘機では不可能な戦法だ。

だからこそヤマトがこういった戦法を取ることは予想できないようできないはず。少しでも虚をつければ、こちらが優位になるだろう。

ルリは損耗率が四〇パーセントを超えたリングを必死に持たせていた。

ヤマトには常に数十にも達する重力波とミサイルが休みなく襲い掛かってくるので、リングの角度や位置には常に注意を払う必要があり、デブリを包むディスプレイーションフィールドの強度の管理、それに加えてリフレクトディフェンサーを活かそうとするとさらに筆舌し難い負担が彼女を襲った。

さすがのルリも、そして相棒たるオモイカネも余裕はなかった。

ルリは額を流れる汗を拭う間さえもてないまま、汗にまみれて必死の形相でヤマトの防御を固めている。

(キツイ……)

喉が渇く、頭が割れそうなほど痛む。

だが辛抱しなければ。ここで倒れることがあったらヤマトは……ユリカは！

ルリはヤマトの成功とその先にある幸せを求め、悲鳴を上げる体に鞭打って攻撃を凌ぎ続けた。

損耗率が四〇パーセントを超えたとき、ついにヤマトからの砲撃も

開始される。

エネルギー消費量が比較的少なく、かつ敵艦隊の主力を構成する駆逐艦を撃破できる威力と取り回しを両立した副砲がメインだ。

——主砲は、まだ撃たない。

ユリカはヤマトをローリングさせて直進させることで、強引にヤマトの上下左右を包み込む敵艦を一隻でも多く副砲の射程に収めるように指示を出した。

敵がトンネル状にヤマトを包囲しているからこそ通用する戦法だが、この状態ではヤマトも進路変更に大きな制約が付く。長くは続けられない。

進はゴートと協力し、限られた時間を最大限活用すべくそれぞれ砲撃とミサイルを分担して指示、的確に脅威度の高い標的への攻撃を敢行しているが、やはり数の暴力に加え優秀な指揮官に統率されている艦隊には螻蛄の斧であった。

せっかく敵艦を撃沈ないし手傷を負わせて落伍させても、すぐに後続の艦がフォローして穴埋めしてしまう。

モグラ叩きをしている気分だったが、進もゴートも弱音を飲み込んで黙々と攻撃指揮を続けた。

状況は最悪に近い。が、ここで狼狽えているようではユリカの後継者にはなれない。

確実に病が進行し、日に日に弱っていく彼女を助けるためにも、弱音を吐くわけには——！

「リング損耗率五五パーセント！」

また、ヤマトの防御が薄くなった。

これ以上は危険と判断したユリカはついに主砲の使用を解禁した。

「主砲射撃開始！」

「了解！ 主砲発射準備！ 目標指示はこちらから行う！」
とうとうヤマトの主砲が火を噴いた。

だが冥王星のときの感覚で連射するにはエネルギーが心許ないため、連射速度はかなり抑えめだった。

通常一度の射撃で三門から撃ち出す重力衝撃波を一門づつ、それぞれ

れ別の標的に向けて発射することで効率化を図る。

砲身をバラバラに上下に開き、一門撃つては砲塔を旋回させて次の標的に——それを繰り返す。

リングの損耗がさらに進んだ。迎撃ミサイルを中心に、パルスブラストによる迎撃が開始されると、ヤマトの消耗が加速する。

進は真綿で首を絞められる感覚というのがどういものなのか、知ったような気がした。

固定砲台と化したコスモタイガー隊は必至の攻撃を展開していた。

ヤマトの消耗を抑えるため、敵艦よりも無数に飛来するミサイルの迎撃にこそ全力を割かねばならなかった。

特に兵器の少ない下部への迎撃はコスモタイガー隊頼みと言っても過言ではなかった。

アキトは右舷側の発進口に陣取って必死にミサイルを撃ち落とし、少しでも機会があれば敵艦にも攻撃を加えてヤマトへの攻撃をひとつでも減らそうとしていた。

あつという間に増設したミサイルは撃ち尽くし、ロケットランチャーガンも弾切れ、Gフアルコンのマイクロミサイルも撃ち切った。

バスターライフルの増設バッテリーも残りわずか、レールカノンはたったいま撃ち切った。

拡散グラビティブラストを撃つたびに、大口径ビームマシンガンを撃つたびに、増設エネルギーパックのエネルギーが徐々に徐々に減っていくのが、アキトの焦りを煽る。

ヤマトのエネルギーは大丈夫か。

本当にこの包囲網を抜け出せるのか。

不安だけが募る状況。

だがアキトは諦めなかった。あの火星の後継者との戦いを思い返せば、まだやれる！

左舷側の発進口に陣取っているリョーコのエックスもまた、必死の迎撃に心血を注いでいた。

「くそっ！　せつかくの新型のお披露目にしちゃ、ちつとばかり状況悪すぎだぜ！」

軽口とも愚痴ともつかぬ悪態を吐きながら、ミサイルを迎撃。増設分の武装はとつくに撃ち尽くした。

いまはエックスデイバイダーの標準装備の武装のみで戦っている。右手のビームマシンガンを単射の収束射撃で発射しながら、胸部インテークの下に並んだ左右合わせて四門のブレストバルカンを撃ち放つ。

左手にはシールドモードのデイバイダーを掲げ、至近弾の余波を凌ぐ。

返す刃でデイバイダーを展開してハモニカ砲をスタンバイ。カットアブレードモードで発射。

命中。

横っ腹に直撃を受けた駆逐艦がフィールドごと装甲を切り裂かれ、黒煙を噴いて落後する。

すぐに代わりが来るが、リョーコはめげずに攻撃を続けた。

ことが終わったらウリバタケと真田になにか奢ってやる。そう心に誓いながら。

開放した発進口のハッチに陣取ったアルストロメリアは左右に二機づつ、後方に一機を配置して火器という火器を撃ちまくっている。

新装備のアトミックシザースによって手数が増したアルストロメリアは対艦攻撃を完全に諦め、ミサイルの防御にのみ全力を注いでいる。

カタパルトに置かれたサテライトキャノン用のエネルギーパックにGファルコンからケーブルを繋いで電力を確保しつつ、使用可能な火器を総動員しての決死の防御。

次々と弾切れになった火器を放り出す非常にもったいない使い方をしながら、ガミラスの猛攻に抗った。

「ヤマト、包囲網の三分の二を突破しました。まだダメージを与えられていません……！」

オペレーターの驚愕に満ちた報告にも、ドメルは驚かなかつた。冥王星での戦いを考えれば、この程度は予想できたからだ。

それに単独行動が前提の艦艇ともなれば、工務施設を有していることは予想が付いた。それによる自己改良による戦力の変化は想定している。

しかしそのドメルでも予想できなかったことはある。

反射衛星を鹵獲して複製したらしい防御手段と、新しい人型の追加だ。

どちらもドメルの予想を上回る力。

実に見事な仕上がりで感服させられる。

指揮の采配も見事。あのシュルツを下しただけのことにはあるが。

(思い切りがよく判断も申し分ない。いい指揮官だが……少々経験不足だ)

どれ、ひとつ驚かせてやるか。

ヤマトはもうドメラーズIIの射程内。ガミラス最強の戦艦の威力なら、ヤマトの防御にも通用することを教えてやろう。

ドメルはヤマトの回避行動を予測して砲の狙いを付けさせる。狙うは艦首上甲板の主砲二基。

ここで確実に抵抗力を削ぐ。

(抗えるものなら、抗って見せろ、ヤマト)

「リング損耗率九〇パーセント！」

「フィールド、艦首に集中展開！ 残ったリングは後ろで盾にして！」

消耗し過ぎて役に立たなくなったリングは後方で盾に。艦首方向の攻撃はもうフィールドで防ぐしかない。

展開したフィールドに次々と重力波とミサイルが命中して、強化さ

れたはずのフィールド発生基にみるみる負荷が溜まっていく。

あつという間にイエローゾーンに突入。

エネルギー残量もみるみる減少していく。

第三相転移エンジンも空になって停止寸前だ。

波動砲発射のためには最低でも第五・第六エンジンは維持しなければならぬのに、このままではそれすらも……。

それにしても見事な艦隊運用だ。ヤマトの進路を尽く遮り絶妙に減速させて来る。

最高速に達することができれば、敵艦の包囲を突き抜けられるかもしれないのに、それを許してはくれない。

ユリカもフェイントを交えた指揮で艦隊の動きを乱そうと試みてみたが、尽く見抜かれて効果を上げられなかった。

手強い。冥王星基地の司令官もそうだったが……やはり百戦錬磨の強者だ、経験値では勝てない。

(それでも、私はヤマトの艦長なんだ！ 負けられない！)

沖田艦長から受け継いだこの役目、果たせずには終われない。

幾度目かの集中砲撃に対して、ユリカは避弾経始を利用して受け流すべく右への回答を指示したのだが……。

猛烈な衝撃がヤマトを襲う。

ヤマトが回避行動を取り、包囲した艦からの攻撃を凌いだと思った瞬間、敵旗艦からの強烈な砲撃がヤマトの艦体に突き刺さったのだ。

銀を基調に両サイドに巨大なインテーク状の構造物と円盤状の艦橋を有する超弩級戦艦の砲撃は、ヤマトの上甲板にある傾斜部分に命中、フィールドも装甲を撃ち抜いてしまった。

「第一、第二主砲機能停止！ 第一副砲も障害発生！」

「機関部にも障害発生！ 出力が低下していきます！」

たった一撃に主砲二基を潰された。それどころか副砲まで……。

回避行動を完全に読まれていた。

敵指揮官の能力も凄いが、それに応えた砲手の腕前の、なんと恐ろしいことか。

敵旗艦のおそるべき火力とクルーの練度。

前方火力の大半を潰されてしまったこの状況で、あれと相対し続けるのはあまりに危険だ。

もう躊躇してられない。タイミングが早い但最终の手段に出る！

「慣性航行に切り替え！ 反転右一五〇度！ 上下角マイナス二二度

！ 波動砲発射用意！ 発射と同時に重力アンカーをカットして反動でかつ飛ばします！ ラピスちゃん、あと何発いける!?!」

矢継ぎ早に指示を出す。

進もジュンも一瞬驚きの表情で振り返ってきたが、すぐに飲み込んでくれたようで発射準備を進めさせていく。

ヤマトが速いか敵艦が速いか。

ヤマトが先んじなければ次の一撃でヤマトは大きな傷を負い、拿捕されるか自害するかを選択を迫られることになる。

「二発まで保証します！ それで脱出と小ワープ一回分のエネルギーも残ります！」

ラピスもユリカの意図を理解してすぐにエネルギー残量の計算をしてくれた。助かる。

「二発使って敵艦隊を強行突破します！ 敵艦を狙う必要はありません！」

大介はすぐに操縦桿を捻ってヤマトを最速で回頭させ、境界面のある方向に艦尾を向ける。

つまり、敵旗艦に無防備にメインノズルを晒してしまうということだ。

早く波動砲を発射しなければ、ヤマトは――。

周りからの砲撃が、フィールドを失ったヤマトの艦体に突き刺さる。駆逐艦の砲撃の多くは装甲を貫通できないが、脆弱部位を中心に被害が拡大している。

ヤマトが先か、敵が先か。

無情にも敵旗艦の射撃用レーダーが照射された。

「アキト!!」

「見事だ、ヤマト」

ドメルは部下には聞こえないよう、小さくヤマトを称賛する。

ヤマトの前部主砲は無力化し、懸念していた人型の戦略砲も放たれる兆しがない。

だがまるで諦めるそぶりも見せず、まだなにかをしようとしているではないか。

（艦尾をこちらに向けた？ 戦略砲持ちはヤマトの右舷後部に……!?）

「艦隊を散開させる！ 包囲網を崩しても構わん！」

ヤマトの右舷後部に鎮座していたあの人型が、戦略砲の発射態勢に移行しているではないか。

艦隊を散開させないという選択肢はなかった。

ブラフの可能性は高いと考えているが、万が一にも放たれてしまったら艦隊は大損害を被ることになる。

それだけは避けねばならない。

敵の詳細なデータはないのだ。撃てるか撃てないかの判別ができないのなら、撃てるものと考えて行動するのが常套であろう。

ドメルは包囲網を崩してでも、部下を助ける道を選んだ。

狙いどおり、敵艦隊はサテライトキャノンを避けるために包囲網を崩した。

もちろんブラフだ。この状況下でサテライトキャノンは撃てない。本当に優秀な指揮官だ。

だからこそ、資料が不足していれば最悪な状況を前提として行動してくれると信じていた。

——おかげで、だれも波動砲に巻き込まなくて済んだ。

展開中のコスモタイガー隊を素早く格納して、命令を発した。

「波動砲——てえええっ!!」

「発射あああっ!!」

ヤマトの艦首からタキオンバースト波動流が勢いよく放出された。同時に反動を吸収してヤマトを空間に固定する重力アンカーがカットされた。

それによってヤマトは波動砲の猛烈な反動で後方に吹き飛ばされる。

そう、木星での経験を踏まえて発案されていた、一か八かの切り札であった。

メインノズルすらはるかに凌駕する推進力を得たヤマトは、乱れた艦隊の隙間を縫って包囲網から飛び出す。

噴射圧を稼ぐべく最大収束で発射された波動砲の軸線上に敵艦はなく、ガミラス艦隊は一隻たりとも巻き込まれてはいない。

予想どおりだ。サテライトキャノンを避けるために包囲網を崩せば、巻き込まずに使える隙が生じると思っていた。

………本当ならもつと早いタイミングで、リングがまだ健在の内に艦隊旗艦を波動砲で撃ち抜いて混乱を狙ったほうが効果的だと思っただが、それを選択できなかったユリカの甘さ。それを帳消しにするかの如くヤマトが空間を走る。

敵が態勢を立て直す前にヤマトは再度反転。メインノズルを全力噴射、第二艦橋下の艦橋砲から発煙弾を撃って全力逃走。

——ガミラス艦隊は、についてはこれなかった。

「まさか——このような手段まで隠していたとはな……!」

おもしろいものを見せてもらったと、ドメルは満足げな表情で飛び退るヤマトを見送った。

残念だが、火力と装甲に特化したドメラーズ三世では追いつけない。デストロイヤー艦でも無理だ。

「ガミラス最強のドメル艦隊破れたり——か。ヤマト……想像以上だぞ」

ドメルは、最良のタイミングで行われたブラフにも、超兵器を推進力に転用するという奇抜な発想にも感心させられっぱなしであった。さすがはデスラー総統が目かけた艦だ。

これほどの包囲網、これほどの時間を耐え凌ぎ、最後に勝利を掴めたのは、間違いなく彼らの不屈の闘志のなせる業だ。

「ドメル司令、追撃いたしますか？」

「いや、いい。あの速力には追いつけそうにない。それよりも、損傷した艦の応急処置と遭難者の救助に全力を尽くせ」

追いつけないという理由もあるが、それ以上に健闘を称える、先を見越してという意味でヤマトを見逃す。部下も文句はないだろう。

しかし、じかにタキオン波動収束砲を見れたのは今後の戦略において優位に働きそうだ。

あとは脱出の時に使用するであろう一発のデータを、境界面付近に巧妙に隠してきた観測機が捉えてくれることを願うばかりか。

（やはりヤマトの動向が、今後のガミラスの未来を左右する。——失敗は許されない。私の見極めが、ガミラスの命運を左右してしまう）
ドメルは改めて自分に課せられた使命の重さを噛みしめた。

辛うじて包囲網を突破したヤマトは、追撃を受けることもなく無事次元の境界面に到着していた。

しかし伏兵がいるかもしれないと警戒せざるをえなかったヤマトにとって、到着までの時間は気の休まる時間ではなかった。

交代で休息を取りながらも、全員が濃い疲労をべったりと顔に張り付けている。

「次元アクティブソナーに感あり……次元の境界面です」

疲労困憊の雪がそう報告すると、ユリカはすぐに波動砲で境界面を撃つことを指示する。

早くこの場を脱出してワープで逃げ延びたい。これ以上トラブルが起こるともう対処できないと思えるほど、みな疲れ切っていた。その願いを乗せた波動砲は、狙いどおり次元の境界面を押し開いて開口部を作り出した。

安定翼を開き、まるで雷雲の中のような回廊を抜けて次元断層を脱したヤマトは、無差別に近い緊急ワープで宙域を離脱し、安息の時間を手に入れた。

はずだった。

ワープ明けの直後、ユリカが倒れさえしなければ。

通常空間に復帰した直後、彼女の体内のナノマシンが活性化、浸食を再開してしまったのだ。

かつてない強敵との戦いで疲弊しきった体に、抵抗力など残されていなかったのである。

声もなく白目を向いてコンソールパネルに突っ伏したユリカを、進が抱き上げて医療室に走った。

万が一に備えていたイネスたちの懸命な処置のおかげで最悪の事態は回避できたのだが……。

「——手を握ってるのは……アキトとルリちゃんなの？　ねえ、なんで電気消してるの？　真つ暗でなにも見えないよ。あれ？　私、ちゃんと喋れてる？　なにも聞こえないんだけど……」

意識を取り戻したユリカは、視力と聴力に重大な障害を抱えていた。

ベッドに横たわるユリカの手を掴んでいたアキトとルリの顔が、傍らで見守っていたラピスとエリナと進の顔が、その報告を受けたクルーの顔が、悲しみに染まっていく。

傍らで発せられた家族の慟哭は、いまのユリカには届かず、悲しみに染まりきったその顔を見ることは——幸運にも叶わなかったものであった。

次元断層に落ち込むというトラブルも、ガミラス最強と謳われるドメル艦隊の猛攻撃も辛うじて切り抜けることに成功したヤマト。

しかし、度重なる苦難の連続にユリカは大きなダメージを受けてしまう。

だがヤマトよ、止まっている時間はないのだ。

人類滅亡と言われる日まで――

あと、二七〇日しかないのだ。

第十四話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十五話 悲しみのヤマト！ 立ち上がれ古代！！

古代、覚悟を示せ。

第五章 乗り越えるべき壁

第十五話 悲しみのヤマト！ 立ち上がれ古代！！

Aパート

ガミラスによって壊滅的な環境破壊を受け、凍てついてしまった地球。

その地球で自家用シエルターに入りながらも、ネルガル会長のアカツキ・ナガレは精力的に活動を続けていた。

人員や物資の不足が目立つためいろいろと厳しいご時世だったが、今後のことを考えると生産活動を停止させることは論外だった。

アカツキは最初からヤマトが失敗するとは考えていない。いや、考えないようにしていた。

アカツキはそもそも誰かに屈服するというのが大嫌いな人種だ。例え格上の侵略者だろうとも関係ない。

ネルガルが再建したヤマトは、いままで好き勝手してきたガミラスに散々煮え湯を飲ませているはずだ。そう考えるだけで明日への活力が生まれってくる。

ヤマトは必ず地球を救う。

かなり厳しい賭けになるだろうが、ミスマル・ユリカは愛するアキトと添い遂げるため、必ずやコスモリバスを手に入れて地球を救い、ついでにその身を健全だった頃まで回復させて再びアカツキたち——ナデシコの仲間たちに元気な姿を見せてくれるはずだ。

アカツキはそう信じているからこそ頑張っている。希望こそが、明日への活力なのだ

「ふむ。食品と医療品の供給はなんとか軌道に乗りそうだね。もう少し増やして暴動の抑制もしたいところだけど、これ以上はさすがに無理か……」

「はい。人はなんとかありますが、資源が乏しい現状ではこれ以上生産量を増やすのは難しいでしょう。ヤマトの工場プラントのコピー

も、規模はそれほど大きくないですから」

アカツキの秘書役を任されているプロスペクターが、資料を読み上げネルガルの現状を伝えてくれる。

プロスペクターの報告にアカツキも渋面を隠せない。

人道的云々もそうだが、ここで多少の無理をしても恩を売っておけば、地球の復興に便乗してネルガルの発言力を増せると考えているからこそその支援だ。決して善意だけでわが身を削っているわけではない。

木星との戦争でスキヤンダルが発覚して地位を落としたネルガルにとつて、ヤマトの活躍や地球の現状維持に全力を挙げて協力することとは、ネルガルの負のイメージを払拭させ、明日の繁栄を得るための投資として十分すぎる働きをすることだろう。

もちろんアカツキなりに地球の現状を憂いているのは本当だ。

だからこそ多少無理をしてもこうして現状維持に努めている。

そこに商人としての打算がないわけではないが、善意だけで行動する人間など逆に信用できない気質のアカツキとしては、いまの自分の考えと行動が間違っているとは思っていない。

第一ネルガルの会長としてネルガルを復権させ、栄誉を掴むことを望むのは経営者として当然の責務だ。他人にとやかく言われる筋合いはない。

「プロスペクター君。ナデシコCの改装と波動エンジン搭載艦艇基礎設計の進展はどうなっている？」

アカツキは手元を開いていたウィンドウの一つに視線を移しながら、今後の作戦に関わる案件、それを担当するネルガルの技術部門と造船部門の進展を問う。

一つはヤマトが地球に帰還してから使われるナデシコCの改装について。こっちはヤマトが帰艦までに仕上げる必要がある。間に合わなかったら大変なことになる。主にアカツキ個人、そして旧ナデシコクルー的な意味で。

もう一つは、ガミラス戦後を見据えた波動エンジン搭載型の新造艦について、だ。

これはいまのところネルガルが圧倒的に優位性のある事業であろう。イスカンダルからの支援で得られた各種データはすでに地球上で生産能力を維持しているすべての企業に提供されているので優位性はない。

だが、ネルガルにはヤマト再建という事業を成功させたアドバンテージがある。そこで吸収したノウハウは、ほかの企業では決して持ちえないものだ。

おまけにユリカが真田を通じて冥王星攻略までのヤマトの運用データもすでに提供済みだ。アルストロメリアの改修作業の副産物である。

それをじっくり研究する時間のあるネルガルは、ヤマト帰還後に提出される運行データを提供されるかどうかといった具合のほかの企業に圧倒的に先んじているのだから、独断場は確約されているも同然だ。

最初の内は、提供されたデータにアカツキは諸手を挙げて喜んだものだ。企業のトップとしては当然の反応であろう。

加えてヤマトのデータベースから回収できたアンドロメダと主力戦艦、駆逐艦や巡洋艦といった地球防衛軍が運用していた各種データ。

詳細な設計図などは望むべくもないが、外見や簡単なスペックノートだけでもいまの地球には大きな財産だ。

これらのデータを基に、こちらの技術や規格に合わせて改設計した主力戦艦級やアンドロメダ、駆逐艦や巡洋艦クラスを完成させて販売するのが戦後のネルガルの販売戦略である。

うまく形になれば、しばらくの間はネルガルが戦後の造船業を独占できるだろう。

もちろんこれらのデータを真つ先にネルガルに提供したのはユリカの好意であり、ヤマト再建と地球の現状維持のためにネルガルに無理をお願いした彼女なりの返礼であった。

(まあ、これらのデータがなかったとしても、僕は彼女のために動いたかもしれないけどね)

結局あの夫婦に入れ込んでいたのだ。アカツキにとつてもナデシコの思い出は、いまでも色あせない大切な思い出。その象徴であり、火星の後継者との戦いやヤマト再建計画を通して関係を深めたあの夫婦の未来、繋ぐことができるのなら力を貸すことに躊躇はない。

「それらはヤマト再建に携わり、地球に残留した技術者を中心に進行中です。新造艦についての最終決定は——ヤマトが帰艦して、ユリカさんの意見を聞いてからになるでしょうね——特に、波動砲の搭載に關しては」

「まあ仕方ないよね。正直いまさら感があるけど、データを提供してくれたのはイスカandalなわけで、ヤマトが太陽系を出てから軍や政府に開示した波動砲の資料は——だいぶ効果的だったみたいだしね」
アカツキは皮肉気に笑う。あのデータを見た連中の顔は生涯忘れられないだろう。——アカツキも人のことは言えないと自覚しているが。

「イスカandal。あの星もいろいろあったんだねえ。まさか、波動砲があそこまで危険極まりない技術だとは思わなかったよ……。あのお偉方が、波動砲搭載艦艇の量産どころか生産にすら消極的になるとはねえ」

ヤマトが市民船に向かって発射した波動砲のデータ。これだけは軍と政府にも細大漏らさず伝えられている。

当初は相転移砲を凌ぐ破壊作用に驚きながらも、今後の地球圏防衛のために数隻は波動砲搭載艦——しかもヤマトのデータベースに残されていた『拡散波動砲』を開発すれば安泰だと考えていた連中が、揃って顔面蒼白になったのは本当に見物だった。

旧ヤマトの波動砲の威力をほぼ保持したまま六連射を実現したトランジッション波動砲。あれほどの威力の砲は見たことがないと思っていたが、まだ序の口だったとは……。

さらに彼らを煽ったのがヤマトが太陽系を離れてから明かされたコスモリバーシステムの実態と、それに関連する対ガミラスの方針の影響も大きかった。

すでに知らされていて腹を括っていたミスマル・コウイチロウとそ

の腹心を除いた連中の、阿鼻叫喚と言つて過言ではないあの惨状。

ヤマトに問い質したくてもすでに通信圏外。

もつとも、干渉されたくないからこそあのタイミングで明かされたわけだし、アカツキも助言したりしたのだが。

……結局渋々のだが、ユリカが考えたプランを後押しすべく軍と政府の高官は各方面に理解と賛同を求めている始末だ。

もつとも、ヤマトが『成功』するかどうかは未知数だが。相手の――デスラー総統とやらがヤマトからの提案をどう受けるかによって、事態は大きく変わる。

できればいい方向に転んでくれたほうがネルガルのにはありがたいとは思うのだが、こればかりはあのお気楽能天気な艦長殿の弁舌に期待するしかない。

――ああ、不安だ。

「どうせ最終的には保有数を制限しても造るとは思うけどね、波動砲搭載艦はさ。結局ここまで追い込まれたっていう事実が覆せない以上、破滅の力であつても継りたくなるつてもんだよね、人間つてさ。――あとは、その力をどうやって御するにかかっているわけだけども……」

「ええ。愚かではないと信じたいものですか、地球人類が」

そう願いたいね、とアカツキも頷く。

まさしく神にも悪魔にもなれる力……。

後にアカツキは、波動砲に関わるすべての技術を指して、そう比喻したという。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十五話 悲しみのヤマト！ 立ち上がれ古代！！

綱渡りに等しい挑戦に成功し、次元空洞に落ち込むという危機と強敵ドメル艦隊との交戦を切り抜けたヤマトではあったが、そのことを喜ぶクルーの姿が見受けられなかった。

それはヤマトクルーにとって精神的支えであつた艦長、ミスマル・

ユリカが病の急激な進行で緊急入院したことが原因である。なお悪いことに、今回の発作により彼女は視力と聴力を完全に失う重大な障害を抱えてしまったことも、クルーの心に手痛い打撃を与えていた。

——オクトパス原始星団の時に薄っすらと感じられていた、ユリカへの精神的な依存が、ここにきて特大の爆弾として爆発してしまったのである。

そしてユリカが倒れたことがトドメとなって、ルリまでもが倒れてしまう。

アステロイド・リングの制御やその後の探索活動の疲労が祟った過労ではあったが、ルリとてチーフオペレーターとしてヤマトの航海をけん引してきた存在だ。

——ヤマトは大丈夫なのか？

クルーたちの間で次から次へと不安がささやかれる。

あのユリカですら……シミュレーションでは全戦全勝の無敗。冥王星基地との知恵比べ、我慢比べにすら勝利したあのユリカですら手玉に取られた新たな敵の出現。

そして深刻な航海の遅れ。次元断層の中では通常空間より時の流れが早かつたらしく、内部で過ぎた二日の四倍に当たる、八日間ものロスタイム。

加えて次元断層からの脱出地点と無差別ワープによる退避行動による予定航路からの大幅な逸脱を加味した、正味一〇日にも及ぶ航海の遅延。

カイパーベルトでの停泊にオクトパス原子星団での遅れと加味して六五日もの遅れ。

さらに戦闘で大きく傷ついていたヤマトの惨状。

致命的とも言えたのが主砲の被害だ。いまも機能停止したままの第一・第二主砲はそれぞれ左右に向いたまま砲身がバラバラの角度で停止したままの状態。修理待ちの状態だ。

加えて波動砲の準備中の被弾で第三主砲までもが同様の状態に陥り、ヤマトの戦闘力はがた落ちしている。

文字どおりヤマトの主砲として威力を見せつけてきたショックカ

ノンが停止したままという事態は、クルーにとっては非常に心許なく感じられていた。

復旧前に次の襲撃があつたら……。

度重なる不幸と暗雲立ち込める前途を前にして、ヤマトクルーの心は折れてしまう寸前であつた。

ワープによる撤退の次の日、進はユリカを見舞うべく右舷居住区の医療室に向かつて歩いていった。

状況は最悪だ。日程の遅れはもちろんヤマトの復旧にも時間がかかる。

幸いにも主砲は復旧可能な損害にとどまつた。かつてウリバタケが開発したデイストーションブロックのおかげだ。デイストーションブロックが最後の盾となつて機能してくれたおかげで、修理不能という事態を——さらに最悪な事態と言える、第二主砲直下まで伸びているエンジンルームへの貫通を防いでくれたのだ。

主砲の修理作業はゆつくりとだが確実に進んでいる、交換部品の用意も含めて五日で修理を完了する予定であるが、言い換えれば五日の間は主砲が使えないということだ。これは第三主砲も含めての話である。

不幸中の幸いだったのは、第一副砲は衝撃で不具合が起きただけらしく、いま現在は完全復旧して使用可能ということだろう。

それにパルスプラストの大半に撃ち残しているミサイル、それにまるまる残された波動エネルギー弾道弾が二四発。これだけあれば、小規模の艦隊であれば逃げるまでの時間稼ぎ程度はできる。もちろん波動砲も健在だ。

だがヤマトの被害をこの程度に抑え切った反重力感応基とリフレクトデیفエンスーはすべて使い切つていて、補充の用途が立っていない。前者は使える状況が限定されているとはいえないと心許なく感じる程度の活躍はしている、陰の功労者だ。

それに被害は抑えたと言っても艦体には数十もの弾痕が刻まれ、装甲の交換を求められている箇所は多い。

ワープで逃走したあと、幸運にもヤマトはガミラスの部隊に遭遇していない。どうやらいま現在はガミラスに所在が掴まれていないようだ。

次元断層内で資源を回収したことで修理用の資材には困らずに済んでいるが、できれば腰を据えた修理のため、どこか惑星にでも立ち寄りたところだ。が、銀河間空間に飛び出し恒星系がめつきり少なくなつたこの宙域では、それは高望みであると、ついさきほど周辺のスキャンングデータを見て肩を落としたばかり。

悪いことは、重なるものだ。

(それにしても、あの艦隊旗艦の実力。艦長の行動すら読みきり、ヤマトの防御を突破するための一点集中攻撃。どれをとっても、俺が太刀打ちできる相手じゃない)

心が折れてしまいそうだった。

ユリカを支えてみせると息巻いていた自分が過去の存在に感じられる。

たつたの一戦、一戦で進は絶望的な現実を突きつけられる羽目になつた。

そしていままで自分がこれほどまでにユリカに依存していたのだと認識するや否や、自分はまったく彼女の期待に答えられていなかったのだと自責の念が襲い掛かつてくる。

「……お母さん——」

ヤマト農園で取れた美しい花を一輪、片手に掴みながらユリカが眠るベッド訪れた進。眼下には酸素マスクを付けられ、薬品を体内に送り込む管が何本も腕に刺さつたユリカが静かに眠っている。

いつもにこやかに笑っていた顔は血の気が失せ、そつと頬に触れると返ってくるひんやりとした感触。——まるで、死人のよう。

かつてナデシコCで倒れたときよりもはるかに深刻な状態に、進は大声を上げて泣き出しそうな気持ちになる。

そつと、気持ちを抑えるかのように持参した花をベッドサイドの花瓶に挿す。

花瓶には、アキトラ家族が——そしてほかのクルーが見舞いに来る

たびに一輪づつ持ってきたのであろう、美しい花が束と刺さっていた。

たったこれだけのことで、彼女がどれほどクルーに慕われていたのかがわかる。そういえば、進が花を貰いに行ったとき随分と閑散としているなど思ったが……全部、彼女の見舞いに使われていたのか。

あれから再度行われた検査の結果、彼女の視力を回復する手段はないことが告げられた。視神経が完全に破壊されているためだ。聴覚も、同じ状態にあるという。

ほかにも体温の調節機能に異常をきたしているらしく、体温調節のため常に監視体制を維持しなければならなくなった。

筋力の低下も一段と進んでいて、もう自力で歩くこともできないらしい。

予想を上回る状態の悪さにアキトもエリナも顔面蒼白。ラピスは恥も外聞もなく大声を上げて泣き出し、ルリはシヨックと過労が祟ってその場で昏倒し、いまは自室で絶対安静を言い渡されている。

航海班——特に責任者の大介は、自身が立案した長距離ワープの挑戦のせいでヤマトが次元断層に落ち込んだのではないかと責任を感じて、苦しんでいる。

もちろん進も、そして第一艦橋でもっとも大人な真田も責任はないと慰めはしたのだが、あまり効果は上がっていない。

(こんな状態でもしも戦闘になったら……)

いまのヤマトでは、決して敵に勝てない。

ヤマトクルーが意気消沈している頃、ドメルは艦隊を率いて次元断層を飛び出し、早速デスラーにヤマト遭遇の報を知らせていた。

ほかのクルーには聞かれぬように最大限の防諜を施してから、通信室でパネル越しにデスラーと向き合う。

自身の執務室で連絡を受け取ったデスラーは、思いのほか早いドメルとヤマトの邂逅がどのようなものであったか、詳細を求めていた。

「そうか、ヤマトと一戦交えたか……」

神妙は面持ちで報告を受けるデスラーに、ドメルはいつもどおりの生真面目な表情で続ける。

「はい、聞きしに勝るとはまさにこのことでした。改めて、素晴らしい艦です。それに、ヤマトは自前の工作設備を有し、航行しながらも艦の機能や装備の改良を続けていると思われます。二カ月前の冥王星での戦闘時に比べると、戦術が洗練されているだけでなく、こちらの意表を突くことを目的としているであろう新装備の投入も行っていました」

ふむ、とデスラーは納得した。

単独航行をするのであれば、工作艦としての機能も多少なりとも有していてもおかしくないとは考えていたであろうし、自己改良することも想定していたが、思ったよりもペースが早い。

重ね重ね、敵に回したくないタイプだ。大規模な工廠と豊富な人材を駆使する国軍には及ばないまでも、以前の交戦データを基にした戦術を新しい装備で覆される危険性があるというのは、対峙する側からすれば面倒このうえない。

ただでさえタキオン波動収束砲という厄介極まりない装備を持ち、それを除いた戦闘能力も他を圧倒する水準にあるというのに。

だが、だからこそ惹かれるものがあるのだろうか。

「タキオン波動収束砲をこの目で直に見れたことも幸運でした。次元断層の境界面に向けての発砲も観測できましたので、その生データをすぐにでも本星に届ける手配をします。こちらで見た限りでは、やはりあのカスケードブラックホールに対して有用な破壊手段となり得ると思われます。ただ問題は、エネルギーが引き摺られて仕損じる可能性がいぜん残ることでしょう」

ドメルの報告にデスラーも頷く。できればヤマトには、もう少し詳細な観測できる状況下でタキオン波動収束砲を使って欲しいところだが、それで艦隊に大損害を出すのは本末転倒。少し方法を考えるべきか。

自軍への被害を抑えつつ、タキオン波動収束砲を使わせる——使わなければならない状況に追いやる手段を。

「総統、かれらはタキオン波動収束砲で実に突飛なことをしでかしてくれましたよ。例の人型の大砲をこれ見よがしに構えて脅して艦隊を分散させ、直接的な被害が出ないように発砲してその反動で一気に飛び出す。——まさか大量破壊兵器を推進力として活用するとは、このドメルとて思いつきもしませんでした」

そう聞かされてデスラーも思わず目を見開いてしまった。

まさか艦隊決戦兵器であろうタキオン波動収束砲を推進力として活用するとは……どうやらかのミスマル・ユリカという人物は、頭の柔らかい指揮官のようだ。

本当に突飛というか、常識で括れそうで括れない艦だと痛感させられる。単艦でわがガミラスを退けてイスカandalに行こうとするだけのことはあるとほめるべきか、それとも——。

被害を鑑みず力押しですり潰すのなら勝てない相手ではないが、移民船団護衛のための戦力を確保しなければならぬ現状でそれは現実的ではない。

いかに強大なガミラスと言っても、物量には限度がある。

やはりこのまま敵としてぶつかり続けるにはリスクの高い敵だが……。

「ふむ……ヤマトはタキオン波動収束砲を意図的に当てなかったか、か。………。ドメル、君なら同じ状況に置かれたとき、どうする？」

「そうですね……。もしも私が同じ状況に置かれたのなら、おそらく途中で艦隊旗艦に向けてタキオン波動収束砲を使用して風穴を開け、その中を突破することを選択するでしょう。艦隊旗艦を失った艦隊とは脆いもの、指揮系統の乱れを誘発すれば突破するだけなら可能です。ヤマトにはデブリやアステロイドを盾として使える装備があるので、タイミングさえ見極めればあの状況でも一発だけなら撃つことは可能なはず。それに気づかない指揮官ではないでしょう。にもかかわらずそれをしなかった。おそらくヤマトの艦長は大量破壊兵器の使用に忌避感を抱いているのですが、地球側から見れば敵でし

かないガミラス相手になにを遠慮する必要がありましたでしょうか——。推測の域は出ませんが、ヤマトはガミラスとの戦いの終結に、和平の可能性を見ているのではないかと考えます。それ以外に、われわれの感情を極力逆なでしないようにする、それ以外の理由でタキオン波動収束砲の直撃を自重する理由は思いつきません。彼らは祖国の存亡を背負った存在。なによりもそれが優先される立場にありながら半端な人道主義をひけらかすとは考えられません。……総統、やはりヤマトは総統の眼鏡に叶う相手と見ました。ですので、今後の対ヤマトの方針に關しましては、総統の意向を尊重したいと思います」

ドメルの話聞いて、デスラーは少し考えたあと「君の考えている決戦までは適度に泳がせて構わない。ただし、バランスには近づけるな」とだけ告げて交信を終了した。

最終的な判断を下すには、あと一步が欲しい。

いや、ガミラスの立たされた苦境を考えるのであれば、なんと少しでもヤマトを掌中に収めることを優先すべきだろう。

ヤマトなら、カスケードブラックホールを破壊するに足る力がある。スターシアが、あの女性がヤマトにあの力を授けた理由はおそらくそこにある。

スターシアはガミラスも見捨てられないが、直接託すには問題があると判断して、より信用できるほうに力を託した。ヤマトなら、ミスマル・ユリカならガミラスも地球も救うと判断して。

……だが侵略者である限り、ヤマトは決してガミラスには屈しはしない、ガミラスが行いを改めない限り、敵対し続け最悪の場合は……。スターシアと共感した指導者が、ガミラスにヤマトを渡す道を選ぶようながないのはわかりきっている。

となれば、利害関係の一致による一時的な共闘かさもなくば——和平による共存の道を選ぶしかない。

だがそうすれば……デスラーが求める『大宇宙の盟主』たる大ガミラスの存在は夢と消える。

どのような理由があつたにせよ、辺境の惑星の戦艦一隻に屈したとあれば、ガミラスの影響力は地に落ちる。

いままではその軍事力を警戒して静観していた星間国家も、こぞつてガミラスを屈服させに来るであろう。

そして、それは地球も同じはずだ。ヤマトは地球そのもの。ならばヤマトに屈するということは、地球に屈することに等しい。

どれほど強力で敬意を持つに相応しい存在であっても、戦艦一隻に事実上敗北するなど、あつてはならない。

そうならもう、ガミラスは誇りを取り戻せない。

それだけは断じて許してはならないのだ。

デスラーは偉大な祖国を弱者にするつもりなど。毛頭ない。

たしかにヤマトには共感を示しその偉大さを認めている。が、地球人そのものに対しては不信しかない。

つい最近まで内紛が発生していたこともそうだが、その原因も調べた限りでは一〇〇年も前の事件が原因だというではないか。

そんな過去の怨恨をいつまでも引きずるような文明に、信を置くことなどできない。

デスラーにとって地球人とはそういうものでしかなかった。だから事情を打ち明けての共存ではなく侵略による略奪を方針とした。

あんな野蛮人相手に下出に出るほど、ガミラスは落ちぶれていない。そしてそんな野蛮人の国相手では——協議している間にガミラスは取り返しのつかないことになる。

デスラーとて、スターシアの考えがまったく理解できない訳ではない。い。

力に溺れ、破壊と略奪にのみ明け暮れる蛮族に成り果てるつもりはない。

が、デスラーは戦いの中に生命の美しさを見出し、戦いの中にあつてこそ命とは煌びやかに美しく輝くものだと思つて疑われない性分だ。

そして、その戦いの対価として祖国も繁栄している。

……それは、デスラーのやり方が正しいという証明ではないのだろうか。

力によって得られる絶対の自信こそが、宇宙に平和をもたらすのではないのだろうか。

そう、デスラーはスターシアが言う『愛』という感情を理解し切れ
ていない。

祖国を宇宙の盟主としたいのは愛国心と理解しているが、デスラー
には人同士の繋がり『愛』が理解できない。

スターシアには敬意を抱いているが、それが『愛』なのかは自分で
もよくわかっていないし、ほかに心惹かれる異性や執着するなにかが
あるわけでもない。

だから彼は、自身の美学に則った指導者としての振る舞いがなによ
りも優先されている。

それに——ガミラスは侵略のみで勢力を広げたわけではない。武
力が背景にあるとは言え、交渉によって傘下に入れた星もあり、同時
にその武力の庇護下に入ろうと自ら進んで傘下に入った星もまた、多
いのだ。

そういった星々にはガミラスの植民星となることを条件に支援も
行い、可能な限り紳士的に応じてきた。不必要な搾取も圧制も敷いて
はいない。反乱を起こされても面倒だったという理由もあるが、ス
ターシアの言葉に引っかけかりを覚えたからでもある。

そう、それほど宇宙には戦乱が巻き起こっている。

調べた限りでは、あの天の川銀河の中でも特に星の多い、銀河中心
方向で活発に星間国家同士の戦乱が起こっている。

だれもかれもが、争いという選択肢を捨てられていない。

デスラーの苦悩は続く。

力がなければなにとつ成すことはできない。それはガミラスの
在り方が立証しているはずだ。

あのヤマトですら、力がなければ太陽系内のガミラスを排し、銀河
の海原へ進むことはできなかった。

しかし、戦う目的も力を振るう理由も同じであるはずなのに、ヤマ
トにはデスラーすら魅了する別のなにかがある。

それがスターシアが語った「ミスマル・ユリカ艦長は愛する家族の
ために戦っている」ことと繋がっているのかが、気になる。

そんな個人的な思惑が、国を救うに足る原動力になり得るのか。

人に向けられる『愛』というものが、『国家』を救うに足る力だとい
うのだろうか。

すでに天涯孤独の身となつて久しく、幼いころからそう言った感情
とはほど遠い権力抗争の世界で生きてきたデスラーにはどうしても
理解できない。

もしかしたら、ヤマトと手を取り合いミスマル・ユリカという人物
に接触すれば、それがどのようなものなのかわかるのかもしれない
が、個人的な願望で国を犠牲には……。

はたしてデスラーは、ヤマトに対してどう対処していけばいいのだ
ろうか。

普段ならばすぐにでも『排除』を決められる程度の案件に過ぎない
はずなのに——彼は、答えに窮していた。

一方ドメルもいまのやり取りで、デスラーが個人の思惑としてはヤ
マトと直接語り合いたがっていると悟った。今後の方針に幾らかの
修正を加える必要があるだろう。

ドメルとしては、またとない強敵としてヤマトと全力で戦いたい願
望がある。が、それは国家に忠誠を誓った軍人の本分に反する。

ドメルはデスラーからイスカandalとのやり取りまで含めた、ヤマ
トに関する詳細な情報を渡されている。

これは最前線で実際にヤマトを量るために必要という配慮だ。政
治面まで含めればヒスやタランにも詳細を打ち明けるべきだろうが、
彼らはデスラーと知っていることに変わりがない。

ヤマトを推し量るその役目は、最前線でヤマトと直に戦える立場に
あるドメルにしかできない。

ヤマト相手に対等に渡り合える指揮能力を有するドメルにしかで
きないのだ。

ヤマトを試すべく、ドメルはゲールに任せた策のほかにもひとつ仕
込みをしてあったのだが、どうやら変更を加える必要はなさそうだ。

デスラーから許可も出たので、ドメルが考えている七色混成発光星
域——通称七色星団での少数先鋭の艦隊決戦以外でヤマトの撃破を

狙う必要はないだろう。

撃破を狙う罠を張るのならそこがヤマトの航路上にあつて最適であるし、下手に挑んで無用な犠牲も出す失策も犯したくはない。

しかし、七色星団に誘い込めたとしても勝利のためには兵器開発局に依頼した対ヤマト用の装備と、長年ドメルが温めていたアイデアが形になることが必須。進展の具合は悪くないと聞いているので、ヤマトのワープ性能を考えれば間に合うだろう。……途中で劇的に改良されなければ、だが。

ヤマトに勝つには、タキオン波動収束砲を封じ一発逆転の可能性を奪って精神的打撃を与えつつ、十分な攻撃力を持った航空部隊と艦隊の連携による柔軟で休む間を与えない飽和攻撃を仕掛ける必要がある。

それによつて最大の弱点であろう、数の乏しさとそれに付随する持久力の乏しさを突くことが勝利への道だ。

推測を孕んだ部分は大きいが、根本的な技術力で劣る地球で完成されたこと、初期に見られたトラブル、そして交戦した際のヤマトの行動を鑑みるに——もしかしなくても、こちらの艦艇に比べてエネルギー効率が悪い可能性がある。

ガミラスに比べて地球の技術力が未熟なのは疑いようがない。ゆえに大出力を必ずしも効率的には使えておらず、凶らずも短期決戦に特化してしまった可能性が考えられた。

そう考えると、シユルツが敗北したのは航空機と連携した艦隊行動ができなかったことと、想像を絶した威力に恐れ戦き、短期決戦を求めてしまったプレツシャーによるところが大きいのだろう。

それにしても——。

ドメルは思う。

あのデスラーがこうも心を惹かれるとは、予想だにしていなかった。

ドメルは妻も子もいるので、デスラーが理解できないでいる人同士の『愛』については理解しているし、デスラーからミスマル・ユリカ艦長の戦う動機と聞かされたときにはむしろ納得したくらいだ。

要するに、だれかを愛したら愛しただれかの愛する人も大事になり、そうやってどんどん輪が広がっていつて——やがて世界すらも愛おしく思うようになるといった具合だろう。

ある種典型的な博愛主義とも言えるかもしれない。

ドメルも似たようなものだった。だから気持ちはわかる。だからこそ今回のヤマトの決断を素直に賞賛もできる。

デスラーは……幼き頃から政争の只中にあり帝王学を徹底的に叩きこまれた人生であったゆえに、理解できないのだろう。

親の跡を継いでガミラスの総統となり、個人的な美学を挟むことはあるものの、その力はガミラスという国家の繁栄のためだけに向けられている。

それゆえに、少々失礼ながらデスラーを哀れに感じることはあった。彼の父は徹底した現実主義者であったし、暴力によって権力を拡大していくのに躊躇がない人物だった。

彼の母も夫に逆らえない大人しい性格かつ政略結婚だったので、『愛』というものを感じ難い家庭であったことも災いしていたのだろうか。

もしかしたら、ヤマトがガミラスの妨害を跳ね除け続けたとしたら……ガミラスは転換期を迎えることになるのかもしれない。

ドメルはなんとなく、そんな予感がした。

しかしまずは、次元断層を脱したヤマトの現在位置を調べねば。

タキオン波動収束砲を使った脱出は、次元回廊の形成手段の違いから遠方に出現する可能性が高い。それにワープを重ねれば、予定されていたであろうイスカandalへの航路から大きく外れているはず。

早く捕捉しなければ。用意していた罠が使えなくなるのは少々具合が悪い。

データを得るために、ヤマトにはどうしてもあの罠を通過して貰う必要があるのだから。

あとは……そこでゲールが早々に戦死などという失態を踏まないことを切に願う。

彼にはまだまだ働いて貰わねばならないし、自身の策で無駄死にを

出すのはドメルの美学にも反する。

ドメルは拭い切れない不安を抱えながらも、ゲールの無事を祈るしかなかった。

ユリカの見舞いを終えた進は、第一艦橋には戻らず艦長室に足を運んでいた。

いまは住民たるユリカが医療室に入院しているためだれもない。本来なら、立場的に進が容易に入れるような場所ではないのだが、ユリカに戦術指南をしてもらうことがたびたびあった進は『息子』になる前からフリーパスで入室できていた。

「古代進、入ります……」

だれもないと承知しているのについ断りを入れてしまう。それは、家主がいないのに勝手に足を踏み入れる申し訳なさや、弱気になった自分に対する嫌悪が含まれていた。

ドアノブを捻って扉を潜ると、見慣れた艦長室の光景が目飛び込む。

——足りないのは、ユリカの姿と彼女が生み出す心地いい喧騒だけだ。

「……………」

進は言葉もなく室内を進み、普段ユリカと他愛もない会話をするときによく座る、艦長室右前方に備え付けられた椅子に座った。

——普段なら進の右隣に艦長席に座ったユリカがいて、他愛のない雑談を楽しんだり戦術シミュレーションで指導を受けたり。ヤマトに乗ってから、進にとつても最も楽しく安らいだ時間。ユリカを中心にルリがいて、ラピスがいて、アキトがいて——そして雪がいる。

進のいまの人間関係のほとんどが——ここに集約されていた。ユリカの傍らに。

「——っ！」

寂しさが胸に広がり目頭が熱くなる。つい弱音を吐きそうになっ

た自分が嫌になる。

ユリカは自分を見込んで——こんな未熟な自分を後継者として弱り切った体で育ててくれたというのに。

ここで弱音を吐いたら——ユリカの努力を……想いを無駄にってしまう！ ただでさえ期待に沿えない振る舞いをしてしまっているというのに！

そう思い直った進は、寂しさを振り切るために艦長室をあとにしよ
うと踵を返した。そのとき後ろから『ガコツ』という不審な物音を聞
いた。

振り返ってみると、いつも進が座っている椅子のそばにある引き出
しが開いていた。

電子ロックで封じられていたはずの引き出しが独りでに開くなん
て——。

恐る恐る空いた引き出しを覗くと、ファイルが一冊入っていた。厚
みのあるファイルだ。そしてその奥には、レリーフのような物も見え
る。

「これは——」

手に取るか悩んだが、進は意を決して引き出しの中に置かれていた
分厚いファイルを手取る。表表紙にはなにも書かれていなかった
が、表紙裏には『古代進へ』とユリカの字でメッセージが書かれてい
た。

『古代進へ このファイルを手を取っているということは、私はすで
に艦の指揮を執れなくなっている状況にあるはずです——』

出だしはそうだった。メッセージを読み進めていくにつれて進の
表情が険しくなる。

メッセージを読みきると、やや乱暴な手つきで中の資料を次々と読
み漁っていく。

ファイルをめくるたびに、指が震える。額に汗が浮かび、喉が渇い
てぐくりと唾を飲みこむ。

胸の内で沸き上がる感情に呼吸も細くなる。

——二時間ほどかけてファイルを読み切った進はぐくりとその場

に膝をつき、ファイルを胸に抱えて恥も外聞もなく大泣きした。

まさか……まさかこんな真実が隠されていたなんて——!!

進は自身がイस्कन्दルに抱いていた不安が的中していたことを理解した。

そう、イस्कन्दルはたしかに地球のために力を尽くしてくれていた。それはまぎれない事実であったのだが——そこには事態が收拾されるまで到底明かすことができないであろうとんでもない事実が含まれていた。

そして進の予想どおり、ユリカは、アキトは、エリナは、イネスは——そのすべてを承知のうえでこの旅に挑んでいた。

ようやく合点がいった。どうしてユリカが進を育てるのに躍起になつていたのか。どうして、ジュンやルリではいけなかったのか。

進はすべてを理解した。否応なく理解させられた。この旅の先に待つ試練を。

進は感情のすべてを吐き出したあとも、しばらくその場に蹲って動けなかった。それくらい、衝撃的な事実だった。

この内容に嘘はないだろう。ユリカが自分のために——旅の途中で指揮を執れなくなったとき、ヤマトがイस्कन्दルに辿り着いてなおガミラスの脅威が払拭できなかつたときに備えて残してくれた資料だ。

この資料が正しいのであれば、ユリカが助かる可能性は——健康な体に戻る確率は——五パーセントにも満たない。

だがファイルにはその成功率を上げるための手段も書かれている。それは、ユリカが重病を押して艦長になった理由にも繋がっていた。

「すべてを最善の結果で終わらせるには……」

進はファイルを胸に抱いたままゆらゆらと立ち上がる。

「俺が……俺がしつかりしないと」

決意も露に顔を上げる進。もう彼は泣いてはいなかった。同一視されるのは不愉快にも思えるが、やらねばならない。

かつてこのヤマトと共に戦った、『古代進』に倣って。

「そういうことなんだろ……ヤマト」

引き出しのロックを解除して進に知らせて張本人であろう、ヤマトにそう語りかけていた。

視線の先にはファイルで隠されていたレリーフがある。

——それは初代ヤマト艦長にして、並行世界の進にとって父親代わりだった——沖田十三のレリーフだった。

「——だいたいこんなところかしらね。微調整は必要だけど、方向性としてはこれでいいと思うわ」

機械工作室で真田は、イネスとウリバタケの力を借りつつ今後必要になるであろうある物品の設計と生産のため、ヤマトの修理作業の間を縫って話し合っていた。

「これでいけるでしょう。幸いにも、フラツシユシステムに関してはヤマトの意志の発現で、効果が立証されてますからね」

口に出して「妙なことだ」と思いながらも、不思議と大きな違和感はない。

ヤマトとはほかのクルーに比べて一年ほど長く付き合っている。

初めて出会ったとき、この艦は二つに折れ、スクラップと形容するしかない無残な有様だった。

真田は合理的な思考の人間であったので、当初はテクノロジを回収したあとはヤマトの残骸を資源に新しい艦艇を建造すべきだと主張したのだが、ユリカに「ヤマトを復活させなきゃ意味がない」と言われてそうそうに撤回した過去がある。

もちろん内心では無茶が過ぎると考えていた。地球の状況の悪化を鑑みるにできるだけ早くガミラスに対抗できる戦闘艦を用意すべきだ。だが、恩人たるユリカの意向は極力汲みたかったのである。

思い返すのは五年前の一二月。世間はクリスマスに騒いでいる時期で、真田は大学の卒業後の進路でいろいろと悩んでいた時期だった。

大学の研究室に残るというのも考えたが、それでは自身の目的を果たせないのではと考え、できれば企業の研究開発に携わる部署に付き、ゆくゆくは自分の信念に基づいた結果を世に出していきたいと考

えていた。

真田はそんな思いを抱いて様々な企業を巡り、あときはちようどヨコスカを訪れていた。

そう、ボソンジャンプの研究を察知してそれを妨害すべく、初めて木屋のジンシリーズがその威容を現した、あの日に――。

あのととき、事態を收拾したのがナデシコであることは真田も知っている。テツジンを無力化し、相転移エンジンの暴走でヨコスカを滅しようとしたマジンもボソンジャンプで連れ出してくれたことで、真田は命拾いをしたのだ。

そのナデシコの艦長がユリカであったこと、ボソンジャンプを実行したのがアキトだと知ったのは戦争が終わってからのこと。親友だった守が教えてくれたのだ。彼も偶然知ったのだと言っていたが。だから、世間でどう言われようとも自分の命を救ってくれたナデシコとそのクルーへの感謝を忘れたことはない。

だから、何気なく見た新聞の記事で二人が死んだと報じられたときは酷く落胆したものだ。

あの二人がラーメンの屋台を営業していることは知っていたので、近いうちにお礼も兼ねて食べに行こうかと思っていたのだが……。

真田が二人の生存を知り、叶わぬと思っていたユリカとの対面を果たせたのが――あのヤマトのドックだったのである。

ちようどネルガル傘下の家電メーカーに就職して研究職に就き、メキメキと頭角を現した真田をネルガル本社がヘッドハンティングしたのがきっかけであった。

落ち目だなんだと言われながらもナデシコの建造元ということで興味があったネルガルなので、その関連企業に就職した真田であったが、スカウト先では兵器開発の職に就くことを要求されたので非常に悩んだものだ。

真田は自身の技術と知識が、直接的に人を不幸にするであろう兵器関連に使われることは望ましく考えていなかった。だが、自分の命を脅かしたのも兵器なら、救ったのもまた兵器だった。

たしかに兵器は直接人を殺めるために造られる存在ではあるし命

を散らす悪意も同然。だが、それで護られる人もいるのだと、身をもって味わったあの経験が迷わせた。

大いに悩んだ結果、真田は頷いた。

かなり熱心に口説かれたのもそうだが、やり取りの中でついアキトとユリカのことを口にしてしまった際、

「あのお二人でした生きております。まだ公表されていませんが、実は——」

プロスペクター、と名乗った男性が語った衝撃の事実には真田は絶句して、強く拳を握り締めて憤った。

真田にとって最も許せない手段を平然と取りながら、「全ての腐敗の敵」などと宣ったあの恥知らずどもに、真田は頭が真っ白になるほどの激情を露にしたものだ。

それに、真田をスカウトしに来たのは折しも突然出現した侵略者——ガミラスの存在も大きく、強大なガミラスに対抗するためにも真田の知恵と技術を借りてより強力な兵器開発を行いたいと言われ、ついに真田も重い腰を上げたのだった。

その結果、望みながらも果たせぬと思っていた、運命的な出会いを果たしたのである。

だから、真田はユリカの意向を最大限に汲み取ってヤマト再建に協力した。恩返しを兼ねていたといっても過言ではない。

ヤマト乗艦を志願したのも大体それが理由だ。再建に最初から関わっている真田にはこの艦の機能のすべてがわかっていし、どのような形であれ彼女の乗る艦に乗りたかったのである。

まさかそこで守の弟と同僚になるとも、復讐者に墜ちていたアキトが出航直後に彼女の元へ帰ってくるとも考えてはいなかったが。

「ヤマトの意思が発現——か。改めて口に出すとおかしな気分ね。日本には古来から、付喪神という伝承みたいなものがあったけど……ヤマトが二六〇年前の戦艦大和の改造で生まれた艦と言うのなら、長い年月を経て靈性を得たと考えるのもありかもしれないわね」

科学者の言うことじゃないでしょうけど、とイネスは自分なりの見解を告げる。だが、真田はその考えが嫌いではなかった。

「たしかに科学者とか技術者の言うことじゃねえけど……そういうオカルトは嫌いじゃないぜ。モード・ゲキガンフレアといい、ますますアニメチックになってきたな」

「ついでに上がった仕上がった図面を掲げ、惚れ惚れするようにねめ回すウリバタケの姿に真田とイネスは軽く引く。」

「図面の内容が内容なのではつきり言って危ない人だ。まごうことなき変態。おかしな改造を追加されないように監視を強めねば。」

「しかし、これが完成して機能さえすれば……艦長の助けになるはずだ。艦長……アキト君やルリ君やラピス君、古代のためにも負けないでください——」

「まずは例の品に手を加えて試作品としよう。」

真田は科学者として、必ず人の幸せのためになってみせると、意気込みも露にヤマトの整備と並行してユリカのための品を作り始める。両親に倣うかのように。

イネスは真田の傍にそっと寄り添って、自分の仕事を疎かにしない程度に手を貸していた。なんとなく、いい雰囲気。

「——もしかして、俺って邪魔なのか？」

少し離れたところでいい雰囲気な真田とイネスを見て、居心地の悪さを感じる。

開発が決定したユリカへの支援物資は物がものなのでついつい妙な興奮をしてしまったが、想定どおりの機能を発揮すれば日常生活に支障をきたさずに済むはずだ。

病状の進行を止めることは、技術者のウリバタケには叶わない。だがこういった支援はできる。

ナデシコ時代からの付き合いだし、あの二人の結婚の際は既婚者としていろいろ協力したし、ウリバタケはこういったとき簡単に人を見捨てたりするような薄情な真似は決してしない。

——家族を保護して貰った恩もある。

ガミラス戦が始まってからあまり間を置かずに生まれた三人目のわが子を養うのは、地球の荒廃が加速度的に進んでいるこのご時世では、それは厳しいものだった。

ヤマト計画の一部であったダブルエックスの開発に参加し、相応の手当でも貰えたのは、本当に救いだつた。

なんとか家族を養えたのはこの計画への参加が大きく、このときばかりはネルガルの存在に感謝したが、「再建前におかしな改造をしてほしくない」とヤマト再建計画から締め出されたことや、家族のことを思つてユリカが意図的に声をかけなかったと聞かされたときは、憤慨したものである。

自業自得と周りからは言われたが。

ともかく、必要とされていると感じてヤマトに乗つたが、家族を置き去りにすることに内心罪悪感が湧かない訳ではない。木星との戦いや火星の後継者との戦いとは状況があまりにも違い過ぎる。

今生の別れになる危険性は——いままでの比ではないのだ。

だからせめてもと思ひ、ヤマト発進前にウリバタケからネルガルに保護を頼み込んでいたのだが、返ってきた答えが「もう艦長に頼まれて準備してるよ。心配しなくても帰つて来るまで面倒見てあげるから、がんばつてきてよ」と、アカツキ直々に太鼓判を押され、拍子抜けしたくらいだ。

感謝してもしきれない。彼女には大きな恩ができてしまった。

そう言つた経緯があるので、ウリバタケは一気に打ち解けた真田とも協力してヤマトはもちろん航空隊の改良に勤しみ、こうして合間を縫つてユリカを支える物資の制作も行っている。

そのユリカが倒れたことにはショックを受けているが、だからこそここが踏ん張りどころなのだ、『大人な』ウリバタケは自分を鼓舞して今眼の前の仕事に取り組むようにしている。

嗚呼、なんという男の戦い。

家族と友の未来を懸けたこの戦いに勝利し、緑の地球は俺達が護る！

……あのバカ、ヤマダ・ジロウが生きていたのなら、喜び勇んで戦つていたことだろう。そしてウリバタケもうつとうしく思いながら、背中を支えてやっていたのかもしれない。

やはり気が滅入っているのだろうか。ふと昔のことを思い出して

しまった。

雪は居住区の廊下を足早に移動していた。

恋する進が変に気落ちしていないかが心配で堪らなくなり、仕事の合間を縫ってその姿を探しているのだ。

ルリが倒れたいま、雪は生活班長の職務に加えて副オペレーターとしてヤマトの情報管理を行わなければならない。

さすがの雪でもそれだけの激務を処理することは不可能なので、いまは事務仕事に強いエリナの助力も借りて辛うじて捌いているありさま。本当ならこんなことをしている時間はない。

だがその忙しさにあっても、雪は進が心配で仕方がない。母親同然のユリカが倒れて、進もさぞショックを受けているだろう。

雪だって辛い。雪にとってはユリカは尊敬する上司であると同時に、年の離れた友人でもある。それに——今後の進展次第では将来の義母も同然の人だ。

イスカandalまでの旅路はまだ半分も過ぎていないのに、ユリカの体調がここまで急激に悪化するとは予想されていたようで、されていなかった。

決して楽観していたわけではない。雪もイネスもユリカの体調管理には気を遣っていたし、ユリカも大人しくしていないようで自身の体調管理には相応に気を遣っていた。

次元断層に落ちたのはまごうことなき事故であり、だれの責任と云う訳ではない。なのに彼女への精神的依存が原因となり、クルーはだれしも責任を感じてしまつて士気を落としている始末。

普段からユリカがどれだけ自分の支えになっていたのか。どれだけ過酷な状況下において導いてくれたのか、いやというほど突きつけられてしまつて、心を病んでいる。

とくに後継者として鍛えられていた進にとっては……少しでも支えになりたい。愛する進の支えに。

——自身の辛さも誤魔化したくて雪は進の姿を探していた。

居住区には姿が見えなかったので、艦橋か艦長室にでもいるのかと

思ってエレベーターに乗ろうとしたところで、当の進とぼったり出くわした。

「雪、どうしたんだ？　血相変えて……」

「え!？」

進に言われて思わず顔に触れてみると、いまさらながら強張った表情をしていたことに気付いた。

やはり、この艦内の空気は日頃クルーの精神衛生を気遣っている雪にとっても辛かったのだと、改めて思い知らされた。

「え、あ、その……古代君のことが心配で……」

動揺があつたからか、つい本音が漏れる。

雪の言葉に目を見開いて驚いた進だが、すぐにふつと表情を和らげて雪に微笑みかける。

「心配してくれてありがとう、雪。……でも、もう大丈夫だ。雪は少しでも艦内の空気を改善できるよう、なにか考えてくれないか？」

そう言われた雪は「ええ、わかったわ」と頷くしかなかった。進はそんな雪の肩を叩いて「頼りにしてるよ」と声をかけるとエレベーターを降りて居住区を進んでいく。

凜々しい進の横顔に見惚れながらも、雪の冷静な部分があの方角は進の部屋だと気付いた。

（あのファイルを置きに行くのかしら。自室に置くということは重要な資料ではないのだろうか、あんなに厚い資料をいったいどこで――）

雪は進が脇に抱えていた分厚いファイルが気になった。

もしかしたらとんでもない内容が書かれているかもしれない。女性の感が囁く。

もしかしたらユリカが、進を奮起させるなにかを万が一に備えて残していたのかもしれない。

雪は、ふとそう考えるのであった。

第十五話 悲しみのヤマト！ 立ち上がれ古代!! Bパート

ルリは自室のベッドで寝込んでいた。

電子の妖精と呼ばれ、遺伝子操作でオペレーター特性が強化されているルリではあったが、さすがに無茶が過ぎた。

昨日の戦闘でルリが行ったアステロイド・リングの制御はキャパオーバーしていたのである。敵艦の攻撃に合わせてリングの向きやデブリの密度を調整し、さらにミサイルならデブリで、重力波はリフレクトディフェンサーで受け止める。この分別だけでも相当な負担だというのに、さらに重力波の反射角の計算。おまけに一本では足りないからと複数のリングを形成し、個別に管理するという手法は、ルリとオモイカネの最強電子戦コンビをもつてしてもオーバーワークが過ぎた。

ただでさえも限界を超えていたところにユリカの病状悪化の報——倒れてしまうのも無理はなかった。

結局イネスからも絶対安静を言い遣わされ、いまこうして自室のベッドで唸りながら寝込んでいる次第である。

「ユリカさん——イスカandalまで持つのかなあ？」

ルリは苦しみながらもユリカの身を案じていた。

ユリカのことを思うとオチオチ休んでいられない。自分がしっかりとしなければ。ヤマトの機能を維持してイスカandalへの航行を続けさせなければと思うのだが、体が言うことを聞いてくれない。

立ち上がるようにも頭が締め付けるような痛みに襲われ、視界がぐらぐらと揺れて真っすぐ立っていることもできない。立てないのだから歩くこともままならず、ベッドから起き上がってトイレに行くことすらままならない。

こんな状態では当然第一艦橋にも第三艦橋にもいられず、おとなしく寝ていることしかできない。

しかし、ルリは休めているとは言い難い状況にあった。理由はほか

でもない、ユリカのことを気がかりすぎてだろう、彼女が苦しみがいた末、落命する夢をみてしまったからである。

全身にナノマシンの輝きを宿し、激しく苦しみルリに「助けて……」と縋ってくるユリカの姿。

吐血で汚れた手でルリの服の裾を掴み、血だらけになった顔で……。

ルリはなにかしてあげたくても、凄惨な光景に指先一つ満足に動かすことができず、ユリカが全身を痙攣させて動かなくなっていくさまを——死んでいくのを黙ってみることしかできないのだ。

そしてユリカが動かなくなってからのはじめて体が動くようになり、体温を失ったユリカの体をゆすり、死んだことを確認してから絶叫を上げる。

そして、その絶叫で目を覚ますのだ。

全身汗まみれで荒い呼吸。そしていま自分が見た光景が夢であることに安堵しつつ、それが現実のものになりかけていることに絶望し、声を出して泣くだけの夜であった。

結局それからは一睡もできず、目元に隈を作りながらルリはベッドの中でぐったりと横たわるだけの時間を過ごしている。

汗を掻いて濡れたパジャマが気持ち悪いが、自分では着替えもままならないので放置するしかない。風邪でもひいて病状が悪化するかもしれないと思うのだが、満身に動けないのではどうしようもない。

と思っていたら、朝は雪がおかゆを持ってきてくれたついでに着替えさせてくれた。おまけにシーツまで変えてくれたので、不快な感覚とはおさらばできた。

雪は時間をかけてルリにおかゆを食べさせてくれたあと、しっかりと休むようにと念を押して去っていった。

忙しいだろうにこうして時間を割いてくれる雪のやさしさに感謝しつつ、ルリは眠るに眠れない時間を過ごしている。

(……もうお昼か)

枕もとの時計に目を向ければ、時刻はすでに昼時。しかし食欲は

まったく沸いてこない。

雪はいま、倒れたルリの代わりにオペレーターとしてヤマトの情報統括任務にも就いているはずだし、本来の役目である生活班長としての任務も平行しているはず。

これ以上雪に迷惑をかけられないし、だれかを寄こしてもらうのも気が引ける。

そう思ってもう一度起き上がろうと上半身を起こしてみたが、酷い眩暈と頭痛に呻いて、倒れ込むようにまた枕に頭を埋める。その衝撃で更に酷く頭が痛む悪循環に苦しむ。

本当に情けない。ユリカはイスカandalからの薬を得るまでは、ずっとこんな苦しみに耐えながらヤマト再建を先導して——希望を繋いだというのに。

それに——あの指揮官はユリカすら手玉に取る歴戦の猛者。もしかしたら今回同様、いやそれ以上の激戦も想定される状況だ。

ユリカ不在の状態でまたあの指揮官が率いる艦隊と交戦したとしたらヤマトは……。

ルリでは絶対に勝てない。ジュンでも無理だろう。

あの戦い、ヤマトが包囲網を瞬時に抜け出せるような隙はまったくなかった。その隙を作ったのはサテライトキャノンのブラフであり、それですらも敵が『サテライトキャノンが使用される危険性』を警戒していたからこそ成立したものだ。

しかしこれすら『ブラフ』であることを見ぬかれていたり、相打ち覚悟の攻撃を指示していたのなら成立できなかった、綱渡りのような作戦に過ぎない。

もしも失敗していたらヤマトは最悪撃沈、よくて拿捕されていたこと間違いなし。

ゾツとする話だ。

同時にヤマトがガミラス艦隊に対してある程度強気に出れているのは、六連波動相転移エンジンが生み出す絶大な出力と豊富なエネルギー、そして波動砲とサテライトキャノンという大量破壊兵器を有していることが大きく、それが封じられると途端に戦力差が重くのしか

かってくる。

考えてみればごくごく当たり前のことなのだが、いままでの戦いでルリも少なからず慢心していたということなのだろうか。

そのスペックに加え、艦長がユリカだったからこそヤマトはそのままでガミラスの挑戦を退けられていたのだ。

よくも悪くも『常識的な』ルリとジュンでは、数の暴力という純然たる力を覆す奇策は考えられない。こういうのは経験もそうだが、本人の資質によるところも大きい。

ユリカは常識や正攻法を知りながら、『よくも悪くも』それに囚われない突飛さを持ち合わせた人間だ。いまのヤマトに求められているのは、まさしくそんな人材。だからこそヤマトの艦長としていままでの苦難を切り抜けられてきたのであろう。

その彼女を欠いてしまったいまのヤマトが、ガミラスの攻撃を退続けられるのか、ルリには予想もつかない。

それにしても――。

ルリは思う。なぜ銀河系を出てからもガミラスの攻撃があるのだろうか。

加えてあんな指揮官が出てきて、次元断層に落ち込んだヤマトをわざわざ攻撃しに来るなんて。

「ガミラスの本星は――てつきり銀河系にあると思ってたけど、違うの?」

ガミラス本星の所在は、現在に至るまでわかっていない。

だがあれだけの文明を持つ星となると、やはり地球型の惑星が必須だろうし、艦隊を整備するための資源を得られるとなると、大量の恒星系を有する銀河の中でしか発生しえないはずだ。

だからルリは、ガミラスは天の川銀河の中で発生して勢力を拡大する過程で地球を狙ったのだとばかり考えていた。

だが天の川銀河を出てからもガミラスに接触し、あそこまで優れた指揮官を刺客として送り付けてくる。

つまりこれは――。

「……大マゼランか小マゼラン、もしくはアンドロメダ銀河のような

別の銀河系から版図を拡大しに来たってことになってしまふ。それに、イスカンドルはガミラスの名を知っていた」

となると、ガミラスは大マゼランか小マゼランのいずれかにあつて、イスカンドルもその存在を知ることができるといふ状況にあるという推論が成り立つ。

だとすれば――。

ルリは恐ろしい想像に行き着いてしまった。

もしも、ガミラスがイスカンドルを知っていて、イスカンドルが地球に支援したことを把握しているのなら……ガミラスがイスカンドルにも侵略の魔の手を伸ばす危険性がある。

そうなったとしたら、ヤマトはどうすればいい。

地球を救うためにはコスモリバーシステムを受け取つてすぐに帰還し、環境改善を行わなければならない。

それが成つたとしても、今度は地球の復興だ。インフラの再建もそうだが、また侵略者が現れないとも限らない以上、防衛艦隊の整備も急務になる。

そんな状況下でイスカンドルが危機に晒されたとして、救援に向かえるのだろうか。

イスカンドルは、すでにコスモリバーシステムを自力で届けることすらできない状況にある。

だとすると、イスカンドルは自分の身を護るに十分な戦力すら有していない、地球と似たり寄つたりな状況の可能性も否定できない。

ただ、それだと地球に支援できる程度の余力があつたことが理解できない。それともコスモリバーシステムを提供する代わりに、完成したヤマトの力でイスカンドルの脅威を取り除くという交換条件でもあつたのだろうか。

だとしても、最初のメッセージでそれに一切触れないことが気がかりだ。救いを求めているとは考え難いが……。

――やはり、寝ていられない。ヤマトを――一日でも早くイスカンドルに到着させなければ、地球もユリカも、明日が危ういのに変わりはないのだから。

イスカンドルの思惑を量っている余裕はない。どれほど気掛かりであつても、スターシアの言うとおりに、疑うことなくイスカンドルを目指すしかないのだ。

また家族で一緒に生きていくためにも！

ルリはもう一度上半身を起こそうと力を振り絞るが、激しい頭痛と眩暈、今度は吐き気までもが襲い掛かってくる。

（負けてられない。ユリカさんは……ユリカさんは、アキトさんは……ボロボロの体でも頑張れたんですから！）

苦しみながらベッドから起き上がろうとしたとき、インターフォンが鳴らされた。

ベッド横にある端末を操作してドアの前の映像を写すと、

「ルリさん、ご飯持ってきましたよ」

「どうも、お見舞いに来ましたよ」

ハリとサブロウタが来ていた。

サブロウタは食堂で食事を摂りながら、隊長のリョーコと今後の方針について軽い話し合いをしていた。

ヤマト出航後も行われた地道な改修と追加装備の配備によって、コスモタイガー隊の総火力はかなり向上している。

しかし、次元断層での大規模艦隊戦となるとそれでも物足りなく感じてしまった。

環境的に出撃できなかつたとはいえ、あのような大規模戦闘となると砲撃密度が高く、流れ弾による撃墜の危険性が高過ぎて機動兵器部隊が運用し辛い。

多少の流れ弾なら耐えられる防御力を持っているのはガンダム、それもデИБライダーを装備しているエックスデИБライダーになるが、だからといって主砲クラスの直撃を受けると撃墜されてしまうだろう。

こういった数の暴力に抗うコスモタイガー隊の切り札は、当然サテライトキャノン一択。だがサテライトキャノンは現在のモデルでは連射が効かず、発射直後の無防備さをフォローする必要があるためエックスが追加されたいまもなお、安易に使用できる兵器ではない。

発射直後はタキオン粒子の空間波動の影響で、ボソンジャンプシテムを使うことが難しく、アルストロメリアで抱えてジャンプで後方に——というのはやりづらい。

そんなことをリョーコと話して、これからの連携や工作班への改良や装備の開発要請などを何点か纏めて提出するかどうかを検討してみることになった。

どうせ自重していないのだから、こっちからの要望を伝えるだけ伝えておくのは間違いではないだろうとの判断である。

で、甘い雰囲気こそなかったがリョーコとの楽しい食事を終えて食堂をあとにしようとしたところで、自室でダウン中のルリに食事を運ぶ役割に志願したハリと遭遇したのだ。

で、せっかくだから落ち込んでいるであろうルリと一緒に励まして欲しい、との頼まれたので、快く応じて同行することになった。

せっかく二人つきりになれるチャンスなのだから、男を見せろよとは思ったが口には出さない。

ハリとていっぱいっぱいな心境なのだろうし、ここは兄貴分としてきつちりしつかり背を支えてやるのが道理というものだ。

そんなこんなで、サブロウタはハリと一緒にルリの部屋にお見舞いに来ていた。

——ルリは思った以上に、具合が悪そうだった。

顔色が悪いし涙が流れた跡もある。過労もあるだろうが、やはりユリカが倒れたことが効いているのだろう。

ユリカのダウンは、サブロウタですら今後の航海の不安が増したくらい衝撃的であった。

ヤマトの使命はもちろんだが、サブロウタにとっては敬愛するルリが望む結末が得られるかどうかも大切である。そのためユリカの生存と回復が必須となれば、彼女の病状の急激な悪化は到底好ましくない。

それに、ナデシコと戦っていたときはあまり意識していなかったが、ヤマトと共に戦うようになってからは彼女の指揮能力がどれほど優れていたのかを、これ以上ない形で見せつけられたのだ。

それだけに、あの艦隊を指揮した指揮官との再戦が想定される状況でユリカを欠くのは最悪の事態と言える。

サブロウタの目から見ても、ルリとジュンではあの指揮官に打ち勝つのは難しい。そもそもルリは、ヤマトの防御機構であるアステロイド・リング防御幕の制御をリアルタイムで完璧にこなす必要性が今後出てくるだろう。そうなるルリには指揮をする余裕がなくなる。

ジュンは指揮能力はともかく、ユリカほどの突飛さもなく危機的状況下でのガッツにやや不安が見られる。

現状を変えられる一手があるとしたらやはり……。

(古代がヤマトの指揮を執る……しかねえかもな。あいつはメキメキと実力を上げてるし、シミュレーション上とはいえ、いざというときには波動砲の使用すら躊躇しない度胸がある。あの対戦のおかげで指揮能力が低くないってことは証明されたし、あとはあいつ次第でうにでもなる。あの艦長と引き分けた、って結果はほかの連中には頼もしく見えただろうしな)

実際はユリカのサービス行為だったわけだが。きっと彼女は、こんな状況も想定してあの結果を用意したのだろうと、いまになってサブロウタ気付かされた。

彼女は自分が倒れることを最初から考慮して、手を打っていたのだ。

「わざわざお見舞いに来てくれてありがとう……でも、もう大丈夫だから……」

ベッドで寝ているルリは案の定というか、無理をしても起き上がるろうとしていた。

サブロウタは思考を中断してやんわり注意、体を起こそうとしたルリをベッドに押し留める。

やっぱり、気持ちが悪く落ちて着かなくて無理しようとしている。

こういうのを諫めるのも、副官としての役目だ。——元だけど。

「そうですよルリさん。大活躍だったんですから休んでください。それに、ルリさんが無茶して体を壊すことを、ユリカさんが望むとは思いません」

ここでユリカの名を出して諫めるとは……一歩間違えば逆効果になるが、今回は効果があったようだ。

そういえば、ハリはユリカが倒れたあとにも自分の任務を疎かにする素振りを見せない数少ないクルーだった。

少し気になったサブロウタが尋ねてみると、

「別に艦長になにも感じないってわけじゃないんです。でも、僕がしっかりしないと。島さんだつて落ち込んでますし、ルリさんだつて………艦長を救つてみんなで笑顔でいられるようにするためには、ヤマトがこの航海を完遂するのが一番なんです。僕は——ルリさんのためにも頑張らないといけないんです！」

とのことだった。ずいぶん、言うようになったと内心感激したことは、口には出せない。

「——うう、わかりました……」

諫められたルリは素直に休むことにしたようだ。

サブロウタはベッドをリクライニングさせて上半身を起こしてやり、食事しやすいよう体勢を整えてあげた。さて食事は——。

「それじゃあご飯をちゃんと食べて、ゆっくり休んでくださいね——はい、あーん」

ハリは持つてきたルリの食事——おじやの器の蓋を開けてスプーンで掬つて突き出す。

一瞬サブロウタの思考が完全に停止した。

「……ちゃんと食べないと駄目ですよ」

そう言つてさらにスプーンを突き出す。ハリの頬も心なしか赤らんでいる気がするが、だからと言つてスプーンを引つ込めようとする気配がない。

(こいつ——意外なところで根性あるじゃねえか！)

「じ、自分で食べれるからいいですよ……!」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしたルリは自分で食べようとスプーンに手を伸ばすのだが……。

「朝も自分で食べれなくて雪さんに食べさせてもらったって聞きました。遠慮しないでください」

そういえばそんな事を聞いたな、とサブロウタも思い返す。食事を注文したとき料理長の平田が、

「今朝の食事は班長が食べさせてあげたと聞いている。まだ具合が悪そうだったら、そうしてあげたほうがいいかもしれないな」

と微笑みながらハリにおじやを入れた器を載せたトレーを渡してくれたのだ。平田よ、勇気を授けるにしてもやりすぎだ。

結局ルリは、顔を真っ赤にしてしばらく唸ったあと、観念して口を開けた。

それからのことは、彼女の名誉のために黙っておこうと心に誓った。

そしてサブロウタは「じゃあ俺、エステの整備に行つて来るんで」と気を利かせて退出する。

うん、見物人がいると気になって仕方ないだろうしこれでよかったんだ。

サブロウタ言いようのない罪悪感とあまつたるい空気から解放された気分を抱えながら、格納庫に歩いて行つた。

ルリがハりに餌付けされていた頃、アキトは「ちよつと外の空気吸つてくる」と月臣に断つてからパイロット室を抜け出していた。

ユリカの見舞いはもう済ませたが、結局アキトが見舞っている間意識が戻ることはなかった。昏々と眠る姿は見ていて辛いので、気持ちを入れ替えたくて最寄りの右舷展望室に寄り道していた。

「……ユリカ、負けるなよ……」

眼下に広がる巨大という表現すら生ぬるく感じる宇宙。

ヤマトの後方には母なる地球を含んだ、太陽系を擁する天の川銀河の輝きがある。

地球から約二万六三〇〇光年は離れたといつても、宇宙のスケールからすればまだ近所にいるのだと痛感させられる光景に、アキトは憂鬱な気分させられた。

次元断層から離脱したヤマトは敵の追撃をかわす目的の無差別ワープをして以来、ワープをしていない。

ユリカとあの戦闘の怪我人の状態を考えた結果、次のワープは三〇時間後とされ、いまから六時間後を予定している。

不幸中の幸いなのは、主砲を三基も潰されたわりに死者が出なかったことだろうか。

重傷者は数名出たが、いずれも医療班の懸命の治療の甲斐あって容態が安定している。イスカンドルの医薬品とヤマトから回収された医療機器を組み合わせた結果、地球側の医療技術は一段と進歩し、重症者であっても二週間程度の入院でなんとか復帰できるほどになっている。

もちろん五体満足であることが絶対条件ではあるが。手足を失ったり臓器に甚大な損傷を受けるとそんな短時間では回復させられないし、障害が残る可能性は依然として高い。

が、ヤマトでは義手や義足と言った四肢の欠損を補う医療の技術とデータがやたらと充実しているのだ。

冥王星のときは片足を切断しなければならなくなったクルーが一人出てしまったのだが、あまり間を置かずそのクルーに適した見事な義足が届けられ、IFSを応用したナノマシン神経接続技術であったりと動けるようになってしまった。

おまけに熱や痛みなどもちやんと感じられる拘り抜いた一品は、「紛い物とは思えない」と本人が漏らすほどであった。

ヤマトは特殊な任務に従事している上長期に渡って寄港もできないため、紙幣や硬貨というかたちでの給料は支払われておらず、電子マネーで支払われている。

日々の食事や最低限の医療費などは差っ引かれるのだが、これだけ高性能な義足でありながら格安で提供されたため、実は裏があるんじゃないかとそのクルーが問い合わせたところ真田工作班長から、「いいから貰っておけ。なにかあったらすぐに言えよ。俺が手入れしてやるからな」

と笑顔で断言され、引き下がらざるをえなかったと聞く。実際、なんのトラブルもなく快適に生活できていて任務にも支障をきたしていないとか。

外からぱつと見ただけではわからないほど精巧に作られ、接続部も人工皮膚で隠蔽されているので、「海に行っても大丈夫そうだ」と冗談半分に言っていたのをアキトも聞いていた。

そしてアキトにとって肝心要のユリカ。

彼女の治療にはアキトの治療データが思いのほか役に立っているらしい。そのデータが、ユリカの命をギリギリのところまで繋いでくれていると思えば、いままで受けてきた治療の甲斐があったというものだ。自分の体が治ったことよりもうれしく思う。

それに主治医的立場にあつたイネスは、アキトが感覚を補うために使っていた品々に手を加えることで、最低限の日常は遅れるようになると豪語していた。

アキトよりも格段に状態が悪いのに、本当に大丈夫なのかと心配になつたが、イネスの腕前を信じるしかない。

しかし――。

それでもユリカが、自分と同じような障害を被ってしまった。アキトにとつてはなによりも辛い現実だ。

経験したアキトだからわかる、当たり前のはずの感覚が失われるあの喪失感――絶望。

ユリカには、味わって欲しくなかつた。ユリカにだけは――。

それに予想よりもユリカの病状の進行が速まっている。

次元断層に落ちたことが加速した直接の原因だろうが、やはり想像以上に過酷なヤマトの航海が、彼女の命を容赦なく削り取っている。

新生したヤマトは信頼性に難があるとはいえ、性能面では以前のヤマトを超えているのだ。ユリカも旧ヤマトの詳細な活躍はわかつていないと言っていたが、似たような旅をしたことはあるはずだと言っていた。

――だとしたら、いまのヤマトの航海は旧ヤマト時代に比べて過酷さを増しているということではないだろうか。

このままガミラスの妨害の過酷さが増したら……いや、それも問題だがヤマトがもともとあつた世界と宇宙の構造が同一とは限らない、いや違って当然だろう。

だとしたら、ヤマトがいままで経験もしたこともない未知なる空間を進むことになって、ヤマトがさらなる苦難にさらされる危険も――

本当に、ユリカは耐えられるのだろうか。戦闘なら、アキトもダブルエックスで頑張れる。だが宇宙の難所を超える役に立てない。

――ヤマトという組織の中では、アキトは一介のパイロットに過ぎない。直接運航に関わってユリカを助ける役目についていないのである。

そんな自分の無力さに悶々としていると、

「テンカワ、ちよつといいかい?」

イズミに声をかけられた。

珍しい人物に声をかけられて、アキトは少し戸惑ったが断る理由もないので応じることにする。

展望室の壁側に設置されているソファア―に並んで腰かける。少しの沈黙を経て、イズミが口を開いた。

「辛いだろうけど、あんたがめげちゃいけないよ。艦長は、あんたの大切な人は――まだ生きてるんだからね」

「イズミさん……」

たぶん励ましに来てくれたんだとは思っていたが、思った以上に真面目な流れだった。

「大切な人を亡くす辛さはよく知ってる。でも、まだあの子は生きてる。辛いだろうけど、あの子のためにもあんたは笑顔を浮かべる余裕を持たなきゃ駄目だ。あの子をなんとしても繋ぎ留めたかったら、これまでどおり無理をしても励ましてやらなきゃ駄目だ」

「――気付いてたんですか、俺が……少し無理してるって」

軽い驚きと共に確認する。旧知の仲とはいえそれほど接点があったわけではないと思ったのだが。

「最初は、理不尽に引き剥がされたあとの再会だからタガが外れただけだと思ったけどね。それにしあって、あんた、少し艦長とイチャつき過ぎに思えたよ。二人きりならともかく、ああいうふうに人前でイチャつくのは……艦長はともかくテンカワにとっては苦痛だと思っ

たしね」

「——まあね。たしかに少しタガが外れてたのは事実だけど、少しでもあいつを元氣付けられるんなら多少の恥は気にしないつもりだった。イスカンダルまで、なんとしてもユリカの命を繋がないと未来がなくなるから——俺は、あいつと生きる未来が欲しい。一度は一方的に置き去りにしちゃったけど、その分の詫びも含めて、あいつをイスカンダルに連れて行きたいんだ。だけど、いまの俺にはヤマトの現状をどうにかできる力は——」

拳を握り締めて俯くアキトを横目に見ながら、イズミはぽつりと言った。

「私も、大切な人を——婚約者を二度も失った身だ。見ず知らずの他人ならまだしも、知り合いが同じ目に遭うのを見るのは……正直いい気分じゃない。当人同士で揉めて離縁したなら、話は違ってくるけどね」

イズミの告白に驚くアキトだが、そう言えば「記憶マージャン」のときにちらりと見た気がする。

そうか、だから気にかけてくれていたのか。

思い返してみれば、ナデシコ時代に比べるとイズミがアキトたちを気にかけてくれている気がする。

リョーコに比べると自然な感じだったから、そう言った裏事情までは感付けないでいた。

「だからいろいろあったにしても、彼女を一方的に置き去りにしたあなたに怒りが湧かない訳じゃなかった。けど、戻って来て決着をつけたみたいだから水に流すとして——いまは力を貸してやるよ。パイロットであっても、力になれることはあるはずだしね」

ふっと笑うイズミを見て「珍しいものを見た」という顔をするアキト。

旧ナデシコ時代からの付き合いだが、個人的な付き合いがあったわけでもない、パイロット仲間としてもリョーコほど近くもない、ヒカルのような話題もないと、少々距離のある付き合いだったから、こうやって話しかけてくること自体異例中の異例だ。

「その、ありがとう、イズミさん」

思いがけない人物の思いやりに、アキトは少し目頭が熱くなった。改めて思うが、本当にいろいろな人に支えられて、ここに立てている。

「だから艦長やテンカワたちがなにを隠してるのかは、あえて聞かないことにするよ」

イズミの言葉にアキトがピクリと反応する。

「私なりにいろいろ考えてみたけど、指揮能力のことを考えても艦長がヤマトに乗艦するのは——病氣のことを考えるとどうしても不自然だ。ヤマトが地球に帰還するまで命が持たないにしても、もつと体の負担を抑えられる役職に就いてもよかったのに、どうして艦長でなければならなかったのか。いろいろ考えてみると、あまりいい答えには行き着けなくてね……」

「——たしかに。爆弾だよ、俺たちが隠してる情報って。だから、これ以上はいまは——」

「聞き出すつもりはないよ。そつちが愚痴で口を滑らせても、私は決して口外しないって誓う。正直暗い雰囲気は好きじゃないしね」

そりゃアキトだって暗い雰囲気は好きではないが、普段どちらかというと陰湿な雰囲気なイズミが言うと言得力を感じにくい。まあ、よく駄洒落や漫談を披露しているので本音なのだろうが。

アキトは周囲を見渡し、人影がないことを確認するとコミュニケーションの電源をオフにしてから、

「——俺の独断になるけど、イズミさんには話してもいいかと思う」

その態度にイズミもコミュニケーションをオフにして周囲に気を配りながら、アキトの告白を聞いた。

……………

「……覚悟はしてたけど、やっぱり特大の爆弾だね。口外しなくて正解だよ。こんな情報が早々に漏れてたら、ヤマトの航海はもっと苦しくなってたかもしれない」

イズミも苦い表情だ。誰かに聞かれる危険を考慮して掻い摘んだ

説明になつてしまつたが、それでも概要は理解して貰えたようだ。

「誓つたとおり、誰にも口外しない。できる限りのフォロワーもするけど……あんたも気持ちをしつかり持って、優しくしてあげるんだよ」
「わかつてるよ。俺、ユリカの夫だから」

イズミにそう答えたところで、展望室に進が入ってきた。揃つてぎくりとしたが、進は特に突つ込まなかつた。

「アキトさん、ガンダムの状態はどうですか？」

真面目な表情の進にアキトも気を引き締めて答える。

「消耗部品の交換作業は終わつてる。いつでも出撃可能だ、戦闘班長」
「アルストロメリアも、次元断層で使用した機体の整備は終わつてる。被弾らしい被弾もなかつたからね」

「わかりました。いまヤマトは主砲が使えず攻撃力が激減しています。ガンダムを主軸にした航空隊が戦力の要となるので、いつでも出撃できるように警戒態勢を敷いてください」

「了解！」

イズミとそろつてアキトは敬礼して答える。一応ヤマトは軍艦なので、アキトも幾分こういつた仕草が板についてきた感がある。

「頼みます。ああでも、アキトさんはユリカさんの見舞いに行つて来てくれませんか？」

「さつきみ——」

見舞つたばかりと言おうとしたアキトを制するように「あなたの期待に込えてみせるって、伝えて来てください」と言われて察した。

進はそれだけ言うつとすぐに展望室を出て行つてしまう。アキトとイズミは進を見送つたあと顔を見合わせて、

「ありや、さつき聞かされたことを知つたつて感じだつたね」

「——たしか、ユリカは方が一に備えていま話したのと同じことをファイリングしてると言つてたつて。進君……それを見ちやつたのか」

アキトはこういつたとき、折を見て進にファイルを渡す役割を任されていたことを思い出した。

ただし、「アキトから見ても進が指導者としてやっていけそうに感

じたら」と前置されたうえで。

だが進は、アキトやエリナやイネスと言った、真実を知る者の判断を超えたところで真実を知りながら——それを受け止めた様子だった。

「どうやら、思った以上に強い子だったみたいだね。まだ一八だつて言うのに、大した子だ」

イズミは優しい気な声で感想を述べる。

アキトも同感だった。ユリカが拾い上げて一生懸命育てた古代進は——『古代進』とはまったく違う人物を教師に育つたにも拘らず、同じような風格を身に付けつつあった。

「ユリカの奴——結構後進の育成が上手いのかもめないな」

イズミと別れたアキトは再び医療室のユリカの元を訪れた。

「あら、さつきも来てなかったかしら？」

イネスがからかうように言うと、アキトは後頭部を搔きながら「進君に言われて報告に、ね」と答えた。

イネスはそれだけで察した様子だった。

追及もせず適当な理由で人払いして、ついでに隣り合ったベッドの怪我人・病人に睡眠薬を打って眠らせて、強引に防諜体制を整えてしまった。

やりすぎじゃ、と思ったアキトだが下手に口を出して痛い目を見るのは馬鹿馬鹿しいので沈黙を守る。

そうやって密談の体勢が整った病室で、アキトは眠り続けるユリカに報告した。

「ユリカ……進君が俺たちの秘密を知ったよ。いずれそうなると知っていても、いざ知られると怖いものだな。俺やイネスさん達は関わっていない。進君が艦長室の資料を見つけたみたいなんだ。となると、犯人は——」

病室の天井を仰ぐ。

「ヤマトは、進君に務まるって判断したのかな。それともこの緊急事態を凌ぐために無理を承知で導いたのか——どちらにせよ、もうあと

には引けない。ユリカ——まだまだ、進君には荷が重いよ。無茶言う
ように悪いけど、もう少しの間お前が導いてやらないと。だから早く
——目を覚ましてくれ」

そつと右手でユリカの頬を撫でる。反応はない。それでもアキト
は精一杯の笑みを浮かべて、ユリカに優しく触れ続けた。

「——ううっ。もう、飲めないよお……激マズドリンクは、もういらな
い……」

しばらくして、寝言とは言えようやく見せたユリカの反応がそれ
だったので、激しく脱力したアキトとイネスであった。

が、内容が脱力必須のユリカらしいものであったことから、クルー
を励ますに使えるかもと、ユリカが反応を見せてから回していた録
音・録画記録から、音声だけをぶっこ抜いて艦内に放送しようと準備
に入るイネス。

アキトはどうリアクションしていいのかわからない様子ながらも、
そつとユリカの左手を両手で優しく包んでみる。

——ふと、眠り続けるユリカの表情が和らいだ気がした。

そのころ、ラピスは重い体と気分を誤魔化しながら機関室でエンジ
ンの調整作業に参加していた。

ユリカが倒れてしまったショックは大きく、泣き腫らした目は真っ
赤、夜も眠れなかったのだらう目の下にはクマ、ただでさえ色白な肌
が更に白くなっている。

そんな状態で作業するのは危険だ、休むべきだと山崎と太助は訴え
たが、ラピスは頷かなかった。

ユリカのが心配で心配で堪らないのは覆しようがない事実で
あったが、ラピスにもヤマトの機関長としての意地がある。

ヤマトの航海の果てにこそ、ラピスが一番欲しいものがある。

元気になったユリカ、五感と本来の人間性を回復したアキト、お姉
ちゃんになったルリ、頼れるお兄ちゃんの進、そしていまままで自分に
人間性の大切さを説いて育ててくれたエリナ。

みんなと平和になった地球で思う存分生きていく。その願望を実現するためにも、折れたくないのだ。

これは意地だ。意地だけでラピスは機関長として職務を果たそうとしている。

それに『アキトもユリカもがんばったのだ』。

ラピスと違って健康とは程遠い体で、文字どおり血反吐を吐き地面に這いつくばりながらがんばったのだ。

アキトはユリカを救い、火星の後継者を倒すため。

ユリカはヤマトを蘇らせ、苦境に立たされた地球を救い、家族と友人を護るため。

ラピスにはユリカのようにヤマトを引っ張っていく力はない。アキトのようにパイロットとして直接的と砲火を交えることもできない。

でも機関長として機関部門を完璧に運用していくことはできる！

アキトとユリカの子として、挫けて全部を失うような真似だけは決してできない。

ルリだって己の役割を果たした結果倒れたのだ。まだ自分は倒れるほどがんばっていない。

まだまだ私は頑張れる。そう自分に言い聞かせて懸命に仕事に打ち込む。

もちろんラピスのその姿勢は、周りから見れば危ういものであった。

整備作業の指揮を執る山崎はラピスのコンディションの悪さを鑑みて、このなかで最もラピスと親しい太助補佐に付けて見張らせていた。

彼女の気持ちを汲んで——いや、へたに一人にするよりもここにいたほうが却って気持ちが落ち着くだろうと考えてやらせているが、あの精神状態ではミスをしなはずがないだろう。

案の定というか、ミスが頻発しているようで太助がそれとなくフォローを加えているが、自分がミスが続けていることに気づいて焦りを募らせ、それがまたミスを生む悪循環を生んでいる。

どうしたものかと頭を悩ませていた山崎だったが、コミニケを通してイネスから思わぬ一報が届いた。

「艦長の容態は回復に向かつてるみたいよ。さつきおもしろい寝言も言ってたわ」

呆れ返った声で告げたイネスはユリカの寝言を艦内に流す。それは山崎のみならず、ラピスや太助、機関班の全員を脱力させる内容であった。

だがそんな寝言が出る程度には余裕があると思えば、彼女はまだ大丈夫だと思えて安心できる。——していいのか悩むところだが。

——しかし夢に見るほどまづかったのか……。

思い起こされる太陽系さよならパーティーの喧騒。いささか悪ノリの過ぎたパーティーでのユリカに対する所業を、いまさらになって反省することになろうとは。

(もうしわけありませんでした艦長。しかし、その寝言のおかげで機関長は救われたようです)

視線をちらりと向けてみれば、ラピスは両手で涙を拭っていた。だが表情はいくらか明るくなっているし、さきほどまでの思いつめた感じは和らいでいる。

その様子に山崎も、面倒見ていた太助もホッと胸をなで下ろし、問題児である六連波動相転移エンジンの整備を急ぐのであった。

ヤマト第二艦橋。

航法艦橋とも呼ばれるそこで、航海班の面々は今後のヤマトの進路についての打ち合わせを続けていた。

しかし、班長の大介を始め航海班の表情はみな一様に暗い。

だれもが、次元断層にヤマトを落としてしまったのは自分たちの責任だと気に病んでいたからだ。

それに冥王星攻略作戦後の停滞はまだしも、オクトパス原子星団での停滞も記憶に新しい。あれも原子星団の存在を見落とした航海班の責任と言われてしまえばそれまでだと思えば、責任の一つや二つ、感じてしまうのは無理らしからぬことだろう。

大介は特に責任者として、ヤマトの舵を直接与る身として今回の、いやいままでの航海の遅れを気に病んでいた。

（俺がヤマトを次元断層に落とせばいい、艦長ばかりかルリさんまで倒れさせちゃった……俺は、みんなに——古代になんて詫げればいいんだ……）

親友の進がユリカの『息子』という立場を受け入れたとき、「古代が悲しまないようにヤマトをイスカンドルへ」と決意したというのにこのザマだ。情けなくて涙すら出てこない。

それに、予定を大きく外れてしまったため、本来ならヤマトの航海になんら影響を与えないはずだった大質量天体が、ヤマトの進路を塞いでしまっている。

迂回するとなるとイスカンドルへの方向に対してさらに大きく外れてしまう位置関係にあるため、さらに三日の遅れが加算されてしまうと計算が出ている。

だがそのまま進めば重力高配の影響で至近距離にワープしてしまう危険がある。大質量天体のそばではワープの危険度がぐっと上がるので、万が一ガミラスに遭遇した場合はとても危険だ。

リスク回避のために日程を遅らせてでも迂回すべきか、それともリスク覚悟で至近を通過するべきか——。

度重なるトラブルで心労を溜めた大介には決断しきれるものではない。いや、最終的な決断を下す最高責任者は不在。代理である副長のジュンもこの情報に頭を悩ませている。

だれもが不安なのだ。いままでヤマトの進退を決定してきたユリカが倒れ、その状態でも航行を続けなければならぬことが。

いままではユリカが倒れても、ヤマトは停泊を余儀なくされる出来事がすぐに起こったから、彼女不在で航行を続けたことがないこともそれを助長していた。

それにいままでは、彼女も大事には至らずすぐに元気な姿を見せてくれていた。……だが今回は違う。

不安を感じないわけがない。感じずにはいられない。

そうやって結論が先延ばしにされていた第二艦橋を訪れたのは、本

来なら用がないはずの進だった。

「島、次のワープ航路の計算はもうできてるのか？」

「古代……」

進に問われても大介はすぐに応えられなかった。彼の顔が直視できない。思わず謝罪の言葉が口から飛び出しそうになった。

「どうした島？ おまえらしくもない。航路はまだ計算してないのか？」

謝罪の言葉を飲み込んで、大介は「二通りできているが、ちよつと問題が……」と濁した答えしか返せなかった。

「問題？ 問題とはいったいなんなんだ」

やけに食らい付いてくるな。

少し鬱陶しくも思うが、大介は丁寧にその問題を進に教える。

「ヤマトの現在位置からイスカンドルまでの最短コース上には、高重力場を持つ天体——ブラックホールがあるんだ。この隣を掠めるようにワープすると、航路が歪曲されて最悪ブラックホールの中に飛び出してしまう可能性がある。それが回避できたとしてもヤマトのワープアウト地点が限定され、容易に推測できてしまうという問題もある。ヤマトの現在位置がガミラスに知れているとしたら、そのポイントに罠を仕掛けられる危険性があるんだ。だがこれを迂回するルートを通ると、安全と引き換えに三日をロスしてしまう。ヤマトはすでに六〇日近い遅れを出している以上、三日とは言えロスタイムが生じるのは避けたい。が——」

「が、ブラックホールをかすめていくのはリスクが高過ぎる、か……たしかにいまのヤマトは万全とは言いがたい、安全策を取るのが無難だとは俺も思う。……だが島、危険を孕むとしても、いま思いきっては突っ込むべきじゃないのか？」

進の言い様に大介はすぐに反発した。

ブラックホールのすぐ傍を通るような航路は、あまりにもリスクが高い。ガミラスだってヤマトの所在を掴んでいて、罠を張っている危険性もある。ヤマトの航路は実際ガミラスに読まれていた。すでに二度も、太陽系外で罠を張られているのだと強く言い切る。

「だとしてもだ。いまの俺たちには危険を承知でも時短を図るほうが大事じゃないのか？ それに罨の可能性は極めて低いはずだ。本来の航路からは大きく外れているし、次元断層を出たあとの緊急ワープの行き先までを知られているとは考え難い……あれから一日だ。罨を張るには、ガミラスにとつても準備時間がなさ過ぎる」

「たしかに、ガミラスがイスカンドル行きを知っていると仮定すれば、普通は最短コース上に罨を張るか……。言われてみれば、無作為なワープから一日程度で罨を張れるはずがないな」

言われてみればそのとおりだ。ガミラスがヤマトの目的地がイスカンドルだと知っているとしても、ヤマトの航路を推測したうえで罨を張るはず。その点この宙域も、件のブラックホールも、地球とイスカンドルを結ぶ航路からは大きく外れていて、ヤマトがこんな航路を選択する理由がない。

回り道もそうだが危険すぎるし日程の損失も多いからだ。

不安と罪悪感、それに過去の経験からの疑心暗鬼で判断を間違えていたらしい。

「わかってくれたか、島。なら頼みたいことがある。いまから言うことを真田さんやイネスさんの力を借りて検証してくれないか？」

進の話聞いて大介が驚きに跳び上がる。理屈では可能かもしれないが、あまりに危険な賭けだった。

「古代！ そんな無茶をしたら、けが人はともかく艦長のお体が……」

「艦長が俺たちを置いて勝手に逝くわけないだろ」

「古代……！」

「俺は艦長を信じる。艦長は最後の最後まで絶対に諦めない人だ。艦長の息子として、弟子として、部下として、俺は艦長を信じて最後まで突き進む。島、おまえも艦長部下なら、艦長を信じる。そして、艦長が命懸けで蘇らせた、この宇宙戦艦ヤマトを信じるんだ！」

予想外に力強い進の言葉に、大介も気持ちを引き締めて「検討してみる」と宣言する。

「任せたぞ」と大介の肩を叩きほかの航海班のクルーを軽く激励して第二艦橋を去る進の背に、大介はユリカの面影を見た。

普段は楽天的でアキトとイチヤイチャしたりボケたりして、クルーを呆れさせることも多いのに、いざと言うときには病弱な体からは想像もつかない活力でみんなを引っ張っていく。

いまの進からは、そんなユリカの面影がしつかりと感じ取れるのだ。

(いつの間にか、おまえは俺の前を行ってたんだな……)

同期の親友で、同じ位置にいたと思っていた進は、いつの間にか大介よりも先に進んでいた。

いまの古代進は、かつての直情的なだけの熱血漢ではない。

尊敬する母の背中に必死で追いつこうとしている、指導者の見習いだったのだ。

第一艦橋に戻った進はすぐに戦闘指揮席で武装の稼働状況を調べた。

主砲の復旧が間に合わないのは承知のうえだ。だが副砲の回復具合にミサイルの残弾、パルスブラストの稼働具合、見るべきところは多い。

予想どおりだが、主砲以外の武装は一通り使える。波動砲も健在だ。

結局出番に恵まれなかった信濃の波動エネルギー弾道弾もいつでも使える状態のまま放置されている。これを使えば対艦戦闘はもちろん、いざと言うときの目撃ましとして使えそうだ。

コスモタイガー隊の稼働状況はヤマトと反対にすこぶる良好。次元断層内での戦いは砲台代わりで至近弾もなかったことが幸いしている。これなら、ガンダム二機を前面にほかの機体で支援させる運用で十分に戦闘可能だ。

エックスの追加で対艦戦闘力も向上しているのも上々と言える。

問題は、航路復帰したあとガミラスがどこで仕掛けてくるかだ。どんな手段を講じてくるか、読み切れるほどの情報がない。

(やはりここは、出たところ勝負しかないか)

もともとヤマトの旅自体がそういつた面をたぶんに含んでいるの

だ。怖気付いては先に進めない。

「熱心だね、古代君」

副長席のジューンが話しかけてきた。

「いまはヤマト全体が不安定ですからね。だれかがしつかりしないと、明後日の方向に飛びかねないですから」

「……そう、だね。ごめん、頼りない副長で……」

別に貶める意図はまったくなかったのだが……。悪いことをしてしまった。

しかし、艦長が倒れたこの局面においては最高責任者として艦を維持していかなければならないはずのジューンが、（特にクルーの精神的支えとしては）あまり役に立っていないことは純然たる事実であり、進もそう感じていた。

やはりというかなんというか、実務能力ではなく人物としての押しと言うか印象がどうしても弱く、ユリカの陰に隠れてしまったことで「あの人本当に頼れるのかわからない」とクルーによくない印象が根付いてしまっているのが原因だろう。

いや、陰に日向にユリカを支え続けている苦労人で、ほかならぬユリカ自身から「ジューン君がいてくれると本当に楽だよ」と言われるほどの逸材なのだが……。

自身が艦長を務めたアマリスではそのような言われかたをしなかったのに、なぜヤマトではそんなことを言われてしまうのだろうか。

推測ではあるが、自分含めてアクの強い連中が揃いに揃っているから、『普通』なジューンが埋没するのだろうか。

それにユリカは単に有能だけでなく『アクの強い人間だ』、それに慣れるとやっぱりジューンは印象がうっすいのだろうな、と進は納得した。

『以前のヤマト』ならジューンでも問題なく指揮できていたと思う。

人望では沖田艦長に及ばずとも、まっとうな軍人ぞろいだった昔なら、能力どおりの評価が得られただろうに……。

結局、ユリカの下に付いたのが運の尽きか……。

「いざとなったら、俺が音頭を取りますよ。教育されてますから」
進は氣負つていないふうを装ってジユンにそう告げる。ジユンは結構なダメージを受けた様子ではあるが、

「そうだね、ユリカが育てた古代君だしね……まあ、フォローは任せてよ。そういうのは得意だから……」

言っておいてなんだが本当に頼りないな、おい。

(しかし、本当に俺にできるのか？ ジユンさんが付いているとは言っても、この俺に……)

背中に冷たい汗が流れるのを感じる。

だが、進とでも引くわけにはいかないのだ。

『別の宇宙の自分のように』ヤマトを導いていかなければならないのだ。ユリカが復帰できなくても、ヤマトをイスカンドルまで導く役割は——もう進にしかできない。

ジユンではユリカの代わりが務まらないことが立証されてしまったし、ルリにはオペレーターとして全力を尽くしてもらおうほうが実力を発揮できる。

あとはユリカの息子、なぜなにナデシコ、そしてゲームとは言え天才ユリカと互角に渡り合った——ように見えることで注目を集めている進くらいしか、他部署のクルーの信頼を集められそうな人材がない。

(ユリカさんは——最初からそのつもりで俺を育ててくれていたんだ。それが『別の宇宙の俺』を知るがゆえだったかどうかはこの際どうでもいい。そのおかげで俺たちは巡り合えた。いまの俺になれたんだ。なら俺は……俺としてできることをする)

——自分らしくがんばればいいんだよ——

いつだったか、ユリカにフルボッコにされて自信を失いかけたときの励ましの言葉が蘇る。

ヤマトに乗るにあたって——ガミラスと戦うにあたってこうあらねばならないと決めつけかけていた進にとって、目からうろこが落ちる感覚を与えてくれた言葉だ。

それから進は『自分になにができるのか、なにをしたいのか』を常々

考えながらここまで来た。

実際ユリカは進にどうあるべきかを強要したことは一度もない。そう、『古代進』になることも。

こうあって欲しいと望んだことあるし、いまこうやってユリカの代わりを務めることを望んでいたが、それを受け入れたのは進自身の判断だ。拒絶する余地はあった。自信がなければ資料をジユンとルリに開示して判断を仰ぐようにと指示されていた。

それを拒んで自分が背負うと決めたのはほかでもない——進自身。進は自分の意思で、彼女の願いを受け入れた。

ユリカの代わりに、ヤマトを導くと——。

ユリカ同様、沖田艦長の教えを受け継ぐ——と。

第二艦橋の大介から「古代の提案に則って、ブラックホールの重力エネルギーを利用した、フライバイからの超長距離ワープを実行する」と報告があったのは、まもなくのことであった。

ユリカを欠き、ルリを欠き、不安と困惑の渦中にあるヤマト。

しかし真実を知った古代進は倒れたユリカの代わりになることを決意する。

行くのだヤマト、遥かなる星イスカandalへ！

地球は君の帰りを、君の帰りだけを待っているのだ！

人類滅亡と言われる日まで、

あと、二六九日。

第十五話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十六話 超新星！ ヤマト、緊急ワープせよ！

乗り越えろ、名將の罫。

第十六話 超新星！ ヤマト、緊急ワープせよ！ A
パート

少し恒星進化論について触れよう。

恒星とは星間ガスが濃く集まり続けた結果、自身の重力による自己収縮による熱と圧力で核融合を開始して燃えがった天体である。

その主成分であり核融合によって最初に反応を起こす水素は、徐々にヘリウムへと変換されていく。

太陽質量の約〇・四六倍程度の赤色矮星では温度が低いいためヘリウムの核融合が発生せず、水素を燃やし尽くしたあとは外層部が宇宙空間に放出されていき、残った中心核が余熱と重力による圧力で光と熱を発する『白色矮星』になるとされる。

太陽質量の〇・四六倍から約八倍までの恒星では、それ以降も反応が起こるが核融合で窒素が作られる段階でそれ以上反応が進まなくなり、赤色巨星を経て白色矮星になるとされる。

中性子星の場合は八倍から一〇倍の質量を持った恒星の晩年の姿とされている。

それ以下質量しか持たない恒星からさらに核融合反応が進み、炭素・酸素からなる中心核で核融合反応が起こり、酸素やネオン、マグネシウムからなる核が作られる段階になると、中心核では電子の縮退圧が重力と拮抗するようになり、中心核の周囲の球殻状の部分で炭素の核融合が進むという構造になる（玉ねぎの様な層になると考えられている）。

それによって生じる核反応物質によって中心核の質量が増えていくが、中心核を構成する原子内では陽子が電子捕獲により中性子に変わった方が熱力学的に安定となるに及ぶ。

これによって中心核は中性子が過剰に埋め尽くされるようになり、一方で電子捕獲によって減った電子の縮退圧が弱まるため、重力を支えられなくなつて星全体が急激な縮退を始める。

中心核の縮退は密度が十分大きくなって、中性子の縮退圧と重力が拮抗すると急停止するため、これより上の層は中心核によってはげしく跳ね返されて発生した衝撃波で一気に吹き飛ばされる現象——『超新星爆発』を起こし、残された中性子からなる高密度の核が残る。これが中性子星だ。

太陽質量の一〇倍以上の大質量星の場合は、もともと密度が大きくないため中心核が途中で縮退することなく反応が進み、最終的に鉄の中心核が作られる段階まで核融合が行われる。

鉄原子は原子核の結合エネルギーが最も大きいためこれ以上の核融合が起こらず、熱源を失った鉄の中心核は重力収縮しながら断熱圧縮で温度を上げていく。

その温度が約一〇〇億度に達すると鉄が光子を吸収し、ヘリウムと中性子に分解する『鉄の光分解』という吸熱反応が起きて急激に圧力を失い、これによって支えを失った星全体が重力崩壊で潰れて超新星爆発を起こす。

爆発後に残るのは爆縮された芯のみで、残った芯の質量が太陽の二〜三倍程度なら中性子星になるとされるが、それ以上ならば重力崩壊が止まることなくブラックホールになるとされている。

これらの現象は地球上で行われた観測結果やシミュレーションによるもので、より正確な条件はもちろん、実際に恒星の辿る詳細な進化についてはわかっていない部分も多い。

ただひとつ言えることがあるとすれば——。

桁外れの重力とエネルギーを放出する恒星に近づくことはもちろん危険であるが、晩年と言うべき中性子星とブラックホールも、それと同等かそれ以上に危険な天体であり、星々の海を渡るといっているのであれば最大の注意を払って回避するのが望ましいということだろう。

いまヤマトは、その宇宙の脅威、ブラックホールに接近する危険を冒して最短コースを進もうとしていた。

それが蛮勇ゆえの愚行か、勇敢さに基づいた英断であるかを決めるのは——行動の結果であろう。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット
第十六話 超新星！ ヤマト、緊急ワープせよ！

「以上が、これからヤマトが接近しようとしているブラックホールに
関わる恒星進化論よ。で、本題の——」

大介がブラックホールに接近する航路を選択したと聞くや否や、イ
ネスは医務室から喜び勇んで飛び出し、『占拠した』中央作戦室の中央
に陣取って説明を始めていた。

航海班としては、イネスの説明を聞くまでもなくヤマトが自ら危険
な航路を選んだことを重々理解している。

本当ならこんな航路を取らずに迂回すべきところだ。

だが、ヤマトは航路日程に後れを出している。

そして、仮にイスカandalに遅れて到達したとしてもユリカが持た
なければ意味を成さないという認識が根付いている以上、危険であつ
ても遅れを取り戻すために最短コースを通るしかなかったのだ。

「ブラックホールについてはこれから説明するわね。それじゃみんな
大好きいつもの番組で行くわよ！」

嬉々として説明継続を雄弁に訴えるイネスを止められる人間は—
—ヤマトにはいなかった。

彼女はブラックホールについて、それはもう自分が知りうるかぎり
をつらつらと語っていく——つもりだったようだが艦内の空気を鑑
みて欲しい、という進の意見を採用していつもの手法に切り替えたら
しい。

それでも余計な手間と時間を使っている感が否めない、とはだれの
言葉であったか。

使われていなかったモニターが灯り、ウィンドウがあちこちに開い
て流れ出す軽快な音楽！

「三ー！ 一ー！ 一ー……どっかくん！ なぜなにナデシコ〜！」

もはや恒例である。

違う点があるとすれば、ウサギユリカの代理としてゴールデン・ハ
ムスター雪が登場していることと、ルリお姉さんの代わりにオカメイ

ンコラピスが登場していることくらいだ。

ついでに今回はトナカイ真田がボーイコットしたため、泣く泣く進お兄さんが出演していた。

なので、ハムスター雪は念願叶ったなぜなにナデシコ出演に（しかもマスコットキャラ！）、愛しの進と同じステージに立ったと気力充填一二〇パーセントという、異例のハイテンションで臨んでいた。

視聴者のみなさま方はいつものメンツが生贄のみであることに不安を抱いていたが、代理のキャスティングはだれもが納得するものであったと評されていた。

ミス一番星コンテスト二位のわれらが麗しき生活班長と、機関班を中心にその勢力を伸ばしつつある桃色の妖精ことラピス・ラズリ機関長。

このキャスティングに異論のある視聴者など、いようはずがなかったのである。

特に機関室で汗水垂らして油まみれになりながら機関部の調整を行っていた彼女の部下たちは、愛くるしくデフォルメされたノーマルオカメインコの着ぐるみを着た上司の晴れ姿に狂喜乱舞した。

それは痛々しいほどに落ち込んでいた彼女が浮上したことによるこびりも含まれている。

モニターに張り付いて騒ぐ部下——とちやっかり参加している太助の姿に、額に手を当てながら嘆息している山崎も、アイドル扱い云々は別として、その復調をよろこぶ気持ちは痛いほどわかったから、今回はおとがめなしという判断で静観することにしていたという。

ともかく、キャスティングを大幅に変更して開催された記念すべき第四回放送のタイトルは「なぜなにナデシコ ヤマト出張篇その四」ブラックホールつてなに？」となっている。

キャスティングの変更でセリフ回しなどに差異はあるが、おおむねいつものノリで進行していく番組。

番組内では「シユヴァルツシルト半径」だの「膠着円盤が」だの「重力の特異点が」だのと難解な言葉がつつらと流れるように登場し、

理解の及ばない視聴者の脳みそを沸騰させていく。

さしもの才女ハムスター雪も、完全に専門外な宇宙物理学となるとチンプンカンプンのようで、わりと素の困惑から合いの手を入れてるのが見て取れたとか。

同じくマスコット枠のオカメインコラピスも似たり寄つたり——と当初は見られていた。

だが彼女の真骨頂はユリカに勝るとも劣らない、『天然枠』であることにあった。

天然妖精ラピス・ラズリ。彼女がこの番組における最大の狂言回しである。

最初は「寝込んでるルリ姉さんの代わりになるなら……」と消極的な理由でイネスの呼びかけに応じたのだが、自分の知らない知識を学べる環境に置かれたことや、エリナが用意していた(用意させていた)着ぐるみを着せられて、思いのほかあっさり気持ち切り替わってしまったためか……。

空前絶後の大・暴・走!! となつてしまったのである。

素のリアクションで台本を無視した合いの手や質問を連発。悪乗りしたイネスもそれに応じてリアルタイムで脚本を変更してはカンペを出して、セットや演出担当のウリバタケやヒカルに(出演拒否の報復で裏方強制参加の)真田が大忙しで駆けずり回り、番組司会担当の進お兄さんと同じくマスコット担当の雪までも振り回すに至った。

……その振る舞いは、自身も一杯一杯なハムスター雪ではとても抑えられず、進お兄さんはリアルタイムで変更される台本をカンペで確認しながら、自分でもちゃんとわからない複雑な用語やらをカンペ横目に棒読みにならないよう必死に読み上げ、司会担当という己の役目を果たさんと全身全霊を注ぐことを強要する始末であった。

そんな周りの努力も視界に入らず、変わらず大暴走を続けるオカメインコラピスによって、古代進はそのままで経験したどんな苦難よりも激しく荒く、その精神力をゴリゴリと削り取られていった。

後に彼はこのときの気持ちをこう語っていた。

「ラピスちゃんはかわいい妹分です。が、二度と彼女と一緒になげな

にナデシコはやりたくありません。ええ、絶対です！」

そんな（スタッツの涙ぐましい努力によって成り立った）番組の内容を（無慈悲に）要約するのであれば以下のとおりとなる。

ブラックホール。

その呼び方が定着するまでは崩壊した星を意味する『collapse（コラプサー）』などとも呼ばれていたという。

その特性上直接的な観測を行うことは困難であり、ほかの天体との相互作用を介して間接的に観測が行われ、X線源の精密な観測と質量推定によっていくつか候補となる天体が発見されてはいるが、直接的な観測が成されたのは二〇一九年四月とされている。

観測が困難を極めた理由の一つが、ブラックホールには光すらも脱出できないとされる非常に強い重力によって歪められた時空、事象の水平線とも称される空間で周囲を覆われているからだ。

この半径をシュヴァルツシルト半径、この半径を持つ球面を事象の水平線（シュヴァルツシルト面）と呼ぶ。

ブラックホールは単に元の星の構成物質がこの半径よりも小さく圧縮されてしまった状態の天体でしかなく、事象の水平線とはいうものの、その位置になにかしらの指標があるわけではない。

そのためブラックホールに向かって落下すると、知らず知らずのうちこの半径を超えてその中に落ちていくことになるわけなのだが……。

恐ろしいのは、時間の流れは重力の強さによって無制限に引き延ばされてしまうという現象にあった。

それゆえに、事象の水平線を超えてしまっても不可思議な現象が垣間見えると言われている。

落ちた物体を離れた位置から見ると、やがて水平線の位置で永久に停止したように見え、落ち込んだ物体からは宇宙の時間が無制限に加速されたように見えると言われているのだ。

この常識の一切が通用しない空間の中心には、重力が無限大になる重力の特異点があるとされている。その特異点も回転していないブ

ブラックホールでは一点に、回転しているカー・ブラックホールではリング状に発生すると言われているが、直接の観測は当然ながらなされていない。

また、ブラックホールには熱的な放射である『ホーキング放射』と呼ばれる現象も提唱されている。

誤解を恐れず小難しい説明をすべて省略してしまえば、ブラックホールが質量を失う際の放射のことと言ってしまってもよいのかもしれない。

この説も最終的には『ブラックホールに落ち込んだ物質の情報は失われず、ブラックホールの蒸発に伴ってなんらかの形でホーキング放射に反映され、外部に出てくる』という形に落ち着いたとされている。

こういった小難しく専門知識なしでは到底理解ができないような難解極まりない説明が、三人の役者を使ってある程度砕かれた形ではいへ延々と続き、さらにはわれわれが住まう太陽系を擁する銀河系も『中心に太陽質量の一〇の五乗倍から一〇の一〇乗倍の質量を持った超大質量ブラックホールが存在し、それによつて形成されている』という脱線話も踏まえて続いた。

そうやって放送時間が一時間を超えるころになってようやくエンドマークが出現。

終わった終わったと、みなが席を離れようとしたところで後半パート「なぜなにナデシコ ヤマト出張篇その五」ブラックホールを使った超長距離ワープ」の放送予告。

まさかの二本立てに視聴者は喜ぶよりもさきに困惑の色を濃くする。

その（出演者の汗と涙の結晶の）番組内容を（またしても無慈悲に）要約すると以下のとおりになった。

散々危険であると連呼したブラックホールを利用した航路を選ぶ最大の理由は、ブラックホールの重力エネルギーを利用しての超長距離ワープを敢行することにあった。

番組内でその理屈を長々と語っていたが、詳細には触れず内容を要約すると、ブラックホールに意図的に接近して天体の重力を利用して

加速する航法である『フライバイ』を敢行。それによって得られるブラックホールの重力エネルギーを利用し、ワープエネルギーを強引に高めて、現在のシステムでは実現できない超長距離ワープを実現する、というものだ。

ヤマトのワープはタキオン粒子の波動——空間歪曲作用を利用して一種のワームホールを形成するものではあるが、入り口と出口になる開口部はともかく、航路そのものは宇宙が四次元的に見れば『曲がっている』ことを活用している。

ので、時空をも歪めるブラックホールのエネルギーが作用する空間でワープを敢行すれば、ブラックホールによって捻じ曲げられた四次元的な湾曲をも活用することができて、ワープ距離を延伸することができるかと判断されたのだ。

しかし距離の延伸にともなって突入に必要なエネルギーも増大している。しかしそれはフライバイで得られる加速——重力エネルギーで補えると判断され、『理論上は』いまのヤマトでは実現できない超ワープを実現可能と計算が導き出されたのだ。

本当に実現できれば、ヤマトは遅れた日程を大きく短縮できる。この苦境を覆す一手としては最上と言えよう。

ただ——フライバイに失敗すれば、事象の水平線を超えてブラックホールに引き込まれる。……いや、それ以前に潮汐力でヤマトがバラバラになるのがさきだろう。

アイデアを受けてこの航路を選んだ大介も緊張と不安で胃がキリキリと痛んでいた。

本来なら、本来ならこんな危険を冒すことなく安全に運行していくのが責任者の常。

なのだが、遅れに遅れたヤマトの航海予定を取り戻し、一刻も早くユリカをイスカンドルに運ぶためには避けられないリスクと受け入れなければならなかった。

こんな無茶をしなくても、ヤマトはイスカンドルに到着して地球に帰還するギリギリの日程はある。

しかし、最短コースを進むとしたらヤマトは大マゼラン手前のタラ

ンチュラ星雲の一角を通過しなければならぬ。

スターバースト宙域と呼ばれる活動の活発なその場所を通過するリスクは極めて高く、迂回すればかなりの日数を消費してしまう。

ガミラスの妨害による航海の遅れが今後もないとは言いきれない以上、一日でも遅れを取り戻せるのなら取り戻しておきたいのが実情だ。

それに最新情報によればユリカの余命は——あと三カ月あるか、ないか。

それも今後病状が悪化するようなストレスやら負傷がなければという前提で、今後ガミラスの妨害で負傷したりストレスを受けたら……。

ユリカの命を確実に繋ぐためにも……時間が欲しい。

自分たちに、地球に——最後の希望を与えてくれたユリカは絶対に助けると、クルー全員が誓いを立てている。

それが血反吐を吐きながらこの航海の準備を整えてくれた、彼女に対する恩返しなのだ。

だから……ヤマトは行かねばならない。

無茶なワープによる負荷で、本末転倒の事態を招く危険性もある。その危険性を理解してもなお、ヤマトは突き進むしかないのだ。

ヤマトに与えられた時間は——常に限られている。

その後ヤマトはワープで利用予定のブラックホールに接近した。

緊急ワープ地点から約一四〇〇光年ほど離れている、本当なら接近するはずのなかった天体。

銀河間空間にあったであろう赤色超巨星の成れの果てと思われる天体だ。

一体どのような経緯でこの天体がこのような空間に存在してしまったのかは様として知れないが、いまはのんきに探究してはいられない。

気は急いていたが、安定翼のスタビライザー機能でクルーへの負荷が軽減されているとしても、ユリカを始めとする病人・怪我人のこと

を考えると連続してワープを敢行するわけにはいかない。

インターバルも兼ねて徹底したワープ航路の計算、そのために必要なブラックホールの観測を実施。

ヤマトはワープアウトから二四時間後にフライバイ・ワープを敢行すると決定し、その準備にいそしんでいた。

「お疲れ、古代。おまえ、よく頑張ったよ」

疲労困憊で戦闘指揮席に突っ伏している進を見て、操舵席を立った大介が肩を叩いて労う。

「……………」

実質ルリの代わりの説明役だったのだが、天然少女ラピスのせいでエライ目に遭った進に同情は尽きない。

とは言えそんなことを本人に面と向かって言えるわけもなく、「またやりましょうね」とキラキラと輝く眼で言われては——進が反論できようはずがない。

がんばれ、お兄ちゃん。

——ああ、進の可愛い妹は、桃色の悪魔（無自覚）なのでしょうか。

大介はふとそんな言葉が脳裏に浮かんだ。その桃色の悪魔は現在、通信席に座るエリナ相手に喜々として感想を語っている。

——うらむ。これは本当に文句が言えない。

「お疲れさま、古代君。はい、ヤマト農園産フレッシュトマトジュースよ」

こちらにも思わぬ番組構成に疲労困憊ながらも、甲斐甲斐しく進にジュースを運ぶ雪。妙に表情が艶々しいのは愛しの進と共演し、苦難を共に出来た連帯感ゆえか。

そんな雪の姿を見て、大介の胸に諦めの感情が広がる。

（失恋——だな。雪の奴は古代しか見ていない。それに、最近の古代を見てると……）

正直悔しい気持ちはある。

同期だったはずなのに、進はユリカに見初められてメキメキと実力を伸ばし、いまやユリカの代わりにヤマトを先導する指導者としての

頭角も現しつつある。

自分と進のなかが違ったのか、どうしてユリカは自分ではなく進を選んだのか、男のプライドが傷つく。

しかし、聡明な大介はすぐにその理由に行き着いた。

進は自分と違って人を惹きつけて従わせるカリスマのようなものを持っている、と。

たしかに学業成績は大差はなかった。だが、周りに人が集まりやすかったのはどちらかと言えば彼のほうだった気がする。

それによくも悪くも理屈っぽくて合理性を重視する自分には、ユリカや今回の進のような一見合理的に見えない、博打のような手段で道を切り開くような選択は、なかなか思いつけないし実行する気にもなれない。

ユリカは進のそんな資質を見抜いて、自分の後継者に選んでいたのだろう。

そして、雪もそんな進に心惹かれて――

(いや待てよ。それもあるだろうが、艦長はやたらと古代と雪を引き合わせてなかったか?)

思い返してみれば、いろいろと二人の仲が進展しやすいようにと、お膳立てをしていたような気がする。

――そこまで面倒を見る必要があるのだろうかと疑問に感じるが、まあユリカも相当変わった人柄だから考えるだけ無駄だろう。

変人の考えは理解できない。

というか早くも嫁選びですか。意外と――いや、あの親にしてこの子ありな親バカ気質と考えれば、いやでも納得させられる。

ともかく、先を行かれたあげく雪まで(実質)ゲットした進には、嫉妬もあるが納得している自分もいるのだ。

進の言葉がなければ今回のワープに踏み切れたのかどうかもわからず、ずるずると後れを引きずって最悪の事態を招いていたかもしれないと考えると――やはり、指導者としては彼のほうが向いているだろう。

それに大介は『任された』のだ。

先に行く進でも手が出せない——大介の専門分野。その知識と技術を彼は欲しているのだ。

ヤマトの航海班長としてやり遂げなければならぬ。大介が舵を握らなければ、ヤマトはイスカンダルにはたどり着けない。

大介は嫉妬をその心の内に抱きながらも、航海長としてのプライドを奮い起こし、ヤマトの操縦桿を握り直した。

「そう、ブラックホールのフライバイを利用して……」

「そうです。それでヤマトは超長距離ワープを敢行します。どの程度跳べるのかは未知数ですが、うまくいけば一万光年以上の距離を跳べます。そうすれば、遅れた航海予定を何日分か取り戻せるはずです。超長距離ワープが人体にどんな影響を与えるのか未知数なので、ルリさんもしつかりと体を固定して備えてくださいね」

そうコミュニケーションでハリから教えられたルリは、枕に頭を埋めて深く息を吐く。

——まだ……動けそうにない。

ハリたちの（めつちや恥ずかしかった）見舞いから六時間。最低でも五日は休養を取るように言い付けられてまだ一日と半日。当然だ。

フライバイワープとなれば精密な計算が必要になるはずなのに、チーフオペレーターとしてその大仕事に携われず、他人任せにしなければならぬというのは、心が痛む。

「雪さん……みんな、頼みます」

いまのルリには祈ることしかできない。

だが、雪を含めた部下はみんな凄腕揃いだ。本質的な能力やオモイカネとの交感能力は及ばなくても、いま人類が用意できる最高の実力者が揃っている。それに——

「ハーリー君、頑張つてね……」

雪よりもオモイカネとの交感能力が高いハリが力を合わせれば、なんとかなるはずだ。ガミラスとの戦いが始まってから急激に成長を続けているハリなら——。

（あ、あと古代さん、なぜなにナゲシゴご苦労さまでした）

心の中で大任を果たした進を労う。おかげでラピスを伴うと番組が混沌と化すことがわかった。

生贄、ご苦労さまです。

とりあえず、今回の放送に出演せずに済んで本当によかったよかったです。

今後、ラピスが出演するのであればお姉さん役は絶く対！ 断るとしよう。

ヤマトは粛々と眼前のブラックホールの解析を続けていた。

太陽質量の三〇〇倍を超えるブラックホール。銀河間空間にありながら、太陽質量を超えたブラックホールだ。

ブラックホールの周りには水素で出来た降着円盤が形成されている。おそらくこのブラックホールがマゼラニックストリームの近くにあるため、それを引き込んだのだろう。

確証は得られないが、ブラックホールの質量が恒星質量を上回っているのもそれが原因だろうか。

膠着円盤はブラックホールに近づくとつれ回転が速くなり、徐々に赤く変じていつているのが伺える。

これは落ち込んだ物体の放つ光が重力による赤方偏移を受けているためだ。

その膠着円盤も、ある一点で停止しているように見える。

それこそが――

「あそこが、事象の水平線だ。あれを超えてしまうと一巻の終わりとなる。もつとも、潮汐力の影響や重力による時間の流れの遅滞を考慮すると、あのラインよりも手前を航行しなければ、ヤマトと言えどバラバラに分解されてしまうだろう」

真田が険しい表情で大介に忠告する。人類全体にとつてブラックホールに接近すること自体が初めてのことなので、艦内の空気は大分ピリピリしてきている。

とはいえ、

「わかってますよ、真田さん。にしても、古代が開催したなぜなにナデ

シコは無駄じゃなかったってことですね。緊張感はあるが思った以上に艦内の空気が軽い。道化も必要ってことですかね？」

隣の席の大介が悪い笑みを浮かべて語る。笑みの理由は察すべし。「そりゃよかったよ……」

放送終了から三時間ほど経って、いくらか回復した進は波動砲用の測距儀を使ってブラックホールの光学観測をしながら、気のない返事をする。

フライバイ・ワープの成功率を高めるためには、クルーの緊張を適度にとったほうがいいと思ったからがんばったのだ。がんばったのだが……。

(お母さん……ラピスちゃんは天然な小悪魔になっちゃったよ)

心の中でユリカに報告する。彼女が相手では、ユリカの体力は絶対に持たないだろう。

自分が犠牲者で本当によかった。心から思う。彼女に悪気はない、悪気はないのに——天然なのだ。

だから面と向かって文句も言えない。

ああ、お兄ちゃんは辛いよ……守もこんな気持ちを抱いていたのだろうか。

「僕、古代さんを尊敬します。恥を忍んで自ら晒し者になってまで、みんなのためになぜなにナデシコを開催できるなんて——さすがは艦長の息子ですね！」

場を盛り上げようと進を持ち上げるハリにも悪気はないのだが、進の疲労がそれで取れるわけもなく、なんとも微妙な気分であった。

「あ、島さん、ブラックホールの解析データが集まって来たみたいですよ。第二艦橋に降りて航路計算をしましょう」

「ん、そうだな。じゃあ古代、俺たちは第二艦橋に居る。第一艦橋は任せろぞ」

「ああ、すっかり頼むぜ島。最終的にはお前の腕が頼りだからな、当てにしているぞ」

進の言葉に大介の顔も緩んだ。

「任せろ、俺はヤマトの航海長だからな！」

そう、ここから先は……大介の見せ場だ。

運命の瞬間がやってきた。

ヤマトはいよいよフライバイワープによる超長距離ワープを実行するためブラックホールへの接近を開始したのである。

安定翼を開いた姿でブラックホールに接近、高速で流れる水素気流の中に突入するため、すべての窓には防御シャッターを下ろして安全を確保し、エネルギーを少しでも節約してワープにつき込むため、照明を落とされた艦内は非常灯で赤く照らされていた。

自然と緊張感が高まる。

雪は第三艦橋の電算室でリアルタイムに航路計算の修正作業を担っていた。額を流れる汗を拭う暇すらなくキーを叩き、全天球モニターとコンソールに浮かべたウィンドウを流れる大量のデータを視線で追い、ほかのオペレーターと協力して情報処理を続けた。

ルリが抜けた穴は大きく、普段に比べると情報処理能力は明らかに落ちていた。当然だろう、彼女の能力は抜きんでていた。それこそこれも追いつけないほどに。

オモイカネも心なしか元気がない。だがそれでもやるしかない、雪は必死に膨大なデータと格闘を続ける。

E C Iからのデータを受け取ったハリも、それを参照しつつワープシステムの調整作業を繰り返していた。

ワープインの座標や空間歪曲システムの稼働タイミング、ワープインに必要なエネルギーの必要量の計算を最新のデータに基づいて細かく修正、普段のワープとは異なる情報処理にハリも必死だった。ラピスはブラックホールの重力波干渉によって出力が微妙に低下している波動相転移エンジンの制御に全力を注いでいた。

エンジンの稼働には空間歪曲の原理が使われている箇所があるため、そこが影響を受けている様子。

機関室の山崎らと協力してワープエンジンへの供給量を確保しつつ、推力を絶やさないようにするのは大変な苦勞を求められた。

舵を握る大介も、指定された航路に沿ってヤマトを操縦するのに必

死だった。

雪たちオペレーター、ハリ、ラピスといった面々がどれだけががんばっても、大介がそのデータどおりに操縦できなければすべてが水泡と化す。

ヤマトの自動操縦システムではどうていこのデータどおりの航路を進むことはできない。ヤマトの自動制御システムは最低限のものしか積まれていない。

——ここから先は、大介の技量にすべてが掛かっていた。

ヤマトは慎重にブラックホールの周囲を回る膠着円盤に突入した。外周部は相対的に流れが緩やかだが、それでもヤマトをもみくちゃにして吹き飛ばしてしまうほどの激しきで水素気流が流れている。

大介は予定されたワープ方向にヤマトが向かうよう、この気流の中心正確にヤマトを操縦しなければならない。

仮にフライバイワープが成功したとしても、ヤマトの進路がずれてしまつてはロスタイムを埋めるどころかかえって増やしてしまうのは明白。

膠着円盤に突入する方向も、十分な加速が得られる距離も計算されているが、目標座標までの操舵は大介の腕次第。それが大きく逸脱してしまえば計算どおりには跳べない。

大介は緊張で額に浮かんだ汗を流れるままに、瞬きも我慢して計器を睨む。

全神経を集中して操縦桿を操つて、ヤマトを進めた。

ヤマトは水素気流の奔流の中をふらふらしながら全速力で突き進む。

全身のスラスタと安定翼や尾翼の各部も動かして姿勢制御を行い、暴力的な気流に立ち向かう。

高速で流れる水素気流。ちよつとでも艦の姿勢が乱れようものなら制御不能になって弾き飛ばされるかそれとも艦体をへし折られるか、危険な綱渡りが続いた。

限界まで緊張が張り詰めた時間が続く。実際には十数分程度の短い時間だったはずだが、ヤマトのクルーにとっては数時間にも感じら

れる時間であった。

「波動相転移エンジン、出力一〇〇パーセントを維持！ ワープエンジンも正常稼働中！」

ラピスが激しい振動に耐えながら報告。エンジンは、みな的心愿に応えるかのように順調に稼働している。

「座標設定完了！ 時間曲線同調二〇秒前！ タキオンフィールド展開確認」

航法補佐席のハリも振動音に負けない大声で口頭報告を続けている。

「空間歪曲装置作動開始！ ワープ一〇秒前！」

大介がワープスイッチレバーに手を伸ばしてカウントダウンを開始。泣いても笑ってもこれが最初で最後のチャンスだ。

ヤマトはブラックホールの重力と膠着円盤の回転を利用して、メイノズルの推力だけでは時間のかかる亜光速までの加速を瞬時に行った。

「五……四……三……二……一……ワープッ!!」

大介はありったけの願いを込めてワープスイッチを押し込む。

ヤマトは——これ以上は望めないほど、最良のタイミングでワープインした。

ヤマトの艦体がいともどおりの青白い閃光——タキオンフィールドで包まれながら、時間と空間を跳び越える。

普段ならワープ航路の安全のためにと回避する天体の重力場——それもブラックホールを利用したイレギュラーなワープにヤマトの艦体がビリビリと震える。

安全ベルトが千切れて座席から放り出されてしまうと錯覚してしまうほど、激しい衝撃がクルーを襲う。

（お母さん、耐えてください！）

進は全身に力を込めて衝撃に耐えながら、ユリカの身を案じていた。

ユリカはヤマトがフライバイを開始した瞬間、ぼんやりとだが意識を取り戻していた。

視界も音もないのは変わらない。体の感覚もイマイチ微妙で自分の状況がよくわからないが、この様子だと医療室で入院させられているのだろう。

避けられない出来事だったとはいえ、まだ銀河系を出て間がないというのにこの体たらく。

——みなもさぞ、心配しているだろう。

生真面目な大介あたりは、自分がヤマトを次元断層に落としてしまったからと気に病んでいそうだ。

鈍った体を強烈な衝撃が襲うのを感じる。ベルトでベッドに固定されていると思うが、それでも投げ出されそうな衝撃。

（ああ、これは大質量天体を利用したフライバイワープか。私のファイルにそれについて記載してたっけ。イネスさんやエリナがわざわざ進言するとは考えにくいし、進……見たんだね）

ユリカはなんとなく、進が自分が残したファイルを見たのだと察した。

——そうになると、いままで隠してきたすべての事情も知らされたのだろう。

だがフライバイワープを決行したとするのなら、進はすべてを受け入れ先に進む決意をしたと考えて、相違ないと思う。

予定よりも早い展開だな、と思った。

バランスを通過するくらいまでは頑張るつもりだったのに。

——ユリカ、私の声が聞こえますか？ 古代は決断しましたよ。あなたの跡を継ぐことを——

ヤマトの声が聞こえる。音ではなく、直接脳裏に響く、クリアな音声。

ユリカも声を出さず頭の中で言葉を紡ぐ。それでヤマトに伝わるはずだ。フラッシュシステムが、二人の心を繋いでくれる。

（ヤマト……報告してくれてありがとう。それと、いつもも本当にご苦労さま。何度も無茶させてごめんね）

——いえ、それが私の使命ですから。それと、ごめんなさい。私の
独断で彼にファイルを渡してしまいました——

(いいよ。そのおかげで先に進めるみたいだから)

どちらにせよ、この状態では艦長としての責務を果たし続けること
はできない。

もちろんまだまだ頑張るつもりだ。次元断層で遭遇した指揮官は
進だけでは——いやユリカだけでも正直手に余る。

全員が一丸となって立ち向かわなければ太刀打ちできない。まだ
ユリカにリタイアは許されないのだ。

——あなたたちけが人や病人は、私があんとしても護り抜きます。
フラッシュシステムの助けを借りてフィールドを調整すれば、負荷を
軽減するくらいならできるはず。むずかしいでしょうが、一日でも早
く指揮を執れるようになってください。まだ私たちには、あなたの力
が必要です——

(うん。わかってるよ、ヤマト——私も、まだリタイアするには早いか
らね)

ヤマトは激しい閃光と共にワープアウトする。

いつもなら溶けるように消えていく艦を覆う青白い閃光が、まるで
氷のようにはがれ落ちて周囲に散らばり、宇宙空間へと消えていく。

閃光の剥がれ落ちたヤマトは、次元断層での戦闘の傷が癒えきらぬ
姿のまま宇宙空間に投げ出され、くるくると縦に回転しながら宇宙を
漂い、やがで自ら姿勢制御スラスタを噴射して姿勢を安定させた。

「……つうう——ワープに成功したのか？」

戦闘指揮席でふらつく頭を振りながら進が身を起こす。コンソ
ールパネルを操作して窓を覆っていた防御シャッターを開放。シャッ
ターが開放されると、ヤマトの正面に星々の煌めきが広がっていた。
進は艦内通話のスイッチを入れて第三艦橋の雪を呼び出した。

「雪、起きてるか？」

「あいたたた……いま起きたわ、古代君。ヤマトの現在地の調査を始

めるわね」

みなまで言わなくても雪はオペレーターの責務を果たしてくれる様子だ。早く所在地がわかればいいのだが。

「——成功、したのか？」

操舵席の大介も呻きながら体を起こした。

「ワープは成功したようだ。あとは、どの程度の距離を跳べたかだが……期待してもよさそうな気配だな」

いつの間にか起き上がっていた真田が、艦内管理席でヤマトのコンディションをチェックしながら話しかけてくる。

真田にしては、少々楽観的とも言える発言だ。それだけ期待しているのか、それとも苦勞に見合った成果が欲しいという気持ちの表れか。

「うむ。自己診断システムによると、艦体にかんりの負荷が掛かったようだ。主砲は脱落せずに済んだようだが、傷が開いたようだ。この様子ではあと五日は使えんぞ。それに、艦尾左に装甲板の亀裂、長距離用コスモレーダーにも障害が発生している。よし、詳細を確認しだい、修理作業を開始しよう」

「いててて、修理作業は頼みますよ、真田さん」

こちらにも意識を取り戻したジューンが状況確認を始めた。

「古代君、結果が出たわ」

第三艦橋の雪から待ち望んだ一報が届く。

「コスモレーダーを始めとする観測機器に損傷があって、正確さが不十分ではあるのだけれど、ヤマトはイスカンダルへの予定航路上にワープアウトしたとみられるわ。地球からの距離は約四万八〇〇〇光年……ブラックホールから約二万光年をワープした計算になるわよ！」

雪の声にも喜びが滲む。

ブラックホールのフライバイを利用したワープは、一回のワープとしては前代未聞の約二万光年もの長距離を跳躍した、文句のつけようがない大成功に終わったのである。

ヤマトの艦内に歓声が響き渡った。

多少の損害は被ってしまったが、それに見合った成果としか言えないだろう。それに――。

「こちら医療室、イネス・フレサンジュよ。艦長を始め、入院中の患者は全員無事、バイタルに乱れはないわ」

「これから本格的に診察するけど、まず報告」とイネスの言葉に全員が安堵。

最も心配されていたユリカがなんともないのなら、無茶をした甲斐があったというものだ。

これで、次元断層に落ちて遅れたぶんだけは取り戻すことができた。

「みんな喜べー！ 今回のワープで、乗員保護のために使っているタキオンフィールドの更なる調整が可能になるデータを得られた。それだけじゃない、超長距離ワープを実行するために必要な空間歪曲のデータもだ！ このデータを組み合わせれば、ワープの安定度の向上と、劇的とまではいかんだろうが跳躍距離の延伸が望めそうぞ！」

特に安定度の向上はクルーへの負担軽減も図れるから、うまくいけばワープのインターバルの短縮も図れるかもしれん！ 距離こそかつてのヤマトには及ばないまでも、連続ワープの復活を見込めるぞ！ ……無茶をするのも、たまにはいいものだな！」

真田の報告に、悪化の一途を辿っていた艦内の空気がさらに明るくなった。

超長距離ワープの成功に不可欠なのは、やはり航路を構成するために必要な空間歪曲場の構築にある。

その点ヤマトは、最もウェイトの大きい出力はまったく問題ないのだが、技術力とノウハウの不足でワープエンジンの機能を自沈前と同程度にまで回復できなかったことが足を引っ張っていた。データの破損や技術不足が原因だ。

だがそれを補填するに足るデータが得られれば、システムの再調整を行うことで大幅に増強された出力を活用し、ワープ距離の延伸を図ることは決して不可能ではない。

この規模のワープを繰り返すことは現状不可能とはいえ、ワープの

跳躍距離を伸ばせて、間隔を少しでも縮めることもできるなら、日程の遅れを取り戻せるかもしれない。

そうならば――。

それは今後の航海に希望が持てる知らせと言って、不足はないだろう。

「ヤマト――おまえが、お母さんたちを護つてくれたんだな」

進は漠然と、そう感じていた。

それからヤマトは補修作業を行いながら航行を続けていた。

念のために行われたクルーの簡易的な健康診断でも、不調を訴えたクルーは見つからず、病人・けが人の経過も問題なしと、人的な被害は一切見受けられなかった。

反面ヤマトは無茶相応の損害を被っていた。

装甲板の亀裂、主砲の修理のやり直し、コスモレーダーを始めとする観測機器の破損と、外部の被害は大きい。

しかし大事に至るほど深刻なものではなく、スペックを遥かに超える二万光年の大ワープを敢行したにしては軽症と言えた。

工作班はさっそく破損個所の補修作業にあちこちを飛び回っている。こころなしか、その足取りは軽いものだったように見える。

特にこれまでの失態を続けていた（と本人たちは思っている）航海班は歓喜に震え、さっそく勢いそのままに次のワープ計画を立案しはじめた。

また、進本人が吹聴したわけではないのだが、第二艦橋でのやりとりが雪に知られ、ついでに航海班――特に大介の手腕ともどもその発案が褒め称えられた結果、艦内で一躍有名になってしまった。

もともとユリカ絡みで艦内でその名を知らない者がいない（太陽系さよならパーティーでウリバタケが過剰に煽ったこともあって）進なので、これでまた注目されてしまった形である。

当人は困惑を隠せないようであったが、むしろ好都合かと開き直って胸を張っていた。

これからヤマトを引っ張っていかなければならない進にとって、成

果を上げた判断されるのは人望獲得に繋がるのでありがたい流れだ。

進はユリカがまだ艦長として戦い続けるはずだろうと予想していた。その根拠はあの次元断層で戦った指揮官の手強さ。

数で勝るとは言え、あのユリカが手玉に取られた相手にまだまだ未熟な進が勝てる道理はない。となれば打開策はたったひとつ。

ユリカと進を中心に、この寄せ集めのようプロフェッショナルな集まりのヤマトクルーの意識をひとつに纏めて対抗する。それ以外はない。

本音としてはユリカを休ませて進がヤマトを導くのが理想ではあるが、そこまでの実力があると思えば上がるほど進は自分を知らない訳ではない。

自分の無力さはもう十分に味わった。

だが無力さを嘆くばかりではなく行動することで道を開けると――ユリカとアキトから教わった。あとはガムシヤラにこれを超えるしかない。

「よし！ 予定航路に復帰したと言っても安心してられないぞ！

少し休憩したら航路探査を開始して、改めてイスカンダルに向けて出発だ！――それでいいですよ、副長？」

勢い勇んで第一艦橋のクルーを鼓舞したところで、戦闘班長に過ぎないいまの自分の立場を思い出してジユンに――現在の最高指揮官に伺いを立てる。

いかんいかん、つい張りきりすぎてしまった。まだ、ユリカから『艦長代理』を拝命されたわけではないのだから自重しなくては。

「――ああ、うん。古代君の言うとおりだ。航海班は航路探査と今後の航海日程の再調整案を、あとで提出してくれ。工作班はヤマトの損傷のチェックと補修作業を。ほかの部署の責任者もそれぞれ被害報告と稼働状況を纏めて提出するように。次のワープは航路探査終了とヤマトの補修が一段落してからにする。八時間後に中央作戦室でミーティングをするから、それまで各自一時間の休憩を必ず取るこ

と。以上！」

もう進がユリカの代わりに艦長代理として指揮を執ったほうがいいんじゃないだろうか。ジユンはそんな思いに駆られながら、現時点での最高責任者として指示を出した。

なんだかなあ……。

ああ。僕って結局情けないというか決まらないなあ……。
ちよっぴり悲しくなった。しかし、

（――副長権限で指揮を任せるってのもありかもしれないなあ）

別に責任放棄するつもりではないが、音頭を取るなら進のほうが自分よりもヤマトという艦に適しているように感じている。

自分の力をヤマトで活かさきろうと思ったら、積極性のある指揮官をフォロ―する補佐役が最も適切であると自負している。

とすれば表向きの指揮は進に任せてしまつて、自分は裏方に徹するというのも決して悪い手段ではない（ますます頼りないと言われるだろうが……背に腹は代えられない）。

……レクリエーションのシミュレーション対決で、進はそれまで全勝のユリカ相手に引き分けている（たぶん意図された結果だろう）。

戦いそのものは終始ユリカが優勢だっただけに、相当インパクトが強い。

実際進の手腕は大したものだった。ジユンの目から見ても十分合格ラインと言える。

ユリカが倒れてからのヤマトを主導しているのも彼であるし、変な増長の類も一切見られず思慮深さも増してきているし……真剣に検討する価値、あるかもしれないな。

ジユンはそう考えた。

進にも休憩の順番が回ってきた。休憩が被った大介と一緒に食事を摂るべく、足早に食堂に突撃する

今後の方針を決めるための話し合いも大事だが、まずは腹ごしらえ。緊張に晒され続けてどっと疲れたから、腹も減る。すぐく減るのだ。

「ふう、腹減ったぜ」

「まったくだ。さつさと食って休んで、そのあとは第二艦橋で仕事だ」
進は大介と仲よく自動配膳機に並んで、自分の番が来るとスイッチを押して食事の乗ったプレートを呼び出し、手に取ってがっかり。

「——また同じメニューか。最近続いているな」

「それだけ食糧事情が厳しくなってるんだな……航路上に植物や水の得られる惑星でもあればいいんだが……」

プレートの上に乗った食事のメニューは、ここ最近続いている食パン二枚、ソースなしのスパゲッティ、豆入りカレースープ（スパッゲティソース兼用）、植物性プラントンを固めた緑の物体、そしてドリンクはオレレンジジュース。

ベテルギウス突破後の打撃に加え、オクトパス原始星団で停泊していた間に食糧事情がかなり切迫してしまつたヤマト食堂。どうしてもメニューのバリエーションが減ってしまう。

あときはクルーの精神衛生を考慮して、食事を少々豪華にしていたのだが、その反動がここにきて顕著になつたということだ。

特に小麦粉はそろそろ厳しくなつてきているので、今後の主食は豆になりそうだと、平田から聞かされている。

「そうだなあ……とは言え、植物があつても食えるかどうかは調べてみないことにはわからんし、用途が立たない問題だなあ」

進にとつても頭の痛い問題だ。

ユリカの代わりに艦の指揮を執るといふのなら、自然とこういった部分にも気を配つていかなければならない。

ここは——雪にでもご指導を仰ぐか。それを口実に一緒の時間を持ちたいという下心も頭をのぞかせる。

これくらいは……ユリカもやっていたのだから問題ないだろう。うん。

「しかし古代……最近はずいぶん雪と仲がいいんじゃないか？」

大介の発言にぎくりとする。ちよつとよからぬことを考えていたところで、まさかこんな指摘が……。

「そ、そうか？」

「はたから見ると成立間近のカップルだよ。まったく——雪も苦勞するなあ、こんな鈍感が相手じゃな」

「……」

おっしやるとおりでございませす。正直まったく自覚がありませんでした。

「そんなんじゃあ、雪に愛想尽かされちまうぞ。艦長の代わりをがんばるのは結構だが、艦長の子供を自称するなら恋愛だってしっかりしないとな」

(……島、随分染まったな……)

以前の大介だったらこのような物言いはしなかったと思うのだが。それに、

「おまえ——」

「あいにく、勝てない勝負をするほど俺は無謀じゃないさ。俺に申し訳ないとか思ってるなら、なおさらしっかりしろよ」

大介はそこまで言うのと、話に夢中になって放置されていた食事をがつつがと口に運び始めた。

これ以上は楽しい話題でもないので進も倣って食事をかきこむ。

親友の氣遣いが、心に染みた一幕だった。

食事を終えて大介と別れた進は、パイロット待機室にいるアキトに接触するついでに、コスモタイガー隊の稼働状況を直接確認していくことにした。

進も一応パイロットを兼任しているのだが、今後出撃できる機会はそう多くないだろうと思う。コスモゼロは——予備機扱いでいいか。

「——ってところで、いまのところコスモタイガー隊に問題はねえ。この間の次元断層の戦いじゃ、大型爆弾槽も使えなかつたから冥王星以降地道に貯めてきた分を含めて、倉庫の限界数まで回復してる。ただ、先日の戦闘で携行火器を大盤振る舞いで使い捨てちまつた。そつちの数は心許ないが、まだまだ火器は残ってる。任されてくれ」

リョーコの言葉は頼もしかった。

実際、カイパーベルトでのアップグレードを経てアルストロメリア

の戦力は格段に強化されている。プロキシマ・ケンタウリでの戦いでは新型機の編隊相手に一步も譲らぬ激戦を繰り広げ、サテライトキャノンによる先制攻撃があったことを差し引いても会心の勝利を収めている。

次元断層での戦いでレールカノンやラピッドライフルを中心とした携行火器に、外装式のミサイルをかなり使ってしまったが、それ以外の武装の損耗は比較的少ない。オプションのロケット砲とミサイルポッドはまだ十分な数が残っている。一戦くらいなら、問題ないだろう。

「あとはエアマスターとレオパルドが完成さえしてくれば、もうちよつと楽になりそうなんだけどな」

「ああ、たしかに」

エアマスターとレオパルドはまだ完成には至っていない。いまも格納庫の一角、専用に割り振られたスペースでフレーム姿をさらしている。人の形にはなっているが、まだまだ完成には遠い。

「ウリバタケが言うには、初期のアイデアでまとめるにはエアマスターは火力、レオパルドは制圧力が物足りないんだよ。ガミラスあたりからいい部品でも鹵獲できればあ、とかボヤいてやがった」

んな無茶な。

進は頭を抱えなくなった。そんな都合よく部品、それも機動兵器に使えそうなものが手に入るとは到底思えない。

多少性能が物足りなくてもいいからとにかく完成させてくれよ。

進はリョーコに別れを告げてさっそくウリバタケに文句をつけに行っただが、

「そう言われてもよ、こいつらにはGXの代わりにダブルエックスの護衛を任せてえって考えてるんだ。そうしてみると、どうにもスペックがなあ」

「ほどほどにしてくださいよ……」

しかしウリバタケの意見にも見るべきところはある。

ダブルエックス最大の武器であるサテライトキャノンで三度も煮え湯を飲まされているガミラスが、本格的な対策を考えないとは考え

にくい。

——いい加減対策が確立しつつあると考えるべきだろう。

エックスへの搭載が失敗したいま、ダブルエックスの重要性はさらに増している。それを確実に護衛するためにより適した護衛が欲しいというのはわからなくない。

「だろ？ たしかに現状のプランで完成させてもアルストロメリアよりは強力だが、もう一声、もう一声ほしいんだ。エアマスターにはもっと恒常的に発揮できる大火力が、レオパルドは主兵装の取り回し改善と火器増設による圧倒的な制圧力が。でないとなんつーか、中途半端に終わっちゃうまいそうでな……」

「うーむ……」

たしかにこの初期プランだとウリバタケの言うとおりになりそうな予感がする。

実際のところ、両者の物足りない点はGファルコンとの合体でフォローできる範囲ではある。だが物足りないものは物足りないと言われてしまえばそんな気もしてきちゃう、絶妙なライン。

進はしばらく腕を組んで悩みに悩んでからポツリと告げた。

「……多少は妥協、してくださいよ」

「おう。できるだけ、な」

本当かよ。

進は疑いの目を向けそうになるのを必死にこらえ、ウリバタケのものを去った。

そして『私用』としてアキトを連れ出す。どうしても、彼に言いにくいことがあったからだ。

対するアキトも内密の話があるに違いないと考え、真剣な表情であるに続き、後部展望室へと誘われていった。

さあ、内容ないつたいなんだ。ユリカのファイルのことか、それともダブルエックスの運用に関してか、それともそれと——。

アキトはどんな話が飛び出してくるのか、いまかいまかと待ち構えて——。

「アキトさん！ 次になぜなにナゲシコやるときはあなたにも生贄に

なつてもらいますよ！ 俺だけじゃラピスちゃんに参加したときに抑えきれません！」

「そっちの話かよ!？」

予想の斜め上を行く話にあキトは全力でツツコミを入れざるをえなかった。

……その後、必死の説得であキトの了承を取り付けた進はようやく落ち着きを取り戻し、そこからはユリカらが抱えていた秘密に関する問答を繰り返して、これからは進も『共犯者』として航海に挑むことを宣言し、納得してもらおう。

アキトはもとよりそのつもりだったようで、進がなぜなにナデシコの話題を出したことのほうに困惑気味だったようだが、アレを今後一人で捌けというのは酷にもほどがある。死活問題だった。

アキトと別れてからは各武装の制御室や弾薬庫を見て回った。

それが一段落した頃にはワープアウトから八時間が経過、中央作戦室でのミーティングの時間になっていた。

「これがヤマトの周辺の宇宙地図になります。観測によって作成した地図と、イスカンダルから送られてきた地図を合わせて、表示します」
ハリが中央作戦室床の高解像度モニターと立体映像投影装置を併用して、ヤマト周囲約二〇〇〇光年の観測結果と提供された地図を表示した。

銀河間空間にだけあって、星の数は銀河の中比べると非常にまばらで空間が開けているのが見て取れる。

しかし――。

「ふむ、約四五〇光年先に赤色超巨星――約一〇〇〇光年程先に恒星系が一つあるな……。イスカンダルへの予定航路から少し逸れるが、もしかしたら資源を得られるかかもしれない」

宇宙図を見た真田が、右手で顎を撫でながら呟く。

眼前の赤色超巨星は惑星を有していない（すでに飲み込んでしまったのかもしれないが）ので、特別探査する価値はなさそうだ。

件の恒星系も提供された地図に記載はされているが、その環境の詳細

細については特に記載がない。

おそらく観測はできていても、イスカンドルが直接調査したわけではないのだろう。

だがデータによれば、バビタブルゾーンの中に含まれる惑星がある様子。それはつまり、水と植物を得られる可能性があるということを示唆する重大な情報だ。

「たしかにイスカンドルの航路からは少し外れています。この程度なら遅れは最小限で済みます。それにベテルギウスとオクトパス原始星団——トラブルの連続でヤマトの食糧事情もかなり厳しくなっています。だよな、雪？」

「そうね。農園で採れる野菜にも限りがあるし、水もちよつと心許ないわ。どこかの惑星から採取できれば改善できるけど、そうでなければ今後はもう少し締めないといけなくなるわね」

大介の指摘に雪も頷いていた。

航海にトラブルは付き物だとは言われるが、補給の目途が付かない単独での長期航海がこれほどのものだとは。さすがの真田も専門外の分野に驚きの連続である。

かつての大航海時代などは、過ぎ去って久しい歴史上の出来事に過ぎず、宇宙に進出して開拓を始めたのは比較的近い事柄だが、やはり過去の出来事。

しかし、ヤマトが行くの未知の宇宙。理解が進んでいる太陽系とはわけが違う。

夢物語に近かった恒星間の移動が現実のものとなり、さらには銀河間の往来を目的としていた途方もない航海。

地球の科学技術とノウハウを考えれば、無謀極まる挑戦。

そこにガミラスという侵略者の妨害まで加わってしまえば、地球で立てた航海プランがあっさり瓦解してしまっても無理らしからぬといったところだろうか……。

「……真田さん、ワープシステムの改良はどうなってますか？」

「まだ終わっていない。機関部を含めたそれなりに規模の大きい改装だからな。とは言え、この場で作業が終わるまで停泊するわけにもい

かん。しかしこの恒星系で資源が、特に食料が入手できるのなら、寄り道をする価値はあるだろう。しかし問題は航路選択だ。最短航路を選択した場合、赤色超巨星付近で一度ワープアウトしてから再度ワープする危険な航路になってしまう。それを避けると、位置の問題で数日タイムロスが出てしまう。考え物だな」

真田の返事に進も頷いている。ふむ。また、一皮剥けたらしい。……よろこばしいことだ。

「島、補給目的でこの恒星系に寄った場合のロスタイムは、どの程度になる？」

「そうだな……幸いバビタブルゾーン内の惑星は一つしかない。調査はその星だけに絞ってもいいだろうし、目的は鉱物資源よりも水と食料。有用な資源があった場合の採取に関しては、雪に聞いたほうが早いだろうが、それほどのロスにはならないと思うぞ」

「そうね、実際に資源があった場合、水と食用に使える資源の調査と採取だけなら、二日もあれば足りると思うわ。もちろん、食品への加工も含めてね」

大介の見解に雪も生活班長として賛同を示している。

そうだろう、アルストロメリアを始めとする人型機動兵器は、この手の作業が得意だ。

旧ヤマトから継承している作業機械も、数こそ減っているが継承している。これと人型を組み合わせた収集作業の速度は従来の比ではない。

「なら、この恒星系には行くべきだな。貴重な恒星系をみすみす見逃してしまつては、今後いつ補給の目的が立つか見当もつかない。食料になりそうな資源もそうだが、ヤマトの維持に必要な鉱物資源もあるかもしれないんだ。フライバイワープで取り戻した時間を使つてしまふかもしれないが、それに見合つた価値はあると思う——先立つものは必要だ」

今回のミーティングで実質司会を担当している進がそう言うと、第一艦橋のクルーを始め、各班各科の責任者が頷いた。

そんな中であつてラピスは内心「それって副長のジユンさんがやる

べきことじゃ？」と思っていた。

だが、ほかのクルーは気にも留めていない様子。

ジュンも気にしている素振りを見せないのが気になるが、もしかして、ジュンにはジュンなりの考えがあるのだろうか。

疑問に思ったが、この場で口に出すのは止めておこうと思った。

「それでいいですか、副長？」

「いいと思うよ。実際ヤマトの台所事情は厳しいわけだしね。古代君の言うとおり、先立つ物がなくちゃ、今後の航海の不安が募るばかりだ。ここはワープシステムの改良を当てにして、寄り道をしよう。ただ、時間のロスは最小限に抑えたい。この赤色超巨星を通過するルートを選択しよう」

主導権を進に譲ったとはいえ、一応最高責任者であるジュンが了承したことでヤマトの航海プランが決定した。

「ただし、戦闘配備を維持したままワープしよう。こちらの進路変更が読まれているかどうかはわからないけど、ヤマトが物資を求めて星に立ち寄ることはガミラスも想定しているはずだ。もしかしたら、この赤色超巨星を利用した罫の類があるかもしれないからね」

「了解！」

全員で頷いた。さて、また大変なことになりそうだ。

第十六話 超新星！ ヤマト、緊急ワープせよ！ B
パート

赤色超巨星付近へのワープは一六時間後に実行され、ヤマトは赤色超巨星から少々離れた地点にワープアウトした。

件の赤色超巨星との間には、まだ相当な距離が開いているはず……なのだが、眼前の赤色超巨星の姿は地球から見る太陽に比べても大きく見える。

赤色巨星へと至る過程でその質量の多くを宇宙に流出させているのだとしても、もともと太陽よりも巨大な星、接近しないに越したことはないだろう。

「ワープ終了ー……よしっ！ 予定よりも多少引きずられたが、狙いどおりの位置だ。このあとこの星の影響圏を抜ける時間を短縮するためには、この位置のほうが都合がいいだろう。なにしろ太陽半径の八〇〇倍の大きさがあるんだ。ワープなしで迂回するのになら、下手をすれば一日以上掛かってしまうからな」

大介は観測機器で赤色超巨星との距離を測り、ほぼ予定どおりの位置に出現できたことを喜んだ。

ベテルギウスするときも内心冷や冷やだったが、やはり恒星付近へのワープは心臓に悪い。

「艦内全機構異常なし——やはり恒星付近へのワープは航路が多少なりとも引きずられるな。このデータも反映してワープシステムを改修しよう。今後もういったワープをしないと限らん……しかしさすがは島だ。難しいワープを連続でこなすとは、おまえますます腕を上げたんじゃないか？」

真田の賞賛を大介は素直に喜んだ。

「もちろんです。俺はヤマトの操舵士ですからね」

大介も真田の声に含まれる惜しみない賞賛に気をよくする。

油断できる状況ではないが、それだけの仕事はしていると自負しているので素直に受け取って気持ちを盛り上げたほうが、これからも上手くいきそうな予感がするのだ。

そんなやり取りを横目に、電算室の雪は警戒のためセンサーをフル稼働して周辺の状況を探った。

スクリーンと周囲に浮かんだウィンドウが映し出すデータに目を走らせ、すぐにそれを発見して警告の声を上げた。

「前方の恒星から生じたと思われる衝撃波が接近中！ 回避間に合いません!!」

警告を受けたジユンはすぐに「総員対ショック準備！」と指示を出した。

指示を出して僅か十数秒、すさまじい衝撃と共にヤマトがきりもみに回転する。大介が懸命にスラストや慣性制御装置を駆使して姿勢を安定させるべく忙しそうに両腕を動かしているのが視界に映った。

その努力は報われ、ヤマトは姿勢を安定させることはできたのだが……。

「波動相転移エンジン出力低下！ 現在出力八〇パーセント！ さきほどの衝撃でエネルギー伝導管に損傷が発生した模様です！ 出力低下が止まりません！」

衝撃でコンソールパネルに頭をぶつけて額から血を流しながら報告するラピス。痛々しい姿だし血で右目が塞がっているらしく左目だけでコンソールを睨んでいる。

「エリナさん、ラピスちゃんの手当てをお願いします！」

「たまらずジユンは治療を指示した。」

「ちよつとラピス、大丈夫なの!?!」

指示を受けたエリナが通信機器の確認を手早く済ませ、座席から腰を浮かす。

「大丈夫です」と答えるラピスに医療キットを引っ掴んで駆け寄って、消毒薬で浸したガーゼで血を拭って止血を行い——小さい悲鳴が艦

橋に響いた。

「副長、通信機器にも異常あり。通信アンテナが破損したらしく、長距離通信ができません！ 周辺環境と合わせて、コスモタイガー隊の運用に制限が付くと思われます！」

ラピスの治療をしながらもさきほどまでチエツクを続けていた通信機器の様子を報告。さすがの手際だ。

「コスモレーダーも右舷のアンテナを損失、機能停止を確認！ 艦首メインレーダーにも感度低下が認められます！ 衝撃波によるセンサー類へのダメージは大きいです！」

ハリがレーダーシステムの稼働具合を確認して顔を顰めていた。

原因不明の衝撃に晒された影響で、艦橋上部のコスモレーダーアンテナが右舷二枚が全損、左側も辛うじて原形を留めているが到底機能する状態になく、長距離用コスモレーダーが完全に停止してしまっ

た。アンテナの基部である波動砲用の測距儀も同様で、レンズを破損して使用できない状態にあつた。

幸いなのは、バルバスバウの中に収められている近距離用メインレーダーがその機能を辛うじてだが保っていることだろう。

これは——まずいな。

「古代、いまの衝撃で武装の大半に機能障害だ！ デイストーションフィールド発生装置にも異常発生！ 消失までは至っていないが、出力が安定しない！」

額に汗を滲ませたゴートの報告に進も齒を食いしぼる。武器もフィールドもダメージを受けてしまうとは——。

原因がわからないので断定できないが、もしやこれはガミラスの罠——いや、それにしてもタイミングが早過ぎる。

ヤマトのワープアウトに合わせての攻撃にしては、いくらなんでも……。

「古代君、あの赤色超巨星は脈動変光星の一種だったのよ！ どうやら私たちは、運悪く星の脈動のタイミングに合わせてワープアウトし

てしまったようなの！ あの衝撃波は、その脈動で生じた自然の産物よ！」

なんとということだ。運の悪さを呪った。

まさかそんなタイミングに合わせてワープしてしまうとは——宇宙とは人類にとつてまだまだ未知の空間なのだ、またしても痛烈に教えられてしまった。

授業料はヤマトの損傷か——神様は相当皮肉なのかと、進は額に手を当てて唸るが、沈まなかつただけマシ——。

「——っ!? わ、ワープアウト反応！ これはガミラス艦です！」

ハリの絶叫に、今度こそ第一艦橋に悲鳴が上がった。

「ふふふ……次元断層を脱出したあとの足取りが掴めないと苛立っていたというのに……運のないやつだ、こちらの思惑以上の結果だぞ……！」

戦艦の艦橋でモニターに小さく映るヤマトの姿を嘲るゲール。

彼はドメルが考えた作戦を実行するためにバランス星基地を発進し、二日ほどこの宙域で待機していた。

「ヤマトがイスカンダルへの最短航路を取るとなれば、必ずビーメラ星が航路の脇に捉えられる。単独の長期航海ともなれば、水と食料を必ず補給したがるだろうから、水と植物のあるビーメラ星に向かうため、このエルダーの近くにワープアウトすると考えたドメル司令の読みは、正しかったようだな」

正直面白くないが、素直に従った結果本当にヤマトをこの手で討ち取るチャンスに恵まれた。

ガミラス軍人でのその名を知らぬ者などいないと言わしめる宇宙の狼——ドメル將軍。

その手腕をこうも見せつけられては、やはりその称号に偽りなしと実感させられる。

「ヤマトのこれまでのワープ記録から割り出したワープ距離と周期か

ら、銀河を脱してから予測どおりに航行した場合、ビーメラ星の存在に気付くだろう」

イスカandalへの旅路を急ぐヤマトは、多少のトラブルで遅れてもなんとかして修正する。

そして、急ぎの旅路でも先立つ物は貪欲に求めるだろうと力説したドメルは、本当に正しかった。

「エルダーは老いた星だ。その寿命は最早尽きる寸前。おそらく一月以内には超新星爆発を起こしてその生涯を終え、その中心に中性子星を残して消えるだろうと推測されている。……星の死期を早めるのは気が引けるが……専用に改造された超大型ミサイルを一〇発を預ける。不安定極まりない、寿命寸前の赤色超巨星にこれを打ち込めば、まず間違いなく爆発する。主系列星の段階では問題にもならないが、老いて不安定になったいまのエルダーには劇薬として作用するはずだ。計算では八〇パーセント以上の確率でヤマトを巻き込んだ超新星爆発が誘発できるだろう」

これがドメルの思い描いたプランだった。

「君の仕事は、星が超新星爆発を起こすまでの間ヤマトを足止めすることだ。運がよければ、星の脈動で発する衝撃波にヤマトが襲われて傷つくかもしれないが、過度な期待はできない。そこで、私が持ち込んだ『無人艦』を中心とした編成した艦隊を用いてヤマトの足止めに専念するのだ。もちろん君は安全圏から事態を把握し、星の爆発の兆候が見られたらすぐに逃げる。ただし、観測機器は置いておくことを忘れないように」

さすがはガミラス最強と称される名将。

ゲールではここまでのことは考えつかなかった。

ヤマトの航路を正確に予測した手腕もさることながら、その場で利用できるモノをすべて利用し尽くす発想力の素晴らしさたるや——。嫉妬は隠せないゲールであっても、素直に敬意を抱かずにはいられない。

「さて、運よく弱っているうちに叩き潰すとするか——。エルダーにミサイルを撃ち込め！ 無人艦隊制御開始！ ヤマト至近にワープ

アウトさせてから、フィールドを最大出力で展開しつつ攻撃して足止めするのだ！」

ゲールの指示で弱ったヤマトを狩るべく、血の一滴も通わない無人艦隊が牙を向く。

「全艦戦闘配置！ ガンダム発進準備！」

進はマイクに向かって叫びながら戦闘指揮席の計器類、データウインドウに目を走らせる。

ヤマトのコンディションはよくない。

主砲が全滅していて火力が大幅に落ちているだけでなく、衝撃波で武装の大半が機能障害を起こしている。

致命的な損傷ではないが、作動機構やエネルギー系の点検と修理には時間が掛かるだろう。

使える武装は——煙突ミサイルと艦尾ミサイルが半分程度。この環境では攻撃には使えない。

ヤマト後方に出現した敵艦の総数は六五隻。普段のヤマトなら、対処可能な数だ。

進はガンダム二機を主力にした航空戦で足止めしつつ、早々に逃げ出すことを考えた。

——嫌な胸騒ぎがする。

敵艦隊はいつもどおり駆逐艦を中心に数隻の戦艦を擁する編成。

対してこちらはガンダムが二機だけ。恒星の放つ高温さえなければ、アルストロメリアも出せたのだが……耐熱処理が間に合わなかったことが悔やまれる。

「雪、あの星の解析を続けてくれるか？」

「了解。でも探査機器の損傷が激しいし、電算室も不調だから時間がかかるわ」

「構わない」

あの星がどの程度の周期で脈動するかを知らなければ、撤退のタイ

ミングも計れない。

脈動変光星と一口に言ってもその周期は千差万別なので、もしかしたら非常に短い間隔で脈動して、また衝撃波が発生するかもしれない。

またあの衝撃波を食らったら、ヤマトは今度こそただでは……。

「……くそつ。副長！ 姿勢制御スラスタが不調です！ 推力がまったく上がりません！ この水力では方向転換すらままなりません！」

大介の報告に舌打ちしそうになるのをこらえた。ちらりと見ればジユンも険しい表情。

どうやらさきほどの衝撃波に煽られたショックで故障してしまったようだ。

とにかく艦を安定させることに全力を注いだので、ヤマトの向きまでは注意を払えていなかったのも事態を悪くしている。

——艦首の右横には赤色超巨星の姿。ワープ航路への影響が生じる位置関係だ。通常推進で通過するにも、またしても至近距離を掠めなければならぬ角度。ベテルギウスのようにはいかないのは、明らか。

進は胸騒ぎがますます強くなるのを感じる。

（——やっぱり、波動砲はいつでも撃てるようにしておいたほうがよさそうだな）

進は戦闘指揮席から波動砲のコンディションを確認する。衝撃波で多少のダメージがあるが、システムは正常に稼働中。

もうこうなつては手段は選べない。イチかバチかの賭け、今度も成功することを祈るのみ。

「副長。万が一に備えて波動砲とワープの準備を進めたいと思います」

進の進言にこれまた苦い顔をするジユンだが、その意図はすぐに理解して貰えたようだ。

「まさか——イネスさんが言っていた波動砲ワープを敢行するつもりか!?!」

「はい。ヤマトの方向転換が望めないいま、ワープで離脱するためにはそれしかありません。ベテルギウスの経験を踏まえると、敵はあの恒星を利用した罫を仕掛けていないとも限りません。ほかに道はないと進言します」

進の意見にジューンは唖った。

おそらく進の言わんとすることは理解してくれているのだとは思うが。

「真田さん、ヤマトの姿勢制御スラスタの回復にはどの程度かかりますか？」

「推測では、八時間ほどかかります。しかし、フィールドの安定しないこの状況下での船外作業は不可能ですので、実質修理不能です」

真田からの報告も芳しくはなかった。だからだろう、ジューンも決断してくれたようだ。

「——わかった。波動砲とワープ、どちらもすぐに使えるように準備を進めてくれ。エンジンの出力低下が痛いけど、なんとかして機能させてほしい。島君とマキビ君はワープの航路計算を頼む。それと——リスクは大きいけど、前進して後方の敵艦から距離を取るようになってくれ。このまま恒星との安全距離を保とうとすると、敵艦に狙い撃ちされてしまう」

「……。了解！ ヤマト、全速前進！」

大介は覚悟を決めてヤマトを前進させる。

ベテルギウスの二の舞は御免だと思っていたが、またしてもガミラスにしてやられた。

大介には申し訳ないが、しばらくはチキンレースに挑んでもらうしかない。

「——機関部門、了解。機関室、波動砲とワープの準備を進めてください！ この状況を打開するため、波動砲ワープを敢行する可能性があります！ 頼む！」

ラピスの命令に機関室では悲鳴が上がったのが漏れ聞こえた。気の毒に思うが、いまはそれ以外に活路がない。

頼む、エンジンのコンディションを保ってください。

「こちら格納庫！ ガンダム二機、発進準備完了！ いつでも行けるぜ！」

「ガンダム、発進だ！ ただしヤマトは緊急ワープで現宙域を離脱する予定にある！ すぐに帰還できるよう、ヤマトから離れ過ぎるな！」

進は出撃を命じながらも念を押すのを忘れない。ガミラスの攻撃以上にあの脈動変光星である赤色超巨星が怖い。

わざわざガミラスがこのタイミングで仕掛けてきたということは——過去の経験から推測するに、ヤマトが進路変更してこの赤色超巨星の至近を通過するルート——すなわちこの先にある恒星系に補給を目的として立ち寄ることを予想してのこと。

ガミラスがヤマトの懐事情を詳細に把握しているとは思えない。

が、単独での長期間の作戦行動かつ自力で物資を調達しなければならぬ、時間が限られた航海で航路を大きく逸れることも許されない。おまけに、地球人がまだ己の恒星系すら出たこともなかった大宇宙に関して『無知』な民族であるとなれば、彼らの予測を外すことは難しいと思う。

（そもそも、目的地が割れているのなら当然だな……イスカンダルとガミラスは双子星、そのガミラスが地球を求めて遠路はるばるやってきているのなら、大マゼランから地球までの航路上の天体についてはデータを集めているはずだ。となれば——）

これから予定している恒星系には、『ヤマトが求める物資がある可能性が高い』と見て間違いない。

いくらガミラスでも、ヤマトの詳細なスペックは知らないだろうし、イスカンダルから宇宙地図を貰っているかどうかの確証は得られていないだろう（予想はしているだろうが）。

だからこそ、自分たちの見解を基に予測を立てるしかない。『そこに資源があるのを知っているから』こそ『ヤマトがその恒星系に補給を求めるはずだ』と考えて罊を張ったはずだ。

となると、目的地にプロキシマ・ケンタウリのように罊を仕掛けてはいる可能性が浮上したが、どちらにせよガミラスの妨害を避けては

通れない。

ガミラスとイスカンドルは二重惑星。イスカンドルに接近すると自体がガミラスの懐に飛び込むと同義。

ヤマトの目的地と目標が変わらない限り、衝突は避けようがない。それにガミラスとて必死なのだということ、ユリカのファイルを讀んだいまの進には理解できる。

手段を肯定することは決してできないが、護るために必死に抗う者の強さは知っている。

だからこそ、こちらにも死に物狂いで抗わなければならない。

どのような形であれ、民族の存亡を賭けて戦っているのはヤマトも同じ。

しかし、たとえ地球を追い込んだ怨敵であったとしても——生きるために彼らの『滅び』を肯定していいのだろうかという迷いは、進の胸の内にあった。

——ガミラスと和解の可能性が潰えているわけではないのが救いと言えど救いだ。ユリカのファイルに書かれていた。だから進も一縷の望みを託したい気持ちがある。

しかしそれには——。

（ガミラスの総統デスラー……彼ははたして、俺たちを理解してくれる存在なのか？）

ユリカのファイルには彼に関しての記述がわずかに書かれていた。

しかし、その人物像をそのまま鵜呑みにできないのは——進が自分で証明してしまっている。

根っこは似ていても、経験と状況の違いから『古代進』と古代進は必ずしも同一の人物と断定できない相違が生まれている。

それを考慮すれば、ガミラス——デスラーとの和解はあくまで『あり得る可能性』に過ぎない。

（すべてを決めるのは——やはりサンザー恒星系に到着してからだな。それまでは、ガミラスには『障害』として対応するだけだ）

進は胸の内の迷いを振り切って、ヤマトの戦闘準備を進める。

いまは、障害を押しつけて前に進むしかない。

「ヤマトの挫折は地球の滅亡。」

ガミラスは滅ぼしたくない、彼らの滅びを見過ごしたくはない。だが、それで手心を加える余裕は、あまりないのだ。

「作戦を確認するぞアキト。俺たちの仕事はヤマトが準備を整えるまでの時間稼ぎだ。フィールド出力に注意しろよ。この熱量だ、ガンダムでもフィールドがなくなったらあつという間に蒸発しかねないからな！」

「了解、隊長。気を付けるよ」

リョーコの口から作戦の最終確認を受けたアキトは、ダブルエックスがロボットアームに掴まれて運ばれていく振動を肌を感じながら、気合を入れ直していた。

衝撃波でカタパルトが破損し、使えないため、今回珍しくは下部発着口から発進することになった。

中央の発着レーンにGファルコンDX、エックスデイバイダーが乗せられた。発着レーンの傾斜が始まり、発進スロープが形成、シャッターで格納庫と区切って減圧室を形成して減圧、ハッチが解放されて重力波カタパルトで初速を得たガンダムが宇宙に投げ出された。

猛烈な加速と共に艦外に放出された機体を操り、ヤマト後方に出現した敵艦隊に向き直させるアキト。

恒星に近い位置、改修されたとしてもアルストロメリアでは活動困難な環境。カスタム化したのが太陽系内、つまりプロキシマ・ケンタウリ戦の前だったのが災いした。あとであったのなら、耐熱処理ももう少し施されていたのかもしれないと思うと、運が悪いと思う。

ガンダムでもちよつと油断すれば最悪の事態になりかねない極限状況での戦闘。いやでも緊張させられる。

「だが、ヤマトはやらせない。俺の贖罪のためにも、ユリカと一緒に生きていくためにも。おまえたちに屈してやるわけにはいかないんだ」
静かに宣戦を布告する。もちろん連中に発信したわけでもないし、リョーコにも聞かれていない。これはただの決意表明だ。

しかし、ウリバタケと真田は本当にいい仕事をしたと思う。

エックスは大変すばらしい機体だ。おかげで出航後の戦力のままであったなら、単機で立ち向かえ、と言われる羽目になっていたであろう状況で、僚機を伴った戦闘ができる。

彼らには、あとでなにか奢ろう。

(小回りの利くGXなら、GファルコンDXのフォローにはうつつけた。最高速とビームソードの出力が勝るこっちが切り込んで、GXがフォロー。これなら——！)

展開形態のまま敵艦隊に突撃するGファルコンDXの隣を、ディバイダーを背中に装着した高機動モードのエックスディバイダーが飛ぶ。

二機のガンダムでこの数を相手取るのは厳しいが、ヤマト撤退までの時間稼ぎなら。

アキトは厳しい戦いを覚悟した。

一方、ガンダムが飛び行くさまを待機室のモニターで見送った居残り組は……。

「やっぱり凄いなえくガンダム。この状況下で活動できるなんて……ホントにリアルゲキ・ガンガーって感じ?」

改修されたアルストロメリアでも活動できない環境下で活動するガンダムの姿に、呆れるやら感心するやらの判断がイマイチ付かないヒカルに、

「たしかに……こういうときには、歯がゆく思うね」

シリアスモードなイズミが率直に述べる。

正直性能差云々よりも、ユリカの現状を理由にアキトが鈍っていないかどうかのほうが気掛かりだった。

幸いアキトの様子は普段と変わりないように見えたが、手助けできないことは悔しい。力になると言っただばかりなのに。

「まあ、基本性能が桁違いですし。隊長殿もご機嫌でかつ飛ばしとりますなあ、少佐?」

隣ではサブロウタが軽口を叩いている。いや、これはこの状況下でなにもできない無力な自分への憤りが含まれているようだ。機体性

能の差を理由にこうして油を売っていることしかできないというのは、外見や日々の言動がどうであれ、根は生真面目らしいサブロウタらしいと思った。

「そうだな。隊長にこそ相応しいとパイロットを譲ったが……耐熱処理さえ間に合っていれば」

月臣の愚痴は、みんなの愚痴だ。赤色超巨星を掠める航路を選んだ時点でこういった襲撃は想定していた。だが実働二六機もの機体の処理を行う時間はなかった。本当に悔やまれる。

そんな仲間の憤りを乗せるかの如く、モニターに映るガンダムは敵艦と接触、交戦状態に突入した。

(リョーゴ、テンカワ。負けるんじゃないよ)

先陣を切るアキトは敵に航空部隊がないことから、敵艦の対空砲火だけに注意を払って突撃を敢行する決断を下した。

おそらくこの状況下では、ガミラスとて艦載機を運用できないのだろうと推測する。

数でも質でも不利な状態での強襲は、火星の後継者との戦いで散々繰り返してきた。

その決して褒められた手段ではなかったアキトの戦いの日々の成果が——これも地球の存亡に大きく関わるとは……運命の皮肉を感じる。

航空攻撃への対処は航空戦力に依存しているのだろうか、ガミラス艦の対空砲はかなり少ない——というか戦艦以外には確認もされていない。

駆逐艦や巡洋艦クラスの対空攻撃は、甲板上の主砲で行われていることは確認済み。

駆逐艦の小口径な主砲なので小回りも利くし、連射速度も高い。対空射撃に使えなくはない性能だ。

——だが、そんなものに撃ち落されるほどアキトもGファルコンDXも甘くはない。

アキトは右手の専用バスターライフルを最大出力に設定し、同じく

最大出力にした収束モードの拡散グラビティブラストを適度に発砲、解析データから割り出したレーザーシステム（と存在する場合は対空砲）を破壊していく。

撃沈は狙わない。というより狙えない。

ガンダムと言えど敵艦に肉薄しなければ撃沈させることは難しい。だが突撃をフォローする味方が不在の今回の戦いでは、肉薄すること自体が難しい。

それにどうにも——いつもと連中の動きが違うのが気になる。

なんというか、無機質というかまるで無人艦を相手にしているような感じなのだ。ナデシコ時代から多くの無人機を相手にしてきたアキトには、有人艦との微妙な動きの違いというものが、なんとなくだを感じ取れるようになっていた。

これはもしかすると——。

敵の目的を漠然と察したアキトは、すぐにリョーコに伺いを立てたあとヤマトに打電、火力支援を要請した。

リョーコはアキトの進言を理解してからは、協力して敵の武装とレーザーシステムの除去を優先するようにしていた。

エックスディバイダーは右手のビームマシンガンと左手のディバイダーからカッターブレードモード（通称ハモニカブレード）の砲撃を次々と撃ち込んでいく。

必殺武器の名に恥じず、ハモニカブレードの一撃はいままでよりもずっと遠方からの攻撃で敵艦にダメージを与えられている。

一撃必殺は望めないが、この火力は頼りになる。いままでの武器が豆鉄砲に感じてしまうこの威力は、病みつきになりそうだ。

（あとは戦艦クラスに通用するかどうか……）

いままでどおりなら、ガンダムの火力であつても重装甲・高強度フィールドを持つ戦艦に対して決定打を与えるのは難しいと考えられていた。

だが、今なら通じるかもしれない。

とはいえ無理は禁物だ。作戦の完遂が第一。ヤマトに攻撃を届かせないことが仕事なのだ。

リョーコとアキトが曲芸飛行染みた軌道で敵艦隊の中を飛び回り、着実に敵艦にダメージを与えていく。

十分とは言えないかもしれないが、ヤマトとの位置関係、タイミン
グ、いまを逃す手はない。

「こちらリョーコ！ 敵艦の火器とレーダーにダメージを与えた！
波動エネルギー弾道弾を使ってくれ！」

「こちらヤマト、了解！ ゴートさん、お願いします！」

「了解！ 信濃格納庫扉開放！ 信濃の無線コントロール開始、火器
管制システム正常作動中！」

ゴートの操作で無線制御された信濃が起動。

ヤマト艦首下部の専用格納庫のハッチが観音開きに開いて、次元断
層内で上下逆さまに格納されたままになっていた信濃がその姿を覗
かせる。

信濃の格納庫扉はかなり頑丈であったため衝撃波の被害を耐えき
り、格納状態にあった信濃は衝撃波に直接さらされることを免れてい
たためダメージが少ない。一撃入れるだけなら……！

「発射！」

ゴートが発射スイッチを押すと、格納されたままVLSのハッチを
開いた信濃から計二四発の波動エネルギー弾道弾が次々と発射され
る。

アルストロメリアには間に合わなかった耐熱コーティングを限界
まで施した波動エネルギー弾道弾は、姿勢制御スラスタで進路を修
正しながら、ガンダムからの誘導に従って目標に向かって猛進、疎ら
な対空射撃を掻い潜って次々と命中、その威力を見せつけた。

この連携攻撃によって、敵艦隊の三分の一に相当する二〇隻もの敵
艦を一挙に撃破することに成功した。大戦果と言つていいだろう。

スコアの大半は駆逐艦だが、足の速い駆逐艦を潰せたほうがヤマト
にとっては都合がいい。

火力支援を受けたガンダムもこの機を逃すまいと敵艦隊に襲い掛
かり、確実にダメージを与えている。よし、時間稼ぎは成功しそうだ。

しかし――。

「あの動き――やはり敵艦隊は無人艦で編成されているようだ。おそらくA I制御を基本に外部からのコマンド入力で制御されているのだろう」

真田はガンダムと波動エネルギー弾道弾に対する迎撃行動から、敵艦隊が無人のA I制御を基本に外部からの管制を受ける無人艦隊だと見抜いたらしい。

ヤマトの決死の攻撃が上手くいったのは、相手が無人艦で判断がやや鈍かったからだろう。

「しかし妙だ。いままでガミラスが無人艦を使ったことは確認されていないぞ？」

きな臭いものを感じてだろう、ジュンが眉を顰める。

無人艦を使わなければならないほどガミラスは人材が不足しているとしても言うのだろうか。

いや、だとしても連中に何度も煮え湯を飲ませてきたヤマトを相手取るのに、柔軟性に欠ける無人艦で戦いを挑んでくるものだろうか。数に任せるならまだしも、数が少な過ぎる。

ヤマトの航路を予測し、衝撃波で弱ることすら予測に含まれていたにしても、確実に期すならもつと多くの戦力を動員してくるはずだ。

これではまるで――自軍の人的損失を抑えつつも艦艇の損失は鑑みない、自爆戦術のような――。

胸騒ぎを感じる。よくないことが起こっている予感がする。

防御を固めた敵艦に対しては、改修されて決定力を増したはずのガンダムですら、決定打を与えるのが難しい。

そうこうしている内に、眼前の赤色巨星の重力も使って加速し続けるヤマトと赤色巨星との距離が詰まってくる。

そろそろ、ガンダムと言えど活動限界が近い距離だ。

「こ、古代君！ 大変よ！」

切羽詰まった雪の声に進のみならず全員が注目する。フライウインドウに映った青褪めた表情の雪は、本当に大変な事態が進行していたことを告げる。

「分析によると、あの星は核融合が最後の段階まで進んでいて、星の中心核には鉄がかなり生成されているの！ 中心核の推定温度も一〇〇億Kに到達してて、鉄の光分解がかなり進行しているわ！ いまも星全体が急激に収縮を始めていて、このままだとあの赤色巨星は数分以内に超新星爆発を起こすわ！」

あまりに衝撃的な状況にだれもが言葉を失い青褪める。

超新星爆発。恒星の生涯を終える瞬間の最後の輝き。

鉄の光分解で恒星の核に蓄積していた鉄分子が分解されて星の中心が空洞のような状態になることで支えを失った星が潰れ、中央で星の物質が急激に圧縮されてコアが形成され、コアが反射した衝撃波が外部に広がり星が崩壊する現象——重力崩壊が起こる。

そう、I I型の超新星と呼ばれる星の末路——それがヤマトの眼前の恒星で今まさに起ころうとしているのだ！

「でもこの現象は自然に発生したとは思えないわ！ 戦闘開始から間もない頃に星の表面に急激な変動が起きていたの！ 星の脈動にしては妙な動きだったから、なんらかの外的要因で星が刺激されて超新星爆発が誘発された可能性が高いわ！——やっぱり、古代君の懸念したとおり、ガミラスが意図した罠だったのよ！」

……最悪だ。

「ゲール副司令、エルダーの変動を確認！ 星全体が急激に収縮を開始！ 超新星爆発の予兆です！」

待ち望んだ報告にゲールもにたりと笑う。あとは恒星が爆発するまでヤマトを釘付できればこちらの勝ちだ。

ここで退避が遅れると、ゲールも超新星爆発に巻き込まれてしまう。ゲールは速やかに無人艦を自立行動のみに切り替えて撤退を指示する。

ギリギリまで粘って指示を出すほうが確実だが、それで退避が遅れては元も子もない。

ドメルの指示でもあるし、あとは観測機が拾った情報を眺めて葬った証を得ればいいだけだ。

「超新星爆発だあ!？」

デイバイダーを背中に装着した高機動モード。空いた左手で背中のラックから抜き放った大型ビームソードを敵駆逐艦のフィールドに叩きつけながらリョーコが問いただした。

「ガンダム……はす……帰艦！ ヤマ……はこ……より……ワープ……行し……より離……る！」

通信アンテナの損傷と恒星に近づいたことでノイズが混じる通信を聞きながらリョーコは唸る。

不明瞭だが帰艦指示とワープに関する情報が聞けたのなら、やるべきことは一つだ。

「——っ！ 了解！ アキト、撤収だ！」

大型ビームソードで敵艦の装甲を割り、間髪入れずに右手のビームマシンガンをしこたま破損部に撃ち込みながら左手の大型ビームソードをラックに戻し、離脱と並行して背中から外したデイバイダーからハモニカブレードを発射。

その猛攻の前に耐えきれなかった眼前の駆逐艦が爆ぜ、宇宙に華咲かす。

しかし、いままさに恒星が末期の華を咲かせようとしていると考えると、眼前の爆発すらも雑草同然なものだろう。

「リョーコちゃん！ 敵艦隊の動きが！」

隣の駆逐艦を同様に近接のハイパービームソードから接射による集中砲火で葬り去ったアキトが、爆発から離脱しながらリョーコに報告してきた。

敵艦隊の動きが明らかに変わった。

いままではヤマトをこの場に釘付けにするためか、消極的に包囲網を形成するに留まっていたのに、ヤマトを確実に超新星爆発に巻き込

むためか、より積極的な攻撃に転じている。

「くそ……っ！ 仕方ねえ、ギリギリまで粘るぞ！ 少しでもいい、敵艦隊を足止めしてヤマトを逃がさなけりや、なんのためのガンダムだ！！」

答えながら再チャージを完了したハモニカブレードで発射して、少し離れた位置にある敵戦艦に打撃を与えようと試みる。

——弾かれて終わった。

収束率が高く、機動兵器用火器では最も優れたフィールド突破力を持つハモニカブレードとはいえ、やはり遠方から戦艦クラスのフィールドを撃ち抜くのは容易ではない様子。

——やはり、相転移エンジンと波動エンジンでは単純に生成するエネルギーの質と量で雲泥の差がある。

そして、単純な出力以上に波動エネルギーを転用することで効率を増したフィールド発生機やグラビティブラストの威力が凄まじきは、ガミラス戦役開始からヤマトの完成に至るまでの経緯で嫌というほど身に刻まれていた。

この格差を埋められるのは——サテライトキャノンだけ。

だがその切り札を使えばしばらくは身動きが取れなくなる。

——この状況下では、撃つに撃てない。

ガンダム二機がギリギリまで足止めに奮戦してくれていると悟った進は、その心意気に応えるべく「すぐに戻って来い」という言葉を飲み込んで、波動砲とワープの準備を並行して行う。念のため、格納庫内のボソソジャンプジャマーはカットしておく。

その旨も通信で伝え、返事も受け取ったが、ガンダムが無事に帰還できるかどうかはわからない。

「こちら機関室！ エンジン出力は四〇パーセントで横ばいですが、波動砲とワープの同時使用に足る出力を得られそうです！」

太助の報告に頷くらピス。額に巻かれた包帯が痛々しい姿だが、彼女は懸命にヤマトの機関部を統括していた。

エネルギー総量と出力の値は旧ヤマトの六倍もあるのだ。ワープ

も波動砲を同時使用するにしても、三五パーセントもあれば十分事足りる。

問題は、その負荷に損傷したエンジンが耐えられるのか、ヤマトの艦体が持ちこたえられるか、だ。

「波動砲発射用意、安全装置解除」

「ワープ準備。安定翼展開、タキオンフィールド展開準備」

進と大介の手で、粛々と両機能の使用準備が進められていく。

フライバイワープからあまり間を置かずにもた無茶なワープを強いられ、全員の緊張が色濃くなる。せめてヤマトがまともに方向転換できれば普通のワープが可能なのだが……。

スラストターの推力が低下したヤマトは、進路変更もままならなくなっている。

安定翼も展開不能となっているいまのヤマトでは、重力波放射システムでの方向転換もままならない。メインノズルの尾翼の機能では、足りない。

つまりこの場における最善策は、以前イネスが語った波動砲によるワープ航路の強制開口しかない。

準備を続ける最中、ギリギリまで粘っていたガンダム二機がようやく帰艦した。

ギリギリまで敵艦隊へ攻撃を続け、怒涛の勢いで数隻もの駆逐艦を仕留めてヤマトが逃走するための時間を稼いでくれた。

エネルギーの不足でフィールドが部分的に焼失し、恒星からの熱で焼かれた部分が出たようだが五体満足の姿で帰還したガンダムの姿に、第一艦橋のクルーたちは涙があふれそうな思いだった。

このチャンス、決して逃さない。

その決意を胸に、ヤマトは大きな賭けに出る。

ガンダム二機の活躍で時間を稼いだヤマトはいま、爆発寸前の赤色超巨星に向かって突撃を続けていた。

後方から迫る無人艦隊は、死を恐れぬ機械特有の無機質さを存分に発揮してヤマトを追撃、次々と主砲を放ってくる。

ガンダムの加護を失ったヤマトは、再生産が間に合ったわずかばかりのリフレクトデیفエンサーを艦尾ミサイルから撃ち放ち、防壁を展開してそれを防ぐ。

リフレクトデیفエンサーはヤマトに直撃する砲撃をすべて受け止め、文字どおりの盾となってくれている。

「!? 恒星の収縮がさらに加速!——星が……潰れます!」

雪の報告を聞くまでもない。

あれほど巨大だった恒星が急激にそのサイズを縮めているのが、窓に投影された艦外カメラの映像にもはっきりと映し出されている。

その光景を目の当たりにするクルーの噴き出す汗の量が、一段と増えた。

「最終セーフティロック解除! タキオン粒子出力上昇!」

「時間曲線同調! 空間歪曲装置作動開始!」

進と大介の言葉が連なる。本来同時に使用されることのない装置が同時に機能しようとしている。

はたして——上手くいくのだろうか。

「頼むぞ古代……ワープインの瞬間に波動砲を撃つんだ。タイミングがずれたら——」

「任せろ島——俺たちならできるさ!」

互いの呼吸を合わせるように言葉をかけあう。波動砲とワープの準備は最終段階を迎えようとしていた。

「操縦を渡すぞ古代! あとはハーリーの指示に従ってヤマトを安定させるんだ!」

「わかった!——ハーリー、頼むぞ!」

「任せてください!」

戦闘指揮席正面のパネルがひっくり返って、波動砲のトリガーユニットが出現し、進の目線の高さまで持ち上がる。

進は両手でしっかりとトリガーユニットを掴み、対閃光ゴーグル越しに計器を睨む。

「ターゲットスコープオープン! 電影クロスゲージ明度七!」

「タキオン粒子出力上昇！ ワープエンジン出力上昇、ワープ可能領域に到達！」

ラピスの報告に進はトリガーユニットを握る手にさらに力を籠め、大介はワープスイッチレバーに手を伸ばす。

あとはこの二つの操作タイミングを完璧に合わせるだけ。

それは、互いの呼吸を理解している親友同士の進と大介にしかできない芸当だろう。

「古代、リフレクトデイフェンサーでの防御は限界だ。直撃が出る前に頼むぞ」

バリアミサイルの障壁を貫通した砲撃が、ヤマトの傍を掠める。

艦尾ミサイル発射管の弾薬庫に、もうリフレクトデイフェンサーは残されていない。ゴートに言われるまでもなく、進も理解している。

緊張に振るえそうになる手を意思の力で押さえつけ、進はターゲツトスコープを睨みつける。

「さあ、やるぞヤマト！ 衝撃で音を上げるんじゃないぞ！——波動砲発射一五秒前！」

「ワープ一五秒前！ 各自安全ベルト確認！」

進と大介の警告が殆ど重なる。

未知なる挑戦にクルー達の緊張が最大限に高まった。

安定翼は使えない。最初のワープのような負荷があつたら、ヤマトとけが人・病人たちはどうなるか、不安はある。

だがクルーはだれもが己の役割を果たしながら、宇宙戦艦ヤマトがこの奇跡のワープを成功させ、イスカンダルへの航海を続けることを信じていた。

——耐えることには自信があります。わが愛する戦友たちよ、為すべきことをなすのです。明日という日を迎えるために、最後の最後まで、諦めることなく——

またしても脳裏に響いた『声』に、クルーは気持ち少し落ち着くのを感じた。

理屈などどうでもいい。たしかなことは——いまヤマトという艦と進たちの心は一つとなりて——宇宙戦艦ヤマトという『存在』とし

て確立しているということ、ただ一つ。

そしてその助けとなつてゐるのは……遙かなる星イスカンダルからもたらされたフラッシュシステム。

ユリカの呼びかけに応え、苦慮の果てに救いの手を差し伸べてくれた——愛の星。

ヤマトはそこに行かねばならぬ。

必ずコスモリバーシステムを受領して帰らねばならぬ。

すべては地球を救うため。

愛を通すため。

……ヤマトの眼前で、ついに恒星が爆ぜた。

支えを失つた星の中心に構成物質が流れ込みコアを生成、そのコアに反射した衝撃波が星の外周を形成している高温のプラズマを周囲に凄まじい速度で弾き飛ばす！

ヤマトへの到着にはまだ少し時間があるが、悠長にはしてられない。

あれに巻き込まれてしまえば、ヤマトは一瞬にして蒸発して消え去るだろう。

カウントダウンが続く。第一艦橋に波動砲とワープのカウントダウンを告げる進と大介の声が響く。

あと一〇秒。九秒。八秒。七秒。六秒——。

その瞬間が迫る。

——勝負だ。

このときクルーが脳裏に思い浮かべた言葉は、これしかなかったであろう。

「三……二……一……発射あつ!!」

「ワープッ!!」

カウントゼロ。進が渾身の力で波動砲の引き金を引き、大介がワープスイッチレバーを押し込む。

寸分の狂いもない完璧なタイミングでシステムが作動し、ヤマトの艦首に波動砲の煌めきが灯る。

同時にワープのため次元の壁を突破するためのワームホールが形

成される。

そこに波動砲のエネルギーが流し込まれることで、空間が強引に拡張されていくのを外部カメラが捉える。

艦首前方の時空の裂け目が開いていく。あとは飛び込むだけだ。

青白い稲妻を伴う青白く輝く空間に、閃光に包まれたヤマトが力尽くで突入。

ヤマトが空間の裂け目に完全に侵入したすぐあとに、次元の開口部は膨大なエネルギーを放出しながら閉鎖され、ヤマトを追撃していた無人艦隊との間を遮った。

直後、超新星爆発の想像を絶する衝撃波と共に周囲にばら撒かれたかつて恒星だった超高温の物質に飲み込まれて——無人艦隊もその一部と成り果てるのであった。

航海の遅れを取り戻すべく決行されたフライバイワープ。

その成功によって、航海に明かる兆しが見えたかと思われた直後のトラブルとガミラスの罠。

緊急手段を用いて辛うじて退けたヤマトではあるが、その前途は厳しい。

しかしヤマトよ、挫折することは許されない！

君の背中には、地球とそこに住まうすべての命が背負わされているのだ！

人類滅亡と言われる日まで、

あと、二六六日！

第十六話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十七話 浮かぶ要塞島！ ヤマト補給大作戦！

それは、眼前に漂う宝島？

第十七話 浮かぶ要塞島！ ヤマト補給大作戦！ Aパート

古代守は暖かな温もりの中で目を覚ました。

眼前にはベッドの天蓋のような物が見える。体は柔らかく温かい、すべすべした手触りの布団で包まれているようだった。

(たしか俺は——タイタンでガミラスの捕虜になって……)

ナデシコCを始めとする地球艦隊を——最後の希望たるヤマトに欠かせない人材を逃がすために囷となって——撃沈されたのだ。

大破したアセビはすさまじいスピードで太陽系内を突き進み、土星の衛星タイタンに不時着した。

幸運なことに、その時点では守を始め数名のブリッジクルーが負傷しながらも生き延びていたのである。

守はヤマトが発進した場合、資源採取のためにタイタンに立ち寄ることを知らされていた。だからヤマトが資材を求めてやって来るまで、泥を啜つても生き延びる覚悟を持ち、部下たちを鼓舞した。

……古代守は宇宙戦艦ヤマトの戦闘班長か副艦長の任に勧誘されていた、あのミスマル・ユリカ直々に。その席で、ある程度の情報は知らされていたのだ。

若いが思い切りがよく戦況判断もいい。蜥蜴戦争の末期から火星の後継者の事件——それにガミラスの開戦直後から経験を積んでいられるだけあって、実戦経験も十分豊富と言え、ヤマトのクルーとしては申し分ないと判断と、彼女は言っていた。

そう言われては守とて悪い気はしなかったし、人類最後の希望と数度も言われたヤマトには興味もあった。彼女のことは真田のこともあって多少なりとも興味があったし、ナデシコ時代の活躍は——よくも悪くも耳に入っていた。

個人的な興味からも、そして人類の未来のことを考え、守は彼女の誘いに二つ返事に応じていた。

にも拘らず、こうして囷となって流してしまった。

彼女を裏切ることになってしまったのは心苦しかったし、ヤマトへの乗艦が叶わなかったことも残念に思う。だが、それでも発進さえしてくれればよし。

散って逝った仲間たちのためにも、いまを生きている人々のためにも、希望の灯を消さないことのほうが大事であると考え、守は囷となって散ることを選んだ。

だが守は生き残った。ならばヤマトに合流を図るのが、彼がすべき最善の選択であろう。

過酷な航海に挑むヤマトには、一人でも人材が多いほうがいい。そう言って生き残った部下を励まし、命繋いでヤマトで戦おうと息巻いていたところで、彼らはガミラスのパトロール部隊に囚われたのだ。

……それからのことは、あまり覚えていない。

生き残ったとはいえず守たちは負傷していたし、連中はその場で殺したり尋問したりもせず、本国に輸送するつもりだったらしいことしか記憶にない。

守は少なからずヤマトについての情報を持っていた。それが露呈することは避けねばならない。なんとしても情報を護らなければならぬ。その思いだけが強く記憶に残っている。

結局、すぐに冷凍睡眠装置に放り込まれてしまったので、自決による機密保持すらできず、永い眠りについた——はずだったのだが。「お気づきになりましたか？」

左隣から聞こえてきた柔らかく美しい声に、守はゆつくりと頭を向ける。それだけの動作なのに、体中が悲鳴を上げた。

——どうやら、命拾いはしたが重傷を負っているらしい。寝返りすらままならないとは……。

苦痛に呻きながら首を向けた先には——絶世の美女がいた。

床まで届きそうな煌びやかで美しい、柔らかそうな金髪。愁いを湛えているかのような眼差しに長い睫毛に美しい顔立ち。

まるで絵画の中から飛び出して来たかのようなその姿に、守は思わず見入ってしまった。

「どうかなさいましたか?」

反応がない守を氣遣う美女の姿に、「いえ、なんでもありません」と当たり障りのない返答で濁す。まさか見惚れていました……と正直には言えない。

「あの、ここはいつたいどこなんですか?」

「ここは惑星イスカンドルのマザータウン——私の宮殿の一室です、地球の人」

女性の口から出た『イスカンドル』という単語に守は強く反応した。聞いたことのない星だ。

「イスカンドル? 地球ではないのですか?」

守の問いに女性は静かに首を振った。

「ここは地球から約一六万八〇〇〇光年のあなた、大マゼラン星雲の中にあるサンザー太陽系の第八惑星——私はこの星の女王、スターシアと申します」

想定外の事態に、守は理解が追い付かなかった。

だが次第に理解させられた。

自分はヤマトよりも先に、その目的地たるはるかな星にたどり着いてしまったのだと。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十七話 浮かぶ要塞島! ヤマト補給大作戦!?

「——それで、ヤマトはワープに成功したというのか?」

「は、はあ……ヤマトはタキオン波動収束砲でワープの航路を強引に押し開いたようで……その、申し訳ございません」

ゲールは怯えも露に、デスクに座るドメルに頭を下げていた。

作戦は見事に失敗。無人艦とは言え貴重な艦隊を丸々損失したばかりか、あれほど恵まれた状況で失敗したという事実は、申し開き様も無い大失敗。

ガミラス軍のあり方を考えれば、即極刑ものだ。

「——そのときのデータは取れているのか？」

「は……観測衛星のデータを回収することには成功いたしましたので、タキオン波動収束砲を使ったワープの瞬間やその直前の戦闘データも含めて、観測したデータの損失はありません……」

「なるほど。わかった」

欲しい答えを発したゲールにドメルは安堵する。彼はちゃんと与えられた役割を完璧にこなして来たのだ。

たしかに戦果だけ言えば見事なまでの大失態。ゲールが戦々恐々としているように、速やかに極刑に処すレベルの失態だ。——普通の作戦なら。

（次元断層の戦いでもヤマトの甲板上から砲撃していた、それまでの報告にない新型機動兵器——その実働データが取れた。そして、ヤマトの搭載艇からと思われるあの強力なミサイル兵器のデータにタキオン波動収束砲の新たな使い方……十分過ぎる戦果だ）

データは十分に得られたし、『ヤマトに沈んでもらっても困る』のだから、これは考えられる限り最上と言える結果であろう。

いまは表立って褒められないが、ゲールはよくやってくれた。機会があつたらそれとなく労うか、酒の一杯でも奢ってやるのがいいだろう。

——インテリアの趣味が致命的なまでに合わないのが残念この上ないが、彼は宇宙の狼ことドメル将軍の副官たる能力は十分にある。ぜひこのまま副官を続けて貰いたいところだ。——インテリアの趣味が合わないことが本当に残念で仕方ない。

「ご苦労だったな、ゲール。ヤマトを撃滅できなかったのは残念だが、十分に目標を達成している。作戦は一応の成功を見たと言っている……今日はゆつくりと休め。明日からはまたがんばってもらおうぞ」

ドメルの意外な言葉に、ゲールは我が耳を疑っている。

「し、しかしドメル司令——」

「ゲール、ヤマトは手強い。仕留められなかったのは残念だが、それでもヤマトの手の内を垣間見ることができた。そのデータを損失なく持ち帰ったことで、今後の戦略にも大きな影響をもたらさだろう。気

に病むことはない——それに、ヤマトが無傷で済んでいないのは君の頑張りによるものだ。本当によくやったぞゲール」

ドメルの言葉に、ゲールは彼の指揮官としての器の広さを感じた。自分にはない度量に嫉妬は感じるが、汚名返上のチャンスを与えてくれたドメルに感謝し、素直に応じる。

「はっ！ それでは休ませてもらいます。明日から、またよろしくお願ひ致します」

ゲールはドメルに敬礼を送ると、身を翻して司令室から退出する。（ヤマトめ……今度相對したときは必ず仕留めてくれる！ 俺のプライドと——なによりドメル司令とデスラー総統のために！）

退出したゲールの後姿を見送ったあと、ドメルは改めて提出された戦闘記録に目を通す。

デスラー総統がはたしてヤマトをどうしたいのかは——未だに不明だ。おおよそ見当は付いているが。

しかし、ドメルはデスラー総統に——ガミラスに忠誠を誓った軍人。やはりどちらに転んでもいいように手を打っておく必要があると考えた判断は、間違っていない。

デスラーがどちらの選択をしてもいいように、ドメルなりに行動していかねばならないだろう。

（さてヤマト。ビーメラで水と食料を得るといい。その前に、私の差し向けた玩具と対面して貰うことになるがな。——攻略できねば宇宙の藻屑、攻略すれば資材と——わが軍の資料が手に入るぞ）

ドメルは唇に薄く笑みを浮かべる。

ヤマトが万全の状態であれば、主砲の一撃で終わってしまうような脆く無価値な罠。

だが脈動変光星の衝撃波に翻弄され、その直後にイレギュラー要素の強いワープとなれば、かなりの被害を受けていることが容易に想像できた。

艦隊に対して砲撃を確認できなかったことから察するに、主砲がす

べて損壊している可能性もある。例の新型二機もゲールの働きで傷を負っている。

となればあれを外部から破壊することは望めないはずだ。

とはいえヤマトのこと。外部から壊せないなら内部から壊すに決まっている。

あれは軍用兵器ではないから自衛装備はなく、侵入者を撃退するセキュリティもない。

——それでは話にならないので、気休め程度に小型のガードロボツトは大量に置いておいたが。

それでも彼らの技量をもってすれば容易く解体して終了だろう。その後はきつとおいしく資源として活用するはず。

だがそれでいい。

手を取り合える可能性が潰えないうちは……ヤマトには健在であって欲しいのが実情だ。

無事にこの罫を突破すれば、得られた資料でバラン星にわが軍の基地があることを知らされながらも、『タキオン波動収束砲で攻撃するわけにはいかない情報』も知るだろう。

ドメルはこの情報を知ったヤマトなら、バラン星を回避して進むはずだと確信を持っている。あの次元断層内で戦略砲を艦隊に命中させなかったヤマトだ。そうする以外の選択肢を選べないだろう。

(この程度の障害、君たちなら傷ついていたとしても容易に突破できるはずだ。ヤマト、万全の状態をキープして航行を続けたまえ。ガミラス存亡のためには、恥も外聞も捨てて君たちに縋るほかないはずだ……)

ヤマトの今後がガミラスの未来を決定付ける。それはドメルだけが得た確信ではない。デスラー総統すらも漠然とそれを理解していた様子だった。

はたして討つべき存在か、誇りを一時投げ捨ててでも味方とすべき存在か。

ガミラスの苦境を確実に乗り切るためにはヤマトの——あの六連射可能なタキオン波動収束砲が必要なのだ。

——決断のときが迫っている。

いまドメルがすべきことは、ヤマトを倒す戦略を練り、そのための戦力を整えることと、ガミラスが折れたときヤマトが手を貸してくれるよう、こちらの情報を適度に流し、ヤマトが万全の状態になれるようにそれとなく補給の機会をくれてやることだけだ。

たとえこの戦に負けても、ガミラスの誇りに傷が付いたとしても、祖国を護るためならどんな汚名を着ても構わない。

どちらにせよ、ガミラス最強と謳われるドメルを破ったとあれば——ヤマトに正面切つて戦おうとする気概を持てるのはデスラー総統ただ一人。

あとはギリギリ、タラン將軍あたりが交戦の意思を示せるかどうかだが、国を破滅に導きかねない愚策を取るようなことはしないはずだ。

当然、デスラーも。

ドメルを破れば士気はガタ落ち、イスカンドルとガミラス本星が二重惑星である以上、ヤマトが接近すればタキオン波動収束砲の脅威が嫌でも頭を過る。

迂闊にヤマトを刺激して万が一にもタキオン波動収束砲をガミラス本星に——本星から逃げ出す国民に向けさせるわけにはいかない以上、もうヤマトは見過ごすしなくなる。

だがそれはそれでいい。こちらが撃たなければ、ヤマトは決してガミラス国民に牙を剥いたりはしないはずだ。

(ミスマル艦長、そしてヤマトの戦士諸君。君たちは誇り高い戦士たちだ。決して無抵抗の人間を虐殺するような真似はしないだろう。矛を交えた私にはわかる。君たちは撤退を優先したとはいえ、わが艦隊をタキオン波動収束砲に巻き込まなかった)

ドメルの脳裏にタキオン波動収束砲の反動で急速離脱するヤマトの姿が浮かぶ。

狙う余裕がなかったのと、一発でどうにかできる状況でもなかったことが大きいにしても、一隻も巻き込もうとしなかったのは彼らの気質だ。

甘いと言えば甘いだが、超兵器と言う絶対的な力に溺れず自制する心を持つ彼らを、ドメルは高く評価している。

だからこそ、和解の道筋が残されているのだ。

もしもヤマトがガミラスを怨敵と憎み切っているのなら、その威力に物言わせて殲滅してもよかつたはずだ。

それをしないということは、ヤマトは終戦の手段として講和を視野に入れていると考えても、そう外れてはいないはずだ。

「ヤマト、身勝手は承知している。——だが願わくば、私の全力を乗り越えて、君たちの祖国と——ガミラスを救つて欲しい。君たちの戦いに、地球とガミラスの双方の未来が掛かっているのだ……」

凄まじい衝撃と共に、宇宙戦艦ヤマトは艦体を覆う閃光を割れた氷のように四散させながら通常空間に復帰した。

波動砲で強引に押し広げたワープ航路を通過する際の衝撃は凄まじく、ほとんどのクルーが安全ベルトを腹に食い込ませ、激しい頭痛に呻き、悶絶する羽目になっていた。

「うう、ワープ……終了……」

それでも生真面目な大介は根性でワープの成功を口頭で報告する。揺れる視界で捉えた計器の数値を見る限り、ヤマトは無事に通常空間に復帰したことが見て取れる。

「さ、さすがだな、島……」

こちらも波動砲トリガーユニットを握りしめたまま俯いていた進が大介を称賛している。

——しかし、気持ち悪い。二日酔いというのはこういうものをいうのだろうか。

そんな考えが頭を過つてしまうくらい、気持ち悪かった。

「ぬ……うう……自己診断システムによると、いまのワープでの損傷は一部の装甲板に亀裂が生じたくらいのようなだな……。おそらく衝撃波の直撃を受けて弱くなっていたところが裂けたんだろう。……」

よく、この程度の被害で済んだものだな」

呻きながらもしつかりとヤマトの損害を確認する真田。彼も大概タフな男だと思う。心底。

——耐えるのは慣れている、と申しました。私が直接話せるのは……いまはここまでのようです。フラッシュシステムの助力を借りても、意思の疎通ができるのは、極めて限られた時間だけ……。それにしても、さすがは私の自慢の戦友たち。前の戦友にも、勝るとも劣りませんよ——

「——やっぱり、フラッシュシステムが関わってたのか……なるほど、艦長が言っていたヤマトの意思って奴がシステムを介して俺たちの頭に直接語りかけてた、って寸法なのか」

頭を押さえながら進が確認すると、ヤマトは応えた。

——そのとおりです。イスカandalからの援助で、私は——
声はそこで途切れた。限界が来たらしい。

「——うむ。提供された資料にはなかったが、どうやらフラッシュシステムは精神波を拾うだけではなく、自身の精神波を直接相手にぶつける発信装置としても使えてしまうのだな。なるほど——だから最初から情報が解禁されていなかったのか」

いくぶん回復した真田が顎に手を当てながら自身の推測を口にし
ている。

「……たしかに、これって使い方次第だと洗脳とかに使えますもんね——もしかして、最初に封印されたのは、それを恐れていたからかもしれないですね……」

若さの力か、復活しつつあるハリが率直な意見を述べている。
言われてみれば、と真田も眉をしかめているのが見えた。

なるほど、言われてみればそのとおりだ。使い方次第では、システムを使った発信者の思考を強制的に他人に押し付けて強引に洗脳したり、思考を誘導して遠隔操作される危険性があるのか。

こんなシステムを下手な権力者が手に入れてしまえば——波動砲とは別の意味で最悪の事態を招くだろう。

「そうだな——最初はヤマトが使命を果たすために艦長を洗脳したと

かも噂されてたしなあ……」

と、進が最初にその意思を示したときに流れていた噂をボソツと呟くと……。

——い、一応こういつた使い方は想定外ですので！ わ、私は洗脳とか誘導とかはしていな——

さきほどまでと違ってすごく力の入った——と言っても怒鳴つてるとかじゃなくて無理やり言葉を発しているとき特有の力んだ声に、第一艦橋で失笑が広がる。

「あ、誤解を招かないようにって必死になってる」

ハリの率直な感想もまた笑いを誘う。

ここまでのよう、と言っていたにもかかわらず気合いで意思の疎通を図るヤマトがなんか可愛い、と思ったのは大介だけではないだろう。

そうか、これが艦船とかの擬人化萌え文化に繋がるのか。

と盛大に誤解していそうな感想が、艦内にしばらく蔓延し、(某眼鏡技術者を中心に)『ヤマト擬人化計画』などというものが裏で進行し始めたのは、ちょうどこの時期であったという。

……嗚呼、ヤマトの祖国日本が生んだ萌え文化は、この時代にあってもなお健在であった。

よくも悪くも。

——そういうつもりではなかったのに……——

もはやシステムの力を借りても意思疎通ができなくなったヤマトが、上手く伝わらなかつたとしよげていた。

フラツシユシステムは基本的に精神波を『機械制御』に反映させるのがお仕事なので、搭載した機体の操縦や、無線遠隔装置のコントロールに使うのが一般的——らしい。

ヤマトの場合は、どうしてできるのかはよくわかっていないが、わかってる範囲では波動エネルギーの生み出す空間波動に言葉を乗せることで意思の疎通を図っているのであって、洗脳紛いの強制力はない。

拡張次第ではできなくはないらしいが、イスカンドルから提供されたシステムにそのような機能は含まれていない。

とは言え、まったく的外れではないので疑われても無理はないと思いつつも、複雑な気分だ。

——言葉を交わすのって、難しい……——

ヤマトは人間が言葉のみでわかり合えず衝突する理由がわかった気がした。

相手の受け取り方次第では違った意図に取られてしまう。これでは誤解を招いて争いが起こるのも無理はない。

意思疎通と言う手段に目覚めたばかり、人間に近い自我を構築したのがユリカと接触してから、さらには自身は人間に使われる道具でありその役割を果たすことを至上としてきたヤマトは、言葉によるコミュニケーションの大切さを存分に理解すると同時に、些細なことはいさかいが起こる理由を痛感するのであった。

——誤解……されていけないといいなあ……——

それからしばらくして。

機能が大幅に低下したレーダーの代わりに射出した探査プローブ二基がもたらしたデータによつて、ヤマトは目的地であった恒星系のすぐそばにワープアウトしていたことが判明した。

恒星系としては太陽系よりも小さいようなので、ヤマトの速力ならワープなしでも二

日半もあれば横断できそうなくらいである。

プローブがもたらしたデータによれば、この恒星系の第四惑星が件のハビタブルゾーン内にあり、豊かな水と植物を有する地球型惑星であることが判明。

ヤマトは補給を実現すべく、煌々とメインノズルを輝かせながら未知の恒星系の空間を進み始めた。

そんなとき、ユリカがようやく意識を完全に取り戻した。

視覚と聴覚に深刻な障害を抱えたユリカ用の補装具も、彼女の覚醒

にギリギリ間に合った。——まだ試作段階のものだが。

なにぶん本人の意識が戻らないとテストもろくにできないので、こればかりは致し方がないことであろう。

が、それでもいきなり使えるものを用意するという点を鑑みるに、ヤマトが誇る三人の天才の技術力と発想力が優れているのだと、改めて示されたと言っても過言ではないだろう。

そして現在、ユリカは医療室のベッドに横たわったまま視覚と聴覚を補うための補装具が身に付けていた。

しかし補装具とは言っても、彼女の視力と聴力は完全に破壊されてしまっているため、機衰えた機能を機械で増幅して補助する従来の方式では意味を成さない。

そこでウリバタケが着目したのが、ユリカがIFSを体に入れていて、その機能が未だ損なわれていないという点だった。

なので彼は、まずは彼女の目と耳の代わりになる観測機器を作成することから始めた。

完成されたそれは、彼女の耳朶の形に合わせて成形された青い聴覚センサー（ネックバンド型ヘッドフォンにそっくり）で、耳をすっぽりを覆うようにして装着される。

そこにアキトと同じタイプの薄緑色（目を隠す意味もあるので半透明）のバイザー型の視覚センサーユニットの蔓を、ヘッドフォンの耳当て部分に差し込む。

その後、バイザー型視覚センサーユニットと聴覚センサーの得た映像データと音声データを、聴覚センサーの耳当て部分に内蔵したアンテナから送信。

右手首に取り付ける上品な青いブレスレット型の受信機（これも緑色の宝石を模した受信ユニットが付いている）に送りこみ、一体になった白いフィンガース・ドレスグローブ型IFSコネクタからIFSを通してユリカの脳に情報を送ることで、失われた機能を再現するという方法を構築したのである。

システムを構築したあとに取り掛かったのはデザインだ。実用性重視の無機質な外見ではものものしいし、なにより妙齡の女性が身に

付けるものとして相応しくないだろうと、派手さを抑えた装飾品を模して印象を落ち着かせるように発案したのは、意外なことに真田であった。

同時に、頭や右腕が重くなつて負担が増えるのはユリカの状態を鑑みるに絶対に避けなければならなかったので、徹底した軽量化を施すべきだと主張したのは、主治医たるイネス。

このちよつとした気遣いと遊び心を含めた品は——ヤマトマツド三人組の自信作だ。

これで彼女の失われた視覚と聴覚の補填は、目途が立った。

しかし病状が悪化したユリカは筋力の低下も進み、体温調節にも障害を抱えているため、それをカバーするための補装具も制作しなければならぬ。もちろんそれも鋭意制作中であるが、完成品はまだ出来上がっておらず、試作品が持ち込まれるに留まつた。

ユリカは視覚・聴覚センサーだけを身に着け、簡単な調整を受けて機能していることを確認したあと、リクライニングさせたベッドの上で進の報告を聞いていた。

「申し訳ありません艦長。無茶を繰り返した結果、ヤマトを損傷させてしまいました」

進はユリカに向かって頭を下げていた。

結果的にユリカが倒れてからヤマトの進路を決めたのは進だ。

危険なのはわかっていているのだから、航路上の赤色巨星をもっと詳細に調査してからワープしても遅くはなかったはず。——すべては気負い過ぎたことと航海の焦りが生んだ失態。

彼はきつと、そう思っているのだろう。

「別に構わないよ。ヤマトからだいたいこの事情を聞いてるし」

すでに周知の事実とは言え、しゃらつととんでもない事を言ってしまったかもと、言つてから思った。

ヤマト艦長のミスマル・ユリカさん。実はシステムの助けがなくてもヤマトと精神感応できるタイミングがあるのだ。

事実冥王星の海の中でも瞬間的に繋がって、コントを演じたりもしていた。

ヤマトの自我形成はユリカとの精神的接触によって生じた事例であるので、それが原因だろうと勝手に解釈している。

当然眠っている間もそういった瞬間が幾度かあり、その中でフラッシュシステムにまつわるコントもちゃんと聞かされている（より正確には表現するのなら泣きつかれた）。

たぶんユリカがこうして意識を取り戻し、表面上は普通にしていられるのも、ヤマトとの精神的繋がりに影響されている部分もあるのかもしれない。

命と自我を持つ物体にフラッシュシステムを取り付けた事例は、過去にないと聞く。その影響で本来精神波を受信するインターフェースに過ぎないシステムが、なんらかの物理的現象を引き起こしてしまっているのかもしれない。

システムなしでも『根性』で耐久力と防御力が微上昇するヤマトだから、その作用がより強化され、ユリカにも恩恵があっても不思議はない——かもしれない。

実証は極めて困難であるが。

だがユリカは勝手にそう思っている。実際ヤマトに乗ってからのほうが発作を起こしたあとのダメージが比較的小さいのだから、そう考えたほうがなんとというか、ヤマトとの繋がりが感じられて気分もいいのである。

「——進、人は失敗を繰り返しながら成長していくものなんだよ。私だって失敗した——取り返しのつかない失敗も。最初から完璧にやるなんて、出来っこない。特に人の上に立って指揮するって言うのは、ね？」

ユリカの言葉に進は静かに頷いた。ユリカの指導を受けて、最低限は出来るつもりだったのにこのざまだ。

——やはり、まだ未熟と言わざるをえない。

「それに、フライバイワープの決断に超新星からの離脱って成果も挙げてるんだから、気落ちしないで。それから……言うまでもないと思うけど、もう私は艦長としての職務を十全に果たすことができないか

ら、今後はジユン君と一緒に私の副官として補佐を務めて欲しいの。できる？」

ユリカの言葉に、今度は力強く頷いた。

本当は艦長代理として指揮権を譲り受け、非常時にのみユリカが指揮を執ったほうがいくぶん楽なのだが、それをするにはまだ進は経験が足りていない。

というよりも、ユリカが音頭を取らないとクルーがまだ不安がるのだ。

戦果だけを見れば、進はユリカの代わりをしつかりとやってのけたのだが、発進から次元断層までの間ヤマトを操っていたユリカと、教育されているとはいえフライワイプの決断と超新星からの手早い逃走くらいしか指揮官としての成果がない進とでは、やはり信頼度に差が出てしまう。

もつとも、進がユリカの代わりを務められるようになるのは時間の問題だろう。彼はユリカの期待に見事応え、成果を上げているのだから。

「艦長、急場凌ぎではありませんが、日常生活を補助するスーツを用意できたので、着用して具合を見てください。その運用データを基に本命の仕上げに掛かるので」

ユリカの様子に安堵した表情の真田がそう言うので、ユリカも気軽にOKしたのだが——傍らにいたウリバタケが取り出した一品を見たときは、進ともども絶句してしまった。

んで。

ヤマトは修理作業を継続しながら通常航行で恒星系——イスカンダルの宇宙図によればビーメラ星系——に接近を継続している。

コスモタイガー隊を総出で駆使した修理作業の甲斐あって、姿勢制御スラスターの修理作業は予定よりも早く六時間程度で完了し、ヤマトはようやく自力で進路変更できるようになった。

動作テストも良好、派手に破損していた割には経過も良好。

ついでに波動砲ワイプの反動で破損した装甲板も張り替えを始め、

破損したコスモレーダーのアンテナも倉庫にあつた予備に置き換える作業も並行して進められている。

修理作業で剥がした装甲や部品は艦内工場に運び込まれ、補修部品の生産や弾薬の補充のため可能な限り再利用。徹底的なりサイクル精神を發揮して極力無駄を出さないように注意を払いながら、作業を継続した。

作業は決して楽ではなかったが、よりはつきりとした形でヤマトの意思に触れたからだろうか。クルーたちは以前よりもずっとヤマトに愛着が生まれたらしく、その作業は迅速でありながら丁寧であつたという。

「主砲と副砲は変わらず機能停止中、パルスブラストとミサイル発射管の半数は使えるようになりましたが、完全ではありません。修理作業は継続中、予定では主砲はあと四日、副砲が二日後には完了の見込みです。コスモレーダーはアンテナの交換を終了し、現在調整作業中です。装甲板の張替は三時間ほどで終了を予定しています。コスモタイガー隊はガンダムを除いて万全の状態にあります。ガンダムは損傷の程度が大きく、修理完了には最低一二時間を要します」

簡潔にまとめた被害報告をする真田。

幸いなことにガンダム二機は大きな損害を被ることなく帰還できたのだが、フィールド消失による熱損箇所が各所にあり、特にダブルエックスはサテライトキャノンの右砲身と左のリフレクターを焼かれていた。

それ自体はストックされている部品との交換で対処できる程度のダメージではあつたのだが、無茶な機動を繰り返し、機体のあちこちに負担をかけ続けたことを考慮し、オーバーホールを受けることになつていた。

「ビーメラ恒星系まであと三時間を予定しています。機関部の修理中のため、メインノズルの推力は四〇パーセントが限度ですが、航行に支障はありません」

「は、波動相転移エンジンの復旧作業の進展は五〇パーセント。応急修理はあと一〇時間ほどで完了の見込みですが、応急修理だけでは波動砲とワープの使用は不可能です……」

大介、ラピスが続けて報告する。

……ただし、ラピスだけ様子がおかしい。落ち着きがなく、頬を赤らめてもじもじしている。

ふむ、実に少女らしい様子だと、真田の頬が緩む。

「そう。それじゃあヤマトはこのまま目的地のビーメラ第四惑星に接近して。真田さんは主砲の復旧を優先しつつ、ヤマト全体の検査を続けてください。フライバイに波動砲ワープと、無茶を繰り返したので補給ついでに腰を据えて作業をお願いします。もちろん、ラピスちゃんと協力してワープシステムの再調整もお願いしますね」

艦長職に復帰したユリカも、休んでいた分を取り戻すかのようにキビキビと指示を出す。

ふむ、補装具の調子はいいようだ。

真田は満足げに首を縦に振った。

……そんなユリカの姿を見てラピスが「はわわわ……」と右手を口元に当てて目を見開き、わなわなと震えている。

「ん？」とラピスの様子に気付いたユリカが悪魔の一言告げる。

「カモ〜ン！」

と。

ラピスはその一言でストップパーが完全に瓦解したようだ。

機関長としてのプライドや自制も働かず、ふらふらと席を立て艦長席に赴き、ユリカの『白くてもふもふした』体に抱き着く。

時同じく、雪がユリカのために栄養ドリンクを入れたボトルを差し入れに来たようだが、こちらもくすくすと笑いが堪えられない様子。

だが、ユリカは気にした風もなくボトルを受け取って「ありがとうね、雪ちゃん」と口を付けた。

そう、もうお気づきであろう。

ユリカはいま『ウサギユリカ・はいぱあくふおくむ』と化していたのだ！

オクトパス原始星団のなぜなにナデシコを思い出してほしい。

あのととき彼女は「こんなこともあろうかと」とやけつぱちに真田が明かした改良で、全身のパワーアシスト機能を搭載、IFS制御で自身の体同然に動けるぱわあくあつぷした『ウサギユリカ・ぱあくじよんツウ』と化していた。

今回さらに衰えたユリカの日常生活を助けるため、また介助の負担を少しでも軽減すべしとマッド三人組が取り組んだ試みの一つが『第二の筋肉と皮膚を兼ねるパワードスーツの開発』であった。

とはいえ、そんな未知なるアイテムをすぐに用意できるほどご都合主義を極められなかった三人は、試作品も兼ねてユリカウサギの衣装をベースに改良を加え、その場凌ぎをすることを思い立ったのだ。

改良で取り付けられたパワーアシストはそのままに、耳の部分には聴覚センサーの補助システムを内蔵。

体温の調節用のヒーターやクーラーの装備、さらには着ぐるみでは脱ぐも着るも大変なので、そこそこ大きい排泄物パックを内蔵し、清潔さも保つための工夫も凝らした。

さらにさらに、IFSよりもレスポンスがよく日常生活における動作を肩代わりさせるため、開示された資料に含まれていたフラツシユシステムの受信装置と変換器を搭載した。これらの改良が加えられた結果、『ぱあくじよんツウ』をはるかに凌ぐ『はいぱあくふおくむ』が君臨したのだ！

したのだが、そこに視覚センサーであるバイザーを装備しているためか、傍から見ると不良なウサギにしか見えないため、『悪ウサギユリカ』のあだ名が付けられた、とにかくすごい補装具なのだ！

ついでに艦長職であることを示すためのオプションとして、普段見に付けている艦長帽を耳の間に被り(マジックテープで固定)、コート……は着れないので『艦長』と書かれた腕章を左腕に巻き、ヤマトを表す錨マークに、ナデシコを表す撫子の花びらとユリカを表す百合の花が添えられた、三センチほどの大きさのブローチが胸元に付けられていた。

このブローチは、重病の身をおしてまでヤマトをいまままで導いてく

れた彼女に対するクルーの感謝の気持ちとして用意されたもので、進が（実質）指揮を執るようになってから「艦長が目覚めたとき、少しでも励みになるように感謝の印を送ろう」と企画し、意見を募集。その結果生み出された、彼女を象徴するにふさわしい贈り物。

すぐに用意できて普段使いでも邪魔にならず、いつも身に付けていられるアクセサリー、最終的に彼女の名と、ナデシコとヤマトの艦長に因んだデザインで纏められた。

このブローチを渡したとき、感極まって号泣したユリカの姿を見て、真田も嬉しかったものだ。

——まさか最初に付ける場所が着ぐるみ衣装になるとは想定外だったが。

雪が渡したドリリンクのボトルも、三人の遊び心満載で可愛らしくデフォルメされたニンジン型の保温ホルダーに入れられ、ストローが付いている部分がニンジンの先っちょ、艦長席の小さな作業机においても簡単には倒れぬようにと、置く時にはスタンドとして機能する葉っぱが三枚。

これを飲むユリカの姿は、さながらニンジンを齧っているウサギのよう。

——そしていまは、光悦とした表情の美少女を侍らせて椅子にふんぞり返った性悪ウサギそのものといった様相で、第一艦橋に明るい（あ、軽い）空気を広げているのだ！

「まあ、みんなの気分が明るくなればそれに越したことはないけどさ……」

とはウサギユリカ・はいぱあくふおくむの弁。すでになにかしら達観した様子を見せている。

「はあく……もふもふ……」

ウサギユリカ・はいぱあくふおくむの左わき腹付近に抱き着いているラピスは本当に幸せそうで、手でビロードのような手触りの白い毛を撫でたり頬擦りしたり、ぎゅっと抱き着いてみたり——年相応かより幼い印象すら受ける仕草に、誰も「任務中」と注意しようとはせずほっこり顔だ。

これにはユリカも敵わず、左手で頭を撫でてあげる。ラピスの顔がさらに崩れた。

つい一年前まではあまり表情の変わらない、とても無機質で人形のような印象を与えていたとはとても信じられない変貌振りに、真田も目頭が熱くなる思いだ。

——通信席で静かに涙を流しているエリナの姿にも共感を覚えてしまう。

そのエリナは真田に注視されているとは露知らず、ラピスの成長に喜び震えていた。

——よし、艦橋内のカメラを使って写真を撮っておこう。

もちろん個人フォルダーに保存して、彼女の成長の一ページとして永く残す所存である。

「エリナ！」

そんなエリナに突然ラピスが声を上げた。びくりと体を震わせて振り向くと、至福の表情でいたラピスが鬼気迫る表情で、

「私も着ぐるみを着る！」

おう、そうきたか。

だがエリナはまったく動じず超速でラピスを嗜める。

「駄目に決まってるでしょラピス！ あなたの着ぐるみは椅子に座れないのよ！」

みなが姿勢を崩した姿が視界に映りこむ。

はて、なにかおかしなことを言っただろうか。

(そっちかよ!?)

エリナの少々論点がずれたダメ出しに声に出さずに突っ込む大介。

そう言えば、エリナ・キンジョウ・ウオンは『コスプレが趣味』と聞いた覚えがある。

嗚呼、その教育を受けたラピス・ラズリもその影響をばっちり受けてしまっていたのだな……。

島大介は一人納得するのであった。

「……えええ……」

まだ療養生活が解かれていないルリが、ハリとアキトから聞かされたユリカ的狀況になんとも言えない声を上げる。

かなり具合がよくなったルリではあるが、まだゆっくりしなさいと言われ自室のベッドで腐っていた。のだが、まさかアキトとハリが同時に見舞いに来るとは予想してなかった。

珍しい組み合わせもあったものだと思う。

（この二人、特別仲がよかったわけではなかったと思うのですが。——なんだろう、居心地が悪い）

なぜだろうか、まだ交際もしていないのに彼氏と父親が肩を並べて見舞いに来たかのような錯覚を覚える

どうせなら、別々に来てほしかった。

ルリの偽りざる心境であった。

「しかし補装具が付いたとはいえ、ユリカさんは艦長職に復帰して大丈夫なのですか？」

「本人も無理はしないって明言してるからね。とりあえず艦橋にはいるけど、実務のほとんどはジュンと進君がするんだってさ。一応エリナも雪ちゃんも付いてってくれるから、そんな心配はないと思いたいね」

そういうアキトも心配が顔に出ている。

しかしまあ。

ルリは思った。ユリカが倒れたあと、進が音頭を取るまでのヤマトの沈み方を思い返すと、大人しく寝ているとは言えないのだろうと。

実際——過酷極まるヤマトの航海においてユリカの役割はあまりにも大きかった。

戦闘指揮の手腕も然ることながら、艦内の空気を少しでもよくするためにと自ら道化役すら買って出たりと——普段から気を遣っていた（たまに砂糖を吐かせていたが）。

死に至る病に侵された自身のことを極力心配させまいとする考えもあったのだろうが、よくも悪くもクルーから注目され、肩の力を抜かせてきたのも事実。

——何度も思う。あれは、ルリの性格では真似できるものではない。というか真似したら最後、頭の病気を疑われてしまう！」と。

「僕たちも目を光らせて、少しでも具合が悪そうだったらすぐに医務室に連れて行けるようにはします。ですから、ルリさんは万全の体調に戻してから戻って来てくださいね——正直、僕たちだけでどこまで抑えられるか……」

不安げな口調のハリだが、これに関してはルリも責めることはできない。

だって自分も抑えきれないんだもの、普段のユリカは。

そんなことを考えていたら……。

「ルツリちゃあくん！ お見舞いに来たよ〜！」

と元気のいい声でユリカがやってきた。傍らには離れられなくなったであろうラピスがしがみ付いている。——顔面崩壊して幸せそうであった。

ついでに心配について来たのであろうエリナも傍らにいて——個室だとしても少々人数オーバー気味であった。

でも、賑やかなのは決して嫌いじゃない。

……とりあえず、もふもふして癒されておこう。可愛いのは正義。実に名言だ。

ビーメラ第四惑星を光学カメラで捉える距離に達したヤマトの眼前には、まるでサツマイモのような形をした深緑色の物体が漂っていた。

本体には無数の穴が開いているし、周囲にはトゲのあるこん棒のような物体が一二個ほど浮遊している。

「なんだろうね、あれ？」

ユリカがメインパネルに映し出される物体に首を捻る。物体までの距離は現在二万キロ。

ビーメラ星が背後にあったため、緑豊かな星の色と同化して光学カメラでの発見が遅れたのと、例によってステルス塗装されているらしくレーダーに映らなかつたことが重なって、見落としてしまったの

だ。

——ユリカの口調は至って普通なのだが、格好が格好なのでイマイチ緊張感がなかった、と後にエリナは語っている。

「人工物であることだけはたしかです。ただ、ガミラスの物と断定するにはデータが不足しています。もしかしたら、このビーメラ星系にも宇宙に進出した文明が存在していて、防衛のために要塞を設置していたとしても、不思議ではありません」

真田が慎重な意見を述べる。

目下のところ、ヤマトに直接害を及ぼす異星人はガミラスだけが、宇宙にどの程度の文明が栄えているかの資料はない。

……ここは慎重に行動すべきだろう。

「そうだね……雪ちゃん、探査プローブを」

「わかりました——プローブを発射します」

ユリカの指示を受け、雪は電探士席のパネルを操作、第三艦橋の発射管から探査プローブが一つ発射される。

発射されたプローブはロケットモーターで加速しながら先端部の電磁波探知アンテナ群を展開、先端に突き出たままの天体観測レンズと合わせて物体の探査活動を始めた。

プローブは徐々に物体に接近していく。その距離が五〇〇〇キロを過ぎた付近で異変が起こった。

プローブから送られてくるデータは、強力な磁気のようなものを捉えたことを示していたが、詳細な解析をする前にプローブがバラバラに分解されてしまったのだ。

「!? これは……一体……」

「雪！ こっちにデータをよこしてくれ！」

真田の鋭い声に雪は慌てて艦内管理席にデータを転送する。真田は真剣な表情でデータを何度も見返し、測距儀で捉えた映像も繰り返し視聴して分析し、低く唸った。

真田は第一艦橋で分析結果を報告せず、中央作戦室を使って説明することにした。

こればかりは高精度の立体投影装置を備えた中央作戦室の方が説明しやすいと考えてのことである。

説明——と聞いてイネスもふらりとやってきたのだが、今回は申し訳ないがアシスタントに回って貰った。

不服そうではあったが、真田の様子から以前話して聞かせたトラウマが刺激されたのだろうと察して、素直に身を引いてくれたのがありがたい。いろんな意味で。

中央作戦室にはウサギユリカを始め、各班の責任者と、事態に関する各班の責任者とクルー数名が集められた。

ただし第一艦橋を留守にはできないので副長のジユンと砲術科長のゴート、存在感薄い組がお留守番をしている。

「まずはこの映像をご覧ください。探査プローブが破壊されたときの映像です」

硬い表情の真田がパネルを操作すると、中央の立体スクリーン映像が投影される。クルーの位置関係に合わせて四方にスカイウィンドウが向いた状態だ。

流れる映像は、ヤマトの光学カメラが捉えた探査プローブの後姿だが——異様な光景が映し出され、映像を見たまなが思わず息を飲む。

物体に接近していた探査プローブがバラバラに分解されていく。だが、爆発したわけではない。それどころかビームだったりミサイルだったり飛んできたわけでもない。

突如として全体が振動したかと思うと、プローブを構成しているパーツがまるで引き剥がされるように次々と分解され、ビス一本に至るまで完全に解体されてしまったのだ。

「どうです、わかって頂けましたか？ この分解の異様さが」
真田の問いかけにも全員が難しい顔をする。

「うーむ……破裂したというよりは——継ぎ目が外れた……としか形容できませんね。溶接箇所はもちろん、ビス止めされた部分までもが徹底的に」

進の言葉に真田は頷いた。

「そうだ。もう一度見てほしい」

今度はスロー再生された映像が流れる。

スローにされるとなおさら異質さが際立つ。艦橋測距儀の光学カメラはその光景を鮮明に記録していたのだ。

プローブ全体が細かく振動したかと思うと、プローブを構成していたであろう細かな部品が急激に振動して次々と分解されていく。

それでいて、天体観測レンズのような部品は脱落の際の応力で割れたことが確認されるが、割れたあとのレンズがさらに分解されることはなかった。

ほかの金属部品も、過度に分解されずパーツの原型を保ったまま散らばっていく。

「……マグネトロンウェーブと思われれます」

真田が発した単語に全員が首を捻る。聞き慣れない単語だから無理もない。

「推論を含むところはありますが、大雑把に言ってしまうえば範囲内に入ったある種の金属を滅茶苦茶に揺さぶることで解体する作用を持つ……程度に考えて戴ければよいと思われれます。そしてそれはヤマトはもちろん、宇宙戦艦などに使用される金属に合わせて調整されているようです。——そしてこのマグネトロンウェーブは、あの物体から放出されていると見て間違いないでしょう」

真田の説明に一同さらに首を捻る。なんとなく言いたいことはわかるような気がするが、果たしてそんなことが本当に可能なのだろうか、疑問に思っているのだろう。

「原理上、ミサイルによる破壊は不可能です。届く前にミサイルが解体されてしまうだけでしよう。そして、安全圏から砲撃可能な主砲と副砲は修理が完了していません——もちろん、波動砲も駄目です」

「艦長、あれからヤマトの航路を右方向に一〇〇キロほどずらしてみました、追尾してきています。こちらとの距離も徐々に詰めて来ているのが確認されますが、現在のヤマトの速力なら十分に引き離せるでしょう」

大介の報告にユリカが頷く。主砲——いや副砲でも健在なら、距離を取って粉碎してやれるのだが——現状では不可能だ。

ヤマトが取れる対抗手段で最も適切なのは、影響圏内に入らないことだろう。

「そのマグネトロンウェーブは、デイストーションフィールドで防げないんですか？ 防げるんなら、機体の修理完了後にサテライトキャノンで吹き飛ばせばいいと思うんですけど……」

アキトの控えめな発言に真田は頷いた。

「理論上は可能だが、発生機がマグネトロンウェーブの影響圏内にあると発生機が変調してフィールドの維持ができなくなる可能性が高い。当然だが、あの物体との距離が近づいて受ける影響が強くなればなるほど、それは顕著になる。とは言え、ヤマトの発生機はまだ大丈夫だな……。ダブルエックスはまだあちこち分解されてしまっているが、急いで一発確実に撃てる程度に仕上げてから波動砲口にでも陣取ってもらって——」

そこからサテライトキャノンで撃ってもらおう、と続けようとした真田の言葉を非常警報が遮った。

「前方の不明物体からミサイルが発射された！ 迎撃するぞ！」

第一艦橋からゴートの緊迫した声が届く。ユリカもその判断を尊重して迎撃作業を一任したが——まさかこれすら畏だったとは、さすがの真田も気付くことはできなかった。

ヤマト目掛けてこん棒のような形をした物体——ミサイルが一二基、高速で接近してくる。

高速で接近するミサイルに向かって、ゴートは艦首ミサイル発射管からミサイルを放った。

主砲も副砲も使えない現状では、遠方で迎撃するにはこれしかない。

しかし敵ミサイルはこちらが放った迎撃ミサイルを避けるかのように分散した。棘の部分が本体から分離して、回り込むようにヤマトに向かって突き進んでくる。

ヤマトを上下左右に包み込むようにして接近する子弹に向かって、自動制御のパルスブラストで応戦。砲塔要員の配置を待つ猶予はな

い。

レーダーで捕捉した子弹に向かって、稼働してはいても修理と調整がまだ万全ではないパルスブラストが断続的に重力波を吐き出す。命中精度はいつもよりも格段に低く頼りない。

ジョンが展開を制御した、こちらも修理未了のデイストーションフィールドで撃ち漏らしたミサイルを受け止め、ヤマトに被害が出ないように懸命に対応を続ける。

二人の必死の努力もあって、ミサイルはすべて撃ち落とされるかフィールドで防ぐことができたのだが——様子がおかしい。

あまりにも威力が低いのだ。フィールドにもほとんど負荷が掛からず、それでいて弾頭が爆発するとなにやら粉末のような物質を周囲にばら撒いている。

これは……ゴートは直観的に察した。

このミサイルはヤマトへの攻撃が目的ではない。この物質でヤマトを包み込むことが目的だったのだと。

異変はすぐに起こった。

ヤマトのコンピュータが強力な磁場による干渉を受けて狂い始めたのだ。

その影響を真っ先に受けたのはレーダーやデイストーションフィールドなど、比較的艦の外部に近い装置。

瞬く間に制御装置にエラーが頻発、外壁に耐磁コーティングされている第三艦橋ですらECIにエラーが発生して、その機能に著しい障害を抱えてしまうのであった……。

「強磁性フェライト……ですか？」

ゲールの問いにドメルは「そうだ」と短く応えた。

ゲールも見ているモニターには、ヤマトを迎えるべくビーメラ星系に設置した宇宙要塞の図面が表示されている。

このマグネトロンウェーブ発生装置は、廃棄された宇宙戦艦などの

人工物を解体することを目的として開発された処理施設だ。もちろん今回のような作戦に導入するには少々性能不足。そのままではヤマトに通用しないだろう」

「しかし」とドメルは続ける。

「この強磁性フェライトで対象を包み込むことで、マグネトロンウェーブの影響を増幅し、別途照射する磁力線で捉えることで逃走を許さず、ヤマトの反抗そのものを奪うという三段構えの効果が期待できる」

ドメルの説明にゲールも唸る。処理施設をこのようなトラップとして活用することは、彼には思いつかなかったのだろう。

ドメルが言うとおり、この装置はガミラスの『民間企業』が開発した宇宙船の処理設備をバラン星に回して貰ったものだ。

前線基地ともなれば、損傷して修復困難になった艦艇も出てくるし、手っ取り早く資源にできれば、その分軽症な艦艇のためにもなる。中間補給基地も兼ねるバラン星では意外と重宝する装置である。

移民後不要になる移民船を資源にするうえでも、大いに役立つことだろうとの触れ込みでプレゼンテーションされていたらしい。

最初こそ効果を疑問視されたものの、実際にはかなりの威力を発揮した。人やアンドロイドや作業機械でちまちま解体するよりも早くて楽、遠隔操作で停止できるので誤解体の危険性も小さく、単独移動可能と、これからガミラスが宇宙にさらに拠点を広げていくうえで、頼れる宇宙の解体屋になるのでは、と期待されてはいた代物だ。

ゲールが思っているように、このような運用は想定外も甚だしい。「しかしドメル司令、それでもヤマトに通用するのでしょうか？ あの艦は――」

「わかっているさ、ゲール。それに通用しなかったとしても構わんだ。ビーメラ星と撃破したあれの資材で補給を済ませようとすれば、その分時間をロスする。その間にバラン星基地を隠蔽してヤマトの目から逃れ、攻撃を回避するのが目的だ。時間の限られた旅ゆえ、星を一つ一つ入念に調査する余裕などないだろう。腹が膨れているのならなおさらだ。必要な行動とは言え、時間的損失が生み出す焦り

も加われれば隠蔽は上手くいくはずだ……ヤマトを早急に討ちたい君の気持ちはわかる。だが、このバランス星基地だけは護り抜かねばならぬのだ。堪えてくれ」

ドメルが示した対応は、ゲールにも理解できるものだった。

バランス星近隣ではヤマトと戦わない。万が一にもバランス星前線基地を破壊されてしまえば、併設されている『民間居住施設』にも被害が及ぶ。

——それだけは軍人として避けねばならない。ゲールとしてその程度の認識はある。

すべてはガミラス帝国——デスラー総統のかけがえない財産なのだから。

問題は、ヤマトがこのバランス星を都合よく素通りしてくれるかどうかにかかっている。万が一発見されたりしたら……後願の憂いを立つため、そしてなにより地球を守るため、ヤマトはタキオン波動収束砲を撃ち込んでこの基地を壊滅させるだろう。

——願わくば、そのような事態は確実に回避したいものだが……怨敵ガミラスの基地を、見す見す見逃してくれるだろうか……。

第十七話 浮かぶ要塞島！ ヤマト補給大作戦！ Bパート

ヤマトは未知の物質で包み込まれて身動きができなくなっていた。「くそっ！ 強磁性フェライトでヤマトを包み込むとは……っ！

フェライトでマグネトロンウェーブの作用を強くしつつ電子機器を狂わせ、磁力線で捉えて逃がさないつもりか……！」

語調も荒く真田が吠える。どうにもマグネトロンウェーブによる探査プローブの破壊を見てから穏やかではない。

いまでも悔しそうに中央作戦室の壁を殴っている。だが気持ちはわからないでもない。

これではサテライトキャノンで遠距離から破壊することもできない。マグネトロンウェーブの影響下であんな反動の強い砲を撃てば、瞬く間に解体されてダブルエックスは破壊されてしまうだろうし、それ以前にチャージ中の負荷にも耐えられない可能性が高い。

それをカバーするためにヤマトのフィールドで保護して、直接ケーブルを引っ張るなどの措置で強引に発砲させる予定だったのが、強磁性フェライトですべて流れた。

ボソソジャンプで影響圏に離脱して狙撃するには、修理を完了した万全の状態でなければならぬ。が、完全修理を待っている間にヤマトはバラバラになってしまう。

それどころか、ヤマトは右も左もわからない状況に置かれてしまったので、物体から距離を置こうにもどつちに進んでいいのか、まったくわからなくなってしまった。

おまけに強磁性フェライトに向けて照射された磁力線によって拘束されたいま、嫌でもあの物体に引き寄せられているはずだと、真田は推測している。

こうなると、時間稼ぎすら満足にできはしない。

「真田さん、イネスさん、この状況を打開するにはどうすればいいと思いますか？」

真田が激昂している理由がトラウマだと見当をつけたユリカは、そこには触れずに知恵だけを求めた。

「そうね……この状況で強磁性フェライトを除去するのは難しいわ……二重三重にフィールドの発生が阻害されていては……。このままだと、ヤマトを解体できる距離まで接近されて一巻の終わりね。……最も確実に手早い手段は、あの要塞を無力化、つまりマグネトロノウェーブを停止してヤマトの解体を防ぐことだけと考えていいわ」「急がないと取り返しがつかなくなる。この瞬間にもヤマトへの影響を計算してマグネトロノウェーブの調整を行っている可能性がある。これ以上状況が悪くなる前に、なんとかしなければならぬ」

イネスも真田も深刻そうな表情を崩さない。いまこの瞬間もヤマトは解体待ちの廃品同然の状態なのだ。気が気でないのも当たり前である。

——あるのだが。

「——あの物体を解体したら、不足してる鋼材関連の補充ができるよねえ」

と、つつい余計なことを呟いてしまった。たった一言、されど一言。それだけで事態が一転した。

「そうだな……ヤマトの鋼材関連はいつでも火の車状態だしなあ……あの物体、ヤマトよりもかいんだ……つーことは、だ。かなりの量の鋼材の補充ができるし、もしかしたら貴重なコスモナイトだって……！」

ウリバタケも乗り気になってしまった。おやこれは——。

「となったら、意地でもあの物体を解体して資源にしないと……いやそれだけじゃない。あれの後ろには緑豊かなビームラ4……生野菜として食べられる食料も合わせれば、ヤマトの備蓄が一気に改善される……！ これは天の恵みだ!!」

あれ、進も流されてきちゃった。

なんか二人の間で一気にあの物体が『ヤマトを解体しようとしている脅威』から、『ちよつと反抗的だがヤマトが必要としている補給物資の塊』に変換されてしまったらしい。

「……おいおい……っ！」

気が気ではない様子の真田の声も届かず、すっかり空気が変わってしまっていた。

傍らにいたイネスも気遣わしげではあるが、諦めてと言わんばかりに苦笑している。

「真田さん、あのマグネトロンウェーブの影響圏ってどの程度に及ぶと思いますか？」

「——そうですね、おそらくヤマトを破壊する威力を發揮できるのは、探査プローブが破壊された五〇〇〇キロ以下だと思っています。ただ、強磁性フェライトをこの距離でヤマトに使ったことから考えると、磁力線そのものはこの距離でも届くものだと考えて間違いないでしょうが……」

努めて冷静に答える真田にユリカは腕組して考える。

それ自体は自然な動作なのに、ウサギユリカ・はいばあくふおくむの格好では威厳もへったくれもないな、と自分で思った。

「……」

手っ取り早く改造できて、無理なくさまざまなアシスト機構を仕込めると用意したのは自分たちだが、やっぱり止めておけばよかったかもしれないと内心後悔する真田。

緊張感帰って来い。欲しいのはシリアルではなくシリアスだ。

「うくん。データ不足だから断言不能だけど、あの物体がボソソジャンプ対策までしてないんだったら、ジャンプで接近できるね。向こうにはA級ジャンパーは居なくて、座標入力は全部機械入力だったって聞いているから、このコンディションなら入力も妨害できてるって勘違いしてくれる可能性もあるし」

「だったら、あの物体に直接取り付くまで行かなくても、近くにジャンプアウトしてから宇宙遊泳で取り付いて進入するってのもありじゃないか？ そうすれば、あの物体を鹵獲しているいろいろ解析もできるし資材も手に入る」

凄く乗り気なアキトも意見を出し始めた。

「だとすると、ヤマト内部のジャミングシステムをオフラインにしないといけないわ。貴重な補給資源を見逃すなんてありえない！」

エリナも乗り気だ。常識人だと思っていたのに。

「真田さん、あの物体がマグネトロンウェーブの影響を受けることは絶対にはないのですか？」

進が真田に問い合わせてくる。正直データ不足で断言できないのだが……。

「断定はできませんが、マグネトロンウェーブの影響を回避する手段はいくつかある。まずは継ぎ目のないシームレス構造を採用することだ。変動磁場を使って振動させているにしても、一体構造なら構造体全体が振動するだけで破壊されることはないからな。ほかにもマグネトロンウェーブの影響を受けない非磁性の素材で造るというのもあるし、対象を選べるのなら対象外、または影響が少ない素材を使うとか。あとはそうだな……発振装置が外部にあつて、影響を受ける外層だけシームレス構造を採用して、なんらかの手段で遮蔽して影響を受けない内部は普通に組み上げる——とかが考えられるな。だが、直接調査してみないことにはなんとも……」

「だったら直接乗り込んで調べればいいんですね？」

ドアのほうから聞こえた声に驚き振り返る。

そこに立っていたのは艦内服をばっちり着込んだ療養中のルリの姿だった。右手には飲み干したばかりのドリンク剤の空き瓶が握られている。

——ドーピングしているのが丸分かり、実にレアな姿だと場違いな感想が頭を過る。

「話はオモイカネが聞かせてくれました。いまこそ私の出番だと思えます。ハーリー君のアシストもあれば、いままで研究を続けてきたガミラスのコンピューター……見事に掌握してご覧にいきます」

ラピスの名前を出さないあたり、IFSを忌避している彼女の心情を重んじるルリのやさしさが垣間見える。

「だったら私も同行します。こんな状況下では意地なんて張っていません。三人が掛かりで徹底的にやったほうが、確実です」

なにやら迷いを振り切ったらしいラピスも挙手して宣言。全力を挙げてあの物体を解体し、資源に還元してみせましょうという意気込みが、全身から発せられていた。

たしか、ハリとラピスもジャンパー処置は受けているのでジャンプには耐えられるはずだ。同行には問題ないが、強いて言えば敵地潜入の経験が皆無で戦力にはまったくならないことが問題か。

「おっとルリルリにラピスちゃんにハリー。クラツキングのための機材は現地で調整必須だろう?——ここは、この俺ウリバタケ・セイヤも同行して現地で端末の調整をば——」

「セイヤさんはジャンプに耐えられないでしょ?」

ウリバタケの参加表明はアキトに防がれた。

「む、無念……!」と撃沈されたウリバタケを尻目に、資源うんぬんはともかくあの物体をどうにかしたい真田もついに名乗りを上げた。

「俺が同行しよう。ヤマト再建時、ドックと外を自由に行き来したくてジャンパー処置は受けてるんだ。俺なら同行できる」

「だとするとお……運搬役がアキト、万が一の護衛役とか労働力として進と月臣さん、解析担当にルリちゃんとハリー君とラピスちゃん、システムエンジンニアとして真田さん——」

「私も同行させてもらおうわ。アキト君とセットで行けば、いざというときの補完もしやすいわよ」

珍しくイネスが声を上げた。最近は艦内での発明はともかく、艦外作業をしてまで解析担当を務めることはほとんどなかったのだが……。

「あら? 私だつて技術者の端くれよ。ウリバタケさんが駄目な以上、私が行かなくて誰が行くというのよ」

自信たっぷり宣言するイネスの姿にこれは止められないと確信を得た。

うゝむ……。

そして、除け者になったウリバタケが床に『のの字』を書いて拗ねていた。

大人げない。

話が纏まったとなれば行動するのみ。

ユリカは物体攻略部隊として編制した進、アキト、月臣、ルリ、ラピス、ハリ、真田、イネスに合わせ、「ルリさんとハーリーが行くなら俺が行かない」と名乗りを上げたサブロウタを含めた計九名が一緒に作戦を煮詰める。

「そもそもあの物体って攻撃用の要塞とは思えないんだよね。どう考えても宇宙戦艦の解体用っていうか、処理施設の一部みたいって言うか——」

「ありえますね。もしかしたらいまヤマトを包んでる強磁性フェライトも、本来攻撃用ではないマグネトロノウェーブを攻撃用途で使おうとした、苦肉の策なのかもしれません」

呼び出された雪がいままでに得られたデータから推測を加えてくれた。

コンピュータが全部沈黙してしまったわけではないので、反応の悪いコンソールを操りながらデータを表示し、あとは自前の頭脳でどうにかできるだろう。

「プロローブが解体される直前までに送られてきた映像データからも、あれが要塞の類とは考え難いと思います。このフェライトを封入したミサイルもあの物体の周囲に浮遊していて、物体に備え付けられていたわけではありません。最初から軍事用に開発されていたのなら、本体に発射管の類があってもいいものです。それがないということとは別の用途で造られた装置を強引に兵器転用した可能性があります」と、ルリが雪の説明に捕捉する形で推論を述べる。

「私もそう思う。たぶんいまヤマトに仕掛けてくるとしたら次元断層で戦った指揮官だろうし、あんな凄腕の指揮官がこんなヘンテコな手段に期待するとは考え難いよ——たぶん嫌がらせかヤマトの足止めが目的で、撃破は考えてないよ」

ユリカはもふもふの腕を組んで思索する。あの凄腕の指揮官がこんな奇抜なアイデアを駆使してヤマトと戦うとは正直考え難い。

これは絶対に足止めが目的だ。おそらく解体されて資源になるこ

とすら想定されているはず。

——となれば。

「ということは、ガミラスはヤマトが航路変更してこのビーメラ4で補給するって読んでたってことになるな。……あの赤色巨星の罫を考えるとそうだろうとは思ってたけど、やっぱりガミラスはこの周辺の宙域にも精通していると考えたほうがよさそうだ」

隣のアキトもいままで得られた情報からそう推測——したように見せかけた意見を述べた。

裏事情を知らないメンツにも違和感なく、もつともらしく聞こえるだろう。

しかしユリカと共犯者はこの宙域をガミラスが知っている可能性は最初から考えの内だ。

このビーメラはバラン星からほど近い位置にある恒星系。ガミラスがイスカンダルと同じ大マゼランに含まれている以上、地球との中間点であるバラン星には——。

(必ず大規模な基地がある)

もう確定だ。疑う余地はない。

(……なにか企んでるのは間違いないけど……それがヤマトにどう作用するのかがまったく読めない。ガミラスの事情からすれば、トランジッション波動砲は喉から手が出るほど欲しいとは思うけど……だからヤマトを極力万全の状態にしておきたい?)

いまガミラスが置かれている状況——カスケードブラックホールによる母星消滅の危機。それを乗り越えるには、カスケードブラックホールの破壊が理論上可能と思われる波動砲が不可欠。

——ヤマトはそれを六連射で備えている。

カスケードブラックホールの破壊を抜きにしても、ガミラスが戦争によって版図を広げようとするのであれば、波動砲の破壊力は魅力的なはず。

そういう意味では、(相当)運よくヤマトを仕留められたとしても、解体に留められ、比較的原形を留めたまま回収可能なマグネトロンウェーブによる破壊を目論むのは、わからないでもない。

だとしてもあまりにも脅威として小さ過ぎる。これだったら以前の機雷網をもう一度敷いたほうがよほど確実だろうに。

——とすれば、これを置いた指揮官はヤマトの撃滅をできるだけ先延ばしにしようとしていることになる。

おおかた「失敗前提。むしろ突破させることでわざと補給の機会を与え、時間を使わせるのが目的」とかうそぶいて部下を納得させつつ、本命はヤマトが万全の状態を保てるように一計を案じたのだろう。——トランジツシオン波動砲を維持させるために。

——となれば、トランジツシオン波動砲を欲するあまりガミラス内部でもヤマトに対する方針が割れている、と考えるのは都合がよすぎるだろうか。

もしそれが事実なら、付け入るスキがあるかもしれない……。

「ふくむ。やはり、映像から見るかぎりではあの要塞はシームレス構造の外郭を持っているな。それに外殻に開いているあの穴……おそろくあそこからマグネトロンウェーブを照射していると見て、間違いないでしょう」

「そうね。内部構造がどうなっているのかはこれじゃわからないけど、本体がシームレス構造だとするなら、あの穴の中にメンテナンス用の通路の類が設置されている可能性があるわ。マグネトロンウェーブの発生装置がどの部分にあるのかはわからないけれど……内部までシームレス構造ないし防磁処理がされていないのなら、発射口のすぐ奥ね。されているのなら物体の深部ってこともありえるけど……情報が少な過ぎて確定できないのがもどかしいわ。アキト君と古代君が収集した冥王星基地の内部構造も、あまり参考になりそうにないわね」

こっちは真田とイネスが仲よく物体の分析を続けている。

持ち前の知識を総動員してあの物体の構造を可能な限り推測して、少しでも突入作戦のプランを綿密にしよう和努力を重ねている様子だが、ユリカには似合いのカップルのように映った。

「こちらウリバタケ。突入部隊運搬用に、非磁性素材をメインで使ったシームレス輸送機の制作は八〇パーセント完了だ。と言っても、非

磁性素材とシームレス構造のせいで必要最低限以下程度の性能しかないけどな。計器も推進装置も簡素なものだから、情報の信頼性が一段と劣るし、速度も持久力も足りねえ。マグネトロンウェーブの影響のことを考えると、一気にジャンプで接近するのも心配だから、一度艦外に出たあとはスラストで接近してくれ。ただし、航続距離の關係で帰りはジャンプ頼みになるから確実にあいつを沈黙させてくれよな。あと、防磁性を強化した宇宙服も用意が間に合うぞ。普段のよりも感じが違うから注意してくれよな」

ウリバタケは作業の手を休めることなく進展の報告をくれた。

いま工場区で開発しているのは急場凌ぎのシームレス輸送機。

マグネトロンウェーブで影響を受けにくいと思われる非磁性の素材や、磁場の影響が小さいと考えられる軽合金にエステバリスの構造材にも使われていたセラミックや強化樹脂を使用して、なんとか輸送機の形にでっちあげた代物だ。

外殻はシームレス構造の合金製だが、それ以外の部品はさきに挙げた素材でなんとか形にしている程度。ジャンプフィールド発生装置は二回使えるだけのバッテリーが接続され、防磁素材で嚴重に梱包されている。

一応影響が小さいと目される素材で造られているから大丈夫だとは思いますが、心配の種は尽きない。

だが、マグネトロンウェーブに分解されないこと、ヤマトがバラバラにされる前に対応することという制約があるため、これ以上は望めない。

ウリバタケも簡素の中にもキラリと光る職人魂を詰め込み、想定される状況下で一〇〇パーセントの動作を保証される出来栄えにすべく腕を振るってくれている。

「ありがとうウリバタケさん。マグネトロンウェーブの影響を考えると、持ち込む道具も選ばないといけないわね……コミュニケーションやパソコンは大丈夫かしら？」

「宇宙戦艦の構造材に対して特効になるように調整されているのなら、その程度の物は大丈夫だと思います。念のため、武器ともども非

磁性トランクに嚴重に梱包して持ち込みましょう」

「実包を使う銃器があれば、動作だけは保証されるんだけどなあ」

真田の言葉にアキトがぼやく。

ヤマトではクルー全員に配られたレーザー銃・コスモガンを中心に、レーザーアサルトライフルやコスモ手榴弾が用意されている。が、実包を使用する古きよき銃器はあまり用意されていない。

ヤマトの場合、白兵戦があるとしたら艦内に侵入を許した場合の防衛戦、または敵施設内に進入しての破壊工作が想定されている。

宇宙戦艦や宇宙要塞の場合、外も中も金属素材をメインにした構造体であることが多いと考えられ、跳弾の危険が高い実体弾を使用した銃器は自損の危険が高いと判断され、ヤマトのデータベースから回収されたレーザー銃を正式化した経緯がある。

ほかに、民間出身のクルーでも反動が少なくて使いやすく、ガミラスの科学力で造られるであろう防弾装備に通用するとしたら、並行宇宙でヤマトのクルーが白兵戦で存分に使った実績があるコスモガンなら間違いはないだろう、と言った理由もあった（外見は新調されたが中身はコピーに近い）。

「さすがにグレネードは持ち込めないな。密閉空間での影響もそうだが、マグネترونウェアの影響で信管が誤作動したら自爆するだけだし、下手に壊して止められなくなったらまずい」

「だとすると、レーザーアサルトライフルとコスモガンか。アサルトライフルは分解してコスモガンと一緒に梱包しましょう。あとは、どちらもダメなときに備えた装備をいくつか用意しないと……」

「そうだな……ナイフや警棒の類も持って行こう。俺も木連式の武術をいくつか修めている。敵の兵士がいるとすれば、それは俺が打ちのめそう」

サブロウタと進と月臣が持ち込む武器について議論を重ねている。そちらに関してはユリカの専門外。任せるしかない。

「ラピスさん。パソコンが持ち込めるにしても、ヤマトとの連絡が絶たれた状況だとオモイカネのサポートも受けられません。マグネترونウェアの影響を考えると持ち込める機材にも限りがあります。

どういった物を持ち込みましょうか?」

「そうですね……あまり欲張つても仕方ありません。最初はマグネットロンウェーブの停止に注力してヤマトの解体を阻止しましょう。そのあとでオモイカネの力を借りて完全制圧するのがベターだと思います。——あまり褒められたことではありませんが、アキトと一緒に火星の後継者相手に工作した経験もありますから、ルリ姉さんとハーリーさんとオモイカネがいままで積み立ててきた対ガミラス・ハツキングデバイスがあれば、対応できると思います」

こちらも顔を突き合わせて、物体攻略のために不可欠なコンピューターの制圧手段の計画を煮詰めていた。

「今回の作戦は敵施設への侵入ですし、経験の多いアキトさんにリーダーを担当して貰ったほうがいいでしょうか?」

「ううん。アキトはたしかに経験値が多いけど、今回はあの物体の無力化が最優先だから真田さんがリーダーのほうがいいと思う。単純に火力で破壊することが難しい状況だから、やっぱり専門知識のある人の知恵を借りて堅実に解体していくしかないと思うよ」

ユリカは今回のリーダーに適しているのは真田と言い切り、彼をリーダーに指名した。

一番機械に対する理解力と解析能力が高く、多少羽目を外したり激昂することもあるが、感情のコントロールに優れる人柄を鑑みてのことだ。

「そう言うことでしたら、今回の突入部隊の指揮官を拝命いたします」
「サポートはぼつちり任せてね。なに、私たちが一丸となって掛ればあんな物体すぐに資材に早変わりさせてみせるわ!」

イネスの言葉に全員が頷く。

ガミラスがなにを企もうがどんな罠を仕掛けてこようが、ヤマトはすべてを打ち破つてイスカandalに行く!

「それではこれより! マグネットロンウェーブ発生装置解体を兼ねたヤマト補給大作戦を開始します!」

選ばれた九名の特別工作隊が出来たてはやほやのシームレス輸送機に乗り込み、ボソソジャンプ対策をカットしてからアキトのナビ

ゲートでボソンジャンプ。

工場区からその姿を消したのであった。
すべては……資材を得るために！

そしてヤマトの艦外にボソニアウトしたシームレス輸送機は、ヤマトと物体の現在位置をざっとではあるが確認していた。

「ふむ、現在地はヤマトから推定二キロ、物体との距離は推定一万と四〇〇〇キロか……いかな、このペースだとあと四時間ほどでヤマトはマグネトロンウェーブの影響をもちに受け始めるぞ」

「そうね。発進前の検査でも主砲や副砲を始め、損傷個所で振動が見られるようになってたし、あんまり悠長に構えてると補給の前にヤマトの修理作業が長引くことになるわね」

もうすつかり資源獲得作戦に変貌していることがその言葉からも伺える。

普通ならヤマトが解体されてしまう事が最も気掛かりであるはずなのに、ヤマトの修理作業の延長による時間的損失にしか目に入っていない。

あの物体が本質的には単なる解体用機材で、攻撃用要塞ではないと見抜いたがゆえのことではあるが……。

「シームレス輸送機で接近するのに約一時間、となると、作業時間は三時間ほどを目安にしないといけないな。スラスターを噴射、物体への接近を開始するぞ」

操縦桿を預かるサブロウタが簡素なレバーを引くと、後部に据えられた二つのスラスターが点火、物体に向けて加速を始める。

その姿は本当に簡素なもので、艦内工場能力をフル活用した一体成型のボディは、以前のヤマトで散々活躍した救命艇に近い代物であった（いまのヤマトの救命艇は形状が異なっている）。ただ、ティルトウイングタイプではなく、後部に取り付けられたボンベのような形の推進器で飛行する。

そのため第一印象は『ティッシュ箱』であった。

「時間なかったんだから文句言うな。性能は保証する」

とは、その姿に突っ込んだアキトに対するウリバタケの反論であった。

ともかく、シームレス輸送機は徐々に速度を上げてマグネトロンウェーブを発する物体に接近していく。

念のために持ち込んだ機材のチェックも継続しながら、各々これらの作業に備えた。

しばらくして、シームレス輸送機はマグネトロンウェーブの影響をもちに受け始めるであろう物体との距離五〇〇〇キロの地点に達した。

シームレス輸送機は全体が振動に見舞われたが、持ちこたえている。突貫工事で不安が残っていたが、対応できているようだった。

ホツと胸を撫で下ろしていると、窓の外に解体されたプローブの残骸が漂っているのが見えた。

ビスの一本に至るまで解体されているようで、細かな部品と成り果てている。

それは自分たちが失敗したときのヤマトの末路だと思つと、緊張を煽られてソワソワした気持ちになった。

……真田はプローブの残骸を辛そうに見ていた。傍目にも、嫌な記憶とダブらせてみているのが伺える。

「真田さん……どうしたんですか？」

隣に座っていた進が意を決して尋ねると、真田は渋い顔で「少しな……」とだけ答えて黙り込んでしまう。

あまり話したくない話題だということとは確定した。事情を知っているであろうイネスは心配げな表情だが、承諾も得ず口に出すつもりはないようだった。

しかし、口にしてしまった方が楽になると考えたからか、真田はぽつりとぽつりと話し始めた。

あまり思い出したくはない、しかし決して忘れられない、過去の惨劇を。

「――俺はな……子供の頃は絵が好きだな。大きくなつたら画家になりたいと思っていたんだ……だが、一五年ほど前に遊園地で事故に

遭って、そこから人生が一変したんだ」

真田が語ったのは一五年ほど前に地球の遊園地であった痛ましい事故だった。

その遊園地では、機械トラブルによるジェットコースターの事故が発生、なんと乗客を乗せた小型のコースターが宙に飛び出し、乗っていた子供二人が宙に放り出される痛ましい事件が発生したのだ。

その乗っていた子供二人と言うのが、幼き日の真田志郎とその姉だったのだ。

「俺はそのとき姉を亡くした。あの時、コースターに乗りたい乗りたいとわがままを言ったのは俺でな……姉は地面に叩きつけられるその瞬間まで、俺の手を握ってくれていたのをいまでも鮮明に思い出す。……あのバラバラになったプロローブを見たとき、地面に叩きつけられたコースターの残骸と、その傍らで亡くなった姉の姿がフラッシュバックしたんだ……」

真田の告白に、事前に知っていた様子のイネスも沈痛な面持ちになる。

肉親の死。

これ以上に生々しく思える『死』はない。

両親の理不尽な死を見たアキトも、つい最近守を亡くした進も、真田に共感して薄っすらと涙が浮かんでくる。

「酷いものだったよ……姉は俺の自慢だった。綺麗で明るくて優しくて——そうだな、そういう意味では艦長に近い人なりだったかもしれない。もし俺が、あのときわがままを言わなければ、もしも、あのコースターが事故を起こさなかったら——いまでもそう思うことがあるよ」

真田は自身の両腕と両足を見つめると、不意に進に問うた。

「なあ古代。俺の手足をどう思う？」

「え？ どうって言われても……普通じゃないんですか？」

普段の真田の姿を思い出しながら進は応える。なぜなにナデシコのキャラクターイベントで共演したときに互いの肩を抱き合ったりしたが、特別違和感は——。

「この手足は作り物なんだよ。あの事故は、姉の命だけじゃない、俺の手足も奪っていったんだ」

真田の告白に、やはり知っていたイネスらしい以外の全員が驚く。普段の挙動に、作り物の手足を思わせるような仕草はない。それに、あれほど精巧な工作作業もしているというのに――。

「俺の両親は技術者でな。特に俺みたいに四肢を欠損した人が苦もなく日常を過ごせるようにと、安価で精巧な義肢を作ることに情熱を燃やしているんだ。俺の手足も、もともとは両親が設計した物だ。おかげで日常生活においては不便さは感じないし、みんなも見ているように精密作業もこなせる。むしろ生身だった頃よりも器用になったくらいさ」

自嘲気味ではあつたが、言葉の端々に両親に対するたしかかな敬意と感謝が感じられる。

「この一件以来、俺は科学畑の道を進むことに決めたんだけ。――科学とは、人の幸せのために生み出されたものはずだ。生活を豊かにし、より高みを目指すためにこそあるはずだ。……だが、現実はどうだ！ 姉の命や俺の手足を奪ったような事故は枚挙がない！ それどころか科学に心奪われ外道に走る人間の、なんと多いことか！ 俺は、科学とは人のためにあり、人は科学に勝るものだということを証明するために――科学を屈服させ、人の幸せを侵さないようにしたいと願って、科学者になったんだ！」

握り締められた拳に、真田の決意の固さが伺える。

「――屈服、ですか」

真田の告白を聞いた、ルリはぽつりと呟く。

ああ、と進は理解した。

コンピュータを友達として成長したと聞くルリにとって、機械はとても身近な存在な存在であり――対等な関係だった。

その友人を貶められたような気がして、同情を差し引いても反発を覚えてしまったのだろうか。

「わかっているよ、ルリ君。君とオモイカネの関係はこの目で見させてもらった。君たちのような関係こそが、俺の目指すべき本当の答え

なのではないかと、ヤマトに乗ってから思うんだ」

さきほどまでの感情の荒ぶりを抑え、優しく真田は告げた。

「しかし人が科学を制すべきというのは——正しいのだといえども思う。科学で生まれたすべての機械が——オモイカネのように人と歩み寄れる存在ではないからね。それに……人が裏切らない限り、科学もまた人を裏切らないものだど、だれかの言葉を耳にしたこともある。俺は、誰もがそうあるようにするために科学を制し、同時に科学と接する人のあり方についても模索していきたいと考えている——そのきっかけは間違いなく、君たちの関係だ」

「真田さん……」

「つくづく、俺は君たちに救われたり道を示されているのかもしれないな……アキト君、実はいままで話していなかったんだが——君は俺の命の恩人なんだ」

「え？」

いきなりそんな事を言われたアキトが戸惑う。

「まだ艦長にも言えてはいないんだが、君たちがヨコスカで自爆寸前のジン・タイプを一機、なんとかしてくれただろ？ あのととき、俺もヨコスカにいたんだ。ナデシコが暴れていたジン・タイプと戦ってくれなかったら、君がボソソジャンプを使ってまであの機体を放り出してくれなかったら、俺はあそこで死んでいただろう」

思わぬ告白を聞かされ、あの場で自爆して果てようとしていた月臣がぎくりと硬直する。

まさか自分が殺しかけた民間人の中に、いまヤマトを支えている科学者がいようとは——。

居心地が——悪い。

「だからこそ、君たちの訃報を新聞で見た時には悲しかったし、プロスペクターさんを通してヤマトの再建計画に誘われて、真実を——君が五感に障害を抱えて復讐鬼となり、艦長がボソソジャンプの制御装置にされたと聞かされたときには、腸が煮えくり返る思いだったよ。俺

が最も唾棄すべき存在——科学に心奪われ人間性を失った連中の玩具にされたなんて……。だから俺は、命を救われた者として、科学者として……恩人の君たちに少しでも報いたいと思って、ヤマトの再建を手伝う覚悟を——兵器開発に携わり、俺が生み出した兵器で血を流す覚悟を決めたんだ」

「真田さん——そんなことがあったなんて、俺、知りませんでした」
「あまり語る必要を感じなかったのな。恩を着せたいわけでもないし、俺個人が納得していれば済む話だった。しかしな……再建したヤマトが君にも明日への希望を与え、ダブルエックスが君たちの再会の懸け橋になってくれたと知ったときは、感無量だったよ。どちらも俺が関わっていたからな……」

目を閉じた真田の脳裏に、ダブルエックスに乗ってヤマトの危機を救い、ユリカと痴話喧嘩を繰り広げたあと、医務室で感動の再会を果たした二人の姿が——そしてその姿を喜びも露に見ていたルリたちの姿が浮かぶ。

理不尽で愚かしい思惑で引き裂かれた恩人の幸せそうな姿に、筆舌し難い感動を味わったのは記憶に新しい。

「ほかにもヤマトにナデシコCから移動になったルリ君が乗ると聞いたときも、できる限りの時間を割いてオモイカネの搭載の調整や、I FS対応のインターフェイスを組み込んだり、要望に応じたハードウェアの改造もした」

「——どうりで、親切だと思いました」

まあ、第三艦橋のエレベーター問題は誤算だったが。と真田は冗談めかして告げたが、ルリは複雑な表情で黙ってしまった。

逆にいままで会話に加わっていなかったラピスが訪ねてきた。

「ということは、ユリカ姉さんの着ぐるみの改良を頼まれてもいないのによってくれたのって……」

「もちろん、艦長が少しでも楽になるようにと気遣ったんだ。幸いイネスさんの協力も仰げたから楽なものだったよ。俺も両親から義肢関係の技術は伝授してもらっているし、アイデアもいくつか使わせてもらっているんだ。あのパワードスーツ化も、両親が考えた半身不随

になってしまった人や、欠損はしていなくても麻痺などで体が自由に動かない人のために考案していた技術を使わせてもらっているんだ。形にするうえで、ウリバタケさんの協力も大きかったと付け加えさせてもらおうよ」

思いがけない事実にあキトもラピスも開いた口が塞がらない様子。立場が逆だったら、真田も似たようなリアクションを取っていたとは思う。

「正直な気持ちを言えば、どんな形であれ兵器開発に携わり血を流した以上、科学で人を幸せにするという願いに土を付けたという思いはあるんだ。だが、綺麗事だけ並べて眼の前の犠牲を見過ごすのは、耐えられない。俺の信念のためにも、たとえガミラスの血を流すことになったとしても……ヤマトの航海は成功させる。ヤマトを生み出したのも科学だ。科学者としての俺が手塩にかけて甦らせ、改良も重ねてきた。ヤマトの成功は、地球に残された人々の幸せに繋がるのは確実なんだ！——本音を言えば、ヤマトの力が侵略者とは言えガミラスに向けられ、多くの血を流す結果になっているのには、心苦しく思っている。だが、俺たちはあとには引けない。たとえ片方しか救えずとも、すべてを失うよりはずっとマシだ」

それは真田の本音だった。地球を追い込んだガミラスを恨まずにはいられない。だがそれでも、自身が開発した兵器でガミラス人が死んでいくというのは気分がよろしいものではない。

ガミラスとて人なのだと、あの冥王星基地の残存艦隊が教えてくれたのだ。

向かって来るのなら退ける。綺麗事で済まないのなら、降りかかる火の粉を払うことにためらいはない。

だが、戦いが終わったあとに感じるあの虚しさは——消すことができないでいた。

「それに詳細はわからないが——艦長の言葉を聞く限りでは、イスカンドルにはたしかに彼女の未来を拓くなにかがあるよう思えるんだ。俺の感が囁くんだが、もしかしたら艦長の命を救うのは医学ではなく、科学技術によるものかもしれない」

「医学では治せないって——でも治療と言ったら医学なんじゃ!？」
突然聞かされたルリが声を荒げるが、真田は極力冷静に推論を述べた。

「俺も医学にはそれほど詳しくないが、あそこまで破壊された体を元通りにすることは不可能だと思う。たとえば、クローン体のような新しい体を用意して脳髓を——もしくは記憶や人格と言った彼女を形作るパーソナルを移植して事態を解決する、ということもありえない話ではないし、その場合は医学と言うよりも科学が救うと言える。もしくは——」

アキトは背中を冷たくしていた。たぶん進とイネスも同じ心境だと思う。だって顔が微妙にこわばってるから。

真田の推論に肝が冷える。大体当たっているのがおそろしい。気に恐ろしきは天才科学者。

つーかおまえもう真相知ってるだろ!

そう叫びたくなったアキトである。

「すべては推論に過ぎない。真相はイスカンドルに辿り着き、向こうの人間か艦長が真相を語ってくれることを祈るしかない。だが俺は、あの人は自分の命と引き換えに地球を救って俺たちを置き去りにするようなのは考えていないと信じている。必ずイスカンドルになにかがある。あるからこそ、彼女は命を削ることを躊躇わなかったと、俺は信じているよ」

そう真田が締めるときで、目的の物体にだいぶ近づいたことをサブロウタが教えてくれた。

——彼が真実を知るのにはそう遠い話ではないのだが、真実を知ったときの反応が容易に予想できて……アキトは震えあがる。

「ん? どうやら着いたようだな。長話に付き合わせて悪かった。さあ! 接舷してあの物体の制圧に掛かろう! ヤマトが解体される前に終わらせないとない!」

吐き出すものを吐き出してすっきりした真田が音頭を取ると、真田の口から語られた出来事にショックを受けて意気消沈した一名を除いて、全員が元気に応えるのであった。

(月臣——過去って、消せないよな)

アキトは優しく彼の肩を叩いた。

月臣は、そっとアキトに応えた。

「すまん。今度、飯でも奢る……」

「ユリカ、マグネトロンウェーブの影響が強くなってきているみたいだ。修理中の装甲板の剥離が始まったよ」

強磁性フェライトの影響で計器類はあまり信用できないものの、工作班の面々が損傷箇所を中心に目視と艦内通話を使って艦橋に報告してくれているので、ヤマトの状況を知ることには不自由はなかった。

「うーん。まあ間に合うだろうけどこれ以上解体されるのもねえ。ヤマトお！ 気合で耐えてくれないかなあ！」

すでに周知となっているから語りかける事に躊躇がない。ほかのクルーには返事は聞こえなかったようだが、ユリカには返事が届いた。

「——がんばってみます！」
と。

頼もしい限りだが、ちよつぴり泣きが入ってた気がする。——トラウマでもあるのだろうか。

一方でマグネトロンウェーブ発生装置に取り付いた九名は、ワイヤーでシームレス輸送機を係留したあと、マグネトロンウェーブの発射口と思われる開口部から侵入を試みていた。

シームレス構造である以上、外部にメンテナンスハッチの類があるはずもないという考えから、多少の危険は覚悟で突撃を開始する。

「よかった。手を加えた宇宙服はマグネトロンウェーブの影響を退けられるよね」

「帰ったらウリバタケさんにお礼しないとですね」

イネスの安堵の声にハリも同意する。ウリバタケは同行こそできなかったが、たしかな仕事振りで突入部隊を支えてくれていた。

慎重に発射口と思われる開口部にその身を潜らせる。人が入るのに十分な大きさな穴ではあるが、九人も入るとなると手狭だった。

互いに装備を引っかけないように順序立てて慎重に進んでいく。奥行きは一五メートルほどと短く、直ぐに行き止まりに達してしまう。

真田とイネスは周囲を検分しながら少しの間歩き回り、互いに意見を交わして結論を出した。

「ふむ、どうやら発射装置よりも奥にはマグネトロンウェーブ自体が届かないようだ。案外指向性があるんだな。この奥の隔壁も、防磁コーティングされてはいるようだがじかに作用したら長くはもたんだろう。——よし、このまま最深部に侵入して、マグネトロンウェーブを内部に反転させられないかを試してみよう。上手くいけば、この物体自体を解体できるはずだ」

隔壁の傍にあった防護扉をハッキング（物理）して開放、内側に入る。

その先には予想どおり、メンテナンス用と思われる通路が伸びていた。その様相はケーブルが絡み合って作られたトンネルのような構造で、どのような意図と機能性を求めてを作り出したのか、進には理解できなかった。

戦闘担当の四人はトランクからコスモガンを取り出して構える。マグネトロンウェーブの影響は回避できたらしい。レーザーアサルトライフルも問題ない。スリングを肩に通して構える。

「行くぞ。このケーブルを辿っていけば、心臓部に辿り着けるはずだ」アキトと進が前衛を担当し、そのすぐ後ろの真田とイネスが道を示し、中衛にサブロウタ、サブロウタの近くにルリとラピスとハリ、後衛に月臣という陣形で、慎重に先を進んでいく。

通路は正直言つて狭く、人がすれ違うのがやっとといった具合で入り組んでいる。まるで迷路のようにあちこちに通路が伸び、真田とイネスが主要のケーブルを見極めて先導してくれなければ迷子確定であった。

冥王星でも使ったマーキングを残して退路を確保しつつ、九名は慎

重に通路を進んでいく。

不思議と防衛装置の類が見受けられず、一切の妨害を受けないまま進んでいくが、いかんせん構造が複雑で階層も分かれているので素早く移動できない。

人口重力が働いているので一行はケーブルでできた通路を歩かねばならず、病み上がりで体力が不足気味のルリは辛そうで、フォローが欠かせなかった。

——かなりの距離を歩いた。ときにはケーブルでできた壁面を這い上って階層を移動する必要もあり、苦労させられた。

途中、六〇センチ程度の赤い四つ足ガードロボットに遭遇して少々焦ったが、物陰に隠れてやり過ぎしたり、発見される前に破壊して切り抜ける。

案外脆くて助かった。

「もう五キロも歩いてるのか……真田さん、イネスさん、まだ中心部には着かないんですか？」

「もうすぐだ、古代。この物体は完全に無人で動いている、言わばこの物体自体が巨大なロボットのようなものだ。イネスさんとも結論が共通したが、どうやらこの通路も一種の電気回路のような構造をしているようだ。内部には作用していないが、おそらくこの物体全体がマグネトロンウェーブの発生装置になっているんだろう——そして、その構造を鑑みた上で俺とイネスさんが導き出したゴールが……ここだ！」

真田が示した部屋の中の様子は、それまでの通路とは一変していた。

円形の部屋の中央には、球形の巨大な電子頭脳と思しき物体があり、その四方からオレンジ色のケーブルを伸ばして床や壁、天井に繋がっている。

周囲には平らな床もあり、一目見てわかる、ここが心臓部であると。「……では、手早く無効化してしましましょう。ハリー君、ラピス、私たちの出番です。………さんさん歩かせてくれたお礼を、たっぷりとして差し上げますー！」

体力の限界を向けて呼吸が荒いルリの呼び掛けにハリもラピスもおびえた表情で頷く。

ルリの目は危ない光を湛え、ギラギラして見えた。

その姿は、進も怖かった。だから触れないでおこうと思う。誤爆されかねない。

「アクセスポイントを探すのは私たちに任せて、アキト君たちは周辺の警戒をよろしく」

イネスに言われて四人は技術者組を固めるように周囲を警戒する。あのガードロボットが大挙して襲い掛かってくるかもしれないので、備えを怠ることはできない。

真田とイネスはすぐにアクセスできそうな端末を発見、地球の物とはだいぶ規格が違うが、過去の解析データからでっち上げたコネクターを調整して接続、あとは真田たちのバックアップを受けたルリたち三人の仕事である。

携帯端末では全力を出すには少々物足りないスペックではあるが、ルリがハリや部下と一緒に構築したガミラス用のハッキングデバイスが出来栄えは見事だった。苦戦していたヤマト出航前とはうって変わって実にスムーズに掌握していった。

——そして案の定と言うべきか、警報システムが発動した。やはり完全回避はまだできなかったらしい。

真空の物体内では音は聞こえないが、あちこちで赤色灯火が点滅している。ガミラスも共通の警戒色らしい。いままでやり過ぎしてきたガードロボットが大集結。一挙に襲い掛かってくる。

上部のカバーが開いてレーザーガンを発射。施設の破損を気にしてか出力はやや低めだが、それでも命中すれば宇宙服の気密が危うい。

進たちはコスモガンとアサルトライフルを二挺持ちして応戦。ともかくにもルリたちの邪魔をさせるわけにはいかない。

入ってきた入り口はもちろん、各所のサービスハッチの類からも飛び出すガードロボットを、四人は代わる代わる立ち位置を入れ替えて応戦していく。

飛び交うレーザーを防ぐべく、真田とイネスが持ち込んでいたらしい個人携行用のディスプレイションフィールドを展開して持ちこたえる。内部にマグネトロンウェーブの影響があつたら使えない代物なのに、念には念をと持ってきた周到さに感心させられる。

とはいえバッテリーはそう長くは続かないし、応戦中の四人は無防備なままだ。

「そのお、急かすよで申し訳ないどき、早いとこ頼みますぜ！」
余裕がなくなってきたサブロウタが堪らず急かす。

月臣は宣言どおり、宇宙服を着ているとは思えない凄まじい体術を見せてつけてガードロボットを蹴り飛ばし、レーザーの火線を見切つて縦横無尽の大活躍。

サブロウタたちはそこまではいれないが、必要に駆られて蹴つたり撃つたりエネルギー切れの銃を投げついたりナイフや電磁警棒で応戦したり。必死で抵抗している。

だが多勢に無勢。溢れるように出て来る大量のガードロボットの群れと残骸に、埋もれてしまいそんな錯覚すら覚えるほど追い詰められていた。

「ルリさん、こっちは準備できましたー！」

「ルリ姉さん、こっちもいけます！」

「それじゃあ、ポチつといきましょう」

——掌握に成功したらしい。

ガードロボットがすべて沈黙して、騒々しかった中央制御室が静まり返った。

「ふう〜。クラッキングは久しぶりでしたけど、腕は鈍っていませんでしたね」

「私も久しぶりですけど、務まってよかったです」

「実にいい経験値でした」

三人は清々しい表情だった。

制圧までの時間は一五分。オモイカネの助けもなく、ガミラス製のコンピューター相手にこの程度の時間で済んだのだから、大金星だろう。

いままではそもそも掌握すらできなかつたのだから。

「やはりこの物体は無人で稼働していたようです。システムを掌握した以上、この物体はもうわれわれのものです。もちろん外部コントロールシステムもばっちりですよ」

ルリはとつても嬉しそうだった。ようやく彼女個人としてガミラスに一矢報いたと思っっていることは、表情から容易に察することができきる。

「よし！一度脱出してヤマトに戻ろう！外部からコントロールできのならば、わざわざ内側から壊す必要はない。この忌々しいジャンク製造機をジャンクに代えて、われわれの航海の足しにしようではないか！」

「さんせーい！」

と全員そろって挙手。

手早く帰り支度をしてガードロボットの残骸を踏み越え、心臓部をあとにする。

九人はまた足場の悪いケーブルのトンネルを進んでいく。

構造が判明したので工程が多少楽になったのが幸いだった。ついでに人口重力も切つてスイスイ泳ぐから早い早い。

疲れと心地よい達成感を感じながら、一行はシームレス輸送機に乗り込み、ボソソジャンプでヤマトの艦内に帰艦した。

格納庫でジャンプアウトしたシームレス輸送機の姿に、待ち構えていたクルーが歓声を上げ、ウサギユリカ・はいぱくふおくむも駆けつける。

そして一同を代表し、真田は報告するのであった。

「艦長、マグネトロンウェーブ発射装置の無力化に成功しました！」

あのジャンクはたつたいまからわれわれの補給物資です！データの出出しが終わつたら、早速解体しましょう！」

ビーメラ星系第四惑星で補給ができると喜びも露にした矢先に襲い掛かったガミラスの罠。

立ち塞がったマグネトロンウェーブ発射装置の脅威を切り抜け、貴

重な資源をゲットしたヤマト。

しかしヤマトよ、油断は禁物だ。君の行く手にはガミラスの妨害と、神秘なる宇宙の大自然が立ちほだかっているのだ。

人類滅亡と言われる日まで、

あと、二六五日。

第十七話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十八話 新たなる脅威！ 暗躍する第三勢力！

立ち向かうべきは、ガミラスかなぞの敵か

第十八話 新たなる脅威！ 暗躍する第三勢力！ Aパート

古代守は状況を整理していた。

聞けば、彼女には二カ月ほど前に救出されたようで、残されたわずかな医薬品をすべて使って処置したあとらしく、すでに峠は越えているのだとか。

そして守の証言と照らし合わせる限りでは、冥王星攻略作戦失敗から約三カ月が経過している。

スターシア曰く、太陽系から比較的 안전한航路を選んだ場合、ガミラスの宇宙船なら一月もあれば余裕でここ大マゼランまで帰れてしまうのだとか。

——つくづく、技術力の差を思い知らされる。

守から地球の惨状を聞いたスターシアは、悲しそうに顔を伏せていた。

——はたしてそれが地球を憐れんでのものなのか、それとも隣人の暴挙に由来するのか、守には図れなかったが、なんとなく両方なのだと感じた。

「古代守さん、あなたは——あなたは、ミスマル……いえ、テンカワ・ユリカという女性をご存知でしょうか？」

スターシアの口から意外な人物の名が飛び出したと当時は思ったが、いまになってみれば当然の問いだったと思う。

「ええ、存じてます。彼女は——地球で数年前に起こった戦争を集結に導くきっかけを作った、『英雄』の一人ですし、つい最近起こったテロ事件での被害者でもあります。そして、真正正銘——地球最後の反抗作戦に使われる宇宙戦艦の建造に深く関わった、いまの地球に欠かすことのできない人材です」

守は当たり障りのないレベルで答えた。ヤマトのことで勧誘される前まで、その程度の認識だったのは事実であるし、彼女を——彼女

たちを死なせないために自分は命を捨てたのだ。

正直に言えば、彼女の安否はいまも気になっている。守の記憶にある最後の姿の時点で、相当弱っていたことが伺えた。

おそらく完成なったヤマトと共に、いまも戦っているのだとは思いますが……。

「彼女の具合はどうでしたか？ 私たちが提供した医薬品は、効果がありましたか？」

そう言われても、守は地球がイスカンドルから支援を受けたことを知らない。自分が冥王星での戦いで。そのことを伝えるとスターシアは残念そうに「そうですね……。」とだけ返した。

「スターシアさん、あなたはミスマル大佐とお知り合いなのですか？」
守の質問にスターシアは丁寧に応えてくれた。

スターシアが語った真実は守には飲み込み難いものだったが、ともかくユリカがボソソシジャンプを利用して自身の意識をこちらに残されていたフラッシュシステムの端末——ガンダムフレームにシンクロさせることでスターシアと綿密に打ち合わせ、ヤマトの再建に必要な支援だけでなく、噂に聞いた新型機や守も目にしたGファルコンと言った新兵器の完成にも関わっていたということも理解した。

しかしまさか、ヤマトの再建の裏にこのような事情が隠されているとは……。

だとすれば、体調云々以前にヤマトの旅とは、彼女の命を賭した文字どおり最後の手段だった——ということなのか。

ならば、あの入れ込みようも理解できる。

スターシアは言った。「私はユリカがヤマトで無事イスカンドルにたどり着くことを願っている」と。

守も同感だった。

現在は連絡も途絶えてしまっているのでその動向は図れない。だが、隣人のデスラーから以前ヤマトの艦長について尋ねられた、つまり彼の関心を引くほどにヤマトはうまく立ち回っているということが窺えた。

だが、それ以上の情報はイスカンドルには伝わってこない。ヤマト

がいまどうしているのか、無事に航海を続けているのかは、イスカandalにいる限り、知りようがないことである。

スターシアから裏の事情を聞かされて以来、守はどうかしてヤマトの旅を支援できないかと考え始めていた。

守とて地球人だ。死んでいった部下たちの命に報いるためにも、ヤマトの航海は絶対に成功させたいと考えるのが当然であろう。

問題は、どうやって支援するか、だった。

目が覚めてから一カ月。守はだいたい回復して自由に動けるようになっていた。さすがに激しい運動を長時間続けるようなことはできないまでも、宇宙船を操縦するくらいなら問題ない。

幸い、イスカandalから地球までのおおよその宇宙図は手元にある。

ヤマトのワープ性能も、改装に関わったイスカandalのマザーコンピュータの演算によれば、跳べたとしても二〇〇〇光年程度が目安で、自己改良を続けても、ガミラス艦を無傷のまま鹵獲して部品を移植でもしない限りは、プラス二〇〇〇光年が限界らしい。

もちろんこれは技師の技術力や頭脳の程度を考慮していない数値だが、確度の高い情報であると思う。

航路の予測は立つ。トラブルによる寄り道やずれはあるにしても、合流できる可能性は依然として残されている。ならばなんとかして、航行中のヤマトに物資を届けられないだろうか。

守はそう考えてスターシアに相談を持ち掛けてみた。スターシアは眉根を寄せて思案していた。守は辛抱強くスターシアの返答を待ち、十数分が過ぎる頃になってようやく「——わかりました。ヤマトの支援の可能性を模索しましょう」と許可を出してくれた。

そうと決まれば行動あるのみ。守はスターシアが開放してくれた防護扉を潜ってタワーの最下層にある格納庫、それに隣接した倉庫に足を踏み入れた。

ユリカと交感し奇跡の立役者となったガンダム。使える機体の一つでもないだろうかと考えるのだった。

スターシア曰く「すべての機体が解体・封印処置を受けましたが、破

棄はされていなかったはず。手入れもされていなかったので経年劣化はあると思われませんが、使える部品が残っている可能性はあります」とのことなので、徹底的に洗い出す所存である。

探し出して数日。保存状態のいい部品の入ったコンテナが数個見つかった。

守の知識と技術では組み上げられそうにないが、使える部品ではないかと思う。

おそらくヤマトには親友の科学者——真田志郎が乗っているはず。ヤマトの再建に関わっていると聞いていたし、彼の性格なら、こういった局面で最善を尽くそうとするだろうと予測できる。確証はないが確信は持てるという、字に表すと矛盾しているようなこの気持ち。親友ならばこそその理解であろう。

その彼でなら、この部品とアイデアさえあればこの部品を有効活用して役立つ物品の一つや二つ用意できると、守は信じて疑わない。

あとは移動手段だが……おあつらえ向きのもを見つけた。ガンダム用のオプションとして用意されたのであろう、波動エンジンとワープエンジンを搭載した巨大な外付けのモジュールを見つけた。しかも状態がよく部品も完全に、イスカンドルの自動工場に運び込めば組み上げられる状態とは、実に運が向いている。

これをイスカンドルに残存している連絡船を組み合わせれば——ヤマトと合流可能だ。

それに、この輸送モジュールのデータを反映すれば、ヤマトはイスカンドルやガミラスの域には及ばないまでも——連続ワープ機能をほぼ取り戻し、イスカンドルまでの旅路を短縮できるはず。

一日でも早く辿り着かねばならない彼女らにとって、この上ない助けとなる。

問題は、この広大な宇宙を旅するヤマトの所在をどう突き止めるか、だ。

おおよその航路はわかるにしても、正確にワープアウトせねば行き違いになってしまう。観測機器の性能は純イスカンドル製のこちらが勝るだろうが、連絡艇に詰める程度、かつ自動工場によるやつつけ

仕事ではあまり期待が――。

どうしたものかと悩んでいる守の耳に、スターシアの悲鳴が突き刺さった。

駆けつけた守の視界に飛び込んだのは、ボソソジャンプシステムとフラッシュシステムが起動した例のガンダム・フレイムと、その眼前で蹲るスターシアの姿。

駆け寄った守に、スターシアは告げた。

「ユリカの……ユリカの状態が急激に悪化しました……」

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ ディレクターズカット

第十八話 新たななる脅威！ 暗躍する第三勢力！

マグネトロンウエーブ発生装置を停止し、マグネトロンウエーブはもちろん強磁性フェライトと連動して動きを封じていた磁力線の影響も消え去ったヤマトは、マグネトロンウエーブの影響で不調を起こしていたデイストーションフィールド発生装置の再調整を完了していた。

出撃できずフラストレーションの溜まっていたウリバタケの汗と涙の結晶というべき成果である。

フェライトを除去しないことにはヤマトのコンピューターが正常に動かないため、再起動したデイストーションフィールドでフェライトを艦体から隔離、その後フィールドを球体状に広げてから補助エンジンを点火して前進、フェライトの中から抜け出すプランが実行された。

「補助エンジン始動、出力上昇中」

「補助エンジン点火、一〇秒前」

第一艦橋に戻ってきた真田が固唾をのんで見守る中、出航用意が進んでいく。

工作隊として活躍して疲れ果てたラピスに変わって機関制御席に就いた山崎が、計器を読み上げ補助エンジンが正常に稼働中であることを告げる。

報告を受けた大介が操舵席から補助エンジンの点火スイッチを押す。すると、ゆつくりと前進を始めたヤマトが強磁性フェライトの雲の中から姿を覗かせた。

相変わらず計器が正常とは言い難い状況なので、こうして前進するだけでもひやひやものだ。なにしろ宇宙はなにが飛んでいるか知られたものではない。こうやって進んでる間にも、なんらかの物体がヤマトに直撃して損害を被る危険があり得る。

幸いなことにそういったトラブルに直面することなく強磁性フェライトの霧の中から抜け出せた。フェライトの影響を受けていた計器類も少しづつではあるが正常値に戻りつつある。

「さて、あとは工作班を動員して艦体に付着したフェライトの除去作業だな。ちゃんと除去してやらないと、トラブルの基になるからな」真田はヤマトの艦体に大量に付着しているフェライトを見て、「しかし面倒な作業だな」と珍しく愚痴る。

この作業には工作班総出プラス作業用の小バツタ総動員で行うのだろうが、綺麗に除去するには数時間は掛かる。

きれいに除去しなければならぬとはいえ、要塞を沈黙させてきたばかりだとさすがに重労働だな、と思っていたら。

「真田つちは休んでくれていいぞお。俺たち居残り組がせつせと除去しちまうからよ」

ウリバタケが労りの通信を送ってきた。

ふむ、ありがたい言葉である。

真田は少し悩んでから「では、お願いします」と了承してユリカに伺いを立てている。

「いいよいいよ、休んじゃって。大活躍だったもんね」

ウサギユリカはいぱくふおくむな艦長はもふもふな腕を組んでうんうんと頷く。

……やっぱり、早々に完成型を作ろうと真田は硬く誓った。

緊張感が——保てない。可愛いのだが、人妻かつ恩人に対して長々とさせているべき格好では——断じてない。

真田は超特急で完成型を作り上げようと心に誓う。

だがまずは休憩が先だ。後方展望室にでも行くことにしよう。

後方にある強磁性フェライトの霧は邪魔だろうが、少しくらい星の海を眺めて心癒されたほうが、精神衛生上好ましいだろう。

そう思つて展望室を訪れた真田は、手すりに両腕を乗せてもたれるように宇宙を眺めている進と出くわした。

「真田さん——」

「よう、古代。おまえも息抜きか？」

真田が問いかけると進は頷いてから、「兄のことを考えていたんです」と呟いた。

その言葉には真田も表情が変わる。進の兄・守は、彼にとつても無二の親友と呼べる存在だった。

その最期を思えば、心乱さずにはいられない——そんな存在。

「古代……守、か。あいつは——どんな気持ちで囀役を務めたんだろうな」

「？ 真田さん、兄のことをご存じなのですか？」

「ああ、よく知つてるとも……いままで黙っていたがな、俺とあいつは無二の親友だったんだ」

真田の告白に進はわが耳を疑った。

いや——待てよ、たしか高校時代の守は、曰く「理工学系の面白い奴友達になった」と楽しげに語っていたような気がする。なにぶん幼き日のことなのであまり記憶にないが……。

「俺とあいつは、高校時代にたまたま知り合つてな。派手なおまえの兄貴と地味な俺——まったく正反対なはずの二人は奇妙なほど馬が合つてな。シームレス機の中で話したように、当時の俺は、将来は科学を屈服させようと息巻いてひたすら勉強に打ち込んでいた時期だった……あいつと付き合い始めたおかげで、いい意味でガス抜きができたよ」

真田は当時を懐かしむ様に思い出話を少し、聞かせてくれた。

本当に——色々と振り回し、振り回されたものだ。大人と言うには幼く、子供というには年を取った、なんとも半端な時期の思い出。

だが色褪せない、在りし日の大切な思い出。

真田は思い出話をそう締めくくった

「そうだったんですか……」

「ああ。だからな、古代。気を悪くしないで欲しいんだが、おまえを見てると——どうしても守のことを思い出してな。……寂しい気持ちも沸き上がるが、それ以上にあいつに変わってお前を見守っていきたいと考え、今日までを過ごしてきた。正直に言っ、おまえの急成長には驚かされてるよ。艦長やアキト君の存在が、今日のおまえを形作ってきたんだと思うと、感慨深いものを感じるな……」

真田の言葉に進は小さく頭を振った。

「艦長やアキトさんだけじゃありません。真田さんが——ヤマトが俺を育てたんです」

真田も笑みを浮かべて頷いた。

それからしばらくは守の思い出話が花咲く。家ではこんなだったとか、学校ではこういったことをしていた、とか。

そうやって昔話にひとしきり盛り上がったあと、進は言った。

「俺は、兄がまだどこかで生きているような気がするんです」と。

真田は静かに頷いて肯定した。

「少なくとも、俺たちの胸の中に——思い出の中で守は生き続けている。俺たちが忘れ去らない限り、ずっとな」

進も頷き、二人は仲よく連れ合い後方展望室をあとにした。

折角の機会だからと、真田はユリカ用の補装具の制作に関して意見を少々求めたのだ。

ウリバタケの思惑を振り切りさっさと仕上げてしまうためにも、ここは『そういう意味』では常識人の進の視点が欲しい、とのことだった。

進もいまは長めの休憩を貰っていて支障がないので、所在を第一艦橋に報告してから真田に同行する。

真田がわざわざこういうのだから、さぞウリバタケ発案の補装具と云うのはおかしなものなのだろうと警戒しながら、進は機械工作室の

ドアを真田と一緒に潜る。

そこで見せられたウリバタケ案の補装具のアイデアを見せられて、進はそつとアキトに一報を入れるのであった。

アキトさん、あなたは夫として怒っていい、と。

そしてアキトと進の監修の元、ユリカ用の新しい補装具が形になった。

真田とイネスに言わせれば「まだ完全とは言えない」らしいのだが、いつまでもウサギユリカでは士気に関わる（緊張感を削ぐ）と、短い休憩で必死こいて形にしてくれた力作だった。

まだ工作部隊として突撃して三時間程度だというのに……アキトと進は頭が上がらないな、と感謝の意を示す。

もちろん余計なことをされないよう、ウリバタケが艦外作業で関与できないタイミングであることも織り込み済みの作業であった。

ウリバタケが示したアイデアを見て呆れ——を通り越して怒りが込み上げてきたのは、アキトも同じだった。

「ほええく。これが正式版なんだ！」

早速エリナとイネスの手も借りてユリカが身に付けたのは、身体に密着した黒いボディースーツだ。

ベルト状の人工筋肉や体温維持に必要な保温・冷却機能が盛り込まれた、ある意味次世代型。パワードスーツの雛型というべき代物である（現時点ではその用途に使える性能は与えられていない）。

また、いまのユリカは不健康そのものと言えるくらい体の線が細くなってしまっているの、人工筋肉だったり保温・冷却機能も利用して在りし日のスタイルに近づけるよう、肉襦袢よろしく盛ってある。

これはさんざん悩んだ末、「健康そうに見えるほうがいい」という決断から実施された気遣いだ。

この上にいつもの艦内服を着こみ、胸元にはみなが送ったブローチを飾り、艦長帽とコートを羽織れば、新スタイルのミスマル・ユリカ艦長の出来上がりだ。

「うん！ すっごくいいよこれ！ 着ぐるみよりは全然動きやすい

！」
その場でくるくると回って見せるユリカの行動にアキトと隣のエリナはハラハラさせられるが、転倒しそうな素振りはない。上手く仕上がっている。

ほかのクルーにもちゃんと仕上がったことを報告すべく、映像と音声で艦内中に放送しているの、さながらフアッションショーの様相を呈していた。

すっかり色が抜けて白髪となってしまった頭髮も、もう染めて誤魔化しても手遅れと判断してそのままにしてある。

衰えた姿には違いのないのに、「旧ヤマト式の敬礼！」とか言って拳を握った右腕を胸の前で横にして掲げてみせるなど、呆れかえるほどいつものノリなので、みんなで苦笑しながらも、元気そうでなによりと、ちよつと安心した。

「ちえつ。結局この案で通っちゃったか」

完成の報を聞いて、お披露目会場となった中央作戦室に駆けつけたウリバタケは残念そうに呟いている。

ウリバタケが考えていたのは、真田案では悩んだ末だったスタイル補助の肉襦袢も最初から盛り込んだ『旧女性用艦内服型のボディースーツ』だ。

一応着替えの手間も減るし、緊急処置のとき脱がしやすいという合理的な理由を上げてはいるが、はつきりとセクハラ親父の考えが透けていた。

それをよおしく理解しているアキトは、残念そうなウリバタケの後ろから肩を叩いた。

「セイヤさん、人の妻で遊ぼうだなんて……そんな不謹慎なこと考えてませんよね？」

静かだが、とても迫力のある声色にウリバタケの体が硬直する。その肩に置いた手に、力が籠ってしまうのは気のせいではないはずだ。「と、当然だろテンカワ！ お、俺は純粹に自分の案のほうが機能的だと思っただけで……！」

見苦しい言い訳をするウリバタケに「次は、ないですからね」と釘

を刺す。アキトの放つ黒いオーラ（殺気混入）にウリバタケは一も二もなく頷いて応じた。

うん、人間物分かりがいいのが一番だよ。
アキトは心から嗤った。

そんな騒動のあと、アキトは格納庫に戻ってダブルエックスの修理作業の手伝いを始めた。

工作班の大半は強磁性フェライトの除去作業で忙しいので、人手を増やして少しでも作業を進めておきたい。

ガンダムはヤマトの貴重な戦力だ。いつまたガミラスが来るかわからない状況下で、整備中のままにはしておけない。

「テンカワ」

コックピット内部の基盤の交換作業をしていたアキトに、コックピットハッチから顔を覗かせたイズミが声をかけてきた。

「よかったね、艦長がとりあえずは元気になって」

どうやら心配してくれていたらしい。同じ科の同僚としては唯一真相を知らされていることもあってか、イズミは最近こうしてアキトを気遣う機会が増えている。

実にありがたい話だ。

「ありがたい、イズミさん。でも、油断は禁物なんだ。さすがに日常雑務の類はもうジュンとか進君に投げっちゃって、戦闘指揮とか今後の方針に関わる重要な決断に関与するに留めたほうがいいって、イネスさんからも念押しされてるくらいだからね」

基盤の交換作業を終え、メンテナンスハッチを閉じたアキトがコックピットから這い出す。

ダブルエックスは現在、全身の装甲の張替えや損失した部位を新品に置き換えるなど、オーバーホールの真っ最中。

普段の格納スペース内では手狭とあって、駐機スペースのほうに置かれ、直立状態で整備を受けている。

全身の装甲の大半が剥がされて内部構造を露出した姿は痛々しくもあり、同時にメカ好きの心をこれ以上なく揺さぶる姿だと思う。

サテライトキャノンも使えずたったの二機であれだけの敵の足止めにも成功し、五体満足で帰ってこれたのはこいつの性能のおかげだと思うと、感謝の念が尽きない。

「お〜い、アキトく〜ん！」

不意に呼ばれてキョロキョロと辺りを見渡し、「下だよ」とイズミに注意されてダブルエックスの足元を見ると、ヒカルが手を振っていた。

「リョーコがコックピット周りの調整教えてって言ってるよ〜」
なるほど、てこずっているのか。

リョーコはまだガンダムに触れて間がないので、テストパイロットも含めれば数か月以上乗っているアキトのほうが整備作業含めて一日の長がある。

本体はともかくコックピット周りの整備作業はお茶の子さいさいだ。

「わかった！ すぐに行く〜！」

「こつちは私が手伝つとく。リョーコの世話を頼むよ」

イズミに送り出されて、アキトはダブルエックスの胸部付近にまで上がっていたリフトに乗り込み、下に降りると向かいのスペースで作業中のエックスの元に向かう。

イズミはそんなアキトの後姿を見送りながら、アキトの代わりに頭部センサーの部品交換を手伝い始めた。

主砲も波動砲も使えないいま、ガンダムがヤマト防衛の要。

そう考えると、イズミも黙って整備作業を見学している気にはならない。自分のときも心底辛かったが——友人夫婦が死に別れるのを見せつけられるのは、正直ゴメンだった。

せめてあの夫婦の危機だけでも乗り越えさせてやりたいが——はたして、上手くいくのだろうか。

（波動砲から生まれたサテライトキャノン。強大過ぎる滅びの力……いまはこれに縋らないと生き抜くことすら危ういとはね……）

イズミは生き抜くためとはいえ、無差別に破壊をまき散らす大量破壊兵器を搭載したガンダムに、複雑な気持ちを抱かずにはいられない

かった。

「……デスラー総統」

声を掛けられ、目を通していた書類から顔を上げると……険しい表情をしたタラン將軍が立っていた。

「どうかしたのかね、タラン？」

「は……イスカンドルから、宇宙艇が発進しました。進路を計算してみたところ、バラン星の方角に向かっていることが判明いたしました。——イスカンドルがヤマトに対して、なんらかの支援を敢行した可能性がありますが……妨害いたしますか？」

その報告にデスラーも少し驚かされた。イスカンドルがヤマトのおおよその所在を突き止めていることもだが、支援物資を直接的に渡すとは——スターシアの性格と方針を考えれば信じられないことだろう。

となれば、

（あのととき見逃した捕虜が行動した、ということか。しかし、スターシアの承諾もなく実行できるとは考え難い。そして——スターシアが行動を起こさざるをえないとなれば……）

ドメルからの最新の報告によれば、ヤマトは現在ビーメラ星系第四惑星を目指していると聞く。

先を急ぐ航海とは言え先立つ物は必須。度重なる戦闘やトラブルを考えれば、ヤマトの物資も困窮しているのであることは容易に予想される。

そうなると、バラン星から少し航路を外れるが、水と植物が補給できるビーメラの存在は無視できず、必ず進路を取る。そのため最短コースを選べば、超新星間近の赤色超巨星に接近するだろうから、そこに仕掛けた罠で痛めつける。撃沈はできなくてもいい。

さらに、ビーメラ星系に到着したヤマトを民間設備に手を加えたマグネトロンウェーブ発生装置でさらに打撃を与えつつ——水と食料、

そして金属資源を意図的にくれてやることで時間を数日とは言え口
スさせる。

——そうすることで、バラン星への接近を遅らせ基地を隠蔽させる
算段となっていた。

無論、くれてやった物資の中にはバラン星基地を匂わせてしまうもの
も含まれているが、それ自体が『基地施設に民間人がいることを匂
わせ、攻略に二の足を踏ませる』誘導にもなっている。

地球攻略を断念し完全に手を引いた場合を考えると、バラン星基地
が破壊されることだけは絶対に阻止しなければならぬ。

あそここの基地は移民計画に則り、先発してインフラ整備をしている
民間人が多数居住しているのだ。これを犠牲にするわけにはいかな
い。

当初の予定どおり地球を手に入れたとしても、居住できるように環
境を回復させるには時間が掛かる。

凍てついた地球を急速解凍するための装置のテストも民間主導で
行われているし、地球の準備が整うまで——そしてヤマト出現以降は
万が一の失敗に備えた重要拠点として拡張が進行している施設だ。

万が一にもヤマトに発見され、破壊されるようなことがあったらガ
ミラスは行き場をなくしてしまう。

逆を言えばあそこさえ無事ならビーメラから水と食料を得ること
で、ほかの星を探すまでの時間稼ぎができる（原生林の規模からくる
開拓の手間やら周辺状況を考えると、ビーメラ4は第二のガミラスに
は適さないので除外された）。

だからこそ正攻法では攻略できないヤマトの強さを逆手にとって、
こんな変化球な作戦を実施している次第だ。

（まだ……ヤマトに沈んでもらうわけにはいかない）

あのスターシアの眼鏡に叶ったミスマル・ユリカという人間なら、
民間施設を確認すれば攻撃を控えて逃走する可能性は高いだろうと、
ドメルと見解が一致している。

そんな人間でなければ、どれほど縋ったとしてもあのスターシアが
コスモリバースシステム——それと密接に関わったタキオン波動収

束砲を渡すはずがない。

しかし、同時にあの艦はどうしても避けることができない状況下では、涙を呑んでそれを成す覚悟がある。そこに躊躇はないだろう。

デスラーはヤマトの戦いをそう解釈しているし、スターシアもそういう用途の使用であれば咎めはできない。

ゆえに、ドメルが計画しているヤマトへの艦隊決戦が失敗に終わったら——デスラーは大人しくヤマトのイスカンドル行きを認めるか、移民船を護るべき戦力を総動員してでも対峙するか、の二択を迫られることになる。

——ヤマトはイスカンドルとガミラスが連星であると知っている。となれば、タキオン波動収束砲に物言わせて降伏を迫ってくる可能性は高い。そうなったら——ガミラスは飲むしかない。

……その場で飲んだ振りをして、地球帰還前に反故して叩き潰すことは可能だ。コスモリバーを受ければタキオン波動収束砲も封じられる。ヤマトとて、承知のことだろう。

そうなれば武力に物言わせて降伏を迫ることは決して不可能でない。ガミラスの未来を考えるのならそうするべきなのはわかっている。

しかし、デスラーとて誇りがある。誇りがあるからこそ、『本物』に対しては相応の敬意を払うべきだ。

ヤマトは敬意を払うにふさわしい相手だ。だからこそ約束を反故して後ろから撃つような真似はできない。デスラーのプライドが許さない。

それに——。

あのヤマトなら、ヤマトを操る地球人なら——解かり合えるかもしれないと、漠然と考え始めている自分がいた。

自分でも驚く解決方法であるが、デスラーはこの甘いにもほどがある考えを妄想と切り捨てることができなかつた。

実際、ヤマトの戦いは気高かつた。

冥王星での戦いでは地球への影響を考えてのことだとしても、彼女たちはタキオン波動収束砲を使わなかつた。それは、大量破壊兵器で

安易に人殺しをしたくないという、彼女の——ミスマル・ユリカの甘さの表れでもあったのではないかと、デスラーは思うのだ。

そんな彼女だからこそ、スターシアはタキオン波動収束砲を託したのではないだろうか。

そう考えてしまうと、あれほど嫌悪していた地球人であるにかかわらず、ヤマトだけは、ミスマル・ユリカだけは信じてもいいのではないかという考えが首をもたげる。

それに和平は彼女たちにとつてもまたとない好機であるはずだ。

コスモリバースシステムを受け取れば、タキオン波動収束砲は封じられる。その状態でガミラスという脅威を残したままでは安心してコスモリバースを受け取り、地球に帰れない。

——とすれば、イスカandal到達時点でガミラスとの和解ないし終戦・停戦が望めないのであれば、彼女たちはその砲火をガミラスに向けなければならなくなる。

ミスマル・ユリカは、決してそれを望んでいない。甘い考えだと嘲笑することもできるが、デスラーにはそれができない。

そしてそんな彼女だからこそスターシアは、ヤマトのの安全保障を兼ねて——カスケードブラックホール破壊に必須なそれがあることで、デスラーが尻込みすることも見越して、タキオン波動収束砲を託したのではないかと、最近思うようになってきた。

——ヤマトと和解すべきだ。

頭の中で冷静な自分がささやく。

だが素直にそうする気にはなれない。

その選択をしたが最後、戦艦一隻に屈したという拭い去れない大敗の記録が刻まれてしまう。

ガミラスとて無敗だったわけではないが、相手が戦艦一隻、それも滅亡寸前からの大逆転という、大衆好みの英雄譚そのものとなれば、その影響は計り知れない。

そうなったら、デスラーが愛するこの国の栄光が損なわれてしまう。ただでさえカスケードブラックホールに——何者かの侵略に屈したという泥を被っているというのに！

それを避けるためには全力を挙げてでもヤマトを撃滅するしかないが……はたしてそれは、本当に払う犠牲に見合った成果と呼べるのだろうか。

「放っておけ。それでヤマトが時間を使い、バラン星基地の隠蔽工作が滞りなく進むのであればそれに越したことはない……ヤマトにバラン星基地を攻撃されるわけにはいかないのだ」

「わかりました、総統。しかし——相手があのヤマトとは言え、ここまですべて消極的な対応を迫られるとは……」

タランの表情は複雑だった。たかが戦艦一隻に振り回される屈辱と、たつた一隻でここまでガミラスに立ち向かう偉業に対する敬意が入り混じった、複雑な表情。

彼のこんな顔を見るのは、はじめてだ。

「総統。お言葉ですが、総統はヤマトをどうしたいと考えられているのですか？ 万が一にもドメル將軍が敗れば、ヤマトはイスカンダルに接近し——わがガミラスをタキオン波動収束砲の射程に捉えます。ヤマトがイスカンダルの隣にガミラスがあると知れば——」

その言葉はヤマトに対して明確な『脅威』を覚えているからこそその言葉だろう。

万が一にも接近を許せば、あの星すら砕くであろうタキオン波動収束砲の威力が物を言う。

対してこちらのタキオン波動収束砲はまだ完成しておらず、タキオン波動収束砲を向け合うことでけん制することすらできない。

いや、六連射できるヤマトのほうが、一発しか撃てないこちらよりも優勢であることは否めないし、運用に関しても一日の長がある。

アウトレンジからの狙撃が成功すれば勝機はあれど、タキオン波動収束砲といえど遠方の敵を撃つときには弾着までに間がある。

避けることは、可能だ。そうなったらヤマトが圧倒的優位となり、ガミラスを叩き潰しに来ることは明白。

タランの懸念は間違っていない。だが、彼には知らない情報がある。

「タラン。ヤマトはとつくにその事実を知っている。承知のうえで、

進んで来ているのだ」

デスラーの言葉にタランの表情がはつきりと強張った。

そう、デスラーはスターシアと話したときからこの情報を知っていた。だからこそ慎重にヤマトへの対処を考えなければならなかった。彼にも、そうしてもらおうとしよう。

「でしたら……」

早急に叩くか、それが叶わぬのであれば和平を視野に入れた活動のいずれかが必要になる。そう訴える前にデスラーは――。

「タラン――ヤマトはわれらを滅ぼしてイスカンドルに向かうと思うか？　そしてわれわれが地球を諦め、われらが脅威、カスケードブラックホールをヤマトに破壊してほしいと願い、その対価に戦争責任を取って地球を全面支援するとしても訴えたなら、彼らは応じてくれると思うか？」

デスラーの問いかけにタランは少し悩んだ素振りを見せてから、

「はい、総統。われわれが徹底抗戦の構えを崩さなければ、ヤマトがその選択肢以外で地球を救えないと考えたのなら、躊躇はしないと思います。その逆もまたしかり。ヤマトはわれらが共存の姿勢を見せ、裏切られないと判断したのであれば、無碍にはしないとされます。彼らにとっても利益が大きいのは、後者であると、私は考えております」

「そうか……」
彼もその答えに行き着いたか。
ならば。

「タラン。軍と政府内でのヤマトに対する危機意識について調査を頼む。戦うにしても講和するにしても、みなとの反応を知っておきたい。想定外の事態ではあるが、これはガミラスにとって、非常に重要な決断になる」

デスラーは一步を踏み出すことにした。

ヤマトの和平――その実現が可能かどうかを吟味するために、タランを使う。自らが信を置く数少ない人間に協力を要請する。いまが、その瞬間だ。

デスラーの指示にタランも慎重な面持ちで頷いた。

……はたしてヤマトはガミラスをどう思っているのだろうか。

デスラーにはああ答えたが、それはヤマトの戦いの情報を見て、彼なりにヤマトの戦いにはある種の気高さ——武士道とでもいうべきものを感じたからだ。

だが、ヤマトとて人が操る艦。人なればこそ、故郷を戦火で焼いたガミラスを憎むのが必然。その憎しみを払しよくできる度量が彼らになれば、和解の余地はない。

復讐の念で放たれたタキオン波動収束砲の業火が国を焼き、国家としてのガミラスは滅する運命をたどるだろう。

対策を一任されたドメルは少数先鋭の艦隊決戦に備え、ヤマトのタキオン波動収束砲を封じ、かつヤマトを翻弄して撃滅可能な新しい戦術を考案している。

いまもガミラスの兵器開発局はタキオン波動収束砲を装備した総統座乗艦と平行して、そのオーダーどおりの兵器を汗水垂らして必死に形にしている最中だ。

最初その案を見せられたとき、タランは実現性を疑った。だが完成すれば今後の切り札になりえるとデスラーの許可も降り本採用に至った。とはいえ、ドメルもそれで確実にヤマトを撃滅できるとは考えていないようだった。

それでも総統が望むのであれば死を厭わぬ覚悟で挑むと宣言していたが、そのドメルとの不意な遭遇をヤマトは退けた。おそろしい艦だと身震いする。正面から戦えば、タキオン波動収束砲を装備していることを考慮しても、ドメルすら退ける可能性を秘めたあの艦が、なによりも恐ろしい。

タランは願わくば、ヤマトと手を取り合い共存の道を選ぶほうが得策と考えていた。総統の補佐官として接点の多いヒス副総統も同じような考えを示している。

これ以上ヤマトと戦い続けるのはリスクが大きすぎる。ましてやカスケードブラックホール問題を抱えたいまのガミラスには。

ヤマトがガミラスの提案に頷いてくれるかどうかは定かではない。しかしヤマトの協力があれば、ガミラスは生き延びられるかもしれない。

ない。六連射可能なタキオン波動収束砲はガミラスで開発中の物よりも優れている。もしかしくなくても、あのカスケードブラックホールを消滅せしめる威力を有しているかもしれない。

そうなれば——都合のいい話だが、ガミラスは地球を狙う理由がなくなる。

そしてヤマトに恩ができる。

それを理由にすれば、『敗戦国』としてではなく、『救われたもの』として地球の復興を支援し、その罪を償うことができるかもしれない。

だがタランはそう考える自分が恥ずかしかった。地球にとつて侵略者という身の上でありながら、被害者相手に身勝手な期待を抱いている。

身勝手だと、恥知らずだと罵られても、いまのタランはなにも言い返せない。

タランはきつと、デスラーも同じ苦しみを抱いているのだと考えるだけで、すべての責任を彼に押し付けてしまう独裁政治というガミラスの政治システムが、恨めしかった。

艦長室で眼前に見える緑豊かなビーメラ第四惑星と、その手前にあるヤマトを『びみよううに』苦しめたマグネトロンウェーブ発生装置をちらちらと見ながら、ユリカは呼び出した進やアキト、エリナやイネスと言った『共犯者』を交えて、奇しくもデスラーとタランが繰り広げていたのと同じ話題の議論を重ねていた。

マグネトロンウェーブ発生装置の罠の不自然さなどから、ユリカたちはあれはヤマトへの事実上の補給物資であり、バラン星への接近を暗に遅らせて欲しいと言う意志表示と見ていた。

つまりそれは——。

「——バラン星にガミラスの基地があるのはほぼ確実と考えていいのだとすると、接近は避けて通り過ぎるのが一番安全ってことになるわね」

ユリカはエリナの言葉に頷く。進も戦闘班長としての立場から、「素通りした場合、基地施設を交えた艦隊との戦闘は避けられますが、後方に敵を残す形になります。そうなった場合、ガミラス本星に接近した際に講和できたのならともかく、そうでない場合は帰路の妨害も心配しなければならぬのがネックですね。それに、木星での件を考えると、バラン星攻略に反対するクルーも出てくると思われます」と指摘した。

後願の憂いを立つ。そのためにヤマトは波動砲をもって市民船を——木星人の故郷の一角を消滅させたのだ。立地条件的に太陽系内に拠点を残すに比べれば、一見危険度は大きく劣るようにも思える。

が、バラン星の基地の規模が不明な現状では安易な決断は下せなかつた。

ガミラスはこちらよりもワープ性能が格段に優れている。冥王星基地の存在を考えればバラン星から直接地球に侵攻することは考え辛い、可能性としては残されていると言えよう。

それに、銀河系と大マゼラン雲を結ぶ延長線においてバラン星はちょうど中間地点。前線基地ないし補給基地として大規模な施設を有している可能性は極めて高く、その規模は冥王星の比ではないはずだ。

だとすればヤマトの航海の安全のためにも、波動砲をもって一気に撃滅を図るのが得策ではあるのだが……。

「バラン星の基地の規模がわからない限り、迂闊に波動砲と言う訳にもいかないよな……ユリカ、たしかガミラスは、カスケードブラックホールによる母星消滅の前に地球に移住することが目的なんだろう？ だったら、バラン星基地は——」

「中間補給基地も兼ねた移民船の停泊地——または一般市民の一時避難先になっている可能性も否定できないよ。今回の件からするに、もう民間人が入ってる可能性は高いと思う」

ユリカも険しい顔でアキトに答える。

それがあるから、バラン星基地への対処は難しい。虐殺なんて、し

かも一般市民を対象とした虐殺なんて、やりたくない。

「たとえばガミラスが敵国で、地球を滅亡寸前に追いやった怨敵であっても——それを理由に波動砲で避難地を……一般市民ごと吹き飛ばすような真似をしてしまえば、平和的な解決を模索すること絶対にできなくなる。仮にガミラス本星に接近してから波動砲で脅してもなお徹底抗戦の構えを取るのであれば、こちらも徹底抗戦しかないけれど……いい気分じゃないわね、仮定の話だとしても」

イネスもいつもどおり冷めたような表情と口調ではあるが、声には苦いものが混ざっていた。

「——ガミラス憎しを口にしていた俺が言えた義理ではないかもしれないかもしれませんが……それでも、平和的に解決できるに越したことはないと思いますし、自ら進んで波動砲で破壊の限りを尽くせば——俺たちは、それこそガミラス以下の暴君に成り下がってしまう。それだけは、亡き沖田艦長から受け継いだこのヤマトの使命に掛けて、断じて容認できません！ ヤマトが敵国そのものを滅ぼすとしたら……それは、そうしなければ地球が滅んでしまうような極限状況下に置かれたときだけです。俺たちは——このヤマトに込められた願いのためにも、安易な決断を避け、平和的な解決を模索するべきだと考えます」

「戦争という嵐で、平和という安寧が流されないよう、繋ぎ留める……か」

進の言葉にエリナはヤマトに施された白い錨マークを由来を——ユリカが語り、ヤマトに込めた願いを口にした。

それは願いの刻印。——波動砲の真上に描かれた、ヤマトの船腹に大きく描いた願い。

平和を求めるヤマトが、平和とは真逆の行為に進んで手を染めることは避けるべきだ。

それがなせないのでは、沖田艦長に顔向けできない。ヤマトを殺戮の兵器に貶めることだけは、断じて許されない。

ユリカはそんなことをさせるためにヤマトをよみがえらせたわけではないし、スターシアもそんなことをさせるためにトランジッション波動砲の技術を託したわけでもない。

ヤマトに込められたいくつもの強い願い。それに泥を塗るような真似は、ヤマト艦長として避けなければならぬのだ。

「平和的解決か……それでも切り札になるのが波動砲とは皮肉よね。——本当に波動砲の全弾発射システムでカスケードブラックホールを破壊できるの?」

この中では唯一の技術者であるイネスが、珍しく疑問の声を上げる。

波動砲のシステムに関しては彼女も随分詳しい域に達しているはずだが、カスケードブラックホールについての情報共有が不足しているからだろうか、不安を感じているらしい。

「理論上はね。カスケードブラックホールと言ってもしよせんは人工物、壊せないことはないよ。あれはブラックホールみたいに見えるだけで、その正体は次元転移装置。言うなれば原理と規模が違うチューリップが、有益な資源になりそうな星々を飲み込みながら宇宙を猛スピードでカッとんでるみたいなものだから。波動砲のパワーなら、その転移装置が生み出す重力場の影響を振り切って本体に届かせることができると思うよ。実際スターシアはそれを理由にデスラー総統から技術提供を求められたらしいから、ガミラスでも勝算はあるって判断するに足りるデータは揃っているはず。だからこそ、技術提供を断られたとしても波動砲の自力開発に着手しているだろうから、ヤマトがイスカンダルに辿り着く段階で形になっていてもおかしくはない、その威力がヤマトに向けられる危険性もあるとは、忠告を受けてる」

「だとすると、イスカンダルを目の前に波動砲で狙撃される危険が伴うってことになりますね——その場合、こちらにも波動砲による反撃の名目が立つと言えれば立ちますが……その場合波動砲の向ける先は……」

「間違いなくガミラス本星になる。でも連星だというのなら、迂闊にガミラス星に波動砲を撃つと、イスカンダルへの影響が懸念されるわ……」

「たしかにね……前にヤマトが本土決戦を挑まれたときの記憶に、海

底火山脈に波動砲を撃ちこんで相手の足場そのものを崩すって手段があったの。記憶見ただけで詳細はわからないんだけど、沖田艦長の助言によって実行されて——」

「向こうの世界の俺が、撃つたんですね。俺もファイルの資料を見ただけですけど、それしか方法がない状況に追い込まれていたのはたしかだと思います。言い換えれば、和解の手段を見つけられずにガミラス本星に接近するという事は——」

「ヤマトかガミラス、どちらかが屈するか滅びるまで砲火の止まない殲滅戦になる……か。正直、心底ありがたくない状況よね」

ユリカと進の言葉にイネスも心底嫌そうに自分の感想を漏らした。

だが、ガミラスが応じてくれなければ和平はあり得ない。

それに——。

「クルーの考えも気になります。カイパーベルトの戦いやベテルギウス突破以来、明確にガミラスへの怨恨を口にするクルーはかなり減っています。それでもここまで地球を追い込み、特に木星を始めとする宇宙移民の人たちは国自体を滅ぼされています。ユリカさんが絶対的な信頼を得ているとはいっても、和平路線でガミラスとの終戦を考えていると公表した場合は、感情的に従ってくれる保証がありません。いま結束が乱れれば、ヤマトは……」

進の指摘にユリカも重々しく頷く。

単純な戦艦としての機能の高さではなく、クルーの結束が生み出す想いの力をヤマトが受け取ることによって絶大な戦果を導き出してきたのがヤマトだ。

その結束を生み出す要因の一つが目的意識。

今回のヤマトの旅は、あくまでイスカンダルに辿り着いてコスモリバスを受け取り、地球を救うことが目的。

それ以外にクルーの願望としてユリカの回復があるが、ガミラスに対しては基本的に『障害になるようなら排除する』の方針で一致している。

これは、ガミラス星の所在がわからずこちらから打って出ることができないと考えられているからこそだ。

逆に所在が知れていれば、波動砲で殲滅という極端な手段も取れるし、そうするべきだという意見が出てきてもおかしくない。

「俺たちの意思統一もそうだけど、はたしてガミラスが俺たちの要求に耳を傾けてくれるのかってのも疑問が残るんだもんな。ガミラスが交渉らしい交渉をせずに地球を侵略に掛かったのは、俺たちを下に見ていたってのもそうだけど、もしかしたら木星との戦争とか火星の後継者のテロによる国内の混乱が影響してる可能性がなきにしもあらず、なんだろう？ 波動砲があるにしたってたかが戦艦一隻。ガミラスの連中が本腰入れて潰しに来ないのも妙な話だ。波動砲が欲しいならなおさらヤマトを無力化して鹵獲したがつてもおかしくないのに……」

アキトの意見にユリカは自分なりの見解を告げた。

「たぶんガミラスは余裕がないんだよ。すぐにでも市民を避難させて次の母星を探さなきゃいけないって状況だもの。軍事力の拡張よりも移民船団の用意とか、地球を手に入れたあと、もしくはそれがヤマトのせいで失敗に終わったときのことを見据えたプランをいくつも提唱しているだろうし、そっちに労力を割かないといけないから、ある種天敵ともいえるヤマトに割ける戦力にもおのずと制限が掛かっているんじゃないか？ ほら、そうでもなければ波動砲で艦隊の一角が吹っ飛ばされることを覚悟のうえで物量で押し込むなり、ワープでの接近戦を挑んで封殺するなりで撃沈を図ることはできる。なのにそれをしないってことは、ガミラスは今後のことを考えて損失を最小限に抑えることを優先しているってことじゃないかな？」

「ありえそうだな……。でもその場合、ヤマトがカスケードブラックホールをどうにかしてやったあと、余裕が生まれたガミラスが約束を反故して後ろから撃ってくるってことも考えなきゃいけないのか……。信頼関係を結ぶってのは難しいな。過去にそれで失敗してるって思うと、なおさら」

アキトの言葉にユリカも言葉が詰まった。

かつて、木星との和平を目指したナデシコの——ユリカたちの行動は、相手の信用を得られなかったことで水泡と化した。

相手が自らの理想が他者にとっても理想であると固く信じている問題児であったことを差し引いても、両者の間にある心理的な溝を考慮できず、同じ人間だから、白鳥兄妹のような人がいるはず、という希望的観測で行動した結果の大敗。忘れられない出来事だ。

「——そろそろ、潮時かもしれないね」

天井を仰いだユリカがぼつりと告げる。

言わんとすることは、ここにいる全員がわかっているだろう。

ユリカたちは航海に集中して貰うため、残酷さを秘めた秘密を抱えながらここまでやってきた。

イスカンドルとガミラスが双子星であること。

ガミラスが地球を侵略した理由。

ヤマトの歪な改装の真実。

そして——ユリカが艦長としてヤマトに乗り込んだもう一つの理由。

すべてを一度に打ち明けることは難しくても、ガミラスとイスカンドルの関係と侵略の目的については、そろそろ打ち明けるしかないだろう。

「でも、一歩間違えればイスカンドルへの不信に繋がりがねないわよ。イスカンドルとはあなたとなんらかの形で交信して、その上で援助を申し出てくれたってことだけはルリちゃんやんが口にした推論が広まって知られているけれど、直接接触に成功したのは依然あなただけ。不信を覚えさせないですませるのは、難しいわよ」

ユリカの方針に賛同しつつも、問題があることをエリナは指摘した。

「わかっている。でも、ここから先は地球とガミラス——そしてイスカンドルの未来に関わる航海になる。最悪、ガミラスに対してはカスケードブラックホールの破壊に協力する、って形で譲歩を引き出すことはできると思うけど、破壊の成否に関わらず、波動砲の全力を解放したヤマトは——戦闘能力を喪失する。その状態でもガミラスの攻撃に備えるって目的もあって、ダブルエックスが——サテライトキャノンが開発されたのは知っているとと思うけど、サテライトキャノンの

威力でも万全じゃない……」

そう、カスケードブラックホールを破壊したあと無力化してしまうであろうヤマトを護るため、数の暴力を覆すためにヤマトとは別の大量破壊兵器が求められた、それがサテライトキャノンなのだ。

実際その威力にヤマトは助けられてきたが、波動砲ほどの破壊力はなく制約も多い。どう考えてもこれ一本で無力化したヤマトを守り抜くことはできない。そういう意味ではサテライトキャノンですら想定スペックに達しているとは言いがたいの事実だ。量産も失敗した。

となれば、ガミラスとの和解を前提としないカスケードブラックホールの破壊はヤマトにとってリスクが高過ぎるということになる。

しかし救いの手を差し伸べてくれたイスカンドルをむぎむぎ飲み込ませるわけにもいかなないので、破壊しないという選択肢は取れない——取れないが、ガミラスと言う不確定要素を抱えたままでは素直に踏み切れないのも事実。

それにガミラスと本土決戦を展開したとしたら……ヤマトは全力の波動砲を撃つ余力を残せない可能性がある。加えてガミラス星を滅ぼしたとしても、その残党まで狩っている時間的余裕はなく、その後の報復などを考えるとつくづく割に合わない。

相手は地球を上回る規模の軍隊を持っている。ヤマトが本星を撃破すれば報復のために各地に散っている部隊が集結して攻撃してくる可能性は極めて高いと、ユリカは予想している。

それにまったく話し合えず解かり合えないという確証がない限り、ユリカとしては和解して共存を目指していききたいのだ。

「ガミラスが上手く乗ってくればいいんですが……ともかく、発表のタイミングはヤマトの修理と補給が完了してからでいいですよね？ いま公表して修理や補給が滞ってしまつては問題ですし」

進の提案にユリカも頷く。

「そうだね、まずはあれを解体して傷ついたヤマトの回復と、第四惑星で水と植物の採取が最優先だね。せっかくガミラスからぐっ厚意だけだったんだし。進、悪いけど第四惑星に降りる調査隊の護衛を任せてもいいかな？」

素直に頷く進にユリカは心の中で笑った。

(むふふふ。これで進は雪ちゃんも公然とデートができるって寸法よ……！)

「艦長、惑星の大気に有害な細菌や物質が含まれていないことが確認されたなら、あなたも降りて少しリフレッシュして来なさい」

とイネスからのありがたいお言葉もあり、介護役のアキトとエリナ、護衛の月臣とゴートを引き連れて、ユリカも惑星に降りれることとなった。

——久しぶりの艦外と思うと、胸が躍る気分であった。

第十八話 新たなる脅威！ 暗躍する第三勢力！ Bパート

それからしばらくして。

艦体に付着した強磁性フェライトを除去し終えたヤマトは、作業を一気に進めたい欲求もあったのでロケットアンカーをマグネトロンウエーブ発生装置に打ち込んで牽引、ビーメラ第四惑星の軌道上进路を取った。

あとは軌道上に付いてから止衛星軌道を維持してマグネトロンウエーブを内向きに発生させて発生装置を解体、資源を回収しながらヤマトの修理作業を進め、同時進行で生活班を主体に第四惑星の資源確保を続けるだけでいい。

地球が壊滅的被害を被って以来となる緑豊かな惑星への寄港に、否応なくクルーの気持ちも高まる。

調査の結果、大気成分は地球人に適しているかつ有害な細菌や毒物も検出されなかったこともあり、停泊中は交代で希望者は惑星に降りてリフレッシュする機会が与えられたのであった。

「なに!? 試験中だった瞬間物質移送器搭載艦が消息を絶った!」

balan 星基地に赴任してから初めてドメルが声を荒らげて座席から腰を浮かせた。それほどゲールが持ってきた報告が衝撃的だったのである。

「は、はい、ドメル司令。報告では、司令が依頼していた瞬間物質移送器のテストのため、決戦場として想定していた七色星団に向かっていた艦と連絡が取れなくなり、不審に思った調査隊が向かったところ、跡形もなく消え去っていたとのことです」

ドメルの剣幕に怯えながらもゲールは報告を続ける。

「ほかにも、対ヤマト用に司令が考案されていた、ドリルミサイルを搭載した重爆撃機もテストをしていたようで、そちらも消息を絶つていきます。……司令、私見で申し訳ないのですが、ここ最近大マゼランに侵入してきていた、例の艦隊の仕業でしょうか？」

ゲールの言葉にドメルも「断定はできませんが、その可能性は十分にある」と苦々しい顔で頷く。

しかし、最悪の事態だ。

あの『瞬間物質移送器』はガミラスの最高軍事機密に属するものだ。昔からドメルが考案し、つい最近になったようやく形になりつつあった、指定対象を外部からワープさせるいわば『転送戦術』の要となる装置。

そしてあの類を見ない強敵、ヤマトと対等に渡り合うために完成を急がせていた新装備だった。

それと同時に試験していた重爆撃機は昔から存在する機体だが、ドリルミサイルは対ヤマト用に用意した絡め手のひとつだ。

惑星の探査目的で開発された特殊削岩弾をベースに、ヤマトの波動砲に打ち込んで砲栓として使用を封じ、ドリルで砲口内を掘削して内部に侵入し起爆、ヤマトを撃沈するという考えのもとに手を加えた品だった。

元が民間転用とは言え、十分な時間を掛けて改造している。たとえばヤマトでも易々とは撤去できないように。

それが外部の手に渡るということは、当然いまままでガミラスが手に入れてきたヤマトのデータも外部に漏れた可能性がある。

(いかん。転送器だけでも深刻な問題だが、ヤマトの——タキオン波動収束砲の情報が洩れれば、それを狙ったほかの星間国家が横槍を入れてくるかもしれない……！)

ドメルは状況の悪さに唸った。

もしかしたら、ヤマトとは手を取り合える可能性があるのだ。

ドリルミサイルにしても、使用すればヤマトに対して致命的な一打を与えられる切り札足りえるが、ガミラスにとっても無視しがたい六連射可能なタキオン波動収束砲に致命的な損害を与えることが前提

の兵器であるため、勝つためには必須と断定しつつもその威力の程度を見極めるのが難しいと判断していた装備。

最悪、内部まで侵入せず発射口を塞ぐだけに留め、そこから発射口を伝って作業員を内部に送り込んで内側から制圧し、ヤマトを手に入れるという策も検討している最中だというのに……！

もしも第三者相手にヤマトが敗れば——タキオン波動収束砲の技術までもが外部に漏れ、ガミラスに向けられる危険性が高い。

「ゲール！　すぐに本国に詳細を問い質してなんとしても行方を追わせるのだ！　あれがなくてはヤマトに勝てん……！　それに、われらに敵対する国家の手に渡った可能性がある以上、あれがどのようなに活用されるか予測がつかない。すぐに対策本部を設立するように訴えねば！」

ドメルの命令にゲールもすぐに応じた。

足早に去っていくゲールを見送ったドメルは座席に深く身を沈めると、机の上で両腕を組んで目を瞑った。

（これでヤマトへの勝利は厳しくなった。相打ち覚悟で挑めばチャンスはあるやもしれないが、この大事なときに犠牲は出せん。——総統、早くご決断ください。これはヤマトに和平を求めるきっかけかもしれないのです！）

「ほう、地球の——宇宙戦艦ヤマト、か」

男は捕らえたガミラス艦の乗員から聞き出した情報に興味を抱いた。

最初はなにかしら有益な資源を得られるかと、あの七色の輝きを持つ美しくも険しい星団を訪れたのだが、思わぬ拾い物を得た。

まさか、指定範囲内の物体を小ワープさせる装置を開発していると……ガミラスもなかなか優れた技術を持っているではないか。

手に入れた戦利品——瞬間物質移送器のデータは本国に送るべき

だが——その前に使えるかどうかをその目で確かめておきたい。

それに、面白い情報も得た。宇宙戦艦ヤマトと、それが装備しているという六連射可能なタキオン波動収束砲とかいう超兵器——興味が尽きない。

わが帝国に取り入れられるのであれば取り入れ、危険因子であれば消滅させる。まずは現物を手に入れねば——。

「そのヤマトの現在地は——ビーメラ星系の第四惑星か……ふむ。攻略予定のバランス星と近いな……よし、バランス星攻略艦隊から何隻か選抜して、搜索に当たらせる。気になる存在だ」

男はすぐに指示を出した。

ガミラスを揺るがす一大事が起きているとも露知らず、ヤマトはビーメラ第四惑星の衛星軌道に留まり作業を続けていた。

「改良？ パルスブラストの？」

例によって真田から持ち掛けられた改良案に首を傾げながら、ユリカは栄養ドリンクをストローでずずず……！ と啜った。

病状の進行でとうとういままでの栄養食でも足りなくなってしまうたユリカは、就寝時以外は二時間置きにこうして専用に調整された栄養ドリンクを規定量飲み、それに合わせてさらに調整された栄養食を三食食べて体力を維持している。

それでも戦闘指揮後は消耗が激しいであろうことを考慮して、医務室か医療室で点滴を受けることも義務付けられている。

いままでよりも不味くなった食事に辟易しつつも、イスカンダルまで道半ばまで来たと堪えているのだった。

「はい。修理も兼ねて、Gファルコンの拡散グラビティブラストのシステムを組み込み、パルスブラストでも拡散射撃を可能にしようと考えてまして。有効射程が短くなる代わりにより高密度で予測の難しい弾幕を張れるようになりますし、いままでどおりの収束射撃との切り

替えも可能ですから、遠方と近距離で役割分担できるようになりませう」

真田の発案にユリカは軽い調子で許可を出した。

幸い資材もあるし修理作業と合わせても時間的ロスが少ないらしい。だったら今後のことを考えてちよつとしたパワーアップも悪くない。そんな気持ちでOKを出す。

「それと艦長。修理ついでに主砲の改良もやっていいか？ 具体的に言うのだな、エネルギーコンデンサーを砲室の左右に付け足して破壊力と連射速度の強化を行ってえんだ。それと、真田つちとも相談している最中なんだが、対空火器を増設して昔の大和の最終仕様よろしく、ハリネズミみたいに武装したい。主砲や副砲の増設はエネルギー的にも艦の構造的にも無理だ。でも、パルスブラストの増設ならなんとかなる。増設分は艦橋や集中制御室からのリモートにして、エネルギーケーブルの類さえ引つ張れば——」

切実な表情で訴えるウリバタケに、ユリカは表情を変えずに考えた。

なるほど。あの姿を参考に改良を加えるのか。多少細部のデザインやバランスが変わっても、元の姿で復元することに固執していたユリカには思いもつかなかった手段だ。

そこではたと気付いた。

ユリカは知らず知らずのうちに、『ヤマトとはこの姿でなければならぬ』という固定観念に囚われてしまっていたのだと。

その点ウリバタケは柔軟だった。いやはや、脱帽させられる。

「——わかりました。どうせ資材はたっぷりとあるんです。ジャンジャンやっちゃってください。どうせほとんど持って行けないんですからここで使い切るくらい気持ちでドゥーンとお願いします」

ユリカが艦橋左側面の窓に視線を向けると、窓の外には哀れなことに工作班と自身のマグネトロンウェーブで解体されてバラバラになってしまった、マグネトロンウェーブ発生装置の残骸が浮かんでいる。

シームレス構造の外層はマグネトロンウェーブではどうしようも

ないので、小バツタやコスモタイガー隊の手で外殻に切れ目を入れ、そのあとマグネトロンウェーブで内側を解体して現在に至る。

もちろんデータを得るために再度内部に突入して制御装置の類を抜き出し、遠隔操作で強引にマグネトロンウェーブを作動させて解体するのは忘れてはいない。

困窮気味だったコスモナイトがそこそこゲットできたのもありがたい限りだ。

しかし、構造を解析した真田曰く「別に使う必要がないのにわざわざ組み込まれていた」とのことなので、ヤマトのためにわざわざ置いておいてくれたのだろう。

ありがとうガミラス、大事に使わせてもらいます。

——しかしこうも露骨だと、バランスに基地があることを推測してしまうクルーも出てくるだろう。

変に勘繰られるよりはユリカの口からその可能性を示唆してしまうのがいいのだろうが、やはり民間人がいる可能性を指摘するのは戸惑われる。

そのためにはガミラスとイスカンドルの関係、彼らの置かれている状況をすべて洗いざらい打ち明けなければならぬからだ。

「サンキュー艦長！ エアマスターとレオパルドも本体部分は出来上がってきてる。あとは武装関連さえ形になれば実践投入可能だ。最低でもバランスに付く前には形にしてみせるぜ！——なんつーかよ、バランスがどうにもキナ臭くてな。そこに付く前に少しでも戦力を拡張しておきたくて仕方ねえんだ。まだ半分も来てねえのに、ここが正念場だ！ つて感がささやいてな」

「……そうですか。とにかく要望を受理しました。改修作業をお願いします」

ウリバタケにはまだ真相を伝えていない。だが彼なりの感が働いているらしい。

正直普段は有能だが問題が多い人物という認識が強く、今回も資材が余っているからには——というニュアンスかと思ったが、言っていることには筋が通っている。

拒否する理由はない。

「ユリカさん、ちよつといいですか?」

第三艦橋に降りて、マグネトロンウェーブ発生装置のコンピュータを解析していたルリの姿がメインパネルに映し出される。

「どしたのルリちゃん?」

「はい、解析していてわかったのですが、やはりあの物体は軍事目的ではなく廃棄処分した宇宙船の解体を目的として建造された、スクラップ処理施設です。それにいろいろと情報も残されていた——というよりは、意図的に残したとされる情報がいくつかあります」

ルリは助手として手伝って貰っていたハリと一緒に、解析によって得られた情報を伝えてくれた。

それはこの物体がバラン星に配備されていたということ。

この物体を製造したのはどうやら民間企業らしく、ここに置かれる以前は民間のスクラップ業者によって運用されていたということ。

さらにプレゼン用と思われる資料も残されていて、最終的には地球に移送して移民に伴う都市開発の資源として移民船の解体作業に役立つ云々という内容まで、きつちりと。

「あちゃー……」

まさかこんな方法でヤマトにそれを警告してくるとは思わなかった。

しかしこれでバラン星には民間人がいることがわかった。それも決して少なくない人数が。ユリカの推測は正しかった。今回の『賄賂』の意味も。

「ユリカさん……これが嘘でなければ、中間目標と定めていたバラン星にガミラスの拠点があつて、そこに民間人が決して少なくない人数が入植している、ということになりますよね?」

ルリはやや青ざめた表情でユリカの判断を求めている。

気持ちはわかる。中間目標として目指していた場所に敵の基地があり、しかも民間人が入植しているなど、ガミラスに関する情報が制限されているルリには予想がつかないことだろう。

ルリは聡明な子だ。この情報と銀河を出てからもガミラスの攻撃

が行われているという事実から、イスカンドルとガミラスが同じ大マゼランか、小マゼランにあることを推測しているはずだ。

そこから予想できることは、あまりにも多い。そして最悪の可能性をいくつも含んでいる。

彼女はいずれの可能性も考えだし、混乱しているはずだ。

「ルリちゃん、このことをほかに知っているのは？」

「ハーリー君とオペレーターだけです。解体に関わった工作班の人たちは、ガミラスの言語がわかりませんから……」

「じゃあ悪いけど、こつちでタイミングを見て発表するからそれまでは黙ってて。下手に不安を煽ってヤマトの修理と補給が遅れるのは問題だから」

ユリカに言われてルリもハリも、E C Iのオペレーターたちもやや青ざめた顔で頷く。

それでいい、いまは、まだ話せない。

「そのままモヤモヤしても体によくはないから、手の空いた人は星に降りてリフレッシュして来て良いよ。ちょうど、先に行った便が帰って来てるし」

ユリカの提案に全員が頷き、責任者ということに残ったルリ以外のオペレーターガールズは、E C Iを後にして帰艦したGキャリアーに向かう。

多目的輸送機を使った食べられそうな植物と綺麗な水の採取作業。それに託けて、クルーたちは自然の中に羽を伸ばしに降りている。二機ある内の一機は、そういった観光目的で運用されていた。

ヤマトが大気圏内に降りていけば、第三艦橋両脇にあるバルジ内に格納された地上探査艇も使えるのだが、まだ修理作業と金属資源の補給作業が終わっていない。

無重力のほうが作業しやすいので、それが終わるまではヤマトは大気圏内に降りれないし、そもそも作業の終了が同時なら降りる機会すらない。

「——俺たちも黙ってることにするぜ。艦長の意向に従うよ」

「ええ。私もいまのことは口外はしません。——艦長の判断に従いま

す」

ウリバタケと真田も箝口令に従うと意思表示をしたあと、各々の作業に戻っていった。

ユリカは第一艦橋で勤務していたゴートやジュン、ラピスにも同じように口止めし、天井を仰いで呟いた。

「……………ここからが、正念場だね……………」

その頃古代守は、連絡船の中で一人寂しい食事を摂っていた。

スターシアがフラッシュシステムからもたらされた情報に嘆き悲しんだあと、彼女を必死に落ち着かせた守はその詳細を窺った。

要約してしまえば、次元断層かなにかに落ち込みボソソジャンプの演算ユニットとの接続が一時切断、その後脱出に伴い再接続された影響で抑えていたナノマシンが活性化、ユリカの病状が急激に悪化した可能性が高い、とのことだった。

かつて彼女とリンクしイスカandalと繋いだガンダムのシステムは、この危機的状況をもイスカandalに漏らすことなく伝えたのである。

しかし、おかげでこのフラッシュシステムは彼女に断続的に接続状態にあるらしく、ヤマトの所在に関する手がかりを掴むことができた。

時間的余裕はないと判断して、ナビゲーター代わりにガンダム・フレームから切り離れたボソソジャンプシステムとフラッシュシステム、使えそうな部品を可能な限りコンテナに詰め込んで連絡艇に乗せた。

あとは当初の予定どおりかつてはガミラスとの往来に使われていた連絡艇に例のワープユニットを接続して準備完了だ。

スターシアを一人残していくのは不安だったが、彼女からも「ヤマトを——ユリカを頼みます」と言われては留まってはられない。

一日でも早く合流し、ヤマトの旅の手助けをせねばならない。

スターシアも文字どおり命を削って救いを求めてきたユリカを救いたがっている。一目会いたがっている。

『滅亡寸前のイスカンドル』において、すでに隣人の暴走を止める活力もなく、ただ存在し続けていただけのスターシアに活力を与えてくれた彼女を。

そして――

「守。あなたも無事に再びイスカンドルにやってくることを、願っています」

守のリハビリテーションを務めさせるうちに、スターシアの介護を受けるうちに、互いに恋に落ちた自覚はある。

まだ想いを交わしてはいないし、スターシアは守が地球に帰ったほうが幸せだと考えているようだが、守はイスカンドルでスターシアと添い遂げる覚悟を決めている。

愛するスターシアのためにも、生きて戻らねばならない。

そしてイスカンドルをカスケードブラックホールから救うためにも、たとえ離れ離れになってしまうとしても、弟の進がこれからも生きていく地球を救う。

そのためにヤマトに力を貸す、それがいまの守に与えられた使命だ。

「待っていてくれヤマト。必ずこの物資を届ける。どれほど微力であっても、必ず助けになってみせる。替えのない命を散らさせてしまった、俺の部下のためにも……！」

思い返すのはアセビの部下。

明日への希望を繋ぐために共に命を懸け、先に逝ってしまった若者たち。その犠牲は――無駄にできない。

彼らに報いるためにも、ヤマトを絶対にイスカンドルに辿り着かせ――地球を救うのだ！

その頃ヤマトは、ビーメラ第四惑星での停泊二日目に突入してい

た。

初日の調査で食用にできる植物の存在が確認され、水も念のためフィルターを通せば飲み水としても使えることがわかった。

ついでに被弾やらなんやらで艦内の圧縮空気ボンベの消費もそこそこあるので、水を分解して少し補充していくことも決定した。

まさかこのような惑星が見つかり補給ができるとは思っていなかった生活班は安堵するやら喜ぶやら、とにかくまたとないチャンスとがつついていた。普段の節制生活の反動であろう。

それに同行して漫画のネタ集めに写真を撮りまくってるヒカルの姿もあったが、珍しいことには違わない緑豊かな地球型惑星なので誰も咎めない。むしろ帰ってからマンガ家稼業を再開したときの楽しみとして大いに取材してほしいとエールさえ送られていた。

進はユリカに言われたとおり雪をはじめとする生活班の護衛として降り立ったのだが——お約束的に原住生物、しかも運が悪いというか、地球で言うのならクマに相当するような大型（体長三メートル）の肉食獣に見事遭遇した（しかも数回）。

進は偶然ユリカのための下見に来ていたアキトに助けを求めつつ、死にも狂いで肉食獣の囿となりコスモガンを連射、気分は生物パニック映画な状態で何度も危うい橋を渡ってようやくと撃退した（この前の生物兵器並みにタフであった）。

苦心の未撃退した肉食獣は調査分析に回され——結果食用として使えることが判明したので、ヤマトの食卓に並んだ。

獣肉ゆえ癖が強かったものの、太陽系を脱してからは専ら合成肉が主体だったこともあってか、ひさかたぶりの天然物のお肉に舌鼓を打ち、みな美味しく頂いたという。

あまりに好評であったため、生活班では緊急会議が招集され、雪や平田を中心に意見をぶつけ合った結果、ある結論が下された。

それはまったく間にユリカのもとに上げられ、あまりの熱意に彼女をドン引きさせつつ判を押させることに成功したという。

つまり……。

「ホントに少し、少しだから！」

と二日目にして戦闘班を動員しての『狩り』が実行される流れとなつた。

大型獣を中心に二〇頭ばかりを確保。クルーの英気を養うためと言いつつ全員参加型の焼き肉パーティーが実施され、クルー全員で飲みや食えやどんち騒ぎが発生した。

——唯一まともな食事のできないユリカが寂しげにしていたことなど、彼女の身内を除けばだあくれも気に留めていなかった。

停泊三日目。潤沢な物資に肉で力を付けた工作班の努力の賜物か、当初四日掛かるとされていた主砲の改修作業が三日目にして終了。エネルギーコンデンサーの追加と、第二・第三主砲の上部（測距儀基部）に小型連装パルスブラストが追加されるなど、原点回帰したかのように力強いシルエットに生まれ変わった主砲は、口径換算で四八センチ砲相当の威力に強化されながらもエネルギーチャージのインターバルが据え置きという強化を施されていた。

ついでにウリバタケの要望で第二主砲上部に白い錨マークが追加、砲身の先端に三本の白線が追加された。なんでもデータの中にあつたヤマトの過去データをそれが気に入らつたらしい。

加えて艦首甲板（第一主砲の前方）部分にも四連装パルスブラストが二列で計六基が追加、第一主砲と第二主砲前の甲板左右に三連装垂直ミサイル発射管が増設された。

艦尾もメインノズル根元に四連装タイプが二基ずつ追加。資材搬入口入り口付近四連装タイプが左右で二基、小型連装が二基追加された。

第二副砲左右にあるパルスブラストの後方（艦中央側）に中距離迎撃ミサイル発射管が追加され、艦底部にも第三艦橋と艦首側のドームとの間に格納式連装パルスブラストを四基格納したフェアリング型の部品が左右で二基追加されるなど、ヤマトはより一層の重武装化を果たしていた。

そして、ヤマトが停泊して五日が経過。

改装工事の影響で出発の予定が少し遅れ、まだビーメラ4に滞在していたヤマトの元に、死んだと思われていた古代守が合流に成功した

のであった。

「守!? この野郎……! 生きてやがったのか!?」

「に、兄さん!? い、生きていたんだね! 兄さん!!」

停泊中のヤマトののすぐそばになにやら宇宙船がワープアウトしたので戦闘体制に移行しながら様子をうかがってみれば、まさかの展開に一同顎が外れる思いだった。

二度と会えぬ考えていた無二の存在の奇跡の生存に、真田や進の様に驚きと嬉しさを隠せず騒ぎ立てる者もいれば、

「うううっ……! よ、よがっだよ、くくっ!!」

「古代中佐——本当によかつ……ううっ」

ユリカとルリのように泣き出して止まらなくなる者もいた。

ヤマトクルーには守とは初対面の者も多かったが、古代守の名前は知られていた。

かつてユリカたちを逃がすために囷となり、タイタンで没したアセビの艦長。言わばヤマトの首脳部を守り切った恩人である。

思いがけない来客にヤマト艦内がにわかには活気だっていたなか、空気を読まず守が持ち込んだイスカンダルの物資の数々に狂喜乱舞していたのは、あいも変わらずウリバタケだった。

ついでに感動の再会を見てもらい泣きしながらも「漫画のネタゲツト!」と写真撮影をしているアマノ・ヒカルの姿もあったという。

「そうか……そういう経緯があつたんだ」

いつしか話し合いの場は中央作戦室に移っていた。

……話の流れでユリカ（とおまけのアキト）が進の義理の親も同然の関係に至ったことを聞かされた守は、最初は目を点にして驚いたあと、「まあ、そういうこともあるかもな」とちよつと複雑な顔をしたが一応受け入れた。

弟を救ってもらったのは事実だし、最後に姿を見たときに比べると見違えるほどに成長したその姿を見れば不満不平はない。

——でもお母さんはぶっ飛び過ぎだと思ふ。

常識人な守はそう考えたが、口には出さないでおいた。

あと弟のノリがやたらと軽くなっていますせんか、悪影響与えていませんか。

とも問いただしたかったが、やはり黙っておくことにしたという。「はい。俺は、スターシアに助けられ、今日まで生き延びることができました。そして、治療を受けながらどうにかしてヤマトを支援できないかと手段を模索していたところ、艦長とリンクしていたガンダムのフラッシュシステムが共鳴現象を起こしまして……」

その場に集められていた各部署の責任者と副官一同に、艦内放送で傍聴を許可されたクルー全員が「そんなことになっていたのか」と驚きの声を上げているのを耳にする。

そうか、やはり秘匿していたのか。

イスカンドルがどうやって地球のことを知ったのか、そしてなぜピンポイントに地球が欲するものを提供できたのか、提供する用意を整えられたのか。ふたを開けてしまえば簡単な問いかけ。

だがその実限りなく奇跡に近い手段が取られていたなど、証人なしでは信じられないだろう。それに——ガミラスとの関係も悟られないようにしなければならなかった理由も察しはつく。

守の到来は、そういった秘密の箱のカギを開ける行為だったのだと、いまさらながらに知った。

「そこで俺は、スターシアの許可を得てイスカンドル王家が住まうタワーの地下にある倉庫から、使える物がないかと探してみました。そこで、ガンダムに使われていたとされる部品を発見することができました。これがヤマトへの助けになる考えた俺は、スターシア協力の元、イスカンドルに残っていた連絡艇と、ガンダム用のオプションだったと思われるワープ可能な超長距離用ブースターユニットを使つて、合流を図った次第です」

「ふくむ。しかし、あんな外付けのオプションでこれほどのワープが実行可能とはな……改めて思うが、イスカンドルの技術は本当に凄いな」

「ああ。とは言え無茶が過ぎたようだ。倉庫で埃を被っていた物をろ

くに整備もせずに使ったからな……本当なら完全な状態で渡してやりたかったんだが、そう上手くも行かなかつたらしい」

申し訳なきように告げるが、真田もウリバタケも「参考にできるだけありがたい」と特に気にも留めていない様子。

——守が乗ってきた連絡艇の追加エンジンユニットは、メンテ不足で動かしたためかオーバーヒートを起こしていた。

ビーメラに到着し、ヤマトに接触できたからよかつたが一步間違えば漂流者だったと思うと、われながら軽率な行動だったかと反省する思いである。

「ともかく、回収したエンジンからこの凶面に書き込まれた部品を抜き出して、壊れてるようならコピーしてヤマトの波動エンジンとワープエンジンに組み込めばいいんだな？　しかし、六連波動エンジンの設計もイスカンドルがやってくれたはずなのに、ここまで開きがあったのか……」

真田とウリバタケはひたすらに唸っている。

たしかにイスカンドルの技術は地球のそれを圧倒しているのだから、気持ちはわからなくもない。

そう納得していると、ウリバタケからエンジンに仕込まれたブラックボックスについての質問が飛んできた。

「ウリバタケさん、それは俺の一存では話せません。艦長の許可がないと……」

守がそう答えるなり、みな視線は一基にユリカに向かう。

あ、まずいかもしれない。

「——艦長、そろそろ話してくれませんか？　ヤマトの歪な改装やブラックボックス——そしてなにより、あなたが『艦長として』乗り込んだ本当の理由を」

真田の詰問にユリカが目に見えて狼狽えている。

「あなたの体調は——あまりにも悪い、悪すぎます。普段の振る舞いから忘れそうにはなりますが、単にイスカンドルに行くことだけが目的なら、冷凍睡眠という手もあります。それができないにしても、もつと軽い役職についても文句は言われないうでしょう。たしかにわ

れわれには、あなたの力が必要でした。それはいまも変わらない。あなたの働きがあったからこそここまで来れました。感謝してもし足りません。だからこそ、地球を救うという使命に並ぶほど、あなたの未来を開きたいという願いは、クルー全員で共通しています」

真田の言葉は真摯だった。

当事者でない守の胸も打つ正直な思いの発露。だからこそ、ユリカも正面から受け止めるしなくなっているようだ。

「教えてください艦長。艦長という役目に付き、われわれを導いた理由は——ヤマトの精神を、それを構築した前艦長の遺志を継がせるというだけではなかったはずですよ。単に戦闘指揮をするだけなら、戦術アドバイザーでもよかったです。たしかに影が薄い副長ですが「おいつ！——それでも艦長の不在時には為すべきことをされていましたし「無視かよっ!？」——わざわざ艦長になったのにもなにか意味があるはずですよ」

ジュンの嘆きを完全に無視して真田は続ける。誰もジュンのフォローはせず、ユリカの解答だけを待っている。

ひどい扱いだと思ったが、場の空気が深刻過ぎてフォローに入れな

い。

申し訳ない、アオイ副長。
「……わかった。全部話すよ。その代わり、約束して。これから明かされる『真実』がどれほど残酷だとしても、受け入れ難いとしても、前に進むことを止めないって——ヤマトの精神である、『最後の最後まで諦めない』を果たすって」

力の籠ったユリカの言葉に、クルーは相当辛い内容であることを察し、ごくりと唾を飲みこんでから頷く。

クルーの覚悟が定まったと感じたユリカは、重々しく口を開こうとする。そのときだった。

艦内に非常警報が鳴り響いたのは！

「どうしたの、オモイカネ!？」

すぐにルリが監視を任せていたオモイカネに問い合わせると、「警告!」「未確認の艦隊接近中!」とウインドウが躍る。

なんとも悪いタイミングで現れるものだ。守も内心憤りを感じずにはいられない。

「ネタばらしはまたあとで！ 総員戦闘配置！」

こうなつては仕方がない。いまは招かれざる客をどうにかしなければ。

守も「とりあえず第一艦橋に！」と言われたため、進の戦闘指揮席の左隣にある予備操縦席に着席して艦の管理を手伝うことになった。とは言え、初めて乗る艦に初めて扱う計器。

いかに場数を踏んだ守とて、マニュアルを呼び出してまずは計器の場所と種類を覚える必要があった。

ヤマトの計器は、それまでの宇宙戦艦と勝手が違い過ぎる。

守は四苦八苦しながら少しずつ覚えていくしかなかった。

そうやって慌ただしくなったヤマトの艦内とは対照的に、未確認の艦隊はゆっくりと威厳を示すかのようにヤマトに接近してくる。

「データベースに無い未確認の艦隊だ。フォルムも違い過ぎる……これは、ガミラスではない！」

額に汗を浮かべながらゴートが報告する。砲術補佐席から呼び出した過去の戦闘記録データに該当する物がないことは、進も戦闘指揮席から確認を取った。

過去のヤマトの戦闘データは欠損が多かったし、下手な先入観を得ないようにと意図的に封じられているので、この場で参考にはできない。

ファイルをここに持ち込むのは論外。出たところ勝負しかないか。

「艦長、敵艦が通信を求めてきています」

緊張を顔に滲ませながらエリナが報告。ユリカがすぐに繋げるように指示すると、頭上のメインパネルに人の顔が映し出された。

灰色の肌到头髪の無い丸坊主の頭に、強膜（白目と呼ばれている部分）が青く、唇も厚く角ばった顔立ち。そして筋骨隆々とした体格のいい身体。

いままで得たデータから推測されるガミラス人とは、容姿がかなり違う。

身に付けた服もまるでタイツの様で体のラインが出ていて、肌の色と同じ灰色なのでまるで全裸と錯覚を覚えそうだ。

それ以外の服飾品は黒い肘まである手袋と膝までのブーツ、裏地が赤い黒のマント。軍服なのは、理解できた。

「——こちらは地球連合宇宙軍所属、宇宙戦艦ヤマト。貴官の所属と目的を教えられたし」

まったく未知の文明ともなれば言語が通じる保証はない。少なくともヤマトには彼らの言語のデータもないので、敢えてこちらから声を発するユリカ。

もしかしたら向こうはこちらの言語データを持っていて、解析して話せるかもしれない。

ユリカの思惑は当たっていたようで、画面に映し出された指揮官と思しき男は一度目線を画面の外に向けてなにかしら手で合図をする。しばらくして男が口を開けば、こちらの言語——日本語に翻訳された言葉が返ってきた。

どういう手品かを追求する余裕はないが、かなり高度な文明を持っている様子だった。

挨拶もそこそこに告げられた男の言い分は、極めて単純であった。「ほう、貴様らがガミラスも手を焼いているという宇宙戦艦ヤマトか。その力、われらが暗黒星団帝国に献上して貰おう。ちようどいま行っている宇宙間戦争に役立ちそうだ。速やかに降伏し、その艦を明け渡しして貰おうか」

居丈高に告げられた内容にユリカは即座に「お断りします」と断言する。

当然だ。ヤマトの力はあくまで『護る』ためにこそあるのだ。交戦国の母星まで遠征することも想定されているとはいえ、それはあくまで戦争を終わらせるための手段の一つに過ぎない。

間違っても侵略を目的とする輩には、ヤマトは渡せない。

——そしてなにより、進はその名前に覚えがあった。

『ヤマトが——地球が戦ったことのある侵略国家』の名前。ファイルに記されていた。つまり、それを記したユリカも知っているという

ことになる。

「ほう。なかなか強力な超兵器を備えていると聞くが、まさかそれだけでわが艦隊に勝てるでも思っているのか？ よかろう、ならば力尽くで奪うまで。せいぜい、足掻いてみせるといい」

言うだけ言っただけで一方的に通信を切られた。その態度に通信を繋いだエリナも呆れ顔だった。

宣言どおり、眼前の敵艦隊は戦闘態勢に入った様子。艦同士の間を離れて攻撃態勢を取る。

眼前の艦艇は、全長が一五〇メートルほどのおにぎり（三角形）を連想させるような円盤型の艦体を持ち、中央よりやや後ろに直立した細めの艦橋、その頭頂部分にアンテナが、艦橋の前後に有砲身の三連装砲が装備されている艦艇が一五隻。

さらにさきほど通信してきた指揮官が座乗しているであろう敵艦は、共通のフォルムを持ちながらも先の艦艇の倍の大きさを持っている。その上三連装砲塔が艦首側が左右に一基ずつと後方一基の計三基。艦橋トップにまるでヤマトの艦長室のようなドーム状の艦橋を有し、艦首からは触覚のようなセンサーが伸び、艦底部には大小合わせて四つのミサイルのような構造物が見える。

いずれも艦体が黒く塗られ、艦首や艦尾の先端部分がオレンジ色で塗られている。

いまさらではあるが、改めて別の星間国家と遭遇し凶らずも交戦状態に突入してしまったことを実感する。

——喧嘩売ってきたのは向こうだが。

不幸中の幸いか、どうやら艦載機は居ないようだ。

「コスモタイガー隊は出撃を急げ！ 主砲・副砲発射準備！ フィールド戦闘出力で展開！」

進がマイク片手に各部署に指示を出す。

本来準備に相応の時間が掛かるコスモタイガー隊も、これまでの戦訓に則って即座に対応できるように最低数の機体が用意されている。

駐機スペースに引き出してGファルコンを接続し、後は下部の武器庫から必要な装備を引っ張り出してカタパルトスロープに乗れば、四

機は即座に展開できた。

それにカタパルトを使用するガンダム二機と合わせれば六機もの機体をスクランブル可能だ。

展開された機体はアキトのダブルエックスにリョーコのエックスデイバイダー、月臣、サブロウタ、イズミ、ヒカルのエース勢。

このメンツは経験も技量もヤマト艦内では上位の存在なので、ローテーションで当番から外れていない限り、だいたいは緊急出撃メンバーに選ばれている。

彼らがヤマトを発信するほぼ同時に、改修されより強力になった主砲が重々しく、副砲が軽やかに旋回して狙いを付ける。

「主砲、副砲、発射準備よろしー」

「発射ー」

ゴートの報告を受けて進が射撃を指示する。

誕生以来シンボリックな存在であり続けた自慢の四六センチ砲が、より強力な四八センチ砲相当の威力になった重力衝撃波を撃ち出す。

こちらは改修を受けていないが、十分強力な二〇センチ砲も主砲に続いて重力衝撃波を吐き出した。

砲撃は狙い変わらず黒色の艦艇に命中、一撃でその艦体を打ち砕く。ヤマトの主砲の威力は未知の異星人艦艇に対しても健在であった。

——しかし、ガミラス艦に比べると装甲防御が優れているのか、それとも着弾時に観測できたフィールドの強度が優れているのか、破壊の規模が小さい。強化された主砲でも、体感的には改修前にガミラス艦を撃ったときと大差ない印象だ。

どうやって知ったか知らないが、どうやら波動砲以外は大したことないと見下していた様子で、思わぬ反撃に艦隊が浮足立ったのが感じ取れる。

それでも無事な艦から即座に『ビーム砲』が放たれヤマトに命中する。

被弾の具合から粒子ビーム砲の一種であることが伺えるが、かなりの威力だ。

ヤマトのフィールドに対して通用する貫通力と破壊力を持っている

るようで、集中砲火を浴びれば決壊する可能性がある。

極力被弾は避けるべきだろう。

ヤマトから発進したガンダムとアルストロメリアの混成部隊は協力して敵艦に食らい付き、六機分の火力を一齐に叩き込んで瞬く間に一隻を火だるまにする。

もともと単機で対艦攻撃を行えるガンダムが二機、それにアルストロメリアのお供が付けば当然の結果だった。

しかし、やはりガミラス艦に比べると固いらしく予想よりも攻撃回数が増えたようであった。

ヤマトは巧みな操艦で敵艦隊の攻撃を躲し、ときに被弾しながらも持ち前のフィールド強度と重装甲で耐え凌ぎ、コスモタイガー隊と連携して確実に敵艦を沈めていく。

思いもよらぬ猛反撃に戦意を失ったのか、大口を叩いたわりには旗艦と思われる大型艦はあっさりと逃げの姿勢を取った。

そして旗艦を逃がすためか、ヤマトに最も接近していた小型艦が体当たりも同然の勢いで急接近。小回りの利く副砲の一撃で撃沈はしたが、残骸の一部がヤマトの第一艦橋の真後ろに激突した。

質量兵器には弱いフィールドの弱点と艦体に比べれば装甲が薄い艦橋ということもあり、損傷は避けられなかった。

幸い気密も破れず、第一艦橋にも鐘楼自体にも決定的なダメージを受けるには至らなかったが、艦長席の真上付近で内壁の一部が破損し、脱落してしまった。

——艦長！ 避けて!!——

ヤマトの切羽詰まった声に反応したユリカはすぐに席を立ったが間に合わなかった。脱落した内壁の一部は鋭い槍となって彼女の腹に突き刺さる。

「が……っ!?!」と短い苦痛の声がかから洩れる。不幸中の幸いか、服の人工筋肉が防刃繊維に似た役割を果たしたことで即死は免れた。

——免れただけで、致命傷であることに変わりはないが。

「ユリカ!!」

「いやあああつ!!」

エリナが叫び、ルリとラピスが悲鳴を上げる。

一気に混乱に見舞われたヤマトを尻目に、大型艦は生き残った小型艦数隻を引き連れて全速力でヤマトから離れていく。十分に距離を取ってからワープで逃げるつもりだろう。

だがこちらは追撃どころか動向を見送るどころではなかった。

「追撃は不要だ！ 雪！ イネス先生！ 艦長が負傷した！ すぐに手当ての準備を！」

進は戦闘終了を指示して医務室で待機中の二人を呼び出す。しかし進の目から見てもユリカが致命傷なのは一目瞭然だ。

——これは、普通的手段ではどうにもならない。

（こんなところで……死なせない！）

進は独断で『ブラックボックス』の一つを使うことを決意した。本来イスカンダルで完全なものになるはずのそれを無事に使える保証は限りなくゼロに近い。

だが、そのシステムを搭載しているのはヤマトなのだ。

命を宿し自我を得たこのヤマトなら、消えかけた命を繋ぐくらいの奇跡を起こせる可能性はある。

いや、ユリカとの関係を考えればそれくらい軌跡は起こせる！

進は自分の席のマイクにしがみつくようにして怒鳴った。

「波動砲、モードゲキガンフレアで用意だ!! 急げっ!!」

「古代！ そんな場合じゃ——!!」

「敵艦に追撃するにしても主砲で——!!」

気でも触れたかと止めに掛かった大介やジュンなど気にも留めず、進は艦長席に駆け寄る。

ユリカはすでにゴートの手で座席から移動させられ、すぐ横の床に寝かせられている。担架なしで運ぶのは無理と判断してのことだろうが、ありがたい！ これなら意識を嫌でも集中できる！

進はユリカがどかさされた血まみれの艦長席に腰を下ろすと、眼前のスイッチを所定の順番で操作した。

すると、正面の一番大きなモニターが前方に倒れ、中からアームで保持された艦長用の波動砲トリガーユニットが現れ、進の視線の高さ

にまで持ち上げられる。

戦闘指揮席とは形状の違うトリガーユニットは、シンプルな筒状の本体と上部に覆い被さる様に取り付けられた二枚のターゲットスコープを備え、右側面に支持アームが接続されている。後部のボルトは戦闘指揮席の物と違ってほとんど伸びていないが、進は構わずそれを押し込む。

小振りで二枚重なったターゲットスコープに『Modeゲキガンフレア』と表示された。そのあとファイアイルと口頭で教えて貰っていたとおり、ボックス下部の隠しパネルを開いて中のスイッチとレバーを操作。

するとターゲットスコープの表示が変化、第一艦橋の各席や機関室やECI等にも同じ表示が現れた。

『コスモリバーシステム 起動』
と。

「な、なんだよこれ……?」

第一艦橋の喧騒も知らず、指示通り波動砲モード・ゲキガンフレアの準備を進めていた太助は、コンソールとウインドウに表示された単語に我が目を疑う。

——コスモリバーシステム。

それはヤマトが地球を救うために求め、イスカンダルにあるとされている装置のはず。

なぜそれが、ヤマトのコンソールに表示されているというのだ。

「なんだこれは……!?、これが、ブラックボックスの正体なのか!?!」

驚愕する山崎たちの前で、最終手順前まで準備されていたエンジンは、機関士の手を離れて勝手に動き出した。

ベテルギウスのときのように。

「頼むぞヤマト……!、俺たちの想いに答えてくれ……!」

——やってみせます。彼女には恩がありますので——

「——タイミングは任せるわ。いまは不完全でも、コスモリバーシ

システムに掛けましょう」

事情を知っているらしいエリナは進の行動を支持することを表明し、ユリカの手を握った。

「ゴート・ホーリー、彼のタイミングに合わせて破片を引き抜いて」

「そんなことをしたら出血多量で死ぬぞ!？」

エリナの思わぬ発言にゴートは難色を示す。だがエリナに目線で訴えられた。信じて欲しいと。

その視線にゴートも折れ、呼吸に合わせて動く破片に手を添えて、いつでも引き抜けるように準備した。

「古代君……いったいなにをしようとしているんだ?」

状況が飲み込めないままではあるが、それが唯一ユリカを救う手段だと察したジュンも作業のバックアップをすべくコンソールを覗んでいる。

システムのコンディションを示すステータスマニターの表示は、ほとんどの装置が接続されていない、不完全な状態であることを端的に伝えている。

が、最後に記された一文を見て彼の表情がはつきりと歪んだ。

『アクセス端末・情報変換素子 ミスマル・ユリカ 未接続』

「……ユリカが——コスモリバーシステムの部品?」

次々と現れる秘め事の数々にもう理解が追い付かない。

だがそれでも理解できたことは、時期は不明だが進はすべての真相を知っていて、この窮地を切り抜けるためにいままさに明かされようとしていた秘密を駆使しようとしていること、そしてエリナも知っていたということだけだ。

「艦長の様子は!？」

息を切らせて雪や医療科のクルーを数人引き連れて来たイネスが開口一番に問う。

しかし誰かが答えるより先に、艦長席の傍らに寝かされたユリカの姿を見て険しい表情になる。

——致命傷だ、治療はとて間に合わない。

そして、艦長席に座った進の姿と表示されたウインドウの内容からなにをしようとしていることを察して、ユリカを運び出すことを保留した。

「進君!?…なにが——っ!?!」

突然連絡も取れなくなり、安定翼を開いたヤマトの姿を見て状況を確認したかったので第一艦橋に直通でかけてみれば、ひどい惨状だった。

だが進が艦長席に座っていることからすべてを察したアキトは、格納庫には戻らず第一艦橋にダブルエックスを横付けすると、非常用のエアロックを使って艦橋に飛び込む。

「ユリカ!!」

アキトはすぐにユリカの傍に駆け寄ると、視線で進に促す。

コスモリバーズにすべてを賭ける、と。

準備がすべて完了したことを確認した進は、艦内通話の全回線オープンした。

これからの『奇跡』を形にするには、ほかのクルーの協力が不可欠だ。

「戦闘班長の古代進だ! 艦長が負傷されて危険な状態にある! 応急処置のためヤマトのブラックボックスの一つを緊急起動する! 詳細を説明している時間はない! 全員スリーカウントに合わせて艦長が助かるように祈れ!」

有無は言わせない強い語調で一方的に通達する。

困惑しているだろうが構っている時間が惜しいのだ!

「いいか!?! 三……二……」

カウントを開始。困惑の音が漏れ聞こえていた艦内通話も静かになった。

さあ祈れ、祈ってくれ。

その祈りが奇跡を呼び、艦長の命を繋ぎ留めてくれるのだ!

緊張で手のひらに汗が浮かぶ。額から流れ落ちた汗が目に入る。

「……起動!!」

カウント終了と同時に進はトリガーを引き絞る。同時にゴートがユリカに突き刺さった破片を引き抜いた。

機関室で六連炉心が突入ボルトに接続され、膨大な量の波動エネルギーがすべて波動砲口から放出され、ヤマトを包み込む。

ここまではモード・ゲキガンフレアと同じだった。

違うのはここから、ヤマトの艦内にも光の粒子のようなものが舞い散り、空間が優しい青い光で満たされる。

——それは神秘的な光景であった。破片が引き抜かれ傷口から溢れだした血だけでなく、それまでに流れていたすべての血液が、まるで逆再生のように傷口から体内に戻り、傷口がどんどん小さくなっていく。

あれよあれよという間にユリカの傷口が塞がっていき、青ざめていた顔にも血色が戻る。

成功。

不完全なコスモリバーシステムが想定どおりに起動して、ユリカの『時間を戻して』致命傷を塞いでくれた。

——賭けに、勝った。

「ほらー。ぼさっとししないで艦長を医療室に運ぶわよ！ 完治したわけじゃないんだから！」

イネスは呆然としている雪たちを急かし、持ち込んでいた担架にユリカを乗せ、医療室に向かって超特急。

完全に塞がり切らなかつた傷口からはまた出血が始まっていたため、困惑しながらも雪たちも大人しく従う。

ユリカが運ばれて行くのを見届けた進は、こわばった両手を波動砲トリガーから引き剥がして、艦長席に体を預けて虚脱する。

——これで、ヤマトの秘密の大部分は明かしてしまった。

もう後戻りはできない。これから先はどれほど辛い現実に向かいながらも、前に進む以外の選択肢は存在しない。

だれもがすべてを理解したうえで乗り越えていくしかなくなった。最悪の可能性も含め、ユリカたちが抱えてきたすべてを受け止め

て。

共にこの現実立ち向かうことを強制されるのだ。
すべては愛のために。

ついに明かされるヤマト改装にまつわる秘密！

イスカンダルで積み込む予定だったはずのコスモリバーズが積み
れていた真実とはいかに。

そして、正体不明の脅威の出現にヤマトは、そしてガミラスは、ど
う対処していくのか？

急げヤマトよイスカンダルへ！

地球に残された人々のタイムリミットは、

あと、二六〇日しかないのだ！

第十八話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十九話 明かされる真実！ 新たな決意と共に！

いま、決断のとき来たれり

第六章 自分らしくあるために

第十九話 明かされる真実！ 新たな決意と共に！

A.パート

——もしも自分の進むべき先に避けることが難しい困難があるとしたら、人はどんな選択をするのだろうか。

ユリカは朦朧とした意識の中で思い返す。

あのととき、ヤマトの導きで知った愛の星——イスカンダルの救済。それに賭けた一か八かの大勝負。

ボソソジャンプでイスカンダルに直接乗り込めないかと考え、実行したあの日のことを。

われながら無茶苦茶だったと思う。いかにA級ジャンパー、演算ユニットとのリンクが確立しているとはいえ、脳が崩壊してもおかしくないくらいの負荷が掛かりそうな前代未聞の大ジャンプ。

結果は——成功とも言えるし失敗とも言えた。

ユリカは肉体ごと跳躍することは叶わず、向こうに現存していたガンダムのフレーム——そこに残されていたフラッシュシステムにリンクしたことで意識だけを辛うじて飛ばすことができたに過ぎない。

突然の来訪者に驚きはしたが、スターシアは常に理性的でユリカを無下にはしなかった。

もちろん彼女はコスモリバーシステムを——波動砲の技術を地球に提供することには難色を示した。

ユリカ自身、地球がつい最近まで内乱に荒れていたことを正直に話したこともあるだろうが——イスカンダルはその威力を恐れ、波動砲を封印していた。

もちろんそれに連なる技術も一切封印して、星から出さないことで守り抜いていた。

それでも継るユリカにスターシアは語った。

「われわれはもともと、あなたがたと同じ銀河で生まれた文明の末裔

なのです。あなたがヤマトと呼ぶ船を内包してこの宇宙に出現した水は、並行宇宙の回遊水惑星——アクエリアスのものだと思われます。アクエリアスは、その水の中に生命の種子とでもいうべきものを内包した惑星で、接近する星々に水と命の芽を撒き、それらが成長して文明を持ったあとに接近すれば洪水で文明を押し流す。——それは、アクエリアスが文明に、生命にもたらす試練であり、強い生命に育って欲しいという厳しきからくる愛なのです。わたくしどもの祖先も、その試練を乗り越えながら発展していった文明です」

極端にスケールの大きな話に、日頃の振る舞いに反して聡明なユリカですらもすぐには呑み込めなかったが、ヤマトの記憶でも似たようなことを聞いたのでなんとか飲み込めた。

「わたくしどもの最も遠い祖先の星の名は——シャルバートと申します。かつてはその優れた科学文明が生み出す超兵器を駆使して銀河全体を支配していた民族でした。……しかし、彼らはやがて力による支配では真の平和が訪れないことに気付き、その行いを恥じて銀河の支配を放棄して歴史からも姿を消し、母なる星ごとを異次元空間の内に隠遁しました。私たちイスカンドルとガミラス星の祖先は、あなたが古代火星文明と呼ぶものから分岐した種族。それも元を正せばすべてはシャルバートから……アクエリアスの生命の種子から分岐した文明なのです。もちろんあなたがた地球人を含んだ生態系も、歴史に残っていないだけですべては水惑星アクエリアスの命の種子から生まれた存在なのです」

スターシアの告白に、ユリカは頭がくらりと揺れるのを感じた。途方もないスケールの物語だ。しかし、地球で自然発生したと思われた生態系が外部からもたらされたものだったとは——。

「私たちの祖先はシャルバートが戦いを放棄する前に、あなたがたの銀河のすぐそばを通過しようとしていた大マゼラン雲に移り住んだ移民でした。当初はかつてのシャルバート同様、武力による支配で大マゼランを統治しようとしていましたが、シャルバートの決断を知り、武力による支配の愚かさを悟ったわれわれもまた、その力を放棄したのです。——長い年月が過ぎ、やがてイスカンドルとガミラスを

狙う星間国家による侵略を受けたとき、わたくしどもは決断の時を迫られたのです。座して滅びを待つか、それとも反撃をするか……」

スターシアは一度そこで言葉を区切り、気持ちを落ち着かせてから続けた。

「結局選んだのは、徹底抗戦でした。たしかに争いで真の平和は得られない、本当の意味での共存には至らないとわかっていても、われわれも生きとし生けるもの——生きたかったです。そこで一度は封印した技術を紐解き、独自の発展を遂げました。それが、相転移エンジンの改良を推し進め、タキオン粒子を源とする波動エネルギーを生成する波動エンジン。それによって実現したワープ航法システム。……そして波動エネルギーの時間歪曲作用を応用して戦争で荒廃した惑星環境の復元を試みた研究が進められました。その成果が時間流制御技術とボソソジャンプシステムを組み合わせて生まれたのが、時空間制御によって惑星環境を回復させる装置——コスモリバーシステム。しかしその研究過程で生まれた波動エネルギーの制御技術によって、高圧縮・高出力化した波動エネルギー……タキオンバースト波動流を撃ち出す超兵器も生まれてしまったのです。それが——あなたが波動砲と呼ぶ、タキオン波動収束砲なのです。……タキオン波動収束砲とコスモリバーシステムは本来同一システムの裏と表。破壊と再生両方の面を持つ、イスカンドルの遺物なのです」

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第十九話 明かされる真実！ 新たな決意と共に！

「——これが、私たちがユリカさんから教えてもらったスターシア女王陛下とのやり取り。つまり、コスモリバーシステムの真実にして、ヤマトのこの歪な改装の意味よ」

緊急入院したユリカに変わり、こういった説明となれば自分がやるべきだろうと、いつもに比べて重苦しい雰囲気を漂わせながら、イネスはクルー全員に告げる。

中央作戦室に陣取ったイネスは、この日のために用意していた資料

を高解像度モニターやウィンドウに表示して説明した。

「その歪な改装の代表格、六連波動相転移エンジンに関する説明をसरるわよ……。波動エンジンの増幅装置として相転移エンジンが機能したのは、『この宇宙の波動エンジンの原形が相転移エンジン』であつたから。だから、改装の際ヤマトの波動エンジンは従来の『宇宙エネルギーを圧縮してタキオン粒子に変換』から『真空の相転移で生じたエネルギーをタキオン粒子に変換』という具合に変化しているの。つまり波動相転移エンジンっていうのは、本来波動エンジンの動作に含まれる工程の一部を相転移エンジンにゆだね、波動エンジンは波動エネルギーへの変換効率に特化するように改造した複合機関。波動エンジン単体では稼働できないのもそのため。当然よね、システムの一部を外部に出してしまったのだもの。——そして、相転移エンジンに技術を逆輸入できたのも波動エンジンが発展型だから、と言う訳よ。これらの相乗効果のおかげで、旧ヤマトの六倍、つまり波動炉心六基分の出力を得られた。だから、出力が格段に劣るはずの相転移エンジンの増設にも拘らず、エンジンが劇的に出力強化できたってわけ」

イネスの説明に機関部門のクルーはおおいに納得している様子だった。

波動エンジンの技術で相転移エンジンがパワーアップできたのは、波動エンジンが相転移エンジンの進化系でありながら、大雑把に言えば『波動エネルギー生成機能の有無』の違いしかなかったからではない。生成するエネルギーの質に雲泥の差があるから絶対的な出力以上の差が生じてしまっているが、本質が同じであればこそ役割分担を定めることで新旧の技術を複合し、劇的なパワーアップを遂げられたのだ。

イネスは自身の説明がきちんと伝わっていることを確認して多少なりとも満足感は得られたが、それをよろこんでいられる心境ではなかった。

「とはいえ、ヤマトのそれは不完全なの。本来は波動エネルギーの作用を利用して相転移エンジンの効率強化も可能で、それで生成量が増えたエネルギーで波動エンジンも生成量も上がって——てな具合に

相互補完して行くのが本来想定されていた波動相転移エンジンの増幅作用。実現していたのなら、いまのエンジンでも旧ヤマトの八倍相当の大出力を得られるんだけど、私たちの技術だとそこまで負荷に耐えられる強度を持たせるのが困難だったから、意図的に封印されているわ。一部のパーツを交換して制御プログラムの封印を解けば、いまのヤマトのエンジンでもできるのだけど、その場合はもって数分が限度。下手をすると安全装置のかけ直しもままならないままエンジンが臨界、大爆発を起こす危険性が高いわね」

六倍のいまですら持て余し気味なのに八倍とか……制御できるわけがない。それを実現するには大規模な改修工事を請けてエンジン全体のバランスや強度を見直さなければならぬ。

また、構造的に六連波動相転移エンジンではそれが出力の頭打ちだろうとイネスは予想を立てている。この上限を突破するには、エンジン自体の構造を見直す必要があるし、なにより大型化が避けられないだろう。

「それじゃある意味本命、コスモリバースシステムについてさらに細かく話すわね。……これは時間制御技術にボソソジャンプ、ってところからカンのいい人は察してるかもしれないけど、いわば一種のタイムマシンなの。その惑星の過去のデータをタイムトラベルを活用して収集し、任意の時間データの情報を呼び出して過去の姿に再構築させる——それが、コスモリバースの環境回復の種明かしってわけ」

「まさか——本当に時間操作技術だったなんて……」

ラピスはユリカと初めて会ったとき、『時間でも戻さない限り地球は救われない』と考えていたらしいとイネスは聞かされていたが、まさか本当にそうだったとは考えていなかったであろう。

(ラピス、あなたは本当に賢い子よ)

イネスは心の中で賞賛した。

「ただね、そのデータ収集を実行するためには——時間と空間の概念がないボソソジャンプの演算ユニットが必要な。これは私たちが火星で発見した物が使えるらしいから、あれと接続を確立しなければ、コスモリバースを起動させることはできない」

「まさか……ここに来て演算ユニットが絡んでくるなんて」

青褪めた表情のルリが歯を噛みしめる。

思い出したのだろう、ユリカを抱えて花のように変形した演算ユニットの忌々しい姿を。そして否応なく連想される——ルリたち家族の幸せを一度は壊した火星の後継者の影。

——イネスもルリ同様、気分が悪くなった。

「でもね、肝心のアクセス端末をイスカンダルはすでに失っているのよ。そして私たちはあの遺跡を活用する術を持っていない——ただ一つを除いて」

「まさか!? ユリカをまた繋げるって言うんですか!？」

今度はラピスが絶叫した。ここまで言われたら嫌でもその答えに行き着くだろうし、嫌なのは自分も同じだ。

感情を押し殺して、イネスは頷く。

これで理解しただろう。ユリカがヤマトに乗った裏の事情が。

そしてルリたちが乗艦しようとするのを渋った理由も、嫌というほど理解させられただろう。

「繋げる対象はコスモリバスシステムそのものだけだね。彼女は不幸にも、火星の後継者の人体実験の後遺症で体内に演算ユニットのナノマシンが残留している。そして、時間が経つほどに……ボソソジャンプを行使するたびに浸食が進み、彼女自身が演算ユニットの端末に変貌していった。彼女自身の『慣れ』と『経験値』も重要だったの。だから、彼女はヤマトの再建にあれほど熱心だった。あれはヤマト再建はもちろんだけど、彼女が端末になるために必要な経験値を蓄え、自身を『最適化』するためのものでもあったのよ。この状態の彼女をコスモリバスシステムに接続すれば、演算ユニットに無線接続しているも同然の状態にできる。ただ、知ってのとおりボソソジャンプには人類はもちろん地球上の生物はそのままでは耐えらることができない。その欠点を補うためには、彼女に人間翻訳機になってもらってフォローしてもらえないのよ……。それ以外には、コスモリバスシステムを起動する手段が存在しない、つまり救済の道がないってこと。もしも、彼女がシステムに組み込まれる前に死亡してしまった

場合は……私に彼女のナノマシンを移植してコアになるつもりだったわ。もつとも、昨日今日入れた程度じゃ全然馴染めないから、成功率は大幅に下降するし、まず間違いないく私は死ぬことになるけど、ね」

イネスの説明を聞いて、真田はヤマトのドックに初めて案内されたときのことを思い出していた。

あのときユリカは、ジャンプ体質になっていない真田を含めたネルガルの技術者を一人も死なせず、一切の異常すら起こすことなく運搬してみせた。

地球の生命がジャンプに耐えられないのは、演算ユニットが地球の生命体をそうだと認識していないから、という説を聞いたことがあるが……なるほど、だから彼女を再び『人間翻訳機』として組み込み、地球規模の大規模なその保護を担ってもらわなければならないというわけか。

その残酷な事実には拳を握り締める。

なんとということだ……。自分が最も唾棄する行為なしでは、地球は救えないというのか!!

憤る真田の姿にイネスは顔を顰めるが、それでも説明を続けなければならぬ。

これは——今後のヤマトの航海を左右する、避けて通れない道。だれもが乗り越えていかなければならない試練のときなのだ。

「もちろんこれにはスターシア女王陛下も反対したと聞いているわ」「そのことに相違はない。俺もスターシアからすべてを聞かされたよ。そうすることでしか救いの手を差し伸べられない、命を危険に晒してまで救いを求めてきた彼女を冒瀆するような手段しか取れないと……：：：気に病んでいた」

守の言葉にイネス、そして隣にいたエリナは少しだけホツとしたような表情を浮かべる。

よかった、スターシアもまた血の通った人間だったのだと、ようやく確証を持てた。

「——それが聞けただけでも、あなたが来てくれてよかったと思える

わ。最初ユリカから聞かされたときは、もつとほかに手段がないの
かって、心底腹が立ってたから……」

「——続けるわね。このコスモリバーシステムは、波動エネルギー
を触媒とした時間制御システムなわけだけど、『効果があるのは波動
エネルギーで覆えた範囲のみ』という制約があるの。ヤマトの波動砲
が六連発可能なトランジッション波動砲になったのは、惑星規模——
それもイスカンドルや地球くらいの大きさの惑星を覆いつくすエネ
ルギーを生み出すには、波動エンジン六基分相当の出力が必要とされ
たことと、それを分散して効率的にエネルギーを放射するシステムが
必要だったからよ。拡散波動砲の技術でもエネルギーの放出とエネ
ルギーフィールドの形成はできるけれど、それだけのエネルギーを損
傷することなく撃ち出すには、ヤマトの耐久力が足りていない。一度
に放出できないのなら、分割して……それがトランジッション波動砲
のシステムに繋がった。つまり波動砲の連射機能はおまけに近い代
物なの。イスカンドルに到達次第、艦長の組み込んだコアモジュール
の搭載やシステムの組み換えを行うことで波動砲は——いえ、ヤマト
はコスモリバーシステムへと変貌する」

「なんてこった——ヤマトは『最初からコスモリバーシステムにな
るべく改装された』ってことですか……」

ジユンが予想だにしなかった真相に唖る。

完全に理解してもらえたようだ。

ヤマトの改装が歪み、その最たるトランジッション波動砲の意味。
たしかな威力を見せつけてはくれたが、もつと信頼性の高いシステム
として構築できなかつたのかだの、無理に六倍出力とか六連射とかい
らないし過剰だろうという意見はたびたび耳にしていた。

いまようやくその意味を明かせた。

これで理解してくれただろう。

強固にトランジッション波動砲の搭載を主張したユリカが、決して
破壊と殺戮を望んでいたり、過剰防衛を主張していたわけではないの
だと。

彼女らしくない主張はすべて、そうすべて、コスモリバーシステ

ムを完成させるために不可欠な主張だったのだ。

「そう、真相を知らないネルガル内部でもこの改装には反対意見が多く寄せられたけれど、ガミラスの侵略が想像以上に悪辣だったこと、ヤマトが成功したあと、ガミラス本体を発見した場合の報復の可能性なんかも視野に入れた場合は価値がある、って納得させたのよ。もちろん波動砲の威力によってヤマトの航海の安全保障に少しでも繋がれば、という思惑もありはしたのだけれど。実際、ヤマトに対して敵が艦隊決戦を挑んでこないのは、波動砲で一気に壊滅することを恐れているからよ。ユリカの受け売りだけどね……。それだけの力が、いまのヤマトにはある。正直こんな極限状態でもなければ、こんな装備の搭載なんて許可されなかったわよ。一応私たちの政府はどんな思惑があつたにせよ、これより格下の相転移砲を封じる程度の分別はできるんだから」

とは、ヤマト再建の責任者の一人であるエリナの言葉。

イネスとて、真相を打ち明けられた状態でなければ、ここまでの極限状態でもなければ、これほど常軌を逸した大量破壊兵器の搭載を主張したユリカを軽蔑していたであろうし、政府とて正式化しなかつたであろうと思う。

もちろんそれは、サテライトキャノンにも言えることだ。

「気になった人もいると思うからついでに説明しておくね、サテライトキャノンもコスモリバーシステムに『ある細工』をするためのテストベッドも兼ねて開発されたものであると同時に、波動砲の全力を出したあとのヤマトを護衛するために開発された装備。完成したそれは後者の用途ではややスペック不足にも感じるけれど、その威力に関しては私たちが一番よく知っているはずよね？」

「——波動砲を全力と言うことは、もしかしてあの全弾発射システムのことですか？ たしかにプログラムの構築はされていますし、システムの構造上実行は可能ですけど……そんなことをしたら、保護システムがあつてもヤマトは負荷に耐えきれずに自壊してしまいます」

機関部門の——必然的に波動砲の管理も担う事になる機関部門の長であるラピスが疑問を挟む。

ヤマトの波動砲は従来とは異なる発射システムを構築している。従来はエンジンルームとは別に用意された波動砲の発射システムにエネルギーを導入し、そこでエネルギーの加工を行って発射していた。

だが新生した——コスモリバーシステムとなるべく改修されたヤマトのそれは、エンジンルームの先端から砲口までの間を二つの収束装置とライフレングチューブと呼ばれる砲身で繋げている、艦全体が文字どおり砲身となるシステムに変貌している。

そのライフレングチューブの内側には、発射口と同じストレートライフレングと呼ばれる溝が存在していて（円筒の内側に誘導レールを嵌め込んでいる）、その溝がエネルギーの整流効果を与えていた。

また、短時間の間に複数回のタキオンバースト波動流が通過する負荷を考え、構造材や防御コートに混入されているのと同じ反射材が張り付けられていて、エネルギーを強制的に発射口方向に押し流す作用を与えられている。

これによつて装置全体が保護されているのだが、オリジナルの空間磁力メッキに比べると格段に能力が劣るそれでは、連射はともかく六倍の負荷に耐えることは到底できない。

反射衛星の解析データからオリジナルの空間磁力メッキの復元も工作班の間で検討されているようだが、ほかにもやることが多く進展が乏しいと、ほかならぬ真田自身から話を聞かされている。

「正解よ、ラピスちゃん……そして、これからの説明を聞けば嫌でも実行しなければならぬことがわかるわ。——それはね、私たちが目的地としているイスカンダル、そして二重惑星を形成しているガミラス星は、カスケードブラックホールと呼ばれる時空転移装置の脅威にさらされていて、数か月以内に消滅する定めを背負っているからよ」

一気に二つ、大きな秘密が解き明かされる。
さあ、ここからが本番だ。

「ガミラスが性急に地球侵略を行ったのは、彼ら自身が滅亡の危機に立たされているから。地球がガミラスに比べて文明の程度が低いことから見下されていたのも関係しているでしょうけど、もしかしたら

木連との戦争から火星の後継者に至るまでの内紛の過程を調べ上げた結果、たとえ紳士的に接触したとしてもすぐに回答が出ない、またはこちらが付け上がって過大な要求をしてくることを嫌ったとも推測できるわ。……地球を上回る超大国のプライドがそうさせたとも言えるかもしれないけれど。ただ確実に言えることは、ガミラスが早急に地球侵略を決定したそもそもの原因は、カスケードブラックホールにあると言っても過言ではないということよ」

思いもよらぬ真実にクルー全員が言葉を失う。

ガミラスの取り付く島もない一方的な降伏要請や情け容赦ない猛攻と、祖国のために命を捨ててヤマトに立ち塞がった冥王星艦隊の振る舞い。一見矛盾しているかのような彼らの行動の裏に隠されていた真相。

彼らが冷酷無情な侵略者であるという解釈は間違いではない。しかし彼らにもまた、ここまでのことをさせた、けっして小さいとはいえない理由が存在する。

だがその行動の結果はどうだ。滅亡の危機に晒された文明がほかの文明を滅亡寸前に導き、未来を手にしたかと思えば、追い詰められた文明の決しの反撃で滅亡への道に再び突き落とされかけている。しかもそれに手を貸しているのは同じく滅びに瀕しているはずの隣人ときた。

——なんという皮肉、なんという負の連鎖。

神が本当にいるというのなら、なんと皮肉が好きなのだろうと嫌味の一つでも言いたくなる。

「それで彼らの行動が正当化されるわけでもないけれど、言い換えればヤマトがカスケードブラックホールを破壊することができれば……それで恩を着せる形で地球侵攻に待ったをかけて貰える可能性が生まれるの。もちろん救いの手を差し伸べてくれたイスカンドルの存亡も掛かっているから、やらない訳にもいかないのだけれども。……予定では、イスカンドル到着後に波動砲の改修を行ってギリギリであつてもヤマトが自壊せずに済むようにして、文字どおり全身全霊の力を込めた波動砲でカスケードブラックホールを消滅させるって

のが、艦長の考えてたプランの一つ」

「一つ？　ということとは、ほかのプランもあつたということですか？」

「今度は大介が口を挟んできた。」

しかし、これは種明かしの場なのだ。イネスはできるだけわかりやすいように、丁寧な回答を重ねていく。

「ええ。もう一つはガミラスを滅ぼし、イスカンドルのみを救って地球に戻るプランよ。これは推測を含むのだけでも、ガミラスの目的が全宇宙の支配、つまり国や民族の究極の発展にあるとするのなら、いずれにせよ地球は標的になっていた可能性が高いと言えるわ。つまり、移民計画が上がる以前から地球に目を付けていた可能性は十分に考えられる。となれば、カスケードブラックホールを消滅させたところで地球を諦めてはくれない、同盟といった互いにとつて損のない関係を作ろうとはせず、支配下に置こうとする可能性は否定できないのが実情よ。——だったら、私たちが殺戮者の汚名を着てもガミラスを滅ぼさなければ、地球に明日はない。コスモリバスシステムで地球を救っても、ガミラスの軍勢をヤマト一隻で食い止めるのは物理的に不可能。特にコスモリバスシステムに改造した波動砲を再改造するには時間が掛かるし、それ以前に全力射撃したヤマトは大ダメージ被ることは必至——戦闘能力はほぼ完全に失うでしょうね。イスカンドルで完全修理をする時間的余裕は、おそらくない。万が一カスケードブラックホールを消滅してもガミラスとの講和が望めないのなら、波動砲を失ったあとの安全保障として開発されたサテライトキャノンの乱用も辞さず、迫りくるガミラスを片っ端から消滅させて、地球に帰る——それが、彼女が考えた言わばプランBつてやつよ。しかも仮に本星を滅ぼすことに成功したとしても、星間国家であるガミラスが真に滅びるには至らないでしょうね。ほかの星、宙域に広がっていたことで難を逃れた残存勢力による報復、それによる戦争継続の可能性……問題が完全に解決されるわけではない。それに、ガミラスの植民星の中には自ら恭順して安全を得た国がないとは言えないわ。ガミラスを滅ぼすということは——そういった星々の安全すら脅かすことにもなるって、彼女は言ってたわ」

能天気には振舞っているように見えて、ユリカが心の内で悲壮な——いや、そんな表現すら生ぬるい覚悟を抱えていたことを突き付けられ、クルーはみな悔しいやら悲しいやら。なにも知らずにただ彼女にだけ重しを背負わせてしまっていた現実を直視して、俯いていた。

「いままで黙っていてごめんなさい。私が言えた義理じゃないけど、イスカンダルに不信を抱えたまま航海を続けるってことは、イスカンダルに接触して支援を求めたユリカへの疑いにも発展しかねなかった……だから、イスカンダルが私たちの味方なんだって実感を得られるまでは、秘密にしておきたかったのよ」

エリナが訴える。決して悪意から隠していたのではないと。

許してほしい。私たちには『迷っている時間はなかった』のだと。スターシアが言っていたように。

最初からガミラスとイスカンダルの関連性が知られていたら、きっとだれもが疑ってかかり、手遅れになっていた。それを避けるためには黙っていることしかできなかったのだと。

「——守さんにイスカンダルについて話して貰う前に、コスモリバーズに対する細工について、少し触れさせてもらおうわ。さつきも話したとおり、コスモリバーズの恩恵に与れるのは波動エネルギーの放射された範囲内だけ。艦長が元通りの体に戻るには——コスモリバーズに掛けるしかない。彼女はコスモリバーズのコアとなるために、そしてヤマトを再建するためにナノマシンの除去をせず、彼女はいままで耐えてきた。でもそのせいで、もう医学では救えない。コスモリバーズの時間制御能力で、彼女の体を最低でも火星の後継者からの救出当時にまで戻して、イスカンダルから提供された医学で体を蝕むナノマシンを取り除く。それしかなかった……。でも、コスモリバーズの恩恵に与るには波動エネルギーを『ヤマトに向かって少量であっても分流する』必要があった、そのために考案されたのが——」

「——モード・ゲキガンフレア。サテライトキャノンのタキオン粒子を外部から制御するため、という名目で開発されたのがタキオンフィールド発生装置なんだ。つまり、モード・ゲキガンフレアはコスモリバーズの恩恵をヤマトの艦内——ユリカに向けるための機能の

応用つてのが真相で、いままでの運用方法は真の搭載目的を隠す擬態だったんだ」

イネスの言葉を引き継いだのは、ユリカの傍らには行かずこの場に残ったアキトだった。イネスも少し口を休めたいと思ったので、アキトの行動にケチは付けなかった。近くに用意しておいた飲料水のボトルに口を付けることで先を促した。

イネスから引き継ぎの合図を受けたと判断したアキトは、変わって語り始めた。

「ユリカによると、この問題はスターシアさんと協議しているときにはもう上がっていて、上手い解決法を導き出せなかったらしいんだ。けどユリカがヤマト出現時に精神的な接触を果たし、その記憶に触れていたことが転機になった。垣間見た記憶の中に、機関部の故障でエネルギー漏れを起こした状態のヤマトが、漏れた波動エネルギーを防御スクリーンとして活用した場面があったらしい。偶然波動エネルギーが敵の攻撃をストップする性質が持っていたらしいんだけど、波動砲口からわざとエネルギーをリークさせて、攻撃と同じエネルギーを使っている敵の防御幕を力づくで突破、そのまま敵の都市要塞に強行着陸して心臓部を攻撃する作戦を取ったらしい。——モード・ゲキガンフレアはこの行動に着想を得て、真相を秘匿したまま波動エネルギーをヤマトに向かって分流するシステムを搭載してもらったための理由として考案されたものだったんだ」

「——どうりで搭載を強固に主張されたわけだ……そんな裏があったとは。気付けなかった」

開発に協力していた真田も思わぬ裏事情に渋い顔をしていた。

真相を知らないのなら、単に攻撃バリエーションを増やすために主張したとは思えないだろう。

実際、モード・ゲキガンフレアは戦場でその威力を示しているのだから、ユリカの主張が正しかったとは思っても、どうしてこんな突飛なシステムを考案したのかなんて、追及しなかった。

普段の振る舞いがバク——いや、とにかく変わり者なユリカだから、なにかしらあったんだろう程度には疑問に思えたかもしれない

が。

「フラッシュシステムがエンジンについているのも、あそこがコスモリバースの事実上の心臓部だから。ユリカを……部品として組み込む制御装置は、突入ボルト付近に置くことになってる。システム起動後、タキオンフィールドがエネルギーを誘引してコスモリバースの効果をヤマト内部に及ぼせるようになったら、俺たちは『ユリカを元通りにしたい』って強く願う。その思念をフラッシュシステムが拾ってくれることでコスモリバースに干渉、地球の回復に全力を注ぐしかないユリカの回復処理を代行するって考えだったんだ。これらの情報処理を補佐させる目的で、地球に残してきたナデシコCの改装も進められているはずだ」

「じゃあ、艦長が重病なのに艦長職に就いた理由は——」

「島君の推測どおり。フラッシュシステムはわかり易く説明するとワイヤレスのIFSに近い代物だろ？ だから機能させるには思考——この場合は思念波がどうしても必要なんだ。だから、単なる戦術アドバイザーとか、体の治療のためにイスカンダルに同行するって形だと、みんながユリカに強い関心を持つわけがない。関心を持つてもらって、『絶対に助けてあげたい』って思ってくれないと、助からない。加えてさつきイネスさんが説明したとおり、ナノマシンと『馴染み』が進むほどにシステムの完成度が高まる以上、冷凍睡眠で運ぶわけにもいかなかった。あとは——そうだな、みんなも痛感しているように出航当時はヤマトの艦長を務められるのがユリカしかいなかったってのも理由だけどね……」

アキトはユリカが艦長としてヤマトに乗らなければならなかった理由を淡々と語る。

それはすべて、ヤマトの成功のため——地球はもちろん自身が生き残る希望を繋ぐためだったと。

「実際、その判断は正しかった。今回だってみんなが思ってくれなかったらあいつは助からなかった……ありがとう。夫として感謝の言葉しか出ないよ。本来の計画だと、あいつは内容が内容だけに、俺たち——ルリちゃんやラピスをヤマトには乗せないつもりだったん

だ。どうしてもクルーだけで不安が残るのなら、地球に戻ってからお義父さんも含めて乗せればいい、思いが必要なのはコスモリバーズ発動のときだけって判断してた。……ああ、そうそう。ついでに補足しておく、進君がすぐ行動に移れたのはベテルギウスの経験があったからなんだ」

ベテルギウスのとき、と言われてラピスは、機関部門の人間は気付いたようだ。

「アキト、それってもしかして、高負荷がかかったのにエンジンの損傷が異様に少なかった、あれのこと？」

ラピスの問いに答えたのは、コスモリバーズを使用した影響で再び意思疎通が可能になったヤマトだった。

—— そのとおりです、ラズリ機関長。私はあなたたちの意志を反映することで『耐えること』には少々自信があります。ですから普段以上に耐えられるようにしようと『気合いでフラッシュシステムを起動』して『みなさんの意志』を拾い、無理なエンジンの動作を行おうとしたのですが、なぜか不完全なコスモリバーズシステムが起動してしまつたので、これ幸いとエンジン内部の損傷を時間制御で強引に復元しながら作動することで、あの異常動作を実現できたのです。限りなく偶然に近い出来事でしたが——

ヤマトの回答にラピスはもう驚いていいのやら感心すべきなのかわからなくなった。

まさか、あの不可思議な現象の裏がそうだったとは。

……しかしいまさらだが、戦艦が『気合いで』システムを動かすな。しかも秘匿システムを二つも。

「そう、進君が今回の手段を思いついたのも、躊躇いなく行動できたのも、ヤマトが不可能を可能にした実績を知っているから。この二度の奇跡は、なにでもユリカさんとヤマトの間に精神的な繋がりがあることに起因しているらしいわ。彼女は葉で抑えられてるけど、日常的に演算ユニットにアクセスしてるに等しい状況にあるわ。物理的な接続こそされていなくても、心臓部たる波動エンジンにフラッシュシステムを搭載されているヤマトだからこそ無線での接続が確立され、シ

システムを起動する要件を満たせてしまった、ということらしいわ。ご都合主義満載の奇跡だけでも、それに助けられていては文句も言えないわ。……それといまさらな説明ではあるけれど、進君だけど。彼は次元断層を突破してユリカさんが倒れたときに、彼女が万が一を考えて残してた資料を渡されていて、すべてを把握しているわ。彼があれから奮起してがんばってるのは、それが理由よ」

とイネスが補足する。

そう、ヤマトという艦の特異性だけではなく、ユリカというイレギュラー要素の相乗効果があつた結果を生んでいたのだ。

皮肉な話だが、火星の後継者の人体実験で得たデータの数々に加え、ユリカが生体部品として使われて障害を抱えたからこそその奇跡だと思つと、あの火星の後継者の存在もまた、未来への希望を繋ぐという意味では一定の成果を上げていたということになる。

……腹立たしいことこの上ない。

「結果的にはあるけれど、艦長の推測は当たっていたつてことになるわね。完成したあとのコスモリバスでも通用するかは——ぶつつけ本番にはなるけど、希望は繋がったわ。……ヤマトの秘密の暴露はとりあえずこんなものね。イスカandalについて——守さんにお願ひするわ。直接見たあなたのほうが詳しいものね」

「引き受けました。それじゃあ、ざつと説明させてもらう。驚くとは思つが冷静になつて聞いてほしい。——実はイスカandalは、カスケードブラックホールとは関係なく、滅亡寸前なんだ」

「なつ!?」

変わつて説明を始めた守の言葉に一同絶句。

地球に救いの手を差し伸べてくれたイスカandalが——滅亡寸前。アキトもこの事実を聞かされたときはたいそう驚いたものだ。

「イスカandalが過去に経験した事故が原因なんだ。イスカandal星の中心にはイスカandalリウムと呼ばれる放射性物質がある。それは非常にエネルギー変換率の高いエネルギー資源となりえる希少物質らしい。過去にイスカandalも、そして構成素材が同じガミラスもそれが原因で狙われていた。それゆえに何度も戦争を経験し、戦火に焼

かれ、資源を得るために過度の採掘を行った結果、イスカンドルもガミラスも環境破壊が深刻化していた。これを改善するために作られたのが、コスモリバーシステム。その力で一度はその問題を回避した。——はずだったんだ。コスモリバーによる復元は完璧ではなかった。いや、ある欠陥があった。時間制御によってイスカンドル星の中に時間の歪み——時間断層が生まれてしまった。その断層内では時間の流れが外よりも何百倍も速く進む。そのせいで、星の中心だけが急速に寿命をすり減らしてしまい、星全体が歪になったことで大規模な地殻変動を起こした。それにより大陸の沈没が起こり、地殻に亀裂が生じた。その亀裂によって露出したイスカンドリウムが発する大量の放射線は、イスカンドルの大気を瞬く間に汚染してしまった。放射線の影響で人々は次々と倒れて、一気に人口が激減。イスカンドルはこうした事故を想定して開発していたコスモクリーナーDと呼ばれる放射線除去装置を使って星全体を除染し、露出したイスカンドリウムを封じて対処したが、一部を除いた人々は生殖能力を喪失。新しい命が生まれることがなくなり……いまは、生殖能力を喪失しなかったイスカンドル王家の人間、その生き残りであるスターシアと使者として地球に送られた妹のサーシア以外、イスカンドル人は生存していない」

「じゃあ、コスモリバーを届ける力がないって言うのは……」
「想像どおりだよ。いまのイスカンドルには技術者が残っていない。装置の部品は残されていても、組み上げる力が残されていない。当然運搬する力も。——だからヤマトが自ら取りに行き、同乗している技術者に残された図面を頼りに組み上げてもらうしかないんだ……。ヤマトは状況的に単艦でイスカンドルに行くしかない。当然ヤマト自身も自給自足でやり取りしなければならぬ都合上、ベテランの技術者が何人も必要になる。そういうった事情も考慮して技術者の人選がされたはずだ。真田が乗ってるくらいだな。——あとは、イスカンドル到達までに技術者が生き残れるかどうか、ミスマル艦長が命を繋げるかどうか、コスモリバーを手に入れられるかに関わっている」

守はハリの疑問に丁寧に答えた。

最終的に自ら希望したとはいえ、真田が乗艦できたのもウリバタケが乗艦ことを許可されたのも、すべては彼らの技術を見込んでのこと。

もちろんイネスも含まれているが、それ以上に彼女はユリカの主治医として彼女の延命、場合によっては代理としてその命をコスモリバースに捧げる役割をもって乗り込んでいる。

「もつとも、仮に自力で渡せるだけの余力があったとしてもスターシアは渡さなかつただろう。彼女は俺たちが本当に『コスモリバースシステムに付随する波動砲の力に溺れないか』はもちろん、『自らの責任を投げ出さずに困難に立ち向かえるか』を試さなければならぬ立場にある。それでも条件付きとはいえ寄与してくれたのは、カスケードブラックホール破壊のために技術提供を求めてきたガミラスを拒んだ過去があるからだ。——それが地球侵攻した遠因になっているのではないかと気にしていたし、ミスマル艦長が接触して援助を求めた行為自体、妹以外の人間と接すること自体が久しぶりだった彼女にとっては何となく他者との交流だった。艦長の人柄に面食らいながらも徐々に親しみを覚え、友人になった……それがスターシアに禁を冒す覚悟を決めさせたんだ。それはスターシアにとっても同じ、だから彼女たちは俺たちに託してくれた。スターシアも命の危険を顧みず地球に希望を運ぶ大任を、自ら背負ってくれたんだよ……」

アキトは火星に葬られた亡きサーシアを思った。

直接対面することは叶わなかった、異国の人。妻の友人。

彼女のおかげでヤマトはこうして旅をできている。

いくら感謝しても感謝のし足りない、尊き命を散らしてしまった恩人。

直接会ってみたかった。

アキトはいまほど強く思ったことはなかった。

「——彼女の行動に、そんな裏があつたなんて」

ルリの脳裏に蘇るのは、生きて合流を果たせず命を落としてしまっ

たサーシアの亡骸。

彼女たちは決して上から目線で地球に手を差し伸べてくれたわけではなかった。

自らの行動の影響を気につけ、ユリカの行動に心動かされ、かけがえのない友のために……。

きっと断腸の思いだったろうに。

それでも彼女らは重い腰を上げてくれた。

ガミラスと二惑星という関係にあっても、イスカンドルは間違いなく地球の味方だった……。

「それじゃあ、イスカンドル人はもうスターシアさん以外に残っていない、ガミラスも星としての寿命が？」

衝撃で震える声で指摘するハリに、守は首を振った。

「たしかにイスカンドルで生きているイスカンドル人はスターシアだけだ。ただ、イスカンドルはかつて経験した大戦争の教訓から、仮に滅亡寸前に追い込まれたとしても民族の復興を可能とする『胚』を残されていると聞かされている。それを使えば、いまのイスカンドルであつても民族再建は可能だ……。だが自らが生み出した負の遺産の完全な抹消を考えた王家の人々は、自らの失態から始まった滅びを受け入れる考えに至つたらしい。——イスカンドルが滅べば、負の技術が継承されることもなくなる、と。これは本当に徹底していて、王家の人間がすべてマザータウンからいなくなるか、王家の人間が任意で操作することで即座に星もろとも消滅する仕掛けも残している。だからスターシアはイスカンドルに縛られ離れられず、双子星であるにも拘らずガミラスは手が出せなかったんだ……。それとガミラス星の状況だが、あちらは起動時の状況の違いもあつてか、イスカンドルよりも時間断層の規模が小さく早くに自然消滅したそうだ。だから、ガミラス星はまだ大丈夫だ。カスケードブラックホールがなければ、少なくとも移民目的で地球を侵略することもなかったらう」

「ということ、地球に時間断層が生じる可能性があるか？」

ルリが問うと守は首を縦に振った。

「十分にある。そもそもシステム自体改良がなされていないからな。

だが、当時のデータを基に調整を加えれば、ガミラスの様に被害を最小限に抑えることはできるはずだ。それに、過去のガミラスがやったように時間断層を積極的に活用すれば、地表で暮らす人々の時間はそのままに、早く進む時間の中で作られた物資で急速に復興することも可能だろう。瓦解した防衛艦隊の整備も可能だ」

「つまり地球は、爆弾を抱えることになる。時間断層のことが外部に知れるようなことがあれば、その有用性を狙った異星人の侵略もありえる、と」

「うむ……」

ゴートの指摘に守は苦々しく頷いた。

『……おそらくわれわれ人類は、もう波動砲を捨てることができなんでしょうから』か。艦長のあの言葉は、これを予期してのことだったのか……。侵略者にとって価値のある星に住まうのなら防衛力が必要だ。ヤマトがここまで航海を続けられたのは、波動砲の威力にガミラスが慎重になっていいるからだとすればなおさら……もう人類は波動砲を捨てられん……！ 波動砲の存在が安全保障に繋がる可能性が示唆されてしまえば……！」

真田が感情のままに右の拳を左手に叩きつける。

一度侵略によって滅亡寸前にまで追い詰められた文明が、まだ狙われる要因を残した状態で強大な武力を捨てられるわけがない。

身を守る手段を捨てるということは、他国から見れば侵略してくださいと言っているようなもの。歴史が証明している。

結局のところ、戦争を避けるためには『割に合わない』と思わせて武力衝突を回避させる目的でも、軍事力が欠かせないのだ。

だが――。

「それどころか、波動砲があれば最悪『やられる前にやれ！』って過激路線に傾向しかねないですよ？ だってその気になれば、相手の母星そのものを破壊できるんですよ？」

いまさらながら突き付けられた波動砲の真の脅威。

波動砲は『波動エンジンさえあればいくらでも増産できる』

そして、最悪現場の判断で使用できてしまうのだ……。

「——そういつた懸念もあつたから、スターシアは渋つたんだ。あの威力は、人の心をたやすく惑わす。だからカスケードブラックホールの脅威を認識していてもガミラスには渡せなかつたし、その力でミスマル艦長が歪んでしまわないか、仮に彼女が大丈夫でもほかの人間がその力に溺れてしまわないか、地球が今後ガミラスのようにならないかを常に案じていた。前者二つはどうやら避けられたようだが、あとは地球か……」

「——ええ、その懸念があつたからこそ、ユリカはミスマル司令にも出航直前にすべてを打ち明けて調停を頼んでるわ。ヤマトが太陽系を飛び出したあと、すべての情報を開示して判断を迫っているはずよ。とはいえ、今後の安全保障の問題もあるから封印には至らないだろうって判断して、その後の防衛艦隊構想についても草案程度なら作って、ね。できるだけのことはしてつたのよ、彼女」

「——まさか、シミュレーターで使つたアンドロメダと主力戦艦つて艦艇のデータも？」

太陽系さよならパーティーのとき、ユリカが進との戦いで使つた戦艦群のデータを思い出した大介が問えば、エリナが頷く。

「そのとおり。あれはヤマトの初航海が成功したあと、地球の復興の過程で作られた新しい宇宙艦艇。その最初期のものを回収できたデータから復元した代物よ。外見だけだけどね。あのデータを基にネルガルで新造艦を造つて、それを売り込む——ユリカがヤマトの再建と並行して考えてた地球の防衛艦隊再建構想の一端よ。うちとしても、戦後のスキヤンダルで失つたシエアを取り戻して再起するにはこの上なく魅力的なプランであつたし、私と会長はユリカからすべてを聞かされている立場にもあつたから、ヤマト再建を含めて承諾して、いまに至るつてわけ。なにしろヤマトは出生世界で数度に渡つて侵略者と渡り合つた経験があるのよ？ この世界でも同じことが起きない保証はない。ヤマト再建だけでも余裕がなくてヒーヒー言つてる状況だったけど、ヤマト成功のあとを考えるとおぎなりにもできない……転ばぬ先の杖として、プランだけはいまも地球で進展しているはずよ」

つくづく驚かされる。能天気そうに見えて、ヤマト再建から始まって戦後の状況を見据えてできる限りの準備を整えさせていたとは。

「なにしろ今後どうなるかなんて誰にもわからない……だから『ヤマトの戦いを知る者』として思いつく限りの保険を残して、万が一生き残れなかったときでも今後の侵略者に対する備えを残すべく準備してたの。この世界で唯一、過去のヤマトの戦いを知る者として——。コスモリバースと言えども、想定外の動作になるユリカの再生は成功率が低くて確実性に欠けている。それにさっき話した時間断層も、いまのヤマトでは検出されていないけど、ユリカを再生するためにシステムを内向きに作動させるってことは、ヤマトもその影響を受けるってことだから——」

「——ヤマトが急激に劣化して死ぬってことですか!？」

「可能性は極めて高いわ。これから、いろいろと無茶も重なるしね……ユリカさんが地球艦隊の再建の準備を整えるべく用意を進めたのも、このヤマト自身がはたしてこれからも存続できるかどうかかわらないからよ。万が一ヤマトが時間断層を生じる反動——リバースシンドロームの影響で老いてしまったら、私たちは実績のある守り手を失うことになる……私たち自身の能力を、絆を疑うわけではないけど、いままでの戦いだって『ヤマトだから切り抜けられた』。結局向こうの世界だって、いろんな事情があつたのだろうけれど、ヤマト以外に地球の防衛で実績を残せた艦はほとんどないって聞いたわ……」

驚愕するジュンにイネスはその可能性が十分あることを、そしていかに自分たちがヤマトに頼っていたのかを伝える。

実際、ヤマトはいままで地球艦とは桁違いの能力を持ってガミラスに抗ってきた。そしてそれが、何時しか当たり前に……。

そのヤマトがいなくなったらと考えるだけで、こんなにも不安になるなんて……。

「——だから、私はヤマトに縋つたの」

医務室で入院中のユリカが、コミュニケーションを起動して語りかけてきた。

「バラバラになって、一見再起が無理そうな状態にもかかわらず私た

ちのために……使命を果たすためにこの世界に来てくれたヤマト……私は応えたかった。ヤマトはね、出航前にも話したとおり、地球を救うため、人類の未来を拓くため、坊の岬沖の海底から蘇ってきた艦なの。だから、最後の最後までその使命を果たさせてあげることが、ヤマトにとつての幸せであり、ヤマトに継ぐ私たちができる恩返しだと思った。だから——私は選んだの。ヤマトの技術から新しい艦を作るのではなく、ヤマトを復活させるって道を。この世界で没した大和の残骸も混ぜて、この世界の大地と一緒に改めて抗おうって——それに、ヤマトは二六〇年もの間海底で地球の自然と同化して眠っていた艦だもの。意思を持っていることも含めて、システムの器としては最適だろう、私の負担がそれで減れば、自身の回復に回せるリソースも増えるかもしれないって、スターシアも言ってたし」

と、ユリカは語る。

彼女は決して伊達や酔狂でヤマトを蘇らせたわけではなかった。必然だったのだ。

宇宙戦艦ヤマトの特異性こそが、この状況を覆せる最後にして最大の——鍵。

——そしてみな、ヤマトに勇気付けられてここまで来た。来ることができた。

もしもヤマトではなくアンドロメダがやって来たとしたら、はたしてここまで勇気づけられただろうか。

否。

ヤマトには実績がある。歴史がある。

それが勇気の源だったのだ。

——宇宙戦艦ヤマトでなければ——駄目だった。

「それにね、仮にヤマトから生まれた『別のヤマト』を造るにしても、私たちは本家本元のヤマトをちゃんと知らない。それじゃあ、ちゃんと魂を受け継ぐことができないって思ったのも理由かな。私できえ、記憶の中に生きる沖田艦長の姿を見て感銘を受けただけで、直接教えを受けられたわけじゃない。だから、せめてオリジナルのヤマトに乗って学びたかった。それができれば、仮に『いまのヤマト』が今後

駄目になるとしても、私たちが理解した本物の魂を次に繋げることができれば、姿形が異なる『次のヤマト』を生み出すことだって、できるんじゃないかと思つたの」

言いたいことは理解できる。

データだけを見てわかつたような気になつたところで、それは継承ではない。模倣だ。

継承するには、やはり本物に触れるのが一番確実に効果的だ。ユリカが新造ではなく在りし日のヤマトの姿を極力保つたまま復活を願つたのも、やはりいまなら——クルーとなつたいまだからこそ理解できる。

「——私、いまふと思いました」

ルリはユリカに対して静かに語り始めた。

「アクエリアスは、生命の種子を運ぶ愛の星。その愛は、時に試練という形で厳しく現れるけれど、その本質は命を強く育てるためのもの……。アクエリアスの——命の種子を宿す海に沈んだヤマトがこの世界に現れたことに、いまさらですが運命的なものを感じます。……アクエリアスから生まれた生命同士の生存競争——これも形を変えたアクエリアスの試練なのかもしれませんね……」

「そうかもしれないね。……ねえみんな、真実を話す前に私聞いたよね？ 前に進むことを止めないでくれるか？ 最後の最後まで諦めないでくれるか？ って」

ユリカの言葉に、全員が頷く。

正直膝を折ってしまいたいと思えるような衝撃を受けた。

ここまで希望を繋いでくれたユリカを『部品』として使うことに対する抵抗もそうだが、そこまでしながらも救える確たる保証がないこと。

——そして、このヤマトをも失うかもしれないこと。

しかし、ユリカに関しては不完全な状態とは言え、その命を繋ぐという形でコスモリバーズの効果が得られることが示された。万全とは言いがまつたく先が見えないよりはいくぶん気分がマシだ。

それに……仮にヤマトが二度と飛べなくなつたとしても、その魂を

自分たちが継いで第二、第三の『ヤマト』に繋いでいくことができる。そう、自分に言い聞かせて頷く。

それが、ここまですべて希望を繋いでくれたユリカとヤマトに対する、最大限の礼だと信じて。

「じゃあみんな、お願いだから悲しまないで。たとえ可能性が○に近くても、○じゃない。今回上手くいったみたいに、本番でも上手くいって、私が元気になれる可能性は——希望の灯は残ってる。それ、ヤマトが駄目になるって決まったわけでもない。でも、ここで立ち止まったら全部お終いになっちゃう。だから、歩みを止めないで………ううっ……ごめん、一旦切るね。少ししたら重大な発表があるから、そのまましばらく待機してて」

ユリカはそう言うと、コミュニケーションをオフにしてクルーの前から姿を消した。

第十九話 明かされる真実！ 新たな決意と共に！

Bパート

「——悪いね、進。せっかく補装具も用意して貰ったけど、ヤマトの指揮——任せるしかないや……」

「はい。あとのことは、俺に任せて下さい」

みんなの前には姿を現さず、ユリカの傍でイネスたちのやりとりを聞きながら、進は最後の打ち合わせを済ませていた。

「艦長室のクローゼットの奥に、赤い錨マークの掛かれたトランクがある。その中身を使ってくれろと嬉しいな。……やっぱりさ、カッコつけたほうが、いいと思うから」

「はい」

「——大丈夫、あなたならできる。私の自慢の——古代進なら」

とびつきりの笑顔でユリカは進を送り出す。髪の色が落ち、肌荒れも酷くなつた痛々しい姿でも、その笑顔はたしかに太陽の輝きを宿していた。

最後の勇気を受け取った進は、彼女が自分に託した『願い』を叶えるべく、そしてそれ以上にヤマトと共に戦うものとしての使命を果たすため、行動を開始する。

艦長室で目当てのトランクを開け、中に入っていた衣服を身に付ける。

ついでにファイルを見つけた引き出しから『ある物』を取り出すと、大事に脇に抱えながら第一艦橋に降りる。

持ってきたそれを壁に掛けると、大きく息を吸ってから艦内通話のスイッチを震える指で押し、腹の底から声を出した。

「ヤマトの戦士諸君！ 本日ただいまをもって艦長代理に就任した、古代進だ！ みんなの命、いまこの瞬間から母ユリカに代わって俺が預かる！ 一度にさまざまな情報を与えられて困惑しているだ

ろうが、俺たちのすべきことは変わらない！ ヤマト共に……地球と人類の未来を護るぞ！」

突然の宣言に驚いた各部署の責任者と副責任者は、大慌てで主幹エレベーターに搭乗、二基のエレベーターにぎゅうぎゅう詰めになって第一艦橋に転がり込んできた。

そんな彼らが見たのは、旧デザインの戦闘班の艦内服に身を包み、ユリカと同じデザインの真新しいコート羽織り、艦長帽を被った進の姿。

そして、艦長席のエレベーターレールに掛けられた、初老の男性のレリーフ。

「こ、古代！ その格好——いや、艦長代理って」

会話が筒抜けなのも忘れて大介が問い質す。第一艦橋のあちこちにクルー全員分のフライウインドウが開いて、言葉を求めている。

急展開に困惑している大介の表情に「ドッキリ大成功」と冗談が頭を過りながらも、進は言った。

「艦長の意向だ。残念だが、先の負傷の影響もあつて艦長はその職務を果たすことが難しくなった。よって、艦長の後継者として教育を受けた俺が艦長代理として全権を任せられた。以後、よろしく頼む」

「……わかつちやいたけど、ちよつとは相談して欲しかったなあ……そんな僕って頼りない？」

副長なのに蚊帳の外だったジユンが嘆き、傍らにいたラピスに慰められている。

「さて、今後のヤマトの航路についてだが、ガミラスの目的とマグネトロンウェーブ発生装置から得られた情報を加味した場合、われわれがイスカンダルと地球を結ぶ中間目標として考えていた自由浮遊惑星バランスにも、ガミラスの大規模な中間補給基地の類が存在する可能性が高いことがわかつている」

呆けていた大介たちの顔が引き締まる。

「これが地球への侵略拠点であることは明白であるが、彼らの真の目

的を考えれば——地球の凍結をなんらかの方法で解除し、入植可能になるまでの間移民船団を待機させる寄港地となっている可能性が考えられる。事実、マグネトロンウェーブ発生装置は民間の解体業者が所有する設備であることが解析から伺え、そのような装備を前線基地が備えていること自体が不自然だ。つまり——」

「まさか、バランス星の基地施設に民間の居住エリアが併設されている可能性があるということか!？」

進の言わんとすることを察したゴートが声を荒らげた。

「そのとおりだ。もしそうなった場合、民間施設を避けながらの基地施設の破壊工作は不可能。加えて中間地点にある施設ともなれば、冥王星前線基地とは桁違いの規模を有している可能性が高い。それにバランス星の位置関係を考えれば、地球攻略に失敗した場合の一時避難先に指定されている可能性は十分にある」

「……そうか、ここからなら俺たちが補給したビーメラス系ともかなり近い。水と食料の心配が少なくて済む。原生林が生い茂るビーメラスを開拓するのには時間が掛かるが、すでに文明が生まれた地球なら、開発された都市部への被害を抑えて攻略すればわれわれが造った施設も利用してインフラの整備が早く終わる。遊星爆弾が地表に対しての爆撃ではなく、寒冷化による人類の凍死を狙うものだったのは、ガミラスに一から惑星開発をする余裕がなかったからなのか……！」

「そのとおりでしょう、真田さん。そうでなければ、文明を持った地球を手に入れるよりも、文明のないビーメラス系に入植したほうが楽だったはずです。おそらく、カスケードブラックホール対策が検討されたときには、もう開拓するには手遅れだったのだと考えるのが妥当でしょうね。実際、ここまでのヤマトの航海で地球人型の異星人が入植するのに適した恒星系は、太陽系とビーメラス系以外ありませんでした。大マゼラン内で入植先を見つけられなかった理由は不明ですが、なにかしら入植できない理由があったと解釈せざるをえません。地球に目を付けたのは、将来的に天の川銀河に手を伸ばすための拠点として目を付けていたのを、そのまま移民先として選定したのではな

いかと、艦長は推測していました」

進がいままでユリカたちと検討してきた情報を打ち明けると、みな揃って難しい表情になる。

「さて、われわれが採るべき道が二つあることは、さきほどイネス先生からの説明でみな理解してくれたと思う。艦長代理としての俺の方針はすでに決まっている。艦長も同じ考えだ。だがそれを発表して命令する前にみなに聞きたい——ガミラスとどうしたいのかを」

進に言われ、事情を知らなかった全員が考え出す。

ガミラスの行動は到底許せるものではない。滅亡寸前まで追い込まれた地球人類としては当然の感情だ。

しかし、だからと言って滅ぼす道を選ぶべきなのだろうか。

地球が——ヤマトがガミラスに勝てるとしたら本星接近時に波動砲で国を滅ぼす以外に道がない。

それも——報復を考慮するのなら民族そのものを、ということになっってしまう。

報復が来ることを覚悟したとしても、つど退ける余力が地球にあるのかどうかわからない。ガミラス本星を滅ぼしたとしても、各地に拠点を有している可能性は十分にあるのだから。

「……俺は、できるなら和解の道を模索したい」

木星出身のクルーの一人が言った。

「俺たち、ずっと地球は悪だった教えられて育って、それを疑いもせず成長して、戦争して……結局戦争が終わってもそうそう価値観を変えられなくていがみ合って、火星の後継者が出て来たときも内心草壁閣下に期待してる自分がいて……。でもガミラスに木星を滅ぼされて、行き場を失った俺たちを受け入れてくれたのは——地球人だった」

その言葉に、次々と木星出身のクルーが呼応していく。

「——そうだったな。さんざん罵り合って血を流して……。仲良くできるなんて全然考えられなかったのに、国を亡くした俺たちを受け入れて、一緒に戦おうって言ってくれたの、地球人だったんだよな」

「——ああ。嬉しかったよなあ……。あのとき、これ以上なく実感したんだよな。過去の怨恨を超えて仲良くなれるんだって……」

「——俺たちだつて、戦争中は民間にもさんざん被害を出した木星が許せなかった。あれだけ血を流しておきながら、やれ悪の地球人がだの、一〇〇年前の恨みだのとか言われても納得なんてできなかったし、事実上の報復をしておきながら俺たちの報復を認めないって……本当に自己中な連中だつて、心底嫌つてたっけ」

「いつからだつたんだろうな。一緒に腹の底から笑いあつて、飯食つて風呂入つて、仕事して、その日の成果に一喜一憂して……。いつの間にか昔の恨みなんて流れちまつて、一緒にいるのが当たり前になつちまつた」

木星出身のクルーの言葉に刺激され、地球出身のクルーも口々に當時を思い返している。

考えてみれば本当に愚かしい戦争だつた。

過去の怨恨があつたにせよ、互いを理解しようと思はず自己主張ばかりで暴力を振るいあつて……ガミラスだつて、そんな連中に期待をかけるようとはしないだろう。

だけでも、ガミラスの侵略があつたからとはいえ……いまは互いにわかり合えている。

もはや過去ではない、現在の怨恨を乗り越えて手を取り合うことができた。

その結果を噛みしめたクルーは、自然と言葉を発していた。

「艦長代理。俺たちは、ギリギリまでガミラスとの和平を模索したいと思ひます。もう、恨みや憎しみを糧に血を流し続けるのはゴメンです。ガミラスと解り合えないのなら、心を鬼にして滅する覚悟を持ちます。でも、いまはもうこれ以上は無理だ、つていうところまでがんばつてみたいと思ひます！」

「艦長代理、それがここまで希望の灯を繋いでくれた艦長に報いることだと考えます。彼女だつて、俺たち木星人が中心になつた火星の後継者のせいで人生を滅茶苦茶にされて、あんなに仲のいい旦那さんと引き剥がされて、命に関わる病に侵されたにも拘らず——俺たちのために本気で悲しんでくれた。俺たちの無念を理解してくれたんです。」

——そんな彼女の部下として、最後の瞬間まで抗いたいです！」

口々に、クルーが訴えてくる。

内容は個々に微妙に違っていたが共通していることは一つ。

ガミラスと共存する道を模索したい、憎しみを糧に戦いたくない。そして、いざというときには躊躇わない、と。

クルーの総意を受け取った進は、後ろのレリーフを振り返ってクルーに語りかける。

「みんな、見てくれ。このレリーフの人物は、初代宇宙戦艦ヤマト艦長——沖田十三のレリーフだ。アクエリアスの海に没したヤマトから艦長が個人的に回収し、保管していたものだ」

進に促されて第一艦橋に所狭しと浮かんでいたウインドウの、艦橋に上がっていたクルーの視線がレリーフに注がれる。

「残念なことに、俺たちは直接沖田艦長に会うことは叶わなかった。だが、ヤマトの記憶を垣間見た艦長を通じて、その精神はたしかに俺たちにも受け継がれた……最後の最後まで諦めるな、たとえ最後の一人になっても絶望はしないと……だから俺たちも、どんな苦難に遭遇しようかと決して諦めず、その先にある微かな光を……本物の希望に変えるぞ！それがこのヤマトという艦に乗る者の宿命だ！帰りを待つてくれる人々のためにも、最後の希望を繋ぐ！——いままで俺たちを導き育ててくれた、艦長のためにも！」

進の言葉に、自然と全員の背筋が伸び、姿勢が正される。

「修理とワープシステムの改良が済み次第、ヤマトはバランス星に向けて発進する！ 探査プロープによる探査が可能なギリギリの距離から情報を収集したあと、素通りして大マゼランを目指す。和平への道を模索するためにも、彼らが未来を繋ぐための重要拠点と考えられるバランス星は、一度捨て置く。たとえ後方からの攻撃に晒されることになったとしても、これから先ヤマトが越えねばならぬ宙域で罨を張られることになったとしても、俺たちはそれを潜り抜けてイスカンドル星並びにガミラス星に接近し、講和を訴える！」

それはきつと苦難の道だろう。地球で帰りを待つ人々が望む結末とも言えない。

だがそれが正しき道と信じて俺たちは行く。

これ以上血を流さずに済むように、同じアクエリアスの命の種子から生まれた遠き兄弟とわかり合うために。

「八方手を尽くしても駄目なら、俺たちは涙を呑み、心を殺してでもガミラスを討ち、イスカンドルを救って地球に戻る。願わくば、そうならないことを俺も願ってやまない。しかし——」

一度言葉を区切ってから、大事なことを告げる。これを忘れてしまつては、ナデシコがかつて失敗した、木星との和平交渉の決裂を繰り返しかねない。

「残念ながら、俺たちは地球政府の代表という立場にはない。俺たちが独断で和平を実現したとしても、政府がそれに納得してくれる保証はない。幸いなことに、ミスマル司令が行動してくれているはずなので、ある程度の理解は得られているとは思いたい。だが、それでも俺たちがなんでもかんでも決めることはできない。万事上手くことが運んだとしても、ガミラスの使者を地球に連れ帰るなりして政府間で話し合つて貰う必要がある。その場合、使者の安全を守り、無事にガミラスに送り返すのも俺たちの役目だ。間違つても、個人の感情に基づく報復の被害者にさせるわけにはいかない」

「責任重大つてことですね……」

ラピスも改めて自分たちが選んだ道の険しさを痛感し様子だ。

「そうだ……これから先は、こちらの覚悟を示すためにも不用意に波動砲を使うことができなくなる。辛く険しい道程になるだろう。だが、俺たちは地球を救い、人類の未来を拓くためにもこの苦難を乗り越えなければならぬ！——改めて言うぞ……全員、信念をもって戦えと！俺たちの行動の結果が、すべてを決するぞ！」

進の宣言にクルーが敬礼を持って応える。しかし、その敬礼は宇宙軍で使用されている型ではなかった。

補装具を身に着けたユリカが行つたのと同じ、拳を握つた右腕を胸の前に横に掲げる、ヤマト式の敬礼だった。

それを知らない守は普通の敬礼だったが、周りに合わせてすぐに敬礼をやり直す。

進は軽く驚きながらも同じ敬礼を返す。そして思った。

いまこの瞬間、俺たちは『本当の意味でヤマトのクルー』となったのだと。

ユリカを通して沖田艦長の教えを受け継いだ、『沖田の子供となった』のだと。

進が艦長代理を宣言してからすぐ、医療室のユリカの元にアキトが戻ってきた。一緒にウィンドウに映し出される艦長服姿の進の姿を眩しそうに見る。

嗚呼、なんて立派になったのだろう。

「大きくなったなあ。最初に会った頃は、年相応って感じだったのに」「だよねえ。正直、間に合ってほっとしてる」

二人揃って進の言葉を聞き、それに応じたクルーの反応を聞く。

「憎しみを糧に戦うのはもう終わり、か……なあユリカ、もしかして、ナデシコときはできなかったことに、またチャレンジしてるのかな？」

「うん。あのとときの失敗、活かされるといいね」

思い出すのはナデシコを奪って挑んだ和平交渉。

あの時はそれが正しいと思っていたが、いま思い返してみると、政府の意向を無視した勝手交渉など、逆に泥沼化を招きかねい手段だったと反省する思いだ。

そして理想だけで先走った結果……木星の内情を読み切れず、白鳥九十九という犠牲を出してしまった。

あのあと演算ユニットを投棄して戦争の目的を失わせなかったら、もしかしたら殲滅戦に移行していたかもしれない。

子供だったのだ。

まだまだ世間を知らず、思いを通せば世界が動くと錯覚してしまった、子供だったのだ。

あれからいろいろあった。

見方を変えれば中途半端な終局を迎えさせたがゆえの火星の後継者の出現。そして生まれた戦乱。ユリカたち火星生まれを襲った悲劇。

——もう繰り返してはいけない。

ガミラスとの戦いは長く続けば続くほどに、双方を疲弊させていく。

地球に勝ったとしても、ガミラスは大きく弱体化してしまう。そうすれば彼らの庇護下にあるかもしれない弱き者たちの未来すら、闇に閉ざされてしまう。

「今度は成功させたいな。このまま戦争が続いたとしても、俺たちに未来はない」

「うん。でもできると思うよ。このヤマトなら……ナデシコでちゃんどできなかつたこともできる。そんな気がするの」

ユリカの脳裏にヤマトの記憶の断片が蘇る。

アクエリアスを発進したヤマトを包囲する異星人の艦隊。そんなヤマトの危機を救ってくれたのは——ガミラスの艦隊だった。

だとすれば、少なくともガミラスとは和解の可能性がある。

もちろんユリカの知る進たちとかつてヤマトに乗り込んだ『古代進』らが事実上の別人であるように、この世界のガミラスに和解の可能性がある保証はどこにもない。

だが、冥王星艦隊の行動を思えば、同じような精神構造を持つていて、共通する価値観を持っているのではないかと思えてならない。

ユリカはあの瞬間、共存を目指すプランのほうを主軸に切つてきた。

だから、せめて波動砲に溺れていないと示す意味合いもあって、次元断層内では極力波動砲で巻き込まないようにと注意を払い、進が応じてくれたことで犠牲を出さずに済んだ。

そのことをあのときの指揮官がわかつてくれていたら、希望が繋がっていると信じたい。

たしかに砲火を交え、命は散らした。だが波動砲による大量虐殺を否定した。それは戦うべきときは躊躇しないが、必要以上の犠牲を払うことを嫌う自分たちの『甘さ』である、ガミラスを滅ぼすことは望んでいないというメッセージ。

伝わってほしい、未来のために。

「ここからが本番だな——ユリカ、万事上手く進めるにはいったいなにが必要なんだろうな？」

アキトの問いにユリカは力強く答える。

「決まってるじゃない……ヤマトがいままで起こしてきた奇跡の立役者——愛だよ。やっぱり最後は、愛が勝つに決まってるよ」

二人ははしつかりを互いの手を握り締めて、立派に育った子供の晴れ姿を見詰めていた。

進の宣言のあと、守の乗ってきたツギハギの連絡艇を解体して部品を取り出し、提供されたデータと照らし合わせてワープエンジンの再改装を始めた。

幸いにも連絡艇はあの暗黒星団帝国とやらの攻撃に晒されず、無事だった。それにここはまだビーメラ4の軌道上。再度敵が攻めてくる可能性はあったが、まだ残されているマグネトロンウェーブ発生装置の物資も活用すれば、下手に移動するよりも短い時間で作業できる。

エンジン改修には四日ほどかかる予定だが、背に腹は代えられない。

アステロイドリングを活かすときだ。マグネトロンウェーブ発生装置の残骸を偽装に活用して、ヤマトは機関部の改修作業を開始した。

「まったく、完璧に追い抜かされるとは思ってもみなかったぜ。だが調子に乗るなよ古代。すぐに追いついて追い越してやるからな！」

去り際に大介は清々しい笑みを浮かべながら進に宣言。

その声には最大限の賛辞と、学生時代からのライバルに対する心地よい対抗心が伺えた。だから進も、

「待ってるぞ島。なんてったって、おまえは俺のライバルだからな」

と返して親友の奮起を促す。そうやってエレベーターの前で拳を打ち合わせ、大介は去っていった。

「さて……兄さん。俺の代わりに戦闘指揮席に座ってくれないか？」

もちろん、戦闘班長として」

進はいいタイミングでヤマトに合流してくれた守に、戦闘班長の職務を押し付けることにした。

これから起こりえる激戦を考慮すると、各部署に攻撃指示を出しながらヤマトの操艦をするのは、いまの進の手には余る。

自分はユリカのように天才と称される頭脳はない。

ついでに誘拐されていた期間のブランクがあれどナデシコでの実戦経験があり、ヤマトのすべてを理解して力を引き出していたユリカの真似もできない。

だから体よく押し付ける。嫌とは言わせない！ たとえ兄でも！

「……そうだな。ミスマル艦長にしごかれたと言ってもまだまだ新米のおまえだ。両方の役職を兼任するのは辛いだろう。俺も遊んでいけるわけにはいかないからな。だいぶ回復したとは言っても、パイロットをできるほどではないし、願ったり叶ったりだ。それじゃあさっそく戦闘班の部署を回って挨拶をしてくる」

「頼むよ、兄さん」

「……しかし、仮にも艦長代理の立場でその呼び方はないんじゃないか？」

真つ当な軍人として教育を受けている守は進の振る舞いが立場ある者としては少々フランク過ぎるのではないかと指摘をするが……。

「え？ ユリカさんはだいたいいつもこんな感じだけど……」

「え？」

「え？」

思わず問い返してしまう。

「……」

「……」

そして沈黙が流れた。

そこに至って、守は思い出した。

そうだった、いろいろと同期から言われていたが『あのキワモノで有名なナデシコの艦長』だったのだ。軍人らしからぬ振る舞いも、伝染してしまったようだ。

ミスマル艦長、弟の教育を微妙に失敗している気がします。

守は心の中で苦言を呈しながら「なら、いいさ」と矯正を諦める。いままでもそうだったのなら、変に空気を変えるよりはそのままのほうがクルーも動きやすいだろう。

そういう意味では、進はたしかにユリカの後継者なのかもしれない、と守は思った。

第一艦橋を去る守の背中を見送って、「やっぱり、ユリカさんは普通じゃないのか」と妙な納得をしている進に、「軍人としての態度は見習うべきではないと思います」と、ナデシコ時代から付き合いの長いルリが指摘する。そのあとで、

「古代さん、これからは私に対して敬語とかいららないです。私もフランクに接しますから」

突然宣言した。

「正直少し悔しいですが、あなたは私よりも上に行つたと判断します。長いこと決めかねていましたが、これからは年齢どおり私が妹であなたがお兄さんです——と言う訳で、以後よろしく。それじゃあ、私はECIに移動します」

言うだけ言つてルリはフリーフォールで第三艦橋に降りていく。

進は言い返す間もなかった。

「——ああいったところは、ルリさんもユリカさんの影響受けてるんだな」

またしても妙に納得させられた。

「——ああ、これであなは名実共にユリカ二号になつたのね……喜ばしいんだか悲しいんだか」

とはエリナの弁。

進は正直なんと言つていいのかわからない。彼女もさんざんぱつら振り回されてきたのだろうし。

「でもまあ、正直重荷を背負わせることになって申し訳ないと思つてるわ。本当なら、年上の私たちがもっとしっかりしないといけないのね」

「いえ、もう十分お世話になっています」

それ以上は上手い言葉も浮かばなかったが、それでもエリナには伝わったようだ。

「通信アンテナの再調整もしておくわ。マグネトロンウエーブ発生装置の解体で、相手の通信の周波数の解析も進んだことだし、もしかしたら暗号化の弱い通信なら拾えるようになるかもしれないしね」

エリナも本格的な調整作業のた、通信室に去っていく。

「進兄さん、とつてもかっこうよかったです！ 私もユリカと地球を救うために全力を尽くします！ それでは、山崎さん、太助さん、機関部の改修を急ぎましょう！」

「了解」

「はい、機関長」

一緒に第一艦橋に上がっていた仲良し二人を引き連れ、ラピスは足取りも軽く機関室に向かった。

……必要な作業のためとはいえ、一気に第一艦橋から人が居なくなっていく。

——緊急対応大丈夫なのだろうか。

「古代君」

みなに釣られて第一艦橋に上がっていた雪が話しかけてきた。

「艦長代理就任おめでとう。頑張ってるね」

なにやら熱いまなざし。

ふむ。なるほどたしかに、大介が言うように脈ありのようす。

だがいまはお仕事優先。腑抜けてはいられない。

「ああ、わかってるよ雪」

満面の笑みで祝福する雪に、進も笑顔で応える。

「これからも、ユリカさんを頼む。状態が前より悪化してるから」

「任せて。それはそうと、古代君部屋はどうするの？ 主幹エレベーターには近い位置にあったと思うけど、艦長代理になったんだし、艦長室にお引越しかか？」

「——ああ。ユリカさんとも話し合ったけど、艦長室は俺が使うことになったんだ。ユリカさんは医療室に入院することが決まっているし、服装までわざわざ仕立てたんだからかっこうつけるためにもそつ

ちを使えつてごり押しされて……ああ、そうだ。雪、悪いんだけど艦長室の荷物の整理をお願いできるか？ さすがに女性の荷物を勝手に動かすのは……」

「わかったわ。すぐに着替えは纏めて医療室の方に持って行くわね。あと、シーツとかお風呂場のアメニティも交換しておくわ。そのほうが落ち着くでしょ？」

雪に言われて「頼むよ」と進もお願いする。

最初は引越すことに抵抗を示したのだが、結局「最高責任者になるんだからわがまま言わない」と押し切られてしまった。どっちがわがままなんだと思わないでもなかったが、口論で勝てる相手ではないのであきらめた。

正直気は進まない。あそこは緊急対応しやすい個室としては最も立派なのだが、いかんせん場所が場所だ。

眺めがいいし怖いでもあるし、スペースステブリの類が接触したり敵弾が命中したらあっさりなくなってしまうような場所。

——沖田艦長には悪いと思うが、全然住みたいと思わないのだ。

だが決まってしまったことは仕方がない。あとで荷物を移動させなければ。

——そうだ、大切なことを忘れていた。

「真田さん、手間をかけて申し訳ないんですが——」

「あのレリーフが昇降の邪魔にならないようにして欲しい、だろ？ ちようどのあの近辺は修理しなけりゃならないからな、ついでにやっておくよ。おまえは自分の荷物を纏めてこい」

真田は進の肩を叩いて微笑んだあと、艦内管理席に座って部下を呼び出し、壊れた第一艦橋の壁面の修理作業の準備を始めた。

進はそんな真田の背中に会釈し、隣にいたジユンに「それじゃあ、しばらくお願いします」と声をかけた了承を得たあと、荷物を纏めに自分の部屋に戻った。

そうやって各々が自分のやるべきことをしているなか、艦長室で引き続き作業を進めていた進はウリバタケに呼び出され、機械工作室に足

を運ぶことになった。

「艦長代理、守さんが持ってきてくれたこの物資なんだがよ。これを活用すればエアマスターとレオパルドを理想的な形で完成させられそうだけ！」

ウリバタケが危機として差し出したPDAを受け取って、表示された仕様書にぎつと目を通してみる。

表示されていた機体は機動力特化型と火力特化型のガンダム、つまりエアマスターとレオパルドであったが、以前目にしたことがある初期プランのそれとは異なっていた。

名前も『ガンダムエアマスターバースト』『ガンダムレオパルドデストロイ』となっている。

「エアマスターは可変機構——トランスシステムを持つ機動力特化の機体で、人型と戦闘機形態を任意で使い分けて戦う近・中距離での射撃戦に特化した機体だったのは、前に説明したよな？」

口頭で捕捉するウリバタケに頷く。

エアマスターは徹底して軽量化を図りながら、シンプルな『寝そべり変形』によって、戦闘機形態に変形する機能を与えられたガンダムであり、小回りと安定感重視の人型と、速度と一撃離脱戦法重視の戦闘機型をプレキシブルに切り替えることで、近・中距離での高機動戦闘に特化した機体だ。

「初期プランだと軽量化志向が行き過ぎて、武器が両手に装備可能なバスターライフル二挺しかなかったが、守さんが持ってきた物資から武装を追加して補えた。増えた重量分はこれまた物資にあった追加ブースターを組み込んでフォローする。そのせいでちよいとピーキーなセッティングになっちまっているが、Gファルコンナシならダブルエックスを凌ぐ通常戦闘火力に、単独でもGファルコンDXに匹敵する機動力と、抜群の運動性能を両立できるのが特徴だ。ただ、本体の軽量化志向は変わってねえから、アルストロメリアよりは固いが、ガンダムの中では一番柔いのが欠点だな。シンプルにしたとはいえ可変機だから構造が複雑化していることと装甲の弱さを考慮して、こいつは白兵戦用の装備はオミットしてる。Gファルコンとの合体

は戦闘機形態での性能の強化に的を絞ってる」

ウリバタケのセールズに進も領く。

元来がダブルエックスとエックスに随伴し、その安全を確保するために開発された機体だ。少々極端に振った性能もガンダム同士の連携のためであるのなら文句はない。

画面に表示された機体は、白を基調に濃淡異なる青で彩られた機体で、機体の各所に航空機に似た意匠が見受けられる。

ダブルエックスよりも一回り太い脚部は大規模なスラストユニットを内蔵していることが伺えるし、肩の上にはこれまた巨大なスラストユニットが乗っかっていて、背中には戦闘機の機首を思わせるパーツが装備されている。

別ページの可変後の姿——ファイターモードも記されている。胸部の装甲一部開いて上に回転させて後方にスライドした頭部の正面を覆い、腰を一八〇度回転させて膝関節をクランク状に折り曲げて固定、つま先を折り畳んでメインスラストとする構造だった。

肩のスラストユニットも、格納されていたスラスト一体型連装ビーム砲——ブースタービームキャノンが外側に回転、格納されていた主翼の端に乗っかる形で側面に展開、肩の外側に折り畳まれていたスタビライザーも正面に展開して翼を形成している。

機首を形成するノーズユニットも移動して、胸部と一緒に頭部を完全に格納し、機首の大口徑ノーズビームキャノンを正面に向ける構造になっていた。

おまけに二挺の軽量型バスターライフルは、腕の側面にあるコネクターに機首のほうを向いた状態で接続される。

見るからに重戦闘機。エンジン出力との兼ね合いでグラビティブラストこそ見送られたが、十分すぎる火力だと思った。

Gファルコンと合体するときは、腰と足は人型IIノーマルモードのまま、ブースタービームキャノンを展開せず、ノーズユニットの尾部にあるドッキングコネクターを開き、Aパーツの代わりとなってBパーツに接続されるような姿だ。

戦闘機としてはGファルコンDXの収納形態の上位互換に相当し、

ブースタービームキャノンが使えなくなるがGファルコンの追加兵器や出力の増大もあって、総火力で単独のファイターモードを凌ぐ重戦闘機に変貌する。

特にグラビティブラストの追加は心強い限りだ。

「んで、次はレオパルドのおさらいだ。こいつは既存のガンダムに比べると胴体が前後左右に一回り大きくて、比較的規模の大きな武装を内蔵できるフレームを採用した重火力・重装甲に重きを置いた、エアマスターの対極の機体だな」

言われてレオパルドの資料を出すと、全身にこれでもかと武装を搭載した機体の図が表示されていた。

「見てのとおり全身武器庫も同然の機体でな。胸部には砲身八門のブレストガトリングを両胸に内蔵。両肩の上には短砲身だが至近距離ならかなりの威力を発揮するショルダーランチャー。右肩には精密射撃用の連装ビームキャノンに、左肩には二段構造の一一連セパレーターミサイルポッド。右腕にはリストビーム砲に頭部にはヘッドビームキャノン。両膝には長射程・高火力のホーネットミサイルに、右足側面には護身用のビームナイフ！ 普段は短縮してバックパックに懸架しているツインビームシリンダー！ 左右で異なる性質を持つが、本質的には機動兵器用の高火力ビーム機関砲で、単独時には少々きついが、Gファルコンとの合体で出力を増強すれば、対艦攻撃にも威力を発揮する！ ただ、重武装と重装甲を両立したせいで、ガンダムでは機動力が最も低いのと、単独での長時間飛行ができない、水中航行もできねえと、地形適応に難がある。つーても飛ぶだけならGファルコンくっ付ければ解消するからあまり問題にはならんだろ。地表ではエステと同じ発想のキャタピラとローラーダッシュのおかげで、ダブルエックスやノーマルモードのエアマスターにも追従できる。平地なら」

全身真っ赤で手足の一部と顔が白い、武器庫同然の機体。最初に見せられたときも思ったが、こんな重武装兵器管制システムがパンクしたりしないだろうかと心配になる。パイロットも、だが。

可変機構よりもロマンをくすぐられたのか、語気も荒くプレゼンす

るウリバタケの態度も鬱陶しい。

しかしこれだけ武器を満載しただけであった、火力は折り紙付きのこと。

特にツインビームシリンダーとやらは、本来左腕を丸ごと格納してビームガトリングにするインナーアームガトリングが初期案であったのだが、取り回しの問題から変更されたのだとか。

補給物資の中にあったださまざまな部品から見繕ったビーム兵器をベースに、右腕は四砲身のガトリングとその下に配された三連装砲、左腕は砲身断面が四角と円の大口徑砲二つとその脇に小口径連装と単装砲の複合となっている。

腕全体ではなく下腕部のみを覆うことで射界を広く取って、集中射撃による対艦戦闘から左右に分けて弾幕を張るなど、臨機応変に使えるのが売りらしい。

右手は単発威力よりも連射性重視で、左は連射性よりも単発火力重視。単位時間あたりの総火力はどちらも変わりなく、反動も極端な差はない。

だったら統一しろよと言ったら、「対艦攻撃には小口径のガトリングは不向き」らしく、右でフィールドを削り左で突破して装甲を抜く、という運用のために分けたのだとか。

そして普段は燃費もあってどちらも対空戦闘重視の低出力モードに抑えられているらしいが、対艦攻撃時には高出力モードに切り替えることも可能らしい。なんでもこの武装は腕の動力そのものと連結している構造であるからこそ、大出力化が可能なのだとか。

ほかにもビーム兵器オンリーでは弾持ちに問題があると、胸部のブレストガトリングやミサイルといった実弾兵器も多数装備しているのも特徴で、とにかく手数が多い。

これに飛行ユニットも兼ねたGファルコンと合体すると、地形適応の問題もかなり改善される。

長時間の飛行ができない機体の推力補助のため、Bパーツを可変として合体するのも特徴らしい。たしかに中央部が下を向き、コンテナパーツが平行になっている、変わった合体パターンだ。

Aパーツを使わない収納形態にもなれる。

合体で出力問題から解放されるため、ツインビームシリンダーの火力も上がるしなによりグラビティブラストの追加は大きい。

宇宙空間の場合、ミサイルを含めれば三六〇度死角のないこの大火力は、たしかに頼もしい限りだ。

「プランを見てもらえばわかると思うが、初期の案に比べるとどっちも格段に進歩した機体になってる。ピーキーなセッティングになっちゃまっているのが問題と言えば問題だが、それでもうちの連中なら扱いきれないってほどでもないし、これくらいの性能なら、二機でもダブルエックスの護衛が務まるはずだ。……今回は守さんがいい部品を持ってきてくれたおかげで形にできた。ここまで待たせちゃまって悪かったな。だが、待った分だけの活躍ができるよう、ばっちりしつかり仕上げてるからな！」

と、ウリバタケなりの謝罪と力強いアピール。

とにかく、バラン前に形になってくれそうで助かった。

二機とも相転移エンジンはGファルコンの予備をベースに手を加えた物で、出力的にはエックス以下Gファルコン以上という程度で、さらにエネルギーの貯蔵機能が優れるエックスやダブルエックスに比べると、長期的なエネルギー消費効率が劣るらしい。

それを効果的に補填するため、そして機体ごとの長所を伸ばすには、やはりGファルコンが適任だったのだと、ウリバタケは熱弁している。

「想定している運用方針は以前にもチラツと話したが、エアマスターが先行して敵部隊に接触しての戦線の構築、または早期警戒機。レオパルドはエアマスターに続いて戦場に到着しだい、大量の火器で敵機を殲滅するって運用を想定してる。こいつらが邪魔な敵機を排除してダブルエックスの安全を確保、サテライトキャノンを使うってのが、俺が考えてる黄金パターンってやつだ。サテライトを使わないにしても、両者の中間を埋めるダブルエックスを組み込んで三機でフォーメーションを組めば、いままでよりもずっと戦いやすくなるはずだ。エックスはアルストロメリアの指揮に回せるし」

「……運用方針はそれで問題ないと思います。パイロットはGXのときに辞退した月臣さんとサブロウタさんを割り当てましょう。シミュレーションのデータはできていますか?」

「おう! バッチシだぜ!」

さすが、仕事が早い。

「わかりました。それでは、念の為副長にも確認して貰ったあとで『全力で』組み立て作業に入ってください。波動砲とサテライトキャノンを安易に使えなくなったいま、この二機は戦局を左右する存在になるかもしれませんので」

「おう!」

二日が経過した。

機関部の改修も完了し、補給作業も完了した。

使い切れなかったジャンクに後ろ髪を引かれる思いを抱きながらも偽装を解除。ヤマトの周囲に広がり宇宙を漂い始めた残骸を背に置き、ヤマトはビーメラ4から発進する。

テストを兼ねたワープテストを実行、これまでよりも大きく飛距離を伸ばして最高記録の二五〇〇光年のワープに成功。二四時間のインターバルを置いて再度二五〇〇光年のワープ。今度も無事成功、ヤマトにも異常はない。

ワープ機能は着実に強化されている。次はインターバルを短く置いた場合の人体への影響を調査するため、最高記録の半分のワープを二度、一二時間の間隔を開けて実行。

成功した。どうやら、一度に二五〇〇光年跳ぶよりは気持ち負担が小さいらしい。

どうやら待望の連続ワープのテストに移行してもよさそうだ。そう判断した進はついに連続ワープのテストを指示した。うまくいけば、この手痛いロスタイムを完璧に帳消しにできるだろう。

緊張と期待が高まる中、準備は淡々と進んでいった。

「波動エンジン出力上昇。連続ワープ可能領域に到達」

「ワープ航路のプリセット完了。多目的安定翼展開。タキオンフィールド形成終了」

「時間曲線同調。空間歪曲装置作動開始。ワープ一五秒前」

着々とワープ準備が進められ、ついにカウントダウンを開始する。

「一〇……九……八……」

カウントが進むにつれ、緊張が高まっていく。

失敗は許されない。

今後のヤマトが受ける損害やその回復日程確保もそうだが、ユリカの具合がかなり悪い。このままではあと一カ月現状維持できれば上出来と言った具合だ。

連続ワープで日程短縮がはたせないと、間に合わなくなる。

「三……二……一……ワープ！」

カウント〇と同時にレバーを押し込みワープイン。

ヤマトは青白い閃光に包まれながら、艦首から空間に溶け込む様に宇宙から消失、約一〇〇〇光年の距離を跳んだあと、閃光と共に通常空間に復帰、間髪入れずに再度閃光に包まれて空間に溶け込み、また一〇〇〇光年跳んでは出現、また閃光に包まれて……といった工程を計五回繰り返し、合計五〇〇〇光年もの距離を一日で走破することに成功した。

テストで行ったワープテストの記録の倍近い跳躍距離に、だれしもが喜びの声を上げる。

跳躍距離の延伸もそうだが、クルーへの負担も検査結果や各員の報告書を見る限りではいまままでと変わらないか、逆にいくらか抑えられているともとれるデータが出た。

ユリカも体調の悪化が見られない。

連続ワープテストは無事成功を収めたと判断されたのも当然だろう。

ヤマトの艦体にも損傷は見られず、機関部の改修と並行して行われたコスモレーダーの拡張も問題がないようだった。

二四時間のインターバルを置いたあと、ヤマトはまた連続ワープで五〇〇〇光年の距離を消化、それを繰り返して、改修地点からわずか

五日でバラン星まであと一〇〇〇光年の距離にまで達していた。

「ワープ終了！ 通常空間への復帰を確認」

「艦内全機構、すべて異常なし」

「波動相転移エンジン、異常なし。正常に稼働中。出力回復まで、あと八時間を要します」

それぞれの責任者からの報告に、進も満足気だ。

「わかった。出力の回復を待ってから、一〇〇〇光年のワープを実行、バラン星から一 a u の地点で探査プローブを発射してから停泊、バラン星の調査活動を行う。バラン星は自由浮遊惑星で、光源となる恒星を持たないからプローブの探査に邪魔は入らないはずだ。プローブの飛行速度とバラン星の動きの観察を考えると、この程度の距離が最適だろう。各員、探査終了後はすぐにワープでバラン星を飛び越えて大マゼランに向かう。準備を怠るな」

できるだけ威厳あるように指示しながら、進はすぐにガミラスがこちらに仕掛けてこないことを願った。

バラン星がヤマトに潰されたくない重要拠点というなら対処は二つ。接近される前に叩き潰すか、息を潜めてやり過ごすか。

前者はおそらく超新星を利用した罠（マグネトロノウェーブ発生装置は罠の皮を被った援助なので除外する）だろう。これは切り抜けた。

もしこのタイミングで艦隊を出撃させれば、ヤマトに存在を察知されて攻略する口実を与えかねないはず。

わざわざ遠回りに、かつ露骨に示唆して揺さぶりをかけたのだから、ヤマトがバラン星を通過しても即座に反撃できる距離にある間は見過ごすはずだ。

もしかしたら、保有戦力をすべて叩きつけて物量で潰す方法に出る可能性もあるが……波動砲を警戒しているのなら可能性は低いはず。

それができるのならとつくの昔にやっているだろう。ガミラスだって百戦錬磨の強者なのだから。

さて、どう動くガミラス。

なにごともなく一〇〇〇光年のワープを終えたヤマトは、予定どおり探査プローブを発射、ロケットモーターで加速したプローブはアンテナを展開しながらバランス星目指して宇宙をゆったりと航行していく。

しばらくして、展開したプローブの天体観測レンズが映し出したバランス星の姿がメインパネルに表示された。

「バランス星を確認しました。質量が〇・九木星質量、直径が地球の約一〇倍の巨大ガス惑星だと推測されます。環も保有しているようですが衛星の存在は確認できません」

ハリが分析結果を合わせて口頭説明する。

自由浮遊惑星に遭遇するのは初めてだが、その存在自体は二世紀前から示唆されていたのでさほど驚きはしない。

「ふむ。あり触れた巨大ガス惑星にしか見えんな。ガミラスの技術力の限界がわからんから推測でしかないが、衛星がないのだとしたら軌道上——それも赤道の上辺りに自力移動可能な宇宙要塞という形で基地を構えているのかもしれない」

「——なるほど。ということは、あの環の中に艦隊を隠してヤマトがガミラスの痕跡に気付いたと確信を持った場合に限り仕掛けてくる、と考えるのが自然でしょうか」

「おそらくな。ヤマトもカイパーベルトで取った戦術だ。彼らも、そうする可能性が高い」

議論しながらも、貴重な時間を割いて調査を続ける。徐々にプローブもバランス星に近づくのでより情報が精度を増していく。

そしてついに、環の近くに基地施設と思われる巨大な建造物が確認された。

わかる限りでも最も長いところで全長三〇キロにも達する巨大なものだ。アステロイド・シップ計画の模倣か、岩石を纏って隠蔽しようとしているのが伺える。あと数時間もあれば環に溶け込むことができるだろう。

……本当に波動砲なしでは攻略すらままならない規模だ。

その基地の一角に巨大なグラスドームを有する区画があり、その内
部には街並みが再現されているのが伺える。

「やはり、民間施設があると考えたほうが妥当だな。攻略は見合わせ
るべきだと進言する、艦長代理」

真田の言葉に進も頷く。この構造では、被害を避けて基地を無力化
するのは――。

「っ！ 艦長代理！ バラン星の軌道上で別の光を確認！――これ
は、戦闘と思われませす！」

ハリの報告に一気に第一艦橋の緊張が高まる。想定外の事態だ。
「ハリー、詳細を頼む」

努めて冷静に問う進にハリはわかる限りの報告をする。

重力振を検知したと思つたら、突如として出現した宇宙戦闘機らし
き編隊の空襲に晒されたこと、時同じくしてバラン星宙域に先日ヤマ
トを襲った暗黒星団帝国と名乗る集団と同じタイプの艦隊が出現、急
遽発進したガミラス艦隊と戦闘状態に突入した、というのだ。

しかも辛うじて得られた映像データによれば、民間施設と推測した
区画にも容赦なく攻撃が降り注ぎ被害を出している、と。

最重要拠点であろうあの基地の対応が後手に回っているとは……
少々信じがたい事実だ。このままでは、陥落するかもしれない。

「艦載機単位でのワープだど？ そんな技術まで持ち合わせていると
いうのか、あの艦隊は……」

敵の超技術に真田が歯噛みする。

艦載機単位でも『跳べる』技術なのか、それとも『跳ばす』技術な
のかは、まだ見当が付かない。

だがあの戦術がヤマトに向けられたら――。これは由々しき事態
だ。

「どうする？ このまま見過ごしたほうがヤマトにとっては得かもし
れないけど……」

ジュンの語尾が濁るのも当然だ。このままガミラスと暗黒星団帝
国と名乗る集団が潰し合ってくれば、ヤマトは手を汚すことなくバ
ラン星基地が打撃を受け、ガミラスは無視できない打撃を受ける。

ヤマトの航海の安全がより増すことになるはずだ。

だが……。

「艦長代理……通信を傍受できたわ。暗号解読……成功。さすがね、ルリちゃん。内容は……すぐにドメル司令に戻って来てほしい、民間人居住区に被害が出ている、だそうよ」

エリナの報告に進は覚悟を決めた。

もう、後戻りはできない。

「……たとえ敵国であつたとしても、民間人に出る被害を——虐殺にも等しい行為を黙って見過ごすことはできない……それは、『俺たちらしい』決断じゃない！」

進の言葉に問いかけたジュンも、第一艦橋の全員も頷いた。

もしかしたらヤマトの早合点かもしれない。ここで乱入したとして、挟み撃ちにされる可能性は高い。

共闘したとしても、暗黒星団帝国を退けたあと、消耗したヤマトがそのままガミラスによって叩き潰される可能性も、十分にある。

しかし決めたのだ。道を模索すると。

「全艦戦闘配置！ 緊急ワープを敢行する！ バラン星の基地付近にワープアウトしてハッキングプローブを発射、ハッキングを併用して基地施設の様子を確認しながら、必要ならば民間人の救助活動を行う。ガミラスに対しての反撃は禁ずるが、暗黒星団帝国が仕掛けてきたのなら反撃を許可する！ 連中はこのヤマトを狙っている。自己防衛として十分に言い分が立つ。繰り返しだが、ガミラスにだけは攻撃するな！ 俺たちの覚悟が試されるときだぞ！」

進の命令を受けてヤマトの艦内が騒がしくなる。

下手すれば三つ巴、もし本当に救助活動が必要となれば医薬品や衣料品の準備も怠れない。

それに収容するためのスペースの確保も大切だ。ヤマトのキャパをオーバーしない程度で済めばいいが、と生活班も不安を訴え始める。

どう転ぶかもわからない行き当たりばったりな作戦。この行動が吉と出るか凶と出るかはくじを引かなければわからない。

しかし、いまこそ覚悟を示すときが来たのだ！

明かされた真実に困惑を隠せなつたヤマトクルー。

しかし、すべての真実を背負つて前へと進むことを決意した。

艦長代理に就いた古代進の下、ヤマトはバラン星救援のために出撃する。

はたして、その行動の果てに待つものとは。

人類滅亡と言われるその日まで、

あと、二四八日しかないのだ！

第十九話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十話 三つ巴？ バラン星の攻防！

ヤマトよ、覚悟を示せ！

第二十話 三つ巴？ バラン星の攻防！ Aパート

ヤマトが衝撃の事実には揺れていた頃、バラン星では。

「なに？ ヤマトが正体不明の艦隊と遭遇して交戦したただと？」

「はい。ヤマトの動向を調べていた偵察部隊によりますと、ヤマトはビーメラ星系で修理と補給を開始しましたが、五日後に報告にあったイスカンドルからの宇宙艇と接触、その直後に司令が気にかけていた、あの黒色艦隊の一派と思われる艦隊と遭遇し交戦、撃退したとのことです」

ゲールの報告に「ふむ」と頷いてドメルは思案する。

大マゼランの外縁で度々目撃され、ガミラスの大マゼラン外縁の守備艦隊にちよっかいを掛けてきていた黒色艦隊がヤマトにも手を出した。

その意図はおそらく——ヤマトの鹵獲だろう。

連中が対ヤマト用に準備を進めていた瞬間物質転送器とドリルミサイルを手に入れたのなら、その過程で試験艦を運用していたクルーを捕獲して口を割らせた可能性がある。

栄光あるガミラスの戦士だとしても、拷問に屈せず情報を護りきれぬ保証はない。

だとしたら、ドリルミサイルの用途も知ったはずだ。そうであるならば、ヤマトのタキオン波動収束砲の存在を知り、手に入れようと考えたというところだろう。

ガミラスにちよっかいを出してきたということは、目的はガミラスへの侵略とみて間違っていないだろう。大マゼランへ勢力を伸ばすことが最終目標であると考えても、当たらずとも遠からずか……。

それならば、ドメルがいままで遭遇した星間国家の中でも類を見ない破壊力を持つあの砲を欲したとしても、なんら不思議はない。

そしてただの一隻と侮って返り討ちにあつたところか。

バカメ。そのような連中がどこかできるほど、ヤマトはやわな相手ではない。

「報告」苦勞だったな、ゲール。——周囲に展開中の部隊に厳命しろ。もしもあの黒色艦隊がヤマトに再び手を出したのなら、ヤマトよりも黒色艦隊への攻撃を優先しろ、とな。連中の狙いはおそらくヤマトのタキオン波動収束砲だ。連中に技術を渡す危険を冒すくらいなら、ヤマトを助太刀したほうがわが軍には得だ」

塩を送るのはあのマグネトロンウェーブ発生装置とビーメラの資源採取が最初で最後まで考えていたが、これは止むをえない措置だ。

あの超兵器を、ガミラスに対して敵意ある勢力に渡すわけにはいかない。

「はっ！ 厳命いたしますー！」

ドメルの指示にゲールも素直に応じた。たしかに、第三勢力にあの大砲を渡すのはリスクが高い。

あのヤマトに事実上の助太刀をするのは心底嫌なのだが、ヤマト以上にあの黒色艦隊に渡すほうが厄介だ。

——ヤマトだけなら一艦で済むが、連中の手に渡って量産でもされたら……！

ゲールは不満を押し殺してドメルの命令を部下に伝えた。

正体不明の黒色艦隊からヤマトを護れ、タキオン波動収束砲を敵に渡してはならない、と。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ ディレクターズカット

第二十話 三つ巴？ バラン星の攻防！

それから二日が過ぎて。

ドメルはバラン星基地を離れ、今後の作戦で共に戦うことになる部下たちと合流していた。

合流先は対ヤマトを前提とした少数先鋭の機動艦隊。

先日の瞬間物質移送器搭載艦失踪事件の影響もあって、直接顔を合わせたミーティングが必要になったのも事実だが、ドメルとしては『万が一のため』に呼び寄せた感が強い。

正直な気持ちと言えば、無駄に終わってほしいのだが……。
「ようやく合流できましたね、ドメル將軍」

そう喜んだ部下に敬礼で応えながら、ドメルは対ヤマト用にと引つ張り出してきた試作の戦闘空母の艦内に足を踏み入れた。

この戦闘空母は、戦艦の砲撃力と空母の航空機運用能力を両立する目的で開発された試作艦で、タキオン波動収束砲の有無を除外すれば、コンセプト的にはヤマトのそれに近いといっても過言ではないだろう。

ただ、ヤマトが戦艦をベースに航空機運用能力を与えた艦とするならば、本艦は空母に戦艦の砲撃力を与えた艦だ。

最大の特徴は飛行甲板の可変機構で、空母として使うときは後部にある艦橋基部のシャッターも開放し、全通式の飛行甲板と格納庫を解放して航空機を運用する設計になっている。

砲撃戦に移行するときは装甲シャッターの閉鎖と合わせ、飛行甲板の一部を反転させ、左右に分割された複数の砲塔とミサイルランチャーを露出した攻撃モードに移行することで機能を使い分ける。

同様の構造が艦底にも備わっているので、下方向からの攻撃にも備えがあるのはヤマトにはない特徴であろう。

両者の機能を統合した結果、ヤマトよりも大型で全長四〇〇メートルもあるが、それでもドメルの乗艦するドメラース三世に比べれば小型である。

最新鋭艦である両者を比較した場合、あくまで戦艦・艦隊旗艦としての性能を追求したドメラースIIIが火力と装甲に特化した分足回りに難を抱えているのに対し、空母としての性能を求めた結果、戦闘空母は意外と足回りが軽快であるというのも特徴であった。

……総合的な性能は、現状ガミラス最強と言っても過言ではない新造艦。

——が、構造の複雑化によって生産コストが増大したり、空母としてみれば艦載機の数も物足りず、戦艦としてみると装甲シャッターで閉鎖されているとはいえ格納庫の耐弾性が——といった欠点が見られるのが玉に瑕。

機能は保証されているが、それぞれの用途に特化したほうが却って運用しやすい、総コストも抑えられるといった意見に押されがちで、既存戦力に足すとしても新鋭艦は保守性に劣り信頼性が……といった理由もあつてあまり着目されているとは言い難かった艦だ。

構造的な比較で言えば、空母としての機能を下部に、戦艦としての機能を上部に集中したヤマトのほうが完成されていると言えるのかもしれない。

実際その評価相応の戦果を挙げている。

単艦にあれだけの機能を詰め込み破綻をきたさないばかりか、度重なる戦争で研鑽されたガミラスの艦艇に対してワンサイドゲームを展開できる、あの優れた性能。

中途半端な段階で放置されていた戦艦空母が着目されたのは、その性能をより研究するのが目的であった。そうでなければこの大事な時期に余計な労力を割いてまで完成させる理由はない。

基本的に堅実な兵法を重んじるドメルがこの艦を所望した最大の理由は、機動部隊を率いてヤマトと対峙するにあたり、少数先鋭を實現しつつ航空戦力と砲撃力を少しでも底上げするためである。

また試作艦艇ということは、言い換えれば損失しても全体としてはさほど懐が痛くないということの裏返し。

移民船団護衛のため、実績のある堅実な艦艇の大半はそちらに回したいのが実情であり、ヤマトとの戦いで損失してもまったく痛くない、それでいて必要十分の性能を満たしていたのが、この半端物と称された戦艦空母だったのだ。

ヤマトには、七色混成発光星域——通称七色星団で決戦を挑む予定となっている。

事前にデスラーから承認を得て、『ガミラスの地球侵攻とヤマトの航海の安全を掛けた最後の艦隊決戦』と銘打ち、文字どおりガミラス最後の対ヤマト戦として挑む。

前時代的だが決闘状も叩きつける。互いに引けない戦いだと認識させて絶対に戦うのだ。

勝つても負けてもガミラスの未来を守るために。

数ですり潰せないのなら、少数戦力でも戦える環境を整えてやればいい。そのための七色星団だ。

搭載数に優れた多層式宇宙空母三隻に自身のドメラーズ三世とこの戦闘空母、あとは指揮戦艦級二隻の計七隻で挑む。

——駆逐艦が含まれていないのは、ヤマトの防御性能に対して火力が足りず、移民船団護衛には足が速く多用途に使える駆逐艦を一隻でも多く回してやりたいからだ。

この戦力に瞬間物質移送器による航空機の転送戦術で攪乱と消耗を図りながら、ドリルミサイルを搭載した重爆撃機を送り込んでタキオン波動収束砲を封じ、そのあとは航空部隊と連携した砲撃戦にもつれ込んで降伏を図るか、撃沈して終わらせるといふ考えだった。

ワープで送り込まれる航空部隊の猛攻を合わせれば、あの戦略砲持ちの人型としてそうそう発砲できまい。

ボソソジャンプを使える彼らのことだから、すぐに持ち直して対応してくるだろうが、初撃で打撃を与えれば十分。

その初撃でリーダーを確実に潰して目暗ましを図る。

そうやって混乱を誘い、航空戦力を消耗させ、防空能力が一時的に衰えた瞬間を狙ってドリルミサイルでタキオン波動収束砲を封じてしまえば、一発逆転の手段を一つ奪える。

あとは例の戦略砲持ちを警戒しつつ消耗戦にもつれ込む。そこから先は根気の勝負。どちらが勝っても不思議はない戦いとなろうが、それ以外に勝算はないと、ドメルは考えていた。

しかし、要の瞬間物質移送器とドリルミサイルがまさか行方不明になるとは……テストなしには使えないと現場に出したのが失策だったか。

だが荒れた宙域である七色星団で確実に動作することを確認しないことにはこの戦術は意味を成さない。テストは必要だった。

移民のための行動が目立つからか、最近では異星人の敵対的行動が散見されていたので注意を払わせていたのだが……。

やはり、ヤマトの脅威や移民政策の遅滞に焦りがあったのだろう。それが油断を招き、致命的な失態に繋がってしまったのだろう。

兵器局にデータが残っているので、物質移送器もドリルミサイルも再生産自体は可能だが、はたしてヤマトを七色星団誘導するまでに間に合うかどうか。

ヤマトのワープ性能が日増しに向上しているのも気になる。どの程度で頭打ちになるのかが読めないなので、技術漏洩と合わせて、手痛い損害だった。

「ドメル司令、お久しぶりです」

そう声をかけてきたのは紫色の多層式宇宙空母——『第二空母』の航空隊隊長のバーガーだった。紫色の髪で細面の男だが、頬に大きな傷があるのが印象に残る男である。

まだ二七歳と比較的若く非常に血気盛んで直情的な性格だが、切り込み隊長としてこれ以上の存在をドメルはまだ知らない。

「久しぶりだな、バーガー。元氣そうだなによりだ」

しばらくぶりの対面だが、共に戦場を駆けたことのある戦友であり、ドメルが信を置く凄腕のパイロットだ。

特に爆撃機の運用に長け、まだロールアウトされて日が浅い新型爆撃機——『ドメル式DMB—87型急降下爆撃機』を早くも物にして、戦果を挙げている。

ドメルは前線に立つ将として、兵器開発局に積極的に現場の意見を届ける機会が多い。その要望に応えるように開発された兵器は評価も高く、正式化される機会が多いのだ。

ドメラーズ級と名付けられたガミラスが誇る最新鋭宇宙戦艦も発案者はドメルで、艦隊旗艦に求める機能を彼なりに追求していった結果、ああいう形になった。

最新鋭の空間戦闘機——『ドメル式DMF—3高速戦闘機』と呼ばれる機体も彼の意見を参考にして開発され、正式化された主力戦闘機である。

高速十字空母に搭載されている専用搭載機を上回る性能を有し、ガミラス全体での機種更新も進んでいる。

ほかに、対ヤマト用にと考案した『ドメル式DMT—97型雷撃

機』も存在している。

発想自体は前時代的な宇宙魚雷を装備した航空機で、巨大な魚雷を包み込むようなボディを持ち、宇宙魚雷を縦列に二本搭載。自衛用の四連装ビーム機関砲も胴体下とキャノピー後部とエンジンノズルの上下に四基、計一六門も搭載している、青色に塗装された機体だ。

機動性が劣悪だが優れた攻撃力を持ち、宇宙戦艦としては破格の耐久力を有するヤマトに対して有効打を得るために、要塞攻撃用の機体を改修してなんとか間に合わせた機体である。

自衛装備の多さも、急速に強化されたヤマトの艦載機から可能な限り身を護りつつ、確実にヤマトに魚雷を撃ち込むために増設された装備。多少のバランスの悪さは目を瞑るしかない。

これらを搭載した空母はバーガーの乗る第二空母のほか、ガミラス標準カラーの緑に塗られた『第一空母』と青色に塗られた『第三空母』。搭載機はそれぞれの機体の色と空母の色を一致させることで識別を容易にして、母艦を間違えないように配慮されている。

普段ならここまで気を遣う必要はあまりないのだが、七色星団内ではレーダーが利き辛く電子機器に頼り切っている間は間違いが生じないとも限らない。おまけに多層式宇宙空母はすべて同型艦で塗装やマーキング、電子情報による識別を除くと区別が付きづらい。

それに七色星団の環境下では、この派手な色彩でも迷彩を期待できるので、元々識別のために色を塗り分けていた塗装がDMF―3で緑、DMB―87で紫、DMT―97であったことから、空母の塗装も合わせることで迷彩と識別を兼ね備えた一石二鳥の処置となった。

この内、七色星団の決戦を考案される前にDMF―3とDMB―87はプロキシマ・ケンタウリ星系でヤマトと交戦している。

その戦闘では著しく強化されていた敵人型軍団相手に手痛い敗北を喫ってしまったと聞かされている。

自信をもって提出したアイデアが、時代遅れとされている人型に後れを取ってしまったのはショックであった。それも現実と受け止めるには、さすがのドメルも時間を要したくらい。

そういえば、その戦闘にはたしか――。

「ドメル將軍と一緒に戦えて光栄ですよ。しかも、相手はあのヤマトって言うんですから——これで、あのときの借りを返せるっつてもんですよ。あの戦略砲持ちの人形め……」

やはりそうだったか。

あの戦闘では、あの戦略砲持ちの人型の砲撃で部隊の半分が消し飛ばされ、後方で待機していたはずの空母の至近を掠めて危うく撃沈されるどころだったのだ。

至近と言ってもビームの光軸から五〇〇メートルは離れていたはずなのに、四〇万キロもの距離を超えて届いた砲撃は、三隻の空母の真下を通過しながら艦底部を焼き、溶解させた。

軽装甲の空母とはいえ、規格外の威力には違いない。

それだけでも厄介なのに、あの機体は強化されて十分な脅威となつたほかの人型とは一線を画した性能で部隊を翻弄。桁違いの実力を見せつけた。

正直、あれほどの機体は初めて見た。

地球人も侮れないものだど、ヤマトと並んで彼らの底力を痛感させられた一件であろう。

「バーガー、貴様の實力でも苦戦を強いられるとは……やはり無視できない存在だな。よく無事に帰ってきた。その経験が、きつと役に立つだろう」

バーガーの腕前は知っている。

それにあのDMB―87は爆装を使い切ったあとに限れば、DMF―3には劣るが空戦を可能とするだけの運動性能を持っているのだ。

ヤマト登場以前の敵人型機動兵器相手なら、一方的とまではいかにいにしても、十分通用する性能を有しているはず。

にも拘らずあの戦闘結果。あの大砲で先手を取られたにしても、ヤマトの航空隊の實力は目を見張らんばかり。

あの大砲こそ装備していないようだが、類似した特徴を有する新型も追加されていたことを鑑みると、戦術を一から見直さなければ連中を消耗させるより先にこちらが全滅させられてしまうかもしれない。

ドメルは改めて、そう考えた。

それからは金髪で細面で眉がなく、冷静沈着でDMF-3のパイロットとしても優れた技量を有するゲットー、全体的に角ばった顔つきで口数は少ないが、すでに前時代的になった雷撃機を意のままに操るクロイツ、そして負傷して視力を失った片眼を眼帯で隠した歴戦の勇士、ハイデルンと顔を合わせた。

いずれも、共に幾度もの死線を潜り抜けた経験のある、ドメルが信頼する戦士たちだ。

ドメルがルビー戦線で手腕を振るっていた頃は、軍全体の戦力向上と移民船団護衛の際の連携確認も兼ねて、それぞれ別部隊に転属してその技術を振るっていたが、ヤマトという驚異の前に再び集うときがきた。

近況報告を済ませたあとは、彼らが乗ってきた戦闘空母、第一空母、第二空母、第三空母、二隻の指揮戦艦級の状態を確かめ、それが終わると大マゼランからはるばるやって来た彼らをゆつくりと休ませるため、日を改めてからミーティングを行った。

盤上のシミュレーションではあったが、七色星団での戦いを想定した編隊行動の確認、リーダーや通信機器の調整、状況の変化を考慮した部隊運用などなど、細かく確認する。

本当なら実機を使った演習もしたい気持ちがあったのだが、胸騒ぎを覚えて指示を飲み込んだ。

ヤマトが通過するまでの間、バランス星周辺で艦隊を動かすわけにはいかない。

黒色艦隊との戦闘を終えたヤマトがさらに四日ほどビーメラに停泊していたまでは確認されているが、その後の動向は不明のままだ。ワープ距離の延伸に成功したのだと睨んでいるが、どの程度の跳躍を可能にしたかの予測が立たず、追尾できていない。

——もしかしたら、もうバランス星付近に到達しているのだろうか。そう考えたからこそドメルは『万が一』に備えて基地を立ち、無理なくワープ一回で速やかに帰還できる場所に艦隊で陣取っているのだ。

本当なら基地の防衛艦隊同様、バランス星の環の中に隠したかったの

だが、ヤマトの動きが掴めないので迂闊に戻れなくなってしまったのである。

ドメルがその『万が一』について説明を終え、戦闘配備のまま待機するよう命じて二日が経過、バラン星に残してきたゲールから緊急連絡が届いた。

「バラン星基地が襲撃を受けているだ?!」

「はい！ 行方不明になった瞬間物質移送器を使用しているのか、それとも艦載機単独でのワープ技術があるのかは判別できませんが、突如としてワープアウトしてきた爆撃機部隊による奇襲を受け、基地に打撃を受けました！ 民間人居住区にも損害が発生していて、いま避難を急がせています！ 民間船にも護衛を付けて退避させるべく準備を進めているところです！」

慌てふためきながらも臨機応変に現場対応して必死に堪えているのが、通信越しでも伝わってくる。

——『万が一の事態』が起こってしまった。ヤマトよりもドメルが懸念していたのは、例の黒色艦隊の襲撃だ。

最悪の事態だ。あそこを失ってしまえばガミラスは——。

「あつ!? ド、ドメル司令！ 黒色艦隊が接近してきています！ いま、艦隊に出撃を指示しましたが、敵艦隊の規模が大きく、基地と民間船を護衛しながらでは長くは持ちません！ 至急救援を！」

「すぐに戻る！ それまでにはなんと少しでも踏み止まるんだ！」

ゲールを叱咤しながら、ドメルは身振り手振りで緊急発進の準備を整えさせる。

ドメラーズ三世こそ持ってきたが、ほとんどの戦力は基地に残している。基地の防備が特別薄くなったわけではない。

——敵が上手だった。

いくらゲールがやり手であっても、完全に虚を突かれた状態では限度がある。

すぐに救援に向かわなければ！

「し、司令！ や、ヤマトがワープアウトしてきました！」

ゲールの報告にさすがのドメルも一瞬思考が止まった。なんという——最悪の展開だろうか。

ヤマトはドメルの策でバラン星の状況をおおよそ察したはず。事前に探査プローブの類で確認だって済ませただろう。隠蔽が間に合わなかったことは、この襲撃が証明してしまっている。

——それでもドメルが見込んだ通りの相手だとしたら、後願の憂いを抱えたままであっても素通りすると踏んでいた。

もしもヤマトがバラン星の襲撃を知ったうえでワープしてきたのなら、その目的は二つに一つ。

便乗してバラン星基地を攻略するか、それとも——。

ドメルは後者であってほしいと、心の底から願った。そうでなければこれからガミラスがたどり着く未来は——。

「ドメル司令！ ヤマトが——ヤマトが基地に攻撃中の航空隊と交戦を開始しました！ わが軍を無視して……いえ、一時休戦を訴え、共通の敵の排除に協力すると打電してきました！」

驚愕に歪むゲールの表情と報告に、ドメルは自分とデスラーのヤマトに対する認識が決して間違っていないかつた、つい安堵の笑みを浮かべてしまう。

やはりヤマトは気高き戦士であった。

たとえ祖国を滅ぼさんとしている相手であっても、滅ぼすのではなく最期の瞬間まで平和的解決を模索する、大きな器と高潔な精神を持つ戦士たちであったのだ。

これで、デスラー総統も決断できるだろう。

恥を承知のうえで、ヤマトとの和平の道を。

地球との共存の道を。

ようやく、ようやく選び取ることができるのだ。

バラン星宙域にワープアウトしたヤマトは、『意図的に』バラン星基地と暗黒星団帝国と思われる航空部隊の間に割って入った。

傍から見ればワープアウトの勢いで突っ込んだように見えるかもしれないが、当然ながら計算ずくの進路である。

連中のやり方ならすぐにも――。

「敵航空部隊からのビーム攻撃！ 左舷後部に二発命中！」

「フィールド出力安定、被弾による被害はありません」

ルリと真田からの報告に進は会心の笑みを浮かべる。

航空戦力との戦闘は初めてだったが、すでに一度戦った相手。ある程度の推測も可能だし基地への攻撃を確認している以上、それに合わせた備えもできるといふものだ。

ヤマトの改修は伊達ではない。小ワープならば、ワープアウト直後でも十分に戦闘可能な調整が行われている。

進は念のため定型文な勧告を行うように指示したが、応答はなかった。

……これで大義名分は立った。

ガミラスはともかく、『黒色艦隊には反撃できる』。もう遠慮はいらない。

「よし！ 全砲門開け！ 黒色艦隊に向けて応戦する！ 対空戦闘開始！ 敵機を近づけるな！ コスモタイガー隊は全機発進！ エリナさん、 balan 星基地に一時休戦と基地防衛に協力すると打電願います」

「了解！――こちらヤマト、ガミラス・balan 星基地に告げます。現在ガミラスと交戦中の敵艦隊は、わがほうにとっても脅威であり、基地の民間人居住エリア防衛のためにも、共通の脅威を取り除くまでの間は一時休戦を求めます」

エリナが進の指示を受けて balan 星基地に向けて通信を送った。

ガミラスがこれに応えてくれるならよし。駄目でもあの黒色艦隊を突破して逃げるだけだ。

見殺しにしないと決めた以上、戦うのみ。

balan 星基地に駐屯しているガミラスの艦艇はヤマトが捉えた限りでは推定二〇〇隻。環の中にあとどれくらい隠れているかは不明だ。

対して敵艦隊の総数は約五〇〇隻。この差を覆すのは、並大抵のことではない。

しかし、やると決めたからにはやるのがヤマトだ。無茶は最初からわかりきっている。

改良されたコスモレーダーがフル稼働を始める。

イスカンダルの部品を組み込んだ上側のレーダーアンテナは、大きさこそ変わっていないが表面がフラットな形状に変化し、最大稼働すると赤い光が端から端まで伸びては縮む、という動きで往復運動する機能が付加されている。左右対称に動く高精度スキャナーの機能が追加され、目立つ代わりに索敵範囲が延伸されていた。

強化されたレーダーが暗黒星団帝国艦隊——略して黒色艦隊の動きを捉える。

応戦開始。

増設分も含めたパルスブラストが素早く旋回、ヤマトとバラン星基地を襲い掛かる敵の大規模航空部隊を視界に捉え、煙突ミサイルと両舷ミサイル発射管も開放する。

「対空戦闘——開始！」

ゴートの命令を受け、パルスブラストと各ミサイルが一斉に火を噴いた。

増設されたことで密度を増した重力波の雨あられが敵航空部隊に浴びせられる。撃ち出された計二四発のミサイルも複雑な機動を描きながら敵機に食いついて、次々と火だるまに変えていく。

同時に改修されてより遅くなったシヨックカノンが旋回。砲身が波打つように向きを変え、遠方に座している敵黒色艦隊に向けて狙いを定めた。

「照準誤差修正。エネルギー充填一〇〇パーセント、安全装置解除確認」

「シヨックカノン、発射！」

ゴートの補佐を受けながら戦闘指揮席に座る守が発射を指示する。

合流してからずっと、進やゴートのレクチャーを受けたことで、ヤマトの戦闘能力はほぼ理解した様子だった。

知れば知るほどに冥王星のときに——いやそれ以前に欲しかった艦だと呻いていた。

そして最後にはこういつていた。

「——さすがは最後の希望の艦だ、ミスマル艦長が必死になっていた理由が身に染みたまよ」と。

ヤマト正面方向の敵艦に放たれた六発の重力衝撃波は、最大射程での砲撃にも拘らず敵駆逐艦の一隻に食らい付き、その身を打ち砕いて宇宙の藻屑と変えた。

改修で威力を増した主砲は、最大射程もわずかではあるが延伸されている。以前の主砲であれば、この距離だと届いても有効打にならなかったかもしれない。

「どうだ！　口径換算で四八センチ砲相当に強化したシヨックカノンの威力は!!　くうっ!!　俺様にかかればこんな——」

進は突然割り込んできたテンションMAXのウリバタケの通信を容赦なく切断了。

うるさい、戦闘指揮に集中させてくれ。

まだまだ新米指揮官の進はこめかみを抑えながら指揮を続けた。

「ハッキングプローブを発射。ガミラス基地の情報取得を開始しろ！」

進の命令を受けて、第三艦橋の小型プローブ発射管に装填していたハッキングプローブをバランス星基地に向かって撃ち込まれ、システムへの干渉と情報の引き出しを開始した。

以前ハリが指摘したように、無線でガミラスのシステムに干渉して掌握することは未だに難しい。

ヤマト本体の通信機器の改修が必要であるし、それ専用の特化したナデシコCに比べると、どうしてもヤマトのコンピュータと無線容量の規模が足りない。

だが、補助端末を搭載してヤマトとの通信を確立したデバイスを打ち込めば話は別だ。

負担が大きく完全掌握は望めないまでも、こういった状況で情報収集したり部分的に相手を掌握することは、不可能ではない。

「プローブの打ち込みに成功。ガミラスのシステムに侵入して情報の取得を始めます」

ワープ前からECIに降りていたルリが、システムと自身の技能をフル稼働させて早速情報取得にかかる。と言っても機密情報には目もくれない。

欲しい情報は民間人の規模と避難状況。ヤマトが救助活動をするべきか、それともこのまま戦い続けた方がいいのかの判断材料だけだ。

——念のため、波動砲は識別が容易な派手なオレンジ色の封印プラグを差し込んで封鎖している。

封印プラグは文字どおり波動砲を封印するための装備。

かつてヤマトがアクエリアスの水柱を断ち切るために使用した閉鎖ボルトと違って、外部から発射口を完全に閉鎖して密閉状態にしてしまう。

外部から差し込んでいるのと、緊急事態を想定して強制排除できるようにはしてあるし、嵌めたまま発砲しても暴発のリスクはさほど大きくない仕様になっているが、これは急増品ゆえそこまで徹底して作りこめなかったことと、決意表明として取り付けただけの代物であり、本当に波動砲を封印する目的の装備ではないからだ。

こうやって波動砲をわかり易く封印すれば、バランス基地にとって——ガミラスにとって最も恐れられている最終手段をヤマトが行使するつもりがないというパフォーマンスができる。

そうすれば、少しはこちらの誠意が伝わるはずだ。

しかし敵艦隊の規模が予想よりも大きい。波動砲なしでこの局面を打開するのはかなり厳しいが、ヤマト側の判断で波動砲を解禁すれば誠意もへったくれもない。

凌ぐしかない！

ルリは情報収集に神経を集中させた。

「コスモタイガー隊、発進開始するぞ！」

解析作業開始と同時に、やはりワープ前に発進準備を整えていたコスモタイガー隊の発進が始まる。

あらかじめカタパルトレーンに待機していたアルストロメリアは、装備の確認を完了したあと、発進準備完了の合図を出す。

それを受け取った管制室の操作でカタパルトレーンが傾斜してスロープを造り、格納庫と区切るシャッターが閉鎖され、減圧を開始。減圧完了後、発進口が開いて四機の人型機動兵器が宇宙空間に踊り出す。

ただ、今回発進にあたって一つの注意点があつた。ヤマト下方に位置するバラン星基地である。

うっかり勢いよく発進し過ぎると、基地に衝突してしまう危険性があるのだ。

現在ヤマトは基地上空一五〇〇メートルの地点を飛んでいる。基地の規模を考えると、至近距離と言って差し支えないだろう。

勢いあまつて激突してしまえば、支援に来たのか攻撃に来たのかがあやふやになってしまう。慎重さが求められた。

逆に衝突を気にしなくてもよかつたのが、上甲板のカタパルトから発進するGファルコンDXであつた。

その姿はまさにフル装備。専用に用意されたオプションをすべて満載した姿は、徹底抗戦の姿勢としてはわかりやす過ぎるほどわかりやすい。

この戦いで使用する予定がないサテライトキャノンには、ヤマトと同じオレンジ色の封印が施されて使用を禁じられている。

砲身を取り外してしまうほうがわかりやすくいいのだが、機体バランスが崩れると戦いづらいというアキトの意見が汲み取られ、封印に留められていた。

切り札を使えないのは不安といえど不安だが、もともとサテライトキャノンに頼り切った軟弱な思想で戦っていないので、意外と気持ちは落ち着いている。

いざとなればありつたけの弾薬をぶん撒いてどうにかするだけだ。

GフアルコンDXを乗せたカタパルトが旋回してヤマトの斜め前方に指向する。任務はもちろん、基地の防空戦闘だ。

「さて、後ろから撃たれないことを祈っておくかな」

そんな独り言を呟く。

発進許可のサイン。

アキトはGフアルコンのメインスラスターを点火、カタパルトの勢いも借りて機体を一気に加速させる。

目標は基地施設への爆撃を目論む航空編隊。

広域防御であることを考慮され、あの一角の敵部隊はダブルエックス単機で受け持つことが決まっている。

ものすごくしんどいが文句を言っではいられない。

「——おまえたちは知らないだろうけどな。サテライトキャノンがなくなっただって、ダブルエックスは最強なんだってことを、いやでも教えてやるよ」

アキトは最近では本当に、本当に珍しいことに、どう猛な笑みを浮かべて機体を操った。

次々と艦載機を放出しながら、ヤマトは基地上空から決して離れず、外部からの探査で民間人居住区だと判断したグラスドームを有する区画を中心に防空戦に挑んでいる。

ヤマトに敵の目を引きつけて基地への攻撃を軽減すべく誘導を試みたが、数で勝るからか、それともヤマトが一隻と舐められているのか、あまり食い付いてこない。

それならば足を止めた殴り合いだと言わんばかりに、増設に加え拡散モードの追加で弾薬投射量が桁違いに増えたパルスブラストを撃ちまくり、とにかく敵爆撃機（用途からそう分類した）の進路を阻み、煙突ミサイルや舷側ミサイル発射管からも迎撃ミサイルを次々と撃ちだして応戦を続けた。

——敵の爆撃機は航空機と言ってもかなりの巨体であった。それゆえか出力が高く、触覚とも触腕とも形容できる形状をしたビーム砲を主兵装とし、強力なビーム攻撃を加えてくる。形状から推測はできていたが、想像どおりフレキシブルに動いて機体の向きとは無関係に

放たれる砲撃は、なかなか厄介であった。

しかしビーム兵器には違いない。重力波砲のパルスブラストなら射線を逸らすことができるし、衝突したさいは一方的に打ち消せる。

改修によって増えに増えた弾幕は、相手の攻撃を捌くのに有益であった。この相性のよさもあつて、ヤマトは一隻でありながら数十はあろうかという敵航空機の攻撃を捌くことができ、基地への被害を目に見えて軽減させることに成功していた。

そんなヤマトの姿を見て、ゲールはギリリと歯を鳴らす。

自分に恥を掻かせたヤマトをこの場で討ち取ってやりたい衝動に駆られるも、ドメルからの命令もそうだが、いまヤマトと敵対してもなんのメリットもないという事実にとストップをかけられる。

——ヤマトが庇ってくれなければ、あの居住区は長くは持たない。襲撃を警戒して強固に造られているとはいえ、本来攻撃を凌ぐはずの防御シャッターや防御フィールドの展開も間に合わぬタイミングでの攻撃を受け、防御能力をほとんど活かせていない。

何度司令室からシャッターを操作しようとしても、構造材が歪んだのか大半が動作不良で使い物にならない。現場に工作隊を送り込んで応急処置したくても火災のせいで遅々と進まず、辛うじて展開したデイストーションフィールドも出力が上がり切らないときたもんだ。

出撃させた防空部隊をもってしても被害をどれだけ抑えられるか……。

ゲールとて誇りあるガミラスの軍人。大統領への忠誠心に誓っても、民間人に犠牲を出すわけにはいかない。

正直な話、ヤマトが助太刀してくれて大助かりだった。

民間施設の防衛に手を貸す、などと断言していたことから察するに、こちらの通信を傍受して解析したのであろう。

——解析できたということは、ヤマトも相当ガミラスに対する理解が進んでいると見える。おまけになんか武装も強化も実現している

らしく、ただでさえハリネズミだった対空砲がさらに増えているではないか！

さらなる脅威となる前にここでヤマトも沈めたい気持ちをぐっと抑え、ゲールは防空戦闘機や黒色艦隊を迎え撃つために出撃した艦隊に対して「ヤマトには絶対に攻撃するな！　いまヤマトに心変わりされたお終いだ！」と厳命せざるをえなかった。

敵はおそらくヤマトも狙う。

敵の攻撃が少しでも分散してくればこちらとしては儲けものだ。

それに……ヤマトは最大の武器であるはずのタキオン波動収束砲を塞いでまで休戦を訴えてきた。

……こうなつてはこの場に限つては共闘するしかない。やけっぱちだ！

「ゲール副司令、第一五区画と繋がる隔壁が損傷していて、民間人と救助に向かった兵たちが取り残されています！」

部下からの報告にゲールはすぐに対処するようにと工作班を向かわせることを指示。

しかし、そこに至るまでの通路も多くがガレキと炎で塞がれ、このままでは間に合わない。

ドックには近いのだが、港内には避難に使う予定だった民間船が敵弾によって損傷し座礁してしまった。構造材に食い込んでしまつていて、撤去して別の艦を入れるのにも時間が掛かる。

非常にまずい状況だ。

額に青筋を浮かべながらゲールは必死に頭を巡らせる。

だが残念なことに、この難局をひっくり返す妙案は一向に浮かんでこない。結局地道な努力を重ねる以外の手段は、ゲールにはなかったのであった。

「艦長代理、どうやら第一五区画に大勢の民間人と救助に向かった兵士が取り残されているようです。総数は不明ですが、基地の自己診断

システムや無線・有線含めた報告を傍受する限り、救助活動が難航しているようです」

ルリからの報告に、進はさらに詳細な情報がないかを問い質した。ルリも心得たもので、ハツキングで得られた詳細な情報を足して詳細を報告、それを聞いた真田は難しい顔で唸った。

「……むう。このペースでは手遅れになるやもしれん。——艦長代理、ヤマトで近くのドックに入港して救助活動をしなければダメだ。ロケットアンカーを上手く使えば、座礁した艦を引き抜いてヤマトが入れるだろう。われわれなら、小バツタを駆使して迅速に障害物を除去して救出が可能だ。やる価値はあるぞ」

「エアロックの制御システムへの干渉は可能です。接舷さえできればヤマトに避難させることは難しくはありません——乗ってくれば、ですが」

ルリが基地内部の気成分などを調べてくれたが、ヤマト艦内とさほど変わらない、地球型の気成分であった。これなら、接舷してガミラス人を艦内に入れてもヤマトクルーに悪影響を及ぼす危険は小さい。しかし兵も入れるとなれば内側から制圧される危険性も十分に出てくる。ヤマトクルーは半分民間で構成されている都合、白兵戦となれば存外脆い。

ハイリスクではあるが——。

「やるしかない。見殺しにするくらいなら最初から来たりしなかったさ……。ヤマト、第一五区画最寄りのドックに向けて全速前進！ コスモタイガー隊は全力を挙げて防空に努めるんだ！ バラン星基地にもその旨を伝えて協力を要請してくれ！」

「了解！ ヤマト、第一五区画最寄りのドックに向けて、全速前進！」
大介はすぐさまヤマトをドックに向けて進ませた。

本当に救助活動をする事になるとは思わなかったが、これもなにかの天命であろう。

幸いと言うか、実にいいタイミングでガミラスの艦隊がワープアウトしてきた。

これならこの場は任せても大丈夫だろう。

それにヤマトが動き出す頃になってようやく脅威と認められたか、敵航空部隊もヤマトを追尾して攻撃を仕掛けてきている。

正直、いまはありがたくないが来たものはしょうがない。丁重に迎撃させて頂くまでだ。

ヤマトは全速力でドックに向かいながら、追いつがってくる敵に応戦を継続。

大量の散弾を吐き続けるパルスブラストの、数百にも及ぶ重力波の砲弾が雨あられと敵航空部隊に襲い掛かる。

ヤマトとて、この航空攻撃に晒され続けたことで多少ではあるが損害を被っている。

並みの戦艦であったなら数隻は沈められているであろう猛攻を凌いでいるのだ。損害警備で済んでいるほうが奇跡であろう。

敵がヤマトに攻撃を集中しなかったことと、散弾モードによる圧倒的な弾幕を形成できるようになったパルスブラストの活躍のおかげでもある。が、一番の要因はやはり常軌を逸した頑強さを誇るヤマトの装甲強度だ。

しかしそのヤマトですら、装甲表面に浅い傷が刻まれ、構造的に脆弱なアンテナやマストが欠ける程度の損害を被っている。より強力な重力波兵器に対応するヤマトの防御でありながら、ビーム兵器主体の敵の攻撃でこれだけの損害を与えらえる火力は軽視できない。

収束モードを迎撃に折り混ぜつつ、コスモタイガー隊と連動してできるだけ基地の遠くで迎撃したいのだが、敵はなおもワープで送り込まれており、ヤマトとコスモタイガー隊、そしてバラン星基地を翻弄している。

それでも食らい付けているのは、単機性能でこちらが勝っていることが要因だ。特にガンダムは彼らに対しても圧倒できるほどのスペックを有しているらしく、孤軍奮闘の最中だ。

エアマスターとレオパルドは最終調整中はまだ出せないが、それもあと少しで終わる。そうしたらこの二機も追加投入して当たらせれば、もう少し戦局がこちらに傾けられるかもしれない、進は漠然とだが考えていた。

月臣はアルストロメリアのコックピットの中で迫り来る敵機を見据え、最速で撃墜していく。

敵はガミラス戦闘機の軽く三倍を誇る大型の機体、火力と射界の広さに攻め難さを感じるが、喰らいつく。

改修を重ねて強化された機体に、各種オプションが生み出す威力。そして異星人の宇宙戦闘機の性能にいい加減慣れてきたこともあいまって、冥王星くらいまで常に感じていた非力さはもう感じない。

そしていまは、なによりも心構えが違う。

思い返すのは自身の分岐点となった、白鳥九十九の暗殺。

戦争の行く末をめぐってすれ違いが生じた結果、月臣は草壁春樹の思惑通り、無二の親友だった彼の命を奪ってしまった。

——幾度後悔しただろうか。

なせもつと理解を示してやれなかったのか。

あの情勢下において九十九の考えは決して浮世離れしていたわけでもない。地球との和平を模索する声はほかにもあったのだ。

だが、徹底抗戦を訴え遺跡を手に入れさえすれば勝てると考えていた草壁一派と——なんの疑問を抱かず、いや、現実と理想の間で苦しんでいたにもかかわらず、それを押し殺して『木星の正義』に固執してしまった自分の、なんと愚かしいことか。

そのせいで取り返しのない過ちを犯してしまった。

その罪悪感に苦しみ、罪滅ぼしをしたくて——アキトとユリカが火星の遺跡上空での（なぜか生放送された）痴話喧嘩からのラブロマンに心打たれて——熱血クーデターを起こして木星を改革した——つもりだった。

結局一番の危険分子である草壁を取り逃がし、火星の後継者の蜂起を未然に防ぐことは叶わず、そのせいでまた血が流れてしまった。

あのときとはいろいろと情勢が変わったが、敵国との和解を求めて戦うという状況が、過去の記憶を呼び起こす。

まさか、自分があの時の九十九と似たような立場に立とうとは考えもしなかった。だが、だからこそ……。

「過ちは、繰り返し返さん……！」

月臣は眼前の敵機に両腕を射出した。フラッシュシステムで制御されたワイヤードフィスト、機体とは違う位置、角度からの内臓ビームライフル。これにアトミックシザーズを足した十字砲火。

被弾、炎上した敵機に拡散グラビティブラスト収束モードを撃ち込み粉碎。

次の機体。アトミックシザーズで敵機の触腕型ビーム砲を掴んで向きを変える。敵は予想外のアクションに対応できないまま発砲。近くを飛行していた味方に命中。

それを見届けるなりフルパワー。アトミックシザーズでビーム砲を引きちぎりつつ、離脱ついでにビームと重力波を叩きこむ。

（九十九。俺は二度と過ちを繰り返さない。この戦いの果ての結果が決裂であったとしても、そう断言できるまでは和平の道を模索する。おまえの——親友だった男としてのけじめだ）

決意を胸に月臣はアルストロメリアを駆る。この戦いの果てに、よき結果がもたらされることを願って。

アキトは仲間たちとは少し離れたところで、次々と襲い掛かるビームを避け、ときには盾で受け止めながら激戦を繰り広げていた。

基地施設は広大で、たった二六機のコスモタイガー隊だけで全域をカバーするのは不可能だった。

おまけに敵機が巨大な分頑丈で、デイストーションフィールドとは異なる偏向フィールドの類まで完備、ガミラス機よりも全体的に打たれ強いことも向かい風となっていた。

さらに防空隊が出てきたことを察知してか、戦闘機と思しき比較的小型で小回りの利く機体も参加するようになってきて、戦況がさらに悪化する始末。

だがそれでもアキトは任されたエリアの防衛を成し遂げていた。単独で最も優れた戦闘能力を持つGファルコンDX。単独での作戦行動に慣れているアキトの組み合わせは強力である。

ガミラス以上に生物的で、黒一色の敵機は虫嫌いなら悲鳴を上げた

くなるほどに気味が悪く、強力だった。

だがアキトは一步も引かずに応戦し、すでに十数機もの敵機を血祭りにあげていた。

右手に握っていたロケットランチャーガン。撃ち切った。投げ捨てる。

ディフェンスプレートの裏に固定していた専用バスターライフルを代わりに握らせ、左手にはビームジャベリンを構える。

「……いい反応だよ、ダブルエックス。最初は戦略砲搭載とか言われて嫌悪感もあつたけどさ、俺たちって本当にいいコンビなのかもしれない」

嬉しそうに呟きながらアキトはGファルコンDXを操る。

この間のオーバーホールで、ダブルエックスは細かい部分でアップデートを受けてポテンシャルを増していた。

駆動系や推進系、マザーボードやCPU、ついでに相棒として付き合いの長いラピスがOSを微調整と、あまり目立たないが機体の応答性が多少なりとも向上し、よりアキトの感覚に繊細に着いてきてくれるようになった。

おかげでいままでよりも少し余裕をもって、この猛攻に対処できる。

多少の被弾は持ち前の頑強さで耐え凌ぐ。

敵機の攻撃は強力だが、ダブルエックスの装甲を一撃で破壊するほどではない。それにダブルエックスにはディフェンスプレートという優秀なシールドがある。シールドで防げれば機体へのダメージは抑えられた。

何発か被弾したディフェンスプレートの表面には弾痕が幾つも刻まれているが、もう少しくらい持つ。

左手のビームジャベリンを眼前の敵機に投擲。コックピットらしき場所に被弾。制御を失った敵機に左手に持たせたGハンマーをぶちかまして軌道変更。基地にだけは墜とさない。

——サテライトキャノンを使えないのが微妙にしんどい。

この機体は戦略砲撃機。こういった状況下で真価を発揮するとい

うのは、単機での戦闘能力以前に広域破壊、大量破壊に適した装備を有しているからだ。

それを封じた状態でここまでやり合えているのは、アキトの実力がなせる業だ。

「連中におまえみたいなのが装備が施されてなくて安心したよ。おかげで俺たちが介入する余地が残されたんだからな」

もしも敵がGファルコンDXのような装備を備えていたなら、バラン星基地はもう落ちていた。

ボソンジャンプにすら対応しているGファルコンDXは、自分にとって都合のいいポジションに苦もなく出現し、超長距離砲撃を可能とする有効射程と、スペースコロニーすら一撃で消滅に導く威力を兼ね備えたツインサテライトキャノン装備している。

つまり、いま黒色艦隊が行っている奇襲攻撃をより完璧な形で、しかもただの一機で実現するポテンシャルを秘めた、決戦兵器の名に恥じない超兵器。

波動砲を——場合によっては戦闘能力を失ったヤマトを護衛するために造り出されたそれは、状況次第では彼らが行っている作戦を行うためにこそ造られた。

アキトは思う。

こいつらと同じことは、したくない。

もちろんそれは、己の過去の過ちを繰り返すことだからというものもある。ガミラスが話の通じない無情な侵略者であるのなら、アキトは罪を背負ってでも、ユリカたちと生きる世界のために……サテライトキャノンの引き金を引ける。たとえあとで良心の呵責に苦しみのた打ち回ることになったとしても。

だがまだ希望の灯は残されている。

彼らは地球に対しては無慈悲な侵略者であったが、祖国のために命を懸けて戦える忠誠心や愛国心を持っている。

ヤマトと、自分たちと同じ『心』を持っていると、いまは自信をもつて言える。

だからこそそれに掛けたい。

もう——罪なき人が住まう場所を襲撃するようなことは、したくない。

「希望の灯は消さない！ 出し惜しみはなしだぞ、ダブルエックス！」
アキトはコンソールパネルを操作、フラッシュシステムのスイッチを入れる。

結局改修で搭載してからも、IFSとの微妙な干渉が見られ、あまり機体制御に有効とはいえなかったフラッシュシステムだが、アキトは本来二人乗りで連携するのが前提のGファルコンとの合体に着目した意見を工作班に提出し、改めて調整を重ねたことである意味ではフラッシュシステムの真骨頂と言うべき使い方を確立した。

「ドッキングアウト！ コンビネーションで行くぞ！ Gファルコン！」

普段なら出撃中は合体したままで運用されることが多いGファルコンをドッキングアウト。ダブルエックスはGファルコンの上に立ち乗りする形で敵陣に突っ込む。

合体していないためスラスターの完全な同期もできず機動力は低下するが、ダブルエックスの足や腰の動きを利用してGファルコンをサーフボードのように乗りこなす。姿勢制御スラスターと合わせてアクロバティックな機動で攻撃を掻い潜りつつ、発砲。

ヘッドバルカンやブレストランチャーを駆使して牽制をかけ、機体を後方宙返りさせてGファルコンだけを先行させるようにして飛ばす。

当然先行したGファルコンに火力が集中するが、『フラッシュシステムを介してアキトのイメージで制御された』Gファルコンは、それを軽やかな機動で回避しつつ、機首の大口徑ビームマシンガンと拡散グラビティブラストを発射して敵機を撃墜、または回避行動を誘発させる。

回避行動で乱れた敵に、後方のダブルエックスからブレストランチャーと専用バスターライフルの銃撃を浴びせた。

地球製機動兵器用の火炮としてはどちらも最強クラスの武器。暗黒星団帝国の兵器にも見劣りしていない。

攻撃しながら敵陣を突き抜けたGファルコンは、ダブルエックスの攻撃中にターンして今度は後方からミサイルも交えた攻撃を繰り出し、さらに敵の混乱を誘う。

混乱した敵陣に突っ込むダブルエックスは、Gハンマーをリアスカートのマントに戻すと、代わりにようやく実戦投入された不遇のオプシオン兵器——ツインビームソードを左手に握らせてビームを出し、すれ違いざまに敵爆撃機を力任せに両断した。

グリップとハンドガードでゆのような形を作るツインビームソードは、上下に備わった発生機からハイパービームソードをも上回る出力のビームを出力する、最強の近接戦闘兵器だ。

上下の刃の扱いが少々難しい武器だが、上下から刃が出ている形状を利用した連続攻撃は、刀身が一つしかないビームソードよりも『決まりさえすれば』遙か上をいく威力を叩きだす。

寝かせた状態で正面に構えるなどすれば、左右に位置する敵機をすれ違いざまに同時に斬れたり、手首を高速回転させて簡易ビームシールドとしても使えるなど、少々燃費が悪いことを除けばかなり利便性が高い武器だ。

本体が小さいので軽量でもあるし、当初はなかった仕様なのだが、実戦投入されなかった間に真田の手で改造され、ハンドガード部分にもビームを誘導して巨大な弓のような大剣としても使えるようにされていた。

なんでも対艦攻撃用のごり押しモードであるだけでなく、「本当はロケットパンチと組み合わせて……」とか言っていたので、「元ネタはなんだ。ゲキガンパンチにそんな仕様はなかったはずだ」とツツコミを入れたら真田は「大昔、初めて人が乗ったロボットにそういう武装があった」と回答。

ダブルエックスにロケットパンチは付けられなかったので代わりに——。

アキトはツインビームソードのビームをカット、マウント状態のGハンマーの鉄球部分にもっていく。

すると、鉄球の先端にあるスパイクが開いてツインビームソードの

ハンドガードを加えこんで固定した。——ロケットパンチの代わりにGハンマーを使うことでアイデアを実現したのだと、真田は妙に自慢げに語っていた。

——あんたもウリバタケの同類かよ。

と口に出さず、いまさらなツツコミを加えたことを、彼は察しているだろうか。

ともかく、アキトはツインビームソードを接続したGハンマーを改めて左手に装備させ、鉄球部分に内蔵されたスラスターを吹かして射出。同時にビームソードも出力させる。

「それ！ アイアンカッター！」

というのがこのコンビネーションの名前。元ネタの名前らしいが、ビームなのにアイアンはないだろう……。

弓状にビームを発生させたハンマーが、正面から敵機に激突する。スラスターの推力にハンマーの質量が加算されたツインビームソードは、さきほどよりもいくぶん簡単に敵機を両断した。

……うん、威力は十分すぎるほどあるみたい。

趣味の産物の威力に驚愕する間もなく、ダブルエックスにビームが降り注ぐ。最大出力のフィールドを纏ったデイフェンスプレートで受け止めるが、度重なる被弾にデイフェンスプレートもボロボロになり、シールドの接続部がギギシと軋みを上げている。

これ以上デイフェンスプレートによる防御は無理と判断して、振り抜きざまに左腕との接続を解除して敵機の眼前に投げ飛ばす。

投げ飛ばされたデイフェンスプレートは回転しながら慣性で宇宙を飛翔した後、機体への直撃コースだったビームと相打ちになって宇宙に散る。

なおも降り注ぐビームを、手元に引き戻した鉄球ごとツインビームソードを回転させて巨大なビームシールドを形成、凌ぎきる。

位置関係的に背後にビームが抜けると施設に被害が出てしまう。回避行動ができない。

アキトは右手のバスターライフルで反撃しつつ別方向からGファルコンを襲わせて反撃する。

——ライフルのエネルギーパックの残量が心許なくなってきた。出撃中に急速チャージできない仕様が恨めしい。要改善と訴えておこう。

アキトはダブルエックスと平行してフラッシュシステムでGファルコンを操り、敵編隊を翻弄していたが、そろそろ限界が近い。

フラッシュシステムによる遠隔制御は思った以上に使えるのだが、搭乗機の制御と並行して別の機体を思考コントロールするのは負担が大きく長続きさせられない。

人間、なかなか別のことを並行して考えていられないものだ。

負担を軽減するため無人機のAIシステムも補助として組み込んでいるのだが、まだまだ万全とは言えないようである。

これ以上の無理は危険と判断したアキトは、Gファルコンを呼び戻して再合体。再びGファルコンDXの姿へと戻した。

「オートを併用しても、五分が限界か……！」

もつとこの連携の持続時間を延ばせれば有益だと思っただが。

合体したGファルコンDXに敵機が群がる。

両翼の拡散グラビティブラストを矢継ぎ早に発射して弾幕を張りながら、エネルギーが空になるまでバスターライフルを撃ち続ける。空になったライフルは思い切つて敵機の進路上に投げ捨てる。

敵機が避けた。その一瞬のスキを狙ってミサイルポッドのハッチを開放、残された三発をすべて打ち尽くす。命中。だが仕留めきれない。左手のハンマーを射出。命中、切り裂いた。

敵弾を簡易ビームシールドで防ぎながら急上昇して射線から逃れつつ、空いた右手で右腰のハイパービームソードを抜刀。最大出力。突撃。正面からビームソードを突き立てて沈める。

「——くそっ。装備が——！」

いままでハイパービームソードも一本損失した。残された武器は左手のハンマーと、固定武装だけ。

幸いというか、受け持ったエリアの敵機はいままで最後だった。後ははまだ見えない。いや、エネルギーを使い果たしたららしい機体が帰っていくのが見える。補給に戻っただけのようだ。

「リョーコちゃん、装備の大半を使い果たした。補給に戻らせてくれ！」

「……わかった！　すぐに戻って来いアキト！　無理して撃墜されたらシャレにならねえ！」

苦戦しているのか、語気も荒く合流を認めたりョーコに返事をする
と、アキトは機体を収納形態に変形させ、最高速で部隊と合流を図る。

戦術モニターに映るヤマトはドック内に入り込み、救助活動を開始
しているようだった。

第二十話 三つ巴？ バラン星の攻防！ Bパート

ヤマトが救助活動のため移動を開始した直後、ドメル率いる対ヤマト決戦艦隊がバラン星に緊急ワープで帰艦した。

「これほどとは……！」

目を覆う惨状にさしものドメルも悔し気に唇を歪める。

敵航空部隊が出現した瞬間の観測データから、それが瞬間物質移送器によるものだとすぐに判明した。

それだけに自身が考案した瞬間物質移送器の威力をまざまざと見せつけられる形となり、自身の発想が正しかったことを証明すると同時に敵に回したときの恐ろしさを嫌というほど突き付けられる形になってしまった。

「ドメル司令、あの瞬間物質移送器の対抗策は考案されていないのですか？」

戦闘空母の艦長であるハイデルンが問いかけてくるが、ドメルは首を横に振るしかない。

「対抗策は完成していない。理論上は意図的な空間歪曲でワープ後方を強制中断させることやワープインを阻害することは可能だ。だがそのために必要な空間歪曲場の生成の研究は、まだ途上だ。ワープそのものの阻止は現状不可能と考えていい。出現を予期して対応するにしても、ワープの空間歪曲反応や重力振を検出する従来の方法では出現するそのときまでどこから来るのかはわからない。加えてワープ航路の逆探知もワープアウトの方向の調整次第で防げてしまう。……強いて欠点を上げるなら、片道一方通行ゆえ、敵を殲滅できなければ帰ることができないという程度。それも、俺が考えていたように波状攻撃を加え、退却中の部隊への追撃を許さず、ローテーションを組んで相手が倒れるまで攻撃を浴びせ続ける。もしくは最初から撤退が不要な爆弾や機雷の類を送り込んで相手の行動を制限するなど、運用次第ではいくらでもカバーできてしまうものだ。ワープそのも

のを阻害できない限り、あの兵器の優位性は揺るがない」

ドメルはゲールから送られてきた敵航空部隊の動きから、自身が対ヤマト用に考案していた戦術とほぼ同じ行動をしていることを見抜いていた。

「見る。あの黒色艦隊所属の航空隊も波状攻撃を続けることで弾薬を使い切った機体の撤退を助けている。ヤマトの航空隊も攻撃を防ぐのに手一杯で撤退中の部隊を攻撃できてはいない。彼らも防空を優先しているがゆえに、追撃よりも迎撃を優先せざるをえないのだ……。このままでは相手の弾薬が底を尽きるまで、一方的に蹂躪され続け、われわれは壊滅してしまう」

元々試作兵器だったのだ。十分に研究してカウンター手段を含めた装備・戦術を構築するには圧倒的に時間が足りなかった。

だが、運用側ですらカウンターが難しいという性質だからこそ、ヤマトに対しても有用である——というよりはそうでもしなければ少数先鋭の戦力であの強敵を葬り去ることができないと考えたからこそ、引つ張り出してきたのだ。

それが第三勢力の手に渡ってしまうなど、予想できなかった。それが悔しい。

「ドメル司令！ ヤマトが逃げ遅れた民間人の救助活動をすると言っています……」

ゲールがドメルに助け舟を求めてきた。判断に困ったのだろう。彼の表情を見れば理解できる。

だが無理もない。ヤマトはガミラスにとって最も脅威とみなされている存在なのだ。それがよりにもよって救援にやってくるなど、それが想像できようか。

「……要請に応じる。誘導に向かった兵たちにも連絡して、ヤマトに乗れと伝えるのだ。いいか、内部から制圧しようとは考えさせな。この戦い、地球を救うだけならヤマトにとっては無益でしかない。にも拘らず自ら進んで参戦し、このような振る舞いをしてくれるということ——」

「まさか!? ヤマトはガミラスとの講和を求めているとでも言うので

すか!？」

ドメルの言わんとすることを察して驚きの声を上げるゲール。だが、そうとでも考えなければヤマトの行動は説明がつかないことは、彼も気付いている様子だった。

タキオン波動収束砲を封じていることも、それを裏付けていると判断して相違ないだろう。

「その可能性は高い。ともかくいまはヤマトを味方として扱う。向こうの言い分どおり、一時休戦して共通の敵を排除する」

ドメルの命令にゲールも「りよ、了解しました!」と応じてすぐに部下に指示を出していく。

さて、ヤマトを味方に付けたことで事態が好転すればいいのだが。

「……気に入らねえが、あそこの連中を救うためだ。いまだけは見逃してやるぜ、ヤマト」

愛機のコックピットで待機していたバーガーも不満不平を露にしながらも、軍人としての責務を果たすためといまだけはと抑え込む。

これが終わったら、決着をつけてやる。

この程度の行動でガミラスがヤマトの要求に応じるとは考えていない。たかが戦艦一隻に屈するなど、真つ当な国家ならまずありえないことだ。

バーガーはそう考えながら愛機をカタパルトに接続させ、猛烈な加速と共に母艦を離れて敵艦隊に向かっていく。

基地の防空は第一空母が搭載しているDMF-3高速戦闘機に任せて、バーガーはクロイツが指揮するDMT-97雷撃機の部隊と協力して駐屯艦隊と交戦中の黒色艦隊に対して攻撃を仕掛けて撃滅する。

ガミラスの未来のために、この基地を落とさせるわけにはいかない!

帰還したドメル艦隊と艦隊に所属する航空部隊は、結局シエルターに入らず、民間船も使って基地の外に避難しなければならなくなった民間人を護るべく防御陣形を敷き、ヤマトと入れ替わりになる形で基

地の盾となって戦闘を開始した。

「ロケットアンカー射出！」

進の指示で第一五区画に最も近いドックに侵入したヤマトは、座礁している艦船をロケットアンカーで引き摺り出そうと悪戦苦闘していた。

真田の思惑どおり、ロケットアンカーで引きずり出すことはできそうなのだが、破損して脆くなった艦船をそのまま引きずり出すことは難しく、左右のチェーンの長さやらヤマトの姿勢を幾度も微調整する。

「よし……！　引き出せそうだ……！」

大介は苦難の末、座礁船を引き出すことに成功した。

引き出した民間船は乗員の反応がないことを確かめてからドックの外へと放り出す。

空いたスペースにヤマトを滑り込ませるべく、リバーススラスタで逆進しながら慎重に連絡橋の位置に右舷後方の搭乗口を合わせる必要がある。

ルリがシステムをハッキングして連絡橋を伸ばしはしたが、艦の移動と固定は自力で行わなければならない。

艦体を固定するためのガントリーロックが機能していないのだ。しかたなくロケットアンカーを左右の壁面に打ち込み、続けて姿勢制御スラスタとアンカーの巻き取りでヤマトの位置を十数センチ単位で微調整し、連絡橋とのずれがないことを確認してから完全に艦体を固定させた。

「よし！　ここからは俺たちの仕事だ！」

「艦長代理、医療科も準備完了です！」

艦内管理席から立ち上がった真田と、受け入れ態勢を超特急で完了した雪の声を聴くと、進はすぐに救助活動の開始を指示した。

規格が異なる連絡橋のエアロックに接続するため、工作班は破損部

を一時的に覆うための保護カバーを持ち出してエアロックと乗員ハッチの周囲に覆い、気密を確保。

強度が十分であることを確認するとすぐさまルリに連絡、合図を受けたルリがシステムを操作してエアロックを解放、ヤマトとの接続が完了した。

苦労の末繋がった連絡橋の中を、工作機械を担いだ工作班、護衛兼労働力の戦闘班にファーストエイドキットや担架を持った医療科、そして建材撤去要員の小バツタの軍団が道を阻む瓦礫や炎を退けつつ、一斉に駆けて行く。

全員がルリとイネスが手掛けた翻訳機を身に着けることは忘れない。威力のほどは未知数だが、言葉が通じないのでは案内もできないのだ。

「その通路を右です」

システムに侵入しているルリからのナビゲートを頼りに、ひたすら施設内を突き進んでいく。

そうやっていくつもの分岐を超え、爆発の衝撃で施設が揺れるたびに恐怖しながら進んだ先に、民間人の大群とそれを導いていた兵士たちの姿が見えた。

——小さな子供もいるようだ。急がなくては。

兵士の何人かが驚いてこちらに銃を向けるが「ドメル司令からの命令を忘れたのか!？」とほかの兵士が制止している。

翻訳機もちゃんと機能しているようで言葉が通じる。これなら誘導できるだろう。

「われわれは地球の宇宙戦艦ヤマトのクルーです！　ここは危険です！　早くヤマトの中に避難してください！」

地球の戦艦と聞いてはつきりと民間人の顔に恐怖が浮かぶ。

さすがに自分たちが戦争している国の名前くらいは知っているようだ。報復を恐れているのだろうか……。

「……ドメル司令から指示を受けている。いまは、諸君らの厚意に甘えさせてもらう」

渋い表情ながらも、この隊の隊長と名乗る兵が敬礼をしながら答え

た。持っていたアサルトライフルらしい銃をベルトで肩に下げて銃口を上に向けている。

ドメル司令と言うのがどういう人物かは知らないが、どうやら非常に柔軟な思考をしているらしい。ありがたいことだ。

案内するにあたって人数の確認もそうだが、負傷者がいないかを確認しなければならぬ。

案の定、これだけの攻撃に晒されているだけあって、火傷や切り傷を負った人も多く、骨折して自力で動けない人もいた。

医療科の面々はそういった負傷者に止血バンドを巻いて止血したり、簡易ギブスを施すなどして応急処置を行うと、消耗の激しい子供やけが人を持ち込んだ担架に乗せて運搬を始める。

こういうとき、小バツタの頼りになること。そのパワフルさは障害物の撤去はもちろんのこと、けが人の運搬にも威力を発揮している。

道中できるだけ丁寧に処理して来た通路を、ヤマトクルーはガミラス人を誘導しながら戻り、必死の思いでヤマトに辿り着いた。

だがまだ仕事は終わっていない。今度は戦闘配備中のヤマトの艦内に連れ込んだガミラス人を、邪魔にならない場所に誘導する仕事が続いている。

連れ込んだガミラス人は総勢二五九人。ヤマトの乗員数と変わらない人数を一気に收容する羽目になった。

彼らを誘導する場所は予め検討していたが、やはり大きなスペースのある場所に優先して運び込み、戦闘の邪魔にならないように、かつ被弾で破損しにくい場所を選定しなければならない。

第一候補として挙げられたのは艦橋の基部にあり、纏まったスペースを有する中央作戦室だ。居住区エリアに近く装甲に守られた場所と言えればここ以外にない。

それでもスペースは足りないのです、外部に近く不安が残るが、戦闘の邪魔になることがまずありえない両舷展望室（防御シャツターで閉鎖済み）や食堂、だがそれでもあぶれてしまったのでやむをえず、居住区の通路にシートを敷いて耐え忍んでもらうしかなくなった。

負傷者は優先して医療室に運び込み、医療科の面々が代わる代わる

処置して必要ならベッドに寝かした。

幸いヤマトはまだ装甲を貫通するような被害を被っていないので、ベッドを必要とする人が人は出ていないが、これから戦闘が激化するとクルーの処置に支障をきたしかねないありさまとなる。

連れ込んだ兵士たちの武装解除は、議論の末行わないこととなった。一応は敵国の戦艦の中だと考えると、市民の精神衛生上、彼らの存在が不可欠と判断してだ。

もちろん彼らが艦内で暴れることがあれば、ヤマトは無視できない損害を被ることになる。なので銃の携行を許可する代わりに爆薬の類は引き渡しを訴えた。

渋々ではあったが、彼らも状況を理解しているのだろう。無事に引き渡しに応じてくれた。

「ドメル司令が信じろと仰ったのだ。われわれはその指示に従うだけだ」

苦々しい表情であるが、それでも命令に従うあたり、ドメルという司令官は相当人望が厚いらしい。

「第一五区画に生存者はもういません。救助活動を終了してもよさそうです」

監視カメラやらを総動員して内部の捜査を続けていたルリの報告を受けて、進も救助活動の切り上げを決定した。

もとよりこの状況下でドックに長く留まり続けるのは自殺行為だ。速やかに撤収を指示した直後、施設全体がまた揺れる。

「こちらコスモタイガー隊リョーコ！ 敵艦隊の射程に基地が捉えられたみたいだ！ 早く発進しないとドックが潰されるぞー！」

リョーコは必死に敵航空隊の足止めをしながら警告する。

ディバイダーを背中に装着した高機動モードのエックスディバイダーを駆り、左手で引き抜いた大型ビームソードを振り回し、右手に持ったビームマシンガンからビームの弾幕を張って敵機の侵攻を抑えてきたが、そろそろ限界が近い。

さしものガンダムも、艦砲射撃の直撃に耐えられるほどの頑強さは

ない。

防衛戦はもう限界だ。砲撃が命中した基地の一角が吹き飛び、無作為に飛び散る破片から身を守るために回避行動を取れば、好機と言わんばかりに敵機の攻撃も飛んでくる。

アクロバティックな機動で回避しながら返す刀でビームを叩きこんでも、敵の数は一向に減らない。じり貧だ。

何度目かの艦砲射撃を回避する中で、破片に煽られて左手のビームソードがすっ飛んで行ってしまった。

ビームソードは諦めてデイバイダーを左手に構え、拡散放射モードで弾幕を張る。エネルギーが急激に減少。こういった長期戦では、デイバイダーは必ずしも有効な武装ではないのだと思ひ知らされる。

そのとき、合流したアキトのGフアルコンDXの砲撃がエックスデイバイダーの背後にいた敵機を射抜いた。やばかった。

相転移エンジン搭載でもエネルギーは心許ないし、弾薬も底をつきかけている。一度補給しなければ……！

「こちらヤマト、これよりドックから出てバラン星の環に突入する。コスモタイガー隊は防空任務をガミラスに引き継ぎ、ヤマトに帰艦して補給を行え。これ以上の継続戦闘は危険だ」

パイロット兼任だっただけはある。進はちやんとこちらの消耗具合も図ってくれていたようだ。

「了解！——野郎共、交代で補給に入るぞ！ 消耗の激しい奴からだ！ アキトは最初のグループと一緒に補給してすぐに再出撃だ！ ガンダムは極力戦線に残す！」

「了解！ すぐに補給を済ませて戻ってくる！」
アキトは文句も言わずにリョーコに従ってヤマトへの帰艦コースを全力疾走する。

よし、アキトが再出撃したら次は自分が戻って装備を整える。
(ハードな戦いだぜ、ちくしょう)

リョーコは心の中で毒づきながら、エネルギーが切れそうなビームマシンガンに敵機に撃ち放った。

「ヤマト、発進！」

「ヤマト、発進します！」

連結橋に繋いだカバーの回収も諦め、ロケットアンカーを巻き上げて艦体を自由にしたヤマトは、すぐに乗員ハッチを閉じて補助エンジンに点火、ドックから発進。

これ以上この場に留まると狙い撃ちにされてしまう。

普段ならまだしも、たつぷりと避難民を抱えてしまったいまのヤマトは無茶ができない。

ヤマトが動き出してすぐ、多数の敵弾がついさきほどヤマトが停泊していたドックに着弾して大爆発を起こす。至近で大量に生じた爆発の破片に身を打たれ、爆炎に飲まれながら、ヤマトはそれらを振り切って猛然と加速する。

煌々とタキオン粒子の噴流をメインノズルから吹き出しながら、ヤマトはバラン星の環に向かって突き進む。

黒色艦隊もヤマトを逃がすつもりはないようで、航空攻撃はよりも効果的な艦砲射撃を雨あられと降り注いでくる。

ヤマトはフィールドを艦首に集中展開して攻撃を受け止めながら必死に突き進む。

しかし帰還のため接近していたGファルコンアルストロメリアが二機、攻撃に巻き込まれて一瞬で蒸発してしまった。当然パイロットも即死だ、脱出は間に合わなかった。

ついに部隊に人的被害を出してしまったと悔しがる中、攻撃を避けながら次々とコスモタイガー隊がヤマトに着艦していく。

その中にはアキトとヒカルとイズミの姿もあった。

「さっすがにシンドイねえ……でも、ピンチからの大逆転は漫画とアニメの王道だし、こつちにはスーパーロボットなガンダムだってあるんだから、なんとかかして見せないかね」

軽口を叩くも声に余裕のないヒカル。

たしかに状況はかなり悪い。

敵が突然出現する戦闘なんて、彼女にとっては木星との戦争以来で

あろう。

——あとはゲームの類、だろうか。

「……補給、頼んだよ」

こちらにも余裕がないのか駄洒落さえ出てこないイズミ。声には拭いきれない疲労が滲んでいる。

いくら彼女らが凄腕、機体も連中と同格のアルストロメリアであっても、数の暴力を覆すには少々力不足だ。

機体の損傷は比較的軽いとは言っても、ガンダムに比べれば程度は重い。

「……エアマスターとレオパルドは？」

アキトは険しい表情で格納庫奥で最終調整中の二機を見る。見た感じ作業は終わっていきそうなのだが……。

とか考えていたら、短距離ボソンジャンプで格納庫に直接帰投したアルストロメリアから、月臣とサブロウタが飛び出してくる。

対ジャンプジャマーを切ったのか。だったらアキトもそれであればよかった、とチラと思ったが、二人が緊急帰投したということは……！。

「隊長、エアマスターとレオパルドの最終調整が完了した。テストも訓練も抜きのぶっつけ本番になるが、出撃の許可をくれ。リスクが高くとも、ガンダムの力が欲しい」

「俺からも頼むよ中尉。リスクがあっても構わない。この戦局を少しでも好転させるには、ガンダムがいるんだ」

揃って真剣な表情でリョーコに訴えている。

絶賛戦闘中で余裕のないリョーコだが、少し悩んだ様子を見せてから苦々しい声で「わかった……でもヤバいと思っただけ逃げて帰れよ」と許可を出していた。たぶん、止めても無駄だと感じただからだろうし、戦力が必要だと判断したからだろう。

——新品同様の新型機、ダブルエックスと肩を並べるガンダムの名を聞いた機体。

アキトはいままさに出撃せんとしている新型に期待するやら不安がるやら。複雑な気持ちだった。

「こちらは大ガミラス帝国軍、銀河方面作戦司令長官のドメルです」
「こちらは地球連合宇宙軍極東方面所属、特務艦、宇宙戦艦ヤマト。艦長代理の古代進です」

進はガミラスの援軍としてワープアウトした艦隊の旗艦から通信を受け、それに応えていた。

理由は不明だがドメル将軍は少し驚いた顔をしていたが、すぐに真顔に戻って簡潔に告げる。

「貴官らの救援に感謝いたします。進路から、あのアステロイドを使用した防護システムで防御を固めるつもりと見受けまます。わが軍も支援しますので、早く防御を固めて戴きたい」

ドメルの読みに進は内心舌を巻いた。

ヤマトの進路からあつさりはこちらの目的を推察する洞察力、そしてヤマトが取ろうとしている手段にすぐに結びついたところから、こちらの戦力やいままでの戦法を徹底的に研究しているであろうことが伺える。

——次元断層で戦った指揮官だ。

直感がそう告げる。

「わかりました。ご理解が早くて助かります。ヤマトはいま、波動砲——タキオン波動収束砲を封印しているため、敵艦隊に対して決定打を持ちません。航空部隊の戦略砲も同様です。そちらの不安を少しでも払拭するための措置でしたが……」

波動砲、というのは地球側の呼び名であって本来の呼び方ではない。わかり易いようにと正式名称に訂正を加えつつ「波動砲とサテライトキャノンで事態を開くのは難しい」と訴える。

封印の解除は容易だが、それを示唆するわけには……。

「わかっています。古代艦長代理、あなたがたの心遣い、痛み入りまます。お互い思うところはありますでしょうが、いまこの場においては友軍であると考えています」

「こちらもそのつもりです。共にこの窮地を切り抜けましょう」

進は少しでも余裕を見せるために、礼を失しない程度に笑みを浮かべて応じる。

そんな進にドメルも笑みを返し、

「わが帝国の市民を救助して頂き、本当に感謝しています。この礼は、必ず」

そこで通信は終わった。

これ以上話したければ、まず眼前の脅威を取り除く必要がある。せつかく繋がったガミラスとの細かい糸。切らすわけにはいかない。

あのドメルという司令官は話せる相手だとわかったのも収穫だった。

——さて、できることをしよう。

ヤマトはもう間もなくバラン星の輪に突入できるところまで来ている。ガミラス艦隊が追いつき共に戦ってくれているおかげで幾分楽になっているが、予断は許さない状況には変わらない。

「艦長代理、バラン星の環に突入します」

ハリの報告に進はすぐに反重力感應基の射出を指示する。

黒色艦隊からの砲撃を掻い潜りながらバラン星の環に突入したヤマトは、すぐに両舷中距離迎撃ミサイル発射管を増設分含めて解放して、中から七本を一つに纏めた反重力感應基を六四発射出、射出後に散らばった計四四八発の反重力感應基が周囲を漂う岩塊に次々と撃ち込まれる。

続けてリフレクトディフェンサーも打ち出され、アステロイド・リングに交じって重厚な防御壁を構築する。

次元断層で使用したときの倍にも及ぶ、出し惜しみなしの徹底した防御姿勢。避難民を抱えて被弾が許されなくなったヤマト本気の防護幕であった。

「アステロイド・リング、形成完了。リフレクトディフェンサーも所定の位置に配置完了。防御幕制御を開始します」

「反重力感應基とリフレクトディフェンサーへの動力伝達制御はこちらが受け持ちます。ルリ姉さんは防御幕の位置調整に専念してください。——山崎さん、エンジンの管理と各部へのエネルギー伝達管理

の一部をそちらに任せます」

「リフレクトディフェンサーの反射角制御は僕が受け持ちます。任せてください」

「ハーリー君のフォローは僕がしよう」

すでにバラン星へのハッキングを終了したルリがアステロイド・リング防御幕の制御を開始する。

そしてハリとラピスが制御に手を貸すことでルリの負担を軽減。ルリが過労から回復したあと、時間を作っては制御プログラムの更新は行っていたようだが、改修作業であったり解析作業であったりが重なっていたこともあって、伐根的な改善には至っていない。

となれば、ルリに伍する能力を有するオペレーターに助力願うしかない。

その分ハリとラピスの負担が増え、本来の任務を果たせなくなるのだが、ラピスは山崎が、ハリの作業はジュンが一部請け負うことでフォローを行うことで成立させる。個々の負担が増えるのは避けられないことだ。

「太助！ エンジンのコンディションには気を配れ！ これから攻撃に防御と、エネルギーの消費が激増するぞ！」

「了解！」

山崎はすっかり片腕として定着しつつある太助に声をかけつつ、自分もエンジンの管理作業に余念がない。

改修を重ねたとは言ってもまだまだ安定性に欠ける超高出力エンジン。小ワープ明けからすぐに戦闘に突入しただけあって、いままも少々ぐずっている。

——万が一に備えて、波動砲も撃てるようにも備えておかなければならない。

事前に言われていたことだ。表向きは封印しているとんでもヤマトの切り札、最終兵器。敵のこの猛攻。最悪封印を破って敵艦隊に向けて使用しないとも言えない。

(撃たないで済めばいいが……)

アステロイド・リング防御幕を展開したヤマトは敵の攻撃をすべて受け止め、無力しながら反撃を続けている。

度重なる激戦で洗練された防御幕に、さしもの黒色艦隊も物量以外に攻略法を見いだせないようだ。攻撃が激しくなっていく。

敵艦隊はヤマト左舷前方に集中している。

無駄なくアステロイド・リング防御幕を活用するため、敵艦隊の方向に円盤状に回転する盾として展開。一挙集中させることで分厚く展開した防御幕は鉄壁の防御であった。

「艦首ミサイル、両舷ミサイル、目標選定完了」

ゴートがミサイルで狙う標的の選定を完了。

「主砲発射準備。目標、距離五万一〇〇〇キロ、方位左三七度、上下角プラス一九度」

戦闘指揮席でやや不慣れながらも守が主砲の準備を進めさせている。

ヤマトから攻撃するためには、リングの制御をしているルリと呼吸を合わせ、射撃の瞬間だけ射線を解放するようにリングの制御をしてもらわなければならない。

ヤマトに乗って日が浅く交流の乏しい守ではあるが、そこは指揮官としての経験も生かして呼吸を読み、ここぞというタイミングを示して攻撃を開始している。

さすがだと、進は兄の後姿を頼もしく思った。

完璧なタイミングでアステロイド・リング防御幕の一部が必要最低限の大きさを開口部を作り、主砲の重力衝撃波とミサイルが通るゲートを構築、重力衝撃波とミサイルがすり抜けていく。

攻撃完了後はすぐに開口部が閉じて鉄壁の防御を崩さない。理想的な戦闘スタイルであった。

——戦況が動いていく。

敵艦隊が前進し、押し込まれる形で後退した基地駐屯艦隊が、自然とヤマトと合流して共同戦線に至る。

合流したガミラス艦隊はヤマトの盾となるように展開されていく。

ヤマトが抱えた避難民を守るためだろう。

しかし、両者の間に連携など存在していない。

避難民を守るため、そしてドメル司令官の命令でヤマトと共闘しているだけで、不信感を拭えていない。艦隊はヤマトの動きを警戒している動きが硬く、ヤマトもガミラスに誤射しないように注意を払わなければならず、改修されて威力を増した主砲を活かせなくなっていた。

……これでは双方足を引っ張り合って敵に付け込まれるだけだ。

「艦長代理。このままだと足の引っ張り合いで敵に付け込まれるだけだ。向こうと話してヤマトを指揮下に一時組み込んでもらおうとしないと、満足に戦えなくなる」

「私も副長の意見に賛成です——残念ですが、私たちが指揮権を得ることは難しいでしょうし、なにより艦長代理は艦隊の指揮経験がありません。こちらからお願ひして、一時艦隊に編入して貰うほうがやりやすいと思います」

ジュンとルリから進言され、進は悩んだ。

進が受けたユリカの即席教育はあくまでヤマト単独での作戦行動を前提としたもの。必要とされていなかった艦隊運用のノウハウは含まれていない。

こればかりは仕方のないことだ。

ジュンとルリもそれを承知だからこそその進言ではあったが、表情は険しい。

一時的であってもガミラスの指揮下に入ることの抵抗はこの際無視できる。この場に來た以上、覚悟していた。

……問題なのは、指揮下に入れば当然ながらデータリンクの接続がどうしても避けられない点だ。

その過程でヤマトの戦闘データや機能に関する情報が流出する可能性は否めない。

今後もガミラスと敵対関係が続くのであれば、些細な情報でも漏洩は避けたいのが本音である。

しかしこの状況下で尻込みしている余裕は——やはりない。

思い悩んだすえ、進はさきほど話をしたドメル司令に意見しようと通信を決意したのだが、それよりも先にガミラス側から通信を求められた。

「古代艦長代理、ドメルです。戦線が後退しヤマトと艦隊の距離が近づいて合流してしまっています。これからはヤマトもわが艦隊と連携して戦わねば、ジリ貧になるだけでしよう。——連携を密にするため、私の指揮下に入ってはもらえないでしょうか？」

と、そのドメル司令直々にお問い合わせされた。表情から察するに、こちらの懸念材料はすべてお見通しなのだろう。だとすればなんと潔く、そして柔軟な思考を持った指揮官なのだろうか。

ユリカが手玉に取られ、ギリギリのところまで追い込まれただけのことはある。敵ながら尊敬に値する人物だ。

それに彼はヤマトをよく分析している。だからだろう、単なる敵というだけでなく、対等な戦士として扱ってくれているような節がある。

ならば……！

「艦長代理の古代です。ドメル司令、了解いたしました。宇宙戦艦ヤマトはこれよりガミラス・バラン星基地艦隊の指揮下に入ります。この場においては力を合わせ、眼前の脅威を取り除きましょう」

進は決断した。

いまは情報漏洩を気にしている場合ではない。一致団結して事態の收拾にあたる必要がある。

進の決意はドメルにも伝わったようで、「感謝します」と言葉短いながらも敵国の将に従う決断への敬意が伝わってくる。

やはり彼は、とても器の大きな指揮官であった。

すぐにヤマトはドメルの乗艦であるドメラース三世とデータリンクを開始。双方情報を共有して戦列を立て直した。

ルリが構築していた対ガミラスの解析データのおかげで、ガミラス側から送られてくる情報の翻訳にも支障をきたさずに済んだ。

ドメル艦隊に一時編入されたヤマトは避難民を抱えているため艦隊の中央、ドメラース三世と戦闘空母のすぐそばに移動し、共に長射

程を活かした砲撃で前線で戦うデストロイヤー艦を援護する。

優先すべきはやはり空母。

ワープで航空部隊を送り込めるとしても、母艦を失ってしまえば補給が封じられる。そうすれば撃墜を免れた機体があっても、いずれ補給が追い付かなくなつて航空攻撃を封じることができる。

標的となる空母らしき艦艇は、円盤状の艦体の中央にある溝のような巨大な滑走路で航空機を受け入れ、その両脇にある格納庫に艦載機を出し入れしている様子が辛うじて確認できた。

推定全長は八〇〇メートルにも達する超大型の空母。数は確認できただけでも三〇隻以上。定石どおり艦隊の後方に位置しているためかなり距離がある。また艦隊が壁になっているため直接照準に捉えにくく、有効な射線が生じる機会は非常に少ない。

そのためヤマトはもちろん、ドメラーズ三世や戦闘空母の砲撃も前線に立つ駆逐艦や巡洋艦クラスの艦に命中する形で遮られ、肝心の空母にはほとんど届かない。

しかしひとたび射線が通れば話は違った。ヤマトが誇る四六センチ——改良によって四八センチ相当に強化された重力衝撃波砲はその巨体さえもたやすく貫き、芯を外れない限りただの一撃で超巨大空母を轟沈せしめる威力を披露している。

隣に陣取つたドメラーズ三世や戦闘空母では射程外の標的も苦もなく狙撃し、かつてシユルツを震撼させたその威力を凌ぐ、驚異的な火力を存分に見せつけた。

ヤマトを含む前線部隊が奮戦する後ろで、脱出した民間船やら脱出艇は基地を挟んで艦隊の反対側へと移動が進められている。

転送戦術がある限り護衛対象を後方に置くことに意味はないともいえるが、艦隊の艦砲射撃に晒されなただけマシであるし、連中が標的にしているのはあくまで基地施設のみで、民間船は狙っていないことを見抜いたドメル の 采配であった。

さらに数十分が経過。戦局はヤマトとガミラスが歩調を合わせるようになつたことで五分となり、膠着状態へと突入している。

ガミラス側の残存艦総数は四〇〇隻。不意打ちを受けたことやヤ

マトを警戒した艦隊配置などが裏目に出て、初動で数を減らされたことで数的不利を被っている。

ヤマトとドメルの合流で持ち直せて入るが、押し込むには一手足りない状況が続く。

敵の主力兵器はビーム兵器。重力波砲とかち合えば一方的に湾曲してしまえるので、攻防一体の戦術で押し切ることも不可能ではない。

——ヤマトもガミラスも、威力を一転に集中する高収束型を採用していなければ、だが。

これがヤマト以前の地球艦隊のように、広域照射を可能とするタイプを装備しているのであれば優位を取れたのだが、ままならないものだ。

ドメルは膠着した戦局を打開する策を模索していたが、そこにヤマトから反重力感応基の簡易制御プログラムをガミラス側に譲渡し、防御を固めることで戦線を押し込むアイデアが飛び込んできた。

予想外の進言に大層驚かされたが、ドメルはヤマトからの提案を素直に受け入れた。

前線を構築するデストロイヤー艦は機動力に優れ、敵艦に対しても通用する火力はあっても防御が薄い。それを補填できるアステロイド・リング防御幕の提供は適切な処置と言えるだろう。

ただ、ヤマトにとっても重要な防御手段であり、次元断層での対決を制した要因とさえいえるそれを、簡易型とはいえこちらに譲渡する決断——彼らも必死だ。

講和を考えているのだとしても、身を切るような真似までするとは思わなかった。

(この行為には誠意をもって応えねばならん！)

ヤマトから制御を委譲されたアステロイド・リング防御幕は簡易制御ながら有用だった。多少機動力は削がれたが、デストロイヤー艦は防御力を増した恩恵でより積極的な攻撃に転じることができている。

ヤマトは無防備になってしまったが、残存していた三〇〇を超える岩塊に加え、ヤマトからの遠隔制御で送り込まれたリフレクトディ

フエンサーなる装備によって、前衛の被害が急速に減少した。

これを機に攻勢を強めることができるだろう。

「ドメル司令、敵艦隊の中に瞬間物質移送器を搭載した艦艇は未だに発見できません。敵艦隊の数が多く、艦影が重複していますので……」

「搜索を続ける。あれを発見して叩くことができれば、この状況も覆せる」

この状況を改善するには、瞬間物質転送器を止めるのが先決だ。

（——ヤマトにも情報を与えて搜索への協力を頼むべきか？）

ドメル個人としてはそれに異論はないが、機密漏洩で極刑に処された場合、デスラーとヤマトを引き合わせる人間がいなくなってしまう問題がある。

それに——ガミラスの将としては情けない話だが、残される家族のことを考えれば、軽率な行動には移せない。

結局ドメルはヤマトに情報を提供せず、独自に搜索を続けさせることしかできなかつた。

一方ヤマトでも、艦載機のワープ攻撃を阻止するためにどうすればいいのかについて、議論がされていた。

「——ふくむ。収集したデータを見る限り、あの爆撃機そのものにワープシステムが搭載されているという線は消去してよさそうだな。いくらなんでも計測されたジェネレーター出力が小さ過ぎる。おそらく外部から強制ワープさせているんだろう」

——あの、実は……——

ヤマトがなにか言いたさそうだったが、それを遮るようにして進

が、
「——あった。ユリカさんのファイルによると、ヤマト出生世界においてガミラスとデインギル帝国という国家が、外部から物体を強制的にワープさせるシステムを利用してたとある。暗黒星団帝国につ

いては記載がないが、この世界の彼らが開発に成功していたとも考えられる」

ドメルの指揮下に入って余裕の出た進が、なにかしらのヒントを求めてファイルを捲っていたのが功を奏した。情報があつたのだ。

「なるほど。となれば転送装置を持つ艦艇がいるはずだ。空母にそれらしい動きは？」

「ありません。安全を確保するため、ヤマトとガミラスのレーダーに引つかからない位置に待機しているのかと……」

ジュンの問いにルリが答えた。

さすがにこの状況下で敵艦隊の内側を丁寧に解析する余裕はない。

いまも敵艦載機は次々と襲い掛かってきているのだ。機体の大きさと空母の推定される容積から考えても、間違いなく二順以降の出撃になっているはず。どこかで兆候を察知できてもよさそうなのだが……。

「……真田さん、敵航空部隊のワープの観測データはあまさず記録してください。この戦闘中には無理でも、次の戦いを考えて対策を得られねば、ヤマトもどうなるかわかりません」

「うむ。そのとおりだな、艦長代理。解析は行うが、まずはこの状況を覆さないことには……」

「艦長代理、ガミラスの前衛部隊が戦線を押し込んだぞ！」

「ドメル司令より、ヤマトに優先して攻撃して欲しいターゲットの位置情報と攻撃順序が送られてきました。メインパネルに出します」

守とエリナからの報告を受け、進はメインパネルに表示された敵と味方の位置情報と、ドメル司令からの要請に目を通した。

——やはり凄い指揮官だと痛感する。

ユリカが無茶を承知で現場復帰を望んだはずだ。これは、自分だけではとても及ばない。

彼女と協力して知恵を絞り、ジュンとルリのバックアップがあつて初めて対等に渡り合えるか、といったところだ。

やはり結論はヤマト側と同じで、アステロイドリング防御幕を活かして敵艦隊と距離を詰め、敵の空母を叩けるだけ叩いて航空戦力を封

じるというものだったが、艦隊運用の指揮の細かさと着眼点は、進の指揮を上回っている。

やはり、彼の指揮下に入ったことは間違いではなかったようだ。

格納庫では月臣が自身の新しい機体——ガンダムエアマスターバーストを受領し、コックピット周りの微調整を行っていた。

基本的な構造はダブルエックス——いやコントロールユニットがないのでエックスと同型。ダブルエックスのテストパイロットも行っていた月臣にはアルストロメリアほどではないが、馴染んだ構造だった。

「そっちはどうだ、サブロウタ」

「問題ありません。いま機体を立ち上げました」

隣で片膝をついているレオパルドデストロイのサブロウタも特に問題なく進めているようだ。

(さて、使いこなせるか……)

シミュレーションは行っているが初見の機体には違わない。ましてやアルストロメリアともダブルエックスとも異なる可変型の高機動型ともなれば、月臣にとっても未知の機体だ。

その点サブロウタのレオパルドデストロイは全身武器の砲撃型。武装こそ増大しているがコンセプト的にはかつての愛機であるスーパーエステバリスと極端な差はない。

火器管制制御は大変だろうが、機体コンセプトが大きく異なる自分よりはマシだろうと思うと、少しうらやましい。

「いいか、月臣にサブロウタ！ エアマスターもレオパルドも組み上がったあとの最終調整が終わっただけで、稼働試験も終わってねえ！ 合体機構の調整も間に合ってねえからGファルコンとの合体もできな！ 機体のコンディションには気を配れよ！ 操縦の癖だつてまったく別物なんだからな！」

格納庫の喧騒に負けないウリバタケの大声での注意に、月臣もサブロウタも力強く頷いて開放していたコックピットハッチを閉じる。

「完成度は九〇パーセント……少佐、結構な博打になりそうですね」

「だとしても、ここで凌がねば先はない。敵航空部隊のワープ攻撃は止んでいないんだ。少しでも肉薄して、空母の一隻でも叩きたいところだな」

不安は残れど戦意は衰えず。

ぶつかっていくのみ。

補給を完了して再出撃したGファルコンDXに続く形で、イズミとヒカルもヤマトから飛び出していく。

月臣とサブロウタも、標準武装のみを施されたそれぞれの新しい機体を発進スロープに乗せていく。

改めてエステバリス系列機とは違う手応えを感じて自然と気が引き締まる。

——この力、必ず使いこなしてみせる。

「月臣元一朗、ガンダムエアマスターバースト！」

「高杉サブロウタ、ガンダムレオパルドデストロイ！」

「発進する!!」

イスカンドルの支援を受けて新たに生まれた二機のガンダムが、宇宙にその身を躍らせる。

熾烈極まる防衛戦に、はたして一筋の希望を見出すことができるのだろうか。

ヤマトとガミラスが奮戦していた頃。 balan 星基地を襲撃した暗黒星団帝国の艦隊旗艦では、指揮官がモニターに映るヤマトの姿を見てほくそ笑んでいた。

「……あれがヤマトか」

「はっ……てつきり例のタキオン波動収束砲とかいう装備以外は大事なことない艦だと思っていたのですが……それ以外の装備も含めておそろしい性能の艦でした。おそらく、単艦での性能はわが軍のプレアデス級に匹敵、あるいは上回るやもしれません。辺境の星の艦艇とは思えぬ、けた外れの戦艦です」

五日前、ヤマトを侮って挑んだ挙句あつけなく返り討ちに遭った指揮官が、上司に向かって汗を垂らしながら受け答えしていた。

その言葉を受けた、筋骨隆々の厳めしい風貌と体格の指揮官——
デーダーはその性能に脅威を覚える。

彼の任務は鹵獲したこの転送装置の威力確認と、 balan 星基地を攻略してガミラスの動揺を誘うことだ。

重要拠点をあつけなく潰されたのであれば、動揺をしないわけがない。

ついでに将来の脅威になりえるかもしれない宇宙戦艦ヤマトの捜索、可能であれば鹵獲か撃破をするために部下の一人に小規模ながらも艦隊を授け、遭遇が予想される宙域に差し向けたのだが……想像以上に手強い。

わが軍に比べれば格が劣るとはいえ、一国相手に単艦で抗うだけの能力はあるらしい。

……それにしても目立った衝突もなくガミラスと共同戦線を張るとは——連中、ガミラスに与するつもりだろうか。

——ならば、もう少しヤマトの力を知りたい。これから大きく影響する事案のようだ。

「——可能であれば、例のタキオン波動収束砲とやらの威力を見ておきたいところだな」

しかし安易に撃たせるわけにはいかない。艦隊に向かって放たれた被害甚大では済まされないはずだ。ガミラスの捕虜から聞いた程度の情報であつても、わが目で見るまでは過小評価は禁物。

貴重な将兵をいたずらに損耗させるのは指揮官としては下策中の下策。総司令の顔に泥を塗らないためにも、慎重な行動が必要だ。

—— balan 星への攻撃は、十分成功したと言つても過言ではないだろう。

あの様子では、当分の間は基地として満足に機能しないはずだ。

となれば、あの正体不明の移動性ブラックホールから逃げ出そうとしているガミラスにとって、寄港地を失つたと浮足立たせるに十分な損害を与えていると判断してもいいだろう。

ならば、これ以上ここで戦闘を継続して戦力を消耗させる必要はない。もう連中は十分こちらの力を思い知ったことだろう。

それに、本星攻略には移動要塞ゴルバを動員するのだ。たとえ正面からガミラス全軍とぶつかったとしても戦力的に不足はない。

——ならば動かせる範囲の戦力を最大限に動員し、イスカンドルに向かっているらしいあのヤマトを出迎え、仕留めるのが得策。

——放置するには少々目に余る存在だ。

この場でテストも兼ねて使ってしまったが、転送戦術の優位性は証明された。多少の対策は立てられてしまっただろうが、完全に対処して覆すには情報も時間も不足しているだろう。

ならば空母を中心にした機動艦隊と駆逐艦隊を同時に差し向け、この旗艦プレアデスの威力も併せて一気に撃滅してしまうのが上策か。

連中がイスカンドルへの最短コースを取るのなら必ず通過しなければならぬ、例の七色混成発光星域で罟を張るのがいい。

長距離レーダーが機能障害を起こしやすいあの宙域は、この転送装置の威力を何倍にも増幅させてくれる。

なるほど、ガミラスにもいい指揮官がいるものだ。ほめてやる。

……そこまで考えてふと思いついた。これを実行できれば、味方に被害を出さずにタキオン波動収束砲の威力を見れるかもしれない。

デーダーはニヤリと、実に悪い笑みを浮かべた。

ユリカは夢現の中にあつた。

先日の負傷が原因で衰えた体力が更に低下したせいかな、一日で起きていられる時間が八時間を切っている。

進がバランス救援のためにヤマトを動かしたことは確認しているが、そこから先はワープの負荷もあつて意識が遠のき、いまになつてようやく意識が戻りつつあつた。

衰えた感覚でもはつきりと感じ取れる、戦闘の喧騒。

医務室にいてもヤマト自身の砲撃による衝撃音や、全力運転を続け

るエンジンの唸りが感じられる。すっかり馴染んでしまった、ヤマトの息吹。

それらを感じながら、ユリカの意識は夢と現の境を彷徨い続ける。そんなユリカは balan 星の軌道上を巡る人口太陽の軌道が突如として変わり、猛スピードでヤマト・ガミラス混成艦隊に向かって突き進む夢を見た。

あまりに衝撃的な内容に飛び起きたユリカは、感覚を頼りに右手に着けっぱなしになっているブレスレット型受信機のスイッチを入れて聴覚センサーをオン。

ベッドサイドに置かれている視覚補助用バイザーを大慌てで装着。コミュニケーションを起動。第一艦橋に警告を。

——あれはただの夢ではない。浸食が進みより演算ユニットに近づいたことで垣間見た、『未来』だ。

「太陽に、balan 星の太陽に気を付けて！ 太陽が——太陽が迫ってくる！」

決死の覚悟でガミラス・balan 星基地と暗黒星団帝国艦隊との戦いの渦中に飛び込んだヤマト。

大量の難民を抱えながらもついにドメル司令指揮の下、ガミラスと共闘して事態の收拾にあたるヤマトに、更なる試練が襲い掛かる。

だがヤマトよ、この困難を乗り越えねば地球を真に救うことはできないのだ！

負けるなヤマト！ 人類は君の帰りを、君の成功だけを信じている！

人類滅亡と言われる日まで、

あと、二四七日しかないのだ！

第二十話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十一話 未来を切り開け！ 決意の波動砲！

ヤマトよ、奇跡を起こせ！

第二十一話 未来を切り開け！ 決意の波動砲！ Aパート

ヤマトの艦内に收容されたガミラスの兵士は、不安に駆られながらもレーザーアサルトライフルを握りしめ、同じく收容された民間人に視線を巡らせる。

……一様に不安な表情を浮かべている。

無理もない。この艦は敵国の艦——それも、ガミラスの手で滅亡寸前にある星の艦なのだ。

いつどのようなタイミングで報復されるかもしれないという不安はあつて然るべき。

——この部屋に閉じ込められたまま、生命維持装置を切られるかわからないのだ。

軍艦ともなれば、機密保持や安全確保のためにこうやって民間人を一か所に纏めることは不思議ではないが……。

兵士は手元にある小銃の感触を確かめるかのように難度も握り直しながら、民間人に不安が伝染しないように気を引き締め直す。

武装解除されなかったのは幸いだ。連中に言わせれば「武装したお前たちが入り口に立っていたほうが安心できるだろう」とのことらしい。

実際に民間人は継るような視線で自分たちを見ているし、この中央作戦室という部屋以外に收容された民間人にも、付き添いとして武装した兵士の同行が許可されていると聞く。

……その気になれば、このヤマトを内側から破壊することもできないわけではない状況にはある。

しかしドメル司令やゲール副司令からも「ヤマトには手を出すな」と厳命されていて、これだけの数の民間人を抱えていては迂闊な行動はできやしない。実質人質を取られているも同然の状況だ。

收容されてからもヤマトは被弾による衝撃だつたり戦闘機動によ

る揺れがあつたが、いまはそれも止んでいる。

ほんの少し前には「これよりヤマトは波動砲を使用します。全員衝撃に備えてください！」と若い女性の声でアナウンスが流れ、それからあまり間を置かず計五回の衝撃が襲い掛かった。

特に五回目は四回目までに比べても一際大きな衝撃で、誰もが不安の声を漏らしたものだ。そもそも、この状況下でいったいなにに対してこれほどの衝撃を発する兵器を使ったというのか、不安は尽きない。語感からすると、件の波動砲とはタキオン波動収束砲である可能性が高いわけで……。

静かになつた……。

おそらく戦闘はすでに終了しているのだろうが、まだドメル司令はなにも言つてこないし、ヤマト側もなにも言つてこない。

苛立ちが募る。これからいつたいていどうなつてしまうのか。

兵士はままならない状況に強いストレスを感じながら、ちらりと避難民に視線を巡らせる。

——落ち着け。おまえは栄えあるガミラスの兵士。市民を不安がらせるような真似はするんじゃない。

必死に自分に言い聞かせ、彼らの安心に繋がるようにと虚勢を張る。

そんな緊張状態が何分続いただろうか。ようやくヤマトのクルーが現れた。彼らはなにやらワゴンを押している。なにかしら支給でもあるのだろうか。

黄色を基調に黒の装飾が施された制服を着て、正面にはエプロンを掛けて両手には肘まであるゴム製と思われる手袋。

見るからに炊事係だ。となれば、ワゴンの上に乗せられている大鍋の中身は自ずと推測できるが……。

「みなさん、戦闘は無事終了しました。ドメル司令指揮のもと、受け入れの準備が進められていますので、いましばらくお待ちください。それとみなさんお疲れでしょう。温かいスープをご用意致しましたので、どうぞ召し上がってください」

そう言いながら、彼らは鍋の蓋を取る。

中には少量の豆と野菜の切れ端が浮かぶ、薄茶色の透明感あるスープがなみなみと入っていた。

「……」

漂ってくるスープの香りが鼻を突く。急速に空腹感を感じ、彼はここまで疲労もあつてか腹が空いていたのだと、いまさらながらに自覚させられた。

——はたして信じていいのだろうか。毒が入っていたりしないだろうか。

ヤマトクルーは中央作戦室に居る全員にスープを配膳している。

だれもが一応受け取りはするが、警戒心が強く口を付けていない。それでも受け取ったのは、やはり助けて貰ったという意識があつて無下にできないからか、それとも疲弊しきつた心身が眼前の食事を欲しているのか。——どちらとも、なのだろう。

——緊張状態を続かせるのは、よくない。

「……すまない、助かる」

こうなれば自棄だと、口先だけの礼を告げてからスープの注がれたカップを受け取り毒見役をかつてでる。

兵士は意を決して渡されたスープのカップに口を付けて、中身のスープを啜った。

口腔内に広がったスープは熱過ぎず温過ぎず、啜るように飲めばちようどよく、適度に塩味も利いていて疲れた体に心地よかった。

——美味い。

なんの捻りもない、シンプルな感想が頭を過った。

カップと一緒に渡されたスプーンで具の豆や野菜を口にかき込んで、簡素だが温かい食事を終える。

「ごちそうさま。美味かったよ」

そう言つて空になったカップを返す。今度は本心からの礼が口から飛び出した。

その様子に安心を得たのか、ほかの兵士や民間人も恐る恐るではあるが、食事に口を付けはじめた。

しばらくすれば、突然訪れた危機の連続に張り詰めていた気も緩ん

だのか、みないくらか表情が柔らかくなる。

そんなガミラス側の様子にヤマトのクルーも満足そうに見えた。いくらか余裕をもって用意したのだろう、何人かがお替りを要求すれば、ありったけを提供してくれた。

そんな様子を見ながら、余裕を取り戻した兵士は改めて辺りを見回してみる。

そういえば、ヤマトのクルーは受け入れの際大量の毛布を運び込むでは床の上に敷いてくれていた。民間人が冷たい床に座らないようにするための配慮だ。上に羽織る毛布も用意されている。

戦闘中ともなれば、ほかにすることも多いだろうに。

いくらか不信感が解けた民間人の何人かが、食事を提供してくれたクルーに怪我をして医療室に運ばれた家族や友人らの様子を尋ねている。

それを受けたクルーは腕に巻いた通信機になにやら訪ね、情報を得るなりそつと彼らを医療室に向かって案内してくれたり、案内できないならば様子を聞かせたりしている。

滅亡の淵に追いやった憎むべき敵国の人間だというのにこの紳士っぷり。ヤマトのクルーは途方もないお人好しだ。自分たちだったらここまでの対応は——できない。

彼とて軍属になつてそれなりに長い。ほかの星の侵略する際、銃をもって戦場を駆けまわったこともある。

これは侵略を受けた側の対応ではない。もつとこう、侵略を受けた側というのは、射殺さんばかりの視線をしているものだ。

だから疑問に思つて尋ねてみた。末端の兵ではまともな返事が返つてこないかと思つたが、案外そうでもなかった。

「ヤマトは地球の未来を考えて、ガミラスと共存していく道を模索しているんだ。恩を売ると言えば聞こえが悪いかもしれないが、こうすることで戦争を終わらせることができるなら……怨恨だつて飲み込んでみせるさ。綺麗事だと馬鹿にされても、ヤマトはそういう道を選ぶと、決断したんだ」

その回答を聞いて、呆れるべきか感心すべきか少々判断がつかなく

た。

が、彼は思った。

少なくとも、いまこの場で救いの手を差し伸べてくれたことに関しては、素直に感謝すべきだろうと。

しかし、余裕ができたいまだからこそ気付いたのだが………部屋
の端っこにある妙な機材はいつたいたんだらうか………。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ　ディレクターズカット

第二十一話　未来を切り開け！　決意の波動砲！

少し時は遡る。

ドメル艦隊と合流したヤマトは、艦載機の補給と再出撃を繰り返しながらひたすら遠方の空母に対して砲撃を続けていた。

「艦首ミサイル、煙突ミサイル発射！」

実戦の中で慣れてきた守は、威勢もよくけん制と露払いを目的としたミサイル発射を指示する。

放たれたミサイルは、入力された標的を目指して機敏に軌道を修正しながら宇宙を突き進む。だが敵艦の迎撃によって四分の三近いミサイルが撃ち落とされ、残されたわずかなミサイルが辛うじて敵艦に命中する。だがその程度の数では有効だとはなりえない。

だがわずかだが敵艦隊の間に間隙が生まれた。

その隙を逃さずヤマトの主砲が旋回。照準。発砲。

三本の重力衝撃波が敵艦隊の隙間を縫って直進し、目当ての空母に直撃。一隻轟沈せしめた。

この混成艦隊の中で、敵艦に対して必殺の威力を発揮出来るのはヤマトとドメラーズ三世のみ。内敵空母の辺りにまで届くのはヤマトの主砲——三連装四六センチ重力衝撃波砲のみである。

敵艦隊もこちらの優先目標が空母であると察したのだろう。脅威となるヤマトの主砲の射線に空母を置かないよう、前衛艦隊が盾として立ちほだかり、射線を塞がれている状況が続いていた。

——この動きは、転送装置搭載艦を隠す意味もあるのかもしれない

い。

そうは理解していても、それを止めるすべはない。

ヤマト威力を活かすべく、ドメラーズ三世と戦闘空母が率先して露払いを務め、障害となる艦を排除してヤマトの射線を空けようと奮戦しているが、目立った効果は出ていない。

前衛に施したアステロイド・リング防御幕もだいぶ消耗させられており、強気に攻勢に出ることもままならなくなったのも、膠着状態に弾みをかけていた。

黒色艦隊も負けじとビームとミサイルの雨あられを降らし、爆撃機の転送も止む気配なし。

その砲火のほとんどは、ヤマトとドメラーズ三世を含む艦隊に集中している。バラン星基地への追撃は不要と判断したのだろう。

さきほどまでは基地への攻撃が優先されていたため被害は小さかったが、攻撃目標があらゆるさまにヤマトと艦隊旗艦と判断されたであろうドメラーズ三世に切り替わってからは、被害が拡大する傾向となっていた。

ヤマトへの被害も小さくはなかったが、より深刻だったのはドメラーズ三世である。

元来重装甲重火力の艦隊旗艦としての役割が重視された設計、それゆえ対空装備が乏しく、その巨体による被弾面積の広さと鈍重さが、敵爆撃機の大火力にいいように弄ばれる要因となっていた。

本来は僚艦の対空装備や味方戦闘機によって制空権を確保することが前提の設計が裏目に出て、転送戦術で前線の概念が消失した結果タコ殴りにされるといふ結果を迎えている。

ヤマトに匹敵する装甲とフィールド強度で耐え凌いでいるとはいえ、このままではいずれ決壊してしまうのは火を見るより明らか。

ドメラーズ三世をやらせまいと、ヤマトも対空火器を総動員、ドメラーズ三世のカバーを請け負っている。

増設された三連装垂直ミサイルを撃ち放って数を減らしても、すぐにおかわりが来るこの状況では焼け石に水だった。

僚艦としてドメラーズ三世を挟んでヤマトの反対側に陣取ってい

る戦闘空母も、甲板を裏返して露出した多数の火器を撃ち放ち、弾幕を展開しているが完全にはカバーできていない。

対空戦闘に向いたガミラスの戦闘機と言えど、神出鬼没な敵爆撃機に翻弄されるばかりで十分な効果を上げられていない。

その場に留まった戦闘が苦手な宇宙戦闘機の弱点が、本来あまり意識しなくてもいいはずの弱点が、重くのしかかっている。ならば。

「コスモタイガー隊はドメラーズ三世の防衛に機体を回してくれ。ドメル司令を失うわけにはいかない」

「了解！ イズミとヒカルとサブは俺に着いて来い！ ドメラーズ三世の防空に当たる！」

「りよ〜か〜い」

「――」

「お任せあれ！」

守の指示を受けて、リョーコが馴染みの連中に声をかけてフォローに向かった。イズミがなにかしら駄洒落を言っていたようだが、よく聞き取れなかった。

戦闘中だから別に構わないか、うん。

守は一人納得した。

ドメラーズ三世上空に移動中のリョーコは、ちらりとエックスデイバイダーの隣を並走する真紅の機体を見る。

エックスよりも全体的に武骨で火器を満載した動く弾薬庫。

その赤いボディと『デストロイ』という名も併せて、敵陣を火の海に沈めるために生まれてきた機体の生き様を感じさせられた。

「せっかくの新型のお披露目。相応しい舞台を用意して貰っちゃあ、がんばるしかありませんなあ！」

やはり木星出身者だけあって、『強力な新型機』というフレーズに心揺さぶられるのか、いつもより気持ちテンションが高い気がする。うっとうしいほどではないが。

「気張り過ぎて壊すなよ。貴重なガンダムなんだからな」

一応隊長として釘を刺しておく。まだ完全とは言えない機体なの

だから、無理をされたら困るのは事実。

それに――

「わかってますよ隊長殿。まだデートもできてないのに死ねませんか
らねえ」

「最後が余計なんだよ最後が！ いいからさっさと防空任務に就けえ
!!」

一気に赤面させられたリョーコが怒鳴り散らすと、サブロウタは
「へ〜い」と気負うことなくドメラーズ三世の艦橋の上に機体を降り
立たせ、防空体制に入った。

（――でもまあ、これが無事に済んだら飯くらいは付き合ってもいい
かな）

苛立ち交じりに敵機を撃墜しながら、リョーコはふとそう思った。

「さてさて、新型の威力をとくどご覧あれ！」

ドメラーズ三世の円盤のような艦橋に降り立つ許可を無事頂けた
サブロウタとレオパルドデストロイは、早速防空任務を果たすべく全
兵装の安全装置を解除、その攻撃性能を全開にする。

地球が生み出してきた重武装型機動兵器の発展型として生み出さ
れた機体の威力、とくと味わうがいい。

背中に収納されていたツインビームシリンダーの砲身が伸長し、マ
ウントアームによって脇下を通って機体正面に差し出され、側面のカ
バーを解放。カバーの中に両手を潜らせ砲身の後ろにあるグリッ
プをそれぞれの手で掴み、掌にあるコネクターとグリッパに内蔵された
コネクターを接続、エネルギーラインを成立させる。カバーが閉鎖さ
れて両腕に固定されたツインビームシリンダーとバックパックと繋
ぐマウントアームが外されフリーになった。

さらに右肩外側に装備された連装ビームキャノンの砲身を前方に
向けられる。

左肩側面に装備された一連ミサイルポッドが正面のハッチを解
放され、赤い弾頭が露出。

胸部の黒い装甲ハッチが跳ね上がり、内側に収められた八砲身のブ

レストガトリングの姿を露にする。

両膝に備えられたカバーが前に倒れ、収められていたホーネットミサイルが発射体制に移行した。

そして、コックピットのモニター前面にガンダムタイプ共通のヘッドアップディスプレイが下りてきて、複数のターゲットマーカールが出た。

レオパルドデストロイの特徴でもある多重ロックオンシステムが稼働して、複数の兵装を異なるターゲットに指向できるようになった。

——準備完了！

「それじゃあ……乱れ撃っちゃうぜ〜っ!!」

ワープで至近距離に現れた敵機を素早くロックオン。持てる火力を出し尽くしていく。

右腕の四砲身ビームガトリングと三連装ビームキャノンが生み出す弾幕が敵機を捉え、容赦なくフィールドを削り取ってハチの巣にする。

左腕の大小の複合ビーム砲の生み出す重い一撃の連打が、捉えた敵機のフィールドを数発で撃ち抜いて、砕く。

そのビームの暴風雨の援助をするショルダーキャノン。ややテンポの違う攻撃が敵機の回避行動に喰らい付く。

最も射程距離が長く、精密性に優れた連装ビームキャノンが、基部の関節を活かしてほかの武装の射程外の敵機に次々と撃ち放たれ、フィールドに威力を削がれながらも確実に手傷を負わせていく。

一一連装ミサイルポッドから対空ミサイル、両膝の熱探知型のホーネットミサイルが一挙に放たれ、ツインビームシリンダーよりも外側に位置する敵機に複雑な軌道を描きつつ着弾。

左右に振ったツインビームシリンダーの火線を潜るようにして機体の正面に飛び出して来た粗忽者は、ブレストガトリングの生み出す弾丸の嵐と、両頬に内蔵されたヘッドビームキャノンの砲撃でごり押しして撃墜。

「最高だぜこの機体!! 圧倒的な投射力! 癖になるぜ!!」

アドレナリンもたっぷりにサブロウタが歓喜の声を上げる。

宇宙軍に入ってから試験艦であるナデシコBの火力不足を補うべく、重武装が売りだったスーパーエステバリスに乗ってきたサブロウタにとって、レオパルドデストロイはある意味理想的な機体であった。

重武装な機体で単独での飛行能力が欠如しているとはいっても、未体験の地表はともかく、宇宙空間での移動速度は悪くなかった。それに今回は間に合わなかったGファルコンと合体すれば、さらに火力も増やし飛べるようになってさらに機動力が上がるとなれば、文句はない。

そして、レオパルドが生み出す弾幕に恐れをなし、軌道を外れた敵機は――。

「はあ〜い、残念でした」

「山の頂点、それは……いっただけ」

待ち構えていたイズミとヒカルに撃ち落とされる。

ラピッドライフルにレールカノン、オプションのロケット砲にミサイルランチャー、それにGファルコンの拡散グラビティブラストとミサイルが、レオパルドが撃ち漏らした敵機を容赦なく葬り去っていく。

ついでにヤマトから継続されているパルスブラストの弾幕までもが容赦なく襲い掛かる。

おもわず敵に同情したくなるような地獄絵図。レオパルド一機が参戦しただけでこのありさま。

なるほど、ウリバタケが自信をもってプレゼンするだけのことはある。こいつはダブルエックスに群がる敵機をまとめて相手取るのに向いている。護衛機として適当な機体だ。

サブロウタは圧倒的な破壊力に酔いしれるかのように大量の火砲を撃ちまくる。ミサイルは撃ち切ったがまだまだ弾薬もエネルギーも残っている。全部持っていけ。

「レオパルドすっごくお〜い!! まさに全身武器庫!!」

ヒカルの興奮する声が飛び込んでくる。通信はオンのままだ。

「撃ち漏らしはこっちが引き受けるから、とにかく撃ちまくってよ」
いきなりシリアスモードになったイズミに煽られ、サブロウタは景気よく撃ちまくる。

「オラオラオラア！ よそ見していると命を落とすぜ！」

「こつちもハイテンションだった。」

補給を終えたエックスデブライダーは高機動モード。左手にハイパーバズーカを担いで次々とロケット弾を撃ちまくっている。

右手には補給してエネルギーが満タンになったビームマシンガンを握り、単射モードで正確に敵機を射抜いていく。

ついでに補給されて弾薬がこれまた満タンのブレストバルカンからもけん制射。確実に敵機を追い込んでいく。

エックスデブライダーはその卓越した運動性能で敵弾を避けつつ応射。予備も含めて撃ち尽くしたハイパーバズーカを敵機に向けて投げつけつつ、空いた左手にリアスカートアーマーに懸架していたレールカノンを器用に握らせて腰だめに構えさせる。発砲。

長らくエステバリス系列機に乗っていたサブロウタにはこのアクションの無茶さがわかる。エステバリスやアルストロメリアでも、片手でレールカノンを振り回すことは一応可能だ。

だが反動制御までは手が回らない。それにヤマト発進以来細々とした改良を重ねて威力が強化されていて、反動も増している。

それを片手で発砲できるのはガンダムのパワーとショックアブソーバーがあつてこそだ。

戦況はだいぶよくなった。

「あやや。ガミラスの戦闘機は大変だねえ。その場に停滞できなくて」

「——戦闘機だしね。宇宙空間での停滞戦闘は人型の特権よ。その代わりに連中が敵機を追い回してくれてるんだから、こつちも助かるけどね」

二人の軽口をどおり、ガミラスの戦闘機との共同戦線が確立し、定点に留まらないガミラス機が敵機を追いかけ、定点に留まれるコスモタイガー隊が対空砲台の代わりを務める。この役割分担が機能する

ようになったことで、個々の負担が減少して能力を發揮できるようになったことが要因だ。

そして二人の指摘どおり、宇宙戦闘機としての形態を持つガミラスの戦闘機は、一定の空域に留まって戦うことが苦手のようで、転送戦術における防空戦闘という点においては、その場に留まった戦闘が可能な人型機動兵器に軍配が上がるようだ。

それをわかっているのかそれともドメル司令辺りが指揮を出したのか、ガミラスの戦闘機は近接防御はコスモタイガー隊にほぼ一任し、その穴を埋めるような形で部隊を展開して防空作戦を展開している。

きつとこちらがいつ敵に回ってしまわないかと、内心冷や冷やしていることだろう。

……こちらと同じ気分だが。

「……和解にも至っていない連中と共同戦線を張るなんて、地球を出た頃は考えてなかったぜ」

即席混成部隊のことを思うと、つい軽口が飛び出してしまうリョーコにサブロウタも静かに同意した。

そうしている最中も攻撃の手は休ませない。休めている余裕はまったくといっていいほどない。

敵の攻撃が厳しいこともそうだが、やはり敵の機体が大きく相応に頑丈であるため、普段のガミラス戦の感覚で攻撃すると致命傷を与えられないことがままあったからだ。

いままで相対してきたガミラスの戦闘機が全長（または全幅）一八メートルほどに対して、新たに出現した暗黒星団帝国の使う戦闘機と判別した機体の全長は、倍近い三〇メートルにも達している。

単純にサイズだけなら決して珍しいと言えるほどでもない。大きさだけなら木連が使用していたジン・シリーズもだいたいこのくらいの大きさであったし、あれもエステバリスと比べれば火力も装甲も上であったことを考えれば、驚くには値しないともいえる。

——が、決定的なまでに機動力が違った。

鈍重で運動性能が低く、ボソソジャンプを抜きにすれば多少タフな

敵程度の扱いであったジン・シリーズに比べると、敵機は最低でもGファルコンクラスの機動力を、あのサイズで披露している。

おまけに数の暴力があるにせよ、ヤマトの防御性能をもってしても完全に無効化できない火力のビーム砲を装備している。これは驚異的なものだ。

単純な火力ではガンダム相当、しかもまるで触手のようにフレキシブルに動いて照準してくるのだから、敵の技術力が極めて高いことが容易に予想できてしまうような機体である。

加えて細部形状や意匠はともかく、有機的ではあっても地球製の航宙機に近い形状であり、かつ比較的運用思想が地球と酷似している部分があるガミラスに比べると、形状と機能の違いから機能が予測し辛く、少々戦いにくい。

ただ、動きそのものは一般的な航宙機の域を逸脱していないので、慣れてきたいまならさほど困惑せずに戦うことができる。

火力の高さは厄介だが、こちらも地道に改良を重ねてきた甲斐があった。ガンダムの装甲は一撃で陥落することはないし、直撃は避けたいアルストロメリアにしても、全体的な性能強化の恩恵で、対空遷都に限って言えば、致命傷を負った機体はいまのところ出ていない。

相手も小型高性能を地で行くコスモタイガー隊の対応には戸惑いと不慣れさを感じる。

性能的にはガンダム以外は劣っているのだろうとは思うが、決定的な差を生み出すほどではないし、相手が戸惑っているうちは付け入る隙があるということ。

このまま勢いで押し込むのが得策か。

——相も変わらずワープで投入される爆撃機の姿は途絶えない。だが数は確実に減ってきている。

主にガンダムの奮戦によって敵の頭数が目減りしているのだ。

そうとわかればサブロウタもさらに気合が入るといふもの。

——ここで一気呵成と行きますか！

すでにミサイルを撃ち尽くし、実弾のブレストガトリングの残弾も大分減っている。だがビーム兵器はすべて健在だ。火力は半減して

も、そこらの機体よりはずっと強力な火力を保持していた。

(だが、Gファルコンが欲しいとこだな。ちよつとエネルギーの減少が大きい)

相転移エンジン搭載とはいってもエックス以下、Gファルコン以上という程度。特別優れているわけではないし、コンデンサーの規模と数からエックスほどのエネルギー貯蓄量はないのが痛い。

特にツインビームシリンダーは消費が大きく、ある程度対策されているとはいってもエネルギーを容赦なく喰い尽くす。

このままツインビームシリンダーを使い続けるのは厳しいと判断したサブロウタは、右のビームシリンダーを外してバックパックに戻し、右手にだけ装備されたリストビーム砲の砲身を前方にスライドさせて発射する。

大口径一門と小口径四門、計五門のビーム砲から、そこその威力のビーム弾を発射して応戦を続ける。

右脛にマウントされているビームナイフは——この状況でなんの役に立つ。

いつそ左のビームシリンダーも戻してなにか携行武装を——と考えていたら思いがけない補給の申し出。

Gファルコンだ。

合体こそできなかったものの、レオパルドとエアマスター用に稼働状態に移行した予備機のGファルコン。それを補給機として発進させたのだ。

パイロットを載せず、ヤマトからの——ルリの手による遠隔操作ではあったが、電子の妖精の二つ名は伊達ではないと言わんばかりにアクロバティックな機動でGファルコンが戦線に到着する。

本来ガンダムやアルストロメリアを収納するカーゴスペースに武器を満載して戦場に運搬してきた。

すぐにアルストロメリアが群がってきて代わる代わる収められていた携行火器——ラピッドライフルとレールカノン、好みのものを掴んで戻っていく。

サブロウタが補給中の一機に補給を申し入れ、長年愛用している

レールカノンを一挺放つてもらおう。

危なげなく左手でレールカノンをキャッチ。ビームシリンダーよりも消費は幾分少ない。

手を使って速やかに装備を交換できるのは人型の特権だ。固定武装はどうにもならないが、携行武装が補填できるだけありがたい。

「よっしゃー！ もう一仕事するとしますか！」

ガミラス機では真似できない継戦能力を最大限に駆使して、コスモタイガー隊はヤマトとドメラーズ三世を中心に艦隊の中樞を防衛戦を継続していた。

月臣のエアマスターバーストは、アキトのGファルコンDXと共にガミラスの航空部隊と並走、敵艦隊に突撃を敢行していた。

二機のガンダム以外はガミラスの戦闘機と爆撃機と雷撃機で構成された部隊で、ヤマトの射線を塞いでいる敵艦を沈めて主砲の射線を確保する目的で進んでいる。

空母への直接攻撃はその規模と距離から現実的ではないと判断され、却下された。

収納形態で機動力を優先したGファルコンDXと、ファイターモードに変形したエアマスターはガミラスの高速戦闘機に匹敵する速度で戦場を突っ走る。

胸部装甲を回転させて後方にスライドした頭部を隠し、腰を回転させて膝をクランク状に折り曲げつつ太腿を前方に曲げてやや高い位置に固定、折り畳んだつま先に内蔵されたスラスタと胸部の回転と連動して後方に倒れたスラスタユニットから、ブースタービームキャノンに乗せた主翼を横に開き、背中のノーズユニットを前方に移動させたファイターモード。

エアマスターバーストの特徴というべき可変機構によって生み出される機動力の高さに、月臣は満足していた。

データは見せて貰っていたが、やはり実物を体験すると印象が違う。実に素晴らしい。

この機動力と運動性能は——それだけで強力な武器になりえる。

多少火力が低くても、この機動力を活かしたヒット&アウェイは、対空・対地戦闘においては絶大な威力を持つ。

強いていえば、対艦・対要塞攻撃には打撃力が不足しているのが難点だが、それはGファルコンとの合体やほかの機体との連携で補える。

高機動ユニットやGファルコンと言った外付けのオプションでしか成しえなかった航空機形態への単独変形の威力。想像以上だ。

月臣は眼前に広がるイモムシ型戦闘機の大群を見据える。

——さて、初陣だ。

「テンカワ、打ち合わせどおりに頼むぞ。エアマスターとDMF-3の部隊で迎撃機は抑えてみせる。いまは、おまえたち攻撃部隊の火力が頼みだ！」

「——わかってる。任せろ月臣！」

機体の性能を鑑みた役割分担だった。

エアマスターとガンダムタイプの一機。火力はガミラスの戦闘機よりも優れた性能を有しているはずだ。

だが今回の出撃では、対艦戦闘に従事するには少々火力不足。ガンダムは基本的にGファルコンとの連動前提で、取り回しのいいビーム兵器を主兵装としてグラビティブラストをオミットしている。例外は合体を前提としていないガンダムエックスディバイダーのみ。

今回エアマスターは調整不足で火力の要であるGファルコンと合体して運用できないので、対艦戦闘には火力が足りないのだ。

なので、単体でもGファルコンDXの収納形態に迫る機動力と上回る運動性能を活かして、迎撃機の対処に回るのは必然といえよう。

ドメル司令はいままでの戦闘でその実力を示して来たアキトのGファルコンDXを敵艦隊の攻撃部隊に編入させた。そして進の推薦でフォロー役として月臣とエアマスターバーストが追加されて、現状に至っている。

言語の問題に関しては、ルリのいままでの努力に加え、ドメルがヤマトを理解すべく独自に行っていた成果が合わさったことで、まったく問題にもなっていない。

両者の間には確たる信頼関係が築かれていないので、その連携はグクシヤクしたものではあったが、部隊行動を取るのに必要なコミュニケーションが確立できただけ、ありがたかった。

「――迎撃機の出撃を確認した！ 全機、作戦どおりに行動開始だ！」
レーダー反応を確認したゲットーの指示で、パツとガミラス・ヤマト攻撃部隊が散開する。

月臣とDMF-3の編隊は、ほとんど同じタイミングで増速。迎撃に出てきたイモムシ型戦闘機の編隊と相対した。

突出して会敵したエアマスターは、機首のノーズビームキャノンから巨大なビーム弾を、翼部のブースタービームキャノンから小型ビーム弾を撃ち込みながら突撃する。両腕にマウントされたビームライフルは敢えて使わない。

ガミラスのDMF-3もエアマスターに劣らない速度で敵航空編隊に突撃。主翼に内蔵された大口徑ビーム機関砲――パルスガンを発射しながら突っ込む。合わせて主翼に懸架された対空ミサイルもばら撒き、敵の編隊行動を妨げ攻撃部隊を通す間隙を生み出す。

そうして生まれたわずかな隙をGファルコンDX、ガミラスの爆撃機と雷撃機であるDMB-87とDMT-97が、見かけに反したアクロバティックな機動で必死に潜り抜けていく。

それでも全機が無事抜けること叶わず、何機かが被弾して煙を吹き、速度を鈍らせる。だが脱落はいない。辛うじて、だが。

エアマスター含む戦闘機部隊と交戦状態に突入しながらも、何機かが反転して追撃しようとしている。

「やらせん！」

それを見た月臣は素早く機体を人型のノーマルモードに変形、マニピュレーターで改めて保持し直した軽量型マスターライフルを、追撃に転じようとした敵機に向けて発射する。

両手で腰溜めに構えたバスターライフルから放たれたビーム弾は、人型特有の安定感と細やかな照準によって次々と敵機のエンジン部に突き刺さっていく。

単発の火力はダブルエックスやエックスが使うライフルに劣るが、

その分速射性に優れている。

エアマスターの倍以上の大きさを誇るイモムシ型戦闘機といえど、機関部に四発ものビーム弾を連続して叩き込まれては一溜りもない。機関部が爆発して機体の後ろ半分が吹き飛び、誘爆して武装している前半分も砕け散る。

さらに頭部バルカンも連射して敵の回避運動を誘いながら、両手のバスターライフルを矢継ぎ早に撃ち込んで敵機の数減らすべく攻撃を続けた。

ファイターモードに変形。敵陣に突っ込みながらバスターライフル以外の火器を全力で撃ち込む。敵の只中で素早く再変形。両手に握らせたバスターライフルを左右に、上下に、同じ方向にと撃ち分ける。

コスモタイガー隊の中でも一番の腕前と称された月臣だからこそできる、流れるような戦闘スタイル。

攻撃部隊への追撃は許さんと、慣らしもろくに終わっていない機体だということすら頭から追い出し、アクロバティックに、優雅に、そして苛烈に敵戦闘機部隊に挑む。

エアマスターの猛攻に勢いづいたガミラス戦闘機部隊も続き、敵と味方が入り混じる大空中戦へと移行していった。

「……マジかよ。ヤマトの奴ら、いったいどこからあんな機体を……！」

DMB―87を操りながら、バーガーはヤマトの新型機——エアマスターと言うらしい——の戦闘能力に肝を冷やす。

いまは味方だからいいが、これからあんなのも相手にしなければならぬのかと思うと、気が重たくなる。

というかおかしいだろ。戦艦内部の工作設備であんなものを一から建造できるなんて！

バーガーは自分の常識がガラガラと音を立てて崩れていく錯覚を覚えた。

「爆撃機部隊の隊長、突っ込むぞ」

「お、おうー」

並走して飛行している戦略砲持ちの人型から——ダブルエックスと言わらしい——の通信に、どもりながら応じる。

……本当は七色星団の決戦で雪辱を果たしてやるつもりだった機体だ。それがいまは僚機とは……。

件のダブルエックスは、背中に合体している戦闘機のようなパーツに安定翼を追加、その上下に三角柱のミサイルや円筒状の魚雷と思われる装備を追加している。

それだけではない——自分たちが来る前からバランス基地を護るために航空戦を展開していたとは思えないほど、機体が綺麗だった。

細かい損傷はいくらもある。だが致命的と言える損傷は確認できない。手足の一本どころかアンテナ一本折れていない。

……つくづく化け物染みた機体だ。

その戦いを違った立場で分析できるのは今後を考えるとありがたい、とポジティブに考えるべきだろうか——今後があればだが。

バーガーは頭を振って気分を入れ替え、愛機を巧みに操って弾幕の中を軽やかに舞い、敵艦目掛けて突き進んでいく。爆装されたDMB—87はDMF—3に比べて重く鈍いが、DMT—97に比べると動きは軽い。

黒色艦隊の艦載機も図体が大きい割にこちらに追従できるだけの機動性と運動性能を持つが、技量はどうかやらバーガーたちガミラス陣営やヤマトのパイロットが勝るようだ。

まあ当然だろう。

こちらは対ヤマト選抜メンバーの集まり。向こうは母国の存亡を背負った先鋭揃い。

そう簡単には下せはしまい。

そんなことを思いながら、バーガーは円盤型の敵艦に向かって突き進む。

まずは艦隊からの砲撃を遮る邪魔な艦から始末する。

隣にはダブルエックスの姿もある。どうやらバーガーが狙っている艦の隣を始末するつものようだ。

その様子を視界の端に捉えながら、バーガーは最良のタイミングで機首の八連装ミサイルランチャー、翼下に懸架した大型爆弾二発と中型爆弾を胴体格納分含めて一六発、DMB―87の全火力を容赦なく叩きつけた。

僚機たちもそれに倣い、各々の標的に食らい付いていく。

バーガーの機体だけでは若干火力不足だったが、僚機の攻撃も加えることで撃沈に成功。思わず唇の端に笑みが浮かぶ。

——ふと気になったので隣のダブルエックスに注意を払えば、そつちはそつちで懸架したミサイルと魚雷を放出したあと人型に変形して急接近、左手で握ったビームを上下に出力した剣か弓のような武器でフィールドごと装甲を力技で切り裂き、機関部と思われる場所に容赦なく搭載されたミサイルや火砲を至近距離から撃ち込んで、単機でありながら敵艦を沈めている。

……いやいやいやいや、おかしいだろあの火力。

こつちは数機がかりだったのに単機とか。

……あれが、過去にイスカンドルが生み出した星間戦争に耐えうる人型機動兵器——ガンダムの実力。

(こりやあもう、人型だからとバカにできねえ。ガミラスも本格的に研究しなけりやならないかもしれないねえ……)

そんな感想を抱きながら、目標を撃沈できたことに安堵。

(……射線さえ確保すれば、あのヤマトの長射程砲が——)

バーガーの思考を読んだのか、と疑いたくなるほどタイミングよくヤマトからの警告が飛び込んできた。急速離脱。直後に放たれた重力衝撃波(ということが解析で判明している)が九発、バーガーとダブルエックスが沈めた敵艦の残骸の隙間を縫う精密射撃でその先にいた空母一隻に突き刺さり、あつけないほど簡単に打ち砕いた。

装甲が薄い傾向がある空母型とはいえ、全長八〇〇メートルにも及ぶ大型艦艇をあっさり沈めてみせたその火力。正直肝が冷える思いである。

だがこれでまた一隻、空母を減らした。少しは航空攻撃が緩くなつてくれれば……。

そう考えながら、弾を撃ち切って武装が後方迎撃用のパルスビーム機銃のみとなった機体を翻して撤退に移る。

弾切れになった爆撃機など、的にしかならない。

だがやはり簡単には見逃してはもらえない。戦闘機部隊の妨害を振り切って追撃してきたイモムシ型戦闘機の攻撃に晒され、一機、また一機と味方機が撃ち落とされていく。

「くそっ！ こんなところじゃ死ねえ！」

バーガーも後方に食い付いた敵機にパルスビーム機銃で牽制しつつ逃がっているが、やたらとフレキシブルな触腕型砲台からビームが次々と撃ちかけられる。

このままでは墜とされる！ そう肝を冷やした瞬間、横から撃ちかけられたビームの直撃を受けて敵機が爆発四散する。

——ダブルエックスの援護だ。

「大丈夫か、隊長さん」

「……助かった、礼を言うぜ」

今度会ったら絶対報復すると誓った相手に救われるとは……。

正直気分が悪いがバーガーも戦士の矜持ぐらいは持っている。礼だけは欠かせない。

「殿は任せて下がってくれ。こつちもミサイルは撃ち尽くしたし、ライフルのエネルギーもいまので最後だけど、武装はまだいくつか残ってる。迎撃機の相手くらいなら問題ない」

そう告げるパイロットにバーガーも頷き、渋々ではあるが殿を任せて撤退を継続する判断を下した。

（対艦攻撃装備と対空戦闘装備を両立して、どっちにもシームレスに対応可能だなんて……悪夢みたいな機体だぜ。パイロットの腕もいし判断も的確。味方に付けりや、たしかに頼もしいと言えるが……）

殿に就いたダブルエックスは、左手のショートシールドに固定していた（開戦時から姿を見る人型と同じタイプの）ライフルを右手に掴み取り、三点射で群がる敵機を牽制、胸部に合体した戦闘機の機首を思わせるパーツのビーム機関砲、背中のグラビティブラストも散弾

で次々と発射、帰還中の攻撃機部隊への被害を抑えるべく奮戦している。

そこにやや遅れながらも戦闘機部隊も合流、殿を務めてくれた。

やはり一際活躍が目立つのはダブルエックスとエアマスター。被弾の痕こそ見受けられるがどちらの機体も装甲表面で防げているらしく、動きがまったく鈍っていない。

(やっぱり悪夢だ。ガンダム——絶対忘れられねえ……)

「……ううむ。予想よりも手強いな」

あまり見かけない人型機動兵器の思わぬ善戦に、データーは苛立ちがさらに増すと同時に、これ以上の交戦はいたずらに戦力を消耗するだけだと強く感じた。

「——作業の進展は？」

「はっ。システムへの侵入に成功、まもなくプログラムの改変も終わります」

部下に問い質すとすぐに待ち望んだ答えが返ってきた。よし、と頷くとデーターは全艦に指令を出した。

「艦載機を收容せよ！ 各艦、順次バランス星宇宙域からワープで退却を開始しろ！」

これで作戦は成功した。鹵獲品のテストも兼ねた下準備は終了したも同然。

あとは艦隊司令——メルダースの擁するマゼラン方面艦隊に合流し、ガミラスを屈服させるだけだ。ついでにイスカンドルも制圧すれば、さらなる戦果を得られるだろう。

連中の星がああの移動性ブラックホールに飲まれるまでまだ数カ月ある。悠長には構えていられないが、それだけあれば必要量のガミラシウムとイスカンドリウム——それにもう一つ、かけがえのないものが手に入る。

移民計画の重要拠点であろうバランス星基地を攻撃することで連中

の焦りを生み、浮足立たせることができたはず。

そのわずかな隙が、こちらの勝利を不動のものとするのだ。

「プログラム改変完了。制御はこちらのものになりました」

「——よし。ガミラスの人口太陽を起動、敵艦隊目掛けて直進させろ。観測機器を最大稼働させるのも忘れるな。ヤマトが例のタキオン波動収束砲とやらを使うのを見届け、解析する。あれがわが帝国にとつてどの程度の意味合いを持つのかを、ここではつきりとさせる！」

わざわざこの場に飛び込んで来てガミラスと共闘したヤマトだ。

おそらく武力によってガミラスの侵略を跳ね除けるのに限界を感じて、講和に持ち込むことを考えたに違いない。

だからこの状況を——第三勢力の手によってガミラスの危機に味方として乱入し、その意志を示した——といったところだろう。

超兵器を持ちながらなんと弱気なことだと思うが、おかげでこのような機会を設けることができた。

連中もどうやらイスカンドルを目指しているようだし、その制圧を考えているわれわれと衝突するは必然。

最悪最大限に譲歩して、こちらの邪魔をしない代わりに連中の行動の一切を黙認してもいいが、あれだけの艦、見過ごすのはあまりにも危険だ。

——あのタキオン波動収束砲という大砲がどうしても気になる。第六感が囁くのだ。あれを放置することは、わが帝国の足元を掬われるに等しい、と。

データーは長年の感がそう訴えるのを聞き逃さなかった。

そのデーターが見守る中、モニターに映っていた巨大なプラネタリウムのプロジェクターのような建造物の穴から高温のプラズマが噴出。

サイズこそ小さいがまごうことなき恒星の姿を作り出して、バランス基地とその防衛艦隊目掛けて緩やかに動き始めた——。

その頃ヤマトの第一艦橋は、突如として飛び込んで来たユリカの警告に困惑していた。

敵艦隊はどんどんワープで戦闘宙域から離脱を始めていて、ようやく戦闘に一段落着くと安堵していた矢先だったので、なおさらだった。

「太陽？　太陽が迫ってくるんですか、艦長？」

「うん。たぶん、非常に近い未来のことだと思う。それを夢って形で見たみたいなの」

ウインドウに映るユリカの姿に、進と真田は顔を見合わせた後ドメル司令に問い合わせることにした。

近くに恒星の影はないのだが、進はなんとなくその正体を察した。

と、その前にユリカを下げさせなければ。

艦長代理が指揮を執っているのに艦長が顔を出すと混乱を招くかもしれないから、いまはまだユリカの姿を晒すべきではないと訴える

「そうだね。私、パジャマのままだからこのまま話すのは失礼だもんね。おめかししてから出直さないと礼儀がなってるって思われちゃう。さっすが進！　礼儀も弁えた成長にお母さん感激だよ！——じゃ、着替えてお化粧するね」

と言って通信を切った。

——違う、そうじゃない。

激しく脱力して落とした肩を持ち上げつつ、進はドメル司令を呼び出してこの詳細を確かめるべく行動を開始——しようとしたとき、向こうからこちらに通信が送られてきた。

「古代艦長代理、まずいいことになった」

深刻そうな表情のドメルに進は悟った。ユリカの警告は一足遅かったのだと。

「わがガミラスがバランス星でテスト運用していた、人口太陽のコントロールを奪われた……どうやら、基地もろともわれらを飲み込ませるつもりようだ。あれの移動速度を考えると、ワープでの撤退は現実的ではない。艦隊が密集し過ぎていてワープインに支障をきたして

しまう。それに、民間船の足では、到底逃げ切れないだろう……」

「人口太陽？——まさか、ガミラスが地球を解凍するための？」

「そのとおりです。包み隠さずお話ししますと、あれは寒冷化により凍結した地球を解凍し、ガミラスの早期移住を実現するために開発されたものです。地球を有する太陽系に運び込む前にバランスでテストを繰り返し、完成後に輸送する手筈になっていました」

やはりか。ガミラスはなんの考えもなしに地球をあのような状況に追い込んだわけではなかった。

地表を荒廃させるのが人類死滅への早道であるのは自明だが、将来的な移住を考慮するのであれば、荒廃の程度を考えないと行く当てを失くしてしまう。

ガミラスは星を凍結に持ち込んでも解凍する術を持っていた。

だからこそ、地表への被害を限界まで抑え、ある程度は本来地球が持っている生態系の情報を保存でき（凍結で保存された地球全土の生物のDNAを採取して、クローニングすることもできるのかもしれない）、場合によっては人類が築いた文明の残りを活用することにより素早く文明の復興を可能とする——そういう算段だったのだろう。

はたして地表に大量の遊星爆弾を墜とされ、放射能汚染で赤茶けた星に成り果てた——ヤマト出生世界の地球とどちらがマシだったのだろうか。

ついそんな比較が頭を過った。

「どうやら連中は、あなたがたと同じくハッキング端末を基地に打ち込み、制御装置に干渉したようです。残念ながら、安全に停止する手段はもはやありません」

あ、ばれてた。

「——古代艦長代理。あなたがたの決意に水を差すことになってしまいました……本当に申し訳なく思う。……だが——だが、撃つて欲しい。タキオン波動収束砲で……人口太陽を」

静かに、だが申し訳なささと苦渋さを多分に含んだ声色でドメルは告げた。

波動砲で人口太陽を撃て、と。

「……」

ユリカから警告を受けたときには、すでに考えていた。……波動砲しかない。

もともとこういつた状況を想定して、すぐにも解放できるように封じてあるのだから、問題なく使用できる。

しかし。

「おそらく敵の狙いは、タキオン波動収束砲のデータを得ることにあると推測されます。艦隊に撃たれるのを避けつつ、データを収集するためにタキオン波動収束砲でしか破壊が望めない人口太陽のコントロールを奪ったのだと、私は解釈しています。……その結果を見て、ヤマトを手に入れるか破壊するかかの判断を下すつもりなのでしょう」

「——たしかに連中と遭遇したとき、波動砲に興味があるという言葉を聞きました。ヤマトを無条件に差し出せとも。だとすれば——」

「撃たなければ、ヤマトは逃げられても艦隊の大半と基地は壊滅。当然、民間船も……撃てば、敵にその威力を曝け出すことになり、解析され、今後の戦略に不利が生じる。どちらを選んでも、得をするのは敵だけ。……この状況に持ち込まれた瞬間、われわれの選択肢は奪われてしまったのです」

ドメルの冷静な言葉に、ギリツと歯を噛む。

データを解析するのはガミラスも同じ。

つまり、このあとガミラスとの和解が成立できない——またはガミラス側がカスケードブラックホールの窮地を逃れるためだけにヤマトを利用したとしたら……もうヤマトは地球を救えなくなる。

だが！

（俺たちは——俺たちはなんのためにこの場に来た？ 地球を救うため、最善と思えることをするために来たんじゃないのか？ ここまでいかなる理由であっても波動砲を撃たなければ、俺たちはなんのために戦っているんだ……！）

正直迷いがある。

波動砲をわざわざ封印したのは、この絶大な威力を封じることによって悟を見せるため。意思を示すためだった。

たしかにいまは非常事態。この状況を覆せるのは——トランジション波動砲だけだ。頭では理解している。

しかし安易に解除できる封印だと知れたら、ドメル司令はともかく、ガミラス上層部に受けが悪いのではないだろうか……。それで和平への道が開けなかったりしたら俺たちは——。

——古代——

突然進の頭に、いままで聞いたことのない重々しい声が響く。

——古代、覚悟を示せ。おまえたちの覚悟を、ガミラスに——
進はドメルと通信中だということも忘れて後ろを振り返る。

——そこにあるのは、いや、いたのは初代ヤマト艦長——沖田十三のレリーフ。

(沖田艦長——……あなたはまだ、ここにいられるのですか？
ずつとずつと、俺たちのことを見守ってくれていたのですか？)

レリーフの沖田はなにも言わない。幻聴だったのかもしれない。
しかし進の目には、レリーフに刻み込まれた沖田の表情が柔らかく微笑んだようにも見えた。

——それだけで十分だった。

ヤマトの在り方を決定付けた父——沖田に背を押されて、進は前を振り返った。

(沖田艦長……俺は——俺たちは！ 覚悟を示します！)

決心がついた。

俺たちは俺たちの道を——母ユリカから学んだ、「自分らしくある」
生き方を貫く！

もう、迷いはない！

「……封印解除だ！ トランジション波動砲用意！ 目標、人口太陽！」

第二十一話 未来を切り開け！ 決意の波動砲！ Bパート

進の決断を、クルーは後押しした。

「封印プラグ強制排除！」

真田がキーボードを叩いて暗号コードを撃ち込む。

波動砲口を完全に密閉していたオレンジ色の蓋の周囲に小さな爆発が連続して起こり、最後にひと際大きな爆発が砲口内部で発生、反動でプラグが外れてヤマトの前方にゆっくりと回転しながら慣性で漂い始める。

……そして、奥のレンズシャッター上の装甲シャッターがゆるりと展開された。

「ルリさん、波動砲で人口太陽を破壊するとして、それによる被害がどの程度のものになるのか計算してくれ」

「了解」

進の要望にルリもすぐに応じる。

「人口太陽の構造データを提供します——古代艦長代理、決断に感謝します」

ガミラス式の敬礼と共に言葉とデータを送ってくれたドメル。進もヤマト式の敬礼を持って応える。

「——解析結果が出ました。破壊するだけならコア部分に波動砲を一発撃ち込めば事足ります。が、人口太陽自体の崩壊を波動砲の作用が助長して——周囲に高温のプラズマと重力衝撃波をまき散らし、後方の基地はもちろん、艦隊や民間船への甚大な被害が懸念されます。先に周囲のプラズマを波動砲で剥ぎ取ることも検討しましたが、収束率の高いヤマトの波動砲では効果的に剥ぎ取れません。せめて、波動砲のエネルギーで全体を飲み込んで押し流せれば、被害を抑えられるのですが……」

ルリの計算結果に渋い顔になってしまった。

まさか波動砲が艦隊決戦兵器として辛うじて機能している性質――

—なんらかの物体を破壊する際にタキオンバースト波動流が四散し周囲に破壊作用をばら撒いてしまうという難点が、重く押し掛かってくる。

それに、人口太陽のプラズマが生み出す表面とでも形容すべき部分の直径は、小惑星クラス。

——収束型の波動砲では、照射半径がまったく足りない。

(考えろ……なにか……なにか策があるはずだ。破壊によって持たされる被害を相殺するなにかが……)

必死に頭を捻る。時間はあまり残されていない。

だがなにかあるはずだ。こういった局面に役立ちそうなアイデアが。いままでの航海の中に——経験の中に。

進の脳裏に波動砲に関連した様々な出来事、情報が駆け巡り——

「……そうだ！ 過去の戦訓を活かして照射範囲を拡大すればいいんだ！」

閃いた。そうだ、あれがあつた！

「なぜなにナデシコの第二回放送を思い出してくれ！ 『過去にヤマトの波動砲は、敵大型ミサイルを飲み込んで破壊したとき、その爆発で照射範囲が拡大した事例がある』って説明されていただろう？ あれはおそらく艦長が見たヤマトの過去の記憶——つまり実際にあつたことだ！ だったら、それを意図的に引き起こしてやれば照射範囲を拡大できるはずだ！」

進お兄さんとして収録に参加した経験がここで活きるとは！

たしかファイルによれば、そのときはヤマトの四分の一ほどの大きさがあつた超大型ミサイル複数によって、その現象が引き起こされていたらしい。

ヤマトには当然そんな大型ミサイルは搭載されていないし、ガミラスとてすぐには用意できないだろう。

だが、ヤマトにはそれに比肩しうる威力のミサイルを搭載した支援艦を搭載している！

「そういうことか……！ 信濃の波動エネルギー弾道弾を波動砲の軸

線上に配置して起爆させれば、波動砲をその地点から広域に拡大させることができるはずだ！　予め波動砲の収束率を限界まで下げた状態でそれを起こせば、あの人口太陽を飲み込める規模にまでエネルギーを拡大させられる可能性は——！　ルリ君！」

「再計算開始！……結果が出ました。七八パーセントの確率でエネルギーが拡大して広域に広がります。ただ、乱暴な手段でエネルギーを拡大させるため、波動砲一発分ではエネルギーが不足です。計算では弾道弾二四発で拡大を狙い、波動砲二発分のエネルギーを一度に放出できれば完璧なのですが……」

「全弾発射システムを使った場合、ほぼ強制的に六基分のエネルギーを使ってしまう。残念ですが、現時点のシステムでは必要分のエネルギーを供給して射撃できるようなには造られていません」

元来がカスケードブラックホール破壊のために構築された、応急的なシステム。そこまで器用な運用には対応していない。

エンジンを停止しただけでは駄目だ。エンジン内に残留するエネルギーが使用されてしまう構造になっている。

モード・ゲキガンフレアのようにタキオンバースト波動流にまで加工していなければ、ある程度の調節も可能なのだが……。

「ならば、あえて四発無駄撃ちしてエネルギーを減らしたあと、残った炉心だけで全弾発射システムを構築するのは駄目か？」

ゴートの思わぬ閃きにルリとラピスが早速検証すると、成功率が意外と高いことが判明した。

「よし！　波動砲四発を無駄撃ちしてから、残ったエネルギーを拡大放射して人口太陽を破壊する！——ドメル司令、それでよろしいですか？」

「異存はありません。念のため、艦隊をヤマトの上下左右に広げ、最大出力でフィールドを広域展開して後方の艦と基地の盾となるべく配置しましょう。——ヤマトの成功を祈ります」

ヤマトの邪魔をしないためだろう、ドメルは敬礼を送った直後に通信を切斷、メインパネルから姿を消した。

ドメルの姿が消えた後、進は改めて波動砲の発射指示を出す。

「トランジション波動砲用意！　すぐに読ん発を無駄撃ちして残った二発を同時射撃して対応する！　信濃の発進準備も急げ！」

今回のような防衛戦や乱戦では使い道がないと埃を被っていた信濃に、思わぬ出番が回ってきた。

さつそく大介は艦の操縦をハリに任せ、信濃に乗り込むべく席を立った。

「……艦長代理。俺は波動砲の使用に不慣れだ。発射はそちらに任せたほうがいいと思うが」

守の進言に少し悩んでから、頷く。

「艦長代理、俺も島に同行して波動エネルギー弾道弾の展開を補佐する。……なに、一緒に戦闘指揮をしてきた仲だ。おまえのタイミングに合わせる自信はあるぞ」

自信たつぷりに胸を張るゴートの言葉にちよつぷり感動しながら、進は信濃を親友と少し前までの副官に任せた。

「艦首を人口太陽に向けます」

操縦桿を引き継いだハリがヤマトの艦首を人口太陽の方向に向ける。

人口太陽はすさまじいスピードでこちらに向かってくる。この様子だと、安全圏で破壊する猶予はほんの二分程度、五分もしない内にこちらを飲み込んでしまうだろう。

「波動相転移エンジン、出力一二〇パーセントへ！」

「了解！　出力一二〇パーセントへ！」

波動砲発射に備えて、エンジンの出力が上げられていく。エンジンの稼働音が一際高くなり、生み出される振動も激しくなる。

「フライホイール始動！」

それまで単にエンジンの回転を円滑にするためにしか機能していなかったフライホイールが、エンジンの再始動を円滑にするための補助エネルギーを溜め込み始め、淡い発光が徐々に強い発光へと移行していく。

出航後数回に渡るエンジンの再調整でその機能は洗礼されつつある。真の力を発揮するには至っていないとはいえ、出航当時よりも格

段に進歩しているのだ。

「信濃、発進準備完了！」

「ハッチ解放！・信濃発進だ！」

大介から報告が来るなり、すぐに信濃の格納庫に併設された管制室に連絡してハッチを解放させる。

ヤマト艦首下部のハッチが一段下がったあと観音開きに開く。

中から出番に恵まれなかった信濃がゆっくりとその姿を現し、安定翼を伸ばしてブースターを点火、猛加速してヤマトの正面下方に向かって飛び去って行く。

——これで波動砲の軸線から外れつつ弾道弾を発射する準備が整う。

「島さん、ゴートさん、波動エネルギー弾道弾はヤマトから一〇キロの地点で交差するように発射してください。起爆そのものは波動砲に巻き込まれるだけで大丈夫ですから、信濃が巻き込まれない距離から正確に交差させることだけに専念すればOKです」

額に汗を浮かべたルリがそう指示すると、両者から「了解！」と威勢のいい声が返ってきた。

安全を期すなら事前に波動砲の軸線上に波動エネルギー弾道弾だけを放出して留めておけばよいのだが、今回は事前に四発無駄撃ちしなければならぬ。その余波で起爆してしまわないように直前まで信濃で守らなければならないことが、難度を上げていた。

余波に巻き込まれることがあったら信濃は木っ端微塵。それ以前に上手くエネルギーが拡散しなかったら人口太陽崩壊の余波に巻き込まれてしまう。

あまりにも急な作戦なので万全とは言い難いのが心苦しい。だが、いまはできることをやるしかない。

「安全装置解除、ターゲットスコープオープン！」

「操舵を艦長席に委譲します」

進は艦長席のコンソールを操作、正面のモニターが奥に倒れて中から出現したスコープ付きの発射装置を両手でしっかりと掴む。

発射装置の上に取り付けられた二枚重ねのターゲットスコープに

は、猛進してくる人口太陽の姿が映し出されている。

最初の四発は意図的に外さなければならぬ。進は意図的にヤマトの艦首を人口太陽から右にずらす。

「出力二二〇パーセントに到達。四連射、準備完了」

ラピスの報告に頷くと、ジュンにガミラス艦に向けて、エリナに艦内に向けて波動砲発射に伴う警告を発するよう指示する。

「発射一五秒前！ 総員対ショック防御！」

戦闘中のヤマトの窓にはすべて防御シャッターが下ろされている。閃光防御は必要ない。

艦長席用の発射装置を握るのは二度目だが、戦闘指揮席の物とは違う重圧を感じる。

（……沖田さん、ありがとうございます。未熟な俺の、背を押してくれて）

進は力強く目の前の発射装置を両手で掴む。

ターゲットスコープには、ヤマトの艦橋測距儀が捉えた人口太陽の姿が映し出されている。

フィルターを通した姿は、まるで生き物のようにプラズマの炎を振り乱しながらこちらに突き進んでくる、物の怪か。

「二〇……九……」

カウンタダウンが進む。だが不思議と緊張はしていなかった。ただ悠然と、成すべきことを成す。

「六……五……」

（俺は、沖田さんとユリカさんに恥じないよう、この仕事をやり遂げて見せます）

「三……二……」

死してなお、宇宙を超えてなお、進に言葉を——父の優しさを示してくれた沖田艦長に感謝しながら、照準を調整。

「……」

（俺は、沖田さんが育て、ユリカさんが受け継いだ——宇宙戦艦ヤマトの指揮官だ！）

力強い想いと共に引き金を引く。

六連炉心が突入ボルトに激突して、莫大なエネルギーが波動砲収束装置に流し込まれる。

そこで高圧・高エネルギーのタキオンバースト波動流へと至った波動エネルギーがライフリンググチューブ内を駆け巡り、最終収束装置を通過、凄まじい光芒と共に艦首の砲口——ヤマトのシンボルというべき場所から放出される。

最大まで収束率を下げていたので、その奔流はいつもよりも倍近く太くなっていた。

一発、二発、三発、四発。

炉心の頂点を入れ替えながら四度、突入ボルトに六連炉心が激突してエネルギーを流し込む。

放たれた波動砲の光芒は、人口太陽を大きく右に反れた宇宙空間を突き進んで遥か彼方で減衰して宇宙に溶け行く。

「波動砲、全弾発射システムのプロテクト解除！ 全弾発射システムを構築します！」

ラピスは四発分のエネルギーを撃ち切ったことを確認した後、予め施されていたプロテクトを機関長権限で解除して全弾発射システム——普通に使ったら反動でヤマトが砕けかねない、未完の最終兵器の安全装置を解除する。

六連炉心の内部回路が切り替えられ、モード・ゲキガンフレアと同じように全炉心直結状態になった。エネルギーが突入ボルトから洩れて機関室内に漏洩する危険性から、スーパーチャージャーの側面の溝に沿って、ハニカム状の補強が入った防火扉が天井から降りてくる。

防火扉が降り切る前に機関班一同は機関室の後部——ヤマト誕生当時から改修を重ねて使われているという波動炉心側に退避する。

今回はカスケードブランクホール対策の要となる六発分ではなく二発分での発射。本来の三分の一程度の負荷になるから問題なく発射できるはずだが、それでも普段の倍の負担が掛かる。

機関士の一部からは「ヤマトの能力が過去に比べてインフレしてるせいかな、感覚が可笑しくなりそう」と漏らしているが、それが真つ当

な反応であろう。

「よし、四連射を確認した。ゴートさん、頼みます」
「うむ。任せてもらおう」

波動砲の余波に巻き込まれないように距離を取りつつ、波動エネルギー弾道弾の発射予定ポイントで待機していた信濃が波動エネルギー弾道弾の発射準備を整える。

ゴートはルリが計算して出してくれたポイントを入力し、発射装置の安全装置を外した。

信濃のVLSのハッチが開く。中からヤマトの危機を何度か救ってくれた波動エネルギー弾道弾の姿が覗く。

発射レバーに手を添えながら、ゴートは緊張で唾を飲みこみ喉を鳴らす。

大見得を切って出てきたが、不安なものは不安だ。仕損じれば、いまはまだ停戦もしていない敵国とはいえ、多数の民間人を犠牲にしてしまう。

ゴートの脳裏に過るのは、重ねた勝利に驕り、見殺しにした——いや、生き残るために『殺してしまった』火星の避難民たちのこと。

あの過ちを——繰り返すわけにはいかない。

ヤマトと繋がったままの通信機からは、進の声で波動砲のカウントダウンが進められている。

グローブの中の手に大量の汗が滲む。

レバーを何度も握り直し、高まる緊張に視野も狭くなるが、それでも計器から目を離さない。

進のカウントが五を数えたとき。ゴートはここぞというタイミングでレバーを引いた。

VLSからロケット噴射の尾を引いて、二四発の波動エネルギー弾道弾が一塊となって飛び出していく。

進はターゲットスコープの端にちらりと映る、波動エネルギー弾道弾の姿を捉えた。

あとはこちらがタイミングをしくじらなければ大丈夫のはずだ。

今度はしっかりと人口太陽の中心にターゲットを置き、カウントダウン。

「三……二……一……発射あっ!!」

五度目の引き金が引かれた。

六連炉心が再び突入ボルトに叩きつけられる。

通常の倍の量のエネルギーが装置内に注ぎ込まれ、タキオンバースト波動流がさらに激しく収束装置とライフレリングチューブの中を暴れ回り、さきほどまでよりもさらに激しい光芒と共に発射口から噴出する。

一回り大きくなったタキオンバースト波動流は、軌道上に割り込んできた二四発の波動エネルギー弾道弾を飲み込んだ瞬間……爆ぜた。

普段の倍もある力強い奔流は散り散りになることなく一本であり続けたが、波動砲一発分の三〇パーセントにも達する波動エネルギーの開放によって急激に広がり、そのエネルギーすらも取り込んで、より強大な奔流と化して眼前の人口太陽を軽々飲み込む規模にまで膨れ上がった。

波動エネルギー弾道弾の起爆による損失と、照射範囲の拡大で単位面積当たりの威力は通常の五分の一以下にまで落ち込んだのだが、太陽とは言え人工物。

本物の恒星には遠く及ばない。その程度のエネルギーでは抗うことはできなかつた。

人口太陽は成す術なくタキオンバースト波動流に飲み込まれ、外周のプラズマを残さず押し流され、コアも激しく変動する時空間歪曲場に飲み込まれて塵も残さず消滅した。

その内に秘めたる膨大なエネルギーすら、漏れ出すこと敵わずタキオンバースト波動流に飲み込まれ、はるか彼方に押し流されていく。

人口太陽を飲み込み、内部で爆発されたタキオンバースト波動流は、さらにその奔流を広範囲に拡大。地球の月程度なら飲み込んでしまえるような凄まじい閃光となって、宇宙の彼方に去っていった……。

ドメルは眼前で放たれたタキオン波動収束砲の威力に、改めて言葉を失っていた。

次元断層内で見たときも、それから数度の使用を観測してデータは得ていたが、人口太陽ほどのエネルギー体を容易く消滅させる威力を見せつけられては、驚くなどというほうが無理というもの。

——余波を受け止めるべく備えていた用意も無駄と終わったという現実が、それを後押しする。

(やはり、ヤマトのタキオン波動収束砲の制限は六発まで。予想はしていたが、艦隊を丸ごと飲み込むような広範囲放射は通常できないものだったか……火急の事態とはいえ、それらの欠点すらわれらに……)

ドメルはヤマトの誠実さに感激を隠せなかった。

地球を救うだけなら、バランスを見捨ててよかつたのである。

それなのに加害者であるガミラスのためにその身を挺して戦い、手の内をさらけ出すような真似までして守り抜いてくれた。

その背中の、なんと広く、まぶしいことか。

これに応えられねば誇りもなにもない。すぐにでもデスラー総統にすべてを伝え、ヤマトの誠意に応えねばならない。

総統ならきつとわかってくれる。ヤマトと手を取り合ってくれる。

ヤマト一隻の振る舞いで地球のすべてを理解したと言い切るつもりはないが、彼らもわれらと変わらないメンタリテイを持ち、ガミラスにも勝るとも劣らない気高さを見せてくれた。

ならば、文明の遅れた野蛮人などに見下すべきではない。

それにその威力を眼前で見て確信を持てた。あの砲ならガミラス本星を飲み込まんとしているカスケードブラックホール——次元転移装置を破壊できる。

彼らはきつとイスカンドルのためにもそうするだろう。となれば、ヤマトを生かせば必ずガミラスは恩恵を得られる。

母なる母星を捨てずに済むのだ。

ドメルは改めて全軍にヤマトに対する一切の手出しを禁止する命令を出すと、まずはデスラー総統に一報を入れるべきとし、長距離通信の準備を始めるべく通信室へと足早に移動した。

デスラーはバラン星襲撃の報を受ける直前まで、自身の新たな座乗艦となる新型艦の視察に赴いていた。

ガミラス本星がカスケードブラックホールに飲み込まれるまであと数カ月。

移民後の政府再建のための準備もそうだが、自身が先に立って民族を導くために必要な力の象徴も欠かすことができない。

それにデスラーはヤマトとの最終決戦があるとすれば、その矢面に立つのは自分だと思っていた。

ヤマトが見込みどおりの存在なら、たとえ報復や復讐といった感情を捨てられずとも、発端となった指導者である自分を討ち取りさえすれば、それで矛先を納めてくれるだろう。

つまり移民船団を護る戦力を温存するためにも、ヤマトと最後の決戦を挑むのはこのデスラーが乗る艦一隻で行わなければならない。

もちろんこれからが大変なガミラスを見捨てるに等しい行動であるとは、重々理解している。

しかしデスラーが倒れば、ヒスもタランもヤマトからは——地球からは手を引く。そうすれば、あの強大な力がガミラスに向けられることは……しばらくはない。戦後復興した地球がこちらを探し当てて報復でも企てない限りは、安泰だ。

ならばこそ、ドメルが敗れたとしても総力戦を演じず一対一の戦いを挑み、勝てればそれまで、負けたとしてもデスラーの命で満足して貰えるように誘導するしかない。

デスラーは眼下で最終調整段階に入った——デウスーラと名付けた自らの新しい座乗艦を見下ろす。

高貴な蒼で塗装された艦体は、ガミラスの艦艇でも二番目に大きい六三八メートルにも達している。

最大の特徴は艦首に搭載されたガミラス製タキオン波動収束砲――通称デスラー砲。

デスラー砲は時短のため、工廠で完成形になった試作品をそのまま搭載できるように手配した。

加えてこの艦は移動総統府としても機能するように建造されている。

もともとデスラーの移動は総統府としての機能を有している脱出艇によるものと想定されていたが、所詮は脱出艇。性能は物足りない。

そこで考案されたのが脱出艇を『コアシップ』として外装パーツを着せ、一隻の大型戦闘艦として完成させるという発想だったのだ。

結果としてガミラスでも最大級のサイズと戦闘能力を秘めた、最強の艦が誕生したわけだが……。

「総統のご要望どおり、デスラー砲の搭載にも成功し、コアシップと艦体の出力を組み合わせることで計算上はヤマトのタキオン波動収束砲二発分の威力を発揮できます」

工廠の管理者を供に付け、艦の説明を受けながら内部を案内される。

作業のほとんどは完了しているので雑多な印象はない。

脱出艇そのままの艦橋やデスラーの個室は、品を損なわない程度に装飾されていて、ガミラスの総統の威厳をこれ以上なく引き立てられる。

艦橋後部中央にはデスラーが腰を下ろすための立派な椅子も用意されていて、普段は床に収納されているが指揮卓も用意されている。デスラーが過不足なく艦隊を指揮できるようにとの配慮だ。

デスラー砲の搭載に伴って艦橋に追加された発射装置は機関銃を模した形状で、非使用時には床下に収納される構造だ。

左手で側面から飛び出している安全装置の解除レバーを動かし、右手でトリガーを引くことで発射される。

眼前の小モニターがターゲットスコープの役割を果たすなど、武骨なように気品を感じさせるデザインと機能性の両立に、デスラーは作

業に携わった者たちを労い称賛した。

こういう気配りも、国を統べる者には不可欠な技能である。滞りなく視察を終えた直後、バラン星が最近国境付近に出没していた黒色艦隊の仲間と思われる大艦隊に襲撃されたとの報告を受けた。険しい表情で中央司令部に飛び込み状況確認を進める中で、思いもよらぬ事態に発展していたことを知る。

——宇宙戦艦ヤマトが……あの宇宙戦艦ヤマトが、バラン星基地防衛のために力を尽くしてくれたというのだ。

報告を受けたデスラー、いや将校たちはわが耳を疑い、報告したドメルに再三問い合わせた。だがドメルは基地や艦隊の各艦、さらには自身の艦が修めた戦闘データとヤマトからの通信データ、その一切を提出してそれが真実であると述べた。

その中にはもちろん、ヤマトが敵の制御下に置かれて暴走した人口太陽をタキオン波動収束砲で消滅させたことまでもが含まれている。ヤマトの行動も驚きではあったが、同時に重要拠点であるバラン星基地を易々と陥落させてしまったドメルの失態を責める声も大きかった。

ドメルの隣に立っていたゲールも顔色が悪く、連帯責任を恐れているようでありながら、ドメルの進退を案じているようであった。

ドメルはそれに対して「すべての責任は私にあります。いかなる処罰も甘んじて受けましょう。しかし、いま一度ヤマトと交渉し、地球との共存の道を模索するべきだと進言させて頂きます」と意見を通す。

何人かの将校は憤ったが、デスラーはそれを制して問うた。

「……それが、君のヤマトに対する結論か？」

「そうです。彼らは信を置くに値しません。決して、われらが地球人に対して下した、野蛮人などという評価が適切な存在ではありません」
力強く言い切るドメルの姿勢に、デスラーは決断し告げた。

「バラン星基地陥落の事実を鑑み、ドメル将軍を銀河方面作戦司令長官の任から外す。バラン星基地司令の任もだ。副官のゲールは改めてバラン星基地司令に任命する。生き残った人員を纏めて再編を急

いでくれたまえ。——ドメル將軍は使者として宇宙戦艦ヤマトに赴き、彼らに交渉に応じる気があるかを問い質し、彼らにその気があるのであればヤマトをガミラス星ならびイスカンドル星まで案内するのだ。今後、別命あるまで宇宙戦艦ヤマトへの敵対の一切を厳禁する。それと、この戦闘でヤマトが受けた損害の回復と、物資の補給にはすべて応じることを厳命する。今回は、彼らに多大な恩があることを忘れるな」

デスラーの命令にドメルは快く、ゲールは戸惑いながら応じ、中央指令室に集まっていた将校は驚く者と妙に納得した者とで真つ二つに分かれた。

バラン星からの通信が切れると、デスラーは眼前の部下に静かに告げた。

「ガミラスの現況を鑑みるに、これ以上ヤマトとの交戦を続けるメリットはない。ましてや所属不明の国家がわがガミラスに牙を剥いているというのなら、なおさらだ。また、ヤマトにはタキオン波動収束砲が装備されている。それも、先日完成したデスラー砲の三倍の威力がある。この脅威を払拭できるのなら、交渉の価値はある」

デスラーの言葉にさきほどから納得の姿勢を示していた将校は大きく頷き、納得できていなかった将校も理解の色を示す。

「それに、ヤマトはイスカンドルとわがガミラスが置かれている状況を知っている可能性が高いとの情報も得ている。だとすれば、イスカンドルが提供したであろうあの砲の使い道の一つは……」

「——カスケードブラックホール破壊……でありましょうか」

真つ先にデスラーの言わんとすることを理解したのは、やはりタランだった。

「そうだ、タラン。ヤマトがイスカンドルに恩義を感じているのなら——イスカンドルの危機を見過ごすことはしないだろう。スターシアは侵略戦争を行っていることを理由にわれらに提供を拒んだが、ヤマトには提供している。となれば、ヤマトを指揮する者はその眼鏡に叶った人格の持ち主のはずだ。……とすれば、ヤマトは最初からこの戦いの結末としてカスケードブラックホール破壊を前提とした貸し

を理由に、講和を考えていた可能性が高い。しかし、われわれがそれに応じずあくまで戦う道を選んだのなら——」

「タキオン波動収束砲でガミラスを滅ぼすことも辞さない、ということですね、総統」

ヒスの言葉に、デスラーは神妙に頷く。

彼もヤマトと交渉するというデスラーの意向に従う姿勢を示している。

当然だろう。タランも、そして水面下ではヒスも、どちらに転んでもいいようにいろいろと準備を重ねてきたのだ。その過程で、最もガミラスにダメージが小さく済む流れは——ヤマトとの交渉による終戦だ。

仮に地球を諦めることになったとしても、あの威力をガミラスに向けられるに比べたら安い対価だった。

それにあのドメルが『信を置ける相手』と断じたのなら、一度取り決めたことを反故してまでヤマトがガミラスに攻撃することはないと考えるもいい。

問題は、地球が復興して十分な戦力を整えたあと、ヤマトとの交渉結果を『ヤマトが独断でしたこと。地球政府が従ういわれはない』と行動した場合だ。

ヤマトへの搭載を成功した以上、地球の艦は今後タキオン波動収束砲が装備されている艦艇を大量に生産するだろう。こちらも生産力では負けていないので、今後デスラー砲を搭載した親衛艦隊を構築して備えることはできなくもないのだが……。

ここまで考えて、ようやくあの戦略砲持ちの人型の存在意義も解つた。

あの機体は、カスケードブラックホールを破壊してもなおガミラスの攻撃が続いたとき、ヤマトをその猛攻から護り抜くために用意された機体だったのだ。

数の暴力を覆す絶対的な暴力として。良心の呵責を捨て去り、向かって来る脅威を機械的に排除するため。

その威力を早々に見せつけていたのも、それしか手段がなかったの

もあるだろうが、こちらに警戒させてこういった考えに誘導するための布石だったのかもしれない。

「今後の対地球戦略については詳細を考える必要があるが、これ当面はヤマトを気にせずには済むはずだ。——ヤマトにはわが帝国の民を救って貰った恩義があり、ヤマトが戦ってくれたおかげで艦隊への損失も最小限にできた。多少の譲歩をしてやったとしても、道理に反してはいまい」

デスラーにそこまで言われては、反発する者は誰もいなかった。

誰もがヤマトを恐れていたのだ。単艦でありながら度重なる罨を潜り抜け、初めてであろう宇宙の難所を幾度も潜り抜けてきた、そのタフネス。

タキオン波動収束砲の絶対的な威力も、自軍で開発に成功したことにより鮮明にわかるようになった。

その威力を一度に六度も叩きつけられたら……仮にエネルギーを使い果たして無力化したヤマトを叩く余力が残せたとしても、ガミラスも尋常ならざる被害を被る。そうなれば、新たに現れた黒色艦隊を始めとする外部勢力によって滅亡してしまうかもしれない。

その恐怖もさることながら、ヤマトの戦いと航海に対して敬意を抱いていた将も一定数あった。

今回のヤマトの行動は、そういった将の心に深く刺さった。だからこそ、この決断が通るのである。

(さて、ヤマトは当面敵ではない。いま最優先すべきは)

デスラーは対ヤマトの方針が決定するや否や、敵艦隊の目的について自身の考えを述べる。

その考えを吟味した結果、満場一致で全軍に緊急警戒態勢を命じる手筈となった。

敵艦隊の目的は、間違いない——。

(艦隊の配備が間に合えばよいのだが……)

デスラーは一抹の不安を感じずにはいらなかった。

敵は間違いない——強大だ。

ガミラス本星との通信を終えたドメルとゲールは、一つ息を吐いてから互いに向き合う。

「後始末を任せるかたちになって、申し訳なく思う。——バラン星基地のみなをよろしく頼む、ゲール司令」

申し訳なさそうであるが、どこか清々しいドメルにゲールも、

「……お任せください、ドメル將軍。短い間でしたが、あなたの副官であれたことを誇りに思います。艦隊は私に任せて、ヤマトとの交渉を成功させてください。……私が言うのもなんですが、交渉の結果が、ガミラス・地球、双方にとってよきものであらんことを、願っております」

「ありがとう、ゲール司令。成功を祈ってくれ」

敬礼を交わし合い区切りを付けた。ドメルは踵を返して連絡艇に向かう。

すでにヤマトとは話が付いている。

快くドメルを受け入れ、準備が出来次第発進する手筈だ。

（政治とは、距離を置くつもりだったのだが……人生、なにが起こるかわからないものだ）

軍人として実直に勤め上げてきたドメルにとって初めての経験だ。

だが、悪い気はしない。

それだけの相手と巡り会えた。

ゲールは、ドメルが視界から消えた後、今度は窓の外に見えるヤマトに向かって敬礼を捧げる。

ヤマトに対して思うところがないと言えば嘘になる。

ただ一度救われたくらいで手の平を返すほど軽々しい訳でもない、と思いたいが、全力を尽くしてくれたヤマトに感謝の念がないと言えれば、それも嘘であった。

そのヤマトに向かって、つい先程まで上官であったドメルを乗せた連絡艇が向かっていくのが見える。

（ドメル司令……さきほどの世辞でもなんでもない、本心でした。どうか、お気を付けて……）

互いに第一印象は最悪だったと思う。

目敏いゲールは、ドメルが司令室の調度品に不満たらたらであることはわかっていたし、入れ替えたがっていたことも知っている。

だが彼が不和を生まないためにぐっと堪えてくれたことも、あのヤマトと対峙して生きて帰って来れるように作戦を練ってくれていたことも、わかっている。

気に入らない存在なら、作戦に託けて謀殺することも、作戦失敗の責任を取らせて処刑することもできたのに、彼はそれをしなかった。

もちろんゲールにとって忠誠を捧げるのはデスラー総統ただ一人だが……。

（ドメル將軍。今度会う機会があったら、酒でも酌み交わしたいものですなあ）

ゲールは連絡艇がヤマトの格納庫に着艦するまで、敬礼を捧げた腕を下ろすことはなかった。

その頃スターシアは、通信装置の前で逡巡していた。

「……」

思い起こされるのは三年前、デスラーからタキオン波動収束砲の技術を求められたときに、拒絶したことだ。

あのときはその決断が正しいものだと思っていたが、その二年後に遙か一六万八〇〇〇光年も彼方の星——地球から救援を求められるとは考えてもいなかった。

最初はガミラスのときと同じように断るつもりだった。

だがイスカンダルが拒絶した結果、ガミラスが地球に侵略の手を伸ばしたのかもしれないと思うと、無下にはできない。

そう思つてユリカと言葉を交わす内に、彼女のことが好ましく思えたのだ。

当時のスターシアは共に暮らしていた妹サーシアを除けば、極稀にホットラインで言葉を交わすデスラー以外の人間と接する機会は無であった。

だからだろう、常識的に考えてとても無礼な手段でコンタクトを取ったユリカには、呆れを覚えながらももう少しだけ言葉を交わしたいという渴望が顔を覗かせるのを、抑えられなかった。

——彼女はとても変わっていた。

頭はとてもよく回転も速いのに、どこかずれた応答をすることがあるのがとても珍しく思えた。

彼女がイスカンドルと知るきっかけとなったという並行宇宙の宇宙戦艦——ヤマトについて語ってくれたとき、その特異性について一緒に考えると同時に……すでに地球にはそのヤマトが波動エンジンとタキオン波動収束砲をもたらしていたことを知った。

それは別宇宙の物であるのだから、この宇宙のイスカンドルが保有するそれとは別物と言えるかもしれない。だが、その破壊力はこの宇宙のイスカンドルのそれと遜色ないことが彼女との会話で窺えた。

だから彼女に問うたのだ。

本当に大丈夫なのかと。

ユリカは「大丈夫！」と、胸を張って答えた。

だからスターシアは方針を捻じ曲げてでも応える道を選んだ。

……そのことでガミラスに、デスラーに思うことがないわけではない。

どのような理由であれほかの星を侵略するなど、スターシアからすれば言語道断、到底許せることではない。

しかし、隣国の人間であり元々は一つの種族だった存在だ。

それに……スターシアとして自分の考えが絶対に正しいわけではないことは重々承知している。

この宇宙に戦いが満ち溢れているのは揺るがない事実。どれほど平和主義を唱えたとしても、相手に聞き入れる意思がなければ意味をなさないことは、スターシアとて理解している。

イスカンドルとて、かつてはそれを理由に捨てたはずの武力を取り戻して争ったのだから。

他国との国交が閉ざされて久しいイスカンドルは、この宇宙の情勢を正しく把握しているとは言い難い。が、少なくともいまイスカンドル

ルは二つの勢力から狙われている。

一つはその正体こそ杳として知れないが、何者かが送り込んできた次元転移装置。——おそらくはイスカンドルやガミラス星自体を目的とした、資源採取を目的とした行動であることだけは察しがついたが、正体を見極めるには情報が不足し過ぎている。

もう一つはガミラスの国境を侵犯し始めているという正体不明の黒色艦隊。

デスラーがわざわざその存在を教えてくれたのだから、偽の情報ではないだろう。

デスラーが隣人としてスターシアたちを気遣ってくれていることは、素直に感謝している。

同時に、彼が単なる暴君でないことの証左だと信じたい気持ちがあつた。立場上相容れないとはいえ、彼自身を嫌っているというわけではないのだから。

「……」

正直、ユリカは信じるに足る人間だと思った。

しかし状況が状況なので、スターシアと接触できていた時期から時間を経て、考えが変わってしまうことも十分考えられる。

ガミラスとて、ヤマトが発進すればその目的地がイスカンドルであることは容易に予想するであろう。

デスラーはタキオン波動収束砲のことを知っている。そして、タキオン波動収束砲とコスモリバーシステムが表裏一体の存在であることも。

ヤマトがタキオン波動収束砲を使えば、イスカンドルが支援していることはすぐに判明する。

その場合、地球とガミラスの違いとはいったいなんなのかと問われたら、スターシアには応えられる自信がない。

たしかに地球はガミラスのようにほかの星を侵略してはいないが、それはまだ彼らにその技術がなかっただけで、自らの民族内で不毛な戦いを続けていた。

そのような文明が将来的にタキオン波動収束砲を使ってほかの星

を侵略しないという保証はない。むしろタキオン波動収束砲が引き金になってしまいかもしれないのだ。

特にいまは、加害者側とはいえガミラスに対してはその力を向けない理由がない。実際ヤマトはその威力を駆使してガミラスの脅威を潜り抜けているのだろう。

スターシアがヤマトにタキオン波動収束砲——それも六連射可能な技術を提供したのは、イスカンドルでヤマトに大規模な改装を行う余力も時間もないのが一番の理由だが、その威力でヤマトの航海の安全が少しでも得られるのであればとの思いがあった。

——そう、その威力ゆえにタキオン波動収束砲を封じて外部にその存在を知られないように配慮し、隣人の危機すら看過して封じてきたタキオン波動収束砲。その力に縋ってしまったのは、スターシアも同じだった。

どうしていまさらデスラーを、そしてその力を行使したヤマトを責められようものか。

「……」

通信機モニターの隣にちらりと目を向けると、そこにあるのはイスカンドル星の——自爆スイッチ。

イスカンドル王家の人間のみが押すことのできる最終手段にして、イスカンドルの負の遺産を未来永劫葬り去るために設けられた、封印装置。

ユリカと出会う前は、カスケードブラックホールに飲み込まれる前にこのスイッチを入れてイスカンドルを滅ぼすつもりだった。

しかしいまはヤマトが来る。ヤマトに託したタキオン波動収束砲の威力ならば、あの次元転移装置を破壊することも可能だろう。

いまは……それに期待している自分がいた。生きたい欲求が生まれたのだ。

「……守……スターシア……」

スターシアは迷っている。

いま一度デスラーを説得して、地球とヤマトから手を引くように訴えるべきだろうか。

しかしながら、引き換えにできる条件をスターシアはすでに失っているだろう。

ガミラスの技術力なら二年もあればタキオン波動収束砲を自主開発可能だ。

カスケードブラックホールを破壊するに足る六連射型——ユリカがトランジション波動砲と命名した域に至っていないければまだチャンスはあるが、デスラーが約束を反故しない保証はない。

それに——ヤマトはいま、必死の思いでこのイस्कन्दルを目指している。

初めて体験する未知なる宇宙の洗礼を存分に浴びて、ガミラスの妨害も掻い潜って。

ここでスターシアが万が一にもデスラーを引かせることができたとしても、それでは彼らの努力を無駄にしてしまう。

それにスターシア自身が彼らを試しているのだ。

本当に困難を乗り越えてでも生き抜く意思があるかどうかを。

その主張を通すのであれば、スターシア側からガミラスに話をすることは重大な違反だ。

しかし、スターシアは地球に技術提供をしたことで内心ガミラスに負い目がある。

その負い目が形となって、ついデスラーにユリカのことを話してしまった。

大切な友人であるユリカの容態も心配が尽きない。彼女が心配過ぎて、守の要望をあつさりを受け入れ、本来ならするべきではない救援の手を差し伸べてしまっている。

『女王』として毅然な態度を崩さないように努めるべきだと理性が訴える。

だがスターシアの『人間』の部分が悲鳴を上げているのも自覚している。

そうやって悩み抜いたあと、やはり女王としての姿勢を貫くべきだと頭を振って通信機の前から離れようとしたとき、件のガミラスから——デスラーからのホットラインが入った。

「やあスターシア。お加減いかがかね？」

「デスラー……今回はどのようなご用件ですか？」

画面に映る美しい尊顔に浮かぶ表情に、デスラーは内心苦笑する。なにやら複雑な心情を覗かせている。普段からポーカーフェイスか苦々しい顔しか見せない彼女にしては珍しい。

「今回はいろいろとイスカンドルにもご報告しておきたいことがあつてね。まず最初に、ガミラスはタキオン波動収束砲の開発に成功したと伝えておこう。なかなか手間取ったがね」

そう告げると露骨にスターシアの表情が変わる。

禁忌の力に手を出したという非難と、やはりそうなったかという落胆——そしてヤマトの今後を思つての憂い。

ここまでスターシアが感情を表に出すことは珍しい。

デスラーなりの推測だが、女王として毅然としなければという公人としての理性と、一人の人間としての感情がせめぎ合っているのだから。

後者に関しては簡単に推測できる。

ヤマトに乗っているであろうミスマル・ユリカ艦長の安否と……少し前にイスカンドルが保護した地球人の捕虜のことだろう。

予想どおり、あの宇宙船に乗っていたのはその捕虜で、ヤマトへの支援物資を運び込んだとみて間違いなかったようだ。

「いやはや。君が封印したがるのも解る威力だったよ、あれは。さすがはガミラスすら上回る技術力を有していたイスカンドル製の超兵器だ。……しかしながら、やはり一朝一夕では万全とは言い難くてね。ヤマトの六連のトランジッション波動砲とやらには及ばないのが実情だ」

「……改めて技術提供をお求めになるつもりですか？」

スターシアが警戒も露に言葉を紡ぐ。

きつと心中穏やかではいられないだろう、いまデスラーは『波動砲』と口にした。

この名前はヤマトが——地球が使っている名前であつて、イスカン

ダルもガミラスも使っていない通称。

しかも正式名称として向こうが使っている『トランジツション波動砲』の名前まで出されては、スターシアとしては最悪の事態も想像せざるをえないはず。

少々悪趣味だと自分でも思ったが、かつて技術提供を断られた身の上としては意地悪の一つでもしたくなるのが人情というもの。

こちらとて、多くの人民を束ね、守り通さねばならない国家元首の立場にあるのだ。

「求めたところで提供などしてくれないのだろう、スターシア？ それに、喜ばしいことにわざわざイスカandalから提供して貰わなくても、すでに実用化されたそれに頼れる状況になっている」

「……！ まさか、ヤマトを鹵獲したとでも言うのですか!？」

おや、予想よりも反応が激しい。

珍しく、語気も荒く言葉の先を促すスターシアに意味返しは十分と判断したデスラーは、それまで浮かべていた微笑を払って真剣な表情でスターシアに告げた。

「鹵獲などしていない。スターシア、わがガミラスはヤマトと一時休戦し、和平の道を模索することとなった。まだ本格的な交渉には至っていないため詳細は未定だが、地球と終戦協定を締結することになった場合、第三者の視点も必要だと考えてね。その際は地球にとつて恩人であり味方と見做されている君に、是非とも交渉の席に参加して頂き、進行役をやって貰いたい」

スターシアは大層驚いた様子。目を大きく見開き僅かに口も開いている。

デスラーはいままで見たことのないその表情になぜか胸が高鳴るのを感じながら続けた。

「さすがは君の見込んだ人物だ。ヤマトは——ミスマル・ユリカ艦長は最初からガミラスと殲滅戦を演じるつもりはなかったようだ。最後の手段として想定しながらも、われわれと和解する道筋を探していたようだね。ついさきほど連絡があった。バランスに設けていたわが軍の前線基地が、例の黒色艦隊に襲撃され壊滅的被害を被った。

が、ヤマトが救援に駆けつけてくれた。おかげでわが国民二〇〇名余りがヤマトに直接救助され、バランス星に派遣していた部隊への被害もかなり抑えることができたよ」

「ユリカが……やってくれのですか？」

「そうだと考えている。ただ、実際に艦の指揮を執っていたのは、艦長代理を名乗った、古代進という男性だと報告を受けている」

「古代進？ 古代——っ!？」

スターシアの表情の変化を見て、デスラーは彼女の頭の中でさまざま考えが一瞬で巡ったのだと察した。

だが、そこには触れないのが礼儀というものだろう。

「しかも、君が託したトランジツシオン波動砲を使ってまでガミラスを救ってくれたと聞いている。その気になれば、便乗してバランス星基地諸共にあの黒色艦隊をも吹き飛ばせたらうに、最初はご丁寧に発射口を封印してまで救援を申し出たらしい。……まったく、君が見込んだだけあって、われわれの常識では測れない存在のようだ」

「デスラー……私としては大変喜ばしい報告です。ですがなぜあなたは地球と和解する道を選ぶことができたのですか？ いままでのあなたがたの方針に則れば——」

「たしかに軍事力という一点に関しては、ヤマト如きに負けるガミラスではない。だが、私はあのヤマトという艦をとても気に入っているのだよ。敵として打倒してしまうにはあまりにも惜しい。それにヤマトを討ち取ってしまったら、この母なるガミラスも、隣人である君たちイスカンドルもこの宇宙から消えてしまう。だがヤマトさえ味方にできればそれを回避できる。それが成されるのなら、地球に対する振る舞いを改めることに異存はない……それと——君の心を掴んで見せたミスマル・ユリカという女性にも興味があつてね。是非とも会って話をしたいと、ずっと思っていたのだ」

それはデスラーの本心だ。

本気で戦えば、犠牲は避けられずともヤマトは討ち取れる。ヤマトを討ち取れば、この偉大なガミラス帝国が銀河辺境の未熟な文明の戦艦一隻に負けたという、不名誉な称号は得ずに済む。

実際最後の最後まで悩みに悩み抜いた。

ヤマトを気に入っているというのは、結局デスラー個人の考えでありガミラスという国家の総意ではない。

ガミラスの政治形態は軍事一体で、総統であるデスラーによる独裁政治形態に近いため、デスラーが一言告げれば問題なく流れを作ることはできる。実際そうだった。

……だがヤマトという存在をどこまで信じていいのかは凶れなかつたから、最後の一押しができないでいた。

しかしデスラー自らが遣わしたドメルによってヤマトの方針を知ることができた。ならばデスラーは迷うことなく進むことができる。

ドメルは人を見る目がある。前線に立つことのできないデスラーの代わりは十分に務まると考えていたが、予想を裏切らなかつたようだ。

「……わかりました。そういう事情があるのなら交渉のお手伝いをお願いします。それと、デスラー……」

「ん？」

「イスカンドルの方針があつたとはいえ、あなたがたを見捨てるような真似をしたことを、心より謝罪します」

意外なスターシアの反応にデスラーは困惑した。

「……いや、君はイスカンドルの女王として当然のことをしたのだ、気に病むことはない」

そのせいか無難な応対しかできなかつたが、まあそれでいいのだろう。

最初から覚悟していたことであるし、なによりスターシアが素直に提供していたら、デスラーはきつとその後の星間戦争でその力を存分に——振るっていたかどうかはわからないが、タキオン波動収束砲の封印を掛け直すことには難色を示してははずだ。

それくらい、あの威力は魅力的なのだ。

そういう意味でも、その威力に心奪われず最後の最後まで自制しているヤマトのクルーに、艦長のミスマル・ユリカに会ってみたいと強く願う。

艦長代理という存在を立てているところからすると、すでに先は長くはないのかもしれない。

ならば、逝かれる前にどうしても話がしたい。

もしガミラスの医学で助けてやれるのなら助けてやりたい。

彼女の『甘さ』がなければ、そしてなにより護るべきもののために全身全霊を尽くす、あの気高き精神をデスラーに感じさせなければ、この戦争はどちらかが滅びるまでの殲滅戦にしかなくなっていなかったのだ。

その功績を称えるという意味でも、それくらいの援助は当然だろう。

デスラーはその後、いくつかの事柄においてスターシアと打ち合わせをしたあとホットラインを切り、改めて今後の地球との関りに関しての方針を思案しながら、ヒストタランがそれぞれ用意していた和平政策の資料を読みふける。

ヒストタランでは多少やり方が違うが、おおむね共通しているのは今後ガミラスと地球は同盟関係を築くことが無難であろうというものだった。

それはデスラーも賛成している。

仮に一切の関りを絶ったところで将来的に再度接触する可能性は十分にある。

……そのとき友好を築けなければ、その先に待つのは波動砲を突きつけ合った戦争になる。

その威力を熟知したからこそ、監視下に置いておきたいと考えるのは自然なことだ。

地球側にしても、ガミラス側の動向を知れるというのは決して損ではないはず。

ヤマトが勝手に締結した終戦など容易に反古できると考えるのが当然で、ガミラスという国家が健在であればまた戦争になると警戒もする。

ならば、双方監視し合うのが現状ではベターではないかと思う。

だとすれば——いろいろ譲歩してやるほかないだろう。

少なくともガミラスの傘下に入れるというよりは、対等な立場での同盟が無難な落としどころか……。

おそらくそう間を置かずに動きを見せるであろう黒色艦隊を始め、今後のことを考えながら、デスラーはヤマトと直接対面できる瞬間を楽しみにしていた。

いまはまだバランス星の状況が落ち着いていないので先延ばしにしているが、もう少し我慢すれば、件のミスマル・ユリカと言葉を交わせるかもしれない。

あのスターシアに認められた人間性はどのようなものだろうか。

そして、『大切な家族を守るため』という彼女の『愛』が本当に国家の危機に、脅威に立ち向かえる力足りえるのかがわかる。

そうすれば——スターシアが言っていた『愛』というものがなんなのか、デスラーにも理解できるかもしれない。

その瞬間が待ち遠しい。

デスラーはふと視線を上げ、外殻に空いた穴から除く深淵の宇宙——そして微かに視界に入る隣人イスカンドルの姿を捉え、ふと唇に笑みを浮かべた。

ヤマトの戦いは無駄にはならなかった。

ついにその思いが届き、ガミラスとの戦いに終止符が打たれようとしている。

しかし油断はできない。

ヤマトの力を把握した暗黒星団帝国の目的とはなにか？

凍り付いた地球に残された人類が滅亡する日まで、

あと、二四六日しかないのだ！

第二十一話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十二話 愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！

ヤマトよ、その愛を示せ！

第二十二話 愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！ Aパート

ドメルは連絡艇の窓から徐々に大きくなるヤマトの姿を眺める。こうして間近に見ると、ガミラスとの設計思想やデザインセンスの違いというものがはっきりとわかる。

余裕のできた初遭遇のあと、ドメルなりに過去の資料を含めて研究してみた。

その結果、ヤマトのデザインが大昔の水上艇のそれに酷似していることが理解できた。

元来宇宙戦艦としては適切とは言いがたいその形状を採用した理由まではわからなかったが、なにかしら象徴的な意味合いがあるのだろうか。

ヤマト以前の地球軍艦艇に比べても、そのデザインははっきりと異なっている。明らかなイレギュラーとしか映らなかった。

ヤマトの出自はこの宇宙の地球ではなく、並行世界にあるというデスラー総統の考察が真実であるのなら、ドメルでは予想もできない複雑な経緯でもあったのかもしれない。

……それにしても、あつさりに乗艦を許可されたことには少々驚かされた。

たしかにデスラーの意思は伝えだし、水先案内人としての提案もしたとはいえ、少々彼らの人の好きが心配になる。もう少し警戒心があってもいいのではないだろうか。

しかしこれほどまでにヤマト側の和平への意識が高いとは……心底驚かされた。

内心さまざま葛藤があったはずだが、それでも意思を通そうとする芯の強さにはドメルとて感服せずにはいられない。

はやく、彼らの人間性に直に触れてみたいと期待が高まった。

連絡艇はヤマト艦尾底部に開く発着口に近づいていく。ガイドに

従って滑らかに滑り込み、発進用のスロープに着地した。

ドメルは機を降りる準備を手早く終える。

ガミラスの将校としての品格を損なわないよう、気を付けて振舞わねばならない立場にあるし、もしかしたらクルーの一人くらいは感情的になって襲い掛かってくるかもしれないのだから、緊張感をもって行動せねば。

（――よし、首と耳に着けた翻訳機は正常に作動している。これなら会話に問題はない）

後ろの発着口が閉じる。スロープ内が加圧され、天井のシャッターが開くと、傾斜していた床が持ち上がって水平になった。

安全を確認した連絡艇の搭乗口が開く。

小ぶりなスーツケースを片手に機の側面から出現したエアステアを威厳もたつぷりに下りながら、ドメルはヤマトの格納庫の床を踏みしめた。

――ついに、この日が来た。

正直ヤマトにこのような形で――ドメルが描いた中で最良と言える形で接触することができるとは……。

ドメルの眼前には、出迎えに来たのであろう古代進艦長代理にアオイ・ジユン副艦長、そしてゴート・ホーリー砲術長の三人が敬礼と共に立っていた。

右手を頭の横にかざした、地球への諜報活動の際に見られた彼らの敬礼。

ドメルもガミラス式の敬礼ではあるが、毅然とした態度で応える。

「乗艦を許可頂きありがとうございます。ドメル将軍、ヤマトとガミラスの交渉のため、ガミラス星ならびイスカandal星までの案内人を務めさせていただきます」

「ご足労ありがとうございます、ドメル将軍。宇宙戦艦ヤマトは、あなたを歓迎いたします」

敬礼を終えたあとは、進と握手を交わす。

「この度の救援には、心の底から感謝しております。あなたがたにとっては侵略者に過ぎないわれわれにこのような厚意を示して頂き、

なんと言えはいいのか……」

「ドメル將軍、われわれの目的は地球を救うことであつて、ガミラスを滅ぼすことは目的ではありません。——たしかにこの戦争では多くの血が流れ、怨恨を生んでいます。しかし、だからと言ってガミラスを滅ぼすような真似を前提に行動してしまえば、われわれに救いの手を差し伸べてくれたスターシア陛下に合わせる顔がありません」

「……そうですか。あのスターシア陛下が認められただけのことではありません。古代艦長代理、この交渉が地球・ガミラス双方にとって最良の結果になることを、心から願っています」

「——われわれも、そうなることを願っています。それでは、ヤマトの艦内をご案内いたします」

「ありがとうございます。しばらくの間、お世話になります。それと、さきほどの戦闘で消耗した物資がございましたら遠慮なく申し出てください。補給の要望にはすべて応じるようにと、デスラー総統からも命じられていますので」

「ありがとうございます、ドメル將軍。それについては被害報告をまとめたあと、提出させて戴きます」

傍らに控えていたゴートの言葉にドメルも頷いた。

「こちらです」と案内を開始した三人の後に続きながら、ドメルは失礼にならない程度に格納庫に視線を巡らせた。

格納庫には先の戦闘で被害を被った、ヤマトが誇る人型機動兵器の姿見える。ほとんどの機体が傷を負っていて、四肢の欠損が見られる機体も見受けられた。

……その中であつて、傷は多いが四肢どころかアンテナ一つ欠損していないように見える機体が四体。

資料によれば、かつてイスカンダルが世に生み出したという最強の人型戦闘機、ガンダムに酷似した機体だ。

ヤマトがイスカンダルからの支援を受けている以上、あのガンダムは地球で再現された機体と見て間違いないはずだ。

地球出港当初から存在が確認できるダブルエックスという機体は当然として、次元断層の戦闘で確認されたエックスという機体と、今

回の戦闘で確認された新型二機——エアマスターとレオパルドなる機体も視界に飛び込んでくる。

……ヤマトが自力で修理や改修を行うための工場施設を備えていることは予測していたが、だからといってまさか新型——それも単機性能ではそれまでリードしてきたはずのガミラスの機体すら圧倒する機体を三機も追加するとは、だれが予想できようものか。

もし予想できたやつがいるとしたら、そいつはきつとアニメだとかマンガだのの読み過ぎだと思う。

「エアマスター、調子よかったぞ。慣らし運転なしで投入したとは思えん出来栄えだ」

「レオパルドもだ。ホント、イスカンドルから救援物資を得たとは言ってもほとんどジャンク同然の部品だろ？ 本体はコツコツ造つてたにしても、そんな部品で装備の大半を拵えた割には本当にいい出来だよな、こいつ」

……いま、聞き捨てならないことを聞いた気がする。

イスカンドルから小型船舶が飛び立った報告は受けているし、それがヤマトへの救援だとは丸わかりであった。

いまのイスカンドルの状態なら、間違つても完成品が届くことはないと思っていたが、ジャンクも同然とは……いや、それは比喻表現であつて、実際はバラバラに分解保存されていた物資が届いた、ということなのだと思ふ。

だがそんな状態から、受け取つて数日しか経つてないというのに、ここまでの機体を用意できるとは……！ ヤマトの技術者の能力は卓越している。ここまでの人材はガミラスにもそう多くはない。

損害回復の速さの秘訣は艦内工場施設だけではなく、やはり技師の腕のよさがあつてのものだったのか。

「まあ、本体の設計はあまり弄つてないですし、イスカンドルの部品も状態は結構よかったですからね。それに班長——じゃなかった、ウリバタケ副長つてこういうの結構得意なんですよ。ナデシコ時代から結構やらかしてますし」

パイロットと思しき二名に相槌を打つ整備員との会話に、ドメルは

もう感心するやら呆れるやら。

だが実際に完成された機体の威力を目の当たりにした立場としては、彼らの仕事の確かさを認めないわけにはいかないというかなんというか。

——やはり総統と自分は正しかった。

ヤマトの力は艦の性能だけではなく、それを最大限に引き出し維持するクルーの能力の高さにも由来していた。それも並大抵ではない。

ドメルは心底驚かされながら格納庫の外に案内され、艦内通路に出た。格納庫入り口ドアのすぐ隣にある主幹エレベーターへと案内され、四人並んで入り込む。

そのまま階層を二つ上がったところでエレベーターを降りた。

「ここがヤマトの居住区エリアです。ドメル將軍には、空いている士官用の個室を使ってもらおうと考えています」

「ありがとうございます。——すみませんが古代艦長代理、ヤマトに收容してもらっている避難民の様子を見たいのですが」

「……そうですね。ドメル將軍に顔を出してもらったほうがみなさんも安心なさるでしょう。それではこちら——」

案内しようとした進の動きが固まった。なにやら信じられないものを見た——としか思えない顔つきをしている。

ほかの二人も掌で顔を覆って大きく溜息を吐いている。

どうしたことかとドメルが視線を巡らせると、視線の先にはなにやら丸みを帯びた大きなシルエツトが——。

「あ……あの、これは……その……」

眼前のシルエツトから若い女性と思われる声が発せられた。

よく見れば——というか見なくても丸々としたシルエツトの頭の部分から、若い女性の顔が覗いている。

羞恥からかすつかり赤くなつて唇がわなわなと震えている。

これは——着ぐるみというやつか。

息子のヨハンと一緒にリビングでテレビを見ていたとき、幼児向けの番組の中でこういったものを見た記憶がある。番組に出てきた着ぐるみは、完全に着用者が隠れていて顔が露出していなかったが、シル

エツトなどは酷似している。

いかにも幼児向けのデザインのそれは、ネズミのような動物（デフォルメされているだろうが）を模したデザインで、平時であればドメルであっても頬を緩ませる程度には愛嬌のあるデザインだ。

そんな（どうして戦艦に用意されているのかがまったく理解できない）着ぐるみを着た女性は、両手でカートを押している。

カートの上にはガラス製の食器の上に色とりどりの食品が置かれているようだ。

——あれは、食器の具合から見て氷菓子だろうか。

「——雪、いったいどうしたんだ？」

進の戸惑いを含んだ声色に、雪と呼ばれた女性はびくりと体を跳ねさせ、薄っすらと涙すら浮かべる。

その様子に進も慌てているのがわかる。

この状況は不可抗力だとドメルも思うが、だからといって上手いフォローができるほどドメルも女性の扱いに慣れていない。

「ひ、避難民の中には小さな子供もいてね。中央作戦室に置きっぱなしだったなぜなにナデシコの放送機材一式を見たら、着て欲しいってせがまれて仕方なく……あと子供たちの励ましになると思って、アイヌでも配ろうかと……」

「そ、そうなのか！ いやあく雪は職務熱心で本当に尊敬するよ！」

機嫌を損ねたと青褪めた表情の進が必死にフォローに入った。

……だがそれはフォローになっていないのではないかと、ドメルは内心突っ込んだ。

この若さで艦長代理を任されるほどの男でも、女性の扱いは苦手と見た。

と、ドメルも軽く逃避。

………女性に泣かれるのは、宇宙の狼とて苦手だ。むしろそんな状況に出くわしたくない。

「うう………こんな格好で………こんな格好で………」

着ぐるみ越しでもわなわなと震えているのがよくわかる。

これは——不味い。

「こんな格好で、本当に申し訳ありません!!」

着ぐるみを着た雪は腰を深く折って平謝り。

(——たしかに、目上の人間に会うにはかなり問題のある格好ではあるが相応の理由もあるのだしそもそもガミラス側に咎める権利はないような気がするのは私の気のせいではないと思うのだしそもそも子供たちのためなればという優しさにどうしてケチをつけられようか……)

まったく想定外の事態に軽く狼狽えながら、ドメルは咄嗟にフオローの言葉を発していた。

「いえ、お気になさらず。わが国民によくして頂いて、感謝の極みです」

よし、当たり障りのない回答が口に出た。しかも動揺を感じさせない滑らかな回答だった。

そして頼むから持ち直して欲しい。そして早くその氷菓子を子供たちに届けて欲しい。

ほら、もう溶けてしまえばいい。

「ゴホンッ！ 森君、アイスが溶けてしまうから早く行ったほうがいいと思う。ドメル將軍も気にしていないと言っているのだし」

ジュンのフオローもあって、着ぐるみの女性は平謝りしながらもカードを押しして通路の奥に消えていった。

その先に避難民——特に子供たちが居るのだろう。

「……その、申し訳ありませんでしたドメル將軍」

「いえ、本当に気にしておりませんので」

進に向き合ってそう言うドメルではあったが、ヤマトのクルーに抱いていた『高潔な救国の戦士』のイメージが大いにぐらついたことは、言うまでもないだろう。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十二話 愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！

「タキオン波動収束砲……まさかこれほどとは……」

データーは人口太陽を使った策で得られたヤマトのタキオン波動収束砲のデータを、眉根を寄せて閲覧していた。

「はっ……解析データによりますと、あの砲の威力はわが軍の機動要塞ゴルバの主砲に匹敵する出力を持つています。単純な出力比は五分ですが、あのタキオンバースト波動流なるエネルギー流の作用もあつてか、実際の破壊力はわずかではありますが、ゴルバの主砲に勝っているようです。それに、とても厄介な作用も発見されました……」

報告する部下の語尾が弱くなる。

不審なものを感じながらもデーターは先を促す。すべてを把握しなければあの艦への対処を決められないのだ。

「報告しろ」

「はっ……あのタキオン波動バースト流に対して、わが暗黒星団帝国が実用化した金属元素は異常に脆く、特に動力エネルギーとは融合して過剰反応を引き起こす可能性が高いのです。万が一にもあの砲がわが軍に向かつて放たれた場合、余波だけでも艦艇を沈め、直撃を受けた艦艇はエネルギー融合を起こして大爆発を起こします。最悪、タキオン波動収束砲一発で艦隊が丸ごと吹き飛んでしまう恐れもあります……」

部下の弱気な報告に、さしものデーターも叱責できず黙り込んでしまう。

単に強力なだけの大砲だと思っていたが、どうやらそれは軽率な判断だったらしい。

（くそっ！ 連中の艦を鹵獲したときには気付かなかった！ もしかすると、連中の動力エネルギー自体がわが軍に対して猛毒となる可能性が……！）

最悪の可能性が頭を過つたデーターはすぐに命令を下した。

「すぐにメルダース司令に報告するのだ！ ヤマトの——いや波動エネルギーのわが軍に対する危険性を確かに伝え、対抗策を講じてもらう必要がある！ そして、われらは別動隊として、現在唯一タキオン波動収束砲の搭載が確認されているヤマトの撃滅を図る！」

部下はヤマトの威力に恐れ戦き及び腰になっているようだが、デューダーは自身に喝を入れるためにも座席の肘掛けを思い切り叩いて告げた。

「幸いにもわれわれの手元には、ガミラスの連中から鹵獲した瞬間物質転送器とドリルミサイルがある！ 連中が考案していた策を真似るのは癪だが、航空兵力を駆使した転送戦術を駆使してヤマトを翻弄し、ドリルミサイルをあの発射口に打ち込んで破壊してやるのだ！ われらが倒れてもタキオン波動収束砲さえ黙らせれば、ヤマトなど取るに足らん戦艦だ！ わが帝国の未来のためにも引くことは許されんぞ！」

デューダーは口で言ったほどヤマトを侮ってはいなかった。

むしろ侮っていないからこそ、最悪タキオン波動収束砲だけでも完膚なきまでに破壊して、その脅威を取り除きたいと考えたに過ぎない。

あの砲は——暗黒星団帝国にとって致命的な存在でしかないのだから。

雪との衝撃的な接触で印象が大きくぐらついたドメルではあったが、気を取り直して艦内を案内を継続してもらっていた。

現在ヤマトはもちろん、ガミラス側も被害確認と復旧作業に勤しんでいることもあって、今後の交渉の目途はまだ立っていない。

それまでの間に今後のプランを少しでも考えておこうと思う。

できればヤマトのワープ能力を補完するためにも、同行艦が最低一隻欲しいところだが……。

ドメル自身は連絡要員としてヤマトに乗り込んでいるため、降りることができない。

そうなると同行する艦の人選も問題だ。対ヤマト戦のために選抜した部下たちなら、大丈夫だと思うが……（血気盛んなバーガーを除いて暴走は心配ないだろう）。

いろいろと思慮しながら、宛がわれた個室に荷物を置く。さて、次は避難民の様子を確認せねば。

案内役として同行するようになったのはゴート一人だった。

最高責任者である進と雑務の処理があるジューンはこれ以上時間を割けないため、いったん席を外して仕事を済ませてくることになったのである。

ドメルはゴートから渡された資料を見て眉をしかめた。

思ったとおりだ。大量の避難民を抱え、食事も用意までしてくれていた。

まだ詳細な報告こそ上がっていないが、ヤマトの備蓄食料にも無視し難い消費が生じているだろう。

(ふむ。食料の補充は必須だな)

ガミラス側から保存食——いや、地球人の体質はもちろんだが、口に合わないかもしれない。できるだけプレーンで加工できるような食品を選ぶようにしなければ。

ドメルは心のメモにそう書き留めつつ、むっとり顔の巨漢に付いて回る。

まずはドメルの部屋から近い左舷展望室の様子を伺った。

「あー！ ドメル將軍だ！」

顔を出すと早速避難民達から驚きと安堵の声が漏れ聞こえてくる。

ドメルは彼らに笑顔で応えると、怖い思いをさせたと謝罪し、間もなく移乗の手筈が整うはずだと伝えて安心させた。

しかし、この展望室には子供の姿が見えない。そのことを不審に思つて尋ねてみると……。

「子供たちなら、みんな右舷展望室に移っています。なんでも動物の着ぐるみを着た女性がお菓子を配ってくれとかで……一応、こちらのモニターから様子を見れるようにはしてくれましたが……」

なにやらない淀む男性に促されてモニターを覗き込むと、子供たちが喜び勇んで鳥らしい着ぐるみを着た——ドメルの見間違いでなければ十代前半の少女に一齐に襲い掛かっているではないか。

着ぐるみの少女が悲鳴を上げているが子供たちは容赦なし。少女

を揉みくちやにして楽しんでる。

別の場所ではさきほどの雪という女性が配っているアイスを堪能している子らもいるし、さらに別の場所ではトナカイの着ぐるみを着た強面の男性が襲われて悲鳴を上げている。

控えめに言っても阿鼻叫喚の地獄絵図。もちろん、ヤマトクルーにとつてだが。

「……」

「ヤマトは敵国の艦ですし、彼らに心許したわけではありません。しかし、さすがにこれは気の毒でして……」

一刻も早く移乗の準備を整えさせよう。

ドメルはすぐにゴートに話を通して貰ってゲールに訴えた。

感動的な別れのあとの若干シユールなやり取り。ドメルもゲールも終始苦い顔であった。

それから三〇分ほどが過ぎた。ゲールが遣わしてくれた指揮戦艦級二隻がヤマトの両舷に接舷し、避難民と兵士を回収して引き上げていった。

……残されたのは、もみくちやにされてボロボロな少女——ラピス・ラズリ機関長（!?）と疲れ果てた表情の真田志郎工作班長に森雪生活班長の姿。

ノロノロと着ぐるみを脱いでドメルに敬礼を送る三人の姿に、ドメルは答礼するなり「ご迷惑をおかけしました」と労いの言葉を送るのであった。

そんなまったく予期しなかったハプニングを乗り越え（同時にまだ自分が知らない世間があるのだと痛感させられ）、気持ちを持ち直したドメルは再度ゴートに案内され、これからはばらく世話になるヤマトの艦内を最低限見て回った。

驚いたのは軍艦であるにも関わらず居住環境が思いのほかよかつたことだろう。

ドメルが宛がわれた個室もシャワーやトイレが完備されたものであったが、それは高級士官用の個室と考えればそれほど不思議ではない。

だがそれ以外の、乗組員の慰安を目的としているであろう各種レクリエーション施設の充実具合はかなりのものだ。

避難民の収容も行っていた両舷の展望室もガミラスではなかなかお目に掛かれないデザインであるし、複数人で同時に入浴が可能な大浴場に映画視聴室といった福利厚生の豊かさは、規模はともかく質という面ではガミラスの軍艦よりも上ではないだろうか。

もちろんガミラスとて軍人の福利厚生に関して言えばそれ相応に気を遣っている。

軍人と言えど人の子。士気を維持するためにはやはり争いから遠ざかった楽しみも必要なのだ。

ヤマトもその目的上乘組員のケアには気を遣っているだろうとは思っていたが、想像以上である。

それに食糧事情も厳しいとは考えていたが、艦内でたんぱく質の合成やプランクトンの育成、野菜類の品種改良による早期収穫を可能とした農園と、艦の規模に対して非常に優れた供給システムが整備されていると教えてもらった。

これは、ガミラスの軍艦にはない施設だ。

やはり、単独で超長距離航海に挑むとなればこれくらい設備は必要になるのだろうと、しきりに感心させられるのであった。

そして、艦内を見回っていると必然的にクルーの姿もかなり目に入ってくる。彼らは当然のようにドメルの姿を認めれば敬礼で応えてくれるのだが……どうにもぎこちない。

板についていないというか、そもそも階級が上の人間に会うことに慣れていないかのような振る舞い。

そして、視界の外では妙に緩い空気を出しているクルーもチラホラ。

いったいどうしたことなのだろう。

「ドメル将軍。ヤマトのクルーは軍・民間の混在ですので、粗相があるやもしれません。ご理解いただけると恐縮です」

「そうなのですか……わかりました。私にも立場がありますので、余程でなければ目を瞑りましょう」

ゴートにフォローされてドメルの疑問は解消した。

言い換えれば、正規の軍人だけでやっていけないほどに地球が疲弊していたということでもある。にも拘わらずあれほどの戦果を挙げているクルーに、民間から徴兵された人材が交じっているとは。

追い詰めてしまったガミラスが言えた義理はないだろうが、地球人のタフネスと適応力には目を見張る思いだ。

「助かります」

フォローしたゴートも安堵した様子。

さらに聞くなれば、彼自身も元軍人に過ぎず、いまはヤマトを完成させたネルガル重工という企業からの出向社員扱いらしい。

にも拘らず砲術部門の責任者に着けるとは――。

いや、むしろ民間出身ゆえ、軍事に染まっていないからこそ、あの柔軟で突飛な行動に繋がっているのだらうともとれる。

ふむ、軍人生活の長さが意外と思考を硬直させていたのかもしれない。ドメルはふとそう思った。

そうやってしばらくは入出を許可された範囲で艦内を見て回っていたのだが、やはりミスマル・ユリカ艦長のことが気になり始める。

艦長代理が指揮を執っているということは、彼女は指揮が取れない状況にあるということだけは容易に想像がつく。

問題は程度だ。

代理、というからにはまだ彼女が健在であると取ることとはできる。だとしても面会謝絶を言い渡されるほどののか、それとも会話できる程度なのかは、聞いてみなければわからない。

さてどう切り出したものか。

悩んでいると、ゴートが「失礼」と断ってから左腕に巻かれている通信機を操作して表示された文面を読み、一つ頷いてからドメルに告げた。

「……艦長の身支度が整ったようです。ドメル将軍をご案内するようにと連絡がありました。いまから艦長室にご案内したいと思います
が……」

「ぜひともお願いいたします。実は、デスラー総統からヤマトについ

てわかっている限りの情報を伝えられたときから、一度お会いしたいと常々思っておりました」

ドメルは思いがけず対面する機会を得られたことに喜びも露にゴートについていく。

来た道に戻って主幹エレベーターの左舷側に乗り込み、ゴート案内のもと、艦長室へ。

本国との連絡前に対面できるのは行幸だ。これで、デスラー総統にいい報告ができる。

「わかっているわね？ 無茶は厳禁よ」

「了解了解。ただお話しするだけだから」

こういった交渉に不慣れなユリカを補佐するため傍らに控えたエリナに念を押されつつ、ユリカはひらひらと左手を振りながらドメル将軍が現れるのをいまかいまかと待っていた。

ようやく掴んだチャンスだ。

最悪地獄に叩き落とされるも覚悟の上でガミラス星を滅ぼすしかないのかと考えていただけに、このチャンスは是が非でもモノにしたい！

ドメル一人を味方に付けたところで体制に影響はないかもしれないが、なにもしなければそれこそなにも変わらない。

ここに戦争の終結の可能性を見出せるかどうか、いまはこの瞬間に全力を賭すしかない。

そうごねてこういった場を設けて貰ったのだ、万が一の失敗も許されない。

体調も正直微妙なので、短期決戦を図る必要もある。

……とは言っても、ユリカ個人のやり方は一つしかない。

つまり――

「はじめましてドメル将軍！ 私がヤマト艦長のミスマル・ユリカです！ ぶいっ！」

満面の笑みをこれでもかと浮かべ、右手でVサインを突き出して一気に攻める！

(これでドメル將軍のハートをキャッチ！)

結局彼女はどこまで行っても彼女でしかなかった。羞恥でちよつと頬を染めながらも、初めてナデシコに乗った日のことを思い出して懐かしさが込み上げてくる。

後継者が育って気が楽になつてしまったのか、最初の頃のように厳格さを出そうという考えは宇宙の彼方に飛んで行つてしまった。

直後、エリナが思わず手刀を降り降ろしたのは、避けることができない必然であつたといえよう。

強烈な一撃を貰つたドメルは、一瞬で思考が完全に停止した。

デスラー総統がスターシア陛下からお聞きになられた情報で『女性』というのは知つていたが、てつきり冷静沈着な、いわゆるデキル女性のイメージを抱いていただけに、それはとても強烈な一撃となつてドメルの頭をぶつ叩いた。

珍妙な挨拶もそうだが、直後に艦長の脳天に手刀を振り下ろす女性クルーの存在にもさらに一撃貰つた。

ベシツ！ という鈍い音がそれを助長する。

(地球では、あれが普通なのだろうか……?)

ドメルの中で築かれていたヤマト——というよりはユリカに対するイメージが致命的なまでにひび割れる。そりやもうバツキバキに。

そんなドメルを、傍らに控えていたゴートが気の毒そうに見ている姿が窓に映つていた。

……そうか、あれは別に普通でもなんでもないのだな。

ゴートの振る舞いにわずかな救いを見出しつつ、ドメルは気を取り直して——と本人は思つているが動揺がまったく抜けていないまま、敬礼と共に自己紹介。

「は、初めましてミスマル艦長。ガミラスの將軍ドメルです。この度は、お招き頂き光榮に思います」

言葉を少し囁んでしまった。普段なら絶対にありえないのに……。動揺がまったくと言っていいほど抜けていない！

「艦長の失礼をどうかお許しく下さい。通信長のエリナ・キンジョウ・ウオンです」

こめかみを痙攣させながら自己紹介するボブヘアの女性の妙な迫力に、動揺収まらぬドメルは少し気圧されてしまった。

——そう言えば、滅多にないが妻イリーサを怒らせたときはこんな感じだった気がする。

やはり怒った女性は手強い。それも普段が冷静で穏やかに見えるような相手ほどに。

ドメルはすっかり思考が混乱し、ペースを乱されてしまったのであった。

合掌。

エリナの雷を受けて痛む頭頂を摩りながら、ユリカはドメルを観察する。

屈強な軍人そのものといった感じの風貌。

(うむむ、手強そう。でも、負けないもん！)

先制攻撃で相手の出鼻を完膚なきまでに打ち砕いたとも露知らず、ユリカは無難に今回の戦闘に関する話題などで場を温めること。

ちよつと隣から冷たい空気が流れているような気がするが、気にしない気にしない。

そうやって当たり障りのない会話を続けると、ドメルの視線が少し泳いでいるのを感じた。

そう言えば、健常者ではなかったのだと思い出す。すっかり馴染んでしまっていて違和感がなかったバイザーやら補聴器やら、気になっても当然だろう。

——無事元の体に戻れたとしても、元の生活に戻れるのかちよつぱり不安になる。

「ああ、すみませんドメル將軍。この格好だとやっぱり気になりますよね」

「え？ ええ、女性に対して失礼だとは思ったのですが、やはり気になっちゃって……」

なぜか落ち着かない様子のドメルにユリカは「まあ、この格好じやあねえ」と自分の格好にこそ問題があると盛大に誤解していた。

もちろんドメルが落ち着かないのはあまりにも強烈な先制攻撃を受け、圧倒的不利な状況下にありながらドメルの包囲網を見事突破して見せたヤマトの指揮官——つまりユリカに対するイメージが大崩壊したショックが思いのほか大きいためだ。

当然格好など二の次である。

「実は私、不治の病というものに侵されて……もうそれほど長くないんです」

言い過ぎではないか、という雰囲気から隣からヒシヒシと伝わってくるが気にしない気にしない。

とりあえず手っ取り早く理解してもらおうと、バイザーを外して見せる。

聴覚センサーとの接続を立たれたバイザーの電源がオフになって、ユリカの視覚が暗転する。

それでもヤマトが誇る天才三人が精魂込めて作り上げた聴覚センサーは、驚いたドメルの息遣いをたしかにユリカに伝えていた。

まあ、焦点定まらぬ目を見たらそれは不気味だろうし驚くのは無理もない。

でもお化粧はちゃんとしたから不細工ではないはず。

と、ユリカの思考は相変わらずずれていた。

「ガミラスとは無関係の地球人同士の権力争いに巻き込まれて、重度のナノマシン障害を患ってしまった。いまはもう、自分の目と耳じやなにも見えないし聞くこともできないぐらい悪いんです」

言いながらバイザーを嵌め直すと、軽いノイズのあと鮮明な視界が開ける。やっぱり、ドメルは大層驚いた。……でもさつきと表情が微妙に違うような違和ないような。

「いまは、ヤマト自慢の天才メカマンがわざわざ専用補装具を作ってくれたおかげで、なんとか日常を遅れてるんですけどね。ほら、このインナースーツもそういうった目的で着てるんです」

「ナノマシン障害？ たしかにガミラスでも医療や体質改善にナノマシンを使うことはなくもないですが、人体への安全が確認されていないナノマシンを使うことはありません。いったいなにがあったとい

うのですか？」

ドメルの問いかけに、ユリカはちよつと悩んでからエリナに相談してみた。

彼女も悩んだあと、「ここは私に任せて」と説明役を請け負ってくれた。

エリナの細を穿ちながらも解り易い説明を聞かされて、ドメルが低く唸る。

まあ地球の恥部を打ち明けている様なものだから、エリナとしても正直口が重い。

今後の交渉にも影響するかもしれない。かといって黙ったままではユリカの現状に説明がつかない。

なので、「前の戦争で恨みを買って誘拐され、ボソソジャンプ解明のための実験体にされた」として、その過程でボソソジャンプに適性を持った生命体の研究と称してナノマシンによる生体改造を受けた後遺症、と誤魔化すことでA級ジャンパーについては秘匿した。

医療による回復が見込めないため、コスモリバーシステムに頼る以外に活路がなく、ヤマトを操れる指揮官がほかにいなかったことから無理を承知で艦長を務めていると、少々苦しい説明となってしまうがそこはさんざん活用してきた話術で誤魔化す。

誤魔化すつたら誤魔化すのだ。

「なるほど……そのような体でここまでがんばれたのは、そういった事情がありましたか……」

ドメルはいつ死んでもおかしくない状態のユリカが艦長をする、という不可解な状況に一応の納得はしてくれた様子。ありがたいことだ。

「そうなんですよ！　もう、コスモリバーシステムの影響をほんの少しでも利用して回復しない限り、私は大好きな夫や子供たちと明日を生きられないんです！　あ、夫っていうのは——」

哀れ將軍ドメル。頭お花畑状態のキャピキャピユリカにアテられる。

あとで聞いた話だが、彼は既婚者らしい。

しかし基本堅物というか、女性の扱いが不得手なタイプのドメルにとって、このやりとりは心底堪えたらしい。

エリナが早い段階で（物理的に）制止してくれたのがせめてもの救いだったと、後日感謝の言葉を贈られた。

もしあのまま続いていたら彼の精神力は極度に疲弊し、しばらく立ち上がれなかった、と。

……重ね重ね、本当に申し訳ありませんでした。

エリナは感謝の言葉を口にするドメルに、再び頭を下げたという。

……………

話が真面目な方向に戻ってすぐ、二転三転する場の空気に疲れた表情のドメルは、ヤマト出現時から議論されていたという、ヤマトの不自然な来歴について尋ねてきた。

この質問については予想されていたので回答も用意してある。

まあ、ほぼそのまま伝えるだけでいい。

過去の記録に触れさえしなければ単に並行宇宙から漂着した戦艦で済む。それ自体は別に明かしても特別誰も困らない情報でしかない。

「やはり——ヤマトは別の宇宙に存在する地球の艦艇でしたか……デスラー総統の推測は正しかったようですね」

「ありや。やっぱりデスラー総統にはバレてましたか。スターシアの言うとおり、物凄く賢い人なんだ」

スターシアから聞いた、と誤魔化せばヤマトの記憶を垣間見たことも、ある程度は誤魔化せる。

（ふふふ、スターシア便利説！）

などと友人に対して失礼なことを考えた報いだろうか、ユリカは急に胸が苦しくなって激しく咳き込んだ。

慌てずすぐに背中を摩り、ドメルに断つた上でドロップ薬を口に含ませて対処するエリナに感謝しつつ、改めてドメルに向き直る。

ドメルもユリカの体調が気かりなのか、できるだけ早くに話を終えて休ませたいと顔に出てしまっている。

（ほむ？ 意外と顔に出やすい人なのかな？）

ユリカはそうドメルを評したが、別に彼は腹芸が苦手なのではなく、単にユリカの特異な振る舞いにやられて自身のペースが保てないだけだったということ、彼女は終ぞ知ることはなかった。

「やはり、デスラー大統領についても知っておられたのですね。ならば、大統領の人柄を考慮したうえでの介入だったのですか？」

「私も、スターシアからそれほど詳しく聞いたわけではありません。先の介入行為は私たちの個人的な感情と、この戦争の行方を私たちに真剣に考えた結果です。私の見解では、このまま戦いが続いた場合、ヤマトがガミラス本星を滅ぼすか、それともヤマトが負けて地球が滅ぶかの二者択一を避けられません。そんな結末を回避するためには、和解が唯一の方法であると考えたまでです。——それでも、正直こうして対面できる可能性は低いと考えていました。どうやって接点を持てばいいかも、持てたとしてどうやって信じてもらうかも、五里霧中でしたから……」

ドメルは思った。

正直ユリカの性格に面食らったが、決して自分とデスラーがヤマトの振る舞いから感じていたものが間違っていたわけではなかったようだ。

——自分の観察眼を大いに疑ったのは紛れもない事実だが。

思った以上に彼女は、いやヤマトは真剣に今後のことを考えていた。

イスカandalとの接触を経て、ヤマト再建とほぼ並行してこの戦争の行く末を真剣に考え、イスカandal到達がガミラス本星到達と同意義であることを意識したうえで、様々なパターンを考慮したのだろう。

彼女の言うとおり、このまま戦い続けたとしたら結末は二つしかない。どう転んでも、どちらかが滅び去る運命を避けられない。

第三の結末を迎えるためには双方歩み寄っての講和の実現以外に道はない。

だが彼女が指摘したように、本来ヤマトとガミラスの間でそのよう

な接点を持てるはずがない。

地球からすればガミラスは侵略者、事情があれどその行いの責を問
い、怨恨に根差した不信が付いて回るのは必然。彼女が講和を望んだ
としてもクルーが追従してくれる保証はない。

ガミラスもだ。ヤマトは国家の命運を左右する戦いにおいては障
害物。普通ならそれ以上の関心など持たれるはずがない。今回はデ
スラーが偶然ヤマトに強い関心を抱いたからこそこの奇跡が実現し
たが、狙って起こすことなど到底不可能だ。

——もしも地球が得たのはヤマトのみで、イスカンドルからの支援
がコスモリバースの提供のみであつたなら。

——もしもガミラスの地球侵攻が切羽詰まった状況での国策でな
く、もつと余裕のある状況下での移民地確保、いや単なる領土確保で
あつたなら。

きつとこんな場は設けられることはなかった。

ヤマトがガミラスのことを知るのはイスカンドル目前であり、取る
べき手段は本土決戦。そして目指すは勝利のみ。良心の呵責に苦し
もうが、地球を見捨ててガミラスを取る選択は取れるはずがない。

ガミラスもそうだ。デスラーがヤマトを『同類』として共感を寄せ
なければ、ガミラスが取るべき手段はヤマトの撃滅、その果てにある
地球の獲得以外にない。仮に現場の人間である自分が意見具申した
としても、デスラーは一笑して終わりだろう。

今回の対談が実現できた要因はユリカとデスラー。そして双方に
情報を伝え、心痛めていたであろうスターシア。

双方の代表が互いに関心を寄せ合い、対面する以前から手を取り合
う可能性を真剣に悩み、その機会を逃すまいとしていたからこそ……
そして両者の間に立つ者がささやかな力添えをしてくれた結果実現
した、薄氷の上を渡るかのような、いつ崩れてもおかしくなかった道
筋だったのだ。

だが奇跡は起こった。

双方の想いはすれ違わなかつたのである。

「正直、冥王星基地を攻略するまでは自分でも無理かもしれないって

結構悩んでたんです。でも、基地を脱出した司令官が残存艦隊を引き連れてヤマトに向かつて来たときに確信したんです。……たしかに侵略という手段は許せません。被害者としての立場からならなおさら……でも、彼らも私たちと同じ思いを抱えて戦っている。そう考えたら、和解の道もあり得るんじゃないかって強く思えるようになったんです。それにベテルギウスするときにも命を捨ててまで挑んできた艦もあって……あれがなかったら、こういう形で対面する機会は得られなかったと思います。その二つの事件が、私以外のみんなの意識を変えてくれたから、私たちはこの道を選択できたんです」

その言葉にドメルは、シユルツとその片腕だったガンツが思わぬ遺産を残していたことを悟った。

彼らの国と総統に対する忠誠心が、最大の敵として君臨していたヤマトを味方へと転ずる一手として機能していたのだ。

そのことを知らされてドメルは目頭が熱くなるのを感じて、天井を仰ぐ。

「そうですか……！　彼らの行動が、このような結果を残してくれていたとは……！」

「はい。もちろん私個人としてはスターシアに対する後ろめたさもあったのですが、それは長らく私と、数少ない理解者の胸の内に秘められていました。それが明かされたのはビーメラ4で暗黒星団帝国と初めて戦ったあとでしたので、彼らの影響の大きさがなければ、バラン星への介入はありませんでした。……ドメル将軍、失礼かと思いますが——冥王星基地の指揮官のお名前を教えてくださいませんか？」

ドメルは少し悩んだが、教えることにした。

亡きシユルツやガンツがどう思うのかはドメルにはわからない。だが、彼の行動が結果としてガミラスを救うかもしれないと知れば——名誉と思ってくれるだろう。

「冥王星前線基地司令官の名はシユルツ。ベテルギウスでヤマトと戦ったのはその副官であったガンツという男です。彼らは戦いに敗れ、使命を果たせず逝ったことを悔やんでいたでしょうが……この和

平が成功すれば、彼らは結果としてヤマトを止めるといふ大任を果たしていたことになる……きつと、喜んでくれるでしょう。彼らの墓には、私から報告しておきます」

「……彼らを手を掛けた私たちが言うのも失礼かと思いますが、よろしく願います」

突然湧いた神妙な空気。不謹慎だと頭の片隅で思ったが、さきほどまでの緩かった空気との落差が激しい。彼女の妙な空気に当てられたせいでどうにも調子が戻らない。

しばしの沈黙が流れる中、ドメルは思う。

彼女はたしかにいろいろと、本当にいろいろと頭のねじが吹っ飛んでいるタイプではあるが、根は真面目であるし頭の回転は速く、第一印象からは想像できないが（失礼なこと）、意外なほど物事の表裏を見極められる人間であるようだ。

だからこそ、人が付いてくるのだろう。

この天性の明るさがクルーに襲い掛かる不安を打ち消し、有事の際はその明晰な頭脳と型にハマらない性格だからこそその発想力でみんなを引っ張り切り抜ける。

その性格上乘組員は逆に不安を感じることもあったろうが（そうでなければドメルは己の常識を信じられなくなる）、彼女のプレッシャーに負けそうで負けないこの振る舞いが、未知の航海に挑むヤマトを支えてきたのだと。

——あの厳格だったスターシアが惹かれたのも、わかる気がする。

初手にキツイ一撃を貰ったのでかなり人物像が揺らいでしまったが、こうして面と向かって話してみればなかなか面白い人物だと思う。

——無論、マイペースで楽道家なうえ『天然』という属性を備えているせいで時折会話に（激しく）疲れることがあるのが玉に瑕だが、まあ許容範囲だろう。——たぶん。

ともかく念願だったヤマトとの交渉に続き、スターシアすらも惹きつけた彼女の人柄の把握を果たしたドメルが満足していると、

「ドメル将軍。一つお願いがあるのですがよろしいですか？」

と切り出された。

はて、なにが望みだというのだろうか。

その要望に快く頷いたドメルはエリナに準備をお願いしたあと、艦長室の外で待っていたゴートに案内されて第一艦橋に降り立った。

ユリカも昇降機能付きの艦長席で早々に艦橋に降りて来ている。

艦長席の傍らには古代艦長代理と並んで見かけない男性が立っていた。

男性は板についていない敬礼と合わせて、

「戦闘班航空科所属、ガンダムダブルエックスのパイロット、テンカワ・アキトです」

と自己紹介をした。続けて「私の旦那様でくす」とそれはもう嬉しそうにユリカの補足も頂く。

彼がそうなのか。

アキトは真っ赤になった顔で「すみません、艦長——妻がご迷惑をかけまして」と恐縮している。

面食らったのはたしかだし、思っていた人物像とは三五〇度ほど異なっていたが、悪い人間ではないし敬意を払うに十分な人物だとは思っている。

話していて少々——いや結構疲れるのは事実であるが。まあ、こちらが抱いていたイメージとのギャップの問題だろう。そうとでも思わなければやっていられない。

そんな考えがつい顔に出してしまったのか、アキトはもちろん進もほかのクルーも気の毒そうな顔をしている。

そうか……みな、同じような感想を抱いているのだな。

ドメルは妙な親近感を抱いた。彼らとは、きっとこれからも仲良くやっていけるだろうと、心の底から実感した。

「ドメル將軍、準備ができました」

通信室でガミラスの超長距離通信装置との接続作業をしていたエリナから報告を受け、ドメルはドメラーズ三世の通信コードを使用してガミラス本星に通信を繋げる。

本来ならヤマト艦内の通信室でやる予定だったのだが、ユリカがデ

スラー総統と話をしたいというので第一艦橋で行われることになった。

デスラーはユリカに興味と関心を持っていたので彼女からの要望は願ったりかなったりだった。が、彼女から要望を聞かされたとき、ふと思いついたドメルからも一つだけ要望を出しておいた。

さて、うまく転んでくれるといいが。

「デスラー総統、ドメルです。無事にヤマトに乗艦、彼らはわれわれと交渉する用意があるとのことですよ」

「そうか……」

デスラーはドメルがヤマトの艦橋と思しき場所から連絡をしていることに疑問を覚えつつ、ひとまず国家の危機の一つは去ったと安堵する。

その思いのままモニターに映る室内に目を向けると、デスラーの姿に緊張気味のクルーの姿が映る中、一段高い座席に座る女性の姿を捉えた。

緑色のバイザーを着用して耳には青いヘッドフォンのようなものを付けているが、彼女がおそらく……。

「デスラー総統、ヤマトのミスマル艦長が、総統と話がしたいと申し出ております」

ドメルの言葉にデスラーは大いに心が躍った。

ついにあのスターシアを説き伏せ、デスラーにとって最も理解し難い『個人的な愛憎』が、国家の危機を救うに足るのかどうかの答えを得られるやもしれない人物と、通信機越しとは言え対面できるのか！

デスラーは翻訳機が正常に作動しているかを改めてたしかめる。問題なく作動している。念のために準備をしておいて正解だったようだ。

翻訳機の準備が整ったことをドメルに伝えると、彼はバイザーを付けた女性に振り返って促した。

「それでは……ミスマル艦長、どうぞ」

促されて女性は「それではご要望にお応えして……」と妙な前置きをしたあと、

「はじめましてデスラー総統！ 私がヤマト艦長のミスマル・ユリカです！ ぶいっ！」

ドメルの要望どおりだ。さきほどとまったく同じ挨拶をしてもらえた。

予想外の行動にさすがのデスラーも驚きで目が丸くなり口が半開きになる。ついでにはほかのクルーが全員頭を抱えたり顔を覆って恥ずかしがっている姿が目に入った。

予想どおりの結果にドメルはデスラーに見えないように注意しながら、強く拳を握る。

（申し訳ありません総統。しかし、ミスマル艦長の人柄を知りたいと切望されていた総統の気持ちを汲むには、このほうがいいと……ご無礼をお許しください！）

故意的だった。

しかし、彼なりにデスラーへの忠誠心からの行動ではあった。

第二十二話 愛を説いて！ 目指せ大マゼラン！ Bパート

予想だにしない挨拶にデスラーは、ついでに傍らに控えていたタランもヒスも同じような表情で驚き一瞬思考が停止してしまったようだ。しかし無理もないことだと思う。

デスラーはもちろんタランもヒスも、『あの』ヤマトの艦長ということで、ドメルのように不屈の闘志と溢れんばかりの使命感を感じさせる、デキル女性と（それもある程度年配者であるすら）考えていたにも拘らず、実際眼前に現れたのは年齢の割にいろいろ頭が軽そうなキャピキャピした女性。

衝撃を受けないほうがおかしい。

それでも大ガミラス帝国の総統として国を統率し、難局に立ち向かってきたデスラーの立ち直りは非常に速かった。

彼女の行動を咎めるでも眉を顰めるでもなく、非常に大らかな格好で受け止める。

「これはこれは、なかなか元気のいい艦長さんだ。——お初にお目にかかる、私が大ガミラスの総統デスラーだ。以後お見知りおきを」

ユリカの非を咎めるどころか受け止めてみせたデスラーの姿に、画面に映っているほかのクルーから、

「ユリカさんの『あの』挨拶を怒りもせず流した……！」

「凄い……！ さすがはガミラスの総統だ……！ 器がデカイ……！」

と驚いている。特に薄青の髪と金色の目を持つ細身の少女と、ミスマル艦長の隣にいるぼさぼさな髪の男性が。

やはり、彼らの常識でも『あれ』はないのか……デスラーは地球の常識が『あれ』ではないことに少し安堵する。もしも常識であったなら地球人に対する心象が悪くなったであろうことは、確実だ。

ちらりと見ると、ドメルもデスラーの様子に感服している様子。

……そうか、やはり君もこうなったのか。

デスラーは少しだけ彼に同情した。たしかにこれは面食らう。

とはいえ、彼女をよく知りたいと願ったのはデスラーだ。おそらくドメルもこれで相当面食らいながらも、デスラーの願望を汲んで敢えて非礼とも取られかねないこの挨拶を願ったのだろう。

実際、彼女は恥ずかしいのか頬を赤くしている。……突飛な割に羞恥心はあるようだ。だったらなぜドメルにそんな挨拶をしたのかと問いただしたい欲求が沸き上がるが、そこは我慢だ。

「今回は交渉に応じてくれたことに感謝する。君たちにはガミラスに向かつてタキオン波動収束砲——いや、波動砲と呼んでいたね。それに向けて権利も動機もある。にも拘らず言葉による解決という手段を許してくれたことに感謝する。……そして、君たちを辺境の星の野蛮人と嘲るような真似をしたことを……ガミラスの総統として深くお詫びする」

「いえ、私共と致しましても、スターシアの顔に泥を塗るような真似はしたくありませんでしたし、このまま戦争が続いて殲滅戦になるのは望んでいないので、大変ありがたい申し出でした。当然ですが、ヤマトはカスケードブラックホールの排除に全力を注ぎます。なので、できるだけ今回の和平で便宜を図って頂けるとこちらとしてはありがたいのですが……」

彼女の言葉にデスラーも大きく頷く。対価としては妥当なところだ。

「無論だ。詳細に関しては今後地球政府との間で協議する必要があるが、できるだけだけの支援をしよう」

これで、デスラーが理想とする『偉大なガミラス帝国』の実現が不可能になってしまうかもしれないが、もう四の五の言っていられる状況ではない。

ヤマトが信じられるとわかった以上、味方に取り入れることに迷いはなく、そのためならこの苦々しい敗北も受け入れよう。

——そうすれば、ガミラスは路頭に迷うことも、母なる星を失うこともなくなる。生き残りさえすれば、足掻くことはいくらでもできる。

デスラーはヤマトが失敗するとは最初から考えてもいない。

ヤマト最大の使命、地球の救済という目的の前ではカスケードブラックホールなど『道中の障害』に過ぎないのだ。

そんなものに屈するヤマトではない。

デスラーはその一点で、ヤマトを信じることができた。

複雑な思いを胸に抱きながら放たれたデスラーの言葉に、ぱつと笑みを浮かべるユリカ。

バイザーで目元が覆われていてもはつきりとわかるほどのリアクションに、デスラーの心中がさらに複雑な感情が吹き荒れる。

「そう言うことでしたら、私たちも心置きなく全力を尽くせます。それにつきまして、どうしても必要になるものが三つほどありますので、用意して戴けるとありがたいのですが……」

ユリカが告げたのは、カスケードブラックホールの詳細な情報と、反射衛星砲に使われている反射フィールド関連と波動エンジンの制御技術の提供であった。

カスケードブラックホールのデータは当然だがデスラーも提供するつもりだった。ヤマトが排除してくれるのなら、ガミラスとっては願ってもない千載一遇の好機。それを邪魔立てする理由はない。

だが反射衛星砲と波動エンジン関連のデータはいつたいなに使うのだろうかと尋ねてみたところ、

「実はヤマトのトランジッション波動砲は、地球側の技術不足で不完全なままなんです。特にカスケードブラックホールを破壊するためには、六発分以上のエネルギーを一度に撃ち出す全弾発射が必須なのですが、それを実行するための耐久力がヤマトにはないんです。もしいまの状態で発射したら、ヤマトは確実に内部から破壊されて沈みまします。下手をすると、私たちは共倒れということも——」

なるほど、それはたしかに困る。

ヤマトが沈めばガミラスとしては最も利益を得られる展開になるのだが、デスラーとしては絶対に避けたい展開だ。

——恩を仇で返すなど、デスラーの美学に反する。

イスカンドルも巻き込まれているとはいえ敵対国、しかも自分たち

を滅亡の淵まで追い込んだガミラスを救うとまで言い切った彼らの
気高い精神に応えずして、なにが偉大な大ガミラス帝国か。

「それに、波動相転移エンジンのフルスペックを解放するためにも、波
動エンジンの耐久力の補強はもちろん、エネルギー制御の改善も必要
でして……」

ヤマトの大力の正体はそれだったのか。

まさか、相転移エンジンが——過去の遺物が波動エンジンの増幅装
置として機能するとは思っても至らなかった。

もともとガミラスの波動エンジンもイスカンドルが開発したとき
に提供された代物だけに、意図的に封じられた、または伝えられな
かったであろう点が多いことを、改めて実感する。

「わかった。ガミラスの存亡にも関わる事柄ゆえ、特例として技術提
供しよう。カスケードブランクホール破壊までは、ガミラス星に滞在
してヤマトの改修作業を行うといい。ドックを用意させよう」

「感謝します、デスラー総統……正直に言いますと、ガミラスとこのよ
うな形で手を取り合え、私を始め、ヤマトクルー一同心から安堵して
います。もしもヤマトが軍事力で勝るガミラスに勝てるとしたら、そ
れは波動砲の威力を前面に押し出した力押ししかありません。そ
うなれば、ガミラス民族はもちろん、ガミラスの庇護下にあるほかの
文明にすら弓引くも同然の結果になっていたと考えると、改めて講和
という手段を選べたことを嬉しく思います」

彼女の言葉にデスラーも同意を示す。

たしかにヤマトは強力無比な戦艦ではあるが、数の暴力に抗うには
限度がある。それを覆すのが波動砲というのなら、なるほどたしかに
彼女の言うとおり、そしてデスラーが予想していたとおり、和合せず
に最後の最後まで行ってしまうえば、その先に待つのは凄惨極まる殲滅
戦しかない。

——安堵するに足る出来事だ。

スターシアから聞き及んでいるのなら、ガミラスが支配する星々の
すべてが武力による侵略のみならず、自ら進んで庇護を求めてきた文
明があることくらいは想像がつかはずだ。

「それはこちらも承知していた。君たちはすでにスターシアから知らされているだろうが、わがガミラスとて余裕がない状況にある。君たちがイスカンダルを目指す以上、途中で阻めない限り必ずガミラス星も波動砲の射程に入る……私にはガミラス民族を護る義務がある。君たちが報復のため、ガミラスそのものを滅ぼすことを前提していると仮定した場合の対応を検討しつつ、そうでなかった場合に備えた対応として講和も考えられていた……君たいが誇り高き戦士であったことを、幸運に思う」

「私たちも同じ気持ちです。——ただ、講和の切っ掛けになったとはいえ、第三者にこの戦いを見られたことは、地球・ガミラス双方にとって不利に働くかもしれない。ガミラスにとっては戦艦一隻に抗われた結果講和を許してしまったというのは、国家の威厳にどうやっても傷をつける結果になってしまいますし、地球にとっても波動砲の存在であればこそそれが成ったと見られてしまえば、国力を大きく損なっている現状では波動砲の技術をほかの国家に求められ、さらなる侵略を招く可能性が否定できません……」

それにはデスラーも思い至っていた。

ガミラスはどう足掻いてもヤマト一隻に苦汗を嘗めさせられた事実を消すことはできない。暗黒星団帝国だけではなく、ガミラスに敵意あるほかの国家にとっても、ガミラスが弱体化した、と考えられるも不思議はない。

そして地球に関してもそのとおりだと思う。ヤマトに波動砲が搭載されていなかったと仮定したら、太陽系すら出ることは叶わなかっただろう。出られたとしてもベテルギウスするとき確実に始末できていたであろうと考えれば、たった一隻の戦艦で（本腰を入れていたとは言えなかったが）ガミラスほどの国家に抗える力を与える波動砲の威力を、これ以上なく外部に示した形になる。

これは争いの種になる。

彼女は第一印象の割には頭が回るようだ、デスラーはらしくもなく失礼な感想を思い浮かべた。

ユリカとのやり取りを重ねる。

話が進むたびにデスラーは自身の抱える疑問がさらに増したのを感じた。

話をしてわかった。彼女は地球を救うだけではなく、ガミラスのとまでも気にかけている。

なぜ、そこまで交戦中の敵国に対して気を回せるのだろうか。

「……ミスマル艦長……直接話す機会を持たせなければ尋ねたいと思っていたことがあるのだが……」

「? なんでしょうか?」

「私はスターシアから、君が家族のために戦っていると聞いた」

「そうですけど……それがどうかなさいましたか?」

彼女は脈略のない話の繋がりに困惑している。

無礼だとは自分でも思う。だが、デスラーはどうしても気になるのだ。

「私には理解できない。そういった個人的な愛憎が、国家の危機を救う動機足りえるのか? それに君は地球だけではなくガミラスまでも気にかけている。家族という狭く小さいコミュニティーを護るだけなら、ここまでしなくても実現できるだろうに」

困惑を多分に含んだデスラーの言葉に、ユリカは小首を傾げたあと、

「デスラー総統には恋人とか奥さんがいないんですか?」

と切り込んで来た。

率直過ぎてタランが「少し失礼では?」と苦言を呈するが。デスラーはそれを片手で制する。

こちらから振った話題で、礼を失したのもこちらが先だ。目くじらを立てる必要はない、と。

「いない」

「好きな人とかも?」

「あいにく、そのような感情自体がどのようなものかわからない。だから答えを求めている」

デスラーの問いにユリカは「うーん」と腕を組んで悩んでから、
「たぶんそれは、理屈じゃなくて心の内から湧き出るものだと思うん

ですよ。私だつてアキト——夫のことは大好きですけど、その気持ちに気付いたときだつてなんとなく、ああ、これが恋なんだなつて思つたくらいですし……」

「……そういうものなのか？」

「だと思えますよ。まあ、私とアキトの場合はもう生まれたときからそうなるつて決まつてたようなものですけどお！」

言いながら頬に手を当てて身を振っている。

——なんだろう、この背中がむず痒くなる思ひは。

ちらりと視線を横に向けるとタランもヒスもむず痒い顔をしているではないか。

つまりこれは、当たり前前の反応なのだろうか。

おや、隣に立つていた男性が赤くなっているではないか。もしかすると——彼が件の夫なのだろうか。

ついでにほかのクルーも間違いなく羞恥で赤くなっている。

……そうか、君たちも大変なのだ。同情する。

「私個人の見解ではありませんが、個人的な愛憎が国家云々に関しては十分な理由になると思います。だつて私はそのために地球を救いたつて思つてますから。それに難しく考える必要なんてないと思います。みんな誰だつて、自分が生きて行く世界を護りたいつて考えるのは、当然の欲求だと思います」

「当然の欲求？」

「はい！ 全員が全員そうじゃないとは思いますが、私の場合はそうでした。私、これでも料理人の妻です。私個人としては、夫と一緒に生活できるだけでとても幸せなんですけど、それは私の幸せであつて夫の幸せとイコールじゃない。だつて、夫の夢は一人前の料理人になることだから。そして、自分の料理を食べてみんなに笑顔になつて欲しいつていう夢があります。だから、妻として夫の夢を応援して支えるのは当然のことなのです！」

胸を張るユリカだが、デスラーにはイマイチピンと来ない。

幼い頃から帝王学を学び、自分なりの美学や願望をもつて総統の地位に就いたとはいえ、デスラー自身はその権力を自分自身の至福のた

めにはなく、ガミラスという国家をよりよくするために使ってきた。

だから、わかるようで、わからない。

「イマイチ理解されてないみたいですけど、要約に要約を重ねてしまうと、愛って繋がっていくものだと思うんです。自分がだれかを好きになる、好きになった誰かにも別の好きな人がいて、その別の人にも——。そうやってつながり合っていくのが、人の世だと私は考えています」

満面の笑みと共に放たれたその言葉が、デスラーの胸に染み渡る。

「……愛とは、繋がっていくもの？」

初めて、聞いた言葉だ。

「はい！　人は愛を育んでみんな生きて行くものだと、私は思っています。もちろん人には個性があります。だからその個性がときにぶつかり合ったり——酷いときは命の奪い合いに発展することもあります……それでも、私たちがすべきことは憎しみあつて殺しあうことではなく、愛し合うことだと思うんです。それがすごく難しい、限りなくきれいごとでしかないとしても、私は頑張ってみたいんです。……だって、愛がない。それ以上に悲しいことなんてないって、いまは思えるんです」

彼女の言葉に、漠然とだがデスラーも理解し始めていた。

要するに関連付けなのだ。

彼女にとって、自身の幸福はもちろん家族や友人と言った存在も愛すべき存在であり、ゆえにそれを取り巻く状況や世界そのものを護りたいという願望の発露に繋がりが、結果としてそれが国家の危機を救う原動力となった、ということか。

——それはデスラーがガミラスという国家のために死力を尽くす様と似ている。

ガミラスという国家を形成しているのは人だ。人が集って初めてそこは『国』となる。

それを理解しているからこそデスラーは、決して国民を追い詰めるような真似はしなかった。

国民の生活を豊かにするためにも、国家としての力を付けるためにもさまざまな努力を重ねてきたし、成果が示されたときは心から喜んだものだ。

具体的には違うのかもしれないが、大切なモノと関連付けられたからこそデスラーはガミラスという国家を成り立たせるすべてを護りたいと思えるのだろう。

そこまで考えが及んだとき、デスラーの胸に去来するものがあった。

「そういうことなら……理解できる」

デスラーは彼女の言葉を反芻して噛み砕く。そうか、そういうことだったのか。

「ようやく、スターシアが私に呈していた苦言の意味が理解できた。たしかに、君の言う意味では私には……愛というものが見えていなかった。国を愛する心を持っていたというのに、国という群ればかりを見て、人という個を見ていたわけではなかった……そして、自分とは異なる価値観に対する理解も、及んでいなかった。……ありがどうミスマル艦長。期待していたとおり、君に教えてもらうことになったようだ」

「デスラー総統……」

「……この宇宙には暴力が蔓延っている。中には破壊と略奪に明け暮れる無法者もいる。そうならないように気を付けていたつもりだったが……どうやら、私はそういった連中と紙一重のところになっていたらしい。……ガミラスのためとはいえ、これまで私は戦いの中にある命の輝きに美しさを見出して来た……その結果として国が繁栄するのならそれが正しいと思ってきたが、どうやら私は間違っていたようだ。いまは自国のことばかり考え、この宇宙で生きるほかの命に敬意を払いきれいになかった自分が恥ずかしい。……そして、完璧と胸を張れる調査も出来ていないのに醜い面だけを見てすべてを理解した気になり、君たち地球人を一方的に見下したことを、改めて深くお詫びする。われらの心は——私の心は——」

もはや、最後の言葉を口にするのに戸惑いはない。

「地球人となんら変わりはない。もう、地球と戦う理由はない。この戦争は終わりにしよう」

その言葉に彼女は驚きと喜びの混じった表情を浮かべ、「じゃあ、公の場における立場とかはありますけど……私たちもうお友達つてことで大丈夫ですね！」

タランとヒスが「なぜ一気にそこまで飛躍するのですか……!?!」と小声で悲鳴を上げているが、デスラーはその言葉を聞いて胸に暖かいなにかが宿るのを感じた。

そうか、考えてみれば愛する人どころか、個人として親しい友人すらいなかったことに、いまさらながら気付かされた。

立場もあるとはいえ、デスラー自身が他者に一歩踏み出すことがなかったのも原因だろう。

そうか、あのときの、和解さえ成立すればヤマトは最高の理解者になるだろうという予感——間違いではなかった。

「ありがとう、ミスマル艦長——貴艦らの航海の安全を祈る。一刻も早いガミラス星並びイスカンドル星到着を期待している。今度は、顔を合わせて話がしたいものだ」

そう微笑むと彼女も微笑みを浮かべ——直後、激しく咽込んだ。

慌てて傍らに控えていた男性（おそらく彼女の夫）が駆け寄って背中を摩る姿が見える。

「——!?! どうしたのだ!?!」

「すみませんデスラー総統。艦長は病気で体調があまりよくないので。これから先は、艦長代理の古代進が引き継ぎます」

傍らに控えていた、ユリカと同じコートを着た青年が変わって応対する。

ユリカの咳は止まらず、顔色もどんどん悪くなっていくのがモニター越しにも理解できてしまった。

「わかった。艦長代理が変わって貰おう。すぐに艦長を医務室に連れて行きたまえ。無理をさせたようですまなかった……」

デスラーは素直に謝罪して、下がらせるように訴える。

彼女の隣に控えていた男性は礼を述べると、彼女を抱き抱えて第一

艦橋をあとにする。

二人を見送ったあと、彼女の病状について軽く尋ねてみた。

「——艦長の病気はガミラスとは直接関係しない、地球人同士の争いが原因です」

と前置きした上で簡単な説明を受けた。

ボソソジャンプ演算ユニットに由来するナノマシンに侵されている、と。

なるほど、コスモリバーシステムは地球だけでなく自分自身の将来すら掛かった、文字どおり最後の希望だったわけか……。

それなら、さきほどの動機と合わせて彼女が——ヤマトが必死な理由がわかる。

誰だつて個人としての幸せは掴みたいものだということくらい、デスラーも理解している。

すでにメンタルに差がないと理解できた以上、あざける気持ちもない。

「ということとは——ヤマトにとってイスカandal到達のタイムリミットはあと一カ月程度ということになるのか。それも最大限の延命を図り、ミスマル艦長にこれ以上負荷を掛けないという前提があつてのこと……」

あまりにも短い時間だ。

報告によれば、ヤマトは連続ワープ技術をついに完成させたようだが、それでも二四時間当たりの跳躍距離は精々五〇〇〇光年。トラブルなく常に最大距離で跳べたとしても単純計算で一六日後に到着となるだろう。

残された時間の約半分を移動に使ってしまう。

何事もないのなら余裕があると言つてもいい。だがヤマトにはカスケードブラックホールへの対応という任務が残されている。

カスケードブラックホールはガミラスとイスカandalを飲み込むまで、あと三カ月程度の距離にある。もちろん飲み込まれる寸前まで待つわけにはいかない。ヤマト自ら出向いて対応してもらう必要があつた。

そのための航程に消費する時間に加え、波動砲の全力を出すために必要な改装を加える時間を考える必要がある。加えてデスラーの推測だが、六発全弾発射システムの危険性を考えれば、艦長権限でのセーフティーが掛かっているはずだ。

その点も質問してみたところ、

「そのとおりです。残念ながら、私の権限ではトランジッション波動砲の全弾発射はできません。それに、次元転移装置が生み出す重力場の乱れを考慮して狙いを付ける必要があるため、病気の代償で手に入れた艦長の特異能力を利用した狙撃が考案されています。……カスケードブラックホール破壊までは、彼女をヤマトから降ろすことができます」

悔しそうな進の表情にデスラーも思案する。

これではカスケードブラックホール対策を終えるまで、冷凍睡眠で引き延ばしを図るという手段は使えそうにない。

……となれば、ヤマトのイスカンダル・ガミラス星到達までの時間を短縮させるのが吉であろう。

一番の解決法はガミラスの超長距離ワープ技術を提供し——ヤマトが体得したばかりの連続ワープ機関をブラッシュアップすること。だが、最高軍事機密の漏洩以前に改修にかかる時間を考えれば今回は諦めるしかない。

だとすれば——ちようど要望もあつたことだ、この手で行こう。

「ドメル」

「はっ！」

「君には継続してヤマトに乗り組んでもらうが、ヤマト護衛のために何隻か同行艦を選抜してくれたまえ。——ヤマトのワープ機関を改修している余裕はない。わが軍の艦艇で先導し、曳航することで超長距離ワープを実現させる。これでガミラス到着までの時間を短縮させ、全体的な日程の圧縮を図る」

同じ結論に至っていたのだろう、ドメルはすぐに同意した。

「本当なら十分な数の護衛艦を付けてやりたいところだが、万が一を考えバラン星にも十分な戦力を残す必要がある。また、最短ルートを

通るうえで避けられない七色星団の環境を考慮し、少数精鋭の部隊でヤマトを護衛、ガミラス星に案内する作戦を取る。——それと、超長距離通信の使用を許可する。彼らも地球と話すことがあるだろう。敵は必ずヤマトを狙ってくる。対策を講じるために必要であれば、機密情報の一部開示も許可しよう」

「了解しました、デスラー総統。私のすべてを掛けて、ヤマトのガミラス星到着を速めてみせます」

ドメルもやる気は十分だ。

balan 星基地を——ガミラスの明日を左右する重要拠点を護りきれなかった失態をヤマト護衛で償って見せると、気炎を吐いている。そうやって話が纏まりつつあったとき、異変が起こった。

「何事だ!?!」

通信に割り込む形で鳴り響いた緊急コールに、デスラーは険しい表情で応える。

「デ、デスラー総統! 暗黒星団帝国のものとされる艦隊がガミラス星並びイスカandal星に向かって進撃中です! レーダー反応が微弱であるため総数は分析中ではありますが、会敵予定はいまから二〇時間後と予想されます!」

やはり balan 星基地を攻撃したのは、こちらの動揺を誘うためだったか。

デスラーはそれ以前から暗黒星団帝国の狙いが最初からガミラスへの侵略にあり、そのための陽動として balan 星基地を襲ったであろうと見当は付けていた。

実際、いまガミラス軍部は予想だにできなかった大損害に動揺が広がっている。士気が揺らいでいる状況で襲われていたらひとたまりもなかっただろう。

しかし、最大の脅威として認識していた宇宙戦艦ヤマトと事実上の和解が成立しているため、全体の動揺は幾分和らいでいる。

連中がヤマトの存在をどの程度認知しているかは定かではないが、ヤマトの存在は連中にとっても相当なイレギュラーとして機能しているはずだ。だとすれば敵が次に打つ手は——。

「デスラー総統！　すぐにヤマトも救援に向かいます！」

「……心強い言葉だ、古代艦長代理。ヤマトはわがガミラス帝国と十分に渡り合える猛者、助力頂けるのならこれ以上の救援はない」

デスラーは大ガミラス帝国の総統として、戦艦一隻の救援に頼もしさを感じてしまう自分のおかしさに笑みを浮かべてしまった。

たしかにヤマトは強いが戦艦一隻。その救援を心強く感じてしまうのは大国の長として情けないことだろう。

だが——ヤマトとデスラーは似た者同士。立場が逆であったのなら、同じ決断をしていたであろうと考えればもはや迷いなどない。

ヤマトは強い。本来侮られて当然であろう単艦という身軽な立場、圧倒的劣勢を常に背負っているからこそ生まれる柔軟で型にはまらぬ戦術。それを活かしきる艦と搭載機のスペックの高さ。

その実力は冥王星基地陥落と、次元断層内での戦闘でいかに示されている。

「デスラー総統。敵の目的に関して、こちらが得ているだけの情報を伝えたいと思います」

進は簡潔に纏めて知らせてくれた。

暗黒星団帝国が現在彼らが行っている宇宙戦争を優位に進める目的で、ヤマトの波動砲を欲したことを。

「……なるほど。ならば、連中の狙いはイスカンダリウムとガミラシウムである可能性もあるな……どちらも純度が高くエネルギー変換効率に優れた地殻物質。どこかでその情報を得て狙ってきたか」

ガミラスが独自にヤマトと同じ波動砲——デスラー砲を開発していることを知られているかは定かではないが、知られていることを前提に対策したほうが足元を掬われ難そうな予感がする。

こちらはすでに最高軍事機密の瞬間物質転送器を奪われているし、余裕のなさもあってテストの際の隠蔽工作が足りなかった可能性も否定できない。

安易な使用は却って首を絞めるやもしれないし——ヤマトを認めただ以上、安易に使っていい代物ではないことも理解した。

これは……本当に最後の切り札だ。

そういつた理屈とは別に、デスラーの第六感が敵にデスラー砲を使うなど警告している。

こういつた感は信じたほうが賢明であると、経験上知っていた。あとは——ヤマトの到着までに仕留められるか、それとも助太刀願うことになるのか。それを左右する敵の出方と戦力の徹底分析次第だろう。

（——この大ガミラス相手に挑んだのだ、覚悟はできていると見た。わが愛すべき祖国、簡単に討ち取れると思うな）

降りかかった火の粉を払うに躊躇はない。

偉大な祖国を護り抜くは総統の務め。断じて屈することなどないのだ！

「島、ガミラス艦に曳航して貰ったとしても、イスカンドルとガミラス到着にはどの程度の時間が掛かると思う？」

「データだけではなんとも言えんが、ガミラスのワープ能力はヤマトのそれを凌いでいる。数日中には着けると思うが……そのためにはデスラー総統が仰っていたように、最短コースを取らなければならぬいだらうな」

大介が難しい顔をしていると、水先案内人を務めることになったドメルが捕捉のためのデータを取り寄せていた。

そのデータを参照するため、ユリカを含めたメインスタッフは中央作戦室に移動する。

正直状態がいいとは言い難いユリカだが、もしかしたら自分が知恵を貸す必要があるかもしれないと、イネスと雪を伴ったの参加とあいなった。

車椅子に座って点滴台と共に参上したときは、誰もが「大人しく寝てろ」と容赦ない物言いので氣遣ったのだが、結局領かなかった。

ちなみにドメルはその物言いに手で顔を覆っていた。

ああ、そういえば艦長にたいする言いようではなかったですね。

「ヤマトの諸君、これを見てくれ」

部屋の中央に立ち、ルリが表示したデータ——星系図を愛用の指示棒で指しながらドメルは解説を始めた。

「これがイस्कアンダル星とガミラス星を擁するサンザー恒星系だ。ちよようど、大マゼラン雲のこの辺りに存在している」

言いながら大マゼラン雲の一角を指す。

「そして、ここが諸君らの銀河系と大マゼラン雲の中間地点——いまわれわれがいるバランス星だ。ここからイस्कアンダル星並びにガミラス星に最短コースを取るとなると、避けて通れなくなるのがタランチュラ星雲だ。……この星雲は大マゼラン近海の領域の中でも最も活発なスターバースト領域にあたり、その範囲も広大。特に中心近くの若い星団は、君たちの太陽の二六五倍もの質量を持った青色超巨星を始めとする巨星や超巨星から構成されていたりと危険地帯が多い。われわれとて迂闊には近づけない場所が多く、残念ながらそれらの重力場の影響で大ワープもできない。一気に突破することが難しい領域なのだ」

ドメルがルリに視線で促すと、この手の作業は手慣れているルリがすぐに表示される情報を切り替え、小さなウインドウも併せて見やすいレイアウトで表示する。

「しかし今回は急を要するため、危険を承知で最も短い距離を走破する必要がある。そうなると避けられないのがタランチュラ星雲の中でも最大の難所——七色混成発光星域、通称七色星団と呼ばれている宙域だ。ここは、異なる性質を持った六つの星とガス状の暗黒星雲、黒色矮星からなる混成星団だ。濃密な暗黒ガスと星々から流出する星間物質によって生み出される強烈な宇宙気流が特徴で、これらの影響で長距離レーダーが機能不全を起こし有視界による航行も困難。通年通して『嵐』で荒れ続けている宙域と言っても過言ではない。場所によっては『凧』の状態にある場所もあるが、それは極限られた場所、時間も限定されている」

ドメルの言葉に進たち押し黙った。

オクトパス原始星団を思わせる、異なる性質の恒星が互いに干渉し

合って生み出される危険地帯。真つ当な神経の持ち主ならず迂回すべき場所と言つても過言ではないだろう。

「そういった環境ゆえ、君たちとの和解がありえらしたらイスカandal到達後と踏んでいたわれわれが、最後の決闘の地として選んでいた場所でもある。ヤマトと少数戦力で渡り合うには、こういった荒れた場所で君たちが目暗ましされている内に、新兵器の瞬間物質転送器を使った転送戦術で翻弄、隙を見て試作兵器のドリルミサイルで波動砲を封じ、抵抗力を削ぎ落した上で降伏または撃沈を狙う——という策を練っていた。無論、君たちが勝てば以降ガミラスはヤマトに手を出さないという条件も添えて、戦つて貰うつもりだったのだ」

「なるほど——たしかにこの場所であの転送戦術を初見で食らったら混乱は避けられませんか。私たちはボソソングジャンプを使った同じ戦術を構築した一派を知っていますし、有効性も把握しています。初見での確に対処するのは厳しいですね」

木星が運用し、火星の後継者がほぼ完成にまで漕ぎ着けていた、ボソソングジャンプ戦法。

一度食らえば連想して対策——まではいかなくても心構えくらいはできるだろうが、即興で対処して凌ぎきるのは不可能に近い。

事前情報があるいまですら、根本的な対策は不可能な状況にある。

「幸運なこと、実行する前にあなたがたとの和解が成立したのでお蔵入りにりましたが、この作戦は暗黒星団帝国——最低でもいまガミラスに仕掛けてきた一派には知れていると考えるのが妥当です。いまはお話できますが、私がヤマトとの決戦に使おうと技術部に用意してもらっていた転送器とドリルミサイルは、事前テストのため派遣されていた部隊ごと彼らに鹵獲されたと見てまず間違いないでしょう。その際なにに使うつもりだったのかも聞き出されているでしょう。だからこそ、連中は——」

「ヤマトに目を付けて手に入れようとした、ということですね」

進もこれで因果関係がはっきりしたと納得する。となれば——。

「連中はヤマトとガミラスが共同戦線を張ったところを目撃している。こちらの狙いをどの程度掴んだのかは不明だが、ヤマトがガミラ

スとの全面衝突を避けて組みしたと考えることは十分あり得る。となれば、バランス星攻撃で浮ついたガミラスに仕掛けた連中も、ヤマトが本星の防衛戦に参加する可能性を懸念しているはずだ。真つ先に、波動砲装備のヤマトを潰しに来るだろう」

真田も渋い顔をしている。

ヤマトは最短でイスカンドルとガミラスに到達し、その防衛に当たらなければならない。だが、敵がそれを予測しているのなら必ずどこかで妨害をしてくる。波動砲の威力を間近で見たのなら猶更。

そして、最短コースを取る以上避けられないのがこの七色星団で、そこでヤマトを迎え撃つガミラスの策を知っているとあれば――。

「真田工作班長が考えているとおり、ここでヤマトを妨害しようとするでしょう。いかに波動砲が決定的な威力を持つといっても、当たらなければ意味を成さない。レーダーも光学カメラも正確さを失うこの宙域でなら、波動砲による先制攻撃を避けることができると思えるのは自然です」

「レーダー障害が著しいとは言っても、それを回避するための手段がないわけではありません。ヤマトにも搭載されている探査プローブのような探査機器を撃ち出す、艦隊を広範囲に散開させるなどしてデータリンクを確立すれば、探査範囲を補うことは可能です。それにワイプアウトの前兆そのものは観測可能ですので、事前に注意さえ払っていれば、完全な不意を突かれることだけは回避できます」

「パルスプラストを増設した甲斐があったということだな。手数が増えた分、対処もしやすくはなっている」

ルリとゴートが各々の意見を口にする。

こうなると、運よく会敵しなかったということがない限り、まず戦闘は避けられない。

となると問題は――。

「転送戦術に対する効果的な対抗策は現状ありません。しかし瞬間物質転送器にはその性質上、運用によってカバーしなければならぬ致命的な弱点もあります」

「――片道一方通行であるということですね、将軍」

ジュンの指摘にドメルは頷く。

そう、片道一方通行なのだ。つまり攻撃部隊は消耗したら自力で帰艦しなければならぬ。

断続的に部隊を送り込んで翻弄すれば、撤退中の部隊への追撃を抑えたり、その行方を惑わすこともできるかもしれないが、それは相手が困惑してくれた場合に限る。

「そうです。最初からそれがわかっていたら、撤退中の部隊を追尾して母艦の位置を掴むことは十分可能です。また、総統もこの欠点にお気付きになられ、送り込む物体をミサイルや宇宙機雷など、撃ちつばなしにしても問題がないものに変更するなどの対処法を編み出しておられました。連中もその程度の知恵は働くでしょうが、それは事前準備が必要になります。転送器を鹵獲した部隊がそれを実行可能なほど物資に余裕があるかどうかにかかっていると云ってもいいでしょう」

相手の懐事情が読めないのでなんとも言えないが、ガミラス本星に大挙として襲撃した以上余裕があると考えるほうが正解だろう。

「そうになると、至近距離に出現したミサイルや機雷に対処することも考えないといけなくなりますね……ルリさん、やっぱりこの手の戦術に対する有効な防衛手段は、アステロイド・リング防御幕だと思いませんか？」

「ハーリー君の指摘は尤もだと思います。あれなら三六〇度、どの方向からミサイルや機雷を送り込まれても、そちらに接触させることでヤマトへの直撃を避けることは可能だと思います——ただ、それはヤマトからある程度離れたところに出現した場合に限ります。もし接触寸前の近距離に出現させられたらお手上げです」

ハリとルリのやり取りにドメルは否定的な見解を示す。

「あれはまだ試験段階の兵器です。そこまでの精密さはまだありません。また、送り込める物体の質量の制限もあり、現状小型艇以上の物体の転送は不可能です。また、ワープエンジンを搭載している場合はそちらとの干渉もあり転送に影響が生じるため、自力ワープ可能な艦艇を消耗させずに送り込む、という使い方もできません。この短期間

で欠点を把握して改修するのは、無理と判断していいと思います」

「ドメル将軍、七色星団の中にアステロイド帯は存在しますか？」

「いえ、あまりにも荒れているため、密度の高い小惑星帯は存在していません。それに、『風』の状態ならまだしも、荒れた場所で一戦交える可能性がある以上、精密制御を要求されるアステロイド・リングは使えないと断定すべきです」

これにはルリもハリも頭を抱えてしまう。

アステロイド・リングはヤマトの重要な防御システムの一つだ。それが使えないとなると、ヤマトの防御が必然的に薄くなる。

それに反重力感応基とリフレクトディフェンサーの補充には時間がかかる。その時間をほかの弾薬やら補修部品に割かなければならないいまのヤマトでは、どちらにせよ頼れないか。

「 balan 基地の工廠も被害を被っているが、まだ使用に耐えらえられる。短時間で用意できる物には限りがありますが、アイデアがあれば実現できる改装があるかもしれません」

ドメルの進言にふとアキトが閃いた。

「真田さん、ウリバタケさん。いつそヤマトに追加装甲ないし追加パーツを施すのって駄目ですか？ ブラックサレナとかGファルコンみたい」

アキトに言われて真田とウリバタケも「その方法なら、ある程度問題を解決できるかもしれない」と乗り気だ。

「そうだな……たしかにヤマトの消耗を抑えるための追加パーツがあってもいいかもしれないなあ……問題は作る時間だが、構造を徹底して簡略化してやれば、なんとかかなるかもしれないねえな」

「ドメル将軍、工廠に問い合わせて貰えませんか？」

真田とウリバタケの提案に、ドメルは快く応じて balan 星のゲールに事の次第を伝えてくれた。

基地司令官のゲールは意外とあっさり許可をくれた。

なんだったら建造途中、廃棄処分に回された艦艇から使えそうな資材を提供してもいいとまで言われてしまえば、あとは頭と手を動かすだけだ。

「あとは、ヤマトに同行する艦艇の選別ですね。デスラー総統の仰るとおり、この防備に隙を作らないようにしなければなりません」「ええ。ここにはまだ大勢の民間人が残されています。彼らを無防備にはできませんし、今後の地球とのよき関係を維持するためにも、バランスを捨てるわけにはいかないでしょう。敵の目的があくまでガミラス星とイスカナル星。バランスが再度の襲撃を受ける可能性は極めて低いでしょうが、第四の勢力が出てこないとは断言できない。基地に十分な戦力を残す必要があります。それに七色星団を突破するのであれば、大艦隊で突入するのは自殺行為です。荒れた場所ですの、ワープアウト可能な空間も限られてしまいますし、重力場の干渉などで多少精度も落ちます。もしワープアウト時に嵐に煽られて接触事故でも起こったら、一気に壊滅してしまう危険性もある。諸々の事情を考慮すると、連れて行けるのは多くても四隻。ヤマト含めた五隻の艦隊で挑むのがよろしいかと」

進とドメルは同行艦の選別に入った。

一隻はヤマトを曳航ワープさせるのに十分な練度の人員を載せている必要がある。

通常複数の艦艇がワープを実行する場合は、衝突を避けるためワープ空間の出口が重ならないように制御している。それに対して意図的に出口を重ね、同じ出口に誘引することで強引にワープ能力に劣る艦艇を曳航するのが、曳航型ワープというわけだ。

その原理上先行する艦艇と後続の艦艇が衝突するリスクが高く、それを回避するのもそれなりの手間がかかる。

なにしろ意図的にワープアウトの接触事故を誘発するような真似をするのだから当然だ。

「幸い——と言ってはなんです、ヤマトとの決戦に備えた先鋭部隊がバランスにいます。対ヤマト戦術の最終確認のため、そしてバランス基地が攻撃を受けたときの保険として合流し、この戦いを生き延びています。彼らと共に行きましょう」

ドメルの進言に進はユリカと目線を合わせ、頷く。

「それで行きましょう。なんとしても最短時間で七色星団を突破し

て、本土防衛戦に参加しなければ……ヤマトには波動砲以外にも、ダブルエックスのサテライトキャノンがあります。迂闊な使用は自分の首を絞めかねますが、いざと言うときには頼れます」

進の進言にドメルも頼もしさを感じているようすだった。

気軽に使っていない力ではないが、使い方さえ間違えなければこれほど頼もしく——戦局を左右する力はほかにない。

「それでは、補給と整備が完了次第出発しましょう。バラン星とタランチュラ星雲までの間には大きな障害はありません。ガミラスのワープ技術なら一気に飛び越えることも可能なはずです」

「それについては保証します」

進のプランにドメルも太鼓判を押す。

ガミラスのワープ技術なら、最速を極めれば一週間程度でガミラスと地球間を移動することも可能なのだ。

——ただ、そのためには七色星団はもちろん、ヤマトが手こずったオクトパス原始星団に似た、ガミラスにとっても迂闊に飛び込みたくはない危険地帯を駆け抜ける必要があるし、なにより無理な超長距離ワープは艦にも乗員にも決して小さくはない負担が掛かる。

なので、通常は負担にならない程度に抑えつつ安全な航路を使うのが一般的。

それでも、一日一万年程度のワープなら容易いので、遅くとも一七日以内には到着できてしまうのだ。

ただし、今回は時間が切迫しているため、曳航式ワープと合わせて少々無茶をするしかない。

七色星団で本当に襲撃を受け、その後の損害回復にどの程度の時間をロスするかはわからないが、無茶をすれば残された八万四〇〇〇光年程度なら、三日もあれば突破できる。

敵勢力の規模も戦力も、ガミラスがどの程度粘れるのかも不明瞭なので三日の旅程では間に合わない可能性もあるが、いまは考えないでおこう。

その頃バーガーは第二空母の航空指揮所で思わぬ展開に絶叫して

いた。

「ヤマトがガミラスと和解したって!？」

まさに寝耳に水。もしかしたら交渉の末そうだったこともあるかもしれないな、と冗談半分に考えていたバーガーであったが、それはもう驚いたのなんの。

報告したゲットーも釈然としない様子だが、敬愛するドメルも忠誠を誓ったデスラーも乗り気なのだから文句も言えない。

「しかも、われわれはこのままヤマトのイスカandal行きの護衛としてヤマトに同行しながら本土防衛戦に参加することになった。バーガー、気持ちはわからないでもないがくれぐれも自重してくれよ。連絡要員兼案内役として、ドメル司令はヤマトに乗り続けることになっているんだからな」

と言われたがもはやいてもたってもいられなくなった。

バーガーはすぐにドメルに連絡を取って許可をもらい、すぐさまヤマトへと乗り込んだ。

——自分の目で確かめたい。

上が決めたことに文句があるわけではないが、直に触れて連中のことを知りたい。そうでなければ気持ちが乗らない。

感情に突き動かされたバーガーを、ドメルは敢えて止めなかった。なんとかなるだろうという漠然とした思いもあったが、同時に「直接見なければとてもわからない」と、経験上これ以上なく理解したからであったと、後に彼は語ったとか。

そしていま、バーガーは連絡艇から降りてヤマト格納庫に足を踏み入れる。

「——ダブルエックス」

すぐに目に入ったのは必ずの報復を誓ったはずの人型の姿。

いまは整備中なのだろう、あちこちの装甲が剥がされたりメンテナンスハッチが開いている。

多数の整備員が取り付いて部品の交換作業やチェック作業を続けているのがわかる。

少し視線を巡らせれば、ほかにもガンダム——と呼ぶべき機体の姿

も見受けられた。

報告では、ヤマト出航時に確認されていたのはダブルエックスだけだったはずなのに、航海中に三機も追加された。

——いったい連中はどういう手腕をしているのか、いやそれ以上にどうしてそんなことをしようと思ったのかが、個人的にも気になる。

「え、と。ご用件はなんですか？」

機体に気を取られていると、油汚れの付いたぼさぼさ髪青年が訪ねてきた。

「いや……ついさつきまで敵だった連中と共同戦線を張ることになったから、どんな連中なのかが気になっただけさ」

声に辛辣さが混じるのも無理ない。事態が急変するにもほどがある。

「ああ、その気持ちはわからなくもないですね。俺たちだってまだ実感が湧いてないって言うか、事態が急変し過ぎというか……」

青年はおそらく暗黒星団帝国の襲撃も合わせた感想を述べているのだろう、困惑が伝わってくる。

しかしそうやって普通に接せられると、悪態をついた自分が恥ずかしくなったのでバーガーは素直に謝っておく。

「すまねえ、困惑していたとはいえ暴言だった。許してくれ」

「気にしてませんよ。俺たちだって、冥王星のシウルツ司令が俺たちと同じメンタリティを持っているって示してくれなかったら、たぶんほとんどのクルーが納得できてなかったでしょうし」

シウルツの名を知っているのか、情報の出所はドメルだろうか。

そうか、命を捨てて挑んだあの司令官の行いが、この和平の遠因になったのか。

直接の面識こそないが、文字どおり命懸けで最大の脅威となっていたヤマトを退けたその業績に、敬意を払わずにはいられない。

「そうか……世の中、いろんなことがあるもんだな」

しみじみと呟いたあと、頭の後ろで引っかかっているなにかを感じた。そうだ、どこかで聞いた声——気付いた、眼の前の青年も同時に。「ダブルエックスのパイロット！」

「爆撃機隊の隊長！」

思わず互いに指差して、笑い出す。

「ちくしょう！ 会ったら真っ先にプロキシマ・ケンタウリでの借りを返してやろうと思ったのに！」

「げっ！ あのとときの爆撃機隊も指揮してたのかよ!？」

一触即発の空気——にはならず、互いになぜか笑い出して小突きあう珍妙な状況になっていた。

「ったく！ あんな物騒なモン乗り回してるからどんな敵つい奴かと思つたら、こんな優男だったとはな！」

「……いや、ある意味アレに乗ってるのは嵌められたというかなんと言うか、詳細を知らされていなかったと言うか」

なんじゃそりや、と問い質すとちよつと同情した。

うむ、死にかけの女房を助けるために乗り込んだ機体がたまたまあれで、それ以前の経歴（あまり詳しくは教えてくれなかったが）から任されるようになったと。

おまえ、不幸だな。

「にしてもまさか、あるとき吹き飛ばしかけた相手と共同戦線を張るなんて……」

「……………まあいい、水に流してやる。だが、個人的にも決着を付けたいと常々思ってたんだ。シミュレーターでもなんでもいいからケリ付けようぜ！」

「そう言われてもダブルエックス整備中でシミュレーターも……」

なに、スペース節約のためコックピットがシミュレーター替わりだと！

と驚いているとヤマト航空部隊の隊長と名乗った女性が現れ、

「整備終わるまでどっか行つてろ！ 邪魔だ！」

とダブルエックスのパイロット共々格納庫から追い出されてしまった。

「俺、ダブルエックスの整備が……」

哀れ彼もお邪魔虫。

結局その後は食堂で茶をしながら駄弁ることになった。

で、行く先々で出会ったヤマトクルーには気軽に挨拶され、食堂に入ったら女性クルーから「あらやだイケメン！」とか騒がれたり。

……ここは本当に軍艦か（思わず頬を抓る）。

いろいろな常識を木っ端微塵に打ち砕かれた気分になったが、彼——アキトとの会話は有意義なものだった。

——バーガーもかつて、任務で恋人を眼の前で失う悲劇に見舞われ荒れていた時期があった。

あのときは周りの連中にいろいろと面倒を掛け、支えて貰って立ち直っていまに至った経緯があるので、アキトの動機は他人事には思えなかったのだ。

結局バーガーは、アキトとのシミュレーターによる対決こそ叶わなかったものの、思いのほか清々した気分第二空母に戻っていく。

部下を殺されはしたが、同時に救われもした。あのときダブルエックスが殿を務めてくれなかったら、バーガー自身も危うかったかもしれない。

忠誠を誓った国家の意向もあるし水に流してやろう。

……だから見定めさせてもらう、ヤマトの戦いを。

二〇時間が経過した。

ヤマトは自前の艦内工場とバラン星基地の工廠を使って簡易追加パーツを制作、その身に纏ってドックを発進する。

結局ノリにノッて大暴走した真田とウリバタケとアイデア担当のイネス（ユリカの看病で手が離せない）によって、ヤマトは新たな姿に変貌していた。

ヤマトの艦体側面に、ナデシコ級戦艦のデイストーションブレードとエンジンユニットを連結したかのような構造物が接続されたのである。サイズはヤマトの全長の半分程度とやや小型で、ブレード部分は初代ナデシコ、エンジン部はナデシコCのものに似ているデザインである。

ブレード部分は強固なデイストーションフィールドを展開するための外部フィールドユニット兼武装ユニット。上下にVLSが左右

合わせて六〇門搭載されている。

エンジンユニットは戦闘で破損、機関部は無事だが艦体の損傷が著しかったデストロイヤー駆逐艦のエンジンを回して貰ったものだ。

これで重量増加分の推力を確保しつつ、防御用出力を負担することでヤマトの消耗を減らすという発想である。

残念ながらワープ機関の調整までは手が回らなかったもので、曳航して貰わないといけないという問題は解消できずじまいであったが。

また、ドリルミサイルが連中の手に渡っていることを考慮し、七色星団突破までは波動砲を確実に保護したいといった判断から、左右に分割された開閉式の装甲ハッチが外付けされた。

パーツの接続は反重力感応基と同じ重力制御とガミラスから提供された磁力制御の併用、非常時には切り離しての運用も考慮されている。

これが通称『ナデシコユニット』であった。

カラーも白基調に赤のアクセントと、ナデシコを強襲したものとなっている。

一連のユニットは急ごしらえなので詰めが甘いと真田とウリバタケは漏らしていたが、短時間でこれだけの物を容易く設計、効率的な海戦術と工廠設備の活用で完成させた手腕に、ガミラスの技師達も顎が外れんばかりに驚いたという。

「実は、一度ミキシングしてみたかった！」

とは真田とウリバタケの言葉であり、直後進から『その発想はなかった』と呆れ半分のお言葉が送られたとか送られなかったとか。

新たなヤマトは、「折角ナデシコユニット付けたんだから名前も追加しようぜ！」というウリバタケの進言もあって、協議の結果あくまで追加装備を施した状態限定の愛称という形で採用された。

ヤマトナデシコ。

それが追加武装を施した、ヤマトの名前であった。

あまりにもまんま過ぎる愛称に「捻りが無い」「安直過ぎる」「創意工夫が感じられない」というか追加装備自体のデザインが手抜きだなどなど――。

辛辣極まりない評価を浴びせられながらも、ヤマトは次の戦いに備えた応急的な強化を成し遂げたのである。

なお、ヤマト本人は「まさかのマイナーチェンジに感激です！ありがとうございます！！」と喜んでいた。

曰く「私は再建されたときにナデシコの『血筋』も混じっているんです。ですから、ナデシコの血縁を感じさせる姿に抵抗はありません」とのこと。

心通わしたユリカの艦と言うのも、ヤマトが親しみを覚えている理由なのかもしれない。

かくしてヤマトは、ガミラスの力をも授かる形でバランス星から飛び立った。

その傍らに戦闘空母、第一空母、指揮戦艦級が二隻。いずれもガミラスの艦艇を従えて。

バランス星に残るガミラスの面々に見送られながら、イスカンドル星とガミラス星を目指す。

地球を発ったばかりの頃は予想すらしていなかった地球・ガミラスの混成艦隊を結成し、この航海の最後となるであろう戦いに赴いていく。

その行く手に待ち構える戦いの行方は、はたして――。

心通わせることでついにガミラスとの戦いに一応の終止符を打つ

たヤマト！

だがまだ戦いは終わったわけではない。

その眼前にはガミラスとイスカンドルを脅かす、暗黒星団帝国の魔の手が迫っているのだ。

ヤマトよ、その愛に誓ってこの脅威を払拭し、地球とガミラスの間に真の平和を築き上げるのだ！

凍てついた地球に残された人々に残された時間は、

あとわずかに二四五日しかないのだ！

第二十二話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十三話 七色星団の死闘！

その死闘、制するのはだれか？

第七章 この愛を捧げて

第二十三話 七色星団の死闘！ Aパート

「状況は悪化する一方ですなあ……」

「ですなあ……」

連合宇宙軍司令部の一室で、秋山源八郎はムネタケ・ヨシサダと向かい合って薄い茶を味わっていた。

ヤマトが地球を発つてすでに四カ月余り。

順調に予定を消化できているのならもう大マゼラン星雲に到着しているはずだが、なにかしらのトラブルが生じているのならまだ中間地点のバラン星付近にあるかもしれないし、下手をしたらもつと後方にいるかもしれない。

なにより、イस्कन्दルへの接近はガミラスの懐に飛び込むことを意味している。

……ヤマトは無事だろうか。

大きなトラブルに直面していないだろうか。

トラブルがあっても航行を続けていけばいいのだが、ヤマトが無事でもユリカが死んでしまっていたら地球の未来は――。

「にしても、ミスマル艦長もなかなか思い切ったことを考えておりますなあ。ガミラス星の救出を対価に和平を結ぼうだなんて」

「――ええ。しかしその選択が出来る意思の強さが、スターシア陛下の心をも動かしたんでしょうなあ……」

実際たいしたものだと感服させられる。

火星の後継者から救出されてほとんど間を置かずに訪れたガミラスの脅威。

結果としてそれに真つ先に立ち向かったのは彼女だ。

イस्कन्दルに渡りをつけて、転移してきたヤマトの再建を始めて――。

そのがんばりのおかげでまだ地球は――絶望の淵に立たされなが

らも抗い続けていられる。

「エネルギーは余裕があるとはいえ、そろそろ暖房と空気清浄設備の維持が大変になってきましたねえ。なんとか、当初の宣告どおりには持たせたいものですが、生産力を失っている以上、予備パーツの調達が難しいのが困りますねえ……」

地球の状況は深刻だ。

暴動やデモの類は連日のように起こっている。

ヤマトを信じている人間もいれば、信じていない人間もまた、多い。いや、正確には信じていないのではない。絶望から抜け出せないでいるのだ。

だから疑心暗鬼に陥って攻撃的になり、治安を急速に悪化させていく。

いまはヤマトが太陽系を離れる前にガミラスの拠点という拠点を潰してくれたおかげで、地球圏にガミラスの姿はない。

だがそれもいつまで続くか……。ヤマト以外はガミラスの戦力には通用しないのだから、留守の間を付け込まれたら――。

ヤマトの成功を信じる者ですらその不安を抱えながら日々を生きている。

そしてヤマトが無事戻ったとしてもガミラスとの戦争は終わらない。結局ヤマトにしか縋れないのなら、ヤマトが敗北したら――。

仮にヤマトがガミラスとの戦いを終わらせたとしても、疲弊した地球にさらなる脅威が襲い掛かろうものならいったいどうなってしまうのか。

そういった不安が常に蔓延している。それが少しづつ、そして確実に人々の心を蝕んで疲弊させ、希望を削いでいく。

はたして本当にヤマトは間に合うのだろうか。

間に合ったとしてコスモリバーシステムは確実に起動するのだろうか。

コスモリバーシステムで地球が回復しても、生き残った人々で文明をちゃんと再建していけるのだろうか……。

考え出せばキリはなく、不安が不安を呼び人々を荒ませていく負の

連鎖が止まらない。

「しかし——ミスマル艦長をコアにしなければ動かすことすらままならないとはねえ。結局われわれも火星の後継者と似たような手段を取るようになるとは——皮肉じゃないか」

「ですな。彼女はもちろんテンカワ君やホシノ君にも辛い思いをさせてしまつて……年長者としては、不甲斐なくて涙が出てきそうですよ」

そう思いつつもなにもできない自分の非力さが恨めしい。

「——本当に彼女らには頼つてばかりなのは精神衛生上、よろしくないですねえ。結局ガミラスとの交渉すらも任せつきり。本来の戦艦の艦長に背負わせるべき責任ではない。それだけでなく、交渉に失敗してしまつた場合ガミラス本星を叩き、民族を滅ぼす決断すらも一任しなければならぬとは——」

「本当に、無力さを噛みしめさせられます。せめて地球を支え、帰ってきた彼女らを支えて上げられれば、この無力感も拭えるのでしょうか?」

二人とコウイチロウは、同僚や一年前までは良好とは言い難い関係にあつた統合軍とも手を取り合つて、ひたすらこの状況を凌いできた。

極寒の星となつた地球で生活するには、密閉された室内で暖房を使わなければならない。電力こそ相転移エンジンに依存することでどうにか賄えているが、常に最大稼働状態にある暖房器具は日々の手入れが欠かせない。

それに空気の清浄機能にだつて限度があつた。

外気を取り込む吸気口は雪や氷ですぐに塞がつてしまうので頻繁に掃除しなければならず、詰まつてしまつたときでも大丈夫のように圧縮空気ポンベの類も増設するなどして備えてはいるが、保守点検用の部品や技術者は、どんどん減つていく。

一年というものは食料だけではなく、こうした部分も含めて万策尽きてしまうまでのタイムリミットである。

工業品はいまもエネルギーが必死に賄つてくれてはいるが、生産量は

極めて少ない。クリムゾンに至っては沈黙してしまっている。

食料の生産もヤマト用に試作された合成食糧。プラントや早期収穫用の遺伝子改良野菜が細々と生産されているだけで、決して潤沢とは言えない。

せめて食糧さえもう少し潤沢に得られるのなら、いまよりはマシな状況になるのだろうか……。

「ヤマトが生まれた世界の地球は七年も持ったというのに。われわれは一年で滅びるかもしれないとは……」

つつい悲嘆に暮れてしまう。

いまはまだ統合軍とも良好な関係を維持できているが、ヤマトが帰艦したあとはどうなるかわからない。

ヤマトは書類上連合宇宙軍所属の艦艇だ。つまり、ヤマトの手柄はそのまま宇宙軍の手柄として扱われ、またしても統合軍は蚊帳の外に置かれるという認識が覆せてはいない。

対策は考えてはいるし一部の連中にはすでに了解を取り付けているので、ヤマトが予定どおりか少し遅れたくらいに帰還する頃には目途が立っているはずだ。

……薄いとはいえすっかり貴重品となったお茶の残りを飲み干し、まだ希望を失うまいと抗っていた二人の元に、コウイチロウから緊急の呼び出しがあった。

それはまたしてもヤマトがもたらした、一筋の希望の光の報告であった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十三話 七色星団の死闘！

「こちら、宇宙戦艦ヤマト。艦長代理の古代進です」

司令室のモニターに大きく表示されたのは、ヤマトの戦闘班長として乗艦したはずの進の姿。ユリカと同じようなコートと帽子を身に纏い、艦長席に座してこちらを見詰めている。

……まさかヤマトから直接通信があるとは予想だにできなかった事

態だ。

イスカンドルに到達して、向こうの通信設備を使わせてもらっているのだろうか。いや、その場合一方的な送信はできてもこちらの声を聴くことはできないはずだ。

つまり！……期待に胸が膨らむが、まず最初に問い質したいのは――

「こちら連合宇宙軍総司令、ミスマル・コウイチロウだ。あく……ミスマル艦長はどうした？」

少々――いやおおいに私情が混じった質問に進も苦笑している。だがすぐに表情を引き締めて答えた。

「艦長は戦闘で負傷し、状態が悪化したため入院されておられます。いまは私が艦長代理として指揮を引き継ぎ、ヤマトを運航しています」

進の報告にコウイチロウの顔がはつきりと強張る。

もともといつ死んでもおかしくないほど弱り切っていた娘が怪我をして、入院にまで追い込まれたとは。

……運命はどれほど娘を苦しめれば気が済むのだと悲嘆に暮れる。

「艦長から総司令当てるメッセージを預かっています。『お父様、私は大丈夫。必ずコスモリバーを成功させて、元気な姿に戻ります』――以上です」

進は預かっていたレコーダーを再生し、ユリカのメッセージをコウイチロウに伝えた。

――本当はもっと長くてユリカらしいメッセージだったが、場の空気を考えて簡潔なメッセージで自重してもらったのだと、補足が加えられる。

それから進は道中に起こった出来事について簡潔に報告を続けた。

その中には暗黒星団帝国と名乗る連中から波動砲を狙った攻撃を受け、止むなく反撃したことも含まれていた。

最悪その帝国が地球に牙を向く可能性も示唆すると、司令室の空気も悪くなる。

――いまの地球に別の国と戦争をする余力などない。かと言って、

ヤマトが反撃したことを咎めるのは筋違いだと理解する程度の理性は残されていた。

事前に話し合ったにも拘らず、相手が聞いてくれなかったことくらい、レコーダーの記録を見せられれば嫌でも理解させられた。

だが、吉報もあつた。

「お喜びください。デスラー総統と直接会談する機会に恵まれ、彼らはヤマトの意思を認めてくださいました。ヤマトの成功が絶対条件ではありませんが、和平による戦争終結を約束してくださいました」

その報告に一瞬時が止まり……次の瞬間歓声や困惑の合唱が司令室の中で巻き起こつた。

「ほ、本当か!? この戦争が終わるのか!?!」

思わず身を乗り出したコウイチロウに、進は笑顔で応えた。

「はい、司令。この通信もガミラスが発見していた、太陽系の第十一惑星に設置された非常用の通信設備を使わせてもらうことで実現しています。いまヤマトにはガミラスの将校が乗艦し、イスカンダル星並びガミラス星までの案内をもらう予定です」

進は事の次第を簡潔に伝えてくる。

それはガミラスの地球侵略の目的であつたり、どうやってガミラスとの交渉に至つたかの報告であつた。

ガミラスについては、大体はユリカがスターシアから聞かされ、コウイチロウたちに伝えたものと同じだった。

被害者である地球側からは身勝手な理由と断じることしかできないが、いまはそれを論議している場面ではない。

進がガミラスの将校から聞いたところによると、ヤマト出現から冥王星基地攻略までの間はガミラスはヤマトを脅威と見なし、排除する方針であつたことも告げられる。

しかしヤマトが太陽系を飛び出してプロキシマ・ケンタウリに差し掛かったあたりで変化が生じたのだという。

「デスラー総統が、ヤマトを気にかけてくれた?」

「はい。デスラー総統はコスモリバーシステムを求めて旅立ったヤマトが波動砲を装備していることを察して脅威と考えていたよう

すが、冥王星基地の生き残りが持ち帰ったデータからその戦いぶりを見て、滅びゆく祖国の運命を背負って戦う者同士としてのシンパシーを感じたそうです。またガミラスとイスカンドルを脅かし、地球侵略を後押ししたカスケードブラックホールの脅威を取り除くに十分な威力を持ったトランジション波動砲の存在ゆえに、ヤマトを障害として排除するか、それとも和解し、その威力でガミラスを救う対価として地球との戦争終結を目指すかで、悩んでおられたそうです」
なるほど、そのような経緯があったとは。

ユリカは「かつてのヤマトの航海において、波動砲の威力が航海上の安全保障に繋がっていた節がある」とは言っていたので、いかに強大なガミラスといえど六連発可能になったトランジション波動砲を装備したヤマトに迂闊に仕掛けてはこないだろうとは考えていたが、当たらずとも遠からずだったということか。

——今回はカスケードブラックホール案件が重なっていたとはいえ、搭載しただけで大国が恐れるほどの威力……イスカンドルが封じたがるわけだ。

「決定打になったのは、ヤマトが暗黒星団帝国によって襲撃されたガミラス・バラン星基地を護るために尽力し、多くの民間人を救ったことでした。その行動によって、地球人はともかくヤマトは信用に値すると判断されたことが切っ掛けとなり、この度の交渉へと至ったのです」

完全無欠な利敵行為に周りの人間（秋山とムネタケ除く）が顔を覆ったのが視界に映った。

無理もない。

だが和平を求めるのであれば——こういう形で恩を売ることとは間違っていないのかもしれないが、交渉の『こ』の字もない内から突飛な行動に出るといえるのは正直関心できたものではない。

——結果オーライだったようだが。

無茶苦茶な行動までユリカの真似をしなくてもいいというのに……。

「地球に対する賠償などの詳細は、今後の交渉で決定されることにな

るでしょう。しかし、デスラー総統はすでに地球との戦争継続を望んでおられませんし、地球の復興にも尽力してくださいと約束してくださいました。——今後ガミラスと地球の関係がどうなるかは私にはわかりません。ですが、この和平への道を閉ざさぬためにも、ヤマトは全力を挙げて挑む所存です」

進の言葉にコウイチロウもひとまずは納得する。

感情が納得しない部分はあるが、感情任せに戦争を継続しても地球に利益などない。避けられぬ滅びが訪れるだけだ。

——それに、ヤマトがガミラス相手にここまで戦ったという事実がほかの国家に知れた場合、特に波動砲の存在を理由に地球に武力行使を仕掛けてくる国家が出てこないという保証はない。さらなる爆弾、時間断層という存在も忘れてはいけない。

ガミラスにその気があれば——という前置の上ではあるが、真実が知らされてから三カ月余りの間に地球連合政府はもちろん統合軍も「感情的な部分はともかく、ガミラスと同盟を築くメリットは大きい」という結論に達している。

「……わかった、ご苦労だったな、古代艦長代理。よくやってくれた。……あ、ガミラスの将校が乗艦していると言ったな？ 少しでもいい、話せるだろうか？」

コウイチロウに請われて進は大きく頷きモニターの前から消えた。しばらく待つと、進が再び顔を覗かせて「大丈夫です」と応える。

「ご紹介します。彼がガミラスのドメル将軍です」

「お初にお目りかかります。ご紹介に預かった、ドメルと申します」
進に促されてモニターにその姿を映したドメルに、司令室の面々が緊張も露にする。

——報告どおり、肌の色以外は地球人とまったく同じに見えた。

彼らもまた、アクエリアスの生命の種子から生まれた存在……地球人の兄弟。

「私は地球連合宇宙軍総司令、ミスマル・コウイチロウです」

通信機越しとはいえ、ついにガミラスとの対面が果たされた。

社交辞令的な挨拶のあとドメルは、現在ガミラス星が暗黒星団帝国

の軍勢に襲撃されており、彼らはイスカンドルをも狙っていること、そしてヤマトは両惑星を護るため、防衛線に参加しようとしていること、敵もまた波動砲を警戒してヤマトを狙ってくるであろうことを告げた。

そして――

「ヤマトという存在が出現してからの急な方針の変更……われらの都合でああなたがたを振り回したこと……ガミラスの将校としてはなく、一人のガミラス人として謝罪させていただきます……」

立场上、軍人として言えないのであると言葉を届けられ、コウイチロウはたしかに彼らが『人』なのだ実感した。

「……それを聞けて、安心しました――古代艦長代理に変わって頂けますかな？」

ドメルは頷き控えていた進に交代してくれた。

「古代艦長代理、ユリカの代わりとして不足なく頑張ってくれているようだな」

「はい」

「地球帰還まで、ヤマトのことを頼む。ユリカが選んだ君のことを、信じて待っているよ。どのような事態が起こったとしても、われわれは――ヤマトを信じている」

優しく微笑み若者を激励する。

出航前にヤマトの指揮を引き継ぐとしたら彼だと聞かされていた（もはやわが子同然だとも）。

彼は愛娘の期待に不足なく応え、地球とガミラスの和平の礎を築く助けまでした。

いろいろな意味で、今後に期待の持てる若者だ。

「了解しました。古代進、今後艦長代理としてヤマトを地球帰還まで指揮します。ただいまよりヤマトはバラン星基地を出港、ガミラス星防衛戦に参加。これを退けたあとカスケードブラックホール破壊任務を遂行し、コスモリバー受領のためイスカンドルに向かいます。以上、通信終わります」

進の敬礼にコウイチロウも応え、通信は終了した。

暗転したモニターから視線を外すと、みな興奮冷めやらぬと言った様子だ。

「ミスマル司令——ヤマトがやってくれましたね」

隣に控えていた秋山が感涙しながらコウイチロウに言葉を掛ける。

「ああ……ヤマトが——子供たちがやってくれたよ」

その後コウイチロウからの報告を受けた政府は、予想されていた中でも最高と言ってもよい展開に狂喜乱舞。

調子に乗ってやや欲張りな要求を出すべく意見した高官もいたが、すぐに「ガミラスが気変わりしたら終わり」と窘められて冷静となり、あくまで講和による終戦協定という形でまとめることとなった。

ヤマトからの朗報を受けた地球政府と軍高官は、いよいよ戦後を見据えた仕事をこなしていかななくてはならない。

ヤマトはたしかに最後の希望であるが、彼らの活躍なくして、日々の平和はあり得ないのである。

「——お疲れさまでした、ドメル將軍」

艦長室で大役を果たして貰ったドメルを労いつつ、自ら淹れた紅茶（エリナから譲ってもらった）を入れてドメルに手渡す。

「お口に合えばいいのですが……」

「ありがとう、古代艦長代理。そう言う君もかなり緊張していたようじゃないか。ああいった場に立つのは初めてと見受けられたが？」

「ええ、即席教育を受けたのはヤマトに乗る一カ月前からですし、私はビーメラを立つまでは、一介の戦闘班長に過ぎませんでしたから」

言いながら自分で淹れた紅茶を一口啜る。われながら上出来だと思ふ。

「……そんな君が、いまやこの部屋の主か。艦長の具合がここまで悪かったとは……これも、和平路線を押し切りたかった理由かな？」

「ええ。即席教育の私では、どれほど素質があると煽てられてもあな

たはもちろん、ガミラスには勝てません……勝てるとしたら、艦長も含めたみんなが一丸となって粘りに粘って、生じるかどうかもわからないわずかな隙を突くか、あなたたちの想像の斜め上に行く奇策を考え付いたときだけです」

「——そうかもしれないな。あの次元断層での戦いでも、私ができるだけヤマトを傷つけず、クルーを一人でも多く捕えたいと考えていなければ、わが艦の主砲はヤマトの艦橋に直撃させていただろう」
進はドメルの言葉に静かに頷いた。

結局あのときヤマトがどうにか逃げ延びられたのは、ドメルがデスラーの気持ちを汲んでヤマトをできるだけ撃沈しないよう手加減してくれていたからに過ぎない。

本気で挑まれていたらあそこで沈んでいた。

「いまとなつてはそれが功を奏したということになりますな——そうだ、あのときサテライトキャノンを撃たず、波動砲を外してくれたことのお礼がまだでした。多くの部下を預かる身として、感謝しております」

「……面と向かってそう言われてしまうと、困惑を隠せません。迷惑はどうであれ、勝つたため、生き残るための最善と言える手段を自ら蹴った、甘い決断ですからね。……結果オーライでしたが」

直撃させなくてよかった。

聞けばあの時直撃を意図して避けたことがデスラーとドメルが和平路線に傾ききっかけになっていたらしいし。

「そうだ。君たちの決断は、結果として正しかった。あの極限状況下でその選択を選んだことは、君が言うように生き残ることだけを優先するのであれば悪手であったかもしれない。だが物事は結果がすべてという考え方もある。恥じることはない。君たちはその行動をもつてわれわれを動かした。それを誇るといい」

「ありがとうございます、ドメル司令」

その頃アキトは格納庫でダブルエックスと向かい合っていた。

と言つてもベッドに寝かされているダブルエックスの胸元に腰かけて、その顔を見下ろしている形だが。

「ガイ、ムネタケ提督……ガミラスとの戦いは終わったぞ。見てくれたか？ 俺たちの戦いを」

アキトはなんとなくだが、ダブルエックスを通してガイとムネタケが自分たちを見ていてくれるのではないかという錯覚を何度か覚えていた。

やはりこの機体が、Xエステバリスの後継だと認識していること、ゲキ・ガンガーみたいな強力なロボット兵器だから、というのが関係しているのかもしれない。

どちらも二人に関係している話題、と言えなくもないだろう。

「……なあくにやっつてんだテンカワ」

「げっ!? セイヤさん……」

いつの間にか収納庫の入り口にウリバタケが立っていたではないか。

……恥ずかしいところを見られてしまった。

アキトは右手で後頭部を掻きながら照れ笑い。

「こいつがエクスバリスの後継だから、あの提督を思い出したのか？」

……まあヤマダに関しちや俺もわからんでもないな。こいつはゲキ・ガンガーみたいとは、よく言われてるし。つーか開発者としても同意してるっつーかなんつーか」

ズバリ言い当てられてしまった。

そんなアキトの態度にウリバタケは納得したと言わんばかりに一度鼻を鳴らすと、背中に隠していたジューズの入ったボトルをアキトに放り投げた。

慌てて受け取るアキト。

ウリバタケはアキトの仕草にひとしきり笑う。

「俺もこいつを見て、たまにあいつらを思い出すことがあってな。

……あの二人を知っててこいつと縁深いのは、俺とお前くらいか。

……今日くらいは、感傷に浸るのも悪くないだろ？ 旅路は半ばなれ

ど、一区切りついた瞬間でもあるんだからよ」

言いながらウリバタケもダブルエックスの体をよじ登ってアキトの隣に座る。

二人はしばらく無言でジュースを飲みながら、いまは亡きかつての仲間のことを思い出していた。

——そんな二人を見上げるダブルエックスの瞳は、どこか優し気に見えた。

七色の光に照らされた『雲海』の中に赤いボディの戦闘空母がワープアウト、同じ閃光の中から間髪入れずにヤマトの姿が現れた。

わずかな間を置いて二隻の指揮戦艦級と第一空母がヤマトを囲い込むような隊列を組んで次元のはざまから飛び出す。

ワープアウト完了。

直後、雷雲煌めく厳しい大自然の洗礼を受けて、すべての艦が大きく揺らいだ。

「ワープ終了！——くそっ！ 思った以上に荒れてるな!!」

大介は宇宙気流の余波を受けて激しく振動する艦の安定を保つのに必死だった。

ナデシコユニットの追加で安定翼が開かなくなってしまっているヤマト。この大嵐の中、姿勢制御スラスターのみで艦を制御するのは骨が折れる。

ナデシコユニットの追加によって艦のバランスそのものが大きく変わってしまったているのだ。ユニット側の推進装置で推力の総計は増えているが、バランスの悪さだけはどうしようもない。

急増ユニットの難点と言えよう。

「くっ！ フィールド制御を変更して気流をコントロールする！」

ヤマトの身を包むディストーションフィールドを変更して安定を保つべく、大介は手早く管制官に指示を出した。

「どうやら、ひととき荒れているときに通過しなければならなくなつたようだな……!! ゴート砲術長、ヤマトの艦載機はこの状況下で出撃できるのか？」

ドメルが問うと、ゴートは振動で生じる騒音に負けない程度の声で

「この状況下では、ガンダムが出せるかどうかと言った状態だ！」と答えている。

そりやそうだろう。ヤマトですら振り回されているのに艦載機がまともに動けるはずがない。

「そうか……。残念ながら、こちらの艦載機も似たようなものだ。連中の艦載機は大型で出力も高い、もしかしたらこの環境でも飛べるかもしれない……。古代艦長代理、空間スキヤニングを実行して『凧』を探すべきだろう」

ドメルが進言に進も頷いている。

すぐに先導してくれている戦闘空母や多層式宇宙空母と指揮戦艦級にもスキヤニングを要請、七色星団の探査活動を開始した。

しばらくの間、ヤマト&ガミラス艦隊はタキオンセンサーを使用した空間スキヤニングを実施。

荒れている宙域ゆえノイズも多く正確さには欠けてしまったが、それでも嵐の先に凧を見つけ出し、全速力でその空域に突き進んだ。

嵐に流されそうになる艦を押しさえつけ、駆け抜けた先には——
とても美しい光景が広がっていた。

広々と眼下に湛えられた雲海と、その雲に反射した七色の光。その上にきらめく七色の空模様。

前方に広がる穏やかな空間。だがその周囲を囲うは激しく渦巻く星間物質の嵐。

凧と嵐の対比が生み出す一大スペクタクルな光景に、大宇宙の神秘と星々の生命の息吹を感じる、すばらしいとしか表現のしようがない美しさであった。

思わず息をのんでその景色に見惚れていた進だが、はっとわれに戻る。

「そうだ……。ルリさん、この映像を録画しておいてくれないか？

これほど雄大な大自然を拝める機会はなかなか巡ってはこない。貴重な資料でもあるし、激戦を終えたあと、大自然の神秘に心癒されることも必要だと思う」

「いいんじゃないかな。——地球の人たちにも、見せてあげたいから

ね。ヤマトが帰還すれば、いままで撮ってきたものと合わせていい旅土産になるだろう」

ジユンの一言に頷き、さっそくルリがヤマトの光学センサーが捉えた映像を最大画素で録画して非圧縮で保存する。

また一つ、無事に戻らねばならない理由ができた。

ヤマトの旅路は決して苦難と戦いに満ち溢れていただけではない。こうして宇宙の神秘との遭遇でもあったのだと、改めて気付かされた瞬間であった。

「データー司令、ヤマトとガミラス艦の姿を捉えました」
「うむ」

データーはメインパネルに映し出されたヤマトとガミラス艦の姿を見てニヤリと笑う。

最大望遠でも豆粒のような大きさでしか映らないほどの遠距離からの撮影だ。連中もまだ気が付いていない様子。

まあ無理もないだろう。この宙域はあまりにも荒れていて、レーダーなどの電子的なセンサーの感度低下が著しい。光学カメラですら、障害物の多さから遠方を見渡すには不自由としか言えない空間なのだ。

「やはりガミラスに与したか、ヤマト。もつと骨のあるやつかと思っただがな」

データーはヤマトが軍事力では敵わないからガミラスに与したと考えていた。あれだけの力を持ちながら、故郷を死の縁に追い込んだ連中に与するとはなんと愚かしいことか。

ヤマトが全力を尽くせばガミラスを滅ぼすことも不可能ではないだろうに——力を持って他者を従わせることに躊躇するとは、弱腰にもほどがある。

「だが、あのタキオン波動収束砲はあまりにも脅威。ここで確実に潰すぞ」

デーダーの激励に部下たちも緊張の面持ちを隠せない。タキオン波動収束砲と暗黒星団帝国の技術はあまりにも相性が悪いことが、つい先日わかったばかりだからだ。

「デーダー司令。ヤマトは艦体の左右に正体不明の追加パーツを装着しているようです。また、タキオン波動収束砲の発射口にも装甲板が追加されていることが確認されました。ドリルミサイルによる封印は難しいかと……」

「連中がガミラスに与した以上そうなつても不思議はあるまい。もともと連中がヤマト用に用意していた装備だ。だが、策がないわけでもない」

デーダーはこういった事態も予測してドリルミサイルにちよつとした細工を施していた。それが機能すればどのみちヤマトのタキオン波動収束砲はドリルミサイルで破壊され、ヤマト本体も吹き飛ぶ。そうなれば、ガミラスの少数戦力など敵ではない。

怖いのはヤマト、タキオン波動収束砲だけなのだ。

「戦艦はヤマトとほか二隻に空母が二隻……内一隻は戦艦クラスの武装を備えているのか、変わった艦だな……。転送戦術の前に空母主体の機動部隊は相性が悪いと判断して防空能力に優れた艦艇を中心に纏めたか——よし、爆撃機部隊と戦闘機部隊を発進させろ！ 転送戦術に備え！」

暗黒星団帝国が攻撃準備を進めていた頃、ヤマト&ガミラス艦隊でも艦載機の展開が進められていた。

ドメルの進言もあり、雲海のすぐ上を航行することで警戒すべき方向を前後左右と上方のみに絞る。

瞬間物質転送基はたしかに厄介極まりない装備だ。だが転送する物体は既存の兵器、付け入る隙がないわけではない。

今回の場合はこの七色星団の環境そのものが味方だ。眼下に広がる雲の中は一定以上の深さとなれば荒れた嵐も同然、その雲海の中に

艦載機や対艦ミサイルの類を直接転送してしまえば、即座にバラバラにされてしまうだろう。この嵐は宇宙戦艦ですらバラバラにされかねない暴力。小型艇に匹敵する大きさの艦載機と言えど、耐えられるものではない。

そして隊列だ。

艦隊の中で最も防空性能が優れているのはヤマトだ。増設した対空火器も威力は伊達ではない。事実上の旗艦であることも含め艦隊中央に。

戦闘空母はヤマトの前方、指揮戦艦級が左右を固め、自身の戦闘能力が乏しい空母は転送戦術によって距離の概念が曖昧になってしまっていることを考慮し、いつでもフォローできる程度の距離を置きながらヤマトと同じ方向に進んでいた。

「戦闘機部隊は直ちに突撃！ 先行して敵艦隊の捜索がわれわれの任務だ！」

第一空母からはゲッター隊長率いるDMF-3部隊が次々と発艦していく。

搭載しているDMF-3は対ヤマト戦においてコスモタイガー隊を引きつけて防空網に穴を開ける事を目的として改修を受けている機体だ。航続距離もレーダーも通常の機体よりも強化されている。

なので、こういった斥候任務に一番向いている機体なのだ。

「戦闘空母は砲雷撃戦用意だ。隠蔽式砲戦甲板展開、対空警戒を怠るな！ 敵艦隊発見の報が入り次第、艦載機を発艦させる。空襲中の突撃を余儀なくされるだろうから覚悟しておけ！」

戦闘空母の艦橋でハイデルンも攻撃指揮を出した。

戦闘空母は本来重爆撃機と呼ばれる旧式だが積載量に優れた大型機を搭載する予定であったが、その機に積む予定だったドリルミサイルを奪われ役目を失ってしまった。

代わりに転送戦術では格好のエサでしかない空母の同行を抑えつつ、空いた積載を活かすためにバランス基地で積みなおした第二・第三空母の爆撃機隊と雷撃機隊の一部を抱えている。

いまは突撃準備だけを進めさせ、飛行甲板を裏返して特徴というべ

き上下の隠蔽式砲戦甲板を展開、戦艦の名に恥じないずらりと並んだ艦砲を見せつけていた。

「爆撃機隊出撃準備だ！　いつでもどデカい花火を上げられるようにしておけよ！」

バーガーは愛機のコックピットに収まりながら部下を激励する。

本来はDMF-3がコスモタイガー隊を引きつけたあと、ヤマトの目と耳を奪うことを目的として用意されていた部隊。

対ヤマト用に打撃力を強化した武装の数々。いま披露のとき。

「雷撃機部隊も出撃準備を整えておけ。ゲットーの部隊が敵艦を発見次第、速やかに攻撃任務に就く」

クロイツも愛機に収まったまま出撃に備える。

やはり本来は対ヤマト用に構成された部隊。

ゲットーの戦闘機部隊がコスモタイガー隊を引きつけて防空網の穴を生み、そこをバーガーの爆撃機部隊がヤマトの目と耳を奪う。コスモタイガー隊が引き返してきたところを爆撃機隊が囮となって引きつけ、雷撃機部隊が特徴というべき宇宙魚雷の火力を持って一気に大打撃を与えるための部隊構成。

転送戦術を前提にしているとはいえ、数で劣るヤマトの航空隊の手数的ななさを突いた戦術であった。

「コスモタイガー隊は全機発進後、艦隊の直掩に着け！　敵艦隊への攻撃は航続距離の長いガミラス機に一任する！」

守の命令でコスモタイガー隊も順次発進していく。

「敵は転送戦術を駆使してこちらを攪乱して痛めつけてくるはず。ヤマトがガミラスと手を組んだと知ったのなら、ドリルミサイルにもなにかしら細工されている可能性もあります。対してこちらは相手をあまりに知らなすぎる。しり込みしない程度に慎重に対処していかなければ、足元をすくわれるでしょうね」

ドメルの指摘に進もジユンも頷いた。

敵は十中八九ヤマトの波動砲の封殺を前提とした行動を展開するはず。装甲ハッチは取り付けたが、それを破壊されてドリルミサイル

を撃ち込まれるか危険性は十分に考えられるだろう。

「コスモタイガー隊は艦隊の防空任務から逸脱しないように注意してくれ」

進はマイクを掴んで出撃したコスモタイガー隊に警告する。

ドメルが考えていた七色星団での戦法について聞かされているコスモタイガー隊は、ヤマトとガミラス艦の周囲を固めるように展開した。

少なくとも、戦闘機や爆撃機の攻撃ならこれで対応できるはずだ。問題は物量で攻め込まれたときに戦力が足りるかどうかだ。

ガミラス側の航空部隊はヤマト撃滅のために編成された部隊編成であり、瞬間物質転送器ありきの編成であるため防空戦に適した編成とは言い難い。

なので普通に考えればもつと構成を変更したほうがいいのだが、ドメルはもちろん進もユリカも変更の必要性を感じなかった。

その答えは簡単……転送戦術はヤマトも使えるからだ。

敵艦隊の所在さえわかれば、こちらもボソンジャンプで兵力を送り込んで攻撃することができる。

特にダブルエックスには、最長射程が四〇万キロにも達するツインサテライトキャノンがある。

いざとなれば先遣隊の情報を基にボソンジャンプからのサテライトキャノンで一気に勝負を決めることだってできるだろう。

そしていまはそのサテライトキャノンが増設されていた。

バランス基地で協議した結果、研究用に持ち込まれていた試作の単装型サテライトキャノンを形にすることになったのだ。

ツインサテライトキャノンの半分以下の性能ではあるが、それでも当て方さえよければスペースコロニーに一撃で致命傷を与えられるだけの威力はある。

身丈ほどにもなる砲身と四枚二対のリフレクターがセットになったサテライトキャノン。砲身の尾部には大型ビームソードが一基マウントされている。

本来切り捨てたはずの仕様を強引に復帰させた影響で火器管制シ

ステムの書き換え必須となり、デイバイダーとビームマシンガンが使えなくなつたため、代わりに試作段階で放置されていた小型の展開式シールドとビームライフルが一体になつたシールドバスターライフルが用意された。

加えてバックパック左上のハードポイントからは本来非対応であつたGファルコンとの合体を補助するドッキングコネクターが伸びている。普段は左肩の後ろに置かれ、バックパック中央に刀のように斜めに背負われた砲身と正面から見るとL字型に配されたリフレクターに干渉しないようになってる。

合体するときには右肩後方に移動して正面に向いた砲身と正面上から見ると逆L字型に配されるように移動したりフレクターの代わりにバックパック中央に移動して、Bパーツと接続される。

サテライトキャノン撃つときにはリフレクターとBパーツが干渉してしまうため、コネクターが回転してBパーツを左肩後方に移動させて展開する形式を採用している。

Aパーツは規格がダブルエックスと異なるエックス本体には接続できないため、収納形態のときはBパーツに、展開形態ではカーゴスペース内に仕舞われることで対応していた。

性能的にはGファルコンDXの下位互換に過ぎないが、総合力では決してデイバイダー装備には劣っていない、GファルコンGX。

本体たるエックスも、原型、デイバイダーに加えたサテライト仕様という仕様変更を受けたとして、両肩が青く塗られて識別された『V e l . 3』の名が与えられていた(パイロット的にはどうでもいい)。「そういう訳だから、同乗させてもらうわよりヨコさん。こっちは本職がパイロットじゃないんだからあんまり無理に振り回さないでね」

「んなこと言われたって、本格的な空戦になったらぶん回さないと死ぬぞ。おまけに急造で慣らしもろくにしてない装備に換装されてんだ、文句言うな」

Gファルコンのコックピットに収まつたイネスは、そのGファルコンと合体しているGXのリョーコに切実な願いをしたが、ぼつさり

と切り捨てられて口の端がピクリと恐怖に震える。

「まあまあ、私たちもフォロー頑張るから気楽にね、イネスさん！」

「大丈夫、万が一の時は死に水を取ってあげるから」

「ちよっ！ 不吉なこと言わないでよ！」

ヒカルはともかくフォローと言うには不穏過ぎるイズミに、内心怖がっているイネスが悲鳴を上げる。

今回の戦闘では瞬間物質転送器の代わりにボソンジャンプで担う。となれば、必要とされるのは長距離ボソンジャンプのほうなのでA級ジャンパー必須。

この戦術を提唱した瞬間、誤魔化していたA級ジャンパーについてもドメル将軍にだけは打ち明ける羽目になったが……まあ彼なら悪いようにはしないだろう、うん。

ほかの連中には「ボソンジャンプの研究者で機器の扱いに長けている」とだけ説明して誤魔化した。

「あとは、ゲットー隊長たちの索敵次第か。俺とアキトのボソンジャンプで爆撃機と雷撃機の連中を敵母艦の近くに運んでやれば、状況的には五分に持つて行けるかもしれないねえんだよな」

「おそらくね。転送戦術の威力を噛みしめて驕っているだろうし、こちらにボソンジャンプがあることを知っているとは考えにくいわ。バランスでの戦闘でも使用したのは月臣君たちが帰艦したときの一度だけでそれ以降は使っていないし、状況的につぶさに観察できたわけでもないでしょうから。それに、連中のエネルギー反応を見る限りではタキオン粒子は検出されていない。つまり、ガミラスやイスカナルが開発したジャマーは備えていない可能性が高いってことよ。至近距離に出現する分には通用すると思うわ」

イネスの推論にリョーコも頷く。ジャンパー処置はしていないリョーコでも、エックスのフィールド出力なら肉体を保護してジャンプが可能だ。

アキトは単独で跳べるのでサテライトキャノンと合わせて今回の要としてこき使われることが確定している。

「アキト、いざってときは転送頼むぜ。嫁さんのためにもこんなところ

ろで終われねえだろ?」

「わかってるよバーガー。あとはゲットー隊長次第か……こつちが仕掛ける前に戦闘空母が発艦不能になる被害を受けなければいいんだけど」

転送戦術の厄介な点は前線という概念が事実上消滅してしまうことだろう。これはボソソジャンプ戦術を考案していた地球側はもちろん、特にその存在を警戒していた火星の後継者——草壁春樹も重々承知していたことだ。

空母はその性質上どうしても軽装甲になってしまっている。

甲板の大部分は飛行甲板になってしまったため重武装は備えられないし、航空機運用の設備のおかげで重装甲化も難しい。

武装なんてせいぜい甲板の端か艦体の側面に対空砲を装備するのがやっとであり、単独では攻撃どころか対空防御もままならない艦種がほとんどだ。

これは地球の空母も似たようなものであり、空母の基本戦術はその運用が確立した頃から一貫して航空機の航続距離を活かして戦場の後方に位置して、直接戦場に出ないのが常識だ。

それはガミラスとて変わりはない。が、戦闘空母が開発されたという点からうかがえるように、この戦術そのものが前時代的であり宇宙戦争の激化には即さないという意見も出ていないわけではないが。

「なに、戦闘空母はこれでもガミラスの最新鋭艦だ。空母としては積載がちよつとばかり少ないが、その分戦艦としての分厚くて頑丈な装甲と対空装備がある。ちよつとやそつとの損害で機能を失うほど軟じゃねえよ」

「わかった。要するに被害を被らないように立ち回ればいいってことだな。いつもどおりに」

バーガーに言われてアキトも笑みを浮かべて戦意を奮い立たせている様子。

GファルコンDXは例の重装備仕様。

Gファルコンに追加された安定翼に空対空ミサイル一四発と宇宙魚雷四発、脚部ラジエータープレートカバーにマイクロミサイル八

発、右手にはいつもの専用バスターライフルを携え、左手に大型レールカノン、Gファルコンのカーゴスペース内にハイパーバズーカ二挺にロケットランチャーガン一挺に予備弾薬五発を懸架。

専用ライフルはビームナイフを追加装備して銃剣仕様。

さらにリアスカートに増設したマウントには、ビームジヤベリンにツインビームソードにGハンマーが懸架されるなど、過去最高の重武装具合だった。詰め込み過ぎで機動性に悪影響が出ているくらいなのだが、奇襲で確実に敵艦を潰すことを目的として、こうなったのだ。

GファルコンGXも似たようなもので、携行武装が両手にレールカノン、バックパックの左下のコネクターに銃身とスコープとグリップを格納したシールドバスターライフルをマウントし、反対側にはビームジヤベリンを急増のマウントで懸架、サイドスカート両側にマウントを増設して対艦ミサイルの弾頭を改造したグレネード——Xグレネードを四基装備している以外はGファルコンDXに準じている。

「こちらエアマスター、配置に就いたぞ」

「レオパルドもOKだ。いつでも乱れ撃っちゃうぜ」

月臣とサブロウタも準備を終えたようだ。

最終調整を終えた二機もGファルコン装備のGファルコンベースとGファルコンデストロイへと変貌を遂げている。

Gファルコンと合体して宇宙戦闘機としての性能が大幅に強化されたエアマスターは、(最初から戦闘機で設計しておけというツッコミを受けつつ)敵航空部隊を引っ掻き回す遊撃機としての役割が期待されている。

ノーズビームキャノンの下には、キャリングハンドル付きの水平二连装ショットガン(ソードオフモデル)のような形をしたビームライフル——ミサイルライフルが懸架されている。その名のとおり、側面に多弾頭ミサイル二基を搭載したライフルだ。

さらにGファルコンに安定翼とそこマウントされるミサイルと魚雷、そして大型爆弾槽を装備した重攻撃機仕様である。

レオパルドのほうも、(もとの悪いというほどではないが)機動力を補うGファルコンの追加で機動力が大きく向上している。

なにより本体の重武装にさらにGファルコンの武装が追加され、さらにさらにそのGファルコンに追加武装を加えたまさに動く弾薬庫。

Gファルコンに追加した装備はエアマスターとほぼ同じだが、機体自体には追加がなかったエアマスターと違ってレオパルドは左足側面に四発ミサイルを内蔵したセパレートミサイルポッド、左サイドスカーツにヒートアックスを追加装備している。

合体中はツインビームシリンダーの格納が上手くいかない難点があるが、それでも一応マウントアームに預けて脇の下に懸架することはできる。

防空戦には結局ツインビームシリンダーが有効と判断され携行武装は特に持っていないが、それでも自前の重武装によって通常火力はコスモタイガー隊最強と豪語できる、火力の鬼であった。

「対空火力の要は俺、敵部隊の攪乱は月臣少佐、いざと言うときに切りこみ役にして俺たちのフォロー担当がアキトとリョーコちゃん、合わせてアルストロメリア一同。全力で当たればなんとかなるかな？」
「なんとかなって貰わないと困るがな……こちらの戦力にも限りがある」

月臣も流石に緊張を滲ませた声でサブロウタに懸念を示している。

暗黒星団帝国の戦力はガミラス以上に底が見えない。この七色星団で仕掛けてくるとしてもどの程度の戦力が配備されているのかわからない。

無論ヤマトがおまけで本命がガミラスとイスカンドルなら、戦力の大部分が向こうに行っているとは思いますが、人口太陽まで使ってヤマトの波動砲の威力を凶つたのだ。相応の戦力を用意している可能性は高い。

さて、どう出るか……。

イネスはナビゲーター役とはいえ初めて航空戦の真つただ中に放り出させる緊張に唾液を飲み込んで喉を鳴らし、珍しく両手を眼前で組んで安全を祈るのであった。

「——なるほど、転送戦術を警戒して防空網に穴を開けないつもりだな」

デューダーはモニターに映るヤマトとガミラス艦の様子にデューダーは薄く笑う。

その程度戦術はあの艦隊構成から予想していた。驚くに値しない。それにこの装置の開発者はガミラス。ガミラスに与したのなら詳細を得ているだろうし、そもそも一度使った戦術だ。初見ならまだしも二度目なら多少なりとも対策されるのは計算の内よ。

「ならば、嫌でも防空網に穴を開けてやろうではないか——対艦ミサイルの準備は終わったか!？」

デューダーの声に部下が「間もなく終わります」と答える。

艦隊に同行させた輸送船と数珠繋ぎにした大量のコンテナから、本来は移動要塞や本土の防空用に配備されている大型対艦ミサイルが大量に吐き出された。ヤマトを仕留めるため、メルダース総司令に直訴して大量に融通して貰ったのだ。

開発したガミラス側も認知しているであろう運用法だが、知っているのならばかならず防げると言う訳でもないのが転送戦術の真の恐ろしさだ。

宇宙戦争では距離の概念が惑星間戦争のそれとは違いどうしても膨大化する。艦載機もミサイルも、障害物のない空間を延々と飛行することのリスク、そして航続距離の問題はどの国家も悩みの種だ。

転送戦術はそのリスクを限定的とは取り除けてしまう。それこそが最大の強みだ。

「瞬間物質転送器作動！ 目標！ ヤマトとガミラス艦の周囲！ 雲海内には転送しないように注意しろ！ 上方から前後左右、逃げ場を与えない！」

作業艇がミサイルを挿んで瞬間物質転送器の眼前に運んでくる。

瞬間物質転送器はガミラスの白い円盤型の宇宙船ごと鹵獲して運用している。わざわざ移植する手間をかけるのも馬鹿らしい。

いまはそちらに移譲した部下が制御下に置いている。

転送装置本体は長方形状の物体で、円盤上部に一对装備されている。正面にはハニカム状のパターンのある発射口からワープ光線を照射、照射範囲内にある物体を指定した座標に送り込む。

有人機を送り込む場合は片道一方通行というデメリットがあり、それを補う戦術を行使する必要があるが、今回のように無人のミサイルや機雷を送り込む分にはデメリットはないに等しい。

そして――。

「いかにヤマトがタフな艦でも、至近距離で対艦ミサイルが雨あられと降り注げば迎撃できても無傷では済むまい」

そう、たとえミサイルが直撃できなくても至近距離でミサイルが爆発すれば破片や高温のガスを吹き付けられて必ず被害を被る。

空間歪曲場を防御装置に使っていたとしても、あの手の防御装備は質量兵器に弱いと相場が決まっている。

「艦載機で防空網を作ろうとも四方八方から絨毯爆撃されれば、逃げるしかあるまい」

あの人型は人型の癖にわが軍の宇宙戦闘機に勝るとも劣らない絶大な威力があるようだが、しよせんは艦載機。対艦ミサイルの爆風に煽られればあつという間に宇宙の藻屑と消える。

それを避けるためには母艦に匿って貫うか影響圏から離れるかの二択しかない。

「転送戦術がある限り、どうあがいても貴様らは後手に回るしかないのだ……攻撃開始！ ヤマトをこの雲海の一部にしてやれ！」

デーダーの指示を受けて瞬間物質転送器から一对のワープ光線が照射、ワープ光線に包まれた大量の対艦ミサイルが次々と転送されていった。

その頃ヤマト・ガミラス艦隊は、艦載機の展開を終了して襲撃に備えていた。

戦闘空母とヤマトの航空隊は艦隊の直掩に専念し、第一空母のDM

F―3部隊は全力で艦隊前方の哨戒任務に就いている。いまのころ、敵艦隊発見の報はない。

いつ、瞬間物質転送器による空襲に見舞われるかもわからない恐怖に晒されながら、各艦のレーダー要員は監視を続けていた。

ヤマトの改良コスモレーダーが最大稼働を示す赤い光の往復運動を繰り返している。だが進の手元のモニターにはまだ目立った変化が映っていない。

「ルリさん、周辺の状態はどうですか？」

進の問いに電算室のルリは「いまのところ目立った変化は観測できません」と答えたあとで、

「この場所は風にあたるとは言っても、周辺には荒れ狂った宇宙気流やら強烈な放射線嵐が吹き荒れています。星間物質の密度変化や動きの変化が激しくて、どうしても観測データのノイズが多くて困ります。小規模物体のワープアウト反応程度なら、見落とす危険はかなり高いですね」

「この場所を決戦の地に選んだ將軍の判断は正しかった」とルリも険しい顔だ。

瞬間物質移送器による転送戦術は、周囲にワープ反応――つまり重力振や空間歪曲反応といった兆候を見ることが一応の察知が可能だ。

とはいえその反応は微弱なものであり、環境の変化が激しいと計測に失敗することはままある。

七色星団は隠ぺいするには本当に最適としか言えない環境だ。

「……このまま地道に続けるしかないだろう。いかに瞬間物質移送器とはいえ、まだまだ経験不足のシステムだ。必ずどこかに付け入る隙がある」

苦戦するルリの様子に真田がついフォローを口にしてている。

真田の指摘どおり、現状ヤマトが転送戦術の要である瞬間物質転送器搭載母艦を発見する手段は地道な哨戒任務以外にないと言っても過言ではない。

ただ……

「確実とは言えないけど、いまの私だったらもしかしたらなにか掴め

るかもしれないよ」

医務室のベッドの上からユリカが進言してきた。本日は体調が微妙なので、艦橋には上がらず進にすべてを任せている。

「ユリカ、大丈夫なの？」

ジュンが心配そうに問うが「平気平気」とユリカの調子は軽い。

「だって、演算ユニットに繋がっちゃってる状態だから周りの変化に割と敏感になっちゃってるんだもん。意識して活性化させてるわけじゃないから特に問題はないよ。まあ、その分確実性が損なわれるんだけど……」

と言われたらそれ以上のことが言えない。

いままではイスカンダルの薬で抑えきれていたのにそれすらできなくなった。つまり彼女はいま、先が長くないとルリを絶望させていたヤマト完成直前頃にまで戻ってしまっているのだ。

だがそんな状態だからこそ、この局面を打開するきっかけをもたらすことができるかもしれない。皮肉なことに。

「わかりました。ないかあつたらすぐに連絡してください」

進は艦長代理として腹を括った。いまは少しでも勝算を上げる方が先決であると。しかし――。

「雪、艦長がちよつとでも無茶をしたら、引つ叩いてでも必ず鎮圧するように！ これは艦長代理としての命令だ」

「任せて艦長代理！ そのときは一切遠慮なく黙らせますとも！」

雪を煽って極力無茶させないように歯止めを作る。本人が言っても聞かぬなら周りを使つて黙らせる。

進は人を使うことをしつかりと覚えたのだ！

「――上官に対して……しかも重病人に対して暴力はいかんとと思うのだがな、古代艦長代理……」

常識人のドメルに突つ込みを入れられてしまった。

――しかし声が呆れがあっても進の命令を撤回させようとしないうあたり、やっぱりドメルも少々毒されていたのだろうか。

少しだけ緊張が和らいだ空気の中、力が抜けていたがゆえに気付けたわずかな痕跡を見つけ、ルリが吠えた。

「空間歪曲反応多数！ 艦の周囲になにかが転移してきます！」
来た！

艦内に警報が鳴り響いて戦闘開始を告げる。

転移してきた物体は——くそっ！

進はつい舌打ちしそうになった。

「対艦ミサイル……！ こちらが転送戦術に対応するため直掩を展開すると見越した戦術か……！」

守がすぐにフィールド管制官に最大出力のフィールドを展開させ、拡散射撃モードのパルスブラスト、ナデシコユニットのVLSに搭載された対空ミサイルの準備を進めさせる。

「了解！ 各砲それぞれ目標を追尾！ 撃ち漏らすな！」

ゴートも砲術補佐席のスイッチやレバーを操作して、これから次々と送り込まれるであろうミサイルの迎撃準備を進めていた。

転送されたミサイルは先端が黄色く、本体が赤く塗られた円筒状、サイズはヤマトの艦橋と同じくらいだった。

——ミサイルのロケットエンジンが点火、艦隊中央のヤマトに狙いを絞る形で突っ込んでくる。

進行バクトルを変更できないワープ航法における問題を考慮してだろう、ミサイルは最初から艦隊を包囲した向きで転送され、ロケットエンジンに点火すればすぐに艦隊の中央——ヤマト目掛けて直進出来るように周到に準備されていた。

「くっ！ この短時間でここまで使いこなしてくるとはなっ……！」

敵の指揮官はなかなか頭が回るようだ！

この混成艦隊の総司令の立場にあるドメルは、

「全艦対空戦闘用意！ 航空部隊は直ちに現空域を離脱して体勢を立て直せ！ 艦隊増速！」

そう指示を出した。

それが敵の狙いだと理解していても、そうしなければ壊滅的な被害を被ってしまう。

ヤマトを始め艦隊全体が増速して全周から襲い掛かるミサイルを引き剥がしにかかる。

転送戦術とて座標の指定は必須。増速して転送範囲から大きく逸脱すれば、時間稼ぎはできる。だが――。

「航空隊を引きはがされたか……！ ミサイルの次の手は航空隊による集中攻撃と見た！ コスモタイガー隊はそのつもりで備えろ！」
守も敵の狙いに気付いている。

予想はしていたが実際にやられてみると厄介だ。

各艦のフィールドの内側に匿うことはできるが、そうすると対空砲を使えなくなってしまう。これだけの数のミサイルをもろに被弾してしまえば、艦隊最強のヤマトのフィールドですらあつという間に決壊してしまうのは目に見えている。

――敵の思惑に乗せられるしかない。艦隊とコスモタイガー隊の距離が開いていく。

戦いのイニシアチブは、やはり敵に取られてしまったらしい。

第二十三話 七色星団の死闘！ Bパート

「くっそー！ 連中の思惑に乗るしかねえのかよー！」

GファルコンGXのコックピットの中で毒づくリョーコ。

自身でも部下に全力で退避を指示しながら安全圏に逃げるしかない。

逃げながら収束モードの拡散グラビティブラストをヤマト目掛けて突き進む対艦ミサイルに向かって砲撃を繰り返し、少しでもヤマトの負担を軽くすべく努力はしているが、いかんせん数が多すぎた。

ヤマトも拡散モードのパルスブラストで弾幕を形成し始めたが、前後左右上方と多方向からの攻撃に、増設しているにも拘らず手が足りていない。

迎撃を免れたミサイルがナデシコユニットが発生させたフィールドに次々と着弾。ヤマトの姿が爆発に飲まれて見えなくなる。

それでも勢いが衰えぬパルスブラストの砲火とナデシコユニットから撃ち出されたであろう対空ミサイルが爆炎の中から飛び出して、襲い来るミサイルを片っ端から撃ち落としていく光景のおかげでヤマトはまだ健在だと知れたが、かつてない状況に眉根を寄せてしまふ。

ヤマト前方を航行中の戦闘空母も砲戦甲板や艦橋前後の三連装砲に後部のミサイルランチャーを駆使して迎撃に全力を注ぎ、左右を固める指揮戦艦級二隻も対空砲を全力運転させてヤマトにミサイルが着弾するのを少しでも防ごうと努力している。

しかし艦隊の中央にいるヤマトに照準されたミサイルの数は多く、また艦隊の外周に転送され直進してくるため、ミサイルの一部は戦闘空母と指揮戦艦級にも襲い掛かりその姿を爆炎の内に沈めつつあった。

「対空砲を増設していてよかったと思える瞬間ね。ウリバタケさんのオタク趣味に感謝だわ」

とGファルコンのイネスが不安からか軽口を叩いているが、耳を傾

ける余裕はない。

モニターの端に同じようにミサイルの迎撃を始めたGファルコンDXとGファルコンデストロイの姿もある。特にGファルコンデストロイは拡散グラビティプラストだけでなく、両腕のツインビームシリンダーで頑丈な対艦ミサイルのボディをハチの巣にしている。合体の恩恵は大きいようだ。

対照的に、戦闘機形態でほぼ固定状態のGファルコンバーストは迎撃には参加せず、追撃で現れるかもしれない航空戦力を警戒している。こればかりはしようがない。

「悪いけど私たちは迎撃に参加できそうにないよ！」

「ごめんリョーコー！ アルストロメリアじゃ無理そう！」

ヒカルとイズミは無念さを吐露しながら距離を取っていた。

すっかり力不足を感じなくなったアルストロメリアであってもこの物量だと余波だけで致命傷だろう。

ここは逃げの一択しか選択しかない。むしろ本命はこれからだと考えれば、英断だ。

「ちっ！ 最初の攻撃がミサイルの雨とはな！ つくづくむかつく連中だぜ！」

愛機のコックピットでバーガーが激しく毒づく。予想されていた敵の攻撃の中でも最も苛烈で、転送戦術の強みを最大限生かした戦い方。

それが理解できるだけにむかついた。

「落ち着けバーガー。この程度で沈むほどわが艦隊は脆くはない。なんせ、あのヤマトが旗艦なのだからな」

諫めるクロイツも少々不安な様子だが、それでもここまでガミラスと渡り合ってきたヤマトが容易く沈むとは考えていないようだった。

それに関してはバーガーも同感である。それにそのヤマト相手に戦うべく召集された自分たちの力量も疑ってはいない。

開発には紆余曲折あったとはいえ、戦闘空母は十分な性能を持って完成しているし、ヤマトと戦うために同行している指揮戦艦級も装甲

を中心に改修されている。だからこそ簡単に沈むことはないと確信を持てる。

「……ああ、すまねえクロイツ。隊長ともあろうものがこの程度で動揺してちゃだめだよな」

頭が少し冷えたバーガーはクロイツにそう返すと、腕を組んでシートに身を預ける。そしてこの空間を哨戒している同僚を思う。

（——頼むぜゲッター。早いところ敵の本体を見つけ出してくれ）

進は被弾の衝撃で揺れる第一艦橋でじつとりと汗を掻いていた。

ヤマトはガミラス艦と一丸となって必死に対空砲と対空ミサイルを打ち上げ、主砲に副砲までも動員して対艦ミサイルの迎撃を続けている。

艦隊の速度や進路を変更しつつ移動して転送座標を変化させ、少しでも攻撃の頻度を落とさせようと努力しているのだが、ミサイルは遅滞なく喰らい付いてくる。

——想像以上に使いこなしている様子だ。

すでにヤマトには一〇発以上の対艦ミサイルがフィールドに接触している。だがいまヤマトを守っているフィールドの発生装置はナデシコユニットに装備されたガミラス製だ。エンジン出力の高さでガミラス艦以上の防御力を叩き出したヤマトではあるが、単純な装置の性能はガミラスのほうがやはり上だった。

いまはその装置にナデシコユニット内のエンジンのすべての出力を注ぎこみヤマトを守っている。

しかし敵のミサイルの威力はかなりのものだ。発生装置の負荷がどんどん蓄積されていつている。

「いかん……！ フィールド出力が六〇パーセントにまで低下しているぞ……！」

「まずいな……ナデシコユニットとヤマトは通路で繋がっているわけではないから、戦闘中の修理作業は絶望的だ。それにあれはバランス星の戦いで出たジャンク品の寄せ集め。このままでは長くは持たん

……！」

額に汗を浮かべるゴートと真田。

急増のオプシヨンパーツでしかないナデシコユニットは欠陥も多いし信頼性にも難がある。真田は制作者の一人として熟知しているだけに、不安を隠せないのだろう。

「爆発の影響でセンサーの乱れも激しく、これではワープ航跡の特定は無理です！」

電算室のルリも悲鳴を上げている。

被弾の衝撃も相まってセンサーの感度低下が著しい。爆炎のせいで光学カメラも役に立たない。間接的ではあるがヤマトの目と耳はミサイルによって塞がれてしまっていた。

「直撃してないだけマシとはいえ、なんとか打開策を見つけないと持たないぞ……！」

ジュンもなにかしら打開策がないかと思考を巡らせているようだが、具体的な対策は思いつかないでいるようだった。

データリンクによるとヤマトほど攻撃が集中していない戦闘空母も指揮戦艦級も持ち堪えているようだが、このままでは消耗しきってしまう。

艦長代理としてなにか打開策を指示したい。

そう思えど妙案は浮かんでは来ない。ドメルも沈黙を保っている。彼ほどの名将も、この状況では現状維持がやっとなのかと思うと、改めて転送戦術の脅威が知れる。

「――進、聞こえてる」

第一艦橋にユリカの声が届いた。

「聞こえています艦長。どうかしたんですか？」

「ヤマトの正面一一時一八分、上下角プラス二〇度、距離推定四光秒の地点でなにかしらの空間歪曲が起こったよ。確定はできないけど、調べてみる価値はあると思う」

妙に落ち着いた声で話すユリカに一抹の不安を覚えながらも、進はすぐにその情報を各艦と先行しているDMF-3隊に転送するように指示した。

出所については事前に考えていた内容で誤魔化すことも忘れない。「ありがとうございますございます艦長。この情報を頼りに、反撃の糸口を見つけて見せます」

「がんばってね……。ふ、ああ……。悪いけど、おねむみたいただからお休みさせて……。…」

返事をするより早く規則正しい寝息が聞こえてきた。傍から見ればとてもマイペースな行動にも思えてしまうが……。

「やはり、無茶ではない程度に探ってくれたとみて間違いないだろうな。今後に影響しなければいいのだが」

戦闘指揮を続けながら、守が心配そうな声を出した。

「ミスマル艦長……。あなたの献身、心に染みしました。私にもガミラスの将としての意地がある。頂いた情報を頼りに必ず逆転してご覧に入れます……。…」

ボロボロの体でも未来を諦めないユリカの姿勢に感動したドメルが気合を入れなおしていた。

「どうやら黙ってやられていたわけではなかったようで、彼なりに敵の次の手を読んでいた。」

「古代艦長代理、航空部隊が離れヤマトの防空網に穴ができた。敵はすぐに爆撃機と護衛の戦闘機を差し向けてくるはずだ。これらの行動で艦隊行動を乱した最大の目的はドリルミサイルで波動砲を封じつつヤマトを破壊することのはずだ」

「なるほど、たしかに。艦長の示唆した方向に敵がいるのなら、敵はヤマトの波動砲が装甲で守られていることも確認できていると考えてもいいかもしれませんね。——ドメル將軍、ドリルミサイルである装甲を突破可能ですか？」

進の問いに「できると考えたほうがいいでしょう」と答えた。

「敵も無能ではないでしょう。バランスの戦いを経験すれば、遠からずヤマトとガミラスが手を組むであろうことは明白。となれば、限られた時間の中でヤマトの波動砲を封じるための手段としてあのドリルミサイルを活用するのが早道。もともとが採掘用の特殊削岩弾を転用した代物なので、あのドリルの刃はガミラスでも最高強度の超合

金でできています。装甲の厚い艦体ならまだしも、構造上脆弱な発射口であれば苦もなく突破できると踏んでいました。ただ、われわれとしても波動砲を完全に破壊してしまうのは今後を考えると都合が悪かったので、封印さえできればそれでよしとしていたのですが……」

あいもかわらず恐ろしい人だ。

進は尊敬するやら恐れるやら。

指摘されたとおり波動砲の発射口の防御性能は低い。特に奥の装甲シャッターは脆弱だ。よほどのことがない限りピンポイントで狙うのは難しいとは考えられていても、弱点には違いなかった。

——結局、ガミラスが味方になっても『アレ』の脅威からは逃れられないのかなあ？——

不意に木霊したヤマトのぼやきに心底同情を覚える。

ああ、やっぱり平行世界で喰らってたのか。そりゃトラウマにもなるわ。

進は再びドリルミサイルを喰らわないようにするための策を考えるべく、思考を巡らせる。

さて、どのタイミングで来るか。

「ヤマトにドリルミサイル……船は昔から女性名詞……ドリル……掘る……ヤマトには自我……擬人化と合わせて……ムフフ……」

応急処置に備えて絶賛待機中の技術者一名、眼鏡を怪しく光らせながらよからぬことを考える。

ちなみに彼は『ヤマト擬人化計画の会』の会長であった。

「被害状況は!？」

戦闘空母の艦橋でハイデルンが損害報告を求める。戦闘空母も少なくない被弾で激しい揺れに見舞われていた。

「左舷に二発、右舷に一発被弾! 第七、第一〇区画に火災発生!」

「第一主砲に障害発生! 現在対処中です!」

このサイズの対艦ミサイルの被弾は応える。

戦闘空母は最新鋭艦であるし、対ヤマト用としてドメルが引っ張り

出してきただけあって、ヤマトの攻撃に少しでも耐えられるようにと装甲が強化されている。

そのおかげでなんとか耐えられているが……。

「ヤマトの状況はどうなっている!?」

「健在ですー!」

さすがはヤマト、ここまでガミラス相手に単艦で抗ってきた実力は伊達ではない。

ハイデルンは素直に感心しつつもままならぬ状況に唇を噛む。

幸い指揮戦艦級も健在のようだが、ヤマトや戦闘空母に比べるとやはり装甲もフィールドも劣っているので被害は徐々に蓄積されている。

……このままではなぶり殺しにされるだけ。だが戦況を変える一手は、いまだに見つかっていないかった。

必死に対空砲を全開にしていたヤマトに突如静寂が訪れた。

「ミサイル攻撃が止んだ……?」

必死に対空砲の指揮をしていたゴートが不振がって思わず天井を仰いでいる。

ナデシコユニットのフィールドは発生装置はオーバーヒート前で、冷却のため数十分は使えそうにない状況にあった。

そんな緊迫した状況にあったためか、つい気を緩めそうになるクルーが出てきてしまう。

「油断するな! おそらくこれは航空攻撃への切り替えだ!」

すぐに進が叱咤して気を緩めないようにする。するとすぐにレーダーを睨んでいたハリから警告が。

「ヤマト直上に空間歪曲反応多数! エネルギーパターンから敵の航空部隊と思われます!」

「対空戦闘! コスモタイガー隊は迎撃開始だ!」

進の怒鳴るような指示にすぐに応えるクルーたち。

さきほどまでミサイルを迎撃していたパルスブラストが、冷却もままならないまま再度稼働させられる。だが、オーバーヒート寸前まで

追いやられているためその弾幕は疎らであり、さきほどまでの威勢はなかった。

仕方ない。特に排熱が必要な砲を停止して、穴埋めのために煙突ミサイルからリフレクトデイフェンサーを八基打ち上げ、ヤマトの直上に八つの円盤状のデイスティーションフィールドを展開する。

戦闘空母と指揮戦艦級二隻も勢い衰えた対空射撃を開始している。これで、敵の攻撃はもちろん突入コースを変えられれば御の字なのだ……。だが……。

出現した一〇〇には届こうかという戦闘機の群れと、その中に混じる二〇機ほどの爆撃機。数の上では少数の爆撃機であっても、ミサイル攻撃で消耗したいまのヤマトには途方もない脅威となる。

結局、ミサイル攻撃の余波を避けるために距離を取らざるをえなかったコスモタイガー隊の迎撃はギリギリのところの間合わず、散発的になった弾幕とリフレクトデイフェンサーに攻撃や軌道を逸らされながらも食らいついた一〇機の爆撃機の砲火が、ヤマトを襲った。

「右舷コスモレーダーに被弾！ 機能低下！」

「第一主砲被弾！ 損害軽微！」

「第一七対空砲損壊！ 使用不能！」

「煙突ミサイル被弾！ 異常は認められず！」

第一艦橋内に次々と被害報告が届く。ヤマトも自身のフィールド発生装置を使用して防御を固めていたが、敵爆撃機の攻撃力は極めて高く、至近距離で撃たれたこともあって減衰しきれず本体に到達していた。

防御力の低いレーダーアンテナや対空砲の一部が破壊され、表面に塗られた防御コートが劣化して白くなる。

さらに三本の触角のようなビーム砲は相も変わらずプレキシブルに動き、機体の向きに関係なくヤマトを追尾して至近距離から強烈なビームを打ちかけてくる。おまけにバランスでは搭載されていないかった強力な爆弾も追加装備されたようで、巨体に似合わぬ俊敏さで迎撃を掻い潜ってヤマトに叩きつけてくる。

敵爆撃機はすべてヤマトのみをターゲットとして、ほかの艦艇には目もくれない。

俊敏なイモムシ型戦闘機も対空砲のターゲットを自ら取りに来るような動きで翻弄し、爆撃機への迎撃を許さないように立ち回っていた。

「コスモタイガー隊に迎撃を急がせろ！——ゲットー隊長からの連絡はまだないのか？」

「まだありません」

エリナの報告に進は一度目を閉じてからドメルに、

「いつでも爆撃機と雷撃機は出せますか？」

と問う。

「ミサイルの雨が止んだいまなら出せる」

ドメルも力強く答えた。

しばし考えたあと、進はドメルに発進させるように願い出た。

「——なるほど、ゲットーとミスマル艦長を信じて賭けに出るというのですね……いつまでも敵に主導権を取られるというのは不愉快でもあるし、ここは一つ、賭けに出るのも悪くない。やりましょう」

とても獰猛な笑みを浮かべて応じるドメルに進も頷く。

DMF—3隊の速力なら、もうそろそろ艦隊に接近できていてもおかしくはない。位置情報さえ送ってもらえればこちらから打つて出ることができると。

それは連中の大編隊に勝るとも劣らない猛反撃となって、この戦局を一変することだろう。

——転送戦術の威力を噛み締めてしまったがために、彼らはきつと艦隊の防空を疎かにしているに違いない。また、こちらが同じ戦法で逆転を狙っているは考えてはいないだろう。

強過ぎる力を持たされると、どこかに必ず驕りが出るものだ。まして手に入れてから一度たりとも痛い目を見ていなければ、なおさらだ。

戦場において慢心は命取りになると、改めて伝授して進ぜよう。

その授業料は高くつくだろうがな。

デーダーはヤマトの前方を航行中の武装空母が甲板の武装をひっくり返して格納し、次々と艦載機を出撃させているのを見て嘲笑した。

「ふん、いまさら艦載機の追加か。それも爆撃機と雷撃機とは——よほど艦載機に余裕がないらしいな」

デーダーはヤマトがまだこちらを発見していないという確証があった。もしも発見していたら、あのタキオン波動収束砲を使っているに違いないと確信していたのだ。

あれほど素晴らしい威力を持つ大砲を死蔵するなどまずありえない。われわれだつたらもう使っている。

それにあの増設ユニットも、解析した限りでは単なるミサイルユニット兼防御フィールド発生機に過ぎないようだ。ドリルミサイル対策は、発射口を塞ぐあの装甲板だけと見て間違いはないだろう。

「デーダー司令。ガミラスの戦闘機部隊を補足しました。まっすぐこちらに向かっています」

部下の報告にデーダーは鼻で笑つてから「適当にあしらつておけ」と指示を出す。とはいえ心の中では少々の——いや結構な驚きがあった。

「……もうこちらを見つけたのか。思ったよりも早かつたな。だがここまででは予想どおり……敵から奪い取った兵器の優位性など過信してはいない。ワープ航跡を追えたかたまたま哨戒部隊が正しい方向に進めたかは知らぬが、こちらを見つけた以上ヤマトが取る行動は……」

「デーダー司令、ヤマト艦首をこちらに向けました。装甲板も展開しています」

やはりだ！ ヤマトは形勢逆転の為にタキオン波動収束砲を使うつもりだ！

ドリルミサイルの存在を知つていても、その威力に縋るしかないだ

ろう。

あれだけ対艦ミサイルの雨に晒されたのだ。決して損害は軽くないはず。焦りも生まれただろう。

なにより連中は早急にイスカンドルとガミラスに行きたがっている。そのイスカンドルとガミラスにわが暗黒星団帝国の大艦隊が攻撃を仕掛けたことくらいすでに知っているはずだ。

ならばなおさらわれわれに構っている時間も惜しければ、損害を抑えたいと考えるが必至。タキオン波動収束砲の威力で一気に戦局をひっくり返そうとするのは当然の選択。

読みどおりだ！

「ドリルミサイル転送開始！ 撃たれる前に封印してやる！」

あらかじめ待機させておいたドリルミサイルと攪乱用の爆撃機二〇機にすぐワープ光線を照射、転送する。

これでヤマトは終わりだ。このドリルミサイルがヤマトの波動砲を封じて一発逆転を奪い、そのまま内部から粉々に粉碎してくれることだろう。

——そして、こちらには旗艦プレアデスがある。

決戦兵器を持っていないガミラス艦など物の数ではない。

こちらには連中の戦艦クラスに劣らぬ火力の巡洋艦が計九〇隻。そこに巨大空母一〇隻からなる大量の航空戦力。

これだけ圧倒的な戦力差があれば負けるはずがない。勝ちが決まったも同然だ。

「ルリさん、ワープアウト反応には細心の注意を払ってくれ。失敗したらヤマトは一巻の終わりだ」

「任せてください。絶対に見逃しません！」

進の発破にルリも真剣な面持ちで答える。

敵艦隊発見の報を受けたとき、進はすぐに波動砲を準備——する『フリ』を指示した。

「しかし古代、敵にはドリルミサイルが……」

説明を飛ばして指示した進に大介が疑問の声を上げた。

進はそれに答えるべく、作戦を語り始める。

「それが狙いさ。敵はヤマトがミサイルの雨に晒されて焦れたと考えたはずだ。戦力でこちらに勝っていて気が大きくなっている。『直接ヤマトと対峙した経験のない指揮官』ならなおさらそういう結論に至るはずだ。先遣隊やバラン星での交戦経験があるにしても、それが正しく指揮官に伝わっていなければ、有利な状況に立てば立つほどに驕りになる」

進はゲッターが送ってきた敵艦隊の画像データにいままで戦場で見かけたことのない大型戦艦の存在を確認した。艦隊の中央に位置している。あれが敵の旗艦だろう。

「そして、そんな状況で波動砲の威力だけを見せつけられればこちらに気を取られ、波動砲さえ封じれば勝ると必ず思い込む。——かつて冥王星のシウルツ司令が、超大型ミサイルや艦隊戦力でヤマトの波動砲を封じて、反射衛星砲で仕留めようとしたことを思い出してくれ。あれはヤマトの戦艦としての力を知りつつも、波動砲に注意が向き過ぎたがゆえの戦術だったんだ。堅牢強固な宇宙要塞や惑星上の基地施設であっても、規格外に近い防御装置でなければ防げない威力を、波動砲は持っている。恐れて当然、意識が向いて当然なんだ」

「——古代艦長代理の言うことには一理ある。私とてヤマトの波動砲が恐ろしく、ドリルミサイルや瞬間物質転送器を用意して、いかに波動砲を封じるか、封じたあとヤマトをどうやって追い込むかを戦術の要として見ていた。……波動砲はそれほどまでに脅威に映るものだ。前線の指揮官や拠点の指揮官ほど、その威力で一挙に壊滅させられることを恐れるのだ」

進とドメルの言葉にクルーは納得してくれた様子。

ヤマトの航海における安全保障としても役に立った波動砲の威力。味方として見れば頼もしいが、敵に回せばこれほどの脅威はそうそうない。そこに、こちらが付け入る隙も見いだせるのだ。敵の注意を嫌というほど引いてくれる。

「あの黒色艦隊も同じだ。そして彼らはいま、波動砲を封じる策を手に入れてる。さっきのミサイルの真意は航空隊を剥ぎ取ってヤマトの防空網に穴を開けることだけが目的じゃない。あれだけの爆撃を受ければ消耗を強いられる。そこに敵艦隊発見の報を聞けば、最も強力で射程の長い波動砲で一発逆転を図るに違いない、そこをドリルミサイルで完封する。それが連中の狙いなんだ」

「……なるほど。なら、その思惑に乗るフリをして波動砲を構えてやれば、相手は貴重なドリルミサイルを勝手に使ってくれるというわけだな」

真田も右手を顎に当てて納得する。

「とすると、ドリルミサイルを無力化したあとに波動砲を使うのか？」
封印の危険性さえ回避できれば波動砲で一気に撃滅するという選択肢も取れる。

いまの状況ではそれが最善と思ったであろうゴートが訪ねてきたが、ハリが即座に指摘した。

「この七色星団の中で安易に波動砲を使うのは賛同できません。ここはスターバースト宙域——それもかなり活動が活発な部位にあたりますから、波動砲の余波がどんな被害をもたらすのかまるで予測がつきません」

ハリが手元のパネルを操作してメインパネルにヤマト周辺の宙域図を写す。

「このように、ヤマトの周辺は『凧』にあたる空間となっておりますが、その範囲は全体から見るとごくごくわずかなもので、周囲には星間物質の嵐があちこちに点在しています。もし波動砲を使用した場合、タキオンバースト波動流がもたらす空間歪曲の干渉によってこれらの流れが変化してしまう可能性が高く、ヤマトへの影響も考えられます。予期せぬトラブルを避けるためにも——波動砲の使用は控えるべきだと進言します」

「……たしかにそれらに波動砲が作用した場合、どうなるか予測が付きにくいな……敵艦隊を撃滅するには、この広がり方だと六発を使った広域破壊を行う必要があるだろうし、撃滅できても敵艦隊の爆発で

より広範囲に影響をもたらす危険性も否定できないか……マキビ君の言うとおりに、波動砲の使用は控えたほうがよさそうだ」

「そうだな……今回は波動砲はなしでいこう」

進はあっさりとして、未練なく波動砲という選択肢を捨てる。

一発逆転の威力は魅力的ではあるが、なければいけないでほかの選択肢を選ぶだけだ。ヤマトには威力こそ格段に劣るとはいえ、戦局を左右するに足る威力の武器が、あと三つ残されている。

「ハーリー、サテライトキャノンの場合はどうだ？」

「いま解析してみます——そうですね、あれは波動砲に比べると格段に作用が劣りますし、GXの単装タイプなら大きな被害はないと思われれます。それと、使用数を制限すれば信濃の波動エネルギー弾道弾も大丈夫かと」

「なら、敵艦隊への決定打は予定どおりガミラス爆撃機・雷撃機部隊とGXのサテライトキャノンとして、そこに信濃の波動エネルギー弾道弾を加えるものとする。——島、ゴートさん。ドリルミサイルを躲したら信濃に移譲して発進に備えてくれ。ヤマトの操舵はハーリーに任せる」

進は迷わずサテライトキャノンの使用を決断した。

使わずに済めば越したことはない力でも、使わずにクルーを、ひいては地球の未来を危険に晒すわけにはいかない。

——指揮官として、辛い選択だと常々思う。

「……わかった。任せたぞ、艦長代理」

島もゴートも心得たと信濃の格納庫に出撃準備の指示を出し、ハーリーも「了解しました」と緊張した面持ちで応じた。

バランスの戦いで全部撃ち尽くしてしまっているのだから、補充が間に合ったのはたったの四発。かなり少ないが、戦艦の二隻くらいなら十分始末できるだろう。

いまはこれが切り札になるだろう。

「あとは、信濃出撃のタイミングだな。敵の行動がもう少し読めるなにかがあればいいんだが……」

第一艦橋でドリルミサイル排除の流れが決まったときも、コスモタイガー隊は敵航空部隊と派手な空戦を演じていた。

度重なる強化改修で性能を増したアルストロメリア。その性能をいかに発揮して互角の戦いを演じていたが、数の暴力、そして敵機の火力の高さには手を焼いていた。

全機が今回から配備された中央で折りたたためる展開式の大型シールドを使用して敵の攻撃を凌ぎつつ、返す刃で撃ち落とししていく。

「すまん！ そっちは任せる！」

「おうっ！ 任された！」

コスモタイガー隊の面々は互いに声を掛け合いフォローし合いながら、群がる爆撃機とその護衛の戦闘機に果敢に立ち向かう。

いずれもアルストロメリアよりも大きい、現在の地球では大型機動兵器と言われる部類の機体は頑丈で、撃墜するにも一苦労だ。

オプシオンで用意された武装でもロケット砲やレールカノン、Gファルコンの主砲たる拡散グラビティブラストなどの高火力兵器を中心に、場合によっては接近してハサミを閉じたアトミックシザースを突き立てて装甲をこじ開け、その隙間にビームを撃ち込むなどの工夫を凝らして効率的にダメージを与えていく。

Gファルコンから計二〇発のミサイルを撃ち放ち、続けて両腕の内臓ビームライフルを発射。

アトミックシザースからのビーム砲の追撃に拡散グラビティブラストで面制圧。

接近してクローを突き立てシザースを突き立て。

黙ってやれてはくれない敵機も次々とビームを撃ちかけてくる。危うい攻撃を盾の表面を溶かされながら受け止め、反撃——できずに機体を損壊させながらも後退して体勢を立て直して反撃。

——熾烈極まる攻防が続く。

ヒカルはイズミが乗るアルストロメリアと互いの死角をフォローしながら爆撃機迎撃任務に勤しんでいた。

「うえ〜ん！ 相変わらず触角がグネグネ動いて気持ち悪いよお〜」
まるで虫のような——しかも触角がわさわさ動いて黒いボディ

とあって——生理的嫌悪感を感じながらレールカノンとアトミックシザースのビーム砲を撃ちこんで目障りな触角を切断、各所に備わった連装機銃が撃ちかけてくるビームを避けながら急接近、アトミックシザースのハサミを閉じて機首下側設置されているコックピットに向けて容赦なく突き刺す。

「……機体の下のほうにコックピットがあるってことは、やっぱり対地爆撃も考慮してるってことかなあ？」

漫画のネタ探しだったりウリバタケの蘊蓄だったりで、そこそこのミリタリー知識を持っているヒカルがぼつりと感想を漏らす。

——すっかり戦争に慣れてしまったと頭の片隅で自虐的な感想が浮かんでくる。

ナデシコ時代にも思ったが、あの時よりもさらに深刻で容赦のない戦いに足を踏み入れてしまった。

もちろんヒカルなりに理由があってヤマトに乗って戦う道を選びはしたが——まさかここまで容赦のない攻撃ができるほどになってしまうとは……。

(ま、コックピット外したって撃墜するんなら同じことだけどね)

いまさらそんなことを考えている自分に冷ややかに突っ込みながらも手は休めない。

少し離れた敵に向かって収束モードの拡散グラビティブラストを撃ちこんで撃墜。地球を発つて以来、この砲には幾度となく助けられてきた。アルストロメリアの量産成功もそうだが、Gファルコンなくしてコスモタイガー隊の活躍はあり得なかっただろうと心底思う。

——やっぱり、ロボットには強化パーツの合体が不可欠だ。

「ヒカル、右舷のガミラス戦艦がちよつとヤバ目だ。支援に行こう」「りよーかい！」

イズミに促されて素直に応じる。幸いほかの機体も頑張ってくれるしなにより——

「オラオラアッ！ 近づく奴あ、容赦しねえぞ!!」

開きっぱなしの通信機から聞こえてくるサブロウタの威勢のいい声にちらりと視線を向けると、そこには大量の弾薬を惜しみなく吐き

出しているGファルコンデストロイの姿があった。

Gファルコン側に増設した対空ミサイルと宇宙魚雷も、左足に増設したセパレートミサイルポッドもさっさと撃ち切つて、スタビライザーやポッドを切り離して身軽にしつつ敵陣の真つただ中に突撃。

両腕のツインビームシリンダーから、両肩のショルダーランチャーからビームを吐き出しつつGファルコンに懸架された巨大な大型爆弾槽のハッチをオープン、中から片側二六八発の高性能炸裂弾を吐き出して機体の両側面に眩いばかりの花火を咲かせる。

その中に突っ込んでしまった不運な機体はたちまち撃墜され、慌て避けた機体は突入コースを著しく逸脱して――。

「もらつたー」

レオパルドのおこぼれを狙つたエアマスターが撃ち落としていく。Gファルコンバーストとなつたエアマスターの機動力や凄まじく、DMF-3やイモムシ型戦闘機と言つた異星人の宇宙戦闘機すら引き剥がす圧倒的な速度、そこにノーズビームキャノンと拡散グラビティブラストの火力が加わつたとあれば、並大抵の戦闘機ではまるで歯が立たない。

なんとか後方に回り込んでビームを撃ちかけたイモムシ型戦闘機も、軽々と回避された挙句後方に向けられた拡散グラビティブラストから放たれた重力波の散弾でコックピットを射抜かれて宇宙に散つた。

まさかGファルコンバーストが後方射撃にも対応しているとは思わず虚を突かれたのか、不用意な隙を晒した機体を周辺にいたアルストロメリアが容赦なく撃ち落としていく。

「うひゃ〜。ガンダムすごいなあ〜」

今度自分も乗ってみたい。

なんとなくオタクな心境が顔をのぞかせた。

数の上で絶対的な不利を抱えながらも、登場して以来変わらぬ（非常識な）優位性を見せつけるガンダムを起点として、コスモタイガー隊の懸命の反撃が続けられていた。

――しかし数の暴力というのは覆しがたいもので、奮戦しながらも

徐々に徐々に損傷を蓄積していった。

いまは戦闘空母が本体攻撃用の爆撃機と雷撃機を懸命に吐き出している最中。ほとんど標的にされていないとは言ってもいくらかの敵機が発艦中の艦載機を沈めてしまおうと踵を返している。

それをカバーするコスモタイガー隊の負担は急激に増大していた。

そして――。

「ぐあっ!？」

一瞬判断を迷った一機のアルストロメリアが、イモムシ型戦闘機と接触事故を起こして弾き飛ばされてしまった。

接触したイモムシ型戦闘機はGファルコンアルストロメリア程度の質量との接触でどうにかなるほど軟ではないらしく、すぐに軌道修正して吹き飛ばされたエステバリスを撃墜しようとしたが――。

ビームが一閃。

真上から撃ちこまれたビームに機体を貫かれ、明後日の方向に飛び去り雲海へと突っ込んでいく。あれは――無事では済まないだろう。

「大丈夫か？ 帰還できそうか？」

イモムシ型戦闘機を容易く仕留めたのは、ヤマト最強の地位を揺るがぬものとしたGファルコンDX。

増設された武装の内、ミサイルと魚雷とレールカノンを使い切っている様だ。機体表面には何度か被弾したであろう『擦過傷』が見られるし、左手のデイフェンスプレートも脱落しているが、こちらとは比べ物にならないほど、いつそ嫌味すら感じてしまうくらい奇麗な状態だった。

「な、なんとかかな……でも右腕が駄目そうだ、切り離す」

右肩の付け根で起こった小規模の爆発で右腕が丸ごと切り離される。爆発ボルトを使った強制排除機構が作動したのだ。

右腕は肘から下は無傷だが、肩のあたりが大きく拉げている。どう見ても作動できそうにはない。

「護衛するからすぐに戻って応急処理を。このままの戦闘継続は危険だ」

「言われなくてもそうさせてもらう――隊長、修理と補給のため帰還

させてもらいます！」

パイロットはすぐに隊長のリョーコに報告を入れる。勝手に戻って戦線に穴を開けてしまうわけにはいかないのだ。

「わかった！ 命あつての物種だからな！」

許可も取れたのでヤマトに引き返そうとしたアルストロメリアに敵機が迫る。

対処を——！

とパイロットが行動するよりも先に、なにを思ったのか、咄嗟に切り離された腕を空いていた左手で掴んで、Gハンマーの要領でグルグルと回して勢いをつけるダブルエックスの姿が視界に映った。

そして！

「ゲキガンパンチッ！」

と叫んで敵機の眼前に放り投げる。

まさかまさかの手動式ロケットパンチが炸裂！

破損した機体の部品を放り投げるとは思っても見なかった敵機はつい慌ててしまつて姿勢を乱す。命中こそ避けたが無防備な姿をダブルエックスの眼前に晒す結果となつた。

そこに頭部バルカンとGファルコンの大口徑ビームマシンガンを全力で叩き込んでハチの巣にする。

防御フィールドとそこそこ頑強な装甲を持つとはいえ、そこは最強の代名詞ガンダムの攻撃だ。敵機は耐えきることができずに爆ぜて消えた。

いまの攻撃で頭部バルカンの弾を使い切つてしまつたようで、空しい作動音が通信機を通して伝わつてきた。

ダブルエックスはまた一つ武器を失つた。

今後に差し支えるかとも思うよりも先に口から、

「おまつ、ゲキガンパンチで……」

とツツコミが飛び出していた。

突つ込まれたアキトはひどく狼狽えてしまつた。

ついガイのことが頭に過つてしまつたがゆえの言動だったが……冷静になつてみると気恥ずかしい。

「まあ、その機体もヤマトもゲキ・ガンガーみたいなものだけどこさ……。いや、妙なことを考えてる時間はないか。ありがとうテンカワ、今度なにか奢らせてくれ」

感謝の言葉と共に彼は傷ついた機体を労わりつつ、ヤマトの下部発着口へと滑り込んでいく。

「……ダブルエックスとヤマトはゲキ・ガンガー、か」

人型——ワンオフ生産のスペシャル機——その誕生経緯故にガイの事を重ねたダブルエックスのことしか目に入っていなかったがなるほど、たしかにヤマトの立ち位置を物語に置くのであればまさしくゲキ・ガンガーのようなスーパーロボットそのものだろう。

悪の大群相手に孤軍奮闘、しかもそれ以外の戦力はあまり役に立たないといくればまさしくだ。

ある意味では、かつてアキトが、ガイが、木連の人々が焦がれたゲキ・ガンガーの現身と呼べる存在と考えるても、当たらずとも遠からずなのだろう。

ならば、物語の結末はハッピーエンドが望ましいのだが……。

敵機の迎撃を続けるべく振り返ったダブルエックスのメインカメラが、ヤマトの周囲に出現した新しい爆撃機の編隊と、遅れて出現した件のドリルミサイルの姿を捉えていた。

「ワープアウト反応！・ 敵爆撃機さらに追加！」

ハリの報告に守とゴートはすぐに対空迎撃を指示する。

ヤマトからの対空攻撃はミサイルに止め、パルスブラストは使わない。傷ついたコスモタイガー隊も、残された力を振り絞って必死に艦隊上空を飛び回って攻防を続ける。

正面に陣取っていた戦闘空母を右に移動させ射線を確認、いかにも波動砲で狙っていると示した瞬間にこれだ。たしかに波動砲に追加した装甲板を開放しているとはいえ所詮はブラフ。これは——

「さらに正面にワープアウト反応！——ドリルミサイルです!!」

ワープアウトした物体の形状と質量からヤマトにとって最大の脅威——ドリルミサイルが撃ち込まれたことを確認する。

「島!!」

「全速後退!! 波動砲口よりエネルギー噴射!!」

波動砲からタキオン粒子が猛烈な勢いで噴出され、ヤマトが全速で後退を始める。

ベテルギウス以来となるヤマトの全力逆噴射。吹き出すタキオン粒子の奔流はヤマトを猛烈な勢いで逆進させた。

メインノズルと同等の推力を持つ噴射はヤマトを急加速で後退させることに成功、予想どおりドリルミサイルとの着弾を遅らせるという目論みを果たした。

――が。

「――ふん、ブラフだったか。だがその程度で逃げられると思うなよ」
データーはヤマトに謀れたことを不愉快に思いながらもドリルミサイルの制御を部下に命じる。

こういった事態を想定して簡易ではあるが改造してある。すでに撃ち放ってしまった以上命中させなければこちらが終わりだ。なにがなんでも命中させなければ……。

データーの額にわずかだが、汗が浮かんだ。

「ドリルミサイル、増速を確認! 追尾してきます!」

ハリの報告に苦い顔をしながら、大介は操縦桿を操ってヤマトの進路を左に変更している。だがドリルミサイルは食いついてきた。

「どうやら爆撃機に積まない代わりに本体にエンジンを増設したようだな」

メインパネルに映し出される拡大映像を冷静に分析するドメル。

ドメルが発注したときのドリルミサイルは探査用の特殊削岩弾に爆薬を追加したり、侵入者対策を施した程度であり大規模な改造は

施されていなかった。

だがいまのドリルミサイルは後部にエンジンユニットが、本体に固定用のマニピュレーターと思われる部品が増設されているのが見て取れる。

おそらくあれでヤマトの艦首をがちり掴んで確実にドリルミサイルを波動砲口に送り込むつもりなのだろう。

なかなか考えている。鹵獲品とはいえ使えるものは有効に使う姿勢は素直に評価すべきだろうか。

波動砲からのリバースで全速後退を続けるヤマトにドリルミサイルが迫る。このままでは直撃は避けられない。

「真田さん、Nユニット分離！ 盾にするんだ！」

「わかった！ ユニット分離！ ヤマト前方で交差させて盾にするぞ！」

真田が艦内管理席からの操作でナデシコユニットをヤマト両舷から切り離すと、後部エンジンに点火。切り離されたナデシコユニットは先端のブレード部分をヤマトの艦首前方で交差するようにしてヤマトの盾となる。

そのナデシコユニット——前方に出ていた左ユニット目掛けてドリルミサイルは正面から激突、激しい火花を散らす。

先端のドリルを回転。

トルクを相殺すべく姿勢制御スラスタを噴射して本体の回転を防ぎつつ、ナデシコユニットの装甲をガリガリと削る。さらに先端からプラズマトーチを出力して掘削スピードを上げていた。

本来備わっていないなかった機能だ。制御室があるドリル中心のスペースにこれほどの出力を持つプラズマトーチを内蔵するとは……！

その勢いのまま左ユニットのブレードを貫通し、後方にあつた右ユニットのブレードに食い付いて火花を散らす。

想像以上の掘削力にさしものドメルもも緊張を隠せない。やはり急増品のユニットの装甲で防げる代物ではなかった。

ドリルミサイルはそのまま右ユニットのブレードを貫通してヤマ

トに迫ってくる。

しかしヤマトはドリルミサイルがナデシコユニットを突破するまでの時間を利用して大きく艦尾を左に振って波動砲をドリルミサイルの正面から退けることに成功している。装甲も閉鎖完了。

ドリルミサイルは依然ヤマトに向かって突き進み、増設された四本のマニピュレーター（爆撃機の触角型ビーム砲と形状が似ている）を展開してヤマトの艦首を抱え込もうとしていた。

逆噴射を諦めたことで減速したヤマトに追いついたドリルミサイルの先端が、波動砲を覆い隠す装甲板に接触、プラズマトーチと頑強なドリルが激突して激しい火花を散らして装甲を削り取っていく。

激しい振動に揺さぶられながらも、ヤマトはなおも艦尾を左に振って、艦首を軸に艦を回転させる。

ミサイルのマニピュレーターがヤマトの艦首を抱え込もうと伸びる。

左舷のロケットアンカーをドリルの根本付近に撃ち込んで強引に進路変更。

——熾烈な攻防の末、ドリルミサイルは波動砲を隠す装甲板を剥ぎ取り発射口右側に接触して削り取り、アンカーのチェーンを引きちぎりながら波動砲に突き刺さることなく通り過ぎてしまった。

追加された装甲は、時間稼ぎという宿願を見事果たして七色の宇宙の藻屑と消え去る。

通り過ぎたドリルミサイルは懸命に進路を修正しようとするが、ヤマトは回転を止めて右舷スラストを全開して水平移動。ドリルミサイルから距離を取りながら第一主砲を旋回。ドリルミサイルを狙う。

ドリルミサイルが速いか。主砲が速いか。

緊迫して一秒が一〇秒にも感じられる攻防が続く。

その結末は——ヤマトの第一主砲から放たれた重力衝撃波が、ドリルミサイルを射抜いたときに決した。

確実にヤマトを破壊すべく爆薬を増やしていたのだろう、至近距離で激しい爆発に晒されたヤマトは大きく揺れ、破片の直撃を受けた右

舷コスモレーダーアンテナがもぎ取られ、艦長室右側のアンテナもへし折られ、右舷パルスブラスト数基の砲身が折れ曲がる被害を被りはしたが、最大の懸念であった波動砲の封印と破壊を回避することに辛うじて成功したのであった。

「ばっ、馬鹿な……!!」

デーダーは思わぬ結末にシートから立ち上がって驚愕する。

まさか、あの増設ユニットが切り離し可能な作りになっていたとは

(ガミラスに与した以上、対策を取られることは想定していた……! あのを発射口を塞ぐ装甲板がそうだと思っていたが……あれはこちらの誤認を誘うためのものだったのか……! あの増設ユニットも単なる武装とフィールド発生装置ではなく、これすらも視野に入れた装備だったとは……っ!!)

実際はデーダーの推測どおり、装甲板だけがドリルミサイルの対策で、進が咄嗟にナゲシコユニットを盾にすることを思いついたに過ぎないのだが、デーダーにそれを知る術はない。

ギリリッ! と歯軋りしながらも艦隊に散開を指示する。こうなれば少しでも間隔を取って一気に壊滅することを避けなければならぬ。

「エ、デーダー司令! 艦隊後方に未知の粒子反応を検出! 重力場の変動も確認しました! これは——!」

オペレーターの報告よりも早く、デーダーは艦隊の後方——空母が隊列を組んでいた付近にさきほど武装空母から出撃したばかりの爆撃機と雷撃機——そして一際活躍が目立っていたヤマトの人型二機が出現したのを見た。

「ヤ、ヤマトの転送戦術だ?!」

瞬間物質移送器の反応ではない!

デーダーの知らない未知の転送技術を持ってヤマト・ガミラス艦隊

はこちらの心理的有利に付け込んだ反撃を開始したのだ。

デーダーがそう理解したときには、爆撃機・雷撃機編隊の雷撃で空母が五隻も沈み、残された五隻もヤマトの人型の一機が放った（機動兵器としては異例なまでに）巨大なビームの奔流に貫かれ、呆気なく四散してしまっていた。

想定外の事態に思考停止仕掛けたデーダーの耳に、オペレーターから悲鳴に近い報告が飛び込んできた。

「デーダー司令!! ヤマトが向かってきます!!」

声に反応して頭上のメインパネルを見ると、艦首を真っ直ぐこちらに向けて前進してくるヤマトとガミラスの艦艇の姿が映し出されている。

そう、増設ユニットを全て使って守り抜かれたヤマト最大の兵器。

そしてわが暗黒星団帝国にとって致命的な威力を發揮するであろうタキオン波動収束砲の砲口が、真っ直ぐこちらを向いている。

それを塞ぐはずだったドリルミサイルは仕損じ、砲口の端っこを削るだけに終わった。

デーダーは死神に心臓を鷲掴みにされたような冷たい感覚を腹に感じながらも、即座にヤマトとの砲撃戦を指示する。

こうなれば距離を詰めて至近距離で撃ち合うしかない。チャージの暇も与えず力押しするしかないと悟る。

こうして、暗黒星団帝国優位に進んでいた戦局は一変し、ヤマト・ガミラス艦隊と正面からの砲撃戦に移行するのであった。

予想されていた七色星団の艦隊戦は熾烈を極め、一時は暗黒星団帝国が優位に立ちまわっていた。

しかし、切り札であるドリルミサイルを辛くも退けたヤマトとガミラス複合艦隊の猛反撃が、いままさに開始されようとしていた。

ヤマト行け！ 危機に窮している三つの惑星を救えるのは君しかないのだ！

人類滅亡と言われるその日まで、

あと、二四三日。二四三日しかない！

第二十三話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十四話 激戦！ 封じられた波動砲!?

切り札を失い、ヤマトはどう抗う？

第二十四話 激戦！ 封じられた波動砲！？ Aパート

ヤマトが七色星団でデーダー率いる艦隊と熾烈な戦いを繰り広げていた頃、ガミラスもまた緊迫した時間を過ごしていた。

突如として出現した、暗黒星団帝国に属するであろう艦隊は、バラン星で確認された艦艇を中心に未確認の大型艦艇数隻も確認されるまさしく大艦隊。

——途方もない規模であった。総数は確認できているだけで三〇〇〇隻ほど。正面から戦えばいかにガミラスとはいえ、苦戦は免れない規模だ。

……その艦隊はいまは、緊急出動した本土防衛艦隊と睨み合い、一触即発の空気を醸し出していた。

デスラーは敵大艦隊を忌々し気に睨みつける。

移民船団護衛のため、本星に戦力の多くを呼び戻していたことが幸運であったと言えよう。喜ばしいことに、ガミラスの支配下にある星々にまでは手が及んでいないと報告を受けている。

つまり敵はガミラスとイスカandalに対してすべての戦力を集中させてきたということになるが、植民星の防衛に戦力を割かなくて済むのは幾分気持ちが良い。戦力を分散せずに済む。

敵艦隊が防衛艦隊と向き合ったのは、接近が報告されてからきつかり二〇時間後。

バラン星襲撃の真意を見抜いたデスラーが緊急警戒態勢を発令しなければ、対応が間に合わなかったかもしれない。それほど敵の動きは迅速であり、これほどの艦隊でありながら監視網をいくつもパスしてきた実力者。

通常の警戒態勢だったなら、見落としていたと考える間違いない。

……油断ならない敵だ。ヤマト接近に合わせて警戒態勢になっていたはずのバラン星基地に容易く奇襲をかけただけのことはある。

それにしても……。

デスラーは敵の動きに違和感を覚えた。

こちらが思ったよりも防備を固めていたからか、それともなにかしら思惑があるのか、睨み合いの姿勢を崩そうとしない敵艦隊。

バラン星を急襲したのはガミラスを浮足立たせるためのはずなのに、どうしてわざと発見されるような動きで接近したのか。連中の力なら本星の目と鼻の先まで発見されることなく近づくことも不可能ではないだろうに、なぜわざわざ発見されるようにして接近してきたのか。

不可解だ。

ガミラスの力量をあれで量った気になって、大きく出ているとも考えられなくはない。

だがデスラーの戦士としての感がそれを否定する。そして、迂闊にこの硬直を解いてはいけないと、第六感が強く訴えている。

そうやって睨み合って二時間。ついに敵に動きがあった。

「私は暗黒星団帝国、マゼラン方面軍総司令メルダーズ。イスカンダルとガミラスはわが暗黒星団帝国に即刻無条件降伏せよ。戦力の差は歴然である、抵抗は無意味だ。繰り返し返す、ただちに降伏してわが帝国に従うのだ。そうすれば、あの移動性ブラックホールに飲み込まれる前に国民の安全は保障してやってもいい」

少々焦らしてからの降伏勧告。さて、どう動くガミラスよ。

「大ガミラス帝国総統デスラーだ。生憎と無法者に屈するほどわがガミラスは脆弱な国家ではない。痛い思いをしない内に逃げ帰ることをお勧めする。そのほうが双方のためになろう。無駄な血を流すことはない」

バラン星基地を奇襲で事実上潰された直後とは思えない、余裕な態度のデスラーの返答。だがメルダーズは顔色を変えることなく、

「——ガミラスの技術力であのブラックホールをどうにかできるのか？ バラン星基地を失った以上、諸君らに逃げる場所などない。それ

とも、あのヤマトに頭を下げて地球に入植させてもらうつもりか？
そうだとすれば侵略者の立場にありながら、なんとも面の皮が厚いこ
とだ。滑稽にもほどがある」

煽る様に切り込んでやった。

ガミラスにあのブラックホールをどうにかする技術がないのは、移
民計画を発案していることから容易に推測できる。

そしてヤマトが共同戦線を自ら持ちかけたことも察しがついてい
る。——いや、あの展開から予測がつかないとしたらそいつは真の無
能と言つていい。論外な推論だ。

ヤマトの目論見は可能な限り平和的に戦争を終わらせることであ
ろう。侵略者に塩を送るような真似は正直理解に苦しむが、彼らなり
に切実な、もしくは譲れないなにかがあつたのだと考えるのが妥当
か。

「生憎だが、ガミラスはつい最近だがブラックホールへの対処法を確
立することに成功している。地球に移民などしなくても、わが偉大な
るガミラス帝国は健在なのだよ」

デスラーは不敵な笑みを浮かべてメルダースの脅しを切り捨てる。
まったく痛痒を感じていない様子にメルダースはいささか驚かさ
れた。

だが、その態度の真意にはすぐに気付かされた。

「——そうか、ヤマトか。ヤマトのタキオン波動収束砲あのブラッ
クホールを吹き飛ばすつもりか」

メルダースは少々眉根を寄せて唸った。

まさか、そんなことがありえるとは……！

ガミラスはヤマトと交渉し、味方につけることに成功したのだ。

きつとヤマトはバランス星での戦いでこの借りを利用してガミラスに
それを示唆したのだ。タキオン波動収束砲の威力でブラックホール
の排除する、その対価にガミラスになにかを要求し、見事目論みを成
功させたのだろう。

……地球に対する調査はろくに進んでいないのでその詳細は知ら
ないが、捕虜にしたガミラス兵から口を割らせた情報によれば、地球

はガミラスによる侵略で滅亡寸前にあり、イスカンドルからの援助で完成したヤマト一隻が対抗戦力らしい。

だとすると、壊滅寸前まで追い込まれた地球に対する侵略の停止、謝罪は当然として復興に関わるあらゆる援助あたりが取引条件になつていそうだが、そこを追及したところで目の前の男を揺さぶるには至らないだろう。

——この男、すでにすべてを受け入れている。

そうさせるだけの力が——魅力が、あの戦艦一隻にあるというのか！

「なにを想像したのかは聞かないでおくが、繰り返してお伝えしよう。わがガミラスはなにものにも屈するつもりはない。余計な血が流れない内に、早々に逃げ帰ることをお勧めする。その場合は追撃はしないと約束しよう」

……たいした男だ。バランスのことを言及しないとは。あれだけでも報復と称して戦いを挑むに足るというのに、素直に引き返せば追撃しないなどと、そうそう言えるものではない。

そしておそらくこの男は口約束を簡単に違えるようなタイプではない。真に認めた兵に対しては、礼節をもって挑むタイプと見た。

「——われわれにも引けない理由がある。わが帝国の未来のためにも、そう易々と諦めることなどできんのだ」

「では、その『理由』とやらを聞かせてもらおう。君たちを退けてしまつてからでは聞くことはできないからね」

「われらの目的はガミラスとイスカンドルにある地下資源——ガミラシウムとイスカンドリウム。……資源こそ、われわれの欲するものだ」

嘘は言っていない。だがこれだけがすべてではない。

メルダーズは最初から目的のすべてを話すつもりなどなかった。デスラーが応じるはずがない、いや、まともな国家であるのならまず間違いなく応じるわけがない要求だという自覚があつたからであり、同時にわずかばかりの後ろめたさがあつたからだ。

「なるほど。ならばますます応じることはできない。イスカンドリウ

ムもガミラシウムも、すでに何世紀も前に環境保全のために採掘を中止した代物だ。母なる星を傷つける行為は決して容認できん！——メルダーズ司令、繰り返し返すが、わがガミラスは降伏には応じぬ。そして親愛なる隣人、イスカンドルへの手出しも許すわけにはいかない！資源が欲しいのならば、無人の星を開拓するなりしたまえ！」

予想どおりの反応だ。

だがそれでよし。それでこそ指導者というものだ。

——その立派な姿勢に敬意を表して、全力でやりあおうではないか。

「……そうか。残念だが致し方ない。少々手荒い方法だが、力づくで屈服させるとしよう」

と言いつき通信を切った。

さて、もうあとには引けんど、互いにな。

デスラーは暗転したメインパネルをにらめつけながら思考していた。

交渉が決裂に終わったことは残念だが仕方がない。予想されていた結末だ。

降りかかる火の粉を払わないわけにはいかない。デスラーには国家の発展と安全のために力を尽くす義務がある。

だが……。

メルダーズはすべてを語っていない。デスラーは確信を持っていた。

侵略者が被害者側にすべてを語る義務も義理もないが、彼の言葉にはどこかこう——後ろめたさのようなものを感じた。

おそらく口にすることが憚られるような目的が、彼らにはあるのだろう。

そしてそれはガミラスが地球を欲したように、民族の存亡を掛けた目的であるため行動にこそ移しているが、彼個人としては必ずしも納得してはいないということだろうか。

イスカンドリウムもガミラシウムもたしかに有用な資源だ。だ

が有用でこそあるが、それとて効率が優れた核燃料資源に過ぎない。わざわざこれほどの大艦隊を率いて採掘するほどの価値があるかと言われれば正直微妙だ。だがこれはガミラスとイスカンダルが波動エネルギーを手に入れたことで不必要になったという点も考慮すべきか。

技術体系が根本的に違っていることを考慮すれば、連中にとっては非常に有益で替えの利かない資源なのかもしれない。

だがこれだけでは少し弱いな。

デスラーは思った。たしかに地殻内部に含まれるイスカンダリウムとガミラシウムを採掘すれば、星には大きなダメージになる。そこに住む生きとし生きるものは大きな痛手を受けること間違いない。

これに関してはどうせブラックホールに飲まれるのだから、と無視することはできる。国民の安全の保障というのも、素直に要求に従うのなら当然の保障とも考えられるが、デスラーは違和感を覚えた。

——ヤマトの登場で遅延を重ねているとはいっても、ガミラス人が星から退去するまで待てば妨害を受けずに済むと、なぜ考えなかつたのだろうか。

逃走先のバランス星を襲って使えなくしたことも含めて考えれば連中の真の狙いが見えてくる。

(やつらの真の狙いは目的は人的資源か)

デスラーは答えを導き出した。

イスカンダリウムとガミラシウムを欲しているのは事実だろうが、それ以上に欲しがっているのは人だ。

単なる労働力——にしてはあれほどの指揮官が後ろめたさを覚えるとは考えにくい。人のことをなんとというが、連中とて侵略にきているのだ。良心の呵責など抑えられるはず。少なくとも敵将の前では。にも拘らずそれを表に出してしまったという事は——。

……人体実験の材料。

ユリカのことを聞いて間がないためか、ついそんな考えが頭を過る。

いや、真相などどうでもいい。連中の要求には応じないのだから。

デスラーは頭を振って思考を切り替えた。

たしかに暗黒星団帝国の艦艇はガミラスのそれよりも優れた性能を持つようだ。だが、ヤマトほど絶対的な差があるというわけではない。バラン星での戦いが証明している。

奇襲という手段を取られて右往左往してしまっただが、戦い方次第で対等以上に渡り合える。その程度の戦力差に過ぎない。

たった一艦で全戦力をぶつければ——という考えを自然に出させたヤマトとは、比べるべくもない。

油断だけはしないように気を引き締めながら、確実に対処していけば勝てぬ戦ではない。

「スターシア、申しわけないが彼らとは矛を交える以外、道はなさそうだ」

密かに事の顛末を見守っていたスターシアにそう告げた。

スターシアもメルダーズの言い様に同じ考えに至ったのだろう、静かに目を伏せながら、「デスラー総統、健闘を祈ります」と短く告げた。争いを好まないスターシアとさえど、イスカンドルの資源が宇宙戦争に利用されるというのは理念に反している。また、いまイスカンドルが彼らに屈してしまえばヤマトにコスモリバスシステムを渡すことができなくなる。

——それは、どのような形であれ救いの手を差し伸べた地球はもちろん、スターシアにとって掛け替えない友人を見捨てるに等しい。それだけは絶対にできないだろう。

ユリカたちは——ヤマトはイスカンドルとスターシアを信じてここまで旅しているのだ。

だが抗おうにもイスカンドルにまともな軍事力はすでに存在しない。国民はすべて死に絶えた。人もいなければ兵器も残ってはいない。

だからガミラスが守ってやらねばならない。考えの違いから長らく袂をわけていたとはいえ、機嫌を同じとする隣人なのだから。

「心配は無用だ、スターシア。わがガミラスはそう簡単に屈したりはしない。イスカンドルも必ず守り抜いて見せる。それに——君が呼

んだヤマトも間もなくやって来る」

デスラーはこの戦いがそう簡単には終わらないであろうと考えていた。おそらく数日に及ぶ激戦となるはずだ。

敵も味方も大規模であるし、互いに様子を伺いながらあの手この手を駆使した凌ぎ合いになることは必至。根負けしたほうが事実上の敗北となるであろうことは想像に難くない。

こちらにも切り札のデスラー砲があるとは言え、努々油断は禁物。これほどの規模の艦隊を率いる存在が、小物であるはずはない。

まだ確認ができていないだけで、移動要塞の類が背後に控えている可能性は十分に考えられるのだ。

ガミラスはそういった兵器を運用していないが、過去にそれらを運用していた国家と相まみえたことがある。

彼らがそういった戦力を保有していない、この戦場に持ち込んでいないという確証が得られないのであれば、むしろあると考えて行動したほうが痛い目を見ないで済むのだ。

(もしも要塞の類を背後に控えさせているのならば、デスラー砲が最も有効なカウンターとなりえるだろうが……なんだ、この胸騒ぎは?)

デスラーはこの艦隊を初めて見たときから感じる胸騒ぎがまた強くなったのを感じた。

——やはりデスラー砲の使用はギリギリまで控えるべきだろう。万が一にも通用しなければ、ガミラス最強の力が通じなかったというショックで士気が致命的に下がってしまう可能性も無視できない。

それに、ガミラスが誇る超兵器はなにもデスラー砲だけではないのだ。

その威力、とくと味わってもらおうとしようではないか。そしてとつと尻尾を巻いて逃げ出して——二度とちよつかいを出さないことだ。

デスラーは踵を返すとデウスーラ・コアシップへと移乗。そのまま工廠内にて出撃準備を整えていた艦体とコアシップを接続し、自身の座乗艦であるデウスーラを起動、ガミラス星の軌道上へと上がった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット
第二十四話 激戦！ 封じられた波動砲!?

ヤマトがギリギリの賭けに勝利して、最大の脅威とみなしていたドリルミサイルを辛くも退けた頃。

こちらにも命辛々発進を成功させた爆撃機と雷撃機部隊に、GファルコンDXとGファルコンGXが合流する。

「ふう〜……ヤマトのリフレクトディフェンサーがなけりや、発進できなかつたぜ……」

愛機のコックピットでバーガーが冷や汗をかきながら呟く。

予想よりも激しい攻撃に一時は出撃も危ぶまれていたが、敵がヤマトに集中していたことが幸いした。見向きもされなかつたことにプライドが傷つかないでもないが、ヤマトがおそるべき艦なのはバーガーもよく理解している。

敵も同じ様子だ。ドリルミサイルをあそこまで改造して運用したところから見ても、ヤマトの波動砲を相当恐れていることが伺える。だからこそ確実にヤマトを潰しにかかつたのだ。ヤマトさえ潰せば、ガミラスの艦艇など物の数ではないと言いたいのだろう。

——腹立たしい。こちらはそのヤマトを潰すために選抜されたメンバーだぞ。……フルキャストではないが。

傷ついたプライドの礼は、これからたっぷりとしてやる。

「舐めくさった報い、しつかりと受けてもらおうぜ！」

バーガーは部下を率いて予定どおりGファルコンDXと合流する。クロイツ率いるDMT-97隊はGファルコンGXの担当だ。

「頼むぜアキト！ 調子に乗りまくったあいつらにガツンと一発決めてやろうぜ！」

「——そう言うおまえが調子に乗り過ぎて撃墜されるなよ、バーガー！」

アキトは左コンソールのキーを操作して、普段は使っていないボソ

ンジャンプ関連のシステムのメニューを呼び出す。大規模なジャンプを実行するためには相応の準備がいる。

ガミラス機にはヤマトの艦内工場で生産したジャンプフィールド発生装置を取り付けてある。急造品だが、行き帰りのジャンプに対応するだけの性能は得られたので、攻撃に成功したら速やかにガンダムと合流して再ジャンプすれば安全に母艦に戻る。

——ここが瞬間物質転送器との最大の相違だろう。

装置を稼働したら、あとはA級ジャンパーのアキトが行き先をナビゲートして、ガミラス機の装置をダブルエックスのジャンプシステムと連動してやれば、敵の眼前に限界まで爆装した爆撃機を送り込める。

それにイスカandalからの情報提供によれば、ガミラス人とイスカandal人はボソソジャンプに耐えられる遺伝子素養を持っていると聞いている。なにしろ彼らは古代火星人と自分たちが呼んでいた文明から分かれた存在なのだ。遺伝子素養を持っていても不思議はない。

念のためヤマトで行った検査でも追認できている。それでも念には念をと機体バランスを損なわないように注意しながら増設したデイストーションフィールド発生装置を最大出力で展開して保護を行っている。

万全だ。

(まさか、火星の後継者の戦法を真似る事になるとはな……)

思わず苦笑してしまう。

ボソソジャンプを使用しての奇襲作戦事態はアキトもヒサゴプランを始めとする破壊工作任務で多用しているが、部隊を率いて敵艦隊に急襲をかけるとなれば、火星の後継者がサクヤ攻防戦で統合軍の艦隊に対して実行した手段のほうがか遥かに近い。

多少複雑な気分になりはしたが、すでに復讐を乗り越えたアキトにとって火星の後継者は『過去の存在』に過ぎない。

なにより同じ道を進みかけて堪えた進の『お父さん』代わりになつてしまった以上、みつともない姿は見せられない。

「準備完了——ジャンプ……！」

アキトのナビゲートでバーガー率いるDMB―87隊が虹色の光と共に消失。わずかな時間を置いて敵艦隊の後方——機動部隊の直上に出現した。

「こつちもやるわよ……！ ジャンプ……！」

艦隊防空戦で振り回されて軽く酔った様子の子のイネスが気力を振り絞ってジャンプを開始。

クロイツ率いるDMT―97隊を引き連れて、アキトらとは別の方向に出現して波状攻撃の構えだ。

敵空母は一〇隻。バラン星の戦いで見た八〇〇メートルにも達する巨大空母。その内五隻の担当は——。

「よし……サテライトキャノンを使うぞ」

静かな声でリョーコはGコントローラー後方のスイッチを震える指でスライドさせた。

使われた瞬間は何度も見てきた。だが今度は自分が引き金を引く。

——緊張しないわけがない。

それにこのサテライトキャノンは形にこそなっているが急ごしらえの品。発砲できるのは一発限り、それで砲身がダメになって使い物にならなくなるとされている。

——仕損じたら、文字どおり二度目はないのだ。

右肩上に位置していたサテライトキャノンが展開していく。

まず最初にドッキングパーツが回転してGファルコンBパーツを左肩後方に移動させた。

続いて右肩後方に位置していたリフレクターが後ろに回転して、後ろ向きに開かれた。開ききったあとパネルが回転して内側の鏡面が前方に向き直る。

砲身が伸びて下からグリップが出現し、長大な砲身を肩に担ぐようにして構えた。

「エネルギー充填七〇パーセント……九〇パーセント……」

管制モニター上のX字のエネルギーメーターが、中心から先端に向

かつて赤く伸びていく。

敵の対空砲がこちらに指向するのを見て、背中に冷たい物が流れるのを感じた。

特にパイロットとして前線に出たことがないイネスは引き攣った表情で言葉も出ない様子。こればかりは仕方がない。

早く。早く――！

じりじりと伸びていたゲージが先端に届いて――メーターが青く点灯する。

照準は――よし！

「いっけええええええっ!!」

絶叫と共に引き金を引く。

サテライトキャノンの砲口からタキオンバースト流が猛烈な勢いで吐き出された。

それは波動砲はもちろんツインサテライトキャノンにも劣るとはいえ、絶対的な破壊力を持つエネルギーの奔流。

その直撃に見舞われた巨大空母五隻は真横から撃ち抜かれ、艦体中央部が消滅。さらに被弾個所を中心に塵と化すように崩壊してゆき――直後に大爆発を起こして完全に消滅した。

エックスのサテライトキャノンのビームの直径は推定一〇〇メートル程度。敵艦を丸ごと飲み込むような真似はできなかつたのだが、それでも直撃すればこの威力……重ね重ね、小型機動兵器が持つべきではない火力だと痛感させられる。

想定よりも爆発の規模が大きくて焦つたが、妙な二次被害は出ていないようだ。

――安堵したのもつかの間、リョーコは初めて戦略砲を自らの手で――命を奪う目的で撃つたという重圧が押し掛かってきたのを自覚した。

ヤマトやガミラスからすれば共通の敵――侵略者に過ぎないが、連中も生きているのだ。

そう思うと、単なる大量殺戮にしかならない大量破壊兵器の使用という選択が、どれほどの重みを持つのかが身に染みる。

殺すという本質において考えるなら、素手で殴り殺そうが差はないだろうが加減が利かない、あまりにも簡単に大勢を殺せてしまう大量破壊兵器というのやはり別格なのだと、心底思い知らされた。

（古代もアキトも——いつもこんな思いをしながら波動砲の引き金を引いてたのか？）

強大な力を使うには、相応の責任が求められる。

そんな陳腐な表現が頭を過って気分が悪くなったが、まだ戦闘中だと自分に言い聞かせてステータスマニターをチェックする。

仕様どおり、エックスのエネルギーはほぼゼロだ。各所のエネルギーコンダクターが保持してくれた最低限のエネルギーしか残っていない。

だがこいつの消費エネルギー量はツインサテライトキャノンよりもずっと小さい。

エネルギーパックにはまだ半分以上のエネルギーが残り、Gファルコンも消耗していない。——十分戦闘可能だ。

ここに来るまでの戦闘で追加したミサイルや魚雷を使い尽くしてしまったのが心許ないが、内蔵されたマイクロミサイルはまだ半分程度残っているし、拡散グラビティブラストも問題なく使用できる。

ガンダムが冷却が完了してエンジンが通常稼働できるようになるまでの間、Gファルコンのエネルギーだけでやりくりしなければならぬにしても、エネルギーパックのエネルギーを使えるいまなら十分に持たせられる。

リョーコはGファルコンの武装に加え、左手に握らせたシールドバスターライフルを迎撃機に向かって撃ちかけながら、鈍くなった機体を懸命に操って戦闘を継続。

Gファルコンのイネスの悲鳴が通信機から流れてくるが、無視。構ってられない。

被弾。右肩の装甲が少し抉れたが、支障はない。

反撃にビームを撃ち浴びせる。命中。煙の尾を引きながら雲海へと落ちていった。

必死の反撃を繰り返すエックスの元に、迎撃部隊を突破してきたD

MF-3の部隊が合流した。迎撃機との戦闘を経たようで、数が少し減っていたがまだまだ健在の様子。

「さすがだな、ガンダム」

合流したゲッターから賛辞を受け取るが、リョーコは歯に詰まったような返事しかできない。

ゲッターもなんとなく察したのか、特に追求せずDMT-97隊と合流するまでの間、エックスの護衛を買って出てくれた。

彼らの機体にもジャンプシステムが外付けされていて、攻撃の成否に関わらず、無力化した攻撃部隊と共に一度帰艦する予定であった。

素晴らしい練度で編隊を組んで、性能低下を起こしているエックスのフォローを完璧にこなしてくれている。

さすがは対ヤマト部隊。すばらしい練度だ。

——こいつらと相対しなくて、よかった。

心底そう思った。もし戦っていたら、こちらの犠牲も甚大だったはずだ。

奇妙なめぐりあわせに感謝である。

サテライトキャノンの一撃である巨大空母が纏めて五隻『消滅した』のを見て（ついでに余波で多少機体が煽られたので）肝を冷やししながら、バーガーは愛機を操り眼前の超大型空母目掛けて次々と爆弾やミサイルを叩き込んでいく。

バーガー率いるDMB-87隊は、戦闘空母の搭載能力の都合から普段の半分程度の物量で攻撃を敢行したにも関わらず、巨大空母を二隻も沈める戦果を挙げている。

だがバーガーはさして驚きを見せなかった。

なぜならいましがた連中に叩き込んだのは非常識なまでの防衛性能を誇る『あの』ヤマトを打ち破るために用意された新型弾頭なのだ。

たしかに暗黒星団帝国の艦艇はガミラスの艦艇よりも全体的に性能が勝っている。だが戦い方やクルーの経験値で覆せる程度の差ではない。

そういう意味では、経験値という点では劣っていてもクルーの能力がすこぶる高く、なにより『絶対的な数を確保してすり潰す以外の対

処が通用しない』ヤマトのほうが数十倍も手強い。

下手に突っ込めば波動砲の餌食。

波動砲を封じても戦艦としての火力と防御力はドメラーズ級並かそれ以上で、武装が多彩で隙らしい隙がない。

そして最高速度はデストロイヤー級駆逐艦を上回りかねないときた。

おまけに搭載数こそ軽空母並みで展開性能が劣るとはいえ、多彩な戦術に対応できる非常識な人型に、ヤマト同様非常識な性能を持つガンダムがいまや四機。

——ここまでくると、よくあるヒーロー番組のラスボスだ、ラスボス！ それも反則を疑うほど圧倒的な！

プロキシマ・ケンタウリ第一惑星で痛い目を見てから、バーガーたちはドメル招集に伝えてヤマトを攻略すべく様々な議論を交わし、戦術や装備を検討していた。

ヤマトと和解したことで本懐は遂げられなかったが、その準備のおかげでいまこうして戦えている。

巨大と言っても所詮は空母。戦艦に比べれば装甲も薄くて耐久力も劣っているというのは、万国共通の弱点というもの。

そうでなくても『あの』ヤマトより軟い時点で沈められないわけがない（辛辣）。

機体を旋回させて離脱に入ったバーガーの視界の片隅で、同じように腹に抱えた巨大な宇宙魚雷を敵艦に叩き込んで離脱するクロイツ率いるDMT-97隊の姿が見えた。

向こうも二隻沈めて意気揚々と帰っていく。

——一隻残っているがその相手は……。

「ちよつとばかり同情するぜ、暗黒星団帝国さん」

バーガーがちらりと様子見した瞬間、件の空母が無様に沈んでいく姿が目に入った。

「まあ、ダブルエックスに取りつかれたら終わりだよな」

そう、最後の一隻を担当したのはダブルエックスだ。

アキトはボソンアウトと同時に事前に打ち合わせたとおり、自身が担当する最も奥の空母に向かって全速で突き進んだ。

空母であるのに武装が外見から確認できる限り三連装の有砲身砲塔が四基だけと、対空戦闘をまるで意識していない構成だった。

直接戦闘に参加する艦種でもないだろうに、どうしたこのような武装構成を採用したのかはわからないが、対空迎撃がないのなら楽なのだ。

狙いはもちろん、大抵の兵器の弱点——機関部だ！

アキトは手始めにカーゴスペースから引っぱり出したハイパーバズーカ二挺を脇に抱えて全弾連射。撃ち切ったハイパーバズーカを遠慮なく放り投げ、続けてロケットランチャーガンを一発撃ち込むとマウントに戻す。

すぐに武器交換。

右手にビームジャベリン、左手にGハンマーを握りしめ、ビームジャベリンをカ一杯投擲。空いた手にツインビームソードを握らせる。

左手を外に思いきり伸ばしたあとGハンマーのワイヤーを伸ばし、邪魔になる左リフレクターを下に倒して立て、左拡散グラビティブラストの砲身も上に向ける。

障害物をのけたのなら、鉄球を下から上に回転させて勢いをつける。

さんざん「使い辛い」とぼやいたせいか、ウリバタケはいろいろと改修を加えたらしく、この変形もその一環。

本体はワイヤーを最新の物に交換しつつ延長され、最長三〇メートルも伸びるようになった。ついでにフィールドの展開装置とスラストの強化で威力を稼ぐ方向にシフトし、鉄球を軽量化している。

おかげでアルストロメリアでも（なんとか）使えるようになったらしい（誰も使いたがらなかったが）。

そのハンマーの勢いを殺さないように注意しながら、ハイパーバズーカとロケットランチャーガンとビームジャベリンが連続で命中して負荷の掛かった部分目掛けて、強化されたスラストも足したハ

ンマーを勢いよく叩きつけた。

——空気があつたならさぞかし派手な轟音が鳴り響いたことだろう。

ワイヤーを通してビリビリと振動がダブルエックスの腕にも伝わってくる。当然のように、直撃した空母の装甲は大きく陥没して砕けている。

デイストーションフィールドとは若干異なる偏向フィールドを装備しているとはいえ、やはり質量攻撃に対して万全と言える防御力は得られないようだ。

(アイアンカッターだったらもつと威力が出たかもしれない)

アキトはすぐにワイヤーを巻き取って鉄球を回収すると、間髪入れずにアイアンカッターに切り替えたハンマーをもう一撃。深々と装甲に食い込んだ。

露出した内部構造目掛けて、ツインビームソードと持ち替えたロケットランチャーガン、続けて最大出力かつ収束モードの拡散グラビティブラストを左右交互に四発つつ連射。破損部からあつという間に爆炎が噴き出し始めた。

すぐに離脱。左手の武器をDX専用バスターライフルに持ち替え、さらに破損部に向かって駄目押しの一〇連射をお見舞いする。

情け容赦ない暴力に屈した巨大空母は、巨大な炎を吹き上げ、内側から爆発して吹き飛んだ。

その巨大な爆発を尻目に離脱したアキトは、事前にドメルから渡されていたデータを参考に瞬間物質転送器搭載艦艇を速やかに探し出す。

——見つけた！

最大戦速で突き進むGファルコンDXに、直掩の戦闘機がビームの雨を降らせてくるが最小限の回避行動で突き進む。

フィールドで防ぎきれなかったビーム弾が装甲に当たるが単発では貫通されない。

サテライトキャノンの砲身が破損し、装甲の何カ所か欠ける損害を出しながら突き進んだGファルコンDXは、本体の撃沈は強行せず瞬

間物質転送器のみに狙いを絞って再装填したロケットランチャーガンとバスターライフル、拡散グラビティブラストを発射する。

装置は一对で成立すると聞かされている。

つまり、片方だけでも破壊すればもう連中は瞬間物質転送器に頼ることができなくなる。

アキトの決死の攻撃の前に右舷の瞬間物質転送器が火を噴き、粉碎される。

——任務完了！

すぐに反転。DMB―87隊とDMT―97隊に合流。さらに先行偵察とGファルコンGXの護衛を請け負ってくれたDMF―3隊に合流、ジャンプ装置の稼働を確認。

アキトとイネスの共同ナビゲートでヤマトと戦闘空母の元に帰還した。

「今回は俺たちのほうが上手だったぞ」

アキトは静かにこの攻防の勝利を宣言するのであった。

「ダブルエックスから入電。我、急襲に成功セリ！」

エリナの報告にコスモタイガー隊が沸いた。

「さっすがリョーコにアキト君！ これでこっちも少しは楽になるかな」

拡散グラビティブラストで弾幕を張りつつヒカルが喜びの声を上げる。

「ふっ——」

イズミがなにかしら喋ったようだが爆発の振動に遮られて聞こえなかった。

——まあ、どうせいつものギャグだろうから気にしないでいいだろう。

しかし——。

そろそろ戦闘継続がキツイな。ヒカルはステータスマニターを見て眉を顰める。

相転移エンジン搭載のGファルコンと云えど、単位時間当たりのエ

エネルギー生成量には限りがある。絶え間ない攻撃への対処で機体のエネルギー残量がだいぶ心もとなくなってきた。

それに武装も連続使用が祟ってオーバーヒート寸前、これ以上の戦闘はかなり厳しいと言わざるをえない。

——対照的にエアマスターとレオパルドの二機はまだ少し余裕がある様子。

くそう、ガンダムって奴はどこまで高性能なんだ！

ちよっぴりムカつく。

レオパルドはミサイルをはじめとした実弾はすべて使い切っているが、極力節約しながら武器をローテーションして使ったらしく、多少出力が低下しているがビーム兵器やグラビティブラストはまだまだ使える様子。

エアマスターも同じようなもので、ミサイルは撃ち尽くしたが常に合体したままではなくときおり分離しては人型のノーマルモードに変形し、徒手空拳で敵機に格闘戦を挑んでエネルギーを節約していた。

ガンダムで最も装甲が薄いとはいえ、それでも使用されている素材がヤマトと同じとなれば頑強さに定評がある。コックピットやら構造的脆弱性を持つであろう部位を選んでやれば、そうそう当たり負けはしないということだが射撃戦主体の高機動機でそれをやる技量は月臣ならではだろうと感心するやら呆れるやら。

ミサイルライフルこそ喪失しているようだが、ほかの武装はまだ健在。いままも元気に敵機を追いかけまわしている。

「月臣少佐、当然まだいけますよね？」

「無論だ。おまえこそこの程度でへばっちやいないだろうな？」

軽口を交わす余裕もあるとか……。

おや、ガミラスの航空部隊を引き連れたダブルエックスとエックスの二機がボソソジャンプで帰ってきたか。

「きつついのお見舞いしてきたぜ！ もう増援も来ないだろうから、ヤマトに群がるハエ共を残さず叩き落すぞ！」

「了解隊長！ でもGXは回復するまで時間かかるから下がって

ね」

リョーコがまるで自分を奮い立たせるように威勢を振りまくが、即座にアキトに諫められる。

——どっちが隊長だ。

「けっ！ 仕方ねえ、月臣にアキト！ 連中を自慢のスピードで攪乱してやれ！ 母艦がやられて連中も浮足立ってるぜ！」

「了解！」

月臣もアキトも快く応じている。

たしかにヤマトの攻撃部隊も思わぬ本隊の被害に動揺してか、動きが精細さを欠いている。

これなら一気に叩ける！

収納形態に変形したGファルコンDXとGファルコンバーストの二機が、猛スピードで戦場を駆け回る。

標的は敵爆撃機。これ以上艦隊に被害を出される前に叩き潰す。

GファルコンDXは機首のビームマシンガンを撃ちかけながら要所所で拡散グラビティブラストの散弾を撃ちかけている。

相手のサイズが大きいのでビームマシンガンだけでは致命傷を与えられないが、散弾とはいえグラビティブラストの火力なら問題ない。ビームマシンガンで追い立ててからグラビティブラストに繋げる、その繰り返しで三機仕留めた。

戦闘機が追いつがってきたなら、急減速からの展開形態への変形を実行し、右手の専用バスターライフルを撃ちかけて反撃。

ビームの応酬を繰り返し、互いに避けては当てるを繰り返す攻防になったが、戦闘機程度のビームであれば防げるダブルエックスのほうが優位であった。

攻撃はフィールドと自慢の装甲で耐え、急接近した敵機には咄嗟に専用バスターライフルに取り付けたビームナイフを出力して切り裂く。銃剣の利点はこの即応性だろう。

致命傷には至らなくても損傷で動きが鈍った機体を、コスモタイガー隊のアルストロメリアが的確に攻撃して撃ち落としてくれる。

もう弾薬もエネルギーも残り少ないだろうに、ここまで共に戦って

きた仲間たちは阿吽の呼吸で合わせてくれる。

これまでの航海で培ってきた連携があつて初めて実現できる戦いであつた。

Gファルコンバーストも、ビームマシンガンの代わりに両腕にマウントしたバスターライフルを連射して敵機を煽り、ときに撃墜しながら拡散グラビティブラストの散弾やノーズビームキャノンの大型ビーム弾を撃ち込んで爆撃機や戦闘機を次々と撃墜していく。

その優れた機動力と運動性能で敵の攻撃を的確に回避。

ここまでの戦闘で機体もパイロットも消耗しているためすべてを避け切ることはできず、戦闘機のビームを何発も被弾して装甲に傷がつく。

だが、かすり傷如きでは止まっていられないとばかりに攻撃を続ける。

三機の戦闘機に後ろに着かれたなら、分離して二手に分かれて敵の目を迷わす。その隙に速やかに変形して両手のバスターライフルを撃ち込んで手傷を負わせる。

合体メカであり、分離した機体の制御も可能という特徴を利用した分離戦術も駆使し、群がる敵機と互角の死闘を繰り広げた。

そんなエアマスターが撃ち漏らした敵機は、レオパルドの砲火に晒されて消える。

まだ残されたエネルギー火器——両腕のツインビームシリンダーや右肩のビームキャノン、Gファルコンの拡散グラビティブラストを使用できるレオパルドの火力は、ダブルエックスを凌いでいる。

結局回復を待たずにできる限りの応戦を続けるエックスをフォローしながら弾薬を吐き出して、ヤマトの周囲から敵機を退けている。

増援が断てなかったさきほどまではこの火力をもつてしてもなかなか数を減らせなかったがいまは違う。

このまま戦い続ければ、最後に勝利を掴むのはコスモタイガー隊だ。

母艦たるヤマトも、ローテーションで撃ち出すパルスブラストの弾

幕は辛うじて健在。その弾幕に飲まれて消える敵機の数は、決して少なくはない。

予期せぬ本隊への大打撃に転送戦術の瓦解による混乱に見舞われた航空部隊が、勢いを得たヤマト・ガミラス艦隊に完全に駆逐されたのは、それから間もなくのことであった。

「……ん？」

真田はエックスから送られてきた敵艦隊へのサテライトキャノンの効果を見て、わずかに首を傾げた。

おかしい、想定よりも破壊の規模が大きいような気がする……。

だがかなり接近しての砲撃であったし、敵艦もかつてない規模の空母だから爆発が大きくても無理はないのだが……。

どうにも気になる。

「どうかしたんですか？ 真田さん」

ハリが真田の様子を訝しんで声をかけてくる。

「——いや、ちよつとな。気にしないでくれ、俺の勘違いだろう」

データの解析をしている時間はない。まずは連中を退ける。そのあとにルリの手も借りて徹底的にデータを解析すれば答えがわかるはずだ。

それまでは、余計な不安を煽らないほうがいいだろう。

敵航空部隊を退けたとは言っても戦闘そのものが終わったわけではない。

直接戦闘に参加せず雲海に身を潜めている第一空母は無傷だが、それ以外の艦艇はいずれも傷を負っている。

特に深刻な被害を受けているのはヤマトの両脇に控えている指揮艦級の二隻で、艦中央部を中心に黒煙や炎を吹き上げていて、見るも痛々しい姿となっている。

「ドメル司令。指揮艦艦級二隻を下げましょう。これ以上戦闘に参加させるのは危険です」

進の進言にドメルも頷くほど、状態が悪い。

辛うじて戦闘能力を維持しているとはいえ、これ以上戦わせても

精々盾にするのが精一杯。

だがヤマトも戦闘空母も十分な戦闘能力を維持できている。彼らを捨て駒にする必要性は薄い。

ドメルはすぐに両脇に控える指揮戦艦級二隻に後退して応急修理するように指示を出していた。

……これでこちらの戦力は戦闘空母とヤマトだけだ。

D M F―3 隊もコスモタイガー隊も損耗激しく、これ以上の戦闘は危険。

ガンダムはまだやれそうではあるが、これ以上無理をさせると応急修理程度では本土防衛戦に参加できなくなる可能性がある。

弾薬を使い果たしたD M B―8 7 隊とD M T―9 7 隊も同様だ。戦闘空母は戦艦としての機能を備えた影響でどうしても補給作業にかかる時間が専門の空母に比べて長くなる傾向がある。

——波動砲の威力を警戒してか、巨大な円盤型の戦艦タイプと見られる艦を旗艦とした、計九〇隻の敵艦が至近距離にワープアウトしてきた。もう再出撃は間に合わない。

D M F―3 隊を收容するために一時合流した第一空母は、着艦作業を終了したあと再びヤマトから離れて身を隠す。

これからの砲撃戦に空母は邪魔なだけ。

今後の戦いを左右するのは艦自身の大火力と重装甲——つまり、ガミラスが最も得意とし、ヤマトの能力を最も活かせる戦い——砲撃戦だ。

ヤマトの人型やガミラスの艦載機隊に思わぬ被害を受けたデーダーではあったが、ドリルミサイルを退けたはずのヤマトが一向にタキオン波動収束砲を撃つ構えを見せないのを見て勝負に出た。

(ヤマトがいかなる理由で撃たないのかは知らぬが、撃たないというのであれば撃ちたくても撃てないよう、接近して砲撃戦に持ち込んでくれるわ！)

予想もしていなかった反撃にすっかり冷静さを欠いてしまったデーダーだが、そこは数々の戦いを潜り抜けてきた軍人。いざというときの思いきりは失われていなかった。

バランスでの観測データから、タキオン波動収束砲の発射には相応の時間がかかることがわかつている。

エネルギーが少々厳しいが、小ワープで一気に接近して砲撃戦に持ち込めばまだ勝機はあった。

ヤマトもあの武装空母も、この旗艦プレアデスの前では赤子も同然。

それに——接近さえすれば、万が一プレアデスが敗れたとしても道連れにできる確信が、デーダーにはあった。

「ECM最大稼働！ 少しでもいい、敵の目を眩ませるのだ！」

「主砲、副砲射撃用意！ パルスブラストも対艦攻撃に備え！」

守の指示でヤマトの主砲と副砲、パルスブラストが旋回を始める。

敵艦はヤマトの前方、左右から真つ直ぐに突っ込んでくる形になっている。

対するヤマトは第一主砲が右、第二主砲が左の最も遠い敵に指向。副砲は最も距離の近い敵機を狙うべく艦首軸線方向の敵艦に向けられた。

両舷のパルスブラストは第一副砲脇の四基のみが前方方向に向けられ、使用可能な残りのパルスブラストも可能な限り艦首方向に指向して備える。

敵も必死なのか、ECMの影響でレーダーの感度が著しく低下してしまっている。が、この距離なら光学機器の測距儀でも十分だ。

ドリルミサイルの影響で壊れたのは艦橋測距儀だけ。こいつは専ら波動砲専門だから大きな影響はない。

「艦首ミサイル、両舷側ミサイル発射用意——ルリさん、オモイカネ、

頼むぞ」

「お任せください。オモイカネもいいですね？」

ゴートが信濃に移動しているの、守はルリの助けも借りて各ミサイル発射管の発射準備を進めた。

幸いにも対艦ミサイルの雨はナデシコユニット搭載のミサイルを中心に煙突ミサイルを足す形で行われたので、艦首と塞がれて使えなかった舷側ミサイルは消耗していない。

ECMの影響下なので精度は多少落ちるが、ルリとオモイカネの最強タッグが手を組めば幾分補えるはず。

戦闘指揮席のモニターに、主砲と副砲がそれぞれの目標を捉えたことを示すロックオンマーカ―が現れ、各砲から射撃準備を終えた報告が飛び込んでくる。

ミサイルも準備はできた。主砲や副砲に比べれば数に限りがあるのでここは温存しておく。

「撃ち方始めっ!!」

左右に向けられたヤマトの主砲と正面を向いた副砲から計九本の重力衝撃波が放たれた。

先制攻撃はヤマトが取った。

ヤマトの右舷一〇〇〇メートルの位置にいる戦闘空母もわずかに遅れて艦首の砲戦甲板と艦橋の前に装備された主砲から重力波を何本も射る。

ヤマトからの砲撃が着弾する頃になって、暗黒星団帝国の艦艇からも大量のビーム砲が撃ちかけられてきた。が、ヤマトのショックカノンはもちろん、戦闘空母のグラビティブラストに干渉されて狙いが逸れる。

強力な暗黒星団帝国のビーム兵器ではあるが、グラビティブラストによる干渉までは防げない。

火線が交わる場所では一方的に捻じ曲げられ、打ち消され、ヤマトと戦闘空母に届いた砲火はわずかだった。

一方ヤマトからの砲撃は有効打を取れた。レーダー妨害の影響で多少狙いが甘く、第一主砲が狙いを多少逸れ、敵艦の端を吹き飛ばす

のに留まったのに対し第二主砲は命中、巡洋艦と思われる艦艇を以前のようにあつさり射抜いて撃沈した。

副砲も多少狙いがそれで致命打には至らなかったが、ダメージは与えられた様子。

戦闘空母の砲はヤマトのように一撃必殺を望めなかったが、ヤマト以上の投射量を活かして矢継ぎ早に砲撃を撃ちかけて補い、同時に弾幕を形成して敵のビームを防ぐ防御の役割も果たしていた。

ありがたいことだ。

あとは互いに砲撃を繰り返して誤差を修正して、有効打を増やしていくのみ。

数で圧倒する暗黒星団帝国と、砲撃の相性で勝るヤマトと戦闘空母の戦いは、互いに一進一退を繰り返す膠着状態に突入していった。

「ぬう……重力波砲の干渉か……！ 敵ながら厄介な性質だ……！」

ECMの効果もあって、プレアデス以外には致命的なヤマトの主砲の命中率を下げたまではよかったのだが、あの武装空母が干渉目当てで撃ちまくっているせいでこちらの命中弾も減ってしまつてまったく有効打を与えられず、膠着状態に陥ってしまった。

対してヤマトと武装空母は逸らされることなく直撃弾を出してくる。

失念していたわけではない。むしろ理解していたからこそ接近戦という手段を選んだ側面もある。

だが敵がそれを利用すべく目暗撃ちするとまでは考えが及んでいなかった。——少々、いやだいな冷静さを欠いてしまっているようだ。

——タキオン波動収束砲を意識し過ぎて、ヤマト自身の戦闘能力を過小評価してしまっていたのかもしれない……。

実際敵の性能・練度共にデーダーの予想を遥かに上回っていた。

やはりここで仕留めなければ……！！

「全艦、偏向フィールドを最大出力で展開しつつ接近を続ける！もつと接近しなければ通用せん！ 恐れるな！ わが帝国の未来を左右するこの戦、負けるわけにはいかんだ！」

死なば諸共。最初から生きて帰れなくてもいいと覚悟のうえでここに来た。

ヤマトは野放しにしておくにはあまりにも危険な存在。ここで確実に沈めてわが帝国がイスカンドルとガミラスを抑えてしまえば――あの脅威極まりないタキオン波動収束砲をこの宇宙から抹消することもできるだろう。

――無論、接近してヤマトを――波動エンジン搭載艦を至近距離で撃沈するのはこちらにとつてもハイリスクだが、そうも言っていられない。

それはこの艦隊の全員が理解しているリスクだ。みな承知の上で作戦に従事しているが、人間及び腰になるときはなってしまうもの。だからこそ、尻込みさせないためにデーダーが鼓舞してやらなければならぬ。

――万が一勝利の果てに生き残ることができたのなら、この戦いの死者すべてを手厚く吊ってやろう。

デーダーは固く心に誓い、自らを鼓舞するべく叫んだ。

「確実にここで仕留めるぞ！ メルダース司令の元に行かせてはならん!!」

第二十四話 激戦！ 封じられた波動砲!? Bパート

「敵艦隊、フィールドを強化しつつ接近してきます。おそらくグラビティブラストによるビーム兵器への干渉を避けるため、接近戦に持ち込むつもりと思われます」

「早く敵の意図に気付いたルリが報告すると、進はずかに悩んだ。」

（どうする？ 敵の意図に乗ればこちらも早急に敵の撃滅を図れるが……）

主砲の命中率は徐々に改善されているが、敵も棒立ちしているわけではない。回避行動を取りながら撃ち合い続ければ、消耗戦にしかないだろう。

敵艦のフィールドが強化されたため、主砲の効果も目に見えて衰えている。ヤマトの主砲をここまで減衰させるとは、驚くべきフィールドだ。

距離を詰めればこちらも直撃弾を生みやすくなるので、敵の数を減らせるがグラビティブラストの干渉が相対的に減ってこちらも被害を被り易くなる。

——どちらを選んでも損害を被るといふのなら、いま欲しいのは時間だ。

しかし——。

「艦長代理。バランスのときに比べると、敵艦隊が異様なまでに積極的です。冥王星基地防衛艦隊同様波動砲封じを図っているにしても、これほどまでに前に出てくる必要は感じません——なにか裏がある可能性もあります」

ルリに指摘されるまでもなく進も同じ懸念を抱いている。

「僕も同感だ。もしかしたら波動砲封じだけじゃなくて、冥王星残存艦隊同様差し違える覚悟で挑んで来ている気がしてならない。慎重に対処しよう」

ジユンの助言も受けて、進は決断した。

先輩たちの判断は間違つてなどいない。安全策を取つたほうがいい局面なのだ。

「よしっ。敵艦隊との過剰な接近は避けるぞ！ 多少時間が掛かつてもいい、敵の思惑に乗つて余計な被害を出すわけにはいかない！——俺たちはガミラスとイスカンダルに向かい、地球を含めた三つの星の未来を救うという重大な使命がある！……ここでやられるわけにはいかない！」

「——古代艦長代理の判断を尊重しよう。ハイデルン、ヤマトに続け！ このまま距離を取りつつ砲撃戦を継続する！ 敵の接近を許すな！」

進の決断をドメルも薄く笑みを浮かべて支持。交戦を続けている戦闘空母に指示を出してくれた。

戦闘空母のハイデルンも獰猛な笑みを浮かべて「了解しました！」

連中にわれわれの実力を見せつけてやりましょう！」と大変乗り気だ。

「島、ゴートさん。隙を見て信濃を発進させる、備えておいてくれ。攻撃のタイミングはこちらから指示をする」

信濃に乗艦している二人からすぐに返事が返ってきた。あとは発進のタイミングだが、敵の眼前でハッチを開放しては狙い撃ちになる。

だからこそ、地形を使うべきだ。

——ちようど活用できそうな暗黒ガス雲が、ヤマトの左舷方向にあるではないか。

そのままヤマト自身が突入してもよさそうに思える巨大なガス雲。これを利用しない手はない。

「ハーリー、左舷の暗黒ガス雲に接触する進路を取ってくれ。あの足のように伸びている一角だ。戦闘空母に死角を作ってもらいながら、

ガスを通過するときには信濃を発進させて紛れ込ませる。ここで伏兵を作っておくぞ」

「は、はい！ 取り舵三五、ピッチ角一〇、第三戦速でガス雲上方を通過します！」

命令を受けてハリはヤマトの操縦桿を操る。大介に比べると手際が悪いが、キャリアに差がある。当然だろう。

ヤマトは進路を変更、左舷にある暗黒ガス帯に向かって進路を取った。

戦闘空母もヤマトに追従、自然と敵艦隊が右舷方向に来るので火力を右舷にのみ集中して応戦を継続。

「ハイデルン。聞いてのとおりだ。信濃発進の瞬間を隠すため、タイミングを合わせてヤマトと敵艦隊の間に入って死角を作ってくれ」

「了解です、ドメル司令、古代艦長代理！——俄然、楽しくなってきましたなあ！」

歴戦の猛者はアドレナリンで脳内を満たしていることが一瞬でわかるような笑みを浮かべ、敬礼。

進もドメルもそれに応えつつ、敵に気付かれずに信濃を放出できるかどうか勝敗の分かれ目になりそうな予感を感じていた。

ガス雲に進路を向けながらも、右舷側から敵艦隊の猛攻が続く。舷側ミサイルも弾頭をリフレクトディフェンサーに変更して防衛

シールドを展開し、ヤマトと戦闘空母に向かってくるビームを遮り、ミサイルを防ぐ。

ヤマトの進路に交わるように接近してきている敵艦隊なので、徐々に距離が詰まってきた。

おかげで互いの砲撃が命中しやすくなるが、それでも互いに妨害し合っているので命中率は四割にも満たない。

ヤマトと戦闘空母は、じりじりと詰まってくる敵艦隊との距離に注意しながら、目当ての暗黒ガス雲に侵入した。

同時にヤマトの右舷側に位置している戦闘空母が動き出した。

事前に作戦を了承している戦闘空母はベストのタイミングでヤマトと敵艦隊の間を通過するように進路を取って、開いたヤマト艦底部

の発進口を隠す。

ガスの濃淡と戦闘空母が、敵艦隊の目からなかなかいい具合に隠してくれた。

発進準備を終えていた信濃が素早く格納庫から飛び出して、ガス雲の中に溶け込むように消えていく。

発進完了と同時にすぐにハッチを閉鎖、格納庫内に侵入した暗黒ガスを排出。

「増速、第四戦速！ 進路修正左五度、ピッチ角マイナス七！」
すぐにヤマトの速度と進路を修正。

信濃放出地点からかなり離れた、よりガスが濃くて視界も悪く、レーダーも機能停止しかねない密度のガスの中へと身を潜めていく。

ヤマトと戦闘空母を見失なってなるものかと、敵艦隊からの砲撃も激しさを増した。

このままガス雲の中で追いかけてくるつもりはない。

ヤマトも戦闘空母も盲目のままでは敵艦隊とは戦えないし、このままガス雲の中を航行し続けるのはリスクが大きすぎる。

「フィールド艦首に最大出力で集中展開！ 最大戦速に加速！」

進はさらなる増速を指示。

抵抗を減らして増速すべく、艦首に集中展開したフィールドで濃密なガスを押しのかつつ、10分近くをかけてガス雲を突き抜けた。

ガス帯に突入されたことでヤマトと戦闘空母の姿を一時見失った敵艦隊は、その動きに追従しきれなかった。

それでもこちらの行動をある程度予測していたようで、増速してヤマトと戦闘空母が飛び出すであろう地点目掛けて猛然と突き進んでいた。

だが行動が予測されるのは想定内。計器飛行すら満足にできない暗黒ガス雲の中に留まり続けることが危険であるというのは、共通の認識であろう。

ましてやここは七色星団。タランチュラ星雲の中でも特に危険なスターバースト宙域。ガス雲の中でなにが起こっているかなど、容易には知れない。

いずれガス雲から飛び出すことも、下手に進路変更して迷子になることを避けると判断されるのも、想定内。

ガス雲を飛び出したヤマトと戦闘空母はそのまま急速上昇、宙返りの要領で敵艦隊の頭上を取り、互いに艦の上部を向け合ったまま高速で交差した。

「全兵装、攻撃始め！」

進の号令でヤマト、そして戦闘空母の全火器が一斉に火を噴いた。

主砲と副砲が重力衝撃波を、パルスブラスト全門から重力波を、艦首・艦尾ミサイル発射管、両舷のミサイル発射管と煙突ミサイルといったすべてのミサイル発射管からありったけのミサイルが発射され、ルリとオモイカネの制御でECMの妨害に抗いつつ、七色星団の空を舞う。

戦闘空母も持てる限りの火力を艦の上部——敵艦隊の頭上目掛けて放出した。

計四基の大口徑三連装有砲身グラビティブラスト、艦体側面の小口径三連装有砲身グラビティブラスト、隠蔽式砲戦甲板にある口径違いの三連装無砲身グラビティブラスト六基、対空パルスブラスト三六門、艦橋後部の六連装ミサイル発射機二基から、指揮戦艦級すらも上回る火力をひたすらに撃ちかける。

その火力によって全力で展開しているであろうフィールドを力尽くで食い破り、何隻かを火達磨にしてガス雲に飲み込ませた。

だが必然的に敵艦隊も全火力をヤマトと戦闘空母に集中する。干渉や相対速度の差で命中率は低かったが、それでもかなり接近した状態の砲撃なので命中したときのダメージが大きかった。

デイストーションフィールドを最大出力で多重展開して攻撃を減衰しながらも、防ぎきれなかったビームの弾痕を装甲に刻みながら進むヤマトと戦闘空母。

傷を深めながらも敵艦を十数隻も沈め、敵艦隊後方にまで到達。

そこで見つけた一際大きな戦艦に向かって主砲を撃ち込むが……。

「なっ!? ショックカノンが弾かれた!？」

守が思わず声を上げる。

眼前に躍り出てきた敵旗艦と思しき巨大戦艦。

ここぞとばかりにヤマトは自慢の四六センチ（威力換算は四八センチ）三連装重力衝撃波砲が二基、その火力を集中させるが近距離で命中したにも関わらずフィールドにわずかに拮抗しただけで弾かれ、明後日の方向に飛んでいってしまう。

巡洋艦クラスであっても減衰されていたのだから不思議ではないかもしれないが、まさかこの距離で正面から弾かれるとは思ってこなかった。

対する巨大戦艦の砲撃はヤマトの多重フィールドをあつさり貫通し、右舷に被弾。装甲を半ばまで貫通され、安定翼の開閉システムに深刻な障害を受けた。

負荷で弱っていたことを加味しても、ヤマトの多重展開フィールドをこうもあつさりと撃ち抜くとは……敵艦の主砲はドメラーズ級の斉射に匹敵——あるいは凌駕する威力だ。

装甲の薄い部分に命中したら、ひとたまりもないだろう。

「艦尾ミサイル、目標敵旗艦！——てえっ！」

守はすぐに艦尾ミサイルを艦橋からの制御で発射。

すれ違いざまに七番から一二番までの発射管から撃ち出された対艦ミサイルは、狙いどおり巨大戦艦に命中するが、目立った効果が見られない。

「——強力なエネルギー偏向フィールドの一種だ。解析データを見る限りでは、デイストーションフィールドと同じ空間歪曲フィールドの一種のようだが、異なる性質を持ったフィールドを多重展開することで効率的にエネルギーを受け流しているようだ……シヨックカノンでは接射かつ全火力を狭い範囲に集中でもしないと、突破は難しいな……」

真田は分析結果に険しい表情。

あの円盤型の巨大戦艦のフィールド出力はヤマトと同等程度なのに、異なる性質のフィールドを多重展開することでヤマトを凌ぐ防御性能を得ているのか……。

エネルギー反応を見る限りでは、機関出力はドメラーズ級と同等程

度でヤマトのほうが上回っているのだが――。

「不味いぞ……この推定強度だと波動砲――いやサテライトキャノンクラスの威力がないと貫通できん……ミサイルのフィールド中和機能は機能しているようだが、出力が桁違いだ。もつと残弾に余裕があれば主砲と併用して火力を集中させれば突破できたと思うが、現状では数が足りん。一番手っ取り早いのはモード・ゲキガンフレアだが、安定翼を損壊してしまった。使えない」

一見すると手詰まりになってしまったような状態だ。

七色星団への影響を無視して波動砲を使うにしても、接近されたこの状況では発射する前にヤマトはハチの巣にされる。

サテライトキャノンもエックスは既に使ってしまったている。使えない。

ダブルエックスのツインサテライトキャノンは――砲身を破損している。砲身の交換と再調整、機体の損傷状況を考えるとすぐに発砲可能に持つていくのは難しい。

モード・ゲキガンフレアも、肝心の安定翼の開閉システムを損傷してしまつては使うに使えない。

だが！

「――信濃の波動エネルギー弾道弾なら、通用する。中和システムと併用した波動エネルギーの空間歪曲作用は、あの出力の空間歪曲場なら突破可能だ」

進は信濃放出が決め手になるという感が当たっていたことに笑みを浮かべる。

波動エネルギー弾道弾もフィールド中和機能を有しているし、なにより通常の対艦ミサイル弾頭とは桁違いの火力を持っている。

仮にフィールドを突破しきれずに起爆したとしても、波動エネルギーならあのフィールドをも突破して本体に打撃を与えられるだろう。

「エリナさん、信濃にヤマトの合図に合わせて波動エネルギー弾道弾を発射するように指示してください。真田さん、波動エネルギー弾道弾もヤマト側で誘導可能でしたよね？」

「もちろんだ。信濃はヤマトの補助兵装と言ったほうが適切な存在だからな。相応の用意はしてある。ボソソングジャンプ通信を利用した誘導方式なら、暗黒ガス雲の中でも正確に誘導できるし、妨害を考慮すればまず気付かれんと思う。だが奇襲である以上タイミングが命だ。信濃の存在に気付かれたら一卷の終わりだぞ」

真田の答えに進は大きく頷く。

たった四発しか残されていない波動エネルギー弾道弾。無駄撃ちしたらあとがない。

それに信濃も所詮は相転移炉式艦艇。波動エンジンやそれに匹敵する動力を持つ暗黒星団帝国の艦艇に正面对決を挑まれてしまつては、虫けら同然に捻り潰されてしまう。

勝利するためには、奇襲以外に術はない。

この奇襲作戦がこの戦いに勝利するために残された、最後の手段だ。

「エリナさん、戦闘空母のハイデルン艦長に連絡を。波動エネルギー弾道弾の爆発の影響を避けるため、発射と同時に最大戦速で敵艦艦から距離を取るように伝えてください——構いませんね、ドメル司令」
「もちろんだ、古代艦長代理。ヤマトの武器の威力は、私よりも君たちのほうが断然詳しい。君たちの判断を尊重しよう」

ドメルは進たちの判断を尊重する姿勢を崩さない。彼ほどの将に支持されていると思うと、自信が持てる。

「ルリさん、信濃の放出地点の正確な座標をマスターパネルに表示してくれ。確実に命中させるためにも、タイミングをしっかりと計らなければ……」

その頃、デーダーは、プレアデスの艦橋で勝利を半ば確信してほくそ笑んでいた。

予測どおり、ヤマトの主砲ではプレアデスの防御を突破できない。だが当然だ。暗黒星団帝国でも数が少ないこの艦艇は艦隊旗艦と

して運用するために開発された。

だから過剰な武装こそ施されていないが、艦載機運用能力はもちろん生半可な攻撃では傷つかないよう、徹底した防御力が与えられている。

武装も数が少ないだけで、破壊力は暗黒星団帝国の艦艇の中でも最強を誇る。

こちらも予想どおり、プレアデスの火力ならヤマトの防御フィールドも紙切れ同然。装甲を貫通できなかったのは誤算だったが、通用することは確認された。

このまま砲撃戦を続ければ、プレアデスが勝利を掴むだろう。

ヤマトがこちらのフィールドを突破できるとしたら、さらに接近して自身のフィールドをぶつけて中和しつつ、横っ腹を見せた斉射を行う必要がある。

だが、向こうが中和できるということはこちらもできるということ。

砲撃をする前にヤマトの倍はあるプレアデスの体格を活かして弾き飛ばして、隙を見せたところを撃ち抜くのみ。

それに、どうやらヤマトはこちらが過度に接近戦を挑みたがっていることを警戒して距離を取る戦法を選んだらしい。

となれば、接射による強引な防御の突破は心理的に選択し辛いだろう。

仮にその手段で撃沈されたとしても、デーダーの予想が外れていなければヤマトを道連れにできる可能性は残されている。

どちらにせよ、分はこちらにあるのだ。

そして敵のミサイルの火力ではこちらのフィールドと装甲を撃ち抜くには、少々火力が足りていない。

おまけにヤマトの艦体サイズとここまでの戦闘で使用した分を考えれば、残弾も残り少ないはず。

これでは主砲にミサイルの火力を足して遠距離から強引に突破、という手段すら取れまい。

デーダーはそう考えてヤマトに砲撃を集中させることを指示。早

急にヤマトのフィールドを瓦解させ、この戦いの勝利を収めるつもりだった。

だから彼は、ヤマトがどうしてわざわざ暗黒ガス雲に突入したのか、深く考えることはなかった。

単に体勢を立て直すための苦し紛れと自己完結してしまっていたのだ。

そのせいで命を失うことになるとは、このときは露ほども考えていなかったのである。

巨大戦艦への攻撃はひとまず無意味と判断したヤマトと戦闘空母は、できるだけ敵艦隊と距離を離すようにしながら信濃が身を潜めるガス雲に向かって、回避運動を行いながら進んでいた。

ボソソジャンプを利用したボソソ通信で信濃の位置情報を確認しつつ、信濃もガス雲の中をヤマトからの位置情報を頼りに進んでいる。

ガンダムやA級ジャンパー単独のジャンプは誤魔化す術はないが、通信程度の用途で使うのなら、アクエリアストックの秘匿のために使われていた隠蔽シールドで十分に隠蔽可能だ。

それでも多少の重力異常などは検出される危険性があるにはあるのだが、この七色星団の環境下ではそれすら紛れてしまうだろう。

七色星団の環境は、決してヤマトに不利のみをもたらしたわけではない。環境さえ事前に把握していれば、むしろ利用できる部分もあるのだ。

それにはこの場を決戦場として選んでいたドメルの協力が得られていることも大きい。

彼が事前に調べ上げた最新のデータにその頭脳が加われば、最小限の通信で連携できるのだ。

敵艦隊はヤマトが自慢の主砲を無力化されて逃げに転じたと盛大に誤解してくれたのだろうか。巨大戦艦を前面に押し出しながら逃

げるヤマトと戦闘空母を追撃している。

逃走しながら艦尾の武装を使用して、巨大戦艦の陰に隠れていない端のほうの敵艦を撃沈しながら機会を伺い続ける。

巨大戦艦はもとより、ほかの艦艇からの砲撃もヤマトと戦闘空母に幾度も突き刺さり、ときにはフィールドを貫通して装甲に傷を残していく。

フィールド発生装置も負荷が蓄積され、このままでは長くは持たない。

焦って失敗してしまうことは避けたい。だが焦りが募るのを避けることができない。

まさに根競べ。

クルーの心労も溜まっていった。

ヤマトは艦尾ミサイル・舷側ミサイル・煙突ミサイルから残り僅かなミサイルを牽制も兼ねて放出、戦闘空母も後部の主砲やミサイルランチャーを使用して抵抗を続けながら、敵艦隊の接近を少しでも阻む。

敵艦隊はヤマトと戦闘空母が暗黒ガス帯に逃げ込もうとしていると考えているのか、ガス帯との間に砲撃を通して牽制してくる。

最初からその気はないのだが、それで牽制されたフリをしてタイミングを見計らう。信濃との合流予定地点までもう少しだ。

……………。

……………。

……敵巨大戦艦が暗黒ガス帯に——まるで触腕のように伸びた一角に近づく。その飛び出した部分を通せば、波動エネルギー弾道弾を確実に命中させられる。

ドメルの助言を基にルリが算出した最良のポイント。

進は迷わず信濃に打電、発射準備を整えさせた。

そして……最良と思われるタイミングで発射を指示した。

「てえええっ!!」

ゴートは命令どおり眼前の発射レバーを引き倒す。

同時に解放されたVLSのハッチ。
飛び出す波動エネルギー弾道弾が四つ。
信濃のありつただけが敵艦に向かって襲い掛かる。
……起死回生の一打は、ヤマトから誘導されながら暗黒ガス帯の中
を突き進み——敵巨大戦艦に直撃した。

デーダーはヤマトと戦闘空母が這う這うの体で逃げ出していると
思い込んで、なおさら躍起になって追撃を指揮していた。

この状況ではタキオン波動収束砲はもちろん、あの人型の大砲も満
足に使えないはずだ。このまま消耗させて捻り潰すべく、決死の攻撃
を続ける。

暗黒ガス雲に逃げ込もうとするような素振りを見せれば、砲撃で遮
り逃げ込むことを許さない。

なんとしてでももつと距離を詰めて決定打を与えるべく、ヤマトと
戦闘空母を追尾する。

そんな風に視野が狭くなっていたこともあり、プレアデスの進路上
にガス雲から延びた『触腕』の存在など気にも留めなかった。

濃度が薄く規模も小さい、あつという間に通過してしまうので目暗
ましにもならないという先入観があったからだ。

そして運のないことに、ヤマトには小型の艦載艇が存在し、タキオ
ン波動収束砲のエネルギーを広域に拡散させるほどの威力を持った
ミサイルを搭載していたということに失念していたのである。

プレアデスが暗黒ガス帯から触腕の様に伸びた一角に最接近。

その中から四発のミサイルが飛び出してきたのを確認して、初めて
艦載艇の存在を失念していたことに気付いた。

ミサイルがプレアデスの艦体と艦橋に命中、対フィールド弾頭の力
でプレアデスの強固なフィールドを中和しながら艦体に接触。

直後、眩い閃光が弾けた。

いまわのときになって、デーダーは思い出した。

そういえば昔誰かに言われたことがあった、「お前は優位に立つと詰めが甘くなる」と。

そのとおりとなつてしまった。

そしてこの距離ではデーダーがヤマトを道連れにできるだろうと考えていた、波動エネルギーと暗黒星団帝国のエネルギーの過剰融合反応による爆発でヤマトを巻き込める保証すらない。

自省する間もなく、デーダーの意識は光の中へと消え去っていった。

暗黒星団帝国が誇る巨大戦艦——プレアデスは、ヤマトが、ガミラスが予想だにできなかった巨大な閃光と共に爆ぜ、残った艦に次々と誘爆。

まるで波動砲の直撃を受けたかのような凄まじい爆発と共に、七色星団の一角を照らしたのであった。

巨大戦艦に波動エネルギー弾道弾の直撃を確認して、その効果を確認しようとしていたヤマトと戦闘空母は予想だにしない大爆発に狼狽えていた。

十分に距離を取っていたつもりだったのに、激しい爆発が生み出した衝撃波に揺さぶられ、押し流され、危うく近くにあった宇宙気流に飲み込まれてしまうところであった。

各種センサーや構造上脆弱な部位に損傷が生じ、各部から被害報告が殺到する。

「また爆発オチか〜!!」

などという悲鳴が各所から聞こえたとも言われているが、真偽は定かではない。

予想外の事態にうろたえながらも、ヤマトと戦闘空母は大きな被害を受けずに済み、何とか体勢を立て直して現状維持に努めた。

暗黒ガス雲に紛れていた信濃も巻き込まれた事が予想され、一時は大介とゴートの生存も危ぶまれた。

が、ボソン通信装置を利用した救難信号を意識を取り戻したユリカが察知。「ヤマト右舷の濃い雲の中、距離と方位は——」と詳細を語ってくれたおかげで行方が掴めた。

それを聞いたアキトとリョーコが疲労を押してGキャリアーで出撃。暗黒ガス帯に突入、爆発によって攪拌されたガスの淡い部分に漂う大破した信濃を発見、重傷を負いながらも生存していた大介とゴートを救出する。

——しかし、安定翼や追加ブースターも全損、機関部も全損し竜骨も折れてしまった信濃は修理不能判断され、ここまでヤマトの航海を陰から支えていた信濃の放棄が決定。

放棄された信濃はすぐそばを流れる宇宙気流に飲み込まれ、バラバラに分解されながら彼方へと去っていった……。

その後、ヤマトと戦闘空母は後方に避難していた第一空母と指揮戦艦級二隻と合流——ついでにドリルミサイルでブレード部分に大穴が開きながらも現存していたナデシコユニットも回収。まだ使えそうなので再装着しつつ被弾個所の応急処置を続けながら、七色星団を突き進む。

損害は決して軽くはなかったが、腰を据えて修理をするほど時間的余裕もなく、外装の応急処置が完了次第ワープでガミラス星とイスカンドル星を擁するサンザー恒星系の手前にある、ライネツク星系に向けてワープすることとなった。

「真田さん、イネスさん。あの爆発はいったいなんだっただんですか？」

中央作戦室に集まったドメルたち。

艦長代理の進はヤマトの頭脳とされる二人に問うていた。

ヤマトのはるか後方では、さきほどの大爆発の影響で混沌としている空間が広がっていた。

ハリの懸念どおり、波動砲に匹敵する威力となってしまうた波動エネルギー弾道弾の爆発の影響で、凧であった空間は荒れ狂う嵐の空間へと変貌してしまっている。

そう、余波によってもともと不安定だった気流の流れが変化してし

まったからだ。

「——艦長代理、ドメル司令。これを見てほしい」

真田はマスターパネルに表示させたのは、サテライトキャノンの効果やさきほどの波動エネルギー弾道弾の効果を観測したデータと、予想されていた被害規模の比較データだった。

「数値を見てわかるとおり、一見なんの問題もなかったとされるサテライトキャノンによる被害も、想定値より二割ほど上回っている。波動エネルギー弾道弾に至っては数十倍もの劇的な反応を見せている。——推測ではあるが、もしかしたら敵の動力エネルギーとタキオン粒子——いや、波動エネルギーは過剰反応する性質があるのかもしれない」

真田の報告に最初に反応したのはドメルだった。

「過剰反応？——ふむ、ガミラスも宇宙に進出して久しいが、このような劇的な反応を起こす文明とは遭遇したことが無いな……。真田工作班長、念のため本国のデスクラー総統に至急連絡を入れたい。具体的な推論は、そのあとでも構わないか？」

「構いません。むしろすぐに本国に知らせるべきでしょう。ガミラスの兵器事情には詳しくありませんが、波動エネルギーを転用した兵器をすでに実用化しているのであれば、事は一刻を争います……」

真田は深刻そうな表情でドメルの判断を肯定した。

ドメルもさすがにデスクラー砲に関しては口を噤んだが、すぐにエリナに戦闘空母に繋ぐようお願い出て、ハイデルンに戦闘空母を中継して本国への緊急ラインを繋げるように指示を出した。

これは——予想よりも事態がまずい方向に流れているやもしれない。

ヤマト・ガミラス混成艦隊が七色星団に到着した頃、デスクラーは艦隊旗艦であるデウスーラの艦橋で戦況を見守っていた。

敵の主力兵器であるビーム砲はグラビティブラストの干渉で多少逸れてくれるので、前衛艦隊は戦線の構築のみならず、大量の砲撃を放って敵の攻撃に干渉して逸らす盾の役割をも担うこととなった。

しかし戦線は膠着状態のままだ。

互いにまだ様子見の段階を逸しておらず、攻勢が互いに緩い。損傷艦はすぐに下げて戦線を維持することに注力し続けている。

いまはグラビティブラストの干渉という利点を活かして抑えているが、長くは続かないだろう。

本土防衛戦という状況ゆえ、損傷した艦艇の応急修理や弾薬の補充が容易であることは優位に働いているが、一步でも間違えれば市街地に敵弾が届いてしまう。

これは数多くの戦いを制してきたガミラスと云えど、あまり経験のない戦いだ。

だがヤマトとの戦いで移民計画が遅れ気味であったことが幸いもしている。

本来ならバランス基地に移動させた民間人の護衛やら太陽系各所に配備して新たな本星となる地球の防備を固めるための戦力が、丸々本星に残されているのだ。

もしヤマトが出現せず、もしくは早々に叩き潰せていたとしたら、ガミラスはここまで余裕をもって戦うことはできなかつたであろう。

皮肉な話だ。

そして、そのヤマトとの戦いを経て多少の改良が施された装備も、もう間もなく準備が整う。

一進一退の攻防は、その後数時間続いた。

デスラーは時間が経つにつれ、妙な違和感を覚え始めた。

敵があまりにも慎重すぎる。これほどの兵力とあれほどの自信を見せた相手にしては、不自然なほど慎重なのだ。

デスラーが疑いを深め続ける中、突然敵黒色艦隊が緩やかに後退を始めたではないか。

これは――。

「総統、敵艦隊が後退を始めています――第二波攻撃の準備でしょうか？」

「おそらくそうだろう。しかし解せん。敵も本気で攻め込んで来ない……なにを企んでいるというのだ？」

さて、どういう出方をするつもりだ。

数の上ではこちらが優位だが、性能面では敵が優勢。

グラビティブラストの干渉による攻防一体の戦術でイーブンに持って行ったが、それ自体が想定外の出来事であったのか、または想定されていたことなのかが読み辛い。

敵は間違いなく、ある程度の時間をかけてこちらの分析をしていたはずだ。にも拘らず、どうしてこうもこちらを探るような行動をしてくるのか。

グラビティブラストによる干渉も、多少戦局を優位にはしたが絶対的な優位性とは言い難い。

だからこそバランス星を襲撃してこちらの浮足を立たせて、本土襲撃という作戦を立案したはずだ。

にも関わらず進行は緩やかでまるで防衛線を構築するのを待つていたかのようにも見受けられ、その意図が掴みにくい。

連中にとってもイレギュラーと言えるのはヤマトの存在くらいだが……。

(このデスラーですら最後の最後まで悩み続けたヤマトとの和解——地球との共存共栄の道を選ぶなど、連中が予想していたとは考えられん)

だとすれば、本来のプランではヤマトへの警戒も疎かにはできないこちらの弱みに付け込んだ奇襲によって一気に制圧するつもりだったと考えるのが自然だ。

ヤマトにしても、最初は瞬間物質転送器やドリルミサイルを鹵獲したときに得られたデータ以上のことは知らなかったはずだ。

知り得た情報は「ガミラスが追い込んだ地球から突然湧いて出た超兵器搭載の戦艦」以上のものではないはずだ。

ヤマトが波動砲を理由に襲撃を受けたという報告で裏付けられる。

——だとすれば、バランス星の戦いでヤマトが偶然居合わせる可能性は想定していても、ガミラスと共同戦線を行ったことは想定外だったはず。

そこに自ら促したとはいえ、波動砲の絶大な威力を目の当たりにし

たことで、技術レベルに大差ないガミラスが同様の装備を持っているかどうかを警戒するようになった、というのだろうか。

(……情報を整理してみよう)

——暗黒星団帝国と名乗る軍勢の存在をガミラスが認知してまだ二カ月程度。

ガミラスの国境付近で確認された最も古い記録がそれなのだから、もしかしたらもう少し前から調査をしていたかもしれないが、デスラーはガミラスが彼らの存在を掴んだ時期と彼らがガミラスに目を付けた時期に大差はないと考えている。

その要因の一つがグラビティブラストの干渉だ。

もつと前から入念に調査していたというのなら、相応の対策を練つていても不思議はないのに、それが成されていない。

それどころか、連中はより強力な兵器であるグラビティブラストを所有していない。

それ自体はガミラスも他文明が開発したものを利用しているに過ぎない(デスラーは後にシャルバートから現在までに連なる歴史をスターシアから聞かされた)が、ワープ航法を開発する過程で空間歪曲関連の技術はどうしても開発する必要がある。

たとえば、自力でそれらの技術を開発したのではなく、地球のようにほかの文明からの技術付与という形で得たのであれば、段階的に発展していく過程で得られる技術を素通りしてしまう、歪な技術体系もありえるだろう。

現に地球が最後の希望として送り出したヤマトも、その性能バランスは歪だ。

六連波動相転移エンジンという、イスカンダルしか技術を有していなかったガミラス製のエンジンすら上回る超高出力機関を持ちながらも、密接な関係にあるはずのワープエンジンの性能が目も当てられないほど低いのがいい例だ。

しかしここまで大規模な艦隊を整備して他国に侵略戦争を仕掛けられるだけの文明が、はたしてこんな初歩的な見落としをするのだろうか。

空間歪曲フィールドやワープ航法。いずれも開発の過程でそれらに関わる技術を兵器転用する発想は、一定以上の技術力があれば出てきそうなものなのだが……。

……それとも、技術的には可能でも有用性を見出せなかったということだろうか。

(……彼らは目的から探ってみてはどうだろうか?)

目的はあくまで『資源』と言っていた。

その『資源』に『人間』が含まれているのはほぼ确实。

そうでなければバランスを攻撃する理由がない。

こちらの動揺を誘うだけなら奇襲だけで済む。彼らはガミラスの移民計画についての情報を掴んでいたからこそ『逃がさないため』にわざわざ行った。それ以外で本星から遠く離れたバランスを襲う理由などない。

事実そのせいでデスラーは警戒を強め、艦隊を配備させている。

加えてこれ見よがしな進軍……。

まるでこれは、わざと艦隊戦力を用意させ、残らず退けるのが目的と言わんばかりではないだろうか。

言い換えればガミラスの前線力を相手取りながら侵略できるだけの自信——すなわち切り札を有しているということを意味するのではないだろうか。

しかし、それでも腑に落ちない点が多い。

それほどの切り札があるのなら、最初から投入してしまえばいい。戦力の出し惜しみや逐次投入は愚策であるというのは、万国共通の戦術論のはず。

——気に入らない。

切り札ならこちらにもデスラー砲がある。

あるのだが……相変わらずデスラーの第六感が訴えるのだ。

気易く使ってはならない、と。

そして、敵艦隊の行動にはなにかしらデスラーが知り得ない思惑がある、と。

「デスラー総統。ヤマトのドメル將軍から緊急の通信が入っていま

す」

通信士からの報告に頷くと、考え込んでいたデスラーはすぐに気持ちを切り替え繋げるように命じた。

「デスラー総統、ドメルです」

緊迫した様子のドメルにデスラーは眉をひそめながら先を促す。

——嫌な予感がする。最高の機密レベルの秘匿回線を使用しているという時点で、とてつもなく重大な案件が生じたことが伺えるが、その予感がますます強くなった。

「われわれは七色星団において予想どおり敵艦隊の襲撃を受け、これを退けることに成功いたしました。しかしその戦闘で思わぬ事態に遭遇し、至急総統のお耳に入れるべく連絡致した次第です」

「——思わぬ事態？」

「はっ、われわれは敵艦隊と一進一退の攻防を展開した末、ヤマトの主砲ですら破壊困難な敵旗艦と思しき巨大戦艦に対し、波動エネルギーを封入したミサイル四発用いて撃破を図りました。それ自体は目論みどおり成功したのですが、その際敵艦が波動エネルギーとの過剰反応と思われる大爆発を生じるという異常事態に直面致しました」

ドメルの報告にデスラーは顔が強張るのを自覚した。

「波動エネルギーと——過剰反応だと？」

デスラーの様子に事態の深刻さが伝わったと判断したドメルは「ヤマトの真田工作班長が私の代わり、事態の説明を行いたいと訴えています」と伝えてきた。

デスラーはすぐにそれに応じた。

「ヤマト工作班長の真田志郎です」

「真田工作班長。説明をよろしく頼む」

デスラーに促され、真田が重々しく口を開いた。

——だが真田を映した映像の端のほうで、亜麻色の髪の女性が必死に片腕を抱え込むようにして抑えている金髪で白衣を羽織った女性の姿が一瞬移ったのを、デスラーとタランは見逃さなかった。

その女性——イネス・フレサンジュのことを、彼女が『説明』という行為に反応して出たがっていたことを二人が知ったのは、もう少し

あとのことだった。

「できるだけ手短に説明致します。われわれが敵巨大戦艦に対して使用したのは、波動エネルギーを封入した波動エネルギー弾道弾と呼称しているミサイルの一種です。これはヤマトの波動砲の八〇分の一に相当するエネルギーを封入しています」

まず最初にヤマトが使用した武器についての説明を受け、デスラーはヤマトに関する報告の中にその武器を積載した小型の艦載艇があつたことを思い返した。

「七色星団という不安定な環境に配慮した結果、われわれはより威力の高い波動砲の使用を禁じ、ガンダムエックスのサテライトキャノンと、この波動エネルギー弾道弾を切り札として敵艦隊と交戦しました。しかしこの二つを使用した場合、どちらも通常とは異なる反応を示したのです。ドメル將軍が報告された、過剰反応と思しき威力の増大現象のことです」

「これをご覧ください」と、真田はその二つの兵器を使用したときの観測データをいくつもこちらに転送してきた。

ガミラス最高レベルの暗号通信とはいえ、なかなか思い切った行動だと感心させられる。

「気分を害されるかもしれませんが、これはガミラス艦に対して使用したときのデータと比較したものです。艦艇のサイズや防衛性能の違いは、多少の推測を交えながら補正しています。——ご覧のとおり、サテライトキャノンで約二割、波動エネルギー弾道弾に至っては数十倍もの威力の向上が見られています。サテライトキャノンに関しては観測機器の精度による誤差の範疇かもしれませんが、波動エネルギー弾道弾に関しては到底誤差では済みません」

「たしかに——このデータに間違いがなければ、連中は波動エネルギーに対して異様な反応を示すということになるな……」

「そのとおりです。交戦によるセンサー類の破損、ECMによる妨害を受けていたため具体的になにが過剰反応を引き起こしたのかが不明ではありますが、このデータを信じるのであれば敵のなんらか物質——またはエネルギーはタキオン粒子に対して反応を起こすと判断

できます」

真田はそこまで言ってから新しいデータを送ってきた。これは――

「ご覧のとおり、タキオン粒子に対して反応は起こしているようですが、われわれの機動兵器が使用しているタキオン粒子を封入したロケット弾は過剰反応と思しき反応を見せていません。反応を見せるようになったのはタキオンバースト流にまで加工したサテライトキャノンからです」

サテライトキャノン――あのガンダムという人型が保有している戦略砲。その存在がガミラスに知られたるきは、デスラーすらも驚かされた。

艦載機に戦略兵器を搭載する前時代的な発想はもちろん、艦載機に搭載できるサイズであれほどのシステムを纏め上げた発想と技術力には、素直に感服せざるをえなかった。

そうか、いままでは波動砲の亜種とまでしか判明していなかったが、あれは波動エネルギーに至っていないタキオン粒子を同じように高圧化・収束して打ち出すタキオンバースト流を利用した兵器だったのか。

ガミラスでは波動エネルギーやタキオン粒子の兵器への直接転用は積極的でなかった（不思議とそういう発想があまり出てこなかったり、既存の戦力で十分であるなどの理由）。

実際デスラーもカスケードブラックホールの一件がなかったら、デスラー砲――タキオン波動収束砲の開発に手を出していたとは思えない。

たしかに優れた武力ではあるが、威力が高過ぎて加減がし難いのはあくまで版図を広げることを目的としているガミラスにとってデメリットも大きかったのである（手に入れるべき星を吹き飛ばしてしまつては本末転倒）。

「それを踏まえて考察するに、『未加工の波動エネルギー』であれば、『より威力を発揮するように加工した』波動砲を使用すれば、どれほどの被害が生じるのか皆目見

当もつきません。われわれはガミラスの兵器開発事情に詳しくはありませんが、艦長から教えられたガミラスの状況を考えるに、独自に波動砲を開発していると考えています。もし完成しているのですから――」

真田の言葉を遮るようにデスラーは疑念に応えた。

「疑念はもつともだ。そちらの推測どおり、ガミラスもカスケードブラックホール対策としてタキオン波動収束砲の開発を試み、つい先日完成したばかりだ。切り札を最初から切るつもりはなかったので使わないでいたが――どうやら正解だったようだな」

これも最高軍事機密に属する内容ではあったが、いまはそんなことを言っていられない。

正確な情報を共有し合って対策を立てなければ最悪な事態を招きかねない状況に直面している。

そんなデスラーの含みを持った言葉に真田は自分の推測が当たっていたことに呻いていた。

和解が成立していなければ、その矛先がヤマトに向いていたであろうことは想像に容易いだろう。

「そのとおりだと思われます。もしも波動砲が敵艦隊を直撃した場合、直撃を受けた艦が強烈な反応で爆発、最悪周囲の艦艇にも大爆発で飛散したタキオンバースト波動流の影響を受けて誘爆を重ね――極めて広範囲を吹き飛ばす危険性があります。言い換えれば、周辺への被害を考慮しなくていい環境下であれば、波動砲は暗黒星団帝国の艦隊に対して絶対的な威力を発揮できるということであり、逆に周辺に考慮しなければならぬ環境下では――波動砲は絶対に使えません。二次被害があまりにも大きく、予測がつきませんので」

断言する真田にデスラーも苦々しい顔を隠せない。

不可解な連中の行動の意図を、自ずと察したからだ。

「――連中が距離を詰めて交戦してこない理由はこれか……!」

「彼らがこのことを知っているのなら、過剰反応を恐れてのことと考えて間違いなんでしょう。これまでの戦いでガミラス艦もヤマトと同じ波動エンジンを搭載しているとわかっているはずです。だから

こそ、影響を受ける可能性がある至近距離での交戦を避け、どの程度の距離ならば問題ないのかを推し量っているのでしょう。迂闊に撃沈して波動エネルギーが漏洩し、それが連中の『なにか』に過剰反応してしまえば、最悪一帯が吹き飛んでしまう恐れがあります。——もちろん連中が欲しがっているであろうガミラスとイスカンダルも纏めて吹き飛んでしまう可能性もありえるでしょう。……おそらくヤマトがバラン星で波動砲を使用した際にデータを取得し、その可能性に気付いたのではないかと思われます。バラン星の時と七色星団では、敵艦隊の動き方に違いが感じられましたので……」

これは——ますます辛い戦いになるやもしれない。
これではこちらにも迂闊に接近できない。

接近戦に持ち込めば敵艦隊は過剰反応を恐れて攻撃の手が緩むかもしれないが、反撃を受けてこちらが撃沈された場合、敵味方問わず甚大な被害を被る可能性が出てきてしまった。

「確認される限り、敵艦隊もデイストーションフィールドと同じ空間歪曲場による防御装置が装備されています。それが撃沈で漏洩した波動エネルギーを遮断して反応を防ぐに足る性能があるかどうかまでは判明していません。しかもこちらの検証の限りでは、波動エネルギーはデイストーションフィールドに対する中和効果が確認されています。だからこそ、波動エネルギー弾道弾を開発したのですが……」

「なるほど。敵艦隊の動きが奇妙なほど慎重なわけだ……」

デスラーも腕を組んで考え込んでしまう。

この問題に気付いたのは連中のほうがだいぶ先だ。となれば、今回の交代から察するにこの場でできる限りの対処法を見出したのかもしれない。

「——われわれは既に何十隻も敵艦を撃破し、こちらも同等の被害を被っている。敵艦隊の攻撃が消極的だった理由がエネルギーの過剰反応を警戒しての情報収集だったとすれば、すべて迂棲があう。だとすれば……」

敵はこれまでの戦いで十分な情報を得て、それに合わせた対策を構

築している最中と考えていいだろう。

だとすれば――。

「古代艦長代理に代わってもらえないか？」

デスラーの要求に真田はすぐに応じて、艦長席に回線を繋いでくれた。

そして、回線の秘匿性を確かめ直してから尋ねた。

「古代艦長代理、ヤマトの到着予定はどうなっている？」

「七色星団での損傷の応急修理の時間を考えると、本来の予定よりも数時間ほど遅れると思われます」

進は淀みなく答えた。

当初の予定では七色星団での戦闘は避けられないとし、受けた損害の修復と補給をガミラスの支配下にあるライネック星系で行い、イスカンドル・ガミラスへのワープを行う手はずとなっていた。

戦闘があると最初から想定していたので、当然そこでの修理や補給による時間的損失はスケジュールに含まれてはいるのだが、思った以上に損害が大きいらしい。

それほどの激戦であったのなら、撃沈された艦が出ずに済んだのはむしろ運がよかったのかもしれない。

――ならば。

「古代艦長代理。私はさきほどの説明を聞いて、サテライトキャノンは使用しても問題ないと解釈したが、サテライトキャノンのコンディションに問題はないだろうか？」

率直な問い掛けだった。

現状、過剰なエネルギー反応を気にせず使える兵器としては最大の破壊力を誇るサテライトキャノンは、文字どおり戦局を左右する一手になる。

もちろんガミラスにもまだ切り札は残されている。残されているが、切れる手札は多いほうがいいのは言うまでもない。

だからこそ、救援に向かっているというヤマトの誇るサテライトキャノンの威力が――どうしても欲しい。

「……現在両機ともに損傷しており発砲不能です。エックスは予備が

ありませんので、もう使えませんが、ダブルエックスは砲身の交換作業と再調整さえ終えれば使用できます。そちらに到着するまでには間に合うでしょう。また、ご理解頂けていると思いますがサテライトキャノンは人型機動兵器の搭載火器です。艦載の波動砲に比べるとどうしても脆く、使用に伴う制約も大きい。エネルギー確保はなんとかありますが、エネルギーのチャージと変換で生じる無防備な瞬間を狙われてしまえば、発砲どころではありません——波動砲とまったく同質の兵器と考えて頂く必要があります」

進の率直な答えにデスラーは「わかった。そのように捉えておこう」と返事をする。

なるほど、そういった制約があったからこれまでの戦闘でもその威力を前面に押し出してこなかったのか。

冥王星や次元断層での解析データからすると、威力は波動砲には及ばないが艦隊決戦兵器として通用する威力があることは間違いない。

この威力であれば、敵が巨大な機動要塞を投入してきたとしても対処できるはずだ。

問題は敵の巨大戦艦はヤマトの主砲すら無力化する防壁を持っていたということ。言い換えれば要塞クラスの兵器ともなればサテライトキャノンすら防ぐ防壁であつても不思議ないということだ。

その場合は防壁を無効化する策を考えなければならぬが、出てきてももらわないことには考えようがない。

臨機応変に行くしかないか……。

敵にまだ動きはない。

ヤマトの到着のタイミング次第で戦局を大きく左右されるかもしれない、デスラーは漠然と考えながら、情報交換を続けた。

「ふむ……予想よりも手強いな。奇襲の成功程度で少々思い上がっていたか？」

メルダースは座席に深く身を沈めながら戦況モニターを見詰めて

いた。

バランス星での戦闘記録と比較すると随分と練度も士気も高い。

おそらくヤマトが敵ではなくなったことでこちらにだけ集中すればよくなり、当初の思惑に比べて心理的余裕が出ているのも影響しているだろうが、やはり本星を背にした戦いでは気合が入るものなのだろう。

——それはどこの国も同じだな、と述懐する。

(それにしても、まさか連中が使う波動エネルギーとわが軍のエネルギーが過剰融合反応を起こすとは……予想すらしていなかった。このようなことがあるとは……)

腕を組み、目を伏せて頭の中で考えを巡らせる。

当初の予定ではバランス星の攻撃成功と同時にガミラス本星に奇襲を敢行するつもりだった。

だが、あの戦場に現れた思わぬ乱入者——ヤマトの存在がその予定を狂わせた。

メルダースとしても、単艦でここまでガミラス相手に抗ったヤマトのことは高く評価せざるをえない。

その要因となったであろうタキオン波動収束砲が、ここまでわが暗黒星団帝国にとって危険極まりない物であったとは思わなかったが……。

そのためバランス星からの報告が上がった直後に予定を変更し、ガミラス艦艇を撃破したときに炉心から漏洩する波動エネルギーによる影響の有無、ガミラスがタキオン波動収束砲を装備していないのかどうかなどを改めて調査する必要性が生じてしまった。

迂闊に奇襲を仕掛けて星の近くでこの現象を誘発してしまつては得られるものがなくなり、損失だけが重なつてしまう。

おかげで予定されていた奇襲作戦は破綻し、わざと警戒網に引っかかつて艦隊を宇宙に上げてもらい、実際に戦いながら情報を集めて対処する手間を強いられている。

この現象さえなければ、奇襲攻撃で抵抗力を根こそぎ奪い、最後はこの機動要塞ゴルバの威力を持って完全に鎮圧できていたのだが

……これでは迂闊にゴルバを近づけるわけにはいかない。

——もつとも、タキオン波動収束砲と言っても粒子ビーム砲の一種であるなら、最大出力で展開したゴルバの偏向フィールドで防ぐことは不可能ではない。が、ミサイルの弾頭などに波動エネルギーを封入していないとも限らない。

事実ヤマトはそのような兵器を使ったと報告を受けている。

それにあの連射式は厄介だ。あの性能だと、最悪防御を力尽くで抜かれてしまう可能性が否定できない。

——ガミラスのみならず、わが帝国すらもたった一隻で窮地に追い込むとは——。

「さて——どう攻めたものか……」

いまのところタキオン波動収束砲の装備が確認されているのはヤマトだけだ。

そのヤマトも七色星団でデーダーが迎え撃っているはずだが——未だに撃沈の報がないことを考えると仕損じたが、相打ちのいずれかだろう。

となれば、遅くとも明日か明後日には到着し、戦線に加わると見たほうがいいだろう。

またこの戦場で新たに確認された大型艦——おそらく敵艦隊の旗艦——の艦首にも、大口徑エネルギー砲と推測される装備が確認されている。

連中がブラックホール対策にタキオン波動収束砲に目を付けていたとするなら、ヤマトと共闘する以前から開発に着手していたことは確実。

あの大砲がガミラス製のタキオン波動収束砲である可能性は高いか……。

ガミラスとヤマトがこの現象について知っているかどうかはわからない。

が、もしもヤマトがデーダーを打ち破ったのなら、タキオン波動収束砲や波動エネルギー封入弾頭のミサイルを使用していたのなら、気付いているだろうし同盟関係に至ったガミラスにも知らせているは

ずだ。

——さて、どうしたものか。

解析の結果、動力エネルギーにさえ直接触れさせなければ劇的な反応を起こさないことがわかっている。

装甲に直接触れるのもまずいが、脆くなるだけで済むなら安いもの。

飛躍的に難易度が上がったガミラス・イスカンドル攻略作戦ではあるが、だからと言って引くわけにはいかない。

ガミラスとイスカンドルで得られる資源は暗黒星団帝国の未来を考えれば必要なものだ。みすみす諦めらるるわけにはいかない。

ましてや本国はいつも熾烈な戦いの最中であり、時間をかけて部隊を再編する余裕すらない。

そしてなにより波動エネルギーへの脆弱性を露呈したまま撤退してしまえばガミラスも——そして地球も波動エネルギーを転用した武装で身を固め、暗黒星団帝国の干渉を避けようとするだろう。

——ヤマトとガミラス旗艦にしかタキオン波動収束砲が搭載されていないいまが絶好の機会なのだ。

これを逃せば、現在の帝国の状況を考えるに二度目はないと言い切っている。

イスカンドリウムとガミラシウムを逃せば、いま行っている宇宙戦争でも苦しい戦いを強いられる可能性は高い。もう一つの資源も得られる機会はわずかとなれば——。

メルダーズに失敗は許されていないのだ。

彼は攻略計画を練り直しながら、遙か遠くの祖国に思いを馳せた。

辛くも七色星団の死闘を制したヤマトではあったが、予期せぬ形で波動エネルギーと暗黒星団帝国の相性の悪さを知ることとなった。

波動砲という決定打を封じられたヤマトとデスラーは、はたして暗黒星団帝国の軍勢を退け、迫りくるカスケードブラックホールを葬り去ることができるのだろうか。

ヤマトよ、三つの星の命運は君の肩に掛かっているのだ！

人類滅亡と言われるその日まで、
あと、二四三日！

第二十四話 完

次回、新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十五話 ヤマトの戦い！ 驚異の暗黒星団帝国！！

ヤマトよ、退くな！

第二十五話 ヤマトの戦い！ 驚異の暗黒星団帝国
!! Aパート

デスラーとの通信を終えたヤマト・ガミラス艦隊は、装甲外板の応急修理を終えただけの状態でサンザー恒星系から約八光年ほど離れたライネツク星系へとワープアウトしていた。

被害甚大ではあったが、一隻も脱落せずに困難を乗り越えられたことは大変喜ばしくある。が、同時にガミラスとイスカンドルが現在直面している危機を解決するためには、些か被害が大きいという認識があった。

なので艦隊はバランスを発つ際、戦闘があつた場合の損害回復のための手段として事前に話を通していたライネツク星系にあるガミラスの自動兵器工場に向かつていた。

ドメルによればそこは大規模な太陽光発電を利用したスペースコロニークラスの規模がある大型施設で、旧式化しているいまでも活用されているらしい。

ライネツク星系はサンザー恒星系の隣にある恒星系の一つで、向かいにあるアルミナート星系と違ってコスモナイトを始めとする宇宙船の建造に適した鉱物資源が特に豊富であることから、その採掘と加工を効率的に行うために大規模な工場施設などをまとめて配置している恒星系だと聞く。

進はドメルが提供してくれたデータを閲覧しながら今後のプランを検討していた。

「この工場はつい最近まで、移民船団の用意のためにフル稼働していました。資材のほとんどはそちらで使ってしまったましたが、まだいくらか残っています。ヤマトと戦闘空母を回復させるには十分な量です」

とドメルは断言している。

移民船団の製造は既に一段落していて、ヤマト・ガミラス艦隊が入港

するのに不都合はないらしい。

ここでガミラス本土防衛戦のための準備を整えなければならないが……許されている時間は短い。

はたしてどの程度まで損害を回復できるのか、ここからは工廠スタッフと工作班の腕次第だが、後者に関しては先の戦闘からの復旧作業で疲弊している。工廠のスタッフが頼みの綱か……。

一抹の不安を抱えたまま、ヤマト・ガミラス艦隊は自動兵器工場へと入港するのであった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十五話 ヤマトの戦い！ 驚異の暗黒星団帝国！！

メルダースは考えていた。

ガミラスとヤマト、双方を同時に相手取るのはできれば避けたい。

ヤマトは波動エネルギーを利用したミサイルを実用化していると報告がある。

和解したらしいガミラスにそのデータが渡っているかどうかは定かではないが、データがあっても工業規格の違いを考慮すれば、バラン星攻撃からわずか三日の現時点で用意できているとは考え難い。

つまり、ガミラスの波動エネルギー転用兵器は艦隊旗艦が装備している大砲のみと判断していいだろう。推測は多分に含むが間違いはないだろう。

つまり自動惑星ゴルバにとって最も警戒すべき存在はヤマトということになる。

波動エネルギーを転用したミサイルに加えタキオン波動収束砲。性質の異なる兵器を二つも備えているなど、実に厄介だ。

たしかにゴルバの偏向フィールドの出力と強度ならばタキオン波動収束砲とて受け流せる自信はある。

だがヤマトの装備は最大で五連射が確認されている。内一発はそれまでの倍の出力での砲撃だった。

とすれば四連射したときと同出力で最大六連射。その六連射分を

一度に放出可能と考えるのが妥当だろうか。

ゴルバの偏向フィールドであつても連続した六発分のエネルギーを受け流せる確証はない。同一被弾力所への集中射撃は防壁を撃ち抜くのに十分な力をはじき出してしまふかもしれない。

それにゴルバとて弱点は存在する。そこを的確に突くのに——六連射は最適であろう。

だが——。

ヤマトとガミラスがエネルギーの過剰融合反応を認知しているのなら、使用を自粛する可能性は極めて高いだろう。

ゴルバほどの大物にタキオン波動収束砲を撃ち込んだとしたら、相当大規模なエネルギー融合反応を生み出し、星の一つや二つあっさり吹き飛ばす大爆発を生み出すのは目に見えている。

だが万が一にも連中がこの反応について把握しておらず、最終手段としてタキオン波動収束砲を行使した場合——最悪の事態を引き起こすだろう。

(帝国の未来のためにもガミラスとイスカンドルは無傷で手に入れなければならぬ……)

帝国の支配者——聖総統の命令は絶対だ。

メルダースも国に、聖総統に忠誠を誓った身の上。その期待には応えねばならない。

なにか活用できるものはないかと、ガミラスとヤマトに関する資料を洗いざらい見直していると、ふと思いついたことがあった。

帝国としてはどちらに転んでも取り立てて支障なく、上手くいけばヤマトとガミラスの共闘を阻止することができるアイデアだ。

地球とガミラスの結束が予想を上回っていたら失敗するだろうが、なにもせず手をこまねいているよりは遥かにマシだろう。

「メルダース司令。七色星団に配した偵察艦から、ヤマトとガミラス艦を確認したとの報告があります」

「……わかった」

念のため、データーが戦を仕掛けた場所から最も近い脱出地点付近に偵察艦を置いておいたのは正しかったようだ。

それにしてもデーダーを破るとは……悔りがたい艦だ。たった一艦でガミラス相手取って大立ち回りを演じただけのことはある。

やはり、思いついたアイデアを試すべきだろう。

そう考えたメルダーズは、早速行動を開始した。

ヤマト・ガミラス艦隊は指定されたドックエリアにその身を滑り込ませ、ガントリーロックで艦体を固定して整備と補給作業を受けていた。

事前に発注していたおかげで作業は円滑に進んでいる。

ミサイルなどの消耗品は出し惜しみできないためほぼ使いつくしてしまっている。この消耗品の補給は最も重要だ。今後の戦いにも大きく影響する。

しかしヤマトの場合、ガミラスと工業規格が異なるため自動兵器工場では対応できない。なので使い易いように加工された資材を受け取って艦内工場をフル稼働で対応するという手間をかけなければならなかったが、一から作業するよりもいくぶん時短にはなっていた。

当然ガミラス艦に比べてコンデイションの回復が遅れるので、回収したナデシコユニットを再改造して穴埋めも図ることになった。

ドリルミサイルで貫通された大穴を塞いで、破損したフィールドジェネレーターの交換やミサイルの補填を行って次の戦いに備える。

ユリカの発案でさらなる改修を行っているが、はたして極めて限られた時間しかないこの状況下で完成にこぎ着けられるかどうか……完成しなかったらユニットを置いてヤマトだけで行くしかないだろう。最悪あとから輸送してもらえないが、そこまで戦闘が長引くのは好ましいとは言えない。

短期決戦を図るためにも、この場で万全の準備を整えて発進したい。

ヤマトの隣のドックに入渠した戦闘空母も各部の応急修理が急ピッチで進められ、艦載機用の弾薬や消耗品の搬入も随時行われ機能

を急速に回復させていく。

そうやって物資の積み込みと修理作業も含めて、八時間ほどの滞在を予定していた。

心休まる滞在時間とは言い難く、修理や搬入作業に携わらないクルーもそれぞれの部署の立て直し、そしてなによりこれからの戦いに備えた作戦会議に余念がなかった。

中央作戦室。

そこで目を覚ましたユリカを交え、信濃から救出されたあと入院した大介とゴートを除いたメインスタッフによる作戦会議が行われていた。

「——以上の解析結果から、暗黒星団帝国が実用化している動力エネルギーと波動エネルギーが起こす過剰反応は、使用した波動エネルギーの数十倍以上という凄まじいレベルであり、実際波動砲の一・二五パーセントの波動エネルギーを封入された波動エネルギー弾道弾四発で波動砲に匹敵するエネルギー反応を生み出しています。また、ボソソジャンプ戦法に同行したガミラス機とダブルエックスの観測データを入念に解析した結果、サテライトキャノンでも反応が確認され、約二割程度の威力向上が見られています」

真田は床の高精度スクリーンに映し出した解析データを指示棒で示しながら、言葉を続けた。

——七色星団での死闘を制したあと、もはや先入観云々を考えて秘匿しているのは致命傷ではないかと考えたヤマト自身が開示したことで、かつてヤマトが戦った暗黒星団帝国の情報が得られている。

——とはいえ、ヤマトの判断は間違っただけではなかった。

厳密に言えばそれはデータではなく『証言』であったからだ。

なにしろ具体的な数値などについては「わかりません」の一言で切って捨てられたので、言葉からくる印象だけで慎重になり過ぎて、却って戦局を悪化させていた可能性すら指摘されたほどだ。

特にヤマトの声を聴くことができないドメルにとっては、丁寧に説明したところで到底信じ難い出所不明の情報になりやすいため、ヤマ

トが下手に入れ知恵しなかったのは寧ろ正解であったと言える。

いままやマトの証言は無視して得られた情報のみで推論を重ねているのはそのためだ。

「……損傷の影響とは言え、モード・ゲキガンフレアを使えなかったのが幸運だったと言えますね。万が一突撃した瞬間にこんな反応を引き起こされては、下手をするとやマトを守る波動エネルギーの膜が、そのままやマトを破壊していたかもしれません」

険しい表情でルリはあのとときモード・ゲキガンフレアが使えなかったことを安堵し、真田も「幸運としか言いようがない」と肯定する。

「……対して、同じ巨大空母に向かって使用されたハイパーバズーカとロケットランチャーガンのタキオン粒子弾頭では、目立った反応が見られていません。封入されているタキオン粒子は微々たるものなので、反応を検出できなかったとしても無理はありません。意識してデータを集めていたわけではありませんでしたし……」

ユリカの子椅子係兼ダブルエックスパイロットとして会議に参加しているアキトは、

「あくまで俺個人の体感ですけど、ガミラス艦に対して攻撃したときと違いは感じませんでした。タキオンバースト流まで加工しなければ、過剰反応せずに済むって可能性もありますか？」

と自分なりの意見を口に出している。

真田とイネスは「断言はできないが、可能性はある」と回答した。

「——とりあえず言えることは、サテライトキャノンと波動エネルギー由来の武器全般に反応するってことか。——具体的な線引きがわからないと、これからの戦いがやり辛いな……。安全を期すなら、タキオン粒子を転用した武装は極力封印したほうが確実に考えたかたがいいのか？」

コスモタイガー隊隊長兼エックスのパイロットとしてリョーコが問うと、

「いまのところはそう考えてもらっていいわ。あらゆる面で情報不足だから、こちらとしても推論を立てづらくってね……」

とはイネスの弁だ。

不幸中の幸いだったのは、タキオン粒子の兵器転用も最小限で済んでいたことだろうか。

ヤマトの過去のデータであった『波動カートリッジ弾』や『波動爆雷』は、主砲の改装や艦内構造の改訂の影響で設置場所を設けられなかったことでオミットされてしまっていたのだが、この場合は幸運であったと言えよう。

「情報収集を考えるのなら、ミサイルの弾頭にタキオン粒子を封入して実験するのが第一なのだが、これからの激戦の中で正確な情報を収集するのは難しいと言わざるをえない」

「それに、動力エネルギーだけに反応を示しているのか、それともそれ以外にも反応を起こしているのかすらまったくわかっていないしね——。もしも仮に、彼らの宇宙船を構成するすべての要素が大なり小なり関わっているとするとするのなら、迂闊な行動は私たち自身の首を絞めることに繋がるわ。撃破した残骸を回収するなりして、然るべき場所で研究しない限り、迂闊なことはできない。サテライトキャノンは普段以上に慎重に、波動砲の使用は厳禁。その認識を共有して徹底しなければならぬわね」

真田とイネス、ヤマトでも特に博識で知恵袋として活躍している二人の意見が一致しているというのであれば、それがとりあえずの正解と考えても間違いはないだろうと、全員が納得してくれた様子だ。

「——暗黒星団帝国がこの情報についてどの程度重きを置いているか、というのも思案しなければならぬでしょう。これからさき、本星を襲撃している艦隊を退けることができたとしても自国の兵器に対して特別威力を発揮する兵器を保有しているガミラスと地球に対し、本格的な戦争を仕掛けてくる可能性は否定できない」

ドメルの疑念は、この現象を発見したときから考えていた難題であった。

「もちろんデスラー総統のことです。地球への賠償の一環として軍事同盟を締結することは間違いないと私は考えています。そうなれば、ガミラスの艦隊を太陽系に駐屯させて防衛網を構築することになるでしょうが、しかし——」

ドメルが言葉を続けようとした矢先、第一艦橋でエリナに代わって通信席についていた交代要員から、ガミラスを介して暗黒星団帝国からのメッセージが届いたと報告が入った。

ユリカも進も、すぐにメッセージを中央作戦室に送るように指示した。

「地球の宇宙戦艦——ヤマトよ。私は暗黒星団帝国マゼラン方面軍司令長官、メルダーズだ」

メルダーズと名乗る人物からのメッセージの出だしはこうだった。「まずは貴艦のこれまでの戦いぶり、お見事であったと称賛させてもらおう。しかし、これ以上わが軍の邪魔建てをすることは許さん——そこで提案させてもらおう。ヤマトよ、大人しくガミラスとイスカンドルから手を引け、今後一切関わるな。貴艦らの目的がイスカンドルにあることはこちらも承知している。これ以上われわれの邪魔をしないというのであれば、貴艦らのイスカンドルでの要件を果たすことは認めよう。またわれわれがイスカンドルに求めているのはイスカンドリウムだけだ。唯一残されたスターシアを貴艦らがどうしようとして、干渉するつもりはない。無論ヤマトからは一切の手を引き、地球を侵略の対象から外すよう私から上層部に掛け合うことも確約しよう。しかし、これ以上邪魔建てするといふのであれば——」

メルダーズはそこで言葉を一度区切ってから、力強く言い切った。「貴艦らをここで撃沈する。仮にこの戦いを制したとしても、地球に対してわが暗黒星団帝国が報復することは避けられないと知れ。貴艦らにとっては侵略行為にしか見えなくても、この戦いはわが帝国の未来を左右する重要な案件。それを阻むということとは、わが帝国に弓引くも同じ行為だ。——その覚悟があるのなら、向かって来るがいい。賢明な判断を期待しているぞ、ヤマト」

その内容にドメルはしてやられたという顔になる。

「——やられた……いままでは相手から一方的に攻撃を受けていただけだった。それならば自衛という形で交戦を正当化できたが、こう言われてしまつては迂闊に戦えない。——やはりバランス星の戦いでヤ

マトが助けに入ったことを、ガミラスに恩を売って地球に対する侵略を止める様に訴えたと解釈したのだな……。しかも波動砲の威力からガミラスが直面しているカスケードブラックホール災害への対抗策に使えると見抜き、ヤマトとガミラスの間で交渉があったと推測されたか……。賢い連中だ。こちらの事情をここまで見抜くとは……。！」

言葉も荒くドメルが憤っている。

……覚悟していたことだ。

真田は初めて波動砲を撃ったときから、いや波動砲を搭載したときからこうなることを予期していた。

あくまで自衛と言い切れるような形だからこそ、ヤマトは暗黒星団帝国の軍勢に対して一切遠慮することなく戦ってきた。

だがどのような形であれ『交渉』という手段を取られてしまったのは、ヤマトの独断で戦うことは——できない。

そんなことをすれば、地球の新しい脅威を自ら招いてしまうことになる。

「——なかなか痛いところを突かれましたね。ヤマトが単独で行動している以上、ガミラスとの交渉含め地球政府の了承を得たわけではないと判断してもおかしくありません。——ヤマトが引かなければ言葉どおり公然と地球を攻撃し、ヤマトが地球大事に手を引いたとしてもガミラスを手中に収めたあとなら、結局説得できなかつたとも言えば大手を振って地球を攻撃できる。所詮は現場責任者の口約束。いくらでも反故できますしね。どちらにせよ潜在的な脅威である地球も見過ごすつもりはないとしても、こういう手段を取られてしまうと身動きし辛いのが実情ね……」

ユリカは顎に手を当てながら敵の目的を推測して口に出す。

「それだけヤマトを——波動砲を恐れているということでもありません。連中がガミラスも同型のデスラー砲を開発に成功し、デウスーラに搭載している事まで掴んでいるかは定かではありません。が、もし察しているというのならヤマトとデウスーラが同じ戦場に出現することを快くは思わないでしょうね。連中にとっても猛毒となるのは、おそらくタキオンバースト波動流——波動砲の直撃に相違ないで

しようし……」

進もまた、自身の推測を口にする。

「バラン星での使用で連射式であることも、普段は分割して発射しているエネルギーを一度に撃てることも敵に知れているだろうことを考えれば、この上なくわかり易い脅威として認知されても、不思議はないしな……」

守も続く。

「……デスラー総統の指摘どおり、連中が機動要塞の類を戦線に投入するとなれば波動砲の有無は大きな意味を持つ。エネルギーの融合反応による過剰破壊の可能性を除外したとしても、その手の要塞に対して波動砲は極めて有効な装備だ。あの巨大戦艦を例に考え、波動砲すらも無力化できるほどの防壁を持つていたとしても、連射や数発分の威力の砲撃で突破される可能性くらいは考えているだろう」

真田も苦々しい表情で語る。

「そこにその全容が知れないデウスーラ。デウスーラに搭載されていることを推測しているのなら、この二隻が揃うことは絶対に避けたいはず。ヤマトには波動エネルギー弾道弾があることも知れている、と考えるのが自然だろうし。こちらがエネルギー融合反応を知らない可能性を考慮して、二重の意味で要塞に向けて波動砲を使われたくないと考えた結果が今回の手段というのなら、敵も必死だよ」

ジュンも腕を組んで唸る。

「地球がこの有様では、私たちだけの判断では到底戦えません。いまの地球に——侵略者を迎え撃つ余力なんてありません。時間断層の存在を加味した防衛艦隊の再整備計画だって、どう考えても数カ月以上かかります。ガミラスとの軍事同盟が実現するとしても、私たちはデスラー総統を信じることでできますが、地球政府がそうである保証はまったくありません。ガミラスに防衛力を全面的に依存しなければならぬことを鑑みても、とてもヤマトの独断では——」

ルリも顔を陰しくする。

正直『交渉』にすらなっていない一方的な通達であることに違いはなくても、こういった言い方をされるだけでこうも容易く動きを封じ

されてしまう。

——政治とは、本当に厄介な代物だった。

「——これも、波動砲の呪いなのかもしれないね」

中央作戦室のコンソールパネルを操作しながらハリが零した言葉を、全員が神妙な顔で受け取る。

波動砲の呪い。

神にも悪魔にもなれると形容しても違和感を感じない、強大過ぎる波動砲の力。

その力ゆえに意図せぬ災いを呼び寄せてしまうことがあるということをも、かつてないほどに痛感させられた瞬間だ。

「地球が暗黒星団帝国と戦争をしない方針を取ればガミラスとは縁を切らなければならなくなる。でも彼らが約束を当然のように反故した場合、ガミラスの助力を得られない壊滅寸前の地球では——コスモリバースを積んで波動砲という最終兵器を失ったヤマトでは、到底勝ち目がありません。地球としても、叶うのであればガミラスの援助が欲しい。そうしないと自力で身を守る術を得ることすらできない。……仮にヤマトが助太刀せずガミラスが彼らを退けたとしても、ガミラスと関わることで自体が問題となってしまうかもしれない。ガミラス、そしてイスカンドルと一蓮托生で共に立ち向かうか、わが身大事に見捨てて彼らが約束を守ることを縮こまつて願いながら地球の再興に尽力するか……艦長、僕は嫌です。理不尽な暴力に屈するのは」

ハリはパネルに落としていた顔を上げて、ユリカに言い切った。

その顔に影はなかった。毅然とした表情でもう一度。

「僕は嫌です。理不尽な暴力に屈して、せっかく和解できたガミラスを見捨てるなんてふざけた真似は。僕は——そんなことを——人間の風上にも置けない選択をするくらいなら、最後の最後まで悪足掻きする道を選びたい。この呪いに立ち向かいたいです！」

意外な人物からの徹底抗戦宣言に、虚を突かれた空気が流れた。

真田も驚かされた。まさか誰よりも波動砲を恐れていたハリが、ここまで決意を抱いていたとは。

「——ハーリー君に後れを取るとはね……。ユリカ、俺も同感だ。連中に大義名分を与えることになるのは癪だし、ここで戦えば地球はまた長きに渡る戦乱に晒される危険性も高い——でも理不尽な暴力に屈して言いなりになるのはゴメンだ。俺は、最後の最後まで立ち向かう選択をしたい」

アキトもしつかりと自分の意見を口に出している。

……きつと火星の後継者の事件のことを思い出しているのだろう。

「アキト君……！　そうね、そうよね。暴力を笠に着て他人を言いなりにしようとする連中なんて、気に入らないわよね」

意外とエリナも乗り気だった。

だが真田も同じ気持ちだ。

「私も同じ気持ちです。連中の科学力がいかに優れていると、それを血を流すことに使おうとする輩に屈するのは、主義に反します」

「——僕も戦う道を選ぶ。もちろん地球に連絡して判断を仰ぐ必要がある。筋は通さないといけないし、僕たちは所詮軍人だからね……。けど、地球が渋るようだったら命令違反覚悟の上で戦う道を選ぶ。ヤマトなもの。きつとそういった前科もあるんだろ？」

ジユンもほかの面々も、口々に戦う道を選ぶと告げた。

「艦長。艦長代理として、俺も戦うべきであると進言します。言いたいことはもうみんなに言われていますが、まだ言われていないことがある——それは俺たちがヤマトの戦士であるということです」

進は膝をつき、車椅子に座るユリカと視線を真っ直ぐ合わせて告げた。

『もう答えは決まっていると思います』が、俺たちはそれを曲げるべきではないと考えます。——それが俺たちに、ヤマトに定められた真の願いだと思います」

ユリカは進の頭を両手で『ワシつ』と掴むと、倍力機構付きのインナースーツの助けも借りて抱き寄せて「進えらい！　よく言った！」と頭をナデナデする最大級の愛情表現を披露。

真田含めたクルー一同、「またか」と呆れかえる。

ドメル、ついつと視線を逸らして咳払い。

雪、わかっていても嫉妬を隠せず頬を膨らませる。

「それでこそヤマトの艦長代理よ！ たしかにいろいろと大事になりそうだけど、それでも私たちはぜえつたいに屈服なんてしない！ 最後の最後まで悪あがきしよう！」

と騒いでいたところにデスラーから通信が入った。

——タイミングが悪いなあ。

真田は額を右手で抑えて呻く。

咄嗟に繋いでしまつてエリナが「あつ」と口に手を当てて自らの失敗を悟つたらしいが、時すでに遅し。

「ヤマトの諸君、そろそろ動揺も——」

「収まったのではないか」と続くはずだった言葉は飲み込まれ、デスラーも一つ咳払いをして顔を背けた。

「——これは失礼をした」

こんな状況でも謝罪の言葉が先に出るあたり、彼は本当に紳士である。

そんなデスラーの行いにさすがに恥じらいが勝り、赤面したユリカと進が無駄に咳払いしたり身なりを正したりしてデスラーに向き直る。

微妙な空気が流れていた。

「いえいえいえいえ、こちらこそ申し訳ありませんでしたデスラー総統。どうぞ、お続けになってください」

ユリカに促されて氣勢を削がれたデスラーが改めて要件を告げる。

彼も立ち直りが早い。さすが一国の主。

「ヤマトの諸君、そろそろ連中からの通達のショックから立ち直つていると思つて連絡させて頂いた。申し訳ない、敵が一枚上手だった……。しかし安心して欲しい。ヤマトの手を借りずとも必ずや暗黒星団帝国の魔の手を振り払い、地球に対して賠償をすると確約しよう。だからいましばらくの間、ヤマトはそこで身を隠して欲しい。……地球をこれ以上の苦境に追い込むわけにはいかない。それにヤマトはカスケードブラックホールを退ける最後の切り札。無用な傷を負い、万が一にも失敗してしまうことがあれば、三つの星の明

日に関わる一大事。どうか、この場においては——」

ヤマトの立場を慮ったデスラーの言葉に、本当にガミラスとの和解がなったのだと感慨深く思う。

感激した様子のユリカは、それでもしつかりと自分の意見を告げていた。

「総統。お気持ちはとてもありがたいのですが、友の危機に立ち上がらぬわけにはいきません。それに波動砲を警戒してヤマトに戦いを挑んだ前歴がある以上、脅しに屈してもいずれ地球は彼らの標的になる懸念は付いて回ります。これは地球にとつてもガミラスとの共闘による同盟確立を後押しする十分な理由となります。……それにこれは、波動砲を使ってしまった私たちの責任です。ガミラスだけに押し付けるわけにはいきません」

ユリカの強い口調に多少困惑しながらも、デスラーは「それでは君たちの立場が——」と気にしてくれた。

だからユリカは一つ、この状況においてしなければならぬ筋を通すためデスラーの力を借りたいと申し出るのであった。

ヤマトからガミラスの回線を使った超長距離通信で事の次第を告げられた地球連合政府は、またしても理不尽に襲い掛かってきた新たな困難に頭を抱えていた。

「——以前の報告と合わせて聞く限り、少なくともわれわれの視点から見ればヤマトの行動に非があるとは言い難い。ミスマル艦長も古代艦長代理も、よくやってくれた」

連合政府の大統領が疲れを滲ませた顔で労いの言葉を投げかける。しかし、その心中は複雑だ。

ユリカが残したガミラスとの戦いを終わらせるプラン——彼なりにいろいろと部下の意見も交えて検討した結果、悪いプランではないと考えていた。

もしも本当にガミラスと和解して終われるのなら、仮に賠償が支払

われないうにしても、報復という最も恐れていた事態が回避できる。

賠償があるというのであれば、荒廃してしまった地球の再興はもちろん、ヤマトとイスカンダルから得られた技術を活用した新しい防衛艦隊を構築して、地球の守りを万全にするまでの時間を短縮したり、穴だらけの防衛網をガミラスに肩代わりしてもらえらるる利点がある。

外宇宙に関して無知な地球の政府の現状を考えれば、ガミラスと同盟を組めるというのは地球にとってはメリットしかないだろう。

——被害者という立場ゆえに生じる、感情論を除外すればの話だが。

「波動砲——木星での運用データやカスケードブラックホール破壊作業についてはもちろん……コスモリバーシステムのことを聞かされたときからとんでもない代物だと嫌というほど思い知らされたが……。まさか新たな脅威すら呼び込んでしまうとは……。スターシア陛下が提供を渡られるのもわかる。強大過ぎる力は、どれほど『正しい』形で使ったとしても必ず災いの種になるのだと、改めて教えられた思いだよ……」

「……大統領閣下。この度の戦争責任、すべてわがガミラスにある。この危機を乗り越え、ヤマトによるカスケードブラックホール破壊作業が終了次第、コスモリバーシステムとなったヤマトを責任をもって地球に送り届けることを、ガミラスの総統デスラーの名に懸けて誓う。そしてヤマトの帰還に大使を同行させ、その場で改めて地球と交渉の場を持ちたいと考えている。無論、最大限の便宜を図ることも確約しよう」

……正直ガミラスがここまで下出に出てくるとは思ってもみなかった。

これが演技なら大したものだと思うが、長らく政界に身を置いてきた彼は直感的に嘘は言っていないと判断する。

とはいえ無条件に信じることもできはしないが。

「デスラー総統。この戦争が終わるのであれば、われら地球一同、これ以上の喜びはありません。ましてやガミラスの手を借りられるというのであればなおのこと異を唱えたりなどしません。——国民感情

の手前、過去の怨恨を水に流そうとは安易に言えませんが、これ以上血を流すくらいなら、われわれは手を取り合う道を選びたい……」

正直な気持ちを吐露する。

苦境に追い込まれるにつれ、ガミラスへの敵意と恨みは募っていったのは事実だが、同時に拭いようのない『疲れ』も蓄積されていった。

それに彼は政治家だ。

感情に身を任せて暴走するよりも、いかにして国益を得るかを優先しなければならぬ立場にある。

「詳細はヤマトの帰還後に詰めるとしても、ヤマトが——いえ、『地球が』この危機を乗り越えるのに力を貸すのであれば、ガミラスは地球にも手を差し伸べてくれますか？」

「無論だ。ヤマトは恩人イスカンドルを救うことはもちろん、敵国であつたわがガミラスも救うと断言している。私は——わが大ガミラス帝国は、受けた恩を仇で返すような真似は決してしない。その恩に報いるまでは、決して」

大統領の問いに即答しながらも、彼は釘を刺すことは忘れなかつた。

デスラーにとって真に恩人たり得るのはヤマトであり、未だ全貌を把握していない地球政府では断じてない。

もしも調子に乗ってガミラスに必要な以上の無理強いを強いたり、戦いに勝つたつもりで支配者を気取るのであれば——その時は、手を切るだけだ。

ヤマトへの恩を果たしきつたあとで。

彼は言外にそう告げてきた。

こちらとしても異存はない。勝者を気取るには地球の状況が悪過ぎる。

「……では、その言葉を信じることにしましょう」

大統領はデスラーの意図を理解した上でそう返答すると、この通信に同席している統合軍司令と宇宙軍司令のコウイチロウを始めとする軍・政府高官達と視線で話し合い、決断した。

「ミスマル艦長、古代艦長代理」

「はい」

大統領の呼びかけに背筋を伸ばして応えるユリカと進。

大統領は厳かに命じた。

「地球連合政府大統領として命じる。ガミラスと協力して暗黒星団帝国の軍勢を退けるのだ。ここで要求に従ったとしても、地球の安全を確保できる保証はない。また、一方的な要求に屈するようでは今後の地球の外交にも大きな影響を残すことになるだろう。——われらは決して理不尽な暴力に屈しないということ、われらが希望——宇宙戦艦ヤマトの力を持って示すのだ！ 必ずや勝利をつかみ取り、無事の帰還を祈る」

「——了解しました！ 宇宙戦艦ヤマト、ガミラスと協力して暗黒星団帝国の軍勢を退け、カスケードブラックホール破壊作業を必ずや完遂し、コスモリバーシステムを受領して地球に帰還します！」

敬礼するユリカと進に答礼。通信を終了した。

——その場から誰も立ち去らない。静かに言葉が交わされる。

「これでよかったですでしょうか？ ガミラスもどこまで信用できることか……」

「たしかに。コスモリバーシステムを起動したあとでは肝心のヤマトも……」

多くの者が口々に不安の声を訴える。

当然だろう。あまりにも——あまりにも背負うべきモノが大き過ぎる。

地球はかつてないほどに大きなモノを背負わされようとしているのだ。

「——しかし、背負っていくしかないでしょう」

ミスマル・コウイチロウ宇宙軍司令が静かに口を開いた。

いまのいままで最低限の事務的な発言してこなかった彼が、ついに言葉を発した。

「たとえ暗黒星団帝国が出現せずとも、ヤマトがその危機を切り抜けるために波動砲の使用を決断せざるを得ないというのであれば遠くならず問題になっていたことです」

いまさら言われずとも、ヤマトが太陽系を出てこちらの管理下を外れたときに明かされた情報から予測されていた結末だと、彼は言う。もしも出航前からあの情報を共有したいたのなら——地球はどのような判断を下したのだろうか。

波動砲の搭載を見送らせたのだろうか。

それともイスカンドルを疑うだけで出航そのものをなかつたことにしたのだろうか。

仮説はいくらでも建てられる。

「それにヤマトのデータベースによれば、『地球は数度に渡って地球外文明から侵略戦争を仕掛けられている』ことが伺えます。……データの破損により詳細な情報こそわかりませんが、われわれが将来同じような戦乱の歴史を歩まないという保証はありません。たしかにガミラスは加害者であり、私とて無条件に信じられると言えは嘘になる。しかしもし本当に手を取り合っていけるのであれば、それは今後地球が遭遇するかもしれない戦乱において、心強い味方となってくれることは疑いようがないでしょう」

「……」

結局のところ、今回のヤマトの決断を容認した最大の理由がそれだった。

ヤマトが抱えていたデータには、詳細が不明になっているとはいえ複数の国家によりわずか四年の間に五度ももの侵略行為、戦争の余波による重大な被害を被っていたことが記されている。

「たしかに——ガミラスのほうの話し合ってくれる気になってくれただけ、はるかにマシですな。ここは一つ、ヤマトの『証言』というものを信じてみるとしますか。——戦艦の証言というのがイマイチ……いや、平時であればまず間違いなく信用を置けない事柄なのですからがね」

この会談に参加していた将官の一人が苦笑交じりに言うと、みなも覚悟を決めた様子だった。

その証言とは、ヤマトに宿る意思の言葉をユリカが文章という形で書き出して今回の通信にちよつとした暗号文として送り付けたもの

だ。

ヤマトが最初に戦った相手がガミラス帝国であったこと。

死闘の末にガミラスを滅ぼして地球を救ったこと。

その後現れた侵略者に与してヤマトへの復讐を果たさんと挑んできたが、ヤマトと自分が同じ目的をもつて戦っていたことから来る共感と敬意によつて奇妙な友情を結び、敵対関係を解消したこと。

その後彼の与り知らぬところで再建されたガミラスの軍勢と矛を交えたことはあつても、彼が事実を知つて以降はヤマトに対してはもちろん地球に対して友好的で、援助を惜しまなかったこと。

……そしてなによりも、不運な事故で自国が壊滅してしまつたにも拘らず、ヤマト最後の任務を邪魔せんと立ちはだかつた敵艦隊を急襲してヤマトの危機を救い、アクエリアスがもたらす水害から地球を救う手助けをしてくれた。

世界は違えどガミラスはガミラス。

今度もよき関係を築ければ、同じように助けられるかもしれない。

切なる願いであつた。

地球との通信であと腐れなくガミラスとの共同戦線を取れるようになったヤマトではあるが、だからと言つてすぐにガミラスとイスカンドル近海にワープするといふことはなかつた。

デスラーもドメルもユリカも進も、「ヤマトが屈した見せかけたほうが隙を見せるかもしれない」と考えたからである。

なのでユリカはデスラーに向かって「ガミラスではすぐに用意するのが難しい秘密兵器を万全の状態で投入してみせます！」と大見えを切つてデスラーを驚かせつつ、戦況を見守りつつヤマトと同行する戦闘空母と第一空母の修理と補給作業を続けさせていた。

ガミラスを介したヤマトへの恫喝から三時間が過ぎた頃になつて、

とうとう暗黒星団帝国の第二陣が出現した。

ガミラスの本土防衛艦隊と再び向き合う形となったのだが――。

「デスラー総統！ 敵艦隊の背後に巨大な機動要塞と目される物体を捕捉しました！」

「――メインパネルに出せ」

オペレーターの報告にデスラーは落ち着いて対応する。

ここで狼狽えていては指導者として失格だ。自分は最後の最後まで胸を張り、威厳を示さなければならない。

「光学モニターの最大望遠の映像です」

メインパネルに映し出されたその物体は、敵艦隊の最奥に鎮座していた。

形状は円筒に近い楕円球状の胴体の上に、球上の『頭部（ご丁寧な角のような装飾まである）』がくっ付いた、ガミラスと同じくどこか有機的な意匠の垣間見える、黒に近い濃緑色の要塞だった。

「大きさは縦の長さが推定三〇〇〇メートル、横幅が一八〇〇メートル。外見からは装備の全容は見えませんが、胴体部分には確認できるだけで四つの巨大なハッチが存在しており、発進口または兵装の類ではないかと推測されます。また周囲を偏向フィールドで覆っていることが観測データから確認されています。現時点では偏向フィールドの強度は不明です」

「予想はしていたが、まさかこのような要塞を動員してくるとは……敵ながら大したものだ」

賞賛を口にしながらもデスラーの顔は険しい。

――この戦場でも少数その存在を確認している巨大戦艦……ヤマトの重力衝撃波砲すら受け付けぬ防御力を持った艦艇。

あの戦艦の性能を鑑みれば、あの要塞の偏向フィールドの性能が生半可なものではないことが容易に予想できてしまう。もしかすると本当に波動砲クラスのエネルギー砲ですら防ぐ性能があるかもしれない。

まだ戦闘状態にはないであろう要塞の解析を試みたところで、その最大強度を把握することはできないにしてもあの巨体と観測される

エネルギー反応を考えれば、通常火器では歯が立たないことは間違いないだろう。

——さて、どのような手段でその防御を突破すればいい。

「……新反射衛星砲の準備はどうなっている？」

デスラーは敵艦隊に対する切り札として準備を進めさせていた、反射衛星砲の稼働状況を尋ねた。

惑星防衛用の新兵器として冥王星基地にテスト配備されていた反射衛星砲ではあるが、対ヤマト戦においてその問題点を改めて露呈する結果となった。

隠蔽を考えて海中に沈めたまではよかった。威力の減衰は想定内であったし、あのヤマト相手にあれほどの威力を発揮できたのだから、今後も採用する価値のある隠し場所だろう。

問題は反射衛星の存在を知られると思いのほか脆いという点だ。

反射衛星砲は多数の反射衛星を中継することで目標までの射線を確保する。これによって砲の死角をなくした兵器だが、砲撃の屈曲に欠かせない反射衛星を任意で移動させることができず、発見されたあとはその動作で砲撃のタイミングと射角を知られてしまうことが露呈した。

開発段階でその可能性は予期されていたが、反射衛星砲の自体が地球への移住開始からしばらくは、移民船団の護衛、艦隊を運用するために必要な各種施設の準備などの理由から艦隊の運用が不完全になるであろう時期を凌ぐために用意された装備だ。

アイデア自体は以前から存在し、いくつかの試作品を経たうえで完成された品ではあったが、詰めの甘い点があることは認めなければならぬ。

そういう意味ではヤマトは実にいいデータを残してくれたと言えるよう。運用上の問題のほとんどは、あの戦いから洗い出せたのだから。

おかげで本来は反射衛星によって生み出されたテリトリーの内側に標的を閉じ込めた状態でこそ最大の威力を発揮するそれに、こうして艦隊戦で運用可能な性能を付け焼刃ではあるが与えることができ

た。

そう、『付け焼刃』だが。伐根的な解決を施したものを開発・製造するには、さすがに時間が足りなかった。

「はっ。反射衛星砲搭載艦は全艦出撃を完了しております。改良型反射衛星も所定の位置に移動完了しました」

改良点は主に二つ。

艦載化による砲自体の運用性向上と、反射衛星に機動力の追加である。

艦載による出力低下を避けるため、機関出力がデウスローを除けばガミラス最高のドメラーズ級戦艦に増幅装置と合わせて搭載し、それが計八隻。冥王星を除いた太陽系の惑星に配備するために準備されていた砲を、そのまま転用している。

反射衛星はヤマトがカイパーベルト以降たびたび見せていたアステロイド・リング戦法を模倣する形で移動能力を得た。

これは反射衛星本来の機能を活かし、ヤマトが次元断層で見せつけた反射機能によるカウンター戦術も模倣する目的も含まれている。

——伊達に最強の敵と見込んだヤマトの研究を重ねてきたわけではない。

ヤマトがガミラスの技術や戦術を取り込んで自身を強化したように、こちらにもまたヤマトの戦術と発想を取り込んで強化を果たしている。

急ごしらえゆえ衛星の制御プログラムに関して言えば、ヤマトのアステロイド・リング戦法に劣っているのが難点であったのだが、さきほどの通信の際、こちらの防衛戦略をヤマトにしか通用しないであろう過去の戦いを隠語として話したところ、チーフオペレーターと名乗ったホシノ・ルリから、

「……三〇分頂けませんか？ 冥王星での戦いは私たちにとっても刺激的でしたので、『独自に手を加えた逸品』があります。時間を頂ければ、ガミラスの防衛戦略を強化することができるとでしょう」

と自信に満ち溢れた不敵な面構えと共に宣言された。

そして宣言どおり、きっかり三〇分後にはそのままインストールし

て使える『ガミラスのコンピュータ言語で構築された制御プログラム』が暗号データで届けられてしまった。

冥王星に配備していた反射衛星砲の制御プログラムを完全に解析してしまっただばかりか、独自に発展させてしまうとは……誠に恐れ入った。彼女は正真正銘の天才だ。

そして確信した。

彼女はヤマト登場以前からガミラスに対して幾度も電子戦で食らいついてきた三叉の艦首を持つ白亜の戦艦——そのチーフオペレーターその人だったのだろうと。

そしてヤマト乗艦以降もガミラスの技術——それもコンピュータ関連を必死になって解析して、万が一ガミラス本星での決戦が余儀なくされた場合はその成果をもってガミラスを電子戦にて無力化することすら視野に入れていたのだろう。

——ヤマトがいままであのクラッキング戦法を披露してこなかったのは、この事実を隠蔽するため。

その隠蔽に一役買っていたのが——トランジッション波動砲だ。改めて、ヤマトの強かさを痛感させられた瞬間である。

本当に、和解できてよかったと心底思わされた。

仮にクラッキングによる無力化とトランジッション波動砲の連携攻撃を凌げたとしても、ガミラスが被る被害は当初の想定を遥かに上回っていたであろう。

それは考えうる限り、最強の組み合わせだ。

「よし。前衛艦隊が交戦を開始すると同時に、新反射衛星砲も砲撃開始せよ」

「はっ！」

デスラーの命に従って、艦隊最後尾に位置するドメラーズ級がエネルギーチャージを始める。

しばらく艦隊はじりじりと距離を測りながら睨み合う。

双方、有効射程に大きな差はない。

じりじりと距離が詰まる。本当に少しづつ、少しでも優位なポジションニングを得ようとするかのように。

……。
……。

——やがて前衛艦隊同士が交戦距離に突入、砲火を交え始めた。波動エネルギーの過剰反応に対するなんらかの回答を得られたのだろう、敵艦隊は積極的に前進、グラビティブラストによる干渉による打撃力の低下を補おうとしている。

打撃力が増すのはこちらも同じと言えば同じなのだが、その分損耗率も増えていく。

艦隊が消耗すればするほど、背後に控えている要塞への火力が足りなくなる。消耗を抑えつつ戦いたいところだ。

「新反射衛星砲、砲撃開始！ 反射衛星のカウンタープログラムも起動しろ！」

デスラーの命令はすぐに部隊すべてに伝達され、猛反撃を開始する。

後方に控えていた反射衛星砲搭載ドメラーズ級は、その大出力を活かして冥王星基地の砲よりも早い間隔で強力なエネルギービームを放射する。

そのエネルギービームは艦隊の外側、一見明後日の方向に向けて撃ったとしか思えない軌道で飛び去った、と見せかけて艦隊の外周や内側に配備された反射衛星が数度に渡って屈曲、標的となった敵艦に突き刺さる。

ヤマトのディストーションフィールドと装甲の組み合わせをほぼ一撃で撃ち抜いた砲撃。それ以下の防御力しか持たない艦艇が耐えられるはずもない。

あっさりと射抜かれて宇宙の塵と消えた。

艦隊運動と密に連携を取った反射衛星のコントロールは見事の一言に尽きる。

不意な回避行動の余裕を持たせた砲撃コントロールではあるが、反射されるエネルギービームの軌道は艦隊の影を上手く利用して絶妙に隠され、敵の回避行動の遅れを招く。

後方の搭載艦に攻撃を届かせるためには前衛艦隊を突破しなければ

ばならないので、そう簡単には砲撃を止めることもできない。

砲撃反射のため艦隊の内側入り込んだ反射衛星はカウンター戦法にも使われる。ヤマトが次元断層で見せた、あの戦術。

反射衛星を最前線にまでは移動させていないが、こういった大規模戦には付きものの『流れ弾』を反射、撃ち返すことでこちらの手数を疑似的に増やすことができる。

反射衛星はその流れ弾に反応して巧みな制御で撃ち返し、敵艦に損害を与えていく。

暗黒星団帝国がこの手品に気づいたかどうかは定かではないが、想定外の攻撃に足並みにがわずかに乱れた。

付け入るならいまだ。

速やかに前線支援のために航空戦力を投入。敵も同じ目的で繰り出していたであろう航空戦力が入り乱れる大空中戦も勃発。

ガミラス・イスカンドル星域は近代では最も激しいであろう戦いの喧騒を響かせる。

一つ、また一つと閃光がきらめくたびに、多くの命が散っていく。美しくも残酷な、戦場という名の喧騒を。

その頃ヤマトと戦闘空母と第一空母は予定よりも六時間以上滞在を延長して、ようやく予定していた整備作業を終えて自動兵器工場を発進した。

「ふむふむ。ガミラス艦隊と暗黒星団帝国艦隊はそこまで派手に混戦してないみたいだね。航空戦力は……入り乱れても無理ないか。でも、そっちはガンダムを投入すれば支援できそうだね」

決戦だから、という理由で雪を介助に引き連れて艦長職に復帰したユリカは、メインパネルに移された戦況を一瞥しながら頷く。

「ええ、この様子なら想定どおりの打撃を与えられそうですね。問題は、急増品だけに予定どおりの効果を発揮できるかどうか……か」

ユリカの艦長復帰に伴い戦闘指揮席に追いやられた進が『新装備』

のステータスマニターを何度もチェックしながら不安を口にする。

「心配するな進。真田が手掛けたんだ、急造品だろうと一発だけなら問題なく機能するに決まっている」

負傷したゴートに代わって砲術補佐席に着いた守は、年長者として進に声をかけている。

その言葉には長年の親友に対する絶対的な信頼が含まれていた。

——しかし『新装備』の制作に協力したはずのウリバタケの存在は奇麗さっぱり抜け落ちているようす。

だがそのことを指摘する人物は……残念ながら第一艦橋にはいなかった。

それはもちろん、日頃の行いの結果であろう。

「ワープ準備、すべて完了！ 一五分後に暗黒星団帝国艦隊左側面、三五〇〇キロの地点にワープアウト予定！」

やはり大介の代わりに操舵席に着いたハリが粛々とワープ準備を進める。

最初は体格や体力的な問題も加味して進が操舵席に着くことも検討されたのだが……。

「僕にやらせてください。島さんの代わりはきちんと務めてみせませう」

と強く訴えたので、七色星団から引き続きハリが操舵を担当することとなった。

ガミラスとの戦いが始まって一年と三カ月。

……苦難の繰り返しの中で、少年は立派な大人へと成長し続けていたのだと、改めて示してくれた。

——その後ろでハリの成長を喜んで薄っすら涙ぐんでいるルリについては——触ると怖そうという理由で誰も触れなかったという。

それから一五分後。ヤマトは戦闘空母と第一空母の二隻と一旦離れ、単独でサンザー恒星系に向けてのワープを実行した。

ワープに必要な座標データは提供されているし、八光年程度の距離なら曳航の必要はない。

ワープ直後に波動砲でも使うというのなら節約のために曳航して

もらうところなのだが、今作戦の要となる必殺兵器を搭載しているのは独立した動力を搭載したナデシコユニット、ヤマトの消耗はほとんど関係ないのだ。

青白い閃光と共に、最も警戒されていた宇宙戦艦ヤマトが艦隊の左側面三五〇〇キロという至近距離に出現した。

惑星上での戦闘ならいざ知らず、宇宙空間での戦い——それも恒星間航行を容易く実現する艦艇での戦闘では至近距離と言って差し支えない距離。

ヤマトがそんな至近距離に出現すると、ガミラスの前衛艦隊は追撃を避けるための牽制射撃を行いながら全速力で後方へと下がっていく。

その動きに不穏なものを感じた暗黒星団帝国であったが、突如として出現したヤマトにも警戒を払わなければならず、追撃が一步遅れる。

……それが致命傷だった。

「……さあ、ナデシコの遺産の出番よ！」

ユリカの指示でナデシコユニットの先端が外側に移動するように開き、中から急造の発射装置が顔を覗かせた。

急増のためこの一発限りで壊れてしまう切り札。それで眼前の大艦隊に致命打を与えなければ、この戦いを早期に終わらせることはできないだろう。

「エネルギー充填一二〇パーセント。目標空間座標、固定完了。影響圏内に友軍の姿はありません」

制御を担当するルリの報告に、ユリカはすぐに命じた。

ここで仕損じるわけにはいかない！ いまこの瞬間こそが最良のタイミング！

「相転移砲！ てええええーっ!!」

ユリカの命令に従って、進が発射装置の引き金を引く。

ナデシコユニットの先端から放たれたエネルギービームが、暗黒星団帝国の艦隊中央に向かって並んで飛び込んで、目標空間にて交差。

その瞬間、急激にホログラムシールのような輝きを持った空間が連鎖的に広がり、暗黒星団帝国の艦隊を文字どおり『消滅』に導いていく。

——そう、これこそがガミラスとの戦いにおいて地球をギリギリのところまで踏み止まらせた禁忌の力にして、ナデシコから受け継がれた最後の遺産——相転移砲の威力だった。

その光景を見てデスラーは感服の声をもらす。

「最初に聞かされたときは本当に驚いたが、決まりさえすればその威力は波動砲にも引けを取らない決戦兵器。盲点だった。旧世代の兵器と侮っていたが、それはわれらが対処法を熟知していたからこそ言えたことであつたと、改めて教えられたよ、ミスマル艦長」

第二十五話 ヤマトの戦い！ 驚異の暗黒星団帝国
!! Bパート

相転移砲。

それは相転移エンジン内部で起こっている相転移現象を意図的に外部で引き起こす、相転移エンジンの攻勢利用手段の一つだ。

相転移エンジンとはインフレーション理論をベースに考案された『真空をより低位な真空に相転移して差分となるエネルギーを取り出す半永久機関』。本来は炉心内部で安全に制御された状態で相転移現象を起こし、生み出されたエネルギーを活用することで自然界に存在している最上位のエネルギー反応——核融合反応をも上回る大出力を得ることに成功した機関だ。

相転移砲とはそれを外部で引き起こすことで攻撃に転ずるというシンプルな発想によって実用化された兵器である。

しかし肝心の相転移現象は自然には発生しえない。人為的に起こす必要がある現象であるため要件は案外難しく、隙が大きい。

たしかに起爆さえしてしまえば、瞬間物質移送器やボソンジャンプを利用した転送戦術同様、『指定された空間内部に無差別に超高エネルギーが出現する攻撃』になるため、空間転移そのものを防げる次元間障壁を張るか、ボソンジャンプなりワープなりで範囲外に即座に逃げ出してもしないかぎりは、三次元空間に存在するいかなる障壁であつても（デイストーションフィールドであつても）無視して対象を消滅に導く超兵器。

物理的な障壁である装甲など欠片も役に立たず、このような負荷に耐えられる物質はこの宇宙に存在しないだろう。

一見すれば波動砲にも匹敵する強力な武装であるのだが——致命的な弱点として、発射から起爆までの間に無視できないタイムラグが存在する、起爆させるための手順が複雑で妨害しやすいというものがある。

特にエネルギーを投射して目標ポイントで起爆させる瞬間が最も妨害しやすい。

これは照準された空間にエネルギーを集約（地球側の装置の場合はエネルギービームの交差）できなければ起爆できないという原理上の弱点のせいだ。

この性質を理解していれば、投射されたエネルギーが起爆地点に到着する前にかき消す、もしくは着弾地点でエネルギーの集約を不完全にするという妨害策があつさりと思いついてしまう。

実行するには相応の技術力が必要になるが、純粋な力技で押し込んでくる波動砲に比べれば対処しやすい。

実際ガミラスでは、各艦艇に標準装備されているワープシステムの一部である空間歪曲装置を使用して相転移砲の起爆地点の空間を歪曲することでエネルギーの集約を乱し、起爆を防いでいた。

——そう、恒星間航行を行える艦艇なら原理は多少違えど備えているワープシステム——これが最大の弱点となっているのだ。

加えて相転移砲が大量破壊兵器であり、使う場合最大の効果が得られるように使うのが常であると認識していれば、その狙いを予測することは容易い。

搭載艦艇さえ見抜いてしまえば、その動向を観察するだけでも防御の難易度はかなり低下するのだ。

波動砲同様エンジンをフル稼働させて同期、エネルギーを撃ち出すというプロセスもまた、発見を容易にしてくれる。

デスラーが、ガミラスが相転移砲を波動砲に比べて軽んじていたのは、一度存在が露見してしまえば簡単に対処できるほど脆い存在という認識があつたからだ。

またもう一つの弱点である『有効射程の短さ』がさらに扱いを軽んじさせた。

地球で使用された相転移砲は発掘したエンジンをそのまま利用した未成熟なシステムであつたことに由来している部分があつたにせよ、最大射程はガミラスのデストロイヤー艦が搭載するグラビティブラストと同程度という短さであつた。

座標固定や起爆用のエネルギービームの制御などに起因する欠点であったのだろうが、射程距離に差がないということは、発射の兆候が見られた艦艇に直接砲撃して妨害すればいいという、単純明快にして確実な妨害手段が取れるということ。

二重三重に対策できるなら、脅威度はどうしても低くなる。

対して波動砲は準備に多少の時間が掛かる、全エネルギーを使用するため発射後の回復に時間が掛かる、艦首方向にしか発砲できないという点から接近戦に弱いという弱点があるが、放出されるエネルギーの桁が相転移砲の比ではなく、射程も長大だ。

転移系攻撃ではないため十分に強固なバリアの類があれば防ぐことは理論上可能だ。

粒子ビーム兵器の一種であるため、空間歪曲作用さえ気を付けることができれば反射によって無力化することもできるだろう。

だがその桁違いの威力がその難度を上昇させている。エネルギーの集約によって突破力を強化することもできるし、相転移砲と違って破壊力の増幅も可能だ（相転移砲は範囲の拡大はできても単位面積当たりの威力は上げることができない）。

そのため生半可な防御フィールドでは防ぐことが難しい。出力で勝りやすい要塞ならまだしも、艦艇クラスではまず防御不可能だ。

さらに射程距離は惑星間弾道ミサイルの類を除いては最長であり、発射に掛かる準備時間は相転移砲と大差ないか、むしろ座標固定の演算処理に時間が掛かり、それが定まらなければ発射すらできない相転移砲よりも即応性は遥かに勝っている。

タキオンバースト波動流の速さも活かせれば、相手の探知圏外からのアウトレンジ戦法すら容易に実行できだけのポテンシャルもある。

そういった点を考慮すると、『わかってさえいけば簡単に潰せる相転移砲』よりも『わかっていてもシンプルに強い分防ぎ難い波動砲』のほうが脅威である。

ガミラスが下した結論がそれだった。

相転移砲とはガミラスにとってその程度であるから、ガミラスではその存在を確認していても自分たちが使おうと考える技術者も将官

も存在しなかった。

通用するのはその敵と遭遇した最初の一発だけ。

戦争そのものの行方を左右するとは言い難い脆弱さを持つ決戦兵器。

そして優れた科学力を誇示する一方で、時代遅れとされたモノへの関心が薄いガミラス特有の思考。

それらが重なったからこそ、ガミラスは相転移砲を使うことがなく、敵に情報の一切を与えなかった。

だからこそ、この状況下で『必殺』の威力を見せつけることができただのである。

デスラーは状況が状況なら拍手をもってユリカ達を賞賛したいとさえ思ったが、まだそれが許される状況ではない。

——後方に控えているあの巨大要塞は相転移砲の範囲外にあったため被害を受けていないのだ。

ユリカは巨大要塞よりも、単純明快な驚異である『数の暴力』を取り除くことを優先した。その判断は決して間違っていない。

第一、あの要塞を射程に収める距離まで近づいてしまえばヤマトはハチの巣にされる。

これが最大の成果なのだ。

そして相転移砲で戦局をひっくり返したヤマトの次の行動がまた、デスラーの度肝を抜いた。

「ナデシコユニットの全ミサイル一斉発射！ 撃ち漏らした敵を一隻でも多く沈めるよ!!」

大量殺戮の罪悪感に浸る余裕もなく、ユリカは罪悪感を引き剥がすように吠えた！

あまり無理するな。できるだけ大人しくしているとイネスから念を押されてはいたが、自身が招いた惨状を直視しなければならぬこの瞬間だけは——見逃してほしい。

ユリカと同じような考えを抱いたであろう第一艦橋の面々は、余計な口を挟むことなく彼女の指揮に従った。

「了解！ ヤマト、全速前進！」

ヤマトのメインノズルとサブノズルが煌々と炎を吐き出し、ヤマトは加速を開始する。

大量のミサイルを吐き出すナデシコユニットの推進装置は沈黙したままだ。相転移砲の発射ですべてのエネルギーを使い切つてしまっている。

それだけに、ユリカたちも見ることがない規模の巨大な相転移空間を出現させ、推定一二〇〇隻にも及ぶ敵艦を一気に消滅せしめる威力を見せつけた。

——おそらく二度と通用しないだろうと思うと、これが相転移砲の最後の雄姿なのかもしれない。

……まるで現実逃避するかのような考えが頭を過る。

ともかく、ヤマトはナデシコユニットから吐き出す大量のミサイルと艦首側の主砲から次々と砲火を吐き出しながら加速、ナデシコユニットは急遽追加した排出弁を開いて残存していた波動エネルギーやタキオン粒子を宇宙空間に放出、中身を空にした。

「ユニットパージ！ 同時に機関逆転急制動！ 直後に取り舵九〇度！ ガミラス艦隊に向かって全速！」

「了解！ ナデシコユニット分離！」

真田は艦内管理席からの制御でナデシコユニットをヤマトから切り離した。

すぐさまヤマトは艦首側の姿勢制御スラスタと波動砲口からの全力噴射で急減速、ナデシコユニットだけがその勢いのままに敵艦に向かって突撃していく。

まさか艦体の一部をそのまま攻撃に転用するとは思わなかったであろう巡洋艦の一隻が、哀れナデシコユニットに正面衝突されて諸共に碎けちり、宇宙を漂う塵屑となり果てた。

その間にも急減速からの回頭を終えたヤマトはオーバーブースター全開。

全力噴射で急加速しながらガミラス艦隊に向かって飛び込んでいった。

ヤマトの動きに対応できた艦艇はすぐさま主砲を撃ち放ってきたが、全力で逃げに入ったヤマトになかなか当てられず、当たってもこちらの防御は突破できなかった。

ヤマトは第三主砲と第二副砲、艦尾ミサイルと煙突ミサイルからの反撃で敵の足止めを敢行しつつガミラス艦隊の中に飛び込むことに成功。

事前に作戦を伝達されていたガミラス前衛艦隊は速やかに敵艦とヤマトの間に割って入り、ヤマトへの追撃を決して許さぬ盾となり、ガミラス航空編隊と入り乱れた大空中戦を展開している敵艦載機部隊は、突如として出現したヤマトに対処する余裕もなく、見過ごすしかなかった。

結局暗黒星団帝国は、ヤマトの電撃参戦による奇襲によって、全戦力の三分の一以上を一度に損失する大損害を被る羽目になり、完全に浮足立った状態になってしまったのである。

「——なるほど。これの準備のために参加を遅らせていたということか、ヤマト……！」

メルダーズはシート肘掛けを強く握りしめながら、怒気も露にモニターに映るヤマトの後ろ姿を睨みつける。

予想に反してヤマトを排除することに成功したのかと、少し気が緩んでしまったのが失策だった。

ガミラスの思わぬ新兵器の投入にヤマトの奇襲攻撃。

どちらも事前に予測することが難しい攻撃であったが、だからと言つてメルダーズに不手際がなかったとは言えない。

正直に言えば、ヤマトの参加は想定されていた。

なにしろ最初にわが帝国がヤマトを襲ったときの理由がタキオン波動収束砲を警戒してのこととなれば、彼らの警戒を解くことなどできない。最初からわかりきっていた。

それにあのデーダーを打ち破ったのなら、タキオン波動収束砲か波

動エネルギーを封入したミサイルを使用した可能性が高いと踏んでいる。

それくらいの火力がなければ、プレアデスの防御を突破して撃沈などではしないだろう。

バラン星の戦闘で解析した限りでは、ヤマトの重力波兵器の威力ではプレアデスの偏向フィールドを抜くには少々力不足と計算されている。

そして波動エネルギーを使用した兵器でプレアデスを破ったのなら、こちらが波動エネルギーに異様に脆いことにも気付かれているだろう。

——だとすれば、遅かれ早かれわが帝国が地球に牙を向くであろう、という結論に至ってもなんら不思議はない。

それならばガミラスと手を組んだほうが地球が生存できる可能性が高いと考えても不思議はない。感情がそれを許せば、だが。

（——肝の据わった指揮官だ）

十分な情報を持っているのなら、こちらの思惑を見抜かれても驚くに値しない。

だが思惑を見抜かれたとしても滅亡に瀕しているらしい祖国の情勢を考えれば、はつきりと戦争になると脅せばもう少し躊躇するかと考えたのだが……どうやら見縊っていたらしい。

（それとも、私が考えている以上にガミラスとの交渉が上手くいっているのか？）

それ以外には考えられない。

地球に支援したであろうイスカンダルを守ると言うのなら理解できる。だが、それだけの理由ならガミラスと共同戦線を張るような事態には発展しないだろう。

互いに『敵の敵は味方』の理論で一時共闘が関の山。この様な事前の打ち合わせがなくては実行できないような作戦は展開不能だろう。間違いない、ヤマトとガミラスは紛れもない軍事同盟を結んだのだ。

それも国家間の取り決めとして、真つ当な契約によって。

それも、メルダーズが脅しを掛けるよりも早くに。

(だとすれば、ヤマトの決断は間違っているとは言いがたい。聖総統が脅威となるタキオン波動収束砲の技術をみすみす見逃すわけがない)メルダーズは当然の義務として、これまでに判明した波動エネルギーとの過剰反応のことや、それを直接転用した兵器があることを本国に伝えている。

——無論、ヤマトの名も。

そのヤマトの祖国——地球は滅亡の淵にあるらしいこともしつかり伝えたところ、聖総統をして「貴官の任務はあくまでイスカンドルとガミラスだ。邪魔になるようなら排除しろ、そうでなければいまは捨て置き」と仰っていた。

「いまは」というのがミソだ。

ヤマトは脅威だが、地球もガミラスもわが帝国の所在を知らない。つまり、暗黒星団帝国にとって致命的な存在であるタキオン波動収束砲の砲火が、すぐに本国に襲い掛かることはありえないと判断していることだろう。

ましてや滅びの淵にある星が再興するのに何年、いや何十年かかるというのか。ガミラスの助けを借りたとしてもすぐには動けない。

それにこちらも地球の詳細な所在を知っているわけではない。ガミラスの捕虜から聞き出した情報で、マゼランの隣にある銀河系にあることしかわかっていないのだ。

だからメルダーズの言葉はまったくの嘘っぱちではなかった。

もし仮にヤマトが本当にガミラスとイスカンドルから手を引くなら、その航海の目的を果たしてイスカンドルの女王一人連れていくことくらい、目こぼししてもなんの問題もなかったのだ。

(……もつとも、いまずぐに地球をどうにかすることはできないというだけで、潜在的な脅威である地球を聖総統がいつまでも野放しにするとは思えん……。どちらにせよ、ヤマトとは矛を交える運命であったということか……)

仮にこの戦いでヤマトとガミラスがこのゴルバを含めた艦隊を下したとしても、現在わが帝国が行っている宇宙戦争が一段落するまで

の間は手出しできないだろう。

……あのガトランティスとかいう連中は手強く、油断ならない。つい最近こちらのテリトリーに無遠慮に侵入した挙句、一方的に侵略を開始したあの野蛮人の国家。

ほかの星に対して戦いを仕掛けながら戦えるほど、生易しい相手ではない。いまだって戦況は決して楽観できないほどのものだ。

なので帝国の最優先目標はガトランティスの排除。そのための資源確保だ。

戦争とは無関係にもともと予定されていた資源調達作戦に、わざわざ帝国最強のゴルバまで動員したのは、速やかに、そして確実に作戦を成功させて資源を持ち帰り、あのガトランティスの軍勢を退け、帝国の未来を安寧のものとするため。

——失敗は許されない。祖国の命運がかかっているのだ。

「……メルダース司令。さきほどの攻撃の解析結果が出ました」「うむ」、と頷いて報告を聞く。

どうやら、ヤマトが再度あの攻撃を仕掛けようとしてきても対処のしようがある様子。それは素直にありがたいと思う。が、ヤマトはあの攻撃のあと追加装備を破棄しているので二度と使わないだろう。——いや、二度通用すると考えていなかったからこそ破棄したのだ。

この装備を使った理由も検討は付いている。

タキオン波動収束砲よりも攻撃範囲が広いのもそうだが、エネルギー融合反応を気にしなくてすむからだろう。

——つくづく頭の回る連中だ。ずる賢い方向に。

戦力の激減も痛い、それ以上に士気が低下したことのほうが厄介だ。

「——やむをえん……ゴルバを前に出せ！」

こうなればこのゴルバの偉容をもって味方を鼓舞し、敵の士気を折る。

おそらくヤマトが最も得意とするのは電撃戦。それに乗っかるのは癪だが、こちらもち久戦に持ち込んでこれ以上奇策を弄されても困る。

「続いてテンタクルス発進！ ヤマトとガミラス艦隊に対して攻勢に出る！ 各艦も残された艦載機をすべて出撃させる！——ヤマトとガミラスは、ここで確実に潰すぞ！」

「お待ちせしました！ デスラー総統！」

「デスラー総統。ご命令どおり、ヤマトをお連れいたしました」

ユリカの挨拶とドメルの報告が続けざまにデウスローの艦橋に木霊する。

敵艦隊への奇襲攻撃を成功させたヤマトは、最大戦速でガミラス艦隊の合間をすり抜け、デウスローの隣までやって来ていた。

事前の打ち合わせどおりに。

「最良のタイミングで来てくれたね、ヤマトの諸君。ドメルも大任ご苦労だった。引き続きヤマトの補佐をお願いするよ」

デスラーは待ちに待った救援の到着を心より歓迎する。

戦力としては所詮戦艦一隻と極少数の人型機動兵器のみ。

だがその力は大ガミラス帝国最強と称される将軍ドメルの艦隊相手に、正面突破して逃走できるほど。

搭載機もマイナーな人型戦闘機ながら、たったの二機種だけとはいえ『大規模破壊を実現可能な戦略砲を搭載している』という変わり種がいる。しかも通常兵装も充実していて、戦略砲に頼らずとも強いという、ヤマトの縮小版のような機体だ

地球人は一騎当千の兵力に拘りでもあるのかと疑いたくなるような、常軌を逸している兵器構成にはいまでも悩まされる。

そこに合わさるは、ミスマル・ユリカ艦長の特異な性格と天才性によつて生み出される『柔軟で突飛な戦術指揮』と『そんな指揮（と人柄）にちゃんと付いていけるいろんな意味で有能なクルー』という、真つ当な軍人であれば思いつかないような組み合わせ。

あげく単独での長距離航海の途上にあつても資材さえ確保できれば艦にも搭載機にも改良を加えてしまえるぶつ飛んだ技術力。

……いかに大ガミラスと云えど、こればかりはそうそう模倣できない。

否、できるわけがない。

それほどにヤマトという艦は突飛な存在なのだ。彼らに一般常識などというものは最低限しか通用しない。嫌というほど理解させられた。

現にいまも相転移砲という過去の兵器を有効活用してみせた。

挙句拡張パーツとはいえ艦体の一部を切り離して『意図的に』突撃させる質量兵器に仕立て上げるなど……。普通、体当たりというものは命と引き換えにするもの、という発想が彼らにはないのだろうか（切り離したのは無人艦だが）。

「しかしミスマル艦長、本当に指揮を執って大丈夫なのか？ 素直に古代艦長代理かドメルに任せてたほうがいいのではないか？」

スターシアにコスモリバーシステムに関するあれこれは教えて貰っている。

ユリカに万が一のことがあつては、これから大きな影響を及ぼす。

ガミラスもイスカンダルも地球も救われずに終わる可能性が極めて高く、あまりにもハイリスクすぎる。

なので本当ならヤマト共々後方に下がっていて欲しいのだが……。『ご心配ありがとうございます！ でも、この総力戦にあつておちおち寝てもらえません！ 危なくなったら戻りますから、やらせてください』

言つても聞いてくれない。

だれか、彼女を素直に従わせる方法を教授してほしい。

そうだ、彼女の夫とやらに頼めば——いや、この押し強さを考えると彼はそう、俗にいう『尻に敷かれている』状態なのだろう。無駄か。

デスラーはこれ以上の説得を諦めた。

視覚補助用のバイザーに遮られ、その表情のすべてを知ることにはできないが、口元に浮かぶ微笑は彼女の強い意志を表しているように、

不敵なものだった。

——どうやら、こういった女性相手に口では勝てないらしい。

諦めたデスラーの答えは簡潔だった。というか簡潔にしかならなかった。

「……そうか、くれぐれも無茶はしないように頼むよ」

適当なところで切り上げて艦隊指揮に注意を向ける。

予定では、ヤマトはこのままデウスーラの隣に位置したまま共に前線に向けての援護射撃を続ける予定だ。

あとは新反射衛星砲の威力と合わせて敵艦隊を翻弄し、隙を見てあの要塞を——。

「デスラー総統。敵機動要塞が搭載艇を放出しながら前進を開始しています」

「む……」

どうやらヤマトの相轉移砲の一撃は想像以上に相手の士気に影響を与えたいらしい。

だからこそ要塞自ら前線に飛び出して指揮を執るころで士気を上げ、同時にその威力を持ってこちらを一気に瓦解させるつもりなのだろう。

その能力が分からぬ以上、迂闊に兵力を向けるわけにはいかないが、本星を射程に捉えられるのは避けたい。

となれば……。

「デスラー総統。リスクは大きいですけど、立ち向かいますよ。このままガミラス本星やイスカンドルを射程に捉えられては、人質に取られるかもしれません。それにあれほどの要塞を星の近くで破壊した場合、どれほどの余波が生じるか……。できるだけ遠くで戦って、叩き潰しましょう」

ユリカも同じ結論に至ったようだ。やむをえないか……。

「——前進開始！ 敵要塞を迎え撃つ！——ヤマトにはデウスーラと共にあの要塞への攻撃を担当して貰う！」

「了解です！ 主砲発射準備！ 目標前方の敵艦隊！ 要塞への突入コースを確保します！」

ユリカも快く応じて砲撃準備を整える。

「デウスーラ、砲撃準備に入れ！」

副官たるタランもデウスーラの武装を開放して攻撃準備を整えさせた。

デウスーラは全身に格納されていた大量の艦砲を艦体の各所から出現させ、前方の敵艦隊に向けて個々に指向させる。

最新鋭艦という事もあり、ドメラーズ級に採用された無砲身四九センチ四連装砲に匹敵する口径である有砲身四八センチ三連装砲を六基、同三三センチ三連装砲を六基、同口径の無砲身砲六基、そこに左右に広がった翼部や後部、艦底に多数のミサイル発射管を装備している。

総砲門数はガミラス最高を誇る、まさに武力の塊。

その総火力はヤマトをも凌ぐだろう（ただし主砲の単発火力はヤマトが凌駕する。これは重力衝撃波砲がオーソドックスな重力波砲を凌ぐ火力を有するためだ）。

砲の配置は艦の左右対称となっていて、戦闘空母の隠蔽式砲戦甲板同様艦隊の中心線に沿わず、並列かつ背負い式に配されるという一風変わった方式を採用している。

艦の形状もあり、一方向に向けてすべての火力を集中することができないう欠点はあるが、多数の火器を個別に指向することで多方向の敵に対して攻撃を行えるほうが重要とされてこの方式が採用された。

もとより艦隊旗艦。後方からの援護射撃であればこれで十分なのだ。

その火力を存分に発揮する機会に恵まれてしまったデウスーラであるが、その傍らには宇宙戦艦ヤマトの姿がある。

——ヤマトとデウスーラが組めば、勝てぬ相手などない。

デウスーラはヤマトと歩調を合わせながら前進し、射程内に捉えた敵艦に向けてその火力を存分に叩き付け始めるのであった。

猛烈な反動と共にヤマトの主砲から重力衝撃波が撃ち出される。

砲身がキックバックして砲室内の尾栓が後退、冷却装置から少量の白い煙も吐き出された。

ヤマトが誇る四六センチ重力衝撃波砲の火線は、バラン星や七色星団のときと同じように敵艦を食い破って撃沈させた。

ヤマトは修理を終えた安定翼を展開、旋回性能低下を対価に艦の安定性を増し、より精密な砲撃を行っている。

一撃必殺の火力であっても当たらなければ意味がない。

幸いなことに僚艦を潤沢に得られたこの場においては、回避行動よりも命中率重視の攻撃姿勢を貫いたほうがヤマトの強みが生きる。

隣で同じように重力波を次々と撃ち出しているデウスーラも、ガミラス最強と称されるだけのことはあると、進は思った。

ヤマトのように一撃必殺とまではいかないようだが、ドメラーズ級にも劣らぬ火力で敵艦隊に打撃を与えていく。砲門数がヤマトの数倍というだけあり、手数に物言わせた攻撃の激しさたるや。

総統座乗艦というだけあって、相当気合を入れて設計・開発したのだらうということが容易に伺えた。

頼もしい僚艦である。

ヤマトとは別経路で艦隊と合流した戦闘空母も艦載機を放出。戦闘空母は砲戦甲板を展開してヤマトとデウスーラに合流して砲撃戦に参加してくれた。

ヤマト、デウスーラ、戦闘空母は大量のデストロイヤー艦やその派生のミサイル駆逐艦や巡洋艦、指揮戦艦級やドメラーズ級と混じって重力波（重力衝撃波）とミサイルを次々と発射、敵艦隊に対して打撃を与えつつ要塞に向かって突き進む。

ヤマトとデウスーラに同行する艦隊の殆どがガミラスのシンボルカラーの緑ではなく、高貴な色とされる蒼で塗られている。

親衛隊という総統直属の部隊らしく、独自に改良が施された艦ももちろん、乗員の練度も桁外れに高かった。

距離が詰まってきた敵艦隊も負けじと猛反撃。大量のビームとミサイルが撃ち込まれてくる。

ヤマトはデウスーラの前面に飛び出して、その膨大な数の対空火器

を駆使して自身とデウスーラに向かって来る大量のミサイルを次々と撃ち落としていく。

重要度においてはデウスーラとヤマトに差はない——どころか、むしろヤマトのほうが重要とさえ言えるのだが、デウスーラは対空火器が乏しく随伴艦だよりの性能。

対してヤマトは対空砲の数が非常に多く弾幕が厚い。こういったときの迎撃役としては非常に優秀なのだ。

おまけにデウスーラは先述のとおり艦の中央にある武器がデスラー砲だけなので、ヤマトが眼前にあっても砲撃の邪魔にならない。

——この二艦、出会い方が違えば全面对決待ったなしだったはずなのに共闘すると思いのほか相性がいい。

互いの長所を上手く組み合わせることができれば、たつたに隻で膠着した戦局さえも動かせるだろう。

今回は出番がないだろうが、ヤマトがこうして正面に陣取ることデスラー砲の発射兆候すらある程度隠蔽できてしまうであろうと考えると、砲門前のヤマトは生きた心地がしないが、それはそれで考慮する価値のある戦術かもしれない。

パルスブラストもミサイルも出し惜しみせず吐き出しながらデウスーラを護衛、主砲と副砲で前方の敵艦を火達磨にしながら、ヤマトはデウスーラをエスコートしながら敵艦隊に向けて進撃を続けた。

一方、ヤマトから発進したコスモタイガー隊は防衛艦隊、そして別経路で合流した第一空母が吐き出したガミラス航空隊と協力して、防空戦に従事していた。

限られた時間では、七色星団の戦いで大きく損傷したアルストロメリアを完全には修復できなかった。

応急修理では無理ができないため専らガミラスの戦闘機を上回る火力と、その場に停滞可能な人型の特性を生かし、一步引いた位置からの火力支援が役割となった。

——例外は例によってガンダム四機だけである。

一時的にガミラス航空隊の支援に回されたガンダムは、まさに獅子

奮迅の大活躍を見せつけた。

ガミラスの航空戦力と敵航空隊との戦いの状況は、ガミラスがやや劣勢といった具合であった。

運動性や機動力は大差ないまでも、攻撃性能で勝る敵に対してやや慎重になつているのが原因だった。

しかし数の優位と地の利を生かした戦術を駆使することで徐々に巻き返しを図っている。

……そこに到着したのは、ガミラスをも驚かせた人型機動兵器——ガンダム。

「行くぜ野郎ども！ 手当たり次第にやっちまえ！」

エックスディバイダーのリョーコが威勢もよく檄を飛ばす。

砲身を破損したことでサテライトキャノンを撤去されたエックスは、再びディバイダー装備に換装されていた。

もともと設計に無理があるサテライトキャノンを再装備するよりは、こちらに戻してダブルエックスを徹底して護衛したほうが有効であるという判断に基づいてのことである。

リョーコとしても使い慣れたディバイダー装備のほうが戦いやすいので願ったり叶ったり。

いまは当初の想定どおり、アルストロメリア全体の指揮を執る隊長機としてその力を振るっていた。

リョーコはディバイダーを背中にマウントした高機動モードで戦場を駆け回り、身近なイモムシ型戦闘機に向かって空いた左腕に担いだハイパーバズーカの照準を向ける。

察して回避行動を取る敵機に向けて引き金を引く。

ハイパーバズーカから煙を引いてロケット弾が発射。砲身後部の排気口からも噴煙が噴き出す。

ハイパーバズーカのロケット弾には誘導機能がある。ミサイルに比べると弱く射程も短いが、この距離でなら機能するだろう。

合わせて右手のビームマシンガンを連射。三点バーストのビームを撃ち込む。

敵機の回避行動に追従するロケット弾と三発のビーム弾が、イモム

シ型戦闘機一機を火達磨にした。

「隊長に続け!!」

勢いを得たアルストロメリアが追従する。

両腕の内臓ビームライフルに脇に抱えたレールカノン、アトミックシザース。ついでにGファルコンの武装と、火力を惜しまぬ攻勢でエックスデイバイダーが生み出した勢いに乗っかっていく。

リョーコは士気が高まった部下たちに背中を預ける気持ちでより敵陣に深く切り込む。

弾切れになったハイパーバズーカを投げ捨て、左手にデイバイダーを握らせる。高機動モードよりも機動力が全体的に低下するが防御と攻撃はこつちが優れる。

浴びせられるビームの雨をデイバイダーで受け止めながら、背中とデイバイダー両端の可変スラスターを噴射。鉄壁の防御で突撃。デイバイダーの陰からビームマシンガンの銃口だけを突き出して連射モードで射撃。

互いの距離が急速に近づく。そして交差。

リョーコは素早く機体を反転させつつハモニカ砲を展開。機体が急激な機動に軋み、激しいGが体に加わる。耐えながらすばやく射角修正。拡散放射モード。

発射。

ハモニカ砲から放たれた重力波の散弾が反転途中の敵編隊に向かって降り注ぐ。そこに完璧なタイミングでアルストロメリアたちの重力波も降り注ぐ十字砲火。

敵編隊は残さず被弾して火だるまになり、重力波に碎かれるか炎上爆発して消え去る。

「さて、こつちはなんとかかなりそうだが」

サテライト遊撃部隊は無事なのだろうか。

「おっしやー！こつち続くぜえー！」

サブロウタのGファルコンデストロイがツインビームシリンダーに右肩のビームキャノン、両肩のシオルダーランチャーにGファルコ

ンの武装を足した砲撃を放ちながら突撃する。

こちらはダブルエックスを中心としたサテライト遊撃部隊。発砲の判断は上に一任しているが、いつでも要請に応じられるように、かつ通常戦力としても強力なダブルエックスを腐らせないようにと、随伴機として用意されたエアマスターとレオパルドを護衛として本隊とは別行動中であつた。

大量の砲弾を吐き出すレオパルドの隣にはダブルエックスの姿。レオパルドが撃ち漏らした敵機を精密射撃で撃ち落としていく。

ガンダムへの搭乗時間が最長だけあつて、アキトの戦い方には危ない気がない。ダブルエックスが万能型に近い性質を有していることを鑑みても、キャリアの差が大きいなどサブロウタは思った。

対して月臣のGファルコンバーストはGファルコンとの合体で得られた機動力を最大限に活かして離れ過ぎないように周囲を飛び回り敵の動きをけん制し、乱し、レオパルドに追い立てていく。

並の宇宙戦闘機を凌駕するすさまじい機動力と敵爆撃機にも引けを取らない総火力が合わさり、火力で勝るレオパルド以上のハイペースで敵機を撃墜していく。

——案外通常戦闘最強のガンダムは、エアマスターなのかもしれない。

機首のノーズビームキャノンを撃ち放ち、一撃で敵機を蒸発させる。両翼の拡散グラビティブラストの散弾で敵機を追い立て、手傷を負わせつつバスターライフルでとどめを加える。

惚れ惚れするほど滑らかに、的確に攻撃を繋げ、軽やかな動きで敵弾を避けつつ宇宙を舞う。

さすがの技量。木星のエースの実力は、未だ健在だ。

「負けてらんねえ!!」

意気込みも露わにHUDに映りこむ敵機を狙い、レオパルドに満載された武装を開放していく。

最も遠い敵にはビームキャノン、そして二発こっぴりのホーネットミサイルで対応。

中間距離の敵機には主兵装のツインビームシリンダー。性質の異

なる左右を使い分け、圧倒的な弾幕を形成する。拡散グラビティブラストも散弾で対応させる。

比較的近い距離の敵機にはヘッドビーム砲とブレストガトリングで対応。弾を持たせるため左だけハッチを開放して撃ち放つ。

撃ち尽くした一一連ミサイルポッドは放棄。まだ使っていないかった左足のセパレートミサイルポッドを開放、発射。追尾したミサイルが眼前の敵機を粉碎する。

(やべっ!?)

敵機の接近を許した。

慌てて一番近かった左手のビームシリンダーを向けて対処——する前にダブルエックスが敵機を切り捨てた。

「だいじょうぶかー!」

「問題ねえ! サンキュー!」

体勢を立て直しつつほかの敵に意識を向け直す。

まだまだ戦いは始まったばかり。これからが本番だ。

アキトはサブロウタの窮地を救ったあと、左手にハイパービームソードを握らせたまま右手の専用バスターライフルとビームマシンガンを使用して敵機を確実に撃墜していく。

——こいつらの相手もだいじ慣れてきた。

たしかにガミラス機よりも火力は若干勝っているが、それ以外は大差ない。大きい分頑丈ではあるが、急所を狙えばそれほど苦勞もない。

それにバランス以降再調整を繰り返しているフラッシュシステムの調子もすこぶる良好。とうとうIFSとの干渉をほとんど気にせず併用できるようになり、機体の追従性が大きく向上し、より肉体の延長のような感覚で動かせるようになっていく。

ラピスのおかげだ。

なにやら自分のなかで折り合いがつかいたらしく、IFSを解禁してダブルエックスのOS全般を徹底的に再調整してくれたのだ。

オペレーターとしての実力ではルリに一步劣るとは言っても、アキトの相棒としての歴は勝る。よりアキトに適した調整を任せたら彼

女に勝る人材はいない。

おかげですこぶる良好なコンディションで戦いを挑むことができている。

アキトは直撃を避けられそうになかった敵弾を左腕にマウントしたデイフェンスプレートで受け止める。表面に弾痕が刻まれたが貫通されなければそれでいい。

ヘッドバルカンを連射。敵の鼻先を抑える。

攻撃装備としては心許ないヘッドバルカンでもけん制射には十分。敵が進路を少しずらして回避行動。そのわずかな隙を突くようにして左の拡散グラビティブラストを拡散放射モードで発砲。

調整に次ぐ調整でエネルギー効率と出力がさらに向上したダブルエックスと、専用に再調整されたGファルコンだからと実装された射撃モードだ。より制圧力が高くなる半面要求出力も消費エネルギーも増える。大出力が売りのGファルコンDX以外ではまともに機能しない。

——実際分離したら使えなくなるし。

アキトはリーダーをちらりと見て、サテライト遊撃部隊とコスモタイガー隊本体周辺の敵機がだいぶ減ったことを確認する。

となれば——。

「コスモタイガー隊各機へ！ ヤマトとデウスーラは中央突破をする！ 護衛に当たれ！」

そらきた！

進の命令に従ってコスモタイガー隊は全機進路変更。ヤマトと合流して直援に戻っていく。

(あとは、どのタイミングでサテライトキャノンを使うかか)

適用際に対する切り札と言われていても、通用させるには工夫が求められるだろう。

——ユリカと進を当てにするしかないか。

「このまま中央突破！ 要塞を目指して!!」

「ほー。」

ユリカの号令の下、ヤマトはすぐ後ろにデウスローを引き連れた状態のまま敵艦隊の真ただ中に突入する。

セオリーどおりなら艦隊旗艦であるデウスローを連れ込むのは悪手の中の悪手と言えるのだろうが、デスラーは自身が前線に赴くことにあまり抵抗を感じない人物であるし、総統自らが前線に立つことで全軍の士気を高める役割を果たしていた。

デスラーの人望が伺える。

彼が一声激励するたびに、デウスローが敵艦を沈めるたびに、全軍の士気が高まっていくのを肌を感じる。

そしてそのデウスローを直接しているのがヤマトであるという現実が、ことさらに大きく作用しているようでもあった。

やっぱりあれか、昨日の強敵は今日の戦友というのは万国共通に燃える案件なのかもしれない。

「コスモタイガー隊各機へ！ ヤマトとデウスローは中央突破をする！ 護衛に当たれ！」

進もコスモタイガー隊に改めて指示を出していた。

これでいい。コスモタイガー隊が直掩に来てくれればヤマトとデウスローに群がってきている敵航空機へ対応してもらええる。

ヤマトは使用可能なすべての武装をフル活用して前進。

前方の第一・第二主砲、第一副砲は正面の敵影に向けて休むことなく撃ち続けられ、後方の第三主砲と第二副砲も側面に回り込んだ敵艦に向けてせわしなく旋回し、その威力を示した。

パルスブラストも対空砲としてはかなり長い射程と高い火力を存分に生かすべく、前半分は収束モードで敵艦に向けて発砲、後ろ半分は拡散モードで対空防御と役割分担してとにかく撃ちまくる。

そしてデウスローへの誤射の危険が高い艦尾ミサイルを除いたすべてのミサイル発射管からありつたけのミサイルが吐き出された。

艦首ミサイルは主砲の射程外——前方の喫水以下の位置にいる敵艦に向けて、舷側ミサイルは弧を描きながらやはり主砲の射程外にある喫水より下の位置にいる敵に向けて、煙突ミサイルは主砲と副砲の

補助としてヤマト前方の扇状の範囲に位置する敵艦にそれぞれ使われた。

デウスーラの火力も借りて怒涛の勢いで進撃するヤマトとデウスーラ。

だが敵艦隊も一步も退く姿勢を見せない。ありつただけの火力をもつて応戦。ヤマトとデウスーラ、同行する戦闘空母や親衛隊の各艦に大量のミサイルとビームが降り注ぐ。

各艦、徐々に被弾が増えていく。

接近したことで、グラビティブラストによる干渉によるビームの湾曲の影響圏外からの砲撃を逸らせなくなったのだ。

そして降り注ぐ大量のミサイル攻撃。ヤマトから放たれる圧巻の対空砲でも対処できないほどの膨大な数のミサイル。

たまらずデウスーラから放たれる大量のミサイルが迎撃に回された。翼部に二四門、後部に一四門、艦底に一三門装備されたミサイル発射管から次々とミサイルを吐き出す。

ヤマトと互いに足りない部分を補い合いつつ熾烈な攻防を続ける。艦体が大きい分ヤマトよりも被弾が多いのだが、ヤマトにも引けを取らない重装甲と強固なディストーションフィールドによってこの猛攻を耐え凌ぐデウスーラ。

その傍らに控える戦闘空母と親衛隊の艦艇が総統をやらせまいとありつただけの火力を動員して敵に立ち向かう。

ひとときわ激しい戦の喧騒を奏でつつ、ヤマトとデウスーラは着々と敵要塞に近づいていった。

ズシンツ、と大きな衝撃音を伴って、ヤマト第一艦橋のすぐ下に敵弾が命中した。

表面と装甲内に多重展開されたディストーションフィールドのおかげで、宇宙戦艦であつても比較的装甲が薄く耐久力が低いことの多い艦橋としては驚異的な耐弾性能をもって破壊を免れた。

だが内部メカの耐衝撃性能を超える衝撃に内部破壊が起こる。衝撃で破壊された回路がショートを引き起こし、操舵席のコンソールの一部が小さな火と煙を噴き出して爆ぜた。

「うっ!!」

飛び散った破片が右腕に食い込んでハリが苦悶の声を上げる。

「ハーリー君!!」

(ユリカとルリのフォローのために)主電探士席に就いていた雪が、傍らに置いていた医療キットを手に駆け寄り右手の傷を確認する。

「診せて、手当てするから!」

すぐに肘掛けのスイッチを操作して座席を下げさせてから右に回して、負傷した右腕に手早く応急処置を施す。

「……これでよし。応急処置だからすぐに医務室で手当てして貰ったほうがいいわ」

傷口から目立つ大きめの破片は引き抜いたが、細かい破片が残っているかもしれない。すぐにも医務室に連れて行って検査、破片があるような手術も必要だが……。

「進、ハーリー君と変わって操舵席に……」

「……最後までやらせてください!」

ハリの身を案じたユリカの言葉を遮り、ハリは再び操縦桿を握りしめた。

怪我の痛みを歯を食いしばって堪え、彼は吠えた。

「これは僕が請け負った仕事です! 島さんの代わりは最後まで僕が果たします!」

「でも——」

「僕だってヤマトの男です!!」

なおも食い下がったユリカを黙らせた一言だった。

「——わかった。なら、ハーリー君に任せた……!」

ハリの心意気を受け取ったユリカはこのまま最後まで(少なくとも彼が限界を迎えるまで)任せることにしたらしい。

「——その歳でその心意気。さすがは私も見込んだヤマトのクルー。立派だ」

予備操舵席に座るドメルもハリの姿勢に感服した様子だった。

度重なる被弾による被害は機関室にも及んでいた。

ヤマトの重装甲と多重展開される強固なフィールドに守られ、機関

室に直撃した敵弾はない。

だが操舵席が損傷したように、内部への衝撃まで完全に防いでいるわけではないのだ。

「くそっ！　また出力低下だ！」

太助は機関制御室のコンソールを叩いて何度もプログラムチェックを繰り返す。

出航以来改修を繰り返してきたエンジンなので冥王星で激戦を繰り広げたことに比べると信頼性も安定性も増しているのだが、それでもこの気難しいのだ、この大出力複合エンジンは。

自動工場プラントに滞在した一四時間も使って整備はしたが、七色星団での激戦のダメージがまだ残っている。

太助は数度のプログラムチェックの末、バグらしいバグは発見できないことから出力低下の原因はエンジン本体の機械的な部分にあると判断した。

「山崎さん！　そっちはどうなってますか!？」

コミュニケーションに向かって声を張り上げると、「もう少しだ！」と怒鳴り声が返ってくる。

直後、不安定だったエンジンが安定を取り戻し始めた。

波動エンジンのフライホイールの下側にあるメンテナンスハッチから山崎を始めとした数人の機関士が油汚れで真っ黒になりながら這い出てくる。

「いいぞおまえら！　だいぶ腕を上げてきたじゃないか！」

全身油汚れに塗れて右手のスパナを振り上げる山崎に、部下たちも各々の工具を振りかざして応えるのであった。

メルダースは持てる火力のすべてを吐き出して進撃してくるヤマトとデウスローラの姿をモニターに認め、眉を顰める。

（よもやここまでこの戦艦能力を有していたとは……宇宙戦艦ヤマト、なんという性能。そしてガミラスの旗艦もこれほどとは……少々、甘

く見ていたのか?)

正直誤算だった。だがようやく納得できた。

ガミラス相手に単独で抗い続けた実力は、決してタキオン波動収束砲に依存しただけのものではなかったのだ。

クルーの練度、艦の性能。すべてが高次元にまとめ上げられたまさに一騎当千の存在。

そこに絶対に祖国を救わんとする強い意志が加わることで、常識では測り切れない絶大な威力を発揮するというわけか!

そのヤマトにまったく見劣りしないガミラス旗艦の力が重なると、まともに戦っては手の付けようがない。

どうやら、ゴルバを投入は正しかったようだ。

「……正直無人機とは言え気が進まぬのだが、致し方あるまい……テナクルスを差し向けてヤマトとガミラス旗艦の動きを封じ目暗ましをさせろ!——ゴルバの主砲を使う!」

あちこちに被弾して傷を負い、小さな煙の尾を引きながらも要塞への接近を続けるヤマトとデウスーラ。

合流したコスモタイガー隊の援護を受けながらも敵艦隊中央を猛進していくのだが……。

「第二主砲被弾!」

「第五対空砲大破!」

「右舷展望室損傷!」

第一艦橋には次々と被害報告が飛び込んでくる。

フィールドそのものの消失は免れているが、負荷の蓄積と主砲の乱用による出力低下の影響で強度が下がっている。徐々に貫通弾が発生するようになり、装甲の薄い部分や対空火器の一部が破壊され始めていた。

「フィールドジェネレーターの負荷、さらに増大。このままではあと一〇分でフィールドの展開自体が不可能になります!」

守の報告にユリカの表情も曇る。……旗色が悪くなってきた。

「敵巨大要塞への距離、あと五〇万キロ。要塞の解析作業を始めます」
そろそろ頃合いとみた第三艦橋のルリが要塞の解析作業の開始を
宣言。

ここまで距離が近づけばかなりの精度で解析作業が行えるだろう。
あとは彼女たちの手腕次第だ。

「ミスマル艦長、あの要塞から出現した小型艇……油断できません」
ドメルの率直な感想を受け、ユリカは真田に意見を求めてみた。

「私も同感です。まるで全身武器の塊のようだ……おそらく人が乗る
スペースも使って武器を搭載した無人機でしょう」

真田がメインパネルに映した搭載艇の映像を交えて見解を語る。

扇状の本体に先端から突き出した四本の砲身はガトリングのよう。
全体を見るとまるでイチョウの葉っぱを連想させるような姿だ。

例によって生物的な意匠が目立ち、駆逐艦クラスの大きさを誇る巨
漢。

見たまんまの重武装っぷりは伊達ではなく、その火力はワンサイズ
上の巡洋艦にも引けを取らない。

そして、無人機だからかなりすばしっこい。

「副砲とパルスブラスト、両舷ミサイルはあの攻撃艇を優先して狙え
！ ヤマトとデウスーラに近づけさせるな！ 主砲と艦首ミサイル
はほかの艦を狙うんだ！」

進はすぐに攻撃艇に対して小回りの利く副砲とパルスブラスト、そ
して一度に放出可能なミサイルの数が多い両舷ミサイルでの迎撃を
指示している。

あの機動力と接近戦を挑もうとする攻撃パターンを考えると、主砲
では過剰火力なうえ小回りが利かない。

副砲とは元来、こういった用途で使うために搭載された武器だ。
……時代の流れで不要な存在となり、ヤマトが登場するまで明確に復
活していなかった存在ではあるが。

攻撃艇の執拗な攻撃に晒され、ヤマトとデウスーラが受ける被害が
さらに増える。

各所からの被害報告の数がさらに増え、装甲に刻まれる傷も加速的に増えていく。

装甲表面の塗装も兼ねた防御コートはビームが被弾するたびに放射材が生み出す反射フィールドで敵弾の威力を削ぐが、耐久限度を超えた負荷に破壊され、煙となって消えていく。

完全に破壊されずとも傷ついた防御コートは白化し、徐々に防御が薄く、もろくなつていった。

ますます激しさを増す攻撃艇の猛攻。

だがユリカはそれ以外の艦艇が徐々にヤマトから距離を取りつつあることに気付いた。これは――。

「艦長、敵艦隊の動きが妙です。まるで要塞とヤマトの間から離れようとしているようにも思えます」

「私も古代艦長代理と同意見です。おそらく、あの要塞の大砲の類で狙っているのでしょうか」

「艦長、どうする？ 波動砲やモード・ゲキガンフレアでの相殺はリスクが高いよ？」

進とドメルとジюнに言われ、ユリカは「警戒して。動きがあつたら全速で逃げます」と答えながらデスラーにも警告を出した。

艦隊の動きについてはやはり気付いていたようで、デスラーからも「いつでも回避行動に移れるように」と念を押された。

――ここからが、本番。

あの要塞を攻略できるかが、勝利の分かれ目だ。

迷いを振り切り、ついにガミラスと肩を並べて暗黒星団帝国と対峙したヤマト。

相転移砲の一撃により戦局を優位に持ち込んだヤマトではあつたが、その眼前には機動要塞――ゴルバの偉容が佇む。

負けるなヤマト、君が最後の希望なのだ！

地球とガミラスとイスカandal。

三つの星の運命を背負ったヤマトの戦いは――終局を迎えつつあつた。

人類最後の日まで、
あと二四二日！

第二十五話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十六話 決戦！ 機動要塞ゴルバ！！

いま、決着のとき。

第二十六話 決戦！ 機動要塞ゴルバ!! Aパート

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

第二十六話 決戦！ 機動要塞ゴルバ!!

飛び交う閃光。

飛び交う物体。

重力波、粒子ビーム、ミサイル、戦闘機、人型。

イスカンドル・ガミラス宙域は激しい喧騒に包まれている。

その喧騒の中を、宇宙戦艦ヤマトとデウスーラが暗黒星団帝国の機動要塞目掛けて進撃を続けていた。

ヤマトもデウスーラも激しい砲火に傷つきながら、要塞の動きをつぶさに観察し警戒も露わに、だが大胆に真正面から相對するように進。

だがヤマトもデウスーラも要塞に対する決定的と呼べる攻略法を見いだせてはいない。

対要塞攻略の要として考えていた波動砲が封じられたままだからだ。あの要塞に対して決定的な破壊力を秘めた装備は、ツインサテライトキャノンのみが安全を確保したまま使えると目されている。

しかしそれはあの要塞がツインサテライトキャノンすら弾き返す防御フィールド出力を持っていない、またはそれを突破して砲撃を届かせることが前提の、薄氷の上を渡るような危うい賭けでもあった。

ユリカはメインパネルに拡大投影されている奇妙な形状の機動要塞をバイザー越しに睨みながら、どうやってツインサテライトキャノンを届かせるか思索していた。

要塞は不気味なほど沈黙を保っている。

唯一確認された行動は、いまヤマトとデウスーラに群がってきている無人らしい攻撃艇を放出したことだけだ。

……だがこの行動は、おそらく要塞からの直接攻撃の前触れだと睨んでいる。

要塞から直接制御されているであろう攻撃艇は、ヤマトとデウスーラの進路を巧みに阻み船速を鈍らせていた。

周りの敵艦が距離を取りつつある。要塞からの直接攻撃が近い。

だがユリカはますますに進路変更をしようとは考えていなかった。

ここでヤマトの進路を無理に変更することはできる。だがそれに合わせて敵が照準を修正するのは必然。

——確実に避けるためにもギリギリまで粘る。あの規模の要塞だ、機敏に動けるはずがない。ましてや敵が目論んでいるのはこの攻撃艇ごとヤマトとデウスーラを葬り去ること。

そんな攻撃ともなれば、ツインサテライトキャノンや波動砲のような広範囲を吹き飛ばすエネルギー砲か、もしくは超大型のミサイルか。可能性が高いのは前者だ。後者なら艦隊がもつとギリギリまでヤマトとデウスーラをくぎ付けにしようとするはずだ。

波動砲規模の砲撃ともなれば数度程度の微調整ならまだしも、発射直前に大きく進路変更されたら追従できないはず。だからこそ確実に期すために足止めをしているのだ。

だがヤマトとデウスーラほど無茶の利かない親衛隊は先に退避行動に移らせた。敵の狙いはあくまでヤマトとデウスーラ。親衛隊の撃ち漏らしは気にしないだろう。

現にヤマトとデウスーラを見捨てるかのように退避行動を開始した艦への攻撃はまばらだ。あわよくば、程度には考えているようだがヤマトとデウスーラだけを確実に足止めせんと、包囲網を狭めてくる。

ヤマトとデウスーラの回避行動が成功するかどうかは、攻撃の予兆を見逃してしまわないかにかかっている。

これはECIをフル稼働させていままも要塞を解析しているルリたちオペレーターの手腕次第だろう。

彼女らが要塞の動きを見落としてしまえば、避けられない。

デウスーラでも要塞の解析作業は進めているだろうが、オペレーターの練度と解析能力はヤマトのほうが優れている節がある。

——被弾の衝撃で艦が揺れる。

シートから振り落とされないように締めたベルトが腹部に浅く食い込む。

——まだか。まだ撃たないのか。

緊張で喉が渇いてひりつく。汗が流れる。

きつといまこの瞬間も改装されたコスモレーダーが赤い光の往復運動をせわしなく行い、収集した情報をルリたちが目を皿のようにして捌いているに違いない。

……………

緊張を割くように、ついに待ち望んだ報告が飛び込んできた。

「艦長！ あの要塞のエネルギー反応がどんどん上昇しています！」

「詳細を！」

第三艦橋のルリからすぐに詳細情報が送られてきた。

要塞の巨大なハッチを中心に極度にエネルギーが集約されていく。その数値は、エネルギーの上昇値は——波動砲にも匹敵するレベルだ！

エネルギー反応が生じていた要塞の胴体部分にある巨大なハッチが開き、中からまるで土管を彷彿とさせるような太く短い砲身が顔を覗かせる。

要塞が砲撃準備に入った！

「両舷全速！ 反転上昇！ コスモタイガー隊にも離脱を指示！ 格納庫のジャマーをカット！ ジャンプで退避させて！ デウスーラと戦闘空母に打電、我に続け！ 後方の防衛艦隊も敵艦の砲口の軸線から退避するように勧告！」

すぐにユリカは回避行動を指示した。

「——攻撃艇が進路を塞いできます！」

ハリが悲鳴じみた声を上げるが、ユリカは意に介さない。

「四の五の言わずに突っ込みなさい！ 強行突破あるのみ!!」

「了解!!——く……っ！」

意を決したユリカの指示に従い、ハリはスロットルレバーを押し込み、操縦桿を力の限り引き上げる。

バルバスバウ根元のスラストターが、メインノズルが、最大出力で噴

射を開始。ヤマトの艦首が持ち上がり、加速を開始する。

……ハリが言いたいことはわかっている。

あの攻撃艇の火力は高い。被弾覚悟で突っ込めばその火力が容赦なくヤマトに降り注ぐ。限界寸前のフィールドが決壊してヤマトがハチの巣にされてしまう危険性は極めて高い。

だがこのタイミングでしか、あの要塞砲を避けられない。もう照準は定めてしまったはず。急激な進路変更には付いてこれないはずだ！

「艦首にフィールド集中展開！ 火力を前方に集中！」

艦首にフィールドを集中展開。体当たり前提で攻撃艇の真つただ中に突撃を開始する。

後方のデウスーラも戦闘空母も遅滞なくヤマトに倣って追従してきた。

さすがデスラー総統、思い切りがいい。ハイデルンもドメルが見込んだ将なだけある。

ヤマトは足止めしようと群がってくる攻撃艇を小回りと連射の利く副砲とパルスブラストを主軸に、デウスーラと戦闘空母は武器の多さを活かした手数を合わせて払いのけていく。

それでも大量の砲撃がヤマトとデウスーラと戦闘空母に襲い掛かる。

砲撃は集中展開したフィールドの強度で強引に弾き飛ばす。

正面に立ち塞がった攻撃艇はフィールドアタックで強引に蹴散らして進む。

出力も推力も質量までもヤマトが勝る。だが負荷で弱ったフィールドは一隻、二隻、三隻と衝突と破壊を繰り返すたびに著しく減退していく。

——五隻目からは限界を迎えたフィールドがついに消滅、それでもヤマトはその尋常ならざるフレーム剛性と装甲強度を活かして突撃を続行。

激しい衝撃。構造材が軋み、ひしゃげ、裂かれる轟音が艦内に響く。激突された攻撃艇はヤマトの体当たりに耐えられず、中央から引き裂

かれるようにしてバラバラになった。対するヤマトも艦首波動砲とフェアリーダー周辺に激しい擦過傷が刻まれ、フェアリーダーの一部が欠ける被害を被った。

追従するデウスーラと戦闘空母はヤマトがこじ開けてくれた道を押し広げるように進む。ヤマトが蹴散らした攻撃艇の残骸が衝突しようともひるまない。

躊躇なく、恐れなく。一步も退く姿勢を見せずに敵の包囲網を食い破っていった。

一方退避命令を受諾したコスモタイガー隊も攻撃の手を止め、指示どおり全速力でダブルエックスとの接触を試みていた。

「みんなー、急いでダブルエックスに寄り添えー！」

敵の大砲が波動砲クラス、最低でもサテライトキャノンを下回ることはないだろう威力なら、ちんたらしては余波だけでも致命的な損害を被ってしまう。

ユリカの意図を察したすべての機体がなりふり構わずダブルエックスを指し、携行武装を破棄してでも手を繋ぎ、的にしてくれと言わんばかりの団子状態になった。

全機、デイストーションフィールドを最大出力で同期させて広域展開、出力がボソンジャンプに耐えられる数値に達した。

アキトはすぐにジャンプ先をイメージ。

ジャンプ先は格納庫。

イメージ——ジャンプ!!

コスモタイガー隊は瞬く間に消え失せ、次の瞬間にはヤマトの格納庫内に団子状態のまま出現、無事の帰還を果たしたのであった。

全速力で離脱を続けるヤマトとデウスーラ。

予測される敵要塞の攻撃範囲からギリギリ逃れた。

それからたいした間を置かず、要塞の大砲から強烈な光の奔流が放たれる。

小規模な艦隊程度なら丸々飲み込んでしまいそうな凶悪な光の奔流が、ヤマトとデウスーラが封じられていた空間を通過——イスカンドルとガミラス星のそばを掠めていく。

目論みどおりの回避行動を成功させたはずのヤマトとデウスローと戦闘空母であつたが、余波が予想よりも広域に及んでいた。想像を絶する威力のビームの衝撃波に艦体を煽られ、フラフラと外側に向かつて弾かれていく。

辛うじて互いに激突することだけは避けたが、すぐには姿勢を立て直せない。

無防備になつた瞬間を狙つて、砲撃の影響圏外にあつた敵艦数隻から砲撃が加えられた。

避けられない。

——それを防いだのは、余波で姿勢を崩されながらもヤマトとデウスローの間に割つて入つた戦闘空母であつた。

自らを盾にした戦闘空母に砲撃が次々と突き刺さり、その巨体を穿ち、砕いていく。

……盾になつた戦闘空母が爆ぜた。

戦闘空母が撃沈されるまでのわずかな時間。その時間でヤマトとデウスローは辛うじて体勢を整えることができた。

ヤマトとデウスローは戦闘空母を撃沈した艦隊に向けて即座に反撃、攻撃してきた敵艦を沈める。

ほかに攻撃可能だつた艦はいないのか、しばしの静寂が訪れた。

「ハイデルン……」

長きに渡つて共に戦つてきた部下の呆気ない死に、さすがドメルも堪えたようだ。

だが歴戦の将である彼はすぐに気持ちを切り替えるべく、爆発した戦闘空母に向かつて敬礼を捧げている。

進はもちろん、第一艦橋の面々もそれに倣い、短い間ではあつた共に戦場を駆けた『仲間』の死を弔つた……。

戦術モニターに表示される被害は想像よりもずっと大きかつた。

遙か後方、最終防衛線を構築していた艦隊の一角すらも消滅させていている。

迂闊だつた。——要塞の大砲の有効射程は、波動砲よりも長く、そ

して広いものだった。後方の艦隊への警告なければ、さらに多くの艦艇が巻き込まれ、失われていたであろう。

このまま撃たせるわけにはいかない。あの要塞の火力は予想を上回っている。

「……くそっ！ 第一・第二主砲発射用意！ 目標、敵機動要塞！——発射！」

立ち直った進がすぐに機動要塞に向けての砲撃を指示。

左右に振り分けられていた二基の主砲が旋回、波打つように角度を変えた三本の砲身がピタリと要塞に向けられた。発射遅延によって時間差で放たれた計六本の重力衝撃波がまっすぐ敵要塞に向けて飛翔する。

遮るものない空間を飛びぬけ、機動要塞に突き刺さる——かに見えたが、すべてに砲身を格納して防御を固めていた要塞表面であつさりと弾かれてしまった。

偏向フィールドだ。

予想はしていたが、あの巨大戦艦とは比較にもならない強度のフィールドだった。

ヤマトの主砲では、何百発撃ち込んだとしても突破はできないだろう。

「くそっ……予想はしていたが、やはりショックカノンで突破は無理か。あの大砲の出力から要塞の出力を推測してみるに、ツインサテライトキャノンはもちろん、単発では波動砲でも歯が立たん。……恐ろしい強度だ——！」

真田が主砲が命中したときの観測データを基に解析した結果、現在使用可能な兵器である要塞の偏向フィールドを突破することは非常に厳しいと結論付けている。

敵は、想像以上の化け物らしい。

「——恐るべき要塞だ。わがデスラー砲も単発での威力はヤマトの二倍は保障しているが……それでも足らぬかもしれない……」

悔しそうなデスラーに申し訳なきそうにしながら、真田はさらに推論を口にした。

「……あくまで推測ですが、収束率を限界まで高めたと仮定しても、あのフィールドを突破するには単純計算で波動砲四発分以上の出力が要求されると考えられます。ヤマトの全弾発射なら可能性はありますが、諸々の事情からその選択は選べません」

「——ヤマトが以前使っていたという波動カートリッジ弾は、こういった敵に対抗するために用意されていたのかもしれませんがね」

進が予想を遥かに超える要塞の強さに悔し気に語る。

たしかヤマトの波動カートリッジ弾が追加されたのは、イスカンダル救援を目的とした戦いにおいてこの要塞——ゴルバの並行同位体と交戦したあとだ。

その戦訓からより迅速かつ柔軟な波動エネルギーによる攻撃はもちろん、エネルギー偏向フィールドを有する敵に対してミサイル以上の決定打足りえる装備として開発されたのだろうと、ヤマトも語っている。

——真田本人でないので、詳しい理由については把握していなかったし、そもそもぶっつけ本番で使用されたから事前の説明は最低限しか把握していないとも。

「たしかに実体弾による射撃が可能であれば、あの要塞の偏向フィールドを超えて打撃を与えられる可能性はある。しかしヤマトの主砲は実弾射撃機能をオミットしてしまっているし、波動エネルギーをオミットしなければならぬと知れているいまとなつては、四六センチ砲弾とは言えあの要塞の装甲を貫通できるとは思えん。……あの砲口を狙い撃ちでもすれば話は別だがな」

「——真田工作班長、エネルギー融合反応を無視して急所に当てたと仮定した場合、最低でもどの程度の威力が必要になると思われますか？」

ドメル の質問に真田はしばし悩んだあと、

「そうですね、敵要塞の構造や構成材質が不明なので具体的には言えません。……やはり、サテライトキャノンの威力は欲しいと思います。しかしサテライトキャノンの場合はなにかしらの方法であるのフィールドを打ち破って通す必要がありますし、ミサイルの場合は

それこそガミラスが使っているあの超大型ミサイルが必須になります。そして狙うべきは発射直前か、発射直後に無防備になるであろう発射口。あそこを狙えさえすれば、動力部に攻撃が届くはず。そうすれば強大な要塞と言えどひとたまりもないでしょう」

狙うべき場所はわかった。だがそこを狙うためには越えねばならぬハードルがいくつもある。

いますぐに、それを超える手段を見つけることはできなかった。

「——敵要塞砲の射程外まで一時退避します。デスラー総統もそれです。よろしいですか？」

「異論はない。いましばらくは、あの要塞を能力を分析しなければ対抗することは……」

「艦長！ 要塞に高エネルギー反応！ 砲撃の予兆です！」

第三艦橋のルリから警告がもたらされる。

光学センサーが捉えた映像がメインパネルに映し出される。

見れば要塞がその場で回転し、隣の砲門を開きつつあるではないか。おまけに上に逃げたヤマトとデウスーラを射線に捉えるべく上昇している。

「反転右二六〇度!! 降下角二〇!! 全速!!」

すぐにユリカはこの場から移動することを命じた。

隣のハリは「了解！」と応じ、歯を食いしばって操縦桿を捻ってスロットルレバーを押し込む。

デウスーラもヤマトと離れることのデメリットを考え、追従するよう動き出した。

バラバラに逃げたほうが一網打尽にされるリスクは減るが、僚艦を失い敵艦隊の只中にある現状では、ヤマトにはデウスーラの手数が、デウスーラにはヤマトの対空火器が欠かせない。

あまり気は進まないが、ヤマトとデウスーラは『ガミラス星とイスカンドル星と要塞の軸線上に移動した』。

あの要塞砲の射程はかなり長い。波動砲すらも上回る長射程を誇っている。威力も同等以上。

となれば、目的となる星が軸線に置かれてしまつては発砲できない

はずだ。星にある資源を求めてきたのに自ら吹き飛ばしてしまつては本末転倒もいいところ。

案の定、要塞のエネルギー反応が低下、砲口を格納している。安堵したのもつかの間、要塞にあらたな動きがみられた。

「!? 要塞にさらなる動きを確認!」

続けざまに放たれた警告に改めてメインパネルを見れば、要塞の頭頂部——角が生えた部分——が回転しながら浮き上がり、その内側に収められていた大量の砲門を覗かせているではないか!

直後、要塞がその場で回転を始め、全周囲に装備された大量のミサイル発射管とビーム砲から怒涛の砲撃が放たれた。

要塞砲による砲撃を避けるため、要塞とガミラス・イスカンドルの軸線上から逃げられないヤマトとデウスーラの退路を断つかのように展開されていた艦隊の砲撃も合わさつて、集中砲火を浴びせられる形になる。

——あつという間にヤマトとデウスーラは大量の火線に飲み込まれた。

まだフィールドが健在のデウスーラも、これほどの火力を集中されては堪つたものではない。

フィールドを喪失しているヤマトはパルスブラストの弾幕を全力で展開、ミサイルを撃ち落とし、同時にグラビティブラストの干渉と温存していたリフレクトディフェンサーを放出して防御を再構築して堪える。

デウスーラも持てる火力をありつたけ振り絞つて弾道を狂わせるべく苦心しているが、到底防ぎきれない。

大量の砲火がヤマトに降り注ぐ。

増設された艦首甲板上のパルスブラスト群が壊滅した。左舷コスモレーダーアンテナが半分になり、右舷カタパルト吹き飛ぶ。

装甲表面には多数の弾痕刻まれ、度重なる戦闘で痛んでいた部位が貫通を許してしまう。

貫通された攻撃の大半はデイストーションブロックによつて防衛され、致命的な内部破壊は免れたがそれでもダメージは大きい。

装甲支持構造が歪んで装甲が部分的に浮き上がり、剥がれ落ちそうになる。

装甲の内側に走っているさまざま配管の一部が外れ、裂け、蒸気や液体などを吹き出す。

コンピュータのいくつかが衝撃でショートして激しくスパーク。モニターがいくつも弾け飛んで回路も断線、内壁が爆ぜる。

武装への被害も大きい。

強固な装甲を持つ主砲も完全破壊こそ免れているが、第一主砲は左砲を砲身半ばから吹き飛ばされ、第二主砲は中砲の駆動系を破壊されて砲身が大きく跳ね上がったまま沈黙してしまった。

第二主砲と第三主砲上部に増設されていたパルスプラストは完全に破壊され跡形もなくなり、主砲側面に追加されていたエネルギーコンデンサーもすべての砲がダメージを被って機能を低下させていく。

主砲よりも小さい副砲は被弾こそ少なかったが、装甲も薄い副砲は一発の被弾でも大きなダメージを受け、機能を損なわれた。

各部ミサイル発射管も、損害を被って使用不能になっていく。それらの破壊に巻き込まれたクルーが負傷、その場に倒れこむ。

程度の軽い者はすぐさま救護班を呼び寄せて負傷者を任せつつ、己の部署を死守すべく奮戦を繰り返していた。

消化ガスを撒いて火災を鎮火し、断絶したケーブルを予備に交換したり、応急処置と割り切って回路を強引接続して復旧を試みる。

内側に生じた亀裂は工作班が持ち込む応急修理用の速乾性液体金属を流し込んで処置。

工作班や各部署の担当者も大変だが、大量の負傷者を運び込まれた医務室と診療室も喧騒が絶えず、イネスは診療科の責任者として手術着に身を包んだままほかの医者と手分けして患者の処置を続けた。

(くっ、このまま戦闘が長引くと助かる者も助けられないわ……！)

イネスは戦闘の激しさを嫌でも思い知らされる。

手の施しようがない患者を何人も見捨てなければならなかった。その被害はいままでで最も激しい戦いであったと断言される冥王星

基地攻略作戦の比ではない。

医務室や医療室に運ばれていないだけで、負傷しているクルーも大勢いるだろう。——非常にまずい状況だ。

——人の意思を、命の輝きを受けて初めて真価を發揮する『いまのヤマト』の最大の弱点。それはクルーに対する直接的な被害と言っても過言ではない。

なまじ命を——意志を持ってしまったがゆえに、そしてフラツシユシステムの追加に伴っていままでとは比較できないほどに『意思の力』を受けられるようになったがために、人間に対する依存が極まってしまったのがいまのヤマトの弱点だ。

かつてもといいた世界の『古代』が、『真田』が、ヤマトの在り方として拘っていた『機械ではなく人の意思によって管理されるべき』という部分が、より顕著に表れるようになってしまったヤマト特有の欠点である。

(これ以上クルーへの被害が拡大する前になんとかしないとまずいわよ、艦長——)

被弾が相次ぐデウスーラもヤマトと似たり寄つたりの状態であった。

すでにかかなりの人的被害を出している。ヤマトほど人的制御に依存していないとはいえ、機械制御も被害が嵩めばいずれ破綻する。

……このままではなぶり殺しになってしまう。

やむをえず、ヤマトとデウスーラは破損部から煙を吹きながら退路を塞ぐ敵艦隊の真つただ中に再び突つ込んだ。

さきほどは攻撃艇を巻き込んだ砲撃をした要塞ではあるが、あれは無人艇であるからだと予想がついている。

いま飛び込んだ艦隊は明らかに有人艦艇で構成されている。ここに飛び込んでしまえば絶対とは言い切れずとも、要塞からの攻撃が収まるはずだ。

イチかバチかの賭けに出たヤマトとデウスーラを守るべく、散開していた親衛隊の艦艇のみならず、後方で戦っていた艦隊の一部が追

ついでにきた。

ヤマトとデウスローを守るべく艦隊を再編成、再び徹底抗戦の構えを取る。

しかもありがたいことに反射衛星砲搭載艦が四隻、この戦域を射程に収められる位置にまで前進してきてくれた。

反射衛星砲特有の屈曲射撃によってこちらへの誤射を完全に回避しながら、ヤマトの主砲以上の火力を持つビームで敵艦隊に砲撃してくれている。

一度はヤマトを追い込んだガミラスの新装備の威力はたしかだった。反射衛星砲の直撃に耐えられる敵艦はほとんど存在せず、一撃で貫かれて砕け散る。

さらにバーガーを始めとするエースパイロットが指揮する航空隊も合流し、攻撃艇の代わりと言わんばかりに次々と戦線に投入されてくる艦載機への対処も始めてくれた。

再び激しい攻防が開始される。

そして予想どおり要塞からの砲火は目に見えて散発になり、ヤマトとデウスローを襲う火線が目に見えて減った。

ここぞとばかりに速度を上げてヤマトとデウスローが敵艦隊を突破、味方艦隊に戦闘を任せ、一時後退を成功させる。

ユリカは艦長席のパネルに映る戦況を見つめながら、要塞をどう攻略するかを思案する。

状況は最悪だ。

あの要塞の防御フィールドを上回る火力を用意することはできない。となればあのフィールドをどうにかして無力化する油断を考えなければならぬ。

このまま戦闘が長引けば敗北するのはこちら側だ。

あの要塞の火力はすさまじい。あの大砲を撃てずとも、通常兵装だけでも艦隊を壊滅に導くだけの威力がある。

状況は圧倒的に不利。

(覆せるの？ この状況――)

ユリカは嫌な汗で背中がじつとりと濡れるのを感じる。

——波動砲さえ使えば。

そう思わずにはいられない。依存したくないと願いながらもここ一番のときヤマトを助けてくれていたのはいつも波動砲だ。圧倒的な暴力に逆らえる切り札だ。

それが封じられたいま、どうやってあの要塞を攻略すればいいのだろうか。

ユリカはその答えをすぐに見いだせる自信をもつことができなかった。

ゴルバの艦橋で戦局を見守るメルダーズは、ゴルバの主砲を強引な手段で避けて見せたヤマトとガミラス旗艦の姿に感心するやら呆れるやら。

「強行突破の可能性は考えていたが、まさか体当たりで突破するとは……」

普通はそんなことはしない。相打ちになるのが精々だし、運よく突き抜けてられても構造材の歪みやらが発生してまともに動けなくなるのが必然。

にも拘らず、ヤマトは『防御フィールド喪失後に』テンタクルス一隻を体当たりで撃破したうえ、その後の戦闘継続になんら支障を生じない。ばかりか、ゴルバと艦隊からの集中砲火に耐えて逃げ延びるとは……。

「……化け物か？」

冗談抜きでこのゴルバと同格の存在かと錯覚すら覚えそうなスペックだ。——単艦で戦局を左右する決定打を有する、という点では紛れもなく同格であろうが。

——地球人の技術力と発想力。もしかすると基礎科学力以外は下手な星間国家よりも強力なんじゃないだろうか。もしくは頭のネジが一〇本くらい飛んでる人間が多いとか……。

それに第二射に対する対応の速さも特筆ものだ。

最初の一発を撃てたのは位置関係的にガミラスやイスカンドルへの誤射を気にせずに済むからだだったが、あつさりで見抜かれた。

この懸念があったからこそ貴重なテナクルスを巻き込んでまで狙ったのだが——あそこまで思い切りがいいというか、非常識とは思わなかった。

その非常識にふさわしいとさえいえる艦載機の人形共も、思いのほか強い。

特に動きがいいのが四体ほどいたが、特別警戒する必要はないだろう。

balan のときに巨大空母を沈めていたし、この戦場でも獅子奮迅の活躍で暴れているが、このゴルバを沈めるにはあまりにも非力。虫けらも同然だ。

……警戒すべきはやはりヤマトだ。このまま火力でゴリ押ししていれば、最終的にはわが軍の勝利は揺るがない。だが連中が大人しく押されてくれるとは考えにくい。

なにかしら策を講じなければならぬとは思いますが……。

さすがのメルダースも、底が見えないヤマトとそれに追従してみせるガミラス旗艦の奮戦に、いい策を思いつけずにいた。

裏を返せばゴルバという絶対的な力を持ってしまい、その力を活かせさえすれば基本に忠実に戦ってさえばいいという状況が鈍らせたのかもしれない。

強力な宇宙戦艦であっても所詮は単艦、それにごくわずかな艦載機戦力のみで常に不利な戦いを凌いできたヤマト。

そしてそのヤマトの非常識っぷりに揉まれに揉まれたガミラス。

よくも悪くも堅実な戦いに終始してきたメルダースが彼らに一步遅れてしまうことになるのは、必然と言える出来事だったのかもしれない。

味方の支援を受けて後方に下がったヤマトは、急ピッチで応急修理

が進められていた。

ユリカは対要塞攻略の策を考えながら、作業状況の進展を見守っていた。

とにもかくにも表面に展開するデイストーションフィールドの回復が優先され、各所でフィールドジェネレーターの部品の交換作業と再調整が進められている。

装甲外板の応急修理も並行して進められ、速乾性液体金属を流し込んで穴を塞ぎ、表面に防御コートを乱暴に塗布して処置する。

作業用の小バツタと、ボソンジャンプで緊急帰投したアルストロメリアに作業を手伝って貰うことで、大幅な時間短縮を実現。工作班を作業服で外に出すよりもずっと安全でもあった。

その流れでデウスローの応急修理も手伝ったら、
「人型も案外馬鹿にしたものではない」

とデスラー総統も隣で控えるタラン將軍も感服していた。

前衛艦隊はヤマトとデウスローの応急修理と敵要塞解析の時間を稼ごうと奮戦していたが、七色星団でヤマトを苦戦させた巨大戦艦が登場すると目に見えて苦戦を強いられはじめた。

ヤマトのショックカノンすら弾いて見せただけのことはある。やはりあの防御力は脅威だ。

火力も不足ないし、たった一艦しかいないというのにここまで食い付いてくるとは——ヤマトと相對したガミラスも、同じような気分だったのだろうか。

妙な感想を抱きながらも、一応考えてあったあの戦艦の攻略法を実行しよう。

とにかく、『周りの物を有効活用すればいけるはずだ』。

応急修理も途上だが、ヤマト以外にあの艦をやれる艦はないという確信も得ている。

「……リョーコさん。あの戦艦をやります。コスモタイガー隊とヤマトの総力を結集して」

ユリカは自分でも無茶を言っているな、と思う。

あの巨大戦艦のフィールドはサテライトキャノンクラスの火炮で

なければ破れない。

だがそれは一撃でやるにはそれしかない、というだけの話だ。

コスモタイガー隊の対艦攻撃の要であった大型爆弾槽は、最近出番が巡ってこなかった事もあって二〇個も残されている。

それに、ちょうどいい位置にある『アレ』を使ってヤマトとコスモタイガー隊の全火力を集中すれば、一隻くらいなら殺れる。

「……了解だ艦長。前の戦いのダメージが多少残ってるが、全機被害らしい被害もない。現時点での最良のコンディションを保ってる。あの巨大戦艦、なにがなんでも沈め——ん？　なんだよウリバタケ、いま艦長と……あ？　ハモニカ砲の奥の手？　んなのあったのかよ……どうしていままで——まさかてめえ、また『こんなことも』って奴か？　え、違う？　一回で壊れる？　マジでヤバイ？——」

なにやら横やりを入れてきたウリバタケと問答を繰り返しているが……内容からするに、ハモニカ砲に隠しダネがあった様子。

ウリバタケすらここまで明かさずにいた奥の手の詳細が気になるが、まあ聞いている時間はないか。

「えくと、とりあえず私たちのすべてを『叩きつけて』、あの巨大戦艦をぜえつたいにも撃破しましょう。まずはコスモタイガー隊が先発、サテライトキャノン以外の火力という火力を容赦も遠慮もなく、徹底的にお見舞いしちゃってください。そのあとヤマトが追いついて、『フリスビーをぶち当ててから』これまた全火力を徹底的に集中させます」

暗黒星団帝国に対してサテライトキャノンを使ったのは七色星団での戦いのみ。

あるとき戦った敵艦隊は壊滅させているのだから、存在が露呈していない可能性はある。

ヤマトの勝利を知られていることを考えると知られてしまっている可能性は無きにしも非ずだが、あるとき使ったエックスは装備が換装されているし、ダブルエックスは使っていない。

加えて『艦載機にも戦略砲がある』と知っているのなら、最低でも目立って強力なガンダムくらいはマークされていてもおかしくない

のに、その様子がまったく見られない。

だとしたら、そこが付け込む隙になると考えても間違いはないだろう。

格納庫で再出撃の準備をしながらユリカの指示を聞いていたアキトは、

「アキト、ガンダムの火力も全部吐き出す覚悟で挑んでほしいけど、ダブルエックスは要塞攻略の要なんだから、サテライトキャノンを使えなくなるような損傷は絶対受けないようにしてね」

と念を押され、

「わかっている。サテライトキャノン、使うときは確実にあの要塞を沈めてみせるさ」

と答えた。

しかしアキトにはボソンジャンプで敵要塞の至近距離に接近し、あの主砲を撃つ瞬間に自爆覚悟で接射するという手段しか思いつけなかった。

どんなエネルギー偏向フィールドであつても、砲口まで遮蔽してしまえば発砲できないはず。

仮に遮蔽した状態で撃てるとしても、発射口の内側までは張り巡らされていないだろう。

ボソンジャンプならフィールドを乗り越えて接射に持ち込める。持ち込めるが――

（タキオンバースト流の影響を考えると、ボソンジャンプでの離脱はかなり難しい。次元断層のヤマトみたいに、反動を吸収させずにバツクする？ いや、あれだけの要塞が吹き飛ぶ爆発に巻き込まれたら、いくらダブルエックスでも木っ端みじんだ。間違いなく自爆必須の戦術になる……）

それでは駄目だ。

アキトの戦いは――贖罪は、ヤマトが地球を救うまで終わらない。

それは今後も現れるかもしれない脅威も含まれているし、アカツキが――義父たるコウイチロウまでもがアキトに「帰ってきて欲しい」と八方手を尽くし、その機会を用意してくれたのだ。

無碍にはできない。

(ボソン砲でガミラスの超大型ミサイルを送り込む？ いや、内部に送り込むようなイメージは俺にはできない……)

もつとそういう訓練でもしておけばよかった。

後悔しても状況は変わらない。

なんとか代案を見つけなければ――。

「……」

戦闘指揮席からマスターパネルに映る要塞を睨み続けていた進も、いいアイデアがでないかと必死に頭を回転させていた。

奇しくもアキトが考えていた手段は進も考えていたが、実行できない手段と切り捨てる。

(フィールドを中和――駄目だ。一番ポピュラーの手段ではあるが、出力差が大き過ぎて中和には至らない。ボソン砲？――案としてありだが、それを実行する手段がない。アキトさんはたしかにA級ジャンパーだけど、内部のイメージがなければ送り込むことはできない。ユリカさんならできるだろうけど、病状の悪化を考えれば――。なにかないか、フィールドに穴を開けてサテライトキャノンを届かせるなにかが……)

考えに詰まり、なにかヒントになるものは――と後方を振り向く。そこには艦長席に座ったユリカと、その頭上にある沖田艦長のレリーフ――。

いまとなつてはユリカと並んで進の背を押してくれる、目標と言っても過言ではない存在。

(いまはあの巨大戦艦を倒すのが先か……戦いの中で、なにヒントが得られればいいんだが)

進は一端思案を中断。ヤマトの火器のコンディションを確かめた。

とりあえずの方針が決定したユリカは、デスラーに一言断りを入れたあと、すぐに作戦開始を決定した。

「ミスマル艦長、確実に仕留めましょう。ヤマトの力ならできると、信じております」

ドメル言葉にユリカも「お任せを」と応える。

張り切り過ぎで頭痛が酷くなってきたし目の前が軽く揺れるが、だいぶ慣れた苦痛なので耐えられる。

——耐えちゃいけないだろうけど。

新しいドロップ薬を口に放り込み、雪が持ち込んでくれた無針注射針を腕に打ち込んだ薬漬けユリカは、ルリと雪に突入コースの割り出しを依頼。ハリにもそれに則って突撃するように指示を出す。

ヤマトのフィールドはまだ完全ではないが、完全回復を待っているとの巨大戦艦の蹂躪を許しかねない。

早急に退場願いたいのだ。

少々荒っぽく非道な手段が混じるが、背に腹は代えられぬと妥協するしかないだろう……。

「ルリちゃん、ロケットアンカーの強度は大丈夫そう？」

「計算上は。それでもできるだけ小さいのを選んでください」

「ラピスちゃん、機関部の様子は？」

「波動相転移エンジンの出力は八〇パーセントを維持。なんとか安定しています」

「全力運転は？」

「二八〇秒保証します。それ以上は、いまのコンディションでは厳しいですね」

ラピスの答えに頷くと、今度はハリと進に「一二〇秒で決着を付けるよ！」と宣言。

「了解！」

二人も戦意も露わに応じる。

ハリの腕に巻かれた包帯に滲む血の量が増えているのが気がかりだが、本人はまだまだやる気らしく交代する気配を見せない。

これから要求される精密操舵には不安が残るのだが……。

ユリカが不安がっていると、右エレベーターのドアが開いた。

「その傷で精密操舵は無理だと思うぞ、ハーリー……一人じゃな」

なんと、杖を突いた痛々しい姿の大海が第一艦橋にやって来たではないか。

頭に包帯を巻いて、右足と肋骨を折っていてとても任務には就けないと入院させられていたのだが……。

「ドメル將軍、申し訳ありませんが予備操縦席を使わせてください」
「しかし……」

「島さん、その怪我じゃ僕以上に無理ですよ！」

渋い顔の二人に大介は、

「だが精密操舵が必要なんだろう？ その腕の怪我じゃ精密操舵なんてできやしないさ。だからハーリー、お前は無事な左手でスロットル制御を担当してくれ。舵は俺がやる。さすがに、腕を伸ばしてスロットルを動かすのキツイからな」

「……でも……」

「任せろって。だいたい入院してなきやならないのは艦長だって同じなんだ。上司が頑張ってて部下が寝てるってのは、格好付かないだろう？」

「うぐうつ……い！」

まんまとダシにされたユリカが呻く。

たしかに艦長として指揮を執ると宣言したとき、猛反対されたのを屁理屈で押し通したのは自分なので、こう言われてはとても言い返せない。

「……わかりました」

ハリも折れるしかなかったようだ。

ドメルも大介の気持ちを汲んで座っていた予備操縦席を明け渡し、自分は空いている航行補佐席に移っていた。

「さてホシノさん、お手数お掛けするが航行補佐席の表示をガミラス語に変更して貰えませんか？ 私も一仕事しなくては」

「——少し待ってください……これでよろしいでしょうか？」

「ありがとうございます。ヤマトのシステムには慣れていませんが、これで私も少しはお手伝いができるというものです」

ルリの仕事にドメルも満足。

七色星団のときから知恵袋として手腕を振るったドメルではあったが、ガミラス艦隊と合流してからは立場的に指揮を執れる立場では

なくなったからか、手持ち無沙汰だったらしい。

「コスモタイガー隊、全機発進！」

進の指示が格納庫に飛び、急ピッチで再出撃準備を整えていたコスモタイガー隊各機が次々とカタパルトレーンに乗せられ、ヤマトの外に飛び出していく。

ほぼすべての機体が大型爆弾槽を追加した重爆撃機仕様。倉庫の在庫を出し切る大盤振る舞いの——決して失敗できないオンリーワンアタック。

ガンダムは大型爆弾槽こそ装備していないが、各兵装を壊す覚悟で最大出力に設定し直している。特に隠し機能を解禁したエックスディバイダーには期待させてもらう。

全機発進したコスモタイガー隊がヤマトの周囲で一度停滞——突撃の構えを見せる。

「——ヤマト、敵巨大戦艦に向けて突撃開始!!」

「コスモタイガー隊、全機突撃開始っ!!」

ユリカと進の合図で、コスモタイガー隊とヤマトが動き出す。

先鋒はコスモタイガー隊。

「おっしやあー！ いくぜ野郎ども!!」

リョーコが吼えれば部下たちから威勢のいい叫びが返ってくる。

大型爆弾槽で重くなった機体を巧みに操り、目標となる巨大戦艦目掛けて脇目も降らず挑みかかるヒカルやイズミを含んだアルストロメリアのパイロットたち。

対空火器を備えていない様子の巨大戦艦ではあるが、その穴を埋めべく艦首の開口部からイモムシ型戦闘機を次々と放出してきた。

どうやらヤマトの航空隊を警戒してギリギリまで温存していたらしい。

だが、前線で艦載機を放出するのは判断ミスもいいところ。

「あそこが弱点だ!!」

リョーコが叫べば全員が虫型戦闘機の迎撃を交わしながら肉薄、一斉に爆弾槽をパージ。慣性で飛び込んでいく大型爆弾槽は、フィールドで威力の大部分を受け止められてしまったが、二〇発も連続で直撃

させたことでフィールドに綻びを生み出すことはできた。

アルストロメリア全機はグラビティブラストの火力をすべて爆弾槽が命中した場所目掛けて集中させ、そこにダブルエックスとエアマスターとレオパルドも参加。干渉して威力を失ってしまいうビーム兵器を使えないとはいえ、ガンダム出力をすべて注ぎ込んだグラビティブラストの威力でゴリ押す。特にひと際高出力のダブルエックスの砲撃は圧巻であった。

そこに本命も本命のリョーコのエックスデバイダーが駆けつける。

リョーコはハモニカ砲を展開したデバイダーを頭上に構え、ウリバタケから教わったリミッター解除コードを入力して出力最大にする。

するとデバイダーから重力波で構築された巨大な刃が生まれた！

これはウリバタケがロマンとして密かに研究していたが、構造的に負荷に耐えきれず、まず間違いなく一度の使用でデバイダーがスクラップ。下手をすればエネルギーの逆流でガンダムの腕部すら破壊しかねないと封じていた、ブラストブレード・モードだ。

収束した最大出力の重力波の刃を、切っ先から押し当てるように一転集中で突き刺す。

デバイダーと機体のスラストスターも全開にして押し込む。

スパークが迸るデバイダー。

コックピットに警告音が響くも構わずリョーコはブラストブレードを押し込み続けた。

ヤマト艦載機部隊の必死の攻撃で巨大戦艦のフィールドジェネレーターは悲鳴を上げ、乗組員はフィールドを維持せんと応急処置に奔走する。

だがそんな彼らの眼前にはやつらの母艦——宇宙戦艦ヤマトが迫っていた。

ヤマトの接近を確認したコスモタイガー隊が四方に散っていく。

エックスデイバイダーは爆発寸前のデイバイダーを投げ出しダブルエックスに掴まれながら急速離脱。

トドメはヤマトが任された。

「やるぞハーリー!!」

「はい大介さん!!」

出航以来互いに支え合ってきた二人が操るヤマトが、最大戦速で巨大戦艦へと突っ込む。

エンジンはラピスたちの努力で全力運転状態を維持、工作班の懸命の努力でデイストーションフィールドも二〇パーセントの出力で展開可能となった。

大介は巨大戦艦の大型三連装砲から放たれるビームを速度を殺すことなく、艦体の避弾経始を利用して受け流す。

被弾した部分の防御コートが瞬時に帰化して煙となり、装甲が一部赤熱化して削られる。

だがヤマトは止まらない。その程度では致命傷足り得ない。

熟練の域に達した操舵でヤマトを操る大介に合わせて、ハリがスロットルを巧みに操作、大介が要求する推力を適時得られるようにしてくれている。

そして不慣れと言いなながら航行補佐席のドメルが敵艦の回避行動を予測して進路を大介とハリに伝達、ヤマトの進路を確たるものとしていく。

「フィールド艦首に集中展開!」

進の指示でありつただけの出力で展開されたフィールドがヤマトを包みこむ。

そのまま突撃——と思わせて、ヤマトは巨大戦艦の手前で大きく旋回。隣を航行中の巡洋艦に艦首を向ける。少々大きいが駆逐艦を狙うには遠い。妥協しよう。

「フィールド最大出力！ ロケットアンカー発射！」

守が砲術補佐席からの制御で両舷のロケットアンカーを射出。

高密度のフィールドを身に纏った二基のロケットアンカーが艦首方向の巡洋艦目掛けて伸びていく。

拮抗。そして貫通。

フィールドを突き抜けて艦首付近に深々と突き刺さった。

「引っ張れええーっ!!」

ユリカの号令に合わせて大介は素早く逆噴射、それまでの勢いを一気に殺して急停止——からの逆進で巡洋艦を強引に引っ張る。

巡洋艦は予想外のヤマトの行動にパニックを起こしているようだが、そんな巡洋艦の艦橋に進は容赦なく副砲を撃ち込んで指揮系統を黙らせる。

準備完了！

「錨上げっ!!」

ユリカの命令に従ってロケットアンカーのリールが最大トルクで巻き上げられる。

リールからは激しい金切り音が鳴り響き、鎖もあちこちで『ギギギ』と金属が変形する音を上げるが、躊躇せずに巻き上げ続ける。

巡洋艦は制御を失い噴射を続けるメインノズルの推力も借りて、ヤマトの艦首にぐんぐんと迫り——艦首表面に展開されたフィールドに接触寸前になる。

「いまだ!! 反転右二七〇度!!」

大介は巡洋艦がヤマトの艦首に接触するタイミングを見切ってヤマトをその場で二七〇度回頭、一二〇度回頭した時点で守はアンカーのリールをフリーに、鎖が自由に伸びるようにする。

すると巡洋艦は自身の勢いはもちろん、接触したヤマト艦首の窪みに上手く引っ掛けられるような形で『投げ飛ばされる』。

円盤状の艦体を持ったため、まるでフリスビーのように。

哀れ巡洋艦はそのまま『質量弾』となって巨大戦艦に向かって突き進み——直撃した。

「全砲門！ 敵艦艦首に向けて全火力を集中！ 撃てえっ!!」

最後の仕上げと、勢いのままに全火力を左舷に向けたヤマトから怒涛の勢いで砲撃が開始される。

傷つきながらも機能している主砲三基と副砲二基。それに生き残った左舷側のパルスブラストと復旧したミサイル発射管も足して次々と砲火を撃ち放つ。

ヤマトから放たれた砲撃は質量弾代わりにされた巡洋艦をあつさりとはちの巣にして大爆発を引き起こしながら、その先にある巨大戦艦の発着口目掛けて集中される。

度重なる攻撃による負荷、そして味方の巡洋艦を故意にぶつけられて限界を迎えつつあった巨大戦艦のフィールドがいに決壊！

偏向フィールドの加護を失った巨大戦艦の艦首発進口から次々と内部に砲撃が侵入——反対側から突き抜ける。

「急速離脱!!」

効果を認めたユリカはすぐさま離脱を指示、ヤマトはメインノズルと補助ノズルを最大噴射。

猛烈な噴射炎を吹き出しながら、巨大戦艦の爆発が生み出した火の玉を背に悠然と宇宙を進む。

ボロボロになったロケットアンカーを巻き上げつつ、行きがけの駄賃とばかりにほかの艦への火力支援を加えながらもデウスーラの傍らに戻る進路を取った。

共通の目的を持ち、互いに認め合って数多くの修羅場を共に潜り抜けてきたからこそ生まれる連帯感。

それにフラッシュシステムを介したヤマトとのほんのささやかな、だが確たる一体感があつてこそ成し得る『ロケットアンカーによる投げ技』。

まさに神業であった。

ヤマトの離脱に武器を使い果たしたコスモタイガー隊も続き、次々とヤマトに着艦。

ダブルエックスはサテライトキャノン周りの再点検、エックスは失ったディバイダーの代わりにシールドバスターライフルを装備してすぐさま再出撃、エアマスターとレオパルドと協力して周辺警戒を

開始した。

第二十六話 決戦！ 機動要塞ゴルバ！！ Bパート

ユリカの手腕を見届けたデスラーとタランは、あいも変らぬ無茶苦茶な戦法に開いた口が塞がらない。

「……………艦載機の全火力集中からの母艦による火力の集中までは理解できました。ですが、まさか前時代的なアンカーを使って敵艦を『投げ飛ばした』ばかりか、質量兵器として活用するとは……………一歩間違えれば相打ちになりかねない危険な戦法をこうも危なげなく……………」

彼らの心臓は超合金でできているのだろうか。

デスラーはそんな感想しか抱けなかった。

ガミラスも最終手段として体当たりをすることがあるが、それは相打ち前提の最後っ屁でありこのような戦術として使うべきものでは……………。

いやまて、さきのユニット突撃とこの攻撃。この二つから導き出されるものは……………！

「——タラン、ヤマトに繋げ。あの要塞の攻略法を思いついたぞ」「え?」

不敵に笑い、プランを話すデスラーの姿に、タランは頼もしさを感じ——同時に「ああ、ヤマトに毒されてしまわれた……………」と嘆いたとか嘆かなかったとか。

「……………本気ですか、デスラー総統?」

「無論だ」

デスラーの策を聞かされたユリカは思いがけない提案に思わずデスラーを問い質してしまう。

だが無理らしからぬことだと、傍らで聞いていたみなも思ったのだと、あとで知った。

結局ユリカも進もドメルも、それ以上に効果的と思われる策を思いつかなかったので、デスラーの作戦を確実にするために八方手を尽く

すことになった。

まずは交戦圏への砲撃に使わなくなった反射衛星の回収作業。

使うその瞬間まで、デウスローラの翼部にミサイルよろしく吊り下げようにして配置する。

そしてデウスローラの艦体部分に乗り組んでいたクルーを可能な限りコアシップに、収容しきれなかった人員はすべてヤマトが引き受ける。

ヤマトの艦内も応急修理やら物資や怪我人の運搬で荒れに荒れていたが、移乗したデウスローラのクルーも力及ぶ限りヤマトのダメージコントロールに協力。

もう機密とかそんなことを言っていられる状態でもなくなった。とにかく力を合わせてこの局面を脱することしか頭がない。

その間にも徐々に前に出てきていた反射衛星砲搭載艦四隻が、ヤマトとデウスローラに代わって前線への火力支援に加え、要塞へのちよっかいを担当した。

反射衛星砲の火力では要塞の防御は一切揺るがなかったが、その偏向フィールドの性能を推し量る上で不可欠な行動である。

「——やはりだ。艦長、デスラー総統。あの要塞の偏向フィールドはヤマトやガミラスのデイストーションフィールド同様、装甲表面に誘導する形で展開されていると見て間違いないでしょう。全体を球形状に包めるフィールドを展開できるかどうかははっきりしませんがあの規模の要塞です、エネルギー効率を考えて装甲表面に誘導する方式を導入したのなら——」

「なるほど。たしかにわがガミラスも、エネルギー効率や武装の効果的な活用を考え装甲表面に誘導するフィールド防御システムを採用しているが、物体を球形状に包み込むフィールド防御方式は採用してはいない。連中も同様である可能性は十分に考えられるという事か——少し調べてみる必要があるな」

デスラーは反射衛星砲搭載艦に要塞上部の開放された砲台部分を狙い撃つように指示を出した。

すぐさま放たれた四発の反射衛星砲のビームは、数度の屈曲を行っ

て要塞上部の砲台部分目掛けて飛んで行った。

砲門の周囲に命中した三発はあつまり弾かれたが、偶然砲門の真正面から命中したビームはそのまま砲門を貫通、破壊して小規模の爆発を引き起こしていた。

「——どうやら、あの偏向フィールドは砲門を覆うようには展開できないようだ。とすれば、あの巨大砲にも同様のことが言えるはず。もし仮に砲口を塞ぐように展開できるとしても、デスラー総統の作戦どおりにいけば問題なく攻撃を通せるだろう……ヤマトを恐れるはずだ。あの砲撃の出力なら、波動砲一発で相殺は可能だ。連射性に勝るランジツション波動砲なら、相殺直後に無防備な発射口を狙い撃ちできてしまうだろう。敵がヤマトを恐れ、ガミラスを軽視したのは波動砲の有無だけではない、連射機能の有無だったのだ」

真田の推測にユリカも得心がいった。

単に波動エネルギーだけが怖いのなら、ヤマトをこれほど脅威に思う理由としては弱い。だが、ランジツション波動砲を有していると確認が取れているのがヤマトだけなら、あの要塞の数少ない弱点を突ける艦艇として警戒されるのも頷ける。

ヤマトは本当に、地球の脅威となる連中にとって天敵と言える性質を有してしまっているらしい。偶然だと思いが。

「——真田、あの部分にサテライトキャノンを命中させても効果はないのか？」

「効果はあるだろう。しかし繰り返すがあの要塞の構造材の強度や構造がわからんのだ。それにヤマトの様にフィールドを装甲の間にも展開していたり、非常用の隔壁としても活用している可能性は否定できません。発想自体は誰かしらが思いついていても不思議ではないからな。一応ガミラスの艦艇では採用されていないことは確認できているが、暗黒星団帝国にそのまま当てはめるのは止めておいたほうがいいだろう。それにあそこは要塞の末端だ。司令室の類がないとは言えない切れないが、仮に司令室を破壊できても要塞そのものが健在では最悪共倒れを凶ってくる可能性がある。……狙うのなら、構造的に動力炉に直結していそうな巨大砲が適切だろう。そちらにもエネルギー

逆流や、こういった事態を想定した障壁の類が用意されている可能性は高い。あったとしてどの程度の強度なのかは皆目見当もつかんのが心配だな。いくら質量五〇億トンはあるスペースコロニーを一発で消滅させるツインサテライトキャノンと言っても、波動砲やあの要塞の砲撃に比べると見劣りしてしまうのは事実だからな。……デスラー総統の策は、そういった点でも有用であると考えます、艦長」

「……」

ヤマトが異様に強固だと思ったら、そんな秘密があつたのかといまさらながら納得するデスラー。

考えてみれば、ガミラスではデイストーションフィールドを装甲表面に展開して防壁にする使い方はしても、隔壁代わりに使おうという発想はなかつたと記憶している。

と言うよりもガミラスは装甲板に複合装甲を採用している。話からするに、ヤマトは装甲自体に『隙間』を設けている中空装甲を採用し、その隙間の部分にデイストーションフィールドを張り巡らせることで防御力の底上げを図っているのだろう。

推測ではあるが、おそらく複合装甲も交えた複合中空装甲といった具合だろうか。

考えてみればヤマトは単艦での長距離航海とガミラスとの戦闘を前提に開発された艦。単純に性能のみを追求するのであれば決して間違っていない選択と言えるだろう。コストの折り合いも、ワンオフの一品物なら考える必要はない。

逆にガミラスでなくても十分な数の宇宙艦艇を揃えようと思えば、コストと性能で折り合いが付けやすい複合装甲にデイストーションフィールドのような防御フィールドを組み合わせたほうが効率的だ。ゆえにガミラスではいつしか過去の遺物と化していた中空装甲。このような使い方があつたとは。

ついでにあのダブルエックスという機体の最大火力もさらっと出てきていたが、やはり「地球人は頭おかしい」と言いたくなるスペックだ。

水中——しかも深度三〇〇メートル地点にある基地施設をただの一撃で消滅させたのだから、その程度のスペックはあると推測は付いていたが……改めて聞かされるとやはり正気を疑いたくなるスペースクダ。

そんな大火力を全長一〇メートルにも満たない機動兵器に装備させ、場合によってはパイロットの裁量で使わせるとは——。

滅亡の淵に追い込んだガミラスが言えた立場ではないだろうが、それでも声を大にして言いたい。

地球人は発想も突飛だがやるのが極端から極端に走り過ぎると。

ヤマトのスペックもガンダムもガンダムも、少数で多数を退けるための苦肉の策なのは理解できる。

だが考えたからといって実現してしまうのは本当にどうかと思う。「それにもう一つ朗報だ。さきほどの巨大砲の砲撃によって受けた被害と、これまでの戦闘データの解析をルリ君とオモイカネに手伝って貰っていたんだが、彼らが使用するビーム兵器は波動エネルギーとの融合反応を起こさないと断言してもいい。もしも反応を引き起こすというのなら、ヤマトの波動砲発射でその事実に気付いていた彼らが遠慮なくこちらを攻撃していたことの説明がつかない。彼らは攻撃そのものには問題がなくても、撃破したあとの波動エネルギーの流出がどのように作用するのかだけが心配だったのでしよう。それが解消された現在だからこそ、あの要塞の巨大砲すら気兼ねなく動員できた。つまり——」

「つまり、モード・ゲキガンフレアであの巨大砲を防いだとしても、過剰反応で自滅することはない——ということですね」

進の問いに真田が頷く。

デスラーの策の一番の問題は、いかにしてあの要塞に無傷で突っ込めるかだったのだが、どうやら解決策が見つかったらしい。

「……お手数をかけて申し訳ないのですが……そのモード・ゲキガンフレアと言うのは、波動エネルギーを身に纏った突撃戦法のことでしょうか？」

そつと訪ねてくれたタランに、第一艦橋の全員が頷いた。

なぜそのような名前になったのかは後日伺えたが、ロボットアニメという文化を持たないガミラスの面々にとつて理解に苦しむものであったことは、言うまでもないだろう……。

そもそもなぜ火器兵器を持ちながら体当たりを率先して行うのだと率直な疑問が飛んだのだが、「ロマンって奴です」と返されてますます渋い顔になった。

それは、だいたい戦争に負ける側が求めてる事柄じゃないだろうか。

やっぱりヤマトは非常識だ。

——作戦は決行された。

ヤマトはGフアルコンDXをカタパルトから撃ち出したあと、デウスーラを伴い支援砲撃を受けつつ最大戦速で敵機動要塞に向かって突撃を開始する。

ヤマトを先頭にデウスーラが続く形になっているのは依然と変わらないが、少しでもエネルギーを温存すべく砲撃を一切控え、残されたわずかなミサイルのみを使用した反撃で敵艦隊を突き進んでいく。当然敵艦隊もヤマトとデウスーラに火力を集中、その進路を阻む。

ヤマトとデウスーラは切り離れた反射衛星を使つて砲撃を適度に捌きながらも、大きく旋回しながら艦隊の密度の薄い部分を選択して突き進み、艦隊を突破する。追撃はない。

当たり前だ。ヤマトとデウスーラが通つたルートは仕組まれたもの。安全に進もうとすれば自然と要塞の巨砲の射程内に飛び出してしまうようになっていく。承知の上で逆らわなかったただけだ。

おそらくメルダーズも多少きな臭いものを感じながらも、巨砲で狙えるなら好都合と考えたに違いない。早速要塞の巨砲が重々しくハッチを開き、砲身を覗かせる。

——撃つ気だ。

「艦内全電源カット！ 波動砲、モード・ゲキガンフレアで準備！」

要塞の動きを確認するよりも早く、ユリカはヤマトの切り札の発動

を指示する。

次元断層での戦い以来使っていないなかったモード・ゲキガンフレア。十中八九連中は知りもしないだろう。

波動砲クラスの要塞の巨砲を防ぎきれぬかは少々不安が残るが、こはヤマトを信じて突っ切るしかない！

「波動相転移エンジン、圧力上げます。非常弁全閉鎖！ 波動砲への回路、開きます！」

非常灯を除いてすべての照明が落とされた艦内。

機関制御席のモニターの光で暗い艦橋内に青白く浮かび上がるラピスの顔。

この戦いにおけるヤマトのラストアタックを目前に控えながらも、その表情に焦りは一切浮かんでいなかった。

もう何度も繰り返した波動砲の準備手順。そこに迷いはない。

激戦続きでエンジンは好調とは言い難いが、そこはヤマトの根性と自慢の部下の手腕でどうにでもできる。そう言い切れるだけの実力を見つけたとむしろ誇らしげであった。

完調とは言い難いエンジンの唸りを上げ、フライホイールの回転が高まる。フライホイールにより強い輝きが宿り、出力がグングン上昇していく。

「波動砲、安全装置解除。最終セーフティーロック解除！」

進の操作で六連炉心の前進機構のロックが外され、突入ボルトへの接続準備が進んでいく。

戦闘指揮席のコンソールが反転して波動砲トリガーユニットが出現。

進は力強く左手でグリップを掴み、右手でボルトを押し込んで発射モードを切り替えてから、右手でもグリップを握りしめる。

「ターゲットスコープオープン！ 電影クロスゲージ明度二〇！」

ポップアップしたターゲットスコープの中央に、巨砲を展開しつつある要塞の姿が見える。——いまから叩き潰す標的の姿だ。

「多目的安定翼展開。タキオンフィールド発生開始！」

操舵席のハリが主翼とタキオンフィールドの制御を担当、ワープ航

法のアシストも含めて目を瞑っててもできるくらいに慣れ親しんだ操作。

文句のつけようがない完璧な仕事を披露する。

「突入コースのデータ、戦闘指揮席に転送します。そのルートを進めば要塞の近くまで到達できるはずですよ」

雪が主電探士席から戦闘指揮席に突入コースのデータを転送。盲目飛行を余儀なくされるモード・ゲキガンフレアを活用するには、どうしても欠かせない作業だろう。

あとは要塞の動きがこちらの予測から外れないことを祈るだけだ。「デスラー総統、ヤマトの突撃と合わせてください。ハードウェアの関係で、デウスーラでは完璧なモード・ゲキガンフレアの再現が困難です。ヤマトの航路からずれると、あのエネルギー砲に耐えきれずに吹き飛ばされます」

ユリカの警告にデスラーは力強く頷いた。

「わかった。ヤマトに遅れず付いて行こう」

ルリが送ってきたプログラムのインストールは既に完了している。デウスーラもタキオンバースト波動流の制御を目的としたタキオンフィールドジェネレーターを艦首に装備している。

デスラー砲を挟み込んだ艦首構造物がそうだ。

これはヤマトの解析データから波動エネルギーの制御システムとしてあの可変翼を使っているのではないかという推測し、ワープ時の負荷軽減のために使用されるタキオンフィールドをタキオンバースト波動流の制御に使えるようにと、デウスーラのデザインに反映された結果だ。

主翼のデッドウェイト化を避けるためと、コスモリバースシステムありきで構築されたヤマトに対して、デウスーラのそれは波動砲としてのエネルギー制御に特化している。

本来こういった用途にはほとんど不向きな構造になっているが、そこは力業でどうにかする。

既存の艦艇を使いまわすのではなく、無理をしても新造艦として

用意したおかげで、この起死回生の一撃を見舞うことができるのだと思うと、デスラーは工廠のスタッフ一同に頭が下がる思いだった。

——彼らの英知の結晶、決して無駄にはしない。

その思いと共に、デスラーは床から出現したデスラー砲の発射装置を掴む。拳銃型のヤマトに対して機関銃を模したそれを。

側面のレバーを引いて安全装置を解除。ヤマトと並行して行われた準備は順調に進み、エンジンの出力は間もなく一二〇パーセントに到達する。

そしてメインパネルに映るゴルバの姿を、発射装置のアイアンサイト越しに睨みつける。

——これで、この戦いに終止符を打とうではないか。

デスラーはグリップを握る手に力を籠める。

「出力一二〇パーセントに到達！ 六連炉心、突入ボルトに接続！」

「総員、対ショック準備！」

眼前の要塞のエネルギー反応が高まっていく。発射は目前だろう。

タイミングが遅すぎても速過ぎても、ヤマトとデウスーラは消滅する。たった一度しかできない、あの要塞を葬り去るこの作戦。

この作戦の成否が——ガミラスとイスカンドル、そして地球の命運を決定する。

気負いながらも進は不自然なほど落ち着いている自分を自覚した。

失敗すれば終わりだと理解しながらも、頭の冷静な部分が「いままでもそうだった。気負うことはない」と告げる。

思えばヤマトの航海は常に綱渡り。ガミラスの攻撃は苛烈であり、未知なる宇宙すらも牙を向いた。

それらすべてを潜り抜け、ヤマトはガミラスとの戦いすら終わらせて——イスカンドルに來た。

あとはカスケードブラックホールをヤマトの全力をもって排除さえすれば——恩人の星イスカンドルを破滅から救い出し、ガミラスと手を取り合う道筋が見える。

——だから、眼前の『小石』に躓いているわけにはいかない。

たしかに彼らにとってはヤマトの戦いと同じ、祖国の命運を左右する戦いかもしれない。——だがこちらにも譲れないものがある。

結局ガミラスと戦っていたときとなにも変わらない。

相手が話し合いで解決できない姿勢を見せているのなら、残された選択肢は屈服か、徹底抗戦かの二択しかないだろう。

後者を選びながらも和睦の道を探すことはできるかもしれないが、それは非常に難しく、感情の対立という壁に阻まれがちだ。

——ガミラスとこのような結末に至れたのは、本当に、本当に運がよかつただけ。たつた一つなにかが掛け違っていたら、こうはならなかった。

たとえ互いを認め合ったところで、抱えた問題を解決できなければ争いに終わりはない。

たまたま、ガミラスとの戦いには落しどころがあつた。それが都合主義的なまでに噛み合つて最良と思える結末に辿り着いただけなのだ——。

(だから——申し訳ないが、おまえたちを下す)

生きたいのは——みんな同じなのだ。

幸せになりたいのは——みんな同じなのだ。

その道を阻む障害が眼前にあるのなら、それを取り除きたいのは共通の願い。

すべてを丸く収めることができないのなら——はたしてどのような選択が正しい。

少なくとも自分たちが生きるために他者を振り落とすという選択は——現実的であつても最良の結果とはとても言えないだろう。

だが最良ばかりを求めて現実を見失うわけにはいかない。

だからせめて——せめて、自分たちの行動の結果からは逃げださない。

もしこれで恨みを買ひ、それで地球が本当に戦火に見舞われるというのなら——その尻拭いは自分たちでする。

その結果——直接自らの手で彼らの文明に終止符を打つことになるとしても……だ。

かつてヤマトは『そうしてきた』

『そうせざるをえなかった』

『それ以外の道を模索することができなかったから』

だから、自分たちもそれに倣おう。

防御シャッターの降りた窓。外部カメラの映像を映し出すスクリーンとして機能している窓。映し出される宇宙。その闇の中に第一艦橋の光景が映りこむ。

その中で、バイザー越しにユリカと視線があつた気がした。彼女は視線で進に言った。

——行くよ、と。

進も視線で応じた。

——行きます、と。

「波動砲——」

「デスラー砲——」

「発射っ!!」

進は引き金を引いた。

デスラーも引き金を引いた。

ゴルバの主砲が放たれたとき、メルダースは勝利を確信した。

ヤマトとガミラス旗艦の防御フィールドでは防ぐことはできない。

タキオン波動収束砲で相殺を凶っていた節があるが、どうやらそれも叶わなかったようだ。

(勝った……)

ついに強敵を打ち倒し、肩の力を抜いて座席に深く体を預ける。

宇宙戦艦ヤマト。そしてガミラスの艦隊旗艦。想像以上にてこずらされた。これほどの強敵と戦つたのは生まれて初めてだ。

だが善戦もここまで。さしものヤマトもゴルバの主砲の直撃だけは防げまい。ガミラス旗艦もろともに蒸発して消えたはず

あとは残存艦隊を――。

メルダーズは眼前の光景に目を奪われた。

らしくなくポカンと開いた口からは「馬鹿な……」と驚きの声力なく漏れだし、自身の迂闊さを呪い――さきほどまでとは打って変わって敗北を確信させられた。

要塞から放たれた波動砲にも匹敵する砲撃の中を、波動エネルギーの膜で包み込まれたヤマトとデウスーラが突き進む。

ヤマトに比べるとエネルギー制御が甘いデウスーラも、ヤマトが砲撃のエネルギーを切り裂いてくれるのおかげ持ちこたえている。

激しい振動にさらされながら、二隻は星をも砕く強烈な砲撃の中を突き進む――突き抜けた。

眼前には無防備に露出したままの砲口が覗いている。チャンスはいましかない!!

「反転左二二〇度！ 全速離脱！」

デウスーラの前方を直進していたヤマトが急転換してデウスーラの進路上から離脱する。

エネルギーを使い果たして停止した波動相転移エンジンの代わりに、自沈前から継承されている補助エンジンが限界まで出力を高めて最大噴射。

いま出せる最大速度で要塞から離れていく。

ヤマトの方向転換を見届けたデスラーは、間髪入れずに最後の指示を出した。

「コアシップ離脱！ 艦体を要塞の砲口に向けて突撃させろ!!」

デスラーの指示で合体していたコアシップが艦体から分離、ヤマトとは逆の方向に向けて転進、要塞から最大戦速で離れていく。

対して艦体部分は真っすぐに無防備な砲口目指して突進していっ

た。

——そう、これがデスラーの考えた機動要塞攻略作戦の要だった。要塞に対して有効といえる戦術は、敵の砲撃を誘ってトランジション波動砲の連射を生かした相殺からの砲口の狙い撃ち。

だが敵要塞の動力エネルギーと波動砲のエネルギー融合反応による被害の深刻さを考慮すれば、この手段は行使できない。

下手をするとヤマトはもちろん、ガミラスやイスカンダルに深刻な被害をもたらしかねないのだから当然と言えよう。

だがあの要塞を確実に葬るためには最低でもサテライトキャノンクラスの破壊力が要求される。しかしサテライトキャノンの威力では要塞の防御フィールドを突破不能。波動砲ですら通用しないと目されているのだから当然だ。

だから届かせるには防御フィールドに穴を開けるか、発射後の無防備な瞬間にあの砲口に撃ち込むのが最善なのだが……砲口内部にエネルギーの逆流を想定した防御策がないとは言い切れない。

そうなる、サテライトキャノン以上のエネルギーを扱うあの砲口を直撃できたとしても破壊できないかもしれない。

……砲口が万全の状態だったら。

そういった部分まで考えられたデスラーの作戦は、その点非常にシンプルであり、現状では最も効果が期待できる手段であった。

要するに、デウスラーの艦体部分を質量弾として砲口にぶつけて破損させることで、フィールドにも物理的な構造にも穴を開け、さらに発射口にデウスラーの艦体をつまませることで砲口を塞ぐために展開されるかもしれないフィールドはもちろん、発射口の閉鎖を力づくで阻止、サテライトキャノンの砲撃を通すチューブとして使うという二段構えの作戦である。

もしも要塞が全体を球状に包むフィールドを展開可能であった場合は破綻してしまう可能性があったが、現状取れる最善の手段であったことは誰も疑っていない。

というよりも、もしも球状に展開できるといふのならそれこそ被害覚悟でトランジション波動砲の六連発による力業で突破を試みる

以外の選択肢がないのだ。

巨大な要塞の砲口に対して艦体のサイズが適切だと判断されたのは、翼部を含めた全幅がガミラス最大のデウスーラ。

それにデウスーラはデスラー砲を有しているため、完全再現こそできないもののヤマトのモード・ゲキガンフレアを模倣することで波動エネルギーを強制的に放出しつつ、かつあの砲撃の真ただ中を突き進める、唯一のガミラス艦であったことが要因だ。

これであるエネルギーの過剰融合反応を回避しつつ、より確実性をもって砲口に突撃させられるという寸法だ。

また、コアシップによつて人員を脱出させることもできる。しかも最低限とはいえ武装されていて十分な足の速さを持つコアシップなら、ギリギリまで艦体を誘導することもできる。

思い立ったあとも、自身の座乗艦として精魂込めて建造されたばかりのデウスーラを早々に沈めるといふ決断は堪えた。

工廠の技師たちの苦勞を思えば、後ろめたかったのだ。

しかしこれ以外に有効と言える手段はない。デスラーは断腸の思いで決断したのである。

作戦立案に関しては渋い顔をしたタランも、デウスーラを沈めると言つたときのデスラーの表情を見て、涙を拭っていた。

デスラーの悲しみと決意を乗せたデウスーラの艦体は、その行動に大慌てで対処しようと動き出していたハッチの隙間を掻い潜り、見事発射口に突き刺さつた！

ハッチは突っ込んだデウスーラの艦体を押し潰すように最大パワーで閉じようとするが、総統の座乗艦に相応しく強靱に造られていたデウスーラの艦体は戻じ切られることなく耐えきり、堅牢を誇る要塞の防御に小さな小さな穴を開けた。

——そう。要塞の防御フィールドは要塞の表面にこそ展開されていたが、球状に展開されることはなかったのだ。

「あとは任せただ、ガンダムダブルエックス」

デスラーは眼前で半壊したデウスーラを見つめながら、ヤマトが誇る最強の搭載機にすべてを託した。

その光景を、艦隊から離れた地点に移動したGファルコンDXの
コックピットから見届けたアキト。

無人となっていて、デウスローラの壮絶な最期にすっかり慣れてしま
まった敬礼を送った。

要塞の注意を引いて狙いを悟られぬようにと、最大射程付近である
約三万キロの距離で、アキトはラストアタックの機会を待っていた。

すでにツインサテライトキャノンの発射準備は完了している。

傍らにはダブルエックス護衛のため、エックスとレオパルドとエア
マスターが控えていた。

「……………デスラー総統の行動、無駄にするなよ！」

「決めちまえ！ アキト！」

「テンカワ！ 終わらせるんだ！」

「……………ああ!! この一撃で……………決着をつける!!」

金色に輝くりフレクターを広げ、両腕両脚のエネルギーラジエー
ターを輝かせ、余剰エネルギーを放出するGファルコンDX。

Gファルコンに装着された増設エネルギーパックはもちろん、ガン
ダムとGファルコンからのエネルギーもありったけ供給した、最大出
力での砲撃。

改良されて以降発射の機会に（幸運なことに）恵まれなかったG
ファルコンDX最強最大の1撃が、ついに放たれるときが来たのだ。

膨大なエネルギー反応を察知して、敵艦載機が迎撃すべく向かつて
くる。

迎え撃つリョーコたち。加えて七色星団で共に戦ったゲッターや
クロイツ、バーガー率いる部隊が応援に駆けつけてくれた。

熾烈極まる航空戦を展開し、次々と互いの機体が火達磨になって宇
宙に散っていく。

その中に、ゲッターとクロイツの機体もあつたことを、アキトは戦
いのあとに知った。

いま、ガミラスの願いも背負って——場合によっては彼らを屠るた

めに使われるはずだったその力を、敵要塞に向かって放つ。

「いつけええええええええええつ!!!」

アキトは絶叫した。

渾身の一撃がツインサテライトキャノンの、一対の砲身から放たれた。

強烈な衝撃に機体が激しく振動する。強化された砲撃の衝撃を緩和するために追加されたショックアブソーバーが働き、伸長していた砲身が少しだけキックバック。

放たれた二本のタキオンバースト流はすぐに絡み合うように回転しながら進み、やがて一本の強力なビームと化して要塞——そこに食い込んだデウスーラ目指して飛翔する。

約三万キロもの遠距離から放たれたツインサテライトキャノンの砲撃は、妨害すべく間に入ってきた敵艦数隻を苦もなく消滅させながら、要塞の砲口に突き刺さったデウスーラに到達。

デウスーラが生み出した極々小さな偏向フィールドの穴を正確に射抜き、破壊された要塞の砲口から内部へと飛び込んだ。

予想されていた内部の防壁の類がなかったのか、それともデウスーラの突撃で防壁が破壊され防げなかったのか。

どちらであったのかはわからない。

ただ一つたしかなことは……。

ツインサテライトキャノンの砲撃で、要塞は内側から爆ぜて消えたということだった。

「おのれ……っ！ おのれ……っ！」

己が敗北を悟った瞬間、メルダースはそれまでの冷静さをかなぐり捨てて吠えた。

もうどう足掻いてもこの状況は覆せない。まさかゴルバの主砲を相殺するバリアシステムを有しているとは——！ いや、あれもタキオン波動収束砲の——！

それでも逃げ帰ろうとしないのは、失敗した部隊の行き場がないということなのだろうか。

デスラーはそんな敵艦隊に向かって、
「撤退するのであれば追撃はしない。命を無駄に散らすか今日の屈辱に耐えるか、好きなほうを選びたまえ」
とだけ宣告した。

結局戦力の要である機動要塞を失い、相転移砲の一撃で艦隊戦力を大きく喪失した暗黒星団帝国に、抗う力も意思も残されてはいなかった。

「……終わった……」

最後の一隻がワープで消え去ったのを確認して緊張の糸が切れたユリカ。

全身の力が抜けて艦長席にもたれかかる。補装具であるインナースーツがあるとはいえ、自力で動けそうにないほど億劫だ。

——瀕死の身の上だというのに、われながら無茶をしたものだ。
ヤマトとの繋がりで補填されていなければ、指揮を執ることもままならなかっただろう。

「——さすが休ませてもらうね……進、あとは任せたよ」

「——了解、艦の指揮を引き継ぎます」

返事を聞くなり「よっ」と疲れ切った体をシートから引き剥がして立ち上がる。ふらつくし頭痛も酷いがまあいつものことだ。

「私が付き添うわ。雪ちゃん、悪いけど通信席をお願い。さて——医務室も医療室も戦場でユリカの分のベッドも埋まってるし……私の部屋を貸すから、薬と食事を摂ったら一眠りしなさい」

エリナに付き添ってもらって主幹エレベーターに向かって歩く。
インナースーツの助けを借りてはいても、疲労が激しいのか足取りが覚束ない。

「部屋に付いたらとにかく薬と簡単でも食事が必要ね」

「うん。ありがと、エリナ」

彼女も疲れているだろうに。それでもこうして世話役を買っても

らえて……感謝の言葉しかない。

——ようやくここまで来れた。

ユリカは思った。

あとはカスケードブラックホールを波動砲のフルパワーで破壊して、イスカンドルに寄港し、コスモリバーシステムに組み込んでもらえれば、地球まではその命を維持させられる。

そのあとは……。エリナたちの祈りをフラッシュシステムとコスモリバーが形にさえしてくれれば……。ユリカはかつての輝きを取り戻せるだろう。

あと少し。あと少しで、この物語にハッピーエンドの印を刻めるところまで来た。

ユリカは改めて、ヤマトの旅の終わりが近いのだと実感した。

しかしすぐ近くにあるイスカンドルにたどり着けるのは、まだ先である。

その後ヤマトは生き残ったガミラス艦と共にガミラス星に寄港することになった。

戦闘によるダメージの回復はもちろんだが、カスケードブラックホールの詳細な情報を得るためには、イスカンドルよりもガミラスへのほうが効率がよかったのだ。

なにしろイスカンドルの湾港施設は長期に割ってメンテナンスもなしに放置されている。

そんな施設で扱うには、ヤマトのダメージはいささか大きすぎた。確実に、しかも改装を含めた作業をしようとするのであれば、軍港の規模も大きく設備も充実していて現役バリバリのガミラスのほうに軍配が上がる。

——ヤマトのデータが漏洩が深刻になるのが問題ではあるが、カスケードブラックホールを破壊するためにはどうしてもトランジッション波動砲の全弾発射システムを再調整が必要だった。

発射システム内の空間磁力メッキの実装と、負荷の掛かりそうな場所への補強を短時間で済ませるためにはやむをえない措置である。

ヤマトは先導するデストロイヤー艦やらデウスーラ・コアシップに導かれるようにガミラス星の大気圏に突入する。

ボロボロになった翼を広げ、大気に乗って滑空するように高度を落としていく。

それにしても……。

シャッターを開いた窓から覗くガミラス星の姿を見て、進は思った。

救援に駆けつけたときも思ったが、見れば見るほどに変わった星だ。

ガミラス星の地表は植物の生い茂った緑一色の姿で、なんと海洋らしい海洋の姿が見受けられない。どころか、地表には巨大な大穴が数個も空いている。

いや、もつと正確な表現をするのであれば——地殻に大穴が開いているのだ。

おそらく地下水などによる浸食でそうなったのだろうが、ガミラス人は地表ではなく地殻内部の空洞部分を居住スペースとして活用しているようで、穴から覗ける範囲には海洋すらある。

——地底湖ならぬ地底海とでも形容すべき環境を湛えたガミラス星は、天文学に興味のあるクルーにとつて、どのような歴史を歩んできたのかを考えさせる実にいい刺激になったくらいだ。

「わがガミラスは、大昔にあった侵略戦争の教訓もあり、自然発生していたこの地下空洞に居を構え、宇宙空間から直接居住エリアや軍施設観測できないようになっていきます。厚さ数十キロにも及ぶ地殻を破壊したり、貫通して攻撃できる兵器は少ないので、むしろ地表に居住するよりも安全なのですよ」

とはドメルの説明である。

要するにもともとの環境に加え、軍事国家であるがゆえの備えも兼ねてこうなったらしい。

先導するガミラス艦の管制に従って指定された大穴を潜る。穴を抜けた先には、照明で照らされた地底の街並みが見えた。

まるでファンタジーの地底王国のようで、空の代わり地殻の天井が

街を覆い、直径数キロはある巨大な天然の石柱が乱立してそれを支えるなか、地球を遙かに上回る超近代都市の街並みが広がっている。

いままで見たこともない光景に、すっかり目を奪われてしまった。それこそこんな光景はSF映画のセットかアニメでしかお目にかかったことがない。

「ドメル將軍、明かりの確保は電力で賄っているのですか？」

「いえ、サンザーの光をプリズムなどを使って誘導して利用しています。もちろん星の自転で昼夜が切り替わるようにも配慮されていますよ」

真田の質問快く応じるドメル。

好奇心からほかにもいろいろと尋ねてみたい気持ちは進にもあったが、まずはドック入りだ。

ガミラス本土防衛戦という激戦を乗り切ったヤマトは消耗しきっている。

さんざん砲火を浴びた装甲表面は無事な個所が見当たらないほどあちこちが穴だらけだ。

展望室などの脆弱部位を除けばほとんどの場所が内部までは貫通されていないとはいえ、装甲の層が覗いしまっている個所がほとんどで、劣化して機能を喪失した塗料兼防衛コートは白化したり黒化したりと、見るも無残なありさまだ。

あちこちアンテナやマストも折れているしで、戦艦大和のときから継承されている、富士山を思わせる優美なシルエットも崩れてしまっている。

間違いなく、冥王星での戦いを上回る大損害であった。

特にクルーへの被害は天と地ほどの差があり、半数近いクルーが負傷、その内七割ほどが入院を要する重症を負っている（とはいえ病室が足りないため、自室に戻して医療機器を取り付けて経過を観察することになったクルーも多い）。

加えていまでの航海で出た人死には冥王星の戦いで二名、バランスの攻防で撃墜されたパイロット二名の計四名と不自然にすら思えるほど軽微であったのに、この戦いで死者は四〇名を超えた。

治療中であつても経過の悪い者がさらに一〇名ほどいるため、もしかすると彼らも戦死者リストにその名を連ねてしまうかもしれない。なまじヤマトが異様に強固で、クルーへの人的被害を抑制してしまつていたがゆえに、航空戦においてもベテラン揃いで機体の改良やらガンダムの大活躍があつてパイロットの被害すらもほとんどなかっただけに、ここまでの人死にが出たことにショックを受けたクルーはとても多かつた。

特にナデシコ出身者にとっては、かつてない人的被害に隠れて涙を流す者が多かつたと言われている。

それほど被害を出しながらも、暗黒星団帝国の軍勢を退けたヤマトはようやく見えてきたガミラスの軍港へとその身を滑り込ませていた。

やはり宇宙戦艦を扱うドックだけあつて、屋根の類もなく開放的な印象を受ける。

剥き出しの鉄骨だつたりあちこちに走っているケーブルの束だつたり、ガントリークレーンなどの存在がいかにもな武骨さと適度に雑多な印象を植え付ける。

デスラー総統の勧めもあつて、ヤマトはデウスーラがその身を委ねていたドックの隣——本来なら親衛隊の指揮戦艦級の一隻が使用していたスペースへと案内されていた。

本来そのドックスペースに収まるべき艦は——要塞の主砲で蒸発してしまつた。

親衛隊はこの戦いで大きな被害を出し、総数が三分の一と大きく目減りしてしまつている。

無理もない。本来ならデウスーラ共々後方にあつて、デスラー総統を護衛するのが主任務だつたのに、今回はその総統が自ら最前線に飛び出して砲火を交えたのだ。

むしろ最後の最後までデスラー総統を守り切ることに成功したのだから、この被害もまた、彼らにとっては勲章と呼べるものなのかもしれないが、どこかやりきれない思いが残る。

ガミラスの艦隊も、総数の三割を損失する被害を出している。要塞

砲の被害は、それほど大きかったのだ。

ヤマトは主を失ったドックにその身を滑り込ませると、安定翼を畳んで管制官の指示に従って位置を微調整、ドック床から伸びている鍬状のガントリロックで固定された。

ヤマトの艦体が固定されたあと、左舷上部の搭乗員ハッチを開放、ドックの横壁からタラップが伸びてきてヤマトの左舷搭乗員ハッチ繋がる。

指揮戦艦級に比べると、ヤマトのほうが一七メートルほど小さかったので、タラップの位置が合うように前後の位置を微調整が必要だった。

船台の高さも調整され、ガミラス艦とは根本的に規格が異なるヤマトの受け入れ作業は無事に完了。

進はようやく一息付けそうだと思った。

なお、ドックの管理者や作業員一同、まさかあのヤマトを受け入れることになるとは露とも思ってもいなかった。

和解したという話は聞かされていたが、ヤマトが寄港するとなれば当然イスカンダルの方だと考えていたものが多数であったし、規格が根本的に異なるヤマトをドックに入れらるかどうかなど、それこそやってみなければわからない。

それでもデスラー総統の命令とあれば、やって見せねばならぬのがガミラス軍人の定めであったが。

ヤマトへの通路が確保されると、早速ヤマトに収容されていたデウスラーのクルーが次々と退艦、入れ替わりにコンテナを乗せた台車を押してドック作業員がヤマト艦内に入り込んでくる。

コンテナの中身は食料と医薬品——の材料となる物品だ。

起源を同じとしていて、交配すら可能と言われるほど遺伝子情報が似通っているも、住む星の環境やらこれまで積み重ねてきた生命の歴史の違いで微妙な差異がある。

それらを考えると、ガミラスの医薬品をそのまま提供するのはリスクが高いと判断され、医薬品に加工する前の材料を提供して、自分たちで加工してもらったほうが手間はかかるが安全と判断されたのだ。

一応、スターシアから提供された守の治療データ……つまり地球人に対する薬品の耐性や効果に関するデータは提供されたのだが、いかにせん薬を造るにも時間が掛かるしその暇もなかった。

ガミラス自体も決して小さくはない被害を被った以上、ヤマトのために割ける労力にも限度があるので、自給しなければならぬのである。

ガミラスから提供された品々を早速真田率いる工作班が艦内工場に運び入れ、医薬品の生産ラインにぶち込み、不足気味だった医薬品を合成して医療室と医務室、重傷者が戻った部屋に運び込んでいく。ここまではすぐに作業する必要があったが、激戦の連続によるクルーの疲労が深刻だった。

結局ドック入りしたあとは半数以上のクルーを休ませて、交代制でヤマトの機能回復に努めることとなる。

しかし、その傷はあまりにも重すぎた……。

「こうして顔を合わせるのは初めてだね。救援に感謝する」

「こちらこそ、お会いできて光栄です、デスラー総統。私が艦長代理の古代進です」

「副艦長の、アオイ・ジュンです」

タランを率いて自らヤマトを訪れたデスラーに、ヤマトの代表として迎えた進とジュン。

デスラーと進は力強く握手を交わし、互いの健闘を称える。

……ついにガミラスとの和解が成立したのだと思うと、感慨深いものがある。

思えば、ヤマトの旅の始まりの時から随分と認識が変わったものだと思う。

——だが、悪い気はしない。

ただ憎しみのまま戦うよりも、こうやって少しでもいい形で終わらせるように心掛けない限り、真の平和というものは得られないのではないかと思う。

だがどれほど平和を望む心を持っていても、ときに暴力に頼らねばならないことも多いというのは、皮肉が利いているなども。

だが暴力に頼りながらも心を失わなかったからこそ、ガミラスとの間に和解という『結果』を作り出せたというのなら、ヤマトの戦いは決して間違っていないのだと信じたい。

スターシアの願いに反することもなかったのではないかとも考えるが、その結論を出すのは彼女自身だと思い直す。

その後デスラーは案の定と言うべきか、ユリカの状態を訊ねてきた。

「いまお休みになりました。容体の急変はないようです」

とだけ答えると、一応満足してくれたようだ。

直接会ってみたいのだろうとは思うが、戦闘直後ということもあって遠慮してくれた様子。紳士だ。

話の流れで彼を第一艦橋に案内することになった。

ユリカとの対面は果たせずとも、やはりヤマトの指揮中枢には強い関心があるらしく、断れなかった。

断る理由もないと言えないし（一応機密に関することは頭を過したが、あとで改装なりしてごまかしてしまえばいいと妥協した）。

デスラーとタランを引き連れ、進とジユンは左舷側の主幹エレベーターを使って第一艦橋へと上がる。

ドアを潜ると何人かのクルーが席を立ち、艦橋に足を踏み入れたデスラーとタランに向かって（普通の）敬礼をする。

デスラーとタランもガミラス式の敬礼で答えながら、艦橋の中央に向かつて歩みを進めた。

艦橋に残っていたクルーは主電探士席の雪と、機関制御席のラピス、砲術補佐席の守、それと中央の次元羅針盤付近にドメル將軍だけだ。

真田はヤマトの損傷箇所やら工場の稼働状況の確認のためウリバタケ同伴で動き回っているし、ハリは部下に仕事を任せたりによって医務室に引っ張られて行って治療中、大介もおとなしく自室に引っ込んで療養生活に戻っている。

デスラーはまず最初に自ら派遣したドメルと対面していた。

「改めてお礼を言わせてもらおうよ、ドメル。よく大任を果たしてくれた。君にヤマトのことを任せて、本当によかった」

「はっ。もつたいなきお言葉です、総統……！」

デスラーはドメルにも握手を求め、類稀な働きを示した部下を労う。

実際彼を介してヤマトを凶ろうとしてなければ、ガミラスはヤマトと暗黒星団帝国を一度に相手しなければならなかったかもしれない。

ガミラスとの共闘がなければ、暗黒星団帝国がああいった手段でヤマトを脅すことはなかったかもしれないが、イスカンドルに近づけば警告はしていたはずだ。

——いくらユリカであっても、独断で暗黒星団帝国との戦争を始めてしまう危険性のある行動には出られないはずだ。

いやそれ以前にゲールにバラン星を任せたままヤマトと対峙させていたら、敵対を続けていたかもしれない。ゲールはその忠誠心からガミラスの——デスラーの敵を見過ごそうとはしないだろう。

バラン星の襲撃に際してヤマトが今回と同じ行動をしたとして、果たしてゲールはそれを受け入れただろうか……。

結果的にデスラーが見込んだドメルがゲールに代わって司令官の任に付き、そのドメルがヤマトに共感を覚え、彼なりに和解という展開を考えていたからこそ、これ幸いとヤマトの行動に乗っかることを指示できた。でなければこの展開はありえなかっただろう。

ドメルの判断と行動が、ガミラス最大の危機を退けたのである。

かつてない大任を果たしたドメルを労ったデスラーは、艦橋に残っていたクルーに対しても一人一人労いと感謝の言葉を掛けて回る。

……しかし驚かされた。

機関長という重要な役職についていたのが、わずか一三歳の少女だったという事実には。

——こんな年端も行かない少女を最前線に送り出す……のは地球の困窮具合を考えればまだわかる。だが重要な役職に据えるのは、さ

すがに理解に苦しむ。

しかも問題なく役職を遂行していたというのだから驚きだ。

思うことはいろいろあるが、一人前の戦士とを礼を失しないように注意しながら労い、彼女の功績を称えた。もちろんラピスの目線に合わせるため腰を落とすことも忘れない。

対するラピスは国家元首に直接感謝されるという想定外の事態に軽くパニックになったようで、ちよつと噛んだ応対をしてしまった。が、年齢を考えればそれは微笑ましく映る。

デスラーは微笑を持って答えた。

進は妹分の微笑ましい光景に頬を緩めそうになって気を引き締める。

挨拶を終えたデスラーが第一艦橋最後部にある艦長席に振り返ったからだ。

いまは空席であり、指揮を引き継いだ進が座る席ではあるが本当の主は――。

「――古代艦長代理、あのレリーフの人物は一体？」

デスラーは艦長席の昇降レールに取り付けられたレリーフが気になったようだ。

「……沖田十三。宇宙戦艦ヤマトの初代艦長だった人物です。われわれは直接対面したことがないのですが、ヤマトがこの世界に漂着したとき、艦長が彼の亡骸を埋葬したとのことです。――彼の「万に一つの可能性を発見したのなら、最後の最後まで諦めてはならない」という考えは、艦長を通してわれわれに伝わっています。彼は間違いなく、ヤマトの父と言える人物です。艦長も沖田艦長の方針を可能な限り継承すべく苦慮されていましたし、艦長自身万全とは言い難い体調にあつて、心の支えとしていたようです」

進は改めてこのレリーフに向き合う。

本当に、直接対面し教えを請えなかったことが残念で仕方がない。

――もしも彼が存命のままヤマトと共にこの世界に来ていたら、どのようなことになっていたのだろうか。

もしかしたら、ヤマトの艦長として進たちを導いてくれたのだろうか

か。

それとも自分たちにすべてを託してヤマトには乗らなかつたのだろうか。

どのような形であれ、彼と直接会うことができたのならどのような関係になったのか、すべての秘密を知ってから、ときおり考えることがある。

——少なくともいまの進たちを見たのなら、成長を喜ぶよりも先にナデシコの軽〜い空気に頭を抱えていたかもしれない。守の例を見るに。

いや、もしかしたら日頃の気の緩みは多少見逃してくれたりするのだろうか。沖田艦長の人なりを正確には知らないのです、ただ単に厳格なだけな人物ではない可能性もあるにはあるが——。

やっぱり、直接会ってみたかった。

「そうか……」

デスラーはそれ以上質問することもなく、その場に膝をついて沖田艦長のレリーフに首を垂れる。

傍らに控えていたタランもそれに倣った。

その心中を進が察することはできない。だがユリカにも影響を残したヤマトの父に対して敬意を示すと共に、感謝しているのではないかと勝手に思った。

死してなお、彼の影響はこのヤマトに残っている。

世界を超えても、なお。

しばらく静かな時間が流れた。

ユリカとの対面こそ果たせなかつたもののおおよその目的を達したデスラーはドメルを率いてヤマトを離れた。

国家元首としてやらねばならない執務が溜まっているのだとか。

ドメルはドメルでヤマトに同行していた間の報告書の提出はもちろんのこと、本星に帰還したからには家族に顔を見せるのが自身に定めらるルールらしく、今回の功績を鑑みたデスラー直々に一週間の休暇を与えられ、艦を降りて行った。

去り際に「機会があればぜひユリカや進に自分の家族を会わせた

い」と申し出てきたので、機会があれば応じると答えておいた。

——あのドメルの家族。興味がある。

ヤマトは修理と並行した波動砲の改造と各部の補強のため、ガミラスのドックで時間一杯お世話になることが確定しているのだ。機会の一つや二つ、あるだろう。

また扱いを特別にせざるをえないヤマトはやはりというべきか、総統親衛隊の管轄に置かれることになった。

まあそれ以外にいい手段もないし、整備作業を円滑に行うためにはむしろ管轄下に置かれたほうがなにかと都合がいいので文句は一切ない。

おまけにデスラーが信を置くタラン将軍が管理者を買って出てくれたこともあり、資材の提供の窓口にもさほど困らなかつた。

機関部や波動砲周辺の改造に必須なコスモナイトの備蓄が絶対的に不足しているヤマトだ。「すでにヤマトに大きな借りがあります」とタランも副総統のヒスも好意的で、国家の危機を救う存在であることも鑑み優先して回してもらえているのもありがたい。

合わせて工廠の設備もいくつか使わせてもらえるように手配してもらえたので、提供してもらえた反射衛星の詳細なデータ（鹵獲品の解析ではわからなかつた部分）を基に、空間磁力メッキの開発を急ピッチで進める。

ガミラスが収集したカスケードブラックホールのデータも提供され、どの場所にその本体である時空転移装置が存在していて、そこに波動砲のエネルギーが届くかどうかの検証も開始された。

欲を言えば安全圏から波動砲を撃ち込んで終わらせたいのだが、エネルギーが引きずられて仕損じるリスクと折り合いをつけられなければ、カスケードブラックホールに自ら飛び込む形で距離を詰め、発射しなければならぬ。

タラン将軍を交え中央作戦室でそう結論が付けられたが、ユリカの状態を鑑みると十分な改修を行う時間がないこともわかつた。

ヤマトの改修作業は乗員のみで行ういまのペースだと、約三六日かかる。

だがユリカはもう一月も持たない。

イスカandalでコスモリバースのコアユニットに接続するまでの時間を考えれば、改修に許される時間はたったの一八日。

予定の半分の時間で改修作業を回収するにはガミラスの協力が不可欠。

そう判断した進と真田はまたしても地球との緊急通信が繋ぐことを求め、機密漏洩覚悟でヤマトの改修作業を行うことを政府に進言した。

作戦成功の暁には、ガミラスの造船技術や超長距離ワープ技術の提供などがデスラーの名の元に約束されたことで正式に許可もあり、地球とガミラスの戦争に終止符を打つ、最後の作戦が決行されるのであった。

辛くも機動要塞ゴルバを下し、暗黒星団帝国の魔の手から逃れたヤマトとガミラス。

そしていま、ついにヤマトは最後の敵——カスケードブラックホールに立ち向かうときを迎えていた。

ヤマト、カスケードブラックホールを見事打ち破り、コスモリバースシステムとなって母なる地球の未来を拓くのだ！

人類滅亡と言われる日まで、

あと、二四〇日！

あと、二四〇日！

第二十六話 完

次回 新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

最終話 ヤマトより愛をこめて！

見届けよ、これが愛の奇跡だ！

最終話 ヤマトより愛をこめて！ Aパート

「……メルダースは失敗したか。地球の宇宙戦艦ヤマト、放置するに危険な存在か……」

暗黒星団帝国の支配者、聖総統スカルダートは予想だにできなかった脅威の出現に苦々しい気分だった。

「だが、連中はわが帝国の所在も知らぬ。いまはガトランティスとの戦いに全力を注ぐべきか……地球を叩くのはいまの戦いを制してからでも遅くはない。ガミラシウムとイスカンダリウムが手に入らぬのは痛い、再度兵力を派遣できるほど戦況はよくもない。……ガトランティス——これほどの軍事国家が存在していたとは……」

非常に口惜しいが、いまは諦めるしかない。

だがわが暗黒星団帝国の存亡に関わる重大な作戦が事実上の失敗に終わったのが腹立たしい。

イスカンダリウムとガミラシウムは帝国の動力エネルギーとの相性がいいとされている物質なので、開発中の無限ベータ砲をより強力にするためにも役立てたかったのだが……忌々しきは宇宙戦艦ヤマト。たかが戦艦一隻にいいようにしてやられるとは。

不幸中の幸いなのは、連中がこちらの所在を知らぬことか。復興のことを考えれば、数年はこちらを探し出す暇などないだろう。

ガミラスも予想以上にしぶとかったが、まず優先して叩くべきは地球か。

滅亡寸前であってあのような戦艦を生み出すとは——この爆発力、見過ごせない。

スカルダートは帝国の邪魔をした忌々しき宇宙戦艦ヤマトの資料から目を上げながら、そう遠くない未来の報復を誓って目を光らせた。

（ガトランティスを始末次第、地球は必ず叩き潰す！）

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

最終話 ヤマトより愛をこめて！

ガミラスの全面協力を得て急ピッチで改修作業を続けるヤマト。作業のほとんどは波動砲と機関部に集中していて、作業のために艦首の甲板を第一主砲の手前まで取り外し、ガントリークレーンで中にある収束装置二種とライフレリングチューブを釣り上げて工廠へ移動させた。

エネルギー収束装置の性能向上により想定される大出力を流しきることや、負荷対策としてエネルギーが通過する部分に空間磁力メッキの生成・コーティングシステムを取り付けていくのが目的だった。ヤマトの艦体表面や波動砲とエンジン回りの空間にも空間磁力メッキの生成装置が取り付けられる。

空間磁力メッキはシステムの構造上長時間展開していられないため、発射直前に展開して保護膜を形成するシステムとして構築されている。

特に負担の大きい発射システム内部には下地代わりに反射衛星の反射板と同じ反射材を張り込んで二重の防御策を施すことで、想定される負荷に備えた。

この改修作業で『机上の計算では』六倍——いや、真の力を開放したエンジンが生み出す、八倍の波動砲にヤマトが耐えられると出ている。しかしあくまで机上の計算に過ぎない。修理作業も並行されているが、時間のなささと激戦続きでダメージを抱えているヤマトの艦体を持ちこたえられるかどうか、完全な保証はできないとガミラスの技官も念を押している。

——テストすらできないぶっつけ本番かつ一発勝負という緊張感。誰もが不安を拭いされてはいない。

波動砲の改装と並行して行われたエンジンの再調整と改造によって、短時間だが真のスペックが発揮できるようになった。

制御プログラムの開放はもちろん、特に負荷がかかる部分はガミラスの技術者が精魂込めて仕上げた部品に置き換えることで、いままでは自壊が懸念されたエンジンの耐久力が高められている。

この作業には念には念をと一〇日が費やされ、徹底的に仕上げられた。

合わせてヤマトの艦体——特に竜骨には空間磁力メッキでも防ぐことができない衝撃に対応するため、いくらかの補強が施された。

ヤマトの竜骨はそのままの無茶の繰り返しにも負けておらず、劣化らしい劣化も見られていない。多少の補強で大丈夫だろうと判断されていたが念には念を、という判断だ。

問題は装甲支持構造のほうだった。

航行中にも修理と並行して改良を施してはきたのだが、抜根的な改善には至っていない。

いままでの数倍を超える反動が加われば、耐えきれずに装甲外板が吹き飛んで剥がれ落ちてしまうかもしれないという懸念は工作班共通の認識である。

それはヤマト自身の強度低下による破断を招くだけでなく、気密が破れるによるクルーへの影響のほうも深刻視された。

作戦中は宇宙服の着用を義務付けたとしても、空気が放出されたときに乗員が宇宙に放り出されないでいられるかは運次第になってしまう。

ここもガミラスの技術者が応急であってもフォローすべきと、特に頭を悩ませた部位だった。

それに波動砲による反動も心配だが、時空転移装置のある場所も問題だった。

……カスケードブラックホール。

イスカandalとガミラスを飲み込んでしまうとされる宇宙の悪魔。

その姿はその高重力が生み出す赤方偏移によって赤色と化したガス状膠着円盤を、まるで尾のように後方に曳かせながら、宇宙をわが物顔で突き進んでいる。

デスラーはその姿を指して「まるで悪魔の唇のようだ」と評していた。デスラーらしい言い回しかもしれない。

その本体と言うべき空間転移装置は表面のガス状の口から中心部に向かって三〇〇キロの地点にあると推測されている。

ガミラスが事前に出した偵察部隊が危険を顧みない無茶な方法でようやく割り出した、敵の心臓部。

その地点に波動砲を確実に撃ち込むためには、ヤマトもその内部に突入する必要があるかもしれないと目されている。

もし突入が必要と判断され突撃した場合、次元転移装置が生み出す重力場の干渉をモロに受けることになる。その場合波動砲発射前にヤマトの艦体に大きな傷を負うかもしれないし、発射の反動でさらに崩壊が助長され、ヤマトがバラバラになってしまう可能性だって残っている。

——許された時間を最大限に活用しても、ヤマトはこれらの問題に対して明確な対処法を得ることができなかった。

やはり時間が足りなかった。現にヤマトは全体的な補強工事を請けているにも拘らず今回の作戦とは無関係の通常兵装のほとんどが修理されずに放置されている始末だ。

武装の大半は使用不能のまま、雑に装甲を張り付けて穴を塞いだだけとなっている。

パルスブラストは虫食い状態。増設分は完全に撤去され跡地の穴を塞いだだけで放置。主砲や副砲の折れた砲身や駆動部はそのまま、当然ミサイルも補充されていないし、発射装置の不具合もそのまま。

戦闘能力の喪失もそうだが、修理放棄された武装部分から破損していかないかという不安が残されている。

それでもヤマトは発進した。護衛としてデストロイヤー艦に指揮戦艦級、高速十字空母数隻を引き連れて。

戦闘能力を喪失しているヤマトを単独で航行させるわけにはいかないと、デスラーが派遣したのだ。

目立たないようにするため小規模な艦隊に留めているが、いざというときにはすぐにも増援が遅れるように準備されている。

暗黒星団帝国の艦隊は退けたが、いつまた攻撃してくるか予想がつかない。

万が一敵襲を受けた場合、彼らを盾にヤマトだけでもカスケードブラックホールに突撃して破壊を敢行、彼らが持ちこたえているうちに

増援を送り込んで敵艦隊を退け無力化したヤマトを回収し、イスカナルに送り届ける手はずになっている。

これがこの航海最後の戦いになる。

ヤマトクルーの誰もが終局を肌を感じていた。

ヤマト一行は無事ワープアウト。カスケードブラックホールの予定進路上へと移動し、その姿を最大望遠で捉えることに成功していた。

幸いなことに、暗黒星団帝国の影はまったく見えない。この分なら襲撃は心配しなくてよさそうだと、ユリカも安堵していた。

——これでカスケードブラックホールにだけ意識を集中できる。

「——上下約三〇万四〇〇〇キロ、左右約三三万八〇〇〇キロ。木星の倍以上の大きさですね。秒速二万九〇〇〇キロで進行中。ガミラスの情報どおりです。誤差はありません」

「……あれが。イスカナルとガミラスを飲み込もうとする、次元転移装置の生み出す悪魔……」

「そして、この戦争の火種になった存在……!」

ルリの解析データを聞きながら、ユリカと進が各々の感想を口にする。

恐ろしい光景だ。

「ガミラスの解析データと合わせて、ヤマトの砲撃データを調整します。しばらく時間をください」

ルリの補佐として電算室の副オペレーター席に就いている雪の言葉に、ユリカと進が静かに頷く。

これが——この戦争でヤマトが放つ。最後の一撃になるだろう。

解析作業の終了とワープによるエネルギーの損失が回復した頃には、カスケードブラックホールは随分と距離を詰めてきていた。宇宙の距離感ではもう目と鼻の先と言っているだろう。重力場の影響も受けつつある。

ヤマトを護衛するガミラス艦隊は、作戦の成功を願う旨を伝えてヤマトから離れていく。彼らの安全を考えれば当然の行動だ。

さて、ここからはヤマトの戦いだ！

「ヤマトのみんな、艦長のミスマル・ユリカです。これから、この航海で私が艦長として指揮する、最後の作戦を開始します」

ユリカは静かに宣言した。

艦内通信の回線を開き、これからヤマトがなにをするのかを、静かに、だが確たる決意と共に語る。

「われわれは幸運なことに、このカスケードブラックホール破壊作戦の前にガミラスとの和解を成立しました。これはみんなが憎しみに囚われることなく戦いを終わらせようと心を砕いてくれたからであり、艦長として本当に誇らしく思います。しかし、ヤマトの戦いはまだ終わっていません」

ユリカは一拍置いてから告げた。

「ヤマトの戦いは、常に愛する者の未来のため、われらが母なる星——地球と人類のためにこそありました。ガミラスとの和解も、暗黒星団帝国との戦いも、そしてこのカスケードブラックホールを破壊するの、すべては地球のため。私たちの帰りを待つ愛する人々のため——そう、私たちの航海はまだ道半ば、そっくりそのまま復路が残っています。このすべてを飲み込む悪食のブラックホールを退けるのも、ヤマトの航海全体から見れば中間目標に過ぎません。だから……私たちは絶対に生きてカスケードブラックホールを破壊します！——そしてイスカンダルに辿り着き、ヤマトをコスモリバーシステムへと改修して地球を救うのよ!! 一昨年も去年も、地球にとって本当に散々な年だったけど、今年二二〇三年は地球にとってよき年になるように全力を尽くしましょう……さあみんな——勝ちに行くぞお！——
おおおっ——!!」

「おおおおおっ——!!」

ユリカの宣言に全員が吠える。ガミラス滞在中に、地球では西暦二二〇三年を迎えてしまっている。

ヤマト艦内は地球時間で運行されているため、ヤマトは年明け早々の大仕事というわけだ。

成功すれば大吉、失敗すれば大凶確定の大仕事。

——さあ！ 最後の 一撃を放ちに行きましょう！——
クルーの熱意にヤマトも応えた。

それを切っ掛けに最大出力かつ全弾発射モードの——通称『マキシ
マムモード』の発射準備が開始される。

「トランジション波動砲！ マキシマムモードで発射用意!!」

「波動相転移エンジンリミッター解除！ 相互増幅開始！」

ラピスは機関室に指示を出すと同時に、機関制御席のコンソール
ボックス右下に隠されていたハッチの解除コードを入力して開放、中
のレバーを思いきり引っ張る。

管制モニターに『エンジンリミッター解除』『相互増幅作用実行』と
警告が表示された。

いままではエンジン耐久力の問題もあつてヤマトが勝手に起動し
たとき以外は封じられていた、波動相転移エンジンの全力運転が開始
される。

機関室でもすぐにその力を体感する事態になっていた。

エンジンの回転数を示すメーターが目に見えて急上昇し、フライホ
ールがまるで燃え上がっているかのように真っ赤に輝く。

そして前方の六連相転移炉心全体が右回りに回転を始め、有り余る
エネルギーを中央の動力伝達装置へとため込んでいく。

「全弾発射態勢！ 空間磁力メッキ展開！」

機関室で太助が、山崎が、駆けずり回って準備を進めていく。

防御壁が下りて機関室が前後に分断される。

そしてヤマトの各所に設置された空間磁力メッキ生成システムが稼働し、ヤマトの艦体が、内側の一部が、眩い銀色に輝き始めた。

「出力上昇中！ 出力、一二〇パーセントに到達！ 出力、一五〇パー
セント！ 最大出力です!!」

想定される最大出力に到達した波動相転移エンジンが、悲鳴にも近い唸り声を上げ、ヤマトの体が震え始める。

解放された発射口内部に最終収束装置の余波で生じる青い輝き。

空間磁力メッキの反射と普段の八倍という途方もない出力のため

か、発射直後のような神々しい閃光となって煌めいている。

「安全装置すべて解除！ 次元転移装置の位置情報をリアルタイムで送ります！」

「全センサー最大稼働！ 電算室のシステムも最大稼働させます！」
ルリと雪が協力して情報処理に当たる。

しかし波動砲に全エネルギーを回すと電算室に必要な電力を確保することが難しくなる。特に今回のように余力を残すことが難しい状況下ではなおさらだ。

補助エンジンの生み出す電力は平常時の予備電力としては十分であつても、このような状況下で電算室に優先して回すとすると、少々心許ない。

なので予備電力として艦載機を使うのだ。

Gファルコン用の合体コネクターにアダプターを付けて、ガンダムとGファルコンに搭載された相転移エンジンを稼働させ、その電力を電算室に回すように手を加えてある。

元が機動兵器用の小型エンジンなので足しになる程度ではあるが、電算室の電力を賄う程度なら十分であつた。

あの悪魔を討ち滅ぼすため、思いつく限りの手段を講じて立ち向かうのである。

「総員、対ショック、対閃光防御！ ターゲットスコープオープン！ 目標、次元転移装置！」

戦闘指揮席と艦長席、両方の波動砲発射装置が起動して、ユリカと進の眼前に滑り込む。

真の力を解き放ったトランジション波動砲は極めて危険な存在。それゆえの安全措置として艦長席と戦闘指揮席双方からの操作でなければ引き金を引けないようになっていた。

もちろんタイミングも合わせなければならぬし、艦長席側はユリカの生体認証がなければ機能しないようセキュリティが掛かっている、これは彼女の死亡時を除いて解除できないように構築されていた。

本来であれば航海の進展とともに必ず体調が悪くなるのが決定付けられているユリカを絡ませるべきではない。だが伊達や酔狂でこのような仕様になったわけではない。

ユリカは視覚補助用のバイザーを外して脇に置く。

生身の視力は完全に失われてしまっているが、ナノマシンの浸食が進んだことが原因で意識すれば『時空の歪みを視覚と言う形で知覚できようになる』。

電算室が最大稼働しているとは言っても、得られる情報は多いに越したことはない。

こうなることがわかっていたからユリカを最後の最後まで必要とする措置が設けられているのだ。敵の正体をより深く知るために。

続けてこのために用意したフラッシュシステムの送信機を頭に被る。

——ガンダムのブレードアンテナ（もちろんアキトのダブルエックス）を模したせいでコスプレっぽいのが難点だが、フラッシュシステムの送受信機としてはガンダムのブレードアンテナの形状と配置が最も適しているというのが、スターシアが送ってくれたイスカンドルの過去の研究成果であった。

そのフラッシュシステムを使ってユリカが知覚した時空の歪みを電算室に送り込んで解析してもらう。そうすればより正確な位置情報を掴める。

あとはそのデータを戦闘指揮席のターゲットスコープに送り込んで貰えばいい。そこから先は進がやってくれる。ユリカは進のタイミングに合わせてトリガーを引くだけでいい。

——タイミングは、フラッシュシステムを通してヤマトが教えてくれる。

今回はより『視やすく』するため、戦闘時としては例外的に防御シャッターが開けられている。

——開かれた窓からはカスケードブラックホールの姿が見て取れる。赤色のガスが生み出す巨大なトンネルと、その奥にある——黒。

漆黒。

暗黒。

深淵。

そうとしか形容しようのない真つ暗な、穴。

ブラックホールでなくても見ているだけで吸い込まれてしまいうな——闇。

いままで進路上にある多くの物を手当たり次第に飲み込んで来た、大喰らいの闇だ。

ユリカの『眼』には、カスケードブラックホールの正体である次元転移装置の位置が『視えた』。

計測どおり、開口部から奥に三〇〇キロの地点にある。ヤマトからは上に三度、右に五度の位置にある。

……開口部のほぼ中央。この辺はすぐにでも予想がつく。だが時空の裂け目が生み出す重力干渉場によって装置に直接物質などが届かないように、入念に保護されているのも『見える』。

時空の裂け目自体は装置の後方に展開されているようだが（おそらく進路観測を行ううえで邪魔になるからだろう）、この干渉場があつては並大抵の手段では破壊できない、鉄壁の防御と言つて差し支えないだろう。

……なるほど、これはたしかに波動砲でも持ち出さなければ破壊は不可能だ。それも六倍——いや八倍の波動砲でなければエネルギーが直進せず、引きずられて外れてしまうだろう。

——波動砲は出力が上がれば上がるほどに、時空間歪曲作用が強くなる。特に六倍以降は本当に凄まじい。

今回の改装では実装が見送られているが、完全に制御された状態だとエネルギー流の内部や周囲に無差別に、または指定座標で次元の裂け目を生み出し波動砲による直接破壊を免れた相手であっても次元断層に放逐する性質を付加できるほどだ。

この現象ゆえ、使い方次第では対象を破壊することなく惑星単位で次元断層に放逐して、そのまま封じてしまうことすらできる。——そう、シャルバートが自身をそうしたように。

今回はこの作用の一端を利用して、重力干渉場を貫いて制御装置を

撃ち抜くのだ。

……そう、一端だ。全力ではない。

トランジッション波動砲とは本来この時空間の裂け目を伴うシステムであったのを、こじ付けて六連射波動砲のことと偽っていたのだ。

完全な波動砲にできなかった理由はたった一つ。——『真の波動砲』を世に出さないようにするためだ。

波動砲の開発過程を紐解いていけば、コスモリバーシステムと波動砲が密接な関係にあることは否が応にも理解させられる。

もしヤマトが純正のエネルギー制御装置とコスモリバーシステムを（不完全であっても）両立してしまえば、自然と真の波動砲の存在が露呈するであろう。

真の波動砲——名を『回帰時空砲』という。

詳細な原理などを要約して結論のみを語るのであれば、波動砲の真の姿とは『コスモリバーシステムの攻撃転用』と言って差し支えない。

その威力は恒星質量程度のブラックホールであれば消滅に導くことすら可能とされる。

原理と破壊力のみを語るのであれば、今回の任務に最もうってつけの武器ではあった。だが決して誕生させるわけにはいかない武器でもある。

スターシアがガミラスへ波動砲の技術提供を拒み続けた真の理由がこれだった。

デスラーはコスモリバーシステムと波動砲の関連を知っている。それだけでもこの兵器の発想に辿り着きかねないのだ。

コスモリバーシステムの現物が残っているいまは、いつ生み出されても不思議はない状況にある。

決して人が手にしていい力ではないのだ。

不幸中の幸いなのは、理論的には完成されてはいてもいままでの歴史で使用されたことが無く、現物が存在しないことだろうか。

そして今後も造られはしまい。

その存在を知っているスターシアとユリカが口外しない限り。

「進、誤差修正右五度、上方三度！　あとはルリちゃんたちの指示に従って微調整して！」

「はい！　誤差修正右五度、上方三度！　電算室からの指示を待ちます！」

命令を復唱して進が狙いを修正する。

これでヤマトの艦首は正確にカスケードブラックホールの心臓部——次元転移装置に向いたはずだ。

重力干渉によるわずかな誤差を修正するための情報を電算室から受け取れば、狙いはより正確になる。

「古代君、重力場の干渉による弾道の変化のシミュレートを送るわ！」

情報処理に忙しいルリに代わって雪が戦闘指揮席にデータ転送を開始する。

フラッシュシステムを介してユリカが『視た』情報を電算室で処理して波動砲の弾道データを算出。

——やはり、この距離からでは確実な破壊は見込めない。どうしても重力場の干渉を受けてしまう。

「艦長！」

みなまで言わずとも伝わった。

「ヤマト！　全速前進!!」

使用可能なサブノズルを最大噴射。

銀色に輝くヤマトはカスケードブラックホールに向かって突撃を開始した。

重力場の影響で時間の流れが遅れる前に——そしてヤマトがバラバラにされる前に決着をつける。

ヤマトは重力干渉の影響でふらつきながらもブラックホールの『口』目がけて突き進む。が、その進路が不自然に折れ曲がる。重力場に引き摺られて真つすぐ進めないのだ。

進の腕ではまっすぐ進めない。そう判断してぎりぎりまで操舵を

引き受けてくれた大介は、懸命に舵を操りヤマトの進路を立て直す。翼を開き、左右に何度もロールしながらヤマトはブラックホールの開口部を突き進む。

重力場の干渉でヤマトの艦体があちこちで別々の方向に引っ張られ、振じられそうになつて艦体がギシギシと悲鳴を上げる。

右コスモレーダーアンテナが拉げ、引き千切られる。左舷のカタパルトが接合部からもぎ取られてガスの流れに飲まれて消えた。ほかにも細かい構造物が拉げ、もがれてゆく。全身の装甲板も継ぎ目が剥がされ脱落しそうになる箇所がいくつも生じた。

……だが、空間磁力メッキの作用で幾分干渉が軽減されたヤマトは気合で耐えきり崩壊を免れる。

途中、高速で流れるガスに第三艦橋が接触。

一度目の接触で右側のアンテナウイングが根元からバラバラにされ、二度目の接触で外装の下半分がごっそりと抉られた。破損部がガスとの衝突で生じた摩擦熱で真っ赤に輝く。

それでも辛うじてガスからの離脱がギリギリ間に合ったことと、空間磁力メッキの保護とガンダムからの供給で機能を維持したディストーションブロックのおかげで、最も重要な電算室とオモイカネの本体は辛うじて——本当に辛うじてのところで破壊を免れた。

あと少し離脱が遅ければ、ガスに沈む量が深ければ、根こそぎ抉り取られていたであろう。

「有効射程まであと一五秒！　あとは頼みます!!」

第三艦橋の外装が崩壊する激しい振動と騒音と、あちこちで火花散り、高精度壁面パネルの部品が脱落して電算室が死んでいく。

コンソールパネルにしがみ付きながら片手で頭を守るルリが進とユリカにすべてを託した。

「古代！　渡すぞっ……!!」

「ああ、任せろっ!!」

ギリギリまでヤマトの進路を保持するため力を貸してくれた大介から、進が舵を引き継ぐ。

発射装置の圧力センサーと微調整用のコンソールを操作して、しっかりと次元転移装置を狙う。

「——われらが地球と……サンザー恒星系の未来を掛けて……っ！」
秒読みカウンントは不要だった。

進のその言葉だけでユリカは彼がトリガーを引くタイミングを察してくれる。

ヤマトの——フラッシュシステムの助けがあれば、なおのこと！

「発射っ!!」

進とユリカの声が重なり、コンマ一秒の狂いもなくトリガーが引き絞られる。

——カチンッ！

聞き慣れた、トリガーユニットのボルトが前進する音を聞いた。

直後、限界寸前までエネルギーを蓄えていた六連相転移炉心が回転を停止。間髪入れずに突入ボルトに叩きつけられた！

同時に炉心と突入ボルトの周囲に激しいスパークが生じる。

そして——銀色に輝く発射口から普段の八倍にも相当する膨大なタキオンバースト波動流が吐き出される。

そのさまは、さながら巨大な光の柱がヤマトから生じたようにも見えた。普段はただ直進するだけのエネルギー流の周囲にまるで渦巻くかのような空間歪曲が生じ、普段の波動砲では見られないほどの激しい稲妻を引き連れながら、ヤマトの前方に伸びていく。

ヤマトにも変化が起きた。

想定値を上回る負荷に耐えきれず、補強されてなおヤマトの艦体が崩壊しそうになる。

耐えきれなかった発射システム内の空間磁力メッキが、下地の反射材をも道連れにして剥がれ落ちていく。

ライフリングチューブの内側と収束装置の内部が灼熱して溶解。波動砲の発射口も真っ赤に焼け爛れ、エネルギー流に続いて激しい黒煙と炎を吹き出してしまふ。

ヤマトの艦体を覆う空間磁力メッキが、エネルギーふく射を受け流していくが、内側からの過負荷に耐えきれず波動砲周辺の装甲が大きい

くひび割れ裂ける。限界を迎えたいくつかの支持構造が破壊されて、艦体に穴が開く。

安定翼が衝撃と周辺の重力干渉の負荷に耐えきれなくなり、バラバラに砕かけて原形を失う。

両弦のロケットアンカーの機関室が破壊され、チエーンが切れたアンカーが重力場に引かれて脱落していく。

機関室にも発射装置から逆流した炎と黒煙が襲い掛かり、防御壁に遮られる。機関士は全員無事だったが、火災に見舞われた機関室の前方はスプリングクラーから放出される消火ガスと黒煙でしつちやかめつちやかに。

そしてエネルギーを使い果たした相転移エンジンが完全に停止。波動エンジンも供給を失って沈黙。ヤマトの動力部は停止を免れた補助エンジンを除いて力を失った。

——ヤマトの艦体を保護していた空間磁力メツキが寿命を迎えてバラバラと剥がれ落ちて消えていく。

一瞬で大破寸前にまで自損したヤマト渾身の一撃は、一見虚空に飲まれて消え去ったようにも思われた。

だが、前方でなにかに命中したかのようにエネルギーの波紋が広がる。

それを見て、激しい衝撃に耐えていた進がにやりと笑みを浮かべた。

……勝った！

空間の歪みを見たであろうユリカも、勝利を確信して笑みを浮かべる。

……カスケードブラックホールは崩壊した。

渦巻く赤色のガスは、中央で生じた激しい閃光と共に弾けて消えさり、ガミラスとイスカンドルを消滅の危機に陥れた宇宙の悪魔は、比較するのが馬鹿らしいほどちっぽけな戦艦一隻の前に膝をついたのであった。

いまヤマトの眼前では時空の裂け目と思われるなんとも形容しがたい、まるで濁流が大地に空いた大穴に流れ込むかのような、不可思

議な現象が起こっていた。

残されたわずかなエネルギーと辛うじて損壊を免れたりバースラスターを使つて飲み込まれないと踏ん張るヤマトの第一艦橋に、異変が起こる。

突如として第一艦橋の中に光が巻き起こり、まるで銀河の真ただ中に放り出されたかのような輝かしい情景が広がる。しかも自分たちが座っていた椅子も、眼前にあったはずのコンソールパネルもその姿を失っている。

「アツハハハハ……」

そんな異常現象に見舞われた艦橋内部に、不気味な笑い声が響く。そして、艦橋の中央であった場所に何者かが出現した。

紫色の肌の半透明で光の粒子が体内を駆け巡り、輝くタトウの様な線が至るところに走っている。悪魔のように鋭い歯と大きく裂けた口、赤い瞳に尖った耳。

まるでファンタジーに出て来る悪魔とか魔族のような印象を持った男性のような存在だ。

「ヒトよ。よくもやってくれたな」

「あなたは、誰ですか!？」

とつさに掴んでいたバイザーを装着してユリカが問う。バイザーから送られてくる視覚情報でようやくその姿を垣間見たユリカは、その異様な姿に息を飲む。

「われわれは——おまえたちとは違う異種異根の生命体。われらが世界を維持せんとして、次元転移装置をこの次元に送り込んだ者だ」

「——っ！　なぜ、このような手段を取ったのですか!？」

ユリカの叫びに近い追及に、その者は薄く笑って答えた。

「——あの装置が生み出す次元の裂け目の彼方にあるものは、おまえたちの想像も及ばぬ別の次元——われらの世界だ。……だがそこには、資源となる恒星系や惑星は少なく、生きるにはその糧を外の次元に求めるほかなかった」

三メートルはあろうかと見える巨体をくねらせながら、その者は語った。

——われらは生きる糧を求めたに過ぎないと。

「だとしても、なぜ共存の道を模索しようとしなかったのですか!? 話せば支援をしてくれる国や星だってあったかもしれないのに!」

「理解不能だ、ヒトよ。この宇宙にある物は、すべてがわが世界にとつては限りない資源。星も、ヒトも、有機物、無機物。あらゆる物がわが世界を構築する」

言いながら身を乗り出し、その凶悪な面をユリカの眼前に差し出してくる。バイザー越しに見ているのに、威圧されそうな錯覚に陥る。そして同時に直感的に理解した。

——こいつに人間の心はない。

より正確に言うのなら、良心とか道徳とか、そう言ったものがごっそりと抜け落ちてしまっているのだろう。

文字どおり生きるためならなんでもする。自分たち以外の存在は、その言葉どおり『資源』としてしか考えていない。

知恵ある悪魔と形容するのが相応しい。

もし仮にならかの組織を作るとしても、きっとそれは力による支配でしかなく、自分たちに益をもたらさなくなればなんの躊躇いも慈悲もなく切り捨て、喰らいつくすだろう。

まさにカスケードブラックホールを送り込んだ親玉として相応しい——強大な悪だ。

どれほど言葉を尽くして決して分かり合えない。力と力のぶつかり合いを制すことでしか、自分たちの生存権を守ることができない。そんな相手なのだ。

「生きとし生けるものすべては、われらの新たなるエネルギー資源として生まれ変わるのだ。——この世界での搾取は諦めるとしよう。だが、いずれ貴様たちの星——地球はわれらが資源として生まれ変わることになるだろう」

「——いかなる理由があれ、地球を侵略するつもりなら私たちとこの宇宙戦艦ヤマトが許さない! 絶対に地球は護ってみせる!」

ユリカの宣戦布告を聞いても、その者は余裕の態度を崩さなかった。

「ハハハハ……まさかわれらが世界と隣接する次元が、一つきりだとも思ったのか？」

その言葉を聞いてユリカの表情が凍り付く。まさか——!!

「われらは、別の次元の地球を食らう。この世界は、おまえたちにくれてやろう。だが、別の世界の地球を護ることだけは——決して叶わぬ」

くっ、と唇を噛む。

こいつの言うとおりに、数多に存在する並行宇宙のすべてを観測して目標となつた地球を発見することは——不可能に近い。

こいつが言うところの『われらの世界』と隣接しているという条件で絞ることができたとしても、どれほどの数になるのやら。——そしてヤマトと言えど、任意で次元の壁を渡って駆け付けられるほど便利な存在ではない。

この世界に流れ着いたこと自体が奇跡なのだ。

その奇跡を繰り返すには、きつと途方もない対価を払わなければならぬだろう。

「アツハハハハ。——さらばだ、ヒトよ……宇宙戦艦ヤマト。その名は、覚えておこう……次は今回の教訓を基に、いろいろと手段を改めさせてもらおう。おまえたちはせいぜいこの世界での生を謳歌し、守れなかつた地球を嘆くがいい」

言うだけ言って、その者は空間に溶け込むようにして消え去っていった。

同時にヤマトの眼前に広がっていた摩訶不思議な光景も速やかに収束し、平穏な宇宙の光景が戻ってきた……。

「なんだったんだ、いまのは……」

事態についていけなかつた大介が呆然と呟く。

「わからん。だが、はつきりとしているのは、連中が相互理解できない存在ということだ」

真田も険しい表情。

「それともう一つ」

真田に続いて進が言った。

「奴らは別の宇宙の地球を狙っている。俺たちの手の及ばないところで、地球を喰らうつもりなんだ。……世界は違っても、ヤマトが護り抜いてきた、俺たちの母なる地球を——！」

——残念ですが、任意で並行世界間を移動する術は私にもありません。この戦いは——私たちの負けです……——

無茶に耐えきったヤマトの無情な一言が、クルーの心に突き刺さった。

その後ヤマトは、カスケードブラックホールの消滅に喜びも露に集ってきたガミラスの護衛艦隊に牽引されて、今度こそイスカンドルへと辿り着く。

地球に似た広大な海洋を有する青く美しい命の星。

双子星のガミラスに比べると地球と酷似した、美しき星。

——だがリバースシンドロームの影響で寿命を急速に消耗し、地殻変動を起こした結果なのか大陸が極めて少なく大半が海洋となっていた。

もともとは地球と同じく居住可能な陸地が多く、相応の生命が満ち溢れていたのであろうことを考えると、一抹の寂しさすら覚える姿である。

念願のイスカンドルを前にして、ヤマトクルーはついに目的を果たしつつあることに感激しつつも、心の内にすっきりとしないものを抱えていた。

たしかにカスケードブラックホールの除去には成功し、ガミラスとの戦争に最良と言える形で終らせることができた。

あとはヤマトをコスモリバースシステムへと改造して地球に帰還すれば、ヤマトの航海に一応の終止符が打たれる。

だが、いまだ全容が掴めない暗黒星団帝国に加え、この世界ではもう相まみえることはないだろう、別の次元から来たらしい正体不明の敵。彼らに別の次元の地球が狙われていると知っては——素直に喜びに浸ることができないのだ。

再起動できず沈黙したままのメインエンジンに代わって、補助エンジンを全開にしてイスカンドルへと向かうヤマト。

そのヤマトにイスカンドルから通信が入った。

「こちらはイスカンドルのスターシア。ヤマトのみなさんを歓迎します。ガミラス星とイスカンドル星を救っていただき、心より感謝いたします。……みなさんには、マザータウンの宇宙船ドックに降りて頂きます。着陸を誘導致しますので、操縦装置を私の指示に合わせてください。現在地上の気圧は——」

地上から届いたスターシアからのメッセージ。その美しい声に、ついにイスカンドルに辿り着いたのだと実感するヤマトクルー。

仕方なかったと言え、すぐ隣のガミラス星に滞在したあと間髪入れずにこの宙域を離れてカスケードブラックホールと対峙したのだ。

目的地を前に回り道を余儀なくされただけに、感慨も一押しだった。

イスカンドルの衛星軌道上でここまで護衛してくれたガミラス艦隊とも別れを告げ、代わりにガミラスから派遣された工作艦や輸送艦が数隻、ヤマトに続いてイスカンドルへと入国した。

いまイスカンドルの設備だけでは難しい大規模な修理作業のためだ。デスラーのささやかな感謝の気持ちの表れである。

ヤマトはマザータウンのスターシアによって誘導され、唯一稼働状態を保つ宇宙船ドックへと入渠する。

ヤマトはマザータウンの海に着水したあとドックに向けて海を進み、スラストターで回頭、リバーススラストターで後進しつつ注水されたドック内部へとその身を滑り込ませた。

ドックからの誘導システムに従って位置を微修正しつつ、ドック底部の盤木とガントリローックで艦体を固定させると、海水が排出され乾ドックとなった。

これからコスモリバーシステム搭載のため、また艦首の甲板を切り開いてライフリングチューブと収束装置を撤去、装置の置き換えが行われる。

またマキシマムモードの反動で破損した機関部門の徹底修理も行

われる。

機関部はヤマトの心臓部、ここで徹底的に整備して万全の状態に戻しておかなければ帰ることすらままならない。

また、ガミラスからの感謝の印として超長距離ワープ機関の本格的な実装も行われることになった。

帰路の時間短縮に役立ててほしいとのことである。

もつとも、ヤマトの修理にはどれだけ短く済んだとしても三カ月は掛かると考えられている。エンジンの修理作業よりも大きな被害を受けた艦体の修理に時間が掛かるのだ。

これでも資材や航路日程に当初の予定を遥かに超える余裕が生まれているから時間をかけた修理作業ができるのであって、ガミラスとの和解成功のありがたみをこういった形でも実感することになった。

また暗黒星団帝国の動向が不明ということもあり、曳航ワープによる早期到達や超ワープ機関実装による帰路短縮の時間的余裕を使い、主砲などの武装の修理も行われることになった。

ヤマトにはガミラスの大使を運ぶ役割が課せられていることもあってガミラスの護衛艦も同行するはずとなっていたが、自衛できずに越したことはない。

——波動砲には頼れないが。

こうなると、撃つような状況に遭遇しないことを祈るしかないだろう。もしくは、最低でもサテライトキャノンだけで済む事態に留まることを……。

ドック入りしたヤマトをスターシアが訪問してきた。

ユリカの状態を鑑みて、国の統治者という立場にあるにも関わらず自ら足を運んでくれたのだ。

実際ユリカの具合はかなり悪くなっている。最終決戦であることや艦橋要員が負傷して減ってしまったことを理由にガミラス防衛戦、マキシマムモードの使用のためにカスケードブラックホール排除作戦には参加したが、それ以外るときはベッドで眠っている時間のほうが遥かに長くなっているほどだ。

もうあまり時間は残されていないことは、自分でもわかっていた。ユリカは医療室のベッドの上で上半身を起こし、念願だったスターシアとの直接対面を果たす。

「……お久しぶりと言うべきかしら、ユリカ」

「……それでいいと思うよ、スターシア。やっと会えたね……」

補装具の力を借りてスターシアと間近で顔を合わせたユリカの目から、涙が零れ落ちる。

最も先行きが見えなかったあの時期。何度も頼み込んで救援を約束してもらい、徐々に打ち解けて一六万八〇〇〇光年の距離を、身分の違いを超えた友人となった女性と、ようやく直に会えたのだ。

嬉しくないはずがない。

残念だったのは、自らの目で、耳で、彼女の姿を見たりその声を聴くことができないことくらいだった。

「ああ、ユリカ……わかってはいても、こんな痛ましい姿を見ることになるなんて……」

スターシアの目にも涙が浮かぶ。フラッシュシステムによって対面したとき、システムが映し出した彼女の姿とは似ても似つかぬ姿。

これから彼女はコスモリバーシステムのコアモジュールに組み込まれる。その先に彼女の未来があるのかどうかは——天に任せるしかない。

「まあ、いろいろあったしね。……ゴメンね、スターシア。サーシア、連れて帰れなかったよ……」

ユリカは辛そうに話を切り出した。サーシアの宇宙船が無事地球に辿り着き、ヤマトで帰って来れる可能性は——最初からかなり低いと考えられていた。

それでも彼女は……妹を連れて帰りたいと願っていたのに……。

「——いえ、あなたのせいではありません。それにサーシアは、立派に……勤めを……っ！」

友人の眼前ということで気が緩んだのか、こらえ切れずに嗚咽を漏らすスターシア。美しい眼からは涙が溢れ、遠い星で命を落とした唯

一の肉親を想い、悲しむ。

ユリカはそつと近くの棚に仕舞っていた小箱を差し出す。彼女は言った「サーシアの遺髪。これだけでも故郷の星に……」と。

スターシアは涙で濡れた眼差しで小箱を捉え、震える両手でそつと受け取り、蓋を開く。

中にはたしかに妹の髪が一束、収められていた。

残酷な現実の象徴。されど髪一房であっても故郷に返そうとしてくれた友の優しさ。

すべてが一気に押し寄せてきて、スターシアは声を押し殺しながらも止めどなく涙を流して泣き伏せた。

……一〇分ほど泣いていただろうか。

落ち着きを取り戻したスターシアは改めてユリカの容態を詳細に訪ね、詳細を理解するたびに表情がどんどん強張っていく。

「——もはや一刻の猶予ありません。すぐにでもコアモジュール化処置を受けてください。到底ヤマトの改修完了までは持ちません……」

口にするには勇気がいる言葉だった。

せつかく会えた友人に対して口にするべき言葉ではない。

だが予想以上にユリカの消耗が激しい。このままではあと数日で……。

「わかってる、スターシア。でも少しでいいから時間を頂戴。——せつかく会えたのにすぐにさよならなんてあんまりだよ。みんなとは地球に帰ったらいつでも会えるけど、スターシアに会いに来るのは楽しいんだよ?」

と言われては、スターシアも強く勧めることはできなかった。彼女とて、本音を言えば……。

「——無理は禁物ですよ?」

もつと、共にいる時間が欲しいのだ。——この星は……寂し過ぎる。

スターシアとユリカは取り留めのない談笑を楽しんだ。途中、やはり紹介せねばなるまいと呼び出しを受けたアキトを「私の自慢の旦那

様です！」とにこやかに紹介。

一国の主という遙か彼方な身分のスターシアに対してアキトは緊張をまったく隠せていなかったが、それでも地球のため力を貸してくれた恩人と、たくさん感謝の言葉を頂いた。

そんなつもりはなかったのだが、ようやく対面できた遠い星の友人との会話は新鮮だったようで、ついついいろいろ尋ねてしまう。

やれ「地球の自然はどのようなものなのか？」やら「人々の暮らしはどのような感じなのか？」などと聞いたものから、ついユリカのペースに釣られて甘味の話題などにも話が飛んでしまった。

しかしいまのイスカンドルで食の娯楽は求められていない。

スターシアも身の回りの世話をするアンドロイドらの手を借りて普通の生活は送っているが、妹サーシアも失い、国民のすべてが死に絶えているいまのイスカンドルにおいて、文化が衰退していくことは避けられない。

——『胚』とそれを成長させて民族を再興するだけの気概は……スターシアにはなかった。

星の寿命をまつとうするのはまだまだ先の話とは言え、いまのイスカンドルは人の住みいい星とは言い難い。

イスカンドリウムの露出による放射線被害からは回復しているし、地殻変動はここ数十年は落ち着いているが、大陸のほとんどは沈降し、島もほとんど消失してしまった。

マザータウンのある大陸は、少なくともスターシアが生きている間に消えてなくなることはないだろうが……はたして民族を再興したとして、いつまでこの星で生きていられるのか見当もつかない。

そう考え、妹サーシアと二人きりで生きてきたが、ここ一年ほどでいくつもの刺激を受けて、人肌が恋しくなってしまう。

いまも目の前で仲睦まじい姿を見せるユリカとアキトの姿はもちろん、思いを寄せる守のことも含めて、決断をしなければならぬと思うようになってきた。

いや、答えはもう決まっているのだろう。

あとはそう——守次第だ。

それからしばらくして、ユリカはクルーとスターシア、そしてわざわざ駆け付けてくれたデスラーやドメルに見守られながらコアモジュール化処置を受けた。

地球帰還までユリカの残りわずかな命を繋ぎ、同時にデータ送受信の容量と速度を限界まで高めるためと、人間翻訳機にされていたときと同じく彫像のようにしてしまいう処置が検討されていた。

しかしスターシアが同じ処置を嫌がったため、イस्कन्दルに残されたマザーコンピューターの力を借りて同等の成果を得られる別の処置に切り替えられている。

頭部以外の体を高性能データスーツとその機能を補助する端末で覆い、呼吸の確保とスーツを着せられない頭部の補助を目的としたヘルメットを被り、地球製のものとは比べ物にならない情報量を高速で扱える液状なのマシンで満たされたカプセルの中に入る。

これが代替え措置だ。

加えてタキオン粒子を利用した時空制御技術を利用し、カプセル内部の時間経過を遅くする『停滞フィールド』を展開して彼女の命を繋ぐのだ。

停滞フィールド自体はガミラスでも研究されてはいたのだが、時空間に作用するタキオン粒子——その極限と言うべき波動エネルギー——を操る文明とは言え、任意の方向に時間流を操作するというのは並大抵で成せる技術ではない。

これもイस्कन्दルが有する超技術の一端と言えよう。

計算上、地球のタイムリミットまでなら余裕をもって状態を維持できるといふ。

スターシアが導き出した代替え措置は、周りの人の心理的嫌悪感の低減以外にも、ユリカの意識を保ったままではいられないという点においても初期案より優れていた。

うれしい誤算である明確な自我を有するイレギュラーな艦艇——ヤマトとのマッチングにおいてこれほどのメリットはない。

イस्कन्दルにとっても前例がない存在に、精神波を検出するインターフェイスシステムが取り付けられている。

これは二重の意味で助けになるかもしれないとスターシアは語った。

ユリカの保護という観点からすれば、システムそのものであるヤマトがフォローを加えることができれば成功率が飛躍的に向上するというのだ。

これならば、当初は五パーセントにも満たないとされていた回復の確立を、五〇パーセント近くまで跳ね上がられるかもしれない。

ヤマトは不完全なシステムでありながら、クルーの想いを受け取って彼女の延命に成功した実績もある。

しかもこの数字はヤマトとクルーのみで実行した場合の数値。

地球に戻れば、ユリカの父親であり親バカで有名なコウイチロウに、ヤマトに乗艦しなかったミナトをはじめとする旧ナデシコクルー。

そして……ヤマトのバックアップを行うべく改修を受けているナデシコCの力も借りられる。

そして、地球環境を回復させるための時空制御に関してもヤマトの存在が大きな力になり得るとスターシアは語った。

別の宇宙とはいえ、ヤマトは一度は海底に没して『地球の一部へと還った』経験がある。海底に沈んだ船舶は海洋生物の住みかとなり、その『記憶を刻み込んできた』はずだ、と。

そして再建の際『この世界の大和の残骸を組み込まれ、その記憶をも引き継いだ』ことが示唆されたのである。

ユリカからすれば、単なるゲン担ぎであり感傷による行動に過ぎなかったそれが、もしかしたらコスモリバーシステムの高完成度を高め、より地球の再生を高度に成す因子足りえるかもしれないと言われるてしまえば、感傷バカにできないという意見だけでなく、実際に行動に移してしまったユリカに改めて賞賛——のような言葉が送られるのは、必然だったのかもしれない。

——努力は確実に実を結びつつある。ヤマトが現れてから、ガミラスとの戦いが始まってからこの日のためにと用意を重ねてきた努力が、いままさに奇跡を起こさんと囁み合い始めている。

だからだろうか。ユリカはリラックスした様子で、

「大丈夫。また会えるよ」

とだけ言い残し、コアモジュールであるカプセルに収められ、そのときが来るまで通常時間よりもずっと遅い時間の中に一人飛び込んでいった。

——データスーツの胸元に、みなを送ってくれたブローチの輝きを灯しながら。

当初の予定よりずっとマシン形ではあったが、それでも生体部品として使うという現実を覆すことはできず、成功率も一〇〇パーセントに達せられない無情さに、進は涙を堪えた。

今生の別れになるかもしれない友を想い、涙を流し嗚咽を漏らすスターシアに声をかける者はいない。

いや、みな揃って泣いていた。

懸命に涙を堪える進とアキト、そしてその献身を心から称え瞑目したデスラーとドメルを除いた全員が、涙と共に地球に希望を残した彼女を見送る。

そして数分が経った。進は言った。ヤマトの最高責任者として。

「みんな、これ以上泣くんじゃない。これ以上の涙は——地球を救い、艦長を迎えるその瞬間まで——取っておくんだ……！」

無理やり感情を抑え込んだ、力んだ声で宣言した。

「俺たちは……絶対に地球を命溢れる青く美しい星にもどす！そして、絶対にユリカさんも取り戻す！——確率なんて糞喰らえだ！俺たちの手で、俺たちの願いで！——ここまで希望を繋いでくれたユリカさんに報いるんだ！」

大声で諭されて、ようやくクルーは泣くのを止めた。

進の言うとおり、これ以上の涙は嬉し涙にとっておく。

——まだ、ヤマトの旅は半分も残っているのだ。ここで泣き崩れては、いられない。

それから先はヤマトをコスモリバーシステムに改造する作業と並行して、クルーたちの慰安も兼ねたイスカンドルの観光が何度か行

われた。

みんな悲しみを振り払うため極力平常どおりに振舞っている。

進も艦長代理として考えた結果、海水浴はもちろん、地球では決して見ることでできないすべてがダイヤモンドで構成された島への探検などを許可する。

ガス抜きは必要だ。

羽目を外して怪我をしたりヤマトの改修作業に支障をきたさない限り、これくらいのご褒美があっても誰も文句は言うまい。と言うか言わせない。苦労したのは俺たちだ。

と半ば開き直りながら。

ついでにヤマトは大規模な改修作業で内部が散らかっていることもあり、スターシアの好意で使われなくなつて久しいマザータウンに残されたホテルを使わせてもらえた。

みなこれ幸いとばかりに最低限の荷物を持って移り住んでいく。

やはりというかなんというか、旅先での宿泊というのは心躍るものなのだろうし、愛着はあれど所詮戦艦内の居住空間。やっぱり窮屈だったんだろうなあと、しみじみ思う。

ともあれ、進自身も適度に休みながらヤマトの最高責任者としてジyunをお供にデスラーやスターシアとの会合に出席する日々を送っている。

カスケードブラックホール破壊に成功したことで、ガミラスは約束を守つて地球との本格的な交渉に臨んでくれた。

超長距離通信と言う形ではあるが、地球と数度に渡つて交渉が行われ、今後の関係についての詳細が煮詰められていく。

おおよその内容を抜粋するのであれば、『地球・ガミラス両軍の波動砲装備艦艇の保有数の調整』であったり、『地球・ガミラス間の軍事同盟の締結』であったり、『地球の復興のための全面支援』などなど。

ほかにも地球人の感情や環境による影響等を考慮して月面に大使館を設立し、地球防衛のための艦隊の駐屯（反ガミラス感情を考慮し、波動砲を失つたヤマトでも容易に鎮圧可能な駆逐艦を中心とした数十隻程度）や、交易のための航路の選定などなど。

相互の感情を緩和する目的で、ガミラスが発見しながらも手付かずで放置されていた太陽系の第十一惑星の開拓と、そこでガミラス人と地球人双方の入植についても話し合いが成された。

ガミラス側の技術支援は確約しつつも、領土としては地球側にすべての権利があるという形に収まったのは、デスラーなりの誠意であったのだろう。

最終話 ヤマトより愛をこめて！ Bパート

ある日のことだった。

「古代」

「どうしたんだ、デスラー？」

「少し時間を取れないか？ 個人的に話したいことがあってね」

ヤマト地球帰還のための航路会議を終えたデスラーに呼び止められ、進は一緒に波止場でプライベートな会話に花咲かせる羽目になった。

奇妙なほど馬が合った二人は何度か顔を合わせている内に打ち解け、プライベートに限れば敬称も付けずタメ口で話せる間柄になっている。

つい先日などは杯を交わした間柄でもあるくらいだ（進にとって初の飲酒経験で、提供された酒は地球で言うところのワインに近い代物だった）。

もちろんというか当然というか、対等に口を利くことを求めたのはデスラーのほうだ。進も「ユリカさんの友人なら、僕にとっても友人」と語ってはいたのだが、それが決め手になったのかどうかは定かではない。

「——それで、話したいことって？」

「いまの状況を不思議だとは思わないか？」

デスラーは右手側に見えるドックに視線を向ける。

壁に囲まれて詳細は見えないが、その周囲にはガミラスの工作船や輸送船が着水していて、貨物室から物資を次々とドックに運び込んでいた。

見えないドックの内部ではヤマトが改修作業を受けている。そのための資材の運搬と作業の手伝いをしてきているのだ。

「つい一月前までは互いに殺し合い、とても和解できるとは考えていなかった。われわれは加害者、君たちを滅びの一手手前まで追い込んだ非道な民族。君たちからすればその程度の存在でしかなかったはずだ」

「——たしかに、ヤマトに乗るまでは……いや、太陽系を出るまではどちらかと言えばそんな空気だった。でも冥王星基地の——シユルツ司令の戦いが、俺たちとガミラスが同じ目的のために戦っているってことを、これ以上なくわからせてくれたんだ」

「……詳しく聞きたい。ドメルからの報告にも書かれてはいたが、当事者の言葉を聞きたいのだ。シユルツの行動が君たちにどのような映ったのか、なにを感じたのかを」

そう言えば、ドメルはともかくデスラーにこのことを話したことはなかった。

ガミラスに停泊していたときは限られた時間——ユリカが動ける時間内にカスケードブラックホール破壊の準備を終えなければならぬという切迫した状態であったため、デスラーとも打ち合わせ以上の顔合わせはしていなかったのだと思ひ出す。

なので進は丁寧に語った。

デスラーは進の口からすべてを聞いた。

ヤマトが発進して冥王星基地を攻略し、カイパーベルト内に潜伏を始めたときまではガミラスは相互理解のできない敵と言う認識のほろが強かったであろうこと。

ほかならぬ自分自身、兄を殺されたとガミラスを憎む気持ちが強く、それを抑えてくれたのがユリカをはじめとするヤマトの仲間であったこと。

そして冥王星基地を辛くも攻略し、カイパーベルトに紛れて傷を癒そうとした最中に襲い掛かってきた冥王星残存艦隊との戦いのこと。

アステロイドリングやダブルエックスの活躍で進退窮まった残存艦隊が、確実にヤマトを屠るために仕掛けた体当たり戦法のこと。

彼らの壮絶な最期には、敵ながら悲しみと敬意を覚えずにはいられなかったことを、すべて語って聞かせてくれた。

たしかに彼らは侵略者であり、直接地球を追い込んだ怨敵ではあったが、祖国のために命を投げ出したその姿——ことさらに響くものがあったのだと。

合わせて、ベテルギウスで捨て身の攻撃を仕掛けてきた、あの戦艦。

「その決死の覚悟を感じさせる戦い。」

それは大和であったヤマトにとって、その乗組員として、決して他人事ではなかったのだと。

「……そうか。それで君たちの心を動かせたのか……」

デスラーはシウルツとガンツのことを思い出す。

もともと大して接点のある人物ではない。数ある部下の一人に過ぎないし、冥王星前線基地を任せる気になる程度には有能な人材ではあった。その程度の認識だ。

冥王星基地を任せて以来、ヤマト出現まではよくやってきていたとは思う。

もつともヤマト出現以降の失態の連続はフォローしようがない。

いまとなつてはヤマトの実力が骨身に染みているが（敵としても味方としても）、あのときは『強力ではあっても戦艦一隻に過ぎない』と蔑んでいたのだから当然だ。

だが……。

「……」シウルツとガンツの忠誠心は、深く心に留めておこう……。彼らはその命を賭してガミラス最大の脅威を取り除き、祖国の未来を切り開いた。……その偉大な功績はガミラスの歴史に刻みこまれ、語り継がれるであろう」

デスラーは静かにガミラス星を仰ぎ、そこに戦没者として葬られたシウルツとガンツに黙祷を捧げる。

当然そこに遺体はないが、魂は帰って来てくれることを切に願う。

もしもシウルツが冥王星基地と共に死んでいたら、ガンツも運命を共にしていたであろうし、デスラーがヤマトに興味を示すタイミングが遅れたか、もしくはは――。

その場合、ヤマトと全面对決に突入し、暗黒星団帝国との挟撃にあつてガミラスは――。

彼らの祖国への――上官への忠誠心の強さが、『強敵としてのヤマト』を葬り去る切っ掛けになるとは……。

彼らは間違いないがミラスを救った英霊に名を連ねるだけの功績を上げている。

決して忘れてはいけない。

彼らは最後の瞬間までガミラスが、デスラーが誇るべき、愛国の戦士であったのだと。

話を終え、デスラーと別れた進はふと雪が恋しくなつてその姿を求めた。進にも今日はこれ以上の予定は入っていないし、雪は今日は非番のはずだ。

たしか仲の良い女性クルーと一緒に海水浴を楽しむとか言っていたから間違いないだろう。

……ということとは水着姿を拝めるのか！ これはぜひとも探し出さねば！

進は先ほどまでのシリアスな空気を微塵も感じさせない軽やかな足取りで、雪を求めて歩き出した。

——ユリカの汚染はかなり深刻な域に達している様子であった。んで。

艦長服ではみない気がしないだろうと考え、すぐにホテルの自分の部屋に舞い戻ってコートと帽子をベッドに放り投げた進はすぐに海水浴が行われている場所にやってきた。

ヤマトのドックのすぐ隣の海では、休暇中の多くのクルーが海水浴やら日光浴を楽しんでいる。

いまは用がない修理作業用の資材運搬船を（ウリバタケが張り切つて）取り付けた浮きで浮かばせて浜辺やらボートの代わりにしている。

マザータウンの海辺はすべて整備されていて砂浜がない。わざわざ砂浜のある場所に移動するというのは——トラブルへの対処を考えて自重させた。

それでも海水浴はそれなりに盛り上がっているようで、泳ぎに自信がないものは運搬船やら防波堤の上やらで日光浴を楽しんでいるし、自信があるものや冒険者は少々沖のほうまで出張って釣りを楽しんでいる連中もいる（コスモクリーナー発動後に遺伝子バンクから復元した魚が自然に還つたのだとか）。

——その一団の中にラピスとアキトの姿も見取れた。どうやら同じく非番の部下に教わって釣りにチャレンジしているらしい。

——副機関長と一緒に休めなかったのだろう、山崎やその片腕として頭角を現しつつある太助の姿はない。

(お？ ラピスちゃんアタリか)

釣り針に魚が掛かったようで、ラピスが細腕に力を入れて竿を引いている。でもテンパったのかリールを引くのを忘れていたので、アキトやら機関班の連中が慌ててリールを回して魚を手繰り寄せていた。進は最後まで見届けなかったが、一〇分近い死闘の末ラピスは六〇センチはありそうな丸々とした魚を釣り上げたあしい。

その後、腕に覚えのある部下に捌いてもらって釣りたての魚をお刺身で美味しく頂いたんだとか(ラピス曰く「白米が欲しいです！」だそうな)。

クルーたちが羽を伸ばしている近くに『浜茶屋やまと』と幟を立てたテントがあつて、中では炊事科の何人かが提供された小麦粉を使った焼きそばとラーメン、ついにかき氷を提供している。

非番中のクルー(主に男子)と救援に派遣されたガミラスの技術者が何人か、長机に並べられた料理をパイプ椅子に座ってパクついていた。

麗しい水着姿の女性クルーに鼻の下を伸ばしているようで……。

こういうのは本当に万国共通なのだ、うん。

ちなみに水着はヤマトの工場区を一時的に間借りして作ったらしい。

デザインは全員共通のビキニスタイル。布地面積は広めだが、やはり日の光に晒されている腹部や背中が眩しく色っぽい。海水に濡れていることも相まって、美人が多い女性クルーたちを実に艶やかに彩っている。

——まさか遙々一六万八〇〇〇光年先で海水浴やら浜茶屋を楽しむことになるとは……。まあ見目麗しいのでよしとするか。いちやついているカップルも散見されるし。

(そう言えば、小腹が空いたな)

雪の姿を探す前に少し腹ごしらえでもするか。

そう思って進は浜茶屋やまとに足を運ぶ。そこで水着姿の雪にばったり遭遇、水も滴るいい女な艶姿を横目に楽しみながら、そこそこ美味しい焼きそばを啜る。

ついでにばったり出くわした大介から「お疲れさん」と労いと共にイスカンダルで取れたイカ（らしきもの）の丸焼きを奢られた。

焦げた醤油の香りと塩気が、プリプリした歯応えと甘みのある身の味と合わさってまさに絶品であった。

そんな穏やかだが忙しい日々がきっかり三カ月続き、ようやくヤマトはコスモリバスシステムへの改修を終え、波動砲以外のすべての武装が使用可能な状態に復旧していた。

マキシマムモードの反動やら七色星団からの連戦でのダメージは回復しているが、あくまで現状復帰が優先されたため時間短縮も兼ねてビーメラ4で行われた改修作業もほぼ初期化しており、外見は再建当初にほぼ戻っている。

ほぼ、というのはウリバタケの意見で主砲砲身の参戦章が残されていることと、第二主砲と第三主砲の錨マークが撤去された代わりに第二艦橋下とメインノズル直上に新たに描かれたり、レーダーアンテナは改装後のままだからだ。

改装の（ほぼ）初期化は（主にウリバタケが）嘆かれたが、ガミラスにデータが割れてしまったことを鑑みて、帰還後の大規模改修が決定付けられているヤマトにとっては些細な問題である。

もつとも、ヤマトが無事生き残ればの話だが……。

ともかくヤマトの性能が漏れるリスクを冒しただけあって、ガミラスの手で調整された超ワープ機関の取り付けと調整も終了を迎え、航行能力と自衛力も復活したヤマトはいよいよイスカンダルを出港、地球への帰路に就くことになった。

出航予定日と地球帰還予定日はすでに地球に届け出ており、予定どおりに行けば一カ月後には地球に帰り、コスモリバスシステムで環境を回復させて元通りの姿に戻せるはずだ。

「……古代艦長代理。ヤマトの成功を祈っています」

「はい。スターシアさんも、お元気で」

彼女は悩み抜いた末、イスカンドルに残ったままヤマトの成功を祈ることを選んだ。

守がヤマトに合流するために使用したガンダム（フレーム）のフラッシュシステムは、すでに元の場所に戻されている。

ユリカとのリンクを確立しているそのシステムを利用すれば、イスカンドルからでも彼女の助けになれるはずだと言っていた。

同様に移民計画の破棄や地球との同盟、さらに動きの見えない暗黒星団帝国への対処などについて協議し、ガミラス内部を盤石にするため本星を離れられないデスラーもヤマトが地球に辿り着く時期にはイスカンドルに来訪し、スターシアたちと共に奇跡を祈る予定になっている。

「それじゃあ兄さん。体に気を付けて」

「守、しっかりと」

「ああ。進も真田も、地球を頼んだぞ」

固く握手を交わす。

結局守はスターシアのためにイスカンドルへの残留を表明し、正式に受理されたのである。

スターシアはそれを受け入れるのに戸惑いがあったようだが、それを認めたのはやはり寂しさを隠せなくなったからだろう。

「スターシアさん、これから大変でしょうけれど、イスカンドルが再び発展していくことを祈っています。お体に気を付けて下さいね」

雪がそう言葉を掛けるとスターシアも、

「私も、地球の復活を心から願っています。雪もお元気で」

と返している。

彼女らはユリカにコアモジュール化処置を施すときに出会い、あまりにも妹そっくりな雪の容姿に思わず「サーシア……!？」と声に出して驚いていた姿は記憶に新しい。

雪も思わぬ反応に驚きながらも、納得したことで交流が始まり、少しずつ打ち解けていった。

そういった日々のなかでつい漏らしてしまった守への想いに対して、雪なりに助言を送ったことも、スターシアの決断に影響を与えているのだろう。

守の残留が決まったあと——スタシーアは『胚』を使ったイスカンドルの再生に着手すると意思表示したのである。

『胚』によつての再生は、イスカンドル民族が壊滅的な打撃を受けてもなお実行できるようにと最初から考慮された準備がされている。

『胚』とはイスカンドル人の遺伝子情報と培養施設と養育施設が一体になったシステムのことだったのだ。

このシステムで生み出されるイスカンドル人は、誕生からわずか一年という短時間で地球人換算で一六〇一七歳前後まで急成長し（知識などの吸収速度も強化されている）、その後は地球人よりもやや遅いペースで年を取るように遺伝子調整されている。

それに合わせた養育施設による効率的な学習によつて、急速に人口を回復することができるといふ寸法だ。

これもまた、使い方を誤ればとんでもない社会を作ってしまう危険性を秘めた、イスカンドル負の遺産の一つであり、スターシアも使うつもりはなかった代物である。

これも含めて消滅による永遠の封印を願うだけなら、イスカンドルを爆発させてしまえばよかった。

だがスターシアも、歴代の王たちも、ガミラスを道連れにすることをよしとできなかったのだ。

ガミラスが侵略者になつてからも結局決断されずここまで来て——その封印を解く道を選ぶとは……。

その決断が結果として隣人の暴虐を諫め、遙かなる星の友人たちの未来を拓くことになつたのは、運命とでも呼ぶべき代物なのか、それとも——。

進には、うまく言葉にできないなにかが感じられた。

「——古代艦長代理」

「はー」

「地球との協議の結果どおり、私が提供したイスカンドルの技術の使

用に関して規制は致しません。しかしどうか、扱いは細心の注意を払ってください。……ユリカにも警告しましたが、強過ぎる力というもの、ときに相手のみではなく自分自身さえも傷付けてしまうものです」

「……骨身に染みています。地球が間違った道に進まないよう、力の及ぶ限り尽くしていこうと考えています」

できることは決して多くはないだろう。進は組織の中でも下っ端の人間だ。ヤマトクルーの中で最高階級のユリカですら大佐。ヤマトでの功績を加味して出世できたとしても准将——いや少将に行けるかどうか。多少の発言権と権力を持てても、地球全体の意向を決定することはできない。

協力してくれているネルガルやコウイチロウの力添えがあっても難しい道のりだろう……。

だがやらなければならぬし、やりがいのある仕事だと思う。

「——その言葉を信じます。次にお会いするときには、イスカンドルも賑やかになっていることでしょう」

隣に立つ守に視線を巡らせながら、スターシアはとてもきれいな笑みを浮かべていた。

別れを終え、タラップを降りていくスターシアと守を見送ったあと、気を利かせて真田は先に戻ったが、進と雪はドックを去っていく守とスターシアの背を最後まで見送った。

「……兄さんとスターシアさんは、イスカンドルの新しいアダムとイヴになるんだな」

「そうね。楽な道ではないでしょうけれど、あの二人ならきつとがんばれるわよね。ガミラスの問題もいくぶん改善されているのだから」

「ああ……だから、次は俺たちの番だな」

「えっ？」

急に話を振られ、雪は胸が高鳴る。

いつの間にか一緒にいるところが当たり前前のようになった二人だが、考えてみれば告白をしたり受けたりして、ちゃんとしたカップルに

なったわけではなかった。

ということとはつまり――。

「いまはまだ艦長代理としての仕事が残ってる……だから、地球を救ってからぜひとも聞いて欲しいことがあるんだ」

「……そ、そういう言い方は縁起がよくないと思うわ」

照れ隠しも交じって、つついっ軽口を叩いてしまう。

しかし雪の世代ともなれば創作についてまわる様式美――死亡フラグなどは慣れ親しんだメタな用語であり、お約束だ。

まさかりアルでそれを経験することになるとは……。

これはある意味死活問題だ。

「言いたいことはわかるけど、俺はそれをへし折ってみせるから安心してしろよ」

こちらも言ってからテレが出たのか、その意図を理解した返しをする。当然ながら進もゲームだの漫画だのその手の知識は得ている。だからこそできた返しだろうが……。

このまま漫才のままではらちがあかないと思ったのか、進は真剣な眼差しで宣言する。

「続きは帰ってからだ。さあ、行くぞ雪！俺たちの母なる星を蘇らせに！」

それから一時間としない内にヤマトは発進準備を整えた。

海に隣接したドックに海水を注水して、正面の隔壁を解放する。

「ガントリーロック解除！ 微速前進〇・五！」

艦体を固定していたガントリーロックが開いて、艦体が自由になる。

海面に浮かんだヤマトが補助ノズルを点火、ゆっくりと海面を進んでドックから外に出る。

(やっぱり、ヤマトには海がよく似合うな)

進は海面に行くヤマトの状況に、ヤマトが戦艦大和であった頃はこんな感じで海を往っていたのかと想像する。

ヤマトは徐々に速度を上げながら、海を掻き分け波立てながら進んでいく。

「補助エンジン、第二戦速へ」

「相転移エンジン内、エネルギー注入」

海を進みながら、一番から六番の相転移エンジンにエネルギーを注入。始動準備を進めていく。

ヤマトの眼前の海は穏やかで、水面に日の光が反射してキラキラと輝いている。その旅路を祝福しているかの如く。

「相転移エンジン、エネルギー充填一二〇パーセント。フライホイール始動！」

手慣れたエンジンの始動準備。

ラピスも機関室の面々も、再建当初から「不安定」だの「気難しい」だのと散々苦労させられたエンジンを苦もなく操り、三〇〇メートル級の宇宙戦艦では最強と目されるエンジンを目覚めさせていく。

カスケードブラックホール破壊任務以来となる再始動に、エンジンが喜び震えているような錯覚すら覚えそうなほど、快調な滑り出しだった。

一番から六番までの小相転移炉心に取り付けられた小フライホイールが赤く発光、緩やかに回転数を上げていき、生成したエネルギーが後方にある大炉心に導入され収束。取り付けられた大フライホイールが回転を始めて発光する。

「補助エンジン、最大戦速へ」

「波動エンジンへの閉鎖弁オープン。波動エンジン内、圧力上昇へ」

「圧力上昇へ！」

機関室で太助が機関制御室のコンソールを操り、波動エンジンの始動準備を進めていく。

相転移エンジンが生み出したエネルギーが波動エンジン内へと供給を開始。波動エンジンが唸りを上げる。

「エネルギー充填一二〇パーセント。フライホイール始動！」

「フライホイール始動！」

山崎がタイミングがばつちりに波動エンジンの第一・第二フライホイールを始動させる。

並行世界のイスカンダルから受け継ぎ、この世界のイスカンダルによつて蘇ったヤマトの心臓が、再び鼓動を刻み始めた。

「波動エンジン点火、一〇秒前！」

大介がカウンタダウンを開始する。

ヤマトは最大出力に達した補助エンジンの推力で海面を猛然と突き進んでいる。

「五……四……三……二……一……接続！」

「点火！」

ラピスと大介が阿吽の呼吸でスロットルレバーと接続レバーを引く。

波動エンジンから供給されるタキオン粒子が、接続されたメインノズルから噴出を始めた。

「ヤマト、発進!!」

進の号令に復唱した大介が、操縦桿を引いてメインノズルの推力を大気圏内最大出力にまで上昇させる。

メインノズルのスラストコーンが引き込み噴射口を広げると、メインノズルから発していた輝きが増し、煌々としたタキオン粒子の奔流が勢いを増す。

ついにヤマトはイスカンダルの海から浮上して宙を舞う。

艦底から膨大な量の海水を滴らせながら、メインノズルの噴射圧で後方の海面を二つに切り裂きながら、ヤマトがイスカンダルの空へと飛翔する。

「大気圏内航行、安定翼展開！」

大介が幾度となく世話になった多目的安定翼の開閉スイッチを押す。四分割されたデルタ型の安定翼がヤマト舷側、喫水線部分に出現した。

翼を広げたヤマトは、イスカンダルの澄んだ青空を悠々と飛翔。一

分に満たない短時間でイスカンドルの大気圏を離脱して静寂な宇宙空間へとその身を繰り出した。

さあ、地球に帰ろう。

そんな言葉が似あうほど、堂々とした姿であった。

ヤマトがドックを出てから宇宙に飛び出すまでの間、マザータワー最上階の展望室で守とスターシアが身を寄せ合い、大きく手を振りながらその姿を見送っていた。

いつの日か訪れる再会を願って。

その後ヤマトはガミラスのデストロイヤー艦一〇隻を護衛艦として引き連れながら、順調に地球への帰路に就いていた。

旅立ちに孤独であったのに帰りに同行者が増えるというのは違和感を感じるが、そんなこともあるのだろうかとうと自己完結する。

「地球に到着するまでの間、お世話になります」

とは地球との交渉を任されたタラン將軍の言葉だ。

彼は少し前のドメル同様、ヤマトに同乗して地球への旅路に就いている。デスラーからの信も厚く、軍事にも政治にも明るいことも決め手になっていた。

デスラーは忙しくてとても本星を離れられず、副総統のヒスもそのフォローに大忙しとあれば、必然的に彼が最適なのだとか。

ドメルはイスカンドルを立つときに見送りに来てくれたはしたが、防衛艦隊や今後の戦術についての会議に参加するため同行できなかった。

それでも別れの挨拶ができただけマシだろうか。

また、あの一家と会いたいものだ。

進は遠き知人を思つてセンチメンタルな気分になった。

ヤマトの帰路はガミラスが算出してくれたものをそのまま利用している。またタランチュラ星雲を通過するのはリスクが高いので、ガミラスの協力で完成した連続ワープを使用して迂回するコースを選んだ。リスクが少ない分時間が掛かるのは仕方のないことで、重力干

渉を避けて安全に進んだこともあり、大マゼラン雲を突破するのに一〇日を要した。

ワープの最大飛距離から考えると距離に対して時間が掛かり過ぎている印象があるが、これでも守と合流して改良する前のヤマトなら軽く三倍、改良後でも倍は掛かっていた工程である。

そして銀河間空間に出たからは連続ワープが本領を発揮。

なにしろ約一四万光年もの距離をわずか一〇日で通過することに成功したのだから、その威力の凄まじさが伺えるというものだろう。

途中バランス星の基地に立ち寄ったが、やはり被害は大きく再建はあまり進んでいるように見えない。

しかし機能そのものは維持していることが伺え、ゲール司令によれば「民間人は全員ガミラス本星に戻した。安心しろ」とのことであった。

いまは地球との国交の拠点として再建を進めているのだとか。

地球との和解が成立しデスラーの主義主張が多少変化しても、彼なりにガミラスを大きくしていきたいという願いは消えていないだろうしそれを否定する権利は誰にもない（強いて言えば侵略された側にあるくらいだろうか）。

——進としては、穏便な進出であってほしいと願うだけだ。

しかしゲール司令と言う人物はさすがドメル將軍の副官を務めただけのことはあり、この被害になんだかんだ言いながら基地としての体制を維持している手腕は見事なものだと、進はゲールに対して敬意を示しつつバランス星をあとにした。

——かつては中間地点としてあれだけの時間をかけて目指した場所なのに、いまはわずか五日で通過してしまえるとは……。

その後も航海は順調だった。

次元断層の位置もガミラス側がおおよそ把握してくれていたこともあり、ワープアウト地点と重なって次元断層に落ち込むトラブルもなく、無事天の川銀河外周部にまで到達。

そこからの航路も、散々てこずらされたオクトパス原始星団を迂回するルートを経て、ようやく太陽系の近くまで戻って来た。

「——本当に、本当によく帰って来てくれたなヤマト!!」

さつそく長距離通信で地球に連絡を取ると、感激の涙を流すコウイチロウの姿がメインパネルに映し出された。

「ミスマル司令、ヤマトは七十二時間後にアクエリアス到着を予定しています。到着後にナデシコCと合流、システムの最終確認を終えたのち、コスモリバーシステムを起動する予定です」

「うむ。ナデシコCにはワシも乗艦する予定だ。——少しでもユリカのためになればと思って、旧ナデシコのクルーにも声は掛けておいた……みんな、了承してくれたよ」

「——そうですか」

それを聞いて進も嬉しく思う。一人でも増えてくれれば、ユリカが助かる可能性が上がるのだから。

ヤマトは太陽系内にその姿を現していた。

念のため、ガミラスが発見し今後開発を考えていたという第十一番惑星の姿も見ておくことに。

実際に地球人類がこの星に関わるようになるのは、もう少し先のことになるだろうが、見ておいて損はない。

やや緑掛かった地表を持つが、太陽の遠さもあつて植物の類は見られず水も確認できない。

タランによれば開拓する際はそれらを補いつつ大気組成を改造し、バランスでテストしていた人口太陽を設置することで対処する予定だったらしい。

この星をわざわざ開拓するのも、手付かずゆえ資源がまだ十分残っているであろうと予想されたことと、星系の最外周と言える場所に拠点を造ることは防衛線の形成やらで利点があるかららしい。

それにしても、ここまで恒星から離れた星を居住可能にしてしまえる科学力はさすがと称賛せざるをえないな、とありきたりな感想を抱かされた。

第十一番惑星を通過したヤマトはそのまま地球目指して航行を続けた。

海王星はおろか、冥王星の軌道からも大きく離れた（太陽↪海王星

間の距離の二倍以上) 第十一番惑星を離れると、しばらくは静かな時間が流れる。

ワープで一気に地球近海に戻ることも不可能ではないが、恒星系内では重力干渉の問題もあってワープ航路の算出がそれなりに面倒であるし、地球側も最終的な準備を完了するにはそれなりの時間が必要だ。

——結局通信越しで簡潔に聞いたに過ぎないが、ガミラスとの終戦に関しては市民の間で相当荒れた話題となったらしい。

戦争が終わることは素直に喜ばれたが、和解はともかく同盟関係を構築するという点に関しては賛否両論でなかなか収集がつかなかったらしい。

一時はデモなどで相当ヤバイ状況になりかけたらしいが、ここまで地球を支え続けた政府関係者は誠心誠意市民の説得を続け、どうにか鎮静化に成功したのが、ヤマトがイスカンダルで改修を終えた時期だったらしい。

市民が渋々でも納得できたのは、「ガミラスが早々に裏切つてもヤマトがなんとかしてくれる」という、進たちからすれば「そのとおりだけでももつと言いがなかったのか」と突っ込みたくなる丸投げじみた言葉だったと言う。

政府は最終手段としてヤマトが挙げた戦果をまるまる公にして、その力をガミラスも認めていることや、トランジション波動砲の威力を示すという形でどうにかこうにか『保険』として認めさせることに成功したようだ。

つまり、市民にとつてヤマトは信頼に値する存在として認識されているということだろう。

——どうやらまだしばらくの間は、地球はヤマトを眠らせることができないらしい。

それからヤマトはきっかり七十二時間をかけて帰還した。

途中、航路上にあった火星にだけは立ち寄ってサシアの墓参りを全員で済ませておく(タラン将軍を始め、ガミラス側からも謝罪交じりの追悼が行われた)。

地球に最後の希望を繋いでくれた、偉大な恩人だ。いくら礼を尽くしても尽くし足りない。

艦内で観賞用として飼育されている花を集めた花束を墓前に手向け、ヤマトは火星を去った。

「地球だ！」

第一艦橋の窓から真つ白い星の姿を見て、大介が泣きそうな声で叫ぶ。

おおよそ八カ月ぶりを見る、母なる星の姿。

変わり果てた姿はいえ人類が生まれ育った命の星の姿を目の前にして、大介だけではない、すべてのクルーが「帰ってきた……！」と感激で胸が一杯になる。

——あとはコスモリバーシステムが成功すれば、元の青々とした美しい星に戻るはずだ。

白い地球の眼前には、ヤマトをこの世界へと導いたアクエリアス大氷塊が太陽の光を受けてキラキラと輝いている。

ヤマトが発進したときに砕いた一角はそのままの状態で放置されていて、周囲に飛び散った氷塊の一部が残留して浮かんでいた。

……そのアクエリアスを背に、ヤマトと向き合うように改修を受けたナデシコCが佇んでいる。

ヤマト発進までの間、地球最強の艦としてギリギリの戦いを潜り抜けてきた歴戦の勇士の姿に、短い時間とは言え実際に乗り込んだ大介と進、そして長い間共に戦ってきたルリとハりは感慨深げに敬礼を送る。

——あの艦が、これからヤマトを助けてくれる。

ついにヤマトとナデシコが共に手を取り合い、困難に立ち向かう機会が巡ってきたのだ。

ヤマトはアクエリアス大氷塊の上でナデシコCと合流を果たした。

ナデシコCはヤマトの真後ろに移動すると、特徴である三本のディストーションブレードを開き、メインノズルと補助ノズルを停止したヤマトを後ろから抱きかかえるようにして合体した。

接触回線による接続で通信を確立、ナデシコCはヤマトのサブコンピュータとしてコスモリバスシステムの補助を行う。

ナデシコCから発進した連絡艇がヤマトの下部大型発進口からヤマト艦内に次々と着艦していく。

連絡艇からは協力を受諾した旧ナデシコクルーや、コウイチロウにアカツキを始め、ユリカに縁のある人々が次々とヤマトに乗艦してくる。

「——本当によくがんばったな、古代進君……！」

感激して進と握手を交わすコウイチロウに進は答えた。ユリカのおかげだと。

「——艦長の教育がよかったです——さあ、最後の仕事を始めましょう！」

ナデシコCと合体したヤマトは、安定翼を広げて波動砲の砲口を地球に向けた。

コスモリバスシステムと化したヤマトの波動砲は一見以前と変わらないように見える。だが、砲口奥の装甲シャッターが解放されると、中からかつてヤマトが自沈する時に使用したボルトヘッドプライマーを彷彿とさせる装置が顔を覗かせた。

それは発射口から飛び出すギリギリまで伸びると、先端のリング状のパーツが四つに分割されて開く。

機関室に移っていたラピスが祈りを込めてユリカを保護している停滞フィールドのスイッチをオフにして、いくつかのスイッチとレバーを操作。

電算室のルリがラピスからの合図でコスモリバスシステムへの回路を繋げて、ユリカを含めたヤマトのシステムを改めてシステムと接続。

接続テスト——エラーは見られない。コスモリバスシステムは正常に稼働している。

ルリたちがプログラム面からチェックするのと並行して、工作班による目視点検も行われる。

波動砲の収束装置とライフリングチューブに置き換わるように設置されたシステムのインジケータはすべて正常。接続ケーブルはすべて漏らさず接続された。

「……コスモリバーシステムの起動準備、すべて完了しました」

真田の言葉を聞いて、進は眼前に差し出された波動砲の発射装置をゆっくりと両手で握りしめる。

「……ヤマトの戦士諸君。そして艦長のために集まってくれたみなさん。コスモリバーシステムの起動準備が整いました」

クルーたちはそれぞれに持ち場で、ユリカのためにヤマトに乗艦した人々は中央作戦室を間借りして、進の言葉を聞いていた。

たった一度きりのチャンス。

地球が救える可能性は極めて高いが、どの程度の回復になるかはやってみなければわからない。

リバーシンドロームの対策もするにはしたが、実際どうなるのかはやってみなければわからない。

そして……ユリカの未来。

すべてがこの一度きりのチャンスに掛かっている。

「起動までのカウントダウンを開始します。六〇……五九……」

緊張が高まっていく。

あと少し。あと少しで地球は元の美しい姿を取り戻し、人類は破滅の淵から救い出される。その先にどのような未来が待ち構えているのかは——わからない。

ヤマト出自の世界のように幾度も侵略者が来るかもしれないし、来ないかもしれない。ガミラスとの同盟もどこまで続くかわからない。

苦難は多いだろうが、挑まないわけにはいかない。

——生きるために、生き残るために。

「——〇……九……八……」

カウントが残りわずかになる。

相転移エンジンと波動エンジンの出力が波動砲のときと同じ一二

〇パーセントに達する。

真のポテンシャルを封じた状態であっても、コスモリバーシステム

ムを完全に起動できるだけの莫大なエネルギーが生成され、いままさに解き放たれんとしている。

「三……二……一……起動！」

カウントゼロ。進はいまやコスモリバーシステムの発動キーとなった波動砲の引き金を引いた。

発射口から飛び出していた放射機から眩いばかりの光が溢れ出す。

膨大なエネルギーを収束させて撃ち出す波動砲と異なり、コスモリバーシステムが放出したエネルギーはまるで霧のようにも見える青い不可思議な光が円錐状に広がっていき、やがて地球を包み込み始めた。

一発、二発、三発と、いつものトランジション波動砲と同じように計六発のエネルギーが撃ち込まれ、そのたびに地球が輝きに包まれ――変貌していった。

システムが起動を開始したとき、ユリカは電子の海の中に意識を映している――そんな不可思議な感覚の中にいた。

データスーツを通してシステムと一体になったユリカは、不思議な感覚の中でその命を急速に燃やし尽くす演算ユニットとの完全リンクを実行、意識を演算ユニットと同化させ、未来も過去も現在もない、不可思議な時間の流れに身を置いた。

その不可思議な空間の中から、ユリカは必死に目的とする情報を――ガミラスによって環境を激変させる前の地球の姿を探す。

並行宇宙ではない、この宇宙の過去の地球の姿を追い求めてユリカは未知なる空間を動き回る。

――見つけた。

ユリカは自身が一体化したコスモリバーシステム――いや、宇宙戦艦ヤマトの記憶を頼りにその姿をついに見つけた。

「ユリカ、あの地球がそうです！」

「うん！」

ヤマトの力強い宣言を肯定するかのようには、ユリカはその地球の姿に手を伸ばす。スターシアの言葉どおり、一度は地球の自然に帰った

ヤマトはたしかな案内人となった。

その身に宿したこの世界の大和がそれを助け、宇宙戦艦ヤマト自身の強い使命感と地球への愛が——そしてユリカの家族に対して、友人に対して、それらを取り巻く世界に対して向けられた愛が重なり、いま奇跡を起こさんと世界に働きかける。

そうやってヤマトが放った波動エネルギー——いや、時空干渉波が母なる星——地球に作用していくのだ。

その男性は、最後の瞬間まで最愛の家族を抱えて、覚めることのない永い眠りについた。

ガミラスの遊星爆弾が降り注ぐようになり、どんどん気温が低下していくなかで、避難が遅れて家族そろって取り残されてしまった。

己の失策を悔やむも時すでに遅し。逃れようのない死を間近に控えた。

最後の最後まで互いに抱きしめあい、「——ずっと一緒だ」と言葉を掛ける。

——軍人になってガミラスと戦う。そう言って出て行った息子に、幸在らんことを。

最初に娘が逝った。

わが子の死を嘆き悲しんだ妻もそのあとすぐに逝った。

一番最後に、冷たく凍り付いた妻と子を抱えた男が逝った。

ガミラスとの戦争が始まってから、あちこちで頻繁に見られた悲劇の光景。彼らの時間は二度と戻らず、取り残されていくはずだったのだ。

しかし男性は、形容しようがないような暖かななにかに包まれる感覚を覚え、薄っすらと目を開けた。

視界には、最後の瞬間まで抱きしめていた最愛の家族の姿。腕にはその温もりがある。

(……温もり?)

男ははつとした。

その両腕に抱かれた妻と娘の胸が、小さく上下している。薄く開いた口から呼気が漏れている。

堪らずその身を揺すって声を掛ければ、小さな呻きと共に妻と子供が目を覚ます。

奇跡だ!!

男性は神に感謝し、改めて冷静になって周りを見渡す。

——わが家だ。

逃げ遅れた彼らが最後の地として選んだのは、苦勞して稼いだ金で手に入れたマイホーム。

凍り付き荒れていた面影はない。ガミラスが来る前の平穩そのものの姿。

——天国だろうか。

疑いながらも男は試しに自分の頬を抓ってみる。

——痛い。

三人揃って訳も分からないまま、閉め切っていた窓を開け、雨戸を開ける。

瞬間、刺すような光が家族の目に飛び込んで来た。

……日光だ!

思わず開け放った窓から外に飛び出す。

眼前に広がる光景は、ガミラスによって凍てつく前の光景そのものだ。

記憶にあつた家屋の損壊すら修繕されていて、男性たち一家以外にも状況を飲み込めずに右往左往している住人たちの姿が見える。

——みんな、取り残された者同士だ。

そんな彼らの頭上を、小鳥が「チチチッ!」と鳴きながら飛び去って行く。

海が好き男の希望で、海を望める立地に建てられたわが家の庭。その先に見えるのは、青く美しい広大な海の姿。

「いったい、なにが起きたんだ?」

男は知らなかった。

地球を発った一隻の宇宙戦艦が奇跡を起こしたことに。

——彼がすべてを知ったのは、それからまもなくのことであった。

ヤマトと一体化したユリカは、その光景を外部カメラの映像を通して目の当たりにしていた。

「上手くいきましたね」

うん。お疲れ様、ヤマト」

「——あなたもです、ユリカ。奇跡が起きましたよ」

ユリカは右隣に立っている女性に微笑みかける。女性——とはいつても、その実像はややぼやけている。

日本系の顔立ちで、ユリカと同じく腰まで髪を伸ばした肉付きのいい女性だということまではわかる。だが、それ以上の認識はない。当然だ。この姿はヤマトの魂を擬人化した、いわばアバターなのだ。

コスモリバースシステムと化したヤマトとユリカが一体化したことで、魂の在り方がより生物に、いや人間に近づいたのだろう。

それは人型であるがゆえにより人間の意思を反映しやすく、ヤマトと共にある中で影響を受けていたガンダム之力添えも大きかった。ガンダムらのフラッシュシステムも独りでに起動し、彼女らの助けとなってくれたのだ。

——だからこそ、フラッシュシステムとのリンクがより強力になり、想定外の事態を引き起こしたのだろう。

ヤマトは時空干渉波のキックバックで地球の『想い』を聞いた。

そこには地球が抱きかかえている多くの命の想いが、自身に搭載された物と、ガンダムに搭載されたフラッシュシステムを通してヤマトに、ユリカに——コスモリバースシステムに伝わってきた。

その身の大半を海底に残したままのこの世界の大和。

そして地球の土に還ったはずの沖田艦長も力を貸してくれた。

凍てついた時間に閉じ込められてしまった多くの命の声を、届けて

くれたのだ。

それを聞き、反映しようと足掻いたヤマトとユリカの気持ちだが、コスモリバースシステム本来の機能を超越した成果を上げた。

そう、氷に閉ざされ命を落とした人々の——人以外の生態系の多くが、再びその時を刻み始めたのである。

——彼らの日常を支えていた家屋すらも、在りし日の姿を取り戻していった。

本来の機能を遥かに上回る——奇跡が起きた瞬間である。

——そして……。

「尻尾を掴みました。あの異次元生命体です」

ヤマトはやや怒気の籠った声で告げる。ユリカも険しさを感じる声で応じる。

「——まさか、コスモリバースの時空干渉波のおかげで接点を持てるとはね。これならなんとか、支援できるかも」

地球が実際に動いてくれるかどうかは定かではない。だがユリカは働きかけるつもりだ。

知ってしまった以上、関わってしまった以上、決して見過ごすことはできない。

——たとえ自己満足と罵られようとも、そして支援が事態收拾と言う点から見れば決して十分にはならないとわかっていてもだ。

「——さて、ユリカはそろそろ戻ったほうがいいですよ。みな、心配しています」

「——そうだね。ヤマト、ひとまずはお疲れ様。また一緒に飛びたいね……」

「……地球と人類がある限り、その機会はず必ず来ます。でも、今度は平和な目的で飛びたいものですね」

コスモリバースシステムの停止を確認した工作班と医療科を中心に、ユリカをコスモリバースシステムから切り離す作業が開始され

た。

カプセルを満たしていた液状ナノマシンを排出、ユリカをカプセルから解放しようと作業を進める。

システム発動時、全員必死になって彼女の再生を願った。その思いが届いたのかどうかは定かではないが、ヤマトが時空干渉波を発射するたびに極少量の干渉波がヤマトに向かって逆流したことが確認されている。

同時にヤマトのフラッシュシステムはもちろん、ガンダム——特にダブルエックスのシステムも強い反応を示していた。

はたしてユリカは無事再生されたのか。

ヤマトへの被害はどうなっているのか。

さまざまな疑問が頭を過るなか、一〇分ほどの時間をかけて液状なのマシンの排出が終わる。

作業員に交じってアキトとルリ、そしてコウイチロウも機関室に飛び込み、作業の進展を見守っていた。

カプセルを開放する手はずが整うなり、ラピスも駆け寄り固唾を飲んでいる。

カプセルの傍らで作業を指示していた真田とイネスが顔を見合わせて頷くと、真田は震える指で開閉スイッチを押し込んだ。

(上手くいっていき……！)

パシュンッ！ と空気が抜けるような音と共にスムーズにカプセルの蓋が開いていく。固唾を飲んでその動きを見守る。

蓋が完全に開かれ、ついにユリカの姿が露になった。

——ああ、神様……！

その場に居合わせた全員が天を仰ぎ、それから盛大に涙を流した。

——ユリカの体は、見た限りでは在りし日の姿を取り戻していた。

密着するように作られたデータスーツ越しに見える体は、元気だった頃の肉付きを取り戻している。

ヘルメット越しに見える顔色もいいし、頭髮も元の色艶を取り戻している。

「ユリカ……ユリカ……」

アキトはそつと眠ったままのユリカの肩を揺する。みなが固唾を飲んで見守る。数回揺さぶられて呻き声をあげるユリカ。

生きてる！ と喜びも露わにした瞬間、

「う〜ん……あと五分……」

「……」

お約束を忘れないユリカのサービス精神にイラついたアキトとルリは、互いに顔を見合わせて頷きあった。

そら、ツツコミの空手チョップじゃ！

「いったあ〜いっ!!」

一気に覚醒したユリカが抗議の声を上げながら目を開けると、喜びで顔を埋め尽くしたアキトたちの姿が見える。

——デジャブを感じるなあ。

ノロノロと起き上がろうとするが、イマイチ体に力が入らない。すぐに察してか、アキトが抱きかかえてくれた。

——お姫様抱っこは嬉しい。彼女にとつてもつとも至福と言える時間だ。

その後はもう、お祭り騒ぎだった。

ナデシココから移乗してきたかつての仲間たちはもちろん、ヤマトの仲間たちも次から次へと機関室に押し寄せてきた。

何度かジユンが声を張り上げてても効果はなく、コウイチロウは大声でユリカの名を呼んでは男泣きし、ルリとラピスは抱き合って嬉し泣き。もうあちらこちらで鳴き声と歓声の合唱が鳴り響いて收拾がつかない。

「よかったね、テンカワ」

いつの間にやらすぐ近くに來ていたイズミがそうアキトに声をかけたたり、

「——苦勞が実ったな」

やっぱり人込みを掻い潜って声を掛けに來た月臣の姿もあつたりした。

そして接近こそ叶わなかつたようだが、アキトの視界に入ったアカ

ツキが満面の笑みで親指を立てて祝福してくれた。

——人の輪が生み出す暖かさをこれ以上なく実感した瞬間だった。だが、その人混みの中に進の姿はなかった。

「——古代君なら、第一艦橋で待っています。任された仕事をきちんとやりきるって……」

雪がそう教えてくれた。

クルーにひとしきり揉みくちやにされたあと、ユリカはアキトに抱えられたまま第一艦橋を訪れた。

第一艦橋で、進は独りユリカが戻ってくるのを待っていた。大介すらも駆け付けたというのに、すっかりと自分の役割を果たして。

「……お帰りをお待ちしていました、艦長……」

目尻に熱い涙を湛えながら迎える進。

「うん……ありがとう進。ご苦労様」

ユリカはようやく動くようになった右手を差し出して握手を交わした。

「——最後の仕事は、お任せします」

言うなり進は自身のコートと帽子を脱いでユリカに渡した。

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

ユリカはアキトに艦長席に座らせてもらって、コートと帽子を身に着ける。

それからさほど間を置かず、艦橋要員が自分の席に戻ってきた。

タラン将軍も駆け付け、「ご快方、おめでとうございます」と祝辞を

送ってもらえたので、ユリカも「ありがとうございます！」と元気よく答えた。

「艦長！ ナデシコCが！」

艦内管理席で自己診断モニターを確認していた真田が突然叫んだ。

メインパネルに表示してもらおうと、ヤマトの後方カメラが異変を捉えていた。

——ナデシコCが急速に赤錆に覆われて、朽ち果てていく。

作業員が乗っていた第二船体だけが緊急離脱したが、それ以外の艦体はあっという間に真っ赤に染まり、ボロボロと崩れ落ちていった。

——ナデシコが、私の身代わりになってくれたようです……——
ヤマトの寂しげな声が聞こえる。

ナデシコは、最後の最後でヤマトにすべてを託して宇宙へと消えていく。

本来ヤマトを蝕むはずだった、リバースシンдрロームによる崩壊を肩代わりして——。

ユリカは自分の原点というべきナデシコの名を継いだ艦の最後を、モニター越しながら見届けた。

かつて艦長として指揮を執ったルリも、乗組員として共に戦ったハリも、進も、大介も、その最後の瞬間を見届ける。

——言葉は要らない。あとは全部引き受けた。安心して眠ってほしい。

静かな別れを告げたあと、ユリカは眼前を見据えて最後の命令を下した。

「ヤマト、発進！ 目標は地球よ!!」

メインノズルから煌々とタキオン粒子の噴流が迸る。

ナデシコの残骸に別れを告げ、分離した第二船体とガミラスの護衛艦隊を引き連れながらヤマトは宇宙を進んでいく。

その眼前には、青く美しい姿を取り戻した、母なる地球の姿があった——

こうして、人類は滅亡と言われる日まで一一七日を残し、救われたのであった。

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット

完

短編 ラピス・ラズリの日常

お小遣いは有限だ。

いや、お小遣いに限らずお金は有限だ。

だから大事に使わなければならない。

無駄遣いは極力避け、本当に必要なものをピンポイントで狙うべきだと思う。

そうしなければあつという間にお金は尽きてしまう。収入が制限されているのならなおさら慎重を期さねばならない。

元宇宙戦艦ヤマト機関長、ラピス・ラズリは四人用ソフアーでうつ伏せに寝転びながら、両手で抱えた『携帯型ゲーム機』の画面と、背もたれに立て掛けているピンクの携帯電話に映し出された、SNSアプリのメッセージログを交互に見比べて品定めを続ける。

携帯ゲーム機の画面には、そのゲーム機で購入可能なゲームのダウンロード販売を行っているストアの画面が映し出されている。ラピスはその画面の索引を辿りながら、お眼鏡に叶うタイトルを見つけ出すべく苦心していた。

手持ちのお小遣いで購入出来るゲームは一本だけとなれば、仕損じるわけにはいかない……。緊張感を漂わせながら、最近になってようやく新作がリリースされるようになったストアのページを進めて吟味していたところだったのだが……。

「ラピス、ご飯の準備出来たぞ！」

と、正式に父となったテンカワ・アキトが告げたとなれば小休止せざるを得ない。

「あ、は〜い！」

なぜなら空腹だから。育ち盛りに父が振舞うおいしい食事を冷ますわけにはいかないと、ゲーム機をスリープモードにしてからソファアの座面に置いたまま、キッチンに足を運ぶ。

今日の夕食はリクエストした焼うどんだ！

新宇宙戦艦ヤマト&ナデシコ デイレクターズカット
短編 ラピス・ラズリの日常

ラピスがビデオゲームにはまるきつかけは、八か月ほど前に遡る。
ヤマトがイスカandalへの長旅を終えてしばらく。

地球の復興活動がガミラス協力のもと急ピッチで進められる中、かつてのヤマトクルーもそれぞれの生活に戻りつつも、復興活動に協力する日々を送っていた。

——その前に。

「ではー、ヤマトの地球帰還と、その他もろもろの成功を祝しまして……かんぱーい!!」

ヤマトの帰艦から二週間。

ナノマシンの摘出手術を終えて経過観察のため入院していた元ヤマト艦長テンカワ・ユリカは、退院早々わざわざ遅らせて貰っていた「ヤマト帰還祝福パーティー」で音頭を取っていた。

場所はヤマトが停泊している宇宙船ドック。棧橋部分にテーブルを設置して、ヤマトクルー全員と関係者が揃いも揃って飲めや歌えの大騒ぎという賑わいを見せていた。

もともとナデシコの関係者は全員ノリの良い奴ばかり、加えて内輪向けのパーティーなので無礼講もいいところと、開幕当初から混沌の気配を漂わせていたと、のちにラピスは述懐している。

そんなパーティーで最初に皆がしたことは、「ヤマトに乾杯!!」と称して各部門の責任者がヤマトに向かって酒瓶（中身入り）を投げつけることから始まった。もちろん乾杯の代わりなのだが……。

「進水式ではないのですが……喜んで受け取っておきます」

とは困惑気味のヤマトの言葉。祝いの席に酒は必要だと豪語する連中に押され、まったく飲めもしないのに密かにデスラーから送られていた、ワインにも似たガミラスの酒をグラス一杯空ける羽目になり早々に目を回して沈黙したユリカを介抱するのは、夫テンカワ・アキトと親友エリナ・キンジョウ・ウォンの役目だった。

というよりも、ユリカを助けず逆に利用して無礼講の場から距離を

置こうとした節もあると、姉であるホシノ・ルリは推測していた。だとすればなんとなくひどいと思える。

最初ラピスは どうしてそんなにも嫌がっていたのかわからなかったが、それから酒で酔った男連中の一部から「で、夜はどうだったー!」と、結局捕まったアキトがグラスを握らされて問い詰められているのを見てようやく理解した。

要するに悲劇で三年もの間引き離され、再会を果たしてからもユリカの病気が原因で夫婦らしい生活を送れていなかったことを引き合いにからかわれるのが嫌だったのだ。

最近では年齢相応の義務教育を受け始めているラピスなので、男女の営みというやつに関しても知識を得始めている。もともと、まだどうしてそれがそこまで恥ずかしいのかよくわかっていない点はあるが。

助け舟を出したのはこの場において最も地位が高い、ヤマト計画の事実上の責任者であったミスマル・コウイチロウその人。さすがに無事に元のさやに納まった娘夫婦がからかわれているのは見過ごせなかった——ように考えていたのだが、実際はほかならぬ自分自身が「で、孫の顔はいつ見れそうだ?」などとアキトを問い詰めたかったからという、ルリ曰く「下世話な理由」によるものだったらしい。

ほかに助けてくれそうな——いや、これもルリに言わせれば「生贄」になりそうだと考えられていた古代進は、地球に戻ってすぐに意中の入たる森雪と正式に交際を始めたばかりか、なんともう雪の両親に顔を見せに行ったらしく、雪の父親と静かな戦いを繰り広げた末気に入られたとかで、婚約にまでこぎつけたことを自ら報告して浮かれていた。

——周りからは「艦長の影響恐ろしや……っ!」と慄かれたらしいが、当時のラピスにはなんのことだがさっぱりわからずじまいであった。

もちろん、いまならば理解できるが。

そして、今回のパーティーに呼ばれた旧ナデシコクルーの一人であり、現役アイドルでもあるメグミ・レイナードがハウメイガールズの面々をバックコーラスに、ヤマトが帰還すると同時に発表し、瞬く間

に大ヒットを飛ばした新曲「この愛を捧げて」を熱唱。

ヤマトとユリカを歌ったとされるだけあって、ヤマトクルーはこの時ばかりは静かに歌声に耳を傾け、終わったあとはアンコールの大合唱。

もちろんラピスもその輪に加わってはしゃいでいた。傍らには第二の保護者として周知されている山崎奨と徳川太助を引き連れながら。

そんな中、なんとか義父と仲間内からの追撃を躲すことに成功したアキトは、パーティーの一週間前から少しでも感を取り戻すべく猛練習していた成果を披露すべく、師匠の一人であるリユウ・ホウメイの助力も借りながらどこからか引つ張り出してきた屋台でテンカワラーメンを振舞ってくれろという話を聞き、ラピスも顔を覗かせることにした。

寸胴鍋の中に入れられた専用てぼの中で面が躍る。茹で上がった麺をどんぶりに満ちたスープの中に入れて解す。チャーシューにメンマと、定番の具を載せて、

「へい、おまち！」

とアキトが台の上に置いたとあれば、われさきにと手が伸びる。以前からとヤマトからの仲間たちは、ようやく自分の道を再び歩めるようになった彼を祝うべく、矢継ぎ早に注文を叫んではラーメンをせがんでいる。

「はい、テンカワ特製ラーメンお待ちどうさま」

とラーメンの配膳をしているのはルリ。取り戻したいとかねてから願っていた光景の前に唇の端が持ち上がるのを止められないように、普段はあまり見せない類の笑みで会場を虜にしていった。

そして本来給仕の役割を果たさずだった妻ユリカは、慣れぬ飲酒で足元がふらついてしまっているためエリナに留められ、提供されたラーメン第一号を食べられる権利と引き換えに椅子に座らされた。

普段からそうだろう、という指摘も多少あったが、酔っ払って顔を赤くしてポヤポヤしている彼女の様子を見れば、だれだって配膳など

という役割を任せたいとは思わないだろう。

(でも、幸せそう)

地球に帰還してからのユリカの様子はラピスにとつてもうれしいものだった。不健康一直線だった容姿は、記録映像の中で見た女性的で健康美に溢れるものに戻っていたし、「自由に歩いて食べられるって最高だよお！」と、見舞いに行つたときに聞かされているとなればこういった光景もほほえましく映る。

その言葉がひどく印象に残っているのも、ヤマト再建からイスカナル到達まで、彼女がどれだけ苦しみ、何度も生死の境をさまよつたことを知っているからこそ。

——嗚呼、この幸せがいつまでも続けば良いのに。

それが叶わぬ事だと、だれよりも知るであろうユリカは突然ラーメンを食べる手を止めて、傍らに鎮座しているヤマトの威容を見上げていた。

釣られるようにラピスもヤマトの姿を見上げる。

帰還して二週間。ヤマトの姿はコスモリバーを起動したときからなんら変わっていない。

イスカナルでの改修作業を受け、波動砲以外の戦闘力を回復したヤマトではあるが、いまもって波動砲の再装備を含めた大規模なメンテナンス作業は受けていない。これはヤマトが用済みだからというのではなく、地球でまともに動ける唯一の戦闘艦である以上、任務に支障がないというのであれば当面現状維持のまま任務に就かせる必要があるという切実な理由によるものだった。

それでも最低限のメンテナンスと補給作業を完了するのにあと三日かかるとされており、それが終了すると同時にラピスをはじめとする一部のクルーを除いて再乗船、地球領域を中心とした防衛任務に就き、復興の度合いに応じて範囲を拡大していくことになっている。

(やっぱりみんな、ヤマトに縛られた)

——帰還した時に感じたとおりで。ユリカに限らず皆、ヤマトに半ば縛られた生活を送っていた。

ウリバタケはヤマトを退艦して自宅の工場を続ける意思表示をし

ながらも、真田やイネスに協力を求められれば一も二もなくそれに協力することを決めたという。……たとえば、その内容が軍の新兵器の開発に繋がるとしても。

ほかの民間から協力したクルー、つまり旧ナデシコクルーも半分程度はヤマト限定という条件で、軍部の立て直しが終わるまでは引き続き乗艦を承諾し、退艦する者たちも「非常時であれば」という条件でやはりヤマトに限れば再乗艦を引き受けるなど、ヤマトの戦いを知っているからか、完全に縁を切って民間に戻る気にはなれない様子子が伺えた。

ナデシコCから移乗したルリたちの場合、ナデシコCがヤマトの代わりに朽ち果て失われたこともあり、引き続きヤマトに乗って任務に就くことになっているという。

また再編によって誕生する新組織——地球連邦政府とその直下となる地球防衛軍も、かつてヤマトが属していたそれと同名の組織へと再編され、ヤマトの影響を強く受ける結果となった。

防衛軍では、ヤマト出生世界の艦艇の名を継いだ新造艦や、データをコピーして模倣した艦艇の配備はもちろん、完全新規設計の艦艇の開発にも着手し、ガミラスやネルガルの全面的な協力の元、時間断層の解析作業とその活用について日夜協議を重ねている。

地球は間違いなく再建に向かって歩みだしている。その行く末がよいものなのか悪いものなのかは——まだだれにもわからないこと。

ラピスはそのことに一抹の不安のようなものを感じながらも、仲間たちと共に記念パーティーを楽しむ、いまという時間を楽しんだ。

明日からはすこし忙しくなる、そしてヤマトの仲間たちに会える機会も減ると考えれば、楽しまないと損だという気持ちがさきだったからだ。

というのも、ラピスは自分の進路についてかなり早い段階から明確なビジョンを持っていたクルーの一人であり、そのためにヤマトを退艦して民間人の立場に戻ることを決意させた。

「私は——学校に通いたいです！」

それがアキトたちに進路を問われた時の答えだった。

ヤマト再建から航海から帰ってくるまでの生活で、自分なりに集団生活を楽しんでいたラピスは同世代の人間との生活の場——学校に通う事を望むようになっていた。

ヤマトにも同年代のクルーはそれなりに居たが（ルリはもちろん太助だつて年代は近い）、基本的には成人したクルーのほうが多く、そういう意味では自分は子供として遠慮されていた事を漠然と感じていた。

それに、山崎や太助との触れ合いで自身の進路について相談を持ち掛けたとき、

「いっそ学校に通ってみるといいうのもよいかもしれませんが。このまま大人の社会に身を置き続けるのもひとつの選択ですが、同年代と触れ合い青春を楽しむ……大人になって振り返った時、その時の生活の記憶と言うのは案外宝物として残るものですからね」

というありがたいお言葉をもらえたこともあり、ラピスは一般市民に戻り、学校に通うことになったのだ。

もちろんアキト・ユリカ・エリナといった保護者勢が喜ばないわけもなく、

「ラピスが学校に通いたいと言うなら任せて頂戴！」

とエリナとユリカは自身の人脈やらコネやらを行使して、実験体として戸籍も存在していなかったラピスの戸籍をきつちりと拵えてみせた。

経歴のすべてを明らかに出来ないので、適当に誤魔化しを入れながらそれっぽく聞こえる来歴を考えだし、ユリカとエリナが戸籍作りやらで奔走してくれたのである。

その喧嘩を見ながらラピスは新しい住居から近く、早々に再開が決定されている学校を見つけてもらうなり、アキトと一緒に見学に行ったりしてイメージを掻き立て、必要な品々を揃えるために復帰して間もない商店を見て回るなど、精力的に動き回った。

最終的にラピスはさまざまな意見を検討した結果、アキトとユリカ夫妻の養子という身分を与えられた。

仲睦まじい二人の邪魔にならないかという懸念を覚えたり、エリナとは法律上家族関係にならないという事実には嘆きはしたが、ラピスも分別のつかない子供ではないので納得し、かつてのルリと入れ替わる形で二人と同居することになった。

住居を構えるのは再編される地球政府と軍部の中枢として選ばれたトウキョウシティ、それも中央区。これは両親となったユリカとアキトの仕事に便利だからと選ばれた立地だった。

ユリカはヤマトの艦長としての経験と手腕を認められ、帰還後に少将にまで昇進し、今後の地球防衛艦隊の再編や防衛プランの構築に尽力することになっている。

それに加えて本人の意志もあり、ヤマトの艦長の地位は進に譲る形で地上勤務が決まっているとなれば、住居は彼女の勤務地である中央司令部に近い場所が選ばれるのは必然であろう。

また、夫たるアキトも航海中に決まった約束どおり、かつてのコロニー襲撃犯としての罪状を背負うことなく（犯人は消息不明、ガミラス戦の中で死んだものとして処理された）、戸籍を復活し火星の後継者のラボから救出後、治療を受け、妻のために無理を押してヤマトにはせ参じたという美談を作られ顔面崩壊しながらも、これからのためにと「断罪よりもキツイ」と漏らすその処遇を受け取った。

そしてヤマトでの活躍とA級ジャンパーとしての能力を買われ、正式に軍人の立場を得ると同時にネルガルに出向し、新型機動兵器の開発に協力するテストパイロットという職を得ると同時に、唯一稼働状態にあるダブルエックスの専属パイロットとして、非常時にはサテライトキャノンの引き金を引くことを求められた。

アキトの能力と適性を鑑みた結果、こういう人事になったのだとコウイチロウが教えてくれたことは記憶に新しい。

ラピスが知らないナデシコ時代の問題行為の数々が、普通の部隊への編入を見送る最大の原因だったらしく、そういった情報を細大漏らさず報告したのがネルガルの会長だったともうわさされているが、真偽は定かではない。

一つ言えることは、必要とされながらも使いにくいとして、アキト

は入隊早々左遷されたのだという事実だけだろうか。

かくしてラピスは新しい生活を始めたテンカワ夫妻の養子という身分で新たな生活を始めることとなった。

そんな新生活を始めるにあたり、ラピスは自分に幾つかのルールを課していた。

そのひとつがお小遣い制の導入にある。

ヤマト乗艦はもちろん、再建への協力でラピスには相当な額の給料が支払われている。再建の途上でいろいろと物価が高めの昨今にあっても、安い戸建て物件くらいなら買えてしまえるくらいの蓄えだ。

だがラピスはその給料の全額をあつさりユリカに預けてしまった。

一般的な中学生はこんな大金を持ち合わせていないし、アルバイトも日本では年齢的に行うことはできない。

月々親からもらうお小遣いで日々の娯楽を支えるのが一般的だと情報を仕入れておいたラピスは、学校というコミュニティーに溶け込む上で特殊な存在にならないようにと、大金を封じることが望んだのである。

ラピスの意向を汲んだユリカはラピスの給料を管理することになり、月々のお小遣いという形で決められた額を毎月ラピスに渡す、という形でラピスは自分の給料を使うことになった。

これならユリカとアキトの給料は日々の生活費に使う分を除けば、ある程度積み立てておける。

それはつまり、これから生まれてくる子供たちの養育費を確保しやすくするということだ。

仲睦まじい二人の愛の結晶は、ラピスにとっても家族。その誕生を望まないわけがない。

だから週に一度程度はエリナにも甘えたいと称して、（仕事の都合で同じマンションに越してきた）彼女の部屋にお泊りすることで、二人きりにさせることも決まった。

少々お節介かもしれないが、ラピスはエリナにたつぷりと甘えられ

るし、アキトとユリカも遠慮なくいちゃつける。それで子供ができればまさにハッピー。

これこそ幸せ家族計画というものだろうと、ラピスは胸を何度張ったかわからない。

そんなやり取りを経て、ラピスは学校が再開する際に転校生という形で近くの中学校に入学。

晴れて学生生活を始めるに至ったのが、ヤマトが地球に帰還して一カ月が経過したときであった。

だが自らに課したお小遣い制の壁に秒速でぶち当たることになるまでは、このときのラピスはまったく想像すらしていなかったのであった。

「ラズリちゃんってどんなゲームしたことがあるの？」

転校の挨拶を済ませ、早速新しいクラスメイトのことを知ろうと根掘り葉掘り聞き出そうとする学友に囲まれたラピスは、適当にでっち上げた来歴をそれっぽく語りながらも、コミュニケーションに溶け込む努力を怠らなかつた。

いい加減自分の容姿が目立つことを自覚している。

実際学生になると部下たちに告げた時には、「機関長、美人だから男子に声かけられまくるかもしれませんね」と冗談めかして言われたりもしたものだ。

事実そうだったわけだが。

やはり大人である部下たちに比べると遠慮がない。いや、本心をぶつちやけるとちよつと怖い。

逃げ出したい気持ちを堪えて応対に努める。男女問わずこのタイミングでの転校生というのには興味があるらしく、口々にいろいろなことを尋ねられる反面、会話の端々で亡くなった友人やらクラスメイトやら先生やらの話題が出て来ては、暗い雰囲気になることがあった。

ガミラスとの戦いの爪痕は深く、また直前にあった火星の後継者の一斉攻撃の被害も小さくはなかったということを改めて認識させら

れた瞬間だ。

実際ガミラスとの和睦という結末に不満を口にするクラスメイトもいて、当事者として和睦を望み行動したラピスとしては、自分たちの行動の是非が迷子になりそうな錯覚を受けるくらいには、衝撃を受けた。

そんな中で不意に飛び出した話題が、いわゆるビデオゲームだったのである。

当然だが、ラピスにもゲームの経験はあった。ヤマトのレクリエーションルームにも娯楽としてのゲームは備わっていたからだ。

ハリと並んでクルー最年少だったラピスは、部下たちを中心に日常生活での潤いに気を使われていたようで、合間合間に遊びに誘われたりしたものである。

と言ってもすぐに切り上げられ、かつ短時間でも楽しめるようにとアーケードタイプのパズルゲームに格闘ゲーム、あとはレーシングゲームに訓練兼用のシューティングゲームくらいしかなかったので、クラスメイトが口にするようなタイトル・ジャンルのゲームは経験がない。

なので素直に「家庭用機ではありません」と答えることにした。

——代わりに両親の影響でパソコンでのプログラミングなどに熱中していたと答え、ゲームは前の学校の友人に誘われてアーケードで少し齧っただけとしておいた。これならボロが出にくいだろう。

なぜならラピスは海外在住であったが、こちらに越してきた直後に被害に遭って両親を亡くしたという設定だ、違和感はないだろう。

「じゃあいろいろ教えてあげるよー」

と、後に親友と呼ぶようになる女子生徒——タカハタ・マナに押し切られるようにして放課後自宅に来るよう誘われたラピスは、彼女の家で家庭用ゲーム機に触れることになり、自分でも驚くほどその魅力に取りつかれていった。

これはたしかに楽しい。ぜひとも自分でも遊べる環境を整えたいと思った。

——のだが。

「……高い」

おすすめというゲームのタイトルを教えて貰ったラピスは、自宅に帰ってから早速パソコンを使ってネット検索、教えてもらったゲームの販売について調べると同時に値段を確認したのだが、その瞬間ラピスはお小遣い制を言い出したことを早くも後悔する羽目になったのだ。

コスモリバースシステムの奇跡によつて、凍り付いた人々のみならず、倒壊した建物の大半も復活するというミラクルに見舞われた地球。

そのおかげで日常生活はかなり早いペースで回復しつつあった。発電施設や下水道処理やらのインフラ系も早々に立ち直り、日常生活においての苦労は軽減されていることからそれもそれが伺える。

だが、ゲームなどを始めとする玩具に関して言えば、復興における優先度は低いと言わざるを得ないのが実情であった。

最初にすべきはインフラの整備であり、社会全体の立て直し。娯楽は二の次三の次。

結果、大手ゲームメーカーや玩具メーカーは開店休業状態で、所属している社員も復興への協力を駆り出されつつ、時期を見て本来の業務に復帰していく予定になっているとか。

唯一の救いは、近年のゲーム販売はネットストアによる配信サービスが主であり、本体であるゲーム機と記録媒体さえ保有していればソフトを買いに行く必要がないこと。

そして、ネットストアは早々に復帰していることであろうか。戦争中にあつてもサーバーが生き残っていたらしく、維持されていたのだ。

それ自体はさほど困難なことではなかったのだという。加えて極限を極める避難生活において、気を紛らわせるツールとして役立つと、子供の為に持ち込んでいた親もいれば荷物に紛れ込ませていた子供もいたり、そういった目的で軍が無償で掘り起こした機械を配布したりしていたため、ゲーム機そのものは相当数が生き残っていたし、

それを活用するためにも少々の労力で済むのならばと、そういったストアの維持を精力的に行ってくれた人々がいたのだ。

ネットワークに接続可能な機器は娯楽以外にも利用価値があったというのも、ゲーム機が生き残れた理由の一つであろうか。

ともかく、サービスそのものは生き残っていて、お金さえ用意出来ればいまでも戦争以前の価格設定でゲームの購入は可能というのは、これから一般社会の生活に馴染もうとしているラピスには渡りに船であったのだが、問題はハードウェアのほうだった。

ゲーム機本体は当然ながら生産ラインがストップしているし、混乱に乗じた略奪やら先述の無償配布やらで店頭に残された在庫など存在しない。

となればゲーム機を新規に手に入れることは現状不可能であり、それは責められるべきことではないだろう。

しかし、ラピスはゲーム機が欲しかった。

パソコンでもプレイ可能なタイトルはいくつも存在していて、ネットワークを介せば彼らと一緒に遊ぶこともできる。

——が、同じ物を持つというのが連帯感のほうが重要なのではないかと考えたのだ。

とはいえ手に入らないものは仕方がない。こればかりはラピスがなにをしようとも覆せない現状である。

諦めてソフトだけでもと考えていたら、ラピス自身が統計を調べて提示した月々のお小遣い額を微妙にオーバーしていた。自分から言い出した手前「足りないから追加してほしい」とはなかなかどうして、言い出しにくい。

「……せつかく、みんなの輪に入るのに役立つかと思ったのですが……」

予想だにしなかった障害だった。まさか自分から言い出した制度に足元を掬われるとは……！

「——どうしましょう。頭を下げてお金を融通してもらおうべきなのでしょうか？」

それはそれで後ろめたいし気が進まないのだが、せつかく共通の話

題を得られる機会を不意にするというのは、目的に反している。

結局夕方まで悶々と悩んでいたが、その頃になるとアキトとユリカが仕事を終えて帰宅。「砂糖を吐き続ける生活はまっぴら」と軍の寮での生活を選んだルリや、たぶん将来義兄になるであろうハリと一緒に夕食を摂るべく来訪した直後——来客を告げるチャイムが鳴った。

手が空いていたルリが応対すると、プロスペクターとエリナを引き連れたアカツキが顔を覗かせたではないか。

「ラピス君、入学おめでとう！ これはそのお祝いね。同年代の子とを溶け込むならあつて損にならないツールだと思うよ」

と言つて自ら紙袋を差し出す。ラピスが気圧されながらも受け取ると、中にカラフルな包装紙で梱包された箱が入っていた。——結構重量がある。それにこの包装紙は子供向けの印象を受けないではない。

「さあ！ 早速開けてみたまえー！」

やたらと爽やかな笑みで促してくるので、「それでは、遠慮なく」とラピスは包装紙を止めている粘着テープを剥がしてから、取り落とさないように包装紙を開いていく。

これは——！

「わあ！ 戦前に出た最新モデルのゲーム機ですわね！」

と、ラピスに代わってハリが驚きの声を上げてくれた。なんでも単独でも遊べる携帯機とテレビに接続しても遊べる両用仕様のゲーム機らしい。

そう、アカツキのプレゼントはラピスが求めていたゲーム機だったのだ！ しかもラピスのイメージカラーでもあるピンク色というすばらしい気遣いを上乘せした！

「ふふふつ。僕たちはね、アキト君だけじゃなくて君にもありふれた普通の生活と幸せを得られるようにするにはどうすればいいのか、つて常々考えていたんだ。で、年齢を考えればやっぱり学校に通ったりすることもあるだろうし、そうなったときのコミュニケーションツールとして役立つかとも思つて、前から用意していたんだ。ようやく日の目を見れて、満足しているよ」

悦に入って笑っているアカツキ、ラピスは言葉も出さず感動の眼差しを両手の中に納まっているゲーム機のパッケージに向ける。

「すまないな、アカツキ。気を使わせて」

「わあー！ アカツキさんナイス！」

「——意外と良い人なんですね、アカツキさん」

アカトたちが三者三様にアカツキを褒めると、

「ふふふつ、金持ち嘗めんなよ」

アカツキは相変わらず気分よさ気に笑っている。よくわからないフリーズだが、覚えておこうと頭の片隅で思った。

「さて、会長はハードをプレゼントされたので、私からはこれを送らせて頂きます」

と言つてプロスペクターが差し出したのは、ストアに電子マネーをチャージするためのチケットだった。ちなみに金額は最高の一〇〇〇〇〇円なり。

ソフトが一本にダウンロードコンテンツが少々変えるくらいの金額に、ラピスは感激が止まらない！

「私からはこれね」

エリナが差し出したのは、可愛いピンク色のゲーム機用のポーチに画面の保護フィルム、そしてラピスが教えてもらった有名なRPGゲームタイトルのダウンロードチケット！

感謝感激雨あられで、ラピスは膝が笑っているのを自覚した。

「アカツキさん、プロスペクターさん、エリナ姉さん……ありがとうございます……！！」

それ以上の言葉がどうしても出てこない。

——嗚呼、人の善意とはなんと素晴らしいのだろうか。

少々無礼かとも思ったが、誘惑に耐えきれずにパッケージを開封する。紛れもない新品未開封、新製品を開けた時特有の匂いが鼻を突き、期待が高まる。

「あ、ラピスさん。最初は充電しないと」

ハリによると開封したばかりのゲーム機はバッテリーが十分に充電されていないのだとか。

ラピスは素直に従ってそそくさと充電を開始する。

その間に初めての学校生活を話題に全員で食事をする事になり（アカツキたちは仕事を立て込んでいるらしくすぐに帰った）和気藹々と食事を済ませる。食後の片づけを済ませてゆったりし始めた頃にはちょうど充電が終わっていた。

このメンツの中で比較的詳しいハリに手伝ってもらいながら、ラピスは早速ゲーム機の初期設定を完了し、ネットワークストアのユーザー登録も済ませ、友達から教えてもらった、そしてエリナが買ってくれたタイトルのダウンロードコードを入力してソフトのダウンロードを開始する。

——待つこと数分。

ダウンロードを完了したゲームを起動しつつ、早速遊びはじめてしまったら思いのほか楽しく、気が付けばバッテリー表示が真っ赤になるまでぶっ続けで遊んでしまった。熱中しているラピスを気遣ってか、だれも声をかけることもせずそっとしていてくれたので楽しく遊べた反面、せつかく来てくれたルリとハリに悪いことをしたと後悔の念も。

だが再度充電を開始したならば、ついつい続きが気になって夜中にベッドの中でスイッチを入れてしまい、すっかり夜更かししてしまった。

次の日に眠い目を擦りながら学校に行く羽目になるトラブルに見舞われながらも、さっそく話題をゲットしたラピスはそれを足掛かりにクラスメイトと打ち解けていく。

そして、すっかりゲームの魅力に魅了されてしまったのであった。そんなラピスの姿を、保護者たちはほほえましく思いながら、急速に一般社会へと馴染んでいくラピスの背を押し、支え続けたのである。

それからラピスは友人たちとネットワークゲームに参加しては技術を研鑽し、知識を深めた。

もちろんいまでも需要がある一人用のゲーム各種もお小遣いが許

す限り（ゲーム以外でも要り様な分は取り除いたうえで）購入し、プレイした。

学校の勉強は——正直基礎ができていたとは言い難い部分があったので自分なりに予習・復習しつつ、日頃の言動に反して学業成績が優秀だったユリカ、そしてイメージどおりに優秀なエリナにも助けてもらったことで、急速に成績を伸ばしつつある。

そんな充実感溢れる学校生活が三か月になろうとした頃には——。

学校から帰ってきたラピスはリビングでカバンを降ろすと、制服姿のままぱっぱと宿題を済ませる。数学やら英語なら、取り立てて苦労はない。

それからいそいそと部屋で私服に着替え、ノートパソコン片手にリビングの机の上に。パソコン設置、電源スイッチオン！

「ラピス、おやつどう？」
「いただきます♪」

アキトが気を利かせて持ってきてくれた大福と緑茶の乗ったお盆を受け取ってテーブルに乗せる。一緒に載っていた手拭いで軽く手を拭いてからぱくりとひと口。

——このもっちりとした食感と粒あんの甘さが溜まらない。

あつという間に完食して熱めのお茶を啜る。——ふう。

（さあ、始めますか）

ラピスは放置していたゲーム機を手にとると、パソコンに映像出力端子を接続し、プレイ画面の録画を開始しながらプレイを開始した。

——そう、ラピスはゲームにはまったついでに「ゲーム実況」という趣味に目覚めてしまったのだ！

ただし、生声でやるのが恥ずかしく思えたので合成音声によるテキスト読み上げソフトを使った「ゆっくり実況」という形であるが。

昨今の音声ソフトは人間と遜色がないほど流暢に喋れるのだが、伝統的に大昔の音声と同じように調整して行うのが流儀とされている。

この微妙にイントネーションが可笑しい喋り方が、独特の味を出すのだと友人は力説していた。流暢なだけなら生声でやればいいとも。

ついでに音声合成ソフトの類も自費で購入してそちらも併用してみたりと、日々研鑽に勤しんでいる。

とはいえ、投稿翌日にはどこから嗅ぎつけたのか、ヤマト機関部門一同からのコメントや応援メッセージが届けられ、ヤマトのことなどは巧妙に隠されてはいたが、知り合いであることは隠そうともしないそれらが、衆人観衆のもとにさらされたという事実は、ラピスの羞恥を煽ったが、そのなかでも特別親しい山崎や太助からメッセージが送られてくると、やっぱりこのまま続けようという気になって、現在に至っている。

もちろんヤマト機関部門のみんなは、一つたりとも欠かすことなく動画を見てくれてるらしく、ほぼ毎回なんらかのコメントが残されていたというのは、おそらく実況生活をはじめたばかりの新参者としては異例の事態であったと、ラピスは指摘されるまでもなく理解していた。

というわけでゲーム実況者としての生活を始めたラピスだが、その実況内容はゲームのプレイに関するものがほとんど、しかもやり込み派としてヒカル師事のもと勉強中の軽いジョークを交えつつ、ゲーム攻略に役立つ小ネタや攻略情報を配信するというスタイルをメインにしていた。

人気もそれなりに出てきたが、戦前活動していた著名な方々に比べると雲泥の差があるのは自覚していた。せっかくやるのであれば、やはり上を目指したいという欲求が顔を覗かせる。

ついにかつての部下たちのコメントにもネットスラングなどが大量に含まれていて、まだまだそういったコミュニケーションへの理解が浅いラピスでは理解しきれず、思わずアマン・ヒカルに通訳を求めてしまうこともあったので、勉強は欠かせない。

ネタトークの引き出しを広げるべく、そして動画コメントのスラングを理解するためにも、動画漁りつつ、各種アニメやドラマも視ることに、そして各種掲示板などの徘徊は欠かせない。純粋な娯楽としても。

『ゲキガンパーンチ！』

編集作業の傍ら、リビングのテレビで『ゲキ・ガンガーIIII』を視聴する。とにかくネタを学ぶには見ることに限る。昨今のネットサービスは充実している、視聴環境には困らない。

努力・友情・勝利。愛と希望。知恵と勇氣。

ともかく笑いだろうが恋バナだろうがとにかく知識を蓄える事こそが重要。

今日はゲキ・ガンガーをあと二話ほど見たら、次は『ナチュラルライチ』を見よう！ その後はここ数年で人気だったドラマとか映画を見て、さらに過去の名作に遡っていきたいと考えている。

嗚呼、時間がいくらあっても足りない！ これが青春なのか!!

「……喜ばしいのかそうでないのか、判断に迷うな……」

後ろでアキトが順調にオタク街道まっしぐらなラピスに首を捻っていたことに、ラピスは終ぞ気付くことはなく、そんなアキトの悩みを帰宅したユリカが「アキトの子供なんだから必然なんじゃ？」とバツサリ切り捨ててしまったことも、ラピスは生涯気づくことはなかったという。

数日後。ラピスはエアコンが絶賛稼働中のわが家にて夕食を楽しんでいた。

あの凍結状態から回復した地球、そしてラピスが住む日本の季節は夏真っ盛り。

まるで凍結状態の反動と言わんばかりに、日中は三五度を超える猛暑日が全国で相次ぎ、夜も気温がギリギリ三〇度を下回る程度という熱帯夜も続くという、天然自然の猛威に見舞われていた。

幸いなことに、シエルター代わりに使用した宇宙船の動力などが生きていたこともあり、その電力をガミラスから提供してもらった反射衛星を利用して地球全土に無線送信するスーパーマイクロウェーブ網を臨時で形成すること、そして専門業者にさまざまな便宜を図って各家庭や企業や学校といった場所へのエアコンの設置の推奨を進めさせ、設置に伴う費用などに援助するなどして乗り切りを図った。

結果として、政府の死に物狂いの政策は功を奏し、かつてとは逆の暑さによる犠牲者はかなり抑え込むことに成功したのである。

——もちろんその影に、予想外の事態に陥った地球のために便宜を図ってくれたデスラーの努力があったことは、語るまでもないことだろう。

ラピスはそういった話のあれこれを、個人的にも親交を続けているユリカから聞かされていた。ユリカはイスカンドルのスターシアからも覚えがよく、ガミラスの総統デスラーとも個人的に親しく、政治的な話ができる程度の能力もあるといったことから、軍人として地球防衛艦隊の運用に伴う会議や戦術プランの作成のみならず、両者との外交にも大きくかわる立場へとそうそうに出世している。

そのぶん忙しさも倍増し、朝早くにアキトにたたき起こされて出勤、夜遅くの帰宅といった日も珍しくなくなり、「アキト分が足りない……アキトとイチヤイチャしたい」などと据わった目で呟く姿が本部で目撃されることもある日々を送っていた。

対するアキトも新たな地球の戦力の一つである新型機動兵器の開発は難航していた。ガンダムほどのスペックの機体を量産するのは難しいという真田たちの予想は現実のものとなった。

アルストロメリア・カスタムはいい機体であったが、元来ヤマトのパイロットたちは圧倒的戦力を誇ったガミラス戦をあそこまで生き残った選りすぐりのエリートたち。それらに合わせた改修が施されていたから通用した——という側面があったことが、帰還後に判明してしまったのである。

そこからさきの混沌は、詳細を聞くまでもなく理解した。

ガンダムをベースとした新機軸にするか、それとも従来型のエステバリス・ベースで開発するかで意見対立が発生し、それが終息したのがごく最近の話。ある理由からエステバリス・ベースのほうが好ましいと判断され、ようやく本格的な設計が始まったのだとか。

現時点では詳細な仕様は未定であるが、アキトは真田やイネス、そして協力しているウリバタケから「初期型に先祖返りしている部分が出るかも」と聞かされているようで、シミュレーターを使ってナデシコ

時代に使った各種フレームの再検証に付き合い、木星戦役後に開発された機体との比較などなどを行うなどして要求スペックの再確認などに協力しているのだとか。

かなりハードらしく、たまにアキトに誘われてやってくる月臣元一郎ともどもくたびれた顔で帰宅することは多く、必然的に家事などに割ける時間は減少している。

そのため本日の献立はそうめんと総菜売り場で買ってきた天ぷらの盛り合わせと、シンプルで力を抜いた品となっていた。

「そっか、そうめん茹でるくらいならできるようになったのか……」「ラピスちゃんも、どんどん成長してるんだな……」

と、対面の席に座るアキトと例によって御呼ばれした月臣がそうめんをすすりあげている。

いろいろなことにチャレンジしたい欲求と合致したことから、ラピスはネットや本を参考にして料理をはじめとする家事を覚え始めていた。

まだ手間のかかる料理を作れる域には達していないが、そうめンを茹でるくらいなら問題はない。規定時間どおりに茹で上げて冷水でシメ、冷ややかなガラス製のお皿の上に一口サイズに丸めるように盛り付け、帰りがけにスーパーで買ってきた天ぷらを食卓に並べる。

われながら、いい出来栄えだと自画自賛。これで両親の負担が減るというのならいくらでも家事をしようじゃないかと、妙な張り切りを覚えた。

「おいしー。疲れた体にそうめんが染みる〜」

ラピスは自身の左隣の席でそうめんをすすり、天ぷらをぱくついているユリカに視線を巡らせる。

彼女は涼し気でラフな薄い部屋着姿の上にカーディガンを羽織った格好。これは帰宅して間がなく汗びっしりな男二人のために冷房を少し強くしているのもう十分涼んだユリカとラピスが厚着で対応した結果である。

(お母さん、きれいになったなー)

ついついそんな感想が浮かんでしまうラピス。……正直、仕事はか

なり忙しいはずだが、ヤマトに乗っていたときよりも、そして過去の記録で見たナデシコの時代よりも彼女はきれいになった。

本人曰く「恋は女の子をきれいにするのよ」だそうだが、はたして二〇歳を超えた人妻が「女の子」の範疇に含まれるのかははなはだ怪しいと思いつつ、ラピスは妙に納得してしまった。

現に肌艶はよく、なんとというべきかこう、女の色気というやつが以前に増して強くなっているような気がする。

ちらりと視線をユリカの対面に座るアキトに移せば、彼は疲れた顔でイカの天ぷらを齧って咀嚼中。視線はユリカには向けられていない。

しかし、この二人はとても仲がいい。その日常をつぶさに観察しているわけではないが、行ってきますやお帰りなさいのキスは欠かさない。ほとんどのケースでユリカのほうからせがんで、表向きは渋々というか恥ずかし気なアキトが応じるといふパターンであるが、時おりアキトのほうからキスやボディタッチを含むスキンシップを求めている場面を、幾度か目撃している。

要するに、べた惚れというやつなのだ。ルリが呆れ半分うらやまし半分に漏らしていた。たぶんルリはハリとの仲がうまく進展できていないのだろう。十中八九ルリのせいだとは思うが。

ともかく、いまは月臣を気にしてかあまりベタベタとはしていないが、食事が終わって彼が帰宅したらそれはもうスライムがごとく引っ付きあうのだろう、たぶん。

とはいえこれは悪いことではない。あれだけの目に遭わされ、こうして生活できるようになるまでの苦難を考えればだれも文句は言わせない。

ラピスだって二人に気を使ってエリナのもとに転がり込もうとしたりくらいなのだ、いまも内心邪魔になっっていないか気になっているくらいには、この二人はべたべたしている。

それだけに――。

(弟か妹。この手に抱ける日はそう遠くないはず)

ラピスはそんなことを考えながら、自分も天ぷらにも箸を伸ばす。

あとはそのタイミングがいつになるか、ということだがこればかりは時の運。ラピスがしてやれることはイチヤイチャタイムを捻出してやるくらいしかない。

さて、明日はエリナの家に泊まるとするか。

涼しげな夕食を終えたあと。

ラピスは食器の片づけをしていた。支度をしたなら片付けるまでがお手伝いというもの。といっても使用した食器も調理器具も大した量ではないので、そこまで時間はかからない。特に食器は食器洗浄乾燥機に放り込むだけで終わってしまうとは言えば終わってしまう。

食器洗浄乾燥機が使えない大きな鍋をすこし苦労しながら洗い、水を拭き取ってから棚に戻したとき、月臣がお暇すると申し出てそそくさと玄関に向かつてしまう。

慌てて追いかけると玄関で「もつとゆつくりしてもいいのに」とアキトが引き留めていた。

だが月臣は「あまりお邪魔をすると、艦長に悪い」と早々に逃げだしたいらしく、アキトの制止もむなしく足早に去っていった。

別にユリカが睨んでいた——のかもしれない。最近、アキトとの時間が減少気味であるのだから、無意識に殺気の類を放出してしまっていたとしても不思議はない。ユリカだし。

それでも去り際に「ではラピスちゃん、またの機会に」とあいさつするのを忘れないあたり、なんだかんだで月臣は「いい人」だと思う。

だからこそ、アキトのように罪を背負って生きていくこの人生を支えてくれる、パートナーに巡り合えてほしいと思えた。

アキトはどのような形であれ、許されてここにいる。ルリを通して親友の妹である白鳥ユキナと恋人であったハルカ・ミナトとの対面は果たし、共に墓参りをしたとも聞いた。

詳細なことはわからないが、険悪なまま終わることはなかったと聞く。それが彼にとって救いになるのかは定かではないが、前に進むきつかけくらいにはなっていると信じていたい。

すくなくとも——以前の月臣であったなら、こうして食事に誘われ

ても来ることはなかったであろうし、いい変化を迎えつつあるのだと、ラピスは信じたかった。

彼も自分とアキトを助けてくれた、『仲間』なのだから。

食器洗浄乾燥機が作業を終えるまで、もうしばらく時間がかかる。いまのうちに実況のセッティングだけしておこうと考え、自室に戻ってゲーム機片手にリビングに戻ってきた。充電は完了している。

自分の部屋でプレイしても良いのだが、どうせなら二人のいる空間のほうがいい。

……なにしろ本日のタイトルはちよつと訳ありなのだ。そろそろ肉声による実況も、と考えているのだから、自分の部屋でやるのが正道であるのだが……。

ラピスがちよつと重たい気分になりながらリビングに足を踏み入れると、アキトとユリカが一瞬の攻防を展開していた。勝負はいつでもおりアキトの敗退で静かに収束していたが、何事だろうと思つて首を伸ばすと、ユリカは得意げな表情でソファの真ん中に座ると、自らの太ももを『ポンポン』と叩いてアキトを促しているではないか。

アキトはなにやら不安げな表情で促されるままユリカの隣に座つて、頭を膝の上に置いた。

少々珍しい光景だが驚くには値しない。キスとかハグに比べればまだ常識の範囲内であろうし、そもそも二人は夫婦。もつとすんごいこともしているだろう。

しかし、なぜアキトが不安げな顔をしているのかが気になる。恥ずかしくてたまらないというのなら赤面するだけであろうし、なにをそんなに不安がっているのか。

「うふふ……それじゃあ、可愛い可愛い奥さんの私が、お耳を綺麗にしてあげますからねえ〜♪」

「うう……。たのむから鼓膜だけは破らないでくれよお」

ユリカは心底楽しそうに左手に握っていた綿棒のケースを開封、中から取り出した綿棒を高々と構えている。

いま理解した。要するにアキトはユリカが耳掃除をしてあげると言い出したことで、ラピスが見ている状況で膝枕をしてもらうことの

羞恥よりも、文字どおり身の危険を感じて渋ったのだろう。

だが結局ユリカには勝てず、おとなしく要望を受け入れることになったということか。

ユリカはそんなアキトに「だいじよぶだいじよぶ！ ユリカを信じるんだよ！」と右耳に綿棒を差し込んで、思った以上にていねいな手つきで耳掃除を始めた。

最初は不安が取れなかったらしいアキトも、次第に心地よさそうな表情へと変わっていく。なんだかんだでべた惚れと称されるアキトらしい反応だと思う。

しかし。これはなんというか……。

(……私もやってもらいたい)

耳掃除など自分でもできる。が、だれかにやってもらうとなるとその機会は限られると言ってもいいだろう。

それにより、血の繋がりはなくとも魂の繋がりで母となったユリカに膝枕してもらおうというシチュエーション……娘として求めてもいいのではないだろうか。

思い返してみれば、法的にそうなる以前であったヤマトではそんなに甘えていられなかった。

この家に越してきてからはお互い新たな日常に馴染むのが楽しかったりして、考えてみたらあまりべつたりと甘えた覚えがない。

そろそろ目いっぱい甘えるのもいい頃合いだ。

ラピスはその瞬間を待った。作業を終えた食器洗浄乾燥機から食器を取り出して棚に戻し、実況の準備をさりげなく進めながら。

右耳を終え、その場でごろりと反対向きに転がって左耳もされるがままにしているアキト。ユリカは鼻歌など歌いながら楽しそうにアキトの耳掃除をしている。

傍らに広げたティッシュの上には、使用済みの綿棒と取り除かれた耳垢が置かれている。さほど汚れてはいなかったようで、置かれている耳垢の量は大したことはなく、片耳で約六分程度で終了していた。

「……あんがとな。案外うまかった」

照れくさそうにお礼を言いながら起き上がるアキトに、ユリカは満

面の笑みで「どういたしまして♪」と答えている。

ねだるなら、いまだ。

「お母さん♪」

歌うような声でラピスがユリカに迫る。

「私も、お・ね・が・い・し・ま・す♪」

目をキラキラさせて切望するラピスにユリカは体を震わせて感激し、ブンブンと首を縦に振って応じてくれた。

——それは至福の時間であった。

ユリカの膝枕は普通の枕と違う弾力と温かさ、それとどこか甘いような匂い。「じゃあ始めるよー」と軽やかな声と共に耳の外側、そして内側をこすりつける綿棒の感触は、自分でやるのとは違った感触でこそばゆい一方、妙な心地よさを感じた。

考えてみればデザインナーズベイビーとして生を受けた自分は、血の繋がりのある両親を知らない。当然その腕に抱かれた記憶もない。

ネルガルの研究所では実験体として扱われていたため、そこに人に向けられる愛情などはなかった。火星の後継者に連れていかれてからもそれは変わらず。

——すべてが変わったのは、アキトに助け出されてから。アキトに連れ出されたことで、ラピスはそれまでの人を人とも思わぬ生活から脱し、復讐に燃えながらも人の心を捨てられなかったアキトの不器用なやさしさを与えられ、最初は怖そうな印象を受けたエリナからも愛され、同じ存在であったルリとも絆を結び、自分にここまでの情緒を与えてくれたユリカ、密かにもう一人の父親のように慕う山崎やお兄さんも同然な太助、そして一番のお兄さんである進とも出会えた。

いまこの瞬間ほど、その幸せを噛みしめられたことはなかったかもしれない。

感激のあまり涙でも出てしまうかと思ったが、それ以上に快樂につて顔が緩むほうが優先されたらしい。アキトにそれを指摘されて気づいたが、涙流してしまうよりは、この場は円滑であっただろう。

そんなこんなでユリカの膝枕&耳掃除を堪能したラピスは、蕩けた表情から復帰するなりユリカの隣に腰を下ろし、身振りでアキトが自

分の隣に座るようにと乞うた。何事かと訝しみながらもアキトは素直に応じてくれる。いい父親だと思う。

それを確認してからラピスは、意を決してゲーム機の電源を入れた。

両親は疑問に思ったのかタイトル画面が表示される段階に至って納得したらしく、そつと肩に手を置いてくれた。

——それはおどろおどろしい文体で書かれたタイトル。背景。音楽。すべてが得体のしれないものに対する恐怖を煽るように考えられたデザイン。

そう。此度の実況タイトルはホラーゲーム。

要するにラピスは怖くて一人ではプレイしたくなかったので、アキトとユリカを巻き込む道を選んだのである。

結局、ラピスは初の生声実況を両親を傍らに置くという状況で実行に移した。アキトとユリカはそんなラピスの暴挙とでも言うべき所業に沈黙を貫き通す親心を発揮したが、ラピスが声もなく体をビクリッ！ と動かす度に釣られてビビる、恐怖で絶叫してもビビらされるという時間を、二時間ほど過ごす羽目になった。

その後、ラピスが「今度からは事前について」と苦言を呈されたのは、至極当然のことであっただろう。

ヤマトの帰還から八か月が過ぎた。

目立ったトラブルもなく、地球はおおむね平穏と言える時間を過ごしていた。

しいて言えば、ネルガルが軍や現政府と共同して「英雄の丘」と称した、ヤマトクルーの戦没者を弔う慰霊碑を整備したことだろうか。

ユリカが垣間見たヤマト出生世界のように沖田十三の銅像が建つことこそなかったが、代わりに上に横向きのヤマトのレリーフが刻まれるなど、ヤマトの慰霊碑であることが一目でわかる作りになっていた。

除幕式はラピスも参列したが、なんとも言えない気持ちにさせられた。お偉いさんの演説やは半分聞き流していたが、共に苦難の航海を過ごした仲間たちが四〇名以上、あそこで弔われていると考えると、気分が暗くなる。

遥かに大勢の人間がああ戦いで失われたとしても、一緒の時間を過ごした仲間が死ぬというのは、数に関係なく堪えるものと思う。

だが、その犠牲の果てに地球はよみがえりガミラスとの戦いも最良と思える形で終わった。

もちろんガミラスへの怒りと憎しみを訴える市民はいまだに多い。それは当然の気持ちであり権利だと思う一方で、本当に自分たちの――ヤマトの決断が正しかったのかがあやふやになってしまった感がある。

——その答えが出るのはきつとまださきのことだろう。

「ラピスちゃん、今日は遊びに行ってもいい？」

「どうぞ。両親は留守にしていますから」

すっかり親友となったマナがうきうきした足取りで申し出れば、ラピスはそれを受け取る。

たしかにいまだ世界は混乱のなかにある。

ヤマトはいまだ不完全なまま防衛任務に就いているし、あの暗黒星団帝国がどのような行動に出るかもわからない。

ガミラスとイスカンダルとの関係がこのままどれだけ続くのかも、それ以外の第三勢力が出現して地球に影響を及ぼすかもわからない。

でも――。

「今日はどんなゲームをしますか？」

「じゃあじゃあ！ レースゲームでなにか！」

ラピス・ラズリは今日という日常を生き続ける。

そのさきに明るい未来が待っていると信じて。

その日の夜、ユリカが懐妊したという報告に喜び駆け回ったのは、彼女の生涯でも特に明るく、未来という言葉の意味を噛みしめた思い出であったという。